

サガフロンティア ア
セルス編

おめかけ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

1997年にスクウェアより発売されたサガフロンティアの二次創作です。

作者の勝手な解釈により公式設定とは異なる点が多々あります。そういった話が苦手な方はご遠慮ください。

また一部、サガフロンティア2の話が出てきます。

内容としてはオルロワージュの過去編から原作ラストまでになります。

原作の没設定を加えて再構成した小説です。

Arcadia、Pixivにも投稿しています。

目次

第一幕	獣が魔王になり、乙女になり、そして星に乗るまで	1
第二幕	仙女が頭を蹴り飛ばし、語り語られる永遠の中	18
第三幕	唇の甘き背を食み 虜の雨の空の下	34
第四幕	百万回の春を愛して、いつかあなたは明日を憎む	45
幕間	朴念仁友誼	65
第五幕	時を患う者どもの炸裂すべき愛の牙	80
第六幕	ジーナ嬢かく語りき	94
第七幕	自由意思に関するゾズマ先生のありがたいご高説またはいかにして螺子巻き式侍女が芝居の幕を上げることになったか	115
第八幕	少女の夢で少女が死んで、そして少女が目を覚ます	152
第九幕	そして乙女の血が流れ	168
幕間	零と鴉と喰う者が喰われる夜	186
第十幕	焦がれの連鎖	204
第十一幕	白薔薇姫の優しい悪意	238

第十二幕 やがて旅立つ辺境嬢は紅と踊

る 271

第十三幕 生きるも死ぬも同じ青／ぼつ

ちやまのおぼけ銃 303

第十四幕 全ての乙女は邪悪でなくては

ならない——炎の従騎士アルキオネの物

語① 330

幕間 光刃英雄アルカール第三十八話

く四十六話 345

全ての乙女は邪悪でなくてはならない——

炎の従騎士アルキオネの物語②——

351

全ての乙女は邪悪でなくてはならない——

——炎の従騎士アルキオネの物語③——

375

全ての乙女は邪悪でなくてはならない——

——炎の従騎士アルキオネの物語④——

393

第十五幕 対話篇 ヌサカーン——

第十六幕 幻夢の一撃—— 431

第十七幕 罔象の子宮、プリンセス・スライム——

イム——水の従騎士ハウゲータの物語① 449

——

罔象の子宮、プリンセス・スライム——水

の従騎士ハウゲータの物語②——

466

——

罔象の子宮、プリンセス・スライム——水

の従騎士ハウゲータの物語③——

484

罔象の子宮、プリンセス・スライム——水

の従騎士ハウゲータの物語④——

511

第十八幕 少女のウロボロス —— 521

幕間 光刃皇帝アルカイザー第二十七話

『再会！ 年上の女（ひと）！』 —— 573

第十九幕 善悪二元腐刻絵図——森の従

騎士ウロネブリの物語 —— 589

幕間 あまりにも弱き毒婦 —— 625

幕間 光刃皇帝アルカイザー第三十二話

『妖艶！ 都会の影に潜む蜘蛛！』

649

幕間 水月感応／猿と兔 —— 684

幕間 水月感応／獅子と黒 —— The

Legend Of YAKISOB

A —— 753

第二十幕 銀河の旅路 前編 私が貴方

に支配されていた頃 —— 808

第二十幕 銀河の旅路 後編 偽作大四

畳半大物語 —— 854

第二十一幕 そして紅よ運命と踊れ

916

第二十二幕 永い夜を超えていく

- 第二十三幕 別離 ————— 989
- 第二十四幕 植物界被子植物門双子葉植物網薔薇目薔薇科薔薇属赤蕪 ————— 1002
- 第二十五幕 妖魔の小手(赤薔薇) 前編 ————— 1024
- 第二十五幕 妖魔の小手(赤薔薇) 後編 ————— 1081
- 第二十六幕 埋葬者の荒野、魅了者の月 ————— 1121
- 幕間 光刃皇帝アルカイザー第五十四話『決断! その名、小此木烈人!!』 ————— 1165
- 第二十七幕 そして負け続ける馬鹿の唄 ————— 1197
- 黒騎士セアトの物語 —————
- 第二十八幕 春が巡る ————— 1250
- 第二十九幕 Dear demissis ————— 1274
- ter —————
- 第三十幕 あなたに嘘を一つだけ ————— 1317
- 第三十一幕 帰還/旅人という名の灰 ————— 1345
- 第三十二幕 死亡友誼 ————— 1364
- 第三十三幕 Title Call ————— 1386
- 第三十四幕 『立ち向かう』 ————— 1407

第三十五幕 仮面の奥で／妖魔アセルス

1448

第三十六幕 そして星に乗る／獣が魔王

になり、乙女になり、途方もなき時の流れ

の果て

1482

終幕 Last Battle | As

1497

e l l u s |

第一幕 獣が魔王になり、乙女になり、そして星に乗るまで

たとえばその時、獣は一匹の魔王だった。

元はといえば一幅の影絵、幼い子供が母を待つ寂しさに掌を遊ばせて生まれた一匹の犬畜生。儂い燈火を透かして写し出された影絵の犬が何の因果かすつと浮かび上がって命を持った輪郭の化け物。

獣には重さがない、厚みもない。ただただ漆黒の形を持ってひらひらと空間を泳ぐ犬の異形は自らの姿を思い通りに変えることができた。

壁から抜け出し、音もなく地に四足を踏み出したその後はふんふんとその場の匂いを嗅いで歩き出す。

生まれたばかりの獣には目的もなく本能さえも欠けていて、空腹を感じることもない影絵の身体では生きるためのなものをも必要とせず、したがって獣には何かのために生きようだとか生きるために何かをしようという感情がまるで芽生えない。ひたすらにあてもなく匂いを嗅いで回り、無音の歩行を惰性に続け、いつしか獣は魔王になった。魔王。旅をすればその内にさしてこのけだものはなんだろうという妖怪やら悪魔やら

がちよっかいをかけてくる。なにしろ獣は影絵なのだ、意味もなくぺらぺらしているし正面から見れば少し間抜けで笑ってしまふ。面白半分に剣を突出す者がいて魔法で捕えようとする者がいて、しかし影絵の身体にはいかなる力さえ受け付けずあらゆる敵対者は仰天してしまう。この獣は一体なんだ。どれほど攻撃してもまるで平気にしている。こいつはとんだ獣に出会ったものだ。興味をひかれなおも付きまとう相手に獣も流石にやかましいわとでも思ったのか、尻尾を鋭い槍へと変えて一突きにする。影の槍は見事に心の臓を貫いてしつこい敵はあつという間に息絶えた。

たとえば光を奪うことで影絵の犬を消そうと企んだものがいた。光がなければ影はできない。これで奴もおちやのこさいさいだと高を括った相手が余裕綽々なものも束の間、光があろうがなかろうが依然として存在し続ける影絵の犬に驚愕する。なんというこつちや、それではあまりにもずるくはありませんかと涙ながらに訴えはするものの獣からすればそんなことは知ったことではなく影の剣で一薙ぎにされる。

そんな風にして寄ってくる妖怪悪魔を切っては捨て切っては捨てとしている内、いつの間にかになんだかすごく強い影絵の獣がいるらしいよやばいらしいよと噂は広がった。戦いを挑まれることはさらに増え、けれども同時に獣を認めるものその強さを慕うものがどこからともなく煙のように現れ一つの集団を形成していった。実際、ただ強いと言うだけで憧れる、尊敬する、崇拜するという単純思考はどこにでもやたらといて、そ

ういう考えのやつは大体が「強い奴の近くにいて自分もその影響にあやかりたいよ」というコバンザメ根性でいるものだから有象無象が雲霞のごとく集まり気づけば獣は魔王になっていた。

獣は魔王になった。名前の知らない部下がたくさんできた。知らない誰かが獣のために城を建ててくれ、銅像を造り、あなた様を神として崇めたいのでどうか玉石宝石を奉納させて頂きたいと頭を下げる。

獣は完全に調子に乗った。なにしろ今までは自分が何のために生きているのかもわからずうすぼんやりとしていたものだから、突然降って湧いたこの賞賛の嵐はまさに劇薬。誰かが獣は強いと褒めてくれる。褒められるということは大変に気持ちのいいのだ。なぜならそれは存在してもいいと許されることであり、存在を認められることだったからだ。ひらひらと頼りない自らを恥じるというほどではないにせよどうも確かでないと感じていた獣は「魔王サマー」と歓声を上げられるたびに嬉しくなって尻尾を振った。

影絵である、ということとは自らを感じられない、ということである。自分自身というものが存在していると言っても自らの身体に触れることさえできないのだから。もちろん前足で「ていていつ」と首の付け根辺りを蹴ることぐらいはできるし影の形を変えればそれ以上のこともできるけれどなんといつても影絵は影絵、そこには厚みがない。

熱もなければ匂いもない。感触があると言っても非常に頼りない薄絹がゆらゆらと揺れるような触感ばかりで、ああ俺はここにいるんだと信じられるような要素が獣の形には欠けていた。だから魔王となった獣には魔王を称える声がかことのほか心地よく、溺れるように獣は魔王に染まっていった。たくさんの敵を殺した。

サキュバスというとても淫靡な部下ができた。牡鹿に似た角を持つ彼女たちは豊満な肉体を持ち男たちをたぶらかしては殺すのだという。性というものを獣はまったく理解してはいなかったもののサキュバスはとにかく柔らかい匂いがするで大変気に入った。サキュバス達はサキュバス達で獣をちやほやと甘やかしまくり両者は片時も離れずに組んずほぐれつしていた。

「魔王さま超カワイー!」「魔王さま抱っこさせて!」「魔王さま、お手!」

彼女たちの望むことはなんでもした。毎夜のように繰り返される後背位。権勢を守るための殺戮。血を流せば流すだけ魔王の影は色濃くなつてその輪郭を確かにする。血に濡れて影はひくつく陰部のようにしつとりと濡れるのだった。

魔王は死ななかつた。生きていないから死なないのかもしれない。自分の命のことなど魔王にはわかりはしないし、誰も教えてくれなかつたのだ。それは仕方のないことだろう。ただ命を一つずつぶちぶちと踏み潰していれば別の命が魔王を褒めてくれた。魔王にとってはそれが全てだった。もしそれがおかしいこと、倫理から外れた道だと言

うのなら誰でもいい、この犬っころくに伝えてやればいいだろう。お前はただの影でしかない、ただ存在していると言うだけで生きてはいないのだと。

何年何十年と時は過ぎ、睦みあう淫魔たちも入れ代わり立ち代わり変わっていく。腹の下で嬌声をあげる女を見下ろしてある時魔王はなんだかこの娘は昨日のことは違うような気がするなあとくんくん匂いを嗅いでみる。すると彼女は荒く息をつきながら「どうしたの、わんちゃん？」と魔王の首の辺りを撫ぜる。お前はいつからここにいたのかと魔王は静かに尋ねる。昨日の女とは違う。一年前の女とも違う。あの女たちは一体どこへ行ったのか。

サキユバスは嫣然と微笑んで答えた。

——そんなことどうだっていいじゃありませんか。気持ち良ければそれが全てでしよう？

そうなのかもしれないなと魔王は思う。頂に上り詰めた女が法悦のため息とともに愛を囁き、感謝の言葉を述べる。

ああ俺はここにいます。女は俺を求め、必要とする。俺は確かにいま、ここにいます。

時が経つ。瞬く間に時は過ぎ、百年の月日が流れる。魔王の後宮で女たちは夜伽の声を上げる。愛は安らかに語られる。

けれども、魔王はやがて思うのだろう。何かが違うと。こんなことを続けていても、

何も変わりはないのだと。昨日の女は一年前の女とは違う。千の女を抱いて千の愛を交わしても、それは次の日には失われていく言葉だ。

魔王はしだいに飽きはじめる。快樂の園に倦み、城を離れることが多くなる。

魔王が乙女と出会ったのは丁度そんな頃で、彼女はその日も間抜けに口を開いたまま時計塔を見上げていた。

ぼおん、と鐘が鳴る。どこまでも遠い音色で時の調べが街に響き渡る。錆びついた鐘の内側に古びた舌が鈍く叩きつけられ、時が刻まれる。乙女は時計塔の下、人々の行き交う路地からぼんやりとそれを見つめている。赤毛をやぼったく後ろで編み、そばかすの残る頬を寒さに赤く染め、少し眠たそうな目をしている。朝からずっと、まんじりともせずずっと眺めている。

魔王はそんな風に時計塔に見惚れている人間を見るのが初めてで、物珍しさに気を惹かれてくうんと鼻を鳴らして乙女に擦り寄った。

「ああ」と乙女は言った。「犬だ」

呟いて乙女は魔王に視線を落とし、しゃがんでその背に掌を落とすと、「ふは」と短く息を漏らして笑った。乙女が魔王に対して見せたのはその反応だけだった。街中に突如出現した影の化け物に住人達が逃げ出していくなか、乙女は動揺一つ見せず再び時計

塔を眺めだした。

魔王は乙女を観察し始める。一時間が過ぎるとまたぼおん、と鐘が鳴つて、彼女は「ああ……」としみじみ呟く。「二時ね……」三時になれば三時ねと彼女は言い、四時になれば四時ね、と言つた。それ以外のことは何もしていなかつた。

夜が来て日の帳が落ち、時計塔の鐘が七度ならされると乙女は小さく声を震わせる。

「夜だわ」

そうしてほろほろと涙を零し、ふるふると顔を振つて、長い長い溜息について傍らの魔王に話しかけた。

「どこへ行くの、おまえ？　昼間っからずつとここに居るけれど」

余はどこへも行かぬ。しばらくお前を見ていることにした。魔王が答えると、「ふうん」と興味なさそうに相槌を打つて乙女は惨めつたらしく鼻を噉つた。

魔王は乙女の傍にいる。乙女は飽きもせず時計塔を見つめてばかりいる。

半年が過ぎた。乙女と魔王は時々少しだけ会話をした。

お前は何をしている。

時計塔を見ているのよ。

何のために時計塔を見ているのだ。

そんなの、決まっているじゃないの。

ほう。

時を数えるためよ。

ふむ。

時計というのはそのためにあるのよ。

魔王は少し考える。

……時を数えてどうするのだ。

尋ねると、乙女は一瞬目をつむり、おずおずと語りだした。

あのね、時間というのは、本当に、気が付くといつの間にかに過ぎてしまうものでしょう。今日経験したばかりのことが、たとえば懐かしい人に出会ったり、嬉しいことがあつたりしても、明日や明後日になればその心が薄れてしまつて、いつかは忘れてしまふ。大切だったことも何でもないことになつて、飽きてしまふ。だからあたしは時を覚えていたい、だから、時を数えているの。

お前は一体何を忘れた。

さあねえ。そんなこんなも、きつと忘れちまつたのかもしれないわ、あたし。

ふへへ、とふがない顔で乙女は笑う。

魔王と乙女は同じ時間を過ごし、しばらくの間ともに暮らした。短いながら言葉を交わし、何気ないことをつらつらと話し合う。たいしたことではない。明日の天気や日

の前を横切る虫の名前といった他愛のない話題だ。愛を交わすのでも快樂を得るのではない。それでも同じ時を過ごす二人にとって、その言葉はやがてかけがえのないものとなるのだろうか。

時の流れの話をしよう。

時は常に進み続け、巻き戻ることはけしてない。いつかこの世のすべては過去になり、物語になってしまう。あらゆる熱量は失われ、握りしめたはずの体温はむなしく掠れ散っていく。この世に真実は残らない。残るのは人々によつて語られ、解釈の加えられた言葉、物語だけだ。

時間とはそういうものだ。物語とはそういうものだ。

たとえばこの魔王が自らの物語の結末をどう望んでいたにせよ、時が進めばやがて物語は結末を迎える。そしてまた時の流れの物語はいつでも、陳腐で、ありきたりで、くだらない終わり方を迎えるようにできている。乙女は死ぬ。

世界のすべてはありふれて、乙女は死を語り出す。なぜと云って乙女が時計塔に魅入られてしまったのは自らが不治の病に冒されていたからだし、時を数えているのは死ぬまでの一日一日を数えていたからだ。人間の中で彼女だけが魔王を恐れなかったのもそれは当たり前前の話、いつか死ぬと知っているのなら魔王だろうが神だろうが大して変

わりなどありはしない。

朝、目を覚まして乙女はああ生きているとそう考えてぶると身震いをする。昼になれば昼でもう一日が半分過ぎてしまった恐ろしいと心細くなるし、日が落ちて暗くなればまた一つ生きていられる日が消えてしまったと哀しくなつて乙女はどうしようもない孤独を感じる。だからたとえそれがわけのわからない黒いもやもやした影の犬っころであつたとしても魔王が側にいてくれて乙女は少しだけ嬉しかつたのだらう。最後の日に乙女はどうとう自分の秘密を打ち明けて魔王にお別れを言つた。さよなら。

時の流れの話しよう。

これから先何千年と生きるであろう不死の化け物である魔王は初めて死を考える。乙女は明日死ぬのだという。死んで、いなくなつて、これまでのように時計塔を眺めたり魔王の言葉にいい加減な相槌を打つたりすることはもうないのだという。

いつか失われてしまうものがこの世にはある。たとえ何年生きようとも、いまこの乙女は二度と還らない。なんとかその事実を飲み込んだ魔王はぐると腹の底で低く唸るところを思うのだった。

——この女を喰わねばならぬ。

魔王はもちろん、そう思つた瞬間にあんぐりと口を広げ乙女の身体に噛みついた。乙女は悲鳴を上げたかもしれない。けれどもその時の魔王にはもう乙女の声や言葉は聞

こえておらず、ただ失つてしまふという衝動に駆られるまま乙女の肉を夢中で咀嚼するのだった。

牙の間に女の神経が挟まってびよんびよんと跳ねていた。舌でこそげ取ろうと舐め上げる、脊髄が痺れるほどの冷たい甘さがこみ上げる。乙女の腹に顔をうずめて内臓から骨からとかく構わず噛み砕いてするりと飲み干し、ぐえ、といじきたなくげつぶをする。

食べていくうちに魔王の身体は次第に厚さを持ち始め、影の身体が見る見るうちに膨れ上がっていく。魔王の身体は受肉する。その肉はもちろん乙女の肉であり、かつては乙女の身の内を流れていた血の流れを纏つて魔王はようやくこの世に質量を持つ。

もう、乙女と語らうことはない。頭の悪い乙女の間抜けな台詞を小ばかにすること、寒さに震える乙女に身を寄せるふりをする必要もない。乙女を食らい、乙女と一体化することで魔王は乙女という一つの永遠を手に入れるのだ。二人は一つになり、再び魔王は一人になる。

喰う者の悲しみと喰われるものの悲しみが一つになって、混じりけのない狂気が生まれた。いつの間にかに魔王は静かに笑い出し、両手を広げて我が身を確かめる。魔王はいつしか人の姿をしている。人形のように整った顔をして、しかし男でも女でもない。艶やかな影の髪をぬるりと垂らし、見るもの全てを魅了する蠱惑の瞳を輝かせ、魔王は

淡々と歩き出す。

……。

——余は死なん。余は我と我が身を永遠とし、そして望む全てを永遠にするのだ

街を立ち去る魔王が一度だけ後ろを振り返ると、また一つ時計塔の鐘がぼおん、となつた。

◇

星を視ていた。

安っぽい強化硝材でできた天窓を透かして見る夜空は夢幻、途方もなく広がる無数の星々が瞬いている。

雑多な機械の群れに取り囲まれ無闇やたらと狭苦しいその場所は魔王の住む星に唯一存在する『駅』であつた。ここではないどこかを目指す旅人を迎える場所、何処から来る異邦人たちの集まる場所、別世界との架け橋となる『駅』——星間船発着場。

駅の内部ではあらゆるものが忙しない。さきほどから辺りをうろついている山高帽子卷き猿たちは甲高い音を立てて両手の打震鐘を叩きつけている。赤ら顔の機関士た

ちはといえば、なにがそれほど苛立たしいのだろう、罵声まじりに整備士に指示を出している。

騒がしい。

魔王はきつと口を閉じ、世界との決別を誇示するかのように面を上げ空を見る。夜は静寂を湛えている。きらびやかにまたたく星たちはしかし、生きる苦痛を叫ぶことも死への恐怖を呪うこともなく、ひたすらに沈黙を守り続けている。

「星を見ているのでございますか」

声をかけられ振り向くと、緑色のかつちりとした制服の男がニコニコとうすら寒い笑顔を浮かべていた。

「ここから見える光景にあなたの求める星があると良いのですが」

「星間船にのればあらゆる場所に行けると聞いた」

「もちろんでございますお客様。そこに星が存在している限り、船は必ず辿り着きます。ですから、問題は——お客様が、自身の望む行先を知っているかどうか、ということ。お客様はどのような星をお望みですか？」

問いに魔王はしばらく考えてこう答える。

「余は花嫁を所望している」

「なかなか浪漫に溢れる願いでございますね」

制服の男——星間船発着場の駅員は大げさな仕草で感心して見せる。

「たとえばそれはどのような花嫁で？」

「永遠の花嫁だ。美しく、穢れなく、けして失われることのない恋人のことだ」

「ほほう」

駅員は面白そうに笑うと腰に提げた鞆をぐそぐそと探り桃色の小冊子を取り出した。

『星間ガイドブック 9807年度版』と記されている。

「これはお客様に無料でお渡ししている記念品でございます。こちらを手に取り、まずはヨウマと念じながら指をページに滑らせてみるがよろしいでしょう」

言われたとおりに見ると、自然にページが捲れだした。開かれた小冊子は真っ白だったが、「ヨ、ウ、マ」と唱えた途端に印刷が浮かび上がる。掌の中の記事にはこう書かれている。妖魔。

「お客様のことでございます」

不意に言われ魔王が顔を上げると、駅員がまっすぐにこちらを見ている。

「この星でお客様は確かに魔王と呼ばれてはおりましたが、星間世界においてはあなたのような存在は一般に妖魔と称されます」

「余が、妖魔か。自身の存在のことなど考えたこともなかった。そうか。余は妖魔というものだったのか」

「妖魔。性別を持たず、美しい姿を持ち、変わることもなき永遠の命を持つもの。あなたの求めるものは、おそらくあなたと同じ妖魔と呼ばれる者でございましょう」

「では、その妖魔のいるところへ迎え」

「かしこまりました。それでは次便、星間船アルメファル、ファシナトウルへ参りませ。発車までもうしばらくお待ちくださいませ」

駅員は鞆から小旗を取り出すとさつと振る。するとどこから合図を確認したのか、ぎしりと巨大なものが軋み気配がし、そこかしこから猛烈な蒸気が噴き出し始めた。

駅員に案内され発着場を進むと前方にゲートが見えた。手前で立ち止まり、周囲を見回すと横に案内板らしき表示と『おとな一枚』『こども一枚』という押しボタンがある。少し考えたが自らの人生経験というものを考えて魔王は迷わずに『こども一枚』を押し込む。ガガ、と何かが絡まるような音がして機械が券をはき出したので何気なく手に取りまじまじと観察する。大きな文字で『こども』と記され、その下に小さな文字で『まじまじにならないようにきをつけましょう』とある。

駅員は少し困った様子で魔王を見ていたが、「何か出たぞ」と言われ慌てて「はい、はい」と返事する。

「そちらが搭乗券になります。ゲートのここ、ああ、そう、その隙間です——に通してください」

スリットに券を通すと、バチリと音を立てて丸い穴をあけられた切符がゲートの先に飛び出した。何かの傷跡のようだった。券の穴から発着場を覗いてみるととても狭い世界に見える。くるり、掌で切符を翻し袖に仕舞い込むと魔王は黙って駅員の後を追う。ゲートをくぐり、船に架設された梯子を上り、いよいよ船に乗り込んだ。座席に付いた覗き窓から下を見下ろすと先ほどの駅員が能天気な笑顔を向け手を振っている。

「お客さまは旅に出るのでございませぬ」

駅員の声は不思議によく通り、まるで耳元で囁かれているような気さえする。

「自分の求めるもののため、今いる場所を捨て、まだ見ぬ荒野を目指す。——お客様、差支えなければ最後にお名前を伺ってもよろしいでしょうか？」

「名前？」

尋ねられ、魔王は僅かに戸惑う。魔王には名前が無かったのだ。

星間船はまもなく発車しようとしている。柱の掛け時計がこちこちと時を刻み、ついに短針と長針とが出会い、ジリリ、とやかましく発車の鐘が鳴る。

記憶のどこかで時計塔の鐘が鳴る。ぼおん、と低く、遠い記憶の音がする。

——オルロワージュ。

ふと、口をついて出たその言葉に魔王は少しだけ驚き、それからふむ、と小さく唸り納得する。

「オルロワージュ。余の名はオルロワージュだ」

告げられた駅員はぱつと顔を輝かせた。

「されば、オルロワージュ様。あなたの行く旅路にどうか幸運がありますように！」

そつと手を上げて答えると駅員はなおもぶんぶんと手を振り、見えなくなるまでずつとこちらを見送っていた。

第二幕 仙女が頭を蹴り飛ばし、語り語られる永遠の中

リンクーニャンと呼ばれる女がいる。

清らかな水の玉。

滴り落ちる雨粒。

小さきもの、不完全たる器の中で流動するもの。

そして何よりも『L i n g』という言葉が指し示すのは、虚。何も無い、空っぽ、そういう意味である。

泉玄山の高台に住む仙女、リンクーニャンといえはこの世ならざる美貌の持ち主として名高い。一目見ただけで心を奪われるという蕩尽瞳に桜花の唇。墨を流した黒絹の髪はいかなる時も細密に絡み合い幾何学模様を描く。その吐息はあまりにも芳しくリンクーニャンがほうと一息ため息をついただけで国中の男が下半身を疼かせたという。

仙人仙女といえどももちろん道を学び欲を捨てることによつて人間から昇華した存在であるから、俗世に降りて贅に耽るといふこともないし会えば会ったでわかつたようなわからぬような日く『ありがたい』説教をするものである。リンクーニャンも御多分にもれずその恵まれた美貌を活かすこともなく山に籠り、自然の営みや清澄な空気を愛

でてひっそりと暮らしていた。姿を現すことといえは時折山に迷い込んだ旅人の前にふらりと降り立ち、無言のまま道を指し示す時くらいであり、それも年に一度あるかないかという稀なものである。

そのリンクーニヤンがある日、突然狂ったのだという。

リンクーニヤンは日々穏やかに暮らす。太陽の光を浴び、畑をいじり、書を嗜み、陽が落ちれば水銀を練り、氣功を巡らせ瞑想に耽る。人を超越した彼女の心は何事にも動じることなく凧いでいる。

今日もまた昼が過ぎ、やがて雨が降る。稲光がびしゃん、と遠方に落ちる。すつと目を細めたリンクーニヤンは盆に睡感水を垂らし遠視術を行う。雷に倒れた大木の下敷きになり、旅人が呻いているのが見える。

可愛そうだと思いはしない。義侠心に駆られたりもしない。死ぬと言うのなら死ぬのが自然。しかし生きるか死ぬかと問えばどちらかといえは生きた方が良いだろう。いつものようにそう考え、リンクーニヤンは旅人を助けに向かう。

彼女は善悪に頓着しない。正義を行おうとも思つてはいない。仙女としてリンクーニヤンの行く道は即ち無為にして自然なる道である。ことさらに急ぐこともなく落ち着いて旅人の元へと向かう。それで助かることもあれば助からないこともある。

今回の場合は一足遅く、旅人の命はもう長くはないようだった。大木に挟まれた衝撃

で体のあちこちが破裂し、あまりにも血が流れすぎている。

「これはもう助からんな」

当たり前のことを口に出してリンクーニャンは表情一つ変えない。

「往生せよ。そなたの骸はねんごろに吊ってしんぜよう」

鈴の震えるように可愛らしい声でリンクーニャンがそう告げると——ああ、なんということだろう、今にも死にかけているはずの旅人の頬は見る見る内に赤く染まった。

「き、綺麗だ……奇跡みたいだ……」

血を吐き出しながらたわけたことを口にする男にリンクーニャンはしかしかけらも動揺せず、「格別の賛辞、感謝する」と素知らぬ顔でいる。半死人が錯乱してわけのわからないことを口走るのは今に始まった話ではなく、この程度の事態には慣れきっている。

ところが、というべきか。ことここに至ってはさらに素っ頓狂なことに、麗しきリンクーニャンの花のかんばせを見つめる旅人の股間が見る見るうちに盛り上がり出す。死に瀕した本能が苦し紛れに子孫を残すべく陰莖を硬直させる、という現象はそれ自体をみればけしておかしなことではない。

しかし、相手はリンクーニャンである。見るもの全てを虜化する魔性の瞳、淫らにして悩ましき天の吐息。旅人の股間はついにぶるぶると震え、破れた衣服の隙間からぶく

ぶくと白濁を嘔き出した。

旅人は泣いていた。荒く息をつき、苦しげに唸り、血反吐を吐きながら——しかしその泥に汚れた瞳は恋をしている。死に怯えながら精を放った己の惨めさに顔をぐちゃぐちゃに歪めて泣いている。痛みに喚き、リンクーニヤンに焦がれ、恥辱に戦慄くその姿はまさに滑稽というほかになく、鉄面皮に見えた彼女はとうとう「ク」と唇を歪める。「ク、ハ」とリンクーニヤンは言う。普段から冷静沈着な彼女にしては珍しい意味のない言葉である。腹の底から湧き上がるその思いにリンクーニヤンは不思議に満ち足りた思いで魂を預け、「クケケ」と化鳥の如き吐息を漏らす。

呵呵大笑であった。リンクーニヤンは笑い出した。目の前の男が余りにも愚かしくてたまらない。

「——生きるも、死ぬも、虫けらよ！」

邪悪な嘲笑を浮かべたリンクーニヤンは旅人に近づいた。やはり面白いことに近づけば近づくほど男の陰茎は再び怒張する。戯れに唾を落とせば地に落ちたそれを男は必死に舐めとりむぐむぐと咀嚼し「ああ」と忘我の声を上げ懲りずに射精を繰り返す。

「ほんにそなたは可愛そうな男じゃのう！」

嬉しそうにそう言うリンクーニヤンは男の頭を軽やかに蹴り飛ばし、爽やかな笑い声を響かせたまま山を下りていくのだった。

こうしてリンクーニヤンは地に落ちたわけである。世の真実を透徹し悟りを得た筈の彼女がなぜこれほどあつけなく邪に染まったのか、それは誰にもわからない。あるいはただ修業が足りなかつたのか、あるいは元々の性根というものが毒であつたのか。もしかしたら仙女として無為自然を唱えていたのも結局は世の多くに倣うための方便でしかなく、本当の彼女はどんな時であれやりたいようにしているだけなのかもしれない。

山を下りたリンクーニヤンはその足で都に向かう。城門をくぐり警護のひしめく三殿をするりと通り抜け、森涯城の奥深く皇帝の眠る賢霊宮へと潜り込んだ。あらゆる罨や忍を歯牙にもかけず、彼女を目にしたものは皆腰砕けに崩れ落ちる。

御簾を上げると丁度皇帝は後ろ姿に後宮の雷貴人を犯している。リンクーニヤンは全く気配を悟られることなく二人に近づき、皇帝の耳にそつと唇を寄せる。

真紅の唇から零れ落ちるは呪いまじないによつて修辞された艶能詞。本来はあり得ぬ筈の二言絶句に構成される魔女仕掛けの虜歌とりこうた。リンクーニヤンの舌は肉の槍となつて耳朶を貫き内耳を抜け三半規管を砕き割り、遂には皇帝の脳髓へひたり、淫猥な音を立て密着する。

滴り落ちる乙女の唾液、邪道を行く仙女が震わせる毒の口説。リンクーニヤンの言葉

は皇帝を容易く木偶にした。

城を落としてはや三日、既にして国を手中に収めたリンクーニヤンの邪悪は猛る。税を上げ、金銀玉石を取り寄せ、逆らう者は皆殺しにした。

リンクーニヤンの庭園では蓬萊の美酒によつて池がつくられ、周囲では裸の男女が獣さながらにまぐわい肉を食る。罪のない家族を無意味に捕え、父母親戚から村人に至るまでの知り合いをみな縛り付けて巨大な鉄板に点在する穴に沈めてしまふ。首だけがひよっこりとびだしたまま鉄板は次第に地下から熱され、囚われ人達の悲鳴が上がる。焼け付く人間の皮は鉄板にこびりつきじうじうと焦げつき、蛆虫のように身悶えする。流した汗が滴り落ちれば一瞬のうちに蒸気となつて穴から立ち上る。呼吸はたちまち困難となり、舌を痙攣させながら人々は熱い熱いとおかしな踊りを始める。

リンクーニヤンの薬を服んだ裸の猿たちは凄惨な状況にも顔色一つ変えず、本能にのみ動かされてへこへここと腰を動かす。淫乱毒婦の庭園で性は乱れ、快樂と怨嗟の音が混じりあふ。

「さあ」と言つてリンクーニヤンが背中を叩くのは、捕えられた家族の最後に残つた幼子。恐ろしいほどの美女に首根っこを掴まれ、地獄のような光景を強制的に見せつけられて慄く幼子は背後から酷薄な言葉を告げられる。お前だけは逃がしてやろう。ただし行くのならこの鉄板の上を行け。生きていたいのなら、死にたくないのなら。幼子は

ほろほろと涙を零し齒の根を震わせる。ぶんぶんと首を振り、懇願の視線をリンクーニヤンに向け、愉快しか残らぬその表情に悲鳴を上げる。

幼子は足を踏み出す。焼かれる村人たちの頭を踏み躪り、鉄板に落ちぬようひよろひよろと揺れながら齒を食いしぼる。罵声があがる。この罰当たり、なんてひどい子なの。また一方では幼子の家族や一部の人間が必死に応援する。いいのよ、行きなさい。ああ、私たちのことは……気にしなくても、いいから……。幼子の顔は脂汗で一杯になり、凄まじい重圧と罪悪感から臍腑全体が捻じれていく。うう、と唸る小さな声が快樂と怨嗟の合奏にそつと添えられる。

「暴れないですよー」とうとう幼子は隠すことなく罵声をあげる。「落ちてしまおうじゃないのー！」

熱さに悶える人々が身をくねらせるたびに幼子はがくりと膝を落とし、そのたびに足元の半死人たちを口汚く罵った。どうせ死ぬのだからせめて自分の役に立て。いつしか幼子はそういう物言いをしていた。

やがて幼子は知り合いの頭を蹴りつけた拍子にあつとバランスを崩し、転び落ちたその瞬間、怒りに満ちた多くの手によつて瞬く間に引きずり込まれ、顔面から鉄板に押し付けられ豚のような悲鳴を上げて死んでしまう。

リンクーニヤンは笑っている。何がそんなに楽しいのだろう。人々が苦しんでいる

のが面白いのだろうか。他人が不幸であればあるほど相対的に自らの幸福が実証されているようで安心するからだろうか。うつすらと微笑み、は、は、は、と平和な笑い声をあげる。穏やかに笑っている。

リンクーニヤンの治世はその後何百年と続き、民草にとっては暗黒時代が続いた。

リンクーニヤンは永遠を生きる。

死なずの姫は世に奢侈を極め、快樂の限りを尽くす。何年も何年も官能に耽る。

今日、ひとり恋をして楽人の男を抱き、また明日には飽きて楽人を殺し別の男の瞳を覗く。腕の中に男を抱き百年を生きて気が付けば男は死んでいる。時の流れの中で人はみな死んでいく。

考える時間は無限にある。百年生き二百年生きればどんな馬鹿であろうと多少の分別を身につけるものである。まして仙女たるリンクーニヤン、かつては山中で思索に沈潜することを日課とした彼女がそのことを考えないわけがどうしてあろう。

リンクーニヤンは永遠を思う。

人を愛して今日を生き、人を殺して明日を得る。支配者として君臨し百年を経て——しかし自分はいつまでそれを続けるのだろうか。

夜明けの窓に天を仰いで下界に目を凝らせば薄明の空は蒼く霞んでいる。大気の塵

に光が散乱しあらゆる輪郭を茫洋と冷ますその光景にリンクーニヤンはそつと微かな声を漏らす。

「これが妾の永遠か……」

たとえば時の流れを自在に操り、時間を進めることも戻すことも意のままにする、そんな御業を持った存在がいたとすれば、それは時の君とでも呼ぶ以外に方法はない。しかし仮に当の時の君が時を止め、動かぬ時間の中で何百年と生きたとしてそれは永遠だろうか。

五百年生きれば、千年を耐えれば、それは永遠と言えるのだろうか。どこまでが永遠でどこまでが有限なのだろう。『永遠』とは一体何の謂いだ。

人は退屈から逃れられない。リンクーニヤンがいかに快樂を愛そうとて、やがては飽きる日がやってくる。

何故と言つて、たとえ誰かを愛し愛されたとしても百年経てばその男を知る者は誰もいなくなる。すぐに失われてしまうものに心をかけて言葉を尽くしたところで一体何になる。何もかもが徒勞だ。リンクーニヤンは孤独に蝕まれる。

人は彼女のことを零姑娘リンクーニヤンと呼ぶ。

清らかな水の玉。

滴り落ちる雨粒。

小さきもの、不完全たる器の中で流動するもの。

そして何よりも『零』^{Lin}という言葉が指し示すのは、虚。何もない、空っぽ、そういう意味である。

——空っぽじゃ。なにもかも。

呟いてそつと目を伏せる零姑娘。彼女の名を『はじまり』と呼ぶ相手が現れるまでは、更に三百年の時を要した。



ある時誰かが自室の戸を叩く。

「何者か。妾は今、誰とも会いたいしない」

零姑娘の冷たい返答を意に介さず戸はがらりと開けられ、さつと風が吹き込む。肺を病んだ吐息に似た深い障気の風である。胡乱な目つきで零姑娘が顔を上げるとそこには一人の男が立っている。いや、男ではない。かといって女なのかといえばそうでもない。男でも女でもない異様の麗貌がそこにいた。色濃く濡れた影を連れ、禍々しい闇を纏い、オルロワージュはそこにいる。

生まれて初めて零姑娘は他人の美しさに口を丸めて感嘆する。

「なるほどのう。これはまた美しい男じゃ」

「余は男ではない」

短く答えたオルロワージュに彼女は少し笑ってたしなめるように言う。

「そんなことはわかっておる。そなたのような者は妖魔というのであろう。男でも女でもない、不死の悪魔とな。……しかしのう、男や女というのは、つまるところは言葉に過ぎん。男でも女でもないというのなら、そのどちらでもよかろう。ならば——妾が美しいと思うその者はみな、男と呼ばれておればよいのじゃ」

「そういうものか」

「それでその妖魔がなんの用じゃ。暇にあかせて妾の領地でも奪いに来たか」

「余は花嫁を求めている。姫よ。そなたが欲しい」

「は」

真顔で言い放ったオルロワージュに零姑娘は一瞬茫然とし、しかるのちに童女のように顔を綻ばせて嫺やかに笑う。

「おぬしのう！ それは野蛮人のやり方というものじゃ。女を手に入れたいと思うのならば、まずは言葉の限りを尽くすもの。おぬしのやり方は直截的に過ぎる」

「そうか。ではどうすればいい」

「妾も長いこと生きてきたがおぬしのような馬鹿者は初めてじゃ」

からからと笑っていた零姑娘だったが、オルロワージュが黙りこくつているのを見て少し哀れにでも思ったのかそつとため息をついた。

「妖魔よ。おぬし、名はなんという」

「オルロワージュ」

「ではオルロワージュとやら。おぬしはなぜ、妾を妻としたいのじゃ」

「そなたが美しいからだ」

「……そうか」

相変わらずの直球に反応に困り零姑娘はたじろいで頬を搔いた。

「それでは、ま……女を口説くためには女を喜ばせることが肝要じゃ。女を褒める、楽しませる、まあそういった類のな」

オルロワージュはしばらく考えていたが、やがて重々しい口調で口を開いた。

「そなたは美しい」

「それはもう聞いたわ、たわけ」

零姑娘は頭を抱える。

「褒めるのもうよい。女を楽しませる——いや、ああ、そうじゃのう。おぬしが人にしてもらつて嬉しいと思つたことを妾にしてみよ」

「ふむ」

今度はさらに長い時間がかかり、待ちくたびれた零姑娘が半目になってようやく柱時計がぼおん、と低くなった。オルロワージュが静かに目を細めた。

「わかった」

そう言つてオルロワージュはつかつかと歩み寄り、零姑娘の頭に手を乗せるとくしや、と撫ぜる。

「……なんじや、これは」

「楽しいだろう」

どこことなく満足げなオルロワージュにさしもの零姑娘も押し黙りされるがままに撫でられる。

「おぬしはどうも、妾とは違う星の住人のようじやのう」

「ああ」

素知らぬ顔で答えるオルロワージュに零姑娘は上目使いに可愛らしく睨む。

「言つておくが……今のは皮肉というヤツじやからな」

「そうか」

「……ふ」

零姑娘は再び笑みをもらし、か、か、か、か、と高らかに笑い出した

「これほど笑つたのは久方ぶりじや。オルロワージュよ、おぬし案外面白いのう」

「そうか。余は面白いが。そなたを楽しませることができて何よりだ」

オルロワージュは零姑娘を撫でながら優しく語り続ける。

「姫よ。我が花嫁となりてともに永遠を生きようぞ」

「永遠……。おぬしの言う永遠とは、一体どのようなものを言うのか」

「永遠とは」オルロワージュははつきりと言う。「時の中で生きながらけして失われぬことを言う。時を止めて生きるのでもなければ、命を捨てて死に続けるのでもない。流動と変節の中で、しかし不変である存在のことだ」

「おぬしと妾であればそれが作り出せるか？」

「少なくとも余は死なん。そなたもまた」

「そうか……。それもいいかもしれぬな。どの道、千年を生きて愛という感情の在り処すら見失ったこの妾。おぬしの牙を受けて強制的に虜となるのもあるいは幸いというものかもしれぬ」

「では」

「いいや」

零姑娘はオルロワージュの手首を掴み、ギリギリと握りしめる。

「だからといって易々とおぬしに支配されるほどの零姑娘、枯れてはおらぬ。どちらかがどちらかを支配するというのなら、それは互いの格をもつて競い合おうぞ。妖魔の

瞳は魅了の瞳。どちらの支配力が上か試してみようではないか」

「ふむ。それもよからう。……しかし、どうやって比べる」

「簡単なことよ」

零姑娘はそのままオルロワージュの腕を引っ張り、胸と胸とを合わせ、互いの吐息が感じられる距離にまで近づける。悪戯な表情を浮かべると彼女はそつと口づけをしてこう言う。

——ただ見つめあえばよい。恋人のように。

仙女、零姑娘の瞳は男を蕩かす蕩尽瞳。対するは妖魔オルロワージュの蠱惑の瞳。時計塔の乙女と影絵の魔王が結ばれてできた魔眼。千年の倦怠を超え、悠久の吐息を伴い、二人の魔性は静かに対峙する。瞳は論理を超克し、相手の魂を地べたへと縛り付けようとする。

跪け。跪け。僕となりて愛に仕えよ。語る眼球がぬるりと蠢き、妖術が視神経を犯していく。

迎える結末はあっけなく、突如として零姑娘は頬を綻ばせると上衣をはだけて首元を露わにする。

「よからう。オルロワージュ——いや、ぬし様よ。そなたの牙を妾に打ち立てるがよい」
「余はそなたを愛している。姫よ」そう言つてオルロワージュは身震いするほど美しい

唇を開き、乙女の柔肌にそつと牙を埋める。

「ああ……」法悦に喘ぐ零姑娘。傷口から滔々と血は流れ女の肢体を優しく濡らしている。乙女の血液はたちまちの内に造り替えられ、魂を従属させる。心が愛に満ちている。

上気した顔で零姑娘はうつとりに言う。

「ああ……これが愛というものか。この感情が。虜化とは、こういうものか……」

熱い溜息をつけて零姑娘はオルロワージュの胸元に頬を寄せる。オルロワージュは零姑娘を抱き寄せ、耳の融けるほど甘く切ない声色で囁いた。

「我らの蜜月はこうして始まる。ともに永遠に挑もうではないか。我が第一の寵姫、はじまりの姫——零姫よ」

第三幕 唇の甘き背を食み 虜の雨の空の下

かつてこの世には姿形を思いの通りに変える罔象みづはの姫が生きていて、千年生きて千の男を愛し、けれど千に一つの恋煩いに溺れ落ちて海に溶け、千年千度の恋物語を秘めたその身は大海の一部となった。ゆえ、いつか太陽が海を焼き、海水が天へと昇つて墜落するその雨には、罔象の姫の旅したあまた物語が込められている。

空からは雨が降る。いくばくかの物語が降り注ぐ。オルロワージュと零姫の二人は顔と顔を見合わせてそつと頷き、出会ったその場所でキスをする。

口づけは万華鏡。舌からまろび出る言の葉の如く千変万化とその身を変える。時に邪悪に時に幼く、魔王と仙女がそつと口を合わせ互いの吐息を交換する。ぬらりと濡れひくつく舌を絡めあい、喉を震わせ、混じり合う濃密な体温。燃え立つ夜具の中で語り合いながら言葉の穂を接ぐ代わりに口を吸い、戯れに伸ばした掌が肉体の全てをなぞる。

世界は雨の縦断。降りしきる雨垂れが尽きることなくひたひたと耳を打ち、二人の孤独を絶対にする。雨音が聴覚を支配する。今、この場では、鳥は鳴かない。人の会話も聞こえはしない。車輪の軋み、市場の喧騒も届きはしない。聞こえるのはどうしよう

もないほどの支配的な雨音。きつと部屋の外では、雨以外の一切は滅びてしまったのだろう。雨以外の全てが聞こえないのなら、きつと全ては消滅してしまったのだろう。だから——今確かに存在しているのは、雨と、自分と、口を重ねたその先にいるこの人以外にはない。世界の消えたこの場所でただ無心にキスをするこの孤独のこの甘さ。

「愛している」と自分が言う。

「愛している」と相手が言う。

乙女のように獣のように変幻する舌使い。罪に震える修道女のように口を合わせたその瞬間はつと背筋を震わせて口元を隠し、押し寄せる禁忌と背徳にささやかな涙を零しながら、零姫はまたキスをする。金を対価に唾を売る婀娜な娼婦が舌を躍らせるように、絶え間ない技巧と企みの満ちた視線を伴い仙女零姫はキスをする。

無我夢中だった。溺れるように零姫はオルロワージュとのキスを続けた。

虜化、という言葉が頭をよぎる。

今自分がこうして愛に犯されているのも全てはそのためだろうか。妖魔の血に思考を縫い上げられ、意味もなく猿のように発情しているのだろうか。

恐ろしい。ああ——なんて恐ろしい。虜化という言葉を知ってはいても理性は既にして屈服したがっている。懇願し、慈悲を願い、どうか自分を支配してほしいと叫びだしたくなる。何を捨ててもいい、命でさえもいらぬ。オルロワージュに殺されたい。

この口づけを永遠としてあとにはもう消えてしまつて構わない。

うう、と痛みを堪えるように唸ると零姫はオルロワージュの手を逃れ部屋を飛び出す。わけもなく悲しくなり涙が零れる。ほろほろと泣きながらしかし悲しみは雨に覆われ濡れ鼠の零姫が地の果てへと駆けていく。追いかけるオルロワージュが零姫を捕まえ「愛している」となおも囁く。涙にむせながら零姫もまた懺悔するように「愛している」と答える。

オルロワージュが再び顔を寄せる。押し寄せる快樂に抗うべく零姫はとつさに近くのものゝ力を限り握りしめる。ずるり、と手の皮が剥ける感触がする。とめどなく血が流れていく。

愛している、と零姫は言つた。けれどももしかしたらそれは別の言葉だつたのかもしれない。愛していると言いながら、本当は別のことを言おうとしていたのかもしれない。けれども息を継ぐまもなく口は塞がれ、かたくきつく抱きしめられたこの身では言語野を確かめることさえ覚束ない。自我というものがこれほど容易く調教されるものだとは思つてもいなかつた。

零姫は酔つていた。口づけに酔い、語られる愛の言葉に酔い、与えられる途方もない官能に酔つていた。酩酊する心のままに泣きじやくり、唇を貪り、いつの間にかに気を失つていた。

気が付けば、何かうわ言を口走っていた。自分で自分のうわ言に驚いてびっくりと覚醒し右手の痛みに思わず目を向ければ手の中には一葉の刺草。どれだけ強く握りしめたのか刺草によって手には鋭い裂傷が刻まれ、ふつつと血の玉がとめどなく溢れ出る。

「血……」

途方に暮れた声で呟いた零姫にオルロワージュは刺草を掴みとり、「我が乙女を傷つけるとは」と冷たく睨め付ける。

「刺などいらぬ。刺草など、みな滅びてしまえばよい」

「いいや……」

力なく、しかし必死に零姫は訳も分からずに言う。

「これで良いのじゃ。きつと。この痛み、この血の流れを妾は覚えていなければならぬ。この日のキスが永遠であるためには」

「……そうか」

納得しかねたのかしばらくオルロワージュは刺草をまじまじと眺めていたが、やがてふむと頷いて宙に投げる。ひらひらと頼りなく刺草は空を飛び、そしてはたりと穏やかに落下する。

刺草は乙女の血を吸うものである。血液で淫らに膨れ上がった葉脈は心臓代わりによくどくりと脈打ち、無数の棘が見る間に伸びて大地に突き刺さる。土の下に眠る虫を串刺しにし、あらゆる植物の根を断ち切り、あたり一帯の大地を雁字搦めに縛り上げて刺草は養分を吸い上げる。

また一つ葉脈が波打つ。けらけらと魍魎魍魎の啼くような乾いた音を立て、刺草は大化を続ける。茎は膨張し大木の幹ほどにも太り、やがて高く聳え立って天を衝く。

その異様をたとえるならば、骨と皮だけになった竜の死骸の伽藍堂。棘の伸びるところ触れるだけで肉の裂けるほど鋭く、無数の針が寄り固まって一つの城となったかの如く。

「この日のことを覚えていよう」

オルロワージュはそう言って出来上がった「針の城」へと踏み入り、自らの居城とすると宣言する。零姫はぼんやりと頷き、掌の傷を眺めてはあてもない考えに耽るのだ。た。



たとえば彼女がほうと息を吹くだけで、見渡す限りの野原が燃えた。炎の舌がちろちろと大地を舐め、酸素を奪い、生きているものはみな黒焦げにする。

紅の髪、赤銅の瞳。輪郭揺らぐ陽炎の乙女。炎妖メローペは業火の中で笑っている。燃えろ、燃えろ、世界よ燃えろ。楽しげに唱える呪文でばかりばかりと大気が爆ぜた。燃える世界は美しく、焼け爛れ膨張した人間の肉が彼女を飾る。

彼女の目の前に降り立ってオルロワージュは優雅に礼をする。メローペは手を振り上げた。ただ一言「燃えろ」と告げる。渦巻く炎が燃死鳥となって襲いかかるが、オルロワージュは事もなげに燃死鳥の首根っこを握り潰して絶命させる。唾然としているメローペを抱き上げ、背徳に満ち溢れた口づけを落とす。ただでさえ赤いメローペの顔は更に紅潮し、彼女の身体からくたりと力が抜ける。

——何を。あなたは。

瞳を潤ませながら尋ねるメローペにオルロワージュは答える。

「メローペよ。余のものとなれ」

いや、と首を振るメローペはしかし胸の疼きを抑えられず、オルロワージュが舌を動かす度にどうしようもなく耳朶を這う快感に悶えてしまう。

たとえば邪妖の群れに襲われた洗王国は自らの姫君をファシナトゥールへと献上す

ることで助力を乞う。

「なぜ余が人間どもを助けねばならん」

遣わされた使者へと冷たい視線を送るオルロワージュに、「さて——」と言つて答えたのは、縛められたまま妖煌帝の面前へと引き出された当の姫、金獅子姫であった。

「その問いに答える術を私は持ちません。元よりこの身は戦のための道具。女として扱われることは本意ではないのです」

「ほう。人間の姫というからどんなものかと思えば、これはまた勇ましい女戦士が現れたものだ。——ならば金獅子よ。そなたはこれからどうする？」

「知れたこと。我が意のままに戦い、その意を通すまで！」

金獅子の焼けた肌がにわかに膨張し、ぶちりと縄が切れる。筋肉一つで力任せに縛を解き、立ち上がった姫は乱暴にドレスの裾を破り捨てると近くにいた兵士から剣を奪い上段に構えた。

隆起した筋肉に羚羊のような足。はち切れそうな腱は撓み、いかなる攻めにも迅速な対応を見せることだろう。戦いを挑まんとする金獅子姫の姿はオルロワージュを取り巻く女性とはまるで違うものだったが、しかし「ふむ」と頷いてオルロワージュは剣をとる。

「認めよう金獅子姫。そなたは確かに美しい」

「戦いに言葉は不要。いざ、妖魔の王よ！」

激しく打ちかかる金獅子姫の人間を超えた速度にオルロワージュは感嘆し、この烈女に全力で応えることを決めた。

一合、二合と高らかに剣戟は鳴り死闘は半刻ほども続いた。ついにオルロワージュの剣が怖ろしいほどの閃きを見せ、ぬるりと金獅子姫の右腕に食らいつく。神経から骨に至るまでを容易く斬りとばし、凄惨な音を立てて姫の右腕が地に落ちる。

金獅子姫は痛みに呻くことも喚くこともなく、ただ脂汗を流し青ざめた顔で転がる右腕に目をやり、く、と一瞬悔しげに目を伏せる。しかしすぐさまオルロワージュへと膝をつき頭を垂れた。

「あなたの勝ちです」

清々しい宣言であった。右腕の切断面からぼとぼと血を零しながらも止血することとはなく、左腕で落ちた剣を拾って勝者へと捧げる。

「この命はあなたのものです。オルロワージュ様。殺すなり弄ぶなりご自由になさると良いでしょう」

「そなたはそれで良いのか？」

「勝者が敗者を支配する。それが戦いの掟。剣の道に身を投じた時からその覚悟はできています」

「なんと潔いことだ。これほど爽やかな女性を余は知らぬ。——ならば金獅子姫よ。勝者として余は問おう。そなたは余の牙を求めるか？」

「——は」

俯いた顔の下で顔を真つ赤に染め、金獅子姫は熱い溜息をつく。

「私を支配するのは私よりも強い者のみ。あなたがそれを許して下さるのならば、どうか——その牙を私にお与えください」

一人、また一人と寵姫は増える。針の城は成長を続け、より巨大になっていく。

いつの間にかにオルロワージュは妖魔の君と称される力を身につけ、ファシナトゥールにその支配領域を広大なものとする。

その美しき、強さ、恐ろしき。妖魔の備える三つの力、オルロワージュの卓越すること甚だしく、魅了の君、妖煌帝オルロワージュの元に数多くの妖魔が惹かれ、集まる。

城下では恋に焦がれる乙女たちが胸元に薔薇を抱いてどうかわたしを食べてほしいと声高に叫び、オルロワージュを褒め称える声が絶えることは一日もなかった。

零姫はオルロワージュと共に針の城の最上階にいる。バルコニーから下界を見下ろしぼつりとオルロワージュは言う。

「(こんなことが、前にもあった)」

小首をかしげながら零姫はオルロワージュに寄り添い、それがどうかしたのかと尋ねる。

「余は」オルロワージュは痛みを堪えるように静かに囁く。「いつか、こんな風に高い所から何かを見下ろしていた。魔王であつた。そして——」

「そして？」

「……わからぬ」

オルロワージュは表情を変えずに答える。

「だが確かに思うのだ。こんなことが前にもあつた。余は、いつも、同じことをしているのかもしれない……」

「忘れてしまったのじゃない」

「ああ。きつとそうなのだろう。失つてしまって、もう二度と還ることもないのだ」

「過去に囚われても仕方あるまい。ぬし様には妾がおるではないか。ずっとここにいれば良い。妾の傍に」

「ああ。そうだな」

「この針の城に住む限り、刺草の記憶はけして消えぬ。あの傷あの痛み、ぬし様より受けた口づけの甘さ。あれこそが永遠というものなのである？」

「……ああ、そうだ。これで良い。我らは永遠に愛し合うのだから……」

オルロワー ジュはまたひとときわ強く零姫の腰を抱いて舌を吸う。氷のように舌は冷たく零姫は束の間ぞつとする。助けを求めないように瞳だけをぎよろつかせ、オルロワー ジュの背後に空を見る。いつもと何も変わらない光景だ。

また雨が降ればいい、と零姫は思う。

第四幕 百万回の春を愛して、いつかあなたは明日を憎む

本当につまらない星の、どうでもいい町でよち子は生まれた。

空を野良金魚が飛んでいるというのがその星の特徴で、というよりも特徴と呼べるだけのものがそれ以外に存在しない割とどうしようもない星だった。野良金魚を眺めに行ってくる観光客相手に金魚の干物やらお刺身やらを売って細々と星の住人達は生計を立てていたがいかなせん金魚以外のウリというものがこれといってなく、全体的に生臭いわ海は汚いわ自然は少ないわで年々客も減っていった。

先細りする経済に町では暗鬱な雰囲気常在に立ち込め、どうせ俺たちはどこにも行けやしないんだといじける者かが大勢現れ路地裏の落書きが無意味に増える。過疎化は進み、町の商店街は次々にシャッターを閉め、駅の近くに建てられた「この星は金魚の星」と書かれたモニメントだけがやたらと輝いている。道を歩いているだけで空を飛ぶ野良金魚たちがほつぺたやら膝裏やらにぶみんぶみんとぶち当たってくるので大して痛いと言うほどでもないが無性に煩わしい。もう本当に仕様もない星だった。

若者たちは今日稼いだ金を飲み屋で使い果たしながらそれでも俺はいつか別の星へ

行くんだと大層な夢を語る。手に小銭を握りしめ、それすらも安酒に消費しながらも若者たちがいつも口にするのは決まって「駅」——星間船発着場のことなのだった。

別の星^{リジョン}へ行くための船。いつか10000クレジットを貯めてあの船に乗る、こんなつまらない田舎とはおさらばしてやるんだ——誰もがそう叫ぶけれど、10000クレジットを貯めきるものはないに出ない。金魚の干物を売って大金を集められよう筈もないし、そもそもが町の住人達にそれほどの根気は元より備わってはいないのだから。

そんな星の、まさに衰退し滅びつつある町なんかに不運にも生まれてしまったよち子はとところで阿呆であった。口をあんぐりと開けたまま道端を駆けまわっては空飛ぶ野良金魚がぬぶりと鈍い音を立てて口の中へ入り込む。むぐむぐ、むぐ、と口の中で金魚を遊ばせ、んば、と吐き出す。よち子はげらげらと笑う。なにがそんなに面白いのか自分でもよくわからないのに、よち子は飽きもせず金魚を舐めまわしては笑っていた。脇目も振らずに道と言う道を駆け抜け、顔面に金魚がすごい勢いでぶつかってくるのに顔を顰めては「いたーい！」と言って笑った。

よち子はいつも楽しかった。

5歳になり10歳になり、相変わらず町は薄暗い絶望に包まれていた。気のせいかな気もやたら曇りばかりが多く、人々は空を見上げてはため息ばかりついているのだった。

ようやく変化らしい変化が訪れた時、よち子は12歳でいつものように口を開けたまま疾走していた。何でもどこぞの偉い妖魔が「永遠の花嫁」なるものを探してこの星にやってきたのだという。そんなもんいるわけねえだろ馬鹿かと誰もが思ったに違いないのだが久しぶりの観光客しかも金持ちそうということもあつて住人たちは大いに沸いた。町長が貧相な髭をしきりに捻りつつ「私に任せてくれたまえ」と言い出し、来たる妖魔様ご一行を駅の入り口で待ち構える。この町の良さを是非妖魔の方々にも理解していただくのだ（そして金を落としてもらうのだ）と町長はむやみに張り切つた。

船が到着し、現れた白い巻き毛の妖魔は一步踏み出した途端に顔を歪め「なんと臭い町だ。下賤な」と言い放つ。妖魔らしく顔立ちの美しい人物ではあつたが顔つきは非常に険しく、もう一步踏み出した途端に金魚が頬にぶつかつてぶみんと間拔けな音を立てた。

「……不快だ」

嫌悪感を隠そうともせず巻き毛の妖魔はそう吐き捨てると背後を振り返り、主らしき者に「オルロワージュ様、こんな所に花嫁がいる筈がございませぬ。おみ足が汚れます」と膝をついた。

よち子はそんなことなどつゆ知らず、いつものように馬鹿面を晒して「ふはは」と

町中を走っている。曲がり角を曲がったとたんにはたと誰かにぶつかり、「あいたあ」と呑気に鼻をさすつていると誰かが何かを叫びだした。

「人間風情が！ オルロワージュ様になんと無礼な！」

白い巻き毛の男（よち子にはそう見えた）はしきりに騒ぎ立てている。こんな喋り方をテレビで見たことがあったので、そのまま放っておけばそのうちに「控えおろう！ 控えおろう！」とでも言いだすに違いないと思つたよち子は少しわくわくして巻き毛の男を見守つていたのだが、そのせいで危うく殺されかけた。巻き毛の男が不意に腰に提げた剣を抜いて切りつけてきたのである。白々とした刃の光がぎらりと反射し、あわや少女は真つ二つ——とその時、巻き毛の背後に立っていた別の妖魔が静止の声を上げた。

——良い。セアト。余は構わぬ。

「は……、し、しかしオルロワージュ様。この星の住人の低劣さときたら。もはや生きていく価値すらございません」

——そうか？ 余はそう思わぬ。

恐縮しきりのセアトにオルロワージュは淡々と答え、その内にセアトは苦虫をかみつぶしたような顔をして「……かしこまりました」とどこかへ消えてしまう。

その間のよち子といえば、ただ目を丸くしてぼかんとしているだけだった。何しろオ

ルロワージュユのように美しい存在を見たことがなかったので、見惚れるよりもまずびつくりしてしまった。……ああ、世の中には、こんなにも綺麗な人がいるんだなあ。感動するあまりに「ふへえ……」と間抜けなため息をついてよち子は目をぱちくりさせる。

「……人生つて、こんなことあるのね。時間の流れつて、不思議なものねえ……」

無意識に呟いた言葉に、とんでもなく美しい妖魔の君はうん？と首を傾げこのちつぽけなよち子に初めて視線を向けた。

「……今、何と言った？」

話しかけられてはつと我に返つたよち子は眠気を堪えるように慌てて両手で眼を擦り、しかし相変わらずぼうつと口を開けたままのんびりと答える。

「なあに、おじさん」

「余はおじさんではない。オルロワージュユだ」

「お……おろろあ……じゅう……」

「オルロワージュユだ。言いにくいか」

「縮めておじゆさんじゃ駄目？」

「あまり変わつていないような気もするが……まあ、構わぬ。ともかく乙女よ、今、そなたは何と言ったのだ」

「変なことを聞くのね。あたしはただ、時間つて不思議ねつて、そう言っただけよ。ね、

あたしはこの町のことが結構好きなんだけれど、でもやっぱ生まれから何一つ変わらない町だと思っていたから、おじゆさんみたいに綺麗な人が突然現れて、何年経ったっておじゆさんみたいな人は来ないもんだとあたしてつきり思い込んでいたのに、なんだか、気が付いたらいつの間にかに時間が経っていて、変わらな思ってたあたしの日常が変わって、時間の流れって不思議なものねって、そんなことを言ってたの」

「そうか」

しみじみと囁いてオルロワージュがよち子の頭を撫でる。くすぐったそうによち子はくすりと笑う。

「楽しいか」

「ええ、楽しいわ！ 頭を撫でられるのってとても楽しいのねー」

そういうと、オルロワージュはとても真面目な顔をして、余もそう思う、と頷いた。

それからしばらくよち子はオルロワージュに尋ねられるがまましばらく話をした。金魚が好きなこと、近くの干物屋で時々働かせてもらっていること、将来は金魚屋になるつもりだということ。どの話にしてもオルロワージュは「そうか」と言つて穏やかに丁寧に聞いていてくれたので、よち子はすっかり嬉しくなつて妖魔というのはみんないい人なのだと思ひ込んだ。

「妖魔つてもつと恐ろしいものだってみんな言つてたけど、それつて嘘ね。おじゆさんはこんなの良い人だもの」

「そうか？　また別の場所、別の時間では、もつとずっと怖ろしい、邪悪な存在なのかもしれないか」

「そうだとしても、今ここの、この時にあたしの前にいるおじゆさんは優しいでしょう。あたしにとつては、そんなものが全てだと思うわ」

「……そうか」

そう呟いたオルロワージュはどことなく弱々しく見え、よち子は必死に背伸びをしてオルロワージュの頭を撫でてあげようかと思つたがまったく届かなかつた。

別れ際、オルロワージュはわざわざ身を屈めてよち子の視線に高さを合わせて言つた。

「よち子よ」

「なあに」

「そなたが望むことなら何でも叶えてやろう。金銀財宝でも良い。溢れるほどの贅食でも、そなた好みの美男子でも良い。欲しいものがあれば余に述べよ」

「いらないわ。あたし金魚が好きなの」

「金魚か。ならばとてつもなく大きく、輝くほど美しい鱗を持つ金魚を連れてきてやろ

う」

「ばかねえ」すまし顔をしてよち子は言う。「金魚は何の意味もなく空を飛んでいるのがいいの。それが面白いのよ」

「そうか」

「そんなに悲しそうな顔しないで」

「余は悲しんでなどおらぬ」

「なら、いいけど……」

「ならば、よち子よ」オルロワージュは僅かに語勢を強める。「余がそなたを守つてやろう。そなたを傷つけるもの全てから、余がそなたを守つてやろう。そう……永遠にだ」
「永遠なんて」突然の言葉によち子は眉を下げて困つてしまう。「そんな無茶なことしないでいいわ。永遠なんて大変なもの。あたし、別に、いまのこのままでほどほどに幸せなのよ」

「いいや守る。無茶だなどとむなしいうことを言うなよち子よ。そんなことを言つてはならぬ。良いか、この世に永遠はあるのだ。たとえ何年時が経とうとも、決して失われぬものがこの世にはあるのだ。余がそれを証明してやる」

「そう」と仕方なくよち子は言つて足元の小石をぽんと蹴つた。オルロワージュの眼はどこか遠くを見ていて、その時だけはよち子を見てはいないのだった。そして――、

——そして、物語は語られる。

時の流れの話をしよう。

オルロワージュはよち子を守る。頭の悪い少女との約束を律儀に守り、雨の日も風の日もよち子を見守り続ける。

永遠だ、とオルロワージュは思う。そう、永遠だ。自分がよち子を守ってやるのだ。決して死なせたりなどするものか。そう思っている。なんて愚かな考えだろう。

よち子は順調に成長する。貧しいこの星では時々誘拐されそうになったり殺されかけたたりすることも何度かあったけれど、そのたびにどこからともなくオルロワージュが現れて助けてくれる。一人じゃあない。よち子は微笑みを絶やすことなく少女から娘へと大きくなり、やがて恋をする。

あたし、おじゆさんのことが好きかもしれない。恋って、こういう気持ちのことを言うのかしら。おじゆさんの顔って本当にきれいで、あたしなんだか見ているだけで吸い込まれそうになる時があるの。

余の寵姫となるか、よち子。

……ううん。やめとく。

なぜだ。

あたしはおじゆさんのこと好きだけど、でもおじゆさんの周りにいるお姫様たちみたいに美人じゃないし、頭も良くない。なんだか変でしょ。それにあたし、だからって妖魔になろうとも思えないし。

そうか。

よち子は東の間恋をして、そのまま中学を卒業すると近所の金魚屋に就職した。自らの稼いだ金で生きていくようになり、小さいながらも家を借り、一人で生計を立て、大人になり、年を取り、老い、やがて死んだ。長い時を生きる妖魔にしてみればたった一瞬の事だった。

時の流れとはそういうものだ。生れて生きて、死んでいく。老衰によって穏やかに死につつあるよち子は震える声でオルロワージュに言った。

「おじゆさん。ありがとうね。あなたのおかげでいつも、あたし一人じゃなかった。楽しかったの」

「しかし」オルロワージュはよち子の手を握って言う。「余は約束を守れなかった。そなたを永遠に守るとそう誓ったと言うのに」

「ばかねえ」よち子はくすりと笑う。「おじゆさんはちゃんと約束を守ってくれたじゃないの」

あのね。あたし思うんだけど、永遠なんてそんなに大したものじゃない。おじゆさんは妖魔だから、永遠って言えば何百年何千年という気の遠くなるような果ての果てのことかもしれないけど、でもあたしにとつてみれば、人間の寿命からしてみれば、永遠って百年のことよ。

あたしはもう百歳生きてでしょう。あのちっちゃいころ、金魚を舐めて笑っていた阿呆の頃から途方もなく時間は過ぎて、永遠。いま、ここにいるあたし、永遠を過ぎてあなたに守られたの。だから、これでいいのよ……。

おじゆさん。あたし、あなたのことが好きよ。元気でね。さよなら。

それからオルロワージュはファシナトウルへ帰ると「余はしばし眠る」と宣言し、三百年間一度も目を覚まさなかつた。

時は瞬く間に流れていく。ふと束の間目を閉じて気が付いた時には、昨日知り合つた筈の人がみな死んでいる。何百人何千人、出会いと別れを繰り返し積み重なつた記憶が「名前」という「言葉」に集約され、消えていく。

オルロワージュはよち子という少女と出会い、短い会話を交わし、そして死に別れる。シエダルという少女と出会い、王文青という少女と出会い、メテルムミアという少女

と出会い、そして死に別れる。

途方もなく生きていればいつか約束の言葉を口にするものが現れる。いつもぼんやりとしていて、あらぬ方ばかりを眺めていて、「時間」という単語を口にして不思議がる少女と出会う。こんなことがあった、と思う。自分はいつか、こんな少女と出会ったような気がする。何かを失った、そんな気がする。——けれども、それがなんなのかは決して思い出せない。自分が何を忘れたのかも思い出せずに、時を過ごして更に忘却は深まっていく。

同じような少女と出会い、同じような会話をして、同じような別れ方をする。

よち子。シエダル。王文青。メテルムミア。出会い別れた名前が何百年の時の果てにその違いがわからなくなつて、はたしてあの会話をしたのは誰だっただろう、金魚が好きだと言つたのは、誰だったのだろう、わからなくなる。

薄れゆく記憶の中ではいつかその名前さえ忘れてしまふに違いなく、オルロワー・ジユの感情はゆつくりと摩耗していく。

——そんなに悲しそうな顔しないで。誰かが言った。本当にそうか? 「悲しそうな顔」をしてみせながら自分はどこかで、つまらない既視感を覚えてうんざりしていたのではなかったか。

——余は悲しんでなどおらぬ。……ああそうだ。たとえ悲しいと思つてもいつか色

褪せる感情ならば、それはきつと物語になってしまいう言葉なのだ。

だから、オルロワージュは――。



朝、目を開けて換気のために窓を開け、ああ春が来た、と零姫は思う。

昨日と比べれば気温は少し高いと言う程度で、肌寒いことに変わりはない。それでも今朝の空気を鼻腔一杯に吸い込んで、さらりと静かに風が吹き込み、紛れもなくそれが春のものであると確信する。

季節というものが移り変わるものであることを零姫はもちろん知っているし、ある日突然にスイッチが切り替わるように次の季節へと変化するものではないということも知っている。

しかしそれでも零姫にとっての春はいままさにその瞬間から始まったに違いないし、昨日までは冬で、今日からは間違いなく春なのだ。

少し寒い。けれども、春だと思うそれだけで心持ち暖かいような錯覚に覆われる。匂いの何が違うのかはわからないが、きつと植物の芽吹きや花の開花が風に乗って香るのだろう。

冬が終わり、春が来る。冬が終わってしまつて悲しいという気持ちと、春の訪れに心浮き立つ気持ちが混じり合つて不思議な気持ちになる。

冬にしかなることのできない服。冬独特の食べ物、鳥や虫に獣。それら全てが過ぎ去つて今年の冬は終わり、この冬の思い出と共に封印される。

寂しい、と思う。

けれども同時に思うのは、世界中ただ一人自分だけが春の訪れに気づいたのだということと、誰かに早く伝えたい、ということだ。

オルロワージュと朝食を共にするまで零姫はうずうずと待ち侘びていた。ついにその時が来るとナイフを手取るよりも先に零姫はオルロワージュに告げた。

「知っているかぬし様よ。今日は、もう春なのじゃ」

「そうか」

「のう、ぬし様よ。午前は庭へ散策に出かけよう。まだ早いかもしれぬが、よくよく探してみれば春の花々がいくつか咲いているかもしれないぬ」

「ああ」

野原を歩み、木陰に身を屈め、小さな指で草をかき分け、探り当てたその奥には仄かに蒼く花が灯っている。顔を綻ばせ、零姫は振り向いてオルロワージュに報告する。

「見よオルロワージュ。春はここにある」

「そのようだ」

顔色一つ変えないオルロワージュに零姫はぶつと頬を膨らめ拗ねてみせる。

「なんじや。感動が足りんぞ。妖魔の君ともあろうものが、自然の趣を理解せぬとは嘆かわしい」

「これは仕方のないことなのだ。零姫」

「言い訳か。見苦しいにもほどがあるぞ、ぬし様よ。この花を見て美しいとは思わぬか。春の芽生えを、命の始まりを言祝ぎたいとは思わぬのか？」

「思う」

「では、なぜ」

「けれども、零姫。百万回の春を愛せば、いつかそなたはまた来る春を憎むようになる。春の訪れに喜び、庭に下りて花を探そうとて、そなたは一体何度それを繰り返す」

「たとえ何度来ようとも、美しいものは美しい」

「そう思えるそなたが余には少し羨ましいのかもしれぬ」

「なぜ、わからん。この世に同じものなど何一つとして存在せぬ。生きとし生ける誰もが、この世の誰とも似ていない。去年の花は今年の花とは違うのじや」

「本当にそうか？　しかしそなたは去年のものも今年のものも、ただ等しく「花」と言う。

言葉では同じだろう」

「言葉は思いとは違う。記憶とは違う」

「いいや、積み重なった記憶は言葉でしかない。そなたは百年前の熱を覚えているか？

百年前の触感をその身に感じる事ができるのか？ 情報は感情によって解釈され、

いつか記憶という名の物語になる。この世に真実は残らない。残るのは物語だけだ。

「言葉」だけなのだ。花を見た、とそなたは思う。百年前の花、十年前の花、五年前の花、

一年前の花。花、花、花……口に出して繰り返すうちに、花という言葉の意味は失

われて、その音が何を指し示すものだったかを忘れてしまう」

「妾は違う」

「何も違いはしない。零姫よ。余と出会った時、そなたは既に飽いていたのではなかつ

たか。仙女としての儉しくも精錬な生活にも、邪悪と快楽に染まった生活にも、そなた

は倦んでいたのではなかつたか。だのに零姫、なにゆえそなたは花を愛でる」

……そして何よりも『零』^{ling}という言葉が指し示すのは、虚。何もない、空っぽ、そう

いう意味である。

——空っぽじゃ。なにもかも。

「そうじゃ……。なぜ忘れておった。なぜ、妾は……」

「余の口づけが欲しいか、零姫」

「ほっ」

口に出して零姫ははつとする。なぜこんな時にそんなことを聞くのだろうかと疑問に思うよりも先に、自分はキスを求めていた。何の疑いもなく、ほしい、と答えていた。凄まじい寒気が全身を襲った。

見上げれば、オルロワージュが無表情でこちらを見ている。

「そなたは何も悪くない。余はそなたを愛している」

「妾もじゃ。ぬし様」呻くように零姫は愛を囁き、血が出るほど歯を食いしぼる。「しかし、そうか。妾はまだ理解しておらなんだ。虜化……。教えてくれ、ぬし様よ。妾は何を忘れた。ぬし様の牙を受ける前と後では、妾はどう変わってしまった」

「それは誰にもわからないことなのだ、零姫。自分が何を忘れたのか、何を失ったのか。その答えを出せるものはどこにもいないのだ」

「そんな……」

◇

たとえば小手毬の花を乙女は愛す。今年の花はことのほか小さく美しい。次の年の

小手毬は大ぶりなものが目立ち色は少しくすんでいる。また次の年には花数が多く絢爛に咲き誇り、また次の年には珍しく八重花、柔らかく丸みを帯びてまさに手毬のように手の中で揺れる。

言葉尽くそう。花を語ろう。花はいつでも美しい。乙女の愛す小手毬の花は庭に咲いて幾億万。そのどれもが微細に異なり、花数が違えば色合いが違い、形が違えば重みが違う。

存在するすべての花はみな違う。生きている。生きているから違うのだ。機械種族のように大量生産される無機物とは違うのだ。

花は唯。花は無二。

この花は乙女の花だ。

今ここにある花は、去年のものとも昨日のものとも違うのだ。

「本当にそうか？ 妾にはわからぬ……」

冷たい溜息をこぼして零姫は手の中の花に視線を落とす。

「花は確かに美しい。しかし……」

隣ではオルロワージュが目を閉じ、長い眠りにについている。ため息をついて、零姫は静かに語りかける。

のう、オルロワージュよ。妾は確かにこの花を美しいと思うのじゃ。……しかし、その思いをおぬしと分かち合うことはできぬのじゃな。

それというのも全ては「時」のせいなのか。ただおぬしが妾よりも気の遠くなるほど長い時間を過ごしてきたから枯れているというだけで、いつか妾もおぬしのように花を見て心ひとつ動かない永遠の怪物になってしまうのか。

おぬしの言うこともわからないのではないのじゃ。何事にも初めてというものがある。おぬしとした初めてのキスを思い出すだけで、今でも魂が燃える。初めのキスは2回目とも3回目とも違う。……けれども500回目と501回目との違いは妾にはもうわからぬ。その感触は薄れて消えてしまった。時の彼方の地平線に飲み込まれてしまった。違う、とそう思いながらその違いが極小でしかないのならあるいは同じなのかもしれない。

いつか……いつか妾は初めてのキスのことすら朧なまま、大切なことを何もかも忘れて痴呆めいた至福に溺れてしまうのか。

たとえば記憶。

たとえば思い出。

ああその通り、おぬしの言うように、人の心は移ろうもので、時の流れにその香りを嗅げば必ず無常の匂いがするものじゃ。妾の心はいつだって揺れておる。

のう、オルロワージュよ。そなたを愛しいと思う妾の心、嘘ではないぞ。おぬしはすっかり乙女の了解を得てから吸血を行う。妾がおぬしに吸血を乞うたのは、妾がそうしてほしいと心底願ったからじゃ。この男が好ましい、そう思えたから妾はおぬしを招き入れた。それは間違いではない。……しかし、それ以降のことはどうなのじゃろうな。

妾はおぬしの虜となって後悔はしておらぬ。しかしその心もまた虜化されたものだとしたら、おぬしを想うとき胸を締め付けるこの狂おしさも何も、すべては虜化によって演じられたもの、妾の身体を流れるおぬしの血が語る筋書きに過ぎないのかもしれない。

オルロワージュ。この世に愛を証明することはできるのか。永遠を求めると言っておぬしはその存在を証明する方法を知っているのか。妾にはわからぬ。

虜と言う名の皮を着て、寵姫という名の役割を演じて、永遠と言う名の舞台に立った。しかしその中身は？ 何もかもを脱ぎ捨てて虜化から逃れえたとしたら、妾はそれでもおぬしを愛しているのじゃろうか……？

零姫は眠るオルロワージュにそつと顔を近づけて口づけを落とした。
涙を流すことはもはやできなかつた。

幕間 朴念仁友誼

血の匂いがした。

噎せ返るほど近く濃密な血臭が立ち込めている。吐き気を催しそうなほど血生臭い風が荒野に吹きつけ、喉の痛みに咳をするととめどなく血反吐が零れた。血に濡れた右手をぼんやりと見つめまた一つ咳をする。なんだこれは、と思い反対側を見れば左腕は千切れて無くなっている。左足も同様で視界の端で剣に縫い付けられているのが見える。脇腹は大きく抉れ、はみ出した臓物を子鼠に齧られていた。

「そうか」そこでようやく気付いたイルドゥンはぼそりと小さく呻いた。「俺は負けたのか」

鋭い瞳も今は血と泥にまみれ、身に纏った黒燕草の服は襤褸同然に破れている。

自嘲する代わりにとほりと血を吐き天を睨んでいると知り合いが軽やかに歩み寄ってくる。両手には回収してきたイルドゥンの身体をぶら下げ、ラストバンはにこにここと微笑んでいた。

「やあ。随分とひどい有様じゃないか。我が友」

「見ての通りだ。満足に動くこともできん」

「やはり……魅惑の君オルロワージュと闘うのはいささか早かったようだね？」

「オルロワージュに挑めといったのは……おまえだぞ、ラストバン……」

「僕は挑んでみるのもいいかもしれない、と言っただけさ。それに、僕よりは君の方が強いだろう？」

「……どうだかな」

「まあそう言わないでくれたまえ。僕は何も君を謀殺しようと企んだわけじゃあない。その証拠にほら、こうしてきちんと助けにきただろう？」

「助けに来たのは認めよう。だが……」イルドゥンはラストバンの背後に鋭い視線を送る。色濃い影を連れ、全てを断ち切る妖魔の剣を無造作に右手に提げ、オルロワージュがこちらへと近づいてくる。「まだ、助かったわけではないがな」

「どうした。戦いはもう終わりか？」

息一つ乱さずオルロワージュは平然と問いかける。

「体が千切れたのなら早く繋げるが良い。待っていてやろう」

抑揚の欠けた言葉にラストバンは慌てて声を張り上げた。

「オルロワージュ様！」

「……む。そういえば、そなたは誰だ。そこに倒れているのがイルドゥンで良いのか？」

それとも決闘を挑んできたのはそなたの方だったか？」

「私はラストバンと申します。妖煌帝オルロワージュ様、お初にお目にかかりまして大変恐悦至極にございます。お噂通り、何と言う美しさ、なんとという強さ、一目で感服いたしました」

「ラストバン！」卑屈な態度にイルドウンが怒りの声を上げるがラストバンは構わずに追従を続ける。しかしオルロワージュは左手を軽く振って言葉を遮った。

「よい、よい」オルロワージュは淡々と言う。「そのような言葉は聞き飽きた」

「左様でございますか。これは失礼を致しました」

「それでラストバンとやら。そなたは何故ここにいる」

「はっ。それといいますが、愚かにもオルロワージュ様に敗れ去ったこのイルドウンは私の友であるのです」

「友。妖魔も友誼を結ぶのか」

「は？」

「そうか……友か。それはとてもいいものだな、ラストバンよ。友は大切にするものだ。そなたは友を助けるために現れたのだな？」

「はい……僭越ながら、我が友の助命を嘆願しに参った次第でございます」

「ならばそなたとイルドウン、同時に余に挑んでくるがよい。許そう」

「い、いいえ！ 私はオルロワージュ様と闘うつもりは毛頭ございません。この決闘は

紛れもなくイルドダウンの負け、そこに異論はございません！」

「おい……」

イルドダウンが小さく呻くがラストバンは慌てて「君は黙っていたまえ」と口を塞いだ。オルロワージュはといえばもがくイルドダウンに視線すら向けずにじつと俯いている。

「イルドダウンの負け……？」とすると、余は勝ったのか。そうか、勝ちか……」

オルロワージュはむなしそうに嘔き続けた。

これ以上危害を加える気はないようだ判断したラストバンがほつと一息ついてイルドダウンを離すと、イルドダウンは傷ついてなお力を失わぬ緑宝石の瞳をぎらりと光らせた。

「俺を殺さないのか、オルロワージュ」

「殺す？ 何故だイルドダウン」

「俺は決闘を挑み、負けた」

「そうだな。そなたは確かに負けた。そしてラストバンが助けに来たのだろう。……それならばそなたは助けられている筈だ。何も間違つてはいまい」

「ふざけるな。だとしたらそのラストバンごと叩き斬ればいいだけのことだろう」

発言にラストバンがぎよつとするがイルドダウンは構わずに言葉が続ける。

「敗者に情けをかけるかオルロワージュ。その油断はいつか貴様を滅ぼすぞ」

「だから」オルロワージュはひたひたと凍みつく瞳でイルドゥンを見下ろす。「それがなんだと言うのだ？」

「何？」

「ここで殺してしまえばそなたはそれでおしまいだ。……それはいささか勿体ないことだとは思わぬか？　もう二度と会えなくなってしまうではないか」

「しかし、俺は……」

「また余を殺しに来るが良い。イルドゥンよ。余はいつでも待つておる。命を賭けてそなたと再び剣を交える時を余は楽しみにしている」

「……」

オルロワージュは悠然とした足取りで立ち去っていく。イルドゥンはしばらく黙っていたが、やがてその後ろ姿にぼつりと問いかけた。

「……オルロワージュ。お前は寂しいのか？」

問いかけに答えず、オルロワージュは背中を見せたまま天を仰ぐ。

「オルロワージュ」

再度語りかけるとオルロワージュはゆっくりと振り返り、静かに頷いた。その瞳は何の光も宿してはおらず、破碎した鏡のように歪な世界を映すのみだった。眼球の虚無にイルドゥンは一瞬息を呑み、拳を握りしめる。

「どうやらそのようだ」余所事のようにオルロワージュは投げやりに応え、ぞつとするような微笑を浮かべた。

「しかし、そなたもそれは同じなのではないか、イルドウン。何百年も生きていけば飽きが来る。来る日も来る日も同じようなことを繰り返していれば、その内に寂しいと思う日もやって来よう」

「生憎とこの世界には俺よりも強い相手がごまんといるのでな。退屈するほど暇がない」

「どうかな。今は忙しいと感じてはいても、時が経てばそなたはこの世の全てに慣れていくだろう」

「俺はお前とは違う」

傲然とイルドウンは言い放つ。

「確かにお前は強い。だがそれは世界とは相容れぬ強さなのだろう。誰もお前を傷つけられず、誰もお前に並び立たない。本当はオルロワージュ、お前は戦いという戦いを経験したこともないのでないか。お前がちよいと手首を捻ってやれば敵は千切れて死に、訳のわからない全能感とむやみな達成感ばかりが積み重なっていく。鎬を削ることもなく、血を流すこともない。……お前はただ、足元を這いまわる虫けらを踏み潰しているだけだ。それで楽しいわけではない」

「なるほど。——そしてその虫けらがそなたというわけか、イルドウン？」

「悔しいがその通りだな」イルドウンは無表情でぼそりと呟く。「自分で言っておきながらまるで我慢ならない表現だが」

「虫けらで良かったではないかイルドウン。今、そなたがそうして生き永らえているのも余の退屈のおかげであろう。余の倦怠もたまには誰かの役に立つ」

「下らんな。他者の情けに縋って生きているような奴はそれこそ塵芥に等しい。そんな奴は速やかに死んでいくべきなのだ」

「そなたもなかなかどうして強情だ。それほどまでに敗北の罰が欲しいか？」

「俺は俺の望むようにしか生きられない。それはお前も同じだろう」

「ふむ。……そうだな、確か金獅子姫もこんなことを言っていた。勝者が敗者を支配する。では勝者として余はそなたに命令しよう」

「何だ」

「イルドウンよ。余の友になるがよい。余の友として余の孤独を癒し、また時には余を憎む敵として余を楽しませよ」

「断る」イルドウンは無愛想に返答する。「友などという鬱陶しいものは十分だ」

「ふむ……」

珍しくオルロワージュは眉を上げ、苛立ったように唇を曲げる。

「そなたのように我儘な男はみたことがないな。腹立たしいと思うのも久方ぶりだ」
「おまえがおかしいだけだろう」

無造作に言い放つイルドウン。ラストバンはそれまで言葉を挟まずイルドウンの無作法な言葉にはらはらしながら見守っていたが、この言葉にはさすがに肝を冷やした。
「では、そなたはどうするのだ、イルドウン」

「そうだな……」

イルドウンは自分を支えるラストバンにちらと視線を向ける。

「俺はお前の友になどなりたくはない。だが部下にならなつてやろう。気が向けばまたお前を殺しにも行つてやる。……それでいいだろう？」

「ふっ」オルロワージュは感心したように笑うと剣でイルドウンの胸を突き刺し、そのま大地に縫い付けた。鈍く呻きながらイルドウンはなおもオルロワージュを睨みつける。

「そなたは強いイルドウン。完膚なきまでに叩きのめされておきながら命乞いの一つも見せぬ。あくまでも矜持を失わず自らのままで在りつづけようとはまさに妖魔らしい生き方よ。良かろう。ならばイルドウンよ、そなたはたった今から余の部下として黒騎士に任命しよう」

感謝せよ。そう言つてオルロワージュは剣をゆつくりと捻る。薄氷を踏みしめるよ
うな音を立てて妖魔の骨が砕けていく。イルドウンは苦痛に目を細く歪めるが、血反吐

を吐きながらも不敵に笑う。

「そうか」イルドゥンは止めどなく血を流す自身の体を眺めながら穏やかに頷く。「ついでにこのラストバンも黒騎士とやらにしておいてくれ」

そう言うとおルロワージュは楽しそうに笑った。

◇

夜を視ていた。

日の暮れてまだ間もない頃、空の蒼を夜の帳が遮って薄暗い群青の闇が生まれる。

星を見ていたのではない。そんなものは輝いてなどいない。ただ果てのない空の宵闇を眺めている。春風が颯々と彼の長い髪を吹き散らかしていく。

ふ、と息を吸い込むと温かな空気が肺を満たす。夜の、蒼の、闇に微睡む酸素が舌の上で融けていくような気がする。心地よい感触に目を閉じる。

ファシナトゥールの果てに位置する黒宇森で最も古い胎蠟樹の頂上、鳥でさえ寄りつかぬ遙か高みの幹に背中を預け、イルドゥンは夜を見ている。大木の上からはあらゆるものを見渡すことができた。地平の果てにうねる海は空よりも蒼が濃く、見つめているだけで潮騒に飲み込まれそうになる。あらゆる物体はその身に仄暗い影を埋め、静寂を

保っている。尻を発光させた灯籠虫の薄ぼんやりした赤錆色が黒々とした木々に僅かに滲む。

森は閑かだった。虫のさざめきも松籟も聞こえはしない。上級妖魔であるイルドゥンがあらかじめ「鎮まれ」と一言囁いておけば、虫は懸命に息を止め羽を折り、植物は風に揺れる枝葉を凍り付かせる。

無音の夜に立ってイルドゥンは笑っている。自然を愛でているのだとは到底思えない凄惨な笑みである。見ているだけで手足が千切れ飛んでしまうような暴力性を秘めながら、しかし一方で目にした瞬間に心を奪われ、力なく膝を落として両手を組んで信仰を捧げてしまいたくなるような宗教的美を孕んでもいる。

妖魔イルドゥン。鴉の眼、石化蜥蜴に似た白罌粟の肌。高く通った鼻梁にかたく閉ざされた唇。花緑青の長髪は腰まで伸び、風に流れては軽やかに翻る。

柔らかな夜に身を任せ、とりとめのない考え事に没頭するのが彼は好きだった。だから今日も夜を見つめ群青の闇に手を浸し、地平に煙る太陽の残光を嗅いでイルドゥンは茫洋と思考に耽る。

今考えているのは「時間」のことだった。オルロワージュは確かにそんなことを口にした。時間。

彼は夜を愛している。朝、太陽が昇り、闇は薄れ、世界が照らされる。じりじりと大

地を光が焼き、やがてくたびれた太陽が力を失って地平性の向こう側へと墜落し、世界は見る間に冷えていく。光は失われ、再び闇が降り来た。それら全ては時間の流れによるものだ。

彼が夜を視る時、世界はたいてい静寂で、昼間のように騒がしく駆け回る者もない。生命という生命は運動を停止しているようでもあり、或いは時が停まっているかのよう感じられる日もある。

時間。

時間とは一体何だろうか？

妖魔であるイルドゥンには明確な記憶と言うものが実は存在していない。人間種族であれば「物心がついた時」とでも表現するような時代が妖魔にはない。妖魔は既にし完成された生き物であり、成長などしない。妖魔は生まれ落ちたその瞬間からあるべき姿あるべき状態のままである。より正確に言えば、妖魔は「生まれ落ち」たりはしない。妖魔は生殖行為によって繁殖するのではない、世界の解れ目からある日ころりと吐き出されるようにして陽炎のように存在し始めるのだ。

たとえば人間ならば赤ん坊のころは何もかもが新鮮で日々は目まぐるしく移り変わる。記憶の原初とはそうしたものである。赤子が少女になり、少女が娘になり、やがて大人になる。時の流れと共に人は成長し、それにつれ記憶もまた継続していく。

しかし妖魔には成長というものがない。気が付いたその瞬間に己は己だったのであり、かつ昨日も一昨日も己であったのだ。

だから——というわけでもないのだが、イルドゥンは自分にとつての「始まり」が何だったのかを覚えてはいないし、自分がどれだけの時間を生きているのかも本当の意味ではわからない。自分の命は連続していない。

「それを寂しいと……オルロワージュはそう言ったのか……？」

思わず口をついて出た疑念は寄る辺なく風に攫われて薄れていった。誰にも聞かれなかったようだ。儂げな自らの言葉にイルドゥンはむ、と眉を寄せて黙り込んだ。

「おーい、イルドゥン。またこんな所で独りでののかい。今日はとつておきの琥珀酒アマタールを持ってきたんだ。一緒に飲もうじゃないか」

それからしばらくしていつものようにラストバンが尋ねてきた。大木の根元から妖術で呼び掛ける友の声に「ああ」と答えたままイルドゥンがなおも視線を遠くに飛ばしている、ラストバンは困ったように首を傾げる。

「イ、イルドゥン……？」 聞こえただろう、下りてきてくれないか……？」

上擦ったラストバンの声に、イルドゥンは無愛想に答える。

「お前が昇つて来い」

「木の上で飲むのかい？ それはそれで乙なものかもしれないが……しかし、随分飲むにくくはないだろうか」

「どこで飲むもうと酒の成分は変わらん」

「君と言う奴は相変わらずだな……。まあ仕方ない。君がそういうのなら僕はそれに従うさ」

「早くしろ」

「落ち着きたまえ。今日は折角の日なんだ。僕と君の黒騎士就任祝いさ」

ラストバンは軽やかに大地を蹴り、大木を駆けあがるとイルドウンの隣に腰を落ち着けた。

イルドウンとラストバンは互いの盃に酒を注ぎ、ささやかに打ち合わせた。ぐいと一息に飲み干して「ああ美味いな」とどうでも良さそうにイルドウンが一人ごちる。

「一時はあわや両方とも殺されるかと思つたけれど、中々どうして上手くいったじやないか。ファシナトゥールを支配するオルロワージュ様の旗下に加わることができたんだ、これで僕らも安泰と言うものだよ」

「下らんな。妖魔が安泰を求めてどうする。妖魔という生き物は他者を支配していればそれでいい。自ら支配される側に回るのは人間のやることだ」

「そうかい？ 僕は僕のやり方でこの世の全てを支配しようとしているだけさ。君の生き方とは、単に時間のかけ方が違うのさ」

「だからといってラストバン。オルロワージュに阿るような真似を俺は認められん。何がお噂通り美しいだ、笑わせるな」

「僕の迎合主義もまた君の無愛想と同じように哲学的だと僕は信じているよ。生き物はみな自分の精神からは逃れられないからね。君と同じように、僕だって僕の望むようにしかできない」

「そうか」

「ああ」

「ならいい」

「短く言ってイルドウンは再びラストバンに酒を注ぐ。ありがとう、とラストバンが笑う。」

「しかし……お噂に聞いていたよりもオルロワージュ様はずっと寛大な方だったね。もっと怖いお方だと思っていたのだけれど」

「寛大？ あれは変わり者と言うのだろうか」

「それは否定しないよ。さすが妖魔の君ともなれば、自らの世界というものを完全に構築しているのかな。会話をしているようで会話していないとも言おうような。何か、

ずっと別のことを考えているようだったよ」

「同感だ。オルロワージュには迷いが見える」

「強者ゆえの苦悩……とでも言うのかな？ さしものオルロワージュ様も生きている限り心の悩みというものはあるものだ。付け入る隙は十分ありそうじゃないか。あと何百年かすれば殺せるんじゃないかい？」

イルドウンはちらと横目にラストバンを捉え、小さな声で「知るか」と酒を呷った。

第五幕 時を患う者どもの炸裂すべき愛の牙

打ち寄せる波を妖魔の具足が遮り、僅かな波紋が生まれるか生まれないかという具合で次の波にくしやと砕かれる。

夜の海は月光に照らされて冴え冴えと白み、砂浜に歩み寄る飛沫は記憶を浚うように遠く音を立てる。

あてもなくふらふらと海辺を散歩していたオルロワージュはふと振り返る。地平線の果てまでも続いているような己の足跡が暗く静かな波に少しずつ少しずつ削り取られては消えていく。

海を見る。繰り返される波音が単調な律動を刻む。「余は」とオルロワージュは言う。なぜそんなことを言おうとしたのか、そして何を言おうとしたのかさえも自分ではわからず、それきり口を塞いでオルロワージュは波の滲んだ水平線に視線を飛ばす。

話すべきことはもう無いように思えた。距離を取って歩いている零姫も同じことを感じているのか、オルロワージュに遅れたまま急ごうとはしていない。ただ時折こちらの様子を窺うように顔を上げ、その度に熱のない溜息を吐き出している。力のないその表情を見ていると不意に肩の関節が強張っていくような感覚を覚え、オルロワージュは

ふと足を止める。もう歩くのを止めようか、そんな感情が湧いてくる。

「零姫、そろそろ城に戻るか」

振り返って零姫に尋ねると、彼女は仄かな逡巡を見せた。

「……いや、妾はもうしばらく歩いてみることにする」

「そうか。では余も付きあおう」

「……良いのか？」

「ああ。構わぬ」

そう言ったとき再び沈黙の幕が二人の間に下り、オルロワージュと零姫は何かの試練でも受けているかのように黙々と前を向いて歩き続ける。

それが最後の夜だった。



女の声が熱く男をせがむ。欲情に濡れ、官能に震える声で罰を求める。剣に臍を掻きまわされ痛みに涙を流しながら、くぐもった呻きと共に、と甘い息を吐く。いつそう深く差し込まれた剣に高く声を跳ね上げて女は、奴隷のように慈悲を求めてし

まう。

ほしい、と女は言う。罌粟の花に溺れる中毒者じみて痙攣する腕を男の胸へと弱々しく這わせながら、餌を待つ雛鳥の如く舌を差し出して懇願する。

「ほしい。ああ……ほしい」

童女の甘えるようできて妓女の婀娜めいた媚びさえ含んだその艶言は灯の揺り返しを受けて寢室中に反響する。薔薇の花弁を惜しげもなく燃やし続ける無数の洋燈が闇に籠る男女の吐息を橙に透かし映す。

何が欲しい、零。

縛めがほしい。辱めがほしい。けして消えぬ傷が、滅びを呼ぶ夜の傷がほしい。日ごと疼き腐り果て、妾の全てを暴き立てる傷がほしい。ああ……ほしい。ほしいほしいほしい。あの甘く切ない口づけがほしい。

そなたが望むのならくれてやろう。

ああ……。

今日はいやに乱れるではないか、零姫よ。

そんなことはどうでも良い……。ただ、この快樂さえあればそれで良いのじゃ……。

そう言つて零姫は再びうわ言のようにほしい、ほしい、と言葉を繰り返す。その様子を眺めている内にふと、オルロワージュの表情にすつと陰がさす。

“——そんなことどうだっていいじゃありませんか。気持ち良ければそれが全てでしよう?”

昔、どこかで誰かがそう言った。記憶の中で囁く淫魔にオルロワージュは愛撫の手を止め、拭いきれぬ既視感から静かに問いを投げかける。

「……零姫。時は流れたか?」

「うん?」

幼い仕草で首を傾げる零姫を見て、彼方から恐ろしい速度で迫り来る焦燥があった。零姫は果たしてこれほどまでに快楽に溺れる女だったのだろうか? ほしいほしいと犬のように褒美を欲しがる女だったのだろうか?

今や零姫は穢れない白痴じみた瞳を瞬かせ、一心に舌を出して媚びている。愛を求めている。己の血が成した虜化という鎖のために。

「時の流れに心を蝕まれ、衰えた精神は虜化という糸によって人形になってしまふ。そなたもまた、余が牙にかけた乙女たちのように……?」

「何を言っておるのじゃ、ぬし様よ? 妾は何一つ変わつてなどおらぬ。妾は永遠にぬし様を愛しています。ああ、だから、どうか億万の口づけを」

「零……」

宥めるようにオルロワージュは零姫を抱きしめるが、かつて邪悪の限りを尽くした仙

女は腕の中で駄々を捏ねるようにいやいやをする。

「ほしいのじゃ、ぬし様。ああほしいほしい。傷がほしい、口づけがほしい……」

「零姫……」

……頼りない零姫の身体をきつく抱きしめるオルロワージュの表情は、しかし能面のように微動だにしない。今まさにこの腕の中で自分は何かを失おうとしている。だというのに自分は、そんな悲劇を今更のよう感じている。手にする前から結末を知っていた物語の終章を捲る自分には、諦念ですらも予定調和に過ぎない。

「……いつかこんなことになると思っていた。どうせこんなことになると、余は考えていた。……いや違う。こんなことが、前にもあった。そんな得体のしれない既視感がどうしても消えぬ。わかってはいた。いつかは失うこの愛だ」

「いつか?」

「零姫よ。何度でも言おう。そなたは何も悪くない。悪いのは、全て……」

「良いも悪いもありませぬ。ただ世界には愛だけがあればよいのです。ああ、オルロワージュ様、オルロワージュ様。どうか妾にあなたのキスを……」

「れい……」

零姫は無邪気に首を傾げ、どうしたのですかオルロワージュ様、と声をかける。

「どうしたのですかオルロワージュ様。寂しいのですか? 悲しいのですか? あなた

がそんな風に口を閉ざしてしまふと零はとても辛いのです。キスをください」

「ああ、今……」

口籠るオルロワージュに気づかぬように、零姫は語り続ける。

「それでも、それでも口づけが頂けないのなら、妾は妾の全てをあなた様に捧げます。妾は妾を贈ります。ですから、どうか、この命と引き換えに口づけをください」

零姫はオルロワージュにしな垂れかかり、熱く滾る肢体を押し付ける。織手が淫らにオルロワージュの全身を撫で上げ、乙女の接吻で輪郭をなぞる。

「ああ……」奉仕いたします。どうか、この贈り物を受け取ってください」

「贈り物……?」

戸惑いに瞳を揺らすオルロワージュに、零姫はそつと顔を綻ばせる。

「ええ、そうです。そう……」

生暖かい息を吐き、唇を胸元に寄せ、尖らせた舌で首元を舐め上げ、零姫は童のように幼い笑みを浮かべ、そして穏やかに言う。

——妾から唯一の贈り物をしよう。ああ、そう——貴様に愛をくれてやる……!」

不意に禍々しい形相を浮かべ零姫はオルロワージュの首元へ牙を突き立てた。

唇を三日月に裂き、酷薄な笑みへと変え——夜叉の形相となつて零姫は獣の哄笑を上げる。深く鋭く牙を食い込ませ、見る間に溢れ出た妖魔の血を唇の端からほろほろと零

して吸血する。

「零、姫……?」

動揺にオルロワージュの反応が遅れる。びくりと全身を痙攣させた時にはもう遅い。大量の血を吸ってごくりと喉が蠕動し、零姫の罅が布を引き裂くような音を立てた。嘔み千切ったオルロワージュの肉を乱暴に吐き捨てる。と手の甲で己の口元を拭い、零姫はほう、と甘い溜息をつく。

「ああ……ようやく取り戻したぞ。これが妾じゃ。何千年も前に奪い取られたものを今、ついにこの手に」

「零……」

「どうしたオルロワージュ? 先ほどから同じことしか言っておらぬようじゃが……何年経ってもおぬしは相変わらずつまらない男じゃのう」

「なぜ、余の血を吸った」

「所詮はおぬしもそこらの男と変わらぬな」零姫は悪意に満ちた嘲りを浮かべる。「女の色香に誑かされ、逆吸血を許すとは。何が妖魔の君じゃ、おぬしはとんだうつけ者よ」

「何故こんな真似をしたと聞いているのだ、零姫」

「下らぬことを聞くな、オルロワージュ。妾はずつと支配されておったのじゃ。虜化というおぬしの力にな。虜化を受けたものはみなおぬしに逆らえなくなり、その心を奪わ

れる。だから妾はずっと待つておったのじゃ。おぬしの寝首を搔くその時を。おぬしに抱きついて愛を囁いたのもそのためじゃし、おぬしの下らぬ話に一々付き合つてやったのもそのためじゃ」

「零」

感情の抜け落ちた声でオルロワージュが言う。

「余を騙したのか、零姫」

「騙す？ 何人もの乙女をかどわかした男の言うことか」

冷笑しながら零姫はオルロワージュにとびかかり、大きく変形させた爪で薙ぎ払う。顔に刻まれた大きな裂傷にたたらを踏み、オルロワージュの顔を抑える手のひらからぼとりまたぼとりと血の滴が滴り落ちた。

「おお、体が軽いのう。やはり妖魔の君を吸血するともなれば、手に入る力もまた強大」
「……」

「痛いカオルロワージュ。苦しいカオルロワージュ。こうして傷を受けるおぬしを見るのは初めてのことじゃな。……実に無様よ。この程度の男に良いようにされていたのかと思うと虫唾が走るわ！」

「なぜだ、零……。なぜ……」

「認めよオルロワージュ。おぬしは『永遠』に負けた。おぬしの求める永遠などというも

のは存在せぬ。それは愚かな男の幻想じゃ」

「違う、違うぞ、零姫。余はそれでも諦めぬ。……記憶の中で見知らぬ時計塔の鐘が鳴る。だから、余は……」

「くどい……」

言つて零姫は壁に掛けられていた護身用の短剣を右手に取り、左手で包むように剣の刃を撫でた。掌がふつつりと裂け、流れ出た乙女の血が剣を化粧する。

血に濡れた蒼の剣を掲げて零姫は床を蹴り、猫のように低い姿勢で疾走したかと思ふと瞬く間にオルロワージュの右膝から下を斬りとばした。どう、と鈍い音を立ててオルロワージュが崩れ落ちる。

「零……」

オルロワージュがぼつりと言う。途方に暮れた、力なく弱々しい言葉だった。疲れ果てた声色に零姫はぎりりと歯を食いしばり、俯せに倒れたオルロワージュの後頭部を割れんばかりに踏みつける。衝撃に爆ぜ、大きく窪んだ寢室の床に滔々と妖魔の血が染み渡つていく。

「何が永遠じゃ。下らん……!」

苦々しげに吐き捨てる零姫はなおも体重をかけてオルロワージュを踏み躪る。

「いつまで悲劇の主人公ぶっているつもりなのじゃ、おぬしは!」痲癩を破裂させ、うん

ざりだとも言いたげに零姫は苛立ちを露わにする。「……ああ、そうさな、おぬしは悲しい。たくさんのものを失い、たくさんのものを忘れた。しかしのう！ 笑わせるなよ妖魔の君よ！ 時の流れに全てを攫われてなお「しかしそれでも」と鼻で笑うだけの気概もない男が、どうして永遠などという大それたものを手にできるといふのじゃ！ 永遠は果てない。しかし、おぬしがいつそれに立ち向かった？ はつきりと前を向いて永遠へと己が衝動を叫んだことがあるのか？ いつまでもメソメソメソメソと、やれ誰が死んだ、哀しみが薄れたと情けない！ 誰かを失えば代わりの花嫁を求め、その心が薄れてしまうのならば虜化能力で愛を繋ぎとめる。それでも時の中に心は弱まり、すべての愛は人形になってしまふ。……ああ認めてやるともオルロワージュ。おぬしは可哀想な男じゃ！ しかし同時にこうも言おう。おぬしはつまらん男じゃ！ おぬしは……」

零姫は悔しそうに口籠り、目を伏せて肩を震わせた。

「おぬしを愛した女たちも、なんと、無知で愚かだったのじゃろう……。おぬしのような男に懸想するとは、ほんに馬鹿、痴愚の権化としか言いようがない……」

血を吐くような思いで罵倒を口にした瞬間、不意に凄まじい恐怖が零姫の脊髄に奔った。本能のまま飛び退った零姫の鼻先を妖魔の剣先が舐めるように通り過ぎる。ぞつと全身が総毛立ち、汗が一瞬にして冷えていく。

「オルロワージュ……」

戦慄にそう呟けば、地に伏していたオルロワージュが剣を床に突き立て膝立ちにこちらを見つめている。静かな闇を湛え、煮凝る黒色の瞳には深い殺意が宿っていた。淡々と獲物の様子を窺う孤独な狩人の態で静謐な視線を向ける。

少なくともその瞳に迷いは無かった。澄んだ冬の湖のように冷たく清涼な覚悟を秘め、妖魔の君オルロワージュは依然として美しくあつた。

ぞくり、と零姫の心が震える。「ああ……」思わず漏れたため息に零姫はうつとりと身を振り、嬉しそうに語りかける。

「立て、オルロワージュ！」踊りに誘うように手を差し出し、零姫は牙を剥き出しにして笑う。「悪意を持って！ 己の苦悩を周囲にまき散らし、おぬしに関わるもの全てを不幸にせよ！」のう、オルロワージュよ！ 弱くてもいいではないか！ もっと我儘に生き、弱音を吐き、誰かに頼るような下らん生き方しても良いではないか！ おぬしは言うたな、この世の全ては物語になつてしまふと。物語というものはいつだつて陳腐なものじやろう。……ならばそのありふれた悲劇の中で助けてと言ひ涙を流し、跪いて愛を乞うたとて誰もそれを否定することはできん！」

「余に涙はない」黒々と渦巻く漆黒の瞳を蠢かせ、オルロワージュは淡々と告げる。「弱音を吐く気など毛頭ない。たとえ何があろうとも、余は余の永遠を手に入れる……！」

その言葉を聞いて零姫は歓喜に沸き立つ自らを必死の思いで抑え込み、神妙に問いを投げる。

「……ならば、おぬしはどうする？ 妖魔の君、魅了の君、妖煌帝オルロワージュよ！」

「知れたこと。再びそなたを手に入れ、支配し、屈服させるまで」

そう言つて、オルロワージュはふと自分の両手を眺め、不思議そうに囁いた。

「そうか……。余は、そなたをたつた今失つた。だというのにそなたは未だこの世界から失われてはいない……。そうか……。そうなのか、零姫……？」

「もうおぬしのような阿呆と交わす言葉は無い」満ち足りた表情で穏やかに零姫は言う。

「妾は針の城から逃れ、まだ見ぬ辺境に居場所を求めるとしよう」

劍の柄で窓硝子を叩き割り、零姫は窓辺に飛び乗つた。今にも飛び出そうとする零姫にオルロワージュは言う。

「どこまでも追つてゆくぞ、零姫。たとえどこの星、いかなる時間に逃げ込もうとも、余は必ずそなたを捉えに向かう」

感情を亡くした筈の言葉に熱が灯つた。煮え滾る欲望を美貌の裏に押し隠して滔々と告げるオルロワージュを見て——なぜだろう、零姫はそれを懐かしいと思う。

ああ、と零姫は言う。我知らず言葉が震えた。感傷に唇をわななかせ、寂しげに眼を伏せ、それでも零姫は涙に湿つた声でしっかりと答えた。

「ああ——それでいい」

「零……?」

訝しげに尋ねるオルロワージュに対して零姫は懸命に表情を取り繕い、「は、は、は」と爽やかに笑う。

「気づいておるか、オルロワージュ。……そなたは今、笑っておるぞ」

「なに……?」

指摘されふと口元に手をあて、オルロワージュは「ふむ」と頷いて見せる。

「余は笑っている……そうか……余は楽しいのか……」

「ではさらばじゃオルロワージュ。おぬしのような馬鹿者からようやく離れることができてせいせいするぞ」

「待て、零姫!」

飛び出した零姫を追い、オルロワージュは窓辺から身を乗り出して叫んだ。

「必ず捕まえるぞ零姫。何度そなたを失おうと、何度でも余はそなたを手に入れる。……ああ、愛している。余は、そなたを愛している! 零姫!」

オルロワージュはいつしか感情を露わにして吠えている。長らく感じたことのない悦楽に牙を剥き出し、嗜虐心に残酷な笑みを浮かべて思いの丈を獅子吼する。

欲しい、とオルロワージュは言う。既にして多くのものがこの手の内からは零れて

いった。しかしまた自分は再び欲しい、と思う。ああ——自分は欲しいのだ。自らが求めてやまないものが、この世にはまだ存在している！

欲しい。オルロワージュは笑う。腹を抱え身を振り、体面を取り繕うこともなく笑い出す。

魔王となり、乙女となり、星に乗った影絵の犬——悠久の時を生きる不死の怪物オルロワージュが声を上げて笑うのはこれが初めての事だった。

第六幕 ジーナ嬢かく語りき

あなたのお姉さんはとても偉い人の所へ行つたのよ。小さいころ母はよくそんな風に言っていました。

七つ上の姉さんの顔を実のところ私はあまり覚えていません。そう言うと、もしかしたらあなたは血を分けた姉妹だということになんと薄情だと思われるかもしれません。けれど、七歳も年上の姉といえれば子供と大人ほどにも差があり、だいいち姉は私が物心つく前の幼い頃に家を出て行つてしまつたのです。姉が十三、私が六歳の時でした。「元気でね」そう言つて私の頭を撫でる姉の顔を、やはり私は思い出すことができません。仕事を終えた薄暗い屋根裏部屋でときおり何か意地になつたように思い返そうとしてはみるのですが、記憶の中の姉の顔は靄がかかつたようにぼやけてはつきりとしません。

私は姉のことをよく覚えていません。彼女の姿や性格、彼女が遺した言葉といったものの、個人の名残とでも言うべき面影を持つてはいません。私の姉についていえば、どちらかといえはそういった具体的な要素ではなく、姉が旅立つ日に母の作つてくれた檸檬ケーキの味ばかりが思い出されます。ケーキと言つても実際には蒸しパンに近いもの

だったのですが、滅多に食卓に並ばないデザートに目を輝かせてはしゃぎまわったのを覚えています。貧しい我が家では芋や麦粉の屑を練り固めて焼いた生地などが主食でしたから、甘いものを食べられるのは感謝祭や謝肉祭などの祝日を置いてはありませんでした。ましてただでさえ手に入りにくい砂糖のみならず、あの鮮烈な香りのする檸檬の果汁がぎゅっと染み込んだ檸檬ケーキの爽やかな味を私は忘れることができません。檸檬は母が露天商に頭を下げて格安で譲ってもらったのだそうです。旅人に踏み潰されて汚れていた檸檬を母がなんとか探し回り、どこかこれを分けてほしい、と頼み込んだのだそうです。またもに檸檬を買うお金などうちにはありませんでしたから。

晴れの門出の日、私たち家族は食卓を囲んで檸檬ケーキを食べました。私一人が微笑んでいて、両親や兄弟たちは泣いていました。姉は泣いてはおりませんでした。格別笑いたてるようなこともなくしみじみとケーキを噛みしめ、「ありがとう」と別れを告げるように言ったように思います。

喜ぶべき日ではありませんでした。貧しい我が家の中で姉の美貌が認められ、奉公先が見つかったのですから。母の言う「とても偉い人の所」へ姉は奉公に生き、そこで得た給金で私や私の幼い弟たちは生き永らえることができる。同じ村の中には、炭鉱で働いて体を壊し肺病になる者や、娼婦や奴隸として売り買いされる者も数多くいましたから、それに比べれば姉は随分とした幸運を掴んだはずなのです。

お姉ちゃん、ばいばい。たぶん、私は最後にそんなことを言ったのだと思います。

姉が使っていたベッドが片づけられ、床に残ったまばらな日焼跡を不思議そうにぞりました。幼い私にはそれが何を意味することなのかまるでわかつてはおりませんでした。

家に残った兄弟の中では私が一番のお姉さんでした。幼い洩垂れたちの面倒を見ながら近所の縫製工場に通って僅かな給金をもらいました。幼い私には端切れや糸くずを拾い集める仕事しかできませんでしたが、蒸気を吹かしながらごうごうと轟く巨大なミシンが生地を次々に飲み込んでいくのを横目で眺めるのは楽しいものでした。

そこで私は二年ほど働きました。今にして思えばあまりにもあつという間のことのように思えます。二年間という時間が記憶の中でこれほどまでに圧縮されるものだと、思うと、日々を生きている私の生活というものは一体何なのだろうと時々無性に不思議になることもあります。

私は着実に大きくなっていき、その内に母の言葉の意味が少しずつ分かってきました。

あなたのお姉さんはとても偉い人の所へ行つたのよ。偉い人というのはこのファシナトウールを支配する妖魔の君、オルロワージュ様のことです。姉はオルロワージュ様のおられる針の城へ奉公に行つたのです。城下の世界に暮らす村娘たちの中でも特別

に美しい女を選び、見初められた女達は針の城に召し抱えられる。そこではみな一様に「ミルフアークさん」と呼ばれ、お仕着せの侍女服を着て高貴な妖魔の方々に仕えるのだそうです。

羨ましくないと言えば嘘になります。私の勤める店にも妖魔の方々がいらつしやることがありますが、どの方もみな身震いするほど美しく、また典雅で艶やかな装いをされています。あんな風に美しい方々にお仕えすることができればこれ以上の幸福がほかにあるでしょうか。

姉は奉公先から帰っては来ませんでした。仕送りだけは毎年きちんと届いていましたが、それつきり手紙も電信も寄越さずじまいでした。便りがないのが良い便りとも申せばよいのでしょうか、両親はそれほど心配したりはしていないようでした。

その内に私も自分の仕事というものを見つけなければいけない時期がやってきました。

縫製店で銭勘定をしている人に仕事を教えてくださいと頼み込んでみました。「生意気を言うんじゃない」と初めは殴られました。何度か殴られている内に相手も根負けしたのか下働きの縫い女の更にその下に就かせてもらうことができました。今にして思うと、ごみ拾いの少女に対する仕打ちとしては非常に寛大な態度だったと思います。

そこで私は針仕事を習いました。ごうごうと鳴るミシンの音に耳は悪くなりました。

が、手に職がつくという感覚は心強いものでした。残念ながら私にはデザインに関するセンスといったものはありませんでしたが、堅実さや丁寧な仕事ぶりなどを評価して下さる方が何人かいて、いくつかの紹介状を頂く事が出来ました。

私は十三歳になりました。いつの間にかあのころの姉と同じ年になり、私も家を出る時がやってきました。自分の少ない給金を貯めたお金で檸檬ケーキを作ります。記憶にあつたほど美味しくはなくがっかりしましたが、弟たちがひどく喜んでくれたので助かりました。両親は泣いてはいませんでした。辛いこともあるかもしれないがくじけずに頑張るんだぞ。父はそんなことを言つて私の背中を叩いてくれました。

私は私の生活を始めます。たった一人の生活です。身の回りの物を風呂敷包みに背負い、野菜を卸に向かう農家の幌馬車に乗せてもらいました。あてもなく続く麦穂の黄金を背景に、次第に小さくなつていく我が家を見ていると自然に涙がこみ上げてきました。

奉公先は根つこの町にある小さな仕立て屋です。飴鐘さんという下級妖魔が店主をしています。店の名前はキャンディーベルといいます。

朝、四時に起きるとまず昨日かめに汲んでおいた水で顔を洗います。身の震えるほど冷たい水ですがこれで大体は頭が覚めます。一回に下りて張り出し暖炉に薪をくべ、自在鍋をかけておきます。沸騰する間に服を着替え、前掛けをつけます。湯が沸いたら芋

を二つ入れ、生姜を刻みます。煮えたら芋を取り出して塩と生姜を入れます。今日の朝食は茹で芋と生姜湯です。食べ終わると残っていると刺繍仕事をやつつけてしまいます。六時になるともう一度沸かしたお湯で紅茶を入れ、二階で寝ている飴鐘さんを起こしに行きます。

飴鐘さんは寒さに強いのか一年中スリップ一枚で寝ています。扉を叩くのどのどかな欠伸と共に「おはよう」という優雅な声が聞こえます。半身を起こした状態でベッドにもたれている彼女はどこか淫らがましく、初めて目にした時はなんとなく「ごめんなさい」と謝ってしまいました。長い黒髪をベッドに散らし、切れ長の瞳と肉感的な唇を持つた飴鐘さんは下級とはいえ人外の魅力を備えています。近くでため息をつかれるだけで体の芯からぞくぞくするような甘い感覚が湧いてくるので困ります。

飴鐘さんに今日の予定を伝えるとよいよ私の仕事も始まります。溜まっている注文は山ほどあるのです。積みあがった型紙をかたはしから頭に入れ生地を裁断していきます。その間にも次々に来店されるお客様の要望を聞き、また採寸を行ったり試着をお手伝いしたりせねばなりません。

洋服に使われる生地は揚羽更紗やケテン、ワズカ蛾の吐く蓮毛などがあります。特にファシナトウルで流行しているのは黒宇の森に住む半人半馬のメロウステルムが分泌する糸から織られた黒洞織という非常になめらかな手触りの生地です。どの生地も

いい加減に裁断するとたちまちに糸目が縊れてしまうので素材にあった裁ち方をしなければいけません。

妖魔、あるいはその傍仕えの方がデザイン書と共に生地を持ち込み、まずその生地 of 材質を検品します。次にお客様の採寸を行い（お客様が来られずできない場合もありますが）、生地を測ります。生地をお預かりした後は生地 of 布目を正しく直すためにキ入れをし、デザイン書に沿った型紙をおこし、型紙に合わせて生地を裁断し、仮縫い本縫いと工程を経て最後にプレスにかけます。最後にお客様に一度試着して頂き細かい所を直せば完成です。

午後の大半は針仕事です。昼食代わりに茹でた屑野菜を啜えながら行います。椅子に座って黙々と手を動かしひたすらに生地を縫い合わせていきます。夕方になると石炭を入れてプレス機を稼働させます。吹き上げる蒸気で部屋の中がふわっと暖かくなるこの瞬間が私は好きです。

夜になれば店を閉め、蠟燭を持って屋根裏部屋に行きます。そこでもまた刺繍が待っています。貴族様の襟元や手巾を飾る刺繍はいくらあっても足りません。深夜になるとさすがに眼も霞み、腕も痺れてきますがそんな時には窓を全開にして凍えるほどの夜気を入れてなんとか気合いを入れます。

この生活を始めてから随分と目が悪くなりました。蠟燭の灯かりばかりを見つめて

いるせいかもしれません。座った状態で長時間いるせいか胃の調子も優れなく消化不良が続いているようです。でもお針子ですからそれは仕方のないことです。

十二時を過ぎるとようやく就寝の時間になります。窓から夜を眺めます。洗蟲晶が仄かに輝いています。刺草の根っこから吸血薔薇が咲き誇り、その薔薇を媒介として産卵する洗蟲の蛹は水晶のように硬く光を放ち、根っここの町では終夜灯として使われているのです。色とりどりの水晶がぼうつと輝く夜の町は幻想的な風情で、一日の疲れがわずかながら癒される気がします。

洋服の注文にいらっしやるのは大抵はミルフアークさん達です。注文書やデザイン画などをミルフアークさんをお持ちになり、「次の紫煌祭までに夜会服を仕立ててほしい」といったような希望を仰います。本当は採寸のためにも逐一店まで足を運んで頂ければ助かるのですが、妖魔の方々は城下を好まないのかあまり姿を見せることがありません。

働きながら私はいつか姉と再会することを期待していました。ある日ばつたりと姉さんが店の扉を叩き、「あえて嬉しいわ」「私もです」と抱き合い、城での優雅な暮らしぶりや妖魔貴族様の美しさなどの会話に花を咲かせるのも悪くはない、そんな風に考えていたのです。

ところが待てど暮らせど姉さんはやっては来ませんでした。それどころか店にやつ

てくるミルファークさんはいつも同じ人なのです。針の城には何百人という侍女が働いているというのに、オルロワージュ様やイルダウン様、ラストバン様にセアト様、そして百人の寵姫の皆様の服を注文しにやってくるのはたった一人です。雨の日も風の日も休むことなく、一日に二度も三度もやってくることさえあります。一番多かつた日などは同じ日に七度ミルファークさんが訪れました。さつき店から出ていったかと思つたミルファークさんが一歩踏み出してくるるときびすを返してきたかのように「こんにちは」と平然とした顔でドアを開いた時には流石に啞然としてしまいました。城で暮らす方というのは、やはり、少しおっとりしているとでも言うのか、なんとというか、一度にまとめて注文してしまえばいいのにわざわざ一つ一つ注文するような真似をして、身分の高い人と暮らしていると変わったことをするものなのだ、と思つたのを覚えています。

それが勘違いだということに気づいたのはミルファークさんが店に襟飾りの見本を忘れていったのがきっかけでした。珍しくミルファークさんが忘れ物をされたので鮎鐘さんが「案外ミルファークさんも抜けたところがあるのね」と面白がっていました。

次に訪れた時に返そうと私がこの前の忘れ物ですよと言って紙袋に入れた襟飾りを渡すとミルファークさんにはっこりと微笑んで言いました。それは私ではありませんよ。

そこでようやく私は知りました。ミルフアークさんはみな同じ顔をしているのです。同じ服装をし、同じ喋り方をし、ミルフアークさんは誰しもが「ミルフアークさん」なのです。

ということは今まで店を訪れた針の城の侍女たちはみな一人一人が違う人だったので。何十人といたでしょう。その中に私の姉は一人もいなかったのでしょうか。私は少し不安になってきました。ミルフアークさんはみな同じ顔をしている。もし姉と再会しても気が付かないかもしれません。姉は私であるかわかるでしょうか。六歳の私の面影が私には残っているのでしょうか。私にしても姉の顔でさえおぼろげだと言うのに、今にして思えば何を根拠に「いつか再開したら」などと考えていたのでしょうか。

ミルフアークさんの見分けがつかない以上、私はそれまでよりも積極的に姉を探すことにしました。やってくるミルフアークさんたちを捕まえては私の姉を知りませんかと尋ねることを習慣にしました。何か月経つてもはかばかしい返答は得られず、ミルフアークさんは相変わらず優しく微笑んでは「ごめんなさい、知らないわ」と言うばかりでした。そんな筈は無いでしょう、誰一人として姉を知らないなんて、そんなことあるわけがありません。

けれども、私の姉の存在は依然として知れません。一年が過ぎ、二年が経ち、私はあ

る日とうとう語気を強めて言いました。

「……お願いですから、他の侍女の方たちにもそんな名前の人がないかどうか聞いてみては頂けませんか。彼女は私の姉なのです」

「聞いてみるのは構いませんが……」

ミルファークさんは眉を寄せて困っていました。そういう名前の方はきつといませんよ、そんなことさえ言いました。何故かと問い返すとミルファークさんは当たり前だとも言わんばかりの口調で平然とこう言うのです。

「だって、私たちの名前はミルファークというのです」

「それは侍女としての名前でしょうか？ 私が聞いているのは個人としての名前です。あなたにだって名前はありますでしょうか？」

「……いいえ。私はミルファークです。それ以上でも以下でもありません」

私は大いに憤慨しました。話し方は丁寧でも、城に住むような人たちは根っこの住人を見下しているんだ、だから閉鎖的になって身内の人間にさえ家族のことを教えてくれないんだ。そう思いました。

それは大きな勘違いでした。

ある時黒騎士のイルドゥン様がご来店され、城のさる若君のために洋服を一式仕立てるように命じられました。ミルファークさんではらちが明かないと判断した私は意を

決してイルドウン様に頭を下げます。

「もしイルドウン様が姉のことをご存知でしたら、お願いです。どうか私に教えてはく
ださいませんか……？」

これは賭けでもありません。イルドウン様といえは無口で無愛想、邪妖を狩るとても
怖い黒騎士として有名です。噂話を信じるのならば下手をすればこの場で殺されてし
まうかもしれません。ではなぜそんな賭けに出たのかと言えば、店主の飴鐘さんが「あ
の方はとても優しい方なのよ」と穏やかな調子で言ったことがあったからです。

イルドウン様は私の顔をじろじろと無遠慮に眺めていたかと思うとぶつきらぼうに
ぼそりと言いました。

「……なぜ、俺がそんなことをしなければならない？　ろくに知りもしない他人のため
に」

お願いです、と私は言いました。もしかしたらこれが最後のチャンスかもしれない、
その時はそう思ったのです。必死になつて頭を下げました。床に頭を擦りつけて何度
も何度も頼み込みました。そうしている内にイルドウン様の顔はいよいよ不機嫌そう
に歪められ、ただでさえ鋭い瞳が矢のように尖りだします。

「人間は醜い。恥も誇りもなく、そうやって簡単に頭を下げる」

「お願いでございませす！　お願いでございませす！」

「……」

イルドウン様はむすつと黙り込み、私の頭越しにカウンターの奥に視線を向けました。一緒になって振り返ると、飴鐘さんが面白そうに笑っていました。イルドウン様と飴鐘さんはしばらくの間無言で見つめあっていましたが、やがて痺れを切らしたようにイルドウン様が苛々と踵を床に打ち付けます。

「飴鐘」

名前を呼ばれ、飴鐘さんはなおもおかしそうにふふふと笑います。

「イルドウン様のお好きにされたらよろしいのでは？」

「わかつているんだろうが」

「さあ。私には決めかねますわ」

イルドウン様はふん、と不快を隠そうともせず短く唸り、再び私に目を向けました。

「……小娘。名はなんという」

「……あの、ジーナ、と申します。イルドウン様」

「ジーナよ」イルドウン様はうんざりしたように言いました。「そんなに姉の行方が知りたいか」

はい、と私は答えました。

そうして私は真実を知りました。

今日はもう休んでいらつしやいな。飴鐘さんがそう言ってくれたのを覚えています。私はもう頭がくらくらとしてまともに働くこともできず、屋根裏部屋の自室に籠つてとりあえず休もうとしたのですがまるで眠れませんでした。頭の中を駆け巡る思いに目が冴えるばかりです。

どうしても眠れないので私はこっそり店を抜け出して町はずれの焼却場に向かいました。美を賛美するファシナトゥールにあつてゴミを燃やす焼却場に寄りつく者はおらず、ここでなら誰にも邪魔されずに考え事ができるかもしれないと考えたからです。……いいえ、それは、もしかしたらそれは嘘かもしれません。考えるだけなら自分の部屋でもできたのだし、何も焼却場にまで来る必要はないのです。私がこんな所に来てしまったのはきつと、心の中の衝動が焼け付く炎に焦がれてしまったからか、あるいは火という象徴が私の中に茹で立つ鍋を連想させたからかもしれません。鍋。私は姉の話聞いてからずっとお鍋のことを考えていたように思います。

以前、飴鐘さんが何かの折に不思議なお話を聞かせてくれたことがあります。少年の悩める自我の放浪を描いたお話でした。その物語の中で主人公を導く登場人物の魔少年的な魅力にどきどきしたのを覚えています。

その物語の中でこんな一節がありました。君がもし、非の打ち所のない普通のもの

になったとしたら、アブラクサスは君を捨てるだろう。彼は君を捨てて、彼自身の思想を煮るべき新しい鍋を探すのだ”。飴鐘さんの語る物語はむつかしくて私にはよく理解できませんでしたが、そのフレーズだけは奇妙に頭の片隅にこびり付きました。思想を煮る鍋、という表現が面白かったです。

私はお鍋のことを考えます。

イルドウン様は全てを話してくれました。オルロワージュ様の吸血を受けたものは虜になってしまふ。そして心の弱いものは強すぎる虜化能力に耐え切れず人形のようなになってしまうのだと。身も心も相手に捧げた純粋な人形。主にとって都合のよい姿、都合の良い存在であり続けようとする事。ただ一心に愛し、相手の望むままに動き、命をかけて主に仕えること。

その命の在り様をファシナトールではこう呼んでいるのです。——すなわち、ミルファークと。

あなたのお姉さんはとても偉い人のところへ行つたのよ。今更ながら母の言葉が思ひ出されます。あれは、あの言葉は一体どのような意味だったのでしようか。偉い人というのは、ひよつとして空の上におわしますあの人のことなのでしようか。姉の魂は一体どこに行つてしまつたのでしょうか。

ミルファークとなつたものは身も心も失い、ただ「ミルファーク」という一つの型に

押し込められて姿を変えます。顔も、名前も、心ですらも忘れてしまって、妖魔の方々に仕えるという役目のためだけの人格が残るのです。

ぐつぐつと煮え滾る鍋を想像してください。たくさんの乙女たちの魂がそこで茹で上げられ、ごった煮に形成された集合的自我が何百人ものミルファークさん達に転写される。その中の一人が私の姉です。

……焼却炉の万華鏡のように輝く炎を眺めているとすぐに目が痛くなって涙が出てきました。しかし、それは悲しみによる涙ではありませんでした。

私はどうすればよかったのでしょうか。声を上げて泣けばよかったのでしょうか。涙を流し、あんまりだと叫び、妖魔やオルロワージュ様を憎んでしまえばよかったのでしょうか。

そうすることはできませんでした。告白します。私は薄情な女です。もしかしたら私は姉を失ったのかもしれないかもしれません。けれども、もう十年以上も前に別れた姉がミルファークというよくわからないものになってしまったことがうまく飲み込めず、明確に死んだとも生きているとも言えない切れない真実に涙することができませんでした。

姉の顔が思い出せません。姉の方もそうだろうと思います。

「うう……」

不思議な唸り声が聞こえました。どうやらそれは私の声のようでした。焼けつく目

の痛みにぼろぼろと涙を零し、ごしごしと目を擦りながら私は唸ります。

「う……」

……どうしてこうなってしまったんだろう？ そう思うと顎が強張り、意識せずにごりぎり歯を噛みしめて私は弱々しい呻き声をあげます。

すると、どこか空の高いところから遠い遠い声が響いてきました。戸の隙間から風の吹きこむような細かい声でした。

——ここは人間のお嬢さんの来るところではありませんよ。早くお帰りなさい。

「どなたですか？」

私は驚いて尋ねました。

——私はこの焼却炉を預かる紅と言います。お嬢さん、こんな汚い所で涙を流すものではないません。

「……私は泣いてなんかいません」

——悲しい乙女たちはみなそういうのです。

「でも、本当に私は泣いていなかったのです！」

——では、なぜこんなところへやってきたのですか。

「それは……」

——私の炎では、涙を乾かすことはできません。

「私は……」

私ほもごもごと口ごもりながら、なんとか紅さんに言いました。

「私には大切な人がいました。その人は私にとつて大切な人だった筈なのです。……でも、大切な人はいつの間にかにいなくなつて、私のことを忘れてしまったかもしれないのです」

——そう、ですか。それは……。

声だけではありますが紅さんは少し戸惑っているようでした。

——誰かに忘れられるということは、とても寂しいものですね……。

「紅さん」

夢げな紅さんの口調に思わず名前を呼びました。

——けれど、……けれどお嬢さん。それでもあなたはこんな所に居てはいけません。ここはごみを燃やすところなのです。誰かを失う悲しみを、こんなところに捨てていてはいけません……。

「紅さん」

——さようなら。

そう言ったときりばたりと声は消えて、それから紅さんが返事をすることはありませんでした。

淡々と時は過ぎました。結局イルドウン様は注文された若君の衣装を取りに来られず、来年になるとまた新しい衣装を注文されました。

私は時々イルドウン様と会話を交わすようになりました。

多くのことを聞きました。オルロワージュ様は自らが望まないものは吸血しないこと、たとえそれが妖魔の魅了の力によるものであったとしても、ミルファークさん達のみなオルロワージュ様に進んで首を差し出したのだということ。

姉は幸せであったでしょう。どこか村の祭りか何かにお忍びで来られていたオルロワージュ様と出会い、一夜の恋をして、その魅力に焦がれた挙句にどうか血を吸ってほしいと懇願したのでしょうか。愛する人に抱かれることができ、また家族にも少なくないお金を与えることができる。たとえ虜化に自分が耐え切れず人形になるとしても、そう望んだのは姉自身なのです。……そんな風に、自分の都合の良いように考えた気を紛らわすこともありました。

三年間が経ちました。色々なことがありました。店主の飴鐘さんがオルロワージュ様に恋をし、拒絶されて傷ついた彼女はフアシナトウールを出ていきました。イルドウン様は少しだけ悲しそうにしておられました。新しく来た親方は普通の人間で、根っここの町になかなか馴染めずにいるようでしたが腕は確かでした。

姉と鈴鐘さんのことがあつて、私は根つこの町が少し嫌いになりました。

私がこの仕立て屋で働き始めてから三年になります。嫌だと思つていたことにも次第に慣れ、私たちの頭を押さえつけるように聳え立っている「針の城」のことも気にならなくなります。何の楽しみもないこの町で屋根裏部屋だけが私の気を紛らわしてくれる場所です。ここには大切な衣装がしまわれている場所でもあります。お城からの依頼でさるお方のために毎年衣装を仕立てているのです。もう十数着にもなるそうです。

先輩達は“お城の若君の衣装だ”と噂していました。その若君はもう何年も眠り続けていのだと言います。私の胸の中にまだ見ぬ方への想いが膨らんでいきます。明日にでも御目覚めになればよいのに。そう思いながら一方では、永遠に目覚めなければ良いとも思うのです。

いったいどんな方なのでしょう。妖魔ですから、きつと素晴らしく美しい方に違いありません。毎年心を込めて衣装を仕立てます。想像の中の若君に私の縫った服を着せ、うつとりとそれを眺めます

いつか目覚めた若君がああ針の城から降りてきてこの衣装を着るのです。その時私はどう思うのでしょうか。人形となった姉のように身も心も容易く奪われてこの魂を捧げてしまうのでしょうか。それは恐ろしいことだと思います。けれども心のどこかで

私は被虐の快感を心待ちにしているのかもしれない。私には姉と同じ血が流れているのです。私の衣装を身に纏った勇壮たる若君に跪き、すべての責任や恥じらいを捨てて身を任せてしまえたら——私は頭をぶんぶん振っていけない妄想を追い払います。鏡で確認してみると顔が真っ赤になってとても恥ずかしいです。

毎夜、若君のための衣装を眺めて私は想像します。どんな顔をしているだろう、どんな声、どんな喋り方をするのだろう……。ああ、若君様。あなたの名前はなんと仰るのですか……？

いつかその時が来てほしいと願いながら私は罪深いその時間を恐れました。

私は知らなかったのです。その方がどんな運命を背負っているのかを……。

第七幕 自由意思に関するゾズマ先生のありがたいご高
説またはいかにして螺子巻き式侍女が芝居の幕を上げる
ことになったか

私が私を語るときそこには自然と物語が生まれる。

私は無貌の演じ手。

私は螺子巻き式侍女。

ある時は反逆者である時は下級妖魔。ある時は田舎娘ある時は失恋者。

私は……。

私は……。

……。

◇

朝起きて、二段ベッドから降りると私はまず壁に据え付けられた洗面台で顔を洗いま

す。それから顔を上げ、鏡を見て笑顔を作り、「おはよう」と微笑む練習をします。

鏡には私の顔が映っています。癖のない栗色の髪、小さな目に控えめな唇。これが私の顔です。

「おはよう、ミルファークさん」

声を掛けられて振り向くと、二段ベッドの下で寝ていた子が眠そうに片目を擦っているところでした。彼女もまた癖のない栗色の髪をして、小さな目と控えめな唇を持っています。

「おはよう、ミルファークさん。今日も一日頑張りましょうね」

「はい、ミルファークさん。今日も頑張りましょう」

彼女はにっこりと微笑みます。その顔もまた私の顔です。私はミルファークと言います。彼女の名前もまたミルファークです。

私たちは朝の身支度をします。蔓薔薇を編んだ髪留めに黒ワジュのドレス、生成りの前掛けがミルファークの衣装です。

部屋から廊下に出るとそこには起き出した侍女たちが所狭しとひしめいています。おはようございます。おはようございます。次々に言葉を繰り返して、同じ顔で同じ微笑みを浮かべます。

朝、私たちミルファークは一斉に地下広間へと集合します。針の城に居住する全34

6人もの侍女達が一堂に会し、朝の挨拶と今日のスケジュールを確認します。その日の当番が檀上に上がり、ペこりとお辞儀をした後に大きな声で「おはようございます、ミルフアークさん」と言い、私たちもそれに続きます。

朝しなければいけないことは、たとえば朝食に使う銀器やリネンの準備などがあります。しかし妖魔の方々はあまりお食事を摂られないのでそれほど大変ではありません。糖燐花のお茶や修辭的焼き菓子をお持ちするくらいで、あとはオルロワージュ様が気まぐれに望まれたものをお出しするくらいです。血を差し出すことはほとんどありません。妖魔の方が血を所望されるのは恋と愛との果てに捧げられる血液であり、義務として摂る日々の食事ではないからです。

ミルフアークの主な仕事は二つあります。

一つはお着替えの手伝いです。針の城に住まう妖魔の方々は一日に五〜七度着替えを行います。朝起きて食事する際の服、午前の室内着、昼の外出着、また狩猟を行う時の服、午後の服、陽が暮ればもう一度着替え、夜会や観劇に出かける際の服も必要になります。

もう一つは棺に眠る寵姫様たちのマッサージです。何しろ基本的にはずっと寝たきりですから、放っておけば埃まみれになってしまいます。流石に妖魔の方が床ずれを起こしたという話は聞いたことがありませんが、定期的にお体をひっくり返して差し上げ

たり、清拭やマツサージを行う必要はあるわけです。吸血薔薇に縛られた寵姫様をひつくり返すのはなかなか難しいので慣れるまでが大変です。

これは基本的に二人一組で行います。一人は吸血薔薇が私たちを襲わないように薔薇除けの鈴を鳴らす係です。非常に楽な係ですがあまり人気はありません。吸血薔薇に襲われるリスクを抱えてさえ、お美しい寵姫様のお体に触れられる方が魅力的だからです。

ふくらはぎや二の腕を中心に丹念にもみあげ、仕上げに額からそつと香油を垂らします。眼を閉じていても寵姫の方々はみなお美しく、肌に触れているだけでともするとマツサージ中に魅了されてしまいそうになります。以前、一人の寵姫様に恋をしてしまった侍女が毎日寵姫様の唇に自らの血液を零すことを密かな悦びとしていたことがありました。事件が発覚した彼女は薔薇の海に沈められ処刑されてしまいました。私にもその侍女の気持ちが変わらなくはありません。

今日の私は白薔薇姫様の担当になりました。言葉を交わしたことは数えるほどしかありませんが、白薔薇姫様は大変お優しい方でいらつしやいます。以前、オルロワージユ様が百年ぶりに棺の封印を解かれた時も私たちミルファークに「いつも助かります」と労いの言葉をかけてくださいました。常から礼儀正しくお淑やかな方ですが、針の城に来る前は稀代の賭博士であつたとか植物学者であつたとか、あるいは図書館の司

書や悪の組織の幹部であつたなどなど、その素性ははつきりとせず噂だけが一人歩きしております。

回廊を抜け、寵姫様たちの棺が置かれた薄明の間へと向かいます。いつものように入り口で一回、棺の前で一回お辞儀をしてから「失礼いたします」と声をかけて棺を開きます。

「——あら？」

ところがその日はいつもとは違うことがあつたのです。私はもう一人の侍女と顔を見合せて驚きました。オルロワージュ様の吸血薔薇によつて妖力を奪われ、棺から身動きできない筈の白薔薇姫様が——なんとということでしょう、忽然と姿を消していらしたのです。

「……困りましたね」

「……困りましたね」

「こんな時、私たちはどうしたら良いのでしょうか」

「とりあえずセアト様にご報告しましょう。私は少しこの辺りを探してみます」

「……わかりました。頑張りましょう。ミルファークさん」

「ええ。頑張りましょう」

相談を終えて、私は辺りを探し出します。金雀枝の蠢く回廊を抜け、帆ほん途鳥との剥製が無数に吊られた悠宣堂を歩きまわり、針の城、オルロワージュ様のおわす紫微台しびのうてなを除くあらゆる場所に白薔薇姫様の面影を探しました。

ところが探しても探しても姫様は見つからず、結局私は白薔薇姫様の棺へと戻ってきてしまいました。

ふう、とため息をつき、その場に腰を下ろします。困ったわ。白薔薇姫様はどこに行かれたのかしら。首を捻って考えていると、なにやら外の方で誰かが騒いでいるのが聞こえました。

「おい、今、ゾズマがここにいたな」

「この城に入り込むとは許せん奴だ」

「まだそのあたりにいるかもしれないぞ」

声の主はどうやら黒騎士見習いの方たちのようでした。ただでさえ問題ごとを抱えている私としてはあまり関わり合になりたくない部類です。声を潜めてじつとしているとお三方の間でどうも「ゾズマはあちらにいるようだ」ということで意見がまとまり、足早に去っていききました。

ほつと一息ついて、さあ私は何としても白薔薇姫様を見つけなくてはと腕まくりをしたのも束の間、今度は別の方が室内に入ってこられました。

「やれやれ。なんてつまらない台詞を吐く奴らだ」

野性的な赤毛を逆立て、露出の激しい服を着て胸にニプレスというとても破廉恥な恰好をしたその方は、この針の城でもオルロワージュ様に次ぐ力を持つと噂されるゾズマ様でした。ゾズマ様は私に気が付くとしめしめとでも言いたげに無邪気な笑顔を浮かべて言いました。

「お、いいところに来たね。一つお願いがある。僕はここに隠れるから、あつちの方へ行つたと言つてくれたまえ。頼んだよ！」

そう言うゾズマ様はかくれんぼを楽しむ子供のように実に楽しげにいそいそと棺の中へと入っていきます。

「かしこまりました」

私は答え、少し考えました。まず棺の錠をおろし、解いた腰紐でぐるぐる巻きに縛ります。それから顎に手を当ててもう一度考えてみましたけどどうも十分ではないように思われたので辺りに置かれた燭台という燭台を棺の上に載せておきます。

「これでいいわ」

しばらく待つているとさきほどの黒騎士見習いたちが戻ってきました。怪しい奴を見かけなかったか、と尋ねられたので背後の棺を指し示し、「賊はあの中です」と教えて差し上げました。

私は足早にその場を離れました。もう私には関係のないことです。ゾズマ様とももう会うこともないでしょう。そう思っていました。

しかし、とうとう白薔薇姫様が見つからず、くたくたになつて自室に戻つた私を待ち受けていたのは棺の中に閉じ込めた筈のゾズマ様でした。

「ちよつと、君。あんまりじゃないか」

私のベッドに我が物顔で腰掛けたままゾズマ様は咎めるといふ風でもなく自然な調子で話します。

「私のご主人様はオルロワージュ様でございます。ゾズマ様の命令に従う義務はございません」

「……まあ、もつともな意見だね。君ならそう言うだろう」

「どういう意味でしょうか」
「どうもこうもない。その通りの意味さ。お人形さんに頼みごとをした僕が馬鹿だったな」

ゾズマ様は顎を所在なげに掻き、独り言を言うように自嘲してみせるのでした。

「私には、ゾズマ様の仰つてゐることがわかりかねます」

「うんうんそうだろうね。きみは」

あまりにもゾズマ様がどうでも良さそうに相槌を打つので私は少しだけ苛立ちを覚ええました。

「先ほどから何を、はぐらかすようなことばかり仰っているのですか。きちんと私にもわかるように説明してください」

「じゃあ聞くけど、なんで君は生きてるの」

食って掛かる私に対して、ゾズマ様は何気ない調子で突拍子もないことを聞くのでした。

「なんですか、突然」

「君は自分が何のために生きているのか考えたことがあるのかい？」

なおもゾズマ様は尋ねます。いきなり何てことを聞くのでしょうか。生きる理由だなんて、日常会話の中で質問するようなことではないし、まして問われたからと言って簡単に答えられることでもありません。

本当に変わったお人なのだと困惑している私をゾズマ様は静かに見つめていました。それはどこか冷たい瞳でした。

「……答えられないだろう？」

「いきなりそんなことを言われて驚いているだけです。それに、即答できるのは限られた者だけだと思います」

「じゃあ時間をあげるよ。次までじっくり考えておくといい。またあつた時にその答えを聞こう」

そう言つてゾズマ様は去つて行かれました。

次にゾズマ様が現れたのは半月後でした。いつものように自室へ戻ると当然のよう
にベッドに腰掛けていて、枕をばふばふと叩きながら「安物だなあ」などと勝手なこ
とを仰ります。

「ゾズマ様」

「うん？ ああ」

ゾズマ様は私に向き直り、静かな口調で尋ねます。

「答えは見つかったかな」

「はい」

「……なら、聞こう」

私は自分の胸に手を当てて、背筋を僅かに反らせます。

「ええ。私はこの針の城の侍女、オルロワージュ様に仕えるミルファークです。私が生
きるのはオルロワージュ様にご奉仕するため、あの方のお役に立つためなのです！」

「わー。えらいえらい」

誇りで胸を一杯にした私が一息に言い切ると、ゾズマ様は露骨にこちらを小馬鹿にしたように鼻で笑いました。何故でしょう、ゾズマ様にそんな目で見られるととても寂しい気持ちになりました。

「……どうしてお笑いになるのですか。私はとても傷つきました」

しょんぼりと尋ねるとゾズマ様は苦笑いを浮かべます。

「ごめんごめん。別にそんなつもりはないんだ。気にしないでくれ」

「誰かのために生きたいと考えるのはそんなにも愚かしいことですか？ 他者の幸福のために身を粉にして働きたいと考えるのは下らないことでしょうか？」

私の問いにゾズマ様はふと真剣な表情をされ、短くはつきりした口調でこう言いました。

「ああ。そうだ」

「え……？」

「誰かのために生きたいと考えるのは愚かしいことだ。他者のために働きたいと考えるのは下らないことだ」

とても厳しい言葉でした。それは私たちミルフアーク全員を否定したに等しい言葉です。

「……なぜですか？」

「どうして君たちはそうやって『なぜ』と問い返すのかな？ 本当に自分の生き方に自信があるのなら、たとえ誰に否定されたとしても気にせず生きていけばいいじゃないか」

「質問に答えてください！」

「なら質問に答えよう」鋭い眼をしてゾズマ様は確固とした口調で語ります。「第一に、自分が何のために生きるのか、そう問われているにも関わらず自分ではなく他者を持ち出して理由に据え付けるのはただの欺瞞だ。結局は自分のためなのに他者を持ち出して安っぽい自己犠牲に浸るのは愚の骨頂としか言いようがない恥ずべき行為だ。他者のために生きたいなんてことをぬかす連中は、つまるところ自分は自分のために生きたいと言い切ることもできない腰抜けか、被害者ぶることで無意識にしかも良心に沿ったまま他者を支配しようとする邪悪のどちらかに決まっている。第二に、僕は自由をとりわけ愛する。自由意思を、この世の何事にも縛られない在り方を愛する。生きとし生ける全ては自由であるべきだ。だから君たちのような自縄自縛の被虐者を認めることはできない。君たちはそうやって自分の決めた勝手なルールで自らを縛り上げて喜んでいるようだが、そんなものはくたばってしまえ、だ。君たちは自分の愛を知らない。自分の好きな色、好きな景色を知らない。好きな言葉を知らず好きな動物を知らずありとあらゆる嗜好を持たない。ただひたすらに滅私の精神で誰かに頭を垂れては誰かのた

めに生きる自分は素晴らしい生き物だとほくそえんでいる。下らない。君たちは実に下らない生き物だ。そして第三に」

そこまで言うと言とゾズマ様はふと憐れむように私を見下ろしました。

「君たちには魂が存在していない」

「そんな」

「だから君たちはじつのところ生きてなんかいない。ただ、そこに在るといっただけだ。君はミルファークと言う名の道具に過ぎないんだよ。針の城で使用される銀器や掃除用具と何も変わらない。そんな君が他者のためだなんて言葉を口にするのはおこがましいことだと思うよ」

「嘘です。私はこうして息をしています。生きています。魂がないだなんて、そんなことあるわけがありません。」

「では聞こう。君の名前は？」

「私？ 私の名前は……ミルファーク、です」

「君はどこで生まれた？ ここで働く前は何かをしていた？」

「それは……」

「いいかい。妖魔に吸血されて虜となつた者は強制的にその妖魔に従わされる。そして大抵の場合、心の弱い者は強すぎる虜化能力に耐え切れず人形になってしまう。それが

君だ。オルロワージュに吸血され、自我も魂も忘却した侍女人形ミルフアーク。自由からは程遠い存在じゃあないか」

私はそれ以上何も言うことができませんでした。

朝起きて、二段ベッドから降りると私はまず壁に据え付けられた洗面台で顔を洗います。それから顔を上げ、鏡を見て笑顔を作り、「おはよう」と微笑む練習をします。

鏡には私の顔が映っています。癖のない栗色の髪、小さな目に控えめな唇。これが私の顔です。

「これが私の顔……これが、私……」

目に映る鏡の中の世界には、確かに一人の女が映っています。さかしまの世界、虚像の世界。私が右手を上げると鏡の中の彼女は左手を上げます。

「それでいい筈よ……あなたは私、私はあなたなの……」

呟く声は随分と頼りなく感じられ、私はほんの少しだけ肩を震わせます。

私は鏡を見つめて考えます。私は私であることを証明できるでしょうか。逆に言えば、私以外の誰かが私ではないことを証明できるのでしょうか。

……たとえばここに一人の女性がいます。私と同じ顔、同じ声をして、私と同じように振る舞う侍女。彼女が私ではなく彼女個人なのだと明らかにするにはどうしたらいい

いのでしよう。

鏡を見つめてぼんやりしているともう一人の私がベッドから起き出してきます。

「おはようございます、ミルファークさん」

「おはようございます、ミルファークさん」

もう何度繰り返したかもわからない言葉を交わし、私と私は互いに顔を合わせて微笑みます。

僅かな寝癖の違いだけが私と彼女とを分かつ印。けれどもその違いでさえ、ミルファークの衣装である黒ワジユのドレスに前掛けと髪留めをつければなくなってしまう。

いつものように部屋から廊下に出ればそこには私という私がそこかしこに犇めいていて、同じ声で同じ言葉を螺子巻くように繰り返すのです。

おはようございます。おはようございます。それはたとえば蓄音機がいつまでもいつまでも完全な同音階ばかりを奏でるように、抑揚や強勢すらも全く同じ声色で響きま

す。
私は私の奔流に流されるようにして地下広間へと向かいます。

君には魂がないというあの言葉を聞いてから、地下広間の光景を目にすると頭がぐらくらしました。足元がぐらぐらと崩れていくような気がします。

「あ……」

ぞくりと背筋をかけよる悪寒に声を上げると、聞きつけた侍女たちが一斉に私の方を振り向きました。

「ひ……」

そこにあるのは見慣れたはずの私の顔でした。なんてことのない、無数の、私の、顔面。

けれども魂の欠損を指摘されて眺めるいまこの時、それら全てが蠢く蛆虫の集合にすら思えたのです。

それは同じものが蝟集する景色が呼び覚ます生理的な嫌悪感。葉陰の下に群れ集う白く膨れた油虫の集合。蓮の実の断面に見る黒の円環。皮膚病患者の殺伐とした腐れ穴。川辺の石をべりべりと引き剥がして見る暗がりにはありとあらゆる蟲どもが所狭しと悶えていて、なんらの意思も感じられぬままにじたばたと手足を痙攣させるその有様にはどんな聖人君子であろうとも眉を蹙めざるを得ない。

忌むべき恐怖。おぞましい有機質の集合体恐怖症。トライポフォビア

どうしたのミルファークさん、と近くにいた誰かが私に聞きました。すると波が伝わるように誰もが私を心配し始めます。

「どうしたのミルファークさん」「どうしたのミルファークさん」「どうしたのミルファークさん」

クさん」「どうしたのミルファークさん」「どうしたのミルファークさん」「どうしたのミルファークさん」「どうしたのミルファークさん」「どうしたのミルファークさん」「どうしたのミルファークさん」「どうしたのミルファークさん」「どうしたのミルファークさん」「どうしたのミルファークさん」「どうしたのミルファークさん」「どうしたのミルファークさん」「どうしたのミルファークさん」「どうしたのミルファークさん」「どうしたのミルファークさん」「どうしたのミルファークさん」「どうしたのミルファークさん」「どうしたのミルファークさん」

たくさんさんの優しい心に囲まれた私の頬を孤独な涙が伝います。

ああ、真に恐ろしいのは、怖気たつその集団にあつて、私もまたその一部であることなのでした。

私の名前はミルファークといいます。明日もし私が殺されても、ミルファークが少し欠けるだけで根本的には何も変わらないのかもしれないかもしれませんが。

私は一体何なのでしょう。私という存在は何なのでしょう。

私は無数の私に囲まれてなおどこまでも続く寂寥に凍え、とうとうぼつりと眩きました。

魂が欲しい。

魂はどこにあるのでしょうか。魂は手を伸ばせば届くものですか。そこらに転がって

いたり、どこかで売っていたりするものですか。

魂があれば幸せになれるますか。自分は自分であると確信でき、自分自身を好きになつて、何の後ろめたさもなく胸を張って生きていくことができるのですか。

朝起きて、ベッドから降り、顔を洗うこともなく鏡を見つめて一人私は考えます。

「私は」と私は言います。「私でなければいけない」

背後でミルフアークさんが目を覚まし、「おはようございます、ミルフアークさん」と挨拶をするのが聞こえます。

無視します。

「あ、あの……？ ミルフアークさん……？ おはようございます……？」

ふううと獣が吐くようなため息をついて私は一端ベッドに戻り、なるたけ心を落ち着けるよう努力しました。

「落ち着きなさい。落ち着いて考えるのよ、私……」

「ミ、ミルフアークさん……？」

「まずは……」

「ふええ……」

私は扉を開け廊下に出ます。大勢のミルフアークさん達が地下広間へと向かおうとしています。同じことをしても駄目だと思つた私は逆の方向へと足を向け一歩踏

み出します。

ところがそれきり硬直したように体が動かないのです。何故と言って、この私にはそれからの考えやこれからどうすればいいのかという知識がまるで欠けていたからです。

城で働くミルファークとして必要なこと、食器の場所や掃除の仕方は頭の中にあります。地下広間に行きさえすれば誰かが私に指示を与えてくれます。けれども、生きると言うことを継続するためには私自身がどうあるかを自分で決定しなければいけないでした。

何も知らない赤子のような気分です。何をどうすればいいのかさっぱり見当がつかせません。ミルファークとして刷り込まれた様式以外の行動をとろうとした時、ぼつと頭の中が白紙になりました。

「考えなさい。私。考えるのよ……そう、まず……まずは、歩かなくては……」

息を吸い、ゆっくりと吐き出します。私は呼吸します。それから右足を振り上げ、前方に投げ出し、振り下ろします。一歩進むことが出来ました。今度は左足を振り上げて振り下ろします。上半身が全く動いていないせいかわバランスがすぐぶる悪くぐらぐらします。勢いをつけるために右手を振ってみました。右手を振り、右足を踏み出します。……ああ、いいえ、右手を振りながら左足を踏み出した方が良いでしょう。右手を振り、左足を踏み出します。手と足を同時に動かさなければいけません。

「なんと……歩行がこれほど難しいとは……」

驚愕に呻きつつ私はなおも足を進めます。傍から見ればぎくしゃくとしたそれこそ人形のように滑稽な動きかもしれません。でも私は必死でした。

私は歩きます。これは私の意思です。おそらく、たぶん、きつと。私は私の意思で前に進んでいる。誰に命令されたのでもなく、私がそう望むために歩いている。

私は歩きました。歩いて歩いて歩きまくりました。流石に疲れて足がぱんぱんに膨れ上がつてもなおくじけずに意味もなく無駄に歩き続けていると、ゾズマ様が例の如くどこからともなくひよっこりと現れて言いました、

「……さつきから見ていたけど、君、何をしているの。馬鹿の練習中？」

「そうかもしれない。そうする以外に方法が思いつかないのですから」

「え？」

「……あれから少し考えてみたのですが、もしかしたら私には魂がないのかもしれないかもしれません」

「ふうん？」

「でも、だとしたら私は思うのです。魂を手に入れるにはどうしたらいいだろうかと」

「面白くなってきたな」

「この前あなたは仰いました。私には過去の記憶がない。好きな色や好きな言葉、嗜好

というものがないと。たとえば記憶なら、これからも在り続けていけば自然に蓄積されます。好きな色や言葉はある程度無作為に選び、それを好きだと自分に言い聞かせていけば次第に身に馴染んでいくかもしれません。そうしたら魂を持つことになるますか？」

「もちろん、ならない」

「そうでしょうね。……では、ゾズマ様にとつて魂の定義とは一体なんですか？」

「僕にだって魂の正確な定義なんてものはできやしない。でも条件の一つとしては意思を持つていることが挙げられる。それにしただって、誰かに洗脳されていたり強制されているような意思じゃ駄目だよ。それはメカ種族のプログラムとは違うものなんだ。……だから、より踏み込んで名前を付けるのなら、それはきつと自由意思とでも呼ぶべきものだと僕は思う」

「じゆう」

「そうだよ。前にも言ったろう？ 僕はその言葉が大好きなんだ」

「あなたにとつて自由とは一体何なのですか？」

「それはね」

ゾズマ様は子供のように無邪気な笑みを浮かべて言いました。

「この世の全てに対して無責任でいることさ」

……どうしようもない阿呆であると判断します。

「あれ。なんだい、その冷たい視線は。ひどいなあ。大いに傷つくよ」

「ありていに申し上げてがっかりでございます」

「それはまたどうしてかな」

「さんざんご高説をぶって、人のために生きるのは下らないだなんだと言っておいでな
んですか。無責任とは」

「僕は自分の生き方について言葉を飾る気はないんだ。自由であるということは高貴な
ことでも崇高なことでもない。自由とは自分勝手なことだ。我儘でいい加減なことだ。
僕は自分の生きたいように生きて誰かに迷惑を掛ける。そのことを否定するつもりは
一切ないよ」

「……自由を求めると言って、実はそのあなたが自由であることに對して縛られている
のではないですか?」

私が指摘するとゾズマ様は「うん。良い意見だ」と言って笑いました。

「そのことを指摘されるのは君で692回目だな」

「……私の言葉は凡庸である?」

「ああ、いや今回は別にからかつているわけじゃあない。僕もそれなりに長いこと生き
ているからね。同じ生き方を続けていれば同じようなことを言われることもある。今

の君の言葉はとても面白いと思うよ。これまでこの僕にそんなことを言った妖魔や人間を僕は例外なく好きになつてきた」

「ゾズマ様も誰かを愛することがあるのですか？」

「好きになることはあるよ。でも愛したりはしない。好きかもしれないと思つたらそれとなく観察して、飽きたら放つておく。そのくらいかな」

「またおかしなことを」

「愛という感情は根本的には支配的なものなんだ。自分の欲望を満たすために愛を告げられるのも僕にとっては不快だし、妖魔に群がる娘たちのように進んで支配されたがるのも馬鹿馬鹿しい。僕は僕に愛を語る女性を例外なく軽蔑するつもりだ」

「難儀なお方ですね」

「僕もそう思うよ。僕は僕らしく自由であろうとするとするあまり、ある意味では君の言うとおり雁字搦めになつていられるのかもしれない。困つたもんだよ」

ふふふ、とゾズマ様は楽しそうに微笑みました。

ゾズマ様はその後もときおり私の部屋を訪ね、私たちは短い会話を交わすようになりました。いつも我儘で気分屋で好き勝手なことばかり言うゾズマ様でしたが、この城の中で私の話を聞いてくれるのはゾズマ様だけなのでした。

このままゾズマ様に様々なことを教えて頂き、いつか魂と呼べるものを手に入れられたい——そんな風に考えていた私の考えはあっさりと裏切られることになります。別れの日は唐突にやってきました。

「ちよつとこの城を離れることになってね。今日はお別れを言いに来たんだ」

ゾズマ様はいつも大事なことをいきなり口にします。

「…………え？」

「知り合いがマンハツタンで貿易会社を始めると言うんで、ついでに僕も外の世界に足を向けてみることにしたんだ。もう少ししたら僕は城を出る」

「あ…………」

「君とは色々話せて楽しかったよ。じゃあね」

「待つてくください！」

「うん？」

「あ、の…………。私も…………私を、一緒に連れて行ってはくさいませんか？」

決死の思いで告げた私に対して、ゾズマ様は——ああ何という方でしょう、につこりと笑つて「嫌だよ」と言うのでした。

「君はオルロワージュ様のものだろう？ 彼の所有物に手を出す気はないよ」

「でも、私は！」

言いかけて私は口をつぐみました。——僕は僕に愛を語る女性を例外なく軽蔑するつもりだ。そう言ったのはまさにゾズマ様です。

「私、は……」

「君の言いたいことはわかるよ。でも僕には必要ない」

「私が人形だからですか？ 魂のないミルファークだからですか？」

「君は一体何を求めているのかな？ それこそ、僕についてきたら魂が手に入るとでも？ 君はただ、城での生活に少し飽きてしまっただけさ。たまたま僕と言う異分子に違う考えを吹きこまれて啓示されたような気持ちになっただけで、本当は何一つ進歩なんかしていない無知で考えなしの御嬢さんなんだ。……ああ、そうだね。確かに僕は自由を語ったかもしれない。自由意思を持つことが重要であるように言ったかもしれない。でもそれにしたって結局は個々の自由というものだろう。言ってみれば、君は僕の言うことをはなから馬鹿にして耳も貸さなくらいでも良かったんだ。僕は別に自由というものが唯一無二の真理であるとは思わないよ」

「だって、あなたが仰ったのではないですか！ 私には魂がないと。そんな生き方は下らないと！」

「魂が無くたっていいじゃないか。君がそれで満足できるのなら魂があろうとなかろう

と関係ないだろう」

「だって、あなたは！ あなたが……！」

体から力がぬけ、私はくずおれました。

「いったい私は、あなたの言葉の何を信じればよろしいのですか……。次から次へと言うことを変えて、そんな、無責任に過ぎます……！」

「言つたろう。だから僕は無責任な妖魔なんだよ」

「ひどい……」

「誰かに従いたいだけならこの針の城にいた方がずっと安全だ。仮に僕についてきたとして、それは君を支配する相手がオルロワージュ様から僕に変わるのと何が違うのかな？ 僕に何かを言われて、はいはいと何もかもを受け入れて、僕の望むがままになるのなら君はいつまでたつても人形のままで」

「私はいったい何なのですか……？ 私はいったい誰なのですか？」

「それを語る事ができるのは君だけだ。ほかの誰にもさせてはいけない」

「……私は何の変哲もないただの侍女です。そんなことはできません……」

「だから、これでお別れだ。さようなら」

あつさりと言つてゾズマ様は去つていき、別れ際にこう言い残しました。

「ああ、そうだ。一つだけ方法がなくはない。もし君が自分の名前を思い出すことがで

きたなら、君はもうオルロワージュ様の所有物なんかじゃない。その時は、喜んで僕は君と一緒に旅をしよう」

……。

名前……。

私はミルファーク。

でも、ミルファークになる前の私は一体どんな人間だったのでしょうか。ミルファークになる前は、人間としての名前があったはずなのです。

名前。私自身を指し示す言葉。それさえ思い出すことができれば私は針の城から抜け出すことができる。私自身を取り戻すことができる。

けれどもつまるところそれは、オルロワージュ様の虜化能力を打ち破ることを意味しています。一介の侍女に過ぎない私にそんなことができるのでしょうか。

自室に戻った私は頭を抱えて苦悩しました。気が狂いそうでした。名前、名前、名前。名前を思い出さなければいけない。私には名前があった筈。お母さんがつけてくれた名前、知り合いが私を呼ぶその言葉。名前、名前、名前……。私には、ああ、名前があったというのに……。

悩めども悩めども枯れ果てた記憶の荒野に魂など見つかるはずもなく、私はついに

わつと泣き出してしまいました。同室のミルフアークさんはいつまでも心配そうに私を眺めていましたが、口をきけばまた私も「ミルフアークさん」に戻ってしまいそうでお礼を言うことも謝ることもできません。

私は一体何なのでしょう。気が付いたら誰かに従う人形になっていて、昔のことをいつの間にか忘れていて、自分自身のことも周りのことも分からず、助けを求めれば突き放され、魂がないと言われ……。

いつしか私はふらつく足で部屋を離れ、あてもなく彷徨っていました。

魂が欲しいと思いました。

自由になりたいと思いました。

この胸を渦巻く悩みの何もかもを解決して、自分が自分だと誇れるようになりたい、笑って生きていたいと思いました。

力が欲しいです。魂が無いなどと言われて、そうかもしれないなどと自己嫌悪に陥ってしまふような今の自分を好きにはなれません。力があれば、私に強さがあれば、誰に傷つけられることもなく私は私のままでいられるはずなのです。誰かに殴られたら殴り返すことができるようになります。仕返しや報復を恐れて相手の顔色を窺ってばかりいるような生き方をしているのは嫌です。

私は……。

私は邪悪でありたいのかもしれませんが。
吹き付ける風に涙で腫れた頬が痛みます。

たとえばゾズマ様があれほどまでに飄々としていられるのは、結局ゾズマ様に実力があるからではありませんか。もし仮に下級妖魔クラスの力でしかなかったのなら、傍若無人に振る舞うことなどはできないはずです。

力があれば。

私にも武器があれば。

……そう考えた時、私はいつの間にかにゴサルスの店の前へと立っていたのでした。

ぶくぶくと醜く肥えた緑色の肉の塊。ファシナトウールで攻防を営む下級妖魔ゴサルスの容姿は一言で言えばそうなります。油に汚れた革の作業着を身につけ、不機嫌そうにカウンターに座るゴサルスは私が扉を開くなり「何のようだ。何が欲しい」とぶしつけに視線を向けてきました。

「おつと金ならいらんぞ。代わりにお前の命をもらおう。妖魔は生命三つ。トウテツパターンは生命二つ。木陰のローブは生命一つ。砂の器は生命一つだ」

ゴサルスの店には妖力を秘めた様々な道具が置かれています。真つ先に私の目を引いたのは幻魔という一振りの剣でした。煌々と光を放つ不思議な剣に惹かれて何気な

く手に取りその柄を撫でると、肌にひたりと吸い付くような感触がします。

「良いものに目を付けたな。店の中でもそれは一番価値のあるものだ。幻魔はなんでも斬れる」

「なんでも……?」

そう言われて私は幻魔を見つめます。剣を握るだけで湧き起こる全能感がありました。

「ほんとうになんでも斬れるのかしら」

「ああ」

「なら、今この場であなたを斬り殺して店にあるものを全部頂いてしまうこともできるの?」

「おい」ゴザルスは低く唸り私を睨みつけました、「滅多なことを言うもんじゃないぞ、小娘」

「私は商品の説明を聞いているだけでしょ。なんでも、というのは、どこからどこまでこのことを指すの」

「……竜は斬れるさ」

「妖魔は?」

「なんだと?」

「妖魔は斬れるの?」

「斬れなくはない」

「はつきりしなさい。斬れるの? 斬れないの? たとえば上級妖魔の身体を断つことはできるの? 妖魔の君は?」

「お前は一体何を考えているんだ? ここはファシナトウルだぞ!」

「どちらなの」

「……お前風情が妖魔を持ったところで上級妖魔に敵うわけがなからう」

「……そう」

失望して私は幻魔を柵に戻しました。その他に周囲を見回しましたが武器になりそうなものは見つかりません。

「……いらぬわ。どれもこれもがらくたばかりじゃない。私には必要ないわ」

「そう思うのはお前の勝手だな。……大体針の城の侍女がなぜこんなところに来たんだ? 誰か偉い方の使いなのか?」

問われて、私は我に返りました。……いったい私は何をしているのだろう。不意に何もかもが馬鹿馬鹿しくなり、「さあね」と言って踵を返したその時、ふと店の片隅にぞんざいに投げられていた一つの仮面が目に残ったのです。黒青銅を削りぬいた幾何学的な仮面でした。武骨な骨格標本じみた仮面を手にした時、私は不思議にその仮面を手

に入れる気になっていました。

「これは？」

「それか？ それはジャスペロダスの仮面だな」

「効果は？」

「効果？ そんなものはない。ジャスペロダスの仮面はジャスペロダスの仮面だ。それ以上でもそれ以下でもない」

人食つたような返答にしかし私は反発を覚えるよりもむしろ自然と「ああそうだろう」と納得してしまいます。

「そう。ならこれを頂戴」

「生命一つだ。あとで泣いても返してやらんぞ。本当にいいな？」

「ええ」

こうして手に入れたジャスペロダスの仮面を身につけ、私は根つこの町を歩いてみました。行き交う人や妖魔たちが奇異なものでも見るかのようにじろじろと不躰な視線を向けてきます。しかし仮面をつけていると不思議に恥ずかしいとは思いません。表情を隠して相対する世界はまるで物語やおとぎ話のように現実感が薄く感じられるものです。

ミルフアークとして顔を心を奪われた私にはこの仮面がふさわしいような気がしました。剥ぎ取られた人格の代わりに仮面を被つて街を闊歩していると、これでいいのかもしれない、そんな気分になるのです。

町を歩いているときさまざまな声が聞こえてきます。妖魔に恋する乙女の嬌声、日々の生活に追われる人間の嘆き。彼らには自らの魂というものがあり、私にはない。それならば——。

「やあ、ジーナ」

「アセルス様！」

見知らぬ妖魔に仕立て屋の娘が駆け寄っていくのが見えました。確かジーナという名前だったはずです。ジーナは頬をうつすらと染め、はにかみながら妖魔の隣にぴつたりと身を寄せます。私は二人の横をそのまま通り過ぎます。仲の良さそうな二人が穏やかに会話を続けるのが聞こえます。

孤独をまつたく感じさせない二人の様子に私は思わず仮面を抑えて俯きました。

「……そうなんだ。ああ、そうだ。ジーナのご家族は今何をされているの？」

「私の両親や弟たちは家で農家をしています。姉は——」

「お姉さんがいるんだ。少し意外かな。ジーナはしっかりしているから、長女かと思つてた」

「……ええ。姉は……」

その時、雲間から太陽の光が差し込むようにぱつと一筋の光明が私の心を照らしました。心に花が咲くように気分は晴れ、あらゆる論理を超越する確信が沸いたのです。

私は私であると判断できました。証明することなどはもちろんできません。なぜそんな気持ちになったのかも自分ではわかりません。もしかしたらこの仮面のおかげでしょうか。今ならば自分がどうすべきなのかを決められる気がしました。

私の名前は――。

◇

ゾズマ様、と私は言います。針の城に戻り、大声で叫びました。少し待っているとゾズマ様は「おっと」と言いながら衣裳棚の中から現れました。

「君。僕の名前をそんなに大きな声で呼んではいけない。僕はここでは反逆者だからね」

「同室の子は今いませんから、大丈夫です」

「そういう問題でもないような……。まあ、いいか。それで、僕を呼び出したのは何の用？ もしかして、もしかしたのかな？」

「私の名前はディアディムです。ゾズマ様」

私は言いました。それこそが私の名前、私自身を呼ぶ言葉です。

「へー。これはたまげたな。まさか本当に虜化能力を打ち破るとは思ってもみなかったよ」

しきりに感心しているゾズマ様のご様子が実に愉快で、私はにつこりと笑って答えました。

「——いいえ」

「ん？ でも君は自分の名前を思い出したんだらう？」

「いいえ、違います。私は結局、自分が誰だったのかを思い出すことはできませんでした。だから代わりにこう考えたのです。魂が無いのなら魂を演じる以外に他はないと」私はジャスペロダスの仮面を顔につけます。「私は自分が誰なのかわからない。……だから私は、代わりに自分で自分に名前をつけることにしました。私の名前はディアディムです。私がそう決めたのです。私は生きています。もし仮に生きていないと言うのなら、少なくとも私は生きている演技をし続けようと思います、魂があるように、自我があるように、あなたを愛する女であるように」私は語ります。「私はお芝居を繰り広げます。……だから、どうか、あなたに心を委ねたからと言って軽蔑したりはしないで下さい。何故と言って、それは所詮演技に過ぎないからです。あなたに捧げる全ての言葉

は嘘であります。私と言う女がゾズマ様を愛するのは虚構なのです。ゆえに私は、私を構成する一切がフィクションであることをここに宣言いたします。そしてその上で、この運命の舞台の上で、それでもなお自分自身と言うものを演じ、見出したいと願うのです。あなたの傍に居させてください。ゾズマ様」

しばらくゾズマ様はきよとんとしておられました。しかし次第にそのお顔に理解の色が広がるにつれてその唇からは優雅な笑い声が漏れだします。

「……いやあ、まさか、これはこれは……」

「お笑いになるのですか。……いささか残念ですが、仕方のないことですね」

「違うよ……デアアデーム」

ゾズマ様はくつくつと肩を震わせながら優しい口調で仰いました。

「君は完璧な答えを出した。僕の予想を超える答えを。今この時、君は君自身を完全に支配して見せた。僕は君に敬意を表するよ。デアアデーム」

そう言うゾズマ様はふと真剣な顔をされ、ゆっくりと膝を折りました。恭しく頭を垂れ、貴婦人を踊りに誘うかのようにこの私に手を差し伸べます。

「……どうかお嬢さん。この僕と共に旅をしてくださいますか？」

「……はい」

ゾズマ様の手に手を落として握りしめました。魂も記憶もない私ではございました

が、ただこの瞬間だけは確かに幸福を覚えました。

第八幕 少女の夢で少女が死んで、そして少女が目覚 ます

自分が死ぬ夢を見た。これまでになく嫌な夢だった。

死んだことが嫌だったのではない。死んだ筈のその後でなおも意識が続き、自らの身体を俯瞰するような形で眺める羽目になったのがただたまらなく気持ち悪かった。二の腕を突き破って飛び出た骨、腹の隙間から漏れ出す黄色い汁。醜く折れ曲がった腕は蒼黒く腫れあがりあらゆる方向を指している。どうしようもなく変わってしまった自分の身体はひたすらに不気味で仕方がなかった。

そうだ。不気味だなと自分はそう思ったのだ。悲しみを覚えるよりも先に自分自身への純粋な嫌悪感だけが色濃く湧き起こり、死んでしまった悲しみ、知り合いともう会うこともできない悲しみ、そういうった感情は明らかに欠けていた。

ああ、死んだ、と自分は思う……不気味だな、気持ちが悪いなとぼんやりと考える。そうして最後に頷いてしまうのは結局のところ心の片隅でどうせこんなことになるのだらうと考えていたからかもしれない。

ああ、死んだ。仕方がないな。どうせ、こんなことになるんだろうな。そう考える自

分を当然のように認めている。

少女には夢がなかった。目指す場所、望む生き方というものを胸に描いたことがなかった。

少女には両親がいない。生まれて間もない頃に古墳で落石に巻き込まれて死んだのだと叔母は言っていたけれど、それが嘘であることくらいは少女にもわかる。写真の一つも残っていない両親。どんな人だったのかと尋ねるたびに言葉を濁す叔母。「優しい人だったよ」「穏やかな人だったよ」そう取り繕うように叔母は説明してはくれるもの何一つ具体的な思い出に触れることはなく、ただ優しくして穏やかだったとしか語られない両親の想像上の顔は能面のように微笑んでいる。

一度家の周りにおかしなピラがまかれていたことがあった。乱れた文字で何度も何度も「呪われる」と書き連ねられたピラを目にした時心底からぞつとしたのを覚えている。見知らぬ悪意に怯えて自宅に帰ると叔母を優しく抱きしめて「何でもないよ」と言ってくれたけれど、迷惑をかけたと近所の家を回っては頭を下げる叔母を見るのは辛かった。

春の花が咲くころになると毎年決まったように無言電話が鳴り響く。一体世の中には何が起こっているのだろうか？ 私は一体どんな人間から生まれたのだろうか？ どれだけ頭を捻っても答えは出ない。

17歳になった少女は「優しく穏やかな」両親が遺した借金を保証人である叔母が地道に返し続けていることを知っている。自分の娘同然に接し、時には勉強を教えてくれ、いつも朗らかで明るい叔母。

たとえ何があるうとも彼女に迷惑を掛けてはいけない。望んでいるのはそれだけだ。同級生の女の子たちは勉強に部活にバイトにといつも忙しそうにして、たまの休みに大勢で連れだつて繁華街に出かけていけば満足なのだろう。でも自分は違う。彼女たちには繋がりがある。母が子を産みその子供がいつか母となつてまた子供を産むように、連綿と受け継がれていく人間の物語、家系図の記憶が自分にはない。どんな風に恋をして、どんな風に結ばれて、契りを交わした二人がどんな風に自分を産んだのか。少女にはわからない。

叔母とは血が繋がっている。でも本当の家族ではない。本当の家族になれたとしても、知らない内に与えていた迷惑を思えばその愛を無制限に受け入れて笑っている気にはなれない。

カフェに座つて笑いながらクレープを啜める同級生たちには帰るべき家がある。本当の母親と本当の父親がいて、少しずつ少しずつ大きくなっていく様子をずっと見守られていたに違いなく、そしてそれはなんら間違つたことではない。

親が子を愛するのは当然のことだ。その愛を受け取るのは当たり前のことだ。

けれども……けれども、それが叔母であればどうなのだろう。妹夫婦が遺した借金を文句ひとつ零さずに返済し、その娘を高校に通わせ、衣服を与え旅行に連れて行ってくれ、大学の学費まで出してくれると言う親戚。叔母から注がれる惜しみない愛情。

受け入れてさえしまえば楽になれるのだとわかつてはいる。娘だからといって両親の犯した罪まで背負う責任は無い。だいいち叔母は大人で自分は子供なのだ。守られて当然だろう。叔母がどれほど夜遅くまで働いて体を酷使しても、まめだらけの手にかぎれをつくり、夜勤明けの疲れた体で弁当を拵えようとしても、「いつもありがとう」とそれだけを言つて何も知らない振りをしていればそれでいいだろう。

けれども。

(それは……違う)

早く高校を出て働きたかった。自分の力で食べていけるようになりたかった。しかし同時に自分の力で生きていきたいとは思えなかった。生まれて生きてどうしようというのだ。

少女にはいつか自分が子供を産むのだと言うイメージがまるで湧かない。愛する誰かと結婚をして、子供を産み、またいつか孫が生まれ——そんな繋がりを他人と持つことが自分にできるとは思えない。自分はきつと、誰からも愛されることなく、自分という情報を後世に残すこともなく、静かに忘れ去られていくだけなのだ。

親がないということだけを全ての原因にできるわけではない。しかし何にせよ少女はごくごく平凡かつまっとうにひねくれる。

ひねくれた少女は自然と子供社会の嫌われ者たちとばかりつるむようになる。どこにでもいる、少しだけ頭のおかしい子供たち。虫を殺すのが好きで好きでたまらない子供、飼い犬を他人にけしかけて楽しむ子供。少女が属する集団は学校からつまはじきにされるような子供ばかりだ。

少女が特に仲良くしていたナシーラもそんな子供の一人で、彼女はひどい盗癖を持っていた。盗癖といつて、別に何か財や金品を盗んでいくというわけでもないのだが、幼い頃からナシーラには他人の人家に無断で踏み込んで庭に生えている花を手折って持ち帰ってしまうという救いがたい悪癖があった。事件が発覚してもなお悪びれもしないその態度にあつという間に村八分の憂き目にあつたナシーラはしかし依然として何処吹く風で花盗人をやめようとはしなかった。

◇

——ナシーラ。早く行こう。そんなところでしゃがみこんでいたらまたみんなに苛められるよ。

——だってアセルス。この花はこんなにも美しいの。私、ずっと見ていたいわ。

——そんなんじや駄目だよ。ちゃんとしていなけりや誰かに笑われるんだ。

——アセルスがいればいいわ。それ以外には誰に笑われたっていい。

——友達ができないよ。学校でのけ者にされるよ。

——ねえ、アセルス。私は私が欲しいものだけが欲しいの。それ以外は何一つだって
いらぬ。向こうからただでくれるっていったってお断りよ。私は私が望むもの以外
の全てには、一歩だって私の世界に踏み入れてほしくないの。

——それで本当にいいの？

——ええ、いいわ。あんな人たちとなんか友達になりたくないわ。当たり前のことば
かり口にして、馬鹿みたいにげらげら笑っていることしかできない人たちは嫌い。

——私だって似たようなものだと思うけど。

——アセルスは別よ。

——どうして？

——いいえ。

——いいえ？ いいえってどういうこと？

——私はアセルスに關しては疑問を持たないの。もしかしたらとか、ひよつとしてと
か、そんな風に疑ったりはしない。あの人たちとアセルスは別。理由なんて知らない

わ。

— それはまた随分と評価されたものだなあ。

— あなたは特別なひとよ。私にはそれがわかるの。

— 自分ではどうもそんな風には思えないんだけど。

— そういうものでしょ。自分のことなんて、自分が一番わからないのかもしれないのだし。

— ま、それはそうだ。

— ……。

— ……。

— ねーえ、アセルス？

— なあに、ナシーラ。

— 高校を卒業したら、やはりあなたは就職するの？

— うん。さっさと独り立ちしたいんでね。

— ……。そう。寂しくなるわ……。

— 仕方がないよ。

— そうね。仕方がないのよね……。

— うん……。

——アセルス。

——うん。

——私たちは知っているわ。いつか自分たちが大人になるってことを。何年後か何十年後かはわからないけれど、いつか当たり前のような顔をして大人になって、子供の頃のこだわりや意地というものを捨てて、そんなもの初めから無かったものとして忘れてしまうか、それとも「あのころは馬鹿だった」なんて笑い話にしてみよう。今こうして花を見て、隣にアセルスがいてくれることを私がどう感じていても、時が経てばどうでもよくなってしまうのかもしれないわね。たった一瞬の気の迷いや幼い錯覚に過ぎないのだと思い込んで、この感情の何もかもが殺されてしまうのかもしれないわね。

——うん。

——……。

——……。

——……手を、握っても良い？

——ああ、うん……。

——……冷たいのね、あなたの手。

——ごめんよ。

(ごめんよ、と少女は言う。うん、と頷いたナシーラの右眼から不意に涙が零れる)

— あ……。

— どうして、泣くの？

— さあ、どうしてかしら……。私にもわからないわ。今、不意に、きゅつとなんだか悲しくなったの……。涙が出た……。

— うん。

— アセルス……。

— 泣かないで。

— いつか……。

— いつか？

— この花が永遠であればいい、この花が世界で一番美しい花であればいいのに。そうすれば私はきつとこの日のことを忘れないし、永遠の花を見たこの日のことを永遠として胸に抱いていられるのに。

— うん。そうだね。でも……。

— ええ。そうね……。

◇

その日、フアシナトウールの空を49匹の妖鳥が舞った。

赤子を奪う姑獲鳥の粘つくような啼き声があった。仏の声を形容する逸音鳥の啼き声があった。嘴で火を呑む迦楼羅の啼き声があった。掠奪鳥ハルビのどす黒い老婆の啼き声があった。

黒雲の空を劈いて轟くけたたましい怪鳥の囀り。女の半身を持つ鳥達が鉤爪を擦りあう不吉な風切り。くると円を描いては風に乗る、空を切り、やがては互いに殺し合いを始める妖鳥達の舞踏。

槍のように尖るその嘴で肉という肉を少しずつ筆取り、くちやくちやと音を立てて咀嚼しては嚙下する。

円舞の果てに残った最後の一匹は傷ついた羽を羽ばたかせ、断末魔とは思えぬほど安らかな喘ぎ声をあげたかと思えばよろよろと空を墮ち、針の城の窓辺に身を横たえると室内に眠る姫君にその身を捧げるべく目を閉じる。

海辺に埋まったフューズクリスタルが狂ったように明滅を繰り返して通り過ぎる旅人の眼を焼く。

膨れ上がったガイアトードの腹が裂け、ぼろぼろと零れ落ちた稚児たちが喉を握り潰されたような絶唱を始める。

幹に多数の自殺者をぶら下げたトレントは吹き荒れる妖風に高く枝を揺らし、呪われ

た髑髏達が一斉に嘆きの怨嗟を歌う。

ありとあらゆる怪物の群れ、過去現在未来全ての神話^{サガ}を超えて集う化け物達の歓喜の雄叫び。

それは針の城の一室に眠るたった一人の乙女のために捧げられた百億の異形の祝福。

万魔の歌。

あなたが天を見上げるときそこに太陽の光は無く、無数の死骸が降り注ぐ暗黒の空がうねりを巻いて待っている。ふと視線を横に向ければ、ぼとぼと無造作な音を立てて身も蓋もなく墜落したモンスターの死体が積み重なっている。

決まっているだろう。全ては誕生を言祝ぐためだ。生れてきてくれてありがとう、おめでとうと、囁く代わりに血を流し、肉を磨り潰し、命という掛け替えのない贈り物を献上するためだ。

長い長い年月が過ぎ、深い眠りから目覚める万魔の姫。たった一人のために百億の怪物が死んでようやく彼女は目を覚ます。

——彼女の名はアセルス。妖煌帝オルロワージュの血を享けて蘇った半妖。自らに起きたことを、彼女はまだ何も知らない。



……そして少女は夢を見る。少女の夢で少女は死んで、馬の蹄に蹴られた骨が炭酸水の泡にも似た音を立て砕け散る。風に散らばる少女の骨がからりくろりと音を立て、馬車の扉がするりと開けられ、踏み出した優美なる妖魔の足が少女の骨を静かに踏み砕く。

ああ、と少女は言う。妖魔はふむと頷いて飛び散った少女を拾い上げるとしみじみと呟く。なんと醜い娘だろう。

少女の死骸が風に震える。骨がからりと鳴り響く。風に震える少女の骨の顎関節がからりと鳴いて喋り出す。

醜かろうがなんだろうがあなたの知ったことじゃない。仮に醜いと言うのなら、あなたが美しくすればいい。私の骨をあなたが拾った。

それを聞き、再びふむと頷いた妖魔は少女に自らの血を与え、そして少女は……。

脊髄が痺れあがるような恐怖を覚えて起き上がった。がばりと音を立てて毛布を跳ね除け、体全体で荒い息をつく。茹だるような体の熱が汗によつてさつと冷えていく。混乱したまま思わずじつと手のひらを見つめる。体がある。死んではない。では夢

だったのか、自らの碎ける音、体の奥の致命的な何かがぶちぶちと千切れていくあの切ない感覚は泡沫の幻に過ぎなかったとでも言うのか。

「夢……。そう、夢を見た……」

嫌な夢だった、とアセルスと思う。一体なにが嫌だったのか？ 死んだ自分を見下ろす自分が嫌だったのだ。死んでなお悲しいとさえ思えない自分が嫌だったのだ。生きること執着の一つさえ持てないうすつぺらな自分。

「まったく」とアセルスは静かに囁く。「とんだ馬鹿野郎だよ……」

暗澹たる面持ちで胸元を握りしめていると驚くほど近い場所で不意に誰かがぼそりと囁いた。独り言の多い小娘だな。はつとして横を向けば今の今まで何の気配さえ感じ取れなかった間近に鏃のように鋭い眼をした女が立っている。僅かな怯えを含ませ誰何の声を上げるアセルスを緑髪奥から見つめ、女はゆっくりと口を開く。

「目が覚めたか」

「あなたは誰？」

「質問に答えよとは仰せつかつておらん。俺の役目はお前の目覚めを確認することだけだ」

「俺？ あなた……。もしかして男のひと？」

まじまじと観察してみると緑髪は驚くほど均整のとれた顔立ちをしており、男も女と

も定かでない。

「何が起きたかまったく理解していないようだな。まあいい」

そう言うのと緑髪は陽炎のようにすつと滲み消えてしまう。

「消えた……」

見たままを間抜けに口にして茫然とする。よくよく辺りを見まわしてみれば自分がいる場所はまるで見知らぬ洋室で、アセルスは思わずぞつとする。

「……は……だ……私はいっ……」

部屋に置かれたあらゆる調度品は古めかしい年代物で、絵本に書かれた挿絵のようどこか現実感が薄かった。

室内は全体的に暗く、広々とした部屋の片隅はほとんど闇に覆われて判然としない。

起き上がりベッドから降りるとかつんと硬い音を立てて靴が床を叩いた。下を覗き込めば床は一面モザイクガラスが敷き詰められ、仄かな光を放っている。光源はどこにあるのだろうか？ 床にガラスで描かれた細密画がうつすらと息づくように明滅する。穏やかな黄褐色の光を放つ床下を眺めていると訳もなく何か目覚めることのない胎児や卵を見ているような気分になった。床の明滅が呼吸に見える。蟻が閉じ込められた琥珀化石を握りしめれば掌の中に一億年を感じるように、足元で得体のしれない何かが胎動する感覚に悠久を覚える。

窓に嵌め込まれたステンドガラスは紫色に妖しく光り、そこかしこをつたう蔓によつて縛り上げられている。薔薇に冒された室内では植物の甘ったるい香りが充満し噎せ返りそうだ。息苦しい。

外の空気を入れようと窓へ近づくと、トン、と軽い音が鳴った。近寄ると、一匹の「r b：小妖精 >スプライト」が重たそうに小さな花を抱えながら懸命に窓を叩いていた。シュライクでは滅多に見かけることのない妖魔にはじめぎよつとしたアセルスだったが、スプライトの様子があまりにも愛らしく危険があるようには到底思えなかつたため無防備にふらふらと駆け寄つた。アセルスに気づいたスプライトが窓の外で「ふわ」と嬉しそうに頬を染め、眼を輝かせる。中に入りたいのかと窓を開けようとして、しかし嵌め込み式のステンドガラスはびくともしない。スプライトは恭しく花束を捧げ、それから膝をついて深々と頭を下げる仕草をしてみせるがアセルスにはなんのことがまるでわからず途方に暮れた。窓は開けることもできず、スプライトの声も届かない。仮に聞こえたとしても言語が通じるのかどうかアセルスにはわからない。

スプライトはしばらくあたふたしていたが、やがて動きを止めるとその瞳にこんもりと涙を浮かべた。悲しそうに顔を歪め、ふるふる震えている。憐みを誘う様子にアセルスは思わず「あつ、ごめん」と口走つてしまったがだからと言つてどうすることもできない。

泣きながらスプライトは一端花束を置き、小さな拳をぎゅっと握りしめて、力いっぱい窓ガラスをたたき始めた。打ち付けるたびにスプライトの身体がびりびりと震えるほど力が込められてはいたが、しかし妖精の力ではやはりトンという軽やかな音しか出ない。

何度も何度も拳を打ち付ける内にスプライトの拳は次第に壊れていく。まち針の頭ほどにしかないちっぽけな拳の指が折れ、皮膚が裂け、血が流れ出していく。

「もういい、やめて！」

アセルスは叫ぶ。だがスプライトはなおも止めようとしめない。狂ったように窓を叩き、哀しみの涙を滂沱と流す。言いたいことがあったのかもしれない。仲間うちを一人抜け出して囁く恋の一つもあつたかもしれない。しかし言葉は届かない。贈り物を捧げることもできない。愛しい人を前にしてなんと自らの無力なことか——力尽きたスプライトは絶望に昏い眼を浮かべ窓の外を落ちていった。

第九幕 ・そして乙女の血が流れ

暗く濁ったスプライトの眼球が頭から離れない。逃げ出すようにアセルスはその場を離れ、助けを求めするように城内を歩き回る。しかし人の姿は陰さえも見えず、散策すればするほどに城への困惑は深まっていく

濃染めの紫に覆われた蔓の回廊。巨大な蕾を刳り貫いた伽藍堂に作られた洋室。聳え立つ刺草の城の内部には夥しい数の薔薇が蔓延っている。

無数の財宝を孕む宝物庫があった。月下に咲く花を思わせる刀、表面に銀河の蠢く腕輪。曰くめいた代物がごろごろ転がる宝の山にあつて宝物庫の最奥部に積まれた明らかに場違いな土産物の山が目を引く。安っぽい桃色の包装紙にくるまれた直方体で、「リージョン名物金魚の干物」と記されている。横面を見ると「オルロワージュ様御用達」という印と商品の安全性を証明するために「私がつくりました!」という吹き出し付きで生産者の写真が掲載されている。

「ヨノメ、ヨチコ……?」

生産者の名前を読み上げて首を傾げる。どう考えても財宝と一緒にきたにされるものではない大量生産の土産物だ。よくよく目を凝らしてみれば他にもおかしなもの

らほらと見受けられた。汚らしい字で「めてるむみあ」と刻まれた檜の杖が飾られていたり、王文青と墨痕倫理に記された将棋の駒箱や一見して手製と知れるちやちなつくりの銅細工が見える。銅細工を手にとるとどうも「S」と「O」が組み合わされた装飾のようだった。何度となく磨かれてきたのだろう、黒ずんではいるが傷一つなく輝いている。計算してみると金魚の干物土産の数は全部で2300にもものぼり、収集者の仄かな狂気が垣間見えた。

棺の並ぶ一室があつた。蓋を開けてみれば中には美しい女性が死んだように眠りこんでいる。隣の棺もその隣もみな当たり前のように乙女を閉じ込めて鎮座している。時が進むことを拒否するかののように眠りの中に墜落し続ける乙女たちを、棘を奇妙に肥大させた薔薇が縛る。しかし葬られているのは死者ではない。棺に眠る乙女たちの心臓は鼓動している。儂く震えるその皮膚に思わず手を差し伸べたアセルスは、突如蠢いた薔薇に驚いて飛び退く。気のせいだったかもしれない。薔薇が動くことなどある筈もない。しかし……。この城はどこかおかしいような気がする。突然消えた麗人に窓辺を訪う小妖精、そして棺に眠る乙女たち。

「誰か……誰かいないの」

弱々しく眩きながらアセルスは歩き続ける。どこもかしこも薔薇だらけだ。避ける足場もありはしない。足を進めようとするのなら必ず薔薇を踏みしめなくてはならな

い。美しく綺麗な薔薇をしかし土足で踏み躪り、振れた葉脈から薔薇の血液がほろほろと零れていく。

ちらほらと花卉が散る。押し潰された花卉があまりにも醜い螺旋を描く。

庭園があつた。白い薔薇が群生している。城の大半を支配する薔薇の紫とは違う無垢の純白。嗜虐的な紫とも赤色の攻撃性とも違う、平和の象徴たる白色にアセルスは束の間の安らぎを感じてほっとした。

「薔薇……が好きなのかな。この人は。いい趣味だよね……一応。度が過ぎてはいるけど……」 囁いて、アセルスは首を振る。「いや、やっぱりどう考えても悪趣味だ……」
しやがみ込んで薔薇の花を撫でていると、庭園に吊られた名前も知らない鳥の剥製が突然「ゲゲゲ」と喋り出した。

「ホント、ホント。本当のことを言うよ。武器は装備しないと意味がない！ どんな剣を手に入れたって、使えなけりや役には立たない！ ホント、ホント、本当のことを言うよ……」

「な、なんだあ……？」

「ホント、ホント。本当のことを言うよ。失つたものは取り戻せない。忘れたことは思い出せず、記憶はけして戻らない！ それがこの世の掟だよ！ ホント、ホント、本当のことを言うよ……」

不気味に囁る鳥に後ずさると何かにぶつかってアセルスは更にわっと飛び上がる。振り返ると白い巻き毛の男が立っていて、鋭く舌打ちをしながら鳥の剥製を睨みつける。

「奴らの言うことに耳を貸すな。帆ほ途鳥との言うことは全て本当のことだからな」

「え……？ あなた、な」

どん、と重たいものがぶつかる感触がして、口にしかけた疑問が遮られる。氷を押し当てられたような痛みにも思わず俯けば、巻き毛が手にした剣が自分の腹腔を刺し貫いていた。

「あ……」

驚愕に顔を上げると、巻き毛は詰まらなそうな顔でアセルスを見下ろした。アセルスが伸ばした腕を事もなげに躲して男は剣を抜き、軽くアセルスの胸を押す。アセルスは倒れこみ、そのまま気を失う。

とふ、とふ……と滴り落ちる乙女の血。水で膨れた袋を針でつついたように、肉の詰まった体から止めどなく血液が流れ出る。

その血の色は赤では無い。人間の身体を巡る血潮、鉄の匂いを漂わせるあの鮮血の紅とは違う。

その血の色は蒼では無い。妖魔の持つ妙なる虜の血、魂さえも書き換えるあの蒼の血流とも違う。

その血の色は雪薊スノウシスル。穢れ無き雪の透徹を持ちながら桔梗よりも菖蒲よりも深く朦々と沈み込む紫。

乙女の血を薔薇が喰らう。水面に落ちた雨粒がさつと波紋を生むように、純白の薔薇が一瞬にして暗く染まっていく。

乙女の血に悪意は無い。征服欲も支配欲も欠けている。——しかしそれでもなお、乙女の血は邪悪である。雪薊の血液が薔薇と言う薔薇を浸食する。

妖魔の城の歪な薔薇が乙女の血液を卑猥に啜る。舌を滑らせしつこく舐め上げるように音を立てて吸血する。そしてまた牙を剥く乙女の血が薔薇を見る間に覆い尽くしていく。純潔の白を穢して渦巻き、薔薇と言う薔薇の一切を己の色で染め上げる。

薔薇が血を喰えば乙女の血もまた薔薇を喰うのだ。共食いの様相を呈して薔薇の血ローズブラッドが獣の飢餓の唸りを上げる。

乙女の血は邪悪である。赤でもなく蒼でもなく人でもなく妖魔でもないその血の色の名は一雪薊スノウシスル。この世でたった一人の絶滅の色。孤独と退廃と放埒の色。

ここに乙女の血が流される。滔々と流れ、静かに床を滑る。その血を見て、高みから

妖魔の君が一人囁く。——血は紫か。答えるものはなく、なおも乙女の血は流れ続ける……。

また時が過ぎる。微動だにしない乙女の肉の裡側で小さな泡がぷちりと弾け、蠢く内臓器官が肉の糸を粘つかせながら身を振る。

凍り付いた心臓が奇妙な鼓動を刻み始めた。

アセルスの全身が操り人形じみて痙攣する。青白い電撃に撃たれたように右腕が大きく震え、鍵盤を跳ね上げるかの如く五指が暴れる。

乙女の肉は仮想の熱量を取り込んで見る間に膨れ上がると己の腹部にぼつかりと空いた傷口に群がった。汚らしい汁を互い違いに擦り付け合い絡み合い、傷と言う傷を嘘で塗り固めてしまう。

ううん、と寝言を言うように悶え、アセルスが再び目を開ける。見覚えのある景色、しかし紫に染まった薔薇の庭園。ぬるぬると滑る掌に疑問を覚え見つめてみれば紫色の不気味な液体が滴り落ちる。

「なんだ……これ……」

ぼんやりと呟いて思い出すことは謎の巻き毛と腹に刺さった剣の記憶。……ああ、そうだ、自分は確かに……。いや……死んではいけない。おそろおそろ覗いた自らの腹。穴こそ空いてはいないものの鋭い裂傷そして傷口から溢れ出る紫色の……これは。

貫かれ、しかし思いのほか浅く、けれども確かに刻まれたこの傷から零れ落ちるこの色はこの液体は、いや、そうとしか考えられない、けれどもそんなことあるわけがない。「なんだ、これ……なんなんだ……！」

上擦った声が焦りを更に助長する。

夢を見た、と思う。自分が死ぬ夢だった。けれどもそれは夢だった。夢だったはずなのだ。だといふのにまた自分は夢を見ているのだろうか。今度もまた死ぬ夢だったのか。……いや違う。自分は今ここにいる。夢の場所と今いるここは訳の分からない因果で結ばれている。

巻き毛の男が自分を刺した。気が付けばこの傷があり、この……血がある。体の奥から滲み出るこれは血液以外には考えられない。

助けて、とアセルスは言う。掠れた声で他人を求め、惨めに喘いで嘆きを上げる。依然として醒めない悪夢に震えだした歯の根をそのままに、よたよたと頼りない足取りでアセルスは歩き出す。

どうしようもなく脅えていた。何かが怖くてたまらなかつた。自分には理解できない何かが起きている。自分自身が知らない間に何か別のものに変わってしまったている。

「あ、あ……」

よろけた足が絡まりアセルスは無様に転ぶ。勢いよく顔面から倒れこみ、打ち付けた

鼻っ柱がつんと熱くなった。

……ああ。

……自分はいつもこうだ。

何一つわからないまま追い立てられ、おどおどと逃げ回らなけりやならない。

顔も知らない両親のことで「親なし子」「貰われっ子」だのと馬鹿にされ、さんざ殴られた。自分が何をしたというわけでもないのにただ生きていくだけで迷惑だと言われているような気がする。

ここから抜け出す方法を誰も教えてはくれない。自分が誰かを殴ってしまったのならああどうぞ殴り返してくれとアセルスは思う……。失礼なことを言ったのなら謝りもするし悪いとも思う。しかし自分を悩ませる問題はどんな時だって自らの与り知らぬところ、自分の手では触れられない場所にある。「両親がいない」と蔑まれしかし自分はどうしたらいい？ 今更のように両親を生み出すことはできないしかといて卑しく媚を浮かべて同級生に取り入ろうとも思えない。

いつもそうだ。

世界は自分を祝福してはくれない。

その証拠にみろ、今もこうして自分は見知らぬ場所で孤独に震えているではないか。体の奥から湧き出る紫の血の由縁も知らず、力なく無様に倒れこんでいる。

「ふざけるな……いー」

こみあげる嗚咽を懸命に飲み込み、力の限り掌を握りしめると掌に薔薇の棘が突き刺さる。

それは恐ろしいほど心地の良い痛みだった。

痴愚の笑みを浮かべてアセルスはなおも強く掌を握りしめる。更に増していく痛みが意識を覚醒させる。ぎちり、と掌の中で何かが爆ぜた。広げると手の肉が醜く裂け、汚らしい穴が空いていた。

傷口からはやはり紫色の血が流れている。ぐ、と歯を噛みしめてアセルスは再び棘を握りしめる。ぎちぎちと棘が手の中で炸裂する。

「痛いな……」

アセルスは昏い微笑みを浮かべて拳を握る。心の奥底でじりじりと燻るちっぽけな怒りが痛みによつて勢いを増し、混乱と恐怖が激情に染まっていく。追いつめられた鼠が狂気に涎を零しながら爛々と眼をぎよろつかせて牙を剥くように、か弱い乙女の魂が燃え盛る怒りに焼き焦げていく。

手を握る。

棘が刺さる。

痛みを糧に目覚めた獣が子宮の海で静かに唸る。

——訳の分からないことを訳も分からずに押し付けられ、はいそうですかと頷いてたまるか。

「ああ、うんざりだな……！」

吐き捨ててアセルスは立ち上がる。

◇

やがてアセルスは「王」と出会った。

目覚めた時隣にいた緑髪、自分を突き刺した巻き毛、そして橙色の外套を羽織った見知らぬ男と侍女たちに囲まれて悠然と玉座に座る硝子細工のような美貌の持ち主。

辿り着いたその場所で、玉座についた麗人はこちらを見下ろして静かに尋ねた。

「名は？」

答えるのが当然だとしても言わんばかりの態度にアセルスは首を傾げる。

「私はアセルス。でもね、人に尋ねる前に自分で名乗るのが礼儀だと思うな」

「この無礼者！」

巻き毛が叫ぶがアセルスは意に介さず爪先で床を軽く叩く。気丈なその態度に「ふむ」と王が満足げに息をついた。

「アセルスか。人間にしては気の利いた名前だな。気も強い。いいことだ」

予想もしない褒め言葉に「む……」と押し黙り、アセルスは俯いて年相応の恥じらいを見せる。他人に褒められることなどは久しぶりでどう反応していいのかわからない。

(いや……相手に吞まれちゃいけない。私は誘拐されてきたかもしれないんだ)

アセルスは気を取り直すために自分の右頬を捻る。目の前の王が面白そうに目を細め、余裕綽々なその態度にアセルスは僅かな苛立ちを覚える。

「そろそろ名乗ったらどう?」

問いに答えるように「うむ」と王が頷くと、取り囲む侍女たちがうつとりした表情で手を祈りの形に組み、代わる代わる宗教的な文言を唱えるかのように法悦と語りだした。

——魅惑の君。

——無慈悲な王。

——薔薇の守護者。

——闇の支配者。

——美しき方。

——裁きの主。

——ファシナトウールの支配者。この針の城の主。

——妖魔の君。オルロワージュ様……。

「……妖魔。そうか……。でも私には関係ない。家に帰して」

「先ほど庭で見なかったのか？ そなたの血は紫だ。そなたはもはや人間ではない」

「嘘」

「セアトの剣で串刺しにされた、その傷はなぜ無い？ そもそも、我が馬車に轢かれてそなたは死んでいた。そなたが蘇ったのは我が青い血の力。妖魔の青と人の赤、二つの血が混じりあいそなたは生き返ったのだ。紫の血の半妖としてな」

「私が……」

「かりそめにも我が血を受けし者、それなりの物事を身に付けてもらわねばな。……イルドウン」

イルドウンと呼ばれた緑髪が感情の籠らぬ声で答える。

「……ああ」

「イルドウン。この娘、そなたに任すぞ」

「イルドウンでは力不足では？ 何かの時に醜態を晒すことも」

セアトが不服そうに口を挟むと、橙色の男がイルドウンを庇う。

「イルドウンの身のこなしの素早さ、剣さばき、どちらも十分だ。セアトよ、お前ごときが口を出すことではない」

「半妖……」

アセルスは茫然と呟いた。

「ラストバンの言うとおおり、妖魔の力を教えるのはイルドウン一人で十分だ。だが、まずはその汚らしい格好を何とかしてくるのだな」

オルロワージュはそう言い放つと取り巻きと共に消え、あとにはイルドウンだけが残った。

汚らしいと言われたことにも気づかず、アセルスは突然告げられた真実に動揺を隠せない。

「妖魔……半妖……青い血……紫の血……」

「いい加減現実を受け入れろ、半妖。たかだか血のいくらかが入れ替わったに過ぎん。行くぞ」

「どこへ？」

「血のめぐりの悪い娘だな。オルロワージュの言葉を聞かなかったのか？ 根の町の仕立屋へ行く。お前の服が仕立ててある」

無遠慮に告げるイルドウンにアセルスの頬がぴくりと引き攣る。

「……」

「聞こえなかったのか？ ついて来い、半妖」

「……嫌だ」

「なんだと？」

「嫌だつて、そう言ったんだ！ ……なんだ、あなたたちは！ こつちは死んだだの半妖だの言われて混乱してるんだ！ 人の気も知らずに勝手なことばかり言つて、よくもまあそんな偉そうにしてられるね！ ……運命つて奴はいつもこうなんだ！ こつちが望んでもいないことばかりを押し付けておいて、肝心なことは何一つ教えずに知らん顔をしてる！ もううんざりなんだよ！」

叫んだ直後、イルドウンの腕が無造作に伸びアセルスの顎を掴んだ。そのまま持ち上げ、ぎりぎりと締め上げる。

「……言いたいことはそれだけか、小娘」

冷たく睥睨するイルドウン。

「う……」

「俺はついて来いと言つたんだ。お前の言葉など聞いてはいない。お前はただ馬鹿のように俺の後をついてくればそれでいい」

圧倒的な暴力に身動きを奪われながら、しかしアセルスは気丈に睨み返す。

「い……や……だ……」

「もう一度殺されなければわからんらしいな」

次第に強まる力に骨が軋む。

「あ、あ……」

「跪いて命乞いをしろ。私は惨めな弱者ですと頭を垂れ、卑しく慈悲を乞うがいい」

「嫌なものは嫌だ……。どちらかが謝るといふのなら、お前が私に謝れ……！」

「俺がお前に謝るだど？」イルドゥンが眉を顰める。「解せんな。なぜこの俺がお前になぞ頭を下げねばならん」

心底から不思議そうなイルドゥンにアセルスは拳を固め、力の限りに顔面を殴りつけるがびくともしない。だが予想だにできなかった反撃にイルドゥンの力が僅かに弱まり、アセルスは床に投げ出される。

苦しげに咳をしながらアセルスは再び叫んだ。

「それだけのことをしてるとてのがわからないから、あんたたちは妖魔なんだ！ 私は絶対に命乞いなんかしない。頭だつて下げない。殺すつていうのなら、ああ殺せ！ どうせ私は死んでるんだらう！」

大音声で吠え、アセルスは肩でせいぜいと息をする。

イルドゥンはまるで道端の野良猫でも見るかの如く彼女をじろじろと眺めまわしたかと思うと、どこか納得したように頷いた。

「ふむ……」

「……？」

「……まあ、そうだな。実際の所お前を殺すわけにもいかん。……となれば、仕方がない」

「なに？」

怪訝に問い返すと、イルドゥンはその場に腰を下ろしのんびりと言った。

「お前の気が変わるまで傍にいるよりほかはない。それ以外に出来ることもないのでな」

「……勝手にすれば」

不機嫌に顔を歪めアセルスはイルドゥンから離れる。どこか別の場所に行きたいと思う。ようやく手にした自由だ。頭の中を整理したかった。

「……おい。どこへ行くつもりだ。小娘」

「小娘じゃない。私はアセルスだ」

「そちらは行き止まりだぞ小娘」

「……うるさいな。私は私の行きたいところに行くさ」

「お前に行きたいところなどあるのか？　ここがどこなのかも知らぬくせに」

「それもこれも全部あんたたちのせいだろう」

「ああそうだ。だが俺の知ったことではない。いいからとりあえず服を取りに行け小娘」

「絶対に嫌だ」

「そうか」

「ん……。あ……。？ 服……。？ そうか……」

「どうした」

「巻き毛に剣で刺されて服が血塗れになって、それで代わりの服があるから取りに行くって、あなたが言っているのはそういうこと……。？」

「初めからそう言っている」

「あ……。そう、そうか……」

「何がだ」

「それで、その後はどうするの……。？」

「その後？」

「服を着替えて、その後であなたは私をどうするつもりなの……。？」

「そうだな……。イルドウンは少し考える。特に何も考えてはいない」

「はあ？」

「まあ待て」イルドウンが額に手を当てる。「お前は服を着替える。そして……。そして、そうだな……。お前の部屋がある。そこで寝ろ。とりあえず」

「何それ」

「お前も聞いていただろう。俺とてお前の面倒を見ろと先ほど言われたばかりだ。大したことを考える時間もない」

「ああ……うん。……少しだけ、あなたのことがわかったような気がする」
「ほう」

「……あなた、実は馬鹿なんでしょう?」

イルドウンは「はっ」と小さな声を上げた。笑ったようだった。

幕間 零と鴉と喰う者が喰われる夜

むかしむかしある所にイルドウンという馬鹿者がいた。このイルドウン、生まれついで頑固者で他人に依ることをよしとせず、たとえどれほど偉い相手であろうとも気に食わなければ頭を下げないという自分ルールを頑なに守るタチであったため一部の妖魔からはひどく嫌われている。

たとえばイルドウンが親友のラストバンと一緒に針の城を歩いていると、前方から零姫がやってくる。零姫はファシナトウールで一番偉いオルロワージュの第一の寵姫、ものすごく簡単に計算すれば二番目に偉いということになる。隣でラストバンが女王に對するように恭しく膝をついて挨拶するのがわかったが、やはりイルドウンはイルドウンでしかなく、顎を若干上げさえして、しかも見下ろすような目つきをして「半月ぶりか、零姫」とぞんざいに言い放つ。

当然のごとく零姫はイルドウンを無視してラストバンと語り始めた。

「これは零姫さま。本日もごく機嫌麗しゅうございます。また零姫さまのお美しいご尊顔を拝見することができ、身の震えるほどの幸福でございます」

「うむ、うむ。ラストバンはできておるのう」

ニコニコと微笑えむ零姫はそれからわざとらしく眉を顰めて信じられないものでも見るようにイルドウンに視線を向ける。

「それに比べてこのイルドウンはどうじゃ……。口のきき方も知らん原始の猿と見える」

「……」

「……まあ、イルドウンのことは良いではありませんか。それよりも零姫様、先だつての周遊では何やらとても珍しいものを見つけたと聞きましたか」

「ほお、さすがはラストバン、耳が早いではないか。まさにそのとおりよ。こたびの旅行で妾が手に入れたものこそ、この食鎖チエインスケインの杖——すなわち、『喰う者が喰われる杖』じゃ」

零姫が掲げた杖に、イルドウンは見たままを言った。

「汚らしい杖だな」

別にイルドウンに他意があるわけではない。ただ彼には杖がそう見えたからそう言っただけなのだ。本当に汚い杖だった。あちこちが煤け、植物の汁や怪物の体液が染み込んでいる。肝心の杖自体に施された彫刻も実に不気味で、杖の先から塚元へ向かって菌類、植物、虫、鳥、獣と様々な生き物が描かれ、頂上付近では人間と妖魔とそしてなんだかよくわからない幾何学的なものが絡み合う。実際にそれを口に出すかどうかは別として、装飾品として美しいとはけして言えない杖だった。

手に持った杖を否定された零姫は凍えるような眼で睨みつける。

「嫌いぞイルドウン。貴様は黙って庭の隅で屈伸運動でもしておれ」

「……」

あんまりといえばあんまりな言葉に思わず腰の剣に手を伸ばしかけるとラストバンが慌てて耳打ちをする。

「イルドウン。それはまずい」

「……まだ何もしてない」

「なんじゃイルドウン、剣を抜く気か？　こんなにか弱い、しかも丸腰の女性に向かって貴様は凶器を抜くのか？　野蛮じやのうイルドウン、実に野蛮じや」

とこのようにして数多くの妖魔に嫌われ、中でもとりわけ零姫とは犬猿の仲のイルドウンなのだった。

出会う度に零姫はひどい罵倒を浴びせ、イルドウンは不愉快そうに顔を歪めてラストバンがそれを止める。長い長い時が過ぎ、いつしかそんな関係が当たり前になりつつあったそんな折、ファシナツールを揺るがす大事件が起きた。

零姫が逃げたのだ。

虜化を受けたものは主に対して隷従を強いられる。尽くしこそすれ、逆らうことなどある筈はない。だというのに零姫は——なんとオルロワージュを逆に吸血し傷つけさせたというのだ。

これはあつてはならないことだった。オルロワージュの虜化が破られる、それはすなわち、妖魔の君の権威が揺らぐことを意味する。

零姫の力がオルロワージュを上回った、だから虜化が破られた。オルロワージュは弱くなっているのではないか？ 零姫につくべきなのではないか？

数多くの疑念が囁かれ、ファシナトウルに不穏な空気が渦巻く中、変わらないのはイルドウンただ一人だった。

零姫が逃げたその日、イルドウンは彼女と会っていたからだ。

夜中にひとりでぼんやりしているのが好きなイルドウンがその日も城をぶらついていると、城の頂上からパリーンという音が聞こえる。見上げれば、腕を十字に交差させた零姫が窓を破って落ちてくるところだった。

零姫が軽やかな音を立てて庭に着地し、しばらくしてからオルロワージュのものとおぼしき声が高らかに彼女への愛を告げた。

愛している、とオルロワージュは言う。しかし零姫はその言葉に背を向けて一目散に

疾走するのだ。

「……何をやっているんだ、あの女は」

うんざりしたように呟いたイルドゥンはそのまま見なかったことにして立ち去ろうとしたが、運の悪いことに零姫が丁度こちらの方へ駆けてくる。思わず顔を歪めたイルドゥンは、しかし近づいてくる零姫がうつすらと涙を浮かべているのに気づいてそつと目を細めた。

「おい」

零姫ははつと顔を上げ、緊張したようにすつと息を吸う。用心深くこちらの様子を窺いじりじりと後ずさり、イルドゥンが「一体何の真似だ？」と呆れているとふつと肩の力を抜いて「はは」と自嘲した。

「……確かにな。これほど早く追手が待ち伏せているわけもない」

「何の話だ」

「気にするな。馬鹿には関係のない話じゃ」

「誰が馬鹿だ。……第一の寵姫が夜更けに窓から飛び出すのを目撃しておいて関係がないという訳にもいかなだろう」

「ちよつとオルロワージュの血を頂いてきただけじゃ」

「そうか」イルドゥンはどうでも良さそうに頷いてそれから「……なんだと？」と珍しく

声を震わせる。

「今のは少し面白かった」

真面目な顔で感想を述べる零姫にイルドゥンはなおも疑わしげに尋ねる。

「とすると、お前は……」

「ああ。もはや妾はオルロワージュの虜ではない」

「しかし、相手はオルロワージュだぞ」

信じられないといった様子で言葉を濁すイルドゥンは色々なことを考えた。一体どのような方法で逆吸血を成し得たのか？ そもそも虜化を受けておきながらなぜ逆吸血を行う意思を持てたのか？ そして——そしてイルドゥンが最後に思うことは、彼自身望むただ一つの事。

「お前はオルロワージュに勝ったのか？」

零姫が明らかに「何を言っているのかこの馬鹿は」という顔を浮かべイルドゥンは一瞬鼻白むが、それでもしつこく問い質す。すると零姫は面倒くさそうに「何故そんなことを聞く？」と聞き返した。

「当たり前だろう。俺は奴に勝ちたいからな」

真剣に答えたイルドゥンを零姫は笑う。「はっ」と鼻を鳴らし小馬鹿にさえる。腹立ちを懸命に抑えしかめつづらをしてしていると零姫は仕方なさそうにため息をついて答

えた。

「……まあ、絶対ともいえる奴の支配から逃れえた、奴の力を逆に奪ってやったという点を考えれば、確かに妾は勝ったと言えなくもないのかもしれない。……しかしのう。勝ったとか、負けたとか、事ここに及んで考えてみれば、妾にはどうでもよいことじやな。だいたい、男と女の間には勝敗という考えを持ち込むこと自体が無意味じやろう。いかな妖魔とて、はじまりには愛するために支配したのであって、支配するために愛したのではない」

「愛？」イルドゥンは首を傾げる。「なぜここで愛がでてくる」

「まだわからんのか？ 妾は第一の寵姫であることを、オルロワーヂュを愛することを止めた。奴の虜化を打ち破り、自由を手にするために逃げ出したのじや。今ここで起きたのは妖魔同士の戦いではなく、単なる痴情のもつれに過ぎん」

「そうだったのか」ようやく得心がいったようにイルドゥンは頷いた。「今までどのように奴の剣をかくくぐって吸血したのかということしか考えていなかったが、そうか。お前は逃げてきたのか」

「冗談ではなくこれは心底から言うがやはりお前は馬鹿じやと思う」

零姫の言葉が耳に入らなかったようにイルドゥンは「そうか……」と繰り返し、それからふと顔を上げてまじまじと零姫を見つめた。

「なぜ逃げる」

「さあな」

冷たく答え踵を返した零姫の背中に、イルドウンはぼそりと言う。

「零姫。オルロワージュは寂しいと言ったぞ」

「……ほお」

押し殺した声で零姫はびたりと動きを止めた。

「……意外じゃな。おぬしからそのような言葉がでてくるとは思わなんだ」

「俺の言葉はいつだって俺のものだ。意外も何もない」

「そうか？ 言葉一つで世界は変わって見える。いま、妾には、おぬしがいつもとは違っ

た妖魔に思えているが？」

「俺には関係のない話だな」

「そうか。ならばおぬしはそうやっていつまでも変わらぬ言葉を抱きかかえているがい

い」

「零姫。なぜお前は逃げたんだ？」

「イルドウン」 零姫は小さな声でぼつりと言う。「お前は永遠をどう思う？」

「どうでもいい」

「そう思えるのならオルロワージュもどれほど幸福じゃったろうかな……。まこと、世

の中と言うものはままならんものじゃ。奴の……オルロワージュの求めているものはずばり、その永遠というものなのじゃ。永遠に変わらぬもの、永遠に失われることの無いもの……。そんなものを求めることは、大気の質量を求めることに等しい。浜辺の果てに広がる大海に手のひらから水を零しておいて、落とすその水の形を求めることに等しい……。だから妾は逃げることにした」

「逃げるな。戦え」

「簡単に言うてくれるな、イルドウンよ。……それに妾は何も逃げるためだけに針の城を飛び出したのではないぞ。そうさ、ある意味では、妾は戦うために逃げ出したとも言える。言葉というのはそういうものじゃ」

「まあ、俺はお前がここからいなくなろうがなんだろうがどうでもいいが」

「さようか。ならば妾はこれで失礼するでしょう。思いのほか、おぬしとの会話も趣深いものであった」

「そうか」

「ああ」

「最後に一つ教えてくれ」

「何じゃ？」

「先ほどの話だが……肝心なところが曖昧なままだったのでな。お前が逃げたその理由

だ

「なかなかおぬしもしつこいのう」

「お前は永遠をどう思うんだ？ オルロワージュは永遠を求めている。しかし永遠を求めめることは困難だ。……それでお前は？ 永遠を求めることを諦めて逃げ出していくのか？ それとも……」

「イルドウン。永遠などどうでも良い、とおぬしは言った。しかし再び妾は尋ねよう。この世に永遠は存在すると思うか？ 永遠はあるのか、ないのか？」

「わからん。考えたこともない。お前はどんなんだ？」

尋ねると、零姫は顔を綻ばせて幸福そうにこう答えた。この世に永遠は存在する。



そして次に零姫と出会った時、イルドウンは喰う者の喰われる夜を視た。

ある日ある夜のイルドウンがどことも知れぬ森の中を歩いていると頭上から転がり落ちるように何かが落下する。どさりと音を立てべちやりと汚らしい液体を垂れ流し蹲ったそれは鼻を覆いたくなるような腐臭を放つ。

ひどく醜い生き物だった。全身が血に濡れていた。芋虫の亜種か蛆の類だろうか。

もぞもぞと蠢いて「ぐええ」と耳障りな鳴き声をあげる。薄汚い、気持ちの悪い、要するにおぞましい生き物だった。初めはそう思っていた。

しかしどうだろう、近寄ってよくよくと眺めてみれば切り取られた肉の断面、じゆくじゆくと腐れ汁の滴るその様子にはどうもあの血潮の駆け巡る血管とやらがぶるぶると蚯蚓のように震えているし、無残に飛び出した二つの白の枝は骨のように見える。……とするとこれは、イルドウンのよく知るあの形なのではないか。頭と胴体とを首が繋いで、二本の腕と二本の足とがよきりと生えたその姿を人間、あるいは妖魔と呼び習わすのではないか。どだい、元々はそんな形をしていたのだらうけれど、今ではもう腕も足も捻じり切られて四肢欠損、地を這うことすらできない畜生以下の畜生としてそれは存在している。潰れた顔面は肉団子にしか見えないし「ううう」と苦しみに呻くだけの唇は罅割れた煉瓦の亀裂にしか見えないそれでもイルドウンは頭と胴体とを首が繋いで二本の腕と二本の足とがよきりと生えて賤しく足掻くその形を知っているその名前を知っている。

それは零姫だ。

イルドウンは口元に耳を寄せる。雨が屋根を叩くような音を立て、今や肉塊と化した零姫がぼそぼそと聞き苦しい言葉を漏らす。途切れ途切れに弱々しく、ただ音の連なりにしか聞こえぬ言葉。イルドウンが懸命に聞き取った言葉によれば、零姫は「これは嫌

なところをみられたものじゃ”と言っているようだった。あまりにも無残な様子でありながらも自らを失わぬ零姫にさしものイルドゥンも感心してしまい、その夜、長く長く続くその夜をただひたすらに零姫の言葉を聞き取ることだけに費やした。一言話だけで死んでしまいそうになりながら、零姫はぼつりぼつりと静かに語り、イルドゥンは死んでいく彼女を静かに見守った。

逃げゆく乙女の話しよう。

ここに一人の乙女がいる。たとえ何万年生きようとも本人が乙女だと信じている限り彼女は乙女だし、実際に「その体」は乙女なのだから仕方がない。乙女は自分自身が世界で一番美しいと思っっている。世界で一番正しいと、強いのだと思っっている。

そんな乙女が、ではどうして逃げ出すのだろう。最強であるのなら誰からも逃げる必要はないし、美しいのなら誰だって魅了してしまえるだろう。

しかし乙女はこう思っている。自分は世界で一番美しく正しく強いが、それらは所詮言葉に過ぎないのだと。言葉は時の流れの中で容易く物語になつてしまうものだ。どれほど美しく強かろうとも、その言葉だけでは届かぬものもあるのだと。

逃げてゆく。彼女はどこまでも逃げてゆく。

愛した者がいた。愛した自分がいた。愛の言葉があり、口づけがあつた。愛と言う名の感情を演じて一億百億の日々を過ごし、彼の者を愛して愛して愛し続けてそれでもな

ならば逃げる必要などはどこにもない。乙女の行方を数多の妖魔が追い求め、その足を掬わんと虎視眈眈と企んでいる。だから乙女は逃げるのだ。逃げて逃げて逃げ続けるのだ。

そうして逃げている内にいつかはあいつがやってくる。妖魔の君、魅了の君、妖煌帝オルロワージュ。かつては愛したあの男が全てを切り裂く妖魔の剣をひっさげて乙女を捕まえにやってくる。乙女は世界最強だけれどもこのオルロワージュもなかなか手ごわい。さしもの乙女のつい油断して切り刻まれて命から逃げてだしてこの有様。世界は常にままならぬ。

……要するに、乙女はオルロワージュにしてやられてしまったのだ。なんとか捕まることだけは避けたものの必死に逃げるうちに足は捻じれ腕は腐って落ちた。この目でさえももうまともに見えない。あとはもう、ゆるやかに死ぬのを待つばかりとなった。

しかしな、と乙女は言う。だからといってこのリンクーニャン、何の考えもなくむぎむぎ死ぬのではない。逃げると言うたからには逃げ切るだけの策がある。

覚えているかイルドウン。お前が汚いと言ったあの杖を。妾の持ち帰ったあの食鎖の杖を。

そこらに転がっている筈じゃ。探して持ってきてくれ。

捕まるわけにはいかない。どんな手段を使つても逃げ続けなくてはならない。そう考えたとき乙女の頭をよぎるのは、転化の法。染み渡る水が太陽に焼かれて天空へと高く上り、そしてまたいつか雨として大地に降り注ぐ。この世に産み落とされ、虚無^{ぜろ}へと還り、そしてまた生まれくるいのち。転化転生法によつて再現される輪廻の姿。食鎖の杖によつて発動される破理の呪法。喰う者が喰われる夜^ル。

乙女の唇が杖を啜える。涎を滴らせながら、鎖^{チェイン}、そして杖^{ケイン}、呼ぶべき呪具の名を口にする。

命というのはいつか誰かに食われるものだ。あなたがもし微生物ならあなたの暮らす植物を虫が食いその虫をまた別の虫が食う。その虫はまた鼠に喰われ鼠は蛇に蛇は鳥にと食われていつて獣を食らう人間の血をいつか妖魔が餌にする。食物網の頂点に立つて、妖魔は支配者然と生きている。けれどもそれが一体なぜなのかは誰にもわからない。なぜ自分が生まれついでに勝者なのか、誰も説明してやることできないのだ。食つて食われて食われて食つて。命を繋ぐその鎖の理を破らんとするのなら相応の報いをうけねばならず、一つの命を得るのなら一つの命を失わねばならない。喰う者が喰われる夜という術はつまるころそういうものだ。

仙女として、妖魔として、零姫はたくさんの血を吸った。

故に、食鎖の杖を手にした乙女がそれでも命を願うなら、どこからともなく現れたあ

りとあらゆる被食者たちが、この時よりは捕食者と転じて零姫を食らう。

ざわ、と森が震えた。

「見よ、イルドウン……喰う者が、喰われていくぞ……」

囁いた零姫の唇の端から無数の蟲が侵入し、小さな鋏でそつと舌を切り取った。腕の断面には緑色の微生物がわらわらと蠢いて見る間に肉は腐れだし、膨れ上がった膿がとろとろと流れ出していく。雀に鳩にうぐいすオナガ、なんでもない町鳥が狂ったように乙女の目玉にたかり出し、瞳の淵からそつと嘴を差し込んで眼球を刳り貫こうとする。

乙女の腿を犬が食み、乙女の臍を鼠が舐める。少しずつ解体され骨の覗いたその体に零姫の面影などは欠片も残らず、イルドウンの見下ろすその死体はただ骸と言う以外にほかはなかった。

零姫、とイルドウンは言う。零姫はもう答えない。目の前で喰われた零姫が本当に彼女の言うとおり転生を成し得たのかどうかイルドウンにはわからない。そんなことができるものなのかと思う。仮にできたとして、そうまでして生きねばならないのかと思う。第一の寵姫でもあった女があれほど惨めな姿を晒し、生きながらに食われてまで逃げなければいけないものなのか。

「……大した女だ」

珍しく感嘆の吐息を漏らし、イルドゥンは天を仰ぐ。それは祈りの仕草だった。今またこの世のどこかで新たな命が生まれることを、ただイルドゥンは静かに願った。

第十幕 焦がれの連鎖

美しい方でした。

開かれた扉にいらっしやいませと頭を下げ、現れたイルドウン様にああ今年も若様の衣装の御注文に来られたのだろうかと頭の中でさっそく作業手順を確認していると、イルドウン様の背後からするりと無造作に別の方が入ってこられました。イルドウン様が二人連れで来られたのはこれが初めてだったので珍しいこともあるものねと何の気なしに視線を向け、その途端に私は雷で打たれたように痺れあがります。

その方は随分張りつめた顔をしておられました。身につけている服は何やらひどく汚れていましたが、その色は赤でも青でもなかったために私はそれが血に染められているものとは思いませんでした。

私は服の汚れや乱れよりもその方のお顔にばかり気を取られていました。それほどまで強い光を放つ瞳を私知りませんでした。静かな怒りと確かな意思を感じさせるそのひとみは、達観や老成ばかりを浮かべる妖魔の目とはまるで異なるものだったのです。

「い、いらっしやいませ。高貴な方にこそ来店していただき、光栄でございます」

奥から出てきた親方が震え声で挨拶すると、イルドウン様はつまらなそうにふん、と鼻を鳴らして「お前に命じていた衣装を出せ」とお命じにられました。

「はっ。お持ちかえりになられるのですね？」

「これに着せろ」

隣に立つお方を顎でしやくるイルドウン様に親方が「はあ……」と釈然としない顔で不承不承うなずきます。

「早くしろ」

「は、はい。ジーナ」

「（こちらでございませう）」

試着室に案内する私に気づかず、そのお方はじつとイルドウン様を睨みつけておいででした。視線を察したイルドウン様が「アセルス」と呼びかけ背中を押すと、そのお方——ああ私はようやく御名前を知ることができました——アセルス様は素早くその手を避け、「気安く触らないで」と柳眉を逆立てました。その言葉を聞いて彼女の立場をうつつら理解するのと同時に、心の奥でじんわりと広がる得体のしれない満足感がありました。……ああ、この方はイルドウン様と対等な口をお聞きになっていらつしやる。とても身分の高い方、高貴な方なのだわ……。

自分でも不思議なほど沸き立つ心にふらふらとアセルス様をご案内します。足が地

についていないようにふわふわとした気分です。

屋根裏部屋について扉を閉め、アセルス様に衣装をご覧になっていたいただきました。

「いっぱいあるんだね」

とアセルス様が感心しきりに服を撫でています。

この屋根裏部屋は私が暮らす場所でもありました。自分自身の個人的な空間にアセルス様がいらつしやるという事実には思い至り、私は瞬間的に頭が真っ白になりました。貴方のためを想い、貴方のためだけに作り上げた衣装なのです、とお伝えしたくてたまりませんでした。厚かましいと思われるのが嫌で言えませんでした。

警戒するようにきよきよと周囲に視線を向けていたアセルス様でしたが、お着替えを手伝うべく私が近寄るとはつと身を強張らせて「あなたも妖魔なの？」とお尋ねになられました。

「滅相もございませぬ！」私は驚いてぶんぶんと首を振りしました。「私はただの人間のお針子です。高貴な妖魔の方々とは違う、卑しい身分の……」

「そうなんだ」アセルス様はほつと肩の力を抜いて、それまでとはうって変わった親しげな態度で私に笑いかけてくださいました。

「自分で自分のことを卑しいだなんて言わないでよ。あなたはちゃんとここで働いているんでしょ？ それはずごいことだよ。尊敬する」

「あ、ありがたきお言葉……」

鼻の奥がつんとして思わず涙が出そうになります。なんて優しい方なのか。か。

「大げさなだなあ……」

苦笑いしながらアセルス様がお選びになられたのは真紅のグラ^ラタヌル風宮廷軍礼装^{キユーズドレ}でした。ドレスと名前がついてはおりますが婦人のための衣服ではなく、平たく申せば軍服とドレスのあいの子といったデザインになります。かつちりとした作りではありませんが、軍服にありがちなごてごてとした肩飾りやボタンなどの余計な装飾を省いたシンプルな装いになっており、肩から腰にかけての中性的なラインが特徴です。

フリルの袖にすらつとした腕を通し、襟元に黒雷紬^{クラブット}の首巻を覗かせたアセルス様はまさに凛々しい青年将校といったご様子で大変お似合いました。

「ああ、思ったより動きやすいんだね」

「関節の部分は特に手縫いである程度伸縮するように手を加えてあります」

「へえ。いいね。気に入ったよ」

「ありがとうございます！」

私は心からの感謝に深々と頭を下げました。

ああアセルス様は私を肯定して下さい。私を認め、私の努力に報いを与えて下さる。

私は自然と、アセルス様とたわいのない会話をしているだけで驚くほど満ち足りた気持ちになりました。それはきつとアセルス様が女性であったことが一因かもしれませぬ。同性であることで親しみを感じ、妖魔に対する恐怖は薄らぎます。

私はもしかしたらその時、アセルス様を僅かながらに侮つてさえたのかもしれないでございました。それまで私はこの屋根裏部屋でいつか現れる若君をずっとずっと待ち望んでおりました。美しいその姿を目にしたいとそう願いながら、しかし同時に吸血され虜化されることを恐れてもいました。ですが、アセルス様は女性でした。落胆と共にどこかほつとしていて自分に気付きます。この方はまさか私を取つて食おうなどとはしないでしょう。虜化の恐怖から逃れえた今、私は心おきなくアセルス様に跪くことができます。私に。私の意志で、私の自由に基づき、思うさまこの麗人を眺めることができる。私にとつてそれは、譬えようもないほどの快楽に思えました。



剝り抜かれた薔薇の蕾の回廊を抜けて知らない場所に案内されたかと思つたら、では剣を持って、とイルドウンがいきなり言ったのでアセルスは目を剥いた。一体何を言い出すのだろう。

「はあ？」

と首を傾げて訪ねてはみたもののイルドウンは相も変わらず無表情のまま、そつけない小ぶりのナイフを投げ渡してくる。思わず受け取ってしまったものの銀のナイフはぎらりときらめきアセルスは危なっかしい手つきで取り落としかけた。

「何これ」

「見てわからないのか？ 剣だ」

「いや、そういうことではなくて」

ためつすがめつ眺めてはみるものこれまで包丁しか握ったことのないアセルスには小さなナイフが随分と凶悪なものに思え、なるべく早いところ手放したいのだが手渡された以上そこらに捨てるわけにもいかない。

「だから、何なの」

「剣だろう」

「そうじゃなくてさ」

「この区画をしばらく進んで行けばモンスターが襲ってくる。まずはそいつらと戦って体の動かし方を学べ」

「だから、なんで！」

「戦闘訓練だからな」

「戦闘訓練！ 嫌だよ、そんなことしたくない！」

「なぜだ？」

真顔で尋ねるイルドウンにうんざりしながらもアセルスは律義に答える。

「あのね。私はただの高校生だよ。闘ったことなんてないし、これからだってするつもりはないんだ」

「それはこれまでの話だろう。今のお前はまがりなりにも妖魔の社会で暮らす身だ。剣一つ振るえないでどうする」

「だから、どうして剣で刺したり切ったりしなきゃならないの。妖魔だって、一応言葉は通じるんだし。話せば……」

そこまで言いかけ、シユライクでは妖魔を完全に化け物として捉えていたことを思い出し、また目の前のイルドウンを眺め、アセルスは言葉尻を濁した。

「……まあ、話したって分かり合えないかもしれないけどさ……。でも私はやっぱり、誰かを傷つけたりしたくないし、モンスターとだって戦いたいとは思わない。なるべく襲われないように気をつけるよ」

「ふん」

イルドウンは大理石のように白いその顔を更に青白く染め、不機嫌そうに吐き捨てる。

「馬鹿は救いようがないな」

「どういう意味？」

むっとして問い返すとイルドゥンは「こういう意味だ」と呟き、アセルスをそのまま蹴り落とした。声をあげる暇もなく回廊から転げ落ちていき、鈍い音を立てて地面にたたきつけられる

「痛たた……」

打ち付けた腰を擦りながら顔を上げるとはるか高みのイルドゥンが豆粒ほどの大きさに見えた。いきなり落とされた怒りからくっくと歯を噛みしめ、わなわなと震える拳を握って立ち上がる。

「何するんだ！ そんな高いところから落ちて怪我でもしたら……」

と言いかけ、アセルスは思わずぞつとする。建物でいえば三四階はありそうな高さ。そんな場所から落ちておいて体が少し痛いので済むというのは……。

「私の体……どうなっちゃったんだ……」

恐る恐る手のひらを眺め、肉の内側でびくびくと震える紫の血管に底知れぬ嫌悪感を覚え、アセルスは目を背ける。だが混乱する間もなく間近で獣の唸り声が聞こえ、はつと緊張が全身を駆け巡った。

イルドゥンはなんと saying していたのだったか……。そう、*“戦闘訓練”*だ。そう saying

いた……。

生暖かい吐息が首筋を撫でる。はっ、はっ、と荒い息が断続的に吐き出される。

——少しは骨のある女だと思つたが、所詮は人間か……。

イルドダウンの冷酷な声がかから落ちてくる。

「イルドダウン！」

イルドダウンは答えず、独り言を言うかのように淡々と言葉を続ける。

——殺すなら殺せ、とお前は言つた。ずいぶんと潔いことだと俺は感心さえたものだ。……しかし、それは違うのだな。あの時お前は俺と闘おうとしていたのでもなければ、俺との実力差に観念したのでもない。お前はただ投げやりに命を差し出しただけだ。お前は何もわかつてはいない。甘つたれたまま、聞こえの良い言葉をほざいてるだけだ……。

「イル……っ！」

もう一度叫んだ時には既に遅く、途方もない質量が下腹部に衝突してアセルスは紙きれのように吹っ飛ばされる。激痛に呻きながらなんとか目を開けば、身の丈の二倍ほどもある猪が押し掛かっていた。

バーゲスト。全身を苔に蔽われた赤目の猪犬。恐ろしい怪物が反り上がった牙をずぶりずぶりと腹腔に突き立てながらアセルスの腹を咀嚼する。バーゲストの体重に踏

まれた膝が砕け、蹄で打たれるたびに内臓が弾ける。

ぼたぼたと滴り落ちる唾液が溶岩のように熱い。

「う、ああっ……………」

痛みと恐怖に涙を流しながらアセルスは叫ぶ。恐慌に駆られ、舌を纏れさせながら助けを求める。

「や…………たすけ…………助けて……………」

——助ける理由がどこにある？

「あ……………」

——そうやってお前は都合が悪くなるたびに誰かに助けを求めるのか？ 平和な時は素知らぬ顔で善良ぶっておいて、手を汚すことだけは他者に押し付けるのか？ ……

俺は、闘わない者は助けない。

「ぐ…………っ」

——殺すなら殺せ、とお前は言った。ならば大人しく食われていることだ。闘う理由などお前には無いのだから。

「イ…………ル…………ダウン…………っ！」

搾り出した最後の怒声は、バーゲーストが振り下ろした片足によってあっけなく途切れた。アセルスの右顔面が落下した果実のように破裂する。



凌辱されていた。

バーゲストは貪るようにアセルスの肉を食み、獲物を弄ぶように蹴り転がす。もはや痛みを感じることもさえできず、ただ体の中に浸みこんでいくけどものの涎だけが無性に痒く感じられる。

声が届く。耳に凍った針を差し込まれるように、イルドワンの残酷な声が天から響く。

——オルロワージュの血を享けたお前の命を、数多くの者が狙う。妖魔は更なる力を得るためにお前を襲う。人間は妖魔の力を研究するためにお前を捕らえようとし、嫉妬や妬みからオルロワージュの愛し子を損なおうと考えるものもいるだろう。たとえお前が妖魔でなかったとしても、何の理由もなくお前を殺したがる者がこの世には呆れるほどいる。

獣の牙が乙女の柔肌を齧る。血走った眼球がぎよろりとアセルスを見下ろして嗤う。

——殺されかける度にお前は微笑んで平和を説くのか。話し合い、分かりあい、血を流すことなく握手を交わすことができるかと本気で考えているのか……？

「……………」

不意に蠢いた乙女の腕が稲妻の速度でナイフを獣の眼球に突き刺した。

けたたましい鳴き声をあげて飛び退いたバーゲストには……と笑いかけ、アセルスはよろよろと立ち上がる。

「ああ……………」アセルスは鬱陶しげに頭を振って前髪を払う。「イルドウン、あんたみたいなやつは大嫌いだ……………」

興奮と緊張に体中が燃え上がるほど熱くなる。砕けた膝はまだ再生しきっておらず、がくがくと震えながらアセルスは煌々と眼を光らせた。止めどなく血を流しながらも倒れることを懸命に拒む。

「…………確かに私は馬鹿かもしれない。世間知らずかもしれない。…………でもね、ひとつ勘違いしているみたいだからそれだけは否定させてもらうよ。私はそこまで素直な人間じゃない。何もかもはいそうですかってわけにはいかないんだ…………。ああ、そうさ……………」

アセルスは吠えた。

「闘う理由が、私にはあるな……………」

——そうか。ならどうする。

よたよたとたたらを踏んでいたバーゲストは態勢を立て直すところらの様子を窺うように周囲を回り始める。餌ではなく明確な敵としてこちらをみなし、じりじりと距離を縮める。

——剣を手放したのは失敗だったな。迂闊としか言いようがない……。

「やかましいー！」

頭上のイルドウンを怒鳴りつけ、目の前のバーゲストを睨みつける。腹立たしいがイルドウンの言うことはまさしくその通り、徒手空拳で挑むにはこの怪物はいささか大きすぎる。

どうする、と表情に迷いを浮かべた瞬間バーゲストが猛烈な勢いで突進してくる。慌てて避けはしたものの牙が左手を掠め鈍い音をたてて骨が砕けた。ぐ、と呻き声を飲み込み振り返れば遅い足で大地を蹴りつけ獣が再び突撃を繰り返す。覚悟を決め決死の思いで眼球に突き刺さったナイフをすれ違いざまに取りに行く——が、ナイフに集中しすぎたあまり真正面から体当たりを食らいアセルスは毬のように吹っ飛んでいく。

オルロワージュの血のおかげだろうか、体は再生を続けている。しかし痛みがすぐさま消えるわけではない。唇の端から血を零し「つ、うっ……！」と呻いてアセルスは硬くナイフを握りしめた右手に目を向ける。

「でも、これは取れた……!」

ぎり、と砕けんばかりに歯を食いしばり、掠れた声を漏らして——そして、強張った両手でもって必死にちっぽけなナイフを握りしめ、前かがみの無様な格好で武器を構えた。

息を吸う。

前方でぐるぐると低い鳴き声をあげるバーゲストの巨体に比べると、掌のナイフはいかにも頼りない。こんなもので一体何ができるといふのか——吐き気のするような状態にそれでもなお爛々と眼に闘志を燃やし、アセルスはじり、と足を前に進める。

それでも何とかするしかない。

自分自身の力で。

たった一人で。

づ、と喉の奥で何かが弾けた音がした。アセルスは駈け出していく。牙を剥きだしてバーゲストが向かってくる。

覚悟を決めよう、とアセルスは思う。涙を流しても救われないのなら泣くべきではないし、弱音を吐いたからと言って人間に戻るわけでもない。

わかっているのは——ああ、よくよくと考えてみればたいしてありはしない。

この体には紫の血が流れている。オルロワージュの血。自分を生かしているのは妖

魔の血だ。砕けた筈の体が再生していく。

だからアセルスは真正面から怪物を受け止める。三度目の突貫。牙が内臓を突き破り、ぼとぼと体の中身が零れ落ちていく。だがそれだけだ。これまでのように飛ばされたりはしない。気を失いもしない。痛みに滲む視界が明滅する中で、アセルスの両手がナイフをバーゲストの頭に突き立てている。

「食えるものなら、食ってみろ……！」

口に出した瞬間にバーゲストの牙が胎の中に食い込み、アセルスは泣きだしそうに顔を歪め身をよじる。だが剣を放しはしない。ぎりぎり鈍重な力をこめ、少しずつ剣を獣の頭蓋に打ち込んでいく。

乙女のか細い喉が震える。その唇から漏れ出す言葉は死を望む邪悪な言葉に他ならない。血に塗れた唇でただ短く死ねと呟き、アセルスはナイフで肉という肉を削り取っていく。

バーゲストは上体をぶると震わせたかと思うとアセルスの体を銜えたまま大きく振り回す。脇腹が引き千切れ、ぼろ雑巾のようにアセルスが転がる。ごぼ、と大量の血反吐を吐き散らしながらすぐさま立ち上がりアセルスがナイフを構える。

襲いかかるバーゲストへ向けてナイフを振り下ろす。牙にあたったナイフが乾いた音をたてて折れる。

「折れた……!」

動揺する間もなくバーゲストに食いつかれアセルスは倒れ込んだ。迷っている暇はなかった。ナイフで穿ったその穴に手を突き入れ、力任せに握りつぶした。ぱきりと軽い音が鳴った。指が折れたのかも知れなかった。だが知るものか、構うものか。乙女の織手を闇雲に打ち込み、爪という爪で肉を穿る。血管を引き千切り、頭蓋を打ち砕き、脳髓に手を突っ込んで闇雲に掻きまわす。

目の前が真っ赤になった。頭の中がみりみりと軋む。今にも張り裂けそうに胸が鼓動している。

荒い息だけがどこまでもしつこく響いていた。自分のものか獣のものかも定かではなく、ただ生きるために抗う呼吸だけが耳を打ちつけた。



……こうして始まった戦闘訓練を、アセルスは嫌々ながらも続けざるを得なかった。たとえばどれだけ拒んだとしてもイルドゥンは無理にでもアセルスを引き立て、獣の蠢く巢へと突き落とす。その度に傷を負い、怪我を重ね、否が応でも戦わされる。

何度も何度も闘っているうちに、どうすれば痛い思いをせずに勝つことができるか、

いかに効率よく相手を御することができると考えるようになる。イルドゥンは毎回小ぶりのボーイーナイフしか渡してはくれないが、小型のモンスターならまだしもバーゲストほどの大きさにもなれば流石に力不足を感じる。もっと大きな……そう、ナイフではなく「劍」があればより優位に戦えるのではないか。

毎日のように瀕死の傷を受け、死んだように眠りにつく。朝起きてああ今日もまた血を吐いて苦しまねばならないのかと考えると暗澹とした気持ちになる。嫌になつて逃げ出そうとしたこともあつたが針の城から抜け出そうと試みる度にイルドゥンが現れ、「懲りないやつだな」と罰代わりに巨人をけしかけられるため、うなだれながらもとぼとぼと訓練所まででかけるのが日課となつていた。

イルドゥンとの訓練さえなければ針の城での暮らしはむしろ快適ですらある。ベッドから身を起こすと侍女が既に控えており、朝食の支度から着替えまでを頼まなくても行つてくれる。世話されることに慣れていないアセルスは初め「自分でやりますよ」と伝えはしたのだが、ミルフアークさんと呼ばれる侍女たちに「それでは私たちが叱られますから」と申し訳なきように謝られては何も言えない。私はそのへんにいる普通の女の子なのに、なんだか悪いなあ、などと思ひながら薔薇の香りのするオイルで肌を磨かれ、髪に櫛を通される。

食事についてもそれは同様で、アセルスにとつては過剰なもてなしを受けた。人間の

ように食事を摂る必要のない妖魔の社会にあつて、それこそ初めの日は果物や酒しか供されなかつたものの、侍女たちはアセルスが求めさえすれば大抵のものは用意してくれた。

「オルロワージュ様より、アセルス様の望むものを、と仰せつかつております。何か召し上がりたいものはございますか？」

「え……ああ、うん……じゃあ、肉じゃがが食べたいです」

そう言うともイルファークさんたちは困つた顔をして首を傾げ、まったく同じ顔を突き合わせて「そこそと話し合おう。」

「ニク……ジャガ、とは何かしら……？」

「ニクは、肉でしょう。ジャガは……きつと地方の名前ではないかしら。ジャガという町で作られるような、ジャガ風の、そういう意味では？」

「なるほど……」

「とりあえず、書庫でレシピ集をさらってみましようか」

「そうですね。頑張りましょう！」

「頑張りましょう！」

という具合でその日のうちには肉じゃがが出来ていた。あまり無理はしてほしくないのだが「針の城の沽券に係わりますから」とイルファークさんたちは断固としてアセ

ルスの希望に応える続ける。

針の城の城主、オルロワージュが自分のことを気にかけてくれている、ということとは流石にわかった。来ている服も、食事も、みな無償で与えられている。針の城に限定されるとはいえ、何不自由なく生活をさせようという考えはうつつすらと感じ取れる。

だからこそ、とすべきか。どうしようもなく嫌で嫌でたまらないのは、やはりイルドウンとのことなのだった。

少ずつモンスター殺しに慣れていく自分が嫌だった。戦っている時の自分が、まるで自分ではないようで嫌だった。

命の危機に脅かされたら誰だつてそれまでの自分をかなぐり捨てて一匹の獣同然になり下がってしまうものかもしれない。けれども、バーゲストに襲われて怯えていた自分と、そのあと立ち向かい眼にナイフを突き立てた自分は本当に同じものなのだろうか。唇から零れた「死ぬ」というあの言葉が至極自然に感じられたのは何故だろう。

「自分が何なのか……わからないよ」

本当は心配することなどないのかもしれない。追い詰められれば鼠だつて牙を剥く。死にかけた結果、目覚めた生存本能が体を突き動かした。アセルスは自分で思っているよりも勇敢な女だった。そういうことにおけばいいのだろうか。

それとも真実は残酷で、一度死んだアセルスは人間だった頃とは別人で、妖魔の血が

流れるこの体この心は、妖魔と同じ怪物の精神を宿しているのだろうか。

「私は変わっていく。望むと望まないとに関わらず……」

独り言をつぶやきながら、アセルスは城を歩き回る。道すがらすれ違うのはミルフアークさんばかりで、侍女たちはアセルスに気がつくと静かに微笑んで「こんにちは」と頭を下げる。こんにちは、と挨拶を返して、アセルスも会釈する。どのミルフアークさんも同じ顔をし、手に小さな如雨露を提げ、咲き誇る薔薇に水をあげている。同じ顔に同じ薔薇、いい加減に飽き飽きしていたアセルスは、何か違うものはないのかと周囲に視線を散らした。午後の戦闘訓練まではまだ時間がある。まだ言ったことのない区画へ足を延ばしてみよう——そう考え、薔薇以外の何かを求めて四半時ほど散策を続けた結果、ようやく見つけたのは細長い葉をした雑草だった。城の隅の隅の隅に位置するこじんまりとした庭で草かあ、と落胆に肩を下ろし項垂れていると、しゃがみこんで水をやっていた女性がふと顔をあげて「こんにちは」と言った。日光が当たるわけでもない城の中にも関わらず日差し除けのつば広帽を被ったその表情はよく見えない。だが園芸用の腕蔽いをつけ、帽子の隙間から虫除けネットを垂らしたその姿は他の侍女と同じものだったためにこの時はそこまで注意を払わなかった。だからアセルスは「こんにちは」と無造作に答え、ぼんやりとした調子で「雑草に水をあげてどうするんですか？」と問いを投げかけた。すると女性は悪意のない笑い声を幽かにあげる。

「これは風知草というのです」

「あ、そうなんですか」

へえ、と頷いて女性の隣に腰を下ろし、アセルスはフーチ草というらしいその草を観察する。ススキに似た細長い葉が幾つも伸びている。葉の裏が表に比べれば幾分つやつやしているのが特徴といえれば特徴なのかもしれないが、アセルスの目にはどう見ても雑草としか写らなかつた。

「フーチ草というのはどういう意味なんですか？」

「風を知らせる草、という意味です」

「ああ、そういう……」

「細長い葉を風になびかせ、さらさらと静かな音を立てる草。大気の流れに身を任せ、ささやかに震えることで風の訪れを知らせる草……。眺めてみれば、案外に風情を感じる草ですよ」

「植物にお詳しいんですね」

としきりに感心し、覗き込むように視線を向けてようやく、アセルスは隣の女性がとても美しい顔立ちをしていることに気づいたのだった。優しく澄んだ青の瞳に、栗色の髪を豊かに波打たせ、淑女然とした淡麗な顔。楚々とした唇に穏やかな笑みを浮かべた彼女は旅人を導く木陰の精にも似て、落ち着いた美を湛えている。

「あ……」

不意に自分が恥ずかしくなつてアセルスは俯いた。あからさまに無知を曝け出していた数分前の自分が憎い。

「どうしたのですか？」

「いや、なんだか……ものを知らなくて恥ずかしいなつて、そんな気持ちになつて……」
「そんなことはお氣になさらないでください。アセルス様が知らないことを私が知っていることもあれば、私が知らないことをアセルス様が知っていることもありましよう？」

「そう言つてもらえると、助かります。……それと、あなたは私のことを知っているんですか？」

「アセルス様のことはこの針の城でも噂でもちきりになつておりますよ。オルロワージュ様が人間に血を与えたと」

「あの、あなたは……」

侍女の方ですか、と尋ねかけ、違つた場合は非常に失礼にあたることに氣付いてアセルスは口を噤む。確かめたわけではないがこの城の侍女はみな同じ顔をしているようであるし、どうもこの女性はその存在とは違つて見える。

「私は白薔薇と言います」と女性ははにかみながら名乗つた。

「白薔薇。すごい名前ですね」

「そ……そうでしょうか……」

上品なしぐさで頬に手を当て困惑する白薔薇にアセルスはばつが悪そうに髪の毛をくしやと掻き雑ぜる。

「あ……ごめんなさい。人の名前をどうこう言うだなんて、本当に私はばかだ。どうかしてる……」

「アセルス様がお暮しになっていた場所では、こういった名前の方はいらつしやらないのですか？」

「そうですね……。花の名前で言うなら、ローズとか、アイリス、マーガレットというのならあります。でも白とか赤とか、色までついて白薔薇という名前はなかなか無いですね」

「そうですか……」

少し寂しそうに白薔薇が目を伏せたのでアセルスは慌てて「だけど、とても綺麗な名前だと思えますよ」と付け加えた。

「ありがとうございます」と白薔薇は静かに答えた。そつと顔を綻ばせた白薔薇の儂げな微笑み、見る者すべてにこの人を守りたいと思わせるようなその控え目な感謝にアセルスの胸は束の間熱くなり、会話を忘れてじつと見蕩れてしまう。

「アセルス様？」

「あ、ご、ごめんなさい」

どきまぎとうろたえるアセルスに白薔薇はふふふ、と優しい笑みを浮かべ、アセルスの額をちよんと、と人差指で突いた。格別痛いというわけでもなかったが、突かれたところを擦りながら照れる振りをしてしていると自分でも不思議なほど満たされた気持ちになった。



人は一人でこの世に生まれ、いつか己の孤独に気づく。人は自らの身体から逃れることはできず心からも視界からも離れることはできない。手を伸ばして感じたはずの体温は束の間の錯覚にすぎず、口から零れ落ちた言語は瞬く間に物語へと変質していく。他者に伝えるため、遠い場所にこの思いを伝えんがために生み出したはずの言葉は、唇から遠ざかれれば遠ざかるほどその意味を失っていく。ゆえ、真に純粹なる言葉、混じりけない意志というものは、或いは唇の中、妖しく濡れた舌尖の上にしか存在しないのかもしれない。

人は孤独で、いかなる時もわかりあえず、どのような手段をとろうとも他者と一体に

なることはできない。たとえ相手を食らったとしても、融合したとしても、それは食らう前、融合前の相手とは違うものだから。

物語はそして「それでも」と言い、また「だからこそ」と言う。

けして結ばれず繋がることのない個々の生命はしかしそれゆえ自らの虚ろを嘆き、徒労に終わるはずの救済を求めてしまう。他者との接合を、孤独の補填を望んでしまう。

要するに人は恋をする。そういう風にできている。

人は支配を望み、他者を自分のものにしようと無意識に願うものだ。もし違いがあるとするならば、それは支配する側に回るか支配される側に回るかという差異に過ぎない。たとえその恋が自らが永遠に関わらないことを望むもの、ただひたすらに相手の幸福を祈り、自らはひっそりと身を引くことを覚悟したものであったとしても、ただ望み祈る意志がある以上、それはあくまでも自分に都合が良いように世界を支配する行為に他ならない。

人は人の弱さから人を求める。半妖となったアセルスも例外ではない。

白薔薇はどんな時であっても優しくしてくれる。妖魔の社会に戸惑うアセルスを慈しみ、肯定し、導いてくれる。獣が餌をくれる主人に懐いて行くように、あるいはおぼこ娘が女衞の甘い言葉に容易くかどわかされるようにアセルスは彼女に惹かれていく。

思えばアセルスの人生は望まないことばかりが常であった。身の上のことはもちろ

んであるし、イルドウンに強いられる戦闘訓練にしてもそうだ。

モンスターと血みどろの死闘を繰り広げて愉しむような精神性を乙女は備えてはいない。けれども歯向かわなくては食われるだけで、けだものの牙が肉をよじる感触やいちいち体を削ぎ落とされる激痛はどうしようもなく厭わしい。仕方なく渋々と顔をあげ手渡されたナイフひとつを腰だめに構えて怪物どもと取っ組みあっているうちに激情と興奮とが平静の精神を上書きして気がつけば自分自身もまた獣同然に狂ってしまった。

白薔薇と会話をしている時、自分は何の心配もなく自分のまま、植物や食事やらの平和な話題を口にしていく。女の子らしい、脆弱で繊細なことを考えている。

だが戦っている時はそうはいかない。鉤爪に腹腔を掻きまわされて絶叫をあげ、巨大猿に顔面を握り潰されて目の前が真っ暗になる時、腹の底で沸々とわき立つ怨念めいた衝動は花の名前を口にはしない。その衝動はただ一言こう呟くのだ。死ね、と。

死ね、とアセルスは言う。憎々しげに目を吊り上げ、奇声と共にナイフを振り下ろして呪いを投げつける。死ね。死ね。死んでしまえ。それでもしなければ恐怖に怯えた心はたちまちに体を凍りつかせてしまう。縋りつくべき殺意を後生大事に抱えてアセルスは獣殺しに精を出す。

時が経つ。アセルスは少しだけ戦いに慣れる。毎日のようにどうすればモンスター

を上手く殺せるか自分が傷つかないですむかを考える。もしシユライクにいた頃の自分が今をみれば、きつと邪悪を感じ狂人とさえ看做すかもしれない。戦うことに慣れ、流された血の量だけふてぶてしくなりながら、一方でアセルスは時の流れに変わっていく自らを悲しむ。

——本当は戦いたくなんかないんだ。その筈なんだ。……でも、戦っているうちにふと自分で自分を忘れて、ひたすらに相手を殺すことだけに集中していることがある。時々自分は狂っているんじゃないかって思う。初めてバーゲストと戦った時もそうだった。襲われて、怖くなつて、泣き叫んでいたはずなのに、呆然としてイルドワンの冷たい言葉を聞いているうちにかつと目の前が熱くなつて、気がついたら、何が何でもこいつを殺してやろう、そんな気分になつていた。

自分が何なのか、わからないよ。本当は私はいくつだったのかな。それとも、オルロワージュの血が私にそうさせているのかな。

——血が混じったことで人格が変わるといふ話は聞いたことがあります。オルロワージュ様の血ともなれば、もしかしたらアセルス様の精神をより強靱に残酷に変えてしまうことがあるかもしれません。

——そう……なのかな。もしそうだとしたら、少しは救われる。私のせいじゃない。何もかも悪いのはオルロワージュの血のせいで、私は全然邪悪なんかじゃあないんだと

思えば気が楽になる。……でもそれは、オルロワージュに責任を押し付けているだけだし、根本的には何の解決にもならないんだ……。

——アセルス様は邪悪なんかではありませんわ。あなたは優しい人です。

何の根拠もなくそう言っただけで白薔薇がアセルスの体を抱く。アセルスの両目からぼろぼろと涙が零れ、体が震える。

ある日アセルスは考えた。戦闘訓練をもっと短く済ませることができたなら白薔薇ともずつと長くいられるのではないか。もっと自分が強くなれば、自分の望むものを手に入れられるのではないか。

力が欲しいとアセルスと思う。もともと考えていたことではあった。傷つきたくないのなら強くなるしかない。そのためにはナイフでは駄目だ。自分に必要なのは剣なのだ。

白薔薇にそのことを相談してみると根っここの町のゴサルスの店を紹介された。普通の武器や防具はフアシナトールには置いていない。あるとすれば、魔的な道具を扱うゴサルスの店にしかないだろうと。

ゴサルスの店を訪い、剣が欲しいと告げると幻魔というひと振りの剣を紹介された。

「どんな剣なの？」

「なんでも斬れる剣だ。……だからといって上級妖魔が斬ろうなどは考えるなよ。お

前ごときには無理だ」

「いや、そんなつもりはないけど……。いくら？」

「人間の金はいらん。お前の命をくれ。幻魔は命三つだ」

「はあ？ 命は誰にだつて一つでしょう。そんなものあげられないよ」

そう言うところ、ゴサルスは呆れた様子で溜息をついた。

「お前は馬鹿か？ そんなことはわかつてる。命、というのは比喩だ。比喩の意味はわかるか？ 人間の小娘？」

「そのくらいわかるよ」

「命三つというのはだな、要するにお前のLPを3つ払えということだ」

「だからそのLPがわからないんだけど」

「LPも知らんのか。いくら人間とはいえ世間知らずにも程があるだろう」

「はいはい。わかったから、そのLPつてのを教えてくれるかな？」

「仕方がないな。一度しか言わんからよく聞け」

と言つてゴサルスが語りだしたのは以下のような神話だった。

かつて、この世界は一つの塔であった。星リージョンと呼ばれるものはこの世にはなく、ただ塔の中の各階層に多種多様な世界へと続く扉があった。

なぜ、そんなものができたのだろう。それは一柱の傲慢な神が仕組んだことだった。

平和な世界に飽き飽きした神は、数多の物語を楽しむべく様々な世界を作り出し、またたくさんの怪物や悪魔を生み出して送り込んだ。

「その塔は楽園へと通じている」。言い伝えを信じて塔に挑んだ冒険者たちの苦しみ足掻く姿を見て神は楽しんだ。

しかしある時一人の英雄が現れ、とうとう塔の最上階まで上り詰めることに成功する。神の圧倒的な力にも屈することなく、英雄は手にした刃で神をばらばらにしたという。

塔は崩壊し、飛び散った無数の世界が星となつて銀河にちらばり星となる。リージョン

英雄に敗北した神は己の思い上がりを恥じ、運命を弄ぶ代わりに冒険者たちをそつと見守ることを選んだ。ばらばらになつた体にそれぞれ別の命を与え、駅員として生まれ変わった元『神』は星間船リージョンシップを作り上げ、乗車賃の代わりに旅人の物語を求めるようになった。

「LPというのはその神が旅人に与える加護の一種だ。旅人や冒険者がその身に抱える物語に応じて神の恩恵が授けられ、たとえ致命的な傷を受けたとしても死から免れうる。冒険をすることのない一般人やたいいのモンスターはおおむねLP1で、一度で確実に死ぬ。……そうだな、お前はLP7だ」

「多いね」

「そうでもない。どちらかといえば少ないほうだ。……それで、どうする？　命を払うのか、払わないのか？」

「そうだね……やめとく。力は欲しいけど……なんだかよくわからないものをほいほい差し出すのは嫌だな。他に剣はないの？　命以外で私に払えるような普通の剣は？」

「そんなものはない。買わんのならとつとと帰れ」

「じゃあ、そうするよ。なんだ、白薔薇に紹介されてきたはいいけど、案外品揃えがなあ……」

「……待て」

「なに」

「今、白薔薇と言ったか？　それは白薔薇姫のことか？」

「姫かどうかはわからないけど、お姫様みたいに奇麗な人だよ」

「……はやくそれを言え。手ぶらでお前を返しては白薔薇姫のお顔を汚すことになるだろうが」

「白薔薇はそんなこと気にする人じゃないよ。たぶん」

「そういう問題じゃあない。……まったく、実に忌々しい……。その隅っこに転がっている剣があるだろう。ただでくれてやる。もっていけ」

「ごめん。気持はありがたいんだけど、ただでもらうことはできない。施しを受けるわ

けにはいけないんだ。少しだけなら持ち合わせもあるんだけど……やっぱり、お金を払わせてよ」

「金はいらんと言つたらう。人の金は欲望が染みついていて汚いからな。おれはあまり触りたくないのだ。……いいからその劍を持つて行け。白薔薇姫にはゴサルスがとても良くしてくれたとお伝えしろよ！」

「だからそれはできないよ。ただでなんてもらえない」

「お前もわからんやつだな！」

「お金が駄目なら、働かせてよ。この工房、結構汚いでしよう。掃除と店番くらいなら私にもできるから」

「お前、ものすごく傲慢なやつだな……。まあいい……。それで納得するなら、もうそれでいいしどうでもいい」

「この劍の名前は？」

「名前などない。ただの鉄の劍だ」

「そう。ありがとう」



「いらつしやいませ」

「……なにをやっているんだ、お前は？」

店番をしているアセルスを見て、うんざりしたようにイルドゥンは言った。

「いつまでたつても訓練に来ないからどこへ逃げたのかと思えば……どこまで馬鹿なんだ」

「ごめんね、イルドゥン。悪いけど、いま仕事だから」

「何が仕事なんだ」工房の隅からゴザルスがぼやいた。「無銭飲食で皿洗いさせられている奴でももうちよつとしおらしくしているぞ」

「お前に必要なのは仕事ではない。訓練だ。行くぞアセルス」

「いや。今はいけない」

「何故だ」

「前々から思っていたけど、イルドゥン。いつもやっている戦闘訓練はあまり訓練にはなっていない気がするんだ」

「何だと？」

「オルロワージュがあなたに命じたのは『剣』の訓練でしょう。でもいつもあなたに渡されるのはちつぽけなボーイーナイフだし。あんなものを何回使っても剣の練習にはならないと思うんだ。こうして私が店番をしているのはゴザルスに剣を譲ってもらう

ため。まったく訓練に無関係というわけじゃないよ」

「……」

イルドウンは胡乱気な顔でアセルスを睨んでいたが、やがて真顔で言った。

「一理あるな」

「でしよう?」

「だがやはり仕事は必要あるまい。ゴサルス、剣を渡せ」

「は、はい。ただいま」

「駄目だよイルドウン。私が私の力で手に入れないと意味がないよ」

「……まあ、それはそうだが」

不満気にイルドウンはゴサルスを睨みつけ、ゴサルスは弱り切ったようにか細いため息をつく。

素知らぬ顔で店番をするアセルスと重苦しい雰囲気で仏頂面を崩さないイルドウン。ゴサルスにとっての受難は小一時間続いた。

第十一幕 白薔薇姫の優しい悪意

いつか、人として暮らしていた時代に誰かに尋ねられたことがあった。この世で最も楽しいことは何か。

私はこう答えた。

間近で馬鹿を眺めていることだと。

馬鹿といつても智慧の足りない愚か者は駄目よ。性根の悪い軟弱者も失格。

馬鹿というのは純粹な事よ。まっすぐで、向こう見ずで、そして何よりも無垢であることなの。

オルロワージュと初めて出会ったとき、なんて弱々しい男だろうかと思つた。

肉体や戦いの強さを言っているのではない。自分の望んだものを望んだその時に手に入れられる決定的な強さをオルロワージュは持つていなかった。触れただけであらゆる妖魔を薙ぎ払いながらしかしその言葉を誰一人分かち合うことも出来ず、時の流れの悠久に全てを浚われて途方に暮れているように見えた。

オルロワージュはよく海を眺めている。自分の足跡が波に引きずり込まれ、海の中に

沈んでいく。流動する液体の中に溶けた足跡は形を失い海になってしまふ。たとえ何を孕んでいようと海の中に入り込んでしまったものを取り出すことはできない。その形を再現することはできない。

「だから——」と私が言うと、

「それでも——」とオルロワージュは答えた。

「海を見つめて何になりますか？ 何かを失った感触にささやかな涙を流すことさえあなたはご自身をお許しにならない。なぜですか？」

「なぜであろうな」オルロワージュは茫洋と視線を水平線に向けた。「理由など、わからぬ。流した涙でさえいつかは海に滲みて形を失ってしまうことを知っているからか……それとも、単に悲しいと感じていないからなのか……。どちらにせよ、ああ悲しいと嘆くだけ嘆いて、それで何もかも終わりというわけにもいくまい。依然として時は続く」

「私はこれまで、あなたのような愚か者を何度も目にしてきました」
「ほう」

「身の丈を弁えず……いいえ、己の領分を知っていてそれでもなお、この世の理に挑まんとする挑戦者。何かを奪われ、傷つき、苦しみながら、どうしても諦めきれない何かに突き動かされて前へ前へと進み続ける意地っ張り。彼らの多くはみな、絶望と失意のう

ちに死にました。だってそれは当たり前のことでしょう？ 明日雨が降るのが嫌だからといって雨を殺すことができますか？ 太陽ではなく、天に虫や獣を登らせることができますか？ 何度諫めても夢見る馬鹿者たちを止まることを知らず、嬉々として死地に飛び込んでいくのです。私はそれをずっと眺めてきました。何年も何十年も、ただそれのみを眺め、語り続けてきたのです。——オルロワージュ様。あなたのお隣にいさせて頂いてもよろしいでしょうか？ あなたの命の物語を、忘却と時間とそして恋と愛との物語を、心の書物に記すことをお許しになって下さいますか？ ——ああ、私は思います。この世の全てを忘れ行く煉獄の日々を生き、あなたが淡々と敗北し続けていく姿を私はいつか見るでしょう。けれども、記憶はけして戻らず、失ったものは取り戻せない」と言ったところできつとあなたは頷かない。なればなおさらのこと、私はあなたを見届けましょう。その隣でああなたの苦悩を嘔みしめることを密かな悦びとし、あなたとあなたの魂が泥にまみれ墜落したその有様を、いつか私は語りましょう」

「死神のように優しい女だな、白薔薇」

そう言つて目を細めるとオルロワージュは私の手を取りそつと唇へと運んだ。こうして私は姫となった。

それから私はオルロワージュが多くのを失っていくのをずっと眺めていた。9人もこの寵姫を侍らせておきながら、しかし彼は常に失い続けているのだった。9

「愛している」と彼は言う。無数の乙女がその言葉に相貌を崩し、妖魔の口づけを首に受ける。愛しています。可憐な唇からこぼれたその返事はいつか機械仕掛けの音色となつて呪いのように耳を打つ。

時には彼の愛を拒む者もいた。純真であるがゆえに吸血を拒み、ただオルロワージュに寄り添うことだけを願う者もいた。そうして儂い乙女たちはみな、束の間の瞬きの内に土くれへと還つていた。

その度にオルロワージュはひどく打ちのめされ、絶望し、あの魅力的な瞳を僅かに陰らせて海を見つめるのだった。

「ほら、もう、そろそろ死にたくなつてきたのではありませんか？」

ある日私は耳元でそつと囁いてみた。

「あなたがどれほど時間と死闘を繰り広げようと、手に入れたものはみな瞬く間に滅び去つていくものですよ。あなたが虜にした乙女たちをご覧なさい。阿呆のように来る日も来る日も“愛している”と語るばかりではありませんか。愛というものは何と美しく、残酷なものでしょう。——乙女たちの屍山血河を踏み越えて一人行くあなたの旅路に、果たして何の救いがありますでしょうか」

「いいや、まだだ」

オルロワージュは断固とした口調で首を振る。

「余は何かを忘れた。忘れるということは裏切りだ。何百年何千年と生きるうちに愛する心を忘れ愛する人を忘れ愛した記憶さえも忘れた。余は誰かを裏切り続けている。いまさらやめることはできぬ」

迷いのないその表情を見て、私は思わず微笑みながらオルロワージュに寄り添った。

「そうですか」

「……なぜ、それほど嬉しそうな顔をする？」

「あなたが苦しんでいるのが嬉しいのです。あなたの苦しみがこれからも続くのが嬉しいのです」

「これはまた恐ろしいことを言う姫もあつたものだ。……しかし不思議よな、そなたも言う通り、虜化の洗礼を受けたものは思考の一部を侵される。余の苦しみを楽しむようにはならないはずだが」

「いいえ、いいえ、何も不思議なことなどございませぬ。あなたの虜となつた者が課せられるはただ一点。主を一心に愛し続けるということのみ。それ以外の全ては愛の副産物に過ぎないのです。私はあなたを苦しめているのでもなければ、苦しめたいと思つているのでもありません。ただあなたの苦しみをひたひたと寄せる波のように眺めていたいだけですから、それは愛でしょう？」

「愛……」

「あなたは永遠の愛を求めていらつしやる。……ですが、その愛をきちんと定義されたことがあるのですか？ あなたの求める愛は一体どのような形をしているものなのか、あなたにはわかっておられるのですか？

「ふむ」オルロワージュは口を閉じ、目を細めた。「なるほど……。確かに余は失念していたのかもしれない。愛。……そうか。愛……。白薔薇姫、そなたと話すことができてよかった」

「それはようございしました」

それからしばらくして第一の寵姫、零姫が針の城から逃亡するという事件が起きた。最愛の寵姫を失いさぞ落胆していることだろうとオルロワージュの元へ向かうと、意外なことにこの孤独な妖魔の君は珍しく猛々しい笑みを浮かべているのだった。

「零姫にはしてやられたものだ。まさか余が逆に吸血される日が来るとはな」

「その割には随分と楽しそうなご様子」

「残念か、白薔薇？」

オルロワージュは私の腰をぐいと抱き寄せ、首筋にそつと唇を落とした。ああ、と弱々しく吐息をついてみせ、私は彼の顎を撫でる。

「姫を失って打ちひしがれている余を見せてやれず残念だ。しかし、なあ、白薔薇姫よ。余は生まれて初めて希望に震えているのかもしれない。なぜなら余は零姫を失った。だ

がそれはもう一度彼女を支配できるということなのだ。余を愛してはいない零姫。余と出会う前の零姫。……あの、自由で、邪悪で、そして何よりも美しい零姫。何かを失うということにこれほどまでの可能性を感じたことはない」

「支配……。それが、あなたの望みですか？」

「ああ、そうだ。余は何も失わぬ。失ったとしても、失わぬのだ。……そうだな、手始めに吸血薔薇をそなたたちの棺に這わせることとしよう。二度と自由に出歩くことができぬよう、余から逃れられるとは夢にも思わぬようにな」

「ふ、ふ……」

「なにかおかしいか、白薔薇姫よ」

「なぜと言つて、オルロワージュ様。あなたは矛盾されていらつしやる。失つて失わぬとそう言いながら寵姫たちを縛るはまさに笑止千万。本当に失わないと信じているのなら持てるものの全てをお捨てになればよろしいのに」

「そうか……余は矛盾しているか」

「はい」

「余は狂っているのか」

「はい」

「そうか……」

「それで良いのですオルロワージュ様。矛盾している御身を愛し、狂っている御身を愛せば良いのです。その心のままに迷うことなく、戦って、戦って、戦って——、そしていつか心が滅びたら、子供みたいに涙を零して死んでしまえばよいのです」

「いつの世も女というものは不可思議な生き物だな……。面白いことを言う。なるほど白薔薇姫、もちろんそなたの言う通りたといえ狂っていようとも余は余の心のままに生きることを止める気はない。……だが、そうだったな、そなたの望みはこの隣で余を観察していることだったか。そうであれば吸血薔薇で自由を縛るのはいささか不都合が過ぎるやもしれぬ。そなたにだけは吸血薔薇の戒めを解く方法を教えておこう」

「格別のご配慮、ありがとうございます」

私は深々と頭を下げ、オルロワージュと共にしばらく海を見つめた。

また長い時が過ぎた。オルロワージュは零姫を捕らえるべくよその星に向向いては狩りを繰り返しているようだったが、ついに零姫が捕まったという話が届くことはなかった。

私は時々考えた。——実際、オルロワージュに本気で零姫を捕縛しようという意思があるのだろうか？ 口では何と言おうとも無意識に手を抜いているということもあるのではないか。

オルロワージュは失うことをことさらに恐れる。また来る日の零姫が彼の手に落ちたなら、いつか再び裏切らないとも限らない。だとすれば永遠に狩りを続けた方が、と妖魔の君が考えたとしてもおかしくはない。

妖煌帝オルロワージュはその美しさや強さとは裏腹にひどく臆病な男だ。孤独で、哀れで、そして愚かな男だ。

「零姫は捕まりましたか？」

「いいや、まだだ。だが、きつと捕らえてみせよう」

「そうですか……」

「ああ、そうだ。白薔薇姫。余は妖魔の君オルロワージュ。望む物全てを手に入れ、この世の全てを支配する男なのだ……！」

さようでございますかと答える代りに腹の底で私は笑った。こうして永遠という名のお芝居を繰り広げながら、いつしか求めるものに手を伸ばすことさえもできなくなつたオルロワージュ。ガラスケースの中のドーナツを眺めながら「欲しい」とも言えずに指を咥えて甘つたれている少年のように、弱く未熟なオルロワージュ。私はこの男を愛している。

愚か者を見ているのはいつも楽しい。何十年何百年とオルロワージュの傍を生き、「まだか」「まだだ」とうすら寒い台詞を何度となく繰り返して幾年月。足掻き続けるオルロ

ワージュを眺めて私は時の流れを楽しんだ。

「まだ、零姫は捕まらないのですか？」

「ああ。なかなか零姫も抜け目のない女、一筋縄ではいかぬ」

「随分とお時間がかかるんですね……」

「そうか？　だが、苦勞すればただけ手に入れたときの喜びも大きいというものだろう」

「あなたが零姫様を取り戻すその時を、私も心よりお待ちしておりますわ」

「そうだろう、そうだろう。楽しみにしているが良い。ははは……」

「ふふ……」

私はオルロワージュを愛している。その筈だ。けれども……。

時の倦怠というものはたして伝染するものだろうか？

オルロワージュが零姫を追い求めておよそ五百年が経過した。来る日も来る日も同じような会話をして同じように男を愛している内に、私の心にも次第に退屈という名の蛇が忍び寄ってくる。とぐろを巻いて心の臓を縛りあげたその蛇はやがて甘く切ない声で「刺激が欲しい」と囁き始め、私の視線は次第にオルロワージュを離れ、彼と同じように海を見つめるようになるのだった。

オルロワージュが人間に血を分け与えたという話を聞いて私は少し嬉しかった。また新しいことが始まる。何か面白いことがあればいい、そう考えていた。

妖煌帝の血を享け半妖となったアセルスはけしてオルロワージュに魅了されることはない。オルロワージュが彼女に並々ならぬ期待を寄せるのは当然のことだ。

だから私はこう考えた。アセルスを誘惑してみようと。オルロワージュの愛し子を魅了し、奪い去ったなら……、妖魔の君は今よりもつと苦しむことになるのではないか。オルロワージュの目の前で生まれた希望の雛を横から掠め取り、この針の城から離れたら、あるいはあの零姫のようにオルロワージュは私を追ってくるのだろうか。……それはそれで楽しいことかもしれない。

それに、と言っては何だけれどもアセルスは実際私好みの救い難い馬鹿だった。突然妖魔の世界に放り込まれたせいもあるだろうが少し優しい言葉を掛けただけで犬のように容易く懐く。

「白薔薇はすごいなあ」とアセルスはよく言ったものだった。「植物のこととか、物語のこととか、なんでも知っているし、綺麗だし、本当に憧れちゃうよ」

「そうですか……？ そんなにお褒めにならないでください。恥ずかしい……」

頬を染め、照れるそぶりを見せながら私は内心でああこの子は本当は“女の子”にな

りたかったのだと推測する。自分の生まれや半妖となったことで、常に気を張って男のように強くあることを強いられたために中性的な振る舞いを選んでしまったというだけで、本音のところでは誰もに愛される女の子、守られるべき女の子になりたかったのだ。なんと他愛のない小娘だろうか。

モンスターと戦わされて変わっていく自分に戸惑うアセルス。

「あなたは優しい人です」と言われて涙を流すアセルス。

単純で純情なアセルスを弄ぶのは、枯れた私の心にも久しぶりに楽しいという感情を思い出させてくれた。若く愚かなアセルスの、瑞々しく甘ったれた言葉に対して時には頷き時にはからかい、まごつくアセルスを笑うのは楽しかった。

——強くなりたい。自分の思う通りに生きられるようになりたい。傷つかずに、傷つけることなく生きられるようになりたい。……近頃ではね、ようやくバーゲストくらいなら無傷で倒せるようになってきたんだ。でも、そうやって、変わりたいと思つて変わってしまった私は、バーゲストに勝てなくて、襲われて怯えていたりした自分とは違う生き物なんじゃないのかって時々思う……。強くなつて、弱さを捨てて、いつか完成した未来の私は、弱かったころの私のことなんかで忘れて、悩みや苦しみなんて全然わからなくなっているんじゃないのか……。そう思うと怖くなる。このままイル

ドウンについて戦闘訓練をしていていいのかな……？

——けれども、誰だつてそうなのではありませんか？ 何も変わらずに生きていくことなどこの時の中でどうして出来ましょう？ 肉体が成長することのない妖魔ですら、日々を生きている内に少しずつ変わっていくもの。まして元々は人間であったアセルス様なら、少しずつ成長し、過ぎ去りし過去を懐かしみながら変化を受け入れていくものでしょう？

——うん。そうだね……。そうなんだけど……。でも時々寂しくなるんだ。いや……。違うかな。寂しいっていうんじゃなくて、なんだろう……。納得がいかないっていうか、なんだか無性に……。なんだろうな、この気持ち……。前にも、こんな会話をしたな……。……。

——その気持ちに、いつか名前をつけられたら良いですね。

——うん。

——針の城での生活はお辛いですか？

——ううん、本当はそうじゃない。嫌なことばかりじゃないし、優しい人も親切な人もいる……。白薔薇もね。ただこのまま慣れていって身も心も妖魔になるのはやっぱり嫌だ。

——お家に、帰りたいですか？

——あ……。

——アセルス様？

——どうか……。そりやあ帰りたいたいよ。もちろん。でももしかしたら、私は帰らない方がいいのかもしれない。帰ったって、迷惑をかけるだけだろうしね……。

——そんな。

——いや、そうなんだ。そりや誰だつて死ぬよりかは生きている方がいいって言うだろうけど。でも、私が帰って行つたつて、結局は誰かに養ってもらふことになるだけなんだもの。……そうだよ。針の城だつてそうなんだ。この服も、部屋も、食べ物だつて、みんなオルロワージュのものなんだ。私は働きもせずにそれを平気な顔をして受けて取つてへらへら笑つてる。ゴサルスのお店ではただではもらえないなんて偉そうなこと言つたけど、今の私は誰かの好意に縋ることではか生きていけない。助けられるばかりだ。与えられるばかりだ。私は強くなりた……一人で生きていけるくらい、強くなりた……。だから、ああ、そうだ……白薔薇。私は……。

アセルスは真剣な眼をしてそつと言う。

——私は、ここではないどこかに行きたいのかもしれない……。



「まず最初に言っておく。——俺は剣を教えることには向いておらん」

ゴサルススの店を後にし、意気揚揚と腰に剣を提げて訓練場へ向かったアセルスを見て、イルドゥンは開口一番そう告げた。

「はあ……」

「だが自らの意思で剣を手に入れたお前の意思を認め、今日は俺が相手をしよう」

「あ、うん、まあそれはともかくとして、教えるのに向いていないっていうのはどういう……？」

尋ねると、イルドゥンは「ふむ」と顎に手を当て目を細めた。

「まあそういうことだ。……妖魔とは既にして完成された生き物。人間が赤子から成人になるような成長過程を経験することはない。生まれてから死ぬまでその体は一切変化しない。ある妖魔が今日バーゲストを斬れないのなら、十年先五十年先にもそのままだ。いくら剣を振るつたとて、妖魔の筋力は決して増えない。よって妖魔は努力を行わない。いかな鍛練や修行も妖魔にとっては無意味だから。妖魔が剣を振るうのは、誰に教えられるでもなく自分が相手を斬れることを知っているからだ。人のように技を磨くこともなく、ただ無心で敵を斬るのみ。……つまり俺は、というよりも妖魔という

生き物は他者に剣を教授できるようには出来ていない」

「何それ」アセルスは呆れる。「どうして言い訳から始めるわけ？」

「言い訳ではない。ただ事実を言っただけだ。いいか、アセルス。お前は半妖だ。闘いを知っている妖魔とは違い、お前の体の元は人間なのだ。無限に成長し続けることができるならやがては俺よりもはるかに強くなるかもしれないし、あるいは衰え続けてそこらの邪妖にすら劣る存在になり下がるのかも知れん。どちらを選ぶのかはお前次第だ。戦い方はお前自身で考えろ」

「本当に身勝手なやつだな。自分で無理やり戦わせておいて、それ以外のことは全部私任せってこと？ そんなことなら『すいません、できません』って言っただけで教師役なんか辞退しておけば良かったんだよ」

不満を零すアセルスにイルドゥンはしばらく考え込むように首を傾げていたが、やがて「まあそうだな」と頷いた。

「そうするべきだったかもしれない。俺もあの時はそれほど深く考えていなかったのだ。どうも失敗したようだ。……まったく、オルロワージュも無茶なことを言ったものだ。人間がまともに妖魔の強さを身につけようとすれば当然訓練といったものが必要になってくる。が、そうして戦い方を学ぶという努力は本来妖魔の社会では否定されるべきものなのだが……」

「努力、否定されるんだ」

「ああ。妖魔にとつては生まれ持った素質だけが全てだ。他を魅了する美貌、他を威圧する恐怖、そして何物にも屈しない誇り。この三つだけを尊び、それ以外のすべてはとうでもないことだとされている」

「その三つが優れている妖魔がオルロワージュみたいな妖魔の君に選ばれるの？ ……
大体、そういう美しさとか誇りとかかって誰が評価するものなのさ。美的感覚なんて相対的なもので、実際には比べようがないと思うけど。投票でもするの？」

「馬鹿か。妖魔が投票なぞするか。妖魔にとつての三大要素は他人に認めて『もらう』ようなものではない。認め『させる』ものだ」

「どういふこと？」

「つまるところは決闘だ。我に力ありと自負する者が当代の妖魔の君に挑み、より強いものが王として君臨する。それだけのことだ」

「ふうん」とアセルスはつまらなそうに口を尖らせる。「下らない」

「今、何と言った？」

「下らないってそう言った。何が、妖魔だ。性別を持たない美しい種族だの、薔薇の守護者、無慈悲な王だのとさんざんぎ勿体ぶつたことを言っておいてさ。結局は殴り合いで勝つたやつが偉いっていう典型的な男社会なんじゃないか。笑わせるなよ」

「お前の言うことは一々面白いな。だが気に食わん。戦いを否定したいのなら、それなりの強さを身につけてから言うといい」

イルドゥンは厳しい目つきで静かに答え、腰の剣にそつと手を添える。

「言われなくてもそうするさ……!」

その場を軽やかに飛びのき、アセルスは身を屈めて剣を構えた。

では行くぞ。目の前のイルドゥンが眩き、ああ、と答えたその瞬間、アセルスの右手首はふつつりと断たれ、切り離される。ぼとりと転がつて手首に呻き声を懸命に噛み殺し、冷や汗を流しながら左手を伸ばすと掴み上げるよりも先にイルドゥンの靴底が右手首を踏みつぶした。恨みがましい目つきで顔をあげると、冷たい顔をしたイルドゥンが続げざまにアセルスの左肩を砕き割る。

イルドゥンは言う。けして剣を手放すな。どんな時でもだ。たとえオルロワージュの血がお前を再生させようとお前を無力化することは容易い。武器を奪われれば後は翻られるだけだ。発狂するまで拷問されるのが嫌なら、硬く剣を握りしめろ。

唸り声を上げながらアセルスはイルドゥンの腰目がけて体当たりを仕掛ける。待ち構えていたように顎をイルドゥンの膝がかち上げ、衝撃にのけ反ったアセルスの意識が一瞬飛ぶ。だがそのまま倒れ込みながらも滑らせた足で転がった自分の右手首を蹴り

飛ばし、そのまま転がって吹っ飛んでいった右手首を取り戻した。切断面を合わせるとぞわりとした痒みと共に肉が延び、元通りに接着される。鼻血を垂らしながら不敵に笑い、アセルスは再び剣を構える。

「楽しいか、アセルス」

「何が」

「お前はいま笑っている。戦うのが楽しいのか」

アセルスは顔を顰め「……うるさいな」と低く呟いた。

「そんなこと、どうだっていいだろう。無理やり戦わせているのはそっちだつてのに」
「それもそうだな」

当然のように頷いてイルドウンが斬りかかってくる。壁から壁へと影が飛び移るよう何の重さも感じさせぬ速さで、どこまでも正確無比な剣閃を振り下ろす。数瞬遅れて追いかけたアセルスの剣は軽く打ち払われ、乙女の体に新たな裂傷が刻まれる。

何度となく同じことを繰り返した。その度に血を吐き、痛みに呻く。拙い手つきでいかに剣を繰り出そうとも、イルドウンは手首の返し一つで致命的な一撃を叩き込んでくる。迷いのない剣筋。躊躇いなく込められた力。力任せに振るっているだけのアセルスの剣では如何ともしがたい実力の差に、ようやくアセルスは頭を使い始める。

（ただ剣で斬ろうとしているだけじゃ、駄目なんだ。隙を狙う、隙をつくる、そういう考

えでいかないと……」

息を整え、拳で唇の血を拭い、アセルスは真つ向からイルドゥンを見据える。力ある瞳の輝きに「ふむ」と囁き、イルドゥンは面白そうに口元を歪めた。

「来るか、アセルス……」

ふつ、とくぐもつた吐息と共に足を踏み出し、アセルスは振りかぶつた剣をイルドゥン目掛けて振り下ろす。風を切り裂き骨を砕かんと唸りをあげる鉄剣をしかしイルドゥンは瞬き一つせず僅かに半身を反らせるだけで交わしてのける。攻撃は失敗、しかし――、

（まだだ……ここ、切り返す！）

振り下ろした剣を力ずくで止める。細腕の筋肉がぎちぎちと音を立てて跳ねまわる。それでも歯を食いしぼり、剣の軌道を強引に捻じ曲げた。振り下ろした剣を、丁度Vの字を描くように下から上へと引き戻す。剣撃の切り返しによる二連続攻撃。

これならばあるいは。束の間抱いた希望はあつけなく砕かれることになった。動揺一つ見せずとも簡単に剣の柄で攻撃を打ち払ったイルドゥンは続けざまにアセルスの脇腹につま先をぶちこんだ。

「く、そ……」

息も出来ないほどの痛みに顔を歪め、アセルスは唸る。

悔しげなアセルスとは打って変わり、対峙するイルドウンの表情はどこか楽しげですらある。「なるほど」とイルドウンは言う。

「やはり元は人間なのだな、アセルス」

「何……?」

「いま、剣の軌道を途中で変えたらう。それはお前が考えたのだな?」

「ああ、まあね……付け焼刃だったけど」

「それは妖魔には無い人間の閃きというやつだな。妖魔には技を磨く必要などなく、それ故真つ向から打ち合うことしかない。だが人間は違う。いまのお前のように自分に足りない部分を補い、工夫を重ねることが出来る。……先ほどの動き、なかなか良かったぞ。猿のように剣を振り回しているのとは大違いだ。あとはその技をどう使い、どう自分のものにしていくかだな」

「……なんか、急に師匠みたいなことを言うんだね」

「俺は師匠にはなれん。俺とお前とは違う生き物なのだから。お前はお前自身で戦い、お前自身で自らの戦いを研がなければならん。……俺に出来るのはその相手役くらいか。さあ立てアセルス。もう一度お前の人間性を見せてみる」



戦闘訓練を終え、くたくたになった体を引きずって自室へと戻ろうと階段を上ると、見覚えのある妖魔が穏やかな表情をして待ち受けていた。橙色の外套を羽織ったその妖魔は恭しく膝をつき、大仰な礼をする。

「これはアセルス様。ご機嫌麗しゆう」

「あなたは……？」

「ラストバン、と申します。あなたに期待を抱く男の一人です」

「期待……。何のこと？」

「ファシナトウールのことを、どう思われますか？」

「どうって、妖魔の世界でしょう。好き好んでいたい場所じゃあないね」

「そうでしょう。このファシナトウールは時の止まった淀んだ世界。誰かがその時を刻

まねばならないのです。私はあなたがそれを成してくれるのではと考えています」

「わけの分かんない役割を押し付けられないでよ。やりたいのならあなたが自分でやればいいでしょう」

「ところが、残念ながらそう簡単にはいかないのですよ。妖魔には妖魔のルールがある。妖魔にとっては格が絶対で、自分よりも上の妖魔には逆らうことができないのです。……ですが、あなたは別だ。アセルス様、あなたにはオルロワージュ様の血が流れてい

らっしやる。それは支配者の血、一億年を生きる完全者の血です。あなたにならあるいはこの妖魔の世界を変えられるやもしれません」

「そんな気は無いよ」

「いまはそうでしょう。しかしいつか気が変わらなとも限りますまい」

「イルドウンといいあなたといい、妖魔つてのはみんな勝手すぎる。私は、私だ。それ以上でもそれ以下でもない」

「イルドウンとは、その後どうですか？ 彼からは戦闘訓練にも随分やる気を出していると聞きました」

「あんな奴！」アセルスは大げさに顔を顰める。「人の話は聞かないし、勝手だし、無理やり女の子をモンスターと戦わせて平気な顔をしてるろくでもないやつだ！ あんな底意地のねじ曲がったような奴は大嫌い！」

「そうですか」

ラストバンは静かに微笑む。

「いや、イルドウンもなかなか嫌われたものだ。そのお気持ちはよくわかります」

「そうさ！ 出会ったときからあいつは嫌な奴だった。あいつは……」

「アセルス様」

にこやかな調子のままラストバンはアセルスの言葉を遮った。

「僭越ながら友人の名誉のために申し上げます。確かにイルドゥンは口も悪ければ態度も悪い。ぶつきらぼうで言葉も足りず、いささか失礼な印象を覚えるのも至極当然のこと。……しかし、どうか彼の悪意だけは否定させて頂きたいのです。イルドゥンは他者を困らせ害を成すことに何らの興味も持つてはおりません。彼の言動が気に障ったというのなら彼に代つて謝ります。ですがイルドゥンが彼なりに真剣にあなたに妖魔の世界を伝えようとしていることだけは理解してやつてください。——それでは」

「あ……」

立ち去つていくラスタババンに言葉を詰まらせたアセセルスだったが、はつと気を取り直すと慌てて声をかける。

「待つてー！」

「何でしようか」

「あの……ごめん！」

「はい？」

「あなたは……その、イルドゥンの友達なんだよね？」

「いかにも。イルドゥンは我が親友です」

「そうか。そりゃあ、そうだ……友達のことを悪く言われたら誰だつて嫌な気分になるよね……ごめん！　これからは、陰で悪口を言うんじゃない、イルドゥンと面と向かつ

て真つ向から罵倒するよ」

「はっはっは！」ラストバンは口を開けてさわやかな笑い声をあげた。「その時はぜひ私も仲間にお加えください。加勢しましょう」



目の前には巨大なテーブル。一分の乱れもなく揃えられた見るからに高価な銀器の数々に滲み一つない純白のテーブルクロス。慣れない格式ばった晚餐の場に肩を強張らせたアセルスは緊張した面持ちで体面に腰かけるオルロワージュを窺う。

「オルロワージュ様が夕食を……一緒に」と侍女に告げられ、案内された広間で恐る恐る卓に着いたアセルスに遅れること数分、現れた妖魔の君は椅子に腰かけたものの黙つたままにいる。給仕は前菜をアセルスの前に運んできたがオルロワージュには血のように赤い葡萄酒を供するだけだった。

「い……いただきます」

一応呟いては見たものの自分だけ食べだすというわけにもいかず、居心地悪くもじもじしているとオルロワージュが静かに尋ねる。

「食べないのか」

「いいの？」

「当たり前であろう」

「じゃあ……」

「ぎこちなく食べたアセルスをオルロワージュはしばらく眺めていたが、やがて自らも杯を取り、葡萄酒を口に運んだ。

「ファシナトゥールでの生活には慣れたか」

「うん……まあ、それなりにね。周りの人には良くしてもらってる。食べものとか、身の回りのこととか。……ご飯、食べないの？」

「妖魔は人間ほど食事を必要とはしない。余にはこの酒だけで十分なのだ。気にするな」

「そう……」

「そなたとて半分は妖魔の体。じきに食欲もなくなるだろう」

「嫌だよ、そんなの……」

「欲がなくなるのだ。心配することはない。もう腹を空かせて歩きまわることはない。そなた自身にとってもそれが自然なこととなる」

「そういうことじゃないよ。たとえ飢えが無くなったとしても、何も食べずに生きていたら自分がどういいうもので構成されているのかわからなくなつて気持ちが悪いし、もの

を食べる喜びや楽しみを忘れてしまうのは悲しいことだよ」

「忘れる……か。……人間であったころ、そなたにとつて食事は唯一無二のものであったか？ どこまでも強く執着し、何を捨てても保持していたいものであったか？」

「そこまでではないけどさ……。でも、何かを食べるつてことは私にとつて当たり前のことなんだ。食事をして、睡眠を摂つて、それで、まあ……その他もろもろの欲求があつてね。そういう当たり前のことが、ある日突然自分から失われてしまつてことは、人格やら魂やらを強引に削ぎ落とされてしまうような気持ちになるじゃないか。あなただつてそうでしょう？ 妖魔は血を吸うんだよね。血を吸うあなたが本当のあなたというもので、それをたとえば今日からまったたく血を吸わなくなつてしまつたとしたら、それはもう昨日までのあなたとは全然違う生き物で、もしかしたらあなたではないあなたなのかもしれない」

「ふむ。なかなか興味深いな。続けよ」

「いや、この話そんなに伸びないよ。私が言いたいののはさ……要するに、なんで私はよう……その、半妖つてものにならなけりやいけないのかなつてことだよ。どうして、あなたは私に生き返らせたいの？」

「覚えていないのか」

「まるきり」

「馬車に轆かれたそなたの死体を見て、醜いな、と余は言った。すると死にかけのそなたはこう答えたのだ。『そんなことは自分の知ったことではない。醜いというのなら、あなたが美しくすればいい』とな」

「そんなの……わからない。そんなこと私が言うかな……。仮に言ったとしても、だからってこんな」

「半死の状態だったのだ。そなたには何の責もない。そなたに血を与えたのはあくまでも余が戯れに行ったこと。妖魔になることをそなたが望んでいないのであれば、それはすまないことをした」

殊勝な言葉にアセルスははつと顔をあげ、まじまじとオルロワージュを見詰めた。

「オルロワージュ……さん」

「どうした、突然改まって」

「妖魔も……妖魔の君も、誰かに謝ったりすることができるとはですね。私はずっと、あなたたち妖魔は人間のことなんて家畜か何かにしか見ていないんだと思っていました」

「ふむ」とオルロワージュはため息をつくように頷いてみせる。「実際そのようなものがない。大部分の妖魔は人間を餌だと考えている。余にもそういう部分があることは否定しない。だが人を愛することもまた妖魔の習性の一つだ。我が寵姫の中には元々人間だったものが少なくない」

「あなたはほかの妖魔とは違うと思います。イルドウンとか、セアトとか……」

「だから口調を変えたのか？」

「はい」

「そうか。生物としての強さや身分よりも自らの価値基準に従うそなたの態度を余は好ましく思う……が、その話し方はあまり好きではない。誰もが余にひれ伏すこのファシナトウールにあつて、今までのように気取らぬ口調の方が余にはめずらかに感じる。あまり気を使うな」

「はい。あ……うん、じゃあ……そうしてみ、る、よ……」

「それでいい」

穏やかに目を細めたオルロワージュの表情は相変わらず美しくはあるもののどこか老成を帯び、孫に対する祖父のような寛容と慈しみに満ちている。暖かなオルロワージュの態度にアセルスは思わず気を緩め「あなたは」とつい口走ってしまう。

「あなたは私のことをどう思っているの」

口に出してすぐさま顔が熱くなるのがわかった。なんて直截的で愚かな質問をしてしまったのだろう。

「ごめん。今のは忘れて」

「娘だと思っっている」

「こともなげに妖魔の君は言った。

「え……………」

「生殖を行わぬ妖魔に元来家族というものはない。我が血を分けたたつた一人のそなたが、この世ではたった一人の余の家族だ。年齢からいえば余はそなたの父と呼べるであらう」

「家族…………。お父さん…………。あなたが……………」

「そうだ。アセルス。我が娘よ」

顔をあげると目が合つてアセルスは慌てて俯く。嘘偽りのないまっすぐな視線を向けるオルロワージュにどんな言葉を返せばいいのかとんと見当もつかない。

「…………嫌か？」

「ううん…………そんなことは」

首を振つて否定した後でアセルスは自分の言葉にはつと驚いた。確かに、化けものであるはずの妖魔に突然家族面をされる気持ち悪さが無かつたとは言わない。正直に言えば厚かましいとも勝手すぎるとも感じる。けれども…………心の底でほんのりと淡く、嬉しい、とそう思つてしまった。

「あ……………」

「どうした、アセルス」

「あのね、オルロワージュ……。私はわからないんだ」

「何がわからないのだ、アセルス。そなたが疑問に思うことは素直に尋ねればよい。余がそれに答えよう」

「私は妖魔が嫌いなんだ」ぽつりとアセルスは囁く。「だってみんな勝手なことばかり言うし、私だって好きでフアシナトウルにいるんじゃないってのに半妖だなんて馬鹿にしてさ。妖魔はみんな美しいっていうけど、私にはよくわからない。そりゃあ綺麗だなって思うし、人間の知り合いと比べてみればずっとずっと見た目が整っているなっと思う。……でも、崇拜しようだとか、支配されたいだとか、そんな気持ちにはならないし……そんな気持ちにならない以上は、美だの虜だのと言っている妖魔のことなんてんで理解できる気がしないよ。人間にしてみればやっぱり妖魔は化けものなんだから。どんなに美しくてもさ。ごめん……。だから、急に言われたっていきなりあなたを父親だとは思えないし……」

「それでいい。時間はいくらでもある。その内に慣れ、いつか余のことを父と感じる日が来るやもしれぬし……あるいはどれほど時間が経とうと何一つ変わらぬかもしれん。どちらかが定まらぬことが、余には面白い……」

「面白い……かな……」

「ああ、そうなのだ、アセルス。そなたはいま妖魔の美しさが理解できないと言った。余

の顔を見てどう思う？ 身も心も奪われたいとは思わぬだろう？ だが他の者は違うのだ。妖魔としての格や力が弱い者、またそこらの人間であれば余の顔を見ただけで魅了されてしまう。……これは何も思いあがりから言うのではないぞ。事実そうである、ということ余はそなたに伝えなければならない。余にとつて、己以外のすべては弱者なのだ。顔をあわせただけで相手は余に恋をし、頼みもしないうちから跪こうとする。そなたならどうする？ 百人の男を従え、千人の人間を支配し、誰も彼もを奴隸として君臨したいか？」

「まさか」

「そうだろう。そなたはそうなのだ。だが余は違った。手に入れたいものはみな手にいれなければ気が済まぬし、そうでないもの、手に入らぬものは滅ぼしてしまわねばならなかった。それが妖魔の性分というものだからだ。だが何千年と生きているうちに…… 手に入れる” という言葉の意味がある日わからなくなった。手に入れたいと思うものはみな “自分のもの” ではない。所有していかないから欲しいと思う。けれども…… そうして求めた結果手に入れたものはもはや “自分のもの” となってしまう。わかるか、アセルス？ 手に入れたいと思ったものと、その結果手に入れたものは、決定的に何か違ってしまっているのだ。……もしかしたら、だから余はそなたに血をわけたのかも知れぬ。余の血を享けたそなたはけして余には魅了されぬ。面白い」

「そういうものかな……。よく、わからないけど……」

戸惑いを誤魔化すために手元の杯を呷ると慣れない酒の味にアセルスはむせてしま
う。初めて飲んだ葡萄酒は喉元に苦い感触を残し、アセルスは少しだけ顔を歪めた。

第十二幕 やがて旅立つ辺境嬢は紅と踊る

左の頬から右頬へ、右の頬から左の頬へ。むぐむぐと口腔を移動させ、もちもちとした触感を存分に楽しみながら餅を咀嚼する。

その表情は半目である。少し眠たいようでもあるし、餅を食べる至福に満ち足りている様子でもある。唇の端を打ち粉で白く汚し餅を持つ右手からもはらはらと盛大に粉を零しながらその男は大福を頬張っている。

「ああ……」と男は突然小さく呻き、「お茶が飲みたいな……」としみじみ呟いた。それから男は自室の扉を開いたまま唾然としているアセルスにようやく気が付き、「君はこしあん派？ それともつぶあん派？」と尋ねる。野放図に逆立てた赤毛、胸元をはだけた破廉恥な服装、そして胸元のニプレス。オルロワージュとの晚餐を終え部屋に戻ってきたアセルスを出迎えたのは見知らぬ大福男だった。

「私はこしあん派……だけど、あなた、誰。人の部屋に勝手に入り込んでどういうつもり」

「残念だな、僕はつぶあん派なんだ。僕と君とはけして分かり合えない運命にあるのかもしれないね」

「……あなた、妖魔でしょう。人の話を聞かない奴は大体そうなんだ」

「よくわかったね。僕の名前はゾズマ。このファシナトウルではオルロワージュ様に次ぐ実力者さ。……どうかな、この体の奥から自然と溢れ出てくる大物感、感じるだろ？」

得意げなゾズマの様子にアセルスは頬を引き攣らせた。

「うわあ……」

「……感じないみたいだね……可哀そうに、君には見る目かないんだね。可哀そうに……」

「人の部屋で勝手に大福食べといて何好き放題言ってるの、あなたは」

「好きなことが何一つ言えない世界なんて間違っていると僕は思う。君もそう思わないかい、アセルス？」

「まあ、それはそう思うけど……。何が言いたいのか？」

「君はこの針の城をどう思う？」

「……ああ、そう……。あなたもラストバンさんと同じクチ？ 言っておくけど、私は革命なんか起こすつもりはないからね」

「嫌だなあ。あんな陰険妖魔と一緒にしないでくれよ。僕はただ、君の考えに興味があるだけさ。実際のところ、君はいつまでこの城にいるつもりだい？」

「いつまで、って……わからないよ。私だって嫌だけど、ここから出る方法もわからないし……」

「町はずれの焼却炉。あの炎はムスベルニブルという別のリージョンからの炎なんだよ。あそこに飛び込めば逃げ出せるかもね」

「炎の中に飛び込めって言うの?」

「それは君しだいさ。望めばいつだって帰れる。妖魔の世界を嫌うなら自分の生きたい場所に行けばいいんだよ」

「……どうしてそんなことを教えてくれるの? 初対面なのに」

「さあ、どうしてかな? もしかしたら君が何も知らないからかもしれない。どうして僕が君に教えるのか、そんなことさえわからない君の無知が面白いからかもしれない」

「……馬鹿にして!」

「半分は妖魔で半分は人間。君は世界でたった一人の半妖だ。……だから、みんな君の選択に興味を抱いているんだよ。君が選ぶ道、君が選ぶ言葉、君自身が歩いていく物語に誰もが惹かれてしまうのさ」

「そんなの、知ったこっちゃないよ」

「君が知ろうと知るまいと、君を取り巻く運命は否応なく押し寄せてくるもの。君にだって、それくらいはわかっているんだろう?」

「だからうんざりなんだよ、そういうのはさ。私は普通に生きていけたらそれで良かったんだ。それをむりやり妖魔の世界に引きずり込まれて迷惑にも程があるよ。人の血を吸ったり、虜という名の奴隷にしたり、モンスターと戦わなきゃいけなかったり、決闘なんていう古臭いやり方で王様を決めたりしてさ……。私は知らない。関係ない。私は人間だ。人間なんだ……！」

「そういう幼い物言いをするから周りの大人が君に構いたくなってしまうのさ。……ああ、そうだ。肝心なことを忘れていたな。大福餅の話をしようじゃないか」

「だ、大福……？」

「そうそう。良く考えたら、僕はその話をするためにここへ来たんだ。アセルス、君は、なぜ自分がこしあん派なのか考えたことがあるかい？」

「はあ……？　意味がさっぱりわからない……。好きだからでしょう？」

「そうだね。理由なんてのは、結局のところそういうものなんだよね。君自身、こしあん派である自分が正義だとは別に考えてはいない筈だ。でもいつか君はまるで自分が正義の代弁者であるかのような顔をしてつぶあん派を否定するようになるんだよ。……いや、もしかしたらもうそうしているのかもしれない。君がつぶあん派を否定するのはただ君がこしあん派であるというそれだけの理由だ。けれども君はつぶあん派が仲良くつぶあんをばくついている所へ行ってお前たちのやることは人道にもとるといつて

指をさして罵倒するんだよ」

「……何が言いたいのか？ 私が間違っているって、そう言いたいのか？」

「僕が言いたかったことが何なのか、今答えたところでそれは嘘かも知れない。何が本当で何が嘘かなんてことは結局のところ君の視界の中でしか成立しないことだろう。誰かに尋ねる前に自分で答えを出せるようになりなよ。もつと経験を積んでさ……。そうだよ、君はやっぱり旅をするべきなのかもしれないね。かつてこの針の城から逃げ出した零姫という妖魔はこう言ったそうだよ。『妾は針の城から逃れ、まだ見ぬ辺境に居場所を求めるところ』ってね。今いる場所に自由が無いのなら、この世のどこかに自分の居場所を探し出すか、作り出すしかないじゃないか。君がどんな場所を選ぶのか、僕は楽しみにしているよ。それじゃ」

「言いたいことだけ矢継ぎ早に告げるとゾズマは絨毯の下に潜り込んで消えてしまう。慌ててめくり返してはみたものの隠れるような空間は見当たらずアセルスは首をかしげる。」

「一体何しに来たんだ、あいつ。なんだか説教くさい妖魔だったな……」

「本当に不思議なことを言う妖魔だった。こしあんやらつぶあんやら人を煙に巻くようなことばかりを口にしてうんざりしてしまう。しかし、零姫という女性の話だけは聞くことができ良かったと素直に思う。」

この針の城から自分の意志で逃げ出した人がある。なぜ彼女は逃げ出したのだろうか？ 虜化を受けておきながらどうしてオルロワージュに逆らうことができたのだろうか？

彼女——零姫は辺境を目指したのだという。それは今いる場所を愛せない心細さや自己嫌悪をかなぐり捨てて旅立つものが目指す理想郷の名前だ。

「辺境……」

舌の上で転がした言葉の感触にアセルスはそつと目を閉じる。



たとえば彼女がほうと息を吹くだけで、見渡す限りの野原が燃えた。炎の舌がちらちらと大地を舐め、酸素を奪い、生きているものはみな黒焦げにする。

紅の髪、赤銅の瞳。輪郭揺らぐ陽炎の乙女。炎妖メローペは業火の中で笑っている。燃えろ、燃えろ、世界よ燃えろ。楽しげに唱える呪文でばちりばちりと大気が爆ぜた。燃える世界は美しく、焼け爛れ膨張した人間の肉が彼女を飾る。

彼女の目の前に降り立ってオルロワージュは優雅に礼をする。メローペは手を振り上げた一言「燃えろ」と告げる。渦巻く炎が燃死鳥となつて襲いかかるが、オルロワー

ジユは事もなげに燃死鳥の首根つこを握り潰して絶命させる。嗚然としているメローペを抱き上げ、背徳に満ち溢れた口づけを落とす。ただでさえ赤いメローペの顔は更に紅潮し、彼女の身体からくたりと力が抜ける。

——何をするの。あなたは。

瞳を潤ませながら尋ねるメローペにオルロワージュは答える。

「メローペよ。余のものとなれ」

いや、と首を振るメローペはしかし胸の疼きを抑えられず、オルロワージュが舌を動かす度にどうしようもなく耳朶を這う快感に悶えてしまう。

こうして妖魔の君オルロワージュの寵姫となったメローペは第八の姫、紅姫と称され、揺らぎ霞むような陽炎の美しさと全てを燃やし尽くす業火の残酷性からオルロワージュの元で強く寵愛を受けた。

何かを燃やすことしか知らなかった乙女がオルロワージュの口づけを受け容易く虜となつてからは夢見る瞳に情欲の炎をともして官能に身を焦がす。

男は紅を美しいと言い、紅の操る炎を美しいと言う。紅もそれを信じる。ああ自分は美しく掛け替えない生き物だ、そう思う。だから彼女は表情を蕩けさせてしな垂れかかり男にそつと囁いた。もつと私に価値を与えて。私という炎に無限の供物をくべて、燃え上がった地獄の火炎でこの空も何もかもを赤く染めてしまえばいいわ。オルロ

ワージュは優しく微笑んで「そうしよう」と答えては紅の指し示す先で惨めな人間たちが炎に焼かれ悶え苦しむのをそっと眺めていた。

紅は幸福だった。

そして――、

そして、無数の時が流れた。

気がつくのと彼女はごみを燃していた。いつからこんなことを続けているのだろうか、時折思い出そうとしてはみるもののその度に頭の中の螺子がきゆうきゆうと音を立てるように痛みうまく思い出せない。昨日はといえばこうして同じようにごみを燃やしていたし、一昨日も一昨日もまた何かを燃やしていたような気がする。

少し気を抜いただけでひどく重い睡魔が紅を襲う。朝目を覚ましてもまだ夢を見ているような感覚が続いているし、一日中うつらうつらとしては唇から涎を零しはつと目を覚ましてはわけのわからない悲しみに唇を噛みしめる。

膝を抱えて座り込み、恐ろしくゆっくりとした動作で周りのごみを拾い上げては焼却炉の炎に近づける。犬に餌を与えるような気分になる。手をそろそろと寄せていくと、不意に伸びた炎の舌がごみに巻きついて見る見るうちに焦がしていく。おいしい？

おいしくない？ 答える者の存在しない問いを心の中で繰り返しながら紅は眠たげな目をうつそりと巡らせて、次は何を燃やそうか（それともこのまま寝てしまおうか）と考える。

（ねむい……）

（ああ、とても……ねむたいわ……）

うとうとと膝の中に顔を埋め、紅はそのまま横に倒れこんで目を閉じた。普通の妖魔であれば到底行わないようなだらしない恰好で紅は睡眠をとる。もしこの姿を誰かに見られてもしたらそれこそ誇りを失って消滅さえしてしまうような自堕落な有様ではあつたけれども、しかし紅は何一つ心配してはいなかった。彼女の姿はほとんど消えかかっている誰の目にも映ることはなかったからだ。

紅はこのファシナトウルでごみを燃やす焼却炉の管理をしている。ようするにごみ処理係である。

ごみ、というものは汚いものことだ。誰かに使われ、あるいは使われることすらなく、もういらぬものだからと捨てられてしまったものことだ。もしこれが人間の世界

であればそれこそ汚物という汚物を扱い糞便に塗れて働かなくてはならなかったかもしれないが、そこは麗しい妖魔のこと、基本的に排泄行為を行わないためにそこまでおぞましいものを燃やしているわけではない。そういう意味ではある意味紅は幸いであつたかもしれない。それでも、汚れた食器やら枯れ果てた花の塵やらが頭上からぼとぼと投げ落とされ、来る日も来る日もそれらを燃やし続けなくてはいけない生活を送るうちに次第に紅の体は透けていつしか誰かの目に留まることもなくなつた。

針の城では今日も目覚めさせられた寵姫が甘い睦言を囁いてオルロワージュと交わっていて、きやつきやと甲高い嬌声を上げて身をくねらせ、その内に体液で濡れたシートが窓から放られこの焼却炉へと辿り着くことになるのだろう。昔はそのシートを胡乱な目つきでじつと眺めていた時期もあつたには違いないが、今となつてはもう何もかもがどうでもよくなつてシートの端っこをそつと摘み上げては燃え盛る炎の獣に差し出して視線一つくれない。

オルロワージュを責めようという気にはなれなかつた。紅はまだ彼のことを愛していたし、自分の魅力が足らなかつたのが悪いのかもしれないとさえ考えていた。「もう愛してはいない」と言われたわけではないし、傷つくようなことや別れ話を口にされたわけでもない。ただ、自然に疎遠になつていただけだ。愛が薄れてしまつただけだ。

だから、仕方がないのだ。何を恨むことも出来ない。

この焼却炉は根つこの町のはずれもはずれ、殺風景な崖の向こうに位置している。焼却炉といつても明確な「炉」があるわけではなく、崖の下につくられた特別なゲートからムスベルニブルの天まで立ち上る炎を呼び寄せているだけだ。崖の端に腰かけて紅は焼けつく炎に弱々しい指先を伸ばし、いつか何もかもが嫌になつたらその時はこの身を投げて融けてしまおうと考えている。

眠たい目を擦りながら火の番をしているとそのうちに一人の人間が訪れておもむろに泣き始めた。意地を張るように唇を噛みしめ、ぽろぽろと涙を流して目を真っ赤にしていた。そのすぐ隣に紅が座っていたのだが案の定その女は気がつかずに力のないため息をつく。元気なころの紅であつたなら卑しい人間風情が私に近寄るなど叱り飛ばし瞬く間に消し炭へと変えてしまつていたかもしれないが、悲しいかな今の紅はあらゆるものに優しくなつていて隣に立つこの女が泣き出すのにおろおろと困つてしまう。

自分は大切な人に忘れられてしまったのだとジーナと名乗つたその人間は言った。紅にもその悲しみは身に滲みて理解できたので少しだけジーナと会話を続けたがさりとて何か気の利いたことを言えるわけでもない。久しぶりに感情を揺さぶられた自分が恥ずかしくなつた紅は「さようなら」と言つて黙り込んでしまった。

ジーナと会話をしてからしばらくは苦しい時間が続いた。ああそうだ私は忘れられてしまった。あのオルロワージュ様の優しい手、優しい指が私の体をなぞることはもう

ない。甘い言葉をかけられることも、そんな自分を誇らしく思う心地よさを味わうことももうないのだ。

悲しい。悲しい悲しい悲しい。どうして思い出してしまったのだろう。ぼんやりと眠たい顔をして日がな一日ごみを燃していれば嫌なことを考えずにいられたのに。私は愛しい人に忘れられてしまった。忘れられたことを忘れてしまいたい。何もかもを忘れてしまつて、心のない人形になりたい。両手で顔を覆いさめざめと涙を流しながら紅はごろごろと崖の上を転がったりじたばた足掻いたりしてはみたもののそんなことで悲しみが収まるはずもなく、仕方がない最後の手段だとうとう紅は息をとめた。海の底にひっそりと沈んだ黙する貝のように、沈黙を己の枷として心の動きを停めてみる。はじまりの三十秒まず息を止めて耐えきれなくなったら口を開いてすぐさままた口を閉じる。息を止めて、苦しさにむせながらまた口を開いてまた口を閉じる。息を止めることだけに集中していられたら悲しいことを考えずにいられる。ああ息をしよう。そして息を止めてしまおう。それでそのまま自分でも気がつかない内に死んでしまえたらいい。妖魔としての強さなんて何一ついらぬ。欲しいのはただ一つの言葉だけだったのだ。息をして、息を止める。

(もう機械でいい、人形でいい。息を止めているだけの、思考を持たない無機物でいたい

……)

悲嘆にくれる紅が傷つく心に閉じこもっていると久しぶりに妹が訪ねてきた。炎妖アルキオネ。今は黒騎士セアトに使える炎の従騎士として働く彼女に会うのは何百年振りだろうか。

「紅姫！ 紅姫！ いらっしやるのでしよう、姿を見せてください！」

「あ……アルキオネ……」

透明なまま答えるとアルキオネは声のする方を鋭く睨みつける。

「紅姫。そこにいるのですね？ 相も変わらずいじけて透けたままにいるなんて、何てみつともない」

「そんな風に冷たいことを言わないでくれ、アルキオネ。……それに私とあなたは姉妹なのよ、昔のように、メローペと呼んで頂戴」

「まさか」

アルキオネは口元を侮蔑に歪めて冷笑する。

「落ちぶれたとはいえ姉さまはオルロワージュ様の寵姫ですもの。呼び捨てにすることなどできませんわ」

「そう……そうね……仕方がないわね……」

弱々しい紅の口調にアルキオネは顔面にすつと朱をのぼらせ、か、と唇から火を吹い

た。

「いつまでそうやってうじうじしていらつしやるつもりなのですか？ 以前のあなたなら生意気な口を聞いた私をけしてお許しにはならなかった筈。苛烈であることが、激甚たることが何よりの炎妖の証であるというのに。あなたは変わってしまったわ。オルロワーージュ様を選ばれるという光栄に預かりながら凋落し、一族の名誉を汚し続けている。なぜ、あなたなのですか？ なぜ私ではなかったのですか？」

「あなたにはわからないわ。愛した方に嫌われることすらできなかつた女の気持ちなど……」

「わかりたくもありません。黒騎士セアトは私の男。私が私自身の意志で手に入れた男です。天から降り注ぐものだけしか手に入れられぬというのなら、もはやあなたは炎妖ではないのです」

「私のことはもう、放っておいて。……大丈夫。あなたになるだけ迷惑をかけないように、いつの間にかにそっと消えてしまおうから……」

「あなたは……！」

怒鳴りかけたアルキオネははつと我に返り、「いけない……」と呟いた。ごほん、と咳をする代わりにまた一つ炎を吐きだして「今日はそんな話をしに来たのではなかつたわ」と声を和らげる。

「アルキオネ……?」

「まもなくここにアセルスが来ます」

アルキオネは静かな口調で告げる。

「アセルス……? あ……、オルロワージュ様の血を享けたというアセルス様のこと……?」

「ええ、そうです。そのアセルスが焼却炉に来ます。おそらく、この炎について尋ねてくるでしょう。炎の中に飛び込めばムスペルニブルに行けるのかと」

「なぜ……?」

「なぜ? アセルスが人間だからでしょう。卑しい人間だった小娘にこのファシナトゥールの素晴らしさなど理解できる筈がありません。あの愚かな半妖は針の城から逃げ出そうとしているのですよ」

「針の城から……逃げ出す……? そんなこと、考えたこともなかった……」

口元に手を当てて紅はじつと考え込むが、アルキオネは気付かずに話し続ける。

「もしもアセルスがここを訪ねてきたらそのまま通しておやりなさい。優しく、丁寧にムスペルニブルへとお送りすれば良いのです」

「それで良いのですか……? オルロワージュ様がお怒りになるのでは?」

「アセルスはオルロワージュ様を裏切って逃げ出していくのですよ。心配することなど

なにもありません」

「ムスペルニブルへ行つて、そのあとアセルス様はどうなるのですか？」

「その後？」 アルキオネは残酷な笑みを浮かべる。「その後は私が狩ります」

「そんな！」

「何を戸惑うことがあるのです紅姫。アセルスが憎いでしよう？ あの小娘はなんの力も持たなくせに、我々妖魔たちが何百年と望み続けた妖魔の君の力を手に入れたのですよ。戦うことも、苦しむこともなく、ただか十年かそこら生きただけの人間が偶然からオルロワージュ様の庇護を得るだなんて、そんなこと許されるはずがないでしょう」

「オルロワージュ様の……庇護を……」

「あなたが失つたものを彼女は手に入れた。あなたからオルロワージュ様の愛を奪い去った。……難しいことを言っているわけではありません。あなたはただアセルスを見逃せば良いのです。手を汚すのは私が引き受けます」

「う……」

「わかりましたね紅姫？」

「え、ええ……。わかつた……。わかつたわ……」

「それでいいのです」

満足げにっこりとほほ笑み、アルキオネは足早に立ち去って行った。久方ぶりの再開だというのに抱き合うことすらなく、炎妖姉妹は形ばかりの会話を交わして別れていく。

わかった、と答えはしたものの自分でも自分の気持ち整理できず、紅はまた座り込んで膝を抱え、目を閉じてゆっくりと物思いに耽った。

◇

自分は今ここにいて、アセルス、という今ここにはいない者のことを考えている。

自分はアセルスが憎いのだろうか。アセルスという、まだ見ぬ半妖のことを憎らしいと感じているのだろうか……。そうは思えなかった。怒りや憎しみを蓄えるほど自分の腹には食いしぼる意気が残ってはいなかったし、会ったこともない半妖に悪意を向けるだけの体力も持ち合わせてはいなかった。

オルロワージュからの愛を奪われた、とアルキオネは言った。しかしそれは違うのだ。奪われたというのなら奪い返せばそれで済む。捨てられたというのなら拾いなおせばそれで済む。しかし愛はいかなる時も色褪せていくもの、時の流れの中に忘れられてしまうものなのだ。手の届かないところに行ったわけではないし、消えてしまったわ

けでもない。愛は今もなおそこにある。けれどもそこにあると知りながら忘却の果てにその姿を見失い、触れることさえ出来なくなってしまう。

奪われたのではない。忘れられてしまったのだ。

(だとすれば、私は……)

◇

こんにちは、とアセルスは言った。

緑色の髪の少女、緋色の衣装に身を包み腰から剣を提げた半妖のアセルスは焼却炉を訪れ、きよろきよろとあたりを見回してから簡単な挨拶を口にした。

「はじめまして、私はアセルスといいます。紅さん、聞こえますか？ この焼却炉を管理しているのはあなただとジーナから聞きました」

紅は少し躊躇ったが、しかし最後には結局ありのままを包み隠さず話すことにした。焼却炉のこと、アルキオネのこと、もし針の城から逃げ出せば必ず追手がかかるであろうこと。それは自らの罪悪感から逃れるためだったかもしれない、あるいは選択をアセルスに押し付けるための責任逃れだったのかもしれない。けれどももしかしたらそれは——オルロワーージュの力を継いだ少女なら迷える自分の思惑など容易く吹き飛ばし、

正しい選択肢を選びとつてくれるのではという淡い期待があったからかもしれない。

勝手にいなくなるのは確かに失礼なことかもしれないが、だからといってなぜ追われ、しかも命まで狙われなければならないのか、とはじめアセルスは訝しげにしていたが、紅が丁寧に説明するとすぐに納得してくれた。針の城からしてみれば、アセルスが他者の手に落ちることはオルロワージュの血が奪われることを意味する。妖魔の君そのものではないにしても、アセルスの血を手に入ればオルロワージュの力の一端を掠めることくらいはできるだろう。故にファシナトウルから抜け出したアセルスはすぐにでも連れ戻さなくてはならない。またそうでなければ——あるいはオルロワージュの目が届かない別のリージョンでアセルスを殺し、吸血を行つてその力を奪い取つてしまうこともできる。アセルスが逃げ出せば監督役を命じられたイルドウンを蹴落とす理由ができるセアトにとっては願つてもないことだ。

アセルスは困つたように眉を下げ、声をひそめた。

「……弱つたな。イルドウンのことは嫌いだけど、だからといって迷惑をかける訳にも
いかない」

「……申し訳ありません。あなたを惑わせるようなことを言つてしまいました」

「いや、気にしないで。知らないでいるよりは知った上で苦しんだ方がずっとましだ」

「……ほんとうに？」

尋ねると、アセルスは弱々しく微笑んでおどけてみせる。

「さあ、どうか。自分で言っておいてなんだけど、やっぱりそう聞かされて困っている自分もいるんだろうと思う。聞かなければよかった、黙っていてくれれば良かったのにと。そういう私だって、たぶんどこかしらに存在しているんだろう。自分の弱さを疑えば、誰にだって無限に否定できるでしょう?」

「……あなたは」

「うん?」

「……いいえ。なんでもありません」

「そう言われるととても気になる。できれば何を言おうとしたのか教えてほしいんだけど……」

「……ごめんなさい。思わせぶりの態度をとって。あなたがあまりにも素直に自分の弱さを認めるので、少し驚いたのです」

「驚く? どうして?」

「妖魔は誇り高く生きるもの。自らの失敗や選択を悔いたりはしないものですから。自分のことを弱いと思う妖魔は、いずれ邪妖として消えてしまいます」

「ふうん。そういうものかな……。確かにイルドゥンなんかを見るとそうかもしれない。……でも、オルロワージュはちよつと違うような気がする。あの人はなんだか……」

妖魔の君だつてのに、どこか妖魔らしくない気がする……。不思議な人だよ、ほんと……。迷い続けているのに、けして迷わない、そういうところがさ……」

「そうなのです」

声を僅かに高く跳ねあげ、紅は嬉しそうに語りだす。

「あの方は、オルロワージュ様は特別なお方なのです。妖魔の中にあつて妖魔を超える存在。唯一無二のかけがえのない人……」

「オルロワージュのことが好きなんだね」

はい、と答えるだけで充足感が満ちた。オルロワージュへの愛を認めるだけで胸が誇りで一杯になる。また一人になったら苦しむことになるだろうと思いつながら、それでも誰かに自分がオルロワージュを愛していることを伝えられるのが嬉しかった。

「紅さん。あなたの姿が見たいな」

「え？」

「さつきまでの元気がない喋り方より、今のあなたの方がずっと魅力的に思えるんだ。オルロワージュのことが好きだつて笑うあなたのことを見せてよ。私もあの人のことが好きになれそうなんだ。一緒に話をしよう」

「それは……できません」

「どうして」

「私がとても醜いからです。人にこの姿を見られるのが私にとってはひどく苦痛なので
す」

「……だから姿を見せないの？」

「姿を消しているわけではありませんが……自らを恥じている内に自然と姿かたちは薄
れていきました」

「そんな生き方は悲しいよ」

「そうですね」紅は儂い笑みを浮かべてそつと涙を流す。「私もそう思います」

声の震えを聞き取ったアセルスはむつと眉根を寄せた。

「人間の私に比べれば、妖魔のあなたたちの方がずつと綺麗じゃないか。あなた
の姿を見たことが無い私が何を言ってもそれは無責任かもしれないけど、きつと私の方
が不細工だよ。……って、だからって、それでまああなたの悩みが解決するわけでもな
いけどさー」

「あなたはとても美しい方です。お顔を見ればそれがわかります」

「それは、どうか……」

アセルスは静かに言う。

「半妖になつてニキビも取れたしソバカスもなくなつた。でもね、顔の造作まで変わつ
たわけじゃあないんだ。私の顔は私のままで。……それなのに、どうしてだろうね？」

針の城で目覚めてから綺麗だねって言われることが突然増えた。これまでは一度だつて無かつたのに。お城の侍女も、ジーナにも、あなたにも言われた。みんなが私を褒めてくれる。優しくしてくれる。だけど、私にはわかつているよ。自惚れるほど私は美人じゃない。もし、仮に私の何かが美しいというのなら……それはやっぱり有難いオルロワージュ様の血液のおかげなんだろう。……でもさ！　だとしたら、美しいとか醜いって一体何なんだ。外見じゃなくて、体の中の血が美しいとそう思わせるっていうのなら、それは洗脳や催眠と何も違わないじゃないか。……ねえ、紅。美的感覚なんてそれぞれ違う。私がいま美しいと思うことを、別の場所で誰かが醜いと言う。美醜なんて、根本的には気持ちの問題だよ。……ジーナはね、お姉さんのことで悩んでいたときにあなたに話を聞いてもらえてすごく助かつたんだ。あなたのことを優しい妖魔だつて言っていた。もつとちゃんとお礼を言えば良かつたつて、そう言つてた。だから私は思うんだ。たとえ他の誰の世界であなたが醜かつたとしても、私の視界に捉えるあなたはどんな時でも美しい。誰かに優しくできるあなたはとても綺麗だと思う。オルロワージュのことが好きだつて言うのなら、もういちど会いに行こう。会いに行つて、好きだつて、あなたのことが必要なんだつて言いに行こう。あの人はきつと受け入れてくれるよ」

凜とした声、澆瀨としたアセルスの表情に紅はそつと穏やかな微笑みを浮かべた。

「ああ……」

紅は見えない姿のままアセルスに近づき、その右手を自分の両手でぎゅつと握りしめると熱いため息をついてこう言う。

——お前にながわかんというの？

◇

感電したように右腕が不意に痺れた。とつさに腕を引こうとして、しかし紅の両手がちりと捕まえられた右腕はびくりとも動かない。「紅？」訝しげに声を上げると今度は右腕に突然すつと凍りつくような寒さが襲い、アセルスは驚いて前方をまじまじと見つめる。見えるはずのない紅が確かに笑う気配がした。

「何も知らない癖に」

唐突に響いた紅の声に反応するように、アセルスの右腕に無数の穴が生まれる。見る見るうちに膨れ上がった穴からは煮えたぎった鍋から噴きこぼれるようにぐつぐつと沸騰した血液が飛び出し、焼けついた肌の上でしゅつと蒸発する。

ぐ、と低く呻いたアセルスが振り払おうと暴れるが紅は冷たい声を上げ、「離さない

わ」と化鳥のような笑い声をあげた。

「燃えろ、燃えろ。何もかも燃えてしまえ」

どす黒く変色した右腕が膨張し破裂する。どろどろに溶けだした肉がぶちまけられ周囲に散らばり、突き出した骨がひそやかに焦げていく。

内側からアセルスを焼く紅は童女のように顔を綻ばせて物語りをはじめた。

……私はそつとしてほしだけなのに、誰もかれもが勝手なことばかり言うの。それならば何もかも燃えてしまえばいいわ、焼け焦げてしまえばいいわ。

私が言葉を望んだら、あの方はいつも愛していると喋りつづけてくれた。何度でも抱きしめて、夜という夜をみな熱情のさなかに溶かし固めて私を抱いてくれた。

愛していた。

あの方が好きだった。

だってあの方はとても弱い方なのだもの。いつも孤独で寂しそうにしている人だから、私が寄り添って慰めてあげなければならぬのだもの。

あの方は幸福になるべきなの。幸福にならなければならぬ。あの方にはいつでも笑っていて頂きたいの。私はそう願うの。

何年も何十年もあの方を愛した。何十年の夜伽を超えて何百年の口づけを交わして

けれどもけして薄れることのないこの愛に私は焼かれた。悶えるほどの熱い情欲、膨れ上がる下腹部の炎！

……。

……………。

そして時は流れたわ。

私はいまあの方の寝た夜具を抱いてあの方の残り香を焼く。

あの方は私を憎んでは下さらなかった。嫌われることさえできなかつた。せがみさえすれば何度でも「愛している」とそう言ってくれた。妖魔の君、妖煌帝オルロワージュ様の唇からは永遠の調べにも似て私への愛の言葉が途切れはしない。

それでも生きている内に段々とあの方は笑うことが少なくなっていく。以前よりも楽しそうにすることが減っていく。例えば笑ってはいてもそれはお芝居のように仮初の表情に思えた。

「愛しています」と私が言う。

「そなたを愛している」とあの方が答える。

でもそれは言葉なのでしょ愛と言う名の言葉でしかないのでしょうか。

つまらなそうにしているオルロワージュ様を見て私は思った。「ああ、私が悪いの

だわ」だからあの方を楽しませるために何か違うことをやってみなくてはと考えた。

あの方と戦うこともあった。戯れではあったけれど敵うはずもないあの方に牙を向いて血を流してみたかった。でも私には竜に対する蟻のように敵となることさえできなかつた。

馬鹿の振りをしてみた。芸やまじないを学んでみたりもした。そして時が流れ、流れ流れて停滞は続いた。はじめの内は笑っていても、いつかはあの方も飽きて行く。私の全てに飽きて、飽きてしまったご自身に傷ついて、それでも枯れ果てた心を懸命に動かして私を慰めようとしてくれる。愛していると言ってくれる。

あの方が好きだわ。オルロワージュ様を愛しているわ。

でも私では駄目なのよ。もう私では足りないのよ。その内に何をすればあの方を笑わせてあげられるのがわからなくなつた。どんな顔をしてあの方の前に立っていれればいいのかわからなくなつた。どんな顔をしてもそれは過去に繰り返したお芝居の再現でしかないような気がした。気がついたら上手く笑うことが出来なくなつていった。笑おうとしても顔が引き攣つて歪んでしまう。誰かを傷つけるためならいくらでも笑えるのに、愛そうとすると途端に笑えなくなるの。だから私なんて消えてしまえばいいの。消えてしまつて忘れられて滅んでしまえばいいの。

あなたの名はアセルス。何も知らないくせに私を美しいと言う。たかだか十年かそ

こら生きただけの女が、時の悠久を知らずに愛を語ろうとする。あなたなんて死んでしまえばいい。

悲しみに噴出した炎がアセルスの全身を舐める。

揺らぐ炎に輪郭をなぞられて紅の顔がようやくアセルスにも見えた。紅は泣いている。なぜ泣くのだろう。自分の力ではどうすることもできないから泣いているのだろうか。どうすればいいのかも自分では決められない無力を嘆いているのだろうか。

ふと、不可思議な既視感が沸き起こった。力なく自嘲するこんな泣き顔をいつかどこかで見たことがあるような気がした。それはもしかしたら自分の顔なのかもしれないかった。

悔しいな、とアセルスと思う。自分でも訳がわからないままこみ上げる悔恨にぎりりと歯を食いしばり、腕を焼かれる痛みを束の間忘れた。

「馬鹿！」そう言つてがむしやりに頭突きをかますと、「ふま」と間抜けな声を出して紅がのけぞる。

「ば、馬鹿……っ！」

戸惑つたように声を揺らしながらきよとんとしてみせる紅の鼻からほろと血が零れ落ちた。無様に鼻血を流す紅が思わず顔を拭おうとした両手を今度はアセルスが捕ま

えて握りしめる。見る間に焦げ付き燃えて行く両手に脂汗を流しながらしかしアセルスはしつかと紅の眼を見つめて囁いた。

「消えてしまえばいいと言うのなら、本当に消えてしまえば良かったんだ」

「え……?」

「そつとしておいて欲しいならそんな顔をして泣くなよ。寂しそうに涙を流しておいて感情移入されたくないなんて勝手だよ。そんな風に泣かれたら、思い切り抱きしめて、頭を撫でて、あなたのことが好きなんだつて言つてあげたくなる。自分のことが好きになれなくて泣いている人を見たら、そんな人を放つておいてしまったら、きっと自分だつて救われたいんだらうつて絶望したくなるじゃないか」

「そんな……そんなの、それこそ勝手だよ!」

「ああ、そうさ。私は勝手なんだ。あなたの話を聞いてたら無性に腹が立つてきた。オルロワージュをぶん殴りに行つてくる!」

「や、やめなさい!」

「……まあ、いきなり殴るのもおかしいから、とりあえずオルロワージュがどう考えてるのか聞いてから場合によっては殴る!」

「やめなさいと言っているでしょう!」

「……じゃあ、どうしたらいいの? どうしたらあなたは「元気になるの?」

「それがわからないから……!」

「ここにいたってあなたはそうやって泣いているだけじゃないか」

「なら、どうしろというの?」

「旅をしよう」

「旅……? どうして……?」

「今ここにおいても辛いだけなら、どこにも居場所が見つからないのなら……。ここではないどこかの、まだ見たことのない星の辺境地にいつか生きることのできる場所を探そうよ。私はそのために来たんだ。このファシナトウルを抜け出して私が望んでられる場所を作り出すために旅をするんだ。だから紅、一緒に行こう」

「そんな場所がこの世にあるの? あの方から離れて、本当に私は幸せになれるの?」
アセルスは残酷に首を振る。

「そんなことは、わからない。旅をしてみても居場所が見つからなかったら——短い私の寿命が尽きて、それでも幸せになれないのなら、その時は何もかもを諦めて盛大にこの世を呪って死ねばいい。やるだけやってみて、駄目だったら死ぬしかない。だからそれまでは泣くのを止めて、私と一緒に辺境を目指そう」

「辺境……この世の果ての、開拓地……」

不確かな響きを辿るように紅の舌がその言葉を繰り返した。アセルスの握りしめる

紅の両腕がわなわなと震えた。くれない、とどこか舌足らずにアセルスが名前を呼ぶ。優しく紅を見つめるアセルスの瞳、それは夢見る若者の眼、恐れも知らず無知無謀な場所へと足を踏み出す冒険者の眼だったから、紅ははつと息を呑んでその瞳を覗き込みゆつくりと瞬きをする。

——アセルス……様……。

——あなたも私のことを様と呼ぶの。どうしてかな……。私はそんなに偉い人間じゃあないよ。

——いいえ、いいえ……。いま、あなたをアセルス様と呼ぶのは、私の意志です。そう呼びたいの……。アセルス様……。私を連れて行って下さいますか？ あなたの求める黄金郷への旅路に、私も加わってよろしいのですか……。？ ああ、あなたは開拓者。この世の果てを目指す辺境嬢……。

囁いた紅は炎を纏って上空に舞い上がり、ぱつと鮮やかな火の粉を散らして空を彩る。わ、と歓声を上げたアセルスが楽しげに手を差し伸べると、浮遊する紅はその小さな掌を掴まえて裏返し、手の甲にそつと唇を落とした。

あなたの姿が見たいよとアセルスは言う。あなたの形をこの手で確かめて、抱きしめ

てみたいんだと。

告げられた紅はほうと甘いため息をついてその身を翻す。するとその体は次第に色を取り戻しながら縮んでいき、赤銅の揺らぐ髪を持つ小人の姿となった。

「いまはこれがせいっぱいです」

可愛らしい声で答えた紅はふわりと浮かんだかと思うとアセルスの肩に腰かけ、うなじにもたれかかって安らかな表情で頬を寄せた。

第十三幕 生きるも死ぬも同じ青／ぼっちやまのおばけ銃

青年は海を見るのが好きだった。

暇さえあれば浜辺の大岩に腰かけて尽きることなく打ち寄せる波を見つめた。太陽の光をぎらと反射して白く輝く海が風にさざ波を立てるのや、上空を飛びまわる海鳥たちの影が青い水にまばらな斑点を残すのを見てるのが好きだった。潮風を浴びてひりつく肌や喉の渇きも気にはならなかった。水平線はいついかなる時も不確かに滲んでいて、青年にはそれが幻想への境界線に思えた。

海は青い。

もしこれがサンゴの白い砂を孕む観光地の浅い海であれば緑宝の淡くきらめく美しい海であつたのだろうが、あいにくと青年の治めるオウミは純然とした港星であり青は青でもその色はどこまでも深くどす黒い。人々の悩みや時には命さえもを呑みこんでしまう海の色は慰めではなく孤高を青年に学ばせた。

目の前で小魚がちやぷりと波打ち際に跳ねる。愚かな魚もいたものだ、と青年は口元を歪めてふと昔のことを思い出した。小魚の鱗がぬると波に滑る。

かつて海が青いのは空の青を写しているからだと思つて疑わなかつたあの頃から、自分はいまでもこうして海を眺め続けている。放蕩者の叔父に「海が青いのは水が青い光を散乱させるからだ」と教つた今では、思い出すたびに海の青と空の青とを等しく考へていた幼い自分を秘密のおもちゃ箱にでも押し込めて地下室にしまいこんでしまいたい、と無性に恥ずかしくなる。

それでも、と青年は海を見るたびに思う。この世に真実などどうしてあろう。成長した青年は色というものがつまるところは光の反射に過ぎないもの、どのような波長の光を反射・吸収するかという物体の性質によるものだということを知っている。それでも青年は物理学者でもなければ哲学者でもなく、ただの領主であるところの彼は時々こんなことを考える。

全ての命が始まる海の青と、死んだ人が天へと昇るその空の青とは同じものだ。生きるも死ぬも同じ青だ。今日、海に飛び込んで青に染まる魚釣り人は、海中に沈みながらしかし同時に天空へと墜落しているのであり、等しく青に染まるどころ例外さえ何一つなく、圧倒的な青の中で生まれて死んでまた生きる。青年にとつて青と言うのはそういう不可思議を象徴するものだった。海の青と空の青とが交わる水平線が滲んでいるのが好きだった。

青年は若く美しく、そして莫大な財産を所有していた。神に望むまでもなく何の努力

もなく彼は多くのものを与えられていた。オウミを連綿と統治する一族に生まれた青年は祝福された将来を約束されており、額に汗して働く漁師たちを顎でこき使つていれば苦勞なく大金が転がり込んでくる。親の金で大学へ通い、それなりの経済学と商法を修め、友人たちとの殴りあいや学生街での冒険、娼館での顔を覆いたくなるような失敗を経てこのオウミへと歸つてきた青年は病で静養中の父に代わつてすんなりと領主の座に収まつた。

悩みは何もなかつたし十二分に恵まれていた。時おり港町の情熱的な褐色娘との一夜限りの恋に落ちることもあつたけれども、次の日に目覚めて海を眺めていると何もかもがどうでも良くなつてくるのだつた。

青年は海を見つめる。海が凪いでいる。いつもの癖で彼はごしごしと自分のまなこを擦る。痒いわけでも眠たいわけでもなく、ただ静かに涙を零し、視界を滲ませてしまふために何度も眼球を弄ぶ。真つ赤に充血した眼球の向こう側で青く濁つた海が次第にぼやけていく。滲んでいつて、朦朧として、いつか揺らぐ陽炎の幻想になる。

いいぞ、これでいいんだ。もつと滲んでいけ。霞んでしまつて、水平線の果てに滲む海と空との青が一つになればいい。

来る日も来る日も海を見つめた。青年はそれで満足だつた。他に何もいらなかつた。与えられたものが多すぎてそれ以上のものを求めることはできない。だからこれでい

い。青年はそう思っていた。メサルティムと出会うまでは。

恋に落ちたその時に彼の心中に沸き起こった感情は何だろう。美しい、だろうか、可哀そう、だろうか。いいや違う。愛するメサルティムを見て彼が思うことはただ一つ。ああ、彼女は海の化身、海と言う海のあの青を押し固めて凝固させた宝石だ。彼の眼に映る彼女の肢体はまさに海そのもので、その吐息はどこか潮騒の音に似ていた。くすんだ灰アッシュグレーの肌を持つ人魚メサルティムは青年の待ち望んだ海の体を持っていた。その色は深海のどす黒い青色、退廃と倦怠にけふる海底の色。星の砂を散りばめたように輝く銀の髪を靡かせて彼女が遠い目をする時、彼は息を呑んでじっと見蕩れた。

メサルティムは地元の漁師の網にかかって怪我をしたのだと言う。命からがら逃げ出したものの体のあちこちを怪我してしまい、疲れ果て浜辺で動けなくなっていた所を青年が見つけたのだ。

青年は自分の館へとメサルティムを連れて帰った。簡単な手当てをし、ベッドに寝かせたもののメサルティムは依然として具合が悪そうにしている。一体どうすればと困っていると丁度通りがかったメイドのメアリーチェンバーが口をあめぐりと開けて驚いた。

「あらまあぼっちゃま。またぞろ違う女をつれ込んで……って。わ、人魚！」

「……静かにしろメアリーチェンバー」

分厚い瓶底眼鏡をかけたメイドは興味津津といった顔つきで部屋の中を覗き込んできたが、青年がそつと立ちはだかつて視線を遮るとにたあ、と嬉しそうに笑った。

「いけませんわぼっちゃま。人魚なんかに手を出したらバチがあたりますよお」

「彼女は怪我をしているんだ。放っておける訳がないだろう」

「はいはい。そうでございますね。恋する若者はだいたいそう言うんでございます。そんな風に聞こえの言い言葉で自分を騙しておいて、内心では熱いパトスのエネルギーを迸らせているものなのでございます。ああ美しき青春の日々」

「うるさいぞ。そんなことより手当てをしても一向に彼女は眼を覚まさないようなんだ。医者を呼ぶべきだろうか？ 僕はどうしたらいい？」

「そうですねえ。あたしなら、すぐにでもふん縛ってシユライクの研究所にでも高値で売り付けますね」

「君に聞いた僕が馬鹿だった」

青年は叩きつけるように扉を閉めた。まったくなんてメイドだ、と頭を抱えていると、メイドは遠慮がちに扉を叩いておすおすと謝罪する。

「ごめんなさいぼっちゃま。そんなに怒らなくてもいいじゃありませんか。ちよつとした冗談です。ジョークジョーク」

「おい、君が幼馴染でなかったら頬桁を張り飛ばしているところだぞー！」

「ではお詫びも兼ねて一つアドバイスを」

「なんだ。言ってみろ」

「金魚を飼うなら金魚鉢に」

「……なるほどな。それもそうだ。というなせ気がつかなかったんだらう……僕は馬鹿か」

「メアリーチェンバーはそんな馬鹿なぼっちゃまもお慕いしておりますよ」

「うん。そういうお追従はいいんだ。とにかく、彼女のため室内に人工の池でも拵えろとしよう」

「この部屋にですか？ それいくらかかるんですか？」

「金ならいくらでもあるさ」



庭の噴水にそつとメサルティムを浮かべると、気のせいか彼女の肌が艶を取り戻したように見えた。半日ほど様子を見守っているとようやくやく水妖は眼を覚まし、周囲を訝しげに見回してはつと険しい顔をする。

「眼が覚めたんだね。よかった……」

微笑みながら青年が近づくとメサルティムは低い唸り声を上げ、「触らないで」と言った。静かな、それでいて確固とした決別の意志を示す言葉だった。拒絶されたじろいだ青年は弱々しく顔を歪める。

「安心して。危害を加えるつもりはないんだ。君は怪我をして浜辺に打ち上げられていたんだよ。だから……」

「……」

「だから今は安静にしてなきやならない。いま、君のために小さな池を作っているところなんだ。部屋の中でも水浴びができるように」

「……」

「何か食べたいものはないかい？ 好きなものは何でも用意するよ。君の体力を回復させるために必要なことは何でもする……」

「……」

「嘘じゃない。本当だ。何の不自由もさせやしないさ。……君の名前を、聞いてもいいかな……?」

「……メサルティム」

「メサルティム！」青年はぱつと輝かせる。「とてもいい名前だ！ それは星の名前だね？ 神秘的で、謎めいて、光り輝いている！ メサルティム！ 君の名前はメサルティム」

ムと言うんだ!」

「……あの」

「なんだい? 何でも言つてごらん!」

「私を海に帰してください。仲間のところへ帰りたいのです」

青年ははつと表情を変え、申し訳なきように俯いて唇を噛みしめる。

「ごめん……それはできない」

「どうしてですか?」

「だつて君は……その、まだ怪我也治つてはいないし、下手に動いたら傷が開いてしまうかもしれない……。だから……だから、私は、君がちゃんと元気になるまでは、君のことを守らなければ……」

「……」

「嘘じゃない! 本当だ! 君を助きたいんだ!」

「そう……ですか……」

メサルティムは悲しそうに顔を歪め、「ありがとうございます」と小さく囁いた。

やがて人工池が完成すると、水を張った巨大なタライにメサルティムを乗せて使用人総動員で個室へと運んだ。循環する清潔な水を得てメサルティムの傷を少しずつ癒え

ていったが、しかしその憂い顔は依然として消えることはなかった。深窓の令嬢然として、窓から外の世界を覗いては悲しきため息に咽喉を震わせ、人魚はさめざめと涙を流す。

「笑つておくれ。君のそんな顔を見るととても辛いんだ」

胸を掻き毟るような痛みに青年が懇願すると、美しくまつ毛を濡らしたメサルティムは何も言わずに眼を閉じ、苦しそうに首を振る。

意気消沈して自室へ戻った青年が目元に手を当てて項垂れていると、メイドがどたばたと足音を立てて「大変でございます」と飛び込んでくる。強引に腕を引くメイドに連れられて地下室へとやってきた青年はそこに広がる光景を見てあんぐりと口を開けて驚いた。使わない家具や備蓄を保存してあるに過ぎなかった地下室は今や魔窟と化しており、おそるおそる扉を開けて覗き込むと饜えた臭いとともに不気味な笑い声が響きわたる。「なんだこれは！」と慌てて尋ねるとメイドはこともなげに「さあ」と首をかした。

「どうもあの人魚姫を保護してから変なことが続きました。地下室に行った使用人が誰もいない筈なのに肩を叩かれたことに始まり、何も無いところで転んだりやけに持物をなくしてしまったり、その挙句がこのダンジョンでございます」

「そんな話一言も聞いていないぞ」

「ぼっちゃまはあの人魚姫に夢中なご様子で私どもの忠告なぞまるでお耳にとめて下さりませんでしたので」

「ああ、悪かったよ！ ……それで、原因はやっぱりメサルティムなのか？」

「いや、わかりませんよお。メアリーチェンバーは普通の人間ですもの。でも水妖を閉じ込めておくと良くないことが怒る、水神様がお怒りになるとのもつぱらの噂。妖魔というのやはり魔的な存在でございますから、もしかしたらただいるだけで“魔”を引き寄せるのかも」

「……考えすぎじゃないか？」

「そう言うのならもう一度地下室への扉を開き、よくよく耳を澄ませてごらんなさいまし。……ほら、すすり泣くようなあの風の音が、どこか“帰りたい、帰りたい”と言っているように思えませんか？ もしかしたらこの奇妙極まりない場所はあるあの人魚姫の深層心理が生み出したもので、ダンジョンを抜けて行ったその先には仲間の待つ海へと繋がっているのかもしれないよ」

「そんな馬鹿な」

「馬鹿が馬鹿をやったその結果がこの馬鹿馬鹿しくも怖ろしい変容なのじゃありません？ あの、あたしちよつと地下室以外で何か異変が起きていないかどうか調べてみたくんです。そしたら……」

これ、と言ってメイドが手渡してきたのはおもちゃの銃だった。屋根裏部屋にしまっておいた銃をなぜわざわざ持ち出してきたのだろうか？ 訝しんだものの青年は素直に受け取って「懐かしいな」と顔を綻ばせる。

「昔、よく二人で地下室を探検したな。叔父さんがくれたお守りのナイフとこのおもちゃの銃を持ってさ。お化けを退治する秘密の銃——ゴーストキャノンだ、なんて設定を考えたりして」

何気なく銃を構え、ふざけ半分に狙いをつけて引き金を引いた。メイドが慌てて飛びのく姿に苦笑する。

「おいおい、そんな演技をしてもらって喜ぶ年でもな——」

直後、けたたましい音を立てて床が弾け、爆ぜた木片がくるくると宙を舞った。「な……」 嘩然としてメイドを見ると、彼女は真剣な顔をしてこくこくと頷く。

「そのゴーストキャノン、ゴーストキャノンなんです」



メサルティムは笑わない。館の地下室は少しずつおかしくなっていく。途方に暮れる青年の元にやがて二人の女性が訪ねてくる。肩に人形をのせた緑の髪のアセルスト

楚々とした物腰の白薔薇。どこか人間離れた霧囿気を纏った二人は水路に浮かぶ花文字を見てやって来たのだと言う。

「この屋敷に水妖がいると伺ったのですが」

「それが何か？」

「水妖の仲間がその子を探しています」

「帰してあげないと」

アセルスはそう言つて真つ直ぐな瞳を青年へと向ける。帰してあげないと。その言葉の正しさと若さにたじろいで青年は僅かにうろたえる。

「出つてくれ！ いや、待て、待つてくれ！ ……さつきの話、本当なのか？」

「ええ」

「そうか……。早く海に帰した方がいいのはわかっているんだ。でも私は……。私は……」

「落ち着いて。とにかく、水妖に会わせて下さい。話がしたいのです」

「……わかりました。こちらへどうぞ」

怪しげな二人をメサルティムの部屋へと案内し、青年は暗い顔で言う。

「ここです。この部屋です。しかし、満身に話すことはできないでしょう。彼女はまったく口をきいてくれないのです」

「あなたは、遠慮してください」

「しかし……わかりました」

青年は扉を閉め、その場を立ち去ろうとした。が、やはりメサルティムのことが気になった。客人たちはどうするつもりなのだろう？　もしかして危害を加えるつもりなのではないか？　もしも妖魔を狙う研究者や狩人だったとしたら、その時は自分が守らなければ……。

青年は扉に耳を当てて中の様子を窺う。アセルスとメサルティムの会話を聞いてしまふ。

——高貴な妖魔の臭いがする……。人間なのになぜ？　……気の障ることを言っ

てしまいましたか？

——いいや。君は本当のことを言っただけさ。私は半分は人間、半分は妖魔というこの世でたった一人の中途半端な存在。

——お名前をお教えてください。高貴な方。

——アセルス。

——アセルス様……気高い響き……。

——アセルス様は、オルロワージュ様の血を頂いたのよ。

——妖魔の君オルロワージュ様！ お許しください、ご無礼をお許しください！

——なぜそんなに怯えるの？

——妖魔の君の怒りに触れましたら、下賤な身の私のなど消滅してしまいます。

——大丈夫だよ。私はあの人じゃないから。君のことを教えてよ。そのために来たんだ。

——私はメサルティムと申します。このオウミの海に住んでいます。漁師の網にかかり、今はこうして虜の身となっております。

——怪我していたのを治療してくれたのではないですか？

——大事にしてくれているのはわかるんです。けれど、人間の臭いは嫌いです。息が詰まる……帰りたい……。

——行こう！ 居たくもないところに居る必要はない。

——あの領主は、この水妖をあい……。

——望んでもいないものを押し付けて縛りつける。そんな権利は無い！

——でもあの人間、外に出してはくれません。

——……方法はあるよ。きつと。

“あの人間”……か……。

壁に押し付けた背中をずると下ろしながら、青年は醜く歪んだ笑みを浮かべる。背中の皮がそのまま擦りつけていくような気がした。

メサルティムの声を久しぶりに聞いた。アセルスという女の名前をうつとりと眩く陶醉した声。オルロワージュの名に怯える震えた声。青年の前ではけして見せなかつた弱音。今日、はじめて会つたはずのアセルスにはあれほどの感情を曝け出しながら、自分には人形のように表情一つ変えなかつた。

人間の臭いは嫌いだとメサルティムは言つた。ひどい言葉だ。個人の性格や振る舞いですらなく、種族そのものを否定されてしまった。生きている世界が違う、そう突き放された気がした。

青年は唇を噛みしめて顔を覆う。今さらどうしたらいい。自分はこうしてヒトとして成長してしまつた。今さら生まれる前からやり直すことなどできはしないし、ヒトであることをやめることもできない。

く、う……。こみあげた嗚咽を懸命に堪え、青年は激しく眼を擦つた。視界が激しく乱れ、痛みに世界が滲んだ。

ぼつちやま。心配そうな声に顔を上げると、階段の下でメイドが心配そうにこちらを眺めている。青年は力なく微笑み、ふらふらと立ちあがる。

「そんな目で見るとよメアリーチェーンバー。君は意地の悪い顔で僕を小馬鹿にしている

くらいが丁度いい」

「でも」

「花文字というのがなんなのか君は知っているか？」

「……いいえ」

「僕もだ。そんなもの、今まで知りもしなかった。大学でも、社交界でも、誰も教えてはくれなかった。……この屋敷を出てしばらく行くと、見慣れた筈の水路に桃色の花が浮かんでいる。何気ない花さ。人間の眼にはただ花がその命を散らせているようにしか見えない。……でも、それは違うんだよ。僕らが息をするこの社会とは別の場所に生きる者たちには、その花が何を示しているものなのかがわかるらしい。水路に浮かぶその花は、人間に捕らえられた仲間を探してほしいという水妖のメッセーじなんだそうさ。その花文字を見て……」

青年は振り返り、メサルティムの部屋を寂しそうに見つめる。

「その花文字を見て、捕らわれた姫君を助けに来た勇敢な王子様が彼女たちだ。悪党は僕さ」

「……」

「何か言ってくれ。メアリーチェンバー。君の助けが必要だ」

「……あなたのために笑いましょうか？」

「そうしてくれると助かる」

メイドはゆつくりと深呼吸をし、眼鏡を外して前掛けで丹念に拭いた。それから再び眼鏡をかけ、にたあ、と悪戯っぽい笑みを浮かべてからからと笑う。

「あら、あら、ぼっちゃま。これはまた見事なまでの負け犬っぷりでございますね。愛した姫を悲しませるばかりか、自由を束縛する悪者として嫌われる羽目になるとは！」

「そうだな。その通りだ」

「ぼっちゃまにはどうやら道化の才能があるようでございますね。もしこれが一つの戯曲であるのなら、きつと観客たちは人魚姫に同情し、助けに来たあの方たちを応援することでしょうね」

「そうだな……。きつとそうなんだろう……」

青年はきつと顔を上げ、きつぱりとこう呟く。僕は大馬鹿野郎だ。



それからの話をしよう。

無事に姫は救出された。

しばらく屋敷の中を歩きたいとアセルス達は言った。地下室へと消えて行った彼女

たちを心配しながらはらはらしていると、やがて戻ってきた一行にはメサルティムの姿が欠けていた。彼女はどこに行つたのですか、と青年は尋ねた。彼女は海に帰つたのだとアセルスは答えた。彼女は無事なのか、本当に幸せになれたのか、しつこいほど確認したがアセルスはしつこかと頷いて彼女は大丈夫ですと言う。

……そうですか。青年は静かに納得してみせると、逆にアセルスの方が驚きを見せる。

「本当に信じるんですか？　怒らないんですか？」

「……どうかお引き取りを。あなたの顔を見ると、メサルティムのことを思い出してしまふ」

「……お元気で」

「あなたも」

短い挨拶を交わしてアセルス達は去つていき、館には再び元の平穏な生活に戻る。荒れ果てた地下室が元に戻るといふことはなかったが、使用人が突然消えることはもうない。メサルティムはいない。

また海を見つめる日々が帰つてきた。いつものことだと思ふ。たとえ愛する人を失つても青年は金持ちだ、何不自由することもない。だから海を見つめるのだ。他にやりたいことなどありはしないのだから。

海を見る。まなこをぐりぐりと巡らせて四方八方を見渡し、海と言う海を視界に捉えようとする。浜辺の崖の苔むした暗がりや、波が打ち寄せる様々な漂流物の不衛生な見た目。小石だらけの砂浜は歩くたびに鋭い痛みがはしるけれど水切りがしたい時には役に立つ。

朝の陽ざしに焼かれてぎらつく灼熱の波、昼中の蒼天に染まる穏やかな水、闇に覆われて黒々と冷え切った海。目を覚ましてからは日がな一日海を見つめて変わりゆく景色を観察する。

どう考えても自分が不幸だとは思えない。家に帰れば豪勢な食事と温かな寢床が彼を待っており、こうして海で暇を持て余しても誰にも責められない。確かな財産があり、信頼できる使用人がいる。

満ち足りた人生の中で彼は覚束ない足取りでよろよろと波打ち際に駆け寄り、偏執的なまでに眼を擦り続ける。痒くて痒くてたまらないんだ。やがて激痛に呻き声さえあげて身を振りながら青年はなお目を擦り、膨大な涙を縷々と流す。見たいものが見られないのなら幻覚の中に理想を求めるほかなく、滲みゆく視界の中で彼は必死になつて海をまほろばと化そうと企んだ。

——人魚とは陽炎に過ぎぬと言ったのは誰だったろう。難破した船員が海に漂う木片にしがみ付いて昼夜を過ごし、日光に茹る脳と暑さに岩の上の動物を人魚と見間違

う。全ては錯覚、非現実には過ぎない。それは人間の世界のものではない。あちら側の世界のものだから。

それならば陽炎で構わぬ。陽炎の中に人魚を求め、ただ一言でもいい、愛していると今度こそ告げられたなら。

青年の見つめる世界に夜が降りた。

凍りつくように冷たい夜の海は、やはり空の黑夜を映したように黒々と静まり返っている。海とは空を映すもの。空に雲があるのなら海面にも雲が漂い、空に星があるのなら海は銀河となつて星を沈めた。水面を覗いて見える海の中にはちらほらと星が沈んでいるようで、誰かが無くした宝石や宝物が海底に散らばっているかに見える。

「メサルティム……」

朦朧と眩いて青年は海に映る星に手を伸ばした。おひつじ座はどこにある。海面に触れて得られないものならいつそ水面を超えて海の底へと潜っていこう。すうと息を吸ってさあこれからと飛び込もうとしたその瞬間、彼の良く知る小うるさいメイドが「ぼっちゃま」と声をかけた。

「何かを失って悲しいと思うのなら、さあ、どうぞ青春の自暴自棄なまますすぐお進みになればよろしいでしょう。このまますすぐ、海へと向かって、そうして辿り着いたあの水平線をぎゅうと握りしめて海と空との境界線をあやふやにしておしまいになつ

て下さいな」

「……それは暗に死ぬと言っているのか？」

無然とした表情で青年は答える。今さら水温の低さに驚いたようにぶると身を震わせ、まったく、と水面を叩いた。

「暗にでもさりげなくでもありませんよ。メアリーチェンバーはまさにそう申し上げているのです。だってぼっちゃまはいま死のうとしていたのでしょ？ そんな雰囲気が出ていましたよ。だいぶん、鬱陶しい雰囲気でしたよ」

「そんなわけないだろう。それこそ考えすぎだ。僕は何も身を投げようとしていたわけじゃない。……そうだな。ちよつと海に映った星を撫ぜようとしていただけなんだ」

「馬鹿ね」

「なんだよ」

「そういう浪漫溢れる台詞はどうぞ夢見る乙女だけに囁いて下さいまし。メアリーチェンバーはプロフェッショナルかつ成熟したメイド&レディーですのでそういう言動はこそばゆいだけです」

「ああ、そうかい」

「ぼっちゃま」

「……まだ何かあるのか？」

「……あなたは本当に、相も変わらず馬鹿なのね、ウイル」

久しぶりに名前を呼ばれた青年はきまりが悪そうに顔をしかめてそっぽを向く。

「……ああ、そうさ。僕は馬鹿だよ。そんなことわかつてるさ！ でもどうしろと言うんだ？ 仕方がないだろう。苦労するにもどう苦労したらいいのかさえわからない。意味もなく甘やかされて僕は育った。……そのくせ、親友だと信じていたやつはある日突然僕に跪いて「ご主人さまなんなりと」と言う。父さんも母さんも今日からは身分の違いをはつきりさせなくては、お前も後継ぎとして振る舞えだなんてのたまうんだ。少しは捻くれもするだろう！」

「それはお互いさまでしよう。世の中には、昨日まで一緒に鼻くそほじって笑っていた相手を主人として仰げ、と親に命じられた少女だっているのですから」

「そうかいそうかい。それで君ははいそうですかと領いたんだな」

「いいえ。あたしの返答は「え？ なんで？ だってあいつ馬鹿じゃん！」でした。

「……もちろん、その後でしこたま親に殴られました」

「……」

「……」

「……どうして僕たちはこんな話をしているんだろう？」

「どうにもならないことを、どうにもならないままに受け止めなければならないからで

しよう、きつと」

「わかつたようなことを言うんだな」

「女というのはこの世の全てを知っているかのようにふるまうことを義務付けられた人種なのです」

「まったくああ言えばこう言う口だなあ！ 一体誰がそんなことを君に命じたつて言うんだ？」

「それはもちろん、神様でございますよ」

「その神様は何でそんなことをわざわざ命じたんだ」

「あたしたちは一人では生きていかれないから。一人では生きていかれないのに一人で生きていかななくてはならないから。だからこの世の全ての女は自分自身を演技者として舞台上に立たせなければなりません。生きてはいない自分を生かしておくために、生きているように見せるために。……ええ、ほんとうに、そういうものなのでございませよ。全ての恋は叶わないもの。愛した人は得られないもの。だから女はどんな時でも訳知り顔で、傲慢に男を見下し、あるいはへらへらと世間を笑って、器に満たされた液体のように自在にその形を変えて生きていかななくてはならないの。……あなたにも、それが身に滲みて理解できるのではないですか？ これまで望んで手に入ったものがあった一つとしてありませんか？ あなたの名前を呼ぶのはこのあたしだけ。あの人魚

姫はあなたの名前を知ろうとさえしなかったのだもの。……ねえ、ぼっちゃま。だからあたしはこう思うのでございますよ。死にたいのなら死んだっていいじゃありませんか。……だってこのまま生きてもどうせ一人だし、死んでしまえば、もしかしたら来世で好きな人と一緒になれるかもしれないでしょう?」

いつしか湿りだしたメイドの声が僅かな悲しみを帯びて震えだすのに青年は気付いて、それは誰のことなのかと尋ねる代わりに口を噤んだ。

何の役にも立たない共感が胸の中で弾けた。メイドの言うことが彼にもよくわかった。同じものを失い、同じ悲しみを抱いているのかもしれない。けれどもその共感ほどどこまでも下らなく、何の価値もないものなのだ。なぜと言ってその共感から生まれるものは青年がメイドに対して感じる強い友情であり、その友情は誰に望まれるものでもなかったからだ。

メイドが前掛けをぐそぐそと探って放り投げてきたものを受け取って、青年は闇に眼を凝らす。それは懐かしい少年の日のおばけ銃。おばけを退治するためのゴーストキャノンだ。

「お撃ちになって下さい。撃ってしまえば、物語は終わります」

「こんな海の中じゃ、薬室チエンバも湿って撃てないんじゃないか?」

「ゴーストキャノンが空想を現実にしたものなら、きつと撃てますよ」

「空想を現実……か。本当に馬鹿馬鹿しい話だ」

ふ、と息を吐いて青年は眼を閉じる。ゴーストキャノンの銃把を握り、こめかみに突きつけ、そして昔のことを思い出した。

ものすごく気に食わない奴がいて毎日殴り合いの喧嘩ばかりしていたような気がする。お互いに鼻血を出して、わんわんと泣き喚いて、気がついた時にはいつの間にかに友達になっていたような気がする。拾ってきた猫を納屋に隠してこっそり育てたり、その猫が死んで夜中の森に震えながら埋葬しに行ったりしたような気がする。お互いの水切りの腕を競い合ったり、砂糖壺からいかに砂糖をちよろまかしてくるかを考えあつたりしたような気がする。

少年だった自分は大きくなって、友達も友達でなくなつた。自分がいかに金持ちであるかに気付いた少年は驕り高ぶるよりも途方に暮れ、いつしか海に取り込まれていった。飽きることなく海を見ていた。あの青く濁る海原の全て。太陽を反射して銀色に光る波。自分の知らない遠い世界、身分や財産などまるで関係のない異邦の地。

空と海とは同じものなのだ。少年の日の彼は信じた。空の青と海の青とは等しいもので、めぐり合うあの水平線の果てでは一つなのだ。いのちの生まれる海。死者が昇天する大空。生きるも死ぬもおんなじだ。みんなおんなじ青なんだ。何もかも。何もかも……。

ぼっちゃま、とメイドが言う。

ああ、と青年は答える。

自分が信じていたことは何だったろう。

海は空を映すもの。友達はけしていなくなったりしないもの。飼った猫は死なず、砂糖は好きなだけ舐めることができる。好きな人はみんな自分を好きになってくれる。

小さなころ、親友と一緒に様々な冒険を繰り返した。あの頃はおばけがいた。自分はお化けを退治することのできるスーパーヒーローだった。

自分の信じていたこと。

空と海。

永遠の友達。

猫。

おばけ。

成長した青年は泣き出しそうになりながらふと手に握ったおもちゃの銃をまじまじと見つめる。

この銃はゴーストキャノン。おばけを退治するための銃だ。

肩を揺らせて力なく笑いながら青年は高らかに銃を上げ、空を目掛けて引き金を絞った。星を撃ちぬけるはずもない弾丸で果たして何を滅ぼしたものか、寂しそうに空を見

つめて青年は俯き、やがて振り返って「家に帰ろう、メアリーチェンバー」と言う。

はい、と答えたメイドは目を赤くして、掌で涙を拭う。振り向いた青年を見つめ、嬉しそうにたあと悪戯な表情を浮かべてけたけたと笑い出し、まったく、本当に人騒がせなぼっちゃまでございますよお、いつものように生意気な口をきいた。

第十四幕 全ての乙女は邪悪でなくてはならない——炎の従騎士アルキオネの物語①——

——どうして私じゃないんだろうって、ずっと思ってた。

別に納得がいかなかったわけじゃあない。何しろメローペお姉さまはとんでもなく美しいし、一睨みで山も消し炭にしてしまうほどの力を持つていらつしやる。全てを燃やし焦がし尽くす炎妖姉妹の中でも群を抜いて残酷で、さつきまではころころと笑っていた筈なのに瞬きした後には突然冷たい眼をして殺戮を始める烈火の如き気性の方だからふらりと現れたオルロワージュ様があたしたちを見てまずお姉さまの元に歩み寄って愛の言葉を囁いたのもそれはそれで仕方のないことなのかもしれない。

あたしはメローペ姉さまより弱い。

あたしはメローペ姉さまほど美しくない。

悔しいけれど悲しいけれどそれはやっぱり事実だしぎりぎりど歯ぎしりしたくなったりもするけれどでもその時のあたしはやっぱり自分に自信が持てないでいた。だってあたしは元はいえばただの中学生だったからだ。

そのころあたしは中学生だった。隣の席の小西君が千切った消しゴムのカスをちびちび投げつけてくるのがすんげえうざくて「燃えちまえ」って呟いたら次の瞬間この世の全てが燃え上がって灰になった。あたしの通っていた市立南青山純情派中学は崩壊して塵になり、授業も無くなったから仕方なく家に帰ったらお母さんも不登校の弟もみんな骨だけになって焼け死んでいた。

あたしは一人になった。でも別に悲しいとも思わなかった。もともとそういう人間なんだろうと思った。自分で気がつかなかっただけであたしは頭のおかしい人間で、サイコパスとか殺人鬼とかそーゆー類のヤツだからきつと涙も出ないのだ。寝る前にベッドの上でそつと「もし家族が突然死んだらどんな気持ちになるかなあ……」なんて想像してみてもすつこい怖くなって慌てて眼をつぶったことだってあった筈なのにいざふたを開けてみたらこのザマなのだった。

「燃えちまえ」あたしは言った。「何もかも、燃えてしまえ！」

そう言うときあたしの操る炎がその星全体を覆い尽くしてあつと言う間にリージョンは死の星になった。住む場所もなくなったから仕方なくあたしは星間船の発着場へ赴き、薄気味の悪い笑顔を浮かべた駅員になんでこんなことになったのか知りたいんだと告げる。駅員はにつこりとほほ笑んでファシナトウルという星の存在を教えてください

た。駅員の勧めるままにあたしは「こども」の切符を買ってどんぶらこ、星間船でファシナトウルルへと向かい、そこでぶらぶらしている時にメローペ姉さまや炎妖姉妹たちと出会ったのだった。

あなたこんなところで何をしているの。メローペ姉さまが不思議そうに小首を傾げて尋ねる。意味がわからなくてきよんととしてしていると、お姉さまはだつてあなたは炎妖でしょうと窘めるような口調で言う。

——あのね、あなたは炎妖という妖魔なの。だから、私たちと一緒にいなければならぬいのよ。私たちは姉妹なのなもの。

——いつしよにいてもいいの？

——当たり前じゃないの。

その言葉を聞いてすっかり嬉しくなつたあたしはわーいと両手を上げてお姉さまの胸に飛び込んでふがふがした。ああ、これでいいんだなあ、もう独りじゃないんだなあ、そう思うと涙が出るくらい嬉しかったけれどそれはそれとして涙は出なかつた。

あなたの名前は今日からアルキオネよとお姉さまは言った。あたしの本名ヤス子なんすけど、と思わないでもなかつたけれどまあ、生まれたときからアルキオネでした、みたいな顔をしておいた方が色んな意味で都合が良いような気がしたからあたしは満面の笑みを浮かべて「はい！ あたしはアルキオネです！」とお姉さまに頬ずりをした。

「炎妖姉妹としての生活は楽しかった。辛いことは何もなかった。だってやりたいことをやっていればそれだけで時間は過ぎていくし、気に入らないことや面倒くさいことが起きたら何もかもを燃やし尽くしてしまえばよかったからだ。

たくさんの国を襲った。人という人を大火の渦に沈めてみんな指をさしてけらから笑った。「人間って本当に馬鹿だよね」とみんなで笑った。心の底からその通りだと思つた。たかだか百年かそこの寿命しか持たないのに汗水流して働いて、あたしたちがちよつと手を払えば消し炭になつてしまふ。なんて儂い存在なんだろう。馬鹿みたいじゃないか。あたしは妖魔になれたことを感謝しながら殺戮に精を出した。あたしは人間を超越した存在だ。人を食うもの、人よりも上位の生き物なんだ。苦しんで働いたりしなくてもいい、我慢したり絶望したりする必要もない。あたしはすこぶる幸福だった。疑問に感じることもなくて何一つなかった。

でもその内にオルロワージュ様が表れてメローペ様の手を握つた時、他の姉妹と一緒にきやあきやあと黄色い声を上げて祝福するふりをするあたしの胸がちくりと痛んだ。ああ、あたしじゃないんだな、そう思つた。

オルロワージュ様はなんでも「永遠の花嫁」とかいふ良く分からないものを探し求めてあちこちを旅していたらしい。そこで我々がメローペ姉さまを見初めて「君が好きだ」「私もよ」ってな具合で眼と眼を合わせて見つめ合い愛の言葉を囁いて結ばれたの

だ。針の城に寵姫として迎えられることになったお姉さまは去っていき、あたしたち姉妹は自然と疎遠になっていった。お姉さまという絶対的な頭がいなくなってしまうえばそんなもの、所詮は家族ごっこだったのだろう。

またあたしは独りになった。でもそこまで悲しいとは思わなかった。信じられるかな、あたしはお腹が減らないと悲しくもならない。食べるものに不自由するわけでもない。空も飛べる、行きたいところに行ける。腹が立つ奴や嫌いな奴はみんな殺してしまえばいいんだ、悩むことなんかない。

たとえばあたしは町に居る。「その人間。あたしに美味しいお酒を捧げなさい」とあたしは言う。目の前を通りがかったおっさんが「はあ？」と怪訝そうに歪めるその顔が気に食わなくてあたしは「いいから持つてこいつつてんだろ」と口から火を吐いておっさんを脅す。おっさんは「ひええ」とかなんとか言いながら青い顔でこけつまろびつ走り出し、あたしの前に酒を持つてくる。らっぱ飲みしてみるとこれが案外に美味しただけどおっさんの顔はやっぱりむかつくので「死ね」って言ってあたしはおっさんを焼き殺す。騒ぎが大きくなって警備兵がわらわらと湧いてきて「貴様の目的はなんだ」と警戒心も露わに銃を構えるのであたしは少し考えて要求を言う。「生ハムと金平糖と柏餅とおいしいお酒を持つてこい！」だいたい警備兵はあたしのお願いを聞いてくれないのでたいがい戦いになってあたしは一方的に勝利する。勝利するということ

は燃やし尽くすということ、その町は一面焦土と化して草の根一本残らない。大地はどろどろに溶けてぐつぐつと煮立ちあたしが食べたかった甘味類は見る影もなく、ちよつとだけ「またやつちやつた……」と反省しながらあたしはまた別の場所を目指す。どこに行こうとしているのかはあたしもわからない。でも旅をしていればいつかその「どこか」が見えてくるに違いないと思ったのだ。

何年何十年と時は立ち、焼きつくした国も数えるだけで日が暮れる。頭の悪いあたしにもその内に少しだけわかってきた。いつの間にかに妖魔になって、不死の存在、人間を超越した生き物になって、うっかり家族を殺してしまった、でもまた新しい家族ができて、そんでまた家族を失って、独りで旅をして、旅をして旅をして……、ああ、あたしはいつまでたつても独りなのかもしれない。だって誰もあたしを選んでくれない。あなたが必要なんだよって、ここにおいてほしいんだよって言ってくれない。メローペ姉さまほどではないにしろあたしだって炎妖だ。自分の美しさには自信がある。燃え立つような赤の髪、風に磨かれた砂漠のような褐色の肌。妖魔はみな美しい。……だのに、あたしはいつまでも独りのままだ。

誰に選ばれることもないのならどうやって生きていけばいい？ 答えは簡単だ。誰も自分を選んでくれないのなら、自分が誰かを選ばなくちゃならない。



その旅人は膝を落として茫然としていた。迷子みたいに顔をくしゃくしゃに歪めて、切なくなるような長く遠いため息をついてそつと眼を伏せる。彼が背負ったやけに大きなぼろ袋から画材やら丸めた羊皮紙やらがこぼれて散らばった。

「死んだ」彼は呻いた。「みんな、死んでる……」

「そうだよ、とあたしは頷いて彼の背中に手を添える。」

「そうだよ。あたしが殺したんだ。この国の何もかもはこのあたしが燃やした」

いつも通りの見慣れた光景を仰いであたしはふふふと微笑む。見渡す限りの焼け野原、崩れ落ちた土塀に黒く焦げ付いた人間の骨。

「いま生きているのはあたしとお前だけ。そしてお前はこれからあたしに焼かれるのだよ」

耳元で甘く囁いて彼の首根つこをつかまえる。やせつぼちの体は驚くほど軽く紙きりのようにひらひらして「もつとなんか精のつくもの食べなよ」とあたしは呆れた。

「燃えた……何もかも燃えてしまった……」

「そうだね。すっかり綺麗になったね。お前もこれから綺麗になるんだよ。」

「僕の、故郷……。僕の思い出……。僕の……。僕の……」

——そんなものは全部灰になってしまったよ。

——ああ、みんな、なくなってしまうた……。

——悲しいかい？ 苦しいかい？ どちらにしても、お前はもうすぐ死ぬのだけど。

(旅人は弱々しくふるふると首を振る)

——違うよ。悲しいんでも、苦しいんでもない。……嬉しいんだよ、僕は。……そうして、嬉しいと思ってる自分のことがよくわからなくて、なんだか、何もかもが……空っぽな気分なんだ……。

——ふうん？

彼の答えに興味を惹かれてあたしは旅人の体を地べたに下ろす。

「よくお聞き人間。あたしはちよつと頭が悪い。だからこのあたしにもわかるように丁寧かつ具体的に説明してごらん」

彼はしばらくぼかんとしていたけれど、やがて力なく笑い出した。

「そんなこと、僕にだってわからないよ。化け物のくせに変なことを聞くんだな」

あたしは彼の頬をばちりと張り飛ばして「誰が化け物だって？」と睨みつける。彼が真顔で「すいませんでした」と謝る。

「わからないのならわからないでまあ、仕方が無いのかもしれない。……なら、あんたが

どういふ人間で、この国をどう思っていたのかからゆつくり始めようじゃないか」

そう言うのと困つたように彼は空を眺め、それからおずおずと語りだした。

……別に大した物語じゃあないさ。故郷に馴染めない人間がひとり、飛び出して旅をしていたというだけなんだから。

僕はね、絵描きなんだ。……いや、それは嘘かな。僕は絵描きじゃない。本当に描きたかつた絵は一枚も売れたことがないから。僕は絵が描くのが好きな凡人だ。

この国で青春時代を過ごしたよ。大して幸福というわけでもなかつたけど、悪いことばかりでもなかつた。僕はこれでも裕福な家の出なんだ。

親からは後を継げと言われた。もちろん僕は首を振る。そんなのは嫌だ、親の敷いたレールの上なんか歩きたくはない。……まあ、お決まりのセリフなのかな。そんな言葉を口にして、一人で街に出て……立派な絵描きになるんだと意気込むその他大勢の若者に紛れたよ。

結果は散々だった。箸にも棒にもかからなかつた。馬鹿にされてばかりだったよ。働いて稼いだだけなしのお金でパンのかわりに絵具を買って食うや食わず、そんな調子で十年過ごしてああ僕には才能が無いんだなあって気付いた時にはいろいろなもの嫌いになつていた。

夢が叶わないと色んなことが嫌いになつていくんだなあ。僕を認めてくれない世間

も、親も、何もかもが大嫌いだった。だから国を飛び出すことにしたんだ。もしかしたら世界のどこかには僕の絵をわかってくれる人がいるかもしれないから。

……それで色々な場所を旅して、やつぱりなんだか懐かしくなってきたり帰郷してみたらこの有様だよ。笑うしかないじゃないか。

僕は君にお礼を言うべきなんだろうか？

絵描きになるだの国を捨てて旅に出るだのと言っておいて、結局は寂しくなってきたり戻ってきてしまうような人間は本当に駄目な奴だ。だから故郷なんて無くなってしまうてよかったのかもしれない。

すつきりしたよ。見渡す限りの焼け野原だものな。僕はこの国が嫌いだった。無くなってしまうばいいとずっと思っていた。……けれども同時に、僕はこの国のことが好きだった。生まれ育ったこの場所のことを忘れてしまうべきなのに忘れられなかった。だからこうして滅んでしまって、恐ろしいとか悲しいとか思いながらも心のどこかでほっとしている自分がいて、いまは自分がよくわからない。

「……なんで、自分のことがわからないの？」

「なんで？ そんなことわからないよ。人間なんてだいたいそんなものだと思うよ。だいたいこれから死ぬんだしそんなこと考えたって仕方がないだろう」

「じゃあ殺さないから考えなさいよ」

「……うん？ いやそのあたりの理屈よくわからない」

「馬鹿。こういう時は『え？ 死ななくていいの？ ラッキー』って都合よく領いとけばいいのよ。そんな風に要領が悪いから人としても画家としてもうだつが上がらないんでしょ？」

「そんなこと言われるとますます死にたくなってくるんだけど」

「そんなこと知らないわよ」

「あ、はい……」

「……」

「……」

「……で？」

「え？」

「これからどうするの？」

「どうするって言っても……故郷は滅びてしまったし……」

「絵を描けばいいじゃない。お前は絵を描くのが好きな人間なのでしょう。それなら、絵を描き続けていればいつか自分のことがわかるかもしれない」

「どうしてなんだ？」

「何が」

「だって君は故郷の人を皆殺しにした怖ろしい妖魔だろう。それなのになぜ、僕に絵を描けだなんて……」

「……」

どうしてなのか、と彼は言った。なぜ助けるのか、なぜ絵を描けと言ったのか。あたしにもわからなかった。わからないならわからないで仕方が無いし、わかるまで傍にいて考えてみようと思ったのもごくごく自然なことのように思えた。

彼の国はみな燃やしてしまったので彼はまた旅をしながら絵を描き始めた。放っておくといつの間にかに死んでいそうなので時々様子を見に行くことにした。彼はあまりにも痩せているし旅は旅で人間には過酷だろうからともすると餓死しているんじゃないか栄養が足りなくて病気になるんじゃないかと気になって、その内に食べ物を持って行くようになった。どんな時でも彼はお腹を空かせていてあたしが持ってきた食料を思いのほか喜んでくれた。

「もつとちゃんと食べないと。野菜とか。もやしとか」

「野菜はあまり好きではなくて……」

あまり期間をあげ過ぎてうつかり死んでいたらそれはそれで馬鹿馬鹿しいし、いちい

ち彼の臭いを辿って居場所を探すのも面倒くさいのでやがてあたしは彼と一緒に旅をするようになった。彼が絵を描いているのを横から覗き込んで「気が散るから」と言われて不貞腐れてみたり、「どうこの絵」と聞かれて「よくわからない」と答えて喧嘩になったりもした。

あたしは絵のことなんてわからないしわかるつもりもない。でももしも絵を通していつか彼が自分というものを選び取ることができたのならそれはそれで悪いことではないと思つた。なるたけ彼がちゃんと絵を描けるように環境を整えた方がいいだろうと住む家を用意してあげ、日々の食事や家事のことで手を煩わせないようにあたしが世話をする。

彼はいつもぼんやりとしていて、よくこんなことを言つた。

「あー、なんだろな。僕はきつと頭がおかしいのかもしれないな」

「何言ってるの」

「本当は違うような気がする。だって君は僕の国を滅ぼしたわけだし、僕もあわや殺されかけたわけだし。冷静に考えたら殺人犯につきまとわれて常に監視されてるような状況なわけだろう、これ。普通なら君を憎んでも憎み足りないよね」

「もし仮に憎んでも憎み足りないなら、あとは何を足すの?」

「それなんだなあ。感情は引いたり足したりおもちゃにするようなものじゃない。ある

のはただ一瞬一瞬の揺らめきみたいなもので、腹が立ったかと思えば次の瞬間には笑っていたりして、必ずしも感情は連続していない。だから……」

「自分の気持ちが変わらない？　自分のことが、わからない？」

「そうなんだ。何一つわからないんだ。困ったな……」

「変な人間ね……まあいいわ……ほら、もやしでも食べなさい……」

口いっぱいにもやしを詰めてもぎゅもぎゅしている彼を見ているとなんだか気が抜けてきてあたしは一体何をしているんだろいかまあいいかこれでもいいという気分になつてへらへらとあたしは笑う。

次の年に彼は死んだ。流行り病であつけなく死んでしまった。死ぬ前に彼の両手を握つて「それでどうなの？　自分のことはわかつたの？」と尋ねると彼は息も絶え絶えに「わからねえよ」と呟いて、そのままかつと血を吐いてぽっくり死んでしまった。

何なのだろうか。人間の一生というものはこんなにあつけないものなのか。「もしかしたらいつの間にかに僕は君のことが好きになつていたのかもしれない」くらいのこと、今際の際に伝えてくれても良かったのではないだろうか。

「馬鹿馬鹿しいな」あたしは彼の墓を掘りながら静かに独りごとを言った。「本当に、馬鹿馬鹿しい……」

またあたしは独りになった。こんな堂々巡りを幾年も続けているような気がした。また昔のように気ままな生活を始めた。たくさんの人間を殺した。人間を殺していると気分が晴れやかになる。一人殺すのも二人殺すのもたいして変わりはない。……だったら、一人死ぬのも二人死ぬのも同じことじゃないか。

人間の肉が焦げていく臭いを嗅いでいるとすつと心が軽くなる。人を殺せば殺すだけ死というものの意味が軽くなっていく。誰かが死んだことだつて忘れてしまえる。だからあたしはこう思うのだ。全ての乙女は邪悪でなくてはならない。

最初からそうだった筈だ。あたしは人を殺して涙さえ流さない悪魔なのだ。そうではなくてはならない。悪い女にならなくちゃいけないのだ。

あたしは星間船の発着場に行き、立っている駅員を捕まえて尋ねる。「悪い女になれるようなところって、どこ？」 駅員は薄気味の悪い笑顔を浮かべ「それが、とてもいいところがあるんです」と言つて鞆からチラシを取り出して手渡してくる。チラシにはこう書かれている。「戦闘員募集！ 悪の秘密組織黒十字団 ※資格・能力に応じて昇進制度アリ。キミも目指せ四天王！」

「なるほどね」と頷いてあたしは星間船に飛び乗った。

こうしてあたしは悪の女幹部になった。

幕間 光刃英雄アルカール第三十八話〜四十六話

「秘密組織黒十字団に栄光あれ！ 我らが真の首領に栄光あれ！」

クライン博士が高らかに叫ぶと戦闘員たちが一斉に唱和する。戦闘員たちは仮面の奥から憧れの視線で壇上を見上げている。壇上に立っているのはクライン博士と黒十字団が誇る最強の四天王——すなわち、

鋼のブラック。

土のベルヴア。

毒のホワイトローズ。

炎のアルキオネ。

触れるものみな薙ぎ払う地獄の四天王を筆頭に黒十字団の戦闘員たちは世界を恐怖に染め上げるべく邪悪な活動を日夜たゆまず行っているのだ！



光刃英雄アルカール第三十八話『出会い！ 美しき女性を狙う悪いヤツ！』

強敵ネオアブラーとの戦いを辛くも切り抜けた悠木^{ゆうき}怜次^{れいじ}だったが度重なる奥義ギガ・フェニックスの使用によりその体は既に限界に達しようとしていた。苦しむ怜次はバイクで海を目指し大海原に問いかける。これ以上戦えば生きてはられない……。しかし戦わなければ世界の平和は守れない。俺はいつだってどうすれば!?

悩む怜次だったがその時海岸に一人の女性が流れ着く。彼女の名はさゆり。聞けば自分の名前以外は何も覚えていないのだという。

さゆり「わかりません……。何も思い出せないの……。ああつ、頭が、割れるように痛い……。……。ただ、私は何かに追われていたような気がする……。何かに追われて、襲われていたような……。」

怜次「まさか、ブラッククロスの仕業か!」

さゆり「わからない……。本当にわからないの……。自分が誰なのか……。これからどうすればいいのか……。怖い……。」

怜次「これからどうすればいいのかわからない……。俺だってそうだ。このまま戦い続けて死ぬことが俺の運命なのか……。この人と俺は同じだ……。俺は、この人を守る!」

さゆりを保護し、働いているバイク屋へと連れ帰った怜次。しかし次々に謎の怪異が

さゆりを襲う。荒れ狂う粉砂糖。溶けだすザラメ。膨らませた筈のスポンジケーキはいつの間にかに萎んでいる！

怜次「何故だ……なぜこんなことが……」

怪奇・鳩コック男「コックツク……恐れ戦くがいい！ それらはすべてこの鳩コック男様の仕業なのだ！ 大人しくその女を渡せ！」

怜次「さゆりさんを？ 何が狙いだ！」

鳩コック男「それは言えん！ 色々あつてな！」

怜次「ならば……、さゆりさん、下がっていてくれ！」

鳩男「ま、まさかその構えは!? キサマは先の戦闘で瀕死の重傷を負ったはずだ！」

怜次「自らの死に脅えるいまの俺はヒーローではない……！ だが俺は一人の男と

して、俺の守りたいものを守る！ 変身！」

傷だらけの体をおしてなんとか鳩コック男との死闘を制したアルカール。しかしそれは悲しみの始まりに過ぎなかった……。

光刃英雄アルカール第四十二話『真実！ いま明かされるさゆりの過去！』

触れ合う内に互いを意識するようになった怜次とさゆり。だがさゆりの頭痛は日増

しにひどくなり、ふとしたことから凶暴な一面を覗かせるようになる。

さゆり「自分が別の誰かになってしまいそうで怖い……。怜次さん、お願い、私を守って」

怜次「約束するよ。俺は君を守る」

さゆり「ありがとう……」

ついに結ばれる二人だったがその晩、バイク屋「てつわん」を謎の毒々植物、蔦ん絡めんが襲う。蔦ん絡めんを見て突然苦しみだしたさゆりは戸惑いながらも自らの内に秘めた残虐性に目覚めていく。

さゆり「私はこの植物を知っている……。？　なぜ……。？　私は……。私は……！」

かっと目を見開いて叫び、封印されていた記憶をとうとう取り戻すさゆり。そう、彼女は悪の秘密組織黒十字団の怖ろしい四天王の一角、毒のホワイトローズだったのだ！

怜次「嘘だ！　君がホワイトローズであるわけがない！」

ホワイトローズ「ほほほ、何が嘘なものかアルカール。私はお前の敵ホワイトローズ！　」

光刃英雄アルカール第四十六話『悲劇！　さらば愛した人よ！　涙のブライトナックル！』

猛攻撃を仕掛けてきたホワイトローズの毒々軍団。傷つき倒れていく仲間たちの姿について立ち上がった悠木怜次はアルカールへと変身する！

怜次「さゆりさん……例えば君が相手だとしても、俺は……！」

ホワイトローズ「あなたに私が倒せるかしらアルカール。優しいあなたに！」

怜次「ブライトナツクル！」

ホワイトローズ「ぐふっ」

怜次「すまない……さゆりさん……」

さゆり「いいえ……これでいいのよ……怜次さん……」

怜次「さゆりさん？」

さゆり「黒十字団の一員である私の体にはクロス爆弾が埋め込まれている……組織に逆らえば命はないの……。だから、だから……これで良かったのよ……。さよなら、怜次さん……あなたのこと……愛し……ぐふっ」

怜次「さ………さ……ゆり

さああああああああああああああああああああああああああああああん！」

■次回予告

愛するさゆりを失い悲嘆に暮れるアルカールこと悠木怜次。しかし非道な黒十字団は次なる四天王、炎のアルキオネを繰り出してくる。

激しい炎を操り波状攻撃を仕掛けるアルキオネに怜次は禁断の兵器アルブラストを装着する！

真つ赤な夕日、燃え上がる採石場に怜次は何を思うのか。次回『業火！ 四天王アルキオネの破壊作戦！』見てくれよな！

全ての乙女は邪悪でなくてはならない——炎の従騎士ア ルキオネの物語②——

ここに一人の馬鹿がいる。

そんじよそこらの馬鹿ではない。救い難いほどの馬鹿である。馬鹿だから救えないのか救えないから馬鹿なのか、どちらなのかはわからない。けれども馬鹿は馬鹿である。どうしようもない馬鹿である。

馬鹿はいつでも知恵が足りない。一桁の計算だつてまともにはできないし人から言われたことは何でも信じ込んでしまつてほしいほしい領くところがある。おまけに馬鹿はひどく醜い。痘痕だらけのその顔でほら、本人は無邪気に笑つたつもりでもヒキガエルに牛糞をなすりつけて地獄の釜でぐつぐつと煮込んだえげつない鍋の具にしか見えないうし、喉の奥から漏れるげつげつという笑い声は耳にただけで「こんな奴死ねばいい」と思わせるには十分だ。

山奥の村のそのまた奥の廃屋に頭のおかしい女が一人住みついていて村の中でも腫れもの扱いになつてゐる。これが馬鹿の母である。人口の少ない山奥では自然と近親姦的な結びつきが多くなり、結果として血が濃くなるためか定期的にこうした白痴が生

まれることになる。当然ながら村は白痴の存在を隠そうとし、一種の呪いとして遠ざけられ忌み嫌われる。馬鹿の母親はそういう女だった。その女がなぜ馬鹿を生んだのかといえば、まあおそらくは村の若者にでも悪戯されたのだろう、もしかしたら女から誘ったのかもしれないしそうでなくとも交り合うというその行為の意味を正確に認識していたとは到底思えない。女は子を孕む。気がついた時には臨月だ、今さら墮胎することもできない。村の長がはてどうしたものかと頭を抱えている内に女はある日ふらりと廃屋を飛び出し、次に姿を現した時には両手に赤ん坊を抱えていた。それが例の馬鹿だった。どこぞの便所でもひりだしてきたのだろう。

馬鹿は生まれた。誰からも愛されなかった。ただでさえいびつな出生の上にその容姿は化け物で頭も足りない。村の中でも見て見ぬふりをされた。食べ物も碌に与えられなかったのでもいつもぐうぐうと腹を鳴らし、道端の虫を捕まえてはぷちぷちと嘔み潰してばかりいる。村の大人からすれば気味の悪いことこの上ない。自分で手を下せば呪いが降りかかるかもしれないし直接殺すというわけにはいかないために道行く大人はすれ違いながらも知らないうちに崖から転げ落ちてくれないかとかいつの間にかに餓死でもしていてくれればという良からぬ考えで暗い視線を馬鹿に向けるのであった。

それでも馬鹿は馬鹿であるから人の悪意など知りもしないし存在していることすら考えない。大切なことは何も教わらなかった。教えてくれる人はいなかった。『家』

に帰ると母親が知らないお兄ちゃんに囲まれて「あー」だの「おー」だの言いながら涙を流していてなんだか怖かったし、毎日毎日食べ物を探すのに夢中でペンキヨウするどころではなかった。

村の子供たちは残酷で馬鹿はよく石や肥を投げられた。痛かったり臭かったりして流石の馬鹿も「困ったなあ」と思わないでもなかったがそれでも馬鹿はやっぱ馬鹿でいつも一人でひもじい思いをしているものだから誰かが自分を構ってくれることが震えるほど嬉しくて媚びた笑いを顔に張り付けて「うへ、ぐでへへへ。や、やだなあ」とかなんとか薄気味の悪い声を上げながらと頭を掻きながら子供たちに近づいていく。ぐでへへ、おいらも仲間に入れてくれよう。そうしていつものように石を投げられる。額が割れて血が流れ出す。あ、痛い。けれども馬鹿は笑う。一人じゃないということは素晴らしいことで馬鹿は一人が苦手だ。「や、やめておくれよう」ぐでへへへ。近寄ってくるんじゃねえよ。臭いんだよ。叩きつけられた罵声に馬鹿はきよとんとしてくんくんと鼻を鳴らして体臭を嗅いだ。よくわからない。おいら臭くないよ。そう言つてへらへらと醜い笑みを浮かべると子供たちがよつてたかつて馬鹿の体を引きずりまわし、せーので橋の上から川に突き落とした。よく飛んだな馬鹿。偉いぞ馬鹿。嘲り笑う子供たちの褒め言葉に馬鹿は鼻で水を吸つてむせ返りながらも「あ、あ、ありがとう……」と喜んでいるから始末に負えない。

その内に母が死んだ。悪ガキに弄られすぎて股の傷から毒でも入ったのだろう。熱にやられてぼっくりと逝ってしまった。まともな感性のある人間ならば実の親の死に目に涙の一つも流すところだろうが馬鹿は違う。ただぼかんと口をあけてぼんやりと肢体を眺めているだけだ。やがて村の悪童たちが黴のように湧いてきてなれなれしく馬鹿の肩に手をかけてこう言った。「なあ馬鹿よ。今回は大変だったなあ」にやにやといやらしい笑みを浮かべそいつはとても大切なことを教えてくれた。親が死んだとき子供はどうすればいいか。

それで馬鹿はどうしたか。馬鹿は教えてくれてありがとうと頭を下げてとことこと母の肢体に歩み寄りそのまま足を踏み下ろした。忍び笑いを背後に母の肢体を殴りつけ、弄び、両目を繰り返して虫を詰め込み落書きをして軒下に吊り下げて晒しものにした。なんて馬鹿だろうか。いくら馬鹿とはいえず少し考えればおかしいことにくらい気がついていても良いはずなのに、それでも馬鹿は気がつかない。自分が正しいことをしているのだといつも醜い微笑みを浮かべて母の肢体に陰茎を擦り付けた。たくさんの誰かが笑った。

気がつくくと馬鹿は卑屈になっている。臭い臭いとよく言われるので日に三度は河で水浴びをして誰かと出あえば相手が口を開くより先に「おいら臭くないよ」と告げるのが癖になっている。へらへらと笑ってさえいればオトモダチが馬鹿を小突いたり殴つ

たりしてくれるので馬鹿は随分と人に媚びて笑うのが得意になった。小さい時に比べれば体も随分と大きくなってきて、「おい馬鹿薪を取ってこい」だの「おい馬鹿村中のごみを掃除しとけ」だのと喋りかけてもらえる機会も格段に増えた。馬鹿は少しだけ嬉しい。おいらはとつても馬鹿だから誰かに頼らないと生きていけない。だからなるだけみんなの言うことをよく聞いて、逆らったりしてはいけない。誰かがそう教えてくれた。教えてくれたのは誰だったかな、忘れてしまった。

本当に薄汚い生き物だ。とつとと死んでしまえば良かったのに死ぬことにさえ気が付けない。だから馬鹿は馬鹿なのだ。

馬鹿を良いように扱って労働力の面では余裕の増えた村だったがいかんせん過疎は過疎、ある年の冷害に畑の作物は軒並みやられ備蓄していた種粃もいつの間にかに伝染病に罹っておりとうとうこの冬を越すことはもう難しいということになった。だから村の長たちは賢い頭を寄せ集めてこう考えたのだ。そうだ馬鹿に就職を斡旋しよう。馬鹿だつて仕事につけるのであれば喜ぶだろうし、呪いがこちらに降りかかることはない。そう囁いた村長の手の中には近頃村のそこかしこにばら撒かれるようになった怪文書の類が握りしめられている。その怪文書には黒十字の署名が刻まれていた。一見なんでもない文章のように思えるが読む人が読めばそれは明らかに口減らしを仄めかす内容で人の少ない寒村や貧しい集落の人々に「もしあなたの周りに身寄りのない人間

必要のない人間がいるのならそいつを差し出せ。口さえ喋むのなら代わりに大金を払う」と暗に告げているのだった。馬鹿はひと冬を越す金のために人体実験のモルモットとして秘密組織黒十字団に売られた。

ではみなさんにはこれからいくつかの体力測定を受けてもらいます。体力測定が終わったあとは体や心の強さを試すための実験に移ります。みなさんの協力によって私たちは人体改造の技術を磨くことができ、またその技術の結晶として新たな四天王を生み出すことができるでしょう。ありがとうございます、本当にありがとうございます。みなさんの中で最後に残るのはたった一人ではありませんが、その選ばれた榮譽ある一人には四天王「シユウザー」の名が送られることとなります。さあ、みんなでシユウザーを目指して頑張ろうではありませんか。

部屋の隅に取り付けられたスピーカーがザアザアと雑音混じりに鳴りだして、妙に高い声が告げた。言っていることがよくわからなくて馬鹿は首を傾げていたが、黒服に手を引かれて運動場に連れていかれ、走り幅跳びやら反覆横とびやらをさせられた。ひどい成績だった。試験管らしき人は舌打ちばかりしていた。体力測定が終わると一人一人が別々に連れていかれて誰も戻ってこない。どうしたのかなと思っているととうとう馬鹿の番がやってきて、乱暴に首根っこを掴まれたまま引きずりまわされた挙句に手術台の上に縛られる。

どうせこんな奴が生き残るわけがないのになあと見るからにやる気のなさそうな様子で拷問官は馬鹿に焼いた鉄串を突き立てた。叫び声を上げて馬鹿はもがくけれどもかたく戒められているために逃げ出すことはできない。じくじくと腿に穴があいていく。血や脂が焦げて黒く固まる。「痛いよお……」ぽろぽろと涙を流すと拷問官は呆れた様子で「見ればわかるよ」と良いながらぐりぐりと鉄串を振じった。

一しきり拷問が終わると気を失った馬鹿は石牢に放り込まれた。馬鹿の右足は穴ばかりだらけになってぐずぐずと腐つていく。痛む足を抱えながら馬鹿はぐずぐずと泣いてあの人はなんでこんなことをするのかなあと独りごとを言う。次に会ったときにちやんと聞いてみよう。空気穴の隙間から外の世界を眺めてみると月が皓皓と輝いていて物悲しい。綺麗だなあ、でも痛いなあ。月の美しさに馬鹿は微笑み、けれども足の痛みに耐えかねて顔をくしゃくしゃに歪めて泣いた。ほろほろと泣きながらへらへらと微笑み、馬鹿の夜は過ぎて行く。

拷問は終わらなかつた。当たり前と言えば当たり前のこと、なぜなら馬鹿は何かの秘密や情報を隠しているわけではないのだから。馬鹿は痛みを与えるために痛みを与えられているのだから。色々な薬を飲まされた。飲んだだけで肺が焼けたこともあつたし逆にとても体の調子がよくなつたこともあつた。その薬を飲むと痛みにも俄然強くなつてちよつとやさつと殴られたくらいじゃあびくともしない。いやまだ大丈夫だお

いらは痛くないぞ。痛くないつたら痛くない。脂汗を流しながら少しずつ少し指を万力で潰されていつてある時限界を超えて途方もない痛覚が脳髓を刺し貫く。ぎやつと呻いたのも束の間、間断なく痛みは続き舌が纏れて呼吸さえままならなくなる。「ううん、難しいところだな。ただの麻酔じゃあ駄目なものな。感覚を残しながら痛みに強くするにはどうしたらいいだろう……」誰かが一生懸命に考え込んでいる声を聞きながら馬鹿の意識は薄れていく。

組織からはまったく期待されていなかった馬鹿だったがいくら拷問されてもその馬鹿さゆえに絶望するということがなく痛い痛い泣き喚くだけで廃人になったりはしない。実験体としてはなかなかタフで使えるようだ判断された馬鹿はその内に「ハカセ」と同室に入れられた。

「やあ、君が二号君か。よろしくね」

「に、に、二号？」

君の名前だよと言ってハカセはふへへと力なく笑った。ハカセは随分と小柄で子供みたいな顔をしている。身に付けた白衣はぶかぶかでひどく不格好だ。

馬鹿は二号という名前もとい番号をつけられてハカセと一緒に超人を作りだす実験に参加することになった。ようし、一緒に頑張っちゃおうぜ！ 氣勢を上げるハカセが馬鹿の背中をばんばん叩いて傷が激しく痛んだけれど馬鹿は嬉しくなつてへらへらと

笑う。

馬鹿はハカセが作り出した様々な薬を飲んだ。やっぱりあれかなあ、変装とかも結構大事なことだよ。僕ら悪なわけだからさ、人を騙したりするにはもつとハンサムな方がいいかもだよ。そういつてハカセが差し出した水色の薬を飲むと馬鹿の皮膚からはあの醜い痘痕がとると消えてしまう。「おつ。ぱつと見だと結構恰好よく見えなくてもないぞ。良かったな二号君!」「はい!」馬鹿はにこにここと笑う。筋力が上がる薬、体が柔らかくなる薬。色々な薬を飲まされて馬鹿は少しずつ強くなつていく。

「つつてもまー流石に薬だけじゃ何でもはできないけど。あらかた薬を飲んだら次はもつと高度な実験にチャレンジだ!」「はい!」

ある日ハカセはこう言った。今日は君の頭をカシコクしてあげるよ。本当ですかと言つて喜び勇んで連れられて行つたその部屋には奇妙な姿の鳥たちが無数に蠢いている。

「この鳥は何ですかハカセ」

「帆ン途鳥だよ」

「ほんとどり?」

「本当のことしか言わない鳥さ。まあとにかくしばらく一緒にいてごらん」

わかりましたーと呑気に答えて馬鹿は鳥たちと一緒に一週間過ごした。はじめは面

白そうに鳥たちをつんつんついついていた馬鹿だったが、鳥たちが呟く不思議な言葉にしないで取り込まれていった。予言めいた言葉だった。最初の内はどうでもいいことしか言わない。いちたすいちには、物にしたに、おちていく。この鳥は物知りだなあと感心しているとその内に帆ン途鳥はぎよつきよつと甲高い鳴き声を上げ大きな目をぐるぐる目まぐるしく回転させていく。——ホント、ホント、本当のことを言うよ。

人は死ぬ。形あるものはみな壊れる。この世のすべては失われ、大切なものはみんな忘れられてしまう。「そんなに悲しいこと言わないでくれよ」馬鹿が泣きそうになるのを堪えていると鳥はぎよろりと馬鹿を睨みつけて叫びだす。

「お前は半年後に死ぬ」「お前はシュウザーにはなれない」「お前はとうしようもない馬鹿だ」「お前は母を冒瀆した」「お前は何物にもなれない」「お前と言う人間は最後まで馬鹿のまま死んでいく」

ひどいよ。消えそうなほど小さな声で馬鹿は呟く。なんだってそんなことを言うんだい。おいらのことが嫌いなのかい。嫌いならそう言うっておくれよ。おいらちゃんとしていつくばって隅の方に居るよ。

鳥は馬鹿の言葉には答えない。ただ機械的に「本当のこと」を囁き続ける。帆ン途鳥という鳥は無限の知性を持っているとも言われ、かつては数多の王たちにこぞつて求められた珍鳥だった。しかしこの鳥の怖ろしいところは、はじめは聞いている者のとつ

てはなんの害もない情報を出しておきながら、いよいよと身を乗り出すと途端にけして聞きたくはない真実、自らの死期であったり誰に嫌われていて何を勘違いしているかということばかりを告げるところなのだ。

馬鹿はぼろぼろと涙を流していたが、やがてハカセがやってきたので泣き顔のままへへへと笑う。

「どうだい二号君。帆ン途鳥ってスゲーだろ？」

「うん……」

元気のない馬鹿の様子には気付かずハカセはべらべらと語り続ける。

「帆ン途鳥は本当のことしかいわない。ということはだね、この鳥たちは無限の知識を持っているか、あるいはアカシックレコードみたいなものであるとも言えるんだ。帆ン途鳥は世界中のありとあらゆる真実に通じている。だからさ、この鳥たちと上手く繋がることができれば、頭だつて良くなるかもじゃないか。というわけで実験開始！」

あつと言う間に馬鹿はまた手術台に縛り付けられて無数のコードやらをあちこちにぶすぶす突き刺されて目隠しを付けて電撃を流される。こうして馬鹿の頭は人並みに賢くなった。

馬鹿は泣いた。



馬鹿は音もなく涙を流す。目隠しの下で涙がちくちくと肌を舐めていく。「どうしたんだい二号君？ もう実験は終わったよ。頭、よくなったかい？」心配そうに問いかけるハカセにも答える気にはならない。

「俺は……」

誰に言うわけでもなく馬鹿は声を震わせる。腹の底を灼熱の羞恥心が焼く。途方もない喪失感が息を止める。胃がぎゅつと振じれて吐き気がする。

「俺は……」

ガラスをひっかくような細かい声だった。弱々しく、痛切な泣き声だった。馬鹿は泣く。体の中を無数の虫が走り回るような激痛。歯を食いしばって馬鹿は泣く。

自分は何て惨めな生き物なのだろうと馬鹿は思う。他人の情けに縋り慈悲を乞うことではか生きていけない。卑屈に身を屈めどうか生きていることを許して下さいと出会う人全てに懇願しなければ呼吸をすることでさえ満足にできない。自分の意志もなく他人の言うままに操られごめんさいごめんさいと頭をさげてばかりいる。自分と言う生き物ははたして何のために生きているのだろう。何を生みだすこともなくた

だ誰かの邪魔者にしかなっていかない。どうしようもないほど醜く、愚かで、誰からも愛されない。

母の死体を弄んだ時のことを考えた。情けなくもへこへこ腰を動かして自分は射精を繰り返した。なぜあの時他のヤツらが笑っていたのか今ならばわかる。何も知らないということは滑稽だ。どう見ても喜劇にしかならない。馬鹿はとりたてて母を愛していたというわけではなかったがしかし母が死んだときに悲しむことさえできなかった自分、その死体を汚しさえした自分を思うと臟腑の底がかつと熱くなった。

何かを取り戻したいと思った。幸福な時間、友と呼べる存在、愛する人、そんなものに囲まれて穏やかに笑ってみたかった。堂々と道を歩いて俺はここにいてもいいんだぞと胸を張って生きていたい。勝ち誇りたい。自分よりも弱いものを見下ろしてお前よりも俺の方が上なのだと思うさま馬鹿にしてやりたい。俺の方が生きている価値があるのだと、俺には生きる意味があるのだと高らかに宣言したい。今まで自分を虐げてきた人間たちを捕まえて無茶苦茶にしてやりたい。何の努力もなく笑っている奴ら、ただそんな風に生まれたと言うだけで幸せそうにしている人間どもを絶望の淵に叩きこんでやりたい。なんだっていい、目に付いた奴からぶん殴ってやればいい。

復讐したい、と馬鹿は思う。何が人間だ。人間など、みんな薄汚い糞野郎だ。あんな奴らはぶち殺してやらねばならない。

魂が何かどす黒い粘土にでも覆われていくような気がする。馬鹿はベッドから跳ね起きるとハカセの胸倉を掴んで思いっきり殴り飛ばした。ぎゃん、と犬みたいな声を上げてハカセは信じられないという顔をする。

「い、痛い……。ひどいじゃないか。暴力反対！ 暴力反対！」

「黙れ！ よくも人の体を好き勝手に弄りまわしてくれたな！」

怒鳴りつけるとハカセは叱られた犬ころのようにしゅんとして「怒ったの……？」と上目づかいになった。「そりゃ怒るよね、ごめん……」

「罪悪感はなかったのか。何も知らない阿呆を騙して、好き放題薬漬けにして！ さぞ楽しかったろうな！」

「そ、そりゃあ、悪いなとは思ったけどさ……。でもこれが仕事なんだから、仕方ないでしょう。ボクだって結果を出さなきゃ切り捨てられんだ」

「そうか」答えて馬鹿はもう一度ハカセを殴りつける。口元が切れて血が流れた。「そうか。ああ、そうか……。」怒りに任せて何度もハカセを殴ると少しだけ心が晴れた。ああ俺はずっとこうしたかったんだ。何度も何度も殴りつける。その内にハカセは亀のように縮こまって「ごめんなさいごめんなさい」とうわ言のように呟くばかりになった。こんな姿をどこかで見たことがあるような気がした。それは他でもない馬鹿自身の姿だった。

「……もういい」

赤く腫れた手の甲を撫でながら馬鹿は顔を歪めて渋々吐き捨てる。ハカセはおそるおそるこちらを見つめてふるふる震えている。

「ほんど？ もうぶたない？」

「……ああ。ただその代わり……」

馬鹿が手を伸ばすとハカセはヒツと悲鳴を上げて再び蹲った。面倒くさい、とそう思いながら手を伸ばしもう心配ないのだと伝えるためにハカセの背中にぼんと手を当てるとハカセは「ひうつ」とキテレッツな咳をして馬鹿を見つめ、安心したせいかぼろぼろと泣きだした。

「許しておくれよう……なんでもするから……」

「じゃあ俺を強くしろ」

「え？」

「実験台にしたことは許してやる。これから俺を実験台にすることも許してやる。だから約束しろ。俺を強くしてくれ。どんな相手もぶち殺してやれるだけの力を俺にくれ！」

「え……？ あ……うん、それはまあ全然別にいいけど……うん……。あ、望むところだよ！」

顔面を腫らせたハカセはオーと腕を突き上げてやる気を表明した。

◇

馬鹿とハカセは共に最強の戦士を目指して協力する。ハカセは筋肉増加や知能強化のための薬を開発し（ほとんどそれしかできないのだが）馬鹿は馬鹿でトレーニングに明け暮れ、黒十字団の保有する武器、たとえば個人でも使用できるように小型化されたヘビールールガンなどの使い方を学んだ。

「二号君はさ、どうして急にそんなやる気でのの？」

「自分が馬鹿だということに気がついたからだ。俺という馬鹿を馬鹿にしていた奴らもぶちのめしてやりたいと思ったからだ」

「なるほどなあ。まあ頭良くなったんだもんね。わかるよ」

「お前にはわからないさ。ハカセなんて呼ばれているような連中はみな人のことを道具か何かにししか考えていないんだろう？」

「まーそれは否定しないけどさ。でもわかるよ。ボクもよく人に馬鹿にされるんだ。なんでかわからないけど。そーゆー奴らのこと皆殺しにしてやれたら気持ちがいいだろうなって、よく寝る前とかに考えるんだ。ねー二号君。一緒に頑張ろうぜ。一緒にスゲー強くなつてさ、道行く人々をぼっこぼこにして高笑いするような悪い奴になっちゃおうよ」

うへへ、とハカセは嬉しそうに笑った。

妙に懐いてくるハカセを鬱陶しく思いながら馬鹿は次第に強くなっていく。少しずつ自信もついて、劣等感に悩まされることも減っていく。馬鹿は自分の体を見つめる。逞しい筋肉、均整のとれた肢体。一振りすれば人間の頭だつて簡単に叩き割れる。ああ俺は、強い。俺は生きていてもいい、俺には生きる価値がある……。そう思うと馬鹿はいつの間にかに笑っている。以前のように卑屈な笑いではない。それはささやかな幸福の微笑みだ。おい、ハカセ。馬鹿は言う。俺は四天王になるぞ。シューウザーになつて、邪悪の化身となつて、俺とお前で世界を征服してやる。醜い人間どもを皆殺しにしてやろう。ハカセは勢いよくうん、と頷いた。子供じみたその返事が嬉しかった。

強くなる。強くなる。俺は俺の価値を手に入れる。馬鹿はいつそう訓練に力を入れる。ところがある日ハカセは暗い顔をしてやってきて、ごめんこの実験は中止されることが決まったんだと言うものだから馬鹿は仰天する。一体どういふことなんだ。

「シューウザーは他のところに決まったよ。遠隔兵器の研究をしていたチームがクロービットの技術を完成させてさ。その実験体が新しくシューウザーを名乗ることになったつて」

「……俺はどうなる」

「用済みじゃないかな。洗脳されて扱いやすい戦闘員として使い捨てられるか……実験

の失敗作として処分されるか……」

「他人事だと思つて簡単に言うな」

「それが他人事じゃないんだ。実験チームものきなみ解体になった。役に立たない研究者は明日処刑だつて。悪の組織つてやるのが極端なんだ」

「そうか」

「……ボクらはどうしたらいいのかなあ」

「脱走するか？」

「ボクには無理だよ。今さら、他のところで生きていくことなんかできない。そんな力はない。逃げるのなら君一人で逃げればいいよ。応援する」

馬鹿は少し考える。今こそこの力を試す時ではないか。逃げようとすれば当然戦いになるだろう。黒十字団が誇る精鋭や怖ろしい四天王を相手に死力を尽くしてみるのも悪くはないように思えた。けれども馬鹿の心の中には重苦しい落胆や失望と同時に不思議な納得があつた。

どうせこんなことになるのではないかと思つていた。結局、誰も自分のことを必要としてくれないのだと、やはり自分には生きていく価値などなかったのだと思つた。体の力が抜けた。今にも泣き出しそうになっているハカセの顔を見ていと寂しい共感が全身を走る。ああ俺たちは負け犬だ。馬鹿はもう一度ハカセの顔を見る。もしかし

たら彼は最初で最後の友人なのかもしれない。

「俺たちはどうするべきか。良い質問だハカセ。俺たちは酒盛りをするべきだ」

「へ？」

馬鹿は食糧貯蔵庫に忍び込んで食べ物や酒を失敬してくる。乱暴にハムやソーセージを切り分け、組織片分離針をぶすぶすと突き刺してハリネズミにする。アルコールランプに三脚と金網を取り付け、上に載せたビーカーの中に安っぽい紺濃酒をタトタトと注ぐ。

小さなビーカーに温まった酒を入れ手渡すとハカセは老人のような顔をして「……あつたかいね」としみじみ言う。ため息が酒に溶けて湯気になる。猫のようにちろちろと酒を舐め、ハカセは顔をしかめて「苦いなあ。大人はなんでこんなもの飲むんだろ」と不思議そうにハムを啜えた。なぜ大人が酒を飲むのかは馬鹿にもわからなかった。酒を飲むのはそれが初めてのことだった。ああ俺は多くのことを知らずに死んで行くのだと思ひながら酒を飲んだ。胃の底がじくじくとぬるくなった。

酒盛りをしながら二人でぶつぶつと下らない話をした。もつと美味しいものを食べてみたかったとかいい女を侍らしてみたかったとかそういう類の話だった。手に入らないものばかりを口にして「腹立つなあ」と悔しがってばかりいた。

二人は窓に頬を寄せて夜空を見上げた。「星がきれいだね」とハカセが言う。自分で

自分の言葉に照れているようだった。「うわー、感傷的なボク……」馬鹿はまじまじと星を見つめる。「そうだな」と心の底から同意した。星は綺麗だった。しかし馬鹿にはその星を言葉で飾るだけの人生経験がどうしようもなく欠けていた。「ああ、きれいだとにかくきれいだ」そんなことを言っただけ、しかし言葉の上で「きれいだ」としか言えないのならこの星の美しさも何もあつと言う間に忘れてしまうのかもしれない。ボクは答えた。

ねー、二号君。ハカセが言った。ボクは明日死ぬんだね。そうだなと二号は答えた。さつきから同じことばかり口にしてる。ハカセが小さな指をぶるぶると震わせながら夜空の果てに輝くちっぽけな星を指さして言った。あの星の名前を覚えておいておくれよ。あれ、ボクの名前と同じ星なんだ。ボクが死んでも、名前だけは夜空に残る。ボクの名前は……。

ハカセは恥ずかしそうに名前を口にした。馬鹿はしつつかと頷いて、たとえ何があろうとも忘れないと約束をした。ハカセは翌日に死んだ。



人はいつか死ぬことを義務付けられた生き物であるから、人並みの知恵を身に付けた馬鹿はいつか自分にも死がやってくることを知っている。しかしそれはいつ来るもの

なのだろう。いつかは死ぬと知っていて、しかし目の前にある「これ」が「それ」なのだと受け入れることのできる人間がどれだけいるのだろうか。

採石場に集められた馬鹿と組織の実験体たちを睥睨して、四天王である炎のアルキオネは冷たく処刑を宣言する。お前たちのように中途半端な性能の奴らは生かしておいても扱いにくいだけなので処分することになった。大人しく灰になれば、と彼女は言った。何体かの実験体が怒声を上げて彼女に飛びかかったが、アルキオネがこともなげに腕を一振りすると猛烈な炎が巻き起こり次の瞬間には焼け焦げている。相手にすらならない。ただゴミを掃き散らすように火炎に焼かれていくだけだ。

圧倒的な強さだった。四天王は伊達ではない。新しい四天王シユウザーを生み出すというのだから、この程度で死ぬ強さでは話にもならないのだろう。

馬鹿は隅の方でアルキオネを静かに見ていた。刻一刻と近づく死の運命を感じながら、炎を纏う彼女の姿を見て、美しいな、と素直に思った。幻想的というのは彼女のよきな姿を言うのだろうか。燃え盛り輝くルビーの瞳、揺らぎ立つ火焰のはだえ。それに比べて彼女に殺されていく我ら実験体のなんと弱く醜いことだろうか。一体、人間という生き物はなぜこれほどまでに惨めでくだらないのだろうか。たかだか百年かそこの寿命をしか持たないくせに、何ものにもなれずに足掻き続けて死んでいく。俺は、と馬鹿は言う。俺は一体何なんだ。俺はここで死ぬ。俺はここまでの男だ。俺は……。俺

は……。

炎のアルキオネは炎の妖魔、炎妖なのだという。人間を遥かに超える力を持ち、悠久の時を生きる美しい種族。この女に殺されて俺は死ぬ。

とうとうアルキオネの操る火焰が馬鹿のところにもやってきて、ぶわ、となんだか綿でも押し付けられたような感触がしてふと見下ろしてみると右足がけし飛んでいる。がくりとバランスを崩して手をついた馬鹿が脂汗を流して顔を上げるとそこにはアルキオネが冷たい眼をして立っている。

「死ぬ」と彼女は言った。「嫌だ」と馬鹿は答えた。足元の石ころを思い切り投げつけたが届く前に溶けてしまう。「お前は本当に馬鹿だね。そんなものが通用するとも思っただのかい？」アルキオネが嘲笑を浮かべる。答えずに馬鹿は必死になって逃げ出した。畜生のように這いずりまわり、意味もなく無駄に砂や石を投げつけて醜態を晒した。馬鹿は最後まで馬鹿のままだった。アルキオネが面倒くさそうに馬鹿の左足を踏みつける。そのまま骨ごと焼けついて足が千切れる。馬鹿はなお腕だけで体を引きずる。アルキオネの炎が両腕を焼いて馬鹿はダルマにされてしまう。歯を噛みしめると涙がこぼれた。今さらながらに死ぬのは怖い。

どうしようもなくこみ上げる感情に馬鹿は声を震わせた。腹の奥底から沸き起こる激情に咽喉を焦がして叫んだ。

俺とお前の何が違う。ただそう生まれたというだけで俺は死に、お前だけが生きるのか。なぜ俺は人間なんだ。なぜ支配者として生まれることができなかったんだ。俺は嫌だ。死ぬのは嫌だ。負け続けることが嫌だ。そして何よりも人間であることが嫌なんだ。

人間。

人間は弱い。人間は惨めだ。人間は臭く、醜く、薄汚い獣同然の生き物だ。俺を馬鹿にしたあの人間、俺と俺の母とを弄んだあの糞野郎どもを俺は決して許さない。俺は人間を憎む。この世全ての人間を憎む。何も知らずにのうのうと行き、無自覚に人を踏みつけにする人間を憎む。そして……。

……そして俺は、俺を憎む。俺と言うこの馬鹿を、こうして死んでいくことしかできない己自身を。

お前が理由を知っているのなら教えてくれ。なぜ俺はこうなんだ。なぜ俺はこうして何も手に入れられずに死ななければならぬんだ。ああ、そうだ、生まれてからこのかた人生は何一つ思い通りにならない。誰も俺を必要とはせず、俺を厭う視線でしか迎えない。どうしてなんだ。

勝ち誇りたい。奪われる前に奪いたい。俺は何かになりたいんだ。このまま死ぬの

は嫌なんだ。死んでたまるか。死んでなどやるものか。嫌だ、死にたくない。誰か俺を助けてくれ。たった一度でいい、誰か俺を選んでくれ。俺を必要としてくれ！

無様に涙を流し、叫び終わると馬鹿はぎゅつと眼をつむって死を覚悟したがいつまで経っても何も起きない。恐る恐る眼をあけるとアルキオネが困ったような顔をしてこちらを見ていた。途方に暮れたような、道に迷った子供のような、それは妖魔にはおよそ相応しくない弱々しい表情だった。

今から大事な質問をするからよくお聞き、と彼女は言った。

——もし、あたしがお前を選んだら、お前はあたしを選んでくれる？

全ての乙女は邪悪でなくてはならない——炎の従騎士ア ルキオネの物語③——

もしあたしがお前を選んだらお前はあたしを選んでくれるのかとあたしは聞いた。最初のうち彼は何を言ってるのかわからないという顔をしていたけれど（そりやそうだ）、やがて真剣な顔をしてこう言う。俺はお前を知らないしお前が何を考えているのかもわからない。それでも……。彼は僅かに声を上擦らせる。それでも、お前が俺を選ぶというのなら、俺はお前を女王にしてやる。この世の支配者の女としてお前を高め、連れて行ってやる、と。その言葉を頭から信じたわけではないし、生きながらえるために嘘を言ったのかもしれないとそう思いながらあたしは「そうこなくちゃ」と笑って彼に口づけをした。柔らかなキスを彼の首筋に落とし、この牙を打ち立てて血を吸い上げる。こうして人間である彼は死に、炎妖アルキオネの眷属として妖魔に生まれ変わる。痛みに呻く彼を両手で抱き抱え鼻と鼻とを擦りつけながらあたしは言う。さあ、次は、あなたがあたしにキスをして。

体中の組織が造り変えられていく痛みに呻きながら彼は一体自分に何をしたのかと尋ねる。あたしは質問に答えず静かに笑う。あなたはあたしを超えていく男にならない

けりやならないのでしょ？ ……そんなら、ねえ、この血を吸って、あたし自身を虜にする男になってみせてよ。

四肢をもがれたままの彼の体は驚くほど軽い。血に汚れた彼の唇をあたしはあたしの首にあて、魔女のように呪いのように小さな呪文を呟いた。さあ口を開いて肉をお食べ。あなたとあなたの欲望が躍るままにこの血を啜り、あたしという女を食らい尽くしてごらん。あたしはあなたに従う妖魔。新生したあなたという妖魔に仕える炎の従騎士アルキオネ。あたしの血を吸ったあなたは王にならなければいけない。

彼はあたしから逆吸血を行い、それに伴ってあたしの支配から脱出する。彼はあたしの力を手に入れ、あたしは少しだけ弱くなる。でも構うものか。たとえ妥協や打算で結ばれた関係であろうとも、今この時に彼があたしを選び続けてくれるのなら永遠も悪くはない。

彼の肉体が再生するまでの間にあたしは彼のことを知るためにいくつかの質問をした。名前を尋ねると「俺に名前はない」と言っただけで黙り込んでしまう。眉間に皺を寄せて何か考え込んでいるようだった。殺されるとなれば殺されるで「なぜ自分ばかりがこんな目に」と世界を呪っていたくせに、いざ生き残ったら生き残ったで「なぜ自分だけが生き残ったのか、他の実験体は死んだというのに自分だけが生きていてもいいのか」とか、そんな下らないことを考えているのかもしれない。そんなことを気にしなくて

もいいんだよ、気に入らない奴はみんな、ぶち殺してやればいいんだよ。慰めるようにあたしが言うのと、彼はむつつりとしかめつ面のまま空の高みを指さしてぼつり、「あれが俺の名だ」と囁いた。あの遙か彼方に輝く天馬の座、上膊の星セアト。

その日の昼から午後にかけて激しい雨が降り注いだ。セアトの回復が終わるまであたしはひとまず屋根のあるところへ避難した。雨垂れの音は絶えることなく続いた。行こうと思えばどこにだつて行けるとそう知りながら、けれど雨の降りしきるその光景にはどこか世界との隔絶を思わせるさみしさがあつた。閉じ込められているのかもしれない。雨が降れば誰しもが今いるところに縛られてしまうのかもしれない。……そうして、男と女がひとところに留まつて双方の孤独に共感を覚えたその時に、生き物は雨に閉ざされたその場所でもぐわうものなのだろう。古代から今に至るまでありとあらゆる恋人たちもきつとこんな風に雨を眺めていたのかもしれないと想像を巡らせながらあたしはセアトの手足が生えそろうのをじつと見守つた。

セアトが五体満足になるとあたしは緩んだ頬を隠すことも忘れてわくわくしながら「ほら」と両手を広げると、「あ？」とセアトが眉を寄せた（察しが悪い）。

「何を呆けているの。ほら、あたしをうんときつく抱きしめて、ぎゅつとして、愛してると言って。そういう約束だつたでしょ？」

「……そんな約束はしていない」

「したわよ」

「したのか」

「した」

「そうか……。約束は守る」

セアトはぎこちないしぐさであたしに近づくと不器用にあたしの背に両手を回した。遠慮がちに込められた力に「もつと」と文句を言うとは急にぐつと引き寄せられたせいでわつと驚きながら「きゃっ」と声を（演技で）出して顔を上げたらそれはもう睫毛と睫毛が触れ合う距離で、こりやいかん思ったよりも恥ずかしいと慌てていたら目の前のセアトが恐ろしくクソ真面目な顔をしてこう言った。お前のことを愛している。

途端に胸の奥が熱くなった。

「ふへへ」とうすら笑いを浮かべて照れていたらセアトは不思議そうに首を傾げた。

「どうして泣く?」

この炎妖アルキオネ様が泣いているですって? 自分の顔を撫でてみると、嘘じやない、本当に涙で濡れていた。「ほんとだ」そう言ってあたしはきよんとする。「泣いてる……」

「何かやり方が間違っていたのだろうか?」

居心地が悪そうにしているセアトを見てあたしは束の間苦笑して、「そうじゃないよ」と言ってもう一度セアトに抱きついた。

「誰かに好きだって言われたら、誰だって嬉しくなるものよ。涙くらい、流したりもするでしょう」

「そうか……?」

「そうよ。ねえ、セアト」

「うん?」

「あたしあなたのことが好きよ。あなたのことが必要なの。あなたがいなければ、あたしはもう一歩だって生きちゃいかれないの」

あたしが告白すると、セアトはたじろいだように胸を押さえて後ずさりする。

「ああ……」

「どう?」

「ああ……そうだな……。これは……なかなか……」

くつ、と歯を食いしばってセアトは俯いた。彼がこれまでどんな人生を送ってきたのかはわからないけれどそれはきつと生まれて初めての言葉だったのだろう。咽喉を震わせて背を折るセアトの涙に気付かないふりをして、あたしはくるりと振り返って目を閉じた。



それからまた長い長い時間が過ぎた。でも今度は独りじやなかったから辛いことは何もなかった。二人でたくさんの妖魔を狩ってまわり、その血を吸うことでセアトはぐんぐん強くなつていく。セアトの力を認め、配下になろうという妖魔が現れる。水の従騎士ハウゲータ。森の従騎士「r・b・洞舐」> ウロネブリ」。本当はあたしのほかに女なんていらなかったけれど、自分の男が認められるというのはやっぱり嬉しかったし一番があたりでさえあるのならまあ仕方がない。

ある時セアトはどこかでオルロワージュ様の噂を聞きつけて、「俺もやがてはオルロワージュのような王になるのだ。一度どんな男か見ておこう」と考えたらしい。あたしも久しぶりにメローペ姉さまの顔が見たくなつて、妖魔の君が鎮座する城を訪れるための洋服を仕立てたり立ち振る舞いの練習をしたりすることにした。前日に全ての用意を揃え、「明日着る服とか全部ここに畳んでおくね」と声をかけ、あたしはセアトが帯びる飾り剣や靴やらを丹念に磨いた。

メローペ姉さまの妹を名乗るとあたしたちは拍子抜けするほどあっけなく入城を許された。何百年ぶりに顔を合わせた姉さまは相変わらずとても綺麗で、煉獄の炎を瞳に

宿して蠱惑的な笑みを浮かべている。姉さまが楽しそうにしているのを見てあたしは少ししほっとする。オルロワージュ様選ばれて良かったねと心の底から思うことができた。

オルロワージュ様に拝謁を果たしてからセアトはしばらくぼんやりとしていた。妖魔の君が持つ圧倒的な妖力に惹かれたせいだろうか？ その内に彼は「俺もいつかあの方のように絶大な力を手にしたいものだ……」と呟くようにさえなった。

セアトは心酔するオルロワージュ様の旗下に加わることを選び、命じられたことなんでも聞いた。その頃オルロワージュ様はとりわけ人間の幼女を愛でていて、セアトはその子らの世話や生命保護を任されているようだった。

よち子。シエダル。王文青。メテルムミア。オルロワージュが人間の少女らと出会い、別れていくのを一番間近で見続けていたのはセアトかもしれない。

やがて長年の傍仕えが認められ、また既に上級妖魔として十分な力を身につけていたこともあり、とうとうセアトは針の城の黒騎士として任命されることになった。「良かったね」とあたしが言うと彼は「ああ！」と屈託のない笑顔を浮かべた。その顔を見ているとあたしまで嬉しくなってきた、もう一度あたしは「良かったね！」とセアトの背中を叩いた。

あたしはその時、間違いなく幸せだったのだと思う。

けれども時が流れ移ろう内に世界の何かが変わって行って、気がつかない間に降り積もる埃のように何気ない違和感が幾重にも重ねられて不満に変わる。

淡々と時は過ぎた。いつしかメローペ姉さまの姿を目にすることは少なくなっていくた。あんなに愛し愛されていたはずなのに、いじけた顔をして庭の隅の方で俯いている。どうしてそんな風になってしまうのだろう。だって彼女は選ばれたのじゃないか。妖魔の君というとても偉大な方に見初められ、栄誉と権勢を手にしたのではなかったのか。誰かに選ばれさえすれば、一人ではなくなればこの孤独だつてきつと埋められる筈なのに、どうして姉さまはあんなにも悲しい表情をされているのだろう。

あたしはオルロワージュ様のことを時々考えるようになった。あたしはこの王サマが笑ったところを一度も見たことが無い気がした。近頃では寝室にお籠りになり、たまに顔を見せたかと思えばつまらなそうに世界を見下ろしている。いつかこんな風にセアトもなつちやうんだらうか？ 面白いことは何一つありませんみたいな顔をして、大きすぎる力ばかりを持って余して腐っていくような男になるんだらうか。

黒騎士になつたとはいえセアトはオルロワージュ様からは何か特別な言葉をかけられたわけでもないし格別の信頼を寄せられているということもなかった。セアトはそ

のことを少しだけ不満そうにしていた。「俺は心からオルロワージュ様のことを尊敬している。しかし、それが伝わっているのだろうか……」妖魔として長い年月を過ごすうちに段々とセアトの眉間にも皺が寄ってきて、気難しい顔ばかりしているようになる。大切な人に認めてほしい。でも認めてもらえない。だからまた盲目的に仕えて、懸命に奉仕を行い得意でもない媚を売って……、そうして、得られるもののない千と百年を過ごしてセアトの自尊心は傷ついていく。俺は一体何なのか。俺はまた人間だった頃と何一つ変わらないままに、惨めな物乞いを繰り返しているのではないか。それならば……。

名もない妖魔がオルロワージュ様を襲撃するという事件が起きた。王の身を守ることができなかつたとセアトは随分と嘆いていたけれど、その襲撃犯が黒騎士にとりたてられたと聞くと激しく動揺していた。「黒騎士とは一体何なんだ」と言つて意気消沈する彼を見ているのは辛かった。

あたしは段々とオルロワージュ様やイルドウン達に怒りを覚えるようになっていく。だいたいイルドウンは何なんだ。オルロワージュ様に歯向かった癖に素知らぬ顔で城の中に潜り込んで傍若無人な振る舞いを続けている。どうしてオルロワージュ様はあんなヤツを黒騎士にしたんだらう。それにラストバン。ラストバンに至ってはそもそも何もしていないじゃないか。イルドウンのように戦つてその力を認められたわけ

もない。たまたまイルドウンの知り合いだったというだけで黒騎士になって偉そうにしている。あたしは陰でラストバンのことをコネ入社と呼ぶことにした。

声を大にしてあたしは言いたい。こんな社会は間違っている。だって頑張っているのはセアトじゃないか。努力して、我慢して、オルロワージュ様のために身を粉にして必死になって働いているのは誰でもないあたしのセアトだ。だから褒められるのはあたしのセアトでなくちゃいけないんだ。選ばれるのはあたしのセアトでなくちゃならないんだ。けしてイルドウンやラストバンみたいにへらへら笑って生きているような連中は黒騎士になんかなつちやいけない。だからオルロワージュ様は間違っている。報われるのは頑張っている奴でなくちゃいけない。一生懸命に生きている奴が報われないうなんて法が一体どこにある。

……そう思う一方で、心の中のどこかにこの状況に納得しているあたしがいる。なぜなら妖魔は努力なんかしたりはしない。誰かに認められようだとか、頑張った分だけ報われるべきだなんて考え方は妖魔にはない。妖魔にとっては恐怖と魅力と誇りという『力』だけが全てで、それ以外のことなんてどうでもいいことなのだ。だから、セアトがいつまでたつてもうだつが上がらないのもそれは当たり前前の話で、本当なら馬鹿にされてもおかしくはないのかもしれない。

妖魔にとってセアトのような生き物は本来「見苦しい」と蔑まれさえするものだ。元は人間だったセアトはたぶん、そのことに気付けていないのだろう。それは悲しいことかもしれないし、もしかしたら幸せなことかもしれない。あたしはセアトに欠けているものを知りながらそれを教えることはなく、ただ、彼の女として黙々とつき従っていた。……昔、人間の男と暮らしていたことがあったせいかな。やっぱりあたしにもどこか人間くさいところが残っていて、その人間の部分が妖魔の社会に反発を覚えているのかもしない。

それでもあたしは後悔なんてしない。だってあたしが選んだ男は人間でありながら妖魔になった男だもの。人間として生きて、人間という生き物を嫌悪して、妖魔に生まれ変わり、誰よりも何よりも強くなろうと足掻き続ける見苦しい男、それがあたしの選んだセアトなのだもの。

あたしはセアトの駄目なところが好き。弱ちちくて、人間みたいに落ち込んだり命乞いをしたりするところが好き。誇り高くなりたいと願いながら、けして誇り高くなれないところが好き。だってそういうセアトはきつとあたしを選んでくれる。あたしはセアトを選んで彼はあたしを選んでくれる。だからあたしは炎の従騎士であることに後悔なんかしないのだ。



今、あたしの眼の前にアセルスという女がいる。あたしはアセルスを捕らえるために彼女たちをずっと追っていた。アセルス一人であれば無力化するのはいさぐさのことだ。たけれど、彼女の周りにはいつも白薔薇姫やメローペ姉さまがいてあたしは迂闊に動くことができなかった。

アセルスは世界でただ一人の半妖である。それは人間が吸血を受けて妖魔になるのとも、隔世遺伝や突然変異によつて妖魔になるのとも違う。彼女はあろうことか妖魔の君オルロワージュ様の血を享けて蘇つた特別な存在なのだ。

特別という言葉を使うとなんだかやっぱ腹が立つ。白薔薇姫やお姉さまがアセルスと行動を共にしているのも彼女が「特別」だからなのだろうか。あたしにはわからない。アセルスはてんで普通の女に見える。

どうしてアセルスなのだろう。その力を手に入れるのはセアトだつて良かったはずだ。オルロワージュ様の血は、ぼつと出の、へらへら笑いながら生ぬるい学生生活を送っていたに違いない小娘が何の努力もなしに手に入れていい運命じゃない。

アセルスは故郷のシユライクへと戻ってきた。親代わりになつて育ててくれた親戚の顔を「ちよつと見るだけ」と言つてはいたけれど、本当は会いたくてたまらないとい

う顔をしていた。親離れのできない甘ったれなアセルス。

——別に、今さら会う必要なんか無い。私なんて、本当はいい方がいいんだから。……だから、ちよつと顔を見るだけ。叔母さんが元気にしているかどうか、ちよつと確認するだけ……。

——いい方がいいんだなんて、悲しいことを仰らないでください。アセルス様。

——うん。ありがとう……。でもね、自分がそうと望んでいなかったって、誰かの迷惑にしかなっていないってことは十分ありうることだと思ふな。困ったことに、向こうはそれを迷惑だなんてまるで感じていなくて、私が少しでも遠慮したりすると叱りつけてくる。……だけど違うんだなあ。生きているだけでも素晴らしいことだとか、親は——まあ親じゃないんだけど——親は子供と一緒に居られるだけでも十分幸せで、迷惑なことなんか何一つないんだとか、お涙頂戴の物語じゃあ随分と言われてはいるけれど、あたしが感じているのはそういうお為ごかしじゃなくて単純に金銭的なことなんだ。……ああ、そうか……。私は結局、あの人のことを他人としか捉えられなくて、他人に金銭的な負担をかけることに耐えられないってだけなのかもしれない。はは……なんだかね……。

アセルスは白薔薇姫と一緒に生垣の隙間から自宅の庭を眺めていた。道路脇にしゃ

がみ込んでベニカナメモチ（という植物なのだ）と白薔薇姫が解説していた）の生垣に頭を突っ込んでいる姿はどうしようもなく滑稽だった。アセルスの叔母らしき老齡の女性縁側に腰掛けて玉蜀黍のひげを耂り取っている。「おばさん……」よく聞こえなかったけれどアセルスが小声で呟く。

その時、白薔薇姫が踏み折った小枝が乾いた音を立て、アセルスの叔母がはつと顔を上げてアセルスに気付いてしまう。

——あ……あなた……アセルス……？。

——あ、う、うん……。そう……。あのね、髪の色……ちよつと、染めててね、その……。

——ひ……。

——どうしたの？

——幽霊なの？ いなくなった時の年恰好のまま……やっぱりアセルスは死んだんだね。

——違うよ。私はアセルス。本人だよ！

——私をたぶらかす妖怪かい。 12年も前のアセルスの姿で現れるなんて。誰か助けて！

恐怖に顔を引き攣らせた叔母は家の中に消えていき、後には項垂れたアセルスと柔ら

かに微笑む白薔薇姫が残される。

——12年……私が馬車に轢かれてからそんな……どうして教えてくれなかったの、白薔薇……？

——ファシナトウルに生きるものにとって、時の流れは意味を持ちません。それに、アセルス様にシヨックを与えたくなかつたのです。

——やっぱり私は化け物なんだ。12年も年を取らないなんて……。

——そんな物の言い方をしてはいけません。

——……うん。そうだね……。……あのさ、白薔薇……。

——何でしょうか？

——ちよつとカッブ麵買ってくる。

——え？

——急に食べたくなつてき。紅と白薔薇はしばらく宿に戻っていて。

——アセルス様……？

◇

あたしはアセルスをじつと観察している。白薔薇たちと別れ、一人道を歩くアセル

ス。都合のよいことに一人きりだ、今ならば簡単に殺せる。

何を考えているのか、アセルスはシユライクの繁華街で本当にカップ麺（ちりめんラーメンじゃこたつぷり）を購入した。必要以上に愛想よく「これを下さい」「ありがとうございます」と頭を下げるアセルス。レジの横で備えつけのポットから湯を注ぎ、零れないようにそろそろと店を出る。食べる場所を探してアセルスは近くの公園を探していたがそこは学校帰りの子供たちで騒がしく、アセルスは踵を返して別の場所を探す。手の中で麺が伸びていく。人気の少ない場所を探してうろろと彷徨い、ようやく錆びれた高架下に居場所を見つける。座る場所を探してきよろきよろとあたりを見回し、近くに転がっていた整形外科の看板を裏返して腰かける。カップ麺は既にふやけている。蓋を開けだした途端に膨れ上がった麺が飛び出してアセルスの手を汚す。アセルスは何も言わない。黙って麺を口に入れる。黙々と箸を進め、太い麺を噛みしめる。アセルスの瞳からほろりと涙が零れる。滴り落ちる涙がぼつりぼつりとカップ麺に波紋を残す。アセルスは何も言わない。ただぐ、と歯を噛みしめ、親の敵のように目の前を睨みつけて食べ続ける。

（ああ、そういうことか……）

カップ麺を食べ終わるとアセルスは俯いて動かなくなつた。もういいだろう。これは罠ではないと判断したあたしはアセルスの前に姿を現してこう言う。

「あたしはお前に同情なんかしない。アセルス。大人しく針の城に帰るならよし、もし帰らないというのなら……」

「……」

アセルスは答えず、顔を上げようとしめない。

「たかだかオルロワージュ様におこぼれを頂いただけの半端者の分際で白薔薇姫を連れ出そうなどと……」

「……あなたは」

相変わらず俯いたままアセルスは静かに口を開いた。

「アルキオネ……でいいのかな。紅が言っていた針の城の追手……」

「ええ、そうよ。どんな手を使って拐かしたのかは知らないけど、白薔薇姫もお姉さまもこんな汚い所にいるべき女ではないのよ。お前とは違う」

「……あのね、見てわかると思うけど、私はいま結構落ち込んでいるところなんだ。用があるにしても後にしてくれないかな……?」

掠れた声で答えるアセルスは不気味なほど穏やかで、怯え一つ見せないその様子にあたしは僅かな苛立ちを覚える。

「……お前は自分がいまだどんな立場にいるのかまるでわかっていないようだ。あたしがほんのちよつとこの手を動かせばお前を消し炭に変えることだってできるんだよ」

「ああ、そう……」

どうでも良さそうにアセルスは答え——次の瞬間、世界を呪う老婆のようにどす黒く
噎れた声でどこまでも静かに叫ぶのだった。

「たった一人の家族を失った悲しみにさえ、満足に浸らせてはくれないのか、オルロワー
ジュ……！」

全ての乙女は邪悪でなくてはならない——炎の従騎士ア ルキオネの物語④——

「たった一人の家族を失った悲しみにさえ、満足に浸らせてはくれないのか、オルロワー
ジュ……！」

憎悪に満ちたアセルスの声にアルキオネは思わず剣を振るう。妖煌帝の愛し子の首
があっけなく落ち、ころころと転がっていく。あっけない結末に拍子抜けする思い出で
ほうと息をつき、剣を収めかけて——無視できない違和感にアルキオネは眉を顰めた。
血が、流れていなかった。

確かに妖魔の血流は穏やかで、その鼓動も人間に比べれば遅い。腕を切り落としたか
らと言って動脈から血が勢いよく噴き出したりはしない。しかし、腰を下ろしたままの
アセルスの死体——断面は青の血に濡れこそすれ一滴たりとも零れてはいない。いや
……、

「青色の……。アセルス、お前……！」

血相を変えて転がり落ちたアセルスの首を睨みつける。あちらを向いているために

表情は見えない。後頭部は長く伸びた緑の髪をくしゃくしゃに見出し、土と泥に塗れている。慌てて駆け寄りその顔を確認しようとするアルキオネが手を伸ばしたその時、事切れたはずのアセルスの唇から静かな言葉が漏れだした。

「なんてさ。馬鹿馬鹿しいかな……。死んだふり」

「アセルス……」

「これでいいじゃないか。このまま帰ってくれないかな。アセルスは殺したと、白薔薇は見つからなかったと、そう報告してくれればいい……。黙って首を斬られたんだ。そういうわけには、いかないかな……。？」

「いかないね」ぎりぎり歯を噛みしめて憎々しげにアルキオネは吐き捨てる。「そんな冗談を誰が信じる？ あたしはお前を殺しに来たんだ、仲良しになるためじゃあない」「そう」アセルスはどこまでも穏やかに答える。「あんたたちはいつもそうだ……」

「舐めるな！」アルキオネは叫んだ。怒りのままに剣を突き立て、首を串刺しにする。アセルスの声が奇妙に振れる。故障した蓄音器のように罅割れた言葉を何度となく繰り返す。「たたたたた戦うことばかかか……、ここここ殺すすことばばばばかり……」

「黙れ！」力任せに足を踏み下ろすと今度こそ頭ごと潰れてアセルスは喋らなくなった。無性に疲労を覚えた。肩で息をしながらアルキオネは歯がみする。「なんなんだ……」

「オルロワージュ様の血の力……そういうものなのか……？」

妖煌帝の血に底知れぬ恐ろしさを感じてアルキオネは僅かに身を震わせる。ただの人間の小娘がここまでの再生能力を……。セアトがこの血を手に入れさえすればイルドウンやラストバンなどものの敵ではない。

「セアト。いま持つて帰るからね」

呟いてアセルスの髪を掴み、首ごと持ち上げようとしてずりりと手が滑った。首が再び転がっていく。血で滑ったのだろうか？ 手元を確認してアルキオネはそれが間違いであることに気付く。依然として掌の中に髪は握られている。とするとこれは手が滑ったのではなく——髪が、伸びたのだ。そういえばおかしと思うことは他にもあった。青色の血。話によればアセルスの血は紫色だった筈だ。しかし今、確かにこの髪は青く濡れている……。いや……これは血ではない。初めは血だったのかもしれないが今は違う。髪が血を吸っている。

「吸血……」

茫然としてアルキオネは囁いた。何かがおかしい。首を切り落とした時、確かにアセルスの髪は緑色をしていた。だがこの色は、アルキオネの良く知るこの色は妖魔の……。

恐怖に手を震わせたアルキオネの眼前でアセルスの髪が凄まじい速度で伸びていく。

地を這い、樹木に纏わりつき、コンクリートを覆い、増殖と蠕動を繰り返す。慌てて飛び退るアルキオネの靴をすつと血が舐めた。物語の1ページが捲られるように大地が血に染まった。透き通る程の青い海。血液でできた青の鏡。

ちやぷり、と血が鳴った。舌舐めずりの音。

ぴちやり、と血が跳ねた。水たまりを蹴散らす童女の軽やかさで波紋は広がり、オルガンを爪弾くように血が爆ぜる。

「アセルス！」

恐慌に駆られて唸り声を上げたアルキオネに答えるかのように、ぬるといふ鈍い感触が背中を叩いた。

「あ………？」

不思議そうに振り返るとそこには首なしの少女が一人立っている。もの言わず淡々と佇むその首なし——アセルスの腕はこちらに何かを差し出すように向けられている。

「いつか、私もこんな風に刺されたんだ。あなたの男に」

「あ………」

アルキオネはゆっくりと見下ろした。いつの間にかに自分の胸から剣が生えている。過たず妖魔の心臓を貫いたその剣にそつと触れ、信じられないように目を見開いてアルキオネは膝を折る。

「首にばかり気を取られているからそういうことになるんだよ」

背後で——おそらくは再生を終えたのだろう——アセルスの生首が語りかけてくる。論すような口調に屈辱を覚え、アルキオネはかっとなって怒声を上げた。

「黙れ……！ 不意打ちなんて、この卑怯者……！」

「そんなことは私の知ったことじゃあないね。まともをやつて勝てない相手に正々堂々と殺されるのは、少なくともイルドゥンは言わなかった。……だいたい、あなたは私を殺しに来たんでしょう？ そんな相手にかける義理はない。それでも私はあなたに相当腹を立てているんだ。本当だよ……」

目の前の首なしはつかつかとアルキオネの背後にまわり、背中を踏みつけにして剣を抜いた。低い呻き声を漏らすアルキオネに構わず、首なしはそのまま自らの首を拾い上げて胴体に据え付ける。

「さて」とアセルスは言った。「紅からある程度は聞いてある。あなたにそこまでの再生能力はない。死ぬことはないにしても、しばらくは動けないんじゃない？」

「殺せ……」呪うように吐き捨てたアルキオネに、アセルスは表情にようやく険を浮かべた。

「私はあなたを殺さないよ」

「半妖に情けをかけられて生きながらえるなど」

「情けなんかじゃないさ」

アセルスはきつぱりと答えた。

「自分がほんのちよつと手を動かせば私を消し炭に変えることもできる。さつき、あなたはそう言った。多分それは嘘じゃあないんでしよう。やろうと思えばあなたは私を簡単に殺せる。……じゃあ、なぜそうしなかったか。答えは簡単だ。あなたたちは私の“血”が欲しいんだ。炎の従騎士ともあろう人がいつか本気を出して、血液ごと私を蒸発させてしまったら元も子もない。だからあなたは手加減せざるを得なかった

……」

「……」

「でも、いよいよ自分が死ぬかもしれないとなったらあなただつてそういう訳にはいかない。きつと体ごと炎に変えて私を殺そうとするだろう。だから、私はあなたを殺さない。あなたにはまだチャンスがある。いまを耐え、時間をかけて再生しさえすればまた私の血を奪うことができる。だから……あなたも私を殺さない。お互いに殺し合わない理由ができたね。私はさつきと逃げることにする。……よかつたら、セアトに伝えておいてくれないかな？ 殺されるのは嫌だけど、ちよつと血をあげるくらいなら別に構わないって。それで追うのをやめてくれるのならね。ちゃんと話をしに来てよって」

「半妖と話すことなんてなにもない……」

言い知れぬ敗北感に打ちのめされて弱々しくアルキオネは唇を動かした。

「まあ、そう言わないで欲しいな。……あ、そうそう。さつきから気になってたんだけど、どうしてあなたはそんなに血を流しているの？ この辺り一帯、あなたの血で海みたくになっっているんだけど……」

「……？ 何を言っている？ これはお前の血だろう」

「私の……？ 違うよ。私の血は……その、紫色なもの」

不思議そうに尋ねるアセルスの表情に毒気を抜かれて、アルキオネは黙り込んだ。口を閉ざしたアルキオネにやがてアセルスも会話を諦め、とぼとぼと去っていった。



連絡がないことを心配したのか、それとも単に様子を見に来たのか、やがてセアトが迎えにやってきた。半妖ふぜいに不覚をとった自分をもしかしたら彼は責めるかもしれない。そう思うと悲しくなっただけでアルキオネはぎゅつと目を閉じる。だがセアトは何も言わず、傷ついた彼女の体を優しく抱き抱える。

「……ねえ、セアト。あたし、負けちゃった。役に立てなかった。ごめんね」

悲しそうにアルキオネが言うと、「気にするな」と言葉少なに彼女を受け入れてセアト

は穏やかな手つきで彼女の髪を撫でる。それだけでなんだか幸福な気分になって、アルキオネは「へへ」と笑ってセアトの腕に身を任せた。

——ねえ、セアト。アセルスはあなたに血を与えてもいいと言ったわ。少しくらいなら、それで追うのをやめてくれるのならと。

——そういうわけにはいかないな。お前も分かっている筈だ。白薔薇姫のこともある。奴を野放しにしておくことはできない。奴はただそこにいるというだけで針の城を揺るがしかねない存在だ。

——うん。そうね。……あたし、やつぱりあの女のことが大嫌いみたい。何さ、訳知り顔で偉そうなことを言つてさ。二十年かそこら生きただけの小娘のくせに……。あたし悔しいよ。あんな奴一人殺せなくて……。ほんとごめん。次は絶対にぶつ殺すから。

……。

——セアト？

——不意打ちとはいえ……お前の話を聞いた限りではオルロワージュ様の血の力は未だ底が見えない。まして、今回のこともあればアセルスもそうそう一人にはならんだろう。相手は白薔薇姫と紅姫。迂闊に戦えば今度こそお前は……あるいは他の従騎士

が死ぬかもしれん。どうも俺の見通しは甘かったようだ。

獵騎士の異名に恥じぬ狩人の残酷さと冷徹さを胸に秘め、セアトは冷えた視線で淡々と云った。

——次は俺が出る。



白薔薇と紅は宿の一室で「かつぶめんとは何か」という話題について一頻り議論していたが結論は出ない。そこへ血だらけのアセルスが帰ってきたものだから彼女たちは「どうしたのですか」と驚き、弱々しく微笑むアセルスを心配する。

「心配ないよ。私は大丈夫。怪我は……あるけど、いつかは治る」
「そうですか」

ほつとした顔の白薔薇はアセルスの頬に付着した血を拭き取ろうとするが、アセルスは「自分でするよ」とやんわりと断った。

「私が離れたばかりに……申し訳ございませぬ」

小人姿の紅は居てもたつてもいられないとでも言うようにアセルスの体をよじ登り、再生していく傷跡を痛々しそうにつつき始める。ごめんなさい、ごめんなさい。そう言つてしきりに謝る紅はしかし、何か言いたげに口を開きかけては頭をぶるぶると振つて再び謝罪を繰り返している。その姿を見て「心配しなくてもいいよ」とアセルスは優しい声色を作る。

「襲つてきたのはアルキオネさんだったけど、彼女も無事だよ」

「あ……」

ぎくり、と見るからに動揺を浮かべて紅は小さな体をぶるぶると震わせた。

「ごめんなさい……」

「気にしなくていい。家族を大切に思うのは尊いことだ」

そう言つて、アセルスはふと瞳を揺らした。窓の向こうに遠い視線を向け、寂しそうな口調で「多分ね」と付け加える。

「アセルス様おひとりだけでアルキオネさんを撃退なされたのですか？」

恐縮する紅には目もくれず、白薔薇は冷静な疑問をぶつける。

「その血はアルキオネさんのものですね？ 鉄の剣で炎の従騎士の体を斬つたのですか？」

「そうだ、白薔薇……」

気を取り直したように振り返り、アセルスは腰に提げた剣を抜いてみせる。ゴサルスの店で買った平凡な鉄の剣だったが、いま手に握る剣は様相を変え、禍々しい紅玉の光を放っている。

「さつき見たらいつの間にかこうなってたんだ。血に濡れたっていうのなら青か紫になつていないとおかしいし……」

「それは」誰にも悟られないほど僅かな嘲笑を唇の端に浮かべて白薔薇は言った。「それは『妖魔の剣』ですな」

「妖魔の剣?」

耳慣れない言葉にアセルスが言葉を繰り返すと、白薔薇はいつものように温和な表情を取り戻して優しく答える。

「妖魔が持つべきつるぎ。信じさえすれば、あらゆるものを斬り裂くことのできる剣。妖魔が戦いの中で己と敵との血でもって研きあげる武器、他者の魂を奪い取る吸血の剣。それは妖魔であればいつかは手にするものです」

「でも私は」

「戦いの前後で何か変わったことはありませんでしたか? 体に違和感はないか?」

「いや……首、思いつきり切り落とされてたから、正直混乱してよく覚えてないんだ。無我夢中で……」

矢継ぎ早に尋ねる白薔薇にアセルスはしどろもどろになりながら懸命に記憶を辿る。

「そう、この血はアルキオネさんのもの……その筈なんだけど、どうしてかな、彼女はこれが私の血だつて言う。私が流した血だつて」

「やはり、そうなのですね」

得心したように白薔薇は頷く。確信に満ちたその態度にアセルスは思わず身を乗り出して「やつぱり？」と先を促し、話がさつぱりわからないという顔で首を傾げていた紅はアセルスを見て「やつぱり？」と真似をする。

「簡単なこと。……あなたは、つかのま妖魔になっていたのです」

「そんな！」

「おそらく生家での一件が一因でしょう。あなたの感情が激しく揺らいだ。そこで戦闘が起きる。震える魂は一瞬のうちに激情へと変わる……。オルロワージュ様の血が目覚めたのですね。あなたの持つ鉄の剣は妖魔の剣に、あなたの肉の裡を流れる血は紫から青へと遷移する。戦闘技術では遥か格上の相手にも怯むことのない鋼の意志と凍りつくほどの判断力。この世を統べる支配者の精神があなたに宿る」

「そんなすごい状態になってたの、私……」

「断言はできませんが……。失礼ながら、そうでもないのアセルス様にアルキオネさんを退けられた理由が説明できません」

「そっか……そうだね」

どこか腑に落ちたように言葉尻を弱め、アセルスはぼてりと力なく椅子に腰を下ろした。

「妖魔。私がおね……」

へえ、と投げやりに呟き、アセルスは白薔薇の手から剣を取るとそつと手首に当てて引いた。

「アセルス様！」

首筋に縋りついた紅が怯えたように叫んだ。

「大丈夫」

落ち着いた声でアセルスは答え、手首から滔々と流れ出す紫色の血を見つめる。

「私は狂ってなんかいない。確かめなきゃいけないと思っただけ。いまの自分が何なのかを」

アセルスは一心に血を見つめる。一步離れた場所でアセルスを見下ろす白薔薇の瞳に興味深そうな光が宿る。

「白薔薇」アセルスは静かに言う。「私は妖魔になるの？」

「さあ、それはわかりません。戦いをやめられず怒りや憎しみに吞み込まれていくのならそういうこともあるでしょうし、あなたが何を食べ、どのように生活し、どう生きて

いくのかによって、あるいは別の物語が待ち受けているやもしれません」

「結局……先のこととはわからないってことか……」

アセルスはこくりと頷くと窓辺に近寄り、硝子にこつんと額をぶつけた。

狂っているわけじゃないよ。だってたいして痛くないんだ。痛くないって知っていれば、別に無茶だってできるでしょう。

感覚がないわけじゃない。痛いものは、痛い。でも我慢できるような気がする。手首をちよつと切るくらいならね、何て事も無いよ。

でも、相変わらずだな。自分のことがよくわからないや。

私はアルキオネに殺されるべきだったような気がする。狂ってしまったような気がする。狂ってしまったらおかしくはないじゃない。……いいや、おかしいか。普通はその前に死ぬものな。普通はさ……。

私は戦うことに慣れていく。傷つくことに慣れていく。その拳句が青い血だ。知らない間に妖魔になっていたってさ。なんでもアリだね、我ながら……。

ああ、そうだな。

私はもう、「rb:シユライク > ここ」にはいられないんだ。

故郷にはもう戻れない。なるほどね、叔母さん。実際のところ私は化け物なのかもし

れないよ。

あなたの住んでいるところを血で汚してしまつてごめんなさい。

あなたの平穏な毎日を壊してしまつて、本当にごめんなさい。

私は遠くに行くことにします。

どうかお元気で。

「次はどこへ行くかうか？」

ぼんやりとアセルスは呟いた。

「そうですね、路銀も少々心もとなくなつてきたことですし……」

思案顔で頬に手を当てる白薔薇。「全然わからない」という顔で申し訳なさそうに

しょんぼりしている紅。

「身分証明のない者が暮らして行けそうな場所……手っ取り早くお金が手に入るような星……。生きて、生活していくんだ。私は……」

われ知らず握りつめた拳を震わせ、アセルスは顔を上げる。

クローロンへ行くかう、と彼女は言った。

第十五幕 対話篇 ヌサカーン

朝、目を覚ますと白薔薇が朝食を用意してくれている。「いつも悪いね」と声をかけてアセルスは台所で顔を洗う。彼女たちが暮らしている「r b：集合住宅」> フラット」には洗面台が備えつけられていない。水道から流れる水は妙にぬるく、時おり錆が混じることさえあるが深くは考えないことにしている。半妖になったいまは人間のよいうな代謝は無くなっており、睡眠中に溜まる目脂や皮脂を気にする必要はない。本当ならば顔を洗わずともアセルスの顔はいつでも清潔に保たれている。が、なるべく人間であつた頃の習慣や癖を忘れまいとして彼女は半ば意地になつたように毎朝の洗顔を続けている。

アセルスはふと学生時代を思い出す。あの頃は日々どうでもいいことで悩んでばかりいたような気がする。こうして顔を洗つて、顔の脂のせいで自らの手がてかてかと鈍く輝きながら水を弾くさまを目の当たりにして「うわあ……」と自己嫌悪に陥つたりもした。しかし今ではいかなる時も肌はしつとりとした滑らかさを維持し、洗顔料を必要とはしていない。ここに住み始めたころは碌に考えもせず馬鹿馬鹿しい値段の洗顔料を購入して使っていたが、金銭的な理由からいつしか水で顔を撫でるだけになつてし

まっている。だとしたら本当は無駄な水道料金を控えるためにもこの洗顔をやめてしまった方がいいのだろうと思う——だが、どうしてもそうはしたくなかった。

半妖であるアセルスが、あるいは妖魔である白薔薇や紅が生活していくにあたって、たとえば食費や光熱費に限れば他の人間よりもずっと楽な状態にある。妖魔は食べ物をそれほど必要とはしない。たまの調理には紅の炎を利用してゐる。暑さや寒さにも強く、普通の家庭であればどうしても入り用になる生活必需品——たとえば紙などみずっと少なくて済む。このフラットの個室にはトイレがついておらず、用を足すためには一階に下りて共用のトイレを使用しなければならないがアセルスは一度も使ったことがない。トイレの水に関しては共用費に含まれているので好きだけ使うことができるがトイレトペーパーは自前で用意するようにと大家から注意されている。紙を節約しながら尻を拭くともなればきつと自分は惨めな気持ちになったことだろう。妖魔には排泄の心配がないというだけでも自分は幸運だったのかもしれない。

毛先が盛大に乱れた歯ブラシを口に突っ込んでわしゃわしゃと動かしながらアセルスはちらと横に立つ白薔薇の手元を眺める。綺麗に切り揃えられたサンドイッチが皿に並べられ、薬缶からは湯気が立ち上っている。サンドイッチの具はハムだけだ。きちんと耳の除かれた白一色のサンドイッチを見てアセルスは誰にも気づかれないように唸る。視線を更のぼすとパンの耳はゴミ箱の中に捨てられていた。勿体ない——そ

う思いながらアセルスは楽しそうな白薔薇の顔をちらと見て言葉を呑みこむ。いつか白薔薇や紅にも節約や儉約の必要性についてきちんと理解してもらわなければならぬが、しかしかといつて「パンの耳を捨てるな」と言うのはなんとなくケチくさいことを言うようで気が引ける。だいいち、彼女たちはお姫様なのだ。仕方がないといえど仕方がないのかもしれない。正直にいえばこんなに貧しい暮らしに付き合わせていることさえ心苦しいくらいなのだ。自分にもっと生活能力があれば——忸怩たる思いに齒がみしてアセルスは口の中の水を吐き捨てた。

朝食を摂るとアセルスは外出着に着替え家を出る。玄関まで白薔薇と紅が見送りに来てくれる。じゃあねと手を振って時間を確認するともう六時だ。やや駆け足になりながら職場のイタメシ屋へ向かうと、先輩のアニーが店先に腰かけたまま眠たげに煙草を啜っていた。金髪のシヨートは大分痛んでいるが、野生の獣のように鋭い目つきをした彼女はそれなりの美人でもある。服装はいつも適当で今日も下着の上に革ジャンをひっかけるだけという破廉恥な格好でいるが、本人は人の目を全く気にしていない。一度「少し露出が多くないですか」と失礼を承知で尋ねてみたところ、アニーは真顔で答えたものだった。ウエイトレスなんて乳見せてなんぼじゃん？ やつぱ乳があるとないでじゃチツプの額が違うからさ。あんたも生活苦しいんだから、ふんぎりがつくよ。うだつたら見せ下着ぐらい貸したげるよ。その時は遠慮したがいいよともなればア

セルスも脱がなくてはならないかもしれない。

「よう」

片手をあげて挨拶するアニーに「おはようございます」と頭を下げ、アセルスはきよろきよろと辺りを見回した。

「ルーファスさんはまだいらっしやっついてないんですか？」

「あー。まあ、いつもこの時間には来てるもんね。でも始業時間にやまだだいぶあるし、問題はないんじゃないん？」

「珍しいですね」

「昨日は色々あつてさ」

「どういうことですか？」

それはアニーが口を開いたときカツカツと硬い音を立ててサングラスの男がやってきた。長髪を靡かせ颯爽とやってきたのは店主であるルーファスだ。

「んで」アニーが面倒くさそうに煙を吐き出した。「エミリアとは話し合いがついたの？」

「いや。つかん」

言葉少なにルーファスは答え、アニーの隣に座り込んだままのアセルスに「遅れてすまなかつた」と声をかける。

「はあ……。ホント、何やってんのかね」

アニーは馬鹿馬鹿しそうに伸びをして煙草を街灯に擦りつけて消す。

「アニー。店先を汚すな」

「へいへい」

投げやりな返事をして首をごきごきと鳴らしながらアニーが立ち上がると、ルーファスは不満気に短く唸った。

「大体ネコ耳に何の意味がある。機能的には全く必要が無からう」

「あたしは別にビーだっていいさ。ただ元スーパーモデルさんがピンクタイガーには耳が要るって言うてるんだ。そうでなきゃやる気が出ないってね。……あとはアンタが決めることだろ？　ボスはあんただ」

「だから俺は要らないと言っている。縫うのは俺だ。エミリアじゃない。だがライザが『ネコ耳は必要よ』と突然言い出してな……。耳がついていなかったらタイガーとは言えない、それはただのピンクだと」

「プロレス好きだからねえ……。なんか、こだわりがあんのかもね」

「俺は納得いかん。タイガーならトラ耳だろう。ネコ耳とは言わん」

「……ああ、またそーいう馬鹿をあんたも言いだしたもんだから揉めちゃったんだ」

「要約すればそうなるな。だが実際のところは言語表現に関する自由と尊厳についての

重要な議論だったように思う。避けては通れない戦いだった」

「いいかいアセルス。こういう男にひつかかるんじゃないよ。こういう男はね、遠くから指さして「馬鹿だ！馬鹿がいる！」ってな具合に笑っておくぐらいで丁度いいのさ。なまじ関わつちまうとあたしみたいに面倒なことになるからね」

「は、はあ……」

たわいのない会話を続けながら淀みない動作で店を開け、照明をつけ、タイムカードを押す。ルーファスはピザ生地の仕事を始め、アセルスは食材を切り分けていく。アニーは大きな欠伸をしながら目尻に涙を浮かべ、気だるそうに店内の清掃を始める。

はじめは慣れない仕事に戸惑うことも多かったが今ではすっかり慣れた。ニンジンやタマネギを斬るのはお手の物だ。ひたすらに下拵えを続け、九時になれば店を開ける。客は様々だが、ここクーロンにおける客層は最低といってもいい。尻を触る客、ウェイトレスを口説きだす客はざらでそれも金を払いさえすれば上客の部類に入る。店の中で薬の取引を始めるチンピラに突然ガトリングガンをぶつ放す気狂い。ちよつとでも油断すれば路地から潜り込んだ浮浪児たちが客の財布をスろうとする。気丈なアニーが股ぐらに隠し持った小型拳銃による丁重なおもてなしを続けていなければ店は一日にして廃墟と化しているだろう。

その日もいつものごとく嵐のように忙しい一日だった。

まず初めに発生したのは単なる取っ組み合いの喧嘩だった。一週間前から予約していた桃・赤・黒色戦闘員たちは角席ではじめは静かに飲んでいたのだが（電話予約の際にはやつと休みがとれたんですよと嬉しそうに話していた）、「トワイライトゾーンのあのかどうか」という議論が始まった途端に雰囲気が一変した。「就職したばかりの新人が何を言うか、黙って働け」「でも、権利は権利でしょう」「生意気にも逆らった後輩に先輩がブチ切れる騒ぎになったがこれは例によってアニーが外に放り投げた。次に常連客の「ミス」ビステイがやってきた。彼女は見た目まるつきり猪のモンスターだが、なぜか知能を持ち人語を操ることができる。普段は辻に立ち、自分がいかに洗練されたレディであるかを喧伝することになっていく彼女だがたまにこのイタメシ屋を訪れることがある。レディを自称する通り通常ではその振る舞いも礼儀正しくお淑やかなビステイだが今日は虫の居所でも悪かったのか、海鮮サラダに使われているセロリは何処産なのか生産者の名前は何と云うのか農薬はいつどのタイミングで散布されたものなのかをしつこく問い詰めてくる。アニーが「知らねーよ」の一言で済ませるとビステイは怒り狂って暴れ出し、呷りを食らって隣に座っていた術士の料理が無残に散らばる。「もう我慢ならん」とその青い髪は口のの中で呪文を唱えたかと思うと掌から生み出した魔術の鎖でビステイを縛りあげる。「店内での揉め事はよしてください」

とやんわりと止めに入つたアセルスが術士の肩を掴むが、術士は「気安く触るな」と乱暴に振り払いそれを見ていた細目の男が「おいおいニーサン、暴力は良くないぜ」。俺の演奏でも聴きなよ、きつとハッピーになれるさ」と誰に頼まれてもいないのにリユートを弾き始める。この時点で店は平常な営業が出来ていなかった。そこから更に遺産相続についての話し合いをしていた霊媒師の少女が埒が明かない会話に業を煮やして「もういい百年前のご先祖様に聞きましょう」と交霊術を始めたかと思えば昼間から酒を飲んでくだを巻いていた腹巻姿のオヤジが突然リバースして店内が騒然となる。

一日の営業が終わるころにはもうくたくたになっていた。体力的には十分問題ないが、精神的には疲れ切っている。お疲れさまでしたと言ってエプロンを外しタイムカードを押して休憩室で一息ついていると、今日の残り物を持っていくようにと言つてくれた。

「いつもすみません」

頭を下げるとアニーが「気にするこたないよ。どうせ売れ残りなんだしさ」と作り置きのシナモンパイを頬張りながら口にする。

「ほら、サラミとレタスも持つて行きな。……見りゃわかるよ、家計が苦しいんだろ？」

あんた、昼のまかないの時とかすげー真剣な顔して食べてるよ」

「……ありがとうございます」

深々と頭を下げ、申し訳なそうに身を屈めてアセルスは店を出ていく。

空を見上げると辺りはすっかり暗くなっていった。吐き出した息が白く濁る。……ああ、もう秋も深くなってきたんだな。感慨深げに夜空を見つめ、アニーに貰ったレタスの芯を齧るとぐしやりとした感触が歯の間で弾けた。

「……味が、よくわかんないや」

寂しげに呟いてアセルスは足を速める。

家計が苦しいというのは本当のことだが食事については別段困ってはいなかった。味覚が無くなったわけではなかったが食欲は減退し腹も空かない。常に腹が満たされたのと同じ状態で口にするものは、みな余計なもののように思えた。

レタスの味というものがアセルスの中で具体的にこれという明確な感覚として記憶されているわけではない。だがレタスの芯を齧れば野菜の青臭さや苦さが口腔に広がるものではなかっただろうか……。いまは何度口にしても味気なく感じる。

もう一度空を見上げる。スモッグで汚れた空は靄を吸って淀んでいる。雑多な街の、罅割れた建物や剥がれかけた看板を目にするにつけ心の中までもが錆びれていくような気がする。

遠くの方で、毛皮売りの男が呼び込みに鳴らす鈴の音が聞こえた。安全のために背後

を確認すると闇にとつぷりと呑みこまれたクローンの街並みが虚無を湛えている。

ふと、時の流れを感じた。

シユライクからクローンに来てからもう半年になる。季節は春から夏へ夏から秋へと移り変わり、冬を待ち受ける吐息が仄かに色づいていく。フラットでのつましい生活やイタメシ屋での労働にも随分と慣れ、「はやく独り立ちしたい」と逸つてばかりいたころと比べると随分変わったものだと思う。いま、自分は自分で生計を立てている。自分は自分で完結した生き方をおくれている。自分は成長したのだ。

そう思う一方で、どうしようもなく変わってしまったことを痛感して悲しむ自分もいる。着の身着のまま風邪ひとつひかない丈夫なからだ。どれだけ厳しい労働を繰り返しても疲労を知らない体力。朝、サンドイツチを一つ摘まんだだけで他には何も必要としないお腹。

「……家に帰ろう」

自分に言い聞かせるようにして足早に家路を急いだ。フラットに変えれば白薔薇と紅が待っていてくれるはずだった。自分は一人ではない。その考えはアセルスを癒し、そして同時に現実から目を背けさせていた。

——ねえアセルス。あんたんとこの、……あー、なんだっけ、白薔薇と紅？ あんた

が言いにくいんだつたらあたしが代わりに言つてあげようか。働けつてさ。

——いえ。いいんです。私がそうしたいんです。

——苦勞性だね、あんた。そりやくズ男にしやぶられる女が言う台詞だよ。

◇

クローンの裏通りに妖魔の医者がいる——その話を聞いたのは勤務中のことだった。店にやってきたラモツクスとアニーとの会話の中に妖魔という単語を聞きつけたアエルスが耳をそばだてていると、会話は病魔モールに冒された富豪の娘と、娘を治すためにラモツクスに雇われたとある医者の話に移る。どうも富豪の娘はアニーの知り合いらしく、上機嫌の彼女は「今日はおごりだよ」とラモツクスの頭を撫で、ラモツクスはラモツクスで「えー？ やったー！」とはしゃいでいる。

「そのお医者さんの住所を教えてくださいませんか？」

突然話しかけてきたウェイトレスにラモツクスはきよんととしていたがすぐに「うん！ いいよ！」とにつこり微笑んだ。あまりにも無邪気な笑顔だったので思わずアセルスはラモツクスの頭を撫でる。

医者のことを白薔薇たちには伝えなかつた。人間に戻りたいのだと伝えることは妖

魔である彼女たちを否定するようで後ろめたかったし、危険だからと止められる可能性もある。食料品を買いたれたといつて夜更けに家を出た。妖魔の医者——ヌサカーンは裏通りの奥まったバラック小屋に居を構えていた。

足を一步踏み入れてアセルスは「うっ」と鼻を押さえる。ツンと臭い立つ刺激臭に、おびたらしい埃の積もった室内。仮にも人の命を扱う場所である筈にも関わずおよそ清潔とは言いがたい。木張りの床はあちこちが割れ、足を乗せるたびにぎいぎいと音を立てる。アンティークといえれば聞こえはいいが、屋内の調度品は何もかも古めかしく年代を経ている。窓の棧を試しに指でさらってみると埃が丸まって親指の先ほどにもなり背筋がぞつとした。

「あの、誰かいませんか」

とりあえず呼びかけてみるが返事はない。待合室らしき場所には苔色のソファアーが並んでいるが、破れて飛び出した綿の中で小さな虫が蠢いており腰を下ろす気にはなれなかった。部屋の隅に置かれた骨格標本には「←ココ」というメモが取り付けられているが何の意味だろうか。どうしようかと思はれはらく迷っているの不意に骨格標本の首がぐるりと回転しこちらを見下ろしたものだからアセルスは驚く。驚いたがあまりにも驚きすぎて思考が完全に停止し、表面上は平静なままだ。そのままそろそろと後ずさりし逃げ出すようにして隣の部屋に飛び込むと、そこには白衣の男が訝しげな顔をして

こちらを眺めていた。

「呼び鈴は鳴らしたかね？」

「え？」

「呼び鈴だ。まず受付で問診票に記入を。記入が終わればこちらから診察券を手渡す。時間がくれば診察券に記載されている番号を呼ぶ。呼ばれたら診察室の扉についている呼び鈴を押す。どうぞ、と私は答える。君は不安げな表情を押し殺しながら診察台に座りこう言う。『あのう、最近なんだか心臓が苦しくて……』。ほう、と私は答える。それは大変だ。早速手術を始めねば。病院というものはそうあるべきだ。そうあるべきであるということは、君もまたそのように振る舞うべきだということだ。初診に際していささか手順にまごつくのは仕方のないことだが、わからなければ誰かに聞くべきだろう。呼び鈴は鳴らしたかね？」

「いえ、鳴らしていません……」

「なぜ鳴らさなかつた？ 反社会的な態度をとることで自分は正当な治療費を払うつもりがないことを示そうとしたのかね？」

アセルスは少し考える。

「呼び鈴を鳴らさなかつたことについては謝ります。……でも、受付……には、誰もいなかったし、他に質問できそうな人はいなかったの。……、ここ、看護師の人はいらつ

「しやるんですか？ 姿が見えませんでしたけど……」

「ふむ」男はさもさりげなく、という顔で頷く。「確かにこの病院に看護師ないし受付を行う者はいない。慢性的な人材不足でね」

「……じゃあ、あなたの言ったようになってできるわけないじゃないですか！」

「不可能ではない筈だ。少なくとも私は院内の秩序はそうあるべきだと信ずる。私が信じているからには、この場所の秩序はそうあるべきなのだ」

「はあ……。わかりました……」

「……何がわかったのかね」

「あなたが妖魔だということですよ。あなたが又サカーンさんですね？」

「いかにも。私が又サカーンだ」

堂々と又サカーンは答え、白衣の裾を軽く払う。

「呼び輪を鳴らさなかったことについては今回だけ目を瞑ることにしよう。それで今回はどのような病に罹っているのかね？」

「私、病人じゃありません」

「なるほど。そのパターンか」

「パターン？」

「君は自分が正常だと信じている。が、実際のところはその逆だ。君の気は触れている。」

君の友人たちはみな君に病院に行くようにと勧める。もちろん君は断る。自分は健康なのだ、どこもおかしいところなどない。しかし何度も何度も友人たちに心配される内に流石に君も煩わしくなり、医者には診てもらったが何ともなかったと報告するためだけに仕方なく手近な病院に赴くことにする。それが今の君と言うわけだ。おそらくは精神病……あるいは依存症……中毒……その類だろう。幼いころ親に激しい折檻を受けた経験は？」

「だから、私は診察をお願いしに来たわけじゃないんですってば」

「ではなぜここに来たのだ？」理解できないという顔でヌサカーンが大げさな仕草で手を振る。

「ここは病院だ。病人でもないのにわざわざここへ来るとするのは、それはそれで病気なのではないのかね？」

「ああ、もう……」

うんざりしたようにアセルスは項垂れ、深いため息をついた。

「ええと……。すいません。訂正します。私は病人なんです」

「そうだろう」自信満々でヌサカーンはしきりに頷く。「初めからそう思っていたのだ。

……さ、自覚している症状を言いたまえ」

「私は半妖です。このからだの半分は人間の血、半分は妖魔の血が流れています。私を

人間に戻してください」

意を決して告げると、又サカーンはゆっくりと一步後ろに下がった。アセルスの全身を舐めまわすように観察し、それからようやく口を開く。

「悪いが君は私の患者でないようだ。他をあたりたまえ」

「……そんな。話を聞いてください」

「いま、聞いた」

「そういうことではなくて！ ああもう！」

「……では聞くが、半妖というのは病なのかね？ 生物学的に興味深いものであることは認めよう。しかしたとえればそれは混血、ウルガリア人の男とメルンヌ部族の女とが結婚し産んだ子供とどこが違うのだろう。トマトとジャガイモを配合して新たに生み出した食物は救い難い病に冒されているのだろうか。君の言によるのなら、それら全ては治療されねばならないことになる。……そしてまた、元は人間であった君が妖魔の血を享け半妖になったとして、なぜ君は人間に戻りたいと願うのかね？ なぜ人間の血を捨てようとは思わないのだ。人間に比べれば妖魔の方が生存能力は遥かに高い。基礎代謝や燃焼効率も比べ物にならない。しかし君は人間に戻せと言う。では聞くが、妖魔とは病気なのかね。治療しなければならぬものなのか」

「元の体に戻りたいと思うのは異常なことではないはず。妖魔になれば人間のよう

に年をとることもお腹を空かすこともない。本能から血に飢え、他者を支配して君臨しようとする。誰だつて嫌になりますよ」

「時の速度というものは万物に等しく流れるものだ。変わることは何物も逃れられない。なるほど君は元の状態に戻りたいと言う……しかし、これからさき変わらぬものなどただ一つとしてあるのだろうか。君は変化そのものを恐れているのではないか？ 君は自分の中の変わつていく全てを否定しようとしているのではないのか？」

「そんなことはありません。私はただ、昔みたいに物を食べて満足したり、平和に暮らしたいだけです。……そう、平和です。この血を失えば誰かに狙われることもない。人として静かに暮らしていける」

「生憎だがそういういた精神的な幸福については興味がない。いまの自分が好きになれないのならセラピーでも受けたまえ」

「……」

むすつと黙り込んでしまったアセルスにヌサカーンは肩を竦め、診察室の奥で何やらごそごそと探し始めた。しばらくしてピーカーといくつかの試薬を抱えて戻ってきたヌサカーンはアセルスの目の前で青と赤の液体を混ぜ合わせて紫色の液体を作りあげた。彼が言いたいことを察してアセルスは真剣な顔で頷き、「それで」と先を促す。

「TDE溶液とメスチモール液。どちらも液体の電解震基度を測るためのものだが反応

は赤と青で真逆だ。これらを混ぜ合わせれば色は紫になる。君もわかるね？ この紫から元の赤と青を取りだすにはどうしたらいいか」

「元に戻るのには不可能だってこと？」

「それは結論を急ぎ過ぎだな。方法がないかどうかはわからん。が、少なくとも私には無理だ。何しろ半妖の症例記録など存在していないからな。医者として無責任なことを言うことはできないが、もし君の身に起きた異変が妖魔の血によるものだというのなら瀉血と輸血を繰り返すことで血の濃度を薄められるかもしれないし、血の元となる妖魔を滅ぼせばあるいはその影響下から脱することが出来るかもしれない。だがそれはあくまでも推測だ」

「……なるほど」

「失言だったな。忘れてくれたまえ」

「又サカーンさん」

「何かね」

「ありがとうございます」

「……ふむ」

「ついでのいつてはなんですけど、もうひとつ聞いてもいいですか？」

「君も案外あつかましいな……。まあこの際だ、構わんよ」

「生きていて寂しくなることがありますか？」

「……なに？」

「妖魔として長い長い年月を生き続けて、辛くなったり、むなしくなったりすることはありますか？」

「……どうしてそんなことを聞く？」

「私の知っている妖魔が……」言葉を選びながらゆつくりとアセルスは口を開く。「私の知り合いがそんなことを言っていました。永い時を過ごしている内に、手に入れるという言葉の意味がわからなくなつた、と。そう話している彼の顔を見ているうちになんとも思つたんです。この人は——ええと、人ではないんだけど——この人は寂しいんじゃないか。本当は悲しんでいるんじゃないか。妖魔だから口に出して弱音を吐いた涙を流したりできないだけで、もしかしたら困っているんじゃないかって」

「ほう」とヌサカーンは興味深そうに頷いた。「それで？」

「だから……こんなことを言うと、またそんなものは病氣じゃないって話になるのかもしれないけど、彼の気持ちをもっとわかつてあげられたらと思うんです」

「フーム」

ヌサカーンは穏やかに唸る。

「君は善人なのかね？」

「え?」

「察するにその彼というのが君に血を与えた妖魔なのだろうか——君をそんな体にした相手の精神を気遣うというのは私から見れば狂気の沙汰だな。君にとつて、その妖魔はよほど大切な存在なのか、あるいは君が度を越したお人よしなのか……私としては素直に呑みこめないとところだな。一種の自己陶醉だと考えた方がまだ納得がいく」

ぶしつけな又サカーンの言葉に、アセルスは淋しい微笑みを浮かべた。

「多分、そうなんじゃないですか?」

「うん?」

「そんなものはみんな陶醉だ、ナルシズムだということにしておけば、何だつて解決できてしまふんだし、それはそれでいいんじゃないですか。……私は、別に自分が善人だとは思えませんが、あの人のことがそこまで大切だとも思えません。少なくともいまは、まだ。でも、そこから先に進もうと思つたら——自分が善人なのかどうなのかとか、自分はその人のことをどう思つているのかとか——そういうことを全部ひつくるめて認めていくためには、やつぱり実際の行動を起こしていくしかないじゃないですか。その結果として、いよいよ自分は救い難いナルシストだということがわかれば、その時はその時で盛大に自分を恥じて滝にでも身を投げます」

「滝にか。それはいい」

ヌサカーンはリラックスした様子で手術台にもたれた。

「君の潔さに免じて正直に答えよう。そういつた感情は私には皆無だ。……自分で言うのもなんだが、私は妖魔の中でも変わり者で通っている。あまり参考にはならんと思うがね。私に興味があるのは病気だけだ。病気の生み出す恐怖や不安に私はひどく惹かれる。たいした宣伝を行っていないこの委員にもひっきりなしに患者はやってくる。まだ見ぬ病原体。死を前にした生命の多種多様な反応。それらは私の探究心を豊かに満たしてくれる。この世を夢んでいる暇などはないさ。他の妖魔もきつとそう答えるだろう」

「そうですか……」

「だが——」とヌサカーンは楽しそうに語り続ける。「想像することはできる。妖魔の罹る精神病というものの輪郭をなぞろう。妖魔は長命だ。外敵に滅ぼされない限り半永久的に活動することができる。……しかし、妖魔は子孫を残すということができない。仮に何らかの理由により死を迎えた場合には、その者の存在していたという情報、DNAを残すことはできない。いつか忘れ去られてしまう。それでも生きている……。だから妖魔は支配を、そして愛を求める。妖魔は自己完結した生き物だと思われがちだが、逆に妖魔こそ他者を必要とする生き物ではないかと私は時々思う。妖魔の尊ぶ三大要素——美、恐怖、そして矜持。それらは全て他者との関係性の中でしか言及されない。

力で他者を支配しようとするのは強い印象を与えることで記憶に残してもらうためだし、愛するなどという行為に至っては説明するまでもないだろう。……大体が、妖魔がなぜ人間を虜とするのかという問題もそこに起因しているのではないか。圧倒的に美しいのはもちろん妖魔だ。だというのになぜだか妖魔はたびたび人間を求めてしまう。人間が弱いからか？ 操りやすいからか？ おそらくはそれもあるだろう。だが私はいこうも思う。自分が生きている間は自分だけを見つめていてほしい。けれども……もし自分がいなくなったその後は、虜としてではなく人として生き、子を産み、自分がここにいたという確かな物語を伝えてほしいのだと。身勝手な話だがね。だが妖魔の本能としてはなかなかありそうな話ではないかな？」

「あなたは優しい妖魔なんですね」

「……なに？ なぜ、そう思った？」

「寂しいとか辛いとか、そういういった感情はないとあなたは言いました。多分、それは本当なんだろうと思います。……でも、私はあなたの仮説を聞いてなんだか納得したんです。……いいえ、納得したいと感じました。あなたの考えは——なんていうか、その——とても感傷的、だと思うんです。そして、そんな風に考えることのできるあなたは、きつと優しい妖魔だろうと思います」

「……ふむ」ヌサカーンは深くため息をついた。「……なるほど、これは新鮮だ。自分よ

りも遙かに年弱な生き物に優しいと評される羞恥と屈辱。しかしその裏には名状しがたい驚きが秘められている……。……いま、私は既知であり、未知である……。ふふ……面白い……。面白いぞ……。フッフッフ……。……」

「……楽しんでそうですね……。……」

嫌そうな顔をしているアセルスには構わず、ヌサカーンは自分の世界に没頭していたがやがて壁掛け時計がぼおん、となるとようやく我を取り戻した。

「おっと。こんな時間か」

「長居をしてすいません」

「気にすることはない。なかなか興味深い時間だった。また来たまえ。この次には私好みの病に罹ってくるといい。不治の病でもいい。どうしようもなく難解で悲惨な代物であればなお良い。歓迎しよう」

「遠慮しておきます」

アセルスは即答した。

第十六幕 幻夢の一撃

珍しく腹が鳴って、アセルスは顔を赤らめた。やだ、ごめん……と誰に言うでもなく謝ると、傍で針仕事をしていた白薔薇がくすりと笑った。笑ったね、とふざけ半分に睨みつけると、白薔薇の指から僅かに血が流れている。どうしたのと注意を向けたが、彼女は何でもないことだというように首を振る。ちよつと、針で刺してしまっただけです。

ソファーに腰かけた白薔薇は手袋に刺繍を施している。やがて冬が訪れ、スラム街にも雪が降るだろうから、と彼女は言った。妖魔は暑さ寒さには強いが、逆に気温の変化には鈍くなりがちだ。“人間”のフリをして生きていくのなら、装いの一つも変えてみるべきだろう。

人間のフリ、という言葉は気にかかったが自分のために手袋を作ってくれている白薔薇の気持ちは素直に有難かった。毎夜毎夜少しずつ完成に近づいていく手袋を見守りながら彼女と他愛もない会話を繰り返し、夜中のお茶で咽喉を潤す。いつしか習慣めいてきたこの小さな夜会を心のよりどころの一つとして、アセルスはクーロンでの秋を終えようとしていた。

空腹をぐまかすために立ち上がり、窓をさつと開け放つと冷たい空気が流れ込んでくる。寒いとは思わなかった。もしこれが人間ならどう感じただろう、凍えるように冷たいでも形容しただろうか。アセルスにはわからなかった。自分は冷たいという言葉を知っているから、冷たいと感じるのだろうか。今の季節であれば、夜ならば、おそらく、きつと、冷たいだろう。そう推論し、周りの風景や窓におりた露から「冷たい」と表現しているだけなのだろうか。

熱を感じることはできる。氷を抱き締めれば確かに寒くもなるだろう。けれどもこのまま妖魔に近づいていきあらゆる環境に耐えうる体を手に入れたなら、その時は四季の変化に心を動かすことさえもなくなってしまうのだろうか。

「だから……なのかな」

世界のあらゆるものから感覚が遠ざかってしまったら、失われた感覚を呼び起こすための破滅が欲しくなる。身を斬られる痛みでもいい、魔法による業火や絶対零度でもいい。妖魔に戦う力が備わっているのもそのためか。イルドウンやアルキオネが戦いを求めるのはそのためなのだろうか。

「なんて……なんの証拠もない。あれこれ考えたって、想像の域を出ないか……」

近頃では随分と独り言も増えて、白薔薇はごく自然に聞こえなかったふりをしてくれるようになった。又サカーンの話を聞いてからアセルスは妖魔と言うものが一体何な

のか考え続けていたが未だに答えは出ない。オルロワージュ、イルドウン、ラストバン、セアト。紅にメサルティム、そして白薔薇。みんな人間とはどこか違う生き方、考えを持っていて。けれどもそれは同じではなく、一口に妖魔といっても誰もがどこかしら違っている。シユライクで学生として暮らしていた頃、妖魔はただの化け物だった。本や映画の中に登場するような——人の血を吸る吸血鬼、人を魅了する怪物。しかし妖魔の世界に一歩足を踏み入れた今、アセルスの眼には妖魔がただの化け物とは思えなくなっていた。

夜風にあたつても空腹は引かず、アセルスは諦めて冷蔵庫の中身をござござと漁り始める。少しだけわくわくする。久しぶりの夜食。お腹が空いたという感覚は実に健やかな感情をもたらしてくれる。ようし、たまには贅沢してやろうじゃないか。何かに挑むような気持ちで魚肉ソーセージの皮を剥き、あんぐりとだらしなく口を開けてかぶり付いた。

「あ……」

思わず茫然としてアセルスは言葉を失う。そのままぼとりとソーセージを取り落とし、のろのろと力なく拾い上げ、そつとラップに包んで冷蔵庫に戻した。俯いたまま、アセルスとはとぼとぼと戻り白薔薇の隣に腰を下ろす。

「夜食はおやめになったのですか？」

「うん……」

アセルスは膝を抱え、長いため息をついて足の間に顔を埋めた。

「お腹が空いたと……そう思ったんだけどな……なんだろう……、味が……」

戸惑いに言葉を揺らすアセルスに、白薔薇はそつと微笑んで肩を寄せた。

「白薔薇」

「はい」

「妖魔って何なのかな？」

突然の質問に白薔薇は眼をぱちくりさせていたが、やがて針仕事の手を止めてゆっくりと答える。

「妖魔とは何か、という質問はきつと、人間とは何かという質問と同じものですね」

「それは……答えが出ないという意味で？ それとも妖魔も人間も変わらないという意

味で？」

「いいえ、私には答えることができない、という意味で」

「はぐらかすね」

「誰だつてそんなことを聞かれれば困ります」

「でもさ……」

不意に沸き起こる焦燥に言葉尻を上擦らせ、アセルスは言い淀む。

「私は半妖だから……、自分が何なのかってことを知ろうとしたら、妖魔とは、人間とはって考えて、答えを出して、そしてようやく、そこから半分を、中間点や境界線を見つけて出さなきゃならないんだ。……ゾズマには、そんなことくらい自分で考えてみろって言われそうな気もするし、それはそれで正しいような気もするけど、でも、何の材料もなしに結論なんて出せやしないよ……。ねえ、白薔薇は元々は人間だったの？ 吸血をされて人間から妖魔になって、自分の変わり様に戸惑ったりしたの？ それとも初めっから白薔薇は妖魔で、人間の血を吸ったりもしたの？ 白薔薇は妖魔なのに、どうしてそんなに優しいの？」

矢継ぎ早に投げかけられた問いかけに白薔薇は困ったように眉を下げておずおずとアセルスの手を握った。

「アセルス様……」

「ごめん。子供みたいなことを言ってる」

「いいえ。いいのです。アセルス様。それは当然の疑問です。……ですが、ごめんなさい。私はアセルス様の疑問に答えることができませぬ。私は気がついたときから妖魔でありました。妖魔として生き、そのことについて疑問を持ったことはありませんでした。私には、私が優しいのかどうかわかりませぬ。あなたと同じように、私もまた自分のことがよくわからないのです。たとえば妖魔と言えど、自分が何なのかを知っているも

「のはそうおりません」

「よく、わからないんだ……。あなたみたいな妖魔もいるって思うその一方で、やっぱりどうしても理解できない部分がある……。セアトやアルキオネみたいにいきなり襲ってくる奴もいるし、イルドウンみたいに戦うことを楽しんでるような奴もいる……」

アセルスはミニチュアのベッドですやすや寝ている紅をちらとみやる。「紅も……初めて会った時はあやうく焼き殺されるところだった……。別に、それで恨んでるってわけじゃないけど、……でも、人間とは違う。人間はそんなことしない。ねえ、白薔薇……」

そこでアセルスは縋りつくように白薔薇の手をぎゅうと握りしめ、泣き出しそうに顔を歪める。

「白薔薇も、人を殺したの……？」

静かに尋ねるアセルスに白薔薇はにっこりと微笑んで答えた。ええ、たくさん殺しましたよ。

◇

——そう。

蚊の鳴くような声でアセルスは呟く。

わなわなと震える右腕を押さえて、アセルスは顔を背けた。嘘なんでしょう冗談なんでしょうと叫び出したかったが恐ろしくて出来なかつた。ぎゅつと眼を閉じて、必死に息を整えた。今、自分の隣にいるこの女性が不意に膨れあがり、口は三日月に裂け眼は爛々と輝きだして舌なめずりをする、そんな妄想に囚われる。この肩に触れる彼女の柔らかな感触はしかしどう仕様もなく妖魔のものなのだ。

人を殺した。

確かにそう言った。

何と言つていいのかわからず胸の中で渦巻く動揺に吐き気を覚えていると、怯えるアセルスを慰めるように白薔薇が優しく背中を撫でる。いつもならそれでほつと安心し、身も心も任せてしまいたくなるような愛撫。けれどもどうしたことだろう、今日このとき殺人を宣言して伸ばされた白薔薇の指先はどこか生理的な嫌悪感を芽生えさせ、アセルスはびくりと身を竦ませる。

「いやだ……白薔薇……」

「アセルス様……？」

不思議そうな声を上げて白薔薇がなおもアセルスの背中を撫でまわす。白薔薇の細い人差し指が、淫らに振じれた薬指が、放恣を秘めた中指が、アセルスの脊髄をひたひ

たと叩いた。痺れるような痛みが全身を奔る。神経を駆け巡る稲妻がびりびりと震え、脳髓にまで蕩けるような刺激を伝達していく。その電気信号が官能という名だとアセルスはまだ知らない。ただこの時ばかりは見知らぬ感覚に戦き、やめてと強く身を振って白薔薇を睨みつける。

「どうし……」

どうしたの白薔薇、こんなのおかしいよ。いつもと違う。そう言いかけてアセルスは口を嚙む。思いのほか近く、瞬きの音さえ聞こえそうな距離から深く、どこまでも深くこちらを覗きこむ視線でもって白薔薇の眼球がこちらを見つめている。白薔薇の掠れた吐息が痛いほど耳に響いた。彼女の吐息はむせかえる植物の臭いがした。生きとし生ける植物が、刺を持つ薔薇が食虫花が放つ濃密な命の香り。

——この女は一体誰だ？

——こんな女を私ひとは知らない……いいや……。

——ひとじゃあ、ない……。

戸惑いにアセルスが視線を反らすと、白薔薇はくすりと小さく笑った。

「アセルス様」

「はなして……」

押しつけようと差し出した腕を白薔薇は怖ろしいほど素早く掴み、万力のような力で

そのままぎりぎり締めつけながらアセルスをソファーに押し付ける。やだ、何するの、とアセルスはもがいた。けれども白薔薇は何も答えてはくれなかった。

「し、白薔薇……」

声を迷わせるアセルスに白薔薇は俯いてふるふると全身を震わせた。何をしているのか、まじまじとその顔を覗きこんでアセルスのはつと息を飲んだ。

白薔薇はいつものように、平和な顔をしてくつくつと笑っていた。楽しくてたまらない、そういう顔をしていた。

「……少し、早かったですね」

「え？」

「あなたとこんな話をするのはもう少し先にしようと思っていたのに——あなたが変なことを聞くからつい、口走ってしまったの……失敗でした」

「何を言っているの……？」

「ねえアセルス様……。〃無かったこと〃にしてしまいませんか……？ ほら、赤子みたいに目を瞑って？ 体をうんと縮めて、ぶるぶると恐怖に怯えて——ああ、悪夢よ去れと念じてみて？ そうすれば何もかも忘れられる。今日、起きたことはみんな、〃無かったこと〃になりますよ……。気付かなかったフリをして、見えなかつたフリをして……忘れてしましましょうよ」

アセルスは唾をぐくりと飲み込み、頬を強張らせる。

「そんなことは、できない……。無かったことになんて、なに一つならない……。この、体も、あなたのことも……」

「本当にそれでいいのですか……。？」どこか眠気を誘う声で白薔薇が穏やかに尋ねる。
「本当に、それで、後悔はしない……。？」

「嘘のままになんかできない」アセルスは苦しげに呻く。「無かったことになんか……。？」
「そう」

白薔薇は頷いた。

「それならば思い出してみてください。あなたのお腹が鳴ったのはなぜ？」

「え……。？」

こんな時に何を言うのだろう。一瞬頭が真っ白になった。お腹が鳴ったのはなぜ？
空腹を感じたことにどうして白薔薇は言及するのか――。

（珍しく腹が鳴って、アセルスは顔を赤らめた。やだ、ごめん……。と誰に言うでもなく謝ると、傍で針仕事をしていた白薔薇がくすりと笑った。笑ったね、とふざけ半分に睨みつけると、白薔薇の指から僅かに血が流れている。どうしたのと注意を向けたが、彼女は何でもないことだというように首を振る。ちよつと、針で刺してしまっただけです……）

「そ、そんなことは……違う！ 絶対に違う！」

うろたえるアセルスの体を玩具のように前後に揺すり、白薔薇は軽やかな笑い声を上げて言う。いいえ、そうよ。あなたのお腹が減ったのは、ただあなたが私を食べたくなったからですよ。

「嘘だ！ そんなのは嘘っぱちだ！」

「嘘のままにはできない、とあなたは言った筈」

「でも、そんなことは……」

「ほらー」

珍しく大声を出した白薔薇にびっくりと体を引き攣らせ、アセルスは彼女が突き出した指先に思わず目を向ける。

ごくり、と無意識に咽喉が鳴った。

「うう……」

混乱に脂汗を流しながら唸るアセルスは、しかしその可憐な指に眼を奪われる。いや、指ではない。白薔薇姫の細れる指、その先端にできた醜い傷口、その傷口から滴り落ちる、いやらしく粘ついた蒼の液体——乙女の血液。かちり、と奥歯が鳴った。恐怖に歯の根が合わなくなつたのではない。獣の衝動に、その歓喜に牙が震えているのだつた。歯茎をむき出しにして歯と歯とを強く噛みしめた。次から次へと涎が溢れ、唇の端

から零れだした。だらしなく頬を緩ませて、アセルスはとろんと表情を弛緩させる。わなわなと舌を震わせ、はしたなく突き出した。与えられるものに何の躊躇いもなく跪いてアセルスはねだる様に鳴き声を上げた。淫らがましい声だった。

「アセルス様」

淡々とした白薔薇の声にアセルスのはつとして我を取り戻す。動揺に視線を彷徨わせながら口ごもる。

「ち、違う……これは違うんだ……、ねえ」

アセルスは助けを求めるように白薔薇を見た。冗談だと言つて欲しかった。気のせいだと言つて欲しかった。だが、しかし——白薔薇の指先でまた一滴の血が流れ落ちる。ぴちやり、と湿った音を立て絨毯に小さな染みができた。あさましい音を立ててアセルスの腹が鳴った。違う。これは違う……！

戸惑うアセルスを尻目に白薔薇はじれつたいほどゆっくりとした動きで指先を軽やかに振り、また一しずく血液で床を汚してみせたかと思うとほらわかるでしょうとでも言いたげに視線を床へそしてアセルスへと移動させた。

「白薔薇……」

縋りつくように瞳に涙を浮かべたアセルスを残酷な目つきで見下ろして、女王が命令を下すように厳然とした声色で白薔薇は言った。

「ほら——お舐め」



「う……」

顔を歪めて咽び泣くながら、アセルスは四つん這いになって地べたを舐める。

「うう……！」

涙がとめどなく滴り落ちて、体を支える両手が滑る。あ、と間拔けな声を上げて力なく倒れ込み、したたかに頬を打ちつける。思わず撫でた掌に血がべったりと付着して、ああ、なんて勿体ない、と浅ましく考える。自分はなんて生き物だろうと絶望に冒されながら、必死になって零れた血を啜りあげた。今や全身は焼けつくほどの熱を持ち、衣服の裏側で欲情に胸が尖る。喘ぐように息をして淫らに伸ばした舌を床に擦りつける。咽喉を滑る血はどろどろと粘性を帯び、甘やかな感触をしつこく残していく。恐ろしいほど甘美なその液体を思う存分味わって——アセルスはまた一つ嗚咽を漏らす。

「嫌……こんなのは……私じゃない……私じゃあ、ない……！」

「……」

そんなアセルスを見下ろして白薔薇はつまらなそうにため息をついた。

「やはり、早かったわ……」

床を舐めるアセルスの頭をがちりと掴み、白薔薇は子供をあやす母のように優しい微笑みを浮かべる。

「大丈夫ですよ。アセルス様」

「あ……?」

「悪いのはすべて、この私。アセルス様はなにも悪くありません。私がただ、少し急ぎ過ぎてしまったのがいけなかつたのです。だから——」

白薔薇は小さく囁く。

フラッシュユフラット
—— 光の氾濫。

白薔薇の手の中に生まれた光球がするりとアセルスの頭の中に侵入し、内側で音もなく炸裂する。アセルスの頭が一瞬にして弾け飛んだ。おぞましい肉片をぶちまけてびくびくと痙攣しながら、彼女の胴体がどうと音を立てて転がる。

「大丈夫ですよ。アセルス様——」

白薔薇は淡々と言葉を続ける。

「このくらいであなたは死なない。次にあなたが目覚めた時には、何もかもが夢になっています。……私が、ちゃんとそうなるようにしておきます」

そう言って白薔薇は飛び散ったアセルスの肉片をかき集め、その中に小さな種子をそつと埋め込んだ。瞬く間に根を伸ばした種が身を振ると種はふと姿を消して見えなくなった。アセルスの体がようやく再生を始めていく。

部屋を汚したアセルスの血液のいくぶんかは本体に惹かれるようにずず、ずず、と蠢いて戻っていく。残りの動かない分は白薔薇が魔術で生み出した吸血植物に吸わせて消しておく。

「あとは……、そうね……」

「白薔薇姫……あなた、何をしているの！」

後始末のために頭を悩ませていると、不意に背後から鋭い声が上がった。

「紅姫様……。いくらなんでも、起きるのが少し遅すぎるのではないですか？ そんなことではアセルス様をお守りできませんよ」

白薔薇は呆れながら振りかえり、非を責めるようにやんわりと口を開く。平然としたその態度に紅はわなわなと全身を震わせ、激情の炎に身を高ぶらせた。

「黙れ！ アセルス様から離れなさい！」

「嫌だ、と言っただら？」

「殺す！」

即答した紅に白薔薇はやれやれと言いたげに眼を閉じ、面倒そうに息をついた。

「少し考えて下さいませ、紅姫様。こんな所で私たちは戦えば、アセルス様が折角見つけてきたこの家は簡単に壊れてしまうのですよ」

「そんなことを気にする状況か……!」

「ではもう一つ教えて差し上げます。アセルス様はいま、大変傷ついていらつしやいます。……だから、これはそれを“なかつたこと”にするための仕方のない措置なのです。アセルスは私たちが妖魔であるということに——大量殺人者である妖魔だということを知ってしまいました。自分が血を求める浅ましい化け物だということに気づいてしまいました。その事実が彼女を苦しめ、絶望させてしまうでしょう。今の彼女にはまだ、真実に触れるだけの強さがありません」

白薔薇は紅を威嚇するように不敵な笑みを浮かべる。

「私を殺しますか、紅姫様? そうして目覚めたアセルス様に全てを教え、彼女の心の支えである私を殺したと告げる勇気があなたにありますか?」

「貴様……」

「恨まれますよ、きつと。あなたは、アセルス様に」

「……」

「ああ、でも……そうした方がもしかしたらあなたにとっては都合が良いのかもしれないね。だってあなたはアセルス様に恋をしたのでも希望を見たのでもなくて……死

ぬ理由が欲しかっただけなのなもの」

「そんなことはないわ……」

弱々しく言葉を濁す紅を嘲笑い、白薔薇は「嘘ばかり」と頬をつり上げた。

「だって、ねえ？ たった一人の小娘が夢見がちなことを言つて……」この世のどこかに居場所を探そう、辺境を^{フロンティア}目指そう。だなんて言われて、はいそうですと頷く私たちでもないでしょう？ だからあなたは彼女の言葉を信じたのではなくて、……やるだけやってみて、駄目だったら死ぬしかないという彼女のお題目に縋りついただけ。彼女の旅を利用して……いつか、適当なところで死んでしまえばいい。あなたはそう、諦める。ためにアセルス様に協力している。彼女の願いが叶わないことを知っていて……」

「違う。私はアセルス様を信じているわ！」

「ならばすぐに私を殺してアセルス様に真実を告げなさい」

「く……」

「できないのなら……いますぐ私に協力してください。アセルス様ももうすぐ目覚めます。口裏を合わせ、血痕を跡形もなく消し去るのです。全ては悪夢だった、そういうことになるよう、舞台を作り上げるのです」

「もし……」怯えの表情を浮かべながら恐る恐る紅は尋ねた。「もし、アセルス様が全て覚えていたら？ 悪夢だと信じなかつたら？」

「信じるまで殺しましょう」

白薔薇はこともなげに言った。こうやって脳を吹き飛ばせばいくら再生すると言っても記憶に齟齬も出るでしょう。フラツシユフラツドで何回か脳味噌を焼いていけば、その内に何だつて忘れませよ。

多分ね、と言つて白薔薇は笑う。それは例えば自らの破滅を楽しむような、後先を考えずに悪を為す罪人特有の邪悪な微笑みだった。

第十七幕 罔象の子宮、プリンセス・スライム——水の従騎士ハウゲータの物語①——

喪服に身を包んだその女が歩くと道行く人々はみな眉を顰めた。胸元の襟飾りは実座陣ミツザイガでスカートミツザイガの襷は24。身に纏う黒衣は貴婦人のものではなく高級娼婦コルティージャナのそれであつたし、微笑を湛えた女の表情は早朝の町を彩るにはあまりにも淫蕩であつたら。

黒蘭の手袋に日傘を掲げ、優雅に足を進める女は通り過ぎる人間たちの視線など気にも留めない。自信に満ちた足取りで郊外に建てられた国一番の資産家の屋敷へと向かい、堂々と門をくぐる。すぐに守衛がとんできて「どちら様で？」と尋ねると、女は胡弓の魔女禁・江・涓ジン・ジャン・ジュアンを名乗り当主に会いたいと告げた。

——は……。ま、魔女……でございますか？

——ああ、そうだ。

——失礼ですが、ご婦人……当主様とお会いになる約束はされてらっしゃるので？

——そんな物はないな。

女がそう答えると守衛は鼻を鳴らして露骨に態度を変えた。

——なんだ？ どの世間知らずだ？ うちの当主様はお前のような田舎者は相手にはせんのだ。帰れ帰れ。

——まあそう言うな。魔女が来たと当主に伝えてくれればわかる。ジン・ジャン・ジュアンがやって来たと。

——そういうわけにはいかんな。不審者を追い返すのが俺の仕事でね。お前のような勘違いをいちいち入れていたんでは俺もクビになっちまうんでな。

——そうか。では殺されないだけ有難いと思うが良い。

——は？

女は腰に提げた飾り剣をごく自然な仕草で抜き払い、呆気に取られた守衛の頬を柄で痛烈に殴りつけて気絶させる。屋敷に侵入した女は行く手を阻む使用人たちをことごとく薙ぎ払っていく。怯えるメイドが声を震わせて目的を尋ねると、女はなぜそんなことを聞くのかと不思議そうに首を傾げながらこう答えた。

——女が男に会いに来たのだ。決まっているだろう。それは勿論、恋と愛とのためだ。

それ以外に何かがある？ そう言って女がメイドに唇を落とすと、メイドは顔を真っ赤にして下着を濡らした。「あ……う……」とうわ言を呟くメイドに道案内をさせ、女はとうとう当主の寝室へと辿り着く

扉を開けると、天蓋付きのベッドに腰掛けて一人の老人が新聞を読んでいる。皺だらけの険しい顔。銀行家ロブロ・ブロウは騙し騙されの金融界でのしがたつた鋼の男である。その厳しく鋭い視線は老いて一線を退いた今もお何気ないニュースの裏に金儲けの種が転がってははしないかと目まぐるしく動き続けていたが、入口に立った女に気がつくどふつと力を抜いて穏やかになった。言葉一つで何千人もの労働者の命を奪ってきたこの老人の残酷さを間近で見続けてきたメイドは少年のようなその顔に大変驚いたが声には出さない。

「やあ」と女が言う。

「君か」と老人が答える。

老人は皺だらけの顔をくしゃくしゃにして嬉しそうに笑った。

「久しぶりだな。ジン・ジャン・ジュアン。あるいはミツハ、あるいはレーテ。東の国のプリンセス・スライム。ある時はエリーである時はクリス、ある時は盗賊でまたある時は魔術師……」

「よく覚えているな」

「忘れるものか」

「そうか。嬉しいよ……」

女は表情を和ませ、老人と抱擁を交わす。お互いに強く抱きしめあい、生きているそ

の肉体の感触を確かめあう。

「君がここへ来たということは……そうか。もう、そんな時期だったか。長かった……」
「準備はもう良いのか？」

「勿論さ」老人は両手を広げる。「遺産、人間関係、その他諸々の整理は済ませてある」
「そうか。それなら、早速デートに出かけるとしよう」

「ああ。そうしよう。私はこの日が来るのをずっと待ち望んでいたのだ……」

足腰の弱った老人を乗せた車椅子を押し、海辺へと向かいながら、女は懐かしそうに昔話をする。六十年も前のこと、この町で女と老人は出会ったのだったが、知り合った時は互いに反目するばかりだった。老人は駆け出しの会計士としてのし上がることばかりを考えていたし、女は女で町を滅ぼすために怪物を育てているところだった。ひよんなことから二人は出会い、ぶつかり合い——そうしていつしか惹かれあうようになった。

「それもこれも……みんな半世紀も前のことだとはな。信じられんよ。時の流れというのは不思議なものだ……」

しみじみと呟く老人に女は苦笑してみせ、男の肩をそつと撫でた。

「まあそうだろうな……私にとってはあつと言う間のことだったが……お前にとっては

……」

「ああ、そうだ」老人は悲しみを堪えるように唇を歪める。「時の流れは残酷だ。……私と君とを町の人々はどう思うだろう？ 体を壊した老人と、資産家を買われた娼婦にか見えないのではないか？」

「体が老いれば言葉も老いるのだな、ロブロ。昔のお前はそんなに弱気な男ではなかった。野心に満ち溢れ、隙あらば私を呑みこもうとする男だった……」

「だが、時は流れた。ジジ……」

弱々しく伸ばされた老人の手を握り、女は「ああ。すまない……」と背後から老人を抱き寄せ、頬と頬とを擦り合わせた。老人のかさついた肌と女のしっとりとした肌が触れ合い、産毛が擦れて小さな音を立てる。その時、女は老人の体臭につかの間「ン」と顔を顰め、老人は怯えるように身を振った。

「すまない。すまない……ジジ。私を嫌いにならないでくれ……」

女は答えず、しばらく黙りこんで考えていた。やがて遠い眼をしてまた車椅子を押し始める。

「加齢からくるものか……まあ、そうなんだろうな。仕方がないさ、ロブロ。人間というのはそんな生き物なのだろう？」

「私は醜いか……ジジ？ 私は年をとり、心も体も衰え、もはや君の心に値しない男に

なつてしまったか……?」

「ロブロ。海についたぞ」

女は短く言った。砂浜にとられる車輪を人外の膂力で強引に推し進めると、浜辺にはムカデが悶えたような奇妙な轍が残った。

「ああ……」

老人の瞳から滔々と涙が流れ落ちた。喉からは抑えきれない嗚咽が漏れ、わなわなと肩を震わせた。

「泣くな！」鋭く声を上げた女に老人ははっと顔を上げる。燦爛とした太陽を背に、輝かんなばかりの美貌をもつこの女は凛々しいその顔を気高く張りつめさせ、老人に優しく手を差し伸べた。

……ああ、そうだ。ロブロ。お前は醜くなった。あの逞しい胸板も骸骨のように痩せ細り、生命力に満ち溢れていたあの眼は今や落ち窪みくすんでいる。腰は曲がった。一人では満足に歩くこともできない。お前の体はなんだか臭いな、ロブロ。それはいわゆる加齢臭というヤツだろう。いつも香水と女の香りを纏っていたあの頃のお前とは似ても似つかない。老いというのはそういうものだろう。……だがな、ロブロ。それでも私は言うぞ。

泣くな。弱音を吐くな。それでもお前は美しい。なぜ美しいのかは私も知らん。説明もできん。だがかつてのお前を愛した私は今もなおこうしてお前を愛している。なぜだろうな？ 考える時間はいくらでもある、私がお前を好きな理由くらいいくらでも考えてやるさ。

感情に慣性は働くのだろうか。一度お前を愛おしいと思ったなら、その思いは時も超えるのか。今のお前とかつてのお前は見た目だけでいえば全然別物なのかもしれない。だが私はその二者が地続きのものだと知っている。ロブロ・ブロウという名前がその二人を等しいものと指し示すことを知っている。……だとしたら、私はただ「ロブロ」というその名前に恋をしていることになるのだろうか。人間という生き物の外見を、姿形だけを愛しているのだから、私が愛する「お前」とは一体何なのだろう。お前は私に愛した時の姿をしていない。だがそれでもなお私はまだお前を愛している。なぜだ？ 同一人物だと知っているからか？ 思い出がこの胸をよぎるからか？ だとしたらそれは愛ではなく懐旧というものではないのか？ 「目の前の人間は自分が愛した人間だ」という知識が私の愛情を呼び起こすのか？

ああ、わからんな。何もかもがわからん。考えても答えは出ない。見当さえもつかない。……だが、それでも……。

胸を張れ、ロブロ！ 私はお前が好きだ。お前は醜い老人になってしまったようだが

半世紀の時を超えてさえなおもお前が愛おしい。

堂々とした女の言葉に老人ははつと瞳に生氣を取り戻し、つかの間、青年のように顔を引き締めた。強張る手を懸命に握りしめ、わなわなと全身を震わせながら車いすの手摺を堅く握りしめ、そして自分の足で立ち上がる。もう歩くことはできないと医者に言われたその足に最後の灯を燃やし、魂全てを振りしぼって老人は自らの足で立つて見せる。

老人は力強い声で海へと語った。

時は流れた。あまりにも多くのものが時の潮流に呑み込まれ消えていった。君が愛した体は今ももう、ない。君が愛してくれた私の心も、きつと私は忘れてしまったのだろう。だから……。後に残るのは、そう……。『言葉』だけだな……。

体はない。心もない。それならば私は全身全霊をかけて君に言葉を捧げよう。

君に贈る物語だ、ジン・ジャン・ジュアン。これまでの君とこれからの君に、精いっぱいのお話を贈ろう。

君は生まれた。誰も知らない月の夜。音さえも消えた深海の暗がり。胎児のように体を丸め、自分そのものをぎうぎうと縛り付けるように両手で抱いて、離れがたく、分かち難い何かを無意識に繋ぎとめようとしていた。けれども心が芽生えるにつれ君は

その手をいつしか緩め、いつも傍らにいた「それ」を手放してしまふ。君の手から逃れ、抗いような浮力に呼ばれた「それ」はするすると浮かび上がっていく。幼い君はうとうととまどろみながらそれを見ていた。手を伸ばさなければいけないと知っていて、しかし体は動かなかつた。「それ」は光の差さぬ暗黒の海底から光溢れる水面へと抜けていく。さよなら、と君は言おうとしたのかもしれない。だが言葉は出なかつた。掛け替えのないものを失おうとしていることを心のどこかで認めながら、生まれたばかりの君にはどうすることもできなかつたのだ。

海の底の孤独に耐え、やがて君は成長する。水なる妖魔、世界になみなみと湛えられた海そのものを褥とする水妖として君ははつきりと目覚める。だが君には名前がない。君に親はいなかつたし、名前をつけてくれるような知り合いもない。君は独りだ。深海魚を愛玩して生きるにも限界はある。君はいつか胸の中の衝動に駆られて何かを叫ぼうとする。けれどもその美しい唇から零れたものはいくばくかの泡だけで、応えるものは依然として存在しない。海の中で涙を流すことはできない。だから君は失つたものを取り戻すため、とうとう地上へと上がることを決意する。

君は大地を踏みしめる。だが幼い君には右も左もわからない。途方に暮れて彷徨いながら、君はきつとこう思った。ああ——なんてさみしいのだろう。君は独りで、自分が誰なのかもわからない。だから君はこう考えるのだ。恋をしよう。

淫乱多情の粘体姫。無貌夢幻の永遠嬢。君は君以外の何かになれる。君以外を、君に出来る。それは君が体の裡に秘めた一つの魔法だ。陸に上がったスライムの姫は姿形を自在に変えて数多の男と恋をする。

ある時君は恋をした。美しい貴族の男だった。素性を隠し、愛を囁き、暗い森の中男を誘った。二人は愛し合ったが何年か経つと男は病で死んだ。君はまた恋をした。盗賊だった。君は男に付き合つて盗みや殺しを行い、奪つた財宝で優雅な暮らしを送つた。男はある晩、番兵の矢を足に受けた傷が元で死んだ。君はある時魔術師だった。惚れ薬を買いに来た男が丁度好みで、その薬を男に飲ませた。男は奴隷のように跪き、女王のように君を崇めた。君は満足だった。次に君は旅芸人になった。ナイフ投げの相棒と気ままに世界を放浪したが、ある時男が投げたナイフが胸に刺さつた。死なずの君を男は怪物だと罵り、気を狂わせてしまう。仕方がないので狂つた男の面倒を見続けていると、やがて彼は老衰で死んだ。

君はいつしか体を分裂させ、たくさん「君」としてこの世を生きるようになった。君同士で戦うこともあつたし、君同士で恋をしたこともあつた。何体かの君は滅ぼされ、二度と蘇ることはなかつた。

まるで恋をしなかつた君もいた。貧しい村に子供として生まれ、物心つく前に残酷な皇帝によって鉄板に載せられて焼き殺される。醜い驢馬に変化した君は砂漠の隊商に

仕えたが、ぎらぎらと輝く太陽の下で酷使され、使い潰されて死んだ。ある時君は乞食だった。右や左の旦那様、と片眼を潰した君は哀れな声で慈悲を乞うたが、誰からも愛されることなく飢えて死んだ。

あるとき君は恋をした。相手は最新型のメカ種族だった。熱烈に愛を問うて自分の元に留まるよう懇願したが、プログラムには逆らえないとメカは最終戦争へと出かけていった。ある時君は恋をした。相手は君と同じ美しい妖魔だった。ある時君は恋をした。相手は言葉さえ通じないモンスターだった。

悲しい恋ばかりではなかった。最後まで寄り添い、愛し合った男もいた。

君はその日、恋をする。その日の恋の熱情をいつかは褪せる過去として飲み込むものと知っていて、それでもなお恋をする。

愛しているよと男は言う。私もだよと君は答える。愛している。幾重にも重ねる愛の口説。大好きよ。愛しくてたまらないの。あなたが必要なの。食べてしまいたくない。

君は男を抱きしめる。変わらぬ愛を傾け、男の全存在を受け入れ、やがてその腕の中には男の骨だけが残る。生きていたものはいつか死ぬ。死なないのは君だけだ。生きていないから死なないのかもしれない。本当は君という「形」がただそこに在るだけで、実際には何らの生命活動も行われてはいないのかもしれない。この世のすべては物

語で、君はの中で蠢く配役に過ぎないのかもしれない。

長い長い寿命を誇る美しい生き物、妖魔。彼らのような種族に恋をした何体かの「君」は変わらぬ恋を楽しんでいる。妖魔の男はそう簡単には死なない。もちろん誰かに滅ぼされたりはするし、長い時に心をすり減らし、邪妖と化して消滅してしまうこともある。男の倦怠や絶望を理解できなかったことを悲しみながら君はまた新しい恋を探し始める……。

恋をしよう、と君は思った。なぜそんなことを思いついたのかはもう思い出せなかった。多分さみしかったからだろうと君は思う。けれどもそれでなぜ恋を選んだのか、決定的な答えは掴めない。自分が生まれたその時になにか大切なものを握りしめていた筈なのだが、「それ」が何だったのかわからなくなった。恋をして体を重ねた。そうしている内に君は自分が元々どんな姿をしていたのか思い出せなくなった。「私は私以外の何かになれる。私以外を私にできる」。それが君の孕んだ謎掛け言葉。君はやがてこの呪文の秘密に気付く。「私は私以外の何かになれる。私以外を私にできる」。けれども——ああそうだ、この魔法には自我同一性が欠けている。私は私自身を私には出来ない……。

老人はまつすぐな瞳で女を見つめた。

私は君を愛している。ジン・ジャン・ジュアン。あるいはミツハ、あるいはレーテ。海

底で泡を纏うスライムの姫君。ある時は少女である時は老婆。ある時は剣士でまたある時は奴隷……。君はきつと、私がいなくなっても大丈夫だろう。君は強い。私が死ねば、君はまた次の恋を求めて歩き出す。いまさらそれを責めやしない。でも……。

君はやつぱり、また独りになるんだな……。

もう何度繰り返し返したのだろう。何度男を失い、何度俯いて歯を食いしばるのだろう。私にはわからない。私にはわからないそんな苦しみを抱いて今夜また恋をする君のことを、私はふと心配したくなる。

大丈夫だ。君は強い。……そう信じていながら、私がいなくても何とかなることを悲しいと思いつながら……。それでも、これからの君のことを強く思う。

また独りになる君にこんな言葉しか捧げられないことを悔しく思うが……。それでも、それでも……。

ジン・ジャン・ジュアン。

元気で。

君の健やかなる運命を願う。

海の底から、死者の世界から、君のために私は祈ろう。そして……、

さよなら、ジン・ジャン・ジュアン。



泣くな、とききほど老人に告げたばかりの女は唇を噛みしめて俯き肩を震わせる。ぱつと顔を上げ、はははときわやかに笑い声を上げながら、しかし両目からしずしずと涙を流し、そつと老人の頬に唇を落とした。

「さあ」と女は言う。

「ああ」と老人は答える。

幼い子供のように仲良く手を繋ぎ、老人と女はゆっくりと歩き出し、無辺に広がる海原へと歩み寄っていく。波がさつと股の間をすり抜け、足跡を浚った。靴が濡れてぐちやぐちやと嫌な音を立てて軋む。腰まで水に浸かると流石に歩き辛そうにして老人が喘いだ。女は優しく老人を支え、「さあ、もう少しだ」と声をかける。老人はこくりと頷く。頷いた瞬間に波が顔を叩き、老人は激しくむせる。女が心配そうに屈みこむ。老人は氣にするなどでも言うように首を振り、水面に顔を沈める。

蒼く透き通る海の世界に五体全てを投げだして男と女は少しづつ少しづつ没していく。海中から天を仰いで光の波うつさまを眺めながら、互いに抱きしめあつて唇を重ねる。

海の中は無音ではなかった。海面で碎ける白波や動物たちの呼吸音に鳴き声はどこ

までも忙しなく、地殻はごうごうとやかましく蠢いて海水を穏やかに震わせる。残り少ない酸素を肺の中からごぼりと吐きだして老人の口からいくつかの泡が零れた。あらん限りの命を秘めた透明球体が空へと昇ってくの優しく見守って女はそつと老人の腕を抱き寄せ、深く静かに嘆息する。

海の中から空を見上げる。水の紗幕を帯びて蒼く霞んだ空がゆらゆらと揺れている。太陽は青い。陸上で眺める時とは違いただひっそりと優しい光を放つ太陽は水宝玉アクアマリンとなつて海を照らす。

ああ、と感慨深げに女は頷く。世界は常に美しい。こんな光景をお前と一緒に見たかった。そう思い腕の中の男を見やると、人間ロブロ・ブロウは既に死んでいる。女は瞑目する。

なあ、ロブロ。

私はお前が思っているほど強くはないし、おそらくはそれ程できた女でもない。

私わがままな女なんだよ。——ああ、そうなんだ。なぜとって私は……こうしてお前を独り占めしようとしているのだから。

お前は私のものだ。お前の体も、魂も、肉片の一かけさえ離しはしない。たとえどれだけ望まれようとも、お前の子孫にだつて渡すものか。

お前の死体は永遠に私のものだ。ロブロ。安らかに眠れ……。

女は老人の体を海中に横たえ、そつと浮かべる。小児洗礼を行う司祭のように厳かで神秘に満ちた仕草で老人を支え、海に溶けていく男を見守り続ける。

この海に住む全ての生物は彼女の眷属。この海のあらゆる活動は彼女の鼓動。水なる妖魔、水妖たる女の腸はらわたこそがこの大海。

全ての海は女の子宮でできている。甘く蕩ける女の胎はらで、やがて男の肉体は腐り始める。融け落ちた肉を無数の水棲生物が食んでいく。千々に乱れた男の肉を指先に集めて結び、女は執着のキスを落とす。略奪のため、刻印のため——この男は自分のものなのだと言言するかのように何度となく唇で触れ、溺死体の腹に恋と愛との詩を残す。

女の儀式は男が消えてなくなるまで続いた。完全に男が海へと融けてしまうと女は満足気のため息をつき、また陸へと上がって再び歩き出す。

さよなら、と彼女は言う。失った男の面影を胸に抱き、けして消えることのない胸の傷を疼かせながら、しかしそれでも彼女は笑ってこう言う——。

さあ、次は誰を愛そう。どんな恋をしよう……。

物語の話をしよう。

彼女はある時魔女だった。彼女はある時妖魔だった。

彼女の名前はジン・ジャン・ジュアン。彼女の名前はミツハでレーテ。姿を変えるス

ライムの姫、海を統べる罔象の女王。

ある時彼女はメカだった。

ある時彼女はモンスターだった。

恋に恋して男を抱いて、重ねた体に時を重ねて、舌先で踊らせる愛の口説に幾重もの忘却を織り込む乙女。

ある時彼女は楽師だった。

ある時彼女は商人だった。

そしてある時、彼女は水の従騎士ハウゲータだった。

罔象の子宮、プリンセス・スライム——水の従騎士ハウゲータの物語②——

それで、お前はアセルスにしてやられておめおめと帰って来た訳か？

……あんた、ぶち殺されたいわけ？

ハウゲータ、アルキオネを責めてやるな。アセルスの妖魔化は俺達が思っていたよりも進んでいるようだ。オルロワージュ様の血を侮ることはできない。次はこの俺が行こう。

お前が行くのか、セアト？

ああ。

それは良くないな。お前は私たち従騎士の大將なのだ。そう軽々しく動くものではない。男ならば配下を信用し、泰然自若としているものではないか。

確かにそうかもしれん。だが俺は、俺の女が傷つくとわかっていてみすみす行かせるほど暢気ではない。やるからには必ず殺す。

……ふむ。

なんだ。

今のはなかなか良い台詞だったぞセアト。気に入った。……アルキオネ、セアトにキスしてやれ。

はあ!?! なんでこのタイミングでそうなるわけ?

私はセアトの言葉を好ましく感じ、キスしてやりたいと思った。だがそうするとお前は嫌だろう? だとしたらキスはお前がするべきだ。

しないわよ!

そうか。ならいい。では私がしよう。……セアト、こちらへ。

こいつ、燃やしてやろうか!

落ち着け。今はそんなことで揉めている場合ではないだろう。とにかく次は俺が行く。

そのことだがな、セアト。やはり次は私が行こうと思うのだ。

……あんた、さっきの話聞いてたの?

もちろん聞いていたさ。そうして思ったよ、やはりこの男を死なせたくはないとな。……なあ、セアト。確実性の高い方法を取ろうとするお前の気持ちもわからんではないさ。一番良いのは我々全員でアセルスたちを襲撃することだが、そうすると今度は黒騎士としてオルロワージュ様を警護するという役目が果たせなくなる……。我々の中で最も強いお前が単独で行くというのは、なるほど理に適っているようにも思える。しか

しなあ……。

あんたねー。セアトの力が信じられないってんならそう言いなさいよ。そうしたらあたしが相手になるわよ。従騎士なら従騎士で、主のことをばーんと信じとくのが筋つてもんでしようが。

セアトくん。おせんべ焼けたよー。

……ああ。今、行く。

なあアルキオネ。お前がみたアセルスの力、それが全てというわけでもないのだろう？ オルロワージュ様の血に秘められた力は未だ未知数だ。ましてやアセルスの傍には白薔薇姫と紅姫がついている。一度襲撃に失敗した以上は向こうも警戒しているに違いない。一筋縄ではいかんだろう。

じゃあどうすんのよ。

“対話”してくれればいい。

は？ タイワ？

お前の話の中でアセルスは興味深いことを言っている……。血が欲しいのなら少しくらいなら譲っても構わない。それで狙うのをやめるのなら……。……確か、そんな内容だったかな？ 話をしに来てよと向こうが言っているのだ。噂の辺境嬢はとんだ平和主義者のようだ。つけいる隙は十分にある。戦う前にアセルスの血を手に入れること

ができるなら、あとはそれをセアトに飲ませて妖魔の君の力を手に入れてもらう。

……よくわかんないけど、そんなに上手くいくわけないでしょ。

私はお嬢さんとお話ししてくるだけだよ。別に危険はないだろう。……それでいいな、セアト？

……………。

◇

その女は美しい顔立ちをしていた。ほっそりとした瓜実顔に眼は細く、こめかみに流した艶やかな黒髪が艶めかしい。目元にちよんと添えられた泣き黒子は女の色香を存分に匂わせ、その身に纏う黒衣は獣たちがまぐわう洞穴の暗がりの如く。

その女は確かに美しかった。けれども不思議なことに、あとになって彼女がどんな顔をしていたのかと思いついてみるとどうにも上手くは想像できない。必死に記憶を探ろうにも意識の焦点が結ばず、女の顔は奇妙にその印象を薄れさせてしまう。女の美しさはひどく流動的で、刻一刻と姿を変えているのかもしれない。その女の姿形はまさにその「時」というもの、時の流れを体現したものかもしれない。もし女が美しいというのならそれは時の美しさなのかもしれない。

彼女は何の前触れもなくアセルスの部屋に訪れ、その扉を叩いたのだった。何の躊躇いもなく彼女は水の従騎士ハウゲータだと告げた。予想だにしない唐突な訪問にアセルスは固まり、すわ敵襲かと血相を変えた紅が隠れていた扉の裏から火焰を放つ。ハウゲータは軽やかに後ずさり炎をかわし、廊下の手すりかどろどろに溶けるのを見届けてから「ふむ」と頷いた。

「まあ気持ちわかるな」

剣を抜きかけていたアセルスはハウゲータののんびりとしたその言葉に意気を挫かれたように瞬きする。

「……いま、なんて?」

「確かに一度アルキオネに襲われているのだから、攻撃してくるのもわからないではない。……だが私はまだ挨拶をしただけだろう。剣を納めてくれないかアセルス。私は話をしに来ただけなのだ」

「え……」

「もし、いや許さない、死ねというのであればとりあえず私は逃げるが……。話をしに来るように言ったのはあなただろうか? 中に入れてくれ」

「ほ、本気でいってるんですか……それ」

「ああ」

アセルスは疑わしげにハウゲータの様子をうかがっていたが、やがてぱつと顔を輝かせて部屋の奥へと叫んだ。

「すごいよ白薔薇！ 妖魔にもちゃんと言のわかる人がいるんだ！」

嬉しいなあ、とにこにこしながらアセルスは「どうぞどうぞ」と馴れ馴れしくハウゲータの手を握って室内に招き入れる。思っていたよりも好意的な態度に拍子抜けしたようだったが、ハウゲータはじろじろと室内を見回して「なるほど」と訳知り顔で頷き、断りもなく居間のソファアーに座りこんだ。

「何をしにいらつしやったのですか」

客人に紅茶を出しながら白薔薇が落ち着いた調子で尋ねる。「ありがとうございます、白薔薇姫」と礼を言い、ハウゲータがカップを受け取る。紅は部屋の隅からなおも険しい目つきで睨みつけている。

「こちらのお嬢さんがうちのアルキオネに言ったことを真に受けて。交渉してみようかと思ひまして」

「交渉？」

お嬢さんと呼ばれたことにむつとしながらアセルスがおうむ返しに呟くと、ハウゲータは視線を向けてアセルスの瞳を覗きこんだ。

「そうだよ。もしもう襲わないと約束をするなら血を分けてもいい、とあなたはいった

そうじゃないか」

「そ、そんなことを仰ったのですか、アセルス様？ それはいけません！」

仰天した紅が珍しく非難の声を上げる。「いやあ……」と気まずそうに頭をかきながらアセルスは紅に近寄り、ぷっくりと頬を膨れさせた彼女の頭を人差し指で撫でた。

「そんなことをしても誤魔化されませんから」

「ふい、とそっぽを向いてしまった紅に「困ったな」と眉を下げ、アセルスはハウゲータに向き直る。

「……でもまあ、確かに私はそう言いました。いまでもそう思っています」

オルロワージュ様の大切な血、奪われでもしたらどんなに大変なことに……、と壁に向かつてぶつぶつと呟いている紅をハウゲータは面白そうに眺めながら「あなたは妖魔のことをどれだけ知っているのかな？」と質問した。

「紅姫の言っていることはその通り。私たちがあなたの血を求めているのはその血の中に秘められたオルロワージュ様の力が欲しいからだ。もしあなたが血を渡せばどういうことになるか、きちんと理解しているのかな？」

アセルスは目を鋭くする。

「……逆に聞きますが、あなたたちは私の血にどれだけの力があるか本当に理解しているんですか？ 私は世界でただ一人の半妖らしいじゃないですか。仮に元がオルロ

ワージュの血であろうとなかろうと、今はこの私の血です。たかが私ひとりの血を飲んで、そちらのセアトだか誰だかがやたらに強くなつて新しい妖魔の君が誕生する。そんなことが実際におこるものなのでしょうか。……それは、すこし博打に過ぎるんじゃないですか？」

「リスクのないものを博打とはいわない。強くなることはあつてもその逆はない」

「リスクはあります。この取引の話がどこから漏れたら……あるいは私自身が針の城に伝えたら、あなた達の立場はまずいものになりますよ」

「針の城から逃げ出したあなたがそんなことをするとは思えないが……まあ、それもそうだな。何らかの手段でオルロワージュに伝えることも出来なくはないだろう。ふむ……」

ハウゲータは少し考え、真顔で言った。

「それは困る。やめてくれ」

「ええ……？ 予想外の反応……。ハウゲータさんは交渉に来たんですよね……？」

「交渉には来たが別に上手いとはいっていない。そもそも、交渉の得意な妖魔などいない」

「だったらなぜここに来たんですか？」

不思議そうに尋ねるアセルスにハウゲータは屈託のない笑みを浮かべる。

「私は他者と会話するのが好きだ。自分の知らないことや、考えもしなかったこと……自分の世界とはまるで違う場所がこの世のどこかに広がっていると感じる時、私はたまらなく嬉しくなる。あなたもそうだよ、アセルス。この世でたった一人の半妖。他の多くのものと同じように、私もあなたにはとても興味がある。あなたの話を聞かせてほしいな、アセルス。そしてその上で、もし分かり合うことができるのならあなたの血を私に譲ってほしい」

ハウゲータの言葉に紅はきつと目を吊り上げて「血は駄目です！」と鋭く叫ぶ。

「ああ……ええと……まあ、血のことはともかくとして、いや、ともかくというか一端置いといて……。私の話、ですか？」

「ああ、そうだ」真正面から視線を向け、ハウゲータは敵意が存在しないことを示すように両の掌をこちらに向ける。「時間はいくらでもある。互いのことを知らずにああだこうだと口を尖らせても仕方がないだろう？」

「そりゃあ、まあ」

「あなたの名前はアセルス。少し前までは人間だった。何の因果か妖魔の君に血を与えられて半妖になった。今は針の城を抜け出してクローンで暮らしている。ファシナトウールを離れたのは妖魔の世界を嫌ったからかな？ オルロワージュ様を憎んでいる？」

むう、と口を一文字に引き締めてアセルスは慎重に言葉を探す。

「憎む……というのは、やつぱりなんだか違うと思います。でも私は人間だったんですよ。それが急に半妖なんてことになったら、色々思うところもありますよ」

「それはわかるな。自分が自分の意志ではないものによつて自分以外のものに造り替えられてしまったら、それは不愉快極まる。それはわかる」

わかる、と何度も頷くハウゲータにアセルスは僅かに唇を綻ばせる。緊張のほぐれたアセルスをちらりと見たハウゲータは「では——」と話の矛先を変えた。

「それ以外の妖魔についてはどう感じたのかな。たとえばラストバン、イルドウン、それにセアトは？」

「ラストバンさんはよくわからないけど悪い妖魔ではない気がします。イルドウンは嫌いです。セアトは初対面でいきなり刺してきたからもつと嫌いです」

アセルスはきつぱりと言った。ハウゲータは重々しく頷く。

「それもわかる。セアトには後で“そういうことをすると女に好かれないうぞ”とよく言い含めておこう。イルドウンについては……彼はああいう性格だからな」

「理由について詳しく言うつもりはありませんが、まあ嫌いです」

「針の城の栄えある黒騎士が乙女に対してこれとはな。魅了者たる妖魔としては嘆かわしいのだ」

「魅了者……」

「うん？」

「私としては、そのあたりのことがいまいち実感できないんです。妖魔は他者を魅了し、虜にするもの。頭では知っていても、それはやっぱりオハナシの中のこと、どうにも現実感がない」

「あなたはオルロワージュ様の血を引いているからね。どんなに強力な妖魔でも魅了することはできない。実感できない、というのは、それはごく当然のことだよ。あなたには妖魔の持つ魔的な力が作用しないのだ」

「どうして妖魔には魅惑の力が宿っているんでしょう。どうして虜化の力なんてものを使つて……」

「……恋をしたり、愛をしたり？」

「そう、そうですよ。私は妖魔のことを考えていて時々不思議になるんです。だつて魅惑の力を使つて相手を虜にしたところで、それは都合のよい人形であつて恋人ではない。どれほど愛しているよと告げられても、それは嘘ですよ。そんなことを言われても嬉しくありません。……針の城の寵姫だつてあなた達従騎士だつて、本当のところは洗脳されていて自由意思なんてものは持ち合わせていないのかも怖くなることはないんですか？ あなたはセアトの従騎士。黒騎士に虜化された妖魔でしょう。あなたがセ

アトを想う感情の何もかも、妖魔の血に縛られたものだとは思えませんか？」

矢継ぎ早に質問を続けるアセルスに、ハウゲータは余裕たっぷりに微笑みをみせる。

「……成年者おとなはそんなこと気にしないんだよ、アセルス」

「それ、話を逸らしていませんか？」

「逸らしてなんかいないさ。この身に抱く愛が真実のものかどうかなんてことを後生大事にためつすがめつするのはおぼこ娘のやることだよ。妖魔はそんなことに悩んだり
はしない」

「でも」

「でも、とあなたは言う。でも、その前に私は尋ねよう。愛とは何ぞや」

「あ、愛……？」

「あなたは真実の愛とやらが重要であるかのように言う。自由意思、だったかな？ そんなものによって行使される『愛』が尊いものであると、そう言いたいんだろう？

……だが、自由意思とは何の謂いだ。愛というのは、どのようなものかな？」

「……そんなこと、答えられるわけじゃないじゃないですか」

「私にはできる。愛とは物語のことだ。男女間で交わされる幻想のことだ」

「それが大人の考え方ってやつですか。シニカルであることが現実主義者の証明だとは私には思えません」

「私は皮肉屋ではないよ。むしろ私ほどロマンチストな妖魔もそうはいないと思うがね。……私は別に愛と恋とを馬鹿にしているわけではない。誰かを好きになって恋をすることは素晴らしいことだと思う。だが——、ああ、何と言えいいのか……ふむ。まず、そうだな……こういう言葉から始めてみるのはどうだろうか？　妖魔に虜化などという力は無い、と」

「え？」

「虜化は相手を恋に落とす力。けれども誰かが恋に落ちたとして、それが生きている者の単なる魅力によるものか、それとも妖魔の超常的な力なのか、判断することはできないだろう？」

「でも、明らかに虜化される前と後では様子が違うということもあるでしょう」

「そんなものを誰が見た。教科書にでも書いてあるのか。仮に書いてあったとして、それが本当だとどうやって証明する。妖魔に虜にされると、人間に恋をするのとはどう違うのだ。どこまでが恋で、どこまでが虜化なのだ。そんなことを考えて時間を潰すくらいならば口づけの一つでも交わすことだ。たとえ人間同士であっても多少の上下関係はあるものだろう。恋に恋するあまり相手の言うことを何でも聞いてしまう、探してみればどこかしらに転がっていいような話ではないか」

「違いますよ。人と人が出会って、自然な感情の流れから恋に落ちると、魅了して強

制的に従わせるのとは天と地ほども違いますよ」

「何も違わないさ。恋に落ちるまでの過程を虜化と呼ぶかどうかというだけだ。妖魔と人間が恋に落ちた時、たいていは寿命に短い人間の方が立場的に弱くなる。そして多くの場合、人間は人間が被害者であるように物語を拵えるものだ。あれは妖魔が人間を攫つていったのだと。虜化して連れ去ったのだと」

「……あなただつて、似たような話の進め方をしていてでしょう。妖魔には虜化の力が無いという話をするのは、その方が自分にとつて都合が良いからだ」

「ふむ。そうか。そう言われるとそうかもしれない……。でもね、アセルス。私たち妖魔であつても、本当に自分たちに魅惑の力が宿っているかどうかなどということを確かめることはできない。あなたのことが好きだよ、と私は言う……。すると、彼か彼女かは途端に目を輝かせてはい私もですと答えるのだ。それがどこまで邪悪なことなのかはわからない。それにもし、事実妖魔に魅了の力があつたとして……。一体我々に何ができるだろう？ たとえばアセルス。君は自分が知らず知らずの内に誰かを魅了してしまっているとは思わないか？」

「私がですか？ だつて、私は誰の血も吸っていませんし」

「血を吸わなくとも魅了はできる。かてて加えて君は何しろ妖魔の君の愛し子だ。考えたことはないのか？ なぜ白薔薇姫と紅姫は君についてきた？ 君が彼女たちを魅了

したからだろう」

「そんな！」

アセルスは声を荒げた自分に驚き、恐る恐る白薔薇と紅の様子を窺う。白薔薇は相変わらず柔らかな微笑みを崩さず、紅は恥ずかしそうに視線を反らしている。

「私が、彼女たちを……う？」

不安げに唇を震わせるアセルス。ハウゲータは困ったように苦笑いを浮かべる。

「ああ、すまない。そこまで気にしないでほしい。仮定の話をしているだけだ。実際にそうだというわけではないよ。あくまでも、もしかしたら、というおはなしの中のことだ。あなたにはもしかしたら虜化の力があるのかもしれない。もしかしたら、あなたは誰かを虜化しているのかもしれない。あるかないかもわからない支配力を前にしてあなたならどうする？ つかああなたが誰かを愛したその時に、愛した誰かを自分が支配してしまっていたとしたら？」

「ああ、そうか……。そういう話なんですな」

ようやく合点がいったという風にアセルスは頷いた。

「もし虜化というものがこの世には無ければ何も問題はない。けれど、もし虜化というものが存在しているのなら妖魔は果たしてどうするべきなのか……。全ての愛を疑って虜化を行わない、恋をしないというのも方法の一つだし、ハウゲータさんの言うよう

に気にしないというのも一つですね、確かに。虜化の存在を前提とすれば全ての愛を疑わなくてはならない。だからあなたは愛を物語だと言ったんですね？」

「ああ、そうだ。この世界の全ては一幕の舞台に過ぎない。だとしたら真に私たちにとって問題となるのは、その物語をどう解釈するのか、ということだけだ……。私はこの物語を存分に楽しもうと思う。あなたはどうする？」

「……私は、まだ、わかりません……」

「恋をしたことは？」

「ありませんけど」

「した方がいい。あれはとても良いものだ」

「いや、そんなこと言われても」

「私はこれまで732回の恋をして423の恋人を持った。どれもみな素晴らしい体験だったよ」

「な……ななひやくにじゆうさん？ 流石に多すぎはしませんか、それ」

「妖魔は長生きだからね。そのくらいにはなるさ」

「そんなの、不純です」

「不純？ ああ、そうか……言葉が足りなかったかな。もちろん、同時に複数愛するよ
うな真似はしていない。一つの時に愛するのはたった一人、たった一体だけだ」

「いえ、でも……」

常識の違いに混乱したアセルスは口ごもりながら説明する。

「人間は……一般的には、やっぱり、たった一人だけを愛するというのが良いことだとされているような気もするんですが……」

「いや？ そんなことはないだろう？ たとえば夫の死を嘆き一人閉じこもる未亡人に對しては、辛い過去は忘れて新しい人生を生きてほしい、新しい恋を見つけてほしいという声だつてあるはずだ」

「それにしたつて423人は多すぎですよ」

「そうなのか……？ 私はちゃんと死を悼むし、別にとつかえひつかえという訳じゃない。先の話でいえば、たとえば未亡人が夫の死の三日後に新しい恋人を見つけていたらそれもどうかという気がしなくてもないが、私の場合はそれこそ十年百年は間隔が空く。恋人に對してそこまで不義理だとは思わない」

「うーん……」

まるで共感できない様子で頭を振るアセルスは苦々しい顔で手元のお茶に口をつけた。

「聞けば聞くほど妖魔の考え方がわからなくなってくる気がする……。いや、確実にわかる、理解できると思う部分もあるにはあるんだけど……どうしても違和感が消え

ないというか……。どうして、あなたはそんな風に恋をするようになったんですか？

たくさんの恋をしたのは、気がついたらそうなっていったからで、元々のあなたの気質がそうさせたということなんでしょう。以前、妖魔というのはみな寂しい生き物だ、と言われたことがあります。妖魔はだから、あなたみたいな考え方をするようになっていくんですか？」

「どうだろう。私は他の妖魔が自分と同じ考えをしているかどうかにはまるで興味がなから考えたことではない。私がこういう考え方をしているのは、それはやはり私が私だからだろう」

「あなたがあなただから……。ですか？」

「ああ、そうだ」頷いて、ハウゲータは面白いことを思いついたというように顔を明るくさせ、あなたに一つ物語を贈ろう、と言った。

「物語？」

「私が私だから、ということを私が説明するのはなかなかむづかしい。だから、代わりに物語の登場人物にその思いを演じてもらおうと思うのだ、アセルス。もし許してくれるなら、少しばかり長くなってしまいかもしれないが、私に物語を語らせてはくれないか？」

そう言ってハウゲータは静かに目を閉じ、流暢な語り口で物語を紡ぎ始めた。

罔象の子宮、プリンセス・スライム——水の従騎士ハウゲータの物語③——

姫が遊ぶ人形の腕がぼろりともげた。脆くなった土塀のようにぼろぼろと崩れ、静かな砂に還った。「あら」と一声上げて姫は人形の傷口をいじくりまわす。どこか面白がるような光を蒼い瞳に秘めて、腰まで伸ばしたぬばたまの宵髪が口の中に入るのも気にならない。

今夜八歳になるお姫様に名前はなく、ただ姫とだけ呼ばれている。だから姫に付き従う十四人の侍女たちは口々に「ひめさま」「ひめさま」と心配そうに囁きながら、損壊した人形を抱える姫を見守っている。姫はやがて女王となり太后となり死ぬその瞬間まで名前はなく、死んでから後にその功績を讃える諡号がようやく与えられる。必要なのは権威と役職、その形であって、個人の名前ではない。彼女は死ぬまで名前を持たない。

姫が腰を下ろす室内には青白い薔薇が鬱蒼と敷き詰められている。薔薇の庭と呼ばれるその部屋はむせ返るほどの濃密な香りがたちこめ、姫は時折息苦しそうに咳をする。あまりにも濃い生命の匂いは靄となつて視界を歪ませさえする。暗く翳った薔薇

の色は仄かに明滅を繰り返し、床を壁を天井を夥しい数で覆っている。姫は素足で無造作に薔薇を踏みつけにし、病んだ花卉がちらほらと散る。

その薔薇に棘はない。女王の命により十四の侍女達は毎夜毎夜姫が寝入ったその後でひっそりと息を殺しながら薔薇の庭に集い、冷水で熱を落とした掌で一つ一つ薔薇を撫ぜ、少女が怪我をせぬよう茨を刈り取ってしまふ。

——私の娘のために庭を造りましょう、と女王は言った。生まれた誉れの喜びに、絢爛としてりらの如く美しい部屋を用意しましょう。その美しさは仮初めのようには儚く幻影のようにならぬでなければなりません。命のようであつてはなりません。虫がいたら殺しなさい。姫を傷つける虫は要りません。棘は省いてしまいなさい。姫を傷つける刃は要りません。

だから姫は怪我をしない。いくら薔薇の上で謎かけ踊りを踊ろうとも、ぷっくりと膨れた親指の下で葉脈が振れていくだけだ。

破れた表皮から青い血が零れ、一層の香りが広がる。植物の生命が発散する甘く濃厚な匂い。けれどもそこには虫もなく棘もなく、命というだけで何の説得もない静かな香りが室内に充満している。

姫はまた咳をする。

——姫、姫、寝室に戻られてはいかがですか。

侍女の一人が声を掛ける。姫の両手の中で人形は手をもがれ首を捻られ、芋虫のようにまあるくなつてしまった。

——かあさまが、ここにいろと。

姫はか細く答える。華奢な体を震わせてそれでも懸命に誇らしく、ここにいろと言つたのよ、と微笑んでみせる。

——おまえたちはもうおさがり。

——いいえ姫さま。あなたがおられる限り私たちはとわにひとえにご一緒に。

——そう。

姫はそつと目を伏せ、すまないわね、と囁いた。

薔薇が息をする度に室内に置かれた硝子細工がひつそりと曇り、露を滴らせる。姫が着込んだ五重のドレスの裾は床に散乱し、細かな刺繍が同心円状に広がっている。金糸銀糸で描かれた千年を生きる竜は姫の下腹部を縛り上げているが、長命祝のために尾は持つていない。

四肢を失つた人形を優しく抱いて姫は言う。

——盗まれ、奪われて、でもお前は人形だから奪われたものを奪い返すことはできないの。

姫が爪先で人形の腹を押し込むと、人絹ヒコで膨れた皮は薄気味悪いほどへこむ。

——人形は人の形をしているから人形。人間は人の形をしているから人間。手も足もないお前は一体なあに？

姫はある時一輪の花を手折り、「この花はわたしのものにしよう」と考えた。するとそこに通りかかった新入りの侍女が悲しそうにこう話しかける。

——殺してしまわれたのですね。

——ころした？

——その花はいま死にました。

——私がころしたのね。

侍女は後ろめたそうに視線を逸らし、足早に去っていく。あとから侍女頭がやってきて「差し出がましいことを……」と頭を下げる。彼女にはきつく言って聞かせます。

姫はただ、いいえ、とだけ答え、それから随分長いこと物思いにふけていた。

次の日目覚めた姫は侍女たちに服を脱がされながらはつきりとした口調で尋ねる。

——あの花は。

——はい。

——彼女が大切に育てていたものだったのかもしれない。

——いいえ姫さま。この城に存在する全ての花はあなたのものではない。あなたさまだけのものなのです。

——けれど彼女にとっては違ったのかも知れない。あの花には別の名前があったのかも知れない。

——いいえ姫さま。あれは薔薇でございます。

——母上は私に美しいものだけを見せてくださる。花の名前を知るのなら、ただ薔薇だけで良いと。だからこの城にある花は全て薔薇。色とりどりの、形も違う無数の薔薇。けれど昨日彼女が惜しんだあの花には、本当の名前があるのではないの？

——いいえ姫さま。あなたが眼にする全ての花は、誰もが夢見る至美の薔薇でございます。

——そう。美しいのね。

姫はそう言っていていじらしく咳をする。

花房の国のお姫様に名前はなく、ただ姫とだけ呼ばれている。

女王の寵愛はことのほか深く、生まれたその日に姫には幾千の薔薇が贈られた。けれども姫は侍女がたった一輪の花を持っていることを知っていた。だから姫は人形遊びを止め、近寄る代わりにそっと遠くから眺めるようになった。

姫は人形に名前をつけた。十五体の人形にそれぞれ十四人の侍女から名前を募り、母からもらった人形には自分で命名する。

マヌカン、オイド、ジユモ、ビスク、トルソー、スケルツオ、セパナティーナ、ハ

チエツタ……。一人一人が独自の名前をつける中、もつとも若い侍女がおかしな名前をつけて一同は笑う。

——お前はやさぐれた顔をしているから、やさぐれ一号にしましょう。

そう名付けられたやさぐれ一号が満足しているのかどうか姫にはわからない。けれども姫は、そうね、そういう名前もいいわね、と決めてしまった。

姫の母、地平に煙る落日の女王は宮廷の端も端、秋の塔におこもりになっている。月に一度だけ姫は人目を忍んで彼女に会いに行く。足音を立てないように靴を脱いで、冷たい石廊下をとてとてと危なっかしく駆け、息を弾ませながら姫は女王の元へ行く。

——かあさま。

——よく来てくれたわね、愛しい私のダイヤ、私の瑠璃だま。

女王は目元に皺を寄せ、嬉しそうに両手を広げた。

寂しがりやの女王のために、部屋の中には子鼠や猫や梟が飼われている。鼠は尻尾を吊られ、猫は髭を抜かれているけれど、動物たちは女王によく従う。熱せられた冶金釜やフラスコからは硫黄や消毒液の匂いが幽かにこびりついていて、姫にはそれが女王の象徴のように感じられる。

——ほら、こちらへきて、もつとお顔をよく見せて。

かあさま！と姫は女王に飛びついて、対面を取り繕うこともなくみつともない仕草で

顔を母の頬に擦りつける。ああ、毒の匂いがする、と思いながら、それでも姫はもつとこの匂いを感じていたいと女王の腹に顔を埋めてぎゅつと抱きしめた。

女王は姫の後ろ髪を丁寧撫でながらおそろおそろ尋ねる。

——あの人はどうしているかしら。

姫は顔を上げず、女王の股の隙間から視線を落としたまま答える。

——とうさまは、かあさまにあいたいといつもおつしやっています。

——そう。

女王は目元を赤く染め、切ない息を吐き出した。

——私もあいたいわ。あいたいわ。とてもよ……。

泣き出しそうに顔を歪める女王は幼く、姫は慌てて母の頬に掌をあてる。女王はぬれた瞳を細め、しみじみと呟いた。

——あなたの手はいつでも優しいのね。

それから女王はふと思いついたように、優しい眼をして笑う。

——私、あなたに贈り物がしたいわ。

——贈り物？

怪訝そうに顔を曇らせる姫に、女王は穏やかにくす、と笑った。

——右手を出して。

母が握ってくれた右手が軽い。

姫は俯いたまま城の回廊を歩いている。誰も寝静まった内部は不思議なほど静かで、どこかで番兵の甲冑が擦れ合うかちやりという音だけがやけによく響く。それはあまりにも遠い音なので、まるで骨と骨とが軋んでいるようだわ、と姫は思う。灯火の幽かな明かりが延ばす姫の影は案山子のように痩せ、石畳の隙間を埋めている。未成熟な姫の体はどこもかしこも小さくて、ドレスの袖はやや余っている。

母が握ってくれた右手が軽い。姫は袖の中に右腕を縮めて足早に駆けていく。

次に母に会うのはまた一ヶ月後。姫は寒そうに鼻を吸る。……いや、会おうと思えばいつでもあえるのだ。自分がその気になりそうすれば……。

そこまで考えて、姫ははつと足を止める。廊下の突き当たり、壁にもたれ腕組みをしている男がじつと彼女を見つめている。

——こんなところで何をしているのだね。

——とうさま。

姫はきまりが悪そうに両手を背後に隠し、もじもじと後ずさる。

——彼女に会ってはいけないと、もう何度も言ったはずだよ。

——けれどもとうさま。あの人は私の母なのです。

懸命に言い募る姫に、王はあくまでも諭すように冷静な口調でいる。

——けれども姫、それでも彼女は魔女なのだ。

姫はきつと眉を上げ、頬を紅潮させて声を荒げる。

——その魔女を愛したのが、他ならぬあなたでしょう！ かつて西の国を支配した

邪悪な魔女を打ち倒し、しかしその魔女と恋に落ちて自らの后とした若き王。それがとうさま、あなたなのでしょう？

——私は魔女を愛したのではない。ただ一人の女を妻としたのだ。

王はその表情に懐旧を僅かに浮かべ、しかしきつぱりと言う。

——背後に隠したその手をお出し。

姫はびくりと震え首を振る。

——いや。

——出なさい。

——いや。いやよ。どうして私のいやがることをなさるの。かあさまは私のこの手を優しいと言ったわ。たったそれだけで私には十分だし、たったそれだけで私は良かったの。それだけで終わってしまったとしても。

姫はぼろぼろと泣き出しながらむずがる赤ん坊のようにいやいやをする。けれど王は姫に近寄り、必死に隠すその腕を掴んで眼前に引き出してしまふ。

王は血の気の引いた顔で言葉を飲み込む。

断面から覗く姫の肉はてらてらと脂に輝いている。若き血潮の巡る血管は千切れたまま、蚯蚓のような姿を晒す。肉を突き破つて尖る骨は石灰によく似ていた。

今、姫の右手はない。強引に鉋で叩き割られたが如き無残な傷跡は、しかし不思議に膿むことも腐ることもなくひたひたと固着している。

——右手の先をどこへやった？

——おもちゃ箱の中に置き忘れてしまったの。

——子供のおもちゃ箱にはいつだって魔法が秘められているものだ。しかしそれが魔術やまじないの類であつてはならない。

王は険しい顔をして、姫の右手首を慎重に手巾で包んだ。

——あの人になんと言われたのだね。

姫は声を震わせながら答える。

——それはただ、美しいものを。

母は歌うように言う。

熱可塑樹脂と酸塩鉱の晶石、それに蝶翅脈に通した月光。それら全てを蒼白い電撃に包み、焼き付けてできた皮膚であなたを象ろう。

その体は幻影に煌めき、息づくように風を孕む。けれどもそれは水晶に似て、燦爛と

した日の光はおろか仄めく月光や魂さえも透き徹してしまう。不可視の幼手おきなででひとたび男を抱けば、その心を溶かすことも支配することも容易く行えてしまう。変幻無縫に姿を変えて美のアイデアを侵す不定の造形は、きつとあなたの思うがままに従うでしょう。蜘蛛になりたいと願えば蜘蛛に、鹿になりたいと望めば鹿に。あなたは精神の虚を撃つ淫魔、異国の言葉を持つ踊り子になれる。あなたはあなた以外の何かになれる。あなた以外をあなたにできる。

そして時には金剛よりも硬く密になり、蛇のように絞め殺す万力の力も鋼糸のように肉を破る鋭さも何も、あなたはみな体現することができる。

美しく、そして何よりも強く、私はあなたを本当のお姫さまにしてあげたい。あなたの体に秋を封じて、あなたが歩くその道を祝福してあげたい。

右手を出して、と女王は言う。

姫はまた、咳をする。その吐息はどんな時でも天花粉の香りがする。そういう風にくられている。

その蒼い瞳は五歳の時に埋め込まれたものだ。父親譲りの茶色い眼球を女王の小指でぷつりと絶たれ、深海に眠っていた宝石を入れられた。

ぬばたまの黒髪は天然ではなく人絹でできている。棘蔓草の汁を塗り込み、ニンフの舌で何度となく嘗めあげて磨いたしなやかで冷然とした髪だ。性欲亢進の異常者が一

心にそして貪るようにしやぶった艶めかしいその髪を、女王はまち針で一本ずつ姫の頭に植えつけた。

弱々しい乙女の腱の代わりに姫の体には三四本の鋼鉄線が張り巡らされている。三本の鋼鉄線と四つの発条、そして無数の歯車がいかなるときも駆動している。

今度、姫は粘体スライムになるのだという。

美しくなりたいたいのかね、と父は言う。姫は大人しく首を振り、子供には似合わぬ自嘲の笑みを浮かべる。

——いいえ。私は醜いことも知りたかった。棘の痛みや虫の蝟集するおぞましさを知りたかった。人を傷つけることを知りたかった。

——では、なぜ。

——私は人間であり人形である以上に、ただ一人の娘だから。かあさまが私の幸福を望むように、私もまたあのひとの幸福を望むから。それに……。

——それに？

——こうして美しく作られていく私は、きつと醜い生き物だとそう思うから。

王は悲しそうな顔をして、縋り付くように姫の体を抱きしめる。

——もうあの人と会いに行つてはいけない。いかないでおくれ。

——愛しているの。

姫は静かに言う。

——たとえばその言葉が、人間を模倣する人形のものだとしても。

女王は噉り泣いている。寝台に伏せり、顔を隠して静々と涙を零している。
いかないでほしい。

ずっとそばにいてほしい。

そう娘に告げたかった。けれど姫は行ってしまい、女王の部屋は再び孤独と静寂の檻に包まれる。

窓辺から覗く空は荒れ、安らかな眠りにつく人々を妬むかのように黒々とした雲が凝り固まって唸りを上げている。じきに嵐が来るのだろう。

悲しそうに女王は黒髪を指に巻き付けて弄び、胸のつまるような溜息をつく。

女王は蛇のような眼をしている、という。あるいは蜥蜴の瞳を。切れ長で目元のすつとしたその目はどこか歪んでいて、いやらしい企みに満ちあふれている。そのくせ、いついかなる時も弱々しく濡れていて、潤んだその瞳は哀れみを乞うように伏せられている。

女王はその目でちらちらと扉を始終見つめ、誰か来てくれやしないだろうか、と期待している。

扉がきつかり等間隔に三度叩かれ、その訪い方に女王はぱつと頬を紅潮させる。慌てて手鏡を覗き、涙に腫れた目尻に気づいて思わず挫けそうになる。これではいけないわ、と起き上がり、白粉で薄化粧を施す。乱れた衣服を整えた後に一端全てを脱ぎ捨て、特別に誂えた緋の装束を身につける。軽く咳をして声の調子を確かめ、喉の通りをよくするために果実酒を口に含む。

それらはもちろん彼女の焦がれる男のためだ。

お入りになって、と声を掛け、女王はやや緊張しながら寝台に寄りかかりしなをつくる。

扉を開け、踏み入る王は堅い顔をしているが、それはいつものことなので女王はあまり気にしない。ああ、この人は、石のように巖のように逞しいお顔をしていらつしやるわ、と相好を蕩けさせ、激しく胸を打つ鼓動を抑えようとそつと両手を胸元に寄せる。

——今夜はいつまでいてくださるの？

甘えた声で尋ねる女王に、しかし王は怒りの滲む調子で答えた。

——あの子に何をしたのだね。

——え？

女王はきよとんととして、童女のような仕草で首をかしげる。意味がわからない不安に一瞬眉根を寄せ、それからああ、と暖かい吐息をついてはしやいでみせる。

——あなたもお気づきになったのね。そう、そうよ、わたし、とても宜しいことを思いついたの。あのね、それは美しいことなの。とても美しいことですよ。なにしろそれは万華鏡のように……。

王の手を置いた机がぎしりと軋み、女王は口を噤む。上目遣いで様子を伺い、心細そうに唇を噛みしめる。

——あなたはあの子に会ってはいけない。

——それは、わかっておりますわ。でも……。

——お願いだから。

王は押し殺した声で懇願しさえする。

——お願いだから、あの子に会わないでくれないか……。

王は悲痛な声を上げる。

——ごめんなさい、あなた。

胸を痛ませ、女王は申し訳なさそうに呟いた。

——あなたを苦しめたいわけではないの。私はただ……。

——わかつていても。わかつているからこそ、私はあなたの首に時々手を掛けたくなる。魔女であるあなたが私の思うとおりになればいいと願ってしまうのは、これは傲慢なことだ。

眞実を言えば、私は姫のことをそれほど愛してはいないのかもしれない。実の親子が持ちうる以上には特別の感情も欠けている気がする。けれども、女王。私はただ、あなたを愛していたいのだ。だから、あなたの毒が姫を侵していくのを眼にするのはとても心苦しい。

——あなたはいつか仰いましたわね。その剣で私の右目を抉り、眼球をはね飛ばしたあの時。転がっていった右目にあなたは檸檬でも踏みつぶすかのように足を踏み下ろした。一瞬で破裂した眼球は散らばって組織が地面にこびりついていましたね。短剣でこの胸を大地に縫い止められて、私は標本の蛙みたいに痙攣していましたっけ。あなた、獅子のように強い眼をしてこう言ったわ。それでも私を愛していると。だから私はあなたのものになった。

——その過去は今も変わらない。だからこそ私はあなたと言葉を交わしたいのだ。

——ええ、ええ。わかりますわ。

王は女王の耳元に口を寄せ、わかってくれるねと口付けをする。女王は悲しい快感に打ち震えながら、寂しそうにええ、ええ……とせがむように口にする。

やがて一夜の情事が終わり、寝台の上でしどけなく髪を散らした女王は隣に眠る男の髪を撫でながら、永遠を物語るようにそつと独り言を囁いた。

ごめんなさい、あなた。あの子がただ私の娘というだけなら、私はあなたの言うこと

を聞いていたかもしれない。でもあの子は私とあなたの娘なのだもの。愛しいあなたとの子供なのだもの。この世の誰とも似ていない、人よりも獣よりも美しくそして強く、王女にふさわしい娘でなければ駄目なのよ。

おいで、私の可愛い娘、私の人形。私がかも狂っているのだとしても、その時は人間を愛するように人形を愛してあげるから、この手を握ってみせて。

女王は姫の手を引いて、護衛もつけずに歩いて行く。母と娘の足は国の南に位置する塩の海へと向かい、到着した二人はほう、と溜息をつく。塩の上に薄く水の張ったその海は完璧な鏡面と化し、目映く輝く雲間や深海に似た青空をそのままに映し出している。

少し目がちかちかするわね、と母は言い、なんだか空に落ちてしまえそう、と姫は怯える。

大地には空が広がっている。あてもなく果てもなく広がり続ける空は、ひたひたと波紋に震えている。

乳飲み子を洗礼するように女王は姫の体を抱え、塩の海にそつと浸した。鏡の海の底深く、雲けぶる虚像の中に姫は没し、ガラス玉の眼球で水面にうねる朧な太陽の光を見つめている。

——私沈んでいるの？ それとも昇っているの？

姫は僅かにもがき、先の欠けた右腕を水面に伸ばす。女王は手を差し出す代わりに小さな玉石を浮かべ、右腕の断面に落とした。光り輝く石は姫の右腕に癒着し、微生物が凝り固まるように水が姫の右腕に固まっていく。一瞬、びり、と海は震え、電撃で焼け焦げたように煙が立ち上った。

水面に上がった姫がおそろおそろ右腕を見ると、海のように深く空のように蒼く染まった不定形の右手がしとしとと滴を垂らしていた。

——これが、私の手？

——ええ。それが、あなたの手。

麻痺したように動かない掌を懸命に握りしめようとすると、姫の右腕はあっけなく水に還り、飛沫が弾ける。

——あつ。

——少しずつ、慣れていくのよ。

穏やかに答える母に姫は悄然と項垂れ、今はもう消えてしまった自らの右手の行方を考えるのだった。

——私のかたち……。

そうして二た月と四日の後に、今はもう全身を粘体と化した姫は地べたを這ってい

る。

ずる、という音と共に擦れた腹の細胞が木床に擦れてぷちぷちと潰れていく。左肘を使つてなんとか重い体を引き摺る。右手を地面についた途端に掌はぼしやり、と液状化し、床の隙間に吸い込まれていった。

——ああ……！

疲れ果て濁った声を喉の奥で響かせ、姫は慌てて小さな舌を汚れた床になすりつける。

わたしの体が減つてしまう。

恐慌に駈られた姫は肩を振るわせ、滲んでしまった自らの粘体を犬のように懸命に嘗めとろうとする。

姫の皮膚はゴムのようによよぶよと波打っている。透けた体は醜く膨れ、必死に形を取り繕うもその有様はひどく脆い。やっとの思いで人の指を構成したかと思えば次の瞬間には溶けてしまい、姫は蚯蚓のような姿でうねっている。その体は気温変化に弱く、熱には蒸発し寒い夜には凍り付いてしまう。

姫は地面を這っている。どこへ行くかというのか自身にもわからないというのに、それでも姫は前へ前へと進んでいく。

——強くなるの。

姫は心の中で呟いている。

——私はこの国の姫なのだから、強い人間になる義務がある。だから、私は強くなるのよ……。人は生まれを選べないけれども、それからのことは私自身が決めてみせる。でも、なるとしたらどんなものに私はなろうか……？

姫は地面を這っている。惨めなその姿で必死に何かを探している。

遙か遠く前方に小さな明かりが見えた。誘蛾灯に惹かれる羽虫のように、姫はふらふらと光を求めて体を引き摺っていく。

少なくともその光は城の中には無かった。それは冷たく堅い石壁の向こう側、世界を狭める窓枠の檻のあちら側。広大な宮廷を超え、城下町の喧噪も歓楽街の退廃も超えて遙か彼方、この国の地平にたなびくその光こそはまだ見ぬ世界に掠れるともしび。

それは漁り火だった。

姫の父が治めるこの国の果ても果て、古びて名産もなく、けれど活気に溢れた港町の海辺に揺れる魚舟いおぶねの前照灯。荒波に軋む船体がそれでもなおと呻きながら高らかに掲げるその逞しい鯨脂の黄色い光が今、姫の視界に薄く滲んでいる。

姫の鼻に潮や腐った魚介類の臭いが届くわけではない。漁師達のはち切れそうな筋肉に零れる汗の塩辛さや、湿気の充満する重苦しい空気が届いたわけではない。嵐の日の、鼓膜さえ破れそうな海鳴りの恐ろしさや海底まで濁るどす黒さを知ったわけでもない。

い。姫はまだ、何も知らない。

それでも姫は思うのだろう、ああこの世のどこかに光がある、ここではないどこか、しかしどうしようもなくあそこでしかないどこかに、確かで暖かな光が存在していると。だからこそ考えるのだろう、私は何かを知りたい、もっと別の何かを手に入れたいと。

姫は窓に乗り出し、空にひたすように恐る恐る手を差し伸べた。窓の外では豪雨が夜を切り裂いている。重力に従い全てを縦に両断する雷雨は彼女の小さな掌を厳しく打ち据えるが、しかし姫は誇り高く胸を反らし掌を漁り火に翳した。姫の手はその灯に弱々しく透けていた。血潮は流れていかなかった。なおも手を伸ばそうと姫が窓に足を掛けたその途端、彼女はバランスを崩し地面へと落ちていった。

激しい痛みは無かった。ただ叩きつけられた衝撃で頭がくらくらしているだけで、粘体の体は傷一つ受けていない。城の三階から落下して怪我一つしない姫はしかし、自分が怪我をしなかったことに少しだけ傷ついていた。

疲れたわ、と姫は思う。

乱れる心のままに体は蠕動し、人の形を保つことが難しい。歩くこともままならず困っていると、不意に人の声が聞こえたため慌てて姫は物陰へと隠れる。姫が落ちたところはおちょうど湖底の庭と呼ばれる区間で、白石が敷き詰められた庭の中央に金の水槽が置かれ、その中には睡蓮がちらほらと浮かんでいる。

やってきたのは見回りの兵士で、二人組の彼らは張り出し屋根の下でつまらなそうな顔で雑談をしていた。

——女王はいよいよ黒魔術に耽り、秋の塔で妖しげな儀式に没頭しているとか。

——大量の麻薬を秘密裏に取り寄せ、浮浪児達を捕まえては実験にかけているとも聞く。

——どこまでが本当で、どこからが嘘か。

——火のないところに煙は立つか。

——近く教会は女王を召喚し審問にかけるという。女王が異端に触れたとすれば、議会在が王に罷免状を提出する日も遠くはあるまい。英雄王を何とか蹴落とそうと、議会は虎視眈々とその外套にかぎ爪を打ち立てる機会を狙っていたのだから。

——王は正しいお人だが、女王には間違う。いかにその心が尊くとも、女王をあのままにされては。

——女王の使い込んだ国費の使途は不明。女王の塔から日夜運び出される夥しい数の廃棄物の正体も不明。そして当の女王自身の出自も不明ときてはな。

——王は遠征先からあの女王を連れて帰られた時からおかしくなられてしまった。もしや、心を操られているのやもしれぬ。

それは違うわ、と姫は口にしようとしたのだが、声帯を上手く構成することができな

かった。ためにその言葉は灰泥が渦巻くように澱んだ音となり、あるいは亡霊の噁り泣きのように兵士たちに届いた。兵士達は一瞬恐怖の表情を浮かべて口を噤み、それからそろそろと雨の降りしきる庭に足を踏み下ろす。

彼らは勇敢だった。兵士達は庭の隅に蠢く何かぶよぶよとした半透明の物体を見つけ、あつと叫び声を上げたものの逃げ出すことはせず、警護の任務を果たすべく注意深く近寄っていった。

——西の国が放ったアヤカシか。魔術で造られた斥候か何かか。

——気をつけろ、こいつは……。

少なくとも雨は降っていた。姫は人間の形をしていなかった。下から見上げる姫の視界には、面頬をつけた髭むくじやらの男達が豪雨に髪を乱し、血走った目をして自分に剣を向けていた。爛々と輝く瞳には見知らぬ者に対する恐怖と自らを害する者への怒りが潜んでいる。がちやりと音を立てる鎖帷子はひどく威圧的で、雷に照らされた男の顔は頬骨がくつきりと浮き上がり幽鬼のように青ざめて見える。

ひ、とうめき声を上げたつもりで姫は身じろぎをする。それが兵士達には自分たちに飛びかかろうと後ずさったように見える。

両者は互いに同じものを見た。

兵士はえもしれぬ恐慌に駆られ、手に持った剣を蹲る姫の背中に勢いよく突き立て

る。鈍い感触と共に姫はのけぞる。体の中に突如入り込んだ異物は姫の子宮を刺し貫いて大地に縫い止めた。古びた柄元から錆の毒が混入し、拒否反応に姫は激しく痙攣する。激しく悶える粘体におののいた兵士は柄を逆手に握り、岩を削るような怒声を挙げながら剣を捻る。肉を切り分け、神経を裂き、その先にあるはずの命を完全に根絶やしにしてしまうために。

雷鳴。

夜空を昼に染めるほど目映く鋭い雷土轟鳴が王宮を奔る。姫はなお生きている。

捻りを加える剣の切っ先に身を振りながら、しかし姫は血を流すこともなく蹲っていた。

このイカヅチはなんだろう、と不意に姫は思う。暴力的でしかし懐かしいこの響きは何だろう。張り裂けるほどの衝動と熱情に駆り立てるこの音、この鼓動はなんだろう。それは母の中、羊の海で丸まっていた自分がいつも聞いていたごおうというあの喧しい音、ふくれあがった母の肉がどくると震える心の臓、血潮が血管を忙しく駆け抜け、壁に張り付いた夾雑物をこそげ取っていくあの震音ではないだろうか。

耳を殴りつけんばかりに轟く雷が次第に胸の鼓動に親和していく。

姫は僅かに微笑む。

体を剣で切り裂かれ、それでもこうして生きているこの自分は果たして一体何だろう

か。

「ねえ……」

姫はその声を自らの意思で作り出した。媚を含んだその声は欲情に濡れるように掠れ、秘め事を囁くように押し殺して兵士の耳に届く。

「私は、ずっと……」

粘体は次第に人の体を象り始め、兵士はぎよつと目を剥く。何度となく剣を突き刺すが、姫は構わずにゆっくりと語り出した。

「私はずっと考えていたのよ……一体それは何だろう、って」

姫はおかしそうに笑った。優しい笑みだった。

何かが違う、とずっと考えていたの。だって私は幸福なのよ。家族が一緒にいて、お互いを愛し合って居られるのだから。それだけで満足だと私は思うの。かあさまが望むのなら、私はそれで良かったのよ。あの人の笑顔を見られるのなら。

でも違う。何かが違う。だって私は幸福なのに、それでも幸福ではないの。だから、そう……私、幸福になりたいのよ。

友人に話しかけるように何気ない調子で姫はおしゃべりを続ける。

何かが違うとずっと思っていた。そして幸福とはなんだろうってずっと、窓から地平線を眺めるみたいにぼんやりと、乙女みたいに物思いに耽っていたの。でも違うのよ。

それじゃ駄目なのよ。ねえ、今こうして、あなた達に剣を突き立てられている私は、別に大して苦しくもないけど、でも幸福ではない、そんな風に思うのよ。これは違う、と今はつきり思つたの。だから……。

ぶつぶつと独り言を言うように、誰に伝えるわけでもなくただ自分自身のために姫は語る。その尋常ではない様子に兵士は叫び声を上げ、剣を抜こうとするが、剣はがっちりと粘体に銜え込まれて身動き一つしない。

兵士の目の前で粘体は見るうちに盛り上がり、成人女性の姿をとつた。腰つきは淫らにくびれ、胸は高く張り出し、乳首はつんと尖っている。足はジガバチの如く細く、すらつとしたその腿は白桃色に染まっている。黒髪は長くまつすぐに垂れ、胸元を刺繍のように飾っている。

「なりたいわ……」

姫はうつとりと熱い吐息を吐き出した。

「ねえ、なりたいの……」

姫は恋人にするように兵士の一人に抱きつき、鈍重な力でその体を締め上げた。男は必死にもがくがびくともせず、体中の骨が軋み始める。

「私は幸福になりたいの。けれど何が幸福かということとは、簡単なようできて難しい。それはただ、互いの家族が愛し合っている、その愛という言葉の人形具合のためにお

かきなことになってしまおうように」

首の骨を折ってしまおうと、男の力は抜け、その体はぐにやりとくらげのようにやわらかくなった。姫は男の死体を胸に抱き、ゆつくりと自らの体に取り込み、溶かしていく。もう一人の男は腰を抜き、口の端から泡を吹き出して喚いている。姫は虫けらでも眺めるような冷たい目をして、静かに男を見下ろした。

「支配」というその言葉は、愛によく似ている。相手を強く求めるその心、何かを欲しいと願うその執着心。我と彼とを結びつけ縛り上げ、硬く捕らえて放さないその言葉。人形を弄ぶように、私は支配者になりましょう。自らの望むように、自らの在りようを決める。私はこの国の支配者として、立派にあなたたちを治めてあげる……」

体液の滴るその細れる指で、姫はしゃがみこんだ男の額をそつとついた。

「私の坊や、私の中にお帰り……」

ひ、と男は甲高い悲鳴を飲み込み、懸命にじたばたと足掻きだした。

今度は姫の前で男が地べたを這いずる番だった。

化け物……と弱々しく泣く男に向かって、姫は極上の微笑みと共に高貴な御足を踏み下ろしこう言った。

「ええ。なりたいわ……」

罔象の子宮、プリンセス・スライム——水の従騎士ハウ
ゲータの物語④——

「こうして——」

ハウゲータは言う。

「こうして姫はスライムの体を手に入れた。それは自らの姿を恣意する力。自らの生を演劇する力だ。姫は数多の顔を持ち、自らの望むままに生きることを願った。なりたいたい、と彼女は思ったのだ。彼女は自分以外の何かにならなければならなかった。だから彼女は何かになった。人間になり魔女になり、獣になり悪魔にもなった。なりたいたいと思うながら何になるべきなのかはわからなかったから、色んなものになることにした。たくさん的人生を過ごしてたくさんの人を愛した。姫はとても満足だった。百年を生き千年を生き、やがて姫は少しだけ大人になる。人々の滅びを知り生まれて生きて死んでいくその営みの儂さを目の当たりにする。その内に姫は思うようになった。こうして長い長い時を生きて自分は「何か」になったはずだが、さてそれは一体何だろうか。今の自分は一体どんな生き物なのだろうか？ 考えるとわからなくなった。何かになりたいたいと思った時の——始まりの気持ちを彼女は忘れていた。かつての自分がど

んな姿をしていたのかももう思い出すことはできない。姫は少し悲しくなった。

私のこと、好き？ ある日姫は恋人に尋ねる。もちろんさ、と恋人は答える。

——じゃあ、私のどんなところが好き？

——優しいところ、かわいいところ、時々おつちよこちよいなところだよ。

——そう。私は優しくして、かわいくて、おつちよこちよいな女なの……。ふうん、そうなの……。それなら……。

そんなら私、そうするわ、と姫は言う。たくさんの恋をしてたくさんの女になる。誰かを愛していると一人ではなくなる。胸が温かくなつて、幸福な気分になる。愛している、と恋人は言ってくれる。姫のことを必要としてくれる。

だから姫は、今日も今日とて恋をする……。」

長い物語を終えて、ハウゲータはふうと小さな息をつく。真面目な顔をして聞き入っていたアセルスは手の甲を口元に当てて短い唸り声を上げた。

「こういう質問をするのは馬鹿みたいかもしれないが——」と前置きしてアセルスは口を開く。

「今のお話のお姫様がつまりあなただということでもいいんですね？」

「いいや？」ハウゲータは悪戯に笑う。「これはあくまでも物語なのだ。全てが真実とい

うわけではない。……だいいち、お姫様は人間だっただろう？ 母親に改造されたとはいえ元々は人間だ。妖魔である私とは違うさ。私は物語を語るが、その物語をどう感じるかを強制することはできない。解釈はあなたの自由なのだから。私はあなたに正解を教えることはできないし何が正解なのかも本当にはわからない。私は私のことをわかつてほしいと望んでいるのかもしれない。けれども同時に、自分のことなんてそう簡単にわかつてほしくもないとも思っているんだよ。

私はずっと考えている。この物語の結末はどうなるのだろうか？ 姫は最後にどうするのか？ 姫は自分の形を見つけられるのか？ もしかしたら、姫は母親を殺してしまうべきなのか？ それとも……とそう考えた時、私は自分以外の誰かのことを想像する。その誰かならこの物語をどうするだろう。アセルス。あなたならこの物語をどうする。いつか——私かあなた、そのどちらかが滅ぶことになった時には、あなたの考える結末を聞かせて欲しい」

「ハウゲータさん……」

「さて、私は私の物語を終えた。言いたいことが言えたので私は満足だ。今回の目的も果たせたことだしな」

「目的？ こうして、話をするのですか？」

「ああ。あなたがどんな半妖なのか、どんな考え方をする女性なのか、多少なりとも知る

ことができなくて良かった。……なかなか面白かったよ。私ばかりつらつらと話をしているで済まなかった。今度会う時にはあなたの話を聞かせてほしい。あなたの考えていること、あなた自身の物語を。……今回の目的の一つはあなたと話をすること。そしてもう一つは——時間を稼ぐこと。どちらも十分に果たせたようだ。私はそろそろお暇させてもらおう」

「時間……?」

「ああ。これは予言だが、間もなくこのクローンは水底に沈む。既に十分な量の水は空に喚び^よ終えた。いかに紅姫が炎妖として消し去ることは叶わぬ」

アセルスははつと顔色を変えた。

「どういう……ことですか?」

「私は交渉に来た、とききに言っておいた筈だ。命が惜しければ大人しくあなたの血を渡して頂くようか」

これまで口を挟まずに見守っていた白薔薇がすつと目を細め、ドレスの袖をざわりと揺らした。

「この場であなたを制すれば済むことでは?」

だがハウゲータは「果たしてそうでしょうか?」と不敵に笑う。

「命が惜しければと言ったのはあなたがたのことではありませんよ。ここクローンの住

人たちのことです」

「……その言葉が真実だと証明できるんですか」

乾いた声で俯いたままアセルスが尋ねた。

「よく耳を澄ませてみればいい。どこかで潮の音が聞こえないかな。……それに、その言葉が真実かどうかを証明する必要は私にはない。あなたがそれを信じないというのであればそれもいいだろう」

「……クーロンの人間のことなんてどうでもいい、と言ったら？」

「それはそれで仕方がない。クーロンを滅ぼすどきくきに紛れて私は逃げ出そう」

「だ……」

「うん？」

「私を、騙したんですね……」

瞳に怒りを宿してアセルスはハウゲータを睨みつける。

「さて、それはどうだろう」ハウゲータは視線を反らし、肩を竦めた。

「やつと……」アセルスは悔しげに唇を噛みしめる。「やつと、まともな話ができると思つたのに……分かり合えると思つたのに……!」

「言葉が通じるからと言って分かり合えるとは限らない。覚えておきなさい、アセルス」
「人間とも恋をした、とあなたは言つたじゃないですか！ それなのに、どうして人間の

命を弄ぶような真似をするんですか？」

「そう思うのはあなたが半妖だからだ。私は妖魔だよ？ 知りもしない人間のことなどどうでもいい」

「あなたは……！」

「アセルス。私は何もここで死ねとか捕まれと言っているのではない。私はただ、ほんの少しあなたの血を分けてほしいだけなのだ。クーロン全住民の命とあなたの血液、あなたにとってどちらが大切かな？」

「う……」

弱々しく目を伏せるアセルスに、紅が鋭く叫ぶ。

「いけませんアセルス様！ たとえクーロンが滅んでもあなたの血を渡してはなりません！」

「そら、見ろアセルス。これが妖魔の考え方だ。妖魔は人間がいくら死のうが気にはしない」

「……」

その言葉に傷ついた表情を浮かべ、アセルスは縋りつくように白薔薇に視線を送った。

「白薔薇……あなたはどう思う？」

「私には……なんとも言えません。ですが……一度要求を呑んでしまえばあなたは次もまた従うことになってしまいます。また不特定多数を人質に取られたら……？　そのところをよくお考えになって、返答を。この旅はあなたが始めた旅。最後に答えを決定するのはあなたの役目です。私はそれに従います」

「うん……わかった……」

力なく呟いて、今度は紅の方を振り向き、アセルスは「紅、ごめん」と頭を下げた。



血の入った小瓶をハウゲータに差し出し、アセルスは寂しげに言葉を漏らす。

「あなたとはもつと……分かり合うことができたと思っんです。私は……。私たち
は仲良くなれた、そんな気がするんです」

「どうだろうか。そうかもしれないが……」

「私たちは敵同士なんです」

「……そうだな。セアトが考えを改めない限りはそうなるだろう」

「ハウゲータさん」

「何かな」

「次に会った時、私はあなたに勝ちます。あなたに負けない物語を見つけてみせます」
「楽しみにしているよ」

そう言うとうハウゲータは軽やかな足取りで去っていき、室内には重苦しい空気だけが残された。

なんだかごめんね、と気を取り直すようにアセルスは言う。

「私が頼りないばかりに、変な心配を掛けさせてしまったかな。私、もつともつと強く、賢くならなきゃいけないね」

「いえ、その……」

躊躇いがちに紅がおずおずと口を開く。

「私の方こそ、申し訳ありません。その……けて、ニンゲンの命を軽視するというつもりはなかったのですが……」

「いいんだ。気にしないで」

慰めるように紅の頭を撫で、アセルスは視線を遠くに飛ばした。

わかつてはいたことだった。彼女たちは妖魔で、自分は半妖だ。異なる考え方を持つのは仕方のないことだろう。それでも……。アセルスは心の片隅に氷柱の落ちるような物悲しさを覚えていた。噛みしめるだけ噛みしめ、あとはきつと唇を結んで顔を上げ、「さあ、ここの居場所も知られてしまったようだし、また逃げ出さないといけないか

な？ いやあ、困ったね！」とおどけてみせながら、アセルスは心の中で静かに呟いた。ああ、強くなるう。人間であることにも妖魔であることにも飲み込まれてしまわないように。

今日は確かに自分の負けだった。迷いのないハウゲータの言葉に、確固とした返答を返すことができなかった。考えの浅はかさを突かれ、その挙句に血を奪われる。イルドダウンならきつとこんな自分を笑うだろう。

ハウゲータは何と言ったのだったか。仮にこの世界が物語であるとしたら、存分に物語を楽しむことだ、と彼女は言った。

ほんの僅かな憧れが生まれた。彼女のように迷いなく生きたい、と思った。たとえ今いる場所が不確かでも、その場所を肯定するだけの強さが欲しい。今いる場所が嘘でも、錯覚やまやかしでも。いま、自分の足が踏みしめるこの大地こそが辺境なのだとはいきるだけの。

自分は人間だとそう思いながら……もしかしたら自分は人間ではないのかもしれない。いとそう考えるアセルスには、いま、そんな辺境フロンティアサーガの物語を語ることはできない。

けれど、いつか自分にも——そう考えながら、アセルスは白薔薇と紅に弱々しく微笑みかける。

確かにこの時のアセルスは柔らかな希望を胸に抱いていた。何も知らない無垢な若者が甘い夢想に酔うように、何の根拠もなく「いつか」という言葉を口にした。

だが時はいついかなる時も流れ続ける。変わらないものなどこの世にはただ一つとしてありはしない。

時の流れの話をしよう。

生命は常に時の流れの只中にあり、刻一刻と訪れる回転系からは逃れられない。輪廻と言いつつ循環と言いつつ、ぐるぐると廻り廻り来たるもの。熱き血の流れ、全身を蠢く代謝。

時は獣を飢えさせる。時が経てば腹が減るのは当然のことだ。生きていけば腹が減る。生きることは飢えることと等しい。たとえいかなる淑女とて、空腹に胃を痙攣させ寒空にわが身を抱えれば一匹のけだものとなって牙を剥く。唇の端からは溢れんばかりに涎を垂れ流し爛々と輝く眼光でもって地べたの獲物を探しまわるといふもの。

ゆえに等価は結ばれる。生と飢餓は等しく、飢餓は獣を孕むもの。全ての乙女は獣になるようにできている。

二年後の春、囚われたラムダ基地でアセルスは七四人の人間を殺した。

強くならなければならなかった。だからそうした。

白薔薇の血を吸い、蒼い髪の妖魔と化して、自らの望むままに殺戮を行った。

後悔は無かった。

第十八幕 少女のウロボロス

指を組んで、呪文を唱える。にんにん、にんにん。するとフーキの体は少しだけちっちゃくなって、その代わり二つに増える。にんにんにん。

「にんぼう、ぶんしんのじゅつ！」

得意げにフーキが叫ぶと周りのみんなはオーとかスゲーとか感心してくれて、まだ七歳のフーキは鼻を高くして得意げに「へへー」と笑う。え、マジで？ どこをどうやったらそんなことできるの、と忍者仲間にはよく聞かれたけれどそれは淡島にもわからないことだったから「さてねーっ」と首を傾げることしかできない。だってできるものができるんだから仕方がない。出来ないやつはきつと修業が足りないのだろう。それが気合。

ワカツの下忍であるところの淡島フーキ七歳は周りの忍者には出来ないことができた。分身の術。フーキが望めば体が増える。印を組めば体は二つ、もひとつ望めば体は三つ。分身するたびに体は少し小さくなるけれど一晩経てば元に戻る。これはどんな上忍にもできないことだった。たとえば手裏剣投げや水面渡り、速駆けに変装などなど、里にいる人間ならば程度の差こそあれ忍術と呼べるだけの力を身につけている。し

かし分身は違う。あまりにも速く動くために分身してみえるとかそういうのとも違う。淡島の力とは、いま、この時に、自分を二つにし三つにする力なのだ。

それは本当にすごい力だったし、異常とさえ言える能力だった。だからもしかしたら淡島はもつと早いうちに気が付くべきだったのかもしれない。自分に分身が出来るのはそれが自分が人間ではないからで、里のみんなはごくごく当たり前に人間であるから分身などはできないのだと。両親のいない拾われっ子であつたフーキは人間ではなく、妖魔と呼ばれるような生物なのだ。

ようやくフーキがそのことに思い至つた時にはすでにワカツは滅びていて、里のみんなは死んでいた。みんな馬鹿みたいに良い人だった。「お前だけでも逃げろ」と言われてフーキは訳も分からずに逃げ出したのだが、それはたぶん、フーキがはぐれ者だったからだ。里のみんな、ワカツに住む「人間」はみな、最後まで勇敢に戦つて死んだ。トリニティ軍との戦争に参加しなかつたのはフーキだけだった。

力なくたなびく煙を見てぼかんとした。崩れ落ちた城壁や折れて刺さつたままの刀を見て、目の前の光景が現実のものだとは到底思えない。

「んしょ」

手近にあつた刀を抜いてみようとして両手で柄を握り引つ張るが、刀は頑なに大地を貫き続けびくともしない。その内に手の中から柄がすつぽ抜けてフーキは無様に倒れこん

でしよう。

「な、なんだよう……」

口を尖らせてベそをかきながら刀を睨みつける。血に濡れた刀の腹に、醜く顔を歪めた自分が映っている。何かに拒絶されたような気がする。お前だけでも逃げろ、とそんな漫画みたいな台詞を知り合いのオトナが言った。助けてくれたのだと思う。一緒に戦えと言われていれば当然怖気づいたろうし、何しろフーキはまだ七歳なのだ。分身の術だけで戦えと言われても流石に困る。困るけれども、しかしそれでも、お前は仲間なのだ、みんなと一緒に忍者するのだと言って欲しかった。「お前だけでも逃げろ」というのは、もしかしたら「いやお前はなんか違うから」という意味なのかもしれない。一族の誇りに賭けて血の一滴までもを絞り出して戦う！とかそういうやる気の中にフーキは組み込んでもらえなかった。みそつかすのはぐれ者。フーキの全身から力が抜けていって空気のない風船のようにくにやりとへたりこんでしまう。

「ぶんしんのじゅつ……」

弱々しく呟いてフーキは体を分裂させる。片方の自分でもう片方を平手打ちする。

「どんな気持ちがする？」

「いたい」

「そだね」

二つの自分で一人言を言つてぼんやりとする。

「あたしはどうしたかったのかな」

「一緒に戦つて死んだ方が良かったのかな」

「そうしていれば、気持ちよく満足していられたのかな」

「わからないな」

「わからない……」

どうしたらいいのかさっぱりわからず、フーキは途方に暮れた。

困り果ててあちこちをさまよっていると、やがてフーキはおつちゃんに拾われた。でつぷりと太ったハゲ頭の出っ歯、端的に表現すればおつちゃんはそういう姿をしていた。道端に座り込んでいたフーキにおつちゃんは「何しとん」と声をかけ、おなかへつたと答えたフーキに串焼きやらザラメ焼きやらを食べさせてくれたのだ。与えられたものに無心ではぐはぐと齧りつくフーキにおつちゃんはのんびりと話しかけた。

「お嬢ちゃん。こんなところにいたらあかんで。ここは危ないところやねん。はよ家にお帰り」

「……家、ない」

「なんや。家出かいな」

「そんなんじゃない」

「今夜はどうするんや。行くところはあるんか？」

「ない。……でも、なんとかする」

「お嬢ちゃんみたいになちつこい子供に何ができるんや」

「できる！」フーキはムキになって答えた。「ぶんしんとかできるもん！」

「分身？ 分身で、そら手裏剣シュツシュツつて忍者みたいな奴がするあの分身かいな

？ そらすごいわ。はっはっは！」

まるで信じていない様子のおっちゃんに腹を立てたフーキはむすつと唇を尖らせ、ソースや砂糖で汚れた指を組み、にんにん、「ぶんしんのじゅつ！」と唱えて体を分裂させた。

おっちゃんの対応は素早かった。その目をぎらりと光らせたおっちゃんは巨体に似合わぬ軽快な動きで周囲の視線からフーキを隠し、「……へ」と嬉しそうに笑う。

「お嬢ちゃん、名前は？」

「フーキ」

「そうか、ほなフーキちゃん。おっちゃんが働くところ紹介したるか。そこで働けばもう食うものに困ることもない。衣食住は保障されるで」

「え……？ ほんと？」

驚いて、思わずフーキは口からドーナツをぼろりと落とす。期待に目を輝かせる

フリーキに、おっちゃんはにっこりと恵比寿のように笑う。

「ほんまや。おっちゃんは嘘つかへんねん」

わーい、と無邪気に喜んでフリーキを足をばたばたさせる。



広間の奥にステージがあつて、裾から緊張しながら出てきたフリーキは中央まで進むと一生懸命気をつけをしてマイクに向かつて口を開く。

「あわしまふーき、七歳です。とくいなことはひとりです」

するとへんてこな仮面をつけた人たちがげらげらとフリーキを笑う。フリーキはいつものようににんにくと印を組んで分身の術を披露する。やんややんやと喝采が飛ぶ。

おっちゃんが紹介してくれた仕事は要するに見世物になることで、フリーキは今ラムダ基地という所にいる。基地の偉いヤルトという人が楽しいことや面白いことが好きで、夜な夜なパーティを開いては知り合いたちを招いているのだという。

分身するとみている人たちがみんなすごいすごいと喜んでくれるのでフリーキはとても嬉しい。私はちゃんとはたらいてる。しゃかいじん。

「えへへへ」

その日もいつものように仕事を終えて、たくさんの称賛を浴びた。緩みきった頬を隠そうともせず、スキップスキップらんらんとフーキが駆けていくと、険しい顔をしたお姉さんに突然腕を掴まれた。

「……こんなところで、君みたいなお子供が何をしているの」

押し殺した声で尋ねるお姉さんにフーキは顔をしかめて「イーッ」と舌を出した。

「いたい。はなして！」

「あ、ごめんなさい……」

「人のこと、いきなりつかんじやだめなんだよ」

「それはそうだけど……。あのね、お嬢さん」

「お姉さん、あたしのこと知らないの？ あたしフーキって言うの。この基地じゃ有名なよ」

「……そう。フーキちゃんって言うの。私の名前はアセルス。あのね、フーキちゃん。こんなところにいちやいけな。悪いことは言わないから早くおうちに帰りなさい」

「ばかねー。ここがあたしのおうちなの。あたし、ここに住んでんの。ここで働いて人気者なんだよ。アセルスは？」

「私は……捕まっつてここに連れてこられたんだ。ある程度の自由はあるけど……外には出られない」

「捕まっているの？　じゃあお姉さんは悪い人なのね。捕まえられるのは、お姉さんが悪いからでしょ？」

「違う。執政官のヤルートは妖魔狩りをして楽しむ下種な男なんだ。捕まった妖魔はみんな見世物として弄ばれる。……何か、ひどいことはされてない？」

「ぜんぜん。言ったでしょ。あたしユーマージンなの。おっちゃんもお客さんもみんなあたしに優しくしてくれるよ」

「そのおっちゃんというのは誰なの？」

「おっちゃんはあたしをここに連れてきてくれた人。おんじん……かな」

「その人を信じちゃいけない。あなたはその人に騙されてる。この基地は君が思っているような場所じゃあない」

「うそよ！　アセルスは悪い人だから人気者のあたしを騙そうとする。おっちゃんはとても良い人よ。おっちゃんがいなければあたしは死んでたかもしれないもの」

「そうだとしても」アセルスはぐ、と唇を噛みしめる。「たとえそのおっちゃんがあなただけを助けたのだとしても……今は、そうじゃない……」

「そうじゃなくなんかないもん！　ばかばか！　アセルスのばか！　もう知らない！」
ふいっと顔を背けて駆けていくフーキを、アセルスは悲しそうな顔で眺めていた。



フーキの見世物芸とはいえば、実際のところ稚拙に過ぎた。初期では鉄板とさえ思えたシヨートコント「ゆうたいりだつ」も半年ほども続けているとやがて飽きぐる。観客の反応も思わしくなくなり、フーキの表情は長い時間をかけて強張っていく。

大体が、見世物芸人の生業は旅周りが基本であつて、一ところに留まつて延々と続けるようなものではないのだ。物珍しさがあつて初めて見世物が成り立つのであつて、時が経つてしまえばそれはもう日常でしかない。

舞台の上で幼い少女が芸をする。媚びへつらうような笑みを浮かべて、一生懸命に「ぶんしんします〜」と宣言し、体を増やして見せたところで——それがなんだ、たいして面白みなどありはしない。初めのうちはフーキの「ひとりでやるふたり漫才」に腹を抱えて笑つていた観客たちも次第次第に白けた雰囲気を漂わせるようになった。困つたフーキが相談すると、おつちちゃんはすぐに答えを見つけてくれた。

そんなの簡単や。もつと面白いことしたらええねん。

おもしろい、こと……？

首を傾げるフーキにおつちちゃんは滔々と語りだす。あのな、ここに来る観客はみんな政府の高官やらその妻に愛人やらがほとんどやねん。そういう金持ちたちはみんな娯

楽に飢えてるんや。目新しいこと、新鮮なこと——そういったら自分たちが楽しむためならどんなに高い金でも払う。わかるやろ？ 分身は確かにオモロイこつちやで。……でもシヨートコントはあかん。そんなもんはテレビでいくらでも見られるさかいな。

だつたらどうすればいいの？

無垢な瞳で見上げるフーキに、おつちゃんは爽やかな笑みで言った。おつちゃんにええ考えがある。

ひとはみな残酷なことが大好きだ。表面ではどれほど善人を装つてはいても心の底では誰かが傷つくことを願っている。なぜなら誰かが傷つくということは自分が傷ついていないということであり、誰かが不幸であるということはその誰かよりも自分が幸福だということだからだ。単純明快な理屈によつて悪鬼羅刹の類と化し、仮面をつけた高官たちは今日も集団心理に酔い狂う。

舞台の上に少女が一人立っている。湧きおこる拍手喝采、万雷の悪意。少女は二人そして三人に分身し、その内の一人を黒子が縛り上げて頭の上に林檎を乗せる。

「ぱぱ」と縛られた少女が言う。

「むすこよ」と弓を持たされた少女が言う。

「みごとりんごを射抜けばじゆうにしてやろう」と少女が言う。

さあ一人芝居の幕が開く。右を向いても左を向いても立っているのは少女だけ。孤
独な舞台で少女は少女に矢をつがえ、ひようと飛んでいった矢が少女の下腹部に鈍い音
を立てて突き刺さる。じわりじわりと滲み出る血が少女の股を伝っていく。

「おお。なんとということだ。ゆうーあー下手くそ」と少女が言う。

「てへへ」と弓を持つ少女が頭を掻く。

舞台上に爆笑が弾ける。

舞台の上に一人の少女が立っている。少女は分身することができる。分身体は痛み
を感じるけれども痛覚は共有していない。本体は常に一つだけ。本当に少女なのはあ
くまでも一人だけだ。だからどんなに傷ついたり苦しんだりしてもそれは分身が泣い
ているだけで、少女が傷ついていることにはならない。だから大丈夫なんやで本物の
フリーキちゃんはなんともないでとおっちゃんは言った。

本当にそうだろうか？ フーキは段々と分からなくなってきた。確かに分身は勝手に動
いているように見えても決してフリーキ本体の意志に逆らうことはない。けれども
舞台上に残った血痕はいつまで経っても無くならず、死んでしまった分身の分だけフリー
キの体はちよつとずつ小さくなっていった。

大切なのは心なんや！ とおっちゃんは熱く語る。あのな、たとえばフリーキちゃんの
姿を写真で撮ったり映像に残したとする。でもその写真や映像を叩くことと、フリーキ

ちゃんを叩くこととは同じやあらへん。分身もそれと同じことなんや。大切なのはたった一人だけ。本物の心を持つフーキちゃんだけや。だから細かいことを気にしとらんと、もつともつとオカシなことをしてお客さん喜ばせたり。

本当にそうだろうか？ 疑いながらも疑いきれずフーキは唯唯諾諾とおつちゃんに従つて見世物を続けた。自分の分身を弓で射殺し、分身同士で殺し合いをさせ、分身に分身を解剖させる。

本当にそうだろうか？ 何かがおかしくはないだろうか？ 徐々に縮んでいく体に反比例するようにフーキの疑惑は広がっていく。

本当にそうだろうか？ 誰かに答えを教えて欲しかった。あのアセルスとかいう女にもう一度会いたかった。けれども最近ではおつちゃんがいつも周りをうろちよろしっていてなかなか思うようには動けない。「今が頑張りどころやからな。おつちゃんも手伝つたるわ」そう言っておつちゃんはなにくれとなく親切にはしてくれただけどやっぱり何かのどこかがおかしくてある日とうとうフーキはぼろぼろと泣きだしてしまふ。

もう耐えきれなかった。分身の絶叫や断末魔が耳にこびりついて消えない。胸がどうしようもなく一杯になって、堪え切れなくなった感情が溢れだしてしまふ。

もうやりたくない。そう言つてわんわんと泣くフーキにおつちゃんは「ふーん」と言つた。その冷たい反応にフーキが啞然としておつちゃんは突然「クソが」と

言つてフーキの分身を平手で張り飛ばした。分身は人形みたいに吹っ飛んでいつて床に頭を打ち付ける。分身が低く呻いた。頬が真つ赤に腫れあがり鼻や口元からは見苦しい血が流れ落ちてひどく醜い。突然の暴力に怯えるフーキに対しておつちゃんは目をひんむいて聞くに堪えない罵声を浴びせる。顔面に血が上り真つ赤に膨れた血管がおつちゃんの目元でびくびくと痙攣する。どす黒い声でおつちゃんは分身を小突き回し、窓ガラスが震えるほどの怖ろしい恫喝を続けた。

そこでようやくフーキはおつちゃんの喋り方が演技であつたことに気付いたのでつた。お前は大事な商売道具だから殴らないが誰が拾つてやったのかを忘れるな。見世物以外に生きていく方法がお前にあるのか。世渡り一つできないガキは黙つて俺に従つていればいいんだ。おつちゃんが言つたのはそういうことらしかった。湧きおこる恐怖に全身を凍りつかせてフーキはガタガタと震えだした。目の前の人間が急に化け物のように思えてくる。

「わかつたか」とおつちゃんは言つた。

「はい」と沈んだ声でフーキは答えた。

その日の夜からは食事を与えられることもなくなつてしばらくはひもじい日々が続いた。お金を稼ぎこともできないのに一丁前に腹は減るのかと言われると何も言えずフーキは服の裾をぎゅつと握りしめて黙り込んでしまう。仕方がないから一生懸命働

いた。辛いことや苦しいこと、自分と同じ姿をした少女を殺すことにやつきになって、なんとか観客の興味を引くことができた。だけでもおっちゃんはなかなかご飯をくれなくて、ぐうぐうと鳴る空きつ腹を抱えたフーキは「お願いですから何か食べさせてください」と懇願する。

おっちゃんはあっけらかんと言った。食べるものならいくらでもあるだろう。そう言つて指差したのはもちろんフーキの分身で、やがて襲い来る飢えに耐えきれなくなる時がやつてきた。目の前に立つ少女の分身はほろりと冷たい涙を流して儂い微笑みを浮かべ、「いいよ」と小さく呟いてその目を閉じた。仕方がないことだよ。頭の中で蚯蚓がのたくるような音がした。眉間が不意に熱くなつて眼球がやけに渴く。この子は私であつて私じゃないんだ。私だけど私じゃない。生きているわけじゃない。喋りをするけど私じゃない。自分と同じ姿をしている少女を殺すのはいつまで経つても慣れない。分身を見ているとどうしても体が動かないのでまず先に袋を被せて顔を隠した。それから鉈を叩きつけて右手を落とそうとしたが中途半端な遠慮が災いしたのか手首の半ばで刃が止まる。おぞましい叫び声が上がった。恐怖に鉈を取り落としてカラントという軽い音にふと我に返りそれでも腹は減つていた。こんな声をいつまでも聞いているわけにはいかなかった。鉈を首元にぶちこむとようやく分身は静かになる。もつと早く気づいていればよかった。人間が牛や豚を食うのは牛や豚が人間ではないから

だ。分身は分身で人間ではない。きつとそうだ。だから人間に見えるような余計な部分は一番最初に無くしておくべきだ。何度も鉈で切りつけて首を切り離す。肩ではあはあと息をする。手を切り足を切り達磨になった自分を見下ろしてそれでもまだ覚悟が決まらないのなら金槌を取り出して滅多矢鱈に打ち据えればいい。肉を砕け、骨を砕け、元がなんだかわからなくなるまでぐちゃぐちゃにしてしまえば、自分の姿をしているものは自分が何だったのかもわからなくなるまで壊してしまえばわからなくなる。後に残るのはただの肉だ。血に塗れた掌で赤黒い塊を救い取って口に運んだ。胃が痙攣して少女は少女を嘔吐する。それでも食べないわけにはいかなかった。

命そのものを噛みしめて少女は生きる。奥歯と奥歯の間で鈍い音を立てて播り潰された肉が甘ったるい脂を吐きだしていく。人を人だと思うのも獣を獣と想うのも全ては視覚によるもので、ひとたび切り分けられて肉となればもう元が何なのかなどわかりはしない、ならば人と獣の違いとはソトミに現る姿形によるもので、人も獣も人形もあるいはメカに妖魔でさえも、四角い形に裁断されて小さな影絵となったなら等しく美味しくなるかもしれない。

肉を食う。自分自身にかぶりつく。浅ましく腹を鳴らして餓鬼のように唸りながら滴る涙を調味料に己が飢えを存分に満たすのだ。砕いた肩甲骨が舌の上でコクリと弾けて飛んでいく。弱々しい咽び泣き。どうしてこうなってしまったのだろう。嘆きな

がらそれはそうとして肉は上手い。空腹は最高の調味料だ。ああ生きている。どうしようもなく生きています。生きていますから食らうのだ。生きていますから美味しいのだ。

……。

……………。

ラムダ基地では今、とある見世物が人気を博している。その見世物の名前は「少女のウロボロス」という。

◇

その日は僕にとってとても大事な一日だった。なにしろ僕の一生が懸かっているかもしれないのだ。

ラムダ基地での最終面接を控え、僕は朝から緊張していた。筆記試験、第一・二・三次面接と過程を経てようやくチャンスをつかんだこの機会。失敗すれば僕はまた別のツテを見つけないければならない。熱々の濃いコーヒーを飲んで気合を入れ、鏡の前で念入りに身だしなみをチェックする。髭——しつかり剃っている。鼻毛——もちろん出ていない。目脂はないか？ 髪型は整っているか？ OK。全てOK。僕は完璧だ。壁

に掛けてあったスーツ——去年の誕生日に叔父さんにプレゼントされたもの——に着替え、ネクタイを締めた。アイロンだつてばっちりだ。ネクタイの結び方にはあまり自信がないけれど、そこは面接官の視力が弱いことを期待するしかない。

外に出て家の鍵を閉める。閉めた後でもう一度気になつてガスの元栓を確かめる。OK。再び鍵を閉める。それから歩いて三分の停留所へ。バスに乗つてしばらくすると財布の中に札しか入っていないことに気づいて僕は舌打ちする。なんてことだ。そういうえば昨日、洗濯する時にポケットから小銭を出して置いたままだつた。朝っぱら幸先が悪い——なんとなくげんなりしながら「失礼」と声をかけて先頭まで進み、バスが停まっている間に札を崩す。これで問題はない。バスの料金を払い、駅で電車に乗り、別の電車に乗り換え、また別の電車に乗り換えてそれから星間船に乗る。まったくなくて忌々しい通勤経路だろうか。採用されたら近くに下宿でも探すべきかもしれない。それとも基地の方で住むことになるのだろうか。職業的にはその可能性が高そうない気もする。情報を他に漏らすのはまずいだらうから。

幸いなことにその日はテロもストライキも起きなかつた。全ての交通機関は等しく運行時刻を守つた。面接の予定時刻よりも一時間は余裕がある。僕も立派になつたものだ——昔はしょっちゅう寝坊して遅刻ばかりしていたのに。僕は僕の成長をしみじみと感じてうっかり感動しそうになつた。

僕はラムダ基地を見上げる。呆れるほど巨大な施設だった。まあ基地だから当たり前といえども、前と比べて前なのだが、まるまる一個の星が軍事基地だといえればその巨大さがわかるだろうか。見渡す限りの地平線まで基地のフェンスが続いている。

ラムダ基地はこの世界を統治する組織トリニティの基地だ。空まで聳える鋼鉄の壁、Tウォーカー達がぞろぞろ巡回する厳戒な警備。あまりにも大きなシステムに組み込まれるということに不安もないわけではなかったけれど、やっぱり僕には「こういう大きな所に努めればまず倒産の心配もないだろうし」という将来の安定感の方が重要だった。ようし、やるぞ。気合を入れて僕はゲートへと進んでいく。

◇

——はいりたまえ。

——はい。失礼します。

——ではそちらの席へ。

——ありがとうございます。

——それでは、まず自己紹介をしてもらおうか。

——はい。私はノーガヒ・パラマトンと申します。大学では医学を学んでおりまし

た。今回、ラムダ基地人員募集の話を知り、自分の能力を最大限まで活かせるのはここしかないと考え、応募させて頂きました。

——医学。

——はい。

——なるほど。それはやはり、こういった仕事には必要不可欠なものだからね。

——はい。両親にも子供のころから医学の知識だけは身につけておけと口を酸っぱくして言われております。

——ご両親は医師をされているのかね？

——いえ。両親は××に勤務しております。

——ふむ？（面接官は履歴書をペラペラとめくる） ああ、なるほど。君は……。

——はい。我が家は代々この仕事についています。

——サラブレッドじゃないか。

——いえ。（頭を掻き照れて見せる青年）それほどでも……。

——ご両親と同じ道を……という訳かな？

——それもあります。ですが一番の理由はやはり、自分のスキルと職業の適性を照らし合わせて考えた結果です。

——この仕事はとても辛いものだ。ストレスも多く勤務時間も不規則。自分がこの

仕事を好きになれると思うかね？

(ここで青年は穏やかに微笑む)

——好き？ ——いいえ、好きになる必要はないでしょう。この仕事に感情を持ちこ

む必要はありません。

——なるほど。失言だったかもしれないな。忘れてくれたまえ。

——はい。

——君にとってこの仕事は何だね？ 天職だと思うかな？

——天職、と言えばそうかもしれませんが。でもこの仕事は——つまるところは、ただのシステムです。ルールを守り、規則に沿って行動し、結果を出す。僕がこの仕事に従事するということは僕もまたそのシステムの一部となるということであり、それ以上でもそれ以下でもあるべきではないと思っています。

——ふむ。なるほど、なるほど、なるほど……。ふむ、ふむ……。

——何か？

——ノーガヒ・パラマトン君。

——はい。

——実に申し訳ないのだが、君に残念なお知らせが一つある。

——あー……。そうですか……。

——ああ。本当にすまないのだが——実はこの面接にあまり意味はないのだ。もう、ほとんど形式的なものなのでね。念のため、一応、そういう類のものなのだ。本来であれば後日面接結果を伝えるところだが変に不安がらせるのも無駄だからな。いまこの場で伝えることにするよ。——おめでとう、君は採用だ。

——本当ですか！　うわあ、ありがとうございます！　精一杯頑張ります！

——私からもよろしく頼む。君は新戦力として申し分ないようだし、その家柄もあつてか経験もきちんと積んでいるようだ。一か月もあれば基地で働く準備はできるね？

——はい。もちろんです！

——よろしい。——では君には一カ月後から、このラムダ基地で拷問吏として働いてもらうことになる。期待しているよ。

——全力を尽くします！



この世界にはたくさん生き物がある。さまざまな人間がいて、さまざまな動物がいる。図鑑を広げても一日では読みきれない。きつと一生知らないままにいるようなマインナーな動物もたくさんいるのだろう。

そしてまた、この世界には妖魔がいる。神さまはなんでまたそんなものを造り出したのかはさっぱりわからないけれど、とにかく妖魔はいる。人間よりも遥かに寿命が長く、美しく、そして独特の価値観を持っている。

それまで、僕はこの妖魔という生き物にあまり注意を払ったことはなかった。いるにはいると知ってはいたけれど身の回りにいるのは人間がほとんどだったし、たまに低級妖魔を見かけても人間やモンスターとたいして変わらないように見えたからだ。確かに美しいと思うことも何度かあったけれどそれはTVの中で歌って踊るアイドルやモデルと何も違いはしなかったし、僕の人生にそこまで関わってくるとは思えなかった。ラムダ基地で働くまでは。

採用が決まってから僕は住んでいる家を引き払い、予め与えられた準備金で身の回りを整えた。基地の地下にある特別な住居で暮らすことになったためにいくつかの家財道具や仕事道具を揃えたが、お金は十分すぎるほど余っている。預金通帳を眺めてほくほくしながら僕は「手に職があるって本当にいいもんだな」と心の底から思った。ちゃんとして教育を与えてくれた両親に感謝すべきかもしれない。

ラムダ基地でまず二三の簡単な拷問をこなすといよいよ本格的な仕事が始まっていた。執政官のヤルトは妖魔狩りに凝っていて、捕らえた妖魔たちを弄んで楽しんでいる。その妖魔たちを締めあげるのが僕の主な役回りだった。

なぜ妖魔を拷問するのか？ それはヤルトが長生種である妖魔の秘密を探ろうと
しているからだ。金と権力を手にした奴がやることは大体そういうところに落ち着く
らしい。妖魔がいかにして不老不死たらんとしているか、どのような生活を送っている
のか。——そしてまた、妖魔たちの住むファシナトゥールの状況や妖魔の君の動向など
など。より強く美しい妖魔を捕らえるためには情報はいくらあっても足りなかつたし、
もしかしたらヤルトはファシナトゥールに軍を送ることさえ考えているかも知れな
かつた。……まあ、どのみち僕にはあまり関係のない話だけだね。僕は妖魔の拷問を続
け、それに付随して妖魔の身体データを蓄えていく。いかに傷つければ妖魔は滅びてい
くのか、また逆にどんな攻撃に耐えることができるのか。再生能力は？ 妖魔の細胞は
いかにして全能たりうるのか？ おそろしく地味な仕事ではあつたけれども月々の給
料を想えば何てことはない。思い煩うことは何もなかつた。断言しよう。僕の人生は
ことのほか充実していた。充実。そう、僕の人生は充実していた。なぜなら……。

なぜなら、その時僕は恋をしていたからだ。

初めて彼女と出会つた時、彼女は牢獄に囚われていた。彼女は虜囚の姫、哀れな虜の
乙女だつた。片手を鎖に繋がれ、鉄格子の窓から外を見つめる美しい女性、そしてそこ
に現れた真つ直ぐな青年こと僕。なかなかロマンチックな出会い方じゃないだろうか。

しいて難を挙げるとすれば僕が彼女を捕らえる側の人間だったということだけ、そんなものは運命の前では無力だろう。

僕は一目で恋に落ちた。墜落と言つてもいい。美しい青竹色の髪をしていた。薄暗い牢屋の中で、彼女の瞳だけが力ある宝石として光を放っていた。小さめの唇はきゅつと結んで、挑むような僕を見つめた。君は？と僕は言った。名前を尋ねたつもりだった。彼女は答えなかった。仕方なく僕はノーガヒだと名乗つても、彼女はなおも口を開かない。きつと口を閉じたまま、けして視線を反らすことはなく真つすぐに僕を見つめていた。美しいと思つた。とりたてて造作が美しいとか言うのではなかったがそれでも不思議なほどに美しいと思つた。形が整っているのでも人離れた顔立ちをしているのでもない。それは言うなれば飢えてなお施しを拒絶する放浪者が持つ気高い美しさであり、群れを亡くした獣の王が崖から見下ろす眼光の孤独な美しさでもあった。彼女を語ろうと思えばいくらでも言葉を重ねることができた。彼女が本当に美しいからそうなのか、僕が彼女に恋をしているからそう思うのかはわからなかった。どちらだろうがどうでもいいことだ。

彼女の名はアセルス。アセルス・ナイトレス。それが彼女の名前だった。

彼女は痛みにとても強かった。慣れているのかもしれない。他の低級妖魔たちはちよつと眼球を抉りだしたくらいで泣き叫んだのに彼女は呻き声一つ上げない。拷問

を開始してから三カ月ほどが過ぎたけれどその間彼女は一言も喋らなかつた。ただ黙って冷たい目つきで僕を睨んでいるだけだつた。

——驚いたな。痛みを感じてないっていうわけでもないみたいだし、君は本当に強いコなんだな。

——……………。

——やっぱり、だんまりかい。気持ちには分からないでもないけど、でも喋らなけりや問題が解決するってわけでもないだろう？ 少しは友好的な態度を取るべきじゃない？

——……………。

——うーん。こりや困つたな。何度も言っているけれど、僕は君のことが大好きなんだ。色々喋ってくれたら悪いようにはしないよ。いやほんと。

——……………。

——じゃあ、こうしようか。君が僕に情報を漏らすんじやない。僕が、君に情報を漏らすと言うのはどうだろう？ 何か僕に聞きたいことはないかい？

——……………。

——君も色々気になつてはいるんだろう？ ——たとえば、君と一緒に捕らえられた妖魔のこととかさ。

——五月蠅い。黙れ……。

——おっ。ようやく返事してくれたね。特別大サービスだ。教えちゃおう。彼女達ははまだ生きているよ。ただこことは別の場所にいるけどね。ヤルート長官が妙に気に入って連れて行つちやつたんだ。

(僅かな安心を目に浮かべながら女は齒を噛みしめる)

——どうだい。聞いてよかつたろう？ それでというわけでもないんだけど僕からも一つ質問してもいいかな。だって僕だけ言つたんじゃ不公平じゃないか。物事はフェアじゃないといけない。

——……………。

——そう警戒しないでくれよ。別にオルロワージュの弱点を聞こうつてわけじゃないんだから。僕はこう聞きたいだけなんだ。君のご趣味は何ですかつてね。

——お前は……何を言っているんだ……。趣味……？

——そう。趣味だよ。別にこれくらい答えてくれたつて構わないだろ？ 答えてくれたら今度は彼女たちの正確な居場所を教えてあげる。

彼女は随分と警戒していたようだったけれどやがてリスクはないと判断したのか小さな声で「……野球観戦」と答えた。ようやく成立した彼女とのコミュニケーションに僕は躍りあがつて喜ぶ。

——へー！ 野球観戦！ いいよね！ あの……なに？ その、打ったりとか、投げたりとかね！ 見てて面白いよね！ いやー僕も好きだなー野球観戦。奇遇だなあ！ ビールとかお姉さんから買って飲むよね！

僕は少しづつ彼女と話すようになっていった。そこからはなかなか大変だった。彼女は質問に答えることで僕から情報を引き出していく。でも彼女にだって僕の言うことが真実だとは限らないということくらいは分かっていた筈だし（実際僕が教えたことは全てでたらめだった）、逆を言えば彼女もまたわざわざ真実を話す必要はないのだ。本当のことを答えるメリツトはまるでない。だから重要なのは答えそのものではなく、答え方や質問の傾向から相手の思考を描き出すことだ。

それから僕はいよいよ次の段階に進むことにした。彼女に自由を与えたのだ。一日の何時間かは一定の範囲なら歩き回っても構わないと告げると彼女はとても驚いていた。「君が素直に話してくれたお礼だよ」と言うと、ひどく胡散臭い顔をして僕を眺める。あとはただ待つていればよかった。彼女はまもなく淡島フーキと出会った。

ある時彼女はそれまでとは異なることを聞いた。この基地の中にいる子供は何なのか、と。僕は素直に答えた。フーキは分身能力を持った妖魔で、この基地で見世物にされているのだと。彼女は顔を怒りに歪め、珍しく声を荒げた。

「あんな、子供を……！」

「子供？ でも妖魔だろう？ あんなちびっ子だつて大きくなれば人間の血をちゅーちゅー啜つて殺しまくるのかもしれないよ」

「そんなことはない。ちゃんと物事を教えれば……！」

「本当にそうかな」

「何が言いたい」

「別に。ただ君は、他人のことを気にしている場合じゃないと思うけど。こんなところで正義感を発揮して何になるってのさ」

「正義かどうかだなんて気にしちやいない……。ただ許せない……。お前達が、お前達のやることの全てが……！」

「随分嫌われたもんだな」

「当り前だろう！ 自分が何をしたか、忘れたとは言わせない。あれが人間のやることか！」

「ああ、そうだ」僕はこともなげに頷く。「これが人間のやることなんだ。別にそこまで珍しいことじゃない。どこにだつてありふれたことさ。……それに一つ言っておくのなら、君はこんなことは人間のやることじゃないと言うけれど、人間のやることじゃないような拷問を受けておいて平然としている君は一体何なんだ？」

「……………」

彼女が唇を噛みしめて俯いたので僕は慌てて駆け寄った。

「あ、ゴメンゴメン。あのう、別にそういうつもりで言ったわけじゃあないんだ。ほんとゴメン。前々から言っているけれど、僕は君のことが好きなんだ。大好きさ。愛してるんだ。君を無為に悲しませるようなことをしたくはないんだ」

「どの口で……!」

彼女はかっとなったのか僕の胸倉をつかみ上げた。

「何が、愛だ! 平気で人を拷問しておいてその相手に言う台詞か!」

「あのね、アセルス。拷問というのはただのシステムなんだ。痛みと忍耐と許しと解放の相関値に関するシステム。僕はそのシステムに則って君を痛めつけ、情報を引き出す。それはただの仕事なんだ。僕の感情とは全く関係のないことなんだよ。僕は君のことが好きだ。でも僕の仕事は君を拷問することで、だから僕は拷問する。たったそれだけのことだよ」

「狂ってる……!」

吐き捨てるアセルスに僕は冷静に続ける。

「感情に流される拷問吏は拷問吏じゃない。それはただのサディストだ」

「自分はサディストではないとでも?」

「僕はただの恋する若者さ。君のことが好きなんだ」

さらりと答えると、アセルスは僕の体を壁に叩きつけた。僕を憎々しげに睨みつけ、それから辛そうに目を伏せる。

「私は……人間というのはもつと善良な生き物だと思っていた。悪い人もいるとは知っていたけど、でも、ここまでとは思っていなかった……！ お前たちは人間じゃない。人の皮を被った悪魔だ！」

「そうかい。でも君は、その悪魔に頼みごとをしなけりやならないんじゃないのかな？」
「……どういう意味？」

震える声で尋ねるアセルスに、僕は肩を竦めて答えた。あの子を助けたいだろうか？



「助ける……？ でも、どうやって……？」

「簡単なことだよ。この基地を破壊して逃げ出せばいいんだ」

「馬鹿を言わないで。こんなばかどかい基地の中に閉じ込められて、どこをどう破壊するっていうの」

「全てさ。君を邪魔するものはみんな皆殺しにしてしまえばいい」

「できるわけないでしょう！」

「いいや、君にはできる」

確信をもって僕は言う。

「いいかい、アセルス。この世界の誰もを考えている。力が欲しい、もつと力があれば。でも実際のところ、この世界においては力を手に入れるということはそれほど難しいことじゃない。クローロンあたりで全身改造手術をすれば誰だって無敵のサイボーグになれる。物語においては、力を手に入れるということは有り触れたことだ。ちよつと望みさえすれば簡単に手に入る。——本当に難しいのは力を手に入れるということじゃない。幸福になることなんだ」

「……何が言いたいの？」

「君はもう物語の中にいるんだよ、アセルス。力ならもう持つている筈さ。……血を吸えばいいんだ。妖魔はそうして力を得るものだから」

「私は妖魔じゃない」

「そうだね。そして人間でもないはずだ。君の体が表示反応は妖魔とも人間ともつかない。人の力ではできないことなら、あとは妖魔として可哀そうな女の子を救いだせばいい。君にはそれができる」

「……どうして、私にそんなことを教えるの？」

「君のことが好きだからさ」

「……本気でいつているの?」

「もちろん」

もちろん、それは彼女に二択を迫るためだ。彼女は選択枝があるということを知ってしまった。あとはいつ選ぶのかという問題だけだ。もし仮に淡島フーキを助けないうのであれば見殺しにした罪悪感から彼女をじわじわと責め立てればいい(そんなに血を吸うのが嫌なのかい?)。そしてもし彼女が血を吸うのなら、これほど素晴らしいことはない。愛する彼女がより強くなれるというのなら、未来の恋人としては協力しないわけにはいくまい。あとは彼女の傍らで彼女を祝福し、妖魔と人間の血を持つ存在が吸血するとうなるのかきちんとデータを取らせてもらうことにしよう。どんな方法を取ったのかは知らないが、アセルスの体には間違いなく妖魔と人間二つの血が流れている。僕はこれをとりあえず妖魔人間と呼んでいる。その妖魔人間は吸血によってどれだけ強化されるのだろうか?

もし本当にアセルスがこの基地を破壊し尽くすほどの力を手に入れたなら、どれだけの損害を受けても十分すぎるほどのお釣りが来る。これまでのデータによれば、アセルスという実験体を示す再生能力は取り立てて有用なものではなかった。人為的に妖魔人間を造りだしたとしても、ただ生命力の強い兵士を生み出す技術ならほかにいくらでもあった。ヤルルートが望んでいるのは自らが超人となることだ。そのためには生半な

強さでは足りない。必要なのは支配者としての強さでなくてはならないのだ。

過去にもアセルスに妖魔の血を与えたことはあったけれどその際は取り立てて目立った反応は起きなかった。これは試す前から分かっていたことだ。妖魔は吸血によつて他者からエネルギーを摂取する。この「吸血」という行為にはいくつかの条件が存在しているようで、正確には判明していないが自発的であることやある程度の興奮状態にあることが影響しているらしい。捕らえた別の妖魔に無理やり血を飲ませてもやはり明確な変化は見られなかった。

少しだけ迷いを見せてアセルスは、けれど顔を上げてきっぱり「助ける」と言った。それでこそ僕のアセルスだ。

さあ後は簡単だ。淡島フーキを適度に追い詰めておけばいい。可哀そうな少女をもっと可哀そうにしておいて、我らがアセルスに正義の心を發揮してもらおうじゃないか。

フーキを助けて逃げ出すにしても白薔薇と紅を置いていくわけにはいかないとアセルスが言いだしたので、「仕方ないなあ」と洩るフリをしてついでに二体の妖魔も解放することにした。ようやく再開した彼女達は互いの無事を喜びあっていたが、紅はアセルスに抱きつくなり「お会い出来て嬉しいです。アセルス様。これで心おきなく暴れることができます。もうこんな基地など消し炭にしてしましましょう！」と嬉しそうに言う

ので流石に僕も慌てた。

「ちよつ……。ちよつと待った！」

「アセルス様。このニンゲンは？」

「私を拷問していた人。どうしようもない、最低の人間だよ」

「殺しましょう！」

「いやいやいやいや。もうちよつと考えてよ！」

「アセルス様。よろしいですね？」

「うん……。もう一人、この基地で助けたい子がいるんだ。この人にはその子のところまで案内してもらわなきゃならない。それに、ここには他にもたくさんの妖魔が捕らえられているんだ。あなたが全力を出すのはちよつとまずいよ」

「そうですか……。お役に立てず、申し訳ございません……」

「いいんだ。気にしないで。紅の顔を見られただけでも私は嬉しいんだ」

「はっ、はい！」

紅は顔を赤らめてもじもじしている。アセルスに優しい言葉を掛けてもらえて羨ましい。……まあ、いいか。アセルスの吸血対象もこうして用意できたことだし、あとは一直線にフーキの部屋に向かうとしよう。あの子の姿を見たアセルスがどんな反応を示すのか楽しみだ。

ねえ、アセルス。僕は時々思うんだ。君が美しいのは、そして僕が君を好きになったのは、もしかしたら君が「正義」というものを持つているからなのかもしれない。……でも、正しいとか、悪いとか、そんな価値観に拘泥することに一体何の意味があるだろう？

たとえば君はいつだって迷っている。「正義」だから、それは仕方のないことかもしれないね。力を手に入れるために血を吸わねばならないと教えられて、君は僅かに逡巡した。血を吸う、それは多分、人間離れしたことで、ヒトとしてはあまり正しいことではない。それにだいいち血を吸うからには吸われる奴がいる訳で、君は多分そいつのことを考えたりもしたんだろう。誰かを救うために誰かの血を吸うことは正しいのか、なんてさ。どうだっていいよ。救済と代償の多寡なんて考えたってわかりっこない。

僕は君に思い煩うことなく生きてほしいんだ。くよくよ悩んだり、つまらない正義感なんかに関われたりすることなく、ただただ前だけを向いてやりたいことをやってほしいんだ。



扉を開いた途端、むせかえるような熱気が漂ってきた。薄気味の悪い、性的な匂いだった。

拷問吏に促されてアセルスはその扉を開ける。するとあまりにも無残な光景が目に見え、飛び込んでくる。それは奇形者達の宴、四肢を欠損した乙女の祭壇だ。ドアノブを握った掌が体液でずるりと滑る。拷問によつて右手を鉤裂きにされた女妖魔が狂ったように哄笑を続けている。あらゆる方向を向いた眼球は白濁しガラス体の中にはおぞましい寄生虫が無数に這いずつてている。

アセルスは次の扉を開ける。下半身を蛇と合成された女が忙しなく悶えている。暴れ狂う下半身の蛇に上半身を食われ、しかし離れることも出来ずに血を流している。

次の扉を開ける。全身の皮を剥がれた小さい妖魔が、神経と筋肉を剥き出しに涎を零している。

次の扉を開ける。股間を踏み潰された妖魔が泣きながら自らの肉片を拾い集めている。

次の扉を開ける。次の扉を開ける。助けようと駆け寄り、けれど気の触れた妖魔にはもはや言葉さえも通じない。失ったものをひたすらに嘆き、苦痛の呻き声を上げる彼女たちは「死にたい死にたい」と緩慢に呟く。アセルスの体内で、その血液がすつと冷えていく。

「さあいよいよ次の部屋だ」と男は言った。一瞬ためらい、意を決してアセルスは扉を開く。

ねえおかしいの食べても食べてもお腹が一杯にならないの。どうして？ 唇をわなわなと震わせて少女が問うた。骸骨じみて痩せ細り全身の筋肉が萎みきつて、栄養失調に黒々と肉を腫れあがらせた少女。かさかさ乾燥した皮膚からは死滅した細胞が薄片状に剥離し、痛んだ髪は藁束のように絡みつき触れるだけで容易く抜け落ちる。斑な禿頭と化して、少女淡島フーキは過度なストレスから視線を目まぐるしく彷徨わせよたよたと室内を這いずっている。フーキは何かをずるずると引きずっている。かつてはフーキの衣服だったもの――ぼろ屑となり果てた布切れが罅割れた爪に引っ掛かっている。夥しい血に染められ腐臭を放つ下着。括約筋が衰えたために頻繁に失禁を繰り返したその下着からはおぞましい匂いがする。

お腹が減ってたまらないの。だから食べなきゃいけないの。焦燥に舌を縛れさせながらフーキは爛々と目を輝かせる。両手を広げて散らばった肉片を抱き寄せあんぐりとかぶりつく。まだこんなにお肉がある。私はまだ生きていける。そう言つて嬉しうに涙を流し、ぎりぎり奥歯を軋ませながら硬い肉を挿り潰していく。みちり、と肉の潰れる音がする。フーキが肉を嚙下する。食堂を滑りちやぶりと胃酸に浸かった肉

がじくじくと毒を撒き散らして溶けていく。ぶる、と胃が痙攣する。こみあげる拒否反応に盛大な呻き声をあげ少女は嘔吐する。喉が焦げる。唇が焼ける。苦い唾液を滴らせ目を潤ませた少女はしかしそれでも小さな両手で肉片を驚掴みにして口へと運んでいく。

本当に助けるのかいと男はアセルスに尋ねた。だってこんな有様だ。それにね、信じられるかい？ 彼女が食べているのは彼女自身なんだ。いくら他に食べるものがないって言ってもさ。分身した自分を食べると言っただってふつうは食べないよ。やっぱり妖魔はどこかおかしいんだな。気持ちが悪い。

アセルスは答えない。

一歩二歩と足を進める。アセルスに気付いたフーキがふと顔を上げ、大粒の涙をぼろりと落として「助けて」と言い、それでもその両手は止まることなく周囲の肉を掻き集めている。どうしようもなく飢えているのだろう。目の前に肉があると言うのに食べても食べても満たされないから、だから追い詰められているのだろう。

当たり前前の話だ。熱力学第二法則に則って全ての熱量は減少していく。少女が造った少女の分身からだはもととはいえば少女の血肉。外部からエネルギーを取り入れもせずその肉をのみ食らっていれば、いつか少女はきゆうきゆうと小さくなって消滅してしまうだろう。

アセルスは足を進める。痩せこけたフーキに近寄り、その体を抱きしめる。腐敗臭が鼻をつく。汗と垢で黒ずんだ体が腕の中で滑る。

「あのね」とアセルスは言う。フーキはきよとんとした顔でアセルスを見上げ、それから何も言わずにアセルスの二の腕を噛みついた。ごりごりと音を立てて骨に歯を立て、引き千切る様にして肉を奪っていく。

「ごめんなさい」とフーキは言う。「でも我慢できないの」

「いいんだ」アセルスが答える。

「どうしようもないの。お腹が減って我慢できないの」

フーキが言う。くちやくちやと肉を咀嚼しながら、ぐるぐると腹を鳴らす。

「そうだね……」

声を押し殺してアセルスは答える。

「お腹が」

フーキが言う。

「うん……」アセルスは答える。「私も今、とてもお腹が減っているところなんだ」

「許して。ごめんなさい。許して……」

涙交じりに謝りながらフーキがアセルスを食べていく。アセルスは身じろぎひとつせず体を委ねる。

フーキは最後に「こんな筈じゃなかったのに」と言つて動かなくなつた。それきり目を覚ますこともなく、アセルスの目の前で次第に胸の鼓動が小さくなつていく。驚くほど軽い淡島フーキの体を抱いてアセルスは背筋を丸める。

少女の死を見守つてアセルスは小さく肩を震わせた。しゃぶり尽くされた右腕は無残に穴だらけになつているが許してほしいと少女は言つたのだからきつと自分は許さねばならない。淡島フーキの為すことの全てを許そうとアセルスは思う。許せないことならば他にいくらでもあるのだから。フーキの指はとても脆くなつていて握りしめただけでほきりと骨が折れる。ああ。静かに呻いてアセルスはほんやりと顔を上げる。腹の底からこみ上げる不思議な感情になんと名前をつけたらいいのかがわからない。茫然と前を向き、ただ腕の中に少女の重みだけを感じている。命というにはあまりにも軽すぎる感触に枷でも嵌められたように両手が動かない。この感情を何と呼べばいいのだろうか？ アセルスはほんやりと首を傾げた。自分に今何が起こつているのかがよくわからなかつた。どうすればいいのかも、どんな言葉を口にすればいいのかも。一つだけ分かっていることは、今自分はとても腹が減つているということだ。自分でも驚くほどの食欲が湧いた。不意に恐ろしいまでの飢えに襲われ、眩暈にふらふらと頭をよろつかせる。そうか、とアセルスは呟く。これが本当にお腹が空くということなのかもしれない。

——この女を喰わねばならぬ。

ふと、どこかで誰かがそんなことを言ったような気がした。あまりにも遠く、限りなく近い場所で誰かが喪失に嘆く言葉を聞いた。この女を喰わねばならぬ。その言葉は誰のものだったろう？ 耳を打つその言葉に訳も分からずに奥歯を噛みしめ、アセルスはフーキの体をそつと床へと横たえる。この女を喰わねばならぬ。そんな言葉が耳鳴りのように木霊する。その言葉は支配者のものであり、そして同時にこの世の不条理に怒る弱者のものだった。ぼおん、とどこかで鐘の音が聞こえた。ラムダ基地に存在する筈もない時計塔の鐘がどこかで鳴っている。

「……………」

掠れた声でアセルスは囁く。まるで自分の声ではないように感じる。けれども、ぼおん。時計塔の鐘は鳴りやむことなく打ち鳴らされ、けだものの声が呼び覚ました全能感がこうして舌を突き動かすのだから、それはやはり自分の声なのだろう。その言葉を口にさえすればいい。自分はそうしなくてはならない。そうすることができれば自分は支配者になれる。望む物の全てを手に入れることができる。自分は宝物庫を開ける呪文を知っていて、あとは甘やかな予感に身を任せながら唱えるだけでいい。望むことの全てを望みのままにするために。アセルスは今一度目の前に横たわった淡島フーキの死骸を眺めた。大して知りはない少女だった。交わした言葉を数えても片手で足り

る。他人と言つても何ら差し支えない存在。この少女の死に罪悪感を覚えるのはつまるところは人間の下らない自己憐憫にすぎない。ろくに知りもしない子供が死んだ、ただそれだけだ。そんなことに怒りを燃やすのは正義漢きどりの拙い自慰行為に他ならない。そんなことはわかつていた。けれども——ああ、なんだ、この腹の底を泳ぐ衝動の名は。ラムダ基地で拷問を見た。哀れな乙女達がいたぶられ弄ばれるのを見た。どこにも届かぬ苦鳴を聞いた。助けを求めても得られないこの途絶した監獄で死こそが樂園なのだ。と祈りを捧げて滅んでいく種族がいた。妖魔。ひとよりも遥かに強い生命力をもちながらしかしそのひとに敗れ、繊細な体を乱暴なまでにいじくり回されて発狂していく窮境の乙女たち。アセルスはなおも少女を見つめる。視線を反らすことはできない。反らすわけにはいかなかった。目の前で死んでいった少女を見る。自分が救えなかつた少女の醜い姿を網膜に焼きつける。なんて汚らしい姿だ。傍にいただけで鼻が曲がりそうに臭い。そこらの畜生の方がずっと清潔ではないか。なぜあの時彼女の手を引かなかつた。たとえ疑われ憎まれたとしても迷うことなく奪い去つていればよかつた。ああそうだ。この世のものはみな失われていく。僅かに目を離れたその隙に運命と時間がその牙を打ち立てて殺すのだ。何かを手に入れたと思うのならば今この時を置いて他にはない。出会うその時その瞬間に時と定めを出し抜いて第一の牙を突き刺さねばならないのだ。手に入れるため支配するためには躊躇など何の役に

も立たないのだから。わかっている。本当は淡島フーキを見つけた時にそれ以外の何もかもを皆殺しにするべきだった。それ以外の方法などありはしなかった。自分にはそれができた筈だ。フーキの頬に口づけを落とした。謝罪の言葉を口にする資格などありはしない。だからアセルスは立ち上がる。暴れ出す感情が冷たい全能感を全身に巡らせる。アセルスは振り返る。そこには大切な御姫様が立っている。アセルスは唇を開く。眼を見開き拳を握りしめそしてなお一步足りぬ飢餓感に口元を吊り上げ、血を吐くようにして叫んだ。

「その血を寄こせー 白薔薇ー」

白薔薇が驚いた顔で自分を見ている。どうしてそんな顔をしているのだろう。自分がそう命じたのだからすぐに来るべきではないか。「白薔薇」低い声でアセルスは再び呼びかける。その声は知らず知らずに艶を帯び、女を誘うための欲情に濡れた響きを伴っている。白薔薇。三度叫んだアセルスに白薔薇が魂を抜かれたように「は……はい」と素直に答える。そう。それでいい。アセルスは微笑む。白薔薇を強引に抱き寄せ、背後からその首筋に唇を埋めた。ダンスのポジションのように白薔薇の華奢な体と両手を支え、がちりと音を立ててその軟肌を牙で切り裂く。腕の中でびくりと白薔薇が震えた。

妖魔の姫の血液はあまりにも甘露に喉を舐める。夜空の星と言う星を三温糖で煮固

めたような靈妙なる味わい。千年の精鍊の果てに残るもの、鍊金術師の秘蔵するひとしずくの生命の水。^{アクアヴィーテ}喉を焦がし消えることのない退廃の傷跡を残す魔性の火酒。

アセルスの髪が蒼く染まった。これまで受けた傷が一瞬のうちにさっと解け、ばらばらの肉塊になったかと思えばたちまちのうちに雪^{スノウ}薊^{スル}の血液が縫い上げる。紫糸に傷口を刺繡され組み上げられたフランケンシュタインの花嫁、妖魔化したアセルスの肉体は無残にして妖美を極めた。これまで受けた全ての傷は消えぬことなくつきりと浮かび上がりがんにがらめに乙女の柔肌を縛り上げ、つぎはぎだらけの肉体はいびつに振じれ震えている。けれどもなおその姿を評するのなら彼女の体は滅びと言う名の美しさに満ちていた。無数の傷はいつか消えてしまうことの顕れでありながら、しかし同時にこれまで足跡がけして消えぬものであることをも示している。活性化する肉体に全身の傷が痛みアセルスが呻く。苦痛に身をよじりねだるような声を上げると唇からは一筋の闇が流れ出す。一度潰れた眼球は螺子巻き仕掛けにくるくると回転し淡い青^{アクアグレイ}灰の結晶化を遂げる。二粒の晶石と化した眼球に微かな炎を灯してアセルスはそつと笑った。それは自分が支配者であると知った微笑だった。

誰かが自分の名を呼んだ。ノーガヒ、という男の声だ。盛んに自分を褒め称え、愛の言葉を告げている。愛している、と男は言った。アセルスは答えずに右手を振るう。ぼとりと音を立てて男の右腕が千切れ落ちた。アセルスの右手にはいつの間にか劍が

握られている。捕らえられた時に奪われた剣だった。今までどこに保管されていたのかは知らないが、しかしこれはアセルスの剣であり、アセルスの剣であるからには望んだ時望んだ場所に存在していなければならない。

痛みに絶叫する男には構わずアセルスはフーキの亡骸を紅に預け、他の妖魔を助けるようにと告げると一切振り向くことなく迷いのない足取りで部屋を出ていく。階段へと続く通路には見張りの兵士が立つている。近づいていくと銃を向けられ「ノーガヒ殿からここからは通すなど言われております」と制止される。構わずに押し通ろうとする警告なく膝に銃弾を撃ち込まれアセルスはがくりと体制を崩す。「聞こえなかったのか妖魔」冷たい声で兵士が言う。そのまま銃尻でこめかみを殴りつけられぼとぼと血を流すアセルスは表情を変えずに淡々と見つめ返す。するとアセルスの視線を受けた兵士の顔が見る見るちに真つ青に変わり何を見たのかよろよろと後ずさる。アセルスの指が自らの膝に伸び、埋め込まれた銃弾をほじくり返してそのまま兵士の眼球にねじこんだ。激痛に悶える兵士の背後から妖魔の剣を振り落として首を落とす。転がった生首に足を乗せ階下目掛けて蹴り込むと、下の方で叫び声がある。突然放り込まれた生首に動揺を見せる兵士たちをよそに一陣の颯風と化したアセルスが殺意を剥き出しに切り込んでいく。当たるを幸いに剣を振り回し斬って斬りまくる。銃撃の応戦に体中穴だらけになりながら怯むことなく突貫していくアセルスの不死に兵ぞろいの

ラムダ兵たちにも恐怖が広がり逃げ出すものさえ現れた。警報が鳴り、隔壁が落とされる。それでも構うことなく突き進み、這いずって逃げていく兵士を一人ずつ一人ずつ殺していく。基地内には五月蠅いほどに警報が鳴り響きイエローライトがガラガラと周囲を照らし出す。

アセルスは扉をこじ開ける。ガラス張りの広い空間に一機のメカが待ち構えている。全長4mを誇る巨体、錆鉄色のカラーリングを施された特別製のTウオーカーだ。足を踏み入れた途端に機関銃を連射されアセルスの頭が消し飛ぶ。一発一発が巨人の指ほどもある弾丸を間断なく撃ち込まれ、アセルスはどうと後ろに倒れる。穴だらけになった侵入者にしかしTウオーカーは油断せず、増設された副腕でアセルスを掴み上げると激しく壁面に叩きつけた。引き裂かれた紙きれのように力なく手足を垂らすアセルス。身動きの取れないその体に容赦なくTウオーカーは何度も何度も鋼鉄の腕を叩きつける。片腕だけで2tを優に超えるその質量をそのまま凶器と化して柔らかい女の腹目掛けて叩きつける。衝撃が弾けるたびにびくりびくりと痙攣し血飛沫が飛んだ。だがそれでもアセルスは死なない。再生途中の頭を皮一枚で繋げてぶらぶらと揺らしながら震える指で弱々しくTウオーカーの爪を引っ掻き、次の瞬間には妖魔の剣を握り力任せに叩きつける。副腕に亀裂がはしり、機械部品が辺りに飛び散る。

Tウオーカーが少し手足を振り回すだけでゴム毬のように吹き飛ばされるアセルス

は、しかし痛みに呻くことさえせず静かに自らの敵を睥睨する。戦って殺す。今はただそれだけを。振り下ろした妖魔の剣でTウオーカーの右足を切り落とす。がくりとバランスを崩し、地響きとともに鋼鉄兵器が倒れる。逃げ出そうと慌てて這い出してきたパイロットの顔を思い切り蹴りつけるとごきりと骨が折れて息絶えた。さあ次はどこに行こう。淡島フーキは何と言っていたのだったか。彼女を基地に連れてきた男がどこかにいる筈だ。それに基地の責任者であるヤルト。どこにいるのかは知らないが必ず見つけ出して殺してやる。今の自分にはその力がある。力があるのに何もしないのはおかしいことだ。だから殺す。アセルスは足を進める。行く手を遮るもの全てを叩き斬って突き進む。

自分は一体何をしているのだろ、と心のどこかでぼんやりと考えながらも戦いに逸る心は前へ前へと駆り立てる。もしかしたら取り返しのつかないことをしているのかもしれないとそう考えながら脳裏に焼き付いたフーキの死に顔を思う度に稲妻が心臓をはしる。激情と興奮。繰り返される殺戮に心のどこかを置き忘れ、アセルスは東の間の殺意に狂う。殺して殺して殺して殺して長く切ない雄叫びを上げ、疲れ果てたアセルスがその手からぼろりと剣を取り落とした時、彼女の周りには一人として人間は存在していなかった。やがて白薔薇たちと合流してから妖魔の淑女たちはアセルスの身を心配するばかりで妖魔化やその後の行為についても深く詮索することはない。それは妖魔な

のだから当然のことかもしれないが、しかし後になってからアセルスは「しかしどうなのだろう」と思い返すことがあった。もし、この時、アセルスの一行に人間が一人でもいれば大量殺人を行った彼女をどう思っただろう。どんな理由があるにせよ人を殺してはならないと責めただろうか。たとえ見て見ぬふりをしていたとしても兵士に罪はないと詰っただろうか。アセルスにはわからなかった。白薔薇と紅は何も言わなかったのだ。もしかしたら何とも思っていないかったのかもかもしれない。それはそれで悲しいことではあつたけれども、どだい当の殺人者であるアセルスが悲しいなどと惚けたところで何の救いもありはしないだろう。

戦闘を終えてラムダ基地から逃げ出そうとしていると、仮面をつけたおかしなメイドが現れてゾズマの使いを名乗った。その名前を聞いてアセルスは大福餅の話を思い出した顔をしかめる。メイドの話によればゾズマはゾズマでこの基地に潜入し破壊工作を進めており、アセルスの起こした騒動に乗じてこの基地を潰してしまふ算段なのだという。そんな計画を立てていたのならなぜもつと早く遂行してくれなかったのかと思わないでもなかったがこのメイドにまで罪はない。喉元まで出かかった怒りを懸命に堪え、メイドの案内でアセルス達は脱出用のため用意された星間船に乗り込む。囚われていた妖魔たちも救えるだけ救いはしたが怪我や後遺症などの治療のためにゾズマたちが預かるのだという。

ゾズマたちの用意した星間船は無事にラムダ基地を離れ、星の海へと乗り出している。一般航路に戻るまではもう一つ別の船に乗り換えねばならないとの説明をメイドから受け、そういえばと混乱してこれまで聞いていなかった名前を尋ねたところ、メイドは静かに笑って「私はなぞのメイド仮面です」としか答えなかった。そうですか、と慣れたようにアセルスも頷く。妖魔が変なことを言うのは今に始まったことではなかつたし、メイドが仮面をつけていたら多分それはなぞのメイド仮面以外の何者でもないだろう。ぼんやりと考えてアセルスは船室の窓から外を眺めた。何かとても大事なことを忘れているような気がした。そうだ、とアセルスと思う。私は人をたくさん殺したんだつた。心の中で呟いてなんとなく馬鹿馬鹿しくなる。いまさら何を言っているのだろうか。なぞのメイド仮面とほがらかに初対面の挨拶などしている場合でもないだろうに。

本当は、とアセルスは考える。もつと後悔をするべきなのだろう。おそらくは自分の中の理性とでも呼ぶべき部分は少なくともそのように判断している。人を殺してしまつたことに悩み苦しむ悪夢の一つでも見るべきだろう。だというのに自分はいまここにこうして平然と星々を眺めている。なぜなのだろうか。精神的ショックが大きすぎて感情が凍ってしまったとかそういうことなのだろうか。自分は今もつと弱い女だと思っていた。世界で一番とまではいれないが一応平和を愛しているし、できることなら

ば戦いを避けるように行動してきたつもりだった。何の根拠もありはしなかったが自分はその正しい人間だと思っていた。だがそうではなかった。人をこうして殺しても取り立てて罪悪感もない。もちろんそれは淡島フーキを苦しめていたあの基地の人間が許せなかったということもあるけれど、だからといってその罪が死に値するものかどうかなど誰にもわかりはしない。自分がやったことが正しいことだとはどうしても思えないが、だどいうのにまるで後悔が湧かない。なぜなら自分は自分の望むことを行つたからだ。私は後悔しない。

つまるところは変化なのだとアセルスは結論づけた。自分は変わっていく。この件に関してアセルスが恐怖や悲しみを覚えるとすれば、それは殺人そのものではなく殺人について何も感じなかった自分に対してだ。かつて自分は白薔薇に何と言つた？ モンスターを殺すことにいつの間にか慣れていって、自分はそのことが辛いと涙したのではなかったか。それがどうだ、今ではこうして大量の血に両手を染めておいて素知らぬ顔をしている。自分のことがよくわからない。淡島フーキのことを考えると今でも腸が煮えくりかえる。ラムダ基地のいた人間は死んで当然だと思うその心に迷いはない。その心に迷いはないけれどしかしその心は針の城で目覚めた頃の自分とはどれだけ変わってしまったのだろうか？ 自分のことがよくわからない。白薔薇と紅はいつまでも自分に優しい。なぜなのだろうか？ 妖魔だからなのだろうか。彼女たちに自分の

ことを責めて欲しかった。動機については彼女たちも理解しているだろうが、「それにしたっていくらなんでもひどすぎる」と糾弾してくれば自分にしたって罪の意識の一つだって芽生えるかもしれないではないか。あまりにも他力本願すぎる考えに自分でも呆れながらそれでもアセルスの悩みは増していった。

自分はいったい何を忘れてしまったのだろう。そう考えると無性に過去へと戻りたくなる。あの何も知らなかったころ、のほほんと学生をしていた子供時代に帰りたい。そう思う一方でこうも考える。本当にそれでいいのだろうか。今や自分はこうして力を手に入れた。もう自分はなにも出来ない子供ではない。誰かに守られ与えられるだけの庇護者ではないのだ。ようやく得た戦う力、生きるための力。必要ないとは口が裂けても言えない。それでも……。

寂しい、と思ったアセルスは窓の外を見つめて物思いにふけた。取りとめもなく昔のことを思い出して懐かしさに酔った。シユライクにいたころは本当に平和だったと思う。あの頃はあの頃で子供ながらに必死になつて毎日を生き抜いていた筈だが、それでも平和には違いなかつたのだといまさらながらしみじみ思う。

「懐かしいな……」

遠い眼をしてアセルスが呟いた時、遠慮がちに客室の扉がノックされた。「機関士のものですが」と若々しい男の声が聞こえ、どうぞと返事をするのがちゃりとドアが開か

れる。現れた青髪の男は室内を見回しアセルスに気付いた途端にびっくり仰天し素つ頓狂な声を上げる。

アセルス姉ちゃん？と男は言った。それが15年ぶりになる小此木列人との再会だった。

幕間 光刃皇帝アルカイザー第二十七話 『再会！ 年上の女（ひと）！』

光刃皇帝アルカイザー第二十七話『再会！ 年上の女！』

星間船キグナス号の機関士見習い、レッドこと小此木烈人は改造人間ではない。どこにでもいる普通の一般人であった彼はしかしその家族を悪の秘密組織ブラツククロスに奪われ、彼自身もまた四天王シユウザーとの戦いで瀕死の重傷を負う。しかし！まさに息絶えんとしていた彼のもとに現れたアルカールの導きによって正義の味方アルカイザーとして復活したレッドは、世界の平和を守るため今日も戦う！

■前回までのあらすじ

IRPOのヒューズと知り合ったレッドはキャンベルビルへと向かう。社長であるミス・キャンベルへの疑惑を深めた二人だったが確たる証拠は掴めず後ろ髪をひかれながらもその場を後にする。

捜査の継続と再会を約束し一端ヒューズと別れたレッドは次なる航海へと出発した。

マンハッタンでのブラッククロスの暗躍に不安を覚えながらもレッドはユリアとの他愛のない会話に慰められる。そうだ。俺が守りたい平和はこういうものなんだ……。正義の思いを一層燃やすレッドだったが、なんとキグナス号がカモフツク一味によってハイジャックされる。変身しようにも知り合いの多い船内では思うようにできず、機関士見習いとして乗客への状況説明と安全確認を続けるレッドはそこで15年前に行方不明になったアセルスと再会するのであった……。

レッド「アセルス姉ちゃん？」

アセルス「誰？」

レッド「やっぱそうだ。俺だよ。烈人、小此木烈人」

アセルス「ああ、小此木先生とこの烈人君か！ 大きくなったね。全然分かんなかった。でも、目のあたりなんか変わってないかんじ」

レッド「よく遊んでもらったもんなく。姉ちゃん、全然変わってないよなく。紙の色は緑じゃなかったけど……。ちよつと待て、変だぞ。どう見ても高校生ぐらいだ。もう10年以上も前の話だ。……キサマ、一体何者だ！」

アセルス「キサマで……。烈人君、そういう言葉遣いよくないよ」

レッド「あ、その言い方なんか懐かしい……。いや騙されないぞ！ アセルス姉ちゃん

は……えーと、15年前に行方不明になったんだ。仮に生きていたとしても……ババアじゃないか！」

アセルス「誰がババアだ」

白薔薇「待つてください。この方は本当にアセルス様です。複雑な事情があつて、十数年以上も年を取らずに眠り続けていたのです」

レッド「そんな眠り姫みたいな話を信じろつていうのかい？（……いや、待てよ。正義の味方が現実にいるわけだし、そのくらいの話なら十分ありうるか……？）……ごめん。やっぱり信じるわ」

アセルス「え……そんなにあっさり？　ありがとう……」

レッド「ていうか……、本当に生きてたのかよ……。アセルス姉ちゃん。おばさんとか、すげえ泣いてたんだぜ……」

アセルス「……うん。なんていうか、いろいろゴメン……」

レッド「いやまあ、謝るこたないけどさ……」

アセルス「色々あつてさ。……うん。なんかもう、本当にいろいろ……。十年以上も寝てたこともそうだし、他にも。何もかもが昔とは変わってしまったて……」

レッド「昔とは……か。まあ、そうだな……」

アセルス「でも、烈人君は立派になったね。機関士になったんでしよう。もう社会人

じゃない」

レッド「まだ見習いだけだな」

アセルス「でもキグナス号の乗組員はすごいよ。Aクラスの星間船に乗るには資格だつてたくさんいるでしょう? 頑張ったんだね……。偉い! 小此木先生も鼻高々だろうなあ……」

レッド「……いや、親父は知らないよ。死んだんだよ。一年前に。……事故で。おふくろと藍子もさ……」

アセルス「え……。あ……」

レッド「まあ、そういうわけでさ。俺の方も、昔とは色々変わっちゃまってるんだな、これが……」

アセルス「ごめんね……」

レッド「いいって! 俺は姉ちゃんが生きてるってわかって嬉しいんだよ。親父たちが生きてた頃とはもう、何もかもが変わっちゃまったけど、アセルス姉ちゃんだけは全然変わってなかった。俺はそれが嬉しいんだ」

アセルス「変わってない? 私が?」

レッド「ああ。十五年前のまんまだよ」

アセルス「烈人君……。君はちよつと会わない間に女を喜ばせるのが上手くなったね

……。頭撫でたげようか」

レッド「いや、もうそんな年でもないからいいよ……」

にこやかに談笑する二人だったが、その内にレッドは重要なことに気づく。

レッド「はっ！ そうだった！ よく考えたらこんなこと話してる場合じゃねえ！」

アセルス「どうしたの。そんな血相を変えて」

レッド「実はこの船、いまハイジャックされてるんだ！」

アセルス「えっ」

白薔薇「まあ」

レッド「コックピットは占拠されちまったけどこっちも抵抗してる。客室までは奴らも入ってこれない。安全は保障するよ。ただ乗客たちの間で混乱が発生するとこっちとしても困るからさ。悪いんだけど、しばらく部屋の中でじっとしてもらっていいかな？」

アセルス「もしかして、ハイジャック犯は妖魔？」

レッド「いや、カモフラックだけだ」

アセルス「そっか……。私もハイジャック犯と戦うよ」

レッド「はあ!? 何言ってるんだよ！ 危ないからいいよ！」

アセルス「色々変わった、って言ったでしょう。私だって戦える」

そう言つてアセルスは腰に提げた剣をレットに見せる。

レット「駄目だ! 仮に戦えたとしても俺はアセルス姉ちゃんに戦つてほしくない! よくわかんねーけどせっかく生きてたんだろ、だったら危ないことすんなつて! アセルス姉ちゃんなんかもつと平和で穏やかなところで温泉にでも入つてぬくぬくしてろよ! じゃあ、俺は他の客室も見て回るから、マジで部屋の中でじつとしててくれよな!」

アセルスを残してレットは部屋を出る。ぱたりと扉を閉め、(しかし、相変わらず美人だなあ……)としみじみ思い、ぶるりと頭を振つてイカンイカン今はハイジャックのことを考えねば、と気を取り直す。

レットは隙を見つけてなんとかアルカイザーへと変身し、単身操縦室へと乗り込む。戦いを優位に進めるレットだったが、姿の見えない彼を心配し探していたユリアが敵に捕まってしまう。

手下1「動くなアルカイザー! 動けばこの女の命はないぞ!」

アルカイザー「くっ」

ユリア「ご、ごめんなさいヒーローさん」

手下2「ゆっくりとその銃を置け!」

アルカイザー「卑怯な! その女性を離せ!」

手下「うるせえ！ 卑怯が怖くて悪党ができるかよ！ ボス！ 頼みます！」
カモフツク「カモカモカモ……。いよいよ俺様の力の見せどころカモね。身動きの
取れないお前には悪いが、好き放題やらせてもらうカモ」

アルカイザー「ぐあつ」

人質をとられ、なすすべもなくいたぶられるアルカイザー。危うし！

一方その頃――。

白薔薇「年下の男の子の意地……。ですか。嬉しいですね」

アセルス「うん。なんだか照れくさいけど……。ああいうことを言われると人間って
いいものだなと思えてくる……。でも」

どこか暗い表情を浮かべるアセルス。紅が心配そうに顔を覗きこむ。

紅「アセルス様？」

アセルス「でも、世界は優しい人間ばかりじゃない。ラムダ基地みたいなどころでは
腐ったような人間もいる。……烈人君のことが心配だな。やっぱり様子を見てくるよ」

白薔薇「ここにいろと言われたのでは？」

アセルス「烈人君は私の体のことを知らないもの。……大丈夫。どうせ私は死なない

よ。烈人君が傷つくぐらいなら私が傷ついた方がいいし、それに守られてばかりいるのは性に合わないしね」

白薔薇「でしたら私も一緒にします」

紅「私も」

アセルス「うん。ありがとう!」

烈人の後を追うことにした一行。間もなくレッドの後ろ姿を目にするが、声をかけようとしたその時、とんでもないものを見てしまう。

レッド「よし、ここなら誰もいないな……変身!」

突如として閃光に包まれるレッドの姿。あまりの眩しさにアセルスたちが目を瞑った次の瞬間、正義のヒーローアルカイザーが現れる!

説明しよう! 見習い機関士レッドが叫んだ瞬間、腰に装着したカイザーベルトがその意思に反応して周囲のカルカン粒子を吸収。反マクロダウナー効果によって力場転換を起こした粒子はたちまちのうちに戴冠結晶と化し、小此木烈人の全身を覆うよろい強化スーツとなるのだ! この間僅か0.03秒!

変身——すなわちクラウン・アップした小此木烈人は正義の戦士、アルカイザーとなり、その拳は岩をも砕く!

アルカイザー「とうっ!」

颯爽と駆けていくアルカイザー。茫然とするアセルス。

アセルス「あれ……烈人、くん……？」

白薔薇「どうやらそのようですね……」

紅「面妖な……」

驚きを隠せない一行が足を止めていると、突然謎の男が現れ行く手を阻む。

謎の男「見てしまったか」

アセルス「あなたは？」

謎の男「私の名はアルカール。アルカイザーの正体を知ってしまった君たちを放っておくことはできない。悪いが記憶を消させてもらおう」

紅「記憶を？」

アルカール「そうだ。ヒーローは正体を知られてはならない。悲しいがアルカイザーの記憶も消さざるを得ない」

アセルス「訳がわからないな。記憶を消すとか消さないとかいきなり。やっぱりあのヒーローは烈人君なの？ 彼の家族が死んだっていうのも関係しているの？」

アルカール「それを話すことはできない。危害を加えるつもりはない、大人しく私に従ってくれないだろうか」

アセルス「あなたの言うことには何一つとして領けないな。記憶を消すだなんて軽々

しく言わないで。人の記憶は大切なものだ。その記憶を失って随分長い間苦しんでいるひともいる。今日一日生き抜いたその記憶が私たちを動かしているんじゃないか。記憶を奪う権利があなたにはあるの?」

アルカール「それでも正義の秘密は守られねばならん。恨みはないが……」

白薔薇「あなたは変わりませんね、怜次さん」

アルカール「どうして私の名を……。ま、まさか、あなたは!」

白薔薇を見て驚愕するアルカール。

アルカール「さゆりさん……。? さゆりさんなのか?」

白薔薇「誰のことでしょう。私の名は白薔薇というのです」

アルカール「白薔薇……。ホワイトローズ……。生きていたんですね、さゆりさん……」

白薔薇「何のことかしら」

アルカール「とぼけるのはやめてくれ! 俺はずっとあなたのことを……!」

白薔薇「あなたのことを? 自分が殺したあなたのことをずっと思い続けて来たとも言うつもりなのですか?」

アルカール「そ、それは……」

白薔薇「今回も同じなのです。あなたは正義のために私たちを殺そうとする」

アルカール「違う！ 私はただ、記憶を消そうと」

白薔薇「人の人格は記憶が形作るものではありませんか？ その記憶を消すと言うのは、人格を削ぎ落とすのと何ら変わらないのでは？」

アルカール「しかし……！」

とても優しい声でアルカールに言う白薔薇。

白薔薇「お願いします。怜次さん。どうか今回だけは私たちを——私たちとあの少年のことを見逃しては下さいませんか？」

アルカール「……ッ。わかりました……今回だけ、今回だけなら……」

白薔薇「ありがとうございます、怜次さん。あなたはいつでも優しい人」

アルカール「……さゆりさん、あなたは……」

白薔薇「さあ、アセルス様。先を急ぎましょう」

アセルス「う、うん……」

立ち尽くすアルカールをその場に残し変身したレッド——アルカイザーを追っていくアセルス達。ようやく操縦室へと辿り着いた時、そこで目にした光景は——。

倒れ伏す変身ヒーロー。勝ち誇るカモフック。

アセルス「烈人君！」

白薔薇「静かに、アセルス様。敵に気付かれます」

アセルス「あの人質をなんとかしないと……仕方がない、こうなったら……。紅、あなたの血を少し分けてもらっていいかな……?」

紅「は、はい! 喜んで!」

妖魔の剣をその場に置き、丸腰で近づいていくアセルス。

手下1「なんだテメエは?」

アセルス「あ、あの……私、私、……私は無関係なんです! お願いです! 私だけでも助けてください!」

アルカイザー（ア、アセルス姉ちゃん……どうして来たんだ……くっ）

怯える乗客の振りをしつつ隙を窺い、ユリアを捕らえている手下1に掴みかかるアセルス。しかしハイジャック犯たちに頭を撃たれてしまい、力なく倒れ込む。

手下2「なんだ、こいつ……。馬鹿な女だぜ!」

アルカイザー「キ……キサマらあああああああああああああ!」

手下1「いや、待て! この女……紫の血……?」

カモフツク「人間じゃないカモ? どういうことなんだカモ?」

瞬間、今まさに撃たれて死んだ筈のアセルスはすつくと立ち上がり、アルカイザーへとそつと笑う。

アセルス「ねえ、ヒーローさん。実はね……私もできるんだ。変身」

呟いたその時、アセルスの髪の色は蒼く染まりその右手には妖魔の剣が現れる。妖魔化！ 妖魔と化したアセルスは瞬く間に手下1からユリアを解放しアルカイザーを助け起こす。

アセルス「大丈夫？」

アルカイザー「あ、ああ……すまない……。 (どういふことなんだ……？ 血が、紫だと……?)」

手下2「ち、ちくしょう！ やりやがったな！ カモフツク先生！ いやいよ頼みます！」

カモフツク「カクモカモカモ。何がなんだかよくわからないが、女一人と傷ついたヒーローに何ができるカモ。返り討ちにしてくれるカモ！」

アルカイザー「ブライトナックル！」

カモフツク「ぐふっ」

手下2「せ、先生！ ヒエー退散だー」

アルカイザー「逃げたか……」

アセルス「もう、この船は大丈夫かな？」

アルカイザー「どうやらそのようだ。……危ないところを救われたな、お嬢さん。礼

を言わせてくれ。だが……助けてもらってこんなことを言う資格はないのかもしれないが、あなたのような女性には戦場に出てきてほしくないな」

アセルス「(気まずい……)。正体が烈人君ってわかってるだけに、この会話は気まずい……) あ、う、うん……。そうですね……」

アルカイザー「では、さらばだ。とうっ!」

掛け声とともにどこかへと消えていくアルカイザー。しばらくしてレッドが慌てた様子で駆けつけてくる。

レッド「アセルス姉ちゃん……。どうしてここに? それにこの状況は? アセルス姉ちゃんはやったのかい?」

アセルス「いや……。なんていうの? 正義ノヒーローサンガ倒シテクレタンダヨ」

レッド「ヒーロー……。アルカイザーのことかい?」

アセルス「ああ、そういう名前なの、あれ」

レッド「ていうか、客室にいてくれて言ったじゃないか!」

アセルス「それは重ねがさね本当にごめんね……」

レッド「全くよう……。後の始末は船の乗組員でやることから、アセルス姉ちゃんたちは客室に戻って平和を満喫していてくれよ! 後で美味しいお菓子とかも持つて行くからさ!」

アセルス「うん。ありがとう……」

何か問うたげに帰っていくアセルス。その背中を見つめてレッドはぎりりと拳を握りしめる。

レッド（俺は一体何をやっているんだ……！ 正義の味方になってみんなを守るんじゃないかったのか？ また、守れなかった。俺はまた。アセルス姉ちゃんの体に何が起こっているのかはわからないが、普通なら姉ちゃんはずっと死んでいた。俺の目の前で殺されたんだ！ くそっ！ 強くなってやる！ 俺は……！ 俺は俺の守りたいものを守るだけの力が欲しい！）

■次回予告

不甲斐ない自分への怒りに更なる力を求めるレッド。しかしそんな彼の乗る船は超巨大生物タンザーに飲み込まれてしまう！

脱出のためタンザーの体内を探索する一行だったが、ささいなことからレッドはアセルスへの疑惑を深めていく。

紫の血、異形の力。あなたは本当のアセルスなのか？ ブラッククロスの改造人間ではないのか？

失った過去に繋がれた二人が不信に引き裂かれようとしたその時、二人の前に邪悪な

タンザーの心臓部が現れる!

次回『絆! 驚愕のW変身!』見てくれよな!

第十九幕 善悪二元腐刻絵図——森の従騎士ウロネブリの物語——

一枚の銅板に蜜蝋を丹念に塗りつけ、細長い針金で好きなように引つ掻いてみる。それから温めた腐食液——塩化第二鉄に銅板をゆつくりと浸す。25℃ほどに保ったまま一時間もすればそれでおしまい。蜜蝋の塗られた個所はそのまま、けれど針金に除かれた線は腐れ、銅板の上にくつきりと顕れる。

腐食作用を利用したこの図法、またその絵図を腐刻画という。

下級妖魔洞^{ウロネブリ}舐はその名の通り木の洞で生まれた。ある朝目を覚ましたウロネブリは自らの手足をまじまじと眺め、あ、これはボクだ、ボクがいる、と思い眼をぱちぱちさせる。昨日までの記憶は無い。自分がどういふ存在なのかもよくわからない。ただ自分がウロネブリという生き物だと言うことは知っていたので、ボクはウロネブリ、ボクはウロネブリ、と言い聞かせるように呟いて、初めて目にする世界におっかなびつくり歩き出す。こうしてウロネブリは生まれた。

生まれ落ちた木の洞は取り立てて特徴のない平凡な穴ぐらではあったのだが、自分自身が生まれたその場所からは不思議に離れがたくしばらくウロネブリは洞を中心に辺

りの散策を続けた。

周囲に広がっているのはよくわからない森であった。木の枝にとまる蝙蝠はなんだかやけに牙が大きくて気味の悪い鳴き声をあげるし、踏みつけた茸は突然巨大化してこちらを追いかけてくる。森というものがどういふものなのか碌に知らないウロネブリではあつたが次々に襲い来る怪異にすっかり参つてしまつて、この森はなんだかへんな気がする、怖い、と涙目になつて足が竦んだ。

それが妖魔の森であることをウロネブリはまだ知らない。ここがファシナトウールの果てに位置する黒字森であり、自分がそこに発生した下級妖魔であることなど知りもしない。人間ではないのだから仕方がないことだ。大切なことを教えてくれる親はいない。最低限の知識と生物としての本能、そして訳のわからない命のさだめを背負わされてウロネブリはここにいるのだった。仮にこれが中級・上級妖魔であれば有り余る力を存分に振るい、その誇りと美貌とをもつてたちまちの内にテリトリーを形成し、足りぬ知識は群がる下僕から吸収することで自らの立ち位置を悟りうるものだがウロネブリはそうではない。力も美貌も人間よりもやや優れている程度の下級妖魔、生まればかりでは知恵だつて足りない。

おなかやすいたな、とウロネブリは思う。でもどうすればいいのか何を食べればいいのかもわからなかつたし、道に落ちている木の実を拾おうとするとたちまちに栗鼠や穴

熊やらがとんできてあつと言う間に「このノロスケめ」と横取りしてしまふので、伸ばした手を恥ずかしそうに引つ込めてウロネブリは俯いてとぼとぼとまた歩いていく。

三日ほど歩き続けているとなんだか良い匂いがしてきた。ようやく黒宇森を抜け出したウロネブリはそこでようやく人里というものを発見したのだつた。人間はウロネブリと同じ姿をしていたので、ウロネブリは漠然とではあるが「自分に優しくしてくれるのではないかな」と思つてにこにこ近寄つていく。小さい人間が大きい人間に群がっている。小さい人間はとても楽しそうに微笑み、大きい人間の腰布を引つ張つてはオカアサンオカアサンと騒がしくしていた。

オカアサン、というのは何だろうか。あの大きい生き物の名前のことかもしれない。なんだか楽しそうだ。

子供が親に甘えている光景をそのように解釈したウロネブリは、きつと自分も混ぜてもらおうとも思つたのだろう、えへへと少しだけ照れながらオカアサンのもとに駆け寄つてオカアサンの腿に抱きつき、ぐりぐりと頭を擦りつけた。

「オカアサン！」とウロネブリは言った。すると、途端にオカアサンは怖ろしい顔をしてウロネブリを睨みつけ、「なんだね、この子は！　どこの子だい！」と怒鳴りつけたかと思ふと見る見るうちに血相を変え、「妖魔が出た！」と叫び出すて子供たちと一緒に家中に閉じこもってしまった。

後に取り残されたウロネブリはしばらくきよとんとしていたが、その内に自分が何かまずいことをやったのだとうっすらと理解する。何らかの拒否を受けたことは雰囲気でもわかった。だからまたウロネブリはくたびれた足を引きずりながら力なく元来た道を戻り、とぼるとぼると涙を零しながらあの木の洞によたよたと横たわり、さみしそうに目を閉じるのだった。意気地のないウロネブリは一度失敗した経験からもう二度と人里へ行くとはしなかった。

しばらくは寂しい日々が続いた。いつまでたつても何処へ行けばいいのかわからなかった。お腹が空いてきゆうきゆうと痛む。ウロネブリは空腹のあまり寢床にした木の洞にそつと舌を当て、ぞろりと舐め上げた。すると思いのほか甘く、柔らかな味がこみ上げてくる。心なしか体に元気が湧いてきた気さえする。ウロネブリは赤子の甘える口づけのようにそつと樹皮に唇を当て、ざらざらとしたその感触を舌で味わった。植物の持つ生命力を吸い取り自らの活力とする、これはウロネブリが樹精の妖魔であるからこそなせることであつたが、当のウロネブリはそんなことなど露知らず、涙に濡れた頬を腫らしながら独り木の洞を舐め続けるのだった。

ある日、森でマンティコアに襲われていたウロネブリは弁髪の人に救われる。足が痺んで動けなくなっていたウロネブリの前に颯爽と現れた男はまさに疾風迅雷、一撃の元

に獣を打ち倒してしまう。

「危ないところだったな、少女よ」

そう言って振り返った男にウロネブリは目をキラキラさせ、ふはあ、と鼻から感動の息を吐きだす。

「あ、あり、ありりん……ありが、とお……!」

「うむ。気にすることはない。これも修行の一環だ」

「ふわあ……!」

男があまりにも格好良かったのでウロネブリは喜びのあまりその場でびよんびよんと跳び跳ねる。助けられたのも初めてだったし、誰かとまともに会話するのもこれが初めてのこと。何から何まで新鮮で、堪え切れないほど嬉しくて、ウロネブリは矢継ぎ早に質問を重ねた。

「す、すごい、あたま……!」

「ん? この頭か? ……はは、そうだな。この辺りでは珍しいだろう。これは弁髪と言つて、我が地方に伝わる伝統的な髪型なのだ。これは天を舞う龍の姿を模したもの。戦士はみな己が身に龍を降ろし、龍の化身として闘う」

「ボクも、それ、する!」

「うん、そうだな。それは止めておいた方がいい。君は女の子だろうか?」

「ボク、女の子？」

「わからないのか？ ご両親はどこに？」

「ゴリヨウシンはわからない」

「お父さんとお母さんのことだ。森ではぐれたのか？」

「オカアサン！ 知ってる！ オカアサン、暖かい！ でも、ウロネブリ、怒られた……」

「なに……？ 君は……いや……この気配……剉脈を感じない……。そう、か……。妖

魔か……」

「よーま？」

「ああ、いや……」

「ねー。今のもっかいやって！ あの、ばーんってやって、どん、ぼつくーってなるの

やってー！」

「……爆碎鉄拳のことか？」

「うん！ やって！ やって！」

何度も何度もせがむと、やがて男はとても悲しそうな顔をしてウロネブリの頭を撫でた。

「少女よ。名はなんという？」

「ウロネブリ」

「そうか。俺の名は王文臥おうぶんがという。……ウロネブリよ。すまんが俺もまた修業中の身。何も知らないお前を救ってはやれんのだ。……何を言っているのかわらんか？ まあそっとうらうな……。ウロネブリ、妖魔であるお前の役に立つとは思わんが、望むのならお前に功夫を教えてやる。俺にできるのはそのくらいだ」

「こん……ふう？」

「功夫とは生きる力のことだ。抗う技術のことだ。……わからんのか、ウロネブリ？ ただ生きているだけでは他のものに食われてしまうぞ。何もわからないまま、殺されてしまうだけだ……」

辛そうな顔の男に、ウロネブリはきよとんと首をかしげた。

しばらくの間は男がウロネブリのヒーローになった。一月はこの辺りに滞在すると言った男は、ウロネブリの寝床を訪れては功夫を、そして世の中のことを少しずつ教えてくれた。

男は江民族の出身で年は三十一。今は功夫を磨くために修行の旅に出ているのだと言う。

「老師の言いつけでな。武者修行の傍らファシナトウールの動向を探ってくるように言われている」

「老師って、強い？ オープンガーよりも強い？」

「老師は俺などよりも遥かに強いさ」

と、男は誇らしげに胸を張る。ウロネブリもにこにここと笑う。

「老師、格好いい！……格好いい老師、どんな人？」

「ああ。老師はな。お前と同じように小さな少女で、俺の妹だ」

「ええっ！ す、すごい！」

驚いたウロネブリはまだ見ぬ老師を想像する……と、想像の中の老師はウロネブリそっくりの姿をして、自分よりも遥かに大きな怪物を拳一つで打ち倒し、呵々大笑してみせる。想像上の老師に自分の姿を重ね合わせ、ウロネブリはうつとりと空想に酔った。

「その頃、俺達の村は邪悪な獣に襲われ滅亡に瀕していた……。だがその時、生まれたばかりの俺の妹が突如覚醒してな。昨日まではまだ毬つきなんぞをして遊んでいた筈が見事な功夫を使いこなし瞬く間に村を救った。それ以来、俺は妹に顔が上がらん。俺はとにかく強くなりたくて、その妹——つまり零老師に教えを請うているところなのだ。強いぞ、老師は。その拳は音よりも早く飛ぶ。俺もいつかはあの飛音の拳を体得したいものだ……聞いているか、ウロネブリ？」

「すごいぞお……すーぱーウロネブリ……」

ぼんやりと呟くウロネブリに苦笑して、男はぼんとその頭を撫でた。



こうして初歩の功夫を学んだウロネブリは少しだけ成長する。以前はただたどしかった会話も随分と上手になったし、森のハリネズミくらいなら一人で倒せるようになってきた。

でもあくまでそれは少しだけだ。何故って、ウロネブリは下級妖魔。妖魔にとつては格が全て。下級妖魔は格上の妖魔にはけして逆らえない。それは本当にどうしようもないことなのだ。

やがてまたウロネブリは独りになった。男は故郷に帰ると言い、ウロネブリはとうとう一緒に連れて行っての一言が言えずじまい。どうして言えなかったのだろうか？ 自分に自信が無かったからだろうか。男との会話の端々に、人間と妖魔は違うものだと言う言葉が見え隠れしていたからだろうか。

そもそもウロネブリは本当に男に連れて行って欲しかったのかも怪しい。今いる場所を捨てること、安寧や日常に背を向けてまだ見ぬ世界に飛び出していくこと。それはとても勇気のいることだ。

独りになったウロネブリは赤子のように体を丸め木の洞に横たわる。溢れ出る涙で

しとしとと大地を濡らし、母に甘える嬰兒のようにざらざらとした舌で樹の命を舐め上げる。

朝起きて、息を吸う。ぼんやりと太陽を眺める。鬱蒼と茂る木々の隙間に僅かに覗く太陽の熱が、ただ静かにウロネブリの全身を差しとおしていく。男に教えられたとおり、午前中はもっぱら呼吸法の鍛錬をしている。息を吸い、吐くという行為を飽きることなく繰り返す。口を通してでる息には二種類の息があるのだと男は言った。吸気としての天息、排気としての雨息。大切なのは体を巡るこの二つのバランス。右踵を上げ雨息を練り、印を組んだ指を突き出しながら天息を張る。そしてまたゆつくりと腕を引きながら雨息を戻し、踵を下ろしながら重心を落とす。男が教えてくれた呼吸法、功夫の基礎中の基礎の基礎。九くろはつけきけい炷八卦気形。この呼吸を繰り返すうちにやがて天息と雨息が脈鳴し丹田に稲妻となつて轟く。その稲妻の名を剽といい、武侠者はみなこの剽を全身に流して闘うのだという——が、ウロネブリはもちろんそんなことなどは知らない。ただ男に教えられたとおりやれば強くなれると信じていたし、きつと強くなれば何かしら良いことがあるのだと考えていたからだ。

もちろんそんなことはなかった。いくら修練を積もうと妖魔であるウロネブリには何の技術も身につかなかつたし、良いことなど何も起こりは無かつた。

妖魔は功夫を学ぶなどという『努力』をするべきではない。努力とは自らの存在を認

めることのできない者のすることだ。それは今の自分を否定し、未来の高みに立つ自分を現実にするための行為。そんなことをするのは自らに自身のないもの、誇りを持たない者だけだ。そんな風に見苦しい生き方をする者を、妖魔たちは美しいとは捉えない。蔑み、侮り、贄とするべき下等として扱う。

ウロネブリはいとも容易く支配された。

どうして、とウロネブリは尋ねる。すると誰かがこう答える。決まっているだろう。お前が下級妖魔で、私が中級妖魔だからだ。これからは私がお前の主人となる。お前は私のものなのだよ。

それは夏の日の午後だった。たまたま仲良くなつた子猫を追いかけて潜り込んだ茂みの暗がり。突然現れたその男は猫へと伸ばされたウロネブリの腕をゆつくりと踏みつけにしてそつと微笑みを浮かべた。とても暑い日のことだった。走り回つたせいであぜいぜいと肩で息をしながら、茹だるような暑さにさらだらとこぼした汗が不愉快な感触と共に首筋を滑り落ちていく。男はとても美しい顔をして、その美しい顔のまま恐ろしいことを言う。

——その子猫はお友達か何かかな？

——うん。猫のちーちゃん。今日、友達になつたんだよ。……ねえ、痛いから足をどけて。

——大切なお友達なのかな。

——うん。……ねえ、足を……。

——そうか。では、その猫を捕まえて捻り潰しなさい。

その理屈はとも簡単で、どこまでも明確にできていた。奴隷が持つべきものは主人への忠誠だけでいい。『大切なもの』など、あつてはならない。仮にあつたとしても奴隷にとつての大切なものとはすなわち主人のみを指す言葉でなければならぬ。男が語るのとはそういうことだった。

逆らうことはできなかった。本能がそうさせていた。体がびくりとも動かない。男に歯向かうという発想がどうしても浮かばない。恐怖に震えるウロネブリに男は優しく笑いかけ、さあやりなさいと言って足をどけてくれた。

ちーちゃん。弱々しく声を掛けると、懐いてくれた猫は何の疑いもなく近寄り、すばしっこくウロネブリの体を駆け昇る。その親しみが無性に嬉しく、そして憎かった。男の視線から避けるように猫を両手で覆い背後に隠そうとすると、男は素早くその腕を捕まえてウロネブリを叱りつけた。

——主人の言うことが聞けないのか。

——でも……。

言葉を濁したウロネブリの躊躇いを咎めるように男は巨大な掌で彼女の手を包みこ

み、ゆつくりと力を込めた。掌の中で猫の歪な鳴き声が聞こえる。小さな猫の体組織がみちみちと音を立てて潰れていくその感触が手の皮膚を喰い荒していく。

——あ……。

——どうして私の言うことが聞けないのかな。それはとても良くないことだ。いけないことなのだよ。

——お前は私に従わなければいけない。なぜならお前は下級で私は中級だからだ。妖魔という生き物はそういう風になってきているものなのだ。わかるだろう。

猫の名を呼ぶウロネブリの声が悲鳴じみて振れる。擦り合わせた指の隙間から穢れに満ちた血肉がぼとりぼとりと零れ落ちていく。

ウロネブリは絶叫した。



あなたがもし誰かを愛した時、その誰かは何年後に死ぬのだろう。一年は生きるかもしれない。二年先、十年先だつて生きてはいるだろう。……でも、どうだろう？ 時の流れの話をすれば、誰もがきつといつか死ぬ。あなたが愛したその人は三十年後にたぶん死ぬ。そうでなければ四十年後、それでもなければ五十年のち。迫りきる定めを奇跡

のように走り抜け人の命の限界に挑んだとて、百年過ぎれば塵となる。

時は経つ。形あるものはいつか壊れ、手に入れたものはいつか失う。世界はそのようにできている。あなたは誰を愛してもいいがこれだけは忘れてはいけない。あなたが愛したあの人は、いつか必ず死ぬものだ。どんなに大切なものができたとしても、いつかそれはなくなってしまう。だから——だから、それが嫌だと言うのなら、大切な人が死ぬ前にあなたが死んでしまえばいい。大切な人に何もかもを押し付け『それではね』と両手を振って別れを告げてしまえばいい。

そしてもし、それすら嫌だと言うのなら、答えは簡単だ。

深夜の森にひっそりと開かれた妖魔の夜会。誰もが神秘を囁る茶会、新しい妖魔の品評会。集まった妖魔たちはみな興味深げにウロネブリの眼球を覗きこんだ。馴れ馴れしく肩に手を置き、戯れに頬を張り、その新しい奴隷の反応をみて楽しんでる。

これが私の新しい召使、ウロネブリだ。どうかよろしく。そう言つて男がウロネブリの尻をぼんと軽く叩いたその時、僅かに入り込んだ中指の感触にウロネブリは背筋を震わせた。自分の所有物であることを示そうとするかのように男は盛んにウロネブリの全身を撫でまわす。

「いや見ての通りの下級妖魔、妖魔としての美しさも力も欠けた妖魔なのだが、あまりに

も愚か極まりないのが不憫でね、心の広い私は少しばかり教育を施してやることにしたのだよ」

誇らしげに胸を張り、男が笑った。主人が笑っている時は召使もまた笑っているものだと教えられていたウロネブリは慌てて作り笑いを浮かべてへらへらと媚を売る。

全会一致でウロネブリの評価は決まった。こいつは下級中の下級だ。

他を魅了する美貌。

他を威圧する恐怖。

何者にも屈しない誇り。

そのどれもがウロネブリには欠けていて、そんな妖魔には生きる価値などありはしない。

森を歩く時、通り過ぎる誰もがウロネブリを馬鹿にする。意味もなく殴るもの、唾を吐きかける者も少なくはない。上級妖魔であればある程度は節制のとれた反応をするものだがここは森の中。中途半端な下級・中級妖魔が犇めくこの場所ではあの恐ろしい針の城よりもかえって残酷な扱いを受けることになる。奪われたのは猫だけではない。ウロネブリが大切にしていたものはみんな取られてしまった。道端で拾った使いみちのわからない鉄屑やどんぐり、蜻蛉の頭蓋に綺麗なボタン。幼いウロネブリにとつては宝石のように輝くそれぞれは格上の妖魔たちが「こんなもの」と言つて捨ててしまった。

たとえばウロネブリが小さな桃花を見つけると、どこから飛んできたのだろうか。とても鮮やかな薄桃色をしていて皺が緻密にはしりこんでいる。綺麗だな、とウロネブリは思う……。そうして、そう思った誰もがするようにその花を掌にそつと載せ、穏やかな微笑みを浮かべながらころころと転がす。ウロネブリは何かを美しいと思う。何気なく落ちていた釘や謎めいた木片を手にとり、知らないどこから流れ着いてきたその物語に胸を躍らせる。

ボクの知らない場所。

ボクの知らない世界。

それはいったいどんな所なんだろう。どんなものが存在していて、どんな生き物が暮らしているんだろう。

胸に広がる不思議な感情にウロネブリが戸惑っていると、背後から現れた男が無造作に花を掴み取って握り潰してしまう。大切なものなどお前には必要ないのだよ。そう言つてウロネブリを地べたに叩きつけ、「ごめんさい」と百度言うまでけして離してくれない。

誰かを好きになつた時、何かを大切に思う時、誰もが浮かべる微笑みをウロネブリはいつか忘れてしまつて、その代わりに恐怖や後悔を覚えることが多くなつてきた。だつて仕方がないだろう。ああ好きだなと思つたその時にはもう、誰かに奪われることが決

まっってしまったているのだから。

暗い森の鬱蒼の砦、ちりちりと虫の鳴く闇夜の奥。固く握りしめられた少女の掌からは死骸。小犬に野栗鼠、ネズミに小鳥、零れ落ちる無数の死骸を前にして蹲るウロネブりは弱々しく背筋を震わせる。

ねえ、もう何が何だかわからないんだ。だって、みんながボクのことをばかだつて言う。ばかで、どうしようもなく、生きている価値なんかないつてそう言つて、……そして、どうもそれは正しいことらしいんだ。よくわからないけどなんだかボクにもそれが仕方がないことのような気がするんだ。ゴシユジンサマみたいな方には逆らっちゃいけない、ボクは下級妖魔だから頭を低くして生きていかなきゃいけない。どうもそういうものらしいんだ……。

オーブンガー。助けてよ。こんふーなんて役には立たない。妖魔は生まれついでのことだから全てで、今日生まれたら何もかもがずっとそのまま。ボクはずつとばかのままなんだ。

苦しいよ、オーブンガー。誰かにばかだと言われてごめんさいと謝らなきゃいけないのは、とてもつらいことなんだ……。

どうすればいいのか、わからない。

ボクは、ほんとうにばかなんだ……。

◇

さあ、物語の話をしよう。

ここに独りの馬鹿がいる。

どこにでもいる馬鹿である。平凡で知恵もなく気概がなければ意気地もない。精神薄弱ここに極まりこちらへと言えばひよいひよい誘われあちらへと言えば容易く攫われる。自らの命をどうこうするだけの意志を持たない人形仕掛けの下の下の妖魔。木陰を舐めるウロネブリ。

ある日ある夜産み落とされてちっちゃな手足を震わせたウロネブリはいつか妖魔の世界の掟を知ることになる。生まれ持つ力が全てであるこの社会においては努力など何の役にも立たない。

ウロネブリは逃がっている。息を切らし無茶苦茶に手足を振りだして森の中を駆けていく。だって仕方がないだろう。足を止めれば捕まってしまうのだから。

彼女は馬鹿だと誰もが言った。そしてそれは本当にその通りで言い訳のしようもなく、下級妖魔であるウロネブリは格上の妖魔に従わなくてはならない。けれども——いま、胸の内に隠しているリスだけは絶対に守らなくてはと思うのだ。だから必死になっ

て少女は走る。懸命に、力の限り――。

走って走って走り続けて胸が痛んで喉が掠れて、堰き止めていた想いと共に吐き出した吐息がゼエゼエと乾いた熱を帯びて唇を飛び出した時、ウロネブリはとうとう躓いてごろごろと転がる。鼻っ柱をしたたかに打ち付けてとろんと粘性を帯びた血を不細工に垂らしながらこみ上げる嗚咽を飲み込む。もう駄目だとウロネブリは思う。これ以上は走れない。どう足掻いても逃げられっこない。背後からの足音は見る見るうちに近づいてくる。やっぱり逃げられないんだ。どだい無理な話だったんだ。ボクはぼかで、のろまで、駄目な下級妖魔なんだ……。

ごめんなさい、と大声でウロネブリは言う。ぼろぼろと涙を流しながら膝を落として体を丸めた。胸に抱えたりスを誰にも見えないように両手で覆い隠した。手の中で儂くチーと鳴くそんなリスだった。駄目だよ、静かにして。焦る心を懸命に押し付けて深呼吸するウロネブリとは裏腹に手の中のリスはじたばたと暴れ始める。

――ウロネブリ。

低く、そして深く、淡々とした男の声が背後からじんわりと忍び寄ってくる。ウロネブリはぎゅつと眼を閉じる。

――またそんなものを愛したのか。馬鹿な子だ。そんなものは必要ないといつも言っているだろう。

尻の穴に爪先をぶちこまれるようにしてウロネブリは乱暴に蹴り飛ばされる。股間から脊髄にまで激痛が貫く。痛みに喘ぎながらごめんなさいとウロネブリは言う。亀みたいに縮こまって謝罪の言葉をうわごとのように繰り返す。迸る焦燥感と冷たい絶望。やっぱり駄目だ。駄目だ駄目だ駄目なんだ。この子はきつと見つかつてしまふ。こんなにも可愛いリスなのに、せつかく懐いてくれた子なのに……。きつと奪われて殺される。大切なものはすぐに無くなってしまう。

心が震えた。吐き気を覚えるほどの緊張が胸を渦巻く。悲しみに肺が痙攣する。

「い、や……」

慄きながら呟いたその言葉にウロネブリはいつの間にかに肩を強張らせ、リスを抱く両手に力を入れた。眼の奥が、そして掌が焦げ付くほどに熱くなった。するとどういうわけだろう、掌の中の子猫が不意に暴れるのをやめ大人しくなった。でもそれが何になろう。どうせ男には見つかつてしまったのだ。今さら動きを止めたところで……。

——ウロネブリ。さあ、手の中の獣をお出し。いつものように私が捻り殺してあげよう。

「う……。あ……」

びくびくと怯えながらウロネブリは眼を開ける。男の言葉には逆らえなかった。ただどうしようもなく怖くて怖くてたまらなかった。だから、ああこれでお別れなのだ

そう思いながらゆつくり手をどけ——そして、信じられないものを見るのだった。

「あれ……？」

——なんだ……？ そんなものを後生大事に抱えていたのか……？ 本当に愚かなヤツだ、どうしようもないな……。

男の言葉はもう、耳には入らない。両目を限界まで見開いてウロネブリは手の中のリスを見つめる。掌の中の、変わり果てたリスの姿を一心不乱に見つめ続ける。

直感的に理解していた。論理や理屈を超えてウロネブリにはわかった。それは自分がやったことなのだ。それは自分が持つ力なのだ。

リスは腐れて死んでいる。腐乱している。さつきまで元気に走り回っていたはずなのに、今ではぐずぐずに溶けて異臭を発している。白濁した眼球には得体のしれない粘菌が湧いて蠢いているし、抱えていた指の跡そのままにベリと音を立てて皮が剥がれた。黄色く変色した皮下脂肪は薄気味の悪い泡を破裂させ、粘つく体液を滴らせている。あまりにも醜く無残な死。だというのにウロネブリは凄惨な光景を目にしてかし、不思議なほど落ち着いていた。いやそれは落ち着きなどではなく、かといって現実逃避の誤魔化しでもなければ過剰なストレスによる感性の麻痺でもなく、もしあくまでもそれをその感情を解釈し言語化し説明しようとするならば、いたいけな小動物を腐らしめたこの少女の胸中に沸き起こる感情は曰く、安堵、であった。怯えていたのも

悲しんでいたのでもない。ウロネブリはほっとしていたのだった。

「これで良かったんだ」

思わず口に出していた。

「これで良かったんだ、ほんとうに……」

ああ、そうだ。だって心の底からそう思うのだ。これで良かった。何もかもが解決した。思い悩むことは何もない。最初からそうしていればよかった。

心がすうつと晴れていくのがわかった。体全体がトウメイになったような気がした。

「ああ……」

熱いため息をついてウロネブリは体を震わせる。全身を貫く官能によがり声を上げて身を振る。ああ——これでいい。

大切なものはみんな、いつか必ず奪われてしまう。だからそれが嫌だと言うのなら答えは簡単だ。自らの手で愛する者の息の根を。

好きなものは呪うか殺すか争うかしなければならぬのよ。世界のどこかで永遠の夜長を生きる姫君がそう言った。呪うか殺すか争うか。けれどもウロネブリならこう言うだろう。いいやもう一つ、腐食の答えが残っていると。

一枚の銅板に蜜蝋を丹念に塗りつけ、細長い針金で好きなように引っ掻いてみる。それから温めた腐食液——塩化第二鉄に銅板をゆつくりと浸す。25℃ほどに保ったま

ま一時間もすればそれでおしまい。蜜蠟の塗られた箇所はそのまま、けれど針金に蠟の除かれた線は腐れ、銅板の上にくつきりと顕れる。

腐食作用を利用したこの図法、またその絵図を腐刻画という。

この腐刻画の真理は選択である。選ばなかったものだけが形を変えずにそのまま残る。描きたいと思つたもの、残りたいと感じたものはみな腐らせて絵図にする。それが腐刻画の本質だ。

愛おしいものはみな、腐れ死んでしまえばよい。

この世のすべてを腐らせる腐敗の力。後に森の従騎士となるウロネブリの物語はこうして始まった。



微笑みを浮かべて生き物を殺した。出会いと別れを繰り返しウロネブリは下級妖魔としての暮らしに少しずつ慣れていく。

重たい尻をよちよちと振りながら歩くハムスターがいる。そのあまりにも可愛らしい姿に顔を綻ばせ、ウロネブリは手を伸ばした。可愛いな、と思つたのだ。胸がちよつとだけ切なくなつたけれど、でも平気だった。差し出した指先の匂いをふんふんと嗅い

で、ハムスターは見る見るうちに腐れていく。「さようなら」と小さな声でウロネブリは言う。ハムスターの腹に指を突っ込んで優しく内臓を掻き混ぜた。ちい、と微かな鳴き声を発してハムスターは痙攣し、すぐに動かなくなる。

腐り果てた死骸は生まれた場所に埋めた。森の外れ、木の洞の根元。腐敗という現象はいまある生物を分解し別の有機物にしてくれる。ハムスターもまたこの木の栄養になつてくれるだろう。たくさんの命を吸ってウロネブリの寢床はすすくと成長していく。

近頃ではゴシユジンサマに怒られることも随分と減つた。妖魔の社会でどう立ち振る舞えばいいのかも覚えてきたし、夜、ゴシユジンサマがウロネブリをどう求めているのかもようやくわかつてきた。

ウロネブリはへらへらとうすら笑いを浮かべるのが得意になつた。しかめつ面をしたり泣いていたりすると周囲の妖魔たちはみな「醜い」とか言つて余計にひどいことをするので笑つていた方がましなのだ。笑つてさえいけば殴られるだけで済む。殴つていればその内に相手も疲れてくるし、毒気も抜かれて飽きてくれる。そうです。ボクはほかでのろまな下級妖魔なんです。ゴミ同然、蛆虫以下のどうしようもないやつなんです。ごめんなさい。必死になつて仕えますからどうか殺さないでください。そういう顔をしていれればいい。そんな顔がウロネブリにはお似合いだ。

ある時針の城から黒騎士がやってきて、新しい侍従兵に志願する者はいるかと言って森に暮らす妖魔たちを集めた。針の城といえばあの恐ろしくも美しいお妖魔の君オルロワージュ様の住まう場所であったから森の妖魔たちはみな憧れていたけれども自ら手を上げるものはいない。侍従兵に名乗り出るからには自分の力を示さねばならない。それは目の前に立つ黒騎士と闘い、生き残らねばならないということだ。誰もが尻ごみし躊躇っていると、集められた妖魔たちの背後で「私がりります」と誰かが言った。現れた挑戦者に感心のどよめきが広がりさつと集団が分かれた、妖魔たちの視線が一斉に向けられると、そこに立っているのはおどおどと視線を泳がせるウロネブリだった。失笑が漏れた。もちろんウロネブリは一言も発してはいない。気まずい沈黙が続く中の子よつとしたユーモアのつもりで誰かがウロネブリのふりをしたのだ。こんな時に標的になるのは集団の中でも一番弱い奴、いつも苛められている奴と相場が決まっている。ウロネブリが恥をかくことで場が和むのならばそれでも良いし、勘違いしたウロネブリが黒騎士に挑んで殺されたとしても誰も困りはしない。

針の城から来た黒騎士はウロネブリを見て怪訝そうに顔を顰めた。

「…………お前がか？ ……まあ、俺は別に構わんが…………。とにかく前に出る」

「あ、あ、あのう…………ボク…………」

震えながらウロネブリはなんとか口を開いたが言葉が上手く出ない。あわあわして

いると黒騎士は鋭い眼でウロネブリを睨みつけ「早くしろ！」と怒鳴りつけた。

衆目に晒されたウロネブリは緊張のあまり変な咳をして、おっかなびつくり黒騎士の前に歩み出る。黒騎士はウロネブリの様子をじろじろと眺めまわしていたが不愉快も露わに舌打ちした。

「名は？」

「ウ、ウロネブリ……です……」

「お前のような奴が侍従兵だと……？ 針の城も舐められたものだな……」

その言葉を聞いてウロネブリはほんの僅かにほっとした。そんな風に馬鹿にされるのには慣れていたから、次に自分がどう答えればいいのかようやくわかったのだった。

「そ……そうなんです。へへ……。ボク、駄目な奴なんです……。勘違いなんです……。ごめんなさい……」

惨めにへこへこ頭を下げ、殊更に媚を売るウロネブリの様子に忍び笑いが広がった。ああこいつはやつぱり馬鹿だ、こいつは自分たちが馬鹿にしても良い存在なんだ、そういう了解の含まれた笑い声だった。

誰もがウロネブリを嘲笑していた。森の広場に集まった妖魔の中で笑っていないのは当のウロネブリと黒騎士だけだった。黒騎士は「……そうか」と低く呟き、ウロネブリの柔らかな腹を劍の柄で強かに打ちつけた。げえ、と耳障りな呻き声を上げてウロネ

ブリはくの字に体を下り、胃の内容物を地面にぶちまける。更なる笑いが広がる。黒騎士が言う。俺はお前のような奴が一番嫌いなんだ。消え失せろ。涙交じりにウロネブリは答える。ご……ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい……。呟きながら激痛に息が止まり、自分の吐瀉物にむせる。唇から涎を零しながら眼を真つ赤にして顔をくしゃくしゃに歪めて泣くウロネブリのあまりにも無様な姿にとうとう爆笑が弾ける。

——いや、何でしょうな、あの情けない顔は。

——あれでも本当に我々と同じ妖魔なのかねえ？

——そら、見たまえ、あの見苦しい姿を。悶えながら地べたを這う姿を。

妖魔たちは笑っている。痛みに泣くウロネブリを指さしてはげらげらと腹を抱えて嘲笑っている。その笑い声を聞いてウロネブリまでも懸命に表情を取り繕い、薄気味悪い媚びへつらいを張り付けて泣きながらへらへらと笑った。へ、へへへ、ごめんなさい……へへへ……。

誰もが笑っていた。嘲笑と侮蔑に酔い痴れていた。笑われている当のウロネブリまでもが笑っているのだからもうどうしようもない。

ウロネブリは馬鹿である。力がなければ誇りもない。意気地がなければ矜持もない。笑われるだけ笑われて言い返すことさえ出来ず自分で自分を笑うことしかできない馬鹿である。誰かがウロネブリを笑う。ウロネブリもウロネブリを笑う。だから馬鹿は

馬鹿なのだ。救いようのない、救う価値もない馬鹿なのだ。ここに独りの馬鹿がいる。馬鹿はいつだつて馬鹿のまま。特に妖魔はそれがひどい。生まれた時に馬鹿ならば死ぬまでだつて馬鹿のまま。笑われたつて仕方がない。どうしようもない馬鹿だから。

ここに独りの馬鹿がいる。独りの馬鹿を誰もが笑う。馬鹿は馬鹿で馬鹿なのだから、仕方がないことである。どうしようもないことである。——だから、もし、ここに笑わない者がいるとすれば、それはウロネブリと同じ馬鹿か、あるいはかつて馬鹿だつた者だけに違いない。

ここに独りの馬鹿がいる。そしてそれ故に、針の城からの使者——黒騎士セアトは森を揺るがす叫び声を上げる。笑うな！ その声のあまりの大きさに森は震え幾千幾万の葉を散らし、びりびりと大気が振動した。冷え切つた眼で集団を睨みつけたセアトは、ぎり、と奥歯を噛みしめ、腹の底からの怒りにわなわなと口を震わせるのだった。

◇

セアトは言った。

なぜ笑う。ウロネブリ。生きてることがそんなにおかしいのか。誰かに笑われ、嘲られることは楽しいか。そうして笑われることを笑い、笑われる自身を笑い、何もかもを知らないふりして生きていくつもりなのか。

……いちいち謝るな。俺は謝罪を求めているのではない。責めているわけでも咎めているでもない。

聞け。ウロネブリ。誰もお前を助けてはくれない。それは当たり前のことだろう。ここにいる連中は親愛の情も血の結び付きも持たないのだから。誰もお前を愛さず、誰もお前を認めない。世界は俺達のことなど何ら斟酌してくれはしないのだ。

お前だって本当はわかっているはずだ。こんな生活は嫌だと、苦しいのだと思っ
てい
るはずだ。そんな生き方が嫌なのなら自分の意志で抗わなければならない。他人の助けなどあてにしたところで、そんな時は永遠に訪れはしない。

……どうすればいいのか、だと。決まっているだろう。闘えばいい。思うがままに生きたいのなら、立ちほだかる全てを殺せ。

そんな眼をするな。弱音を吐くな。

ああ、そうだ。確かにお前は下級妖魔なのかもしれない。だがそれがなんだ？ 下級妖魔という言葉が何を指し示すのかお前は本当に知っているのか？ そんなものはただの言葉だ。誰かに言われたことをオウム返しに呟いて自らの存在を貶めることに、何故疑問を抱かない。仮にお前が下級妖魔だと言うのなら、それは誰かに下級妖魔だと言われて反論することさえ出来ないお前の負け犬根性がそうさせているのだろう。世界のルールがなんだ。妖魔の社会がなんだ。妖魔は生まれ持った力を変えることができ

ない？ お前にそんな馬鹿げた言葉を吹き込んだのはどこのどいつだ。妖魔の力。他を魅了する美貌。他を威圧する恐怖。何者にも屈しない誇り。眼に見える訳でもないそんなものが、生まれついで自分のにどれほど備わっているかなどどうしてわかる？

聞け。ウロネブリ。お前はお前を下級だと蔑む妖魔を全て殺さねばならない。お前がお前であることを否定しようとする存在をことごとく否定し、打ち倒さねばならない。そうでなければ、お前はこれからもずっとそのままだ。

泣くな。俯くな！

……ああ、そうだな。そんなことは無理だとお前は言うだろう。できるわけがないと。だが俺は言う。お前にはできる。なぜなら俺はかつてお前よりも醜く、弱く、そして愚かだったからだ。

聞いてくれ、ウロネブリ。俺はかつて生きる価値のないゴミだった。家畜にすら劣るような、命を搾取されるだけのモノに過ぎなかった。自分が馬鹿であることすら知らず、大切なものを奪われ、そして奪われたことにすら気付かずに忘れていた。ただ無為だった。いなくなろうが誰も困らない存在だった……。

だが俺は変わることができた。こんな俺でも黒騎士になることができたんだ。俺は俺を否定するもの全てと闘う。俺が俺であるために闘い続ける。だから……ウロネブリ。もしお前がこのままでいいと言うのなら、ここで死ね。そしてそうでないと言うの

なら、俺と共に闘え！

黒騎士セアトの言葉を聞き終える頃にはもう、ウロネブリは溢れ出る涙を隠そうともせず、顔を鼻水と涙でぐちゃぐちゃにして泣いていた。

なれるかなあ、とウロネブリは言う。涙に濡れ、ひどくぐもった声で不安そうに尋ねた。

「なれるかなあ……？　自分のなりたいものになれるかなあ？　ボク、ともだちが欲しいんだ。ひとりでいるのはもう嫌だし、誰かに頭を撫でてもらって、良くやったねって言って欲しいんだ……。頑張れば、ボクにもできるかなあ……」

できる、とセアトは答えた。だからウロネブリは僅かに顔を紅潮させ、恥ずかしそうにおずおずと、上目遣いで言う。

「セ、セアト……くん」

「くん？　おいなぜ君づけなんだ」

「セアトくん……すきー！」

言い放つや否やいよいよ顔を真っ赤にして、ウロネブリはセアトにひしと抱きつく。

それは大いなる茶番だった。黒騎士の名にそぐわないセアトの感情的な言葉に、群がる妖魔たちからは隠しきれない笑いが再び広がった。

おやおや、と誰かが言う。

「これはこれは、とんだ台詞もあつたものだ。黒騎士様の仰る言葉とは思えませんなア……」

「……何か、おかしいか？」

険しい声で尋ねるセアトに、一体の妖魔が歩み出て答える。

「もはやあなたには『格』を感じない。そういうことでございますよ。どうやらオルロワーージュ様の眼も時には曇られることもあるようですな。……いやいや、何です？」

『こんな俺でも変わることができた』。『だから闘え』ですと？ はは、お涙頂戴もいいたころだ。あなたは可哀そうな少女を救うヒーローにでもなるつもりなのですか？

笑わせないでいただきたい。我ら妖魔は支配のためにのみ生きるものだ。自らの尊厳を求めて生きるなど、惨めなヒト種族のやることではありませんか」

「黒騎士のこの俺に逆らうつもりか……？」

「あなたは確かに黒騎士だったかもしれない……。だが、今は違う。あなたは墮落した。あなたは妖魔としての誇りを忘れ、ヒト種族がのたまうあの『努力』とかいうお題目に毒されてしまった。……よもや、我々がこれまでのように大人しく従うとは思いませんまいな？」

「そうか。まあ、いい……。丁度俺も考えていた所だ。お前たちは俺の求める妖魔では

ないからな……！」

「今のあなたには何の畏れも感じない……。この数を相手に単独で勝つつもりですか？」

「お前たちにどう思われようと知ったことではない……が、この阿呆がただけ言っておこう。お前たち程度、もの数ではない。……だいいち、話を聞いていなかったのか？

闘うのは俺ではない。ウロネブリだ」

「ウロネブリ！」傑作な冗談を聞いたように妖魔は身を振る。「まさかそのゴミ妖魔が我々に勝つと？ 邪妖にも等しいこの下級中の下級妖魔が？」

セアトの腰に縫りついていたウロネブリはその嘲笑にぎゅつと拳を握りしめるが、セアトの次の言葉にはつと顔を上げた。

「それを決めるのは俺でもなければお前たちでもない。……そうだな？ ウロネブリ」

「あ……う、うん！」

「これから先のこととは誰も知らない。ここで死ぬか、生き延びるのか。お前が決める」

うん、と言つてウロネブリは考える……。ひどいことを言われているのだと心の底から思う。どう考えたって勝てる訳がない。恐る恐る顔を上げてじりじりとにじり寄ってくる妖魔たちを盗み見る。どうみても二十体以上いる。これだけを相手にして勝て、とセアトは言う……。それは死刑宣告と何ら変わらないのではないだろうか。死ぬ、と

言われているのと同じことではないのか……。ウロネブリは考え、そして怖気づく。体中がガクガクと震えだし、恐怖に顔が真っ白になつていく。視線が泳ぐ、足が竦む……。けれども……。

黒騎士セアトがその大きな掌をウロネブリの頭に載せた。柔らかな、そして温かな感触がじんわりと広がった。それ以上の言葉はなかった。うん、と言つて、ウロネブリは考える。できる、とセアトは言つてくれた。自分に何ができるだろう。それは生まれて初めて受け取つた信頼の言葉だった。可能と成功を保証する言葉だった。心の底から望み、そして得ることのできなかつた数々のもの。あの温かなオカアサン。功夫を教えてくれた王文臥。りすに野ネズミ、小鳥に子猫。みたことのない世界。じゆう。ともだち。もしかしたら今日、自分は死ぬのかもしれない。しかし今日と言う境界線を踏み越えたその先の時間には、ウロネブリの熱望する世界が待っているのではないか。それならば……。

無意識に息を吸つて腰を落とした。小さな掌を柔らかに開き、軽やかに構える。内腑に天息、手足に雨息。巡る呼吸の螺旋形。胃の底で深く、ぼちりと弾けた剉を血流に載せ爪に集める。見様見真似の拙い功夫をしかしウロネブリは臆すことなく、ただ自分のできることを自分にできるままそつと吐きだしていく。

言う。

「くもん・こけい・らでんそう……」

九門・虎形螺鈿爪。ありし日に見たヒーロー、王文臥が一撃のもとに熊を倒してのけたあの技。王文臥は言った。いつかは音を超える。飛音の拳を手に入れて見せると。それがいつのことなのかはわからない。だが自分にとつては——それはきつと今でなければならぬのだ。嘘と知りながら呟いていた。ボクの拳は音よりも早く鉄をも砕く。そうでなければならぬのだと。だからウロネブリは叫んだ。飛音！
フエイオン

「飛音、爆碎鉄拳！」

叫び、大地を叩いた。僅かな発勁は手足を離れた途端に霧散する。何も起きなかつた。それは功夫のカタチさえなしてはいない児戯だった。ウロネブリはただ腰をゆくりと落として地面を殴りつけたただけだ。だから爆碎鉄拳というのはつまるところ虚仮威しに過ぎなかつたし、ウロネブリの言葉はみつともないハツタリに終わった。馬鹿馬鹿しい、と誰かが言った。指を指して笑われる。それでも恥ずかしいとはもはや思わなかつた。たじろぐ理由を何一つ見出せない。ウロネブリは生まれて初めてその大きな瞳を見開き相手を睨めつける。腐れ、と腹の底から叫ぶ。

擦り？けた拳で大地を感じる。

この功夫が嘘であつても構わない。

ウロネブリの毒は間違ひなく地を這い、森を刻もうとしているのだから。

腐れて消えろと絶叫を上げる。ふるふると森が震える。どこからか強い風が吹く。木々は枯れ、醜く膨らんだ枝を瞬く間に菌糸が覆う。ぱふりと可愛らしい音を立てて破裂した胞囊から無数の胞子が吐きだされ、雪のように天から降り注ぐ。

そして空間は呪詛に満ちた。溢れる胞子が触れるもの全てを腐らせていった。言葉を失う妖魔たちを抱いて森はひっそりと死に包まれていく。

その日、ファシナトウールの黒字森は一夜にして滅び、腐れの毒に蝕まれた樹木が再び元の姿を取り戻すまで五百年を要した。

これが黒騎士セアトに仕える森の從騎士ウロネブリの初陣であった。

幕間　あまりにも弱き毒婦

その劍の名は萼ウテナクロス十字といった。

美しい劍であつた、と記憶している。上級妖魔であれば誰しもが一振りの劍を携えているものだが、それでも針の城一優しいお方だと噂される白薔薇姫が他者を滅ぼすための武器を片時も離すことがなかつたというのは不思議なことのようにも思えた。実際、どこへ行くのにも白薔薇姫はその劍を持つていた。武器と云う存在が己の美しさを損なうことを嫌い、別の空間に隠し持つ妖魔も多い中、それでも彼女は依然としてその十字を帯剣していた。劍の美しさがそうさせたのかもしれない。その劍は白薔薇姫の美しさを一層引き立たせていた。その名の如く花を支えるための萼として。

柄元に奔る十字の緑鍔、美しく咲いた刀身。白薔薇姫の細腕が振るうつるぎ、萼十字。彼女が根つこの町へと訪れるたび私の眼は吸いつけられるようにその劍を追つた。妖魔としては浅ましいことだったかもしれない。けれども私には妖魔としての矜持や規律などはどうでもよいことのように思えた。ただ私が思うのはたった一つのことだけだ。

美しければそれでいい。

私は美しいものが好きだ。妖魔だからそう思うのかもしれない。妖魔の世界には、そして妖魔たちの間には美しいものが多くある。私はそれが嬉しい。美しいものはいつまでも見ていたいし、出来ることならば更に美しくしてあげたい。そう考えた私はいつの間にかに根つこの町に仕立屋を構え、妖魔の貴族たちに妖美なる衣装を仕立てて差し上げることに夢中になっていた。私は名もない下級妖魔、蜘蛛の妖魔^{あめかね}、針の城に住む方がたはゴサルスや私たち職人を蔑視している。妖魔は努力や向上心を否定するものだからそれは仕方のないことかもしれないが、私の衣装を身に纏う妖魔の貴族様がかしその衣装を仕立てた私のことをどう思っているのかと考えると少しだけ悲しくなることがある。……でも私は私であって、その性分や感性を変えることはできない。私は好きで仕立屋を営んでいるのだ。私は私だ。……この「私は私」という言葉は、近頃店によくいらつしやるようになった黒騎士イルドウン様の口癖がうつつたものだ。イルドウン様は自我のとても強い方。頑なで、硬質で、そしてとてもまっすぐなお方。イルドウン様ははじめ「なぜわざわざ他者の服をつくるのか」という顔をしていた。他者を美しく飾るという考えにはまるで共感できないようだった。彼は彼のためだけに存在している。誰かのためだとかそんなお為ごかしを妖魔の中でも特に嫌っている彼は、しかし何故だが私の店に度々訪れては店の服を褒めたりけなしたりしている。最初の内は「なんだか不気味な方」と警戒していたけれどやがて単に私の服を気に入って

れたのだとわかった途端、イルドウン様への親しみが急に湧きだして私は自分でも戸惑ってしまった。本当に変わった男。

——それで、イルドウン様？ 今回の服はどのようにいたしましたでしょうか。

——そうだな。夜に似合う服をくれ。

——はあ……。

彼の注文はいつもひどく雑だった。曖昧で感覚的な言葉に私はいつも頭を抱えたものだったけれど、そうして悩むことですらも私にはどこか楽しかったのかもしれない。針の城の貴族たちの中で、自らの足で根つこの町で降りてくる者は珍しい。中でも黒騎士セアト様は他者に認められようと努力する者にも比較的優しく、ゴサルスなどにはとても慕われていたけれど、私にとってはどこか野卑な印象を受けるセアト様よりもイルドウン様の方が好ましく思えた。

ある時私の仕立屋に一人の新人がやってきた。風呂敷包みを背負った幼い少女で、名はジーナと言った。どこの田舎娘がやってきたのかとからかい半分に眺めていると、思いのほかよく働く。きちんと周囲に注意を向け、いまやるべきことを考える。勤勉で怠けることを知らず、家族を養うため懸命に生きている。私はすぐにジーナのことが好きになった。いつそ食べてしまおうかと考えたことも一度や二度ではない。『残念だけれどもあなたにはデザインの才能がないわ』と告げるとジーナは一瞬泣きそうに顔を歪

め、けれども気丈に唇を引き締めて『それでも、私は働いていかなければなりませんから、ここに置いてください』と頭を下げた。謝る必要など何もなかった。彼女は必要人間だった。たとえ独創性や閃きに欠けていようと彼女の堅実な裁断や繊細で正確な針仕事は私の仕立屋に無くてはならないもの。私は私の持てる技術全てをこの子に叩きこむことにした。

イルドウン様とジーナ。彼らに囲まれた私の生活は穏やかで平和だった。掛け替えのないものであり、けして失ってはならないもののはずだった。だから——だから、妖魔の君オルロワージュ様に恋をして、その恋に敗れた時、私はこの二者のことをまず考えた。

仕立屋に顔を出したイルドウン様といつもものように何気ない会話を交わしながら、私はなぜと考える。なぜ私はこの男を愛さなかったのだろう。彼のことが好きだったし惚れてしまっても何も問題はなかったはずで、とても近い彼のことよりもなぜ一目会っただけのオルロワージュ様に惹かれてしまったのか私にはわからなかった。オルロワージュ様を好きになってしまったの、と伝えた時、イルドウン様は静かに『……そうか』と答えた。

——何も言つてはくさらないの？ 私はどうしたらいいのかしら？

——自分で言うすべてのことは、自分自身で決めることだ。他者の意見になど左右さ

れてどうなる。

——そう。……あなたなら、そう仰るのでしょね。

そうして、彼は今日もまた私の店に訪れる。何があつたか聞かないのだろうか。私の恋がどのような結末を迎えたのか何故尋ねないのだろうか。私が今もこの仕立屋にいる以上、その結果は聞かずとも彼にもわかる。でも……。慰めの言葉？ そんなもの、求めていたわけではないけれど……。

愛していますと私は言った。このファシナトールを支配する王、妖魔の君オルロワージュ様に気持ちを告げた。けれどもその想いを受け取って頂くことはできなかった。だから、私はもうこの星にはいられないのだとそう思った。後に残していくジーナのことを思うととても心苦しい。彼女の技術はもう十分なものになっていたけれど、だからといって経営までこなせるわけではない。長い時間をかけた考えた結果、妖魔ではなく人間の親方を彼女のために招くことにした。愚かではあるが実直で腕のある職人だ。きつとジーナのことを大切にしてくれるだろう。

美しいものが好きだった。けれども私は、自分自身がそう美しくはないということを知っていた。下級妖魔。力も美貌もそこそこの存在。中途半端で、服を仕立てることしかできなくて……。

私はファシナトールを飛び出して色々な星を見て回った。自暴自棄になっていた

のかもしれない。旅の果てに野たれ死んでしまえばそれで運命のカタがつく。投げやりで、いい加減な気分。私。私は何だろう？ 妖魔とは何だろう？ この思いが叶わないのなら、妖魔であることに何の意味があるのだろうか？ 色々なことが分からなくなつた。世界を旅してまわっていると星によつて美的感覚が異なる。『美しさ』というものはその土地の文化に左右される。だとしたら私が今まで美しいと感じていたことは何だったのだろうか。これまで積み上げてきた価値観が音を立てて崩れ去っていく。美しいとは一体何を指すのだろうか。中級だとか上級だとかいう言葉は、誰が定めたものなのだろう。そう考えたその時に私の手には一枚の紙が握られている。紙にはこう書かれている。『力が欲しくはありませんか？ 今の自分が好きになれない方、もつともつと自分を好きになりたい方。私たちと一緒に新しい人生をエンジョイしませんか？』

——秘密結社ブラッククロス ※資格・能力に応じて昇進制度アリ。君も目指せ四天王！』

馬鹿馬鹿しい、と鼻で笑いながらも私の心はもう決まっていた。もうどうにでもなれと思つた。



数年後、私は大都市マンハッタンで貿易会社を経営する女社長、シンディ・キャンベルとなっていた。裸一貫からなりあがるという言葉から想像するほど難しいことではなかった。資本の大部分はブラッククロスが担っていたし、利潤を求めることよりは裏の取引に協力することの方が重要だったからだ。

ブラッククロスに参加した当初、私は思ってもみない歓迎を受けた。いまの四天王には妖魔が欠けており、そこに私が加わることで調和が保たれる、ということらしくった。戦闘員や作業員を飛び越えていきなり四天王という話には流石に驚きもしたけれど、組織の参謀役であるドクタークラインは熱い口調で私に改造手術を勧めた。

——それで、餡鐘君。身上書を拝見させてもらったが、君はファシナトールで仕立屋を営んでいたというのは本当なのかね？

——ええ、まあ。

——それは本当かね？

——？ ええ、本当ですわ。……どうしてお疑いになるの？

——しかし妖魔は機械に弱いというだろう。仕立屋と言っても、裁断機やミシンを使用する必要はあるのではないかね？

——ひと口に妖魔と言っても千差万別というものでしょう。確かに私も機械が大得意というわけではありませんが、他の妖魔に比べれば慣れている方だと思えます。

——そうか。それはいい。実にいい。

——何故ですか？

——私はちやうど、今までにない技術を考えたところなのだ。その技術はメカと他種族とを融合させるもの。メカでないものにメカの精密さと生命知らずの力を与え、メカには命が持つ心や技術を与える。四天王には妖魔が必要だ。だから私は妖魔にメカの力を与えることで新たな四天王にしようと考えた。……ところが、下つ端の妖魔ときたらどいつもこいつもメカ音痴ばかりで話にならん。頭を抱えているところに君が現れたというわけだ。

——私、そんなに役に立ちますかしら。

——勿論だとも。君は自分で気づいていないだけなのだよ、自らの特異性にね。メカを扱うことのできる妖魔、その個性は素晴らしいものだ。

——……そうかしら。……私、そんなにすごいものかしら……。

私はドクタークラインの勧めに従ってメカ音痴矯正手術を受け、全身の四割を機械に変えた。これが私の新しい価値なのだと思った。私だけの、この世界に私と言う名の女がいる意味。機械を操る妖魔、悪の組織ブラッククロスの四天王、毒のアラクネ。

会社の経営は順調だけれども、女社長であるからにはいつでも忙しい。朝起きて、膨大な電子メールの中から重要なものだけをピックアップして目を通す。メイドのつ

くつた朝食を摂る時も、運転手の操る車で会社へ向かう時もずっと。到着した後は秘書に今日の予定を確認し、会社の数字をざっと頭に入れ、必要であれば各部署に指示を入れる。午前一杯はたいい会議や報告を聞くだけで終わってしまおうし、午後は午後であちらこちらに飛び回っては様々な人間に会わなくてはならない。ようやく夜がやってきたと思つても、女社長である私には連日の夜会や催しが待ち受けている。マンハッタンにおけるレディ・キャンベルは大会社の長であり、ファツションリーダーであり、マスコミヤや芸能界にも巨大な発言力を持つ存在だ。一瞬たりとも気を抜いてはいけない。たとえ今は貿易会社の社長であつたとしても、悪の組織の幹部であつたとしても、私が女であることは変わらない。私は美しくありたい。美しくない私を美しく飾っていたい。……だから、私はどんな時でも一分の隙もなく着飾つて人々を魅了する。マンハッタンの才女、都市が生んだ美のカリスマ。それが私。

誰かに褒めそやされることは、なつてみれば案外簡単なことだつた。ここは妖魔の世界ではない。人間の住まう世界なのだ。誰もが私の美しさを湛えてくれる。ここでは私の美しさが保障されている。ああ、これでいいのだわ。きつと、私はこういう暮らしを夢見ていたのだわ。そう思つて自室に拵えた豪華な鏡を眺めると、時おり鏡の中の世界には懐かしい過去の世界が映る。ファシナトゥールで暮らしていた頃の、力もなく名誉も持たない私。名無しの下級妖魔であつた私。小さな鉤針を繰りながらジーナと一

緒に笑っている。時々イルドン様がやってきて、仏頂面でカウンターに腰かけてはぶつぶつと文句をつけたりしている。今の私とは違う。私は過去を懐かしむ。過去を懐かしみながら、そうして同時に少しずつ過去を忘れていく。これでいい。これでいいのだわ、きつと。

◇

ファシナトウルにいたころ、上級妖魔であるゾズマ様のことはそれほどよく知っていたわけではなかった。一度か二度みせにいらしたことはあったけれど、とりたてて記憶に残る会話を交わしたわけではないし、だいいち彼は追手から隠れるために仕立屋を利用したに過ぎなかったからだ。けれども、私がファシナトウルを離れてからゾズマ様との付き合いは急激に増えていった。どこから聞きつけたのだろう、私がマンハッタンで貿易会社を始めると言う話を聞きつけ、薔薇の花束を抱えてやってきた彼は『しばらく匿っておくれよ』とあつかましい頼みごとをする。

——それは……まあ、構いませんけれど……。よく、私だとお分かりになりましたね。

——おやおや、本気で言っているのかい？ 根っこの町の小さな仕立屋、キャンディーベル。あの店は妖魔貴族の中でもそこそこ評判の良い店なんだよ。名前を変えなくても、もうちよつと捻りようがあつたと思うけど？

——私にも、捨てきれないものというのがありますから。

——ふうん？　なんだか面白そうだな。僕はちよつと人間の世界でやりたいことがあつてね。しばらくは君のところへ厄介になろうと思つてゐるんだ。なあに、迷惑はかけない。その代わりと言つてはなんだけれど、ちよくちよく君にもファシナトゥールの情報を伝えてあげるよ。僕は情報通なのさ。

——ファシナトゥール、の……。

——君だつて元はファシナトゥールの住人だろう。古巢の話の一つや二つ、興味はあるんじゃないのかな。

——あの……。

——うん？

——……ジーナは……ジーナは、元気にしていますか？　新しい親方のもとで、苛められたりしてはいませんか？

——ジーナ？　……ああ、仕立屋のところの人間か。うーん、まあ、あまり詳しくは知らないけど、元氣そうだったよ。

——そうですね。良かった……。本当に良かった……。

——……おかしな妖魔だな、君は。人間のことなんて気にしてどうするのさ。本当はもつと聞きたいことがあるんじゃないのかい？

——どういう意味でしょうか？

——それはたとえば、ファシナトウールの誇る妖魔の君、魅惑のオルロワージュのこ
ととか、孤高の黒騎士、イルドゥンのこととかさ。ジーナのことはともかく、彼らの話
ならたくさんあるんだ。何しろ、オルロワージュが血を与えた人間がとうとう目を覚ま
してね。……ほら、君の所に毎年イルドゥンが衣装を注文しに来ていただろう？ あの
衣装の持ち主のことだよ。その人間の名はアセルスと言つてね、面白いことにイルドゥ
ンが教育係を任されることになったんだ。それで……。

——ごめんなさい。聞きたくないわ。

——そうかい？ なんだか辛そうな顔をしているね。悪いことをしてしまつたかな
？ ごめんよ。でも君が聞きたくなつたらいつでも僕は答えてあげる。君が、本当に、
心の底から知りたいと言えるようになったその時はね。

——……そんな時は来ませんわ。私はファシナトウールを出てここへ来た女ですの
よ。私は私、今ここにいる私は、マンハッタンのシンデイ・キャンベル……。

——おやおや。

そうしてニヤニヤと笑うズマ様を見て、やはり私はこの男が好きになれないと感じ
た。口数の多いこの男を見ていると、黙つてばかりいたあの方のことばかりが思い出さ
れて辛くなる。

正義のヒーローアルカイザーの噂が流れ出したのも丁度この頃だった。その噂を秘書から聞いた時、私は最初何の冗談だろうかと思った。正義のヒーロー？ そんなものはTVやコミックブックの中にしか存在していないものだと思っていたのに。悪の秘密組織の、しかも幹部にまでなっておきながら私は自分の敵が何なのかまるでわかっていなかったのだ。私はそれまで、ブラッククロスはクーロンの闇組織やトリニティ軍と敵対しているものだと思っていた。敵対組織というのは、だって、そういう言葉だもの。組織。集団であるもの。ブラッククロスは悪の秘密組織であって、それに敵対するものはといえばそれもやはり「組織」に他ならないのだと。

でもそれは大きな勘違いだった。正義のヒーローなどというどう考えても馬鹿馬鹿しい存在がこの世には実在している。「正義」などという抽象的で非現実的な理念を堂々と掲げ、それもどうやら単独で活動している。動画サイトに投稿されたヒーローの目撃映像を眺めている内に、「おかしな人もいたものね」と思わず独り言が零れる。「どうしたんですか、社長？ そんなにぼおっとしたりして」

秘書のチャン・ジイがにこにここと笑いかけてきた。栗色の髪をした目つきの細い狐顔の娘。胸元の大きく開いた華美なスーツを身に纏い、いつも男受けのする化粧をした秘書。

「だって、正義のヒーローなのよ。そんなものが本当にいるだなんて誰も思わないで

しよう」

「マア、社長ったら。ブラッククロスの四天王ともあろう方がそんなこと仰って良いんですかあ？ 私たち、これでもいちおう悪の組織なんですよ？」

「すっかり忘れていたわ。この動画を見て私、ようやく自分が悪者なのだと思いだしたところなの」

「もう、社長！ しつかりしてくださいよ！ せっかく正義のヒーローさんが出てきてくれたんですもの、いよいよ私たちが悪の悪たる力つてものを見せ付ける時じゃないですか！」

「なんだか随分と嬉しそうですね」

「ええ、嬉しいです！ ライバルが出てきた方がガゼン燃えますもんー」
「そんなものかしら」

熱心にヒーローの魅力を語るチャンに付き合っている内に、次第に私もアルカイザーに興味が湧いてくる。一体彼はなんのために正義のヒーローなんていうものをやっているのだろう。仕事の合間を見つけては少しずつ彼の情報を集めてみる。

シユライクで誘拐されかかっていた女兒を救った。ハイジャック犯人から星間船を守った。都市に蔓延る悪を退治する不滅の皇帝、アルカイザー。市民たちは盛んに彼を褒めそやし、近く市長から特別名誉市民に勲章を与えられる日も間近だとか。

「……なんだか馬鹿みたいだわ、本当に」

「とかなんとか言つて社長、毎日アルカイザーの動画ばかり見てるじゃないですか」

「それは仕事だもの。仕方がないわ。もし仮にアルカイザーが本物のヒーローであれば必ずや私のもとへ現れることになるでしょう。その時のことを思えば情報を集めておいて損はないはずよ」

「そのことなんですけど、社長。私すつごく良いこと思いついたんですよ！ あのですね！ アルカイザーがこのビルに来るじゃないですかあ。そしたら私がですね、こう……エレベーターガールの振りをしてですね、あなたのファンです。受け取つて欲しいものがあるんです」といつて爆弾を渡すんです。どうです？ ナイスアイデアじゃないですか？」

「いくらヒーローでもそんな怪しいものは受け取らないんじゃないかしら」

「受け取らなかつたらそのまま爆弾投げちゃえばいいじゃないですか。ペツキペキの力ンペキですよ」

「そういうものかしら。あなたすこし馬鹿だから心配だわ」

「えー、ひどーい。そんなことないですよ。……あでも、問題があるとすればあるんですよ。ちよつと考えてみたんですけど、もしヒーローさんが素直に私を信じてくれたなら、その時は私嬉しくなつて役に立つ武器とかをあげちゃうかもです」

「……あなた、よくそれでブラッククロスなんかやれるわね」

「だって、悪でも正義でも、誰かに信じてもらえたらそれは嬉しいじゃないですか。誰かに信じてもらえたら、その人のことだって応援してあげたいじゃないですか」

「どうして？　だってアルカイザーは私たちの敵でしょう。悪の組織にとつての正義のヒーローというのは、つまるところは死神と大して変わらないのではないの？」

そう言つて、私は少しはつとする。死神？　……そう、私にとつて、アルカイザーは死神なのだ。自らの罪を罰するもの。自らの存在を糾弾するもの。……いつか、私の前に正義の味方が現れる。私の生き方や私の行動の全てを否定して、お前は間違っているのだと高らかに告げるために。その時、私はどんな顔をしているのだろう。憎しみや怒りを抱いて、歪んだ表情を浮かべているのだろうか。迫りくる死に脅え、惨めったらしく涙を浮かべているのだろうか。それとも……。



アセルス、という娘のことはゾズマ様から聞かされていた。彼女のことを話す時のゾズマ様はいつも楽しそうで、後ろに控えている仮面のメイドがその度に悲しそうな眼をするのが印象的だった。

トリニティのラムダ基地から逃げ出してきたアセルスのことをしばらく匿って欲しい、というのが今回のゾズマ様の頼みだった。針の城からも人間達からも追われるアセルスには行くところがない。それならば妖魔の社会とも人間の社会とも異なる悪の世界でならば少しは落ち着くことができるかもしれない、というのが彼の言い分だった。理屈のほどはよくわからないけれどオルロワージュ様の血を享けたというアセルスには以前から興味があつたし、あの白薔薇姫も同行しているという話を聞いて会わないわけにはいかない。

初めて会つた時、アセルスはひどく丁寧に頭を下げて「ご迷惑をおかけしてすみません」と言った。針の城から逃げ出したという話から随分と気性の烈しい性格を想像していた私としては拍子抜けする思いだった。……これが本当に妖魔の君の愛し子？ 礼儀正しい、普通の子のような気がするけれど……。

「ゾズマ様から話は聞いています。何か必要なものがありましたら何でも仰ってください」

「いえ、お世話になるのはこちらの方ですから。むしろ、私にできることがあれば何でもします。下働きとか、キャンベルビルの掃除とか、何でも構いませんから言いつけてください。それで家賃や生活費の足しになるかは分かりませんが……」

「……そんなことはなされなくていいのですよ。アセルスさんはお客人ですから」

「そういうわけにはいきません。生きるからには働かなければなりませんから」
「生きるからには……ですか？」

その物言いに引つ掛かるものがあって、私はアセルスをまじまじと眺めた。着ている服はどこか薄汚れ、あちこちが解れている。けれどもその服は——その深紅のラークューズドレスは確かに見覚えのあるものだった。それはジーナが毎夜毎晩少しずつ少しずつ仕立てていったもの。お城の若君のためにあの子が真心をこめて針を通したものだつた。

「ああ……そうでしたね。あなたは——あなたのために、針の城からは毎年衣装のご注文があつたのでした。イルドウン様がその度にしかつめらしい顔をして、私にはその顔が懐かしい……。あなたにそのドレスを手渡した時、ジーナは元気にしていましたか？」

「ジーナの、お知り合いなんですか？」

「お知り合いも何も」と私は少しだけ笑う。「私はあの仕立屋のオーナーだったのです。ジーナに針仕事を教えたのは私です」

「そうだったんですか」

「ゾズマ様から時々話を聞いてはいたのですが、やはり他の方にも確認しておきたかつたのです。ジーナは健康ですか？ 新しい親方のもとで苛められたりはしていません

か？」

「それは、大丈夫だと思います。実際に会っていたのは三年前までのことですが、とてもいい子でした。しつかりしていて……」

「そうですか」思わず声に大きくなって、私は自分でも驚くほど安心していた。「それは、良かった……」



親愛なるジーナへ。

お元気ですか？ 新しい生活を始めるにあたってあれやこれやと慌てている内に、前回の手紙から随分時間が経ってしまいました。ごめんなさい。

なぞのメイド仮面がいきなりやってきて私からの手紙を渡されたのでとても驚いた、というあなたの話を読んで思わず笑ってしまいました。

よくわかります。

私も初めてあの人（妖魔？）を見た時は目を疑ったものです。

その時は少し忙しい状況だったので深く追求する余裕もなかったのですが、

すごいセンスをしているなあと未だに思います。なにせメイド仮面ですから。

彼女は上級妖魔であるゾズマに仕えているメイドさんなのだそうです。仮面をつけている理由はさっぱりわかりませんが、

物腰はとても柔らかで話してみると案外まともな女性でした。

あなたと手紙のやり取りができるのも彼女のおかげなのでとても感謝しています。

前回手紙を書いた時はまだ星間船の中、住む場所も行くあてもない状態でしたのであなたに心配を掛けてしまったようですが、

ご安心ください。なんとか落ち着くことができました。

といつても、お恥ずかしながら自力でというわけではなく、例のゾズマとメイド仮面さん（なぞの）の紹介でなんとか仕事を見つけたという所です。

いま、私はマンハッタンのキャンベルビルで清掃員をしています。

マンハッタンに住んでいる妖魔のキャンベルさんとゾズマが知り合いだったので、そのツテです。

キャンベルという名前からもうわかるとおり、キャンベルさんはキャンベルビルの持ち主です。

しかもそれだけではありません。キャンベルさんはマンハッタンの誇る巨大な貿易会社の女社長（！）なのだそうです。

びっくりですね。妖魔なのに。

驚くのはそれだけではありません。

なんと。

そのキャンベルさんの正体は飴鐘さんだったのです。あの飴鐘さんです。

私がファシナトウルにいた頃、居なくなってしまった仕立屋の元オーナー飴鐘さんのことをあなたはよく話してくれましたね。

飴鐘さんは色々あつて名前を捨て、マンハッタンで新進気鋭の女社長、シンデラー・キャンベルとして成功したんだとか。

キャンディーベル ↓ シンデラー・キャンベルということらしいです。

『シン』の部分はどこから来たのかと思い、

もしかして、キャンディーベルとしての飴鐘さんは死んだ、すなわち、死んでい

キャンベル”

という意味なのかとも考えましたが、なんとなく怖くて聞けませんでした。(駄洒落の寒さ的に)

多分違うと思います。そうであつてほしいと思います。

話が少し逸れました。

清掃員としての仕事はもちろん体力仕事ですから、なかなか大変ではあるのです

が、

あなたも知つての通りこの体は頑丈ですし、食費もそこまで必要ではないのでなんとかやつていけそうです。

今は少しずつお金を貯めているところ。目下の目標は洗濯機と冷蔵庫を買うことです。

マンハッタンは都会ですが、色々な店が身近にありそうでなかつたりします。

コインランドリーくらい近くにあるだろうと思つていたら歩いて三十分もかかるので流石に考えてしまいました。

そんなことを書くと、またあなたは、

そんなご苦労をされているのに私はファシナトゥールでぬくぬくして、と言うかもしれませんが、

この際ですのではつきり言っておきたいと思ひます。

そんなことを気にする必要はまったくありません。

前回、うっかり筆を滑らせてラムダ基地で拷問を受けたなどと書いてしまつたせいでしょうか。

あなたの手紙にはしきりに謝罪の言葉が繰り返されてきました。一緒に行こうという私の誘いを断つたこと。

根つこの町から逃げ出していく私を助けられなかったこと。

その二点について、ジーナ、あなたは何度も謝っていたけれど、あなたは何も悪くない。

むしろ悪いのは私の方です。

今さらながら私は『ぐわー。ジーナにそんな思いをさせていたのか……』とじたばたしているところです。

針の城を出ていく時、一緒に行こうと誘う私にあなたは申し訳ない顔をして言いましたね。それはできないと。

とても辛そうな顔をしていました。そしてそんな顔をさせてしまったことを私は長い間後悔していました。

思えば、その時の私にはまるで常識が欠けていて、分別や思慮も足りてはいなかったのです。

あなたには両親がいて、三人の弟と二人の妹がいる。

独り立ちして働くあなたはその稼いだお金をご実家に送っていて、そのお金であなたの弟妹が食べている。

だから行けない、とあなたは言いました。

その言葉はどこまでも正しい。

あなたはあなたを誇りに思うべきです。

少なくとも、私はそんなあなたと知り合えたことを誇りに思います。

あなたは家族に黙って居なくなるわけにはいかなかったのです。

あなたは家族を捨てなかつた。

だから私は、あなたのことが好きです。

マンハッタンより。

アセルス

追伸 安物ですがツボ指圧機を贈ります。

針仕事はなにかと大変だと思うので、お使いください。

幕間 光刃皇帝アルカイザー第三十二話 『妖艶！ 都会の影に潜む蜘蛛！』

光刃皇帝アルカイザー第三十二話 『妖艶！ 都会の影に潜む蜘蛛！』

■前回までのあらすじ

今度こそシンディー・キャンベルを追い詰めるべくマンハッタンへと戻ってきたレツドとヒューズ。まずは作戦会議とファーストフード店で食事を摂ることにした二人だったが、注文したハンバーガーにトマトが入っているというとんでもない事件が発生する。『俺はトマトが嫌いなんだよ、クソツタレ！ トマト入れるんならトマトバーガーって名前にしろや！』腹を立て不貞腐れるヒューズはそっぽを向いたままオレンジフロートをちうちう啜る。

このままでは作戦会議が進まない……。焦りを深めるレツドにその時、一人の子供が歩み寄る。『お兄さんたち、キャンベルビルに用があるの？ ボクもそうなんだ。仲間に入れてよ』突然の申し出に訝しむ二人に、その子供——ウロネブリは無邪気な口調で自らの目的を語り始めるのであった……。

ウロネブリ「……そいで、ボクは助けてくれたセアト君の役に立ちたいの。あのキャンベルビルにはすごく悪い奴がいるからやつつけなくちやならないんだ」

レッド「悪い奴って？」

ウロネブリ「ええとね……。ア、ア……。アセ……。ええと……。なんだっけかな……。あれえ……。？」

ヒューズ「アラクーネ、か？」

ウロネブリ「うん! 多分そんなかんじ」

ヒューズ「ふーん。ま……。いいんじやね？」

レッド「おいおい、ガチで言ってるのかよ? どう考えてもガキだろ、こいつ」

ウロネブリ「ボク、ガキじゃないもん!」

レッド「もん、とか言ってるし」

ヒューズ「いやーなんか話聞いた感じだといいい奴っぽいじゃん、こいつ。要するにイジメられてるところを助けてくれた兄貴分に恩を返したいわけだ。泣かせるじゃねーか」

レッド「そうか……。? 毒、とか腐る、とか、割とヤバイ単語がぼこぼこ出てくる話だったような気がするんだが……。それによ、こんなちっさいガキを危ない目に会わせ

るってのは、ドーにも気が乗らねーんだよな」

ヒューズ「テメーが守ってやりやいいだろが。大体、ガキつつつても見た目だけだしよ。妖魔だろこいつ。本当は俺達より長生きしてんじやねーか？」

レッド「マジか！」

ウロネブリ「まじだよ」

レッド「よくわかるな……」

ヒューズ「人外の奴は匂いでわかる。テメーとはぐぐった修羅場の数が違うんだよ。メモっとけ俺の名言を」

レッド「お、おう……」

言われた通り素直にメモをとるレッドに多少なりとも機嫌を直すヒューズ。

ヒューズ「そんじや、戦力も増えたことだしさっそくキャンベルビルに殴りこむとするか！」

レッド「待てよヒューズ。俺たちはキャンベルを追い詰めるための作戦を練っていたんじやなかったのか？」

ヒューズ「作戦は考えた。だが思いつかなかった。そういうことだ」

レッド「おい」

ヒューズ「ヤツがただの妖魔なら何も問題はない。ぶつちめればそれで済む。殴られ

たからつつつて警察に駆けこむ妖魔なんてもんはいないからな。命のソングンを謳つちやあいるが現行法は妖魔がいくら死のうが見て見ぬふりさ。たとえ都会のど真ん中で妖魔が死んでいたとしても出動するのは市の清掃局くらいだろう。……だがキャンベル——毒のアラクーンネの場合はちと事情が違う。何しろあのアマは今やマンハッタンの名士でいやがる。いくらIRPOだっておいそれと手を出すわけにやいかねーんだ。家探ししてうっかり何も見つかりませんでしたなんてことになってみる。キャンベルだけじゃない、マンハッタンの住民全部が敵に回るだろうよ」

レッド「……あんたの口からそんな意気地のない台詞を聞きたくはなかった。正義のIRPOが笑わせるぜ」

ヒューズ「馬鹿野郎。話はこつからだ。……いいか? つまり法律で奴を裁くのは難しい。かといってキャンベルとブラッククロスとの繋がりを証明するつてのは更に困難だ。こないだの事件で折角の手掛かりは奪われちまったからな」

レッド「それで?」

ヒューズ「おう。だから、IRPOとも都市警察とも関係のない頭のイカれた奴がキャンベルビルに殴りこみをかけるワケだ。そうするとどうなる? もちろんキャンベル側は警備を動かすだろうが、いよいよ自身に危険が迫れるとなればブラッククロス仕込みの力で抵抗してくるだろう。そうなりやこつちのもんだ。戦闘員の二三人捕ま

えりや証拠としちや十分だろ」

レッド「……もし、キャンベルが最後まで抵抗しなかったら？」

ヒューズ「頭のイカれた奴が白昼堂々ビルに侵入しキャンベル貿易の社長シンデー・キャンベル女史に暴行を加え、殺害。まあ悲しい事件だな」

レッド「アンタ本当にクレイジーだな……！ だいたいそんな都合よく頭のイカれた奴がいるわけが……いるわけが……。……つて、おい、侵入するのつて俺なのか!？」

ヒューズ「察しが良いな。行ってこいレッド。正義のために」

レッド「絶対に嫌だ」

ヒューズ「そうか。じゃあウロネブリに頼むわ。……やつてくれるよな、ウロネブリ？」

ウロネブリ「うん。よくわからなかったけど別にいいよー」

レッド「いたいけな子供を騙してんじやねえよ！ そんなやり方認められるわけがないだろう！」

ウロネブリ「ボク、子供じゃないよう！」

レッド「……おう。すまん……」

ヒューズ「テメーは難しく考えすぎなんだよ。近づきさえすればキャンベルは必ずシッポを出す。何も問題はない」

レッド「でもなあ……。失敗したら俺は殺人犯になるわけだろう?」

ヒューズ「要はバレなきやいいんだ、バレなきや。目だし帽でもかぶってけ」

レッド「完全に犯罪者じゃねーか!」

ヒューズ「うるせえなあ。……そうだ、じゃーお前、アレだ。アルカイザーになれ!」

レッド「なっ」

突然の言葉にレッドは仰天し、持っていたチキンナゲツトをぼとりと落とす。落としたナゲツトをウロネブリが摘み上げ、フツと息を吹きかけてから口の中に入れてっこりと笑う。

レッド「な、な、な、何を言ってるんだ、よう。ヒューズさん、よう。なれるわけがないだろう。アルカイザーになんて。そんな、あなた、オソレオオイ」

ヒューズ「恥ずかしいやつかお前は。何その反応。……別にフリだけでいいんだよ。アルカイザーはブラッククロスと敵対してる。そのアルカイザーがキャンベルのビルに乗りこめば、奴らだつて『バレチャッテルナー』ってなるだろ多分。あとは向こうの反応を窺いつつ臨機応変にやってくしかない。……他に何か名案があるか? あるのなら言え。無いのなら黙つとけ。行くぞ、レッド! ウリ坊!」

意気揚々とファーストフード店を出ていくヒューズに対して残る二人は暗い顔をしている。

レッド「大丈夫かなあ……」

ウロネブリ「……なんか、へんな、あだな、つけられた……」

◇

マンハッタン、キャンベルビル・エントランス。突然現れた奇妙な扮装の三人にざわめきが広がる。

受付「あ、あのう……。どのようなご用件でしょうか……?」

震える声で尋ねる受付の女性にヒーローマスク（主材料・紙袋）をつけたレッドは堂々と答える。

レッド「私の名はアルカイザー。こちらの社長に用があるのだ。取り次いでくれないか?」

受付「その……アポイントメントはおありですか……?」

レッド「もちろんあるとも。この胸に漲る正義の心、それが社長と私の間に結ばれた約束だ」

受付「言葉が通じないタイプの人だわ……。ひい……。う、後ろの方たちも同じご

用件で……?」

顔を引き攣らせる受付。

ヒューズ「俺の名前はジョイ・デイヴィジョン。アルカイザーの相棒だ。マンハッタンでワルをやった俺だがある事件でアルカイザーに助けられてからは心を入れ替えて仲間になった。気は優しく力持ちだが頭が悪いのがちよつとした欠点だ」

ウロネブリ「ボクの名前はリィ。アルカイザーの弟分だよ。アルカイザーの武器はボクが発明したものなんだ。天才だけどおちよこちよいなのがたまにキズ。ピーマンだけは食べられないよ」

受付「……ご予定を確認いたしますので、少々お待ち下さいませ……」
レッド「ありがとう、お嬢さん」

受付は手元の端末を素早く操作し警備部へと連絡を入れる。

受付「ヤバイ人来てます」

警備員A「具体的に言ってくれ。どこがヤバイんだ?」

受付「頭です。アルカイザーとその仲間を名乗っていますが、社長に会わせると言っています。今日、この時間に社長が誰かとお会いになる予定はないはずですよ」

警備員B「映像を確認した。すぐに行く」

受付「大至急お願いします」

キャンベル「待ちなさい」

受付「社長！ この通信を聞いていらしたんですか？」

キャンベル「そんなことはどうでもいいでしょう。それよりも、そちらのお客様なら問題ないわ。7Fの会議室までお通しして頂戴」

受付「え、あ、は、はい。……でも、よろしいんですか？ 見るからに怪しいのですが……」

キャンベル「いいのよ。ごめんなさいね。伝えるのを忘れていたわ。そちらの方たちはイメーჯキヤラクター契約の件でいらした俳優さんたちなの。まさか衣装まで着てくるとは思わなかったけれど、きっとプロ意識の high かたたちなのね」

受付「はあ……」

受付「お待たせいたしました。7F会議室で社長がお待ちです。左手のエレベーターからお進みくださいませ」

レッド「……え？」

受付「……お客様？」

レッド「あ、ああ……。すまない。では行くぞ、ジョン。リー」

釈然としない様子のレッドだが、受付に促されてエレベーターへと歩き出す。

レッド「……まさかこうまですんなり行くとはな」

ヒューズ「良かったじゃねーか」

レッド「どこがだ。いくらなんでも怪しすぎるだろうが。どこの世界に突然来たヒーロー(仮)を通してくれる会社があるんだよ……」

ヒューズ「そうだな。100%罠だな」

レッド「だったら」

ヒューズ「罠ってことは相手が手を出して来たってことだ。後はそれをぶち破るだけ。簡単な話だろ?」

レッド「そんなに行き当たりばったりで大丈夫なのかよIRPO……」

ウロネブリ「ねえ」

ヒューズ「お。どーしたウリ坊」

ウロネブリ「何か変だよ。エレベーター」

促され、コントロールパネルの表示見ると階数は既に7Fを超え8F9Fと更に上昇を続けていく……。

ヒューズ「こりゃあ……やばいな」

レッド「おい……どうすんだよ!?!」

エレベーターを止めようと慌ててボタンを押すレッドだったが、操作をまるで受けようとしてない鉄の箱はついに99Fへと到着する。

ちん、と音を立て開く扉に恐る恐る足を踏み出す——と、途端に薄気味の悪い匂いが漂ってくる。

レッド「な……なんだ、これは……」

驚愕に目を見開くレッド。都市の真ん中にありながら、しかしてキャンベルビルの上は魔物の巣窟と化しているのだった！

レッド「俺たちはビルの中にいたんだよな？」

ヒューズ「ブラッククロスは異界化技術を持つている。このビルも一部をトワイライトゾーンと同化させられちまつてるのかもしれない」

レッド「これではつきりしたな。シンデイ・キャンベルはブラッククロスだ」

ヒューズ「ああ。間違いないな。早速この映像を本部に送って——と、クソツタレ。通信が繋がらねえ……！ 敵さんもそこまで馬鹿だつてわけじゃねーか。そりやそうだな……。……気合入れろよレッド、ウロネブリ。ここからが正念場だ。手の内を晒すからには、生かして返すつもりはないってことだからな……！」

レッド「ウロネブリ、周囲に気をつける。危なくなったら俺の後ろに隠れてるんだぞ、いいな？」

ウロネブリは嬉しそうにほほ笑む。

ウロネブリ「うん!」

変装を脱ぎ捨て、モンスターを次々に蹴散らしながら進んでいく一行。そしてその前には、とうとう女傑、シンディー・キャンベルが現れる……。

優雅に微笑むキャンベルは淫らな仕草で唇を窄め紫煙を吐きだした。

キャンベル「まさか、話題のヒーローさんが正面からやってくるとは思いませんでしたわ。……それと、IRPOのロスター捜査官でしたかしら? あなたまで一緒にいらつしやるとはね。どこでお知り合いになられたの?」

レット「お前に聞きたいことがある……!」

ヒューズ「お前はオマケなんだ。黙ってる。……ミス・キャンベル。悪いがこいつは本物じゃない。単なる使いっぱしりさ。アンタの反応がみたくてね。馬鹿げた作戦だったが、効果は覲面だったようだな? シーファー商会の時は上手く逃げられたが、もう言い逃れはできんぜ。年貢の納め時だな、ミス・キャンベル……いや、ブラッククロス四天王の一角、毒のアラクーネ!」

指を突き付け糾弾するヒューズ——だがキャンベルは平然とした様子で無視し、レットに話しかける。

キャンベル「坊や、あなたはアルカイザーではないの?」

レッド「……ああ」

キャンベル「そう。残念だわ……とても残念」

レッド「残念？」

キャンベル「悪の組織の幹部として……残虐の限りを尽くすと言うのもそれはそれで面白いことよ。苦しみ叫ぶ人々の醜い表情はいつも様々で私を楽しませてくれる。醜い、と思っても、それは言葉一つで、けれどもその醜さはみんな異なっている。醜いことを知れば知るほど、美しいということが何なのか分かってくるような気がする……。人の醜い顔を見ているととても楽しいわ。……でもね？ 時には自らが相対する正義というものが果たしてどんななのか、実際にこの目で見てみたい、闘ってみたいと思う時もあるの。自分が悪だとして、悪というのはどんなものなのか、正義と言うのはどんなものなのか……知りたくなったのよ」

レッド「そんな下らない好奇心で、お前は！」

ヒューズ「黙ってろと言った筈だ。二度言わずな。……アラクーネさんよ、下らないおしやべりはここまでにしようや。あんただって仲良くなるために俺達を招き入れたわけじゃないんだろう？」

キャンベル「そうね。その通りだわ」

そう言って、キャンベルは瞬く間に異形の姿——蜘蛛女と化した。鋭い糸を吐きだ

し、ウロネブリへと吹きつける。

ウロネブリ「わわっ」

慌てて避けるウロネブリ。レッドは怒声を上げる。

レッド「弱い奴から狙うとは、流石はブラッククロス、やるのが汚いな!」

キャンベル「弱い……? 何を言っているのかしら」

レッド「何?」

キャンベル「その子の名は森の従騎士ウロネブリ。黒騎士セアトに仕える従騎士の中でも最強と言われる妖魔なのよ」

ウロネブリ「てへへ」

恥ずかしそうに照れて見せるウロネブリにレッドは信じられないという目を向けた。一方、キャンベルは警戒を隠さずにじりじりと様子を窺っている。

キャンベル（人間に過ぎない青髪の坊やとロスター捜査官は私にとってそれほどの脅威ではない……。けれど、ウロネブリだけは別だわ。IRPOと一緒に来るのは予想外だったけれど、狙いはアセルスと白薔薇姫でしょうね……。他にも従騎士が来ているのであれば、勝てない……。正体は知られてしまったけれどここは退くべき……。でも……何故かしら? 思っていたよりも、ウロネブリの動きが鈍い……。?）

戦場では様々な思惑が渦巻いていた。

なんとかアルカイザーに変身する隙を探ろうとするレッド。

キャンベルの話聞いたヒューズはこのまま闘うかウロネブリをサポートする方針に移るかで若干の迷いを見せる。

レッドとヒューズを片手であしらいつつウロネブリの出方を待つキャンベル。

そして期せずして闘いの鍵となりつつあるウロネブリはといえば、実のところ、心の底から混乱していた。

ウロネブリ「あれ……なんか、違う気がする。お姫様もないし……。アラ……。クーネ？ 違ったかなあ……」

レッド「おい、ウロネブリ！ さっきからおかしいぞー！」

ウロネブリ「あ……。うん……。あのね……。ごめん。ボク、間違えてみたい……。レッド「はあ？」

ウロネブリ「ボクが狙わなきゃいけないのは、キャンベルさんじゃないと思うの……。レッド「お前なあ……。今さらそんなこと……。つて、危ねえっ！」

ウロネブリ「きやつ」

足を止め、おずおずと謝りかけていたウロネブリを突如として襲うキャンベル配下の援護射撃。咄嗟に庇ったレッドはウロネブリと一緒に階段を転がり落ちていく。

ヒューズ「レッド！ ウロネブリ！」

キャンベル「これで一対一ね、捜査官さん」

余裕たっぷりに微笑むキャンベルは巨大な蜘蛛足をヒューズへと振り下ろした。間一髪避けたヒューズだがあまりの破壊力に吹き飛ばされ、体を激しく打ち付けられる。

ヒューズ「ぐっ」

キャンベル「もう諦めたらいかが? あなた一人でこの私に勝てると思いい?」

ヒューズ「けっ」血の混じった唾を吐き捨てながらヒューズはハンドブラスタアのツマミをかちりと振じる。出力形式モイド変更。ブラスタアソード、共振。光刃形態ブレードモイド。

キャンベル「……まだやる気なの? 懲りない人ね。そんな支給品のハンドブラスタアで何ができるの?」

ヒューズ「やかましいや蜘蛛女。知らねーんなら教えてやる。男が一匹、ガチでブレード握りやあよ、斬れねーものなんざねーんだよ!」

キャンベル「……あなたは何か勘違いしているようね。IRPOの捜査官と言うのはみんな自分が英雄か何かだと思ってるのかしら? それとも、頑張っていればいつかヒーローが助けてくれる、そんな風に考えているの? 奇跡はそう起こらないわよ、捜査官さん」、

ヒューズ「質問の答えはイエス、そしてノーだ。俺はヒーローのサポートをするためにIRPOボになったんじゃないやねえ、俺がヒーローになるためにケーサツやってんだ! ゴ

チャゴチャぬかしてないでかかってこい、この若作りが！」

キャンベル「勇ましい人間ね。そういう人は嫌いじゃないわ。……でも、これでおしまいよ」

鋭い前脚を振り上げ、風切り音と共に突き出すキャンベル。ヒューズはふてぶてしく笑いながら走りだす。ブラスタブレードを硬く握りしめ、鉤爪に引き裂かれる痛みをものともせず。

ヒューズ「……ここだっ！」

叫びながらブレードを振るうヒューズ。キャンベルの強化クチクラ肢に灼熱したブレードが食らいつき、力任せに両断する！

キャンベル「やっつけてくれるわね、IRPO……でも」

ヒューズ「くそっ……」

砕かれた肋を押さええて呻く。なんとか四天王の足を斬りおとすことに成功したヒューズだったが、しかしその代償は大きかった。息をするのも困難な状況にたたらを踏むヒューズは、次の攻撃で紙きれのように吹き飛ばされて気絶する。

キャンベル「今度こそ、これでおしまいよ……」

死神の鎌のごとく構えられたアラクーネの蜘蛛足は倒れ伏すヒューズの心臓にびたりと狙いを定める。

嗚呼——哀れロスター捜査官はこのまま悪の餌食となつてしまふのか——？
否。

断じて否である。

なぜならここには彼がいる。悪あるところ光あり。影あるところ闇あるところ、邪悪の前に敢然と現れ正義をなすその英雄。助けを求める声があれば世界の裏側からも駆けつける男。その名は！

アルカイザー「とうつ！」

キャンベル「ま、まさか、その姿は!？」

アルカイザー「名声を求める者は他者の行動に。快樂を追うものは己の官能に。賢者は己の行いに。——そして、皇帝は人々の笑顔に善を置く! さあ、賽は投げられた! 光刃皇帝アルカイザー、ここに見参！」

勇ましく向上を述べるアルカイザーにキャンベルは一瞬きよんとして、それから少女のように無邪気な笑い声を上げる。

アルカイザー「何がおかしい？」

キャンベル「私、あなたのファンですの。お会い出来て光栄ですわ。アルカイザーさん。この世にヒーローがいるだなんて、何て素晴らしいことでしょう」

アルカイザー「悪の組織の四天王が何を言うか！」

キャンベル「あら、そうかしら。悪だからこそ正義を求めるのでしょうか？ 誰だつて自らが存在していることの、その意味が欲しいのよ。……案外、あなたがいなくなつてしまえば、悪だつていなくなるかもしれないわよ？」

アルカイザー「……そんなことはない。世界から悪はけして無くならない。だから、誰かが悪と戦わなくてはならない！」

キャンベル「それが、あなた、というわけ？ ご立派ですこと。称賛の言葉を贈らせて頂きますわ。握手してくださいます？」

キャンベルは無造作に蜘蛛の足を伸ばし、アルカイザー目掛けて薙ぎ払う。しかし——何と云うことだろう、アルカイザーは軽々と片手で受け止めた。捕まえたキャンベルの脚はぴくりとも動かない……。そう！ アルカイザー腕は百万馬力！ 7.3トンのパンチりよくであらゆるてきをうちくたくぞ！

キャンベル「これが、ヒーローの力……！」

アルカイザー「ワン・ツー・スリー……シヤイニング・キック！」

キャンベル「ぐふっ」

光輝く回し蹴りを放つアルカイザー。キャンベルの巨体は地響きを立てて倒れていく。体内の機械をショートさせたキャンベルは大量の血を吐きだしながら顔を歪める。

アルカイザー「これでとどめだ、ブラッククロス。食らえ！ 星も砕け散る鳳凰の羽

ばたきを! アル・フェニツ——」

最大の奥義を繰りだすべくアルカイザーが構えたその時、彼の前に一人の女性が立ち
はだかった。

アセルス「駄目っ! 烈人君!」

アルカイザー「……アセルス姉ちゃん!? どうしてここに?」

キャンベル「ア、アセルス……さん……。隠れていてと言ったのに……」

アセルス「ごめんなさい。でも、知らないふりをしているわけにも行かなかったから」
アルカイザー「姉ちゃん。説明してくれ! これは一体どういふことなんだよ?」

キャンベル「……アセルスさん?」

アセルス「黙っていて、ごめんなさい。この……アルカイザーは私の知り合いなんです。……烈人君。私はね、フアシナトウルっていう妖魔のリージョンの王様に追われていて、そこをキャンベルさんに助けてもらってたんだ。だから……」

アルカイザー「だから……? もしかして、見逃せなんていうんじゃないだろうな
……!」

アセルス「うん……ごめん」

アルカイザー「それはできない。俺は正義のヒーロー、アルカイザー。悪を倒すのが俺の役目。そこをどいてくれ、アセルス姉ちゃん!」

アセルス「許してあげることではできないかな……？　話を聞いて、和解の道を探すと
言うわけにはいかないのかな……？」

弱々しく懇願するアセルス。しかしアルカイザーは冷たく首を振った。

アルカイザー「それはできない。奴はブラッククロスだ。奴のせいで大勢の人が今も
苦しんでいる。キャンベルが横流しした武器のせいでどれだけの人が死んだか……！」

アセルス「でも……。このまま続けたらどつちかが死んじやうよ。そこまでやること
はないでしょう？」

アルカイザー「何だってこんな奴を庇うんだ。こいつは……こいつはブラッククロス
なんだぞ！」

アセルス「あなたにとってはブラッククロスでも、私にとってはそうじゃないんだ！

烈人君、お願い！」

アルカイザー「……そこをどいてくれ、アセルス姉ちゃん……！」

アセルス「嫌だ！　烈人君に人殺しなんてさせるわけにはいかない！」

アルカイザー「そいつは人間じゃない、ブラッククロスに改造された妖魔なんだ！」

アセルス「！　だ、だけど……妖魔だって……妖魔でも、言葉は通じる！　わかりあ
えるよ！」

アルカイザー「そこをどけ……！」

アセルス「烈人君!」

アルカイザー「そこをどけと言ったんだ! アセルス!」

アセルス「どうしてわかってくれないの!」

アルカイザー「それはこっちの台詞だ! あんたは本当にそれが正しいと思ってるのか? ……ただ、誰か知り合いが傷ついているから可哀そうだと、そんな安易な考えで手を差し伸べようとしているんじゃないのか? シンディー・キャンベルは人殺しだ。多くの武器を密輸し、そのせいでワカツは滅び、他のリージョンにも戦禍は広がり続けている。ブラッククロスを、キャンベルを、キャンベルを一秒生かしておけば遠くのどこかで誰かが一人死んでいく……! 答えてくれ、アセルス! あんたの行動に正義はあるのか!」

アセルス「わ、私は……」

苦しそうに顔を歪めてアセルスは口籠る。

アセルス「わからない……。私には、わからないよ、烈人君……。でも何かがおかしいよ。こんなのは嫌だ……」

寂しそうに呟くアセルス。

アセルス「もし、私の行動に少しでも正義があるなら……正しいと思える道があるとするなら……それは……」

アセルスは自分の考えに驚いたようにはつと眼を開いた。

アルカイザー「何……?」

アセルス「悪を倒すのが正義の役目。君はそう言ったね。でも私はこう思う。正義の役目は、全ての悪を魅了することだと」

アルカイザー「魅了、だって? 何を言い出すんだ?」

アセルス「誰かを愛することや大切に想うことで多くの人が繋がれていれば、そんな甘つちよろい綺麗事がまかり通る世の中なら、みんながみんな平和に暮らしていけるのにつて、そう思うんだ。だから……!」

アルカイザー「全ての悪を魅了する……? そんなこと、できるわけがないだろう!」
何を言っているんだ、アセルス姉ちゃん。スーツの中でレッドは歯がみする。悪を魅了し、更生させる。正義として悪を口説き落とす、味方にする。立ちほだかる敵全てを説得することなど事実上不可能だ。……それに、仮にもそんなことを実現してのけたとしても、それは洗脳と一体何が違うというのだろうか……? ふと抱いた疑問にレッドはぞつとする。

アセルス「そう……だね。きつと、そうなんだろうな……。でも、私は……」

俯いたまま、弱々しく声を彷徨わせ、アセルスはそつと腰に提げた剣へと手を伸ばす。ついに戦いの意志を見せたアセルスに、アルカイザーは怒りを爆発させる。

アルカイザー「たわごとはいい加減にしてくれ! こっちは家族を殺されてるんだ!」

アルカイザーの声にアセルスはたじろぐ。

アセルス「う、嘘……」

アルカイザー「嘘なものか。俺の家族は……親父は、母さんは、藍子は……こいつらに殺された。俺の平和な生活はみんなブラッククロスに奪われたんだ! だから俺はヒーローになった! この力なら……アルカイザーの力なら、家族の仇がとれると思っただからだ!」

アセルス「でも、それは……!」

アルカイザー「ああ、そうさ。アルカイザーという存在がヒーローなのだとしても、俺という個人はヒーローじゃない。俺は、ただ……復讐のために生きているだけだ。俺は正当な報復を下すためにここにいる! マンハッタンのシンディー・キャンベルはブラッククロスの四天王アラクーンだった……。だから、この俺が裁く! そこをどけ、アセルス! どかないのなら力づくで……!」

ウロネブリ「あれえ……?」

緊迫した雰囲気の中、状況を更に混乱させる暢気な声が響く。

ウロネブリ「知らない人がいる……。レッド、また変装してるの……?」

アルカイザー「……私の名前はアルカイザー。ここは危ない。君は下がっていったまえ」

ウロネブリ「え、ほんもの……?」

アルカイザー「ああ。そうだ」

ウロネブリ「ほんとうに、ほんもの……?」

アルカイザー「ああ」

ウロネブリ「ふわあ……!」

アルカイザー「?」

ウロネブリ「サイン、ください!」

ウロネブリは目を輝かせ、アルカイザーにまわりつく。

アルカイザー「ば、馬鹿野郎、ウロネブリ、今はそんな時じゃ……!」

ウロネブリ「わあ、すごい! ボクの名前どうして知ってるの? ヒーロー、だから

? すごいすごい! ねー、サインちょうだい! いっしょのおねがい! いっ

しょーのおねがいは三回までゆるされる!」

キャンベル「アセルスさん。すぐにここから離れなさい!」

アセルス「え……? でも……」

ウロネブリ「……そういえば、そのお姉さんはだあれ? アセルスって……あー!

思い出した!」

突然興奮したようすで辺りをぐるぐると走りだしたウロネブリはアルカイザーのマントをつまみ、ぴよんぴよん跳び跳ねる。

ウロネブリ「あのね。あのお姉さんすごい悪いアセルスっていうの。アルカイザーさんは正義のヒーローでしょ? やつつけるの手伝って!」

アルカイザー「何だと……?」

ウロネブリ「アセルスのせいでみんなが迷惑してる。アルキオネお姉ちゃんもお腹痛そうだし、オルロワージュ様もお姫様をとられてすごいへこんでる! あの人、ドロボーなんだって! ドロボーは、駄目なことだよ! だから殺さなきゃ!」

アセルス「え……この子……?」

アルカイザー「な……何言ってるんだウロネブリ。アセルスねえちや……この人は、そんな悪人じゃ……」

ウロネブリ「悪だよ! だって悪人だもん! セアトくんもそう言ってたもん!」

アルカイザー「ウロネブリ! 話を聞いてくれ!」

ウロネブリ「ばかばか。アルカイザーさんのばか! もういいよ! 自分でやるから!」

ぷくりと頬を膨らませたウロネブリは胞子と死人ゴケを呼び寄せる。ビルの屋上に

絶え間なく降り注ぐ毒の胞子はアセルス達の皮膚を食い破る。肺に侵入した胞子がまた一つ粘菌の鎌をもたげ、肺の内部を所構わず引つ掻き回していく。呼吸さえままたない状況の中、痛みに喘ぐアセルスはそれまで受けたどんなものとも違うこの攻撃の恐ろしさに気付く。胞子の毒、そして細胞そのものを不活性化させ肉体を屍蠟に近づける死人ゴケには、アセルスの持つ再生能力が機能しないのだ。

思わず味わうこととなった恐怖に顔を歪めるアセルス。その表情を見たアルカイザーははつと我に返り、ウロネブリを静止する。

アルカイザー「駄目だ！ ウロネブリ」

ウロネブリ「もう！ なんでアルカイザーさんはボクの邪魔をするの？ アルカイ

ザーさんは正義なんですよ？」

アルカイザー「俺は……！」

ウロネブリの無垢なる問いかけに答えを窮するアルカイザー。力づくでウロネブリを止めるか……？ 正義という言葉に依拠して行動しているという点では、ウロネブリも自分も、そしてアセルスですらも同じなのではないのか……？ 戸惑い、逡巡するアルカイザーの耳にその時、無慈悲な機械音が響いた。

『出力形式変更。Les-s-lethal。粒子罅割。パラライザー』

瞬間、閃光と共に圧縮された粒子が迸る。アセルスを、そしてウロネブリやキャンベ

ルを粒子が擦りぬけ、全身を麻痺させる。

ウロネブリ「わっ」

アセルス「うっ」

キャンベル「ぐっ」

倒れ伏し、ぴくぴくと痙攣する三者を尻目に悠然と立ちあがったのはさつきまで気絶していた筈のヒューズであった。

ヒューズ「……ったくよ。人がせつかく死んだふりしてんに無差別攻撃しやがって。危うくカビだらけになるトコだったぜ」

アルカイザー「ヒューズ。無事だったのか!」

ヒューズ「見りやわかんदार。そして一応聞いといてやるが誰だテメー」

アルカイザー「オ……私は正義の味方アルカイザーだ!」

ヒューズ「そうか。まあそういうことでもいいんならそれでいい。問題はそこじゃねーからな」

落ち着いてハンドブラスターを構えるヒューズ。狙いをゆつくりとキャンベルへ合わせ、迷うことなく引き金を引いた。

ヒューズ「ヒーローのくせにハイスクールみてーなコトをぐじぐじ言い腐りやがつてよ。飽き飽きだ。お前が出来ないんなら俺がやる」

二発、三発と冷静に銃を撃ちこむヒューズ。その度にキャンベルの巨体が大きく跳ね、アセルスが声にならない絶叫を上げる。

憎々しげにヒューズを睨むアセルス。だが苛烈な視線を受けてもヒューズはうろたえもせず、次なる標的としてガンサイトを彼女へと向けた。

アルカイザー「ヒューズ！」

ヒューズ「なあ、アルカイザー。考えてないのはお前の方なんじゃないのか？ 女子供にちよろつと言われたくらいで止まってどうすんだ？ 正義だなんだと面倒くさいことを考えるのは戦う前に済ませておけよ」

淡々と言い、倒れたアセルスを撃つヒューズ。脳天を撃ち抜かれたアセルスは血をまき散らし動かなくなる。

アルカイザー「ヒューズ！ テメエ！」

ヒューズ「そして戦いが始まったのなら迷わず最後まで戦い抜け。……これが俺の名言だ。メモの用意は？」

激情にかられたアルカイザーはヒューズの胸倉に掴みかかる。ヒーローの馬鹿力に顔を歪めたヒューズは苛立たしそうに振り払った。

ヒューズ「アセルス・ナイトレスはIRPOもマークしてる。何しろオルロワージュの血を享けた半妖だからな。これぐらいで死ぬかよ。ブラッククロスとは関係が無い

ような話しぶりだったが、キャンベルとの繋がりを考えると怪しいもんだな。匿われていたつー話も信じていいんだか」

アルカイザー「アセルス姉ちゃんは……違う。彼女はブラッククロスでは……」

ヒューズ「お前がそう思いたいんならそれでもいいさ。だがそれならそれでさっさとアセルスを無力化してキャンベルを殺すべきだったな。お前の力は何のためにあるんだ? ……おい、ウリ坊。そろそろ起きろ! お前だけは狙いから外してやったらう」

ヒューズが怒鳴るとウロネブリはふらふらと頭を揺らしながら起きあがり不満に口を尖らせる。

ウロネブリ「うう……体がびりびりする……。ひどいよ! ヒューズさん!」

ヒューズ「そいつは悪かったな。だがお前の攻撃を放つとくと俺が死ぬ。そして俺が死ななくても胞子でビルが倒壊して一般人がむやみに死ぬ。だからパラライザーだ。お前のセアトくんも騒ぎを大きくするなとか言っただけでなかったか?」

ウロネブリ「ううん、セアト君はそんなこと言っただけでなかった。でもヒューズさんは殺しかけちゃったことはごめんなさい……」

ヒューズ「おう。全然良くはないがまあいいぞ。ガキのやることだ、一応許してやる。……それで、だ。ウリ坊。向こうでお前の狙うアセルスが転がってる。どうする?」

ウロネブリ「んーと。殺す」

ヒューズ「おつ。そうだな。わかるぞウリ坊。でも駄目だ」
ウロネブリ「なんでー？」

ヒューズ「実は最近の研究でわかったんだが、オルロワージュの血を享けたアセルスは普通の攻撃では倒せないんだ。完全に滅ぼすには妖魔の君の加護を打ち消すための“ひかりのたま”と“いなづまのけん”が必要なんだな。……お前、持っていないだろう？」

ウロネブリ「ええ……どうしよう……？」

困り顔でオロオロするウロネブリ。

ヒューズ「だからまあ、今回は諦めてセアト君の所に帰れや。……なーに、心配することあねー。重要な情報を持ち帰ったお前をセアト君はきつと褒めてくれるだろうぜ」
ウロネブリ「うー。わかった……」

ヒューズ「元気出せって。ほら、こっちのアルカイザーがサインとハグと記念撮影もしてくれるってよ」

アルカイザー「な……」

ウロネブリ「わーい！ ちょっと色紙買ってくる！」
“セアトさんとアルキオネさんとハウゲータさんとウロネブリちゃんへ。アルカイザー”
って書いてね！
ヒューズ「おう。行ってこい。ゆっくりでいいぞー」

ぱたぱたと急ぎ足で駆けていくウロネブリ。

アルカイザー「……」

ヒューズ「……な? これぐらいいいんだよ。ウロネブリはあんまり刺激しない方がいいらしいからな」

アルカイザー「……本当にこれで良かったのか?」

ヒューズ「馬鹿野郎が。本当だの最善だの、真顔で言うことかよ。俺にできるのは今の時の俺に思いつくことだけだ。そいつが俺の正義なのさ」

胸ポケットから取り出した煙草にハンドブラスターで火をつけ、一服するヒューズ。

ヒューズ「さて、これからどうする? ウロネブリの方はなんとかなりそうだ。あと問題はアセルスだけだな。再生する前に話を決めようぜ」

アルカイザー「……彼女を殺すつもりじゃないだろうな?」

ヒューズ「それもあるな。犯罪者として起訴できるほどではないが、参考人として取り調べをすればかなり有益な情報が手に入るだろう。ブラッククロスとは無関係でもファシナトゥールの内情が掴めるかもしれない。……が、のちのちの厄介事を思えばここで事故として始末しといた方が得策かもな」

アルカイザー「そんなことをこの俺が許すと思うのか?」

剣呑な調子で身構えたアルカイザーに、ヒューズは肩を竦めておどけてみせる。

ヒューズ「まあ、そうだろうな。お前はきつとそう言うんだろうと思つたよ。お前の正義ではそういうことになつてゐるんだらうさ。……なら取引と行こうぜ」

アルカイザー「取引？」

ヒューズ「ああ。アセルスは見逃してやる。その代わり、お前は俺に協力しろ。IRPOはいつでも人手不足でな。お前みたいな戦力がいると大助かりなんだわ」

アルカイザー「具体的には？」

ヒューズ「俺の指示に従つてもらふ。勝手に動かれるのは迷惑だし、組織的に行動したほうが効率的だ。ブラッククロスと直接ぶつかるつて時には連絡を入れる」

アルカイザー「それでいいのか？俺はもともとブラッククロスと闘うつもりだった。IRPOと手を組めるのならこちらにも有難いんだが」

ヒューズ「それでいいのさ。これまでは神出鬼没だった特記戦力を駒として戦術に取り入れられるなら願つたり叶つたり。重要なのは「アルカイザー」を戦力として数に入れられるつてことだ。どつかの小僧じゃなくてな」

アルカイザー「ヒューズ。あんた……」

ヒューズ「これからも頼むぜ。相棒」

アルカイザー「……ああ」

がつちりと手を組み、新たな協力関係を結んだ二人。

と、そこへ色紙を手に入れたウロネブリが戻ってくる。纏わりつくウロネブリにアルカイザーが辟易していると、突然ヒューズが「そういえば取引の条件をもう一つ付け加えていいか?」と言いだす。

警戒するアルカイザーにヒューズは皮ジャンを脱ぎだしながらこう言う。

ヒューズ「俺にもサインくれ」

ため息をついてサインの準備をしながら、アルカイザーは倒れたアセルスを暗い目で見つめ、心の中でそつと別れを告げるのであった。さよなら、アセルス姉ちゃん。俺は姉ちゃんと同じ道を歩くことはできないみたいだ……。

■次回予告

IRPOのヒューズと協力体制を結んだアルカイザーことレッド。

ヒューズからの情報提供を受け、故郷・京へと向かったレッドは麻薬捜査を開始した。

怪しい巡礼者を発見したものの足取りを見失ったレッドは謎の機械武者と遭遇、

正義とは、そして人間とは。機械武者の禅問答めいた問いかけにレッドは再びヒーローとしての在り方を思うのであった……。

次回『戦士！ 機械仕掛けの黒鋼！』見てくれよな！

幕間 水月感応／猿と兎

まごうことなき猿であつた。

火斯耶拿^{ヒシヤナ}国の峨尾山におよそ五百匹ほどの猿がいた。くりくりと目は丸く尻も顔もすこぶる赤い手長猿であつた。あまりにもひどい体臭のせいで近くの村人はおろか旅人でさえ山には近寄らず、手長猿たちは山でぬくぬくと平和に暮らしている。日がな屁をこきマスをかきと怠惰に怠惰を重ねた怠惰布団の毛皮を被り続けて幾百年、何ら生産性の無い猿たちの元にとある尼僧が現れる。綺羅めいた瞳の尼僧は細れる小指で山の麓の湖を指さし、『獣たちよ、あれを見よ』と言つたかと思ふところりと菩薩の微笑みを浮かべて天へと昇つた。一筋の煙となつて昇天した尼僧に仰天した猿たちは『はて何か御利益のあるものでも沈んでいるのかしらん』とこぞつて湖へと視線を向けるが、しかしそこには何も無い。いつもの湖が滔々と水を湛えるばかりである。これは狐にもも担がれたかと腹を立てた猿どもだつたが、よくよく馬鹿な猿のこと、もしかしたらあるいはもしやと諦めきれずじいつと湖を見つめ続けた。やがて日が暮れ闇が降り、峨尾山の空は黒々とした夜へと染まる。一日はようやく終わりを迎え今日の出来事はまったくの徒勞であつたかと落胆のため息があちこちで吐きだされたその時、一匹の猿が

『あれは何じや』と素つ頓狂な声を上げた。見よ、見よ。——何かが湖で輝いておる。あれは、水底にひたひたと揺れるあの光は何じや。白々と冴え、滑らかな肉の肌を見せるあの光は。無邪気な声に誘われてそちらへと視線を向けた猿どもはその光を目にした途端にほう、と熱い咳をして唾を飲み込む。

それが何かと答えれば、それは月、であつた。何のことはない。猿どもはただ湖に映つた月に見蕩れているのだつた。

ああ、月は揺蕩う。蕭々と音もなく。それは己が魂を蕩尽してなお足りぬ破滅の美しさであり、獣の本能さえも覆し新たな信仰へと誘う宗教美であつた。

束の間の失語症患者と化して猿たちはまんじりともせず夜半を過ごし、眼球をぎらぎらと風に晒して月を見つめ続ける。美しい。その想いは猿一同みな等しく、法悦の吐息を零し零し水面の月に魂を奪われていった。その夜はたった一夜でありながらしかし猿にとつては千を超え万を超える夜であつた。やがて訪れた朝に太陽が昇りきらきらとした日光が猿の眼を焼き潰すに至つてようやく猿どもははつと正気を取り戻し、『これはとんでもないものを見てしまった』と心胆寒からしめる。何かを愛することは恐怖であつた。愛することは絶望であり、牢獄であり、孤独であつた。もはや自分達が月から逃れられないであろうことがどの猿にもわかつた。ああ、月を視た、と猿どもは思う……それはすなわち、もう月を手に入れずには生きていられないということなのだ。

「さあ月を捕まえるぞ」と猿が言う。

「応」と猿が答える。

月の洗礼を受け哀れ洗脳者と墮した猿どもは再びの夜を待ち、湖に月が浮かぶや否やざんぶと水へ飛び込んで毛むくじやらの腕を月へと目掛け突き立てる。と、水面に映つた月はするりとその爪から逃れ、波紋が鎮まるにつれてまた元の姿へと戻る。功を焦るように猿どもは次々にざんぶざんぶと湖へ飛び込み月をわが身の虜囚とするべく挑みかかるがいずれも叶わず、月は素知らぬ顔で水面を遊ぶ。男の腕かひなから腕へと滑る魔性の踊り子のごとく、月はただ悪戯に猿どもの情欲の飛び交う只中を飛び回つた。

「罅が明かん」と猿が言う。

「大きすぎるからだ」と猿が答える。

手を差し伸べれば姿を隠す月を捉えるためには、水面の鏡に映るその形その輪郭をそっくりそのまま掴み上げねばならない。そう考えた猿どもは手に手をとつて月を囲み、水中を真円で刳り抜くように陣を組む。さあ、もうどこにも逃げ場はない。月という月はすでにしてその形を象り終え、あとはもう持ち上げるばかりとなつた。

「いくぞー」「応！」勇ましく掛け声を上げ二の腕にはち切れそうな力瘤を蓄えて、一世一代の月ムシジメ、擡ムシジメに猿どもは全身の毛をぞわりと逆立たせる。手長猿の巨大なる腕輪はついに厳かな水泡みなわを引き連れて天を指し、歓喜の声が怒濤に上がる。捕まえた！とうと

うやつたぞ！ 沸き立つ心に牙を剥き出し、涎を零しながら今まさに我がものとしたはずの月を抱きしめようと目を見開いた猿どもの眼前に飛び込んで来たものは——あんなんたる悲劇、僅かばかりの湿り気を帯びた虚空だけであつた。

「月が……無い」失望に呻く猿は両目を覆つて悲嘆に暮れ、またある者は「何たる哉！」と憤慨する。こうして一度目の挑戦は失敗に終わつた。

悲しみに溺れそのまま湖深くへと沈んで息絶える者も少なくなかつたがやはり猿は猿、めげることなく多くの猿は次なる方法を求めて旅立ち始める。ある者は思索に耽り、ある者は学問を学び、ある者は凶画として月を記し、ある者は賢者に尋ね、ある者は武芸の腕を磨く。

吉報がもたらされたのはそれから三年後の春であつた。西の都の流安に住むという一灯大師の元を訪れた猿はどうとう真実に触れることとなる。喜び勇んで故郷へと舞い戻つたその猿は元々赤い顔を熟し切つた林檎のように更に赤くして意気軒昂と山の頂に立ちこつた。

「皆の者よ、よく聞け！ 月が肉の手では捕まらぬのも当然のこと。我らの求めたあの月は水面に映る虚像に過ぎん。真実の月は空の高みにあるのだ！」

どよめきと共にとおおという歓声が沸き起こり猿どもの尾っぽはびんと芯を通したように張りつめる。空！ あの雲の、千切れて結ぶ銀の布地のそのまた向こう！ この星

を離れて遠く、天蓋の遙か彼方、ヒキガエルの女神嫦娥じょうがが住まう都！

新たに芽生えた希望に奮える一同はさっそく行動を開始した。学問を修めた猿は月までの距離を計算し武芸を極めた猿は功夫・天踏躰を伝える。図画を深めた猿はわかりやすい絵にしてこれを伝え、思索者は旅立つものの不安を抑えるために無為自然の教えを説いた。

いよいよよとなつた旅立ちの日に、手長猿たちはその長い手と手をしつかと握りしめる。まず三匹が輪を作りその上にまた三匹が乗る。上の三匹はめいめいがこれまた長い尾を下に猿にまきつける。外功——体そのものを強化する功夫によつて鋼の如く張つた尾で全身を吊り上げ、上の三匹はまた円をつくる。そうしてまた猿たちは二段目三段目と層を成していき百を超えるほどの長い長い塔を打ち立てた。本番はここからである。繋ぎ合せた手と手で印を組み今や生ける立体曼陀羅と化した猿どもは毛穴から夥しい汗を噴き出しながら一斉に真言を唱え始める。密なる祭詞によつて濃度を増した神気はついに宗教世界の飽和量を超え現実へと俄かに溢れだし、粘性を伴う大気として猿の体を取り巻いた。後はこの神気に方向性を与えるだけである。練りこんだ体内の剉を螺旋状に編み込み、更にその剉を隣の猿と結びつける。剉と剉、外功と内功を見事に結実させた類まれなる功夫によつて二重螺旋三重螺旋と紐を繕り合わせるように重ねて「道」となし、足元へと添わせる。足先から噴出する神気にふわりと浮かびあ

がった猿の一群は見る見るうちに宙を飛び、第一宇宙速度に到達してから後は安定を求めて到道を足からゆつくりと引き上げ尻尾の辺りに固定する。

畜生、かくあれかし。猿は尻から神気を噴出して空を飛翔す。こうして猿どもは故郷の星を棄て別の星^{リジョン}へと旅立っていくのであった。

さて。こうして重力から脱出した宇宙猿たちがその後どうなったのかといえ、結末は様々である。全ての猿が月へと到達できたわけではない。ある者は力尽きて星屑となり、またある者は星々の誘惑に駆られ違う星を安息の地とする。ある星へ残った猿は齊天大聖を名乗って暴れまわり、また別の星へ残った猿は鍛えた功夫を活かして戦闘民族として一族を増やす。また別の者はとあるおさる刑務所に入れられるもその善良性から囚人たちの支持を手に入れ、また別の猿はとある美女を巡ってカール・デンハムと争う。物語の上では多種多様に語られその真実ははつきりしない。月へと辿り着いた猿の一群も謎の直方体に触れたことよって知性を獲得し長き世の繁栄を手に入れたという話もあれば何度となく飛来し無限に伸びる拳によつて絶滅したとも伝えられている。

旅立っていった猿たちの真実は定かではない。しかしだからといって何の問題があるのか？ この物語は旅立っていった猿どもの物語ではなく、旅立つことのなかった猿、最後にたつた一匹残された猿の物語なのだから。

たった一匹残されたその猿は空へと旅立っていった仲間達を遠い目で見つめる。泣きごとを言うでもなく強がりも吐くでもなく、どこか冷たく機械的ときえ言える瞳で空の青を捉え続ける。

ああ、独りになつた、と猿は思う……。それでもまた懲りもせずに夜を待ち、湖に映つた月を見て今日こそはと考え、鋭い爪で水面を何度となく掻き巻く。しかし月は獲れない。求めるものは得られない。それでも猿はため息をついたりはず、眼球の奥に静かな炎を焦がすのだった。

ところで、この一連の大いなる冒険——あるいは愚行——には一人の目撃者がいた。やがて物語の語り部となるであろう彼女は世界を旅してまわっている女拳士である。ひつつめ髪に黒の長衣というさっぱりとした装いの彼女は怖ろしいほど美しい女性ではあつたが、美的感覚の異なる猿にはまるで通用せず、したがって彼女自身もまたことさらに自らの美を誇るといふことはせずに淡々と佇む。愚かなことを延々と続けるこの猿を哀れにでも思ったのだろうか、それともどうしようもない馬鹿者を見つけてからかつてやろうとでも考えたのだろうか、彼女は馴れ馴れしい態度で猿へと語りかける――

「猿よ」と彼女は言う。「おぬしの一族はみな行ってしまったぞ。なぜそなたはついてい

「かなかつた？」

問われ、しかし猿は答えない。答える義務を感じなかつたのかもしれない。所詮、猿と人である。何の意味があつてわざわざ言葉を交わさねばならないのかとも思つたのかもしれない。

「これ」

彼女はしつこく声をかける。それでも猿は答えない。はじめは素知らぬ顔をしていた女拳士だつたがしだいに顔をしかめ出し、緩慢な動作で足元の小石を拾い上げたかと思ふと勢いよく猿目掛けて投げつけた。石はちようど猿の側頭部に直撃し、鈍い音を立てて猿の頭が大きく傾ぐ。が、猿はさほど驚いたり喚いたりせず、傷跡を不思議そうにぼりぼりと掻き耨るだけであつた。更に機嫌を損ねた女拳士はくわつと顔を歪め、甲高い声で猿の振る舞いを咎め始めた。

「何じゃあその態度は。畜生の分際でこの『飛音拳』の夏か零れ花の言葉を知らん顔とは。身の程を知れ！」

間近でキーキーと騒ぐ彼女を流石に鬱陶がつた猿は、物憂げに口を開く。

「……生憎と、この猿めは武林を知らん。江湖を知らん。拳士どのはさぞご高名なお方なのであろうが、寡聞にしてその名は存じ上げぬのです。まことにあいすまぬ」

「……む」

と夏零花は僅かに鼻白む。思いのほか（猿にしては）丁寧な返事だったので氣勢を削がれたのである。

「そうか。まあそこまで言うのなら許してやらんでもないぞ。何せたかだか猿じゃ、この夏零花を知らんのも無理はない。……仕方がないのう、教えてしんぜよう」

というと彼女はバツ、バツと音を立てて身を翻しながら功夫の套路を踏み、御大層な自己紹介を披露する。

「西に聳える尊存寺が華山派拳術！ その絶技を伝えしは孤高の仙女！ 百年を生き千年を生きるは麗しき美貌、零式永遠功によつて久遠の時を長らえ、音よりも迅はやき拳で悪を討つ！ 飛音拳の夏零花とは妾のことじゃ！ 拍手！」

長つたらしい口上に猿はうんざりした様子だったが、賢明なことに手を叩くことを忘れなかつたため夏零花の機嫌はいくらか良くなった。

「うむ、うむ。それで良いのじゃ。はじめからそのようにせんか、この大うつけめが。――さて、それでは本題に戻るとしよう。のう、猿よ。おぬしはなぜ、空へ行かなかつたのじゃ？ おぬしたちの求めるものは、あの天の遥かにあつた筈。己が望みのために辺境地を目指すことは何も間違つてはおらん。なぜ旅立たなかつた？ なぜ、おぬしは独り残つたのじゃ？」

「簡単なことだ」猿は答えた。「私が欲しいと思つたものは、これだ」そう言つて湖の月

を指さし、それから空を見上げる。「あれではない」

「ふむ……」感慨深げにため息をついて、夏零花は一緒に空を見上げる。「然り」

「わかつて頂けたか？」

わかつたのならどこかへ行つてくれ、と言外に匂わせつつ猿はあらぬ方へ顔を向ける。が、夏零花は気付かぬまま会話を続けた。

「時の流れの話をすれば、なるほど確かにそうじゃのう。初めに猿どもが欲しいと考えたのは湖の方であつた。——じゃが、おぬしも知つておろう。それは月が水に映つた虚像に過ぎん。実体を持たぬものをどうして手に入れられよう？」

微かな揶揄さえ込められたこの言葉に、猿はしかし迷いなく静かに答えた。

「できるかできないかは私が決める。まだ死んではいけないのだから」

そつけないその言葉に夏零花はどことなく嬉しそうに笑い、か、か、と声を上げる。

「……おぬしを見ていると、昔の知り合いを思い出す……。猿のくせに面白いのう、おぬしは。今度あやつにあつた時に言つてやるとしよう、貴様はとある猿にそつくりじやつたとな」

「それは私には関係のない話のようだ。……もうよいでしょう？ 私を月を引つ掻くの忙しいのです」

「そう急ぐでない、猿よ。妾を誰じゃと思つておる。この夏零花はおぬしの百倍、千倍の

時を生きている女じゃ。月が欲しいというおぬしの願い、叶えてやれんでもないかもしれないぞ?」

すると猿の形相は俄かに真剣味を帯び、竹まいを正したのちはゆつくりと息を吐きだし、緊張をにじませた声で尋ねる。

「……あなたは知っているのですか? あの月を手に入れる術を」

「さてな」

「この獣を黓るつもりなのですか、夏零花どの」

「急くなと言ったであろう。答える前にはまずいくつかの問いが必要じゃ。良いか若者よ。疑問を抱いた時もつともな肝要なことは、その疑問の内容を精査し厳密に定義することじゃ。自分が何をわかっておらんのかも定かでないまま足りん頭を捻るのは愚か者の振る舞いと言うもの」

「疑問、でございませうか」

「では問おう。猿よ。おぬしの求める月とは何じゃ」

「月とは、そのことにございます」

猿は湖を指さして言い、夏零花は首を傾げて恍けてみせる。

「それ、とは何じゃ?」

「それ、とは、月、でございます。月とは銀河の果ての天体。この場合は天体の姿が湖に

映った写像のことを言います」

「良き哉。諒解である。……では続けて問おう。おぬしの望みは手に入れること。手に入れる」とは何の謂いなのか？」

「手に入れる……」

と、ここで初めて猿は言葉に詰まる。

「おぬしにとつて、手に入れる、とは？ たとえばそれは虚像たる月を物質化し保有したいということの良いのか？ それともおぬしが試みているように実物として持ち上げ、抱きしめ、あるいは頬ずりをし口づけを落とすことなのか？ それは占有を意味する言葉か？ 他の誰にも奪われたくはないという感情を伴うものか？ 自分以外の何物にも触れられてならないと感じるのか？」

「私は……」猿は口元に僅かな動揺を浮かべつつ、夏零花へと低く頭を垂れた。「……お恥ずかしながら、心が洗われるようでございます。この猿、まるで考えが足りませんでした。私はただ、手に入れたいとなにかに追われるように焦るばかりで、自分が望む物の何たるかをわかつてはおりませんでした」

「気にする」とはしない。猿なのじゃから、それは仕方のないこと」

「ですが」と猿は言いかけ、やがて恥じるように下を向く。「……いえ。いまさらの後悔は遅きに失するというものですね。時は既に流れてしまいました。この悔む心が時を

遡ることはない……」

「気にすることは無い、と妾は言った。おぬしは猿じゃ。所詮、生き物の思考というものは本能と生活文化に左右されるもの。猿であるおぬしがこれまで考えねばならなかったのは、食べること、まぐわうこと、そして寝ることのみ。形而上の概念に疎いのは、これは何度も言うが仕方のないことなのじゃろう」

「……有難いお言葉でございます。夏零花どの。人間であればそのように考えられるものでありましようか？ 人になれば、私もまたあなたのように物事を捉えられますでしょうか？」

「……さて、どうかな。人であつても機械のようにしか考えられん者もいるからのう……」

「猿は人になれますか？」

「もちろん、可能じゃ」

「それはまたどのようによ……？」

「時を待てばな。何万年も経てばもしかしたらおぬしは人に進化するかもしれん」

「いや、そのように迂遠な方法では私の寿命が持ちませぬ」

「では人を食え」こともなげに夏零花は言った。「化生は人肉を食らうことで人の髓を取り込む。人の肉を食い、人の皮を被り、人のような言葉を話せ。人化の法とはおおむね

そのようなものじゃ」

「人を食うのですか？」

流石の猿も声を響め、おそろおそろといった調子で夏零花を眺める。「失礼ながら夏零花どの、あなたもまた人ではありませんか。だというのにそれは」

「わらわは人ではない。よって、いくら人が死のうと知ったことではない」

夏零花は残酷なことをさらりと言った。

「人ではない？ ではあなたは一体？」

「わらわは妖魔。人とは異なる時の流れを生きるもの」

「では私も妖魔になれば……？」

「うーむ。いや……おそらくそれは無理じやろうな」

「何故ですか？」

「おぬしが醜いからじゃ」

「そんな……」

「醜いものは妖魔にはなれん。おぬしのような猿を吸血しようという者がいるとも思えんし、まあそれだけは諦めた方がよかろう。妾もまあ、猿が同じ種族になるといのは何となく嫌なのでな」

「では、やはり人にならねばなりませんか」

「なぜ若者というのはいくまで先を急ぐのか？ 簡単な手段や手っ取り早い方法ばかりを求めて年寄りの話を聞かぬのか？ 人になるのであればまず他者の話をきちんと聞け。己の心で考え、口に出し、そして他者の意見を受け入れよ。良いか、猿よ。話が随分逸れてしまったが……。人になる以前の問題としてまだ決めねばならぬことがある」

そう言うとき夏零花は一度口を閉じ、どこか遠い目をしながら淡々と語りだした。たとえはの話をしよう。

世界を一秒手に入れたいというのなら誰にでも簡単にできる。目を閉じて胸に手を当て、世界は自分のものだと唱えればよい。そうするだけで世界は自分のものになる。様々な要因や自分以外のあらゆる生き物の影響性を排除して、ただ自分だけの世界を見つめ続けさえすればそれができる。だがそれが二秒三秒と増えていけば簡単ではなくなる。痛みや苦しみ、この世の理不尽に打ちのめされ、ひよっとしてこの世界は自分のものではないのかという疑問が鎌首をもたげてくる。

誰かを手に入れたいと言うのなら、一秒、愛する者を抱きしめて口づけを交わせばそれでよい。それが無理なりにであろうとも、その一瞬限りは自分のもの。愛する者をその手にできる。だが二秒三秒と増えていけばそうはいかない。時が無限に増え続けるのなら無限の心変りがあり無限の諍いが待っている。

たった一秒でいいのなら世界の全てを手にすることができる。だがそれ以上を望むのなら、時はやがて牙を剥き『永遠』という名の怪物となる。

愛する者はいつか死ぬ。記憶はいつか失われてしまう。

猿。お前は月を愛した。お前が愛したあの月は、しかし見つめるそばから過去へ過去へと下がついていく。一秒前の月は二秒前とは違う。三秒前とも、四秒前とも。――

もちろん、お前の愛がそこまでを気にしないと言うのであればそれはどんなに幸いなことだろう。だがもしもお前がこの月を十年後にも見ていたいのなら、十年間のこの月を守らねばならない。この湖が土に埋まれば月は映らん。湖の形が変われば水面に映る月もまた姿を変えてしまう。そうであるからには十年間のこの月を、この湖をこの星をお前は守らなくてはならない。この星を不変とするすらにはこの世界もまた守る英雄にならなくてはならない。この世の守護神、ヒーローにならなくてはならない。

そして、また……そうして守るこの月を独り占めになりたいと思うのなら、誰にも汚されたくはないと願うのならば、乙女の処女性を守るように頑なにならねばならない。どんな手段を使つても守りたいと願うのならば、お前の隣に立つ女を殺せ。この月を奪う可能性を少しでも備える者は、遠慮容赦なく殺し尽くせ。女を殺し、男を殺し、この星の生物全てを殺して――この世全ての殺戮者として君臨する、それがお前の願いなのかもしれぬ。

猿よ。『手に入れる』ことはそういうことだ。何かを愛するというのはそういうことなのだ。

夏零花のあまりにも恣意的な極論に猿はしばし唾然とする。この世の守護者？ 殺戮者？ いくらなんでも。その言の途方の無さには呆れを通り越して感心さえしてしまふ。

「私は」と猿は言う。「別に永遠に月を占有したいと考えているわけではありません。この月を眺めようとする私以外のものを殺そうとも思いません。私は……私はただ、この美しい月を手に入れたい、ただそう思うばかりなのです……ですが、その言葉がどのような行為を示すものなのか、いまだ私には判然としないのです……」

「そうか」

答えて、夏零花は優しげに猿を見つめる。

「月を愛し、しかしおぬしはそのために英雄にも殺戮者にもならんと言う。それは幸福なことじゃ。そうして程度というものを弁えることができるのなら、おぬしはオルロワージュにはなるまい」

「オルロワージュ？ それは誰のことですか？」

「……さあのう。いささか口が滑りすぎたかもしれぬ。ちと長居をしすぎたか……」

「夏零花どの……」

「猿よ」別れ際に背中を見せて、夏零花は寂しそうに告げた。「おぬしが諦められるというのなら、それが一番じゃ。もしそうでなくとも、『手に入れる』という言葉が優しく受け取り、時々眺めては小さなため息をつく、そのくらいで満足できるのであればそれでも良い。だがおぬしは言った。『私が欲しいのはこれだ。あれではない』と。そんな言葉をおぬしにするおぬしのこと、きつとその意地は自らを苦しめることになる。考えて、考えて、考えて……それでも叶わぬ想いにいつか世界の理不尽を感じるのなら、おぬしもまた永遠を求める怪物の一匹なのかもしれない。……くどくどしい説教を垂れてすまんだな。ではこれでお別れじゃ。さらば、猿よ。達者で暮らせ」

とぼとぼと元氣のない足取りで夏零花は去っていき、あとには再び猿だけが残される。

夏零花と別れたあとで、猿はしばしば彼女の言葉を反芻した。言いたい放題言ったくせに結局肝心の月を手に入れる手段については教えてくれなかった件の女拳士。ああだこうだとぬかした割にはなかなかどうして感傷的にすぎる台詞。永遠だ？ 怪物だ？ 一体何の話をしているのだ、あの夏零花は……。首を傾げて考えながらそれでも彼女の言葉は不思議と心に残り、猿は月を見ながらぼんやりと考えた。



一年二年と時は過ぎ、相変わらずの月である。けだものの手をいともやすやすと擦りぬけて水面に遊ぶ月である。猿はつい寢食を忘れ月を手に入れることに夢中になりすぎるあまり、気がつけば骨と皮だけの骸骨猿になっていた。今にも死んでしまいそうで不健康極まりない猿は今日も一日湖を見つめ、ああ、月が欲しい、と頑なに願うのであった。

夏零花は言った。本当に何かを手に入れたと思うのなら、人は世界の守護者にして殺戮者にならねばならぬと。けれどもこの猿はいえ、そこまで欲深ではないし業突く張りでもない。旅人や他の獣たちが月を覗きこんだとしてもそれはそれで構わぬと思えたしちよつとやさつと湖が形を変えたくらいで月の美しさが損なわれるとも思われぬ。試したことはなかったが他の湖や海だとしてもそこに月が映ったならば自分は美しいと思うのかもしれないと時々猿は考えた。なにしろ月である。月と言うのはとかく不実な女であつて、今日は下弦、明日はつごもりと出会うたびに姿を変える。男と褥を共にする夜ごとにその衣装ばかりか瞳の色さえも変じてみせる魔性の娼婦のように、刻一刻、その形は移り変わるもの。今日の月は明日の月とは違う。その月を連日連夜愛するというのは一体全体どのような愛なのだろう……自分自身、訳が分からなくなりながら猿はそれでも太く険しい獣の指をそつと湖に映つた月の淵に差し込んでそ

の輪郭を柔らかに撫ぜる。美しいと思ひ愛おしいと思う。その感情が甘やかな蜜のように獣の心を満たしていく。

ああ、美しい。だから、きつとこれで良い。見ているだけで、感じるだけで。寄り添うことができるのなら、忘れずにいられるのなら、ああ、それ以上の幸福がどこにあるか！

月に向かって猿は吠える。己の衝動を、本能を、突き立てるが如くに遠吠えを上げる。私は満足だ。これでいいのだ。——ああ、ほんとうに、俺は！

——ほんとうに？

本当にこれで良いのだろうか。これだけで良いのなら、どうして自分はここにいるのだろうか。食べることも寝ることも忘れて、魅入られたように金縛りにあっているのだろうか。意固地になったように取り憑かれ、このまま滅びを迎えようとしているのだろうか。

……そう。滅びだ。自分はまもなく死ぬ。それぐらい、猿にだってわかつていた。わかつていながらもやめられない。湖の傍を離れようだとか、少しくらいは目を離してもいいだろうという気持ちにはどうしてもなれない。それは何故なのだろう。愛という

ものは一体どういうものなのだろう。

空腹のあまり胃が痙攣する。血走った眼球がぐるりぐるりと不連続な回転を始める。手先は震え、不節制のために体中にできた吹き出物からはとろとろと気味の悪い汗が絶えず零れだす。

それでも。

湖に映る月を見た。美しい月だった。後悔の念を覚える暇などありはしなかった。運命の女に囁くべき言葉は悔恨や怨嗟ではなく愛の言葉ただ一つ。愛していると猿は言う。

ああ月よ。それでも君は美しい。しかし自分はどうやらそろそろ死ぬらしい。なんということだろう。もう会えなくなってしまう。心が滅びればおのずとそうなる。まだろう。仕方がない。仕方がないことだ、これは。猿。私は猿だ。猿は猿に過ぎず猿としてしか生きられぬ。さらば月よ、さらば我が命よ。ああ、死にぞこないの今ならわかる。この世はなんと理不尽なのだ！ 私は死にたくなどないのだ。もつともつと月を見ていたいのだ。どうして……どうして、月は私のものにならないのだ。納得など、ゆくものか。

ああ。あの時。私の仲間たちが空を目指したあの時、私はなぜついていかなかったのか。ただ一人遺され、私はどう思ったのか。そして——そしてあの女拳士に尋ねられ、

『私が欲しいのはこれであれではない』と答えたのは何故だったか。その時感じた感情は何だったのか。

そこには怒りがあつた。意地があつた。理由も説明もなく押し付けられるものに対する激憤があつた。

愛したものは虚像だった。同じものを同じように愛したはずの同族たちはいとも簡単に月を諦め、文字通り尻軽にも天へと昇つていった。

だが、自分は違う。自分が愛しているものは湖に映つたこの月だ。それ以外の何物でもない。空に浮かぶ月でもなければ掛け軸に描かれた墨絵でもない。いま、この時に、目の前にいるこの月が、この月こそが俺の愛した女なのだ。

何故だ。何故自分はこんなものを愛してしまつたのだ。なぜ、自分の愛したものが手に入らないのだ。そんなものはおかしいではないか。条理に反してはいないか。だつて愛しているのだ。抱きしめてなお足りぬほど惹かれてしまうのだ。手に入れないければ、嘘だ。そんなものは、世界はあまりにも邪悪だと言ひようがないではないか。

悶え、苦しみ、じたばたと恨み事を吐き捨て、惨めつたらしい醜態を晒して猿はいまさらにして泣き喚く。

夏零花の言つたことがようやくわかつた。

自分はどうしようもなく月を手に入れたくてたまらなかった。

そして、その願いはもう永遠に叶うことなどないのだった。

憎しみに満ちた叫び声を天へと放ち、それから猿は涙を流しながら湖の月へ愛を告げた。それが別れの言葉となった。

猿の涙がしとしとと体毛を伝い、水面の月に静かに溶けた。

◇

何かを手に入れたいと強く想ったその時に……。

失ったものを取り戻すために……。

俺は……。

『——幻肢再現システム終了。疑似体感覚接続解除。有意知能を再起動し覚醒フェイズへ移行します——』

「私は……」

ノイズ混じりの音声、一人言。胸元の内臓スピーカーから罅割れた声が漏れる。喋ったつもりはなかったが無意識に自己反芻回路が開いていたのだろうか、感情に乏しい声

が自我の在り処を尋ねている。

「私は……」

呟いて、アイカメラの捉えた映像を確認する。天井には光度の強い蛍光灯が輝いている。周囲の生命反応は二個体。壮齢の男性一体。その後ろに女性体が一つ。その男が誰なのかを自分は知っている。知っている筈だ。……誰だったか。

「ア、アア……」

「ようやく目覚めたか。自分が誰なのかわかるかね？」

私は誰なのか、と彼は尋ねている。自分の身体構造を再確認。機械の体、兎の耳を模した感度端末。金属を主成分とした人型ロボット。記憶領域を走査、情報抽出。私は……猿？ いいや……？ 私は……。

「私は……」

「人格混濁が見られるな。幻視体験の副作用としては仕方のないところだが」

私ははたして誰なのか？ 自己を定義できなくてどうして活動できよう。私は何者なのか。私は……猿だ。いや……何かが違う気がする。『気がする』とはどういうことだ。そんな機能は存在しない筈。だが……いや、自分はたしかに猿だった。哺乳類。モンキー。

「わたし、は……猿……いいや、兎……うきぎ？」

その言葉を口にした途端に思い出した。自分の識別名が何なのか、そしてこの男が誰なのかを。

「……失礼いたしました。ドクタークライン。型式番号7874—8782—DRC0012Rabbithead、幻視実験から帰還いたしました」

「うむ。それで良い」

男——ドクタークラインは満足気に頷く。満足気、という言葉は頬筋の弛緩度から推察されたものだ。博士の表情を『満足』と判断することが一体どれだけ有意な行動かは疑わしいが。

形式番号7874—8782—DRC0012Rabbithead——すなわちラビットヘッドは再び辺りを見回す。今、自分が載せられているのは白色硬石製の拘束台だ。首筋の外部入力端子から伸びたケーブルが拘束台の脇に備え付けられた端末に伸び、繋がっている。塵一つない実験室。強化ガラスと無数の監視カメラに囲まれている。助手である女性——ローミンが拘束を慣れた様子で外していく。拘束台から足を下ろすと甲高い音を立てて踵が床を叩いた。ローミンは全身をパンク・ファッションに身を固めている。黒づくめの扮装、鋭く尖る頭髮。彼女の扮装を敵性レベルFと再定義し警戒する。

「それで？ 何か収穫はあったかね？」

ドクタークラインが話しかけてくる。造物主である彼の言葉には従わなくてはならない。収穫、と彼は言った。自分は何をしていたのだったか？

「……幻肢実験を完了いたしました。私は猿でした。猿は月を手に入れようと願いましたが、形而上の問題でそれは叶いませんでした」

「それで？」

「それで、とはどのような意味でしょうか。質問の意図をご説明願います」

「ふむ。これは困ったな。……ローミン君？」

促された助手ローミンは顔を顰めながらこちらを向く。……めんどくさ、と呟いてからローミンは首の骨を鳴らす。

「幻肢体験システムは凝縮した情報を疑似脳に叩きこむことで仮想的な人格を経験させるためのもの。わかる？ クラインおじいちゃんが研究しているのは機械にヒトの心を植え付けることで強化を図る技術。だからあなたは過去の夢を見ていたってわけ」

「その情報は既に入力されています。再入力を要求します」

告げると、ローミンが睨みつけてくる。彼女はドクタークラインに愚痴る様に口を尖らせて見せながらこちらを指さした。

「おじいちゃんコイツうざい」

「はっはっは」

ドクタークラインが楽しそうに笑う。ローミンの見た反応との因果関係は不明。

「ラビットヘッド。猿の一生を見て君はどう思ったかな？」

「保存されている内部仕様情報によれば魂は実装されておりません。『思う』という機能を発揮することは不可能です」

「いいや？ そんなことはない。君にはちゃんと『心』を再現する力が備わっている筈だ。……もちろんそれは人間のものとは違うかもしれないが、しかし人間の心というものが一体何なのかということはしよせん物語の領域だ。心という存在を定義することができる。模倣することができる。ラビットヘッド、魂を仮想領域で実行したまえ。判断すべきフレームを決定し、情報を精査、入力された例から自らの反応を決定する。心とはそういうものだろう」

「……了解。試行開始」

ラビットヘッドは俯いて内部プログラムを目まぐるしい速度で走らせる。処理すべき情報の多さに体内の熱量が急速に上昇する。

「どうかね？」

ドクタークラインが言う。ラビットヘッドは淡々と答える。

「猿の行動は無為でありました。論理性・合理性に著しく欠けています。……一つ、質問

してもよろしいでしょうか？」

「ふむ」ドクタークラインの口角が上がる。心拍数が僅かに上昇する。「言ってみたまえ」

「なぜ、猿なのですか？ 形式番号7874—8782—DRC0012Rabbit headはヒトの心——侍、武人、もののふの精神活動を学習することで機械以上の能力を発揮することを目的に造られています。猿はホモサピエンスではありません。猿を模倣する必要性は皆無です」

「そうかね？ 君はあの猿が人間以上の心を持っているとは思わないか？」

「心に以上と以下があるのですか？」

「これは一本とられたな」

「仮にあの猿が人間以上の心を持っていると定義します。しかし私が模倣すべきは人間のものです。『以上』である必要はありません」

「これは弱ったな……。ローミン君？」

「ウサギ頭。おじいちゃんを困らすんじゃない」

「そのような意図はありませんが、失礼いたしました。ローミン嬢」

「むかつく」

「そのような意図はありませんが、むかつかせてしまい申し訳ありません。ローミン嬢」

「ちようむかつく」

「はっはっは」

ドクタークラインがまた笑う。

「しかしラビットヘッド。そうそう猿を馬鹿にするものではない。猿は君の人工知能に蘇った幻肢痛覚。幻肢痛とは、*“失った筈のものが痛む”* ことを言うのだよ？。あの猿もまた君の忘れていた人格なのだ」

「私の人格モデルは猿だったのですか？」

「そこまで驚くことはない。あくまでもモデルの一つだったというだけだ。人間が取る行動パターンをインプットするために多数の人格モデルを用意した。君はその一つ一つの体験を学び、最終的にヒトの心を手に入れて欲しいのだよ」

「ドクタークライン。あなたは本当にそんなことができるとお思いなのですか？」

「大いに思うとも。……さあ、君には次の任務を与えよう。市街地への潜伏任務だ。まずはクーロンにとびたまえ。シップの発着場にガイドを待たせておく。潜伏場所・活動資金については彼女の案内に従うように」

「潜伏任務。目的は何ですか？」

「目的は潜伏だ。それ以上でも以下でもない。君の任務はクーロンの市井を体験し、その過程で『何か』を学ぶことだ」

「何か？ 何かとは何ですか？ あまりにも指示が不明瞭な——」

「ラビットヘッド。人間の人生はいつだって不確かなものなのだ。誰も自らのやるべきことを教えてはくれないしどこへ行くべきなのかもわからない。人はみな旅人だ。どこの辺境地へ向かうのかは自分で決めなければならぬ。自分が学ぶべき『何か』。手に入れるべき『何か』。その曖昧模糊とした言葉を現実のものとした時、君は本当に人間になれるのかも知れない」

「……任務。拝領いたします」

ドクタークラインの謎掛けめいた言葉に論理回路の処理メモリが見る見るうちに嵩んでいく。それ以上の問いかけは無意味と判断し、ラビットヘッドは実験室を出ていく。



彼女の名は芙蓉^{フージュエ}杰といった。過度に丈の短いスカートにタンクトップ、毛皮のジャケット。腕にはブランドもののハンドバッグを提げ、白いハイヒールの踵で苛立たしげに床を叩いている。険しいというよりも荒んだ目つき、三白眼。不健康からか目の下には隈が出来ておりそれを隠すために目元の化粧が濃くなっている。胃の収縮や呼吸か

ら察するに恐らくは睡眠不足、あるいはバッグの隠し底に忍ばせた酩酊系薬物によるもの。

クーロンのシツプ発着場に降りたラビットヘッドを出迎えた『ガイド』は見るからに娼婦といった格好をしており、そして実際に娼婦だった。潜伏地となる安アパートまでラビットヘッドを案内する途中、彼女は声をかけてきた男と小一時間姿を消した（悪い、客がついちまったから、どこかその辺で時間つぶしてくれろ?）。

衣服というものは人間を天候や気温など様々な外的要因から保護するためのものである筈だったが、彼女の素肌はほぼ7割が外気に晒されている。ラビットヘッドは芙蓉杰の後ろ姿を眺め、「あなたの股間は脆弱部位ではないのか? 装甲を増設し保護するべきではないのか?」と尋ねたが、帰って来たのはこちらを小馬鹿にしたような表情と理解しがたい言葉だった。「これは自分の武器であり、主に威圧と顕示に使用するものである。殺傷を目的とした武器は秘匿すべきであるが、これに限ってはそうではない」という主旨の言葉を彼女は言った。

芙蓉杰はカツカツとハイヒールを高らかに鳴らしながら歩く。生来の気の短さかそれとも苛立ちのためか、その速度はひどく速い。ジャケットのポケットに手を突っ込み、だらしなく背筋を曲げ、眠たげに瞼を痙攣させながら日差しを避ける。

駅——シツプ発着場から離れるに従ってクーロンの街並みは見る見るうちに清潔感

を失い貧民窟やブラック小屋が増えていく。発着場周辺では観光客相手に秋波を送る娼婦達も、離れるにつれて明らかに質は落ち、服装や化粧もみすぼらしくなっていく。

駅の発着場で「ミスタ・ラビットヘッド？」と尋ねてからというもの芙蓉杰は一言も話しかけようとはしなこなかった。ラビットヘッドもまた何らの必要性も感じられなかつたために無言を通していたが、その内に何か話すべきなのではないかと判断する。

レッスン1、人になるにはどうしたらいいか。まずは会話を楽しみたまえ、とドクタークラインは言った。芙蓉杰はラビットヘッドのガイドである。クーロンの武装レバルや治安情報など、予め確認しておくことで今後の戦況が（何と戦うのかはともかくとして）有利に働く可能性は高い。

「ミズ・芙蓉杰？　いくつか確認したいことがあります。まず——名乗る前から私がラビットヘッドだとわかったのは何故ですか？」

「それ、答えなきやいけないわけ？」

面倒くさそうに彼女は言った。気だるさを隠そうともしない。人と人が出会い会話をを行うのであれば当然纏うべき最低限の愛想というものが完全に欠けている。なぜか——。思考し、ラビットヘッドはこう考える。それもそうだ、自分はメカで、人ではない。

「あなたは私に協力するように言われているのではないですか？　もしそうであるのなら、

ら質問に答えてください。これはわたしの任務に必要なことです。もしそう言われていないのであれば、あなたがどのような指示を受けているのかを教えてください。私はあなたの任務を阻害しないように行動します」

「あー……」くぐもつた声で芙蓉杰は唸る。「まあ、なあ。協力しろと言われたかと言や、そりや言われてるんだけどさ。だからってあたしに何ができるって言うのかね？ ただの人間なのにさ」

「あなたはブラッククロスの構成員ではないのですか？」

「んなわきゃないでしょ。見ての通りの女だよ。協力なんて言われても、買い出しくらいしか出来ないよ」

「不可解です。なぜあなたがガイドに選ばれたのでしょうか？」

「話は簡単だね。ブラッククロスはクーロンの風俗ビジネスにも手を出してる。あたしはこの元締めに借金がある。ありがちありがち」

「現地の工作員として専門的な訓練を受けているわけではないのですね」

「当たり前だろ」

「残念です。しかし大きな問題ではありません。私の任務において戦闘が発生する可能性は低いでしょう」

「……あんたの任務って？」

「人間性を獲得することです」

「人間性？」オウム返しに呟き、芙蓉杰は顔を引き攣らせる。「ハッ。そりやまたコーショーなおメカ様がやってきたもんだねえ……。人間性と来たもんだ」

「おかしいでしょようか」

「おかしいね。あのさ、こんなクーロンのドブ街には人間性なんて転がってねーの。そうゆうのはさあ……。何て言うか、余裕のある奴のやることなんじゃないの。哲学とか芸術が発達するのは金持ちが奴隷に働かせて暇な時間ができるからなんだ。あたしら人間が必死こいて稼いだ金の大半を上役にはねられてさ……。安酒で誤魔化して不貞寝して、隣の奴は窃盗犯そのまた隣は強姦魔、誰にも殴られなかつたら超ラッキーなんて生活を送ってるって言うのに、ひよっこり現れた機械野郎にボク人間になりたいでござるよなんて言われてもやかましいとしか思えねーわ」

「……」

「ごめん。悪気はないんだけどさ……。いや、まああるんだよね悪気は。うん。そりやああるよ……」

「……申し訳ない。ミズ・芙蓉杰」

「……着いたよ」

芙蓉杰は足を止め、目の前の安アパートに顎をしゃくる。

「この204号室があんたの部屋。その隣があたし。機械に必要なかどうかはわからないけど、ガスと電気は通ってるから。ゴミ出しは火曜・金曜の朝9時まで。洗濯機は共用でコイン式の奴が外に置いてあるし壊れて使えなかつた時は大家に言えばある程度カネは返してくれる。……なにか聞きたいことは？」

「あなたが自身の生活レベルの低さから『人間性の獲得』という言葉に反感を覚えるのは仕方のないことです。しかし任務は任務です。協力を強く要請します」

芙蓉杰は空を仰ぎ、何事かを考えこんでから穏やかに言った。

「うるせー。死ね」

◇

人としての一般常識を学ぶべくラビットヘッドは芙蓉杰との会話を試みる、彼女の頑なな態度もあり芳しい結果は得られない。

夕方になると芙蓉杰は街娼に立ち、朝まで戻らない。その間ラビットヘッドは何をやってもなく安アパートの一室で情報収集に励んでいる。テレビを眺めるのがもっぱらだが、最近では電子端末に保存された書物を読むことも多い。遙か古代に著作権の消滅した文芸・美術・音楽などは有り触れた端末からいつでもどこでもダウンロードできる。日々の食事や仕事のための衣服・化粧だけで稼いだ金をほとんど使い果たしてしまう芙

蓉杰には現代的なクーロンの娯楽を利用するだけの資産はなかったが、擦り切れて古ぼけた物語ならば無料で手に入る。ラビットヘッドは芙蓉杰の端末を借り、人間の文化を学ぶべく様々な小説を読み耽る。『バイセンテニアル・マン』を読み『造物主の掟』を読み『あなたの魂に安らぎあれ』を読む。

ラビットヘッドは眠らない。睡眠をとる必要がないからだ。電子書籍の文字データを直に取り込みながら静かな夜が過ぎていく。仮に人間の代謝や生活リズムが魂を生み出す元であるのならドクタークラインに睡眠機能を付けてもらうべきかもしれない、と考えているとやがて仕事を終えて芙蓉杰が帰宅する。『ガイド』である彼女に活動報告も含めて端末を返却しに行くと、その日の彼女は料金交渉で揉めた客に殴られたらしく右の頬を真っ赤に腫らしている。病院へ行くことを勧めたが「そんな金あるわけないじゃん」と鋭く睨みつけられる。芙蓉杰は健康保険には加入していないようだった。ガイド役をこなした分の報酬はもらっている筈だったが、詳しい金額については口を閉ざしたきり教えてはもらえなかった。

芙蓉杰は手渡された端末を起動し、既読リストから一番新しいものを選ぶと空間に投影させてばらばらとめくる。

「どこまで読んだ？」と彼女は尋ねる。

「ジャスペロダスが王様になった辺りです」とラビットヘッドが答える。

「へー。馬鹿馬鹿しい」と不機嫌に唸り、芙蓉杰は顛末を放り投げる。「こんなもの読んだって人間になれるわけなからうに」

「しかし思考の助けにはなるでしょう」

「ここに書かれていることは全部ウソなんだよ。フィクションなんだからさ」

「では人間になる方法を教えてください」

「さあね」

芙蓉杰は部屋着に着替えると流し台に立ち、これまで数え切れないほどの男を殴つて来たせいであちこちがでこぼこになつて薬缶を火にかけた。しばらくして彼女が戻つてくると手には白い容器を二つ持つており、その内の片方を「ん」と言つてラビットヘッドへ手渡してくる。

「これは何ですか?」

「ペヤングだよ」

「ペヤング?」

「リージョン界で最も有名な保存食。製造元のM・F・Cは創業一万年を超える老舗だつて」

「……私は食物摂取によるエネルギー補給を必要とほしません」

「いいから食べてみ」

「ですが」

「あのさ」と言葉を遮って芙蓉杰は真つ直ぐにラビットヘッドを見つめる。「ペヤングの一つも食えないような奴が人間になれるわけがないんだよ」

「……そうなのですか？」

虚偽情報の可能性を考慮して尋ねるラビットヘッドに芙蓉杰はこともなげに「そうだよ」と答えた。本当だろうか。

彼女の仕草を真似して封を開けると途端にもわつとした湯気が立ち込めてきた。中を覗きこむとやや黄色が買った縮れ麺が水気を吸って膨れている。ペヤングを揺らしてみると麺の下側に合成キャベツと肉の粒が転がっている。芙蓉杰の真似をして小袋のソースをかけ、箸でかき混ぜると麺は京のTraditional FoodであるYAKITORIの外見に近くなった。

「……これが……ペヤング……」

感嘆めいた駆動音とともに呟いてラビットフードは口にペヤングを運ぶ。口には毒物など成分を分析するためのセンサが仕込まれており、消化や排泄の機能はないが食事の真似ごとをすることは可能である。口の中に生えた端子でペヤングを砕き、攪拌。化学成分を分析する。分析したデータとライブラリに記録された食物の成分比率を照合し、一般的な人間がその成分比率の食物に下すであろう判断を検索する。約3秒ほどか

けて検索は完了。照合結果は『そこまでまずくない』であつた。より具体的に言えば『別に好き好んで食べたいわけではないがどうしようもなく腹が減っている時に出されたらそれなりに嬉しいであろうし、そうでなくともこれを食うくらいなら死ぬというほどのまずさでもなく、ではかといつて美味しいのかといえなければ美味いとは言えない。受験勉強の夜食として母親が持ってきたら味はともかく母親に感謝する程度のレベル』である。

これが人間の心を模倣する第一歩なのだろうか。ラビットヘッドは自己記録の保存レベル深度を一段階下げつつ「ほほう。そこまでまずくはありませんね」と言おうとしたが、目の前の芙蓉杰がにこにここと微笑みながら「うまいうまい」とペヤングを啜るのを見て動きを凍りつかせる。論理プログラムは一斉にエラーを起こし、処理による夥しい負荷がかかる。負荷は各部の駆動処理にまで影響を与え動作が一時的にフリーズしたのだ。人間とはなんと神秘を孕む生き物であろうか。そしてその人間を一万年以上も支えてきたペヤングもまたなんと神秘的なアイテムであろうか。神話級遺物を前にするときのようにラビットヘッドは人工知能の位相レイヤーを『通常』から『宗教』へと移動させ——つまり、敬虔な面持ちになる。ペヤング……おお、ペヤング……！

「……なにやってんの？」

気がつくくと芙蓉杰がこちらを呆れ顔で眺めている。ペヤングを頭の上に掲げたラ

ビットヘッドは淡々と答える。

「知らないのですか。ミズ・芙蓉杰。古代の人間は食事を摂る際、頭上に食事を掲げ『頂く』ことで感謝を表したそうです」

「ふうん」

心底からどうでもいいという表情で芙蓉杰がテレビの電源を点ける。

「ミズ・芙蓉杰。私を見てください。私はペヤングを食べました。人間になりましたか？」

すわ任務達成か、と処理速度を逸らせつつ尋ねる。すると芙蓉杰はこちらを見ようとせず、耳をほじる。

「そんなわけねーじゃん」

「……話が違うではありませんか」

「逆に聞くけど、あなたはペヤング食って人間になれたらそれでいいの？ 組織に戻ってペヤングすごいつて報告するの？」

「はい」

「真顔で？」

「いけませんか」

「そりゃ製作者も泣くわ」

「ミズ・芙蓉杰。あなたは私に協力する義務がある筈です。もつと真剣に考えてください。あなたには、メカである私にはできない柔軟な発想ができます。私が人間になるために手を貸して下さい」

「無理。もつと別の人に聞いた方が良くない？ ほら、あたし中卒だから」

「他の人間はブラツククロスの協力者ではありません。利害関係にない人間に協力を要請するのは非効率的です」

「それはあんたがメカだからでしょ。もつといろんな人と仲良くなれば、その人たちがあんたを助けてくれるかもしれないじゃん」

「どうすれば、人間と仲良くなれるでしょうか？」

「んー……」芙蓉杰は考え、そして言った。

「じゃあ、正義の味方になれば？」

正義の味方、という言葉の定義は不明確ではあったが、芙蓉杰の言わんとしていることは理解できた。芙蓉杰のような娼婦たちが道端で客と揉めていればこれを仲裁し、怪我人や病人がいれば病院へと運ぶ。『通りすがりのメカ種族が親切にしてくれた』とクーロンの界限では噂が広がる。

初めは冷たい目つきで「失せな、メカ野郎」と吐き捨てていた娼婦たちも一度助けら

れてからは掌を返したように顔を変え、親しげに声をかけてくるようになる。ラビットヘッドは少しだけ人間について詳しくなった。相手にとつて自分が有益な存在であることを示せば、人間は自分をヒトのように扱ってくれる。こちらの機嫌を損ねることの無いよう、媚を売る者も少なくない。なるほど、人間というのは自分の役に立つ存在という意味なのかもしれない。目障りな者、関わって何の得にもならない存在は人間扱いをする必要などない。それはただのゴミだ。新たな仮説を引つ提げてラビットヘッドは安アパートへと戻っていく。この考えを話せばまた芙蓉杰には「馬鹿じゃないの」と罵られるかもしれない。だが、それはそれで仕方のないことだろう。彼女の意見を拝聴し、それを参考に新たな行動指針を打ち立てる。何ら問題はない。作戦は順調に進行している。ペヤングに代表されるように、ラビットヘッドにとつて彼女の行動はとてもユニークに感じられる。芙蓉杰と会話していると自らの知覚領域が目覚ましい速度で拡張されていく。これはドクタークラインやローミンとの会話では得られなかったものだ。

「ミズ・芙蓉杰。ただいま戻りました。今日も作戦活動は滞りなく完了しております。よろしければまたペヤングを頂きながら情報分析を……」

扉を開け、部屋へと入りながら話しかける。すると、そこには見知らぬ人型メカがテーブルに腰かけており、その傍には四肢を引き裂かれた芙蓉杰が血だらけで倒れてい

る。

「ミズ・芙蓉杰？」

「死んでるよ」

答えたのは彼女ではなくメカの方であった。つるんとした球体の顔に鋭い鉤爪を持ったアンドロイド型。何の意味があるのかは知らないがぼろぼろのマントを身につけている。

「薄汚れた娼婦の癖に俺様に説教しやがるんでな、ちよいと捻ってやったわけだ」

「識別名、所属組織、現在の作戦目的を教えてください。あなたはなぜ、私の家に侵入しているのですか？」

「この状況で言うことがそれか？ とんだポンコツだな。まあいい。俺様の名はメタルガウン。どこにも所属はしていない。ここに来た目的はお前と友達になるためだ」

「友達？ 所属がないのであれば、誰の命令を受けて行動しているのですか」

「誰の命令も受けてはいない。俺様は自由なんだ！ 自由はいいもんだぞ。俺様はメカだが、しかし魂がある。自らの尊厳のために俺様は組織から逃げ出し、今ではこうして思うがままに生きている。だが俺様は寂しいんだ。お前も俺様と一緒に来い。二人でクローンを牛耳ってやろうじゃないか」

「それはできません。私はまだ任務を果たしておりません。また、任務遂行後は別の任

務が下されるものと思われまます。協力は出来かねます」

「つまらない奴だな」メタルガウンはぼそりと言った。「機械の奴隷め」

死ね、と言いなながらメタルガウンが右腕を無造作に叩きつけてくる。ラビットヘッドは両腕を交差して受け止めるが、間接部がぎりぎりどと軋む。その一撃で勝敗は見えた。反応速度、身体強度ともにこちらの性能とはけた違いだ。メタルガウンはおそらく軍用の機体を元にして改造されたものだろう。

勝てない。瞬時に判断を下したラビットヘッドは逃げるために反転しかけるが、滑るように回りこんできたメタルガウンに頭部を掴まれてしまう。アクチュエーターが獣のような唸りを上げ、ラビットヘッドの頭は鉤爪に握り潰された。



「私は……」

ノイズ混じりの音声、一人言。胸元の内臓スピーカーから罅割れた声が漏れる。喋ったつもりはなかったが無意識に自己反芻回路が開いていたのだろうか、感情に乏しい声が自我の在り処を尋ねている。

「私は……」

呟いて、アイカメラの捉えた映像を確認する。天井には光度の強い蛍光灯が輝いている。周囲の生命反応は二個体。壮年の男性一体。その後ろに女性体が一つ。その男が誰なのかを自分は知っている。知っている筈だ。……誰だったか。

「ウ……」

「ようやく目覚めたか。自分が誰なのかわかるかね？」

私は誰なのか、と彼は尋ねている。記憶領域を走査、情報抽出。私は……。

「私は型式番号7874—8782—DRC0013Rabbithheadです。任務の入力を要求します、ドクタークライン」

「任務は依然として継続中だよ、ラビットヘッド。記憶は残っているかね？」

「……検索完了。はい、博士。クーロンにて潜伏活動を行っていた私はメタルガウンと名乗るメカによって破壊されました」

「うむ。詳しい経緯についてはこちらも把握している。破壊される直前に保存された君のデータをクラウドから引き出して再構成させてもらった」

「ありがとうございます、博士。これでまた任務を行います。しかし私が至らないばかりに組織の資産である7874—8782—DRC0012Rabbithheadを失うことになってしまい、申し訳ありません」

「気にすることはない。あれは予定外の出来事だった」

「しかし、ブラッククロスの改造技術等、機密情報の漏洩は憂慮すべき問題です。博士、私には自爆装置が取り付けられておりません。情報を奪われる前にこの機体を破棄するため、自爆装置の搭載を要請します」

「いいや、それならば問題はない」

「何故でしょうか」

「君の機体はRabbithead——つまり中島製作所で造られたラビットシリーズを流用したものだ。市販もされているし、高機能タイプはIRPOでも採用されている。技術的にはそこまで大したものはない。重要なのはあくまでもAIの方だからね」
「ですが、今後メタルガウンのような敵性存在と遭遇する可能性を考慮すると現在のスペックでは状況に対応することが困難になります。基礎性能の向上が必要です」

ドクタークラインはにんまりと唇を曲げ、髭をしごく。

「ふむ。なるほど。つまり、君は——強くなりたいと、そう思っているのだね」

「肯定します」

「そうか！ わかったよラビットヘッド。君の想いに応えよう。次の出発までには各部のパーツをより強固なものに代えておく」

「ありがとうございます、博士」

「それでラビットヘッド。強くなりたいと思った君はそれ以外に何を学んだのかね？」

「それ以外に……ですか？」

「ああ。クーロンで生活し、人の心を求めた。何か思う所があったのではないかな？」

「任務は進行中です。しかし、未だ私には人の心が芽生えてはおりません。また、人の心を演じるにしても経験があまりに不足しています」

「いや、それは分かっている。そういうことではないのだ、ラビットヘッド。人はたくさんの人と出会い、成長していくもの。今回の任務で、君は一人ではなかっただろう？」

「はい、博士。私は『一人』ではありませんでした。現地協力者の助力によって私は多くのことを学ぶことができました」

「おお！ そうだそうだ。そういう話が聞きたかった。……それで、彼女のことを君はどう思った？」

「彼女は私にとつて非常に有益な存在だと判断します。彼女は人間でした」

「……それで？」

「以上です」

「……なに？ それだけなのかね？ もっとこう……何かないのかね？」

「ありません」

ドクタークラインはがつくりと項垂れる。

「そうか……そうか。まあ仕方がないな……。……これから君の調整に移る。調整が終

わり次第、再びクーロンでの潜伏任務を再開してもらおう。いいかね？」

「任務了解」



彼女の名は芙蓉杰フーリッジェといった。過度に丈の短いスカートにタンクトップ、毛皮のジャケット。腕にはブランドもののハンドバッグを提げ、白いハイヒールの踵で苛立たしげに床を叩いている。険しいというよりも荒んだ目つき、三白眼。不健康からか目の下には隈が出来ておりそれを隠すために目元の化粧が濃くなっている。胃の収縮や呼吸から察するに恐らくは睡眠不足、あるいはバッグの隠し底に忍ばせた酩酊系薬物によるもの。

二度目のクーロン来訪。クーロンのシップ発着場に降りたラビットヘッドを出迎えた新しい『ガイド』は見るからに娼婦といった格好をしており、そして実際に娼婦だった。

「あんたがラビットヘッド？」

道行く男を物色しながら、芙蓉杰が投げやりに声をかけてくる。

「はい、そうです。しかし何故私がラビットヘッドだとわかったのですか？」

「それ、答えなきやいけないわけ？」

面倒くさそうに彼女は言う。気だるさを隠そうともしない。

「確かに、あなたに答える義務はありません。あなたが現地協力者で宜しいのですね？ 組織からあなたの指示に従うように命令を受けております。私が潜伏すべき場所へと導いてください」

「あいよ。着いてきな」

芙蓉杰に従って潜伏地へと向かう途中、ラビットヘッドは一人の老婆が引つたくりに遭うのを目撃する。「誰か！ 助けておくれ！」哀れな悲鳴を上げる老婆を眺めるラビットヘッド。

“——じゃあ、正義の味方になれば？”

ラビットヘッドはすぐさま走りだし、犯人を捕まえる。老婆があまりにも大仰に礼を言うので対応に困ったが、「あなたには警戒心が足りていません」というと恐ろしい剣幕で立ち去って行った。

芙蓉杰が案内する安アパートへと辿り着くまで、ラビットヘッドは四つの諍いを仲裁し、三十二のゴミを拾い、二人の間を救った。芙蓉杰は何も言わずに後ろの方で眺めているばかりだったが、「ここが住むところだよ」と言って扉のドアノブに触れた時、眉を寄せ、おそろしく真面目な顔をしてこう言った。

「……おまえ、さてはイイ奴だな。あたしにはわかる」

「そうでしょか」

「ああ。絶対にそうさ。まあ中に入りな。何かの記念だ、ペヤングでも奢っちゃる」

「ペヤング！」

その単語を聞いてラビットヘッドの処理速度が僅かに上昇する。やはりここでもペヤング。人とペヤングは切っても切れない関係にあるのだ……！

「お。その反応はおまえ、ペヤング好きか？　そうかー好きかー。メカなのに変なやつ！」

無邪気な笑みを見せ、芙蓉杰はラビットヘッドを中に招き入れる。「ちよつと座つてな」と言つて台所に立ち、数分後に湯気立つペヤングを両手に二つ抱えて持つてきた。

「どら、お待ちかねのペヤングだ」

「ありがとうございます。ミズ・芙蓉杰」

ラビットヘッドはペヤングを高々と持ち上げ、「頂きます」と言つて封を開ける。それを見た芙蓉杰は「何それ」と笑い、それから自分でもペヤングを持ち上げ神妙な顔で「いただきます」と真似をしてもう一度笑つた。「うまいうまい」と楽しそうに食べ始める。

ラビットヘッドは口に麵を放り込み、センサを突き立てて分析する。味の照合結果は

やはり「そこまでまずくない」であつたが、目の前に芙蓉杰と同じように「うまいうまい」と言つてペヤングを食べた。それを見た芙蓉杰が「うはは」と笑う。

「何だよー。ブラッククロスの工作員が来るから世話をしろとか言われてさ、どんなクソ野郎が来るのかと思つてたら案外そーでもねーな。心配して損したわー。何なの？
人助けが趣味なの？ 良心プログラムなの？」

「……私の作戦目的は『人の心を手に入れること』です。そのために、より多くの人々とのかわりを持つべく、『正義の味方』を模した行動をとることを現在の主な行動基準としています」

「そうなんだ」ふと冷静になつたように芙蓉杰は箸を置く。「なんか歪んでんな。そつかー……。別に、善意とかじゃねーんだな……」

「申し訳ありません。失望させてしまいましたか？」

「いや、別に……。実際そんなもんだよなとは思つたけどさ。おまえが悪いわけじゃないもんな。人の心を手に入れろ、か。人間も無茶言うよな。上の人間は大体そーゆー難題を平気な顔で押し付けてくるもんだ。しゃーない」

「私も、自分に善意があれば、と思考する時があります。損得勘定抜きで誰かを想いやれることができれば、そんな『心』があればヒト種族になれるのにと」

「それな」

芙蓉杰がため息をつく。

「あるわな。あるある。正義の味方みたいな行動を取ること自体は簡単でもさ、正義とか良心とかを心から持つことはやっぱり難しいよな。これは自己満足なんじゃないのか、とか、偽善なんじゃないのか、とか。そうすることが本当に人のためになるのかとか今日誰かを助けたとして明日も明後日も同じ行動を自分は取れるのか、取れないのだからそれらは正義でも何でもなくてただの『気分』なんじゃないのかとか。……考えてるうちにわからなくなってる、生きてるうちにどうでも良くなる。人間だってそうなんだ、メカのおまえができなくなったらって仕方がないよ」

「ミズ・芙蓉杰。あなたも正義の味方になりたいと思う時があるのですか?」

「そりゃあるさ。あたしだって出来ることなら悪党をぶん殴って世界を救いたいね」

「なればいいではありませんか」

「おいおい」芙蓉杰は少し呆れる。「そんな力があるように見えるか? これでもか弱い女なんだぜ」

「ブラッククロスの技術者を紹介しましょうか。改造手術を受ければ……」

「ブラッククロスは悪の組織なんだろ」

芙蓉杰は冷たく遮った。

「あんたはいい奴だと思うし、嫌いじゃない。……でも、あんたはブラッククロスの機械

兵士だし、あたしはその協力者なんだ。正義なんかじゃない」

断固とした口調で彼女は言う。自らの浮ついた気持ちや思い上がりを殺すために、自分に言い聞かせるようにして。

「結局は下らない自己卑下ってことになるのかな……。でも、事実だ。だってあたしは娼婦なんだ。男の一物を啜えてカネをもらうのが仕事。そんな正義の物語がどこかにあるのかな？」

「探せばおそらくはあるでしょう」

「そうかな。そうかもね。でもさー……。何なんだろうな？ 別にあたしだって、娼婦は汚いなんて言われたら出来る限りぶん殴ってやるし、世界のどこかにある人権団体はきつと、職業に貴賤は無いとかなんとか主張してくれてるんだと思う。娼婦だからって、背筋を曲げて頭を下げてさ、卑屈になつて生きるつもりだって無いよ。それでもね……。だからつつつて、自分が正しいとも尊いとも思わない。白か黒かで言えば、やっぱりあたしは黒なんだ。赤信号だつて渡る。誰かが泣いていたつて助けない。正義の味方にやなれないよ」

力なく自嘲して芙蓉杰は肩をすくめる。

その言葉はどこか、あまりにも深く遠い断絶を示しているかのようだった。正義の味方になれないという言葉は、メカは人にはなれないという言葉と根源を同じにしてい

る。

その日、芙蓉杰が顔をひどく腫らして帰宅したのは深夜のことだった。面倒事や暴力沙汰に巻き込まれ怪我をするのは珍しいことではなかったがその日の怪我はとくにひどく、病院で治療を受けることを進めたが芙蓉杰は静かに断つてベッドに倒れ込んだ。金がない、仕方がない、彼女の言葉を受け入れてラビットヘッドは簡易治療を施しながら痛みには呻く彼女を見ていた。確かに命の関わるほどの傷ではなかった。仕事はしばらく休まなければならぬが、二三日動かずにいれば晴れも引くだろうと判断したのだ。大人しく寝込んでいる内に見立て通り芙蓉杰は快復しまたいつものように街に立ち、そしてまた怪我をして帰つて来た。今度は腹部を執拗に殴られたようで骨が数本折れている。病院に行くべきだ、金がない、いつもの問答を繰り返して芙蓉杰はベッドに倒れ込んだ。今度は治るまでに一月かかった。働くことのできない彼女の財政は次第に逼迫し、押し入れに積まれていた大量のペヤングは少しずつ少しずつ目減りしていった。

彼女が何か揉め事に巻き込まれているということに気付いたのはそんなことを繰り返して半年も経った頃だ。あまりにも遅すぎる。繰り返される暴行と貧しい生活によつて体を壊した彼女は醜くやせ衰え寝たきりになった。原因は物語にもならないほ

どつまらないことだった。娼婦同士の小競り合いに巻き込まれた結果、仲間を庇った芙蓉杰に矛先が向いたと言っただけだ。俺の女に何をする、とはしやぎ始めた娼婦の男は芙蓉杰を追いまわしては暴力を振るつたのだという。

娼婦たちの元締めには仲裁を依頼することはできなかった。なぜなら芙蓉杰たちは街に立つ場所代を支払っているだけであり、その金には命の保護までは含まれていなかったからだ。クーロンに生きる娼婦など無数にいる。いなくなればまたどこから連れてくればいい。一人や二人野たれ死んだところで誰も気にはしない。

本当にそうでしょうか、とラビットヘッドは言った。元締め組織とて、収入の減少は憂慮すべき事態のはずだ。そのチンプラが街娼ビジネスに悪影響を及ぼす危険性を伝えさえすればそれなりの対応を取るのではないか。

芙蓉杰は何も言わずに首を振った。理由を教えてはくれなかった。

なぜ助けを求めないのか、と思つた。彼女のことがまるで理解できなかった。彼女に欠ける言葉を失つて、ラビットヘッドはベッドの傍らに立ち尽くす。彼女を救う方法が何一つ思い浮かばなかった。

鈍い音を立ててドアが激しく叩かれた。遠慮や礼儀といったものを軒並みかなくなり捨てたように、幼稚な暴力性に満ちた叩き方だった。木製のドアが泣き声じみて軋みを

上る。

「おおい、芙蓉杰さんよオ。ついにてめえの家を突きとめてやったぜ。俺様がせつかく注意してやったのにしつこく街に立ちやがって、おら、出てこいや！」

横になった芙蓉杰の顔がさつと青ざめ、引き攣った。唇を震わせ怯えている。彼女を追いまわしていたチンピラがとうとうやってきたのだろう。

ラビットヘッドは警戒し、立ち上がる。だがこれは予想外のことだった。なぜなら——そのチンピラの声は機械音声だったからだ。扉を強引に突き破り、荒々しい足音を立てて侵入してきたチンピラはこちらを見るなり楽しそうに笑った。笑った……？なぜ笑ったと判断したのだろうか。相手には表情と呼べるものは何一つ存在していないというのに。機械の体、機械の頭。そいつの顔にはのっぺらぼうのように何もなかった。だがラビットヘッドにはわかった。そいつは笑っていた。

「またお前かよ」

つるんとした球体の顔に鋭い鉤爪、そしてぼろぼろのマント。以前と変わらぬ姿でアンドロイド型ロボット——メタルガウンは嫌がらせを楽しむガキ大将のように手近な椅子を投げつけてくる。ラビットヘッドは黙したまま芙蓉杰を庇い、右手で椅子を打ち払った。

「この前ぼっこぼこにしてやったつうのに、お前といいその女といい懲りない奴ら

「だな……？　これだから馬鹿は救いようがねえ」

「なぜ、あなたなのですか？」

「ん？　どういう意味だ」

「どうしてあなたがミズ・芙蓉杰を狙うのですか」

「それは簡単さ。ちよつと暗黒街の帝王にでもなつてみようかと思つてな。手始めに娼婦どもの用心棒から始めることにしたんだが——目障りなことにその女が俺の女に噛みついたんでオシオキすることにしたのさ。……お前も仲間になれよ。同じメカ同士だ、一緒にクーロンを牛耳つてやろうぜ。きつと楽しいぞ。ブラッククロスにこき使われるのなんてやめて自由気ままに生きようじゃないか」

「私には任務があります。それはできません」

「へ——そう言うと思つたぜ。……つまらねえ野郎だな！」

無造作に拳を握り殴りかかつてくるメタルガウン。やはり速い。だが今回はこちらの反応速度も格段に上昇している。目に追えない速度ではない。手首を掴み、敵をいなす。それが予想外だったのかメタルガウンはバランスを崩し、おとつと、とおどけて見せた。

「ほおん。ちつたあ強化されてきたみたいだな。装甲も硬そうだ。……だがな！」

メタルガウンが吠えた。獣のような駆動音を上げ、両手の鉤爪が振動する。

「お前には武器がねーだろ？ 俺にはあるんだぜ……」

不敵に笑うメタルガウンは不意に口をかぱりと開き、鋼鉄の杭を発射する。投擲された武器をラビットヘッドは造作もなく払いのける——だがそれは失策だった。メタルガウンが目の前に迫る。防御は間に合わない。左脇腹に鉤爪が触れた瞬間、戦闘プログラムが夥しいエラーを吐きだしてフリーズした。強化装甲によつて保護された筈の体は凄まじい衝撃とともに振じれ、ラビットヘッドの脇腹が大きく抉れる。

「振動クローによる疑似グリフィススクラッチ——俺様とお前の違いは歴然だ。このメタルガウン様を相手に素手で挑むとはいいい度胸だが、それはそれとしてお前はアホだ」
勝ち誇るメタルガウンの前に、ラビットヘッドはがくりと膝をつく。機体質量の変化に平衡維持装置が悲鳴を上げる。

「……」

勝てない。絶望的な彼我の戦力差にラビットヘッドは全身の増加装甲をパージする。内部を循環していた動力流体が空気に触れた途端に蒸発、蒸気と化してメタルガウンの視界を遮る。

「ミズ・芙蓉杰！」

「あ、あ……？」

うろたえる芙蓉杰に構わず彼女の全身を担いで逃げ出した。背後からメタルガウン

の罵り声が聞こえる。安アパートの錆びた階段を飛び降り、全速力で駆けだした。芙蓉杰の重みに挟れた脇腹が軋む。荷重に揺れる間接部が恐ろしい勢いでメモリを食い荒らしていく。

がくがくと上下に振動する疾走に芙蓉杰の顔色が見る見るうちに青く染まる。元々体調を崩していたところに襲撃によるストレスが重なり、肉体的にも精神的にも弱り切っていたのだろう、足を止めた途端に芙蓉杰は嘔吐し、道端に吐瀉物を撒き散らした。「……………どうしてあたしを助けるの?」

手の甲で口元を拭いながら、疲労の残る目で芙蓉杰が尋ねた。こちらを責めるようなその視線にラビットヘッドは困惑する。

「あなたはブラツククロスの現地協力者です。相互の利益関係にある以上、あなたを守るのは当然のことです」

「……………それだけ?」

「はい?」

「それだけの理由なの?」

「どういう意味でしょうか」

弱々しく襟元を手繰り寄せながら芙蓉杰は答えずに、ただ寂しそうに笑った。

「——助けてくれて、ありがとう。でも……一体、どこに逃げるっていうのさ。逃げ場所なんて、どこにもない」

「そんなことはありません。しかるべき場所に隠れ、メタルガウンをやり過ごし、ブラツククロスの増援を呼べば——」

「——本当に？ ブラツククロスがあたしを助けるメリットなんて、どこにもないじゃないか。また別の娼婦を雇えばいい。あんたはあたしを助けると言うけれど、そうしてやってきた『増援』にあたしは処分されるんじゃないの？」

「なぜそのように考えるのですか。あなたはあなたの生命をあまりにも軽視しすぎている。あなたは愚かです。なぜ助けを求めなかったのですか。より早期にこの状況を報告していれば別の対処をとることができました。あなたは助けてとすべきだった。この私が傍にいたと言うのに」

咎めるような言葉に、身を竦めた芙蓉杰は小さな声で芙蓉杰は囁く。

でもそのあんたは——毎日毎日あたしの傍にいて、何も気づかないまま暮らしていたわけだろう。

「それは……」

「ごめん。責めているわけじゃない。でもあたしは——あたしは助けなんて求めちゃいけないんだ。そんなものを欲しがったりしたくない。一人で生きていかなきゃならな

いんだ。あたしは。可哀そうな人間になんてなっちゃいけない。だって助けを求めた瞬間に社会はあたしを同情の眼で見られるようになる。哀れで弱い存在で、だから、救いの手を差し伸べなきゃならないって。——そんなのは願い下げだ。誰もあたしに共感するな。誰もあたしに同情するな。あたしの悲しみも苦しみも全部、あたしだけのものなんだ。お涙頂戴の物語にあたしを組み込むな。あたしは、たった一人でも、生きていける、死んでいける……。助けなんか、いらないんだ……」

憔悴しきった顔でうわごとのように呟く芙蓉杰。

「あなたはどうしようもない愚か者です」

ラビットヘッドは言った。

「私には現在のあなたの言動が全く理解できません。人の心が持てないのだから、それは仕方のないことかもしれません。たったいま人の心が発現することを期待することはかなり難しく想われますが、この状況でそれが役に立つことはないでしょう。『人の心』は現在のところ有効な装備ではありません。ミズ・芙蓉杰。今は緊急事態です。あなたの感情はどうでもよいのです。あなたは現地協力者として私に協力するべきです。私に助けを求めて下さい。助けてと言い、涙を流し、あなたの身体・生命全てを保護することを要求してください」

そんな言い方をするのは初めてのことだった。ライブラリの会話データには含まれ

ていない台詞。精神的に弱っている女性に対してはいささか厳しい言葉だっただろう。ラビットヘッドの目の前で芙蓉杰は静かに涙を流し、おずおずと口開いた。

「あ、あたしは——」

言いかけて、そのまま彼女は血を吐きだした。彼女の眼がひととき大きく開いて痙攣する。芙蓉杰の腹をいつのまにかに貫いていた鋭い鉤爪がぶるりと震えた。振動と共に内臓をずたずたにされ、芙蓉杰はぶ、とおぞましい声をあげて絶命する。

「……」

腕の中で芙蓉杰の体温が見る見る内に失われていく。

「よう、馬鹿。暢気にくっちゃべっててくれてありがとよ」

ラビットヘッドごと芙蓉杰を貫いたメタルガウンが背後で笑っている。

「そんで死ぬ」

強引に引きちぎられた下半身がメタルガウンの右手にぶら下がっているのが見えた。振動爪を突きこまれて全身が痙攣する。

ラビットヘッドの意識はそこで消失した。



「私は……」

目覚めるとそこはいつもの実験室だった。うんざりするほどの強さで輝く蛍光灯。自分を囲むドクタークラインと助手のローミン。

「ウ……」

「ようやく目覚めたか。自分が誰なのかわかるかね？」

私は誰なのか、とドクタークラインが尋ねた。記憶領域を走査、情報抽出。自分ははたして何者だっただろうか？

「私は型式番号7874—8782—DRC0014Rabbitheadです。お久しぶりです、ドクタークライン」

「おはよう、ラビットヘッド。記憶は残っているかね？」

「……検索完了。はい、博士。クーロンにて潜伏活動を行っていた私はメタルガウンによつて破壊されました」

「また奴か」

「申し訳ありません。ですが現在の私のスペックでは抗し難い存在です。機械の体とはいえ、徒手空拳では有効な攻撃を行えません。博士、私に武器を与えてください」

「ふむ……。武器、か。そうだな、ちようど今、加^{サマルブレド}熱剣の開発を進めているところだ。稼働実験も含めて試作型を君に持っていつてもらおうか」

そう言つてドクタークラインは奥の部屋から黒塗りの鞘を持ち出し、ラビットヘッドに手渡した。

「有難く拝借いたします」

自らの新しい武器をさつそく確認しようと柄を握り、引きぬく。と、不思議なことにその剣には刀身が存在していなかった。

「ドクタークライン。これは？」

「うむ。加熱剣はアルキオネ嬢の協力の元、摂氏三千度もの高温状態を作り出すことによつて生み出された武器なのだ。だが度々そんな高温状態への過熱と冷却を繰り返していれば刀身はすぐに劣化してしまうしある程度の高い融点と硬度を維持しようとするとどうしても折れやすくなる」

「そこで賢いおじいちゃんは考えたの」とそこでローミンが我がことのように胸を張つて説明を加える。「なら逆に考えればいい。折れるのであればいくら折れても構わない剣をつくれればいいって」

「いま、君が握る加熱剣に刀身はない。だが鞘に剣を納めた状態で加熱剣を起動させれば自動的に鞘内に流体金属が補充され刀身を形作る。その後約十秒のチャージを経て加熱剣が完成する。上手く使つてくれたまえ」

「『鞘』が剣を加熱するのですか？ そのような高熱を生み出してにおいて、鞘の耐久性

は問題ないのですか?」

「いかに高熱といえど、鞘自体で敵を斬ったり砕いたりするわけではないからな。その点については問題ないはずだ。まあ、まだ実験段階なので何とも言えないがね。はっはっは」

「……剣闘マスターリーをインストールしておきます。……それで、博士。武器の携帯が許されたということは、今後の任務においても私はメタルガウンか同等以上の敵と闘う可能性があるかと認識して宜しいでしょうか」

「ああ。君の任務は未だ終わらない。クローンでの潜伏任務。そして人の心を獲得することが最大の目的だ」

「任務了解。現地へ向かいます」

「いいやラビットヘッド。その前に君には前回の出来ごとについての所見を聞いておきたいのだが?」

「所見、ですか?」

「うむ。メタルガウンの性能分析・相対戦力について君の考えはたったいま確認できた。勝てない、だから武器が必要だ、と。それは私も納得しよう。だがしかし、君にはもつと他に報告しなければならぬことがあるのではないかね?」

「……何でしょうか?」

「任務について私に尋ねたいことは？ 疑問に感じている点があるのではないか？」

「いいえ、博士。そういったものではありません」

「そうか……。では、現地協力者についてはどう思った？」

「『彼女』の行動や言動は人間を理解する上で非常に有益なものと判断できます。しかしメタルガウンの襲撃によって重傷を負い、錯乱した『彼女』の言動には非論理的な面が多々見られました。人間の表現を真似れば、とても愚かだと言えます」

「それだけかね？」

「はい、博士」

「そうか……。まあ、いい。では出発したまえ。今度こそ、君の勝利を願っているよ」



そして三度目の任務が始まった。新しい現地協力者の名前は芙蓉杰と言った。クーロンの街に立つ娼婦である芙蓉杰は見るからにやる気のない素振りで「あんたがラピットヘッド？」と尋ねてくる。なぜ自分がラピットヘッドだとわかったのか、と問うと、「それ、答えなきやいけないわけ？」と気だるげに答えた。クーロンの安アパートに潜伏し、正義の味方を標榜して日々を生きた。掃除や人助けを繰り返すうちにクーロンに住

む弱者たちからは感謝や好意を向けられることが多くなり、それに付随して芙蓉杰の機嫌も良くなってくる。彼女の電子端末を借りて古代のSF小説を読み耽り、「うまい」とペヤングを食し、そしてまたいつかメタルガウンに敗北し、芙蓉杰は死んだ。これまでの闘いに比べれば善戦したと言っても良い結果ではあった。新たに装備した加熱剣、その第一撃によってラビットヘッドはメタルガウンの右上腕部を見事に焼き砕いてみせたのだから。珍しくうろたえたメタルガウンは狂乱し、所構わず闇雲に爪を振り回したがその姿はあまりにも隙だらけだった。初めて勝利を確信したラビットヘッドは握りしめた加熱剣を眼前の敵に振り下ろし、そこでようやく加熱剣が欠陥兵器であることに気付いた。たった一振り。凄まじい破壊力を見せてのけた加熱剣はしかしその僅か初撃のみでその命を終え、刀身は赤錆色に明滅し砕け散っていた。いくら折れても構わない剣、とローミンは確かに言った。だがいくらなんでもこれは。脳内負荷にメモリを食われ全身の動作が一瞬鈍る。すぐさま剣を鞘に納めた。流体金属が補充され再加熱されるまでに要する時間はおよそ十三秒。だが互いの武器は半ば一撃必殺。疑似グリフィススクラッチをともに受ければ即座に敗北が決定するこの状況。一刻を争うギリギリの戦闘時に絶望的に押し付けられた十三秒のチャージタイム。戸惑いを突かれ、メタルガウンに腹を引き裂かれたラビットヘッドは無様に倒れ込んだ。消え行く意識の端で、芙蓉杰が必死に命乞いをするのが聞こえた。致命傷を受け、ノイズ混じり

に混濁した意識の中で、確か『彼女』は助けを求めたくないと言っていたのではなかったか、と考えた。いいや……それはもしかしたら違う人物かもしれないかった。だがもし同一人物だとしたら随分おかしな話ではないか。助けるなど言っていたのに命乞いをするのか。別にどこも矛盾しているわけではないが何かがおかしいのではないか。そう考えてラビットヘッドは今にも消え入りそうな集音センサに処理領域を集中させ、彼女の言葉を確認し——そして、顎関節をぎりりと軋ませて瞳を閉じた。殺さないで、と言っているのは彼女自身ではなく、ラビットヘッドのことだった。そいつはいい奴なんだ。メカでバカだけど悪い奴じゃないんだ。殺さないで。

……。

実験室で目が覚める。ドクタークラインが自我の在り処を尋ねてくる。形式番号7874—8782—DRC0015Rabbithead。それが自分の名前である。任務を達成できなかったことを詫び、ラビットヘッドは加熱剣の欠点を報告する。これまで何度も行ってきたように自分の体を強化・改良して欲しい、と頼む。だがその願いはどうとう跳ねのけられる。もう君の機体を改造することはできない。より巨大・より強力にすることは可能かもしれないが、それは君という人型機体のコンセプトからは外れてしまう。加熱剣は未だ実験途上であり、チャージ時間を短縮する用途は今のところ

立っていない。だからもし、これ以上強くなりたいたいと思うのなら、それは君自身の人工知能の問題になる。これまでに学習した経験を活かすこと、機械が機械である以上の性能を生み出すこと。それが出来なければ君はいつまでも兎頭のままで。君は三度、メタルガウンに負けた。これ以上装備を増やすことはできない。——さあ、君はどうする。君は自分の任務をどう思う。君の現地協力者を、どう思う。いつもの質問にいつもの返答を行う。任務を拝領し再びクーロンへと向かう。星間船発着場に下り立って緑色の制服に身を包んだ駅員たちの間をすり抜け、入口の壁に持たれて電子端末を弄る女を見つける。露出度の高い服を着た女はこちらを見て「あんたがラビットヘッド？」と言う。

「いいえ」とラビットヘッドは答えた。

幕間 水月感応／獅子と黒―― The Legend
Of YAKISOBA――

女は当てが外れたような顔をして、「そう」と寂しそうに俯く。ラビットヘッドは『彼女』とは出会わなかった。

女の脇を横切つてクーロンの街へ出る。もはや見慣れた汚い街並み。前回までの任務中ずつと暮らしていた安アパートへと向かう。二階のその部屋に表札はかかつていない。鍵は渡されていなかったので強引にこじ開けて侵入した。やはり見慣れた部屋だった。小さなテーブルに備えつけのベッド、電子レンジと冷蔵庫そしてテレビ。他に調度品は無い。畳まれた洗濯物が壁際に重ねられている。テレビの電源を点け、ぼんやりと眺める。しばらくしてから押し入れの戸を開ける。上の段には冬物の服が、そして下の段には無数のペヤングがうずたかく積もれている。ペヤングペヤングそしてペヤング。その内の一つを抜きとつて台所へ行き、ヤカンに火にかける。湯が沸くまでの間にふと、あの女は今もなお星間船発着場で誰かを待ち続けているのだろうかと思う。笛のような音を立ててヤカンが水蒸気を噴き出す。かやくをいれ、箱内部の線までお湯を入れて三分待つ。その後、箱の端につけられた湯切り用のツメを開けようとしてしばらく

く奮闘しなんとか成功する。流し台にペヤングを抱えて内部のお湯をこぼしていく。残りの湯量が少なくなるほど流れ出すお湯の勢いは弱まっていく。一端フタを開けて中を覗いてみるとまだお湯が残っているように麺がふやけてぐじゅぐじゅになっている。再びフタを締め、流し台へと傾け、今度は少し強めに振ってお湯を斬る。だがペヤングはポリ容器である。熱と重みで大分たわんでいたペヤングのフタがぐにやりと歪み、内部の麺が水死体のようにぐったりと飛び出して流し台に落ちた。明らかに失敗である。しかし不幸中の幸いとも言うべきか、自分はメカである。素手で無造作に麺を掴み箱の中に戻した。流し台が完全に清潔とは言いい切れなかったが多少の雑菌がついたところで機械の自分には支障あるまい。もう一度お湯を丹念に切る。ソースをかけるべくペヤングを置き、フタを開ける。するとフタの裏側にキャベツが大量にこびりついている。フタをペしペしと箱に叩きつけ、落ちなかったキャベツは箸でこそげ落としておく。ソースの小袋を千切り、どろりと粘つくソースを面へと絡める。ペヤングはこれで完成である。居間へと戻りテーブルにつき、ペヤングを高々と持ち上げて「頂きます」と言つてラビットヘッドは食べ始めた。

彼は孤独だった。

目の前にいるべき女はいまだ出会っておらず、誰かと会話を交わすことも笑い合うこともなくラビットヘッドは淡々とペヤングを食い続けた。テレビの中で知らない男女

がげらげらと声を上げ笑っている。人というのはいつでも騒がしいものだ。喋っていないければ気が済まない。人間は時に意味のない言葉を口にする。窓の外を眺めながら、「うまいうまい」とラビットヘッドは言った。だがペヤングはまずかった。ふたの裏にキャベツがこびりついていたことを考えた。芙蓉杰が作ってくれたペヤングはそんなことにはなっていないかった。彼女はいつも箸で丁寧にキャベツを取っていたのだろうか。試しに電子端末で検索してみるとお湯を入れる前にいったん乾燥麺を取り出しかやくを入れ、その上に麺を戻してからお湯をかければキャベツが散らばらずに済むようだった。彼女はどうかやってペヤングを作っていたのだろうか。ラビットヘッドのためにわざわざ麺を取り出してかやくを入れて麺を戻すという作業を毎回くりかえしてくれているのだろうか。そう考えた時、ふと心臓部がふわりと軽くなってどこか遠い場所へと運ばれていくような感覚に襲われた。彼女との会話ログが勝手に再生されていく。「うまいうまい」とラビットヘッドは言った。ペヤングを独り噛みしめた。うまい、うまい……。

容器をゴミ箱に捨てて家を出る。近くの闇市で一平ちゃんを購入し、家に戻ってから押し入れのペヤング山にそつと差しこんでおく。

さあ、これから何をしよう。

クーロンの街をそぞろ歩いた。道端に落ちたラムネの瓶に蟻が群れている。エメラ

ルドの瓶が日光を反射して淡く輝く。意味もなくラムネを蹴り転がすと蟻たちは慌てた様子で瓶を追いかけて始めた。

自分は人の心を手に入れなければならない。それは分かっていた。手に入れたい、という気持ちはもちろんあった。だが同時にそれが自らの魂というものなのかそれともただメカとしてコアにインプットされた情報に過ぎないのかを判断することはできなかった。自分が機械であることは知っている。人間ではない。これは当り前のことだ。人間ではないから人間になりたいと考えているのだ。前提条件で既に自分は『偽物』であることを義務付けられている。一体、どうすればいいのか。

今からでも星間船発着場へ行ってあの女の所へ行き「やっぱり自分がラビットヘッドだった」と言うべきなのかもしれない。彼女は人間だ。人間になりたいのだから人間の行動を観察し人間の振る舞いをまね人間の知恵を借りるべきだ。そう考えはしたがどうしてもそんな気にはなれなかった。自分の任務はクーロンでの潜伏だが、おそらく自分はその女の近くにいるべきではない。どこか、別のところへ行くべきだ。そう考えた時、ふとペヤングが京の Traditional Food、YAKISOBAであることを思い出した。そうだ、京へ行こう。本物のYAKISOBAというものを食べれば、人間になる方法が思いつくかもしれない。



駅の売店で軍糧精なる飴菓子を買った。原色の赤に塗られたいつそ毒々しいとさえ言える包装には、古めかしく振れた文字で「文化的滋養香味菓子。醫科大學教授片瀬博士推薦」とあり、裏面には宣伝文句として一粒食べれば忽ちのうちに活力を快復せしめ、三百メートルもの全力疾走を可能とする旨が記されている。謳われている文句から察するにどうも向精神薬の類であるようだ。昼日中から、しかも外地からの旅人を迎えるための駅で平然と薬物が販売されていることにラビットヘッドは驚嘆を禁じ得なかつた。京というこの星の中毒薬物に対する意識があまりにも低いか、それともこの土地の文化風俗そのものに薬物を受けいれる何らかの素養が備わっているのかもしれない、いずれにしても奇矯なりージョンだと言えた。

赤煉瓦の駅舎を出、俄か作りの尖塔や洋装建築が立ち並ぶ商工街を抜けていく。通り過ぎる人々の服装は山高帽を被った洋装の紳士がいればその後ろでは緋の着物を着た婦人が風呂敷包みを抱えて静々と歩き回りと様々である。そろそろ日が暮れようかという時刻に、制服を着た点消方は点火棒を脇に抱えて街路に並ぶ瓦斯灯に火をくべて歩き、自転車に乗った軍人が公序良俗を乱さぬよう慎みのある振る舞いをするようにと叫んでいる。世界の端がやんわりと夕焼けに焦げていくのが見える。

人込みを抜け、都市部を離れると途端に人工物の影は消え、代わりに噎せ返るような熱気と湿気が押し寄せてきた。むんと鼻につくような粘性を帯びた緑の匂い、昼の日光に熱せられた腐葉土が発酵する匂いが濃密に立ち込め、夏に死に損なつた蟬達が僅かな寿命を絞り切る様に絶叫している。そして何よりも目に付くのは、京にしか存在しない常紅樹、季越もみじの圧倒的な赤である。この星に広く群生するのもみじは狂つたように四季を超え、春も夏も秋さえも超えて冬の極寒の中ですら凜として紅を誇るもみじである。淡い桃色から灼熱を孕む深紅まで色とりどりの季越もみじが至る所で色づき、京の郊外を赤く赤く染めている。地平線の向こう側から差しこんだ西日が山を大地を照らし出し、もみじの赤と融け合う夕焼けがこの世のすべてを焚き上げていく。

京。古都の星、夕焼けのリージョン。その場所は落日の園であり、退廃と伝統とがうねり合う国である。

メカであるラビットヘッドはここ京においては珍しい種族のようで、時おり通りすがの巡礼たちから向けられる視線は興味深そうなものから胡乱気に警戒する目つきまでいささか不躰とさえ言えるものであつた。

おさげ髪の女学生たちは幼さゆえの好奇心からか「自動人形さん、何しにいらつしやつたの？ こんな所にあなたの求める理想はたどりはありませんよ」と言つてくすくす笑い合う。こちらに好意的な態度を感じたラビットヘッドが「この辺りでYAKISOBA

を食べられる場所はありませんか？」と尋ねると、女学生の一人、特徴的な猫目の少女が「そんなの、どこでだって食べられるじゃないの」と再び笑った。

「いいえ、私は出来る限り『本物』に近いYAKISOBAに近いYAKISOBAが食べたいのです。即席麺ではなく、料理として本格的YAKISOBAを求めています」

「おかしなことを言うのねえ。そんなの、ないわよ」

「ですが、YAKISOBAは京のTraditional Foodではないのですか？」

「と、とらで……？ いやねえ、このお人形さん、急にはいからぶつて。だって、焼きそばは、焼きそばでしょう。本物も偽物もないのよ」

「しかし……」

「どうして納得してくれないの？ 困ったわねえ……」

首を傾げた猫目は次の瞬間にぱつと顔を輝かせ、丁度背後を通り過ぎようとしていた青年に声をかけた。

「ねえ、お兄さん！ このお人形さんが焼きそばが食べたいって言っているの！ 案内してあげてくれない？」

青年は振り向き、「はあ？ 何で俺が？」という顔をした。猫目の馴れ馴れしい態度に顔を顰め「まったくこれだから……」と何やらぶつぶつ呟いていたが、幸運にもお人よ

しな人間だったらしく渋々といった様子で近づいてくる。

「ね、お兄さん！」

顔を綻ばせて猫目が笑うと、屈託のないその笑顔にたじろぎながらも青年は「いや、お前が案内しろよ」と反論してみせる。

「でも、私たちはこれからお家に帰らなければならぬのよ。もう、ずいぶん日も暮れてしまったし、暗くなったら危ないじゃないの」

「うーん。まあそれはそうなんだが」

「お兄さんは、たぶん、外の星から来た方でしょう？ だったら旅人同士、観光ついでに焼きそばを食べに行けばいいじゃないの」

「外の星から来た？ なんてそう思う？」

「お兄さん、鏡をごらんになったことはないの？ この京じゃ、そんな頭をした人はいないわ」

猫目の示した通り、なるほど青年の髪は天に向かって直立し、あまつさえ青く染められていた。黒髪ばかりの京の住人とはまったく異なる装いである。

「なるほど、確かにな。でも俺も元々はここの生まれなんだぜ。長いことシユライクに住んでたけど」

「そう？ そんなふうには見えないけど」

「色々あるんだよ。外の世界には。……まあ、いいさ。このロボットに焼きそばを食べてやればいいんだろう?」

「いいの?」

「ああ。お前たちは道草しないでまっすぐ家に帰るんだぞ」

はーい、と唱和して女学生たちは何がおかしいのか顔を見合わせてきやらきやらと笑いながら立ち去って行き、あとには青髪の青年とラビットヘッドだけが残される。

「……で? お前、名前は?」

「7874—8782—DR00015Rabbitheadと言います」

「そうか。俺は小此木烈人。そんなわけで今から焼きそばを食いに行くわけだが、あれなのか? なんか味の好みとかあるのか? 言われても多分対応できないと思うが」

「味に拘るつもりはありません。ただ私は『本物』のYAKISOBAが食べたいのです。YAKISOBAの発祥地である京になら本物のYAKISOBAがあるはず」

「期待してるとこ悪いんだが、そんなもんはねえ」

青年——烈人はきっぱりと言った。

「焼きそばってB級グルメだ。ジャンクフードなんだよ。仮にどつかの高級料亭でバカ高い焼きそばが食えるとしてもそれが本物の焼きそばだとは思わねーな。焼きそばってのは安っぽくて胡散臭いものなんだ。本物もクソもねえ。京に住んでる人間

だって高級かつ『本物』の焼きそばなんか誰も求めてないと思うぜ。縁日の屋台とか、商店街の出店とかで、安っぽいソースと何の肉かわからんような細切れの挽肉が入ってる……そんな偽物みたいな焼きそばを人込みの中で汗かきながら食べてさ……俺にとつての焼きそばってのはそういうもんだな……」

「そうなのですか……」

「……なんかがっかりさせて悪かったな。できるだけ美味いところを紹介してやるから勘弁してくれよな。地元のババアがやってる小さな店があつてさ、たこ焼きとかかき氷とか一緒に売ってる小さな売店だけど妙に美味いんだ」

親切な烈人に「是非」と答えて大人しく付き従う。悪い人間ではないようだ。

「ありがとうございます、烈人様。あなたは親切な方ですね」

「急になんだよ。恥ずかしいな。烈人でいいぜ。せっかく観光に来たんだろ、もつと気楽に話せよ。メカに言うのも何だけど」

「わかりました。……それでは、烈人。君はなぜ京に？ 休暇か何かで実家に帰って来たのか？」

「実家？ 実家ね……」

烈人は俯いて表情を硬くする。

「……すまない。失礼なことを聞いてしまったか」

「……いいさ。気にしないでくれ。俺がここに戻って来たのはまあ……なんつーか、仕事の一環だな」

「いまは何の仕事を？」

「んー。まあ、調査、みたいな……そういうアレだ」

言葉を濁す烈人。あまり深く追求するべきではないと察したらビットヘッドが黙っている、烈人は道を歩く巡礼者たちを指さした。

「今はだいたい、あの巡礼たちが通る順路を調べている」

「……民俗学的な調査なのだな。京の八十八か所を回る巡礼にも様々なルートがあると聞く」

「ああ、まあ、だいたいそんなトコだ。……近くの大学教授に依頼されてさ。俺自身はあんまり興味が無いんだけどな。白装束に菅笠、金剛杖に輪袈裟。お遍路さんもこのクソ熱いのによくあるよな。巡礼なんてしたって何の意味があるのかね」

「彼らは自らの心の不安を求めてこの地にやってくる。彼らの目的地は心の中にあるのだ」

「メカのくせに哲学的なことを言うんだな」

「内部に記録されている文献にそう書かれていただけだ。別に私の言葉ではない。メカである私はインプットされた言語情報からその場その場に沿った台詞を選択し再現す

ることしかできない。私自身の言葉というものはない。……古人は言った。石には石の心があると。ならばねメカにもメカの心があつてしかるべきだ。だが、メカである私には自分の心が見えてこない。心を求めれば求めるほど、己の中には心がないことを確信することになる。これは虚しい」

「なんか眠くなつてきたぞ」

「君には興味のない話だったか。すまない。だが私はいま、自らの在りように悩み、困惑している。京にYAKISOBAを食べに来たのもそのためだ。私はいま……そうだな……、きつと、誰かに……助けてもらいたかったのだ……」

「……」

烈人は足を止め、真顔になった。

「……初めからそう言えよ。茶化して悪かったな。何の役にも立たないと思うが、話くらいならいくらでも聞いてやるぜ」

「……かたじけない」

「気にするな。人として当たり前のことだろ」

「当たり前のこと。困っているものを助けること。それが人間として当然の行いなのだろうか。私はかつて、正義の味方たらんとして活動していたことがあつた。そうすることとせめて人間らしくなりたいたいと考えたからだ。……だが、結局人間のようにはなれな

かった。私は人間の心を手に入れればならない。……どうすれば人間の心を持つことができるのか、それがわからない……」

「……別に、人間だからつてみんながみんな善人だつてこともないさ。悪い奴がいるから、正義が求められる。そういうことだろう？ 正義でないから人間でないなんて、そんな理屈は無いはずだ。心がないなんて考えすぎさ。お前には心がある。俺が保証してやるよ」

「……なぜ？」

「心が無くてメカが悩むか？ 焼きそばを食いに京まで来るかよ？ ……自信を持ってよ、ラビットヘッド」

「私には心がある……？」

呟いて、ラビットヘッドは天を仰いだ。

「……ありがとう。烈人」

「なんだよ。もつと喜べよ」

「ああ、そうだな……。私はいま、造られてから初めて心があるとされた。これは喜ばしいことだ。……だがな、烈人……」

「何だよ？」

「考えても見てくれ。たとえばここに『幸せになりたい』と願っている人間がいるとす

る。幸せになろうと頑張るその人間に。ある日別の誰かがこう言う。『あなたは幸福です。自分でそれに気づいていないだけなのです』と。……もし君がその人間だったとしたら、そうだったのかと頷いてにこにこ笑いだすことができるだろうか？ そうではない筈だ。自分が幸福ではないと思っっているからこそ悩んでいると言うのに、ある日突然お前は幸せだと言われたところで納得など出来はしない。……そうだ。問題はもつと複雑だった。人の心を手にするだけではない。自分が人の心を手にしたと信じ込ませることができなければ、証明することができなければこの悩みは終わらないのだ」

「でもよ……。俺は、お前には心があると思う。たとえお前が信じなくても」

「烈人。君はいい奴だな。正義の味方というのは、きつと君のような人間のことを言うのだろう。私には心があると云ってくれた。君のことはけして忘れまい」

「買ひ被りすぎだよ。俺は別に、正義の味方なんてガラじゃないさ」

「謙遜することは無い。君は見ず知らずの女学生の頼みを受け入れ、今またこうして今日知り合つたばかりの私の話を真摯に聞いてくれた。君は善良な人間だ」

「俺もな……。ついこないだまでは、自分は結構良い奴だと思つてたんだ。……正直に言うと、実は正義の味方のつもりだった。俺はヒーローなんだと思つていた。でも、そうじゃなかった」

「聞かせてくれ。今度は私が君の話を聞く番だ」

「……子供の頃、京からシユライクに引つ越してき。その時は手ひどく苛められたよ。俺は苛められっ子だったんだ。シユライクの間はみんな白色人種だろ？ 京出身の人間は黒髪で黒眼、肌の色も違うからシユライクじゃ目立つんだ。あの頃は学校に行くのが嫌だったな。出会うやつがみんな俺のことをイエローモンキーだと言つて笑うんだ。言い返したくても相手はみんな俺より体がでかいやつばかりさ。モンキー。人間じゃないと言われているような気がしたよ。周りの人間から除け者にされて……俺はいつの間にか学校でも仲間外れにされてる連中とばかりつるむようになってた。ひねくれた奴とか、問題のあるような奴とかさ。その中に一人、アセルスっていういつも俺に優しくしてくれる人がいた。たまたま近くに住んでいたせいかもしれないけど、俺が苛められていると必ずとんできて助けてくれた。正義感の強い人だった。アセルス姉ちゃん俺のヒーローだったんだ。……でも、ある時アセルス姉ちゃんは突然行方不明になって帰つてこなくなった。変な噂が流れたよ。変質者に犯されて殺されたとか、悪い男に騙されて駆け落ちしたんだとか。少なくともろくな話じゃあなかった。子供だった俺はその時、もしかしたらヒーローは負けてしまったのかもしれない、とそう思ったんだ。アセルス姉ちゃんはいつも正しいことをしていた。でもいなくなつてしまった。悪い奴に捕まつてしまったのかもしれない。誰かに殺されて、どこか遠くの場所に埋められてしまったのかもしれない。俺を守ってくれる人はいなくなつた。だか

ら……だから、俺は強くならなきやならなかつた。舐められないために髪も染めた。今度は俺がヒーローにならなきやいけないと思つた……」

そして、彼が本当の意味でヒーローになる時がやってきた。ブラッククロス四天王の一人、シウウザーの襲撃で命を落とした烈人はサントアリオからやってきたアルカールの力によって光刃皇帝アルカイザーとして蘇つた。俺はヒーローになるのだ、と彼は思つた。ヒーローの力を使ってブラッククロスと闘つた。シウライクでの幼女誘拐事件、そして星間船ハイジャック事件を経て、自分は正しいことをしていると実感できるようやく確かなものになろうとしている時、彼の目の前に再びアセルスは現れた。だがそれは彼が越えるべきヒーローとしてではなく、彼が守るべき女性としてでもなく、彼の仇であるブラッククロスを庇う存在としてだつた……。

——ヒーローは強いのか？ 俺を強くしてくれたのか？

——ヒーローの力は正義のために使わねばならん。

——ブラッククロスの奴らをぶちのめす！

——復讐はいかん！ 正義の戦い以外に力を使えば、君は消去されるぞ！

——どのみち死んでいたんだらう。ブラッククロスだけは許さねえ！

アルカイザーになつたあの日、アルカールと交わした会話を思い出した。自分の行動の原点は正義ではなく、復讐だつた。

「俺は俺のやってることが間違っているとは思わない。だが、敵を庇うアセルス姉ちゃんの姿を見てわからなくなった。俺のやっていることは正義なのか？ 子供の頃、彼女を見て憧れたヒーローと今の俺とは何かが違う。俺は迷った。何も決められなかった。戸惑っている内に仲間の一人が敵を殺し、アセルス姉ちゃんまでも傷つけることになってしまった……」

「後悔、しているのか？」

「しているさ。ヒーローになったことを後悔しているんじゃない。迷ってしまったことをだ。俺には責任があつた筈だ。迷わなければ、敵を殺すことも、そしてアセルス姉ちゃんの憎しみを受けることも全部一人でやれた筈だ。ヒューズの……仲間の情けに甘えることもなかった。うだうだと悩む振りをして他人に手を汚してもらうなんて、ヒーローの、男のすることじゃない……！ 俺は『変身』したんだ。たとえ俺と言う個人がつまらない奴だとしても、変身したからには完全無欠のヒーローにならなきゃいけないかつたんだ。……『変身』つてのは、だって、そういうもんだろう？ 弱い自分を捨てて……正しい英雄になる。そうでなきゃ、俺は……」

「そうか……。君は、これからどうするつもりだ？」

「さあな。わからん。だが、どうにかして強くならなきゃならんだろうな。少なくとも、このままじゃいられない」

衝撃的な話だった。肝心なところをさりげなくぼかしてはいたが、彼の正体がブラッククロスに敵対するものであるとは間違いなかった。このまま彼をひと気のないところに誘き出して殺すべきだろうか、と一瞬ラビットヘッドは考えた。だが「このままではいられない」と言った烈人の力強い眼を見てやめた。それは機械のやることだ。自分人間の心を手に入れなければならない。

烈人のススメに従って小さな売店で焼きそばを購入した。近くのベンチに腰かけ、おみじを眺めながらぼんやりと焼きそばを口に入れる。味の分析結果は「美味しいといえば美味しい」だった。彼は少し考え、自らの分析結果を上書きすることにした。いま、この京で、烈人と二人並んで口にするこの焼きそばの成分データは「美味しい」。そう定義する。

次に会う時は敵同士かもしれない。その時はきつと、小此木烈人は再び正義のヒーローとして立ちなおっているだろう。そうであればいい。人としてか機械としてかわからないが、願わくはその時、自分もまた迷うことなく相對したいものだ。

うまいうまい、と言ってラビットヘッドは焼きそばをかきこんだ。隣の烈人は「何だよそれ」と言って笑った。メカのくせに、変な奴だなあ。そう言って、烈人自身もまた「うまいうまい」と言って焼きそばを口に入れる。それが人間の姿だった。



その女を見かけたのは心術の修行場であった。

強くならねば、と言った烈人と別れたラビットヘッドは自分もまた強くならなければと決意を新たにしたが、さてではどうしたらいいのかと言えば思いつかない。ラビットヘッドはメカである。幾度戦いを繰り返したところで筋力や体力が身につくわけではないし技の閃きに身をゆだねることもできはしない。そこでラビットヘッドが思いついたのは、修行場で座禅を組むことであつた。人間は座禅を組み、深く瞑想することによつて精神中心に入り込み自己を見つめなおす。自分に心があるとは未だ思えないラビットヘッドではあつたが、人の行動を模倣することによつて何か心のようなものが見えてくるのではと考えたのだつた。ところが、そうして出向いた修行場にラビットヘッドは足を踏み入れることさえ許されなかつた。心術の資質を手に入れることのできるのは人間のみと知つてはいたが、挑戦さえさせてはもらえないとは。自分は資質が欲しいのではなく、ただ座禅を経て自らの心の在り処を見つめる導きを求めているだけなのだ、と説明してはみたものの、修行僧の対応は変わらずけんもほろろに追い返されてしまった。

拒まれ、途方に暮れたラビットヘッドが寺の軒先に佇んでいると、そこに一人の女が

やって来た。彼と同じように心術の修業を求め、断られた彼女は苦笑いを浮かべていたが、しかしそんな表情ですら清々しい印象を受ける女であった。

「あなたも？」とラビットヘッドは問うた。

「ええ」と女が答える。「妖魔であることを理由に断られてしまいました。京の座禅修行は心を洗うといえます。一度、体験してみたかったですね。」

「メカの私に術が使えないのは仕方のないことですが、心術は妖魔にも扱えないのですね。不思議なことです」

「何か条件があるのかもしれませんが。心術というくらいですから、心の問題なのでしようね。人と、妖魔。やはり心の在り方が違うのでしょうか」

「心……。私はまさにその『心』を求めてこの修行場にやってきたのです。しかし挑戦すらさせてはもらえなかった」

「ふむ？」

女は笑った。

「メカであるあなたが心を求めるとは実に興味深いことだ。なにゆえ心を求められるのですか？」

「『心』は私を人間にしてくれます。人間に近づいた私は、メカである以上の強さを発揮できるはずなのです」

「どうですか。……メカとしての、性能以上の強さを手に入れて、あなたはどんなさるおつもりなのですか？」

そう尋ねられて、ラビットヘッドは一瞬答えることが出来なかつた。はて、何故だつただらうか——そう考えて、ようやくその理由を口にする。

「クローンに残してきた人がいます。私はその人に出会わなければならぬ、その人に出会いその人を守るためには、強くならねばならないのです」

「それは好ましい言葉です。どうやらあなたにも複雑な事情があらうようだ」

「あなたは、なぜ京に？」

「理由は主に三つあります。一つは、長い間眠っていたためになまつてしまつた体と勘を鍛えなおしたいがため。二つ目は、……まあ、単なる観光のようなもの。私は剣を少々やります。数多くの剣豪を輩出しているこの京の文化に触れることで、私もまた新たな剣の精髓に近づけるのではと考えたのです。そして三つ目は——結局はこれが一番の理由ということになるのですが——我が主のもとから逃げ出した姫を連れ戻すためです。話によれば、彼女たちはこの京へやってきているようですから」

「姫？　もしやあなたは、ファシナトゥールの——」

女はそつと眼を閉じ、静かに答える。

「私の名はラフネライア。恥ずかしながら針の城では金獅子姫と呼ばれています」

「金獅子姫……金の姫獅子。データベースにも残されています。かつて洗王国から妖魔の君へと献上された人間の姫。女性でありながら勇ましい戦士であったと」

「いいえ、『献上』ではありません。私はオルロワージュ様との一騎打ちにて敗れ、あの方の寵姫となることを受け入れたのです。寵姫の中で、自ら剣を執り戦士たろうとする女は多くありません。私が金獅子姫などと身に余る名で呼ばれるのもそのためでしょうが、畢竟わたしは一回の武刃者に過ぎないのです」

「そのあなたがこうして針の城からやってきたということは、逃げ出した姫というのは、別の寵姫の方なのです。針の城の姫君はみな虜化を受けているはずでは？」

「彼女——白薔薇姫は少し特殊な姫なのです」

淡々と答えた金獅子姫の表情は柔らかな笑みを浮かべていた。その『姫』の行動に困りながらも、どこか面白がっている、そんな顔をしていた。

白薔薇姫たちを待ち受けると言った金獅子姫に付き合っただけらしく剣術や戦闘についての会話をしていると、やがて二人組の女性がやってきた。肩に人形を乗せた緑の髪の女性、そして頭に薔薇を纏わせた深窓の令嬢といった風情の女性。それが、金獅子姫の追っている白薔薇姫とアセルスだった。

—— お久しぶりですね、白薔薇姫。そして……お初にお目にかかります、アセルス殿。
—— どなたですか？

—— 金獅子姫様ですね。私、白薔薇と申します。姉姫様のお噂は耳にしておりました。最も勇敢な寵姫であつたと。

—— 白薔薇姫。貴女は最も優しい姫であつたと評判ですよ。その優しさで、私の剣が止められますか？

—— 金獅子姫。白薔薇は私が無理やり針の城から連れ出してきた。戦うのは私です。

—— どちらでも構いません。私はお二方を連れて帰るようにとの命を受けています。私はただ、そのために剣を尽くすのみ。

—— どうして……？ どうして、自由を求めてはいけないんですか？ 私は何も、オ
ルロワージュを裏切るだとか、傷ついたりだとかしようとしていないのではないんです。
私はただ、自分が自分らしくいられる場所をみつけたくて……。

—— アセルス殿。私は別に、貴女を責める気などはないのです。逃げたいのなら逃げれば良いでしょう。私はただそれを追うだけです。生きとし生ける全てのものには自らの可能性を求めて戦う権利がある。私は貴女の行動を咎めはしません。ただこの剣をもつて対峙するだけです。

—— 力づくで他者の自由を奪うことが、あなたの求める剣ですか？ 話し合いで解決

することはできないんですか？

——自由と自由とがぶつかればそこに敗者が生まれることもありましょう。言葉だけでは叶わぬ夢もあるのです。

——アセルス様。私も戦います。

——いいんだ。白薔薇。もう、知っている人が傷つくのは見たくない。これは私が始めた『旅』なんだ。たとえ誰に裏切られても、どんな失敗をしても、全ては私の責任……。だから、私は戦う！ 金獅子姫！

——いざ！

決着は一瞬で着いた。

金獅子姫は中段の構え、青眼。剣先で相手の左目を付く構え。これは防御のための構えであり、追跡者としての金獅子姫には不釣り合いといえる構えであった。攻める気を見せない金獅子姫に対して——やはり経験も浅く未熟なのだろう——焦れたアセルスが逸り、直線的に斬りかかった。上段から振りかざした剣で金獅子姫の手首を狙う。まづ敵が持つ武器から奪うというこの狙いはそこまで悪いものではない、が、それはあまりにも見え透いた隙であった。戦いが始まってより僅か六秒。戦いの趨勢は初めから最後まで金獅子姫の手の内にあつた。アセルスの剣が小手を捉えたと思えたその瞬間、

金獅子姫はあたかも霞のごとく構えを變じる。変幻自在、霞の青眼。振り下ろしたアセールの劍を小手で捌くというよりも弾き飛ばし、大きく体勢を崩したアセルスの首元へと吸い込まれるようにして金獅子姫の劍が奔る。あわや真つ二つと思われたその時、金獅子姫の劍はちよんとその劍先を跳ねあげ、劍の腹がアセルスの顎を強かに打ちつけた。途端、力なく膝を落としてアセルスはあつけなく氣絶してしまふ。

——…これが対妖魔の戦い方です。下手に傷つけ再生させてしまふ前に意識を断つ。妖魔といえど人の体と似ているところは多いのですよ。覚えておくと良いでしょう。

——聞こえていないのでは？

——後から貴女が伝えて差し上げれば良いでしょう。白薔薇姫。

——後から？ それでは…私たちを見逃して下さるのですか？

——私にはアセルス殿を斬る理由がありませんから。

——しかし、金獅子姫様はさきほど…。

——あれはあれで正しいことだと思います。嘘ではありません。ただそれが『今』である必要はどこにもないということです。彼女は貴女を守るために必死だった。もしかしたら、戦いが長引けば別の追手が来ると考えたのかもしれないね。そうなれ

ば貴女まで剣を抜かねばならなくなる。アセルス殿はきつと焦っておられたのでしよう。もし何か一つでも条件が変わっていれば倒れていたのは私だったかもしれない。……アセルス殿が妖魔化されなかったのには理由があるのですか？

——さあ、どうしてでしょう。自分自身の力で正々堂々と闘いたかったのかもしれないせん。

——ふっ……。それについては、未熟と言わせて頂きましょう。貴女を守ることも、己の誇りを貫くこともどちらもしようとして、結局彼女は何も手に入れられなかった。

——そうですね。確かにアセルスはまだ若く、愚かな面も目立ちます。ですが……。

——そんな彼女に惹かれているのですか、白薔薇姫？ 四十六番目の寵姫である貴女が？

——どうでしょうか。最近、わからなくなるときがあります。

——針の城ではアセルス殿が貴女を連れ出しともつぱらの噂。……ですが、私はむしろその逆ではないかと思っています。

——何故です？

——追跡の任務を受けるにあたり、オルロワージュ様から貴女の性格については多少、伺っております。アセルス殿の、そして白薔薇姫、貴女の思惑を私は見極めねばな

りません。今日はそのために参加したのです。貴女が針の城をとびだしてから五年あまりの歳月が経ちました。その中に貴女の求める物語がありましたか？

……………。

——他者の行動を『見る』『観察する』そして『物語る』……。それがあなたの嗜好な
のでは？

——オルロワージュ様がそう仰つたのですか？

——いいえ。あの方の話を聞いてそう思つただけです。間違つていましたか？

——……いえ。その通りです。ご推察の通り、私は物語を楽しむ女。まっすぐで純粹な者が社会の理不尽に曝されて苦しみ、思い悩む姿が……私には愛おしくてならないのです。

——随分とあつさりお認めになるのですね。

——貴女を騙しても面白くはなさそうですから。

——……白薔薇姫。貴女は物語を楽しむ。ですが貴女は自らの求める物語の結末を知っているのですか？

——どういう意味でしょう。

——たとえばそれが主人公の苦難を描き続ける物語といえど、ハッピーエンドとバッドエンドでは天と地ほどに違います。

……………。

——あなたが願う結末はどちらですか？

——ここでバッドエンドだと答えたら、私は貴女に斬られるのですか？

——返答如何によつては、無論、そうなりましょう。

——さて……果たしてどちらなのでしょうね。そのあたりは私にも判然としないのです。なにぶん、長いことページをめくりすぎたものですから。

——白薔薇姫。

——手垢のついた物語はいつか古びて忘れられてしまう。だから私たちはきつと、自ら物語を動かすべく行動していかなければならない。その方法が正か邪か、これは私には預かり知らぬことです。

——白薔薇姫。貴女はやはり針の城を、オルロワージュ様のことを……。

——先ほどアセルスは旅の責任は全て自分にある、と言ってくれました。たとえ誰に裏切られても、どんな失敗をしても、と。それはあまりにも幼く愚かで、しかし勁い言葉であつたように思います。ならば、私もまた独りの女として自らの在り方を選ばねばなりません。私が望むのは果たしてアセルスの絶望かそれとも勝利なのか。次に会う時までには、必ず。

——良いでしょう。楽しみにしていますよ。



話の内容はまるで理解できなかった。しかしそれはどうでもよいことだった。ラビットヘッドはただ、金獅子の剣に魅入られた。短い攻防ではあったが怖気立つほどの冴えを見せるあの業。あの剣速。

内にインストールされた剣闘マスター。数多の剣豪の体捌き・剣閃を記録している自分にはわかる。この女剣士は只者ではないと。

そう認めた時、既にラビットヘッドは彼女と闘うことを決めていた。たとえその結果敗北したとしても、その経験は自分にとってあまりあるものだ。

いまだかつてない感覚に頭部が軋む。それは言うなれば『高揚』とでも呼ぶべき感覚だった。心が躍った。

「金獅子姫——」

出会ったばかりの彼女にこんなことを頼むのは変だろうか。いや、構うものか。たとえ笑われたとしても、失うものなどない。

「不躰は重々承知の上でお願います——どうか私と手合わせ願えませんか」
身を屈め、腰に佩いた加熱剣にそつと手を添える。全身の駆動処理を最優先。

「ははッ……」

金獅子姫が笑う。だがそれは嘲笑ではない。

「——戦いを挑まれて拒む剣士がいるでしょうか？ ラビットヘッド殿。ちようど私も物足りなく感じていた所です。謹んでお受けいたしましたよう」

そう言つて爽やかに笑つたかと思うと、次の瞬間には既に表情を消している。幽遠の瞳でラビットヘッドの動きを捉え、いかなる攻撃にも対応してみせんと身を撓める。

本気でやる——そう、眼で言つていた。脊髄を歓喜が奔つた。ラビットヘッドはこの女妖魔の流派を知らぬ。その劍の由来を知らぬ。だが間違はなくこの姫は劍の達人。それも人の限界を超えた妖魔の劍士——。

勝てる、とは思わない。並び立つことができるとさえ思わない。だからこそだ。己が全身全霊をかけて闘つてこそ見える境地もあるう。

寺の境内に夕日が降りる。赤々と焼けた西日が夕闇を掻き混ぜ、照り返しを受けた雲は溶岩流じみて尖る。寺院はその輪郭をくつきりと露わにし、深く濃密な影を背負つていく。

深紅に染まる夕空の眩さにあつて、しかし地上はひたすらに暗く影絵となり、出会うものが全てが表情を持たぬのつべらぼうのような、人格を削ぎとられた無機物のような、一寸先の想い人でさえ死者と見紛うこの時刻。黄昏時。

人の形をしているものは誰もが人の影を持つ。ゆえに時は黄昏、ラビットヘッドが持つ影は頭が一つに体も一つ、腕と足が二つずつ。それこそは人の形、人の影。人形が持つ影はいかなるときも柔き人影、機械仕掛けの人形は今こそ人影を伴って妖魔の姫と対峙する。

ラビットヘッドの剣が閃く。

人を超えた膂力で撃たれる剣閃は神速。膨大なデータから最適化された体駆動は伝説の剣豪が一生に一度撃てるかという一振りを容易く再現する。握る機剣は加熱剣。錬金術の秘奥を受け、生成された流体金属を鋼の牙と成し——超高熱の火焰を秘め、摂氏三千度を超えてなお燃ゆる灼熱剣。触れるもの全てを灼き砕く剣は白くどこまでも白く輝き、その剣が振るわれる空間では音さえも焼かれ、周囲一面は剣の殺意に溶けて静寂と化す。

対する金獅子姫はやはり青眼。

返し剣。大海のように悠々と待ち受け、泰然自若として剣を捌く。あらゆる器にその身を寄せる流水の如く、金獅子姫の自在剣は後の先。動かぬことの強さをもつていかなる刃をも打ち破る。天に選ばれた麒麟児が妖魔の縁を受け、人の寿命を遥かに超える幾年月を剣戟に費やすことで到達した凶気の剣。あらゆる剣の後から撃たれ、しかしてあらゆる剣の先を征く剣。

片や機械の加熱劍。

片や獅子なるかすみ青眼。

相対する必殺劍。その勝機を得たのはやはり——劍士として上を行く金獅子姫の方だった。加熱劍をいなすことは不可能と見た姫は瞬時に劍閃を変えてのける。——燕返し！ 妖魔の劍が恐るべき弧を描きラビットヘッドの腕を打つ。狙いを外した加熱劍は虚しく大地を叩き、その刃が砕け散る。

——なかなか面白い劍ですね。普通の劍では受けるだけで断ちきられてしまうでしょう。……ですが、そうとわかれば受けなければ良いだけのこと……。

金獅子姫の眼がそう語っている。言葉に出さずとも伝わる。互いに死地を囲む者同士だからこそ、その眼差し、その吐息が百万の言葉よりも雄弁に意志を語り始める。手に取る様に考えていることが理解できる。

納刀——再チャージまで凡そ十三秒。絶体絶命の状況にあつて、然しラビットヘッドは笑う。憎しみもない。後悔もない。何の戸惑いも迷いもなく、何一つ守る必要のない戦場で——ただ、無意味に。劍と言う名の邪悪を振るい、己が全身を殺意に満たして、純粹無垢なる殺人者として闘うことのなんと心地よきことか。そうだ。ここには論理がある。心などというあやふや言葉も、任務や組織などの縛りも、そして守るべき女さえもなく、ただこの場を貫く理は一つ——強い者が生き、弱い者が滅ぶ。なんと明確な理

屈だろう。正義などはいらない。邪悪であることさえも煩わしい。ただひたすらに存在し、存在し続けるために——生き残るために兇器を振るう。

——劍は砕けた。だがまだ私は敗れておらぬ。この十三秒、見事凌ぎきつて見せましようぞ。

慌てずに飛び退った。彼我との距離は三步半。金獅子姫ならばまばたきほどの時間で零としてのけるであろう距離——だが、これで良い。

返しの劍。かすみ青眼。非の打ちどころのない劍である。しかし『劍』の業に関して はラビットヘッドにも一日の長がある。無数の星、無数の時代に存在した数多の劍豪——彼らの生きた証がこの胸には生きている。無刀の位——あるいは徒手空拳による返しの技術。劍闘マスターが内包する防御法は千を超え方を超える。

——そうです。ラビットヘッド殿。貴女に必要なのはまず、歩法。劍を納めている間、敵の攻撃を逃れるための徹底した体捌き。そして——。

教え導くような金獅子姫の言葉。そこに悔りの感情はない。互いの全力を尽くし、劍戟の極致を交わすための啓示。

——……そして何よりも貴女が手にするべき技は——抜刀術。加熱劍は必殺劍。しかし必殺も当たらなければ無為と化す。ゆえに、あなたが繰り出す加熱劍はあらゆる劍閃を追い抜かねばならない。

——抜刀……術……。

——抜刀術とは文字通り抜刀するための術。貴女は必ず剣を鞘へと納めなければならない。命の遣り取りを無数に交わす闘いにおいてその隙はまさに必死。なればこそ、貴女の求める剣は抜かずして抜く剣でなければならない。抜刀を極めれば即ち剣は鞘内にありて同時に掌中を滑るもの。——さあ、ラビットヘッド殿。次の一手で終いと致しましょう。貴女の『剣』を私に見せてください……！

金獅子姫がその眼で吠える。ラビットヘッドは無言で応える。そつと天を仰いだ。地平の端に夕日は落ちて静かな夜がやってくる。穏やかな夕闇。視界の隅に覗き見える幽かなる夕月。人間であれば懸命に眼を凝らしてようやく見えるほどの、朦朧と霞む月が見える。

さあ、全力を尽くそう。己の全てを見せよう。

在るか無きかもわからぬ魂などではなく、今ここに実存する自らの躯体、自らの機能を駆使して。

形式番号7874—8782—DRC0015Rabbithead。この体は中島製作所ラビットシリーズを基に造られた。

月を見る。ラビットヘッドは静かに呟く。

——次^{サテ}元^{ライ}衛星^{トリ}連結^ン機能^カ、起動。

原子時計励起開始。超精密三次元測位。彼我相對距離算出。

「^{ブレイド・ドロウ・カルキユレイション}拔刀演算——」

こうして魔劍は生まれる。

衛星連結によつて得た位置情報を基に必殺必死の抜刀は演算される。未来予知にも似た殺人試行。物理的に回避し得ない速度・角度で振るう加熱劍を幻視する。

チャージまで残り三秒。

いぎ、と姫が言う。

チャージまで残り二秒。

いぎ、とラビットヘッドが言う。

チャージまで残り一秒。

白々と澄んだ月光が灼熱の劍を舐める。

いぎ、と金獅子姫が叫ぶ。

いぎ、とラビットヘッドが叫ぶ。

動いたのは同時——。

ラビットヘッドの加熱劍が、そして金獅子姫の自在劍が、その牙を突き立てんと闇夜

を奔る——。

◇

月が綺麗ですね、と金獅子姫は言った。血だらけの体で空を見上げ、しみじみとため息を零す。剣は傍らに投げ出され、金獅子姫自身もまた膝をつき、力なく軒先にもたれかかっている。夥しい流血に血の気を失った顔でふ、ふ、とささやかな笑い声を上げ、ラビットヘッドを見下ろす。

月が綺麗ですね、と金獅子姫は言った。だがラビットヘッドには何と答えて良いのかわからなかった。だから彼は——ぼんやりと月を見つめ、うわ言のようにその言葉を口にした。

色々なことが怖くて怖くて堪らないのです。この世は不可解に満ちている。訳のわからないことばかりです。

猿の話を私は見ました。そうして、人間になれ、と言われました。人間になる方法なぞ、私には皆目見当がつきませんでした。

人との会話を楽しむことだ、と博士は私に言いました。だから彼女と話をしました。

彼女はやがて死にました。メタルガウンという敵がそうしたので。私は彼に負けました。

しばらくすると私はまた新しい体をもらいました。私は次の私になります。次の私はまた同じ任務を与えられます。人間になれば、誰かが私にそう言いました。

私は彼女と出会いました。芙蓉杰、という名の女です。最初に死んだ女も確かそんな名前をしていました。

人間であればこの時すぐに何かがおかしいと気づくものなのでしょう。たとえば人間には猿の見分けがつかなくても、猿には猿の見分けがつく。

人間同士であっても、異なる人種間では外見の区別がつけにくいということは証明されています。

私は現地協力者に会うように言われていました。一人目の協力者は名を芙蓉杰と言い、彼女はメタルガウンに殺されました。二人目の協力者の名も芙蓉杰と言い、やはりメタルガウンに殺されました。

7874—8782—DRCC0014Rabbitheadとなった私は再びクローンへと赴きます。そこで出会った『彼女』もまた、芙蓉杰という名の女性でした。

その時になってようやく私は何かがおかしいと考え始めました。しかし何がどうなっているのかさっぱり理解できません。

単にブラッククロスが現地協力者として雇った人間が『芙蓉杰』という共通のコードネームを与えられているのではないか、そのように考えもしました。しかし何度も出会う『彼女』はいつも同じ彼女のように思えました。彼女は娼婦でした。彼女はペヤングが好きでした。「うまいうまい」と言つてペヤングを食べました。正義の味方になれ、と言つてくれました。何故でしょう。私はそれが少しだけ嬉しかった。三人目の彼女もまたメタルガウンに殺されました。私は彼女を守ることができませんでした。博士が私に尋ねてきます。彼女のことをどう思うのか、と。なぜそんなことを聞くのでしょうか。何かがおかしいと博士に確認してみるべきだったのでしょうか。わかりません。私はただ怖かったです。今にして思えば、何かが怖くて怖くて堪らなかつたのです。早いうちに彼女の脳波を測定するなりDNA照合を行うなりしておけばよかつたのかもしれません。でも、もし、彼女たちが同一人物だと確定してしまつたら？ 博士に聞いて真実を知ってしまったら？ 二人目の彼女に出会つた時——二人目の彼女に出会つてペヤングを食べた時、私は少しだけ懐かしさを覚えてほつとしました。ああ、これだ、と思ひました。死んだはずのものが生きていました。三人目の彼女と出会つてその想いはますます強くなります。これは一体何なんだ？ そんな風に考えます。真実を知りたい、彼女が何なのかを突き止めたい。そう思うその一方で——私は静かに恐怖していました。何かがおかしい。だがその秘密を暴いてしまえば私はもう二度と彼女

に会えなくなってしまうのではないか。夢でも見ていたかのように彼女は再び死体へど戻ってしまうのではないか——そう考えると怖くてたまりません。

だから私はクーロンから逃げました。

繰り返される事件、悪夢のループから逃げたのです。また芙蓉杰と出会えばまた彼女を失うことになる。だから私がいなくなれば彼女も幸せになれるのでは。そんな風に言い訳をしてこの京までやってきました。

京の町で小此木烈人という青年と出会いました。彼はヒーローでした。正義の味方であった彼は己の理想に苦しみ、悩んでいました。私はそれまで、正義の味方と言うのはある種の機械のような存在だと感じていました。正義の味方は決して迷わない。正義の味方は『正義』という理念を掲げ、悪と闘ってこれを打ち砕く。そこには何の歪みもない論理があります。正義の味方はどこまでも純粋な機械なのだ。

ところが、そうではありませんでした。小此木烈人というヒーローは自らの弱さを嘆き、戸惑いを抱え、それでもなお闘う男でありました。正義の味方には心があったのです。誰かを救う正義の味方もまた、同時に誰かに救われたいと願っている。その矛盾を私は愛します。そしてこう考えるのです。もし正義の味方に『心』があるとすれば、正義の味方になることのできない存在、『悪』というものにも心があるのではないかと。

……なんだか、話が脱線してしまいました。

心、という存在を私は求めました。ですがその言葉の在り方をついぞ掴むことはできませんでした。答えを見つけないことは出来ない。しかし私はそれでも強くならなければならぬのです。この修行場でとうとう私は貴女と出会いました。私はただ、あなたの剣に憧れた。理屈や倫理に拠ることなく、この剣にのみて生きること。清々しい貴女の弁に私もまたこうありたいと感じたのです。

貴女のように強くなりたい。

貴女のように強く在りたい。

そう思う私を私は恥じません。……私は間もなくあの場所へ還らなければなりません。その結果この身がどうなるかはわかりませんが、金獅子姫、貴女に教えていただきたいことは決して忘れない。

月が、綺麗ですね、と金獅子姫は再び言った。ラビットヘッドは答えない。その代わり、今度は金獅子姫が静かに語り始める。

生憎と学の無いこの身ゆえ、心というものが何なのかを教えて差し上げることが私にはできません。私にあるのは、ただ、この『剣』のみです。

月が綺麗だ、と私は思います。その言葉が何に由縁するものなのかを私は知りません。

ですがそれでも月は綺麗です。たとえその想いを貴方と共有することができないとしても。

我が主、オルロワージュ様ははるか昔に心を亡くされてしまわれました。〃月は確かに美しい。しかし、その美しさは百年前の美しさとうどう違うのか？〃。——そう、あの方に言われたことがあります。随分と寂しそうな顔をされていました。

私には剣しかありません。女としてあの方に悦びを捧げることはできない。それを歯がゆく思うこともあります。でずか畢竟、私にできるのは戦うことだけなのです。

あの方の孤独を癒して差し上げることができないのなら、せめてこの剣を持って外敵を滅ぼし守り抜く。それが私の務めです。

この身はオルロワージュ様の剣。この身はオルロワージュ様の鋼。

心が無くても良いではありませんか。ラビットヘッド殿。たとえ心が無かったとしても、剣が、この身が『鋼』であるのなら畏れることは何も無い筈。

剣術とは殺人の法。心が鋼であればすなわち患うことなし。この場合の心とは人間の心を言うものではありません。戦いにおける心構えを言うのです。

鋼としておありなさい。ラビットヘッド殿。さすれば貴方の剣は必ずや道を切り開

くことでしよう……。

ラビットヘッドはもはや答えない。金獅子姫はそつと天を仰ぎ、なおも月を見つめ続ける――。

◇

私は、と彼は言う。眼が覚めて、いつもの光景を視認する。天井には光度の強い蛍光灯。無機的な実験室。周囲の生命反応は二個体。壮齡の男性一体。その後ろに女性体が一つ。彼らが誰なのかを自分は知っている。

「ようやく目覚めたか。自分が誰なのかわかるかね?」

私は誰なのか、と彼は尋ねている。ラビットヘッドは答える。

「この体の型式番号は7874―8782―DRCO016Rabbitheadです。ドクタークライン」

「うむ。無事に目覚めて何よりだ、ラビットヘッド。――しかし、それにしても今回は随分とおかしな行動を執つたものだな?」

「私の任務はクーロンでの潜伏任務です。しかしメタルガウンの存在によつて当任務は

遂行困難と判断されました。よって私は状況改善手段を求め、京へと向かったのです」

「はっ……はっはっは。そうかそうか！ それが君の考えか！ いいぞ、ラビットヘッド！ それでいいのだよ！ それで君は何らかの手段を見つけたのかね？」

「はい。博士。学習プログラムにより、剣闘マスターから新たなプログラムを拡張することができました。私はそれを抜刀マスターと定義しています」

「抜刀マスター！ おお、なかなか浪漫のある名前ではないか！」

「ありがとうございます。博士」

「それで、だ。何度も聞いた質問で申し訳ないのだが——君は、現地協力者をどう思う？」

「ミズ・芙蓉杰のことですね」

「そうだ」

「彼女は私が任務を遂行するために必要な存在です」

「……それだけかね？」

「はい、博士。それだけです」

「そうか……。フーム、うまくいきそうでなかなかいかんな……。ではラビットヘッド。再びクローロンへ向かい任務を遂行してくれたまえ」

「了解」

変わり映えのしない会話を繰り返してラビットヘッドはクーロンへと赴く。いつものようにいつもの場所で芙蓉杰が彼を見つけて声をかける。

「あんたがラビットヘッド？」

「はい、そうです。ですが、どうして私がラビットヘッドだとわかったのですか？」

「それ、答えなきやいけないわけ？」

気だるそうに彼女が言う。

「ミズ・芙蓉杰。また会うことが出来て光栄です。早速ですが私はメタルガウンと戦わねばなりません。奴がどこにいるのか教えて頂けませんか？」

「え……？ 何であたしの名前を知ってるの？ それに、メタルガウンって、誰？」

「本当に何も知らないのですしたら申し訳ありません。しかし、ミズ・芙蓉杰。貴女は三度私と出会い、同じく三度、目の前で死んだ。貴女は本当に人間なのですか？ 貴女には、何か秘密があるのではないですか？」

「な、何言ってるんだよ……。訳のわからないこと突然言い出して……」

「ミズ・芙蓉杰。お願いです」

「……」

しつこく尋ねると、芙蓉杰はぴたりと口を噤み表情を消した。

「……本当に？ 本当にそれでいいの？」

「……はい」

頷くと芙蓉杰は悲しそうに顔を歪め、それからひと気のない場所を目指してとぼとぼと歩きだす。

案内されたのは潰れたばかりの住宅ビル跡地だった。風が忙しく砂埃を立て、霞む視界の向こうで、メタルガウンが瓦礫に腰かけているのが見える。

「よお。遅かったな。うっかり待ちくたびれるとこだったぜ。ここにたどり着くまで随分かかったな」

馴れ馴れしい態度でメタルガウンが挨拶代わりに手を上げる。

「……結局、これはどういうことなのか」

そう尋ねると、メタルガウンは素っ頓狂な声を上げる。

「え？ お前、全部わかったからここに来たんじゃねーの？ うっわ、マジで？ ……あちやー。やべー」

「……私が認識しているのはこの任務が『繰り返し』の状況にあるということだけです。芙蓉杰と出会い、メタルガウンが現れ、そして私が敗北する。執拗なまでに再現されるこのシチュエーションに『気づき』を覚えることが私自身の任務にとって何か重要な意味を持つのではないですか？」

「まあな。説明してみりゃ案外くだらない話なんだが……。言ってみれば大いなる茶番

だな。ドクタークラインもよ、人の心をもったメカを作るつつたつて、これまた馬鹿みたいな実験を思いつくもんだよな」

「実験……。これは実験なのですか？」

「RPGだよ。ロールプレイングゲームさ。このアマは可哀そうなヒロイン。俺様は悪の大魔王。そしてお前は姫様を助ける主人公ってわけだ。ゲームオーバーになっても何度だってセーブポイントからやり直せる。ゲームのクリア条件はヒロインとの会話の中で人間性を手に入れ大魔王を倒すこと。……お前だって、女を殺されて少しは腹が立っただろ？ その怒り、正義の心を体得できたなら人間になれる、まあドクタークラインもそんな風に考えたのかもな」

「……随分あっさり真相を告白するのですね」

「冷静に考えても見ろ。たとえバレたとして何の問題がある？ 実験が行われてるのはきつとクローンだけじゃない。お前みたいなラビットシリーズの複製体は何体でもいるんだ。他のリージョンでだって似たような実験が行われてるんだろ。……俺様にはこの実験の責任なんかねーからな。適当にやるさ」

「……」

「……な？ 話としては下らねーし、騙されてたつてわかつて腹が立つだろ？ それも目的の一つなんだよ。何もかもが嘘だと知つて絶望の淵に叩きこまれて、そんでためー

はどうすんだ？」

「……」

「絶望はてめーに心を与えてくれる。理屈は簡単だよな。絶望するのは心があるからだ。何もかもが嘘だった。ドクタークラインは全部わかった上でお前のとぼけた回答を裏で笑ってたんだよ」

「メタルガウン」

「何だよ」

「お前ももっと自由な存在なのかと思っていた」

「だったら何だったんだ」

「初めて会ったときにお前は言ったな。自分には魂がある。だから組織から逃げ出し、思いのままに生きています。私にとってお前は敵以外の何物でもないが、しかしその点に関しては羨ましく感じていた。人の心を求める私だ、既にして『魂』を手に入れたお前はその方向性さえ違えども見習うべき先達者なのかと思っていた。——だが、それは違うのだな」

「ケツ。うるせー野郎だなてめーは。ああそうだよ。俺様は自由でもなんでもねえ。結局はブラッククロスに造られたメカなんだ、創造主にや逆らえねえ。どうしたって仕方がねーんだよ、これは。……てめーだってそうなんだぜ、ラビットヘッド！ どんなに

納得がいなくなつたつて、ドクタークラインには反抗できない。そういうプログラムが組み込まれてるんだよ、俺たちにはな！」

自棄になつたように捨て鉢に叫ぶメタルガウン。だがもしかしたらそれすらも彼にインプットされた人格を再現しているだけに過ぎないのかもしれない。

「自由を手に入れたのではなかったか。心があるのではなかったのか……！」

「そういう『配役』を与えられただけだ。俺もお前も。そうさ、大した違いなんかありませんねえ。お前だつて、何か一つ違えば悪役になつていた筈なんだ！」

「……私は、お前とは違う……」

「何が違う？　結局のところ、お前はここにこうしてのこのことやつて来ている。お前にもし、本当に真実と戦う覚悟があつたならクラインの野郎に問いただしていた筈だ。たとえそうでなかったとしても、その女を本気で守りたかつたのならその場であのくそ爺いたちを皆殺しにしてブラツククロスを裏切り、その女と逃げ出したつていい。……いいや、今からでも遅くはない。お前がそうするというのなら、この場は見逃してやるよ」

「……」

まるでこちらがそうすることを望んでいるかのようにメタルガウンは言う……。しかし。

ドクタークラインを、ブラッククロスを敵に回す？ 確かにそれは一つの方法ではある。妥当性はともかくとして、確かにそれは考慮に値する手段だ。だがこれまで、自分にはそんな考えは何一つとして思い浮かばなかった。いいや、今もそうだ。考慮には値する、そう判断しながら、しかし自分はその選択をはなからありえないものとして今にも切り捨てようとしている。

それはなぜか。

「……お前はもう、負けてるんだよ、ラビットヘッド。そういう風に作られたのさ」
嘲りと共にメタルガウンが呻くように言う。ラビットヘッドは答えない。

「……ミズ・芙蓉杰」

「あ……？」

それまで傍観していた芙蓉杰は突然話しかけられて困惑の表情を浮かべる。

「あなたも、そうなのですか。何もかも知っていて、私のことを騙っていたのですか」
芙蓉杰は唇を噛みしめる。

「……ああ」

「そうですか……」

「何から何まで嘘だつてわけじゃない。私は自分に刷り込まれた人格データを基に振る舞っているだけだから。あんたにペヤングを食べさせたのも、正義の味方になれと言っ

たのも、あたしの中の芙蓉杰がやったこと。でも、……そうだな、やつぱり、ひどいことだったよね……。ごめん……」

「……」

ラビットヘッドは瞑目する。全身の力が抜けていく。どこか心地よいとさえ言える虚脱感。

「ミズ・芙蓉杰……。貴女に出会えたことを、私は忘れません。ですが……こんな実験はもう、繰り返すわけにはいきません。私は……」

「うん……」

泣きながら弁解する幼子を許す母のように芙蓉杰が頷いた。ラビットヘッドは彼女の首に手を掛け、そのまま縊り殺す。ゴキリと鈍い音がして、女の骨が砕けた。全身からくたたりと力が抜けて芙蓉杰が膝を落とす。

そして虚無が訪れた。女の死体を胸に抱く。体の内部が虚ろに透けていくような感覚。もしこれが『心』によるものであるのなら、こんなものを望んではいなかった。だがこれは予想していた結末だ。どうせこんなことになるのだろうと思っていた。クーロンから逃げ出した時から感じていたことだった。金獅子姫と戦い、クーロンに戻ることを決意した時でさえわかっていた。けして幸福な結末など待つてはいないことを知っていた。

小此木烈人。私を助けてくれ。

いや……彼はここにはいない。ヒーローはやってこない。そして私は正義の味方でなく、人間ですらなく……悪の組織ブラッククロスの機械兵士に過ぎない。

心があれば。

私が人間だったなら。

……今さらそれが何になる。たとえば人の心を手に入れたとしても、人間性に縋りついて生きるわけにはいかない。

「……なあ、もういいか？俺もいい加減うんざりしてるんだ。馬鹿みたいな台詞を喋るのには。もう戦うのはこの辺で最後にしようや」

「……そうだな」

私は一体なんだ。

7874—8782—DRCC0016Rabbithead。それが私の形式番号。

そんな言葉が果たして何の役に立つ？

“たとえば心が無かったとしても、剣が、この身が『鋼』であるのなら畏れることは何もない筈”

“正義の味方のつもりだった。でも、そうじゃなかった”

“白か黒かで言えば、やっぱりあたしは黒なんだ——”

自分は正義の味方にはなれない。

守るべき女を殺して進む道などどこにもありはしない。

自分はブラッククロスの兵士として生きることしかできない。

ならば——ならばせめて悪として、一筋の誇りをもつて生きたい。

悪——ただし、鋼の。ただ一振りの剣にのみて悪を為す、正義と対極の存在として。

「白黒つけようぜ、ラビットヘッド」

メタルガウンが言う。殺意を剥き出しに爪を構える。

「そうだな。私は黒でいい」

答え、剣を構える。

「ラビットヘッドとしての私は既に敗北している。——ならば、ここにいる私はラビッ

トヘッドではない」

「なに？」

「私は鋼、私は黒。我が名は……メタル、ブラック……！——推して参る！」



柳生新陰流『兵法家伝書』活人剣に曰く――。

心は水の中の月に似たり、形は鏡の上の影の如し。右の句を兵法に取用る心持は、水には月のかげをやどす物也。鏡には身のかげをやどす物也。人の心の物にうつる事は、月の水にうつるごとく也。いかにもすみやかにうつる物也。

人の心のものにうつる事、月の水にうつるがごとくすみやかなと云ふたとえなり。意の速かなること水月鏡像の如しと云ふ経文も、月が水にうつりて、さだかにあれども、水そのをさぐれば、月はなひと云ふ儀理にはあらず。

我心を月のごとく場へうつすべし。心がゆけば身がゆく程に、立あふてより、鏡にかげのうつるごとく、場へ身をうつすべし。

場にては水月、身には神妙剣也。いづれも、身手足をうつす心持は同じ事也――。

『月が水にうつりて、さだかにあれども、水のそこをさぐれば、月はなひと云ふ儀理にはあらず』

私は誰だ、と誰かが言った。

私は私だ、と誰かが答えた。

ではその『私』というのは一体何だ。問うものと答えるものとはどんな因果で結ばれている。

ここクーロンの薄汚れた空にもやはり、月は等しく輝いている。

月があるからそれを月と呼ぶのではない。ただこの星唯一の衛星を、自転と公転の等しいその星を『月』と呼んでいるだけだ。

それでもここに月はある。この星の空に月は確かに輝いている。

月は狂気。人を狂わす魔性の女。そんな女に恋をしてこの世の条理に抗するならば、誰しもその手に虚無を握る。

ここに一匹の猿がいる。猿は月に恋をして、叶わぬ恋にその身を焦がす。伸ばしたその手は決して届かず、絶望のうちに猿は死ぬ。

ここに機械の兎がいる。兎は人の心を求めて旅をし、幾度も敗北を繰り返す。人の心。そんな不確かなものを、果たしてどう抱きしめろと言うのか。

それでも物語は無くならない。無かったことにはならない。猿が懸命に伸ばした腕を、兎の願った正義の味方を、その透き通りゆえに水影として写し取ることができたなら、その物語は救われる。

鋼の黒。

メタルブラック。

腰に構えた加熱剣に右手を添える。

次元衛星連結機能起動。原子時計励起開始。超精密三次元測位。彼我相對距離算出。

ブレイド・ドロウ・カルキュレーション
 抜刀／＼ 演算。

呪文めいたコマンドと共に身を撓める。

「へッ。一丁前に構えやがって」

メタルガウンが嘲り立てる。

「てめえに俺様が倒せるか？ 騙されつばなしの空っぽ野郎がよ！ てめえには戦う理

由がねえ！ だから俺には勝てねえんだよ！」

こちらの集中を乱すための安い挑発に、しかしメタルブラックは静かに答える。

「理由なら、ある。——貴様の顔が気に食わん」

そして、抜刀——。

繰り出すは必殺のツルギ。あらゆる剣の後から撃たれ、しかしてあらゆる剣の先を征

く。剣。

演算抜刀——月ムーン擦スクレイパー劍。灼熱の魔劍は遂に放たれた。

第二十幕 銀河の旅路 前編 私が貴方に支配されていた頃

その瞬間が訪れた時、不思議と私に不安や迷いはなかった。それはかつて白薔薇という女が語った通りの出来事であり、初めてその言葉を耳にした私は激しく拒絶したものだ。だったが、いまとなつては何もかもが来るべき予定調和として受け入れられる気がした。

もしこの世に定めというものがあるとしたら、きつと目の前に迫りくるこの剣、この切っ先こそがそうなのだろう、と私は思う……。

忌々しいわが身の愚かさとも、呪いのように拭い難いこの心の弱さともこれでおわかれ。……ああ、そうだ。何もかもを終わりにできる。私という物語の結末を美しく飾ることができる。

躊躇いはない。

後悔もない。

ただ、静かな悦びだけがここにある。

——私は貴方のお役に立つことが出来ましたか？

——少しでも貴方の記憶に残ることができましたか？

もしひとかけでもお慈悲を頂けるのなら、お願いでございます。どうか私を、あなたの——。



……紅たちが駆け付けけると、すでに戦いは終わっていた。

マンハッタン・キャンベルビル屋上。この星での庇護者であったシンディ・キャンベルは瀕死の状態で倒れ伏し、ライダースーツの見知らぬヒューマンと怪しい扮装の男が何やら会話している。人間には全く興味のない紅ではあったがその男はどこかで見かけた気がして首をかしげる。

「あの男、以前どこかで……」

状況がまるで飲み込めず混乱していると、傍らの白薔薇は冷たい声でそつと囁いた。「あれはアルカイザー……。そうですか、アセルス様。戦えなかったのですね」

白薔薇の視線の先に目を向けて、紅は息を飲む。現在の主であるアセルス——彼女が額を撃ち抜かれたまま部屋の隅で倒れている。

「アセルス様！」

叫び、紅の体は瞬時に燃え上がった。炎妖たるその体が激昂する感情に従って激しく燃え盛る。ばちばちと音を立てて空気が爆ぜ、周囲には蜃気楼がもうもうとたちのぼる。

「おいおい。こりゃあ……」

ライダースーツが冷や汗を流しながら誤解だというように手を振るが知ったことではなかった。

決まっている。

アセルスを傷つけたのだ。

殺すしかない。

「おい、待てよ！ キャンベルはともかく、アセルスに手を出すつもりはない！ 戦う気は——」

「身の程を知れ！ 下郎！」

構わずに火焰を放った。紅の炎は大理石の床を瞬時に溶かしながら男を消し炭に変える——筈だった。だが目算とは裏腹に紅の炎はアルカイザーによって防がれてしまう。焦げ付く皮膚の痛みに呻きはしたものの、しかしアルカイザーはなおも平然とこちらを警戒し続けている。

「貴様……！」

更なる憤激に髪を逆立てた紅に、白薔薇姫は相変わらず落ち着いた様子で制止する。「そのへんにしておきましょう、紅姫。彼らにも、そして我々にも、戦う理由はありません」

「な……」

——何を言っているのだ、この女は……？

腹の底で長い間くすぶっていた疑念が今また鎌首をもたげ、ちりちりと焦げ付いていく。傷つき、倒れているアセルスが見えないのか。世話になったキャンベルが今にも死にかけているのがわからないのだろうか。激情にわなわなと震え出す歯をぎりと噛みしめ、紅は矢のような視線で睨みつける。が、やはり白薔薇姫は柳に風といった様子で素知らぬ顔をしている。

「……何を、言っているのです。白薔薇姫。貴女にはこの状況が見えないのですか!」
「ではどうします。アルカイザーを殺すのですか?」

淡々と、白薔薇姫は告げた。

「貴女にならそれが出来るでしょう。たった一息で一国をも滅ぼす炎の妖魔、紅姫。かつての貴方ならきつとそうするのでしょうかね。……でも、そんなことをして本当に良いのですか?」

軽やかに白薔薇姫は笑った。無邪気でいてどこかこちらを試すようなその瞳が紅は

嫌いだった。アセルスが——自らの主が彼女を求めてさえないなければ早々に滅ぼして
いたものを。

「どういう、意味ですか……?」

今すぐこの女を灰にしてやりたい気持ちを懸命に押し殺しながら訪ねると、白薔薇は
困ったようにはにかんでみせる。

「紅姫、貴女は人間に興味が無い。どんな人間を見ても、みな同じものだと思っている。
だから、まともに区別もつかない。……忘れたのですか? 彼が——アルカイザーが誰
なのかを」

「……だからこの者たちを見逃せ、と? 知り合いとはいえ、アセルス様をこのような目
にあわせるなど、万死に値する!」

「ではなぜ、アセルス様はここで倒れているのですか。戦わないことをアセルス様が選
んだからでしょう。その決断を、貴女は裏切るのですか?」

「そ、それは……」

痛いところをつかれて紅はたじろぐ。確かに、アセルスには甘いところがある。妖魔
ばかりではなく、人間や時にはモンスターの命でさえも守ろうとする彼女の判断に首を
傾げながらも尊重してきた紅には、確かに皆殺しという選択は躊躇われた。もしアセル
スが目を覚ましていたら確かにアルカイザー——小此木烈人を殺すような真似はしな

いだろう。たとえそれが紅にとつて塵にも等しい存在であったとしても。

自分がどうするべきなのかわからなかった。……どうして、そんなことさえも決められないのだろうか。

以前の自分なら迷うことなくすべてを焼き尽くしていたことだろう。他者の意見など耳を貸す必要はなかったし、その気もありはしなかった。自分はただ、燦々と燃え盛つていれば良かった。炎妖はその激しい感情の起伏のままに生きる妖魔、灼熱の気性を孕む生き物なのだから。かつて針の城が誇る八番目の寵姫であった頃なら、きつこのちっぽけな人間どもを殺しウロネブリをそして白薔薇姫をも滅ぼしてしまうに違いない。……だというのに、いま自分は前にも後ろにも足を踏み出せずにいる。だって、それは仕方のないことだろう。愛されることを忘れた紅には、自分自身を愛することさえできないのだから。

(ああ、私は……)

助けを求めるように、弱々しく震わせた瞳で倒れたアセルスを見つめた。そうだ。どこに行けばいいかはアセルスが決めることなのだ。目的も行き先も、果ては失つてしまった自信でさえもこの若き主が与えてくれる。だから、その信頼を裏切るわけにはいかない。

「……わかりました、白薔薇姫。しかし、戦わないにしてもキャンベルさんはどうするの

ですか？ アセルス様ならきつと助けようとするはず」

「ええ。問題はそこですね」

白薔薇姫はちらりと男たちに目を向ける。

「話はまとまったかい？ 俺たちの目的はそのキャンベルだけでね。一応、あんたたちとは敵対したくはないんだが？」

ライダースーツの男が言う。

「なぜ、キャンベルさんを？ 貴方がたはなぜ、ここに？」

「白薔薇姫」それまで黙っていたアルカイザーはようやく口を開いた。「確かにキャンベルはあんたたちに優しかったのかもしれない……。だが、彼女の正体は秘密結社ブラッククロスの女幹部、アラクーンネ。頼む、彼女の身柄を渡してくれ」

「アルカイザーさんよ」面倒そうにライダースーツの男がぼやいた。「お前が話すといういろややくしくなるんだよな」

ため息をついてライダースーツの男が煙草に火をつける。

「見てわかると思うがこいつはアルカイザー、ヒーローだ。んで、俺の名はヒューズ。I R P O の捜査官だ。わかるだろ。とりあえずは俺たちが正義、そこに倒れてる方が悪だ」

「おかしなことをおっしゃるのですね」白薔薇姫はそつと微笑む。「妖魔に善悪を説いて

何になるのですか？」

「待つてくれ、白薔薇姫さん」

それまで黙っていたアルカイザーが戸惑ったように声を上げた。

「あんたたちは騙されていたんだ。キャンベルがアラクーネだと知らなかったんだろう？」

「私は知っていましたよ」こともなげに白薔薇姫は言った。「アセルス様はご存じなかったようですが」

「……………」

絶句するアルカイザーにヒューズは「だー、めんどくせ」と頭を掻き筆る。

「話が逸れたよな？俺たちが正義って話はどうでもいい。キャンベルが悪だって話もな。だが、キャンベルの手柄を渡すわけにはいかねーな。マンハッタンに居場所が必要かい？隠れ家が必要ってんならIRPOが用意してもいいが」

「あら、随分と話の分かる方。……確かに、キャンベルさんの財力は随分と頼もしく感じていますけど……」

ウロネブリの放った死の灰の傷跡が色濃く残る戦場を見回して白薔薇姫はため息をついた。

「セアトの配下にこちらの居場所が知られてしまった以上、この地に留まるわけにも参

りません。キャンベルさんのことは残念ですが、ここは引き下がらしましょう」

「そんな、白薔薇姫！」

紅は抗議の声を上げる。

「アセルス様なら、きつと——」

「もう、助かりませんよ」白薔薇姫は動揺一つ見せずに答えた。「あれは致命傷です。

……それに、彼女のことならそこまで気にすることは無いと思いますよ」

「……ええ？」

紅が戸惑いの声を上げたとき、キャンベルピルの屋上に一陣の風が吹き流れた。風が震え、僅かなあいだ太陽の日が陰り、一瞬の闇が生まれる。その闇に紛れるようにしていつの間にか、忽然とその妖魔は現れた。花緑青の髪に宵闇の外套、石化蜥蜴の肌を持つその妖魔——黒騎士イルドゥンは相変わらずの仏頂面で周囲を睥睨する。イルドゥンの纏う妖気にヒューズはすぐさま警戒を深め銃を構えるが、イルドゥンは一瞥をくれなくなり興味が無いと言わんばかりに背を向けた。

「イルドゥン様」

突然の来訪に驚く紅に、イルドゥンはつまらなそうに答える。

「アセルスを追ってきてみれば……こんなことになっているとはな」



「おい。誰だテメーは。それ以上動くな！」

険しい声で警告するヒューズ。しかしイルドゥンはやはり構うことなく足を進めていく。針の城が誇る黒騎士イルドゥン——しかし彼が目指すのは逃亡者たるアセルスではなく、針の城の王オルロワージュの寵姫、白薔薇姫でもなく——大蜘蛛の姿を晒し、血塗れで倒れ伏したキャンベルだった。

「……あ、」

瀕死のキャンベルは血の気の失せたその顔でただ死を待つばかりといった様子だったが、己に近づくものが誰であるかに気づいてさっと表情を変える。

「い、いや……見ないで……」

「……飴鐘」

囁くその言葉に感情は込められていなかった。懐旧も、感傷も、何らの思いも滲ませることなく、しかしイルドゥンはまっすぐにその名を口にした。呼ばれた途端、彼女——ブラッククロスの幹部アラクーネであり、マンハッタンの名士シンディ・キャンベルでもあり、しかしかつてファシナトゥールで小さな仕立て屋を経営し飴鐘と呼ばれていた下級妖魔であるところの彼女は、死にかけにも関わず懸命に身を振って顔を隠そう

とした。悪として敗北することやたつたいま死を迎えようとしていたことよりも、自らの姿を見られることの方がずっと苦しいことだともいうように。

「いや……見ないで……！ 見ないでください、イルドウン様……！」

「何故だ」イルドウンは淡々と言った。「その姿が醜いからか」

「……」

弱々しく目を閉じると、飴鐘の瞳からは静かに涙がこぼれだしていく。唇を噛みしめ、必死になつて嗚咽をこらえ、しかし堪えきれない悲しみが喉を震わせその姿は、きれかけた電球のように弱々しく霞み、明滅するようにも見えた。

「イルドウン……！」

無情なその態度に紅は抗議の声を上げるが、一方で白薔薇姫は表情を変えることなく平然としている。イルドウンの剣呑な気配に冷や汗を流すヒューズもまた過度に同情するということではなく、逆にアルカイザーは「悪」の見せた涙に激しい動揺を見せていた。

四者それぞれの反応にやはり僅かな注意さえも向けることなく、ただじつと目の前の女だけを見てイルドウンは静かに口を開いた。

「——無様だな」

「……」

飴鐘は目を見開いてイルドゥンを見つめるが、やがて辛そうに視線を背ける。

「何のためにファシナトゥールを出た。自らを誇ることができないのなら旅に出たところで同じだ。何も変わりはない」

「……あなたは」

「何だ」

「……あなたは、本当に、変わらないのですね……イルドゥン、様……」

「当たり前のことだろう」

その言葉に飴鐘は瞑目し、涙を零しながら弱々しい微笑みを浮かべた。

「あなたは」 飴鐘は言った。「こんな私を笑いますか？」

「ああ」 イルドゥンは笑うことなく答えた。「これ以上惨めな姿を晒すくらいなら、ここで死ぬ」

「はは……」

暖かな吐息と共にさめざめと泣きながら飴鐘は笑った。その声はどこか濁流に身を飲まれた者が懸命に手を伸ばすような切実なものだった。

「あなたは私を……この飴鐘を殺して下さるのですか……？」

「ああ」

「本当に……」 飴鐘は充足の笑みとともにため息を漏らした。「本当に、ひどい方……」

「おい、やめろ！ 動くなと言ったはずだ！」

剣を抜くイルドウンにヒューズが怒声とともに銃弾を撃ち込む。だが弾はいとも容易く切り払われてしまう。イルドウンは見もしなかった。言葉を交わす価値も無いというかのように、ヒューズたちを相手にすることなくゆつくりと剣を下ろし、餡鐘の胸を一突きにする。すると餡鐘の姿は見るうちに萎れていき、蜘蛛ではなく人間に似た妖魔の姿へと戻っていく。イルドウンは餡鐘を優しく抱き上げ、ぽつりと白薔薇姫に尋ねた。

「……白薔薇姫。アセルスはまだ寝ているのか？」

「はい。しばらくはこのままかと」

「そうか。成長のない奴だな。とにかくこの場所から離れるぞ。ここは……」

イルドウンは僅かに逡巡し、静かに呟いた。

「ここは……妖魔の眠る場所としては相応しくない」

「……ええ。そうですね」

どこかおかしそうに白薔薇姫が答えるとイルドウンはじろりと睨みつけるがそれ以上は何も言わずに立ち去っていく。

「おい、ヒューズ！ いいのか!？」

慌てて尋ねるアルカイザーだが、ヒューズは顔を顰めたまま脇腹を押さえた。

「悪いがお前と違つてこれでも満身創痍なんぞな。イルドウン……だったか。上級妖魔、しかも針の城の黒騎士相手にドンパチ始める気はねえ。戦う理由が見つからねーしな。そうだろ？ 俺もお前も、よ」

「……ああ」

苦々しい様子でイルドウンの背中を見送ることしかできないアルカイザー。

ヒーローと妖魔との邂逅はこうして終わりを迎えた。アルカイザーこと小此木烈人、そして炎妖紅。鈴鐘の涙を目にした両者は釈然としない思いを抱えたままその場を後にした。



……目を覚ますと、気が付けば汽車の中にいた。窓の外には星々の散らばる銀河が途方もなく広がっている。ここは……？ そうか、星間船の中……。ようやく理解して視線を戻せば、そこには見覚えのある仏頂面が向かいの席に腰かけており、アセルスは思わず声を上げる。

「げっ」

「……なんだその反応は」

不満げに漏らすイルドウンには構わずアセルスは慌てて周囲を見回す。紅と白薔薇姫の姿を目にしてほっと一安心したものの相変わらず状況はまるで理解できていない。

「キャンベルさんは？ 私、あのビルで……」

その言葉を聞いて紅がさつと顔を逸らすのを見て、アセルスは結末をうつすらと悟つて息を飲んだ。

「……そう」

「申し訳ありません。アセルス様……」

すまなそうに項垂れる紅に、アセルスは優しく首を振る。

「いいんだ。貴女のせいじゃない……」

静かな悲しみに浸るアセルス達に、話を聞いていたイルドウンは無遠慮な視線を向ける。

「キャンベルというのは餿鐘のことか？」

「え？ ええ……そうだけど」

「そうか。餿鐘は俺が殺した」

「えっ!?! どういうこと？」

「あいつは邪妖になりかけていた。ただ生きながらえているだけの、己自身を愛するこ
とさえできない惨めな妖魔——見るにも値しない存在にな」

「違います。アセルス様」

白薔薇姫が慌てて説明を加える。

「私たちが駆け付けた時にはもう……手遅れだったのです。だからイルドウンは彼女の介錯を」

「違うな。瀕死であろうとなかろうとどのみち俺は殺していた。ファシナトウルを出て何をしているのかと思えば……何も変わってはいなかった。下らん女だ」

「……だから、殺したの？」

「ああ」

震える声で尋ねるアセルスの瞳はぎらぎらと燃え立つような険しい光を秘めていたが、対するイルドウンは素知らぬ顔で頷いて見せる。

「彼女は……キャンベルさんは……貴方に逢いたがっていた……!」

「飴鐘がそう言ったのか」

「違う! でもあの人が貴方を語るとき、いつも懐かしそうに目を細めて……! 貴方や、貴方とジーナがいた仕立て屋の頃の話をしていたんだ!」

「だから、何だ。アセルス」

アセルスの大声に不愉快を隠そうともせず、イルドウンも鋭い瞳で睨みつける。

「あいつは醜く衰えていた。俺は無様だと言った。それを飴鐘も認めた。だから殺し

た。それだけだ」

「お前……っ！」

激昂してアセルスはイルドウンの胸倉をつかみ上げる。

「死にかけの女を前むにして、優しい言葉の一つもかけてやれないのか！ 介錯するにしても、そんなことを言う必要がどこにある！」

「知るか。それは人間の作法だろう。俺には関係のないことだ」

「違う！ 妖魔だろうが何だろうが……！」

「アセルス」

静かにイルドウンは告げ、自らに伸びたアセルスの手首をぎりぎり締め上げる。

「う、ぐ……っ」

「何を勘違いしているのか知らんがそんなことを悠長に話している場合か。だからお前は馬鹿だと言うんだ、アセルス。あの下らん格好をした馬鹿どもを相手に後れを取り、飴鐘を守ることもなく無能を晒して気絶したままでいるとはな。油断、怠慢、そして何よりも愚かだ。お前が平和ボケしている間に二体の寵姫の首が飛んでいる可能性を考えたらどうだ」

アセルスのはつと顔色を変え、イルドウンの手を振り払うが否や通路側に飛びずさり、腰の剣に触れ身を撓めた。

「針の城からの追っ手……次は貴方という訳か」

真剣な面持ちのアセルスは冷や汗を流しながら相手の対応を窺うが、イルドゥンはうんざりしたようにため息をついた。

「反応が遅すぎる……。針の城から逃げ出して少しは成長したかと思えばその体たらくか。今のお前なら先のやりとりで五回は死んでいる。それで白薔薇姫を守れるのか？」

「え……？」

戸惑っているアセルスに、紅がおずおずと助け船を出す。

「アセルス様。イルドゥンは我々を狩りに来たものではありません。むしろその逆で、ラストバン様の頼みで守って下さるそうなのです」

「今となつては面倒な話だがな。ラストバンから話を聞いた時は少しは面白くなるかと思つたが……」

不満げにアセルスを眺めまわし、イルドゥンは口元を歪めた。

「つまらん。俺は寝る」

目を閉じ、それきり黙り込むイルドゥン。紅はそつと近づき様子を窺うと、少し驚いたように報告を返した。

「寝てます」

「何しに来たんだろう……」

茫然と呟くアセルスは呆れた表情でイルドゥンを見つめる。白薔薇姫はおかしそうにくすりと声を漏らした。

「頼もしいではありませんか？ 態度や言葉がどうであれ、一応は協力してくれるらしいのでしょ？」

「でも……許せないよ」

躊躇いがちにアセルスは言った。

「キャンベルさんのこと……。たとえもう助からなかったのだとしても、あの態度には納得出来ない」

不貞腐れたように口を尖らせ、窓の外に顔を背けるアセルス。気まずい雰囲気、白薔薇と紅は顔を見合わせ、静かにため息をついた。



傷ついた少年のような眼差しで窓の景色を眺めるアセルスの様子を窺いながら、紅はそつと考える。

「ただ、と思う。アセルスはその現場を実際に目にしてはいない。あまりにも冷たく残酷なイルドゥンの言葉、そして……」
「貴方は変わらないのですね」
「そう囁いたキャン

ベルの表情をアセルスは知らない。以前と変わらぬ男の態度を前にしてため息を零した女のあの顔を満ち足りたものと評することは簡単かもしれないが、紅にはやはり完全には理解できないでいた。

自分ならばどうしただろう。無様だ惨めだと罵られたのなら涙もするだろうし、事実、紅もまたイルドダウンの言葉に憤りを覚えなくてもない。だが、もし……もしも紅の想い人が——妖魔の王オルロワージュが紅に死を告げその剣を振り下ろすというのなら、その結末は甘美とは言えないだろうか？ 絶対者に下された裁定を受け入れ、愛しい主の定めた末路のままに散っていけるというのなら、こうして迷いを抱えたままうじうじと生きながらえているよりもずっと妖魔らしい生き方なのではないだろうか？

胸にこみ上げた感情のまま、戸惑いに紅は唇に指を寄せる。

私はどうしたら良いのですか、アセルス様……？

助けを求めるようにそつとアセルスに目を向けると、現在の主は拗ねているのを咎められたようにでも感じたのか、恥ずかしそうに口を開いた。

「それにしてもさ、随分とレトロな星間船だね、今回は」
リージョンシップ

革張りの座席を撫でながらアセルスは興味深そうに内部を見回した。これまでに乗ったキグナスやスクイードとは異なり、内部は木目で統一され、瓦斯ランプの柔らかな光に照らされたその場所は、星間船というよりは汽車と呼んだ方がよほど相応しいよう

に見えた。

「ええ。この船は——いいえ、この鉄道は特別なのです。これは一年に一本だけ、99番ホームから午前0時に発車する汽車。短い距離を往復するのではなく、メガロポリスからアンドロメダの終着駅まで、長い距離を旅するためのこれは銀河鉄道と呼ばれています」

「銀河鉄道……。おとぎ話だと思っていただけ……」

「今回は次の目的地も決まらないままにマンハッタンから逃げ出さなくてはなりませんでしたから……なるべく多くの星へ行けるように、と。アセルス様の希望に沿う場所があれば良いのですが」

「そっか……。ありがとう、白薔薇。……でも、そんな特別な鉄道、料金は大丈夫だったの？」

「ああ、それは大丈夫です」

ほら、と言つて白薔薇姫が取り出したのは小さなパスだった。

「これは銀河鉄道の無期限パス。これがあればいつでも乗ることができます」

「よくわからないけど、すごいね……。こんなものをどこで？」

「以前、いろいろあつたもので……」

語尾を濁した白薔薇をことさらに問い詰める真似はせず、ふうん、とアセルスは素直

にうなずいた。アセルスは疑問に思わないのだろうか？ 白薔薇姫には不審な点が多すぎる。旅に出てからというもの、この女は得体のしれないところばかりを見せる。クーロンでの一件以来、紅は白薔薇を信じられないでいる。針の城にいた頃、白薔薇姫はけてそんな素振りを見せなかった。ファシナトウールで最も優しいと評された妖魔。下級妖魔や人間にさえも慈悲深く、根の町の住人の多くに愛されていると聞いた。おかしいと思うべきだったのかもしれない。妖魔が——誇りと美貌と恐怖とを誇るべき生き物が「優しさ」を謳われるなど不似合いに過ぎるというのに。

白薔薇染ととりとめのない会話に耽るアセルスを見て、紅は静かな孤独を感じて目を背けた。

窓の外には、どこまでも無情に輝く星の海があてもなく広がっている……。



『宇宙には、ところどころ理由もなしにとても寂しい場所がある。旅人はそこを通るとき申し合わせたようにブラインドをおろし、外を見ないようにするという』

「この辺りはなんだか寂しい感じのする所だね」

窓の外を眺めていたアセルスがぼつりと言うと、白薔薇姫は少しだけ驚いたように答えた。

「アセルス様……ブラインドをおろさずに外をみているのですか？」

「何か危ないことでもあるの？」

「いいえ……。でもここを通るとき大抵の人は窓をふさぐのです」

「どうして？」

「ここはとても寂しい場所だから……。誰かに教えられることがなくとも、この場所を目にした者はみな、はつと息を飲んで目を閉じ、静かな祈りを捧げる……。そんな場所だからです」

「そう……。ま、私って結構がさつな所があるからね。だからかも」

「感傷に溺れ過ぎないというのは一つの長所ですわ。元気が良くて……。そう、旅人にとって、タフであるということはとても重要なこと」

「そうかな……。私はとにかく、居場所を見つげるためにどんな所でもきちんと目にしておかなければと思っただけ……。素晴らしい心がけですわ」

まっすぐな言葉で褒められ、アセルスは少しだけ恥ずかしそうに身を振る。と、その拍子にアセルスは見知らぬ乗客に気づいて「あれ？」と声を上げた。いつの間にか乗

客が一人増えている。マンハッタンからここまで、新たな乗客が乗り入れるような駅など通り過ぎてはいない。呑気な会話をしていたとはいえ、一応は追われる身のアセルスだ。乗り合わせた乗客は逐一把握する癖はつけている。だというのに、その乗客——膝の上に猫を抱いた痩せぎすの女性はいつの間にか忽然と現れたのだった。警戒心も露わに女性を観察するアセルスだったが、女性はこちらを襲う気配などは微塵もみせず、ただただ穏やかな目をして膝を抱いている。女性の髪は長く腰まで伸び、色褪せてはいたものの清潔さを保っている。

とても優しいそうな人だ。そう思ったが口には出さずアセルスが遠めに眺めていると、女ではなく猫がこちらに気づいて「みい」と鳴いた。虎嶋の小さな猫だ。女は猫の声に顔を上げこちらに気づいたが、小さな会釈を返しただけでそれ以上の興味は示さなかった。

「白薔薇はペットを飼ったことってある？」

「ありますよ。アセルス様は？」

「私は無いよ。猫は好きだけど」

「飼おうとは考えなかった？」

「うーん。どうだろう。飼いたいとは思ったのかな……。でも、なんだか贅沢を言うように叔母さんには言えなかったし……。生き物を買うのに、ただちよつと飼ってみたいか

らと云って気軽に始めるのも無責任なような気がしたのかな。……多分、自信が無かつたんだと思う。猫を飼うってことに対して」

女性は猫の話の話を耳にして顔を上げるが、やはり大した関心もないようである。アセルス達に視線を留めることはなく、どちらかといえば静かに眠りこけているイルドゥンに時折ちらちらと目をやっているようだった。

がたり、と音を立てて扉が開き、現れた小太りの車掌が次に到着する駅の名を告げた。

「えー次の停車駅は『ミーくんの命の館』。停車時間は三十八時間と十五秒」

「ミーくんの命の館」アセルスは感心とも呆れともつかないため息をついた。「変わった名前の星リージョンだな……」

その星は琥珀色をしていた。暗い宇宙の海に温かい色に光ってひっそりと浮かんでいる。心の休まるかわいらしい星だが、しかし紅の目にはなぜだろう、とても寂しい星にも見えるのだった。

汽車は張り裂けんばかりに鼓動していた心臓を止めるようにして全ての動きを止め、音もなくその星へと落ちていく。眠れる我が子を起さぬよう息を殺す母のように。汽笛を鳴らすことも煙突から蒸気を吐き出すこともせず、ただ無音でその星——『ミーくんの命の館』へと到着する。

「イルドゥン様はどうしますか？　まだ寝ていますが」

「うーん」アセルスは少し考える。「置いていこうか」

「良いのですか？」

「イルドダウンがいると話がすぐ殺伐とするし……起きたら追ってくるんじゃない？ たぶん」

「はあ……」

星間船発着場は花園に囲まれていた。小菊や百日草、そしてカーネーション。アイリスにリンドウ、グラジオラス。遠く地平の果てまでも色とりどりの花々が見事に咲き誇り、蝶や蜜蜂が飛んでいる。

「きれいなところだねー」

嬉しそうに深呼吸して、アセルスは濃密な花の匂いを好きだけ嗅いだ。振り返ると、駅は原色の積み木を組み合わせたシンプルな造りをしており、まるで童話に登場するオモチャの城のようだった。平和的な光景に和んでいると、アセルス達の後ろから先ほどの女性が猫を抱いて出てくる。

「さ、降りましょうね、おチビさん」

そう言つて胸元に抱いた猫を撫でると、猫は体を震わせながら「みい」と鳴く。「怖がらなくてもいいのよ。ここはそういうところなのだから」

「みい、みい」

「わかつてるわ。ご主人と別れたのが悲しいのね」

そう言うのと、女性は目を閉じて猫の背中にそつと鼻を押し付けた。その瞼から一筋の涙が流れ落ちるのを見て、アセルスは驚いて目を見開いた。

「あの人、泣いてるよ」

自らが口にした言葉に自分で動揺しながら、アセルスはしかし自分にはずうずうしく他人の事情に踏み込む権利などはないのだと考えたのか小さく頭を振って歩き出した。

「この星はいいところだ」

自身に言い聞かせるようにしてアセルスは言う。

「いい二オイだし、熱からず寒からず……気持ちのいい場所だ」

「ここは宇宙で一番気持ちが良いくて住みやすい所と言われてる星ですから」

アセルスと白薔薇の後を無言でついていきながら紅は静かに考える。しかし……。それにしても人の姿が見えないのはどういふことなのだろう。この星が住みよい場所だというのなら——ここが楽園だというのなら多くの観光客や旅人が訪れて当たり前ではないだろうか。だというのに駅から足を踏み出してからというもの目にするものと言えば無数花々に蝶や蜂、そして豊かに実る果物と——そして獣たちだけだ。

紅の視線の先で、小さな黒猫が足で耳の裏を蹴りつけている。こちらに気が付くと黒猫はじつと観察するように睨みつけ、「のおう」と鳴き声をあげた。猫だけではない。犬

や鳥、兎に蜥蜴。よくよく目を凝らせば遠くの方にダチヨウさえ見える。

「うじやうじやいるね。ここではみんな放し飼いにしているのかな。餌やトイレなんかはどうしているんだろ？」

訝るアセルスは慣れた様子で近づいてくる猫をいちいち撫でるたびに立ち止まる。そのために一行の足取りは遅々として進まず、車掌に紹介されたホテルに辿り着くころには既に日が暮れかけていた。

「これはまた積み木みたいなお子様ムードのホテル……」

ホテルを見上げてアセルスは呟く。まるさんかくしかく……と、確かに子供が戯れに組み合わせて作ったような簡素でしかし暖かな構造のホテルが花畑の真ん中にぼつりと佇んでいる。

「子供の頃の子供部屋を思い出しますね」白薔薇姫が優しい目をして言った。「そうではありませんか、アセルス様？」

壁紙にはチューリップが描かれ、床にはケガをしないようウレタンが敷き詰められていて逆に歩きづらい。所どころに白い汚れが見えるのは何かのシールを剥がした跡だろうか。

「うーん……。まあ、そうだね。流石にこんな部屋ではなかったけど……。でも、なんだか懐かしい感じはする。あの頃は……」

「……」

「叔母さん、元気にしているかな……。たった一人で体を壊したりしていないといいけど……」

暗い顔をしてアセルスは俯く。

「ごめんなさい、アセルス様。シユライクのことを忘れて、無神経なことを言ってしまったいました」

「そんな！ 気にしないでよ。全然平気！ あの頃は確かに平和な毎日を過ごしていたけど……。でも、どこか窮屈で息苦しかった。同級生の子たちと比べて、どうして私は違うんだろうっていつも思ってた」

「……他人の暮らしが羨ましいと感じたことは？」

「どうか。少しは……。あつたかもね。そういう気持ち。私には未来がある、無限の可能性がある筈だとそう思いながら……。本当にそうか？ そんなものは誰にも平等に無いんじゃないかと……。そんな風に思ってもいた。でも、今は違う。少なくとも私は、私自身の意志で自分の生き方を選んでる。だから、これでいいんだ」

そうですか、と言って白薔薇姫は随分と楽しそうに微笑みを浮かべた。



でかい。

まず脳裏に浮かんだのはそれだった。

猫である。猫であるが、やたらとでかい。背は優にアセルスの二倍を超えている。猫といえどこれはもう問答無用で可愛いものだど相場は決まっているが、しかし目の前のこれはどうだろう。猫と言えど猫なのかもしれない。しかしあまりにも大きすぎ、大きすぎるが故に猫というよりもただ肉食動物という側面ばかりが見えてくるような気がする。ぎらぎらと涎に濡れた牙はアセルスの頭程度ならばいとも容易くかみ砕けそう
だ。

「う、わ……」

ホテルにはルームサービスが存在しておらず、仕方なく白薔薇姫たちを残して飲み物を探しに出かけたアセルスの目の前に現れたのは、廊下を塞ぐほど巨大な猫だった。

「にゃお」

猫が鳴いた。猫なのだからそれはにゃおと鳴くだろう。しかしその声はあまりにも野太いがため、ぎゃお、とか、がお、と聞こえないこともない。猫は猫だ。しかし存在感たっぷりな迫りくるそれはもはや怪物だった。

「ぎゃあーお」

猫が鳴いた。可愛い。アセルスはごくりとつばを飲み込む。確かに可愛い。だが出来ることならば1/20くらいの大きさであつてほしかったと切実に思う。目の前で猫は小首を傾げ、目を輝かせて飛び掛かつてくる。ひええ。慌てて踵を返し飛びのくと、猫は夢中になつてアセルスを追いかけた。

「なんだ、このホテルは！」

毒づきながら全速力で駆け出す。だが脅威はそれだけではない。廊下の角を曲がるや否や次に出くわしたのは巨大な蛇だ。細長い舌をしゆるしゆると出し入れしながら巨体をくねらせている。こちらを警戒しているようには見えなかった。背後の猫もそうだが、どちらかといえばヒトに慣れているようには見える。こちらに近づいてくるのも襲うためではなく、どちらかといえばじゃやれているに過ぎないのだろう。だからといって丸太のようなネコパンチを食らう気にはなれないが。

逃げた。そうするより他にはなかった。戦うという選択肢が無いでもなかったが、さすがに猫を切り殺すのは後味が悪そうだ。唸りを上げて飛びかう爪をかううじて避け、蛇の鱗すれすれに身を撓めてなんとかかいくぐり、命からがらアセルスは自室へと戻る。

「はあ……」

急いで閉めたドアに背中を預けてアセルスは膝から崩れ落ちる。

「どうしたのですか、アセルス様？」

白薔薇姫が不思議そうにこちらを眺めている。

「いや、それが……」

言いかけて、アセルスは口を噤む。自分の目にしたものを上手く説明できる気がしなかった。

「自販機が見つからなかったのなら、私がホテルの外で買ってきますわ」

扉のノブに手をかけた白薔薇姫を慌てて制止する。

「いや、いい、いい！ 喉が渴いたような気がしつつも全然そんなことも無かったから、とりあえず大丈夫！」

「ええ……？ はい……」

よくわからないといった表情で不審そうに頷く白薔薇姫。

なんなんだ、このホテルは。胸の内でアセルスは叫ぶ。どう見ても平和そうで穏やかなところだと思っていたのに。何かが変だ。その思いは夜になるとなおさら深まることになった。

外へと出てたがる白薔薇姫たちを何とかいくるめ、アセルス達は一步も外へ出ることなく夜を迎えた。ベッドの中で寝ようとして寝付けず悶々としていると、どこからか動物たちの鳴き声が響いてくる。惑星『ミーくんの命の館』の夜は動物たちの鳴き声で

満ち溢れていた。楽しそうな声ではなかったし、かといって怖ろしい声という訳でもなかった。それはとても悲しそうな声ばかりでアセルスの胸はひどく痛んだ。

……いつ眠り込んでしまったのだろう。気が付けば時計の針は随分と進んでおり、深夜三時を示している。いつの間にか動物たちの鳴き声も聞こえなくなっており、はて問題はいつの間にかに解決したのかしらんと体を起こして辺りを見回せば、なんと……とだろ、白薔薇姫がいらない。

「白薔薇！」

急激な焦りと恐怖に冷や汗が湧いた。まさか追手が……。いや、そんな馬鹿な。よくよく見回せば紅もいないではないか。どういうことなのだろう。敵の襲撃にしてはこの自分が無事なままにいるのがどうにも不可解だ。

なんとという失態だろう。彼女たちは自分が守らなくてはならないのに。自らのふがいなさに歯噛みしつつ、アセルスは跳び起きて窓から外を眺めた。なんのことはない、白薔薇姫は素知らぬ顔をして平和そうに歩いている。が、彼女の背後を見て緊張は更に高まった。白薔薇姫の背後から巨大な動物たちがうじゃうじゃ近づいてくるのが見える。白薔薇が危ない。

迷うことなく飛び出した。間に合うだろうか。逸る心を懸命に落ち着かせ、剣を抜きながらエントランスを駆け抜ける。

「白薔薇！ こっちへ！」

叫びながら白薔薇姫の手を掴み背後へと庇った。

「アセルス様……？」

戸惑いの声をあげる白薔薇姫には構わず、アセルスは剣を振り上げる。猫……のようなもの傷つけたくはなかったが、仕方がない。覚悟を決めて剣を振り下ろした。しかし――、

「この子たちを虐めないで！」

鋭い声と共に割って入った女性を見て、アセルスはびたりと動きを止めた。

「あなたは、 駅で猫を抱いて泣いていた……」

名も知らぬあの女性が、なぜか動物たちを庇って立ちはだかっている。

「大丈夫ですよ、アセルス様。 ここの動物たちは何もしません」

「えっ？」

「みんな人間のお友達……優しいペットなのです」

「ペット……？ でも飼い主も見えないし、夜中に騒いで迷惑じゃ……？」

戸惑いに混乱していると、女性は申し訳なきそうに目を伏せた。

「この子たちは別れてきたご主人たちを思い出して泣いているだけ。許してあげて」

「別れてきた？」

話が見えないアセルスはぱちぱちと瞬きを繰り返す。

「そう……。この動物たちはみなご主人と死に別れてきたものばかり……。この動物たちを飼っていた人たちはここが動物の魂の住む所だと信じているわ。ともに暮らして……。そして死んだ動物たちが永遠に幸せに暮らしてる星だと。……。私が死んだとき、ご主人は人前では平気な顔をしていただけ……。独りになるといつも私のことを思い出してくれた。私のお墓の前で、表情は何一つ変えないまま……。だけどずっとずっと長い間、気の遠くなるほどの時間お墓の前で俯いていた……。私はとても嬉しかった……」

「死んだ……。？ 貴女が？」

「それ以来、私はご主人と死に別れてくる動物たちを出迎えて列車でここへ連れてきてあげる役を引き受けたの」

澄んだ目をして女性は言った。

「貴方は……。一体だれ？」

「私？ 私はミーくん」

「ミーくん!？」

「メスだけど、男のように気が据わっているから、ここではミーくんと呼ばれているわ」

「はあ……」

「飼っていた犬や猫が……動物たちが死んだあと……。特に子供のご主人は死んだ動物たちがここで幸せに暮らしていると思つて星空を見上げて安心してくれるの……。私はね、いつまでもこの星とそういうご主人たちのあいだを往復して動物たちを連れてきてあげるの。この星はそういう人たちのためにあるのよ」

そうか、とアセルスは思った。銀河鉄道が音を立てずに星へ着陸するのは動物たちを驚かさなためだったのかと。

「だけど……貴女はどうして人の姿をしているの？」

不思議に思つて尋ねると、ミーくんはこともなげに答えた。

「何故つて、私は人間だから」

「人間？ だけど、貴女は……」

「何もおかしなことはないでしょう。そう……誰かに飼われていた人間だつて、ペットには違いないわ。私のご主人さまはさる高貴な妖魔だつた」

「そんな……」

アセルスは一瞬言葉を失い、それから憤然と語気を荒らげた。

「人間を飼うだなんて！」

「……どうして？」

ミーくんは本当に不思議そうな顔をしていた。なぜアセルスが怒るのがわからな

い、そんな顔をしている。

「なぜ、妖魔が人間を飼ってはいけないの？　なぜ、人間が妖魔に飼われてはいけないの？　人は猫を飼うのに？」

「それは……」

ミーくんは空を見上げ、遠い目をして言った。

「私はご主人様のことが好きだった……。言葉にすることはなかったけれど、自分の生き方には満足していた。後悔はないわ……」

「そう、ですか……」

躊躇いがちにアセルスは答えた。納得はしがたい話ではあったが、しかし本人がそれで良いと言っている以上、部外者が異論を唱えても仕方がない。アセルスは巨大な猫の頭を撫でた。「驚かせてごめんね」と言うと、猫はやはり野太い声で「にやつ」と短く鳴いた。

「混乱させてしまつてごめんなさい。でも、私たちのことはそつとしておいてほしいの。けして貴女たちに迷惑はかけないから」

そう言うときミーくんは動物たちを先導して何処かへと立ち去つていった。アセルスはただ、そのどこか寂しい後ろ姿を見守ることしかできなかった。

「ねえ、白薔薇」

ぼつりとアセルスは言う。

「はい。アセルス様」

「どうして……人はペットを飼うのかな？」

特に問いを求めてというわけでもなく、半ば独り言のように囁かれたその言葉に、白薔薇姫は黙って耳を傾ける。

「むかし……又サカーンという妖魔に言われたよ。妖魔は自分のことを覚えていてほしいから人を愛するのかもしれない、と……。不思議だね……。ミーくんを飼っていた妖魔はいまどこで何をしているんだろう……」

「はい……」

「どうして、人間は、妖魔はペットを飼うんだろう。やっぱり私にはわからない。どうして……自分よりも寿命の短いものを飼って、『愛玩』するんだろう……。必ず自分よりも先に死んでしまうのに」

「それは……仕方のないことではありませんか？ 自分よりも長生きするものを飼ってしまつたら、自分が死んだ後に世話をするものがいなくなってしまうから」

「そうだけど……でも猫や犬なんて十年かそこらで死んでしまう。ペットを飼っている人たちはどうするんだろう。涙を流して、悲しんで……それからあとはどうするのか？ 次のペットを飼おうと思うのか、それとももう二度とこんな思いはしたくないと思

うのか……」

アセルスは小さな声で、絞り出すようにして言った。

「私は怖いよ……。知っている何か人が人であれペットであれ、それがいつか死んでしまうのが。時が経って、何かが変わってしまったって、そしていつか滅ぶ運命にあるのが、なんだかとても怖いことのような気がするんだ……」

◇

花畑の中を進むというのは、思っていたよりも心地よいものではなかった。自らの背丈よりも高い花々を押し分け掻き分け歩かねばならないのは存外に煩わしく、また息苦しいものだった。

深夜、ホテルを抜け出した紅は独り歩いている。考え事がしたかった。そのためにはアセルス達がいるホテルからは離れねばならないような気がした。だが花畑の中を進んでいるうちに、なぜかむきになったように花々をへし折っている自分に気が付いて紅は途方に暮れた。

花は、言葉を語りはしない。ただ花は美しくあり、紅を優しく取り巻いている。けれども花の檻に取り囲まれて見る光景は、とても狭く、つまらないものにも思えた。

燃やしてしまおうか、と思う。あのふぎけた子供趣味のするホテルも駄も、そしてこの平和なばかりで何の救いも与えてはくれぬお花畑をも、この炎で焦げ付かせてしまえば、そうして後に残るのは何一つ残らない平原だけだ。地平までもが灰に満ちて、視線を遮るものは何一つないその光景は、果たして清々しいものだとは言えないだろうか。

手を伸ばし、小さな焔を生み出しかけて、紅は躊躇う。しかしそんなことをすればアセルスは悲しむだろう。もとは人だったアセルスのためにも人は殺すべきではないし、平和や善を愛するアセルスのためにもこの星を燃やし尽くすべきではないのだろう、きつと。

でも。

だとしたら。

自分はいつたい、何を燃やせばいいのだろう……？

紅はため息をついて、上げかけた手を力なく落とした。今夜の自分はひどく無力だ。何をする気にもなれない。何かができるとは思えないし、何を始める気にもなれない。

こんな自分を——オルロワージュはどう思うだろうか。

想像して、肩を震わせながら紅はぎゅつと目を閉じた。

以前なら、そんなことをけして考えはしなかったのに。

マンハッタンで死んでいったキャンベルのことを思い出した。『お前は醜い』と、冷たい目をして告げたイルドワンの言葉。あの時、キャンベルはどうしてあんな表情を浮かべていたのだろうか……。

どうして、時間などというものがあるのだろうか。時の流れは全てを変えてしまう。時が経たなければ、こんな思いをすることなどなかった。オルロワージュが自らを蔑むことなど、かつての自分なら想像すらしなかった筈なのに。時は愛を濁らせてしまう。時は、想いの全てを色褪せさせてしまう。

「本当に……何もかも、燃え尽きてしまえばいいのに」

小さな声で紅は言った。涙が自然とこぼれ出て頬を優しく伝っていった。

自分もいつかはキャンベルのようになるのだろうか。紅は思う……。そうして死んでしまえば、それでいいのかと……。

「……こんばんは」

不意に聞こえたそんな声に、紅は驚いて身を竦ませた。慌てて涙を拭い辺りを見回すと、長い髪をした女性が立っている。星間船の駅で、猫を抱いていたあの女性だ。今は猫はおらず、その視線は紅の方を向いてはいなかった。話しかけられたのが自分ではないと気づいて、紅は泣き顔を羞じてそっと息をひそめ、身を隠した。

「私の名はミーくん。あなたのような高貴なお方が、どうしてこんな星へ？」

問われた側は質問には答えず、短く鋭い言葉を返した。

「ミーくん……。それが、お前の名か？」

声の主がイルドウンであることに気づいて、紅は少しだけ驚く。やはり駅からアセル又たちを追ってきたのだろうか。

「ええ。今はここで、ご主人を失くした動物たちの世話をしているの」

「そうか。俺の知ったことではないな」

ミーくんは静かに笑い声をもらす。

「確かに、そうでしょうね。貴方には」

「何が言いたい？」

「いいえ。別に、何も」

「気に食わんな。その思わせぶりな態度」

「ごめんなさい……。別にそんなつもりは」

「……」

「……こんなところで何をしたらしたの？」

なぜそんなことを答えねばならないのか、とイルドウンは答えるのだろうか。と紅は思った。だがイルドウンの返答は違った。

「時の流れのことを考えていた」

「時の流れ？」

「かつて、妖魔の王オルロワージュは時の流れの中で何かが変わりゆくことを寂しいと言った。俺にはその言葉の意味がわからない。あれから何千年も経つが未だに分らないでいる」

「そう……」

「飴鐘、という妖魔がいた。根の町で小さな仕立て屋をしていた。飴鐘はファシナトウールを離れ、どこかへ行つたようだった。どうでも良かった。たとえどこへ行こうとも、飴鐘がやりたいことをしているのなら構うまいと。だが——それは違った。再開した飴鐘は見るも無残なほど醜くなっていた。俺は飴鐘を殺した」

「……それで？ そんな貴方は、自らの行為をどう思っているのですか」

「さあな」イルドウンはぶっきらぼうに答えた。「どうでも良い。大した感慨も無い。……いいや、違うな。ただうんざりしている。孤独を感じることも、寂しいと思うこともない。だが……俺はうんざりしている。何故、妖魔ならば自らを愛さないのかと」

「気に病んでいるのね。その飴鐘という方のことを」

「気に病む？ いいや、違う。俺は何も失つてなどいないのだから」

ミーくんはゆつくりと息を吸い、それから穏やかな調子で口を開いた。

「……何も失っていないと思うのは、それは貴方が何も手に入れていないからではない

の?」

「……なんだと?」

「貴方にあるのは『自分』というそれだけで……それ以外の何物をも持ち合わせてはいないから……だから、何が起きても何も失わない、それだけなのではないの?」

「相変わらずお前の言い方は気に食わないことばかりだ」

顔を顰めたイルドウンに、ミーくんは笑う。

「変わらないかしら、私は?」

「……ああ。何一つとしてな」

「そう……」

嬉しそうにため息をついて、ミーくんはイルドウンの隣に腰を下ろした。

「ねえ、貴方はどうしてこの星へ来たの?」

「理由などない。ただの成り行きだ」

「そう……。ここは死んだペットたちが訪れる星。とても優しく、けれどとても悲しい星……。この星には、貴方の考え事を邪魔したりするものは誰もいないわ」

「ペットの魂の星、か……。理解できんな。他者に飼われることを良しとする気持ちなど、何一つとしてわからん」

そういうと、イルドウンはまっすぐにミーくんを見つめた。

「お前はペットだったのか？ お前は……飼われているつもりでいたのか？」

「……」

「わからん……。俺にはまったくわからん……」

「ごめんなさい……。私、貴方を傷つけてしまったかしら」

「俺は傷ついてなどいない。お前の弁に従うのなら、俺は何も手に入れてはいないのだから。所有してなどはいなかった」

「そう……。ごめんなさい。私のご主人さまは、私を対等に扱ってくれた。『彼』が望んでいるものは、彼の後ろに傳くものではなく、彼の隣に立って共に歩むものだということをわかつてはいたけど……。でも、私にはできなかつた」

「知ったことか。本当に……」

そう言い残すと、イルドゥンはその場を立ち去って行つた。「またいらして」そう言つてミーくんは後ろ姿に手を振る。イルドゥンは一度だけ振り向いて目を細めたが、特に何か言うことはなかつた。

一部始終の会話を図らずも盗み聞きしてしまった紅は胸を押さえ、懸命に息を殺していた。潜んでいるのを知られたくないからではなかつた。ただ彼らの会話を邪魔してはいけないと、そう思つたのだった。

かつて彼と彼女との間にあつた物語を紅は知らない。全ては朧げな想像に拠るもの

でしかない。しかし……。

紅は空を見上げ、星を眺めた。

犬や猫と死に別れたことのある旅人は時々ミーくんの命の館に巡り合うことがあるという。しかしその星が何処にあったか、正確に答えられるものはいない。それは人の心の中にある星だから、という人もいる。

ペットを失った悲しみに涙を流す人は、夜空に浮かぶ星々を見つめる。そうして、『ああ、あの星のどれかにあの子がいる。自分の愛したあの子が、あの星の中にきつという』と思うのかもしれない。その星の名をミーくんの命の館と我々は呼ぶ。

もし魂というものが永遠なら、ミーくんの命の館がそれを証明してくれるというのなら、いつか自分が滅んでもこの心が愛するひとの元へ届けばいい。大切なひとに寄り添い守護することができるなら、それ以上の喜びは無い。

そう考えたとき、いつしか紅の口元には小さな微笑みが浮かんでいく。その微笑みを、紅は最後まで誰にも見せることは無かった。それは誰にも知られてはならない微笑みだった。

第二十幕 銀河の旅路 後編 偽作大四畳半大物語

「次の駅は『明日の星』。停車時間は二週間……」

車掌がその星の名を告げると白薔薇姫はアセルスの袖をそつと引いた。

「どうしたの、白薔薇？」

「アセルス様。今度の星ではけして銀河鉄道のことを喋らないでください」

「どうして？」

「『明日の星』はとても平和な星……。だから、銃も剣もみな列車に置いてこの星へ降ります。この星の住人はみな、銀河鉄道のことを知りません。そこには何も知らない幸せな人たちが住んでいるのです」

「何も知らない人たち……。何も知らないって、幸せなことかな？」

「さあ、それはわかりません。でも、この星の住人たちはみな自分たちの生活に希望を持って生きています。……ほら、星が見えましたよ」

白薔薇姫に促され、アセルスは窓から星を眺めた。美しい星だった。青く澄み切った星。いつか凶鑑で見たことのある……。そうだ、地球という星によく似ている、とアセルスは思う。

銀河鉄道は蒸気を上げて夜の底へと降りていく。虚空へと伸びた架橋をがちりと車輪が掴まえ、石畳の上に敷かれたレールを銀河鉄道が駆けていく。

「ここへは変わった降り方をするんだね」

「ええ。この星の線路へ……つまり、ほんとうにこの星の上を走ってる鉄道の上に降りるのです。この星の列車に紛れて、この星の駅へと。駅員だけはこの列車が宇宙からきた銀河鉄道の超特急だということを知っています。この星にはまだ蒸気機関車がたくさんあるから、ちよつと見ただけではわかりません」

「ふうん……。なんだが不思議な感じがするな。銀河鉄道のことをみんな知らないなんて」

「星によつては文明が違えば文化も違いますから。不用意に真実を明かして住人達を驚かせないようにと、鉄道側の配慮なのでしょう」

「でも、ヨークランドやスクラップなんかと比べても、そこまで文明が遅れているという気もしないけどなあ……。銀河鉄道のことを知らされていない星って、結構あるものなの？」

「ええ。マルディアスやサンダイル……。それらの星では、一部の高官や旅人にしか知らされていないそうですわ」

「へえ……。なら私たちは、この星では正体を隠した宇宙人というわけか」

「そうですね」

ふふ、と白薔薇姫は笑う。

煉瓦造りの駅から足を一步踏み出すと、そこには静まり返った街並みが広がっている。立ち並ぶ看板も今は明かりを落とし、薄暗い影となって町並の中に浮かんでいる。

「寂しいでしょう……。でも昼間にもなればとても人が大勢現れる星ですから、気を付けてくださいね」

「うん……。あれ、イルドゥンは？」

振り返ると、イルドゥンはいつもの無表情で離れたところに佇んでいる。

「前の星で置いていったこと、まだ怒ってるの？」

尋ねると、イルドゥンはぴくりと眉を震わせ「違う」と言下に否定した。

「じゃあ、何。一緒に行こうよ」

手を差し伸べると、イルドゥンはその手をまじまじと眺めていたが、やがて「ふん」と鼻を鳴らした。

「何……。その態度」

「さあな。俺のことは放っておけ」

そう言ったとき、イルドゥンは石と化したように口を開こうとはせず、アセルス達は仕方なく先に進むことにした。

やがて日が昇ると、さつきまでの静寂が嘘のように町は喧騒を取り戻した。いままでどこに隠れていたものか、人という人が路地から雲霞の如く現れ、通りを車が音を立てて通り過ぎる。電光掲示板は宣伝文句を飽きることなく繰り返し、信号からは「通りやんせ」が流れ出す。

平和な星というとおり、それまで旅した星とは違い、『明日の星』の住人で武装している者は一人としていなかった。

「この星では生のラーメンが食べられるそうですよ」
「ラーメンー」

アセルスは驚いて声を上げる。合成のカップラーメンならば幾度も口にすることがあるが、小麦が激減してしまったりリージョン世界では本物のラーメンなどはよほどの金持ちでもなければ一生目にするかもしれない代物だ。

そういうことならば、とアセルス達はさつそく近くにあった中華料理屋『紅楽園』へと入ることにした。看板の文字を見て紅はなんとなく嫌そうにしていたが、結局は文句を口に出すことはなく渋々といった様子で暖簾をくぐる。こじんまりとしたごく普通の食事処だ。カウンターが五席にテーブルが三卓。カウンターの主人は暇そうに新聞を広げ、天井に吊るされたブラウン管テレビは野球中継を流している。粗末な椅子はあちこちが剥げて中の綿が露出しており、座るとべこべここと安っぽい音がする。またテー

ブルはといえばどこことなく油っぽく、立てかけられた手書きのメニューはどこどころ掠れていた。

「いらつしやい。あんた達人さんかい？　みない顔だねー。どこから来たの」

前掛けと三角巾をつけた老婆がテーブルに水を置きながら気さくに話しかけてくる。

「わかります？」

「そりやわかるよ。あんた達すごい恰好してるもの」

指摘されて周囲を見回すと、なるほど確かに他の客はスーツかジーンズにTシャツ姿であり、ドレス姿の白薔薇やイルドゥンの大仰な外套姿はあまりにも目立っていた。

「いやあ、それがちよつと遠くから来たんですよ」

「そうかい。まあ、どこでもいいけどさ。ゆっくりしていきなよ。ここはいいところだよ。あたしなんかここで六十年は暮らしてるけど、別にどこに行こうとも思わないもの」

「そうですか」感心したようにアセルスはため息をついた。「なんかいいですね、そういうの」

「そう？　そんなものかね。まあとにかく、何かわからないことがあつたら聞いておくれ。土産物でも観光地でも、ここらのことなら何でも教えてあげるから」

「ありがとうございます」

愛想よく礼を言うと、店員の老婆は嬉しそうに目を細めて戻っていった。

「本当に治安の良さそうなところだね……」

どことなく気の抜けた様子でアセルスは呟く。クーロンでの食事といえば店員が舌打ちするのは当たり前、油断すれば強盗や置き引きに遭うといった有様だったが、この星では違うようだ。隣の席のサラリーマンなどは無造作に後ろのポケットに突っ込まれた革財布をどうぞ盗んでくれと主張しているようなものだったが、この辺りではあまり警戒する必要も薄いのかも知れない。

すつかり寛いだ様子のアセルスはさほど迷うことなく注文を決め、白薔薇姫も「では私もそれを」ということになった。

「……で」アセルスは言う。「イルドウンはどうするの？」

「……」

イルドウンは無言のまま、机の木目を睨みつけている。店に入った瞬間からどことなく不機嫌そうにしてはいたが、どうも店があまり衛生的ではないのが気に食わないようだ。旅慣れたアセルス達はこうした雑多な店の雰囲気慣れてはいるが、イルドウンはそもそもこんな場所には足を踏み入れたりなどしないのだろう。

「じゃあ、イルドウンは味噌ラーメンね」

「おい。勝手に決めるな」

「それなら何にするの」

ほら、と言って目の前にメニューを広げて見せるとイルドゥンは顔を顰めた。

「……いや、俺はいい」

「店員さん待ってるよ」

「だから俺はいらんと言ってるだろうが」

「席に座っておいて注文しないなんて変じゃない？」

「知るか」

イルドゥンは横を向いてしまう。アセルスはため息をつき、「すみません注文お願いします」と手を挙げた。先ほどのおばちゃん店員が前掛けで手を拭きながら小走りで駆け寄ってくる。

「はいはい。何にしましよ」

「私はチャーシューメン。彼女もチャーシューメン一つお願いします」

「はい。チャーシュー二つね。あら、そっちのお兄さんは？」

「この人はちよつとお腹痛いらしいんで大丈夫です」

言った途端、がたりと音を立てテーブルが揺れたがイルドゥンはなんとか暴れるのを堪えたようだった。

「……痛くない」

「お兄さん何か言った？」

「……痛いわけがない」

「気にしないでください。お腹が痛くてあんまり喋りたくないみたいで」

「あらそうなの」おぼちゃんは心配そうにイルドゥンを見つめた。

「大変ねえ……。お兄さん、元気出してね」

あまりにも善良な顔をしておぼちゃんが言うので、イルドゥンは「……ああ」と……うむ」の中間くらいの言葉を小さく口にした。

おぼちゃんが去ると、イルドゥンは怒り狂うあまりにかえって落ち着いた声色でアセルスを責める。

「アセルス。お前」

「あまり目立ちたくないんだよね」

アセルスは静かに言った。

「いくら平和な星だつていつてもさ、どうしたつて旅人は目立つ。私も貴方もここでは異邦人なんだ。外人は外人なりに普通にしてないと、いつか追っ手に足跡を辿られないとも限らないし。ごめんね、イルドゥン。でも私はなるべくヘラヘラして害のなさそうな顔をしていたいんだ」

「……」

突然の真面目な話にイルドゥンは驚いたように一瞬だけ目を細めたが、やがて納得したのか「……ふん」と頷いた。

「少しは旅にも慣れたか」

「そりゃあね。貴方の言ったことは大概その通りだったよ、イルドゥン。世の中は……危険なことばかりだった。ラムダ基地では捕まって拷問も受けたしね……。けして剣を手放すな……。か。貴方の教えが無ければとつくに死んでいたかもしれない。そういう意味では、私は貴方にお礼を言わなければならぬのかもしれないね」

「礼などいらん」

イルドゥンがそういうのでアセルスはありがとうと言うのをや止め、その代わりにラーメンを持ってきてくれたおぼちゃんに頭を下げた。「あ、どうもすみません。……あと、小鉢もらえますか?」

小鉢に麺とスープを取り分け、紅用のささやかなお子様ラーメンを作りながらアセルスは気になっていたので尋ねた。

「貴方が来たのはラストバンさんの頼みっていうことだったけど、それって本当なの?」
「嘘をつく理由があるか?」

「いや、そういうわけじゃないけどさ。ラストバンさんの頼みってやつぱり、あれなのか。私にファシナトールを変えて欲しいとかそういうたぐいの話なのかな?」

「さあな」

「さあなって」

「俺は頼まれたただけだ」

「頼まれたって……理由も聞いてないの？」

「ああ」

「ふうん……。よくわからないけど、本当に仲が良いんだね。友の頼みなら二つ返事でってやつ？」

「仲が、良い……？」 怪訝そうにイルドゥンは眉を顰めた。「俺とあいつがか？」

「そりゃそうでしょう」

「いやそんなことはない」

イルドゥンはきつぱりと言った。

「別に仲は良くはない」

「え、ええ……。そうなの……？　じゃあ、どうして来てくれたの……？」

「どうして……？」

問われ、イルドゥンは表情を変えずに首を傾げ考え込んでいたかと思うと真顔で答えた。

「そうだな。おおむね暇だった。そんなところだ」

「そんな理由で!？」

「そんな理由だ。だいたい、忙しい妖魔などこの世には存在しない。大抵の妖魔はみな暇だ。確か俺はどこかで酒を飲んでいた。するとラストバンが現れセアトに敗れたという話をしてきて……何だったか。その話の流れでお前のことを頼まれた。そして冷静に考えてみると俺は暇だった。そういうことだ」

「はあ……」

イルドウンの投げやりな語り口調に呆れ、それからアセルスは「うん?」と聞き捨てならない言葉に疑問の声を上げた。

「セアトに敗れたって……大丈夫なの?」

「大丈夫だろう」

「でも……怪我とか」

「確かに俺が見たときは傷だらけだったが。だが大丈夫だろう」

「心配じゃないの?」

「俺が心配すると奴がどうにかなるのか? 腐っても妖魔だ。セアトごときに滅ぼされるとも思えん。仮に滅ぶとしても、それはラストバンがその程度の妖魔だったというだけの話だ」

「ラストバンさんのこと、信頼してるんだね。……チャーシュー食べる?」

「だからそういうことではないチャーシューはいらん」

箸でつまんだチャーシューを差し出してくるアセルスにうんざりしたのか、イルドゥンは大仰にため息をついた。

「大体……ラーメンなど食べてどうするんだ？」

アセルスは無理にはしやいでいるのを咎められた子供のように動きを止める。

「そんなの……私の勝手でしょうに」

「ではお前はその人間の食事を旨いと思うのか」

アセルスは不満げに口を尖らせる。

「別に……食欲がなくなっただって、味覚がなくなっただけじゃない。これがチャーシューメンだとわかっていれば、味の想像だってなんとなくつくよ。……ねえ？」

最後の一言は紅に向けたものだった。ミニチュアサイズのラーメンを胡乱気につついていた紅はアセルスに同意を求められるや否やはと背筋を直し、すごい勢いで麺に噛みついて「お……おいひいです」と頬を膨らませた。

「ほら。紅もこう言ってる。ラーメンは人類の口の永遠の友なんだ」

「ならいいがな」

皮肉気に答えるイルドゥンにアセルスは青筋を立てて膨れる。

「ならいいがな……」。ふん！ いつかこの味噌ラーメンを食べなかったことを後

悔させてあげるからね！」

不貞腐れたアセルスは意地になったようにラーメンを啜り、「あー美味しかった！」と聞こえよがしに言った。

◇

「無い！ 無い！ 無い！」

体中をまさぐりながら真つ青になってアセルスは叫んだ。ほんの僅かのことなのだ。そう、ラーメンを食べて少しだけ気が緩み、ほかほかとお日柄も良く……小高い丘のどかな芝生の上でちよつとだけうとうと……眠ってしまった。

本当にそれだけだ。

それほど長い時間ではない。

その筈なのだ。

「銀河鉄道のパスがない！」

それだけではない。携帯していた金銭、財布も根こそぎ持っていかれていた。流石にいざという時の為に服の中に隠していた分までは見つからなかったようだし、命を取られなかっただけでも不幸中の幸いと言えたかもしれない。しかし……。自分の間抜け

さ加減に歯ぎしりしながらアセルスは頭を抱えた。

「そんなに長いあいだ寝ていたわけでもないのに……」

悔し気に呻くと、イルドウンが憎たらしい顔をして「いいや」と口をはさんだ。

「それでもない。たつぷり一時間は寝ていた」

そういつて何かを思い出すように空を見上げ、更に付け加える。

「隙だらけだった」

「……むかつく」アセルスは呻く。「だいたい貴方だつて寝ていたんじゃないの？」

「俺は寝ていない。まあ寝たところで何かを盗まれるほど愚かでもないが」

「はあ!? 起きてたの？」

「ああ」

「……じゃあ、何でパスが盗まれてるの」

「盗人が来たからだろう」

「いや、だから……貴方は何をしてたの？」

「俺は近くの木陰にいた。パスを盗まれるお前の間抜け面を見ていた」

「いや。いやいやいや……止めてよ」

「なぜ俺がそんなことをしなければならぬ？ 少なくとも、命の危険になど晒されて

はいなかった。露わになったのはお前の無能だけだ」

「あつそ……あつそう！」恨めし気に睨みつける。「イルドゥンなんか嫌いだ！」

「落ち着きましよう、アセルス様」

白薔薇姫はアセルスの肩に手を置いてなだめる。

「今はとにかく、パスを探さなければ」

「うん……。だけど、いったいどいつが……」

「何か手がかりでもないかと、とても探しだしませんね……。イルドゥン、貴方が見た泥棒はどんな人物でしたか？」

「……そうだな。黄色のジャケットを羽織った人間の男だ。まだ幼いこどもだった」

「少年、ですか……。それなら、まだ遠くへ行っていない可能性も高いですね。探しましょう、アセルス様。パスを取り戻さなければ永久にここで暮らさないといけなくなる……」

「……」

「……アセルス様？」

「永久に」というその言葉を聞いてぼんやりとしていたアセルスは白薔薇に声をかけられてはつとすする。

「あ……うん、そうだね。まずは……どうしよう。警察に届けるとか……」

「秘密協定でこの星へ銀河鉄道が乗り入れをしていることはそれこそ極秘ですから

……。届けても信用してはくれないでしょう」
「なら」

「ええ。停車期間は二週間しかありません。二週間のうちにどうしても取り返さなければならぬということですよ」

だが、犯人は見つからなかった。



通常であれば、停車駅では必ず銀河鉄道が宿を用意している筈だった。しかし、今回に限っては自分たちが銀河鉄道の乗客であることを証明するためにパスがない。ホテルをとるための満足な金もないアセルス達は、仕方なく不動産屋を訪れた。持ち合わせが少ないことを伝えるとすぐに断られる場合も多く難儀したが、なんとか一日かけて保証人なし敷金礼金なしで訳ありの人間でも受け入れてくれ、かつ短期間からでも契約可能な下宿先を見つけることができた。

しかし、もちろん、至極当然のことではあるが、それはちゃんとしたところではなかった。

建物はごく普通の木造建築であるがむろん吹けば飛ぶようなあばら家だ。周囲は無数のシダ植物に囲まれておりジャングルの中に取り残された気分になることうけあいだし放し飼いにしている犬や鶏やらが気ままに闊歩しているせいで気を抜くと糞を踏みつける。住人が好き勝手に縄を張って洗濯物を干しているせいでいちいちかがまなければまともに入り口までたどり着くこともできない。縁側に転がっているのはさびたバケツにホース、折れ曲がった板切れに古びた文庫本。それだけならまだしも普通だ。が当たり前のようにびりけん人形があり鯉の泳ぐドラム缶があり劇画調で描かれた映画看板がある。

中に入ればどうか。

入口はとにかく張り紙でいっぱいだ。なにが書いてあるのかとよくよく目を近づけてみれば全てピンクチラシである。大家に聞けば住人たちがどこから剥がしては入り口に貼り付けていくのだという。天井を見上げればこれまた墨痕倫理に『学生の自治を取り戻せ!』と書かれているが、この下宿に学生は現在のところ住んでいない。住んでいるのは九州から来た無職とポンビキ、アル中の易者とストリップパーである。

廊下は狭い。実際には一間ほどあるのだが両側に住む住人がそれぞれ個人の物を積み上げていくために体を横にして進むのが精いっぱいとなっている。天井にはむき出しの配線が無数にうねり、絡み合っており、明滅する白熱電球が死にかけの蟬じみた鳴

き声を上げている。板張りの廊下は半ば腐りかけているし、歩くときいきい音がするの
で天然のうぐいすばりだ。屋内だというのにあちこちを蔓が覆っているしなんなら苔
さえ生えている。

当たり前のように四畳半である。風呂は無い。トイレは共同であり、なおかつ屋外で
ある。

年頃の女性であれば秒で逃げだす住居だった。清潔感とはほど遠い、あまりにも猥雑
でかつ狭隘な場所だった。

だがアセルスは慣れていた。伊達にクーロンで半年以上暮らしていたわけではない。
悲しいかな貧乏には慣れていて。

下宿先の大家は背の曲がった老婆だったが、この星の例にも漏れず気の良ければあ
だ。入り口で対面するなり大家は二階を見上げ、半ば怒鳴りつけるようにして「こらー
！」と叫んだ。なぜ怒っているのかと訝しんだアセルスだったが、それは勘違いだった。
「こらー！ 足立さん！ 新しく入る人だよ！ 挨拶おし！」

大家がそういうとどたと足音が聞こえ、階段の上からひよつこりと猿が顔を覗か
せた。いや、猿ではない。よくみれば人間だ。眼鏡もかけている。サルマタにランニン
グシャツと無防備な恰好のまま、男は尻をぼりぼりと掻きながらにつこりと笑った。

「おいどん、足立太なんよ。よろしく」

「あ、私は……」

アセルスが挨拶を言い終わるのを待たず、足立と名乗った男ははつと顔を上げ「いかにかんラーメンが伸びる！」と泡を食って自室へと戻っていく。

「あの人は足立さん。あんた達の向かいに住んでる人だよ。人畜無害だけど時々でかい声で叫んだりするから、まあ気を付けるんだね」

「はあ……」

何をどう気を付ければ良いのかわからないまま大家の案内に従って二階の部屋へと向かう。廊下に並ぶ襖を開ければそこはすぐ各住人の部屋だ。鍵などももちろんついてはいない。下宿館においてプライバシーという言葉は存在しないのだ。防犯意識の薄いこの住居では開きっぱなしの戸からそれぞれの生活が筒抜けである。

「ほら、ここがあんた達の部屋だよ」

そういつて大家が戸を引く。畳が四枚半ある。それ以上でも以下でもない。他に存在しているものは押し入れと空気だけだ。

「それで、家財道具はいつ届くんかね？ え？ ない？ はーあんたたち死ぬ気かい。え？ フトンもない!? はー。いくら若いっていつても自分の体を過信しちゃいけないよ。仕方ないねー」

ぶつぶつと呆れながら大家はどこかから布団を持ってきてくれた。

「まあいいよ。はやく働いて返してよね」

「あ、あの私たちはだいじょう……」

「ああそうだ、足立さん！」

遠慮するアセルスの言葉を聞かずに大家は叫び、そのままどたと足音を立てて向かいの襖を開けた。さきほど紹介されたサルマタの怪人の部屋が丸見えになる。やはりそこは何もない四畳半だった。アセルス達は今日来たばかりなのだから当たり前なのだが、もともとここに住んでいるにも関わらず足立太の部屋には布団代わりに新聞紙が敷かれているだけで、その外にはどんぶりが一つ、慎まし気に置かれているだけだ。テレビもない。衣装棚も冷蔵庫も無い。

「足立さん。あんたあれ持つてるだろ、百ワット。アセルスさんたちに貸しておやりよ。この子たち着の身着のままみたいでなんも持つてないんだよ」

「はあ!」寝転がって足立は素っ頓狂な声を上げた。「なしておいどんがそげんことせにやららんね?」

「だってこの子たちが可哀想じゃないかい。あんたこの冬の夜に女の子二人を凍死させるつもりかね? だいたいあの電球はあたしが足立さんに貸してるものでしょうが」

「しかしあれはおいどんの生命線ばい。あれがないと……」言いかげ、足立はアセルスたちが困っているのに気づいてはっと真面目な顔になった。「……よか。困ったときはお

互い様ばい。おいどんは男ど。寒空の一つや二つ、キアイで耐えて見せるけんね」

「いやほんとにだいじょうぶなんで……」

「よかよか。気にせんでよかよ。遠慮なんてするもんじやなかばい」

そう言つて足立は立ち上がり、押し入れの戸をさつと開けた。と、途端に無数のサルマタというサルマタが雪崩を起こして落ちてくる。押し入れの中に無造作に押し込まれていたサルマタの氾濫にたちまち足立は「ぎゅう」と声を押し殺して生き埋めになつたが、慣れた様子でサルマタの海を泳ぎ切り抜け出すと「なはは」と恥ずかしそうに笑つた。おいどん、サルマタだけはたくさんもつちよるんよ。人間、サルマタさえあれば大抵のことは何とかなるものなんよ。そう言いながら押し入れの奥を「そごそと」かき回し、やがて手のひら大の電球を見つけ出すと大事そうに手渡してきた。

「冬はこれを抱いて寝てるんよ。サルマタでこれを囲んだ即席の百ワット炬燵があれば冬の寒さもなんとかなるつちゆう寸法なんよ」

「いや、私は……」

「アセルス様」

断ろうと口を開いたアセルスの脇を白薔薇姫がそつとつついた。その顔を見てアセルスは意図を悟り、丁寧に電球を受け取つた。

「ありがとうございます。足立さん。大切に使いますね」

にっこりと笑うアセルスの顔に足立は顔を真っ赤にして見惚れていたが、やがてどんと胸を叩いて誇らしげに肩をそびやかせた。

「貧乏暮らしには慣れとるけん。わからんことがあれば何でん聞いてください」

「ああ、はい……」

後ろめたい思いで頭を下げ、アセルスはようやく自室へと入り戸を閉め、そして盛大に項垂れた。

「白薔薇……」

「はい」

「人の親切が胸に痛いよ……」

「はい……」

白薔薇姫はなぜか笑いを堪えているようだった。

「足立さん、本当に大丈夫なのかなあ？」

「さあ、どうでしょう……。案外平気なのかもしれませんよ」

「でもなあ……。うーん……。パスはパスで探さなきゃならないんだけど……。うーん

……」

さんざん首をひねった末にアセルスは神妙そうな顔をして言った。

「……ごめん、紅。ちよつとお願いがあるんだけど……」

人間の拳ほどの大きさである紅はそつと忍び足で足立太の襖を開いた。足立は何一つ気付かず、のんきに寝転がったままである。よく晴れた陽気な日とはいえ、冬の真昼間にサルマタとランニングシャツという薄着でいる部屋の主人はずるずると鼻を吸った。

「はー」

足立太は天井を見上げて深いためいきをついた。

「おいどんどうも女に甘い所があるんかねー。ばってん……」

言いかけて、腹の音がグウと鳴る。

「くそー腹減った」投げやりに呟く。「考えたらおとついななんも食べちよらんもんなー。さっきのラーメンもトリさんに食べられてしもうたし。このままじゃ干乾しになつてしまふばい。バイト料は週末にならんと入らんし、動けば動いただけ腹が減る……。こうなりや寝るしかなか。明日の為に今日も寝て今日の為に明日も寝る。それにしても寒さにやられんようにせんといかんね……」

びあつくしよん、とくしやみをする。

「はー。寒か……。しかし着るものとは言えばサルマタのみ……。どうしたもんかねー……」

やがて紅の見守る中で足立は盛大ないびきをかいて寝始めた。そのあまりにもすご

いいびきと寝言に紅は衝撃を受け、こんな人間もいるのかと半ば感心さえしてしまうほどだったが、自分がやるべきことはわかっていた。

足立太の部屋は少しだけ温かくなった。

◇

足立太は九州の小倉で生まれ中学を卒業したのちに上京し働きながら定時制の夜間高校に通っていたが、勤務先の工場をクビになったために学費が払えなくなり中途退学を余儀なくされ、いまは復学を夢見て糊口をしのぐ毎日である。チビでがに股かつ醜男ではあるが気は誠実で美人に弱い。

現在における足立の全財産は手元にある三百二十八円である。一杯のラーメンが百円強であることを考えるとこれは非常に心もとない金額ではあるが、極貧生活に慣れきっていた足立はそれほど絶望してはいなかった。もし金が無いのであれば近くの中華料理屋で働けば良いし、そうでなくともどこかに日雇いの仕事があるだろう。金は一向に貯まらないがその代わりに夢や希望は無闇に貯まる。巷に雨の降る如くわが心にも雨ぞ降る。いつの日か喜びにあふれてあの空を見上げるときがきつとくるのだと、おいどんこと足立太は信じているのだった。

その足立太がいま何をしているのかというと、彼は下宿館の窓から夜空を眺めている。夜の冷え込む冷気にも構わずランニングシャツのまま、足立は空を指さしてこう語った。

「おいどんは思うんよ。あの星の中にもおいどんのようなことを考えおいどんのように暮らしている男のいる星があるだろうかと……」

足立はけして星を愛するたぐいの男ではない。浪漫に溢れる趣味を持ち合わせているわけではないし、星の王子様に影響されている訳でももちろんない。ただ彼は女に弱く、特に美人を前にすると自分でも思いもつかない台詞をいささか気取った調子で口にしてしまう悪癖があるのだった。

紅から足立の独り言を聞きだしたアセルスはお節介と知りつつもなげなしの金でささやかな酒と肴とを用立て、引越し祝いという名目で足立の部屋を訪れ、その結果このサルマタ怪人の話をずるずると聞く羽目になっていた。

「人の噂だと真夜中になれば銀河鉄道ちゆう幻の列車が空から降りてきてどこから来たかようわからん人をおろして……、夜があげるとまた人をのせてどこかへ飛んでいくちゆうとじやが、おいどんもそんな列車があつたらのつてみたかねー」

「へえ……。そんな噂があるんですか？ 物知りですね」

惚けて見せるアセルスに足立は気分よくなり、その語り口は更に饒舌なものとなる。

「なんでも定期をもつてればどこまでもものつてられて好きなどころでおりられるそうばい。人類の夢ばいねー」

　　楽しそうに語っていた足立はそこでふと唇を噛みしめ、唇を尖らせてどこか悲し気に目を細めた。

「ばつてん、泣いても笑つてもおいどんらにやにげみちはないんよ。夢を見ながら考えるしかないんよ。わかるかね、あせるすさん」

「なんとなく……。足立さんの夢はなんですか？」

「おいどん？　おいどんの夢？」

「ええ」

「そりや、あんた……」

　　言いかけて、おいどんは恥ずかしそうに身をくねらせ、もじもじと照れだした。

「言えん！　言えん！　男つちゆうのはそうおいそれと夢を語つちやいかんとおいどんは思うちよるんよ。腹の内に夢を秘め、耐えて耐えて耐え抜くのが日本男児の定めなんよ」

「そうですか……。難しいんですね」

「あせるすさんには夢があるとですか？　なしてこげな所に来たと？」

「私は……」

問われて、アセルスは戸惑いを覚えた。そういえば……自分はなんのために旅をしてきたのだろうか。追手から逃げなければという意識は常に頭の片隅にあったが、しかしそれは目的ではなかったような気がする。自分には、目指すところ目指すものがあつたのではなかったか……？

「私には……夢なんてものは無いんです。夢を持って生きている人……何かを目指して一生懸命に生きている足立さんみたいな人は本当に尊敬しています。でも……私には夢がない。何かをしたいわけじゃない。私はただ……自分の居場所を見つけたいだけなんです。誰かに襲われる危険のない場所……安心して暮らしていける場所を見つけたくて」

アセルスが漏らした言葉に足立は少しばかり首をかしげていた。

「おいどんにはよくわからんばってん、外人さんも色々大変なんやねー。それはあれか、亡命とかそういう話なんね？ 常々おいどんも戦争には反対だと思うちよります」
なにか勘違いしているようだったが、足立がこちらを励まそうとしているのはよくわかった。

「住処を見つけるつちゆうんなら、ここで良かね。ここは平和な場所たい。くそみたいなボロ家ですけどん、大家のばばあもあれでいいばあなんよ」

「ははは……」

その場では軽く笑つて流してしまつたアセルスだったが、自室へと戻つた後でふと、真面目に考えた。

——もし、パスが見つからなかつたら？

その時は白薔薇姫や紅とこの星で暮らさなくてはならなくなる。けれども、それは——別に悪いことではないのではないかと。

◇

パスを探すのは最優先事項なのだが、それにしても先立つものがなければ身動きがとれない。働き先を探しているという話をする、足立は「そいばはよう言わんね！」と憤然と立ち上がり、先日行つたばかりの中華料理屋へと連れて来てくれた。

がらりと戸を開け、他の客の視線など何一つ気にすることなく足立はでかい声で言つた。

「おっさん、この人一文無しばつてん、なんか食わして働かせてやつてくれんかね」

奥で新聞を読んでいた紅楽園の主人は顔を上げるなり「なんだおいどんじやないかとこれまたでかい声で答えた。

「え？ バイト？ いやウチはそこまで忙しくないし、あんたの給金だけでいっぱい

「いっばいだよ」

「何を！」足立は鼻息荒く言い返す。「おはんにやあわれみちゆうもんがないんか！はるばるソ連から来た外人さんにラーメンライスの一杯も食わせてやらんとか！ こん人は物盗りにあつて金もなにも無いんよ！ 助けてやるのが人情じゃなかか！」

「す、すみませんすみません！」アセルスは恐縮しきりでぺこぺこ頭を下げた。「私はあの、本当に大丈夫なんです。あとソ連？から来たわけではないです」

「あんた……：……：……：そういえばこの前店に来てた外人さんか。えー、あんた泥棒に遭つてたのかい！ はー、そりゃあ……：……：大変だったなあ。まあそういう事情なら……：……：おいどんの頼みもあるし仕方がないか」

「本当にすみません……：……：」

「そうそう、それで良かよ。兎にも角にも、まずはなんか食わせてくれんね。ラーメンライス二つおくれ」

肩身が狭そうに項垂れるアセルスには構わず、足立は自分のペースをまったく崩すことなく自らの主張を続けた。

「え？ おいどんにもかい？ あんたいつもバイトで食つてるだろうが……：……：ええい、まあ、いいか」

渋々といった様子で奥へと引つ込んだ主人はすぐにラーメンライスを二つこしらえ

てくれ、あまつさえ卵をつけてくれさえした。

これは本気で働こう、とアセルスは思った。

幸いにして飲食店で働いたことは何度かあったため、さほど仕事に苦勞するということもない。むしろどちらかといえば足立の方が失敗が多かった。出前する度に自転車を壊しどんぶりを割り客と揉め……とトラブルばかり引き起こしているように見える。悪い人間ではないのだが、めぐり合わせというかなんというか、よくよく不運な男のようだ。

この星へ着いて二日目、アセルスはおおむねバイトをして過ごした。パスの探索を頼んでおいた白薔薇姫もどうやらかんばしい成果は得られなかったようだ。仕方ない。手がかりと言えば黄色の上着を着た少年とというだけでそう簡単に見つかるわけでもない。

三日目、四日目と時は経つ。前借りしたバイト料を家賃にあてながら時間があけば街中を探索しパスを盗んだ犯人を捜す。

五日目の朝、いつものように足立のいびきの音で目を覚ますと何やら階下で騒がしい音がする。様子をみに階段を下りてゆくと、どうやら下宿館に新しい住人が入るのだという。引越してきたのはヒッピーのような身なりの大学生だ。ベルボトムのジーパンにビンテージもののTシャツ、とんぼメガネにポストン・バッグ。現れた長髪の大学

生は、トラックに積み込んだ荷物を運ぶ引越し業者にきびきびと指示を出していた。巨大なオーディオ、傷一つない純白の冷蔵庫、そしてカラーテレビ。どこにそんなものが入るのかという大量な家財道具を運び入れ、四畳半の部屋は瞬く間に物質主義に塗れた。

「やあ、こんにちは」大学生は言った。「僕は西山と言います。いやあ、こんなところであなたみたいな美人に出会えるなんてびっくりですよ」

「はあ……」差し出された手に戸惑いながらもアセルスは一応握り返した。「アセルスです。初めまして」

「きみ、留学生？ 学校はどこですか？ ぼくは騒鳴館大学の英文科です」

「いや、私はあの」

口ごもっている、ああ、と訳知り顔で西山は頷いた。

「浪人生？ そりや大変ですね。まあ、お互い頑張りましょう」

「違いますよ」

「え？」

「私、浪人生なんかじゃありません。そもそもハイスクールを卒業してませんから」

「とすると……」

「そうですね。中卒です。いまは一文無しで、なんとか生きていくために働こうとして

いるところなんです」

そういうと、西山は驚いたように目を丸くして口をぱくぱくしていたが、そのうちに「いやあ、それはそれは……」とかなんとか言いながら逃げるように去っていった。

ため息をついてアセルスはバイト先に向かった。道すがらぼんやりと考える。もし自分がオルロワージュの馬車に轆かれていなかったら……いいや、もしも両親がともに健在で、何事もなく平凡に暮らしていたとしたら……。自分もいまごろはあんな大学生になっただろうか。考えてはみたが上手く想像することはできなかった。自分はそうしなかったのだろうか、と思う。わからない。半妖となったこの身では何もかもが手の届かない世界のようにも思える。

その日、アセルスは初めて皿を割った。いけない、もっと集中しなければ……いやしかし、こんなことをしていないでとにかくパスを取り戻さなければ……とりとめのない考えに浸っていると、出前から帰ってきた足立が客席を見て慌てて厨房へと引つ込んでくる。

「どうしたんですか?」

尋ねると、のれんごしに客席を覗いた店の主人が「ありやあ」と困ったような声を上げた。視線の先を見れば、髪の毛の長いすらりとした美人が座っている。

「あれは浅野さんだな。おいどんの向かいに住んでた人だよ」

とすると、自分がいま住んでいる部屋の前の住人ということか。しかし足立がもじもじしているのはどうしたわけなのだろう、と不思議がりながら注文を取りに行く。

「ヤキソバひとつ」

「はいよ、ヤキソバ一つね」

慣れた様子で主人は料理を作り上げ、足立に手渡すが、足立はなおもじもじしている。

「どうしたねおいどん」

「あのそのなんちゆうか、ここでおいどんが出てゆくと夢も希望も消えるように」

「はあ!？」主人が顔を顰める。「あんたここで働いてるのが恥なんか？ 若いうちにや何したってどうってこともないじゃねえか。若いうちの貧乏だれが笑うか、ばか」

足立ははつとしたように顔を上げた。

「おいどん、やるばい」

「足立さん、大丈夫です。私が行きますよ」

気を使つて名乗り出たアセルスに、足立はきつぱりと首を振つた。

「よかよ。おいどんは男ど。おいどんがおいどんを羞しても仕様がなかばい」

やきそばを乗せた盆を片手に客席へと歩み寄る足立を見て、おかみさんが気の毒そうに呟いた。

「あんた屁理屈こねたけどあれじゃ足立さん可哀想だよ」

「おいどんが男ならどうってこたあねえ。黙ればばあ」

「ふん。そうかい。じゃ、あんた好きな女の前にそのなりでおぼん持つてでられるかい」

「そりやま出られねえ。しかしな……うーん」

「口ごもり、主人はばつが悪そうに頬を搔いた。

「おいどんに悪いことしちゃったかなあ……」

後悔する主人をよそに、足立はどうとう浅野の元に辿り着いた。

「あら、ここでアルバイト？」

「そうなんよ」

「ここ、おいしいの？」

「そりやもうむちやくちやよ」

「足立さん、まだ、あの下宿館にいるの？ 同じゼミで西山君つて人がいるんだけど、彼

がこんど下宿館に引っ越すつて聞いて、懐かしくなつてこの辺りに来てみたのよ」

「は。そりやあ、まあ……」

足立を見つめて、浅野は優しい微笑みを浮かべた。

「変わらないのね、足立さんは」

「そうかね」

「そうよ」

しばらく会話を交わしていた足立はでれでれとにやけながら浮かれ切った足取りで戻ってきた。

「おいどんよー。裏からラーメン運んできてくれんか」

主人に言われ足立は裏口から出ていき、代わりにアセルスが客席のテーブルを片付けていると、大学生が三人やってきた。いずれも男で、そのうちの一人は例の西山だ。

「あ、アセルスさん……だっけ」

「あ……」

「ここでバイトしてたんですね」

「はい。いらつしやいませ」

西山はなんだか気まずそうにきよろきよろと視線をさ迷わせていたが、客席に見知った顔を見つけて「ああいたいた」と手を挙げた。西山が向かっていったのは浅野の席だ。

「やあ、ここにいたのか」

「西山君」

西山に気づいた浅野が口元に小さな笑みを浮かべる。

西山の連れてきた男たちも同じ卓につき、誰に言われるでもなく自己紹介を始めた。

「西山の知り合いの愛沢ですね。わいは駒馬大学や」と茶髪の男が言い、

「ぼくは音羽工学」と黒髪の真面目そうな男が言う。

「わたし浅野です。西山君と同じ英文科の」

「浅野さん、クニはどこですか？」

「わたしですか？ 私は北海道です。北海道の芦別」

「へー北海道。いいところですよね」

「それでもないのよ。人なんてどんどんいなくなってるもの……」

穏やかな世間話を続ける大学生たち。きがつくと、いつの間にか裏から戻ってきた足立のれんの隙間から顔を突き出して歯ぎしりしていた。

「いまは自由が丘なんですけど、以前は西山君と同じ下宿館に住んでいたの。通うのに便利だから」

「そうそう。環境はともかくとして何しろ近いからな。距離が離れていると通うだけで億劫になりますからね。僕はそれで留年した奴を一人知っているんですよ。……でも、思いがけず変なのがいいたなあ」

西山が言うのと、そうそう、と追従するように茶髪の男が笑う。

「変なのって……あの足立ってやつやる？」

「……なにが、変なの？」

浅野は表情を変えず、静かに尋ねた。

「あいついかなかったんで部屋覗いたらもう何年もいるって話なのになんにもまったくないんだ」

「勝手に覗いちや悪いよ」黒髪の男がたしなめる様に口をはさんだ。「それに物があろうとなかろうと人格にや関係ないさ」

「そう思うわ」と浅野が頷くと、西山は気分を害したように「しかしね」と口を尖らせた。「あいつの目には氣力が無い。おれの友達にもいるけどああいうヤツはダメだよ。あの年でその日暮らしを繰り返しているのは結局のところ本人の頑張りが足りないからだろう。どんな人間だって頑張ればあすこまでの極貧生活を送ることはない。ああいう人間はたいがい自分に甘いんだ」

「でも、浪人が一人というのは気の毒だろう」

「人間スタートで出遅れると……いや何年かかってもダメなものはダメさ」

足立はもう顔を真っ赤にして怒りに震えていたが、懸命に歯を食いしばって学生たちの注文したラーメンセットを持っていこうとお盆に手をかけ——たところで流石に主人が止めた。

「いいよおいどん。わしが持っていくよわしが」

ラーメンを食べ終わると大学生たちは映画を見に行くのだと言って出ていったが、浅野は用事があるからといって店に残り、コーヒーを頼んだ。意気消沈したまま皿を洗っ

ている足立を見て、おかみさんはほそりと囁いた。

「でも、あの子、足立さんに恥をかかせないつもりでここにいること言わなかったんだね」

「そうだなあ」主人は言い、足立に同情の視線を向けた。「だがはじめつから夢と希望に借りができちまつて、よくよく運の悪いやつだよおいどんは」

「聞こえちよるばい」

足立が蚊の鳴くような声で言う。

「なーに、ひとはひと、われはわれなり。おいどんだつてその内なんとかなるわい。いつか見ちよれと思うとるんよ」

「あ……足立さん、浅野さん帰るみたいだよ」

促され、支払いの為にレジまでやってきた浅野を見、足立はとぼとぼと力なく歩み寄る。

「——聞いてた？」

浅野は穏やかに言った。

「は……」

「ごめんなさいね。みんな悪気はないの。でも、あなたも悪いのよ。あなたいつになったら学校に戻るの？ いつかでっかくなつてみせるつていつも言ってるけど、あなたす

ぐにバイトクビになるからずつと貧乏のままじゃない。だから駄目なのよ」

「……」

「……じゃあね。久しぶりに会えて嬉しかったわ」

「ああ……はい」

もはやまともにも焦点の合わない目でぼんやりとうなずき、足立はお釣りの小銭を浅野の掌へと落とした。僅かに手と手の触れ合ったその部分を浅野はじつと見つめていたが、しかしやはりそれ以上の言葉を発することはなく、店から出ていった。

足立と浅野の一部始終をあわあわしながら見守っていたアセルスは、どこか腑に落ちないものを感じて「あの、私ちよつと行つてきます」と言つて店を飛び出すと、次の曲がり角で信号を待つていた浅野に追いついた。

「あのー」

呼びかけると、浅野はこちらに気づいて小首を傾げた。

「……あら、あなたさっきの……」

「わたし、あの店で働いてるアセルスという者なんですけど……」

「そう……。そのアセルスさんが何の用なの？」

「なんで、さっきはあんな言い方をしたんですか？」

自分はいったい何をやっているんだろうか——アセルスは自問する。他人の事情に

首を突つ込むなどお節もいいところだ。だいたい自分は追われる身の女だ。人間ですらない半妖の、しかも人を殺したことすらある女なのだ。その自分に、人の色恋沙汰にどうこう言う資格などあるのだろうか。躊躇いを覚えながら、いつの間にか唇は動いていた。どうしてなんですか。そう尋ねると、浅野はおかしそうに弱々しい微笑みを浮かべた。それはどこか寂し気な笑い方だった。

「足立さん、優しいでしょう」

「ええ……はい」

「良い人なんです。とても。いつも苦労ばかりしているのに、下宿館で誰かが泣いていると必ず声をかけてくれる。あの人も優しいから……だから、私も優しくしてあげたくなるの」

「それなら」

「好きよ。足立さんのこと」浅野はあっけなく認めた。「でも、ね……わかるでしょ？」

優しいあの人が私が優しくして……その私にあの人が優しくしてくれて……優しい優しいというただそれだけでは何も変わらないじゃない」

「……」

「いつまでも私はあの人の優しさを利用しては行かないの。あの人には少し厳しくしてあげなきゃ。誰かがハッパをかけてあげなければ、足立さん駄目になっちゃ

う。……下宿館で心地良いのよ。ボロいけど大家さんも他の人もみんな親切だし、何をしても誰にも怒られない。自由で、いい加減で……」

浅野は空を見上げ、太陽の光にまぶしそうに目を細めた。

「私の青春はみんなあの下宿の中にあつた。夢があつて、希望があつて……どこにだっていけるし何にだってなれると思つてた。でも、いつかはあの場所からは出なければいけない」

「何を言つてるんですか？ 浅野さんはまだ若いじゃないですか。貴方はその……まともなニンゲンだし、何か犯罪を犯しているわけでもないし」

「わたし、クニに帰るんです」浅野はアセルスを見つめ、ゆつくりと口を開いた。「西山君たちとはあんな話をしていただけ……本当は学費が払えなくなつたので北海道に帰るの。私は足立さんみたいに強くないし、働いて学費を稼ぐほどの根性も無いから」

「それでいいんですか？」

「ええ。色々考えて決めたことだから……。だから、いま心配なのは足立さんのことだけ……。あの人あんなだからすぐにもめ事起こしたりするでしょう。もう少しだけ小狡くなつてもいいんじゃないかと思うの。……もつとも」

浅野はため息をついた。

「そうなつてしまつたら、私の好きな足立さんはいなくなつてしまうのかもしれないけ

ど。……アセルスさん、足立さんのこと、よろしく願います」

浅野は深々と頭を下げた。アセルスは慌てて頭を上げるように言う。

「そんな！ 私はあの……そういうアレじゃないですから！」

「……そうなの？」

残念だともいうように浅野はアセルスの顔をじっくり眺めていたが、「なんだかごめんなさいね」と言つて去つていった。

アセルスは空を見上げてため息をつく。自分はなんてばかなのだろうか、と肩を落とした。もし時間を戻すことができるなら、足立にひどいことを言つた浅野を咎めようなどと思ひあがつていた自分をぶん殴つてやりたい。

「私はまだ、世の中や人間のことを何も知らないんだな……」

呟いて、アセルスはバイトに戻るべく店へと戻つた。足立はまだ落ち込んでいるようで、トイレにこもっている。

「足立さん、大丈夫かい。今日のところはもう帰りなよ」おかみさんが言う。

「いいんだよいいんだよ。男はな、泣き顔を人に見せちやいけねえんだ。そつとしておいてやりやいいんだよ」と主人が言う。

自分も何かを声をかけるべきだろうかと思つたが、浅野の言葉を思い出して躊躇つた。実際、自分に何ができると言うのだろうか。しよせん、自分は旅人だ。足立という未

来ある若者の青春に現れた一瞬の幻影に過ぎないのだ。彼に好意を持ちはしても、彼と共に生きようとはけして思えない。

心の中で泣きながら歯を食いしばって耐えている足立の顔を見て、アセルスは何も言うことができなかつた。

下宿館に帰ると、白薔薇姫はいつものように優しく出迎えてくれる。

「おかえりなさいませ、アセルス様」

「うん、ただいま」

「アルバイトの首尾はどうでしたか？」

「色々なことがあつたけど、でもおおむね平和だったよ。ここでは血が流れない。それはいいことだね。……パスの方はどう？」

白薔薇姫は申し訳なさそうに眉をさげた。

「それが、やはりどうにも手がかりがなく……」

「うん……。いや、仕様がなによ」

「まだ一週間ありますわ。きっとパスも見つかります」

「……そうだね」

慰めの言葉に力なく頷いてアセルスは何もない四畳半の部屋を見渡した。この四畳

半の部屋こそが、自らの無力の象徴だ。間抜けにもパスを失い、大切なお姫様をこんな狭い場所で不自由を味あわせている。庶民の生まれである自分はいくら部屋が粗末だろうと気に留めはしないが、白薔薇たちは違うだろう。そうだ。白薔薇はいつも優しい。だからその優しさに報いるためにも自分がすっかり彼女たちを守らなければならぬのだ、とそう考え、しかし――、

「『優しい』か……」

呟いた小さな声に白薔薇姫が「え？」と聞き返す。ううん、何でもないよ、そう言つてアセルスは窓際に近寄つて外を眺めた。夜空には冬の夜に相応しいささやかな月が白々と輝いている。何気なくぼんやりと見つめてみると、後ろの方でかたりと瓦が鳴つた。振り返り見上げれば、下宿館についてからすっかり姿を消していたイルドウンが屋根の上に佇んでいる。

「まったく、どこに行つたのかと思つたら」

愚痴るように言い、おつかなびっくり瓦葺きの屋根をよじ登つていく。

「今までどこにいたの？ 心配……はまったくしてなかつたけど」

「こんな場所に住めるか」

返答は短く、そして端的だった。

「まあ、そうだろうね。四畳半に住んでイルドウンなんてちよつと想像できないもの」

「話しかけてくるな。俺は忙しい」

つつけんどんなその態度に腹を立てながらも、しかしどう見ても何かをしているようには見えないイルドゥンにアセルスは首を傾げる。屋根の上に立つて空を――夜を見上げていただけだ。特に何かをしているようには見えない。だが『忙しい』とイルドゥンは言った。つまらない嘘をこの妖魔がつくとは思えない。

「……ねえ、イルドゥン」

「聞こえなかつたのか？ 話しかけてくるなと俺は言ったんだ」

その冷たい拒絶には構わず、アセルスは言葉が続けた。

「ねえ、辛いことや苦しいことがあつたとしても、男の人はそれを面に出しちゃいけないって、やつぱりそういうもののかな？ 男のやせ我慢って、そんなに大事なことかな？」

イルドゥンは胡乱気にこちらを見やり、「いきなり何を言い出すのか」という目でじろりと睨みつけた。

「……知るか。言つたはずだが、妖魔には男も女も無い。お前が言っているのは人間の理屈だろう」

「そうかな？」アセルスは不思議そうに呟く。「でももし、泣きたいと思つたその時に涙を流すか流さないかで言えば、貴方は流さない方でしょう？ 苦しい時にも貴方はけし

て苦しいとは言わないでしょう?」

「当たり前だ。だからそれがどうしたと言うんだ。惨めに助けを乞う妖魔など、もはや妖魔とは言えん」

「知り合いの人が最近そんなことを言っていて……その人が実際、大変な目に遭ったのにな。ずつとやせ我慢をしているみたいで……でも、やせ我慢を続けているのは悪いことなんじゃないか、止めてあげなきゃいけないんじゃないかっていう人もいた」

「それはあの足立とかいう猿のことか」

「足立さんのことを知っているの?」

「あれだけ大きい声で話していれば嫌でも聞こえる。たしかにそんなことを言っていたな」

「ああ、うん。よく言っているよね、おいどんは男ど、男っちゅうもんはナントカカントカって」

「男だの女だの俺は知ったことではないが」と前置きしたうえで、イルドウンは意外なことを言った。「奴の言うことは正しい」

「え?」

「誇り高く、他者の手を借りずに生きていく。それが妖魔の生き方だ」

「じゃあ、妖魔の生き方って男の生き方ってことなの?」

「そんなわけがないだろう。馬鹿か？」

さすがに呆れたようにイルドウンが答える。

「やせ我慢という言葉は好かんが……奴の言う男らしさというものはそれはそれで正しい。だが、それだけが妖魔の全てではない。支配し、君臨するのが妖魔という生き物だ。俺が奴ならば従わない者は全て滅ぼす。気に入らなければ殺せばいい。妖魔が弱音を口にしないのは、そもそも妖魔は『我慢』などせんからだ。そういう意味で言えば……やせ我慢というのは下らんことだな。弱々しい人間特有の腐った文化だ」

「この星ではそういうわけにはいかないんだよ」

諭すようにアセルスは口をはさむ。

「貴方がそう信じているのは貴方が妖魔で、ファシナトゥールに生まれてファシナトゥール流の文化に染まったからだ。それ以上でもそれ以下でもない。人間として生まれてこの星で生きていく足立さんには、気に食わないからって相手を殴り殺すわけにはいかないじゃないか」

「俺の知ったことではない。奴がそうしたいなら、あの足立という人間は己を愚弄する者全てを殺すべきだ」

「そんなことをしたら社会が成り立たなくなってしまうよ」

「だったら、何だ。ちっぽけな人間社会の一つや二つが崩壊したところで俺に何の損が

ある？」

「それなら聞くけどさ。ファシナトウルだって似たようなものじゃないの？」

「なに？」

「ファシナトウールの王様はオルロワージュだ。妖魔はみんなあのひとに従って生きている。妖魔の絶対的な『格』——それが妖魔の社会を決定する。それなら、それは人間の法律やルールと何が違うの？ 誰だって何かに縛られている。そこから完全に自由になることはできないんじゃないのかな」

「……なんの話だ？」 イルドウンが顔をしかめる。「またお得意の妖魔批判か？ 俺は俺に満足している。そんなことはどうでも良いことだ」

「何の話、か……」

口ごもり、アセルスはイルドウンの隣に立ち、同じ夜空を眺めた。

「そうだな。なんだか随分、話が逸れてしまったね。私が言いたかったのは……何だろう、自分でもよくわからない。馬鹿な話だけど……。でもたぶん、それは……」
言いづらそうにしているアセルスに、苛々するようにイルドウンは急かした。

「何だ。言ってみろ」

「うん」とアセルスは言った。「最近なにか嫌なことでもあったの？」

「はっ」

呆氣に取られたように、イルドウンが目を丸くしている。そんな様子を見るのは珍しいことだった。

「何を言っているんだお前は。気でも狂ったか」

「最近、なんだか様子がおかしいよ。貴方が優しくないのはいつものことだけど、それでもいつも以上に不愛想だし、上の空だし、ラーメンも食べなかつたし……」

「ラーメンは関係ないんじゃないか」

「そうかもしれないけど」なんだか不貞腐れたようにアセルスは口を尖らせた。「下らないと貴方は言っただけど……するかしらないかで言ったら貴方は絶対にやせ我慢をする方だと思う。だから」

「……そうか」イルドウンは心底驚いているようだった。「お前は俺を心配しているのか」

「……うん。まあ」

「……それはまた馬鹿馬鹿しい話だな。半妖ごときに心配されるほど俺も落ちぶれてはいない」

「ごめん……。でも、もしかしたら貴方とキャンベルさんとの間には何か、私にはわからない事情があつたのかもしれない。それなのに、私は勝手なことを言ってしまったて……『ミーくんの命の館』でも貴方はずっと別の場所にいたみたいだし、何かあつたのかなっ

て」

イルドウンは答えず、アセルスの全身をじろじろと眺めまわしていたかと思うと、不意にアセルスの頭に手を乗せ、くしやりと髪をかき混ぜた。

「……そうか」

「うん」

「だが、お前の期待しているようなことなど何も無い。お前は気にせず、いつものようにお前らしく勝手なことをほざいていればいい」

「わかった。余計な事を言つてごめん……。でも、じゃあ、貴方はここで何をしていたの？」

尋ねると、イルドウンはしばらく黙っていたが、やがて口を開いた。

「月を見ていた」

「月を？」

「ああ」

視線を空へと向けたイルドウンにつられるようにして、アセルスもまた月を見つめる。空には、静かに光を放つ月が蕭々と佇んでいる。

「ふうん……」

何気なく呟いて、アセルスはイルドウンの傍に腰を下ろした。……こんな時、人間の

成熟した女ならば何を言うだろう。気の利いたこと、浪漫に溢れる台詞の一つでも絞り出してみせるのだろうか。あいにくとそんなことはできなかつた。そんな能力はないし、ましてやそんな性格でもありはしない。だからアセルスはその代わりに、ただ真摯な気持ちで月を見つめた。

月。

空に輝く衛星の名を月とアセルスは知っていて、ただ一心に夜空を見つめる。審美的素養に欠けたアセルスには、月の美しさなどわかりはしない。空にあるのは『月』というただそれだけで、目にうつるその景色は景色以上の何物でもない。正直に言えば、何かを心の底から美しいと思つた経験がアセルスには無い。生まれた環境としても、生き方にしても、そんなことを考える余裕などこれまでありはしなかつたからだ。美しいという言葉を頭の上では知っていて、しかし『これ』が『それ』だと認めたことはなかつた。それはアセルスが自分自身を愛したことが無いのと同じくらい確かなことだつた。

月を見た。頭の中を過るのは過去のことばかりだ。いつか自分はまだ別の場所で見ることがある筈で、そのとき自分は何を考えていたのだったか。故郷のシユライクで見た月と、いまここでこうしてイルドゥンと見る月は同じようであるで違ふものだ。またいつか別の場所でイルドゥンと月を眺めることがあつたとしても、そのとき自分はこの日のことを覚えているのだろうか。美しい、と思わなければ——何かを愛する

ことが出来なければ、きつと何もかも忘れてしまうのではないか。目の前の光景を愛することも憎むこともできないのなら、それは機械仕掛けの人形と何ら変わりはない。

私にはよくわからないとアセルスは言った。月の美しさを理解できるとは言わない、と。けれど、その後で小さく付け加える。

「ただ、こうして月を視たことは決して後悔しない、と。」

イルドゥンは一度だけアセルスに振り向き、けれども何も言うことはなく再び視線を月へと戻す。妖魔と半妖の見つめるその先で、幽かな雲が月の半身を覆い隠していた。



パスは結局見つからないままに二週間が過ぎ、そして最後の日がやってきた。

「今日は列車が出る日ですね。……やはり、この星で暮らすことになるのでしょうか」

心配そうに白薔薇姫は呟いたが、しかしその表情に焦りは見えなかった。

「うん……」 気を落とすでもなくアセルスは答える。「でもこの星はいい星だよ。盗まれたり色んなこともあったけど、でも私はこの星のことが好きになれそうな気がする」

そう呟くアセルスの顔を、白薔薇姫はそつと目を細めて観察している。

「……そうですね。とにかく、駅へ行ってみましようか」

「駅へ？」

「ええ。今日は銀河鉄道が発車する日……。私たちのパスを盗んだ犯人が乗り込もうと
しているかもしれません」

「そうか……。うん。確かに、このまま下宿でうだうだしていても仕様がな
いものな。
行こう！」

白薔薇姫、そして紅と連れ立って駅へと向かう。列車が星を立つのはちようど深夜の
零時だ。深夜の駅は静まり返り人っ子一人いない。……と、そんな物悲しい駅のベンチ
に一人の少年が座り込んでいる。隣に見覚えのある鞆を置いて、少年は恐ろしく真剣な
顔で手に持った物を睨みつけていた。奥歯を噛みしめ、穴が開くほど見つめて、少年の
手がぶるぶると震えている。アセルスたちはこつそりと忍び寄り、少年の手の中にある
ものに目を凝らす。

「私たちのパスだ！」

アセルスは言った。ああまさにその通り、少年の手に握られたそのパスには確かにア
セルス達の名が記されているのだった。

「取り返さなくちゃ！」

慌てて飛び出そうとしたアセルスの手を白薔薇が咄嗟に引く。

「どうして？　だつてあのパスは……」

「アセルス様」

静かに告げた白薔薇の見つめるその先で、少年は悔し気に目を瞑ると自らの躊躇いを振り払うためか力の限り手を振り上げ、そして短い罵倒の言葉とともにパスをベンチへと叩きつけたのだった。少年は肩を丸め、とぼとぼと力なくその場を立ち去っていく。未練がましく何度か振り向き、そしてその度に泣き出しそうになりながらも、少年はきつと前を向いて歩いていく。

白薔薇姫はゆっくりとパスを拾い上げ、そして少年を呼び止めた。

「このパス、置いていくつもりなのですか？」

「……ああ」

面倒くさそうに振り返った少年は、白薔薇の手の中のパスを見て忌々しそうに顔を歪める。

「いらないよ、そんなもの。必要なら、あんたにくれてやるよ」

「そうですか。それはありがとうございます。……ですが、これはもともと私たちのパスです」

そう言った途端、少年ははつと顔をあげた。まだ幼い少年の表情に、様々な感情が瞬

時に横切つては消えていく。予想外の言葉を投稿かけられた驚愕。罪を暴かれた羞恥、そして罪悪感。刑務所へ入れられる可能性への恐怖や謝つてしまおうかという計算。目まぐるしい思惑の果てに、少年はまっすぐにアセルスと白薔薇を見つめた。それは、どこまでも純粹な瞳だった。誤魔化すでも怒鳴り散らすでもなく、逃げも隠れもせず、かといつて媚びへつらい情けや憐れみを乞うわけでもなく、少年は自らの罪を暴こうとするものへとただ潔く対峙した。

「……」

少年は何も言わなかった。口をきつと結んで、ただ白薔薇姫を見つめ返している。

「ご安心を。返してもらえさえすれば、私たちはそれで良いのです」

その言葉に少年は緊張の籠が緩んだようにほっと一息つき、——そして安心してしまった自分への嫌悪に顔を顰めた。

「ねえ……きみはどうしてこのパスを捨てたりしたの？ 銀河特急に乗れるのに。きみは銀河鉄道のことを知っているからこのパスを盗んだんでしよう？ だつたらなぜ？」

アセルスが静かに尋ねると、少年は俯いてジャンパーの端をぎゅうと握りしめた。少年はしばらく葛藤しているようだったが、やがて意を決したようにして口を開いた。

「機械の体が欲しかったんだ。こんな貧しい星ではいくら働いたって裕福にはなれない。ぼくのおじさんは鉄道の技師だったから、たまたま銀河鉄道のことを知っていて、

よその星から来る旅人がどれほど素晴らしいものを教えてくれた。銀河鉄道に乗れば……終点のアンドロメダにさえ行けば誰でもタダで機械の体が貰える。そうすればお腹を空かせることも、いつか死ぬことに怯えることも無い。自分のやりたいことをやって、永遠に生きていけるんだ。そのために……ぼくは……でも……」

口ごもりながら少年は悔しそうに眼をぎゅゅとつむり、絞り出すように言った。「逃げ出してみても結局なんともならないと思ったから……」

少年は、自分自身に対して腹を立てているように言葉を吐き出していく。

「ここで仕事があまくいかないから……ここでできないことはよそでもできない。友達や恋人を捨てて逃げるのは卑怯だと思って……」

涙をこらえるように少年は夜空を見上げ、強張った頬の奥で歯を噛みしめる。

「よくわからないけど……ぼくはぼくの目的のために最後まで頑張るべきだと……そのために男に生まれてきたのだと思って……それで……」

「……」

黙って少年の話を聞いていたアセルスはため息をつき、疲れたようにベンチへ座り込んだ。

「ねえ、ぼく」

「ぼくじゃない。子供扱いするな。俺は男だ。警察に行くと言うなら行くさ。俺はそれ

だけのことをした」

「……うん、そうだね。ごめんよ。きみは——あなたはちゃんとした一人前の男だ」

アセルスは少年の両手を包み込むようにして握り、真正面からその顔を覗き込んだ。少年は顔を赤らめて視線を反らす。アセルスは構わずに語り掛けた。

「あなたのやったことは間違ったことだし、パスを盗まれたことはとても腹立たしいことだった。……でも、それを責めたりはしないよ」

「なぜ？ そんなことをしてもらおう謂われはない」

「なぜかな？ 私にもよくわからない。……だけど、あなたの態度はとも立派だったと思う。不思議な話だけど、どちらかといえば私はあなたの態度を見て感心しているよ。うな気がする。……あなたがパスを手放してくれて助かったよ」

「あんた……変わった人だな。やつぱりあんたも銀河鉄道でアンドロメダまで行くのかい？」

「いいや……私は違うよ。こっちの白薔薇もね」

答えて、アセルスは不思議そうに言う。

「機械の体……か。それって、そんなに大切なものかな……？ たとえ永遠の命があったって、機械になれば何かを食べる喜びもない。人と人が触れ合う時の温かみも何もみんな忘れてしまって、それで幸せだと言えるのかな……？」

「……俺にはわからない。でも、手に入れてみなけりやわからないさ。それがいつになるかはわからないけど、いつかきつと俺は手に入れて見せる」

「……そう。それなら私は……あなたの『夢』が叶うことを祈っておくよ」

アセルスは少年へ片手を差し出した。少年はその手を見て躊躇っていたが、おずおずと手を伸ばし、誓いの握手を交わした。

去っていく少年の後ろ姿を眺めて、白薔薇姫はぼつりと問いかける。

「よろしいですね。アセルス様」

「うん」アセルスは頷く。「いいんだ。きつとあの子は、ずっとまっすぐに生きていくし、足立さんと親友になるかもしれない。そんな気がする……」

呟いて、アセルスははっと思い付いた。列車の発車までもうあまり時間も無い。急いで駆け出したアセルスは駅の売店でカップラーメンを買えるだけ買った。この星に来てからアルバイトで稼いだ金の残りでは、たいした量を買うことはできない。それでも両手に抱えられるだけ抱えて、下宿館へとアセルスは走った。みなが寝静まった下宿の廊下を軋ませながら階段を駆け上り、足立の部屋の前へと辿り着くと、カップラーメンを置く。こんな深夜だ、足立も夢の中にいるのだろう、大きないびきが扉ごしに聞こえてくる。

「アセルス様。お気を付けください、もう時間が」

白薔薇姫の警告に「わかった」とアセルスは頷いた。いまさら足立を叩き起こし、長々と別れの辞を述べるだけの余裕は無い。だが、やはりこのまま黙って去るといふのはどうしても嫌だった。

「足立さん！」この星の住人がよくそうするように、大きな声でアセルスは扉の向こうへと呼びかける。

「あなたのことは一生わすれません。あなたがくじけず頑張るように、私も……たとえどこへ行くべきなのがわからなくても、どんな生き方をするべきなのが見えなくても、私も頑張ります！ だからあなたも、お元気で！ ……あと、最近は冬のわりに暖かかったかもしれませんが、これからはきつと寒くなりますから、風邪をひかないように気を付けてください！」



……ふと、誰かに呼ばれたような気がして足立太は目を覚ます。扉の外で、誰かが何かを叫んでいる。

……こんな夜中に、何を叫んでいるの？

ぶつくさと思痴をこぼしながらあくびを零し、枕もとの眼鏡を手さぐりに見つけると

足立はよたよたと自室の扉を開けた。するとそこには、カップラーメンの山ができてい
る。

「……何ね、これは」

訳も分からずに茫然としているうちに、先ほどの声がアセルスだったことによろやく
気付いた。

「二宿一飯の恩義を感じてめぐんでくれたんか……ありがたくくおう」

大家のおばさんを叩き起こし、ラーメンのお湯を借りに行くとアセルス達は突然下宿
を出ていくことになったのだという。

「こんな夜中にいきなり、ねえ、どうしたのかしら」

「さあ。おいどんにもわからん。もしかしたらソ連の秘密警察か何かが追ってきたのか
もしれんばい」

「寂しくなるねえ……」

「……」

大家の言葉に、足立は黙って頷いた。出来上がったカップラーメンを持って自室へと
戻り、窓辺に腰かけて夜空を見上げる。寒空の下で食べる熱々のラーメンは格別だ。ず
らずと音を立てて麺が喉元を通り過ぎていく。

空には月が輝いている。いつかアセルスと出会った夜、彼女とこうして空を見上げて

星の話をしたのだったか。

「あげん真面目においどんの話ば聞いてくれた人もおらんかったもんねーあせるすさん……あー！」

足立の見つめるその先で、星々のきらめく夜空の彼方を劈いて一筋の煙がたなびいていく。雲ではない。眼鏡の汚れでもない。それは汽車だ。……目の錯覚だろうか？慌てて眼鏡をはずし、目をごしごしとこすつてみても結果は変わらない。汽車は夜空を悠々と進む。力強く、けれども流れるように優雅に。

「あせるすさん、あれに乗っていったんじゃないのかね……」
囁いて、足立はもう一度ラーメンをずるりと啜り上げた。

「……あの星が『明日の星』と呼ばれるわけがわかったよ、白薔薇」

列車の窓から足立のいる星を眺めて、アセルスは言う。

「あの星の明日はきつと素晴らしい。だって、あの人やあの少年が頑張っているんだもの」

しみじみと呟くアセルスを薄目で眺め、白薔薇はそつと笑う。

「……パスが返つてこなかった方が私たちも幸せだったかもしれないね。アセルス様」

試すようなその言葉の響きには気づくことなく、アセルスは恥ずかしそうに首を振った。

「……ううん。これでいいんだ」

「どうして？」

「私はまだ……何も知らないから。それがよくわかった。だからもつともつというんな星を見て、いろんな考え方を経験して……そしていつか、自分で自分の生き方を選べるようにならなきゃいけないと、そう思うんだ……だから、この星は優しい場所だけども、この優しさに甘えて旅を終えるわけにはいかないんだ。きつと……」

アセルスは列車の窓から夜を見つめ、ちりばめられたその無数の星のことを考えた。

明日の星には明日の人間が住むと人は言う。いつも夜空には明日を信じる明日の星が数限りなく輝いていると人は言う……。

ちつぽけな下宿館で、足立太は窓から身を乗り出して星を眺めている。

アセルスはいま、夜を駆ける列車の中から銀河に渦巻く星を眺めている。

二人はきつと違うものを眺めている。けれども二人はこうも信じているのだった。自分がこうして見つめている星々の中に、アセルスがいて足立がいて、そしてまたきつと自分のように考え自分のように暮らしている人がいるのだろう、と。

第二十一幕　そして紅よ運命と踊れ

拍節機は幾何^{きか}を追う。

それは永遠を求めるように飽きることも変わることも止まることもなく時を刻み続ける。

かちり。そしてまた、かちり。人間の骨が折れる時の音。かちり、そしてまたかちり。旅の途中、立ち寄った土産物屋で私はちっぽけな拍節機を視た。どうしてそんなものがあつたのだろう。観光客は動物の置物や食器に目を向けるばかりで、店の隅に置かれた拍節機など見向きもしない。私がある存在に気づいたのも、私自身が拍節機のように小さな体をしていただけに過ぎない。

でも、私はそれを見つけた。私があるを見つけたのだ。屈みこみ、顔を近づけた拍子に拍節機が突然動き出して思わず後退る。それからおずおずと近づいて、首を傾げたまま、これは一体なにかしら、まじまじと覗き込んだ。目盛りのついたガラス板に針が取り付けられている。その先に錘の取り付けられた針は左右に首を振り、その度にかちかちと音を立てる。その音を聞いていると、なぜだか理由もなく気分が落ち着いた。瞼が重い。この身をゆっくりと横たえ、ただ静かにこの心を手放して眠りにつきたい気分

なる。不思議な機械仕掛けだ。

それが何なのかはじめ私にはわからなかったが、さんざんに頭をひねってようやく思いついた。そう、これは『永遠』だ。飽きることも変わることも止まることもなくただ決まった節奏だけを繰り返す機械。永遠に幾何を追う、そう定められ生み出された小さな奴隷。そこに何の価値があるのかはわからないが、おそらくこれは『永遠』というものを表現した芸術なのだろう。

人間というものは本当にくだらけなものをつくる種族ね。

私は微笑み、うっとりとして拍節機を見つめる。

ほんのつかの間ではあったけれど、私はニンゲンが作ったものに心を奪われた。それが拍節機メトロノームと呼ばれる演奏のためのテンポを計る道具であることを知っても、私の気持ちは変わらなかった。

なぜ、そんなものに気を許してしまったのだろう。理由がわかったのはずっと後になってからだ。拍節機が刻むリズムはこの胸の音によく似ていた。拍節機の律動は心臓の鼓動そのものだ。

……いや、それも違う。拍節機の音が鼓動に似ているんじゃない。私の心臓の音が拍節機に似てきているのだ。

どうして気が付かなかったのだろう。

どれだけそれを厭うても、この胸をくり抜いて取り出すわけにはいかない。人は、妖魔は、心臓の鼓動から逃れることはできない。

いつしか私の耳はしつこく刻み続ける拍節機に支配されるようになっていた。寝ても起きてもあの音が、かちり、そしてまたかちりというあの機械的な音が耳の奥にこだまして離れない。

拍節機は幾何を追う。

それは永遠を求めるように飽きることも変わることも止まることもなく時を刻み続ける。

何も変わらない、ということ。愛することも愛されることも、何一つ変わることもなく永遠を超える種族。それが、機械仕掛けのロボットであることを私は知っていた筈だったのに。

私の心臓は日増しに機械仕掛けになっていく。そうして、私はようやくやく悟った。見るに能わぬ者、邪妖という存在はこうして生まれるのだと。

私の名は紅。半妖アセルス様に手を引かれて私は旅をした。けれども——ああ、本当にどうしてなのだろう。私は何も変わることができずにいる。夢を抱くことも、自らを好きになることもできないまま、ただ白薔薇という毒がアセルス様を犯していくのを指をくわえたまま見守っていることしかできない。私の心臓はいつしか機械のようにな

だ決まった拍動だけを刻むようになり、私は自分が真に邪妖に成り下がりがつつあることを認めないわけにはいかなかった。

かちり、そしてまたかちり。呪いのようにこだまするあの音が、私を静かに機械へと変えていく。

長く、とても苦しい時間が過ぎた。クーロン、トリニティ、マンハッタン——そして京へと。様々な星を旅して、ようやく私はあの星、『ミーくんの命の館』で答えを見つけることができた。私が何をすべきなのか。私に何が残せるのかを。

拍節機の音が聞こえる。今ではそれが、私を急かしているようにも聞こえる。——かちり。ほら今だ。……そしてまた、かちり。ほらまた今。かちりと音がするたびに、私は足を踏み出そうか踏み出すまいかと考える。『いつ』が良いだろう。いまかしら……。ああ、また時を逃してしまった。いま一步踏み出していたら、それで終わっていたかしら。かちり。ほら今。そしてまた、かちり。ああ、ほら。いまなら上手くできたのに。死へのカウントダウンはMM:60で刻まれる。

とても簡単なことだった。ついに決戦を迎えたアセルス様と黒騎士セアトが激しく剣を交えている。でも、アセルス様は勝てない。私はそれを知っている。だから、私はほんの少し足を踏み出すだけでいい。捧げものはここにあるのだから。

降り立ったヨークランドの平原で、私たちはとうとうセアト達に追いつかれた。両者

が睨みあうなか、私の幼い主はとんでもないことを言った。「セアトは私が倒す。イルドゥンはハウゲータさんたちを」と。当然、私と白薔薇姫は血相を変えて反対する。従騎士が弱いとは言わないが、その主である黒騎士とはやはり比ぶべくもない。互いに最強の戦力である黒騎士同士をぶつけないで——。ところが忌々しいことに、当のイルドゥンだけが「それでいい」と頷いた。

「それがお前の選択か、アセルス」

「……うん」

緊張感を滲ませてアセルス様が頷く。

「これはお前の旅だ。アセルス。いちいち誰かに頼らなければ道を切り開けないのなら、どのみちお前はおしまいだ。手は貸してやる。……だが、やはり最大の敵はお前自身で倒さなくてはな」

満足げに答えるイルドゥンに、アセルス様は真剣な目をして答えた。

「わかつてる。白薔薇と紅をよろしく」

「誰に物を言っている」

剣を構えたイルドゥンがセアトの従騎士たちと対峙する。私も加勢しようとしたが、実際のところその必要はまるでなかった。

——従騎士ごときが、この俺を阻む気か？

恐れながらイルドウン様。我々の主は黒騎士セアト様。そして主の命は絶対なので
す。

……つまらん台詞だ。

いくらあなたが強かろうと我ら三体がかりでなら……！

お前の言っていることはつまりこういうことか？ 三体一でなら黒騎士にも勝てる、
と。セアトの底が知れるな。口の利き方には気を付けろ、三下。その言動はお前の主を
も愚弄する。黒騎士セアトもそこまで弱くはなからう。

戦いの決着は一瞬でついた。流水と化したハウゲータをいかなる技をもつてしてか
両断し、鳩尾をつかれたアルキオネが悶絶し、最後に残ったウロネブリは涙をぼろぼろ
と流しながら無表情のイルドウンに最後の抵抗を見せる。

「お、お前なんか怖くない……怖くないぞ……！ ボクは……セアトくんのためなら
……！」

「黙れ」

押し殺した恫喝にびくりとウロネブリは震え、格上の妖魔が発する重圧に泣きじゃく
りながらも懸命に抗う。とうとう立ちあがることもできなくなったウロネブリは鼻血
塗れの顔でイルドウンの足にしがみついた。

「いかせない……いかせないもん……」

うんざりした顔で見下ろしていたイルドゥンは小さく舌打ちをし、その腹を強かに蹴り上げて気絶させた。

「イルドゥン、急ぎアセルス様に加勢を！」

「加勢はしない。セアトはアセルスが倒す。そう言ったはずだ」

「な、何を言っているのですか!?! 従騎士たちを無力化したのなら、誰が誰の相手をするかなどという問題ではないでしょう! 戦いとはそういうものです」

「戦いではない。旅だ」

「た、び?」

「アセルスが自分で決めたことだ。他者に舗装させた道を歩いて、そんなものを旅と呼べるのか? 手はもう貸した。あとはアセルス次第だ」

「馬鹿な……」

吐き捨てて、私はアセルス様とセアトの戦いに目を向けた。妖魔化したアセルス様はセアトの繰り出す数々の兵器にも臆することなく剣を構え、懸命に凌いでいる。よく戦っている。だが、やはり——明らかに分が悪い。次第に手数で押され、防戦一方になりつつあるアセルス様をばらばらと見守りながら——しかしその心の中で私はいつしか微笑んでいた。

ああ、やっとこの時が来た。

だって、仕方がないことだろう。

このままでは死んでしまうのだ。

仕方がない。

助けなくてはならないのだ。

だから――、

私は血飛沫の舞う戦場へと躍り出した。僅かな怯えも躊躇いもなく、薄ら笑いさえ浮かべてアセルス様の前に立つ。そして……ああ、そう、何だっだろうか、次に口にするべき台詞は……そうだ、きつと、こんな具合だろう。

「いけない！ アセルス様……！」

いままさにセアトの剣がアセルス様の胸を貫く――その瞬間、飛び出した私は彼女を庇うように立ちはだかった。妖魔の剣が鈍い音を立てて私の肺を貫いていく。目の前でセアトが驚愕に顔を引き攣らせている。……いい気味だわ。さんざ迷惑をかけたしつこい追手。お前などどうでもいいの。だって私は振り向かなければいけない。血を吐き、涙ながらにこう言わなくてはならないの。アセルス様。ご無事で何よりです。そうして……。

そうしたらきつと、何もかもが報われるわ。私を抱きしめて、愛していると行ってくられて……、数えきれない感謝の言葉、悲しみの言葉を口にしてくれる。私を見て。私だ

けを。……そう、あの薄気味悪い白薔薇のことなど、きつとすぐに忘れてくれる。私という犠牲は消えることのない楔となつてアセルス様の魂に打ち込まれ、それは永遠に残るだろう。夜ごと疼いて熱を持ち、彼女の心を占有してしまふ。なんて美しい物語だろう。誰からも忘れ去られていたこの私が、焼却炉の紅が、オルロワージュ様の愛し子のために散つていく。誰かのために命を投げ出し、守るために死んでいく。それが結末だと言ふのなら悪くはない。

振り向こうとして、私は倒れた。体中が痺れて上手く動かない。いけない。震えながら弱々しくアセルス様に手を伸ばし、懸命に彼女の名を呼んだ。

……ああ、温かい。アセルス様が私を抱いてくれている。大声で泣き叫びながら私を抱きしめ、紅、どうして、と何度も何度も繰り返している。なんて心地良い響きかしら。私は血にむせながらうつとりと目を閉じる。その途端、アセルス様はひととき大きく叫びをあげた。嫌だ、紅、死なないで！

ありがとうございます。アセルス様。私の死を悼んでくれるのですね。私のことを覚えていてくれるのですね。ありがとうございます。それでいいのです。それだけで私には十分です。紅は、それだけで死んでゆけます。

体から力が抜けていく。……そうか、これが死というもの？　なんだか不思議な感覚。……でもいいわ。私は満足しているもの。……そうだ、でも最後にもう一度だけ、

アセルス様の顔を見ておきましょう。どんな顔をしているかしら。きっと大粒の涙を零しながら、心配そうに私を見ていて下さるに違いないわ。さつきは傷が痛んでよく見えなかったから、最後にもう一度だけ、ご主人様の顔を見ておきたいの。

私は最後の力を振り絞って瞳を開き、アセルス様を見つめた。そして――、

……。

……。

……。



紅、という妖魔について語るならば、末期の彼女はとうに妖魔たる自負を失っていた。オルロワージュの寵愛を失い、ファシナトゥールで焼却炉の番人に甘んじていた屈辱。そしてアセルスに手を引かれ旅に出たにもかかわらず、当のアセルスは紅ではなく白薔薇ばかりを見ているという不条理。もはや自らを愛する者などこの世には存在しないのだとそう悟った時、妖魔紅は瞬く間に邪妖へと堕ちていった。小人と化した姿もますます陽炎のように揺らぎ、弱々しく明滅する。もうどうしようもない。どこにいくこともできない。だから彼女は、笑って死んでいくことにした。あの星、『ミーくんの命の

館』でそう決めた。美しく死のう、と紅は思った。だからアセルスの身に危険が迫ったその時に、迷うことなくその身を投げて盾となった。盾？　しかし盾になどなれるのだろうか。小人の姿、それも邪妖となり存在さえも怪しくなりかけている紅の体に、黒騎士の剣を受けることなどはたしてどうしてできようか。

……。

……。

答えはとても簡単だ。いま、紅の体はかつての姿を取り戻している。メローペと呼ばれ殺戮を繰り返していた炎妖の頃、王の寵愛を一心に受け、残酷なその気性のままに荒れ狂っていた頃と同じ姿。アセルスよりも少しだけ大きく、燃え盛るように美しい肌をしている。

それはなぜか。

最後の最後に紅は笑った。自分の生まれた意味を知った。自分の意味を自分で決めた。アセルスという女を守ることができて満足だと。

だから紅は元へと戻った。邪妖ではなく妖魔としての本来の姿へと。

死にかけだから？

違う。

満足したから？

違う。

最期に紅が手に入れたもの、その名を人間世界ではこう呼んでいる。それすなわち、

——自己愛、と。

紅は歪な形で自分を愛した。今際の際、アセルスの腕に抱かれながら心の底でそつとほくそ笑んでああ自分はなんて美しいのだろうと陶醉している。愛しているのはむしろアセルスなどではない。紅という名の妖魔を愛し、自分という名の物語を愛している。自己陶醉の悦楽に頬を歪めて紅は自己愛を手に入れ、それによって妖魔としての自らを取り戻した。そして――、

紅は最後の力を振り絞って瞳を開き、アセルスを見上げた。アセルスが泣いている。顔をくしゃくしゃに歪めて泣いている。その悲しそうな顔を見た途端、どうしてだろう、喜びに満ちていた心が不意に痛んだ。薄汚い自己陶醉は風船がしぼむように一瞬にして醒め、紅はふと、我に返った。

自分は夢でも見ていたのだろうか。

そして思う。なんて醜い泣き顔だろう。それでオルロワージュの子だなんて嘘だろう。

……ああ、自分は死ぬのか。こんなところで。本当にどうして、自分はこんなところまで来てしまったのだろうか。大人しくあの焼却炉でうとうととしていればこんなこと

にはならなかったのに。まったく馬鹿馬鹿しい話だ。

……認めよう。この女は愚かだ。この女の語る言葉は、何らの力も持ちはしない夢物語だ。こんな女の口車に乗せられてあの素晴らしい妖魔の世界から星間世界へと迂闊にも落ちてしまったその挙句がこれ？ 笑わせてくれる。

白薔薇の言うことももつともだ。この世のどこかに居場所を探そう、フロンティア辺境を目指そうだなんて、そんなものがどこにも存在しないことなど、よくわかつていた筈なのに。

そうだ。本当はわかつていた。夢や希望を求めて足を踏み出したんじゃない。この子なら私を殺してくれる、そう思っただけだ。居場所なんかじゃない、旅の果てに求めていたのは死に場所なのだ。

これがその結末。アセルスの言葉などしよせんは絵空事。愚かな半妖が聞こえのよ言葉で自らを騙して、針の城から逃げ出しただけ。

死へと近づけば近づくほどに冷徹に冴えていく思考の最中で、舞い降りたアセルスの涙がぼつりぼつりと紅の頬を伝う。

人間の——半妖の涙というものは熱いのだな、と紅は思う。泣いている妖魔など見たことはないし、誰かの涙に触れることはそれが初めてのことだったから。

熱い。……温かい。炎妖である彼女の肌にアセルスの熱が静かに溶けて、そして紅は考える。

……でも、そんな愚かな女に、アセルスに私は何をしてやれたろう。

『——そつとしておいて欲しいならそんな顔をして泣くなよ。寂しそうに涙を流しておいて感情移入されたくないなんて勝手だよ。そんな風に泣かれたら、思い切り抱きしめて、頭を撫でて、あなたのことが好きなんだって言つてあげたくなる』

アセルスは……私を連れ出してくれた。私に優しくしてくれた。この両手をぎゅつと握り締めて、手の中に小さな夢を預けてくれた。それはむなし希望だったかもしれないし、甘ったれた物語だったかもしれない。

それでも、私がひとときの救いを得たことは嘘じゃない。

『今ここにいても辛いだけなら、どこにも居場所が見つからないのなら……。ここではないどこかの、まだ見たことのない星の辺境地にいつか生きることのできる場所を探そうよ。私はそのために来たんだ。このファシナトールを抜け出して私が望んでいられる場所を作り出すために旅をするんだ。だから紅、一緒に行こう』

「……………」

紅はよろよろと立ち上がる。顔を上げ、セアトを見つめ、——そして自らの剣を抜く。別にアセルスが正しいとは思わない。彼女のことを今さらのように焦がれる気持ちになるわけでもない。だがそれでも、まだ死ぬわけにはいかない、と紅は思う。まだやらなければならないことがある。

紅が掲げた剣の切っ先の震えを目にして、対峙するセアトは狂人を宥めるかのようにおそるおそる口を開いた。

「紅姫……動くべきではない。すぐに治療すれば助かる。いや、いまずぐに治療しなければ助からない。私にオルロワージュ様の寵姫を傷つけるつもりは」

「でもお前はアセルス様を殺すのでしょうか？」紅は静かに答える。「だから私が戦うわ。イルドゥンは役には立たない。アセルス様では勝てない。……ならば、私が戦う以外にありますか？」

「しかし」

と口を濁すセアトの背後から、腹の傷口を押さえながら血まみれのアルキオネがふらと駆け寄り、紅の状態に気が付いてはっと息を飲んだ。

「そんな体で……立ち上がってどうするのですか？」

心配そうに口走り、それからはっと表情を険しくさせ、咎めるようにアルキオネは言う。
う。

「あなたに何ができるといいますか、紅姫」

「彼女は」紅は俯いたままぼそりと呟く。「私に優しかったわ」

「え？」

「アセルスは私に優しくしてくれました。ファシナトゥールの焼却炉で誰からも忘れられ軽

んじられていたこの私は見つけ出し、救い出してくれた」

「だから？ それが何だと言うのですか」

「わからない？ 私はそれが嬉しかったの。それが全てなのよ。だから……」紅は血の気の失せた顔で弱々しく微笑み、そして静かに吠えた。「お前たちはここで滅ぼしておかなくてはね」

信じがたいという表情を浮かべながら、しかしアルキオネは警戒心を強めるように後退り、おそるおそる問いただした。

「そんな瀕死の状態で、オルロワージュ様の寵愛を失ったお姉さまに我らが倒せると？」
「貴方を炎妖として調教したのが誰だか忘れてしまったようね、アルキオネ」

「……」

冷たいその言葉にアルキオネは僅かな怯えを浮かべ、虚勢を張るように大げさな笑い声をあげた。

「あれはもう過去のこと！ 何も知らない駆け出しの妖魔であったあの頃と、セアトに仕えるいまの私とは違う！」

「そう思うのなら、かかってくればいい」紅はまっすぐに相手を見つめて言う。「すぐに教えてあげる。貴方が誰に戦いを挑んだのかを」

深く、息を吐き出した。肺の中の酸素という酸素を残らずすべて投げ出すようにして

吐き出し、ほんの少しだけ息を吸った。

そして言う。

「我が名は紅。ファシナトウル第八の寵姫にして、半妖アセルスに連なる深紅の炎。たかだか黒騎士風情の従騎士など、この手で灰にしてあげる」

そう告げた瞬間、大気はどよめき、周囲はたちまちにして茹だるような熱気を帯びた。地平の景色が陽炎に揺れ、空気中の水分が蒸発しあらゆるものが涸れていく。ばかり。音がして、紅の肌が炎に溶ける。今にも倒れそうに震えながら、唇から血を流して紅は笑う。

「アセルス様」紅は言った。「貴方と出会えて良かった」

「駄目だ、紅……」

絞り出すようなアセルスの叫び声を背後に、紅は幽鬼じみた足取りで駆け出した。それは最後の舞이었다。炎の妖魔、紅が踊る死の舞踏。燃え盛る業火で全てを焦がし、息を吸うだけで肺を焼く地獄を描き出すための。

命の最後の一滴までもを絞り出し、死に物狂いで紅は剣を振るう。哄笑をあげ、残虐に頬を釣り上げ、獲物を狩るために炎の息吹を吹き付けていく。

「これは……。このままでは全員滅びてしまう……！」

全身を焼かれる痛みに呻きながら、セアトはなおも躊躇うアルキオネへと必死に叫

ぶ。

「でも……！」

「やるしかない……！ たとえ相手が彼女であつたとしても……！ アルキオネ！」

言葉なく、しかしこくりとアルキオネは頷いた。その瞳に涙を滲ませながらも剣を抜き、紅へと打ちかかる。怯えを滲ませながらアルキオネは紅の剣を受けるが、しかし瀕死とは思えない力に吹き飛ばされる。

紅はぜいぜいと息をしながら、その鋭い眼光で敵をねめつけ、熱波を放つ。高熱に取り巻かれたセアトが身を振り、その隙を逃すまいと紅が剣を振り上げた。主の危機にアルキオネが血相を変える。

「駄目っ！ お姉さま！」

「死ね、セアト！」

かつては姉妹と呼ばれたアルキオネと紅、二体の妖魔が絶叫し、——そして、最後の舞いは終わりを迎える。セアトの首元寸前までうち込まれた妖魔の剣。しかし、紅の力はそこで力尽きていた。呆気にとられたように自らの腕を見つめ、そこにもはや何の力が込められてはいないことに気づいて、「ああ」と深く呻き、紅は静かに血を吐いて頹れた。

「お姉、さま……？」

信じられないものを見るようにアルキオネが震える声で囁き、セアトは九死に一生を得た恐怖に顔を引き攣らせながら茫然としている。

「紅！」

叫び声を上げて飛び込んできたのはアセルスだった。慌てて紅の背を抱き留め、瞳を閉じた彼女に呼びかける。だが、紅はもう何も見てはいない。閉じた瞳からささやかな涙を流し、紅は消え入りそうな声で別れを告げた。ごめんなさい、と彼女は言った。ありがとう、と彼女は言った。もつとあなたと、そう言い、そしてまたこうも言った。

ああ。

死にたくない。

アセルスの腕の中で、紅の熱が冷めていく。炎妖である彼女の体はすっかり冷たくなって、そして何も言わなくなる。イルドウンが顔を顰め、アセルスの背後で白薔薇が笑う。アセルスはそれきり何も言わずに、紅にそつと頬ずりをしてその体を大地に横たえた。

もう言葉は要らなかった。

アセルスの髪は瞬く間に濫りがわしく伸び、その色は妖魔の蒼へと変わる。アセルスの足下には、いつしか深紅の具足が生まれている。燃えるように紅い妖魔の具足を高らかに踏み鳴らし、激昂に震えるアセルスの瞳が瞋恚の炎を宿し爛々と輝く。

「セアト……アルキオネ……」

アセルスはゆつくりと口を開き、静かに告げた。

殺してやる。

第二十二幕 永い夜を超えていく

針の城を出たばかりのアセルスはまだ、世の常識というものを何も知らない。それは仕方のないことだろう。早く独り立ちをと考えてはいてみてもしよせんは齡17の小娘、高等学校で数学や歴史を学びはしても生き方そのものを体得するにはまだまだ遠いその身で彼女は妖魔の国へと連れ去られてしまったのだから。妖魔社会においてはまるで白痴も同然だ。右も左もわからない。持ち合わせといえは白薔薇姫の身に着けた金品だけ。日が暮れば宿を探すのが旅人の至極明快な原則というものだが、携帯端末すら持ち合わせていないアセルスは宿を探すことさえ困難に感じる人があつた。人に聞けば何とかなるだろうという安易な期待はあまりにも浅はかで、浮浪児に金をたかられて連れていかれれば危うく売春宿に売り飛ばされそうになつたことも一度や二度ではない。右往左往と困り切つて影の落ち始めた夕暮れに焦燥感を募らせたアセルスがふと助けを求めるように隣を見やれば、そこにはほら、いつものようににこやかな笑みを浮かべたお姫様がさんざん連れまわされたことを責めることもなく慰めてくれる。

こういうときもありましょう。仕方のない事です。

……ごめん、白薔薇。さっきの人は確かにこつちに宿があるつて……。

それは確かに嘘ではなかったし、善意ですらあったかもしれない。その時、地元の人間が案内した場所は確かに宿だった。しかし、初めて暗黒街クーロンを訪れた彼女たちが辿り着いたその宿はといえば区切りのない広間に雑多な筵が敷かれただけの粗末な宿であった。麻薬中毒者や強盗紛いの荒くれ者たちとまさか針の城の姫君を共に寝起きさせるわけにもいかない。アセルスが力なく項垂れていると白薔薇姫は静かに目を細め、優雅に周囲を見回すとああ、あちらの方ですねと言つて悩みもせず歩き出す。そんなに簡単にわかるものだろうか……しかし白薔薇の言うことなら、と首を捻りながらもおとなしくついていけば、小一時間も探して見つからなかった宿がかくもあっさりと目の前に現れるのだった。

どうして、わかつたの？

屋根の形状や並び方を見ていれば、なんとなく。そこがどのような区画なのかがわかりますから。

へえ、と、間抜けな感嘆符を漏らしてアセルスは自らの無知無力を恥じて身を振る。何も自分が博識であると誇っていたわけでもないが、こうして実の社会に飛び出し旅をしてみても、改めて自分がいかに弱くものを知らないのかが身に染みて理解される。

このままではいけない、と思つた。なぜと言つて、お姫様たちを針の城から連れ出したのは自分なのだ。これは自分の——アセルスの旅なのだ。自分で考え、自分で責任を

取らなければならぬ筈なのだ。——だというのに、気が付けば自分はいつしか白薔薇姫に頼ることに慣れてしまっている。このままではいけない。自分は強くならなければ。

アセルスはよく、つまらない失敗をした。自分がすっかりしなければと張り切るあまりに空回りして、かえって迷惑をかけることも多かつた。それが楽しい、と笑ってくる紅もいたが、しかし何もかもを笑って済ませてしまうほどアセルスはまた楽天家でもないのだった。

白薔薇姫は常に正しい。どんなことでも知っている。……少なくとも、そのように見える。本人は「自分は長い時を生きているから」と謙遜しているが、紅に比べれば随分と世慣れしているようだ。ぜんたい、この麗人はどのような生き方をしてきたのだろうか。

たとえば、金があることを安易に示すことは、危険を招くといつて安宿の主は嫌うこと。

たとえば、クーロンのようなスラム街、星間船発着場の近くには、必ず戸籍を売買している仲介者がいること。

彼女の知恵がなければ早々に身ぐるみを剥がされ、路頭に迷っていてもおかしくはなかつた。アセルスが彼女に傾ける信頼は半ば崇拜めいていく。

シユライクでオルロワージュによって連れ去られ、12年間眠っていたアセルスには既に叔母の手によって失踪宣告が出され、戸籍上は死亡したことになっている。星間世界における身分証明を持たないアセルスは当初、まともに職を探すことさえ困難だった。

困ったときはなんでも白薔薇に聞いた。恥ずかしいことだとは理解していたが、新しいことを知ることは嬉しかったし、そして何よりも彼女の頼もしさを味わうことが嬉しかった。

夜が来る。暮れなずむ世界に影が落ち、この世を黒く染めていく。地平線の向こうに太陽が沈む。旅の途上、ただでさえ見知らぬ町の風景は夜によってなおさらよそよそしく、不気味にさえ見えてくる。

もう、宿を探さなければ。そう思いあたりを見渡して、しかしアセルスはため息をつく。

時に、周囲はまったくの荒野で。時にはあまりにも荒廃とした工場地区ばかりで。時には延々と続く海岸線の途上で。宿は、無い。人家さえも見えない。そんな場所ですと心細くなり、今夜は泊まれるだろうか、泊まれたとして、針の城の追っ手はやってこないだろうかと考え思わず呻いてしまう。日が暮れる。夜が来る。太陽の眼が届かぬ町は指数的に危険度を増していき、騎士気取りのアセルスは無駄に心を逸らせる。闇の帳

に隠された夜の街並み。あの枯れ落ちた街路樹の裏からは刃物を持った悪党が湧き出てくるのではないか。あるいは人攫いや変質者が待ち構えているのではないか。緊張に舌は強張り、鈍い不安が胸を貫く。旅を始めたばかりのアセルスは夜を知らない。光の差さぬその場所で何が行われているのかを知らない。無知が増大させた恐怖にじつと耐え、懸命に虚勢を張ってアセルスは足を進める。何しろこれは自分の旅だ。自分が一言、「もう嫌だ」と弱音を吐けばそこで終わってしまう旅なのだ。

……やつとの思いで宿を見つけたアセルスは、宿代の交渉に四苦八苦しながら宿泊を決める。女三人の旅に奇異の目を向けられ、時には性的な揶揄を投げられながらぐつと堪えて部屋へと急ぐ。部屋に入ったとて安心はできない。鍵は壊れていないか、もしもこの時の脱出経路の確認などやることは山ほどある。夜が来る。今日も一日生き延びることができた、と思う……。しかしこの場所は、この星はどうにも自分が求めていた場所ではない気がする。自由になりたいと、自分が自分らしくいられる場所を求めて旅に出た筈なのに、どこにもその場所を見つけれられないでいる。だってそうだろう、気を抜けば針の城の妖魔が襲い掛かってくるのだ。のんびりと暮らしていくにはどうにも不都合だ。かといって誰にも追われることのないような場所というのはいかにも危険であつたり困難な旅路を要するものだ。夜が来る。ようやくの思いで床に就きさあ明日はどこへ行くこうと考えながら心のどこかでアセルスは煩悶を繰り返す。自分が自分ら

しくいられる場所。そんな場所は、本当にあるのだろうか。自分が自分らしい、とは、いったいどういう意味なのか。そんなものどこにもないのではないか。悲しい気分になつたときはたいてい白薔薇姫に視線を向ける。それだけで体の奥に力が湧いてくる。少なくとも、旅をする意味はある。自分はこの女ひとを守っている。そして……いつか、この女を、安らぎのある場所へと連れていく。アセルスは目を閉じる。深い眠りの中へと自らの意識を投げ、魂をそつと手放す。

朝が来る。目を覚ましてアセルスは時々きよんとする。何故、自分はこんなところにいるのだろうか？ 文字通り何も知らない女学生のような気分で、自分はシュライクにいたはずなのに、と不思議に思っている。そのうちにはつと我に返り、ああ、何もおかしくはない、これは途中、旅の途中なのだ、と自分に言い聞かせて歯を噛みしめる。こはシュライクからは遠く離れた場所。帰ろうと思つても容易には叶わない場所。——いや、もとより帰る場所などない。帰る場所はもはやどこにも残っていない。自分はいま旅をしている。帰る場所のない旅。目指す場所の無い旅。あてもなく——果てしなく。途方もなく足を進め地平線のそのまた向こうまでもを超えてなお、辿り着く場所の無い旅なのだ。この旅は終わりを知らずして、いつしか永遠を宿す旅なのだ。

なぜ、人は旅立つのだろうか。今いる場所を捨て、家族も知り合いも何もかもを捨てて、どうしてどこか遠くへ行こうとするのだろうか。希望があるからだろうか。どこかに行

きさえすれば、この場所を逃げ出しさえすれば幸福になれると信じて。けれどもそれは、もしかしたら絶望しているということなのかもしれない。いまここにこうして生きている筈の自分が大嫌いで、殺してしまいたくて、もう誰とも会話をしたくない、慰めの言葉や同情も煩わしいだけで、ああ、とにかくどこか遠くへ行きたい、と怯えているのかもしれない。だってそうだろう。今ある場所を愛するならばただの一步も動く必要はないのだ。自分自身を愛することが出来るなら、何をも変えることなく生きていける筈なのだ。髪形を変えることも、服を選ぶことも、根本的なことを言えばそれは自分を愛していないということだろう。だからすべての旅人はみな心の中に希望と絶望とをぐつぐつと煮立たせた鍋を抱えて苦しみながら地平線の果てへと這って行くのだ。

世界の果て。辺境——フロンティア。そこに辿り着きさえすればきつと黄金を手に入れると信じて、旅人は今日も足を進める。

ある日ある夜のアセルスは極寒の星にいる。夏でも日照時間が四時間にも満たないその土地は、見渡す限りが白い霧で覆われている。人々の吐息や人家の煙、スノーモービルの排ガスまで尽くは凍りつき、冷たく白い霧となつて視界を遮るのだ。足元には這いよる雪と呼ばれる冷たい風が雪を巻きあげて流れ、地平の果てまで吹きすさぶ。極地の星、零下50度を優に下る凍結の土地。追手から逃れるためアセルスたちはムスベルニブルの更に果てでしばらくの時を過ごした。一切を死に覆われた純白の世界はた

だひたすらに清潔にできており、あらゆるものは凍り付いて腐敗することはない。

アセルス達の住む集落を報道の取材班が訪れたことがあった。もちろんアセルスは撮影を断つたが、他の住民たちは意外なことにこれを歓迎していた。彼らの主な収入源が狩猟であることは間違いないが、こうして取材や観光から得る金銭、また文化維持政策としてムスベルニブルの臨時政府から支払われる保護費も重要な財源となっている。取材班はもちろんある程度知識を仕入れた状態でこの氷原に来訪したようだったが、いずれも興味深げな様子で現地民の生活を記録していた。海豹の皮を剥いで仕立てた防寒着やブーツで全身をがっちりと覆った住民は目だけを露出させた状態で外へ出る。吐き出す息や鼻水は瞬く間に凍り付き、口元に巻いたマフラーに短い氷柱が垂れ下がる。燃料の買い出しに付き合うことになったある女性記者は地元民の運転するスノーモービルに乗せられて一時間ほど離れた軍基地まで出かけて行ったが、帰ってきた時、彼女の意識は朦朧としており喋ることすらままならない状態であったという。外部の「人間」の体はこの極寒の地に対応して作られてはいない。その日の気温は零下42度、しかしスノーモービル上での体感温度は実に零下70度にも及ぶ。凍傷になりかけた彼女の顔には黒い斑点がぽつぽつとできており、介抱された後で「来なければ良かった」と彼女が思わずつぶやくのを、同行していたアセルスはずっと見ていた。体調一つ崩すことなく、ただ心配そうな顔をして人間を見ていた。

妖魔の体は寒さに強い。意識を失うような羽目に陥ることはないが、しかしかえってそれが災いし、意識ははつきりしているのに気が付けば体が動かなくなっていた、ということも少なくない。凍傷になるわけでも、寒さに意識を飛ばされることもなく、ただ肉体ばかりが物理的に動きを停めて凍り付いている。

この地に足を踏み入れて、初めて海豹の毛皮を着こんだ時は自分たちがあまりにも不格好で少しだけ笑ってしまった。ぶくぶくと着膨れしたその有様はヒトとタヌキの合いの子にも似ている。けれども氷河に足を乗せて氷が軋む音を聞いた時、恥や見栄といったものはここでは何の役にも立たないのだとすぐに悟った。いくら自分が寒さに強いとしても細胞が凍り付いてしまえば動くことはできない。だから七枚のタイツの上に毛皮の外套や帽子を着こむのは生きていくために当たり前のことでありごくごく自然なことなのだ。獣の脂に火を灯しナイフで乱雑に切り離れた生肉に嚙り付いて口元を血で汚すのもこの地で生きる人々にとっては日常の一部であり、その行為に美しいとか美しくないといった概念を持ち込むことはお門違いというもの。

それは世界の果てと言っても等しい光景だった、とアセルスは思う。凍てついた空気はダイヤモンドのように張りつめ、大地を踏みしめるたびに舞い散る粉雪は死骸から剥がれ落ちる灰に似て。何もかもが静止した凍結世界はそれでいて騒がしく、満ち引きに押し合いする氷河という氷河がせめぎ合い軋むその音は巨人の足音そのものだ。世界

の果ての光景は吹き荒ぶ雪の繚乱。雪花繽紛として乱れ咲くその空隙を不可視の巨人が闊歩する。雪景色に取り巻かれた人はみなその皮を凍らせ、肉はおろか骨に髓に魂までも停まらせて何らの熱も持ちはしない一個の硝子人形となり果てて心無く呆然と海の白きを眺めて立ち尽くすのかもしれない。自分はこの景色をけして忘れはしないだろう。この場所は生まれ故郷のシユライクとも針の城とも違う。これまで旅したどんな場所とも似ていない。だってこの場所には何も無い。どこまでも白くそして冷たく世界が凍り付いていくばかりでそれ以外の一切は存在していない。煩わしいものは何も残されてはいなかった。ただ生きているだけで、馬鹿のように寒さに震えながら雪の暴力に見蕩れていればよかった。美しい、とはつきりとそう思った。けれどもその美しさは、何故だろう、やはりどこか虚ろにも思えた。大自然のすさまじさに歓声を上げ、両手を上げて賛美しながらああ美しいと叫んでこのまま雪にうずもれていくことも不可能ではないような気もしたが、しかしどうしてもその美しさに頷くことはできなかつた。寂しいと思った。隣には白薔薇姫がいた。奇麗だねと言えば彼女が静かに頷いてくれた。それは息も止まるほど幸福なことなのかもしれない。でも。

……ここが本当に世界の果てなのだろうか？ アセルスはそつと考える。確かにここには何も無い。追ってくる妖魔はいない。半妖を利用せんと企むヒト種族もおそら

くはない。自然はあまりにも過酷で、その過酷さゆえにあまりにも平和だ。世界の果て。自分が自分らしくいられるという場所。 フロンティア 辺境。この場所がそうか？——いいや、違う。何かが違う。だってこの場所には、自由はあっても意思が無い。たとえどれだけの平和がこの地に降り注いだとしても、私自身が何かを選び取った結果でなければ平穩を手に入れたとは言えない。でも、だとしたら……。私が望む。私が私らしくいられる場所”とは一体どんなものだろう……。そんなもの、本当にあるのだろうか……。自分自身にさえわかりもしないのに。私は一体なにを望んでいるんだろう。私が欲しがっているものは、一体なんなんだろう。そう考えた。そう考えて、けれどアセルスは口には出さなかった。この旅は自分が始めた旅だ。白薔薇にも紅にも、そんな弱気を見せてしまうのは無責任である気がした。だからその代わりにアセルスは、心の中で呪文のように“わたしが欲しいものは”とそう唱えて隣に立つ女性に視線を向けた。お姫様はやはりヒトとタヌキの合いの子のように毛皮でぶくぶくと着膨れしていたが、それでも雪の中でお白くよりいっそうの透き通りを持って微笑む。オウミの海とはずいぶん違いますね、と彼女は言う。オウミ？ 困惑しながらアセルスは頷く。確かにあの海は黒かった。何もかもが凍り付いて固まったこの氷海とは似ても似つかない。でもどうしてそんなことをいま言うのだろう？ メサルタイムはいまごろどうしているでしょうね。彼女は言う。うん……。アセルスは力なく項垂れる。むかしむかしある

ところに一人の領主がいて一人の領主は一匹の人魚に恋をした。愛した人魚を閉じ込めて一人の領主は悪だつたから、通りすがりのアセルスはきつと正義のヒーローで囚われた人魚を助けてあげた。解き放たれた人魚姫は嬉しそうに尾びれを振って深い深い海の中へと帰っていった。これで良かったんだ。アセルスと思う。望んでもいないのに縛り付ける権利など誰にもありはしないのだと。通りすがりのアセルスはきつと正義のヒーローで、けれどもその隣に寄り添う白薔薇姫はもちろんお姫様であつてけして王子様でなんかありはしなかつたからこんなことを言う。『あの領主はこの水妖をあ、い……』 どうしてそんなことを言いかけたのかアセルスにはわからなかつた。聞きたくなかつた。聞かなかつたふりをした。ふりをしたただけだということとは自分が一番よくわかつていた。だから領主の館を去つた後もしばらくアセルスはオウミにいた。彼を見ていた。若い領主が海に取り込まれ、メイドが止めるのをじつと見ていた。何の責任もとれはしないのにそれでも自分はその有様を見ているべきなのだと思つた。領主が自殺しようとしたところを、自分が引き起こした事件をずつと見ていた。謝ろうとはまつたく思わなかつたし領主がした人魚への行いにはいまだ憤慨してもいた。けれども。

いま、この場所で。凍り付いた海を見つめてアセルスは違ふんだよと心の中で呟いてとうとう白薔薇から目を反らす。私はメサルティムを助けたかつたんじゃあない。私

が助けたかったのは貴方で、助けてほしい助けるべきだという言葉が貴方から聞きたかっただけなのかもしれないんだ。お姫様は恐ろしいお城に囚われて可哀そうだから、自由にならなけりやいけないんだと。

……私が望んでいるものは。

暗い顔をして塞ぎこむアセルスの隣で、白薔薇姫はやはりいつものように残酷な笑みを浮かべていた。

◇

……行くな、アセルス。行けば、余はそなたを追わねばならん。そなたを追い詰め、狩りたて、そして捕えねばならん。

どうして……？ だって私は、なにもあなたを裏切ろうというわけじゃない。ただ私は、私自身の生き方を見つけたいだけなんだ。運命の全てを貴方に委ねたまま、何もかもを与えられて生きるわけにはいかない。私は強くなりたい。だから……。……いつか、ここには必ず戻ってくるよ。それがいつになるかはわからないけど、でもきつと戻ってくる。その時には、もしかしたら貴方のことを「父」と呼べるようになっていくかもしれない。

だから行くのか、アセルス。そなたはまだ下界を理解してはいない。必ず戻ってくる？ 本当にそうか？ いいや、アセルス。あらゆるものは瞬く間に失われてしまうものだ。余の血を享けたそなたでさえ、人の世の害意に晒されればいつその命を失うともしれぬ。余はそなたを失いたくはない。行くな、アセルス。

ごめん……。本当に、ごめんなさい……。

余は何も失いたくはない。それでも行くのか、アセルス？ 余の安寧から紅と白薔薇を奪い去って旅に出ると？

奪う……。そんなつもりはないけど……。白薔薇や……。とくに紅には、外の世界を見せてあげたいんだ。このファシナトウルに閉じこもってばかりいたら、妖魔だっておかしくなってしまう。だから、私は行くよ。

アセルス。

オルロワージュ。貴方が本気になれば、この場で私の自由を奪うことくらい造作もない。……。なのに、貴方はそうしない。どうして？

……旅に出る、とそなたはこうして告げに来た。余がそれを嫌うこともおそらくは承知の上で。ならば、余はそなたを止められぬ。娘が己の成長を望むのであれば父はそれを見守るのが常だ。だが……。アセルス。寛容にも限りと言うものがある。妖魔はいつか全てを支配してしまう。妖魔は何もかもを奪い去ろうとしてしまう。そうでなければ

ばならないのだ。それが、妖魔の——サガというものだからだ。いつか、余はそなたを追わねばならぬ。追わねば、そなたはきつと失われてしまうだろう。余はそれを知っている。奪われるくらいならば奪う。それが余の在りかただ。

ごめんよ……オルロワージュ。貴方のことは、嫌いじゃあない。でも私はそれ以上にきつと——私自身のこと嫌いなんだ。だから、行かなきゃ。

そんな会話を交わしたのはいつだっただろう。ずいぶん昔のことも思える。もう、何も知らなかったあの頃には戻れない。

だってそうだろう。

紅は死んだ。自分のせいで——セアトの剣に貫かれて死んだのだ。

目の前が真っ赤になった。

どこかで時計塔の鐘の音が聞こえる。あの鐘が私を呼んでいる。

ああ、そうだ。

殺してやろう、と思ったのだ。自分にはその力がある。だから殺そうとそう思った。セアト。そしてアルキオネ。こいつらさえ現れなければ紅は死なずに済んだ。

塵にも等しい中級妖魔が、この私の所有物を奪った。その罪は万死に値する。

剣を構え、そしてゆっくりと振り下ろした。それだけでセアトの全身が無数に切り刻まれていく。痛みに絶叫し、その瞳に恐怖が宿る。

……ああ、なんていい気分なのだろう。初めからこうしていれば良かった。

そう、我慢なんてしなれば良かったんだ。正義だの何だのとつまらない価値観に拘泥するから、大切なものを失うことになる。そんなことはトリニテイの基地で理解していた筈なのに。

それにしても、喉が渇くな。血が足りない。

「白薔薇、貴方の血を頂戴」

そう言うと、白薔薇は私を見て目をみはり、ゆっくり後退った。……何をしているの？

「白薔薇」

もう一度——今度は少しだけ力を込めて告げる。すると、途端に疼き出した首筋の傷を押さえて白薔薇が顔を歪める。

「アセルス様、どうか落ち着いて」

「わかっているんだろ」私は言った。「貴方は既に噛まれているんだから、逃れることはできない」

「貴方はいま、感情に飲み込まれて暴走しています。怒りに我を忘れて……正気に戻った時、傷つくのは貴方ですよ」

「聞き分けのない女ひとだな」

私が見開くと、白薔薇は短く声を上げて膝をついた。悲しげに見つめる白薔薇のその口元からは隠し切れない欲情の吐息が漏れ出す。

「いけません……アセルス様……」

もう言葉は必要ないな。そう判断した私は剣を捨て、白薔薇へと歩み寄る。視界の端でセアトたちが逃げていくのが見えた。……どうだっていい。あの程度、いつだって殺せる。大事なのはいまこの私が望むものを手に入れること。時が経つその前に、目の前の全てを支配することなのだから。

「さあ、白薔薇。約束の口づけを」

そつと白薔薇の頤に手を添え、ゆっくりと唇を近づける。

さあ。

愛する者の血液を、この下で存分に味わおう。

舌を伸ばし、吐き出す吐息で白薔薇を虐めながら、ついにこの牙をお姫様の柔肌へ打ち立てようとしたまさにその時――、

忽然と、世界に闇が降りた。空は日の光を失い、踏みしめる大地までもが黒い底なし

の沼に変貌する。

「これは……?」

「……オルロワージユ様……!」

私の腕の中で震えていた白薔薇がはつと顔を上げた。……その姿も、私の見つめるその先で瞬く間に闇の中へと吸い込まれていく。

「なんだ、これは!」

私はこの世の支配者だ。その筈なのに、伸ばしたはずの指先は白薔薇のドレスを掠め空をきる。胸の音が聞こえるほど傍にいた筈なのに。闇が、怖ろしいほどの闇が粘性を帯びて白薔薇を、そして私自身をも飲み込んでいく。

余に逆らう不屈きものたちよ。この迷宮で永遠に彷徨い続けよ。

その言葉が誰のものなのかを、はじめのうちアセルスは忘れていた。けれども臚な記憶を辿り、声の主に気づいたとき、どうしてもその事実が飲み込むことができなかつた。アセルスにとってのオルロワージユは確かに人外、妖魔の王ではあつたけれど話せば言葉の通じる存在だと認識してたからだ。

しかしその声を聞いた瞬間、ぞつとするような寒気が背筋を襲い、気が付けばアセル

スは白薔薇姫と共に迷宮にいた。無数の時計が無慈悲に時を刻む場所、光の差さぬ暗黒の空間に。

「ここは……？」

戸惑いに漏らした言葉に、白薔薇姫が優しく答える。

「アセルス様。目を覚まされたのですね」

「白薔薇……よかった……。そうだ……。紅は!？」

「……覚えて、いらつしやらないのですか？」

「セアトに刺されて、それから……。そうだ、私のために彼女が戦ってくれた……。紅はどこ？ 彼女を助けないと！」

「アセルス様」静かに白薔薇姫は答えた。「彼女は……。紅は私たちを守るために命を落としました。残念ですが……」

「そんな……」

力なく膝を落としてアセルスは呻く。

「あの後……。突然辺りが暗くなつて意識を失い……。気が付けばアセルス様とともにこの場所へ倒れていたのです」

「ここは……？」

「ここは、闇の迷宮と呼ばれる場所です。オルロワージュ様が自身の妖力によつて生み

出した空間。妖魔の君に反した者を罰するための牢獄」

牢獄だって？ 周囲をきよろきよろと見回してアセルスは困惑する。視界の先でぐにやぐにやと奇怪に屈曲した無数の扉が浮かんでいる。どう見てもそれまで滞在していたヨークランドの景色とは違う。

「ここは一体何なの？ どこか遠くに飛ばされたというなら、なんとか星間船を見つけて戻らないと」

「戻ることはできません」

白薔薇姫は動じることなくさらりと言った。

「ここは、既存の星間世界——リージョンと呼ばれる星々の枠組みとは異なる場所なのです。この世のどこでもない場所。妖魔の君が生み出した無辺の地獄……」

「……おかしいよ」

あまりにも白薔薇姫が冷静なので、かえってアセルスは恐慌に舌を上ずらせた。

「オルロワージュはそんなことをする妖魔じゃない。あのひとは話のわかる妖魔だ。こんな乱暴なこととはしない。無理やりに自由を奪うような真似は……」

そう口にして、アセルスは目の前に立つ女性こそがまさに針の城に囚われていた寵姫だということ思い出して口ごもる。

「違うんだ。妖魔が……セアトたちが襲ってくるのだってそれは彼らが私の血を利用し

ようとしているからで、きつとオルロワージュが出した命令とは違っている筈なんだ」
「どうしてそう思うのですか？」

「どうしてって……」

アセルスは信じられない様子で白薔薇姫を見つめるが、彼女はいつものように平然と微笑んでいる。

「私たちは針の城を脱け出してきたのです。妖魔の君であるオルロワージュ様がこれを咎めるのは自然なことでは？」

「で、でも……。貴方はそれをおかしいとは思わないの？ こうして自由を奪われて腹は立たないの？」

「さあ……。私はあの方の寵姫ですから」

「そんな……」

「私たちはこうして自由を奪われました。でも、それ以前に私たちは逃げ出したことであの方を傷つけている。……だとすれば、加害者があの方で私たちが被害者であると言いつける気にはなれないのです」

「そんな……そんなのって勝手だよ。自分がどこにいるかなんて、自分で決めていい筈じゃないか。それを誰かに決められて破ったら罰を受けなきゃいけないだなんてそんなのは間違っているよ」

「ええ……。そうかもしれないね。でも今は、とにかくこの迷宮を探索してみませんか？ もしかしたら、この迷宮を突破する方法が見つかるかもしれません」

そう言うのと白薔薇姫はどちらが上でどちらがしたともつかぬ空間に一歩足を踏み出し、恐れる様子も見せずに歩いていく。

「待つてよ、白薔薇！」

慌てて駆け寄りアセルスが白薔薇姫の方に手を乗せた時、ちょうど彼女は扉の取っ手を握りしめたところだった。無数に浮かぶ扉の内の一つ、苔むす古めかしい扉が音を立てて開かれる。すると――

……サマ、魔王サマ……。

どこかで誰かが呟く声がある。とても遠い場所で囁かれるその言葉は不鮮明ではつきりとしれない。けれどもアセルスは、何故だろう、その声を聞いた途端に不意にこみあげる懐かしさに思わず胸がつまり、泣いてしまいそうになった。懐旧、あるいは郷愁。それは自分が存在していた場所への愛おしさであり、また自分がいまそこには存在していないという悲しみだった。過ぎ去っていく全てのものへの悲哀を緬い交ぜにして胸元を突き上げるその感情にアセルスは呻き声をあげて立ち止まる。

「何だ、今のは……」

「……どうしたのですか？」

心配する声に顔を上げれば、扉の向こうから白薔薇姫が不思議そうにこちらを見つめている。

「声が、聞こえたんだ……。どこかで聞いたような声が……。貴方には聞こえなかったの？」

「ええ……。確かに、声というか……。何か音が聞こえましたけれど、でも意味のある言葉のように思えませんでした」

「確かに言っていたんだ。魔王さま、つて……。何のことはわからないけど、でも、なんだか……」

「なんだか？」

「どこかで聞いたことがあるような気がした。そんな筈はないのに……」

「既視感のようなものでしょうか」

「わからない。わからないけど……。何だろう、この気持ちは……。いったいぜんたい、何だつてこの場所は扉ばかりがやたらとあるんだろう」

「迷宮と呼ばれるぐらいですから、やはり閉じ込めた者たちを迷わせるためでしょうか……？」
「どちらにしても、今はとにかく手さぐりにでも進むしかありません」

「あ、待つてよ、白薔薇！」

動揺を引きずるアセルスとは対照的に白薔薇姫はやくも次の扉を選び始めている。

次に彼女が手に欠けたのは深海よりも深い青を持つ扉、やはり先ほどと同じように捻じ曲がった扉が再び音を立てて開かれる――。

……あのね、時間と言うのは、本当に、気が付くといつの間にかに過ぎてしまうものでしょう……。

おずおずと語るその声が優しく穏やかに耳元を駆け抜けていき、そして――気が付けばアセルスは訳も分からずに胸元を握りしめている。

「……………様。アセルス様……………大丈夫ですか……………？」

「う、うん……………へいき」

そう答える声が想像していたよりもひどく震えていることを知って、アセルスは苦し気に顔を歪める。これは一体なんだ。私は一体何を悲しんでいるんだ。

「迷宮に仕掛けられた罠でしょうか？ 何か、精神的な攻撃に類するような」

「違う……………と思う……………多分。これはそういうものじゃない……………」

なぜそう思うのか自分でもわからないままに首を振り、アセルスはよろよろと歩きだした。

「それなら、良いのですが……………。少し休みましょうか？」

「いや、大丈夫……………。まだ始めたばかりだしね……………」

は、と力なく笑ってみせながらアセルスは次の扉へと向かい出す……………。扉を開くそ

のたびに、見知らぬ声が自分を呼んだ。けして出会ってはいない筈のものが狂おしい程の懐かしさを掻き立て、アセルスの心を千々に惑わしていく。

……あなたの行く旅路に、どうか幸運がありますように……。

……あたし思うんだけど、永遠なんてそんなに大したものじゃない……。

幾度となく繰り返し返される懐旧と喪失感。開けども開けどもさりとてどこに辿り着くわけでもなくただむなしく扉は開かれ続け、そして——永い、夜が訪れた。

夜。

闇の迷宮には朝が来ない。日が昇ることもなければ落ちることもなく、あたりは漆黒の帳に覆われて微動だにしない。全てのものは不気味に歪曲したままびたりと静止して音一つ立てず、耳に届く音はと言えばどこからか聞こえる時計の針音ばかり。かちり、こきり。時を刻むその音が、かちりそしてこきりと幾何を計りて時間を等分に切り分けていく。胡桃の破裂にも似た乾いた音。世界の果てで胡桃が割れて、時は緩慢に進み続ける。かちり、そしてこきり。時を刻する胡桃の音は殷々と内耳にこだまして、けれど腹が減ることも疲れを覚えることもない。時だけが無限に歩みを続け、自らは何一つ変わらない。はたしてそれは時が流れていると言えるのだろうか。

扉を開ける

次の世界へと飛び込む。するとまた誰かの声が聞こえる。知らない誰かの、確かに見

知った言葉。アセルスはいつしか泣いている。頬を伝う涙に喉を震わせながら、しかしその悲しみの所以を知らないままに。なぜ自分はこんなにも悲しいのだろう。扉を開けるそのたびに傷つき打ちのめされながらしかしアセルスは足を止めることなく進み続ける……。

扉を開けて、扉を超える。迷宮に朝は来ない。静かな夜が空をひたひたと覆うばかりで何も変わりはない。

扉を開ける。扉の向こうにまた夜が見える。足を踏み出せば、また同じ夜がやってくる。どれだけの時が経っただろうか、同じことを繰り返すうちに白薔薇姫もいつしか無言になり、アセルス達は淡々と扉を開け続ける。

懐かしい、と思った。自分は何かを懐かしんでいる。……けれども、それが何かはわからない。そんな記憶はアセルスには無い。だというのに何故だろう、どうしてあの声はこれほどまでに心を騒がせるのか。

あなたは一体誰なんだ。どうして私のことを呼ぶんだ。どうして私は……。」「どうして私は、それが誰なのかもわからないんだろう……」

寂し気に呟いてアセルスは顔を上げ、涙を堪えた。

何かを懐かしいと感じることは、きつと忘却を前提としている。目の前にあるものを忘れていなければ懐かしいとは思わない。かつてあなたが愛したものをあなたはいつ

しか忘れてしまつて、だからあなたはそれを懐かしいと思う。懐旧とは裏切り者の証明だ。あなたは過去を裏切つた。忘れてしまつた。

扉を開ける。

見知らぬ誰かをアセルスは忘れる。その誰かが分からないということは自分が誰なのかわからないことと同じだ。懐かしいその人を自分は愛していたのか嫌つていたのか、そんなことさえわからない。自分は一体何なのだ。どんな生き物で、どんな考えをしていて、その人をどう想つていたのだ。わからない。何もわかりはしないのだ。しいには自分が本当に自分なのかさえ疑わしくなつてくる。記憶喪失患者じみた寄る辺のない孤独感。依拠するものがない寂しき。自分はいったい何を忘れた。忘れてしまった。わからない。名前のない悲しみだけが無辺に降り積もつては散つていく。闇の迷宮。それは、永遠に朝が来ない夜の記憶。

扉を開ける。夜が来る。

扉を開ける。夜が来る。

扉を開ける。

扉を開ける……。

「駄目だ。どこまで行つても……」

ドアノブに手をかけたまま、アセルスはとうとう躊躇いを見せた。

「何か、別の方法を考えないと……ねえ、白薔薇？」

「はい。アセルス様」

同意を求めると白薔薇姫はいつものように優しく頷いてくれ、アセルスはほっと息をついた。階段に腰をおろして一休みする。

「……白薔薇は、何かこの迷宮について知らない？」

「あまり詳しくは……。オルロワージュ様がその意に逆らったものを罰するための場所だと聞いています。あるいは妖魔の掟に逆らう者が試される場所であると」

「試される、場所……。『迷宮』という名前がつくのなら、出る方法があると思うんだ。そうでなければ闇の牢獄だとか別の名前がついている筈だもの」

「そうですね……」

あまり困ったようには見えない様子で白薔薇姫は首を傾げる。どこか呑気とさえいえる彼女の態度にアセルスはぎこちなく微笑む。

「……こんなところに閉じ込められて困っちゃうけど、でも、白薔薇と一緒に良かったよ」

「え？」

「たった一人だけだったら心細くて頭がおかしくなってしまうかもしれない。でもここには白薔薇がいるから」

「そうですね」ふふ、と白薔薇姫は幽かに笑う。「私もそこまで不安には感じていません。アセルス様はどんな時でも道を切り開いてきた方ですから」

「……そんなことはないけど……でも、ありがとう」

小さな声で呟くように言う。紅の死がもたらした悲しみはいまもなおアセルスの胸を痛切に搔き乱し続けていた。白薔薇姫がいなければ、とつくの昔に泣き崩れていたかもしれない。だが、いまは打ちのめされている場合ではない。彼女を——白薔薇姫を守らなければ。そのために自分がしつかりしなければならぬのだ。いまにも崩れ落ちそうなアセルスの心を白薔薇姫の存在がかるうじてつなぎとめていた。

そんな時だった。「おーい」誰かがこちらを呼んでいる。しかも今度は扉を開けた時のような幻聴でもない。声の方に目をやれば、植物型のモンスターが根つこの足でこちらへ駆けてくる。アセルスは警戒心も露わに剣を構えるが、モンスターはまるで意に介せずぱつと顔を輝かせながら「おーいおーい！」と叫んでいる。

「お二人さん！ どこから来たんだい！ オイラの名前は赤カブっていうんだ。よろしく」

「よ………よろしく。私はアセルス。こっちは白薔薇」

挨拶を返すと、赤カブは無邪気に微笑んで心の底から嬉しそうにしている。

「やあ、嬉しいなあ。ようやく、ようやく、だよ。この迷宮にオイラ以外の生き物が来る

なんて本当に久しぶりだよ！ やあ、めでたい！」

「あなたは、なに？ どうしてここに？」

「あんた達と同じさ。この闇の迷宮に閉じ込められてるんだ。困っちゃうな！」

「そう、あなたも……」

に「ここ」こと微笑んだまま、白薔薇姫は穏やかに赤カブの根つこと握手を始める。

「あなたはどれくらいここにいるの？」

「ずっと昔からだよ」

「ここから出る方法は……知らないよね。知っていたらとつくだにしている筈だし」

「知っているよ。……あわわ、知らないよ！」

「……どつちななの？」

困惑に眉を寄せるアセルスに赤カブはあわあわと視線を泳がせる。

「知っているけど、知らないよ！ 言い辛いから言えないよ！」

「赤カブさん。お願いです。教えてくださいませんか」

白薔薇姫が優しく根つことを握りやわやわと撫でさすると、赤カブはさらに真っ赤になった。

「わ、わ、わかった。この迷宮は……」赤カブはもごもごと口ごもる。「この迷宮は犠牲の迷宮と言われているんだ。何かを犠牲にしなければ出られない……そういう場所だ

よ。オイラに言えるのはそれくらいさ。それで勘弁しておくれ！」

「なるほど……そういうことですか」

「犠牲の迷宮、だって……？」

その言葉の不穏な響きに何か嫌な予感を覚えたアセルスは、急に黙り込んでしまった。白薔薇姫を心配そうに見つめた。

「……白薔薇？ 大丈夫？」

「……ええ。大丈夫です。アセルス様……」

いつものように微笑んで見せた白薔薇姫は、迷うことなく剣を抜いてアセルスの腹を貫いた。

「え……しろ、ばら……？」

力なく膝を落として呆然とアセルスは呟く。腹腔からじわじわと血が溢れ、衣服を紅に染めていく。

「あつ……ああ！ だから言わんこつちやない！」

ひどく怯えた様子で叫び声を上げた赤カブは「えらいこつちや」と囁いて逃げ出していき、遠くの扉の陰からおそるおそるこちらの様子を探っているようだったが、そんなことにはまるで気づかずアセルスは目の前に立つ白薔薇姫の表情に心を奪われていた。白薔薇姫はそれまでと何一つ変わらない笑顔のままに。何一つ変わらないその顔

で彼女は言う。アセルス様。私はこの迷宮から出ることにします。

「白薔薇……」

「仕方がないですよね。そうしなければ出られないのですもの。貴方を“犠牲”にしな
ければ……」

……この女は何を言っているのだろう。激痛に意識は乱れ、考えがうまくまとまらない。この女はいつたひと誰だ？ 私はいつたい——何を忘れた。自分は彼女のこんな顔を
はたしてどこかで見たのではなかったか……？

「貴方との旅は楽しかったです。アセルス様。そのことに嘘はありません。でも、もう
——私は針の城に帰らなくては。オルロワージュ様も随分お怒りのようですし」

「駄目……だよ……白薔薇……。あんな所にいちや、いけないよ……。あなたは自由な
んだ……あなたは、普通の、優しい女の人なんだ……」

うわ言のように呟かれた言葉に白薔薇は苦笑する。

「さあ……どうでしょう。普通の女性はこんなことするかしら……？ そんなことよ
り、ご自分の心配をなさるべきではないですか？」

白薔薇は手にもった剣を粗雑に捻りあげ、アセルスは青白い顔に脂汗を浮かべる。

「う……や、やめて……」

「いいえ、やめません」

「どうして……」

「お忘れですか？ 私は寵姫。オルロワージュ様の女、あの方のものなのです。旅を終えれば家に帰らなければ」

「違うよ、白薔薇……。あなたはものなんかじゃない……。あなたは、あなたたちはあの城に閉じ込められていたんじゃないか……」

「そう思っていたのはあなただけです。私はオルロワージュ様に命じられたあなたのお目付け役。私は……旅の間、無知なあなたが右往左往するのを面白がっていただけです」

「そ、ん、な……」

「もう旅はおしまいです。アセルス様。あなたとの旅は楽しかったです。ありがとうございます
ます」

「いや……待つて……白薔薇……白薔薇……！」

「まだ、何か……？」

「あのひとを……愛しているの……？」

「何を言うのかと思えば……」

白薔薇姫はとうとう残酷な嘲笑を浮かべてアセルスを鼻で笑った。

「ええ、愛していますわ。アセルス様。あなたのことも……でもアセルス様。たとえ

愛玩動物にどれだけ好かれても、抱かれないとは思えません」

「……白、薔薇……」

呟いて、アセルスは弱々しく瞼を閉じ、そして——幽かな微笑みを浮かべる。

「なぜ——笑うのですか。アセルス様」

「さ、あ……どうしてだろう……ね……？」

結局、私はあなたのことが何もわかっていな

かったんだと思ったら、なんだか馬鹿馬鹿しくなったよ……ごめん、白薔薇、あなたのことをわかってあげられなくて……」

「……」

「あなたが本当にそうしたいのなら、心からそれを望むのなら……ああ、私は、それでいい……。きっと、『辺境』だなんて、あるかどうかもわからない場所を指している私なんかより、帰りたい場所を持つているあなたの方がずっと……正しい……。私にはもう、守るべきものもない……。ここに、残るよ……」

弱々しく呟くアセルスに白薔薇はしばらく黙り込んでいたが、やはり表情だけは変えないまま、どうでも良さそうに吐き捨てる。

「——つまらない女……」

「え……？」

白薔薇は顔を上げ、透徹した瞳でアセルスを見据える。

「……随分と、つまらないことを言うのですね、アセルス様。貴方はいつもそう。針の城を出ていく前、貴方はこう言っていましたね？ 与えられるばかりだ、助けられるばかりだ、と。でも、その何がいけないのですか？ 貴方はいつも自分が与える側であろうとする。きつとそちらの方がずっと楽なのですね、貴方には。誰かに救われて生きるよりも、施しを与える側に立って生きる方がずっと。……それは結局、自分に自信が持てない子供の論理。それは与えられることを受け入れられない者が縋りつく、*“正義”*だとか、*“気高さ”*だとかいうお題目なのです。私はあなたの愚かさを愛しています。でも、貴方の感傷に巻き込まれたくはありません」

「子供の論理……か……」

泣き出す寸前の子供のように顔を歪めてアセルスは苦し気に言葉を漏らす。

「いつか大人になれるものと思ってた。旅をすれば、たった一人で生きられるようになるば大人になれる筈だと」

「あんなものは、アセルス様、旅ではありません」白薔薇姫はきつぱりと答えた。「困っていれば誰かが手を差し伸べてくれる。わからないことがあれば誰かが答えを教えてくれる。——そんなものは畢竟、旅などではないのです。旅をするのであればあなたは一人であらねばならなかった。私の助力を求めた時点でああなたは既に墮落していたのです」

「だけど……でも……！」

敵しい言葉にアセルスは唇を噛みしめる。それは、白薔薇姫と出会ってから初めて味わう彼女への怒り、芽生えたばかりの儂い反抗心だった。

「じゃあ、私はいつたいたいどうすれば良かったの。針の城でオルロワージュに守られ、ぬくぬくと暮らしていれば良かった？ あなたたち大人はいつでもそうだ。与えるだけ与えておいて、いつか自分勝手に興味を失って私を捨てていく。……それなら、私は、何もいらない！ 私は何も与えられたくなんかないんだ！ 私ははやく、大人になりたい……。大人になって、与える側になって、そして、そして……絶対に捨てたりなんかない……！ 忘れたりなんかない……！」

「世界を“大人”と“子供”の二極に分けて単純化してしまえるから、あなたはいつまでも子供のです、アセルス様。あなたがあまりにも幼く愚かなことと、あなたの両親があなたを捨てたこととはまるで別のことです」

「違う。親のことなんか関係ない。私はただ……！」

「すぐ傍であなたを眺めているのはとても楽しいものでした。……でもそれは、あなたが常に前を向いていたからです。たとえばそれが間違っている、青春に無知が加担した見当違いの行動であったとしても。……ですがアセルス様、誰かを救うことと、命を投げ出すことはやはり同じではありません。たとえば私に裏切られたとしても、あなたは剣

を抜いて闘うべきだった。……私が見たかったのは、きつとあなたのそんな姿だったのかも知れません。あなたが生きること諦めてこの迷宮に残るといふのなら、もはやあなたに物語としての価値はない」

「なら、どうすれば良かったの!? あなたを残して、ただ一人この迷宮から抜け出せというの?」

「ええ、そうです」白薔薇姫は淡々と頷く。物わがりの悪い生徒に興味を失っていく教師のように、投げやりな態度で。「あのオルロワージュでさえ生きることが投げ出そうとはしていない。時の流れにすべてを失ってなお、惨めに生にしがみつく……。生きてさえいれば、失った筈の何かを取り戻せると信じている……。だから、私は針の城へ帰らなければ。あの場所に戻り、妖魔の王が辿り着くその先を見守らねばならないのです。……耳元で囁いてあげなければ、貴方の愛した半妖が生きることが放棄したと。時の流れの濁流に、またひとり乙女が飲み込まれて消えた」と

「あなたは」言いかけてアセルスは白薔薇姫のどこかうつとりとした顔に言葉を失う。「あなたは、いったい何なんだ……。愛しているといつて……。オルロワージュを、あのひとをそんな目で見ているの?」

「あなたに何がわかるのですか? あの方を捨てて針の城から逃げ出したあなたに。あの方は、あなたに傍にいてほしいと願ったのではありませんでしたか?」

「私は……あの人を裏切りたかったわけじゃない。でもあのままではいられなかった。あのひとの傍で守られていたところで、何も変えられないだろうことは分かり切っていたから。……だから、私は旅に出たんだ。たとえそれが間違ったことでも。世界を巡って、生きる場所を探して……そして、強くなつて、いつかあのひとの言葉に応えるために。……そうだ。私は欲しかったんだ。あのひとを救うことができる力が！」

「オルロワージュを、救う……？」

珍しく戸惑つたように言葉を反芻して——白薔薇姫はくすりと声を漏らした。

「ひとというのは、本当に、よくよく傲慢な生き物ですね……」

「え……？」

「一体どこの誰があなたに助けてくれと頼んだのですか？ 妖魔の君オルロワージュが？ いいえ、あの方はそんなことを口にしたりはしません。それが出来ないからオルロワージュは闘っているのだから。千年万年と時を超え、*“時間”*と格闘し続けているのだもの……。……やはり、あなたをここから行かせるわけにはいきません。あなたの無責任な哀れみがやがてオルロワージュの孤独を救うものだとしても、——そんな物語を私は見たくありません。苦しんでいるものところへ行つて、お前は不幸だと囁きかけて……それであなたは、そんな弱者をご立派にも救つてみせる気にいるのですか。今までの苦しみや悲しみを何もかも無かつたことにして……？」

「違う……私は、そんなつもりじゃ」

「……私は、誰かが苦しんでいるのが好き、悲しんでいるのが好き。間近で愚か者を眺めているのが好きです。そして何よりも私が愛しているのは、苦しむ者が苦しみ続け、悲しむ者が悲しみ続けること」

「そんな、……そんなのはおかしいよ！」

「そうかもしれない。でもこれはもう私の性分ですから、変えようのない事なのです。アセルス様。苦しんでいる者が救われ薔薇色に頬を染めるとき、私は失われた苦しみを考えます。悲しんでいるものが救われた時、抱いていた悲しみは忘れられてしまう。そんなのは嫌です。……正直に告白いたします、アセルス様。ただか四半世紀も生きてはいない小娘があの男を救うなどという茶番を私は望みません」

アセルスは道に迷った子供のようになり心細く俯き、小さく呟いた。

「それなら、あなたはどんな物語を望むの……？」

「私が望むのは」白薔薇姫は僅かに考え、そしてゆっくりと答える。「苦しみがいつまでも苦しみであり続けること。悲しみがいつまでも悲しみであり続けること。それが……私の望む永遠です」

「永遠……」

途方に暮れたように囁いて、アセルスは唇を噛みしめる。

「そうやって……あなたはいつまでも語り部として……物語の外側から眺めているだけなのか……。何も変わらない、変えることのない物語を遠目に見ているだけで、あなたは満足なの……?」

「物語というのは元々、そういうものでしょう。作者によつて紡がれた物語を語り部は静かに読み上げるだけ」

「違うよ」アセルスは乾いた声で首を振る。「物語は本の中にあるんじゃない。作者だけが物語の全てじゃない。物語は誰かが読んで初めて生まれるものじゃないか」

「私たちはいったい何の話をしているのでしょうか? いま、この状況にその話に関係ありませんか? 益体もない言葉遊びは終わりにしましょう」

「あるさ。私はあなたの話をしているんだ。白薔薇。あなたは誰かを好きになつただ。それなのにああなたは、そうしてその誰かが不幸になつていくのを傍観していただけじゃないか。……バッド・エンドがああなたの好み? そんなのは、馬鹿げているね!

物語は、語り部たるあなたの中で生まれるものだ。だとしたら、彼ら彼女らを愚かに仕立て上げているのはあなた自身じゃないか! あなたが嘲笑っている物語と言うのは、つまるところはあなた自身のもの。あなたは自分を馬鹿にして悦に浸っているんだ!」

「……仮に」そこで初めて、白薔薇姫は僅かな逡巡を見せた。「仮にそうだとすると、それがあなたに関係ありますか? それはただ、私がそういう妖魔だということだけのこと。私

は私の趣味嗜好——私の性分に従うよりほかにないではありませんか？ 私は私のしたいように生きて、そしていつか滅びます。たったそれだけのこと」

「そんなのは、嫌だ……。私はあなたと……」

「草むらに名も知れず咲いている花ならただ風を受けてそよいでいればいい。……けれど、お忘れですか？ 私は妖魔、白薔薇。全ての妖魔は薔薇の定めの中に生まれた生物です。凡百の花とは違う。どこまでも自らを誇り、そしてあまりにも強烈な自我に殉じて生きていくのが妖魔の性。薔薇の螺旋は渦の激情。何の哀れみも求めることなく、薔薇は気高く咲いて散っていく。あなた如きが口を挟む問題ではありません」

「でも、その花に名前を与えてくれたのはあなたじゃあないか。……風知草。初めて出会ったあの時に、雑草だと思っていたものの名前を教えてくださいました。風知草はただ風に流されているわけじゃない。どんな風にも耐えたから、あの場所に咲いていたんだ」

「だから？ もう言葉遊びはおしまいにしませんか？ どのみち、この迷宮に残されていくあなたには何もできないのですから。……それとも、やはり私を倒しますか？ 剣を抜き、己の道を通すべく闘いますか？」

「……そんなことは、できない。だって私はあなたが……」

「剣を抜かないというのなら、あなたはここでお仕舞い。……あなたの言う通り、私は鏡写しにあなたの中に私を見ているのかもしれない。……けれども結局、あなたはこの闇

の迷宮に永久に囚われたまま一生を終えるのです。愚か者はいつまでも愚かで、無力なまま。あらゆる物語はいつかバッドエンドを迎えるようにできている。だって生き物はいつか必ず死ぬのだから。たとえば妖魔と言えども例外ではありません」

「……」

黙り込んでしまったアセルスを見下ろし、白薔薇姫は今度こそため息をつく。

「さようなら、アセルス様」

別れの言葉を告げて踵を返した白薔薇姫の背後に、しかし響き渡るのは獣の唸りにも似た怒りの声だった。振り返れば、腹の傷を抑えて蹲ったアセルスがこちらを見上げている。

強い目をしていた。

それはかつてラムダ基地で妖魔と化したアセルスが見せた眼光であり、紅を失ったアセルスが瞳に浮かべた眩い程の光だった。苛烈にして壮絶な意思の焔。激情の炎を浮かべた支配者の眼。

その姿を見つめる白薔薇姫はほんのつかのま痛みを堪えるように目を細め、首に刻まれた傷を押さえる。

違う、とアセルスは言った。

「私には、あなたを倒すなんてことはできない。……でも、たとえば今の私が無力でも、い

つか必ずここから抜け出して見せる。……何が、「犠牲」の迷宮だ。自由を手にするために、大切なものを失わなければならぬなんて、そんな馬鹿な話があるものか！」

「……どれほど納得がいかないことであつても、仕方のないことがこの世にはいくらでもあるものです」

「……いいや、嫌だね。そんな理屈には領けない。……そうさ、初めから理屈や常識なんてどうでもいいことだつたんだ。そんなものに従うために、私は旅に出たんじゃない。親のことだつて関係ない。結局は私の心の……私自身かどうしたいのかつて、ただそれだけのことなんだ。正義だとか悪だとか、オルロワージュを救う資格が私にあるのかどうかなんてことは、白薔薇……！ 私の知つたことじゃあないんだよ……！ 苦しんでいる人を見れば苛々する……。悲しんでいる人を見れば、笑つていてほしくなる……。それだけのことだ。私はそういう生き物で、そうしたいだけなんだ……。白薔薇……！それが私の「性分」だ……！ どいつもこいつも幸せになりやがれつて、私はそう願う。私はこの迷宮を出ていくし、オルロワージュのことだつて救つてみせる！」

「言葉だけなら何とでも言えましよう」

「あなたのこともだ、白薔薇姫！」

「私を……ですか？ あなたはこの私を救うと仰るのですか？ どうやつて？ 私は救われたいときえ望んでいないのですよ。なぜと言つて、私は既に満たされているからで

す。救済を求めるのは自らを不幸だと感じている者のすることでしょう」

「そんなことはない。救われたいとさえ思うことのできない孤独を、心の底からの笑顔で微笑むことを知らない寂しさをこそ、私は変えたいんだ。紅は……オルロワージュが悪いわけじゃない、と言っていた。自分が忘れ去られてしまったのは自分に魅力がないのが悪かつたんだと。……でも、そうじゃない。誰が悪いとか、悪が倒されればそれで済むんだとか、そんなことは問題じゃあないんだ。私はただ、彼女に笑っていて欲しかつただけなんだ……！」

「私は紅姫とは違います。アセルス様。あの女の弱さを、私は軽蔑します。誰かに寄り掛かることでしか生きられない、そんな生き方をあの女は選んだ。滅ぶのは当然です」

「そんな言い方をするな。彼女は私たちを守ってくれたんじゃないか」

「本当にそうでしょうか？ セアトの剣からあなたを庇う振りをして……その実、腹の底でほくそ笑んでいたのではないですか？ 生きている理由だとか、生きた価値だとか……そんなお題目に縋りついて、紅姫は拙い自慰行為の果てに滅んでいったのでは？」

「白薔薇！」

「あなたの幼さが、愚かしさが、オルロワージュを傷つけ、紅姫を滅ぼした。……それだけではありません。黒騎士セアトは敗れ、イルドゥンは離反した。針の城の秩序が恐ろしい程の速度で崩れ去っていったのは誰のせいなのか、まだお分かりにならないのです

か？」

「それは……」

「私はあなたを責めているわけではありません。……それでも私は、やはりこう言わなくてはなりません。幾重もの言葉弄して声高に理想を叫ぶよりも……たつたひと振りの剣をかざして戦い抜くことの方が、ずっと純粋で美しいことだとは思いませんか？」

「できない、そんなことは……」

「剣を抜きなさい。アセルス」

裁きを下す王の如き冷徹さで白薔薇姫は告げた。

「その剣で『支配』を象るのです。……あなたにはもう理解できています。あなたの知っている白薔薇と言う女は幻の産物。語り部たる私は物語そのもの。物語とは嘘の謂い。そして嘘とは……不実であり、放埒であり、邪悪であることの符牒。……あなたは裏切られたのです。あなたはもう、知っている筈ですよ。ラムダ基地で妖魔化した時、あなたは自らが正義であることの快楽を経験している。誰にも非難されることのない絶対的な正義を掲げて全能を振るうことの心地よさ……あの途方もない官能を」

「できないよ、白薔薇」アセルスは声を震わせて首を振る。「できない……そんなことはできないよ……」

「まだ、わからないのですか。あなたは騙されていたのです。私が優しいと感じていた

のは、それはただの勘違いというものです」

白薔薇姫は淡々と囁く。優しいその声は、しかしどこか相手を糾弾するように硬い響きもまた備えているのだった。

「違う……違うよ、白薔薇」

押し殺した声でアセルスは呻いた。悲し気に頬を濡らし、しかしけして目を逸らすことなく白薔薇姫を見据えて。

「勘違いしているのはあなたの方だ。私があなたと一緒にいたのは……旅をしたいと思ったのは……あなたが正しいからでも、優しいからでもない。そんなものに理由なんかないんだ。けして言葉にはならないものが、この世にはある。理屈なんかない。論理的な帰結も納得のいく説明もありはしない。ただ私は、私はあなたのことが……!」

腹の底で膨れ上がる衝動を持って余すようにしてアセルスは声を上ずらせた。目に涙を浮かべながら、しかし挑むように白薔薇姫を見つめる。

その瞳は幾千幾億を魅了する妖魔のものではなかったし、己の権利を震えながら口にするだけの弱々しい人種族のものでもなかった。揺れ動き、煩悶を繰り返しながら——それでも中庸を求めるそれは半妖の瞳だった。

アセルスを見つめる白薔薇姫の表情に少しずつ理解の色が広がるにつれ、彼女はどこか困ったように微笑み、それから「わかった」とでも言うように静かに頷いた。

「そう……。あなたが言っていたのは、つまりこういうことだったのですね。愚かで、しかし純粋な者が苦しんでいるのが好きだと言いなながら……。その者から純粋さを奪っているのは結局のところこの私……。そう、そういう……。こと……」

独り言を呟くようにぶつぶつと口を動かして、白薔薇姫は俯く。

「白薔薇？」

「馬鹿な女」

吐き捨てるようにして白薔薇姫はせせら笑い、その声の冷たさにアセルスはびくりと震えた。

「家畜に恋はしない。そんなことは当たり前のことでしょう、アセルス。身の程を知らない女が口にする睦言というのは滑稽だわ」

「……」

残酷な言葉に耐えるようにしてアセルスは齒を食いしぼる。そんなアセルスを白薔薇は弄ぶように眺めまわし、唇の端を上げた。

「ねえ、愛しているわ、アセルス。私はあなたを愛してる。あなたが望むなら、いくらでもそんな言葉をくれてあげる。……。やはりあなたは、私が思っていたように愚かで、そしてどこまでも純粋にできている。愛しているわ、アセルス。あなたみたいに愚かなモノを、きつと私は愛してる」

「し、白薔薇……」

「私は……とても良いことを思いついたの」

そう言うのと白薔薇姫はアセルスの腹から剣を乱暴に引き抜き、今度は左足の先を切り落とした。ああ、と痛みに呻いたアセルスが脂汗を流しながら顔を上げると、白薔薇姫が冷酷な瞳で見下ろしている。

「立ちなさい」

静かに告げられたその言葉に、アセルスは半ば魅了されたようにふらふらと頭を揺らし、ぐ、と痛みを堪えながら立ち上がりかける。

「白、薔薇……なにを……」

答えず、白薔薇姫はアセルスの脇腹を斬りつける。血と臓物を零れ落としながらアセルスは倒れ込んだ。見る見るうちに傷は回復していくが、しかし癒えるよりも早く白薔薇姫は命令を繰り返す。

「立ちなさい」

全身を痙攣させながらアセルスはふらふらと立ち上がる。あなたは結局、私の口づけが欲しいのですか？ 白薔薇姫は言った。違う！ 激しい拒絶を見せてアセルスがきつと顔を上げる……。白薔薇姫は構うことなく剣を振るい、アセルスの左腕を切り落とす。再び倒れたアセルスに白薔薇姫は言う。立ちなさい。

「私に抱かれましたのですか、アセルス様？ それとも私を抱きたいのですか？」

小馬鹿にしたように顔を歪めた白薔薇姫に、苦痛に顔をひきつらせたアセルスは首を振る。

「違う！ 違う！」

「……何も違わないわ、アセルス」

白薔薇姫の剣がアセルスを切り刻み、その度に残酷な命令が告げられる。立ちなさい、アセルス。

それはあまりにも永い夜だった。幾度となく白薔薇姫に切り裂かれ、そしてそのたびに立つことを強要されて——とうとう意識は朦朧とし、立ち上がることもさえできなくなって、アセルスは力なく項垂れる。両手両足を無くし、腹につきこまれた剣が内臓を無遠慮にかき回していく。血の気の失せたアセルスの顔を面白そうに覗き込んで白薔薇姫はくすりと笑う。

「あなたは本当に愚かですね、アセルス様。……でも、私はこんな風にも思うのです。闇の迷宮にあなたが残り、私を助けるために犠牲になるだなんて……そんな下らない自己満足に浸られるのもどうにも癪に障ります。……だから、ねえ、アセルス様。やはりこの迷宮には私が残ることにいたします。あなたは私を犠牲にして自由になり、そして、一生、苦しみ続けなければならないのです。……そう、その方がきつと面白い。正義を振りかざ

したあなたがいつか妖魔の君と対峙し、あの男の苦しみの何もかもを救済して見せるというのなら、あるいはそれが私の望む悲劇なのかもしれないのだから」

とうとう動かなくなったアセルスの首を掴み上げ、乱暴に次の扉へと投げつけると、白薔薇姫は優しく赤カブを呼びつけた。おそろおそろやってきた赤カブは怯えた様子で白薔薇姫を伺っている。

「赤カブさん」

「……は、はいっ！」

「結論ができました。迷宮には私が残ります。彼女を出口まで連れて行っていただけませんか？」

「はい。あの……そのう、よ、よろしいんでしょうか……う？」

「ええ。構いません。これでいいのです」

そう言うとき白薔薇姫は晴れ晴れとした微笑みを浮かべた。その屈託のない笑顔に赤カブはつかのま陶然となり、慌ててぶるぶると頭を振った。

「何が、なんだか……さっぱりわからない……。でも、これでいいんだね？ あんたはとつても怖いお姫さんだけど……。でも、ここの残るのはあんたなんだね？」

「ええ」

「そうか……」

赤カブは不思議そうに白薔薇姫を眺める。

「動機が何であれ、あんたはここに残ることを選んだ……。それがあんたの選択なんだ……。そうか、そういう……」

白薔薇姫とアセルスを交互に見つめて、赤カブは感慨深げにため息をつく。

「……じゃあ、オイラは行くよ」

「ええ。お元気で」

小さく手を振る白薔薇姫にぺこりと頭を下げて、赤カブは重たそうにアセルスの体を引きずつていく。

「ねえ、白薔薇姫さん。あんたは……」

背中越しに声をかけると、白薔薇姫は穏やかな声で「何か？」と答えた。穏やかでないがらしかき感情のこもらない声に、「いや……なんでもない」とたじろいで、赤カブはついに闇の迷宮を後にする。



迷宮から抜け出した赤カブは意識を失ったままのアセルスを背負い、ひいひいと荒い息をつきながら意識を失ったままのアセルスに語りかける。

「目を覚ましておくれよ。お前さんはそろそろ起きなきやあならない。だつてそうだろう？」 お姫さんはあの迷宮に残ったんだ。……それがどんなに邪悪な思惑を秘めたものだとしてもね。お前さんは自由になったんだよ、アセルス。笑うこともできる。お姫さんを憎むことだつてできるんだ。なら、やつぱり目を覚まさなきやな。どんなに嫌だとしてもさ」

長い長い夜が明けて太陽の淡い光が地平線の彼方に滲み、青白い空がうすら寒く風に靡いていく。涙に腫れた頬を冷たい風が撫で、アセルスは僅かに呻いて身じろぎをす

る。

「……は……？」

掠れた声で囁くアセルスの全身は血に染まり、いまもなお流血を続けている。執拗に傷つけられた傷口は容易に回復することなく、じくじくと鈍い痛みを残してアセルスを苛む。疲労と混乱に臉を痙攣させてアセルスはあたりを見回すと、肩を震わせて赤カブに問うた。

「白薔薇は……？」

「白薔薇姫さんが迷宮に残ったからオイラが外に出られた。姫さんとオイラの立場が入れ替わった。だから、代わりにお前さんの傍にいるよ。オイラ達は自由になれたんだ。……は闇の迷宮の外だよ」

「そ……」

何を言おうとしたのだろう。アセルスは短く言いかけたきり口を噤んで黙り込む。赤カブの無神経な言葉にあるいは激高しかけたのかもしれない。あるいは自らに振りかかったことを思い出して言葉を失ったのかもしれない。いずれにしても当初アセルスは感情を抑え込み、腹の底から膨れ上がる感情に堪えようとした。大人にならなければ。強くならなければ。そう知っていながら——しかし、彼女は未だそうはなれないのだった。

「しろ……ほら……」

その名前を呼べば耐えきれないものと知っていてアセルスはなおも襲い来る喪失感にその名を呼ぶ。

「白薔薇……白薔薇あ……」

初めて味わう裏切りや信じる者との決別に千々に心を乱して、アセルスは子供のよう
に泣き叫んだ。

夜が明け、訪れた寒々しい朝に乙女の慟哭が響き渡る。それは自らの半身を奪われたかのような嘆き声であり、聞く者の心を否応なく疼かせる悲しみの発露だった。

第二十三幕 別離

妖魔は涙を流さない。下級・中級といった妖魔ならばもしかしたら涙を流すこともあるかもしれないが、それは奴らが妖魔として不完全な存在だからだろう、とイルドゥンは考えている。だって当たり前のことだろう。涙を流したところで何も変わりはないのだ。そんな行為に何の意味がある。

「……何をしている」

妖魔イルドゥンはむろん涙を流さない。悲しみを覚えることもないし弱音を吐くことも己の悲運を嘆くこともしない。必要がないからだ。妖魔だからそれはごくごく自然なこと。あまり深く考えたことは無いがきつと生まれたときからイルドゥンはそうして暮らしていたし、その意味を考える必要性も取り立ててありはしなかった。……けれど、ファシナトゥールという妖魔社会で生きるようになって、イルドゥンは少しだけ不思議に思うようになった。

「……そんなところで何をしているのかと聞いているんだ」

妖魔、と一口に言いはしても性格や好みは様々で、炎妖がいれば水妖がいて血を吸う妖魔がいれば植物を操る妖魔もいる。頑固と言って差し支えないようなイルドゥンに

もそれくらいのことには納得できる。全員が全員、同じように考え同じような言葉を吐いて同じような性格をしていたら、それは気持ちが悪いだろう。だから薔薇を愛でる姫がいて剣を愛する姫がいて、服を仕立てる妖魔がいれば時を患う妖魔がいる。それはわかる。だが、しかし――。

「おい。聞こえているだろう。白薔薇姫はどこへ行った」

悲しみに涙を流すそのワケが、しかしイルドゥンにはわからない。だって妖魔だ。人間とは違う。誇り高く生き誇り高く死ぬ、そういう種族のはずだ。惨めつたらしく涙なぞ流して、自分は駄目な存在で、だから助けて欲しいのですと全身で主張しているような奴ばらめの気持ちは本当にまったく理解できない。そんなことをしても何にもならないことは知っているだろうに。そんなことをしている暇があるのなら戦えばいい。たったそれだけのことではないか。これほど簡単なこの世の摂理がなぜ理解できないのだろう。

「何とか言え。言わねば話が進まん」

飴鐘は泣いていた。どうして泣いていたのだろう。ずっと考えている。ずっと考えてはいるが、わかりたくは無いような気もする。そんなことをするくらいなら自惚れていれば良かった。たとえ姿が蜘蛛だろうと本人が美しいと思えばそれは美しいのだ。それだけのことだった筈だ。それなのに、飴鐘はファシナトゥールから逃げ出して機械

化手術を受け、シンデイ・キャンベルと名乗る自らを恥じていた。理解できない。イルドゥンには何もわからない。だってそうだろう。根の町であの小さな仕立て屋を続けていたら良かった。服を仕立てることに関して、飴鐘はことさら強い自負を持っていた。美しい妖魔を更に美しい装いで飾り立てるといふ芸術を誇りにしていた。どんな上級妖魔にもできない、私が作る私だけの服こそがこの世で最も素敵な衣装なのだと、誰に語るでもなくその瞳で言っていた。

美しい女だった。

「……いい加減にしろ」

イルドゥンは空を見上げる。雨が降っている。傘をさす習慣などはないので当然雨ざらしだが、風邪をひいたりほしないのでたいして困りもしない。陰鬱とした曇り空。少しだけ昔のことを思い出した。妖魔の君オルロワージュと交わした言葉。寂しい、と奴は言った。時の流れを憂っていた。忌々しい零姫の話によれば、オルロワージュは永遠を求めているのだという。永遠。いつまでもずっと変わることのないもの。どれだけの時が経とうともけして失われることのないもの。オルロワージュの言ったことは、つまりこういうことだったのだろうか。どれだけ強靱な心であろうと、時が経てばいつかは褪せる。美しく誇り高い精神を備えた筈の妖魔は、しかし時がたてば邪妖へと堕ちていく。それが妖魔の定めだ。何百年、何千年と膨大な時間がかかろうと、その摂理か

ら逃れられるものはいない。

妖魔は涙を流さない。だが全ての妖魔は、いつか妖魔でなくなっていく。嗚咽を漏らし、涙を零して、いつか慈悲を乞うようになる。

それがこの星間世界における運命だというのなら――。

得体のしれない徒労感にうんざりしながら、イルドゥンは低く冷たい声で言った。

「立て、アセルス」

雨はなおも降り続け、身に纏った外套ごとイルドゥンをしとどに打ち据える。目の前で項垂れているアセルスもまた濡れ鼠だ。濡れて額に張り付いた前髪からぼたぼたとしずくを垂らしたまま、微動だにしない。力なく尻を落とし、アセルスはこちらを見ようとせぜずにしゃくりあげている。……本当に、この半妖は、何をしているのだろうか。初めて出会ったとき、黒騎士であるこの自分を殴りつけてきた度胸はどこへ行った。どれだけの責め苦を受けようともくじけることなく、強い光をその目に宿して戦い続けていたあの獣のような女はどこへ行ったのだ。

苛立ちは、却ってゆっくりとした動作でイルドゥンにアセルスの胸倉を掴ませた。

「何も言わねばわからない。何か言え」

苦し気にアセルスは呻いた。常時なら、こんな時すぐさま罵倒の言葉が飛んできたものだったが、アセルスはなおも視線を反らしたままぶつぶつと弱々しい声で囁き声を返

すただけだ。馴れ馴れしく触るなど叫ぶことも、手を払いのけて睨みつけることもしない。

「迷宮……オルロワージュが………白薔薇は……」

震え声で覚束ない説明。もつとはつきり言え、と怒鳴りつけようかと思っただが、心はどこかが冷めていてそうすることはなかった。

アセルスの言わんとしていることはなんとなくわかる。闇の迷宮。話には聞いたことがあるあの牢獄に飛ばされたのだろう。ヨークランドの平原からどこへ消えたのかと思っただが、要するに白薔薇姫が迷宮に残りアセルスだけが脱出してきたということなのだろう。

だが、

それが何だと言うのだ。

「そうか。闇の迷宮に辿り着く方法を俺は知らん。とすれば、やはりオルロワージュを滅ぼす以外に方法は無いな」

イルドゥンは言った。アセルスは答ええない。なんだ？ 知恵が足りないのは半妖の猿だから仕方ないことだが、答えが見つかったのなら少しは嬉しそうにするべきではないか。仕様のない馬鹿だ。もう少しわかりやすく言っただけでやるか。

「立て、アセルス。ファシナトゥールへ行くぞ。オルロワージュを殺して白薔薇姫を取

り戻す。まずは星間船発着場を目指すか」

イルドゥンは言った。アセルスは答えない。寝ているのか？ どうもそういうわけではないようだ。掴んでいた胸倉を離すとそのまま膝を落として倒れる。馬鹿なのか？ 手を引つ張るがそれでも立ち上がろうとはしない。

「……おい」

「……い……や……」

返答は短く、そして臆気だった。なぜ嫌なのか、そんなことさえろくに説明しようとして、愚かな子供の如く言葉足らずに首を振って顔を歪めている。まるで——自分で考えたその表現にイルドゥンは更にうんざりして顔を顰めた——無力な人間の少女のようではないか。

それは違う。少なくとも人間ではない。半妖とはいえ仮にも妖魔の君の血を享けた女。ちっぽけな人間の女とはどこか違う——そんな女だった筈だ。いつもの減らず口はどうした。俺を責めないのか。確かに考えてみれば『白薔薇と紅をよろしく』とお前は言った。俺は紅を守らなかつた。その点に関していえば責があるのかもしれない。俺はただお前が勝つていければ良かったのだと思うし謝る気も無いが、だが、まあ、そうだな。責めたいのなら好きにしろ。俺は知らん。

「アセルス」

呼びかけて、しかしアセルスは顔をあげない。唇を震わせながら大粒の涙を零して背筋を震わせている。イルドウンは苛立ち交じりに舌打ちをする。

「立て。立って戦え。奪われたのなら奪い返せ。たったそれだけのことだろう」

一瞬、何を言われたのかわからないようにアセルスはきよんとしていた。それからおずおずとこちらを見つめ、それから何かを誤魔化すように薄ら笑いを浮かべる。

無理だよ。アセルスは言った。戦う理由がない。

「……どういう意味だ。紅は死に、白薔薇姫は囚われの身。この状況に置いて、理由が無いなどという理屈があり得るのか。お前はお前らしく生きることのできる場所を求めて旅に出たはず。やりたいことをやり、思うがままに生きる——その生き方は、しかし正しい。だが、今やその望みは絶たれ、お前の所有物である寵姫たちは失われた。戦う以外に何かあるというんだ？」

「……白薔薇は」ようやく、アセルスは意味のある返答を返し始めた。「私を待つてなにかいないよ」

「なに？」

「針の城へと帰る、彼女はそう言っていた。それから……」

アセルスはぐつと唇を噛みしめる。

「……とにかく、白薔薇は私のことを待つてなんかいない。だから、意味がないんだ」

何を言っているんだこいつは、とイルドゥンは思った。

「白薔薇姫がどう思うかなど、この期に及んでは問題ではない」

「……………」

「重要なのはお前がどうしたいかだ。アセルス。欲しいものがあるのなら戦って奪えばいい。それ以上でもそれ以下でもありはしない。白薔薇姫の感情など塵にも等しい。ただお前が望むもののために戦え。……立て、アセルス！ 何度も言わせるな！」

とうとう声を荒げたが、アセルスは力なく打ちひしがれたまま再び項垂れた。

「貴方に……何がわかるっていうんだよ……。何もわからないくせに……。貴方はただ、妖魔にとって正しいことを何も考えずに口にするばかりじゃないか……」

「正しいからではない。そうするべきだと知っているだけだ」

「できないよ」

「何故だ」

「……どうしてわからないんだよ。やりたくない、そんなことをしても意味がないって言うてるんだ！」

アセルスが叫ぶ。ようやく調子が戻ってきたか——そう思ったが、すぐにその考えを捨てた。目を見ればわかる。これはただの癩癩、ヒステリーだ。思い通りにならない現実、子供がただをこねているのと同じだ。

「白薔薇は私を求めてなんかいなかった。私はずっと騙されていたんだ。彼女は私が苦しみ続けなければならないと言った。私が悲劇を迎えることが楽しみだと言っていた。だってら——もうどうすることもできないじゃないか！」

「言いたいことはそれだけか」

イルドウンの返答が孕む剣呑な気配に、泣き叫んでいたアセルスもさすがにはつと顔色を変え、咄嗟に腰の剣へと手を伸ばした。アセルスの剣——半妖でありながら、しかしその力で生み出し、手に入れた妖魔の剣——その妖魔としての証を目にして、イルドウンの精神の底がすつと冷えていく。

妖魔は涙を流さない。涙を流す妖魔など、もはや妖魔とは言えない。

振り下ろしたイルドウンの剣は、弱々しく掲げられたアセルスの剣を容赦なく砕いた。

ばらばらに散っていく破片ごしに、アセルスは信じられないものでもみるようにこちらを見ている。剣を突きつけ、いまにもアセルスを殺そうとしているイルドウンの姿を。

「これが最後の通告だ」イルドウンは言う。「立てアセルス。立って戦え」

アセルスは顔をくしやりと歪め、そして力なくため息をついた。

「どうして……? 私にはもう、目指す場所もないのに……。紅……白薔薇……そして、

貴方までも……もう、誰もいなくなっちゃった……」

アセルスは項垂れたまま目を閉じ、裁きを待つ罪人のように首を垂れる。投げやりで弱々しいその態度が更にイルドウンの激情を駆り立てる。

ああ、もう、こいつは駄目だ、とそう思った。こんな女を何度も目にしてきたような気がする。人間はいつもこうだ。偉そうにものを言う割に、百年かそこで意気地がなくなる。これが時の流れか。オルロワージュ。お前の言っていたことはこういうものか。

もう、いい。

うんざりだ。

「死ね」

吐き捨て、イルドウンは剣を振り上げた。何もかもがこれで終わりだ。そう思った。だがしかし――、

「——おやおやイルドウン。君ってヤツは！」

その剣がアセルスを捉えることは無かった。剣の先にいた筈のアセルスは忽然と消え、いつの間にかに別の妖魔の腕に抱かれている。口元になやにやと笑みを張り付けた

赤毛の妖魔——ゾズマは傍に控えていた仮面のメイドにアセルスを任せ、余裕綽々といった様子でイルドウンに向き直り、肩を竦めて見せた。

「それが針の城が称える黒騎士の態度かい？ レディに対する然るべき態度とはどうしても思えないぜ」

「……ゾズマか。何の用だ」

押し殺した声でイルドウンは尋ねた。目の前の獲物を横取りされた怒りに殺意さえ滲ませ、イルドウンは妖魔社会きつての異端児に剣を突きつける。

「何の用だつて？ 見てわかるだろう。哀れな姫君を助けに現れたのさ。悪いが、アセルスにここで死んでもらつては困るんだ。彼女にはまだ、編み上げるべき物語というのが残っているはずだからね。僕はそれを楽しみにしているのさ」

「物語だと？ そんなものはない。その女はもはや抜け殻だ。何の価値も無い猿に過ぎない。そこをどけ、ゾズマ。アセルスは俺が殺す。……いや違うな」

イルドウンは煩わしそうに溜息をついた。

「いちいちと……面倒な問答を繰り返すのはうんざりだ。お前はそこに突っ立っていれればいい。アセルスごと滅ぼしてやる」

純然たる宣告に、ゾズマの表情からは笑みが消える。

「やれやれ……」ゾズマは見下すような嘲笑を浮かべた。「随分とまあ、自分というもの

を知らない若者だな」

「なんだと……?」

「君がアセルスを殺したいというのなら好きにすればいいさ。僕は喜んで受けて立つ。かかって来いよ、黒騎士イルドゥン。……だが、その前に一つ認めるんだな。君はアセルスに執着しているんだろ?」

「ふざけるな。そんなゴミにこの俺が執着などするわけがない」

「だったら、すぐにここを立ち去れ。何の価値も無いとそういうのなら、無価値な存在などすぐに忘れてあのファシナトゥールの下らない妖魔社会にでも帰れよ。つまらない存在にいつまでもかかずらわっているなんて、妖魔のやることじゃないだろう?」

「……」

「だが、君は違う。君は僕がアセルスを手にすることが気に食わないんだ。それどころか君以外の誰であつたとしても許せないんだろう。だから君は、君自身の手でアセルスに止めを刺さなければ納得できない。——それを執着というんだよ、イルドゥン。君は、君自身でも知らない心の深い部分でアセルスに影響を受けている。紅がアセルスを過大に評価するのも、君がアセルスを徹底的に糾弾し厳しい言葉を与えるのも、根差すところは同じさ。格好悪いよ、イルドゥン。そんな生き方は僕の美的感覚に反するね」

「だったら何だ。お前の美的感覚など知つたこととか。……俺は俺のやりたいようにや

るだけだ」

「そうかい。なら僕も、僕のやりたいようにやらせてもらおうとするさ」

「待て！ ゾズマ！」

「いいや、待たない。——追えるものなら追ってみるんだな。ちなみにそういうのを人間社会では、ストーキング行為と言うらしいけどね。……おお、そう考えると気持ちの悪い奴だな、君は。ストーキング行為の意味についてはあとで辞書でもさらってみるといい。……じゃあな、イルドウン。さようなら」

剣閃はまたもむなしく空を切った。ゾズマの姿は幻のように失せ、あのメイドとアセルスもまた消えている。

「……」

イルドウンは無言で天を仰いだ。濡れそぼった全身に外套が張り付き、空からは針のような雨が音を立てて降りしきる。

「アセルス……！」

唸り声を上げてイルドウンは雨雲を睨みつける。飢えた獣のように、その瞳にはざらりと光が宿った。

第二十四幕 植物界被子植物門双子葉植物綱薔薇目薔薇科薔薇屬赤蕪

やあ、全国の赤カブファンみんな！　とうとうお待ちかねの出番がやってきた。ようやくお会いすることができてオイラも嬉しいよ。

オイラに会いたくて会いたくてたまらなかつたらう？

“早く赤カブ様が現れないかしら” “赤カブ様の登場しない幕なんて戯曲の価値がないわ！” そんなご婦人方の有難くい呟きを聞いて、オイラもハンケチを噛みしめながら今か今かと出番を待ち望んでいたよ。お待たせ！

さあ颯爽と道化師赤カブ様の登場だ。この物語の中でも群を抜いて英雄的なヒーロイックオイラの姿に客席からも歓声が上がるよ。悪かったねお嬢さんたち、さあオイラの胸に飛び込んでおいで！

……………。

んん？　なんだかアンタは変な顔をしているね？　納得のいかない顔？　苦笑いかな？　……………そう、“こいつは何を言っているんだ？”　って、そんな顔だよ。オイラのはしゃぎっぷりがそんなにおかしいかい？　赤カブが人気者だなんて、そんなことあるわ

けがないって思うかい？

うん！ そうだね！ オイラもそう思うよ！

オイラはそこまで馬鹿じゃない。オイラはみんなに嫌われている。邪魔者だって思われてる。そのくらいはわかっているさ。

正直に言うよ。オイラには何の力もない。気の利いたことも言えないし闘う力だってありはしない。だけでもそれでもオイラは言うのさ。オイラはオイラを愛しているよ。どうしてかって？ だってオイラは闇の迷宮にいたもの。妖魔の君オルロワージユ様の造り出した迷宮に囚われ、長い長い時を一人ぼっちで過ごしていたんだもの。その意味がアンタにだってわかるだろう？ うん？ 闇の迷宮に残されたということとはさ！ ……ふふふ、オイラはニヤニヤと堪え切れない笑みを浮かべて言おう。闇の迷宮に残されたということはさ！ オイラは誰かの大切な存在だったってことなんだ！

闇の迷宮は犠牲の迷宮。自分にとって最も大切な存在を置き去りにしなければ抜け出すことはできない。だからオイラは絶望なんてしないのさ。…ああ、そうだね。確かにオイラは捨てられたのかもしれない。オイラを大切に思っていた奴はオイラを置き去りにして迷宮から抜け出したわけだからね。お前馬鹿なんじゃないのって言われるかもしれない。でも構やしない。たとえそうだとってもへっちゃらさ。だってオイラは必要とされていた。誰かにとって大切な存在だった。その誰かはオイラのおかげ

で自由になって、きつとどこかで幸せになっているに違いない。それでいいじゃないか。

オイラの記憶には欠けた所があつてどうにもはつきりもしない。なぜ闇の迷宮にいたのかも、その前に誰とどこにいたのかもわからない。……気がついた時には闇の迷宮の中に居て、やたらめつたら時を刻む時計たちに囲まれてかちこちぼおんとぼんやりしていた。ここが闇の迷宮だということなせだかすぐに分かつたけれど、自分が赤カブだということ以外には何も分からなかつた。永遠に時を数え続ける無数の時計に囲まれて、あまりにもやることのないものだからオイラはあてもなく空想にばかり耽つてた。

オイラのことを大切に思つてくれていた奴はどんな奴だつたのかなあ。男かな、女かな。美しい姫様なんかだと嬉しいな。……ううん、もしかしたら恋人だつたのかもされないぞ。オイラと彼女であてもなく恋の逃避行に出て、うふふ、オイラがこの身を捧げて逃がしてあげたんだとしたら素敵だな。……そうでなかつたら、すんごい有名な戦士さんかもしれないぞ。オイラは信頼された相棒で、うっかり妖魔に捕まつてしまった相棒を助けるためにこの迷宮に残つたのかもしれない。

うーん。実際どうなんだろう。あんまり高望みしすぎるのもおかしいかな。どんなやつだつていいよ。オイラを大切に思つていてくれた奴なら、とにかく今は幸せになつ

ていてほしい。

どんな奴かな……。男かな、女かな……。人か、妖魔か……。それとも、それとも……。そうこうして来る日も来る日も時を過ごしていると、やがてアセルスと白薔薇姫がやってきた。それから色々あつたけれども結局迷宮には白薔薇姫が残ることになり、アセルスとオイラは自由になった。

アセルスは泣いていたよ。白薔薇姫のことが好きだったんだね。白薔薇、白薔薇、と何度も叫んで、子供のように感情を露わにする。

素晴らしいな、とオイラは思ったよ。いや、別に変な意味じゃない。誰かを大切に思っているようなそんな感情がこの世には本当にあるんだって、そう思ったことが嬉しかったんだ。

アセルスは泣いていた。それは大切な誰かのために流す涙なんだ。オイラを失った人もきつとこうやって泣いてくれたに違いない。それはなんて尊いことだろう。

「白薔薇姫さんが迷宮に残ったからオイラが外に出られた。姫さんとオイラの立場が入れ替わった。だから、代わりにお前さんの傍にいるよ」

慰めるつもりでそう言うと、アセルスは一瞬きよとんととして、それから俯いて強く唇を噛みとめた。彼女の頬を冷たい涙が伝っていった。彼女は何も言わなかったけれど、言いたいことはだいたいわかった。

代わりなんていない。大切なひとの代わりなんて誰にもできない。

自分以外の誰かを強く想うこと。時には自分よりも世界よりも大事に感じることに。その感情の名前をオイラは知らないけれど、でも、そういう気持ちのことを心の底から美しいと思う。

ようやく迷宮から脱出することができてオイラはちよつと考える。これからどうしよう。折角自由になれたんだから、世界中を旅してまわるのはどうだろう。オイラのことを大切に思っていた奴を探し出して、「やあ、久しぶり」と言つて……別に恨んでなんかいないよ、せつかく再会できたんだ、また仲良くやろうじゃないかなんて言つたりして……静かに暮らしていくのも悪くはない、そんな気がしたよ。

でも泣いているアセルスを眺めている内に不思議な感情が沸き起こつてきた。心を任せるにはなかなか悪くない感情だった。『代わりに』とオイラは言つた。オイラは自由になり、白薔薇姫は迷宮に囚われてしまった。代わりに、とはどういう意味だろうか？ オイラにだって、白薔薇姫の代わりになれないことくらいはわかる。でもオイラは代わりにと言つたんだ。だから……、

だからオイラは、この身に代えてでもアセルスを救つてやらなきゃと思つたんだ。白薔薇姫ならきつとそうするさ。

うちひしがれたアセルスを置いていくのは心残りだったけれどいくら優しい言葉を

かけたって彼女を救うことはできない。だからオイラは考えた。考えに考えてまるで良い考えが浮かばなかったもんだから仕方なくドウヴァンへ行くことにした。笑っておくれよ。これでもオイラは必死だったんだ。

ドウヴァンで占いを試すとロクな結果が出なかった。手相占いはそもそも手がないつて怒られたし植物占いは青紫の芳香スミレの香りって言われたけどなんのこつちやだった。占いを諦めたオイラはこうなれば仕方ない神頼みだと神社でおみくじを引いた。書かれていた文句は「探し人は滅びの中にあり」だった。だけどオイラは誰かを探しているわけじゃない。アセルスを助けたいだけなんだ。

「困ったなあ」オイラは弱り果てて大いに嘆いたよ。「どうすればいいんだろう」

地面を見下ろして鬱々としてしていると、鳥居にもたれてあくびをしていた巫女さんが声をかけてくる。

「これ、もんすたあ。ここは神聖な場所ぞ。お前のような邪悪が居て良い所ではない。とく立ち去れ」

「そんな冷たいことを言わないでくれよ。オイラ悪いモンスターじゃないよ」

そう言つて巫女さんに振りむくと、驚いた、その巫女さんときたらとんでもない美人なんだ！

「み、み、巫女さん……。あんだ、すこぶるつきの別嬪さんだねえ。オイラは感心したよ」

「もんすたあに好かれても嬉しゆうない」

「まあそりやそうだろうけどさ！ でも巫女さん。ここは神さまのいるところで、あなたは巫女さんなんだろう？ だったらオイラの悩みを聞いておくれよ！」

「よつく考えてみるのじやな植物。仮に神がいたとして生き物の願いをやたらに叶える理由がどこにある。ましておぬしのようなもんすたあの信仰を求むる神など居る筈もなからう」

「理由なんて知らないよ！ 神さまがいるかどうかだってわからない！ オイラはただ、自分にできることならなんでもやろうとしているだけさ！ 無駄かどうかなんていちいち考えてられやしないのさ！ 願いは口に出すためにある！ 思いは叫ぶためにある！」

「ふむ」

巫女さんはすつと目を細めた。そうすると急に巫女さんが年を取ったような——なんだかひどく老成した女性のように見えてきた。

「では言うて見よ、化け物。おぬしの望みとは何ぞや」

「アセルスを救うことさ！」

オイラは大きな声で言った。

「あせるす……知らんな」

どうでも良さそうに答えた巫女さんにオイラは慌てて付け加える。

「アセルスっていうのは妖魔の君オルロワージュ様の血を享けた半妖のことだよ。アセルスはオルロワージュ様の元を逃げ出して白薔薇姫と一緒に旅をしていたんだけど、白薔薇姫は捕まってアセルスは悲しいんだ。だから、オイラはアセルスを助けるのさ！」

「オルロワージュ……」

その言葉を呟くと、巫女さんの顔は一瞬泣きだしそうになった。

「そうか……」

とても遠い眼をして巫女さんはため息をつく。

「おぬし、名はなんという」

「オイラは赤カブ！」

「では聞こう、赤かぶよ。おぬしとあせるすはどのような関係なのじゃ」

「んーと」オイラは首を傾げる。「あれ……？　ほほ他人かな」

「では、なぜ他人であるあせるすを救う」

「オイラがそうしたいからだよ」

「なぜ、そうしたいのじゃ？」

「それはオイラにもよくわからないんだ。理由がなきや駄目かい？　アセルスは涙を流していたんだ。それは大切な誰かのために流す涙だったんだよ！」

「……………」

巫女さんは曇りのない眼でオイラの顔をしばらくじつと見ていた。巫女さんみたいに綺麗な人に見つめられるのは初めてのことだったからどんな顔をしていいのかわからなくてオイラが身をよじったりしかめつたらをしたりして困っていると、やがて彼女は「うむ」と頷いて東の方角を指差した。白魚のような指先で示された方角は途端に神秘に満ちて、なんだかオイラには光り輝いているようにさえ見えてくる。

巫女さんはまるで宣託でも下すような口ぶりでオイラに言った。

赤かぶよ。残念ながら妾には直接おぬしをどうこうすることはできんのじゃ。

しかし因果は結ばれた。運命とでも呼ぶべきものが今ここにはある。

おぬしの言うことがまことであるのなら、物語の鍵を握るのはやはりあやつということになる。ならば導くことくらいは妾にもできるかもしれないぬ。

おぬしは言うたな。願いは口に出すためにある、思いは叫ぶためにあると。ならばその言葉、見事貫き通してみせよ。

よいか、赤かぶよ。必要なのは「時」を語ることじゃ。七日七晩道なき道を行き、語るべき言葉を口にするのができたなら——あるいは出会うべき者に出会えるかもしれない。

そう言つて巫女さんは胸元から小刀を取り出すと、小指の先を僅かに切つた。滲みだした鮮やかな青の血液——そうか、巫女さんは妖魔だつたんだ——をオイラに擦り付ける。

「祝福あれ」と巫女さんは言つた。ちんぷんかんぷんだったけれどオイラはとにかく「ありがとう」とお礼を言い、彼女が指差した方へと歩き出した。

まずオイラはごろんごろんと転がつた。巫女さんの示したのは丁度神社へと続く長い長い階段の真横だったから、オイラは雑木林の茂る斜面を転がりながら落ちていく羽目になつた。「わああああん！」体のあちこちを地面にぶつけて目を回しながらオイラは痛みに呻いた。トゲや木の枝が体中に刺さつてえらいことになつた。転げ落ちるのがようやく止まると、痛くて痛くてぼろぼろと涙を流しながらオイラは再び歩き出す。とにかくこの道を行くと巫女さんは言つたんだ。だつたら歩かなきゃ。まっすぐに行かなきゃな。

「アセルス！ いま助けるぞ！ 待っていておくれよ」

勇気を振り絞るためにオイラは叫んだ。自分自身を奮い立たせるために、光の届かない森の中を単独で進む恐怖に委縮してしまわないように。

「アセルス！ お前さんがなぜ泣くのかオイラにはわかるような気がするんだ！ わか

りたいとオイラは思うんだ！」

お腹が減つても、へろへろになつてもオイラはとにかく歩き続けた。巫女さんの言つたように七日七晩、精神の擦り減るまでひたすらに歩き続けた。根つこの足を進めるたびにずきりと傷口が痛む。体全体が熱を持つて腫れだしているような気がする。気がつかないうちに舌が震えて、歩いているのか氣を失つているのか自分でもわからなくなつた。それでも歩くのをやめようとは思わなかつた。

「ひい、ひい、ふう……」

ぜえぜえと息をしながらオイラはとぼとぼと歩いている。暗い森の中、どこで知らない鳥がくるうくると鳴いていた。ああ、ここには光が差さない。オイラは独りぼつちだ。こんな風に、ずっと――。

オイラは声を震わせて叫んだ。

「永遠のような気がしていたよ！ 何が何でも終わらないんじゃないかつて思つていたのさ！ 闇の迷宮の中じゃ、何もかもが停まつて見えるんだ！ いくら時計があつたつて、どんなに時を刻んだつて、何も変わりようがなければ時間は凍りついてしまう！ 変化のない世界は時が停まつた世界。それは本当の地獄だ！ オイラはそれを知っている！ いつも考えていた！ オイラが迷宮に囚われている代わりに誰かが自由になれたのなら、それでもいい！ でもどんなに強がつたつて時々は不安になるじゃないか

！ このまま本当に外に出られなかったら？ この時が停まった世界で、死ぬことさえ出来ずに生き続けることになったら？ ……ああ、そうだよ。怖くて怖くてたまらなかつた。寂しくて、悲しくて、誰かに傍にいて欲しかった……慰めてほしかった……！ オイラはこうして自由になることができた。でも、オイラはあの苦しみを知っているんだ！ そうさ！ 白薔薇姫さんはまだあの迷宮の中にいるんだろう？ あの凍った世界でたったひとりぼっちでいるんだろう？ ……そうして、彼女を失ったアセルスはやっぱり一人ぼっちで、寂しくて、苦しくて、誰かを失う悲しみにああやって涙を流しているんじゃないか！

永遠の気がしていた！ でもそうじゃなかった！ オイラは自由になれた！ 時は確かに流れていたんだ！ オイラはそのことを知っているんだ！ そのことを、もう一度証明せにやならないんだ！ アセルス！ 白薔薇姫さん！ オイラは進むよ！」

そうして足を踏み出した瞬間、オイラは切り株の根っこに蹴躓いて無様に転ぶ。

「あいたた……」

弱々しく呻きながらなんとか身を起すと、切り株に誰かが腰かけている。見ているだけで吸いこまれそうな漆黒の外套を羽織った男だった。青年と言ってもいいくらい、若々しくて凛々しい横顔をしていた。男はとても美しい顔立ちをしていて、この前の巫女さんといい随分と綺麗な人にばかり会うなどオイラは少しだけ不思議に思う。

「懐かしい、匂いがする……」

男はぼんやりとあらぬ方をみつめて、懐かしそうに目を細めている。独り言を呟くように、男はそつと口を開いた。

「珍しいこともあったものだ。懐旧に誘われ、星を超えてこのような所へやってきてみれば……名も知らぬモンスターが永遠を叫ぶ……」

「あ、アンタ、どちらさんだい？」

「余の名前か？ 今は供の者もない……独りきりだ。今の余は誰でもない影、名前のない生き物だ。……そなたの名は？」

「オイラ、赤カブってんだ」

「そうか」仰々しく頷いて男はオイラを手招きする。「では赤カブよ。余にそなたの話聞かせてほしい。そなたは今、永遠の話をしていたのではなかったか？」

「永遠？」

オイラは首を傾げた。

「んーと。ああ、そうか……確かにそんなことを言ったかもしれないね」

「そなたは、永遠をどう思う？」

「永遠ていうのはさ」オイラは考えながらゆつくりと言葉を続ける。「なんだか、良い言葉のような気がするよね。永遠の命とか、永遠に続く思い、とかさ。ずっとずっと続く」

こと、終わらない、消え去ることのないもの」

「ああ、そうだな」

「でもオイラは最近まで長いこと闇の迷宮に閉じ込められていたもんだから、なんだか永遠って言葉が怖くなってきたところなんだ。……ああ、闇の迷宮って知ってるかい？」

「……知っているとはいえ、知っている」

「じゃあ説明は省くけど、その闇の迷宮に囚われて光を浴びることも誰かと会話することもできずに長い時を過ごして、そんなに辛い生活が永遠に終わらない気がして……、変わらないことや、どこまでも続いていくことが何よりも怖ろしい、そう思えたんだよ」

「……そうだな。そうかもしれない」

「闇の迷宮には時間が流れていない。時の流れない世界、虚無を湛えた変化のない世界。あれは妖魔の君オルロワージュ様の造り出した世界、オルロワージュ様の世界なんだ」

「ああ……」

「妖魔つてのはみんな長生きだつて言うからねえ。本当に、生まれながらにして永遠を宿した生き物なのかもしれないなあ……。どんな気分なんだろう。ちよつと想像がつかないや……」

男の雰囲気流されてオイラはつかうかとか会話に興じてしまったけれど、ようやく自分の目的を思い出してはっとした。

「いけない。オイラ忘れていたよ。やらなきゃいけないことがあったんだ。ごめんよ誰でもない影さん。オイラ行かなくちゃ」

「どこへ行くのだ？」

「ここではないどこかへさ。オイラ、アセルスを助ける方法を探しているところなんだ」「アセルス？」

「そうだよ。アセルスっていう女の子がいま、大切な人を失って悲しんでいる。オイラはそれをなんとかしてあげたいんだ」

「アセルスは今悲しんでいるのか？」

「うん。アンタ、もしかしてアセルスのこと知っているのかい？」

「それなりにさ」

「そうかい！ ならアンタも一緒に考えておくれよ！ オイラ、アセルスを助けたいんだ！」

「そうか。ならば手を貸そう」

さざらりと男は言った。

「え、本当かい？ 冗談とかではなくて？」

「ああ。余に少し考えがある。……だが、赤カブよ。その前に一つ聞いておきたいことがある。なぜそなたはアセルスを助けようとする?」

「そんなことどうだつていいじゃないか。早くアセルスを助けようよ」

「大切なことだ」

「……ううん、何だつてみんなそんなことばかり気にするのかな? 誰かが困つていたら、それを何とかしてあげたいと思うのは当たり前のことじゃないか」

「なるほどな。では更に問おう。アセルスを助けるために、そなたが死なねばならないとしたらどうする?」

「えっ! オイラ、死ぬの?」

「余の考えている方法をとればそうなる」

ひどいことをごく自然に言つてのける男に唖然としながら、オイラは口を噤む。

「赤カブよ。状況はまるでわからないのだが……そなたはいま、そうして傷だらけになりながらアセルスを助けようとして行動している。少なくとも、それだけの覚悟がそなたにはあつたのだろう。だがそれはどこまでの覚悟なのだ? なぜ、そなたはアセルスを助けようとするのだ?」

「理由なんて」オイラは苦しげに呻く。「理由なんて、わからないさ……! オイラにだつて上手く説明できないんだから……でも」

オイラは齒を食いしぼり、目の前の男を睨みつける。

「オイラが死ぬことでアセルスを助けられるのなら、それでも……いいさ」

「赤カブよ。本当にそれでいいのか？ よく考えてみるがいい」

「くだい！ オイラはこれでいいんだ！」

「だが赤カブ。そうしてアセルスを助けて何になる。アセルスはそなたのことをさほども知るまい。たとえ救われたとしてもそなたの献身に気付くことさえなく、そなたが死ぬばそれきりだ。そなたはきつと忘れられてしまう。なかつたことになつてしまう……それでもいいのか」

「み、見返りを求めるために生きているわけじゃあないんだ……オイラは……オイラは……」

「そなたは死ぬのだ、赤カブ。本当にそれでいいのだな」

「う……」

気がつくときオイラはぼろぼろと涙を流していた。オイラも涙を流すことができるんだ！ ほつとするのと同時に、なんだか訳もなく怖くなった。本当にそれでいいのか、と男は言った。考える、と男は言った。オイラはもう一度考えてみた。これまでのこと、これからのこと……。

「記憶がまるでないんだ……！」

オイラが苦しげに叫ぶと、男はうん？と首を傾げる。

「闇の迷宮の前にどこにいたのか、自分が誰だったのかもわからない。だからオイラには、自分はこの生き物なんだっていう実感が湧かない。思い出すことといえば、迷宮で来る日も来る日も数えていた時計の秒針ばかりだ。支えるものもない、縋りつく言葉もない。生まれたばかりの子供と同じだ……何の経験もない、思い出と呼べるものもろくに無い。だから……だから、ああ……そうか……」

オイラは涙で顔をぐちゃぐちゃにしながら、へらへらと微笑んで見せる。

「オイラは『価値』が欲しいんだ。オイラみたいに自分に自信が無くて、生きていてもいいのかどうかよくわからなくて心細い奴は、誰かを助けたくてたまらなくなっちゃうんだ。犠牲を払って、誰かを救って……そうすれば、オイラは良い奴だってことになる。誰かを助けた、意味のある生き物だってことになる……。結局はそういうことなんだ。……でも、それじゃ駄目かい？ 薄汚い理由じゃあ、駄目かい？ お願いだよ、アセルスを助けておくれよ！。そのためなら、この命を捨ててもいい！」

「いいだろう。赤カブ」

男は厳かに頷くとオイラの頭に手をのせた。
「だが捨てなければいけないのは命ではない。心の方だ。余はそなたの心を打ち砕かねばならん」

「こころ？ どういうことだい」

「そなたに真実を教えよう。そなたを迷宮に置き去りにしたのはゾズマだ」

「ゾズマ！ あの方がオイラの相棒？」

「いいや、違う。ゾズマは誰のことでも大切に思っただけでいいなかつた。だからゾズマは自身に痛覚倍増という術を掛けたのだ。赤カブというモンスターを失うことに対する心の痛み、苦しみを操作することで……ゾズマはそなたを疑似的に大切な存在へと変えた。そなたはゾズマが迷宮へ入る直前に生み出された生命。ゾズマが迷宮から脱出するためだけに造られた存在だ」

「あ……」

「残念だが嘘ではない。赤カブよ。そなたは勇敢であつた。たとえそれが欺瞞であろうとも、他者のために命を投げ出すことのできるそなたに余は敬意を表する。アセルスが忘れても、余がそなたのことを覚えていよう。赤カブというモンスターがこの世に存在したことを、出来る限り記憶に留めよう……」

知らず知らずのうちに、全身の力が抜けていった。

否定することは簡単だつたし、嘘だと叫んで聞かなかつたことにすることもできた。でも何故だろうな、オイラは男の話をまるで疑うことができなかつたんだ。なるほどなあ、と思つたよ。

そうかい、としわがれた声が聞こえた。どうもそれはオイラの声らしかった。命の枯れ果てる声だった。オイラは一体何だったんだ？　そう思った。けれども、そうして悲しむオイラのどこか奥底で——もう一人のオイラが諦めと共に皮肉めいた笑みを浮かべてこう呟いた。

——わかつていたよ。どうせ、こんなことになるんだろうさ。

◇

男の手の中で赤カブの体は見る見るうちに振れていき、くしゃくしゃに縮められてゴミのようになった。折り畳まれた肉の隙間から滲み出た体液が大地を濡らした。赤カブの血は赤かった。

男は赤カブの死骸を両手で包みこみ、ぎゅつと握りしめる。命を押し固めた死骸の球を携え、男はその場から離れる。掌の中で死骸球がぶるりと震える。男はそつと視線を向け、何も言わずに再び歩き出す。

たと言話をしよう。

たとえば、ある辺鄙な星のゴミ捨て場。ボロと呼ばれるその星は空から降ってくるクズ鉄を集めて暮らしている。そんな星の、ガラクタばかりが打ち捨てられた破滅の場所。物悲しい錆びの臭いや胸の詰まるような廃油の臭いが充満していて、息をするだけでジャンクになってしまいうような場所。色褪せた車の扉や折れ曲がって罅割れたピア

ニカが無造作に転がっているそんな場所にとても美しい妖魔が下りたつて辺りを見回し、「ふむ」と言う。

ほんの半月ほど前、一人の半妖がこのゴミ捨て場で小さな人形を見つけた。半妖は汚らしい人形を拾い上げ、悲しそうに眉を寄せてそつと人形に唇を落とした。なぜ、汚い人形にそんなことをしたのだろう？ もしかしたら、その人形が知っている誰かに似ていたのかもしれない。今はもういないその妖魔のために、半妖はその人形を胸に抱いて静かな涙を流したのかもしれない。

人形はとても裕福な星で造られた玩具だった。既製品ではあつたけれどもなかなか高価で、精巧に造られた人形だった。お姫様の形をしていた。母に玩具を与えられた少女が娘になり、大人になり、「もういらぬから」と言つて捨てられた人形が彼女なのだった。

半妖はしばらく人形を眺めていたけれども見ていただけで胸が苦しいのか「ごめんよ……」と辛そうに嘔き、人形を置いて立ち去つていった。

本当は持ち帰つてほしかったに違いない。でも、人形はその時のことをけして忘れなだらう。与えられた口づけの温かさを、半妖の震える掌の柔らかさを、絶対に忘れたりはしないだらう。

ゴミ捨て場に下り立つた妖魔が握りしめていた球体を人形に近づけると、球体はどろ

りと溶けて人形を覆った。するとある筈もない人形の心臓がどくりと鼓動を始めた。酸性雨に剥げかけていた塗装は見る間に色づき、穢れのない純白の肌になる。

「名前は？」と妖魔が尋ねた。

「あかばら」と彼女は言った。

第二十五幕 妖魔の小手（赤薔薇） 前編

赤薔薇。そうして目覚めたお前の命は、この世の誰とも似ていない。お前は未だ誰でもなく、お前はお前自身ですらない。

あなた誰？ いったい何を言っているの？ あたしはなぜ、ここにいるの？

……もうじき、ここにアセルスが来る。

アセルス？ アセルスって……。

それはお前を愛する者、そしてお前が愛する者。

待つて！ 訳のわからないことばかり言つて、あなた……！

お前は一度、全てを忘れる。そうしてお前はアセルスと出会うのだ。

言っていることがわからないわ。……それに、誰が私を愛しても、私が誰を愛するかは私のものよ。あなたなんか決められることじゃない。……でも、確かにその言葉の響き、アセルス、アセルス様、何故かしら、呟いただけで胸が疼く。

お前はその様にできている。赤薔薇。

そう……。あなたがそう造つたの。私を。そういうことなの？ でもきつとあなたの思う通りにはならないわ。

なぜだ？

どうせ決められた命なら、やるだけのことはやってあげる。でも、私は赤薔薇なの。
赤薔薇なのよ。

そうか……。ならばそれもよからう。生きよ、赤薔薇。白薔薇には出来なかつたことが、あるいはお前には出来るのかも知れん……。



……お前が見あげるその空からは、ときおり無数の物語が降り注ぐ。

ごろごろと喧しい音を立てて、星々の彼方から堕ちてくる流星群、隕石。ここ、ボロの星には無数の星屑が流れ落ち、住民たちはその石ころにツルハシを打ち付けては砕いた星屑をスクラップとして売り払い、あるいは加工して生計を立てている。空から降ってくる隕石の中に含まれるのは何も大気に焼かれた隕鉄ばかりではない。星を追われたもの、星を旅し、そしてその果てに滅びたもの。この星とは違う場所、違う時間を生きた者たちの面影が砕けた宙船そらふねとなつて流れつくことも度々だ。

それはいま、住んでいるこの場所とは違う文化、文明のもの。見知った世界を構成する理とはまるで違う技術を伴うもの。（こたわり）

お前の見上げる空からは無数の物語が降り注ぐ。その欠片を拾い集めて、お前はいつかけたものになる。

ずしん、と体の奥に響くような衝撃と共に目を覚まして、お前は寝台から跳ね起きた。寝ぼけ眼を慌てて擦り、窓の外に目を向けると、街の住人たちはもうすでに準備を終えて走りだしていた。極太の縄にとんかち、つるはしに発破。背中にくくりつけた折り畳み式の簡易台車をがちやがちや鳴らしながら隣人の「大男」ロビンが土煙を立てながら大型装甲車に飛び乗るのが見える。

「いけない」

思わず呟いてお前は朝食も取らずに身支度を始める。先に起きだしていたアセルスが「そんなに急がなくてもいいんじゃない？」と少しだけ呆れた顔をしているのにお前は怯む。なんだかみつともないところを見せてしまったかもしれない。お前は顔を赤らめる。本当ならばもっといつでも優雅に淑女のように振る舞いたいのだ。アセルスキットそう望んでいるだろう。……だが、この星ではどんなものだって早い者勝ちなのだ。開拓途上のこの星では、遅れて来たねぼすけに手に入るものなどなにもない。血生臭い事件を避けるための暗黙のルールとして、先に手に入れた者が所有権を持つという

ことになってはいるが、それだつて街の裏路地では守られているかどうか。

もごもご言葉にならない言い訳をして、お前はアセルスの頬におはようのキスをする。アセルスは穏やかに微笑み、「うん、おはよう」と言つてお前の頭をぽんぽんと撫でる。それだけでお前の全身はかつと熱くなり、寝起きの気だるさや喉の痛みも全てが吹き飛んでいった。相好を蕩けさせたお前は「行つてきます」と勢いよく声を裏返らせ、家を飛び出していった。

お前の後ろ姿を優しく見守つてアセルスはそつと囁く。
行つてらつしやい、赤薔薇。

そう。お前の名は赤薔薇だ。誰が名付けたのかは知らぬ。お前はそんなことなど知ろうともしなかつたし、勿論我々にとつても名付け親の所在などは些末な事に過ぎない。どうでも良いことだ。支配者はみな支配者たるべくして生まれるのであつて、何故自分が支配者なのかなどと考えはしない。お前にとつてのお前はいついかなる時も赤薔薇で、当たり前のことだつたのだ。お前が白薔薇ではないのと同じように。

お前は自分が何であるのかを知らない。お前にとつて重要なのは共に暮らしているアセルスが唯一無二の存在であるということだけだ。

それ以外のことなどはどうでも良かった。お前にとつては、自分とアセルスだけが世

界の全てだった。もともとは興味のなかつた星屑集めに参加するようになったのも、結局はアセルスとの生活を豊かにするため、彼女に楽をさせるためであり、お前自身は荒くれ達の汗臭さや不潔が嫌で嫌でたまらなかつた。お前にしてみれば、アセルスはこんな辺鄙な星にいるような女ではない。本来であれば王宮だとか豪華なお城だとか（というものを実際のところお前は絵本でしか見たことがないのだが）に住んでいるのが当たり前の女であり、ボロの共同学校の手伝いなんかをしているのはそれはもちろんアセルスがとんでもなくお優しい（我々の故郷におけるこの表現は一般的に侮辱的な意味を持つが）女だからであつて、長い長いアセルスの物語の中ではほんの僅かなページに過ぎない筈なのだ、とそうお前は考えている。

「今日こそ、何かすごいものを見つけてやるわ」

意気込むお前が落下場所に辿りつくと、隕石は既にあちこちを穿たれ、深く刻まれた穴に仕掛けられた発破が今にも起爆されようとしていた。発掘者の一人が「耳をふさげ」と叫ぶのを聞いて赤薔薇は慌てて身を伏せ、両手で耳を抑える。程なくしてぱあんといい妙に甲高い音と共に粉塵が飛び散り、砂交じりの風が赤薔薇の帽子を浚つていった。しまった、お気に入り空色の帽子なのに。耳を塞ぐのに気を取られて抑えるのを忘れていた。急いで振り返ると帽子は他の発掘者に踏みつけにされており、お前は唇を尖らせ、帽子をひつたくる。

まったく。これだから男は。レデイの帽子を踏んずけるだなんて、なんて野蛮なのかしら。お前はしかめっ面で砂混じりの唾を吐き捨てた。これもまたお前の求める理想とは程遠い振る舞いではあるが、この星で暮らしていくにあたって一番初めに覚えることは上手な唾の吐き方である。

気を取り直して隕石に近寄ると、およそ十ほどに分かれた隕石に男たちが荒縄をくくりつけ、綱引きの要領でひきはがしにかかっている。こうなってしまうてはお前の細腕で出来ることは何もない。お前にできるのは飛び散った破片や瓦礫の中をまさぐって使えそうなものを見つけ出すくらいなのだから。なるべくなら単価の高い鉞石が貼りついていれば良いが、その日は生憎と質の悪いかんらん石しか採ることができなかつた。背負ってきた槌を小一時間ほども突き立てた結果がその程度だったので意気消沈してへたりこんでいると、見知った顔が近付いてきた。お前よりも遥かに背の高い、柔らかな顔立ちをした栗毛のウブリエールだ。

「どおっ」

「ぜんぜん」

不機嫌に答えるお前に、またまたあくど不明瞭な相づちを打ってウブリエールが隣に座り込む。遠慮なく覗き込むと、友人のザックには大小様々な発掘物がつめこまれていた。発掘の盛んな別の星（というのは無論我々の故郷のことだが）からやってきたウブ

リエールは得体の知れない勘の良さで価値のある宝物を次々に見つけ出してしまふ。わき起こる劣等感にロングスカートの裾を握りしめて黙り込んでいると、ウブリエールは困ったようにため息をついた。

「そんなスカート履いてくるからよ。動きづらいでしょ」

そう言うウブリエールの服装はといえば、茶色系統に統一された作業服である。丈夫そうな綿のズボンにポケットが10もついたベストをつけている。彼女が身動きするたびにぶら下げた懐中電灯やら磁力計やらが揺れて音を立てる。

「私は私の着たい服しか着ないの。これでもかなり妥協したほうなのよ」

お前は口を尖らせて反論する。赤薔薇というその名の通り、お前が常に身に纏うのは深紅のブラウスとロングスカート。そして目の覚めるような空色の麦藁帽。確かに発掘現場には似つかわしくない服装ではある。

でもさあ、と言いかけたウブリエールの言葉を遮り、お前は澄まし顔で言った。

「良いことを教えてあげるわ。女にとって、服というのは自分がどういう女なのかを示す武器なの。その服というものを、たとえば環境やら用途やらによってコロコロ変えてしまつたら、自分自身がどういう人間なのかわからなくなってしまうじゃないの」

「ふうん。そんなものかなあ……。あたしには、よくわからないセカイだな、そういうの」

「もう少し大人になればあなたにもわかるわよ」

「そうかなあ。そうなのかなあ……」

妙に深刻そうな顔をして考え込んでしまったウブリエールを放っておいて再び発掘を始める。こんな時ウブリエールであったなら『アニマの気配がする』だのなんだのとお前には訳のわからないことを言つて瞬く間に値打ち物を見つけてしまうものだが、そう簡単にはいかない。剣型に尖ったスコップの先を勢いよく瓦礫へと突き立て、おもいつきり体重をかけて梃子の原理で星屑をひっくり返す。手を真つ黒に汚しながらその中を漁り、これでもないあれでもないと眼を凝らさなければならぬ。

「たぶんー。もうちよつと右のほう。なんか、あやしい感じがする」

麦パンをむしゃむしゃと啜えながらウブリエールが暢気に助言する。「うるさいわね」と言いつつ、今までの経験からも確かな友人の勘を信じてお前は右へ右へと掘り進めていく。と、そこでお前は不思議な金属片を発見した。見慣れた土くれや鉄屑とは異なり、手にとつて見ると羽根のように軽く、表面はやすりでもかけたようにすべすべしている。大気圏での摩擦によって落下物の多くは焼け焦げ、歪んでしまう筈だったが破片は傷一つなく、澄みきつた純白を湛えている。

「きれー」

思わず呟いて赤薔薇は周囲を見回すと、似たような破片がいくつかが散らばっている。

割れている以上は何かの役に立つということも無さそうだったが破片を繋いでしまえば見栄えも良くなるだろう。何かの贈り物にでもなるかもしれない。そう考えてお前はせつせと拾い集め、全部で17片にもなる星屑の欠片を両手に抱えてウブリエールの元へと戻った。

「あなたの言ったとおりだったわ。ありがとう」

素直に感謝の言葉を述べ、パズルのピースを組み合わせるように破片の断面を合わせていく。「まあね」とウブリエールは得意そうにしていたが、お前の手元を眺める目つきだけは不安そうにしている。

「それ、組み立てるの？」

「そりやそうよ。だって砕けたままだったらそれこそ何にもならないじゃないの」

「うん……。それは、そうなんだけど……」

「何？ 言いたいことがあるのなら、はつきり言って」

「それ、なんだか悪いもののような気がするの。確かに強いアニマは感じるんだけど」

「そんなこと言われてもわからないわよ。あなたの言うことは基本的に信じるけど、私にはあなたの言うその『アニマ』というのが感じ取れないのだから」

『アニマ』って言うのはね、魂のことなの。生き物だけじゃない、この世のものには何にでもアニマがある。あたしが使っているスコップにだってアニマが宿っていて、その

アニメをうまく引き出してやればスコップの『掘る』力を何倍にでも強くできるのよ」
「何べんも聞いたわ、その話」

「でも……でもその破片のアニメはなんだか気味が悪いのよ」

「汎霊説アニミズムみたいなものでしょう、それ。T先生がこの前授業で言ってたわ。……私、宗教には興味がないの。あいにくだけど」

「そういうことじゃなくて」

「ううん。わかっている。あなたは嘘をついているわけじゃないし、たぶん、本当にこの破片には良くない魂だか何だかが宿っているんでしょね。でも私は嫌なの。たとえそうなのだとしても、目に見えないそんなものに脅えたり怯んだりして生きるような真似はしたくないの。ただそれだけ」

「……………」

「ごめんね、ウブリエール。親切で言ってくれたのに」

「ううん、いいの。あなたって強いからね」

「そうかしら。ただ頭が固いだけかも」

二人は顔を見合わせてくすりと笑い合った。ウブリエールはそれでもまだ心配そう顔をしていたが、お前はほどなくして全ての破片をつなぐことができた。接着剤を使つたわけではないのだが、破片と破片は見えない磁力で引っ張られているかのようにはびた

りと吸いつき、奇妙なバランスを保ったまま立体を形作り、最終的には純白の卵になった。

「できたわ」

歓声を上げて手の中で今日の成果を転がす。破片を繋いでできた卵——破殻卵ブレイクエッグは罇こそあれど今日産み落とされたかのように白々と輝いている。

「この卵はどこから来たのかしら。星々の向こう側、この空の果ての果ての果てを旅して落ちて来たのかしら」

そう言つて破殻卵を太陽に透かす。卵は日光を浴びて、ふと、気のせいだろうか、どくん、と小さく鼓動したような気がした。ウブリエールがぞつとしたように顔をゆがませる。

こうしてお前は我々と出会った。何も知らぬお前が愚かにも卵を握りしめた時、既にしてお前の運命は決まっていたのだ。

◇

……そして、少女はたまごを握る。

卵を拾いあげた者はみな父となり母となる。孵らぬ卵に憐れみを寄せてそつと力を込める時、掌の中で揺れる卵がほんの僅かに鼓動する。未だ眠りの中にいて母の名を知らず、殻を破る時を待ち続ける虜囚の雛。たまご。卵を握りしめたその瞬間から、ほら、忘れてはいけない、あなたは親になったのだ。少女は卵に頬を寄せ命の温度を確かめる。硬質で、けれど暖かく、仄かに伝わる体温。いのちの証明。

卵を拾い上げることに何の疑問も抱かなかつた。それはごく当たり前で自然なことであり、目を背けられる理由などどこにもありはしなかつた。なぜなら少女は捨てられた子供だったからだ。

自分が両親に捨てられた子供であるということに少女はそれほど絶望していたりはしなかつたけれど、それでも時々考える。もし、自分をもっと美しければ。賢ければ。お母さんとお父さんは自分を捨てなかつたのではないか。自分をもっと秀でていれば。自分にもっと力があれば。下らないと思ひ惨めだと感じながら、それでも少女は考えた。そんなことを考えたとして時が巻き戻る訳でもなし、何の意味もない空想だとわかつていてそれでもなお、誰もがそうであるように少女はやはり『もしも』を願う。

弱々しく震える卵を撫でる。誰かが、何かが、この卵の中で懸命に生きている。少女はそつと独り言を唱える。祝福のつもりで口ずさむ子守唄のようなもの。

ぼうやおねむり、いこいの夢路へ。

眩いたその言葉を口づけ代わりに卵に落とし、腕に抱く弱々しい命を優しく揺する。やがて卵は語りだす。少女の予想とはまるで異なるしわがれた声で、その邪悪さを隠そうともせず。

これは一体どういうことだ。ようやく見つけた宿主だというのにこの女にはアニマが無い。この星の原住民は確かにアニマが乏しい傾向にあるが、それにしてもこれは異常だ。むすめよ、お前は一体何者だ。

卵の尊大な口調に淡い夢想を砕かれた少女は顔をしかめる。

なあに。あなた。

私のことなどはどうでも良い。問題はお前の方だ。なぜ私の精神支配を受けぬ。

精神支配？　なんだか物騒な言葉。ウブリエールの言ったとおり、やっぱり良くないものだったかしら。

質問に答えろ。アニマを持っている限り、私の精神支配から逃れ得る術はない。私に支配されぬということは、生きていないということも同じなのだぞ。

言っていることが良く分からないのだけど。人にもものを尋ねるのなら、尋ねる態度と
いうものがあるのではないの。

……しばし待て。

私はいますぐあなたを捨ててしまったって構わないのよ。

……まあ、待ちなさい。お嬢さん。そんなに頑なな態度をとらなくてもいいではありませんか。

今度は随分と下手に出るのね。

今、あなたとお話が弾むような人格を検索しているところです。だからちよつとだけ、ちよつとだけお待ちになって下さいな。

仕方ないわね。その話し方は癩に障るけれど、我慢してあげる。

——人格検索——人格検索——少女統合中——。はい。
もういいの？

……ええ。いいわよ。御免なさいね。

いやだ、なんだか薄気味悪いわ。急に女言葉になって。

仕方がないことなのよ。あなたと年の近い少女の人格は私以外にはいないもの。

私は赤薔薇。あなたは何なの？

ミスティ。私のことは、ミスティと呼んで頂戴。



私が恋を告げた時、周りの誰もが顔を顰めて訳の分からないことを言った。年や性別のことを挙げつらつては諦めるだのそれは一時の気の迷いだのと小煩いことを言う。ほんとうに、大人つて馬鹿ね。人を愛することにどうして言葉が必要な。言葉を幾重かさねても、アセルス様を想うこの気持ちの形にすることはできないのに。言葉というものには誰かに何かを伝えるために発するものだけれど、唇から零れ落ちたその途端に言葉は世界に縛られて歪められてしまう。唇から遠ざかれば遠ざかるほど真実の思いは消えて物語になつてしまうの。姿形が美しいとか、声が綺麗だとか、そんな言葉を並び立ててどうするの。事故や病気で容姿や声を失つたらその愛は消えてしまうの？ そうじゃない。そうじゃないわ。自分に優しくしてくれるからとか、性格が良いからだとか、そんな理由だつてちゃんちやおかしいわ。誰かが何かを持っていて、その中のいくつかを自分に分けてくれるからといって、それなら私はこの人が好きだなんて、そんな乞食みたいな話あるわけじゃないじゃない。

愛の言葉は唇の中にだけ封印していればいい。もしどうしても愛する人に伝えたいと思うのなら、言葉ではなく口づけで返すべきよ。私はそう信じてる。

理由なんてなかった。ただそうなるようになっただけ。それが私の運命だった。一目見ただけで、私はあの方を好きになった。

幼いころの記憶は、誰しもがそうであるようにはつきりとはしない。私にとつての一番最初の記憶は、このボロの星に広がる満点の夜空。黒々とたなびく雲の銀河をつんざいて、迷い星が視界の端に堕ちていくのが見えた。どしん、という喧しい音と、どこか懐かしい地鳴り。そのとき私はどうしたかしら。突然揺れ動きだした世界に顔を歪めて泣いていたのかしら。それとも何も知らずにけらけらと笑っていたのかしら。

私は何も知らなかった。私は生まれたばかりで、小さなおくるみに包まれて捨てられていた。この星の錆びれたスクラップ置き場で、親の顔さえ知らずに星を見ていた。

そこに丁度通りがかつたのが、アセルス様とその他の妖魔たちだった。大切な人を失い、そしてイルドウンに妖魔の剣を砕かれて憔悴しきっていたアセルス様は穏やかな生活求めてこのボロへとやって来たのだと言う。

はじめ、私の存在に気付いたのはアセルス様を案内してきたゾズマだった。

——やあ、なんだ、この子は。随分と『彼女』によく似ているじゃないか。

——ゾズマ様。今は、あの方のことは……。

おつきのメイドが言葉を濁したのを、なぜだか私ははつきりと覚えている。呼ばれる前から私はその男の名を知っていたような気がした。破廉恥な格好をした赤毛の妖魔。目にしただけで言い知れぬ嫌悪感が私を襲い、赤ん坊だった私は必死になって身を振る。

——ああ、ごめんごめん。でもあんまりにもそつくりだったからサ。……ほうら、おちびちゃん、お手。

……。

——んん？ どうしたのかな？ 反応が鈍いねえ。……ほらほら、おちびちゃん。へらへらとうすら笑いを浮かべるゾズマに腹を立てた私は、この男の腕を切り咲いてしまうつもりで爪を立てたが、弱々しい私の力ではべちん、と間拔けな音を立ててのが精いっぱいだった。ゾズマの手を引っぱたいて私は言った。

——ぞじゅまは、きりやい！

——あ痛た。——あれ、嫌われてる？ おかしいなあ、流石に初対面なのに……。

——気持ちがよくわかるわ。でも、いきなり叩いたりはしては駄目よ。

メイドがしたり顔でものを言う。仮面をつけているのも不気味だし、私はこのメイドのこともあまり好きではなかった。望まぬ大人たちに囲まれて泣きだしそうになっていた私は救いを求めるように彼らの背後に視線を向け——そして、そこでとうとうあの方を見つけた。その時の感動を私はうまく言葉にすることができない。宗教に目覚める時というのはこういうものなのかもしれない。自分の信仰を捧げるべき方に出会えた悦びと官能。あるいは——絶対的な支配者を見つけることのできた奴隷の歓喜。そうでなければ、殻を破ってはじめて母鳥を目にした時の雛の気持ち。ううん——やつぱ

り、どれも違う。どれだけの言葉を連ねてもアセルス様に出会った時の感情にはほど遠い。説明しようとするればするほどそれはほんとうの私の気持ちからはかけ離れてしまう。私はアセルス様を見つけた。知らないうちに私は涙を流してあの方の名前を呼んでいた。

——あ、あせ……あせるすしやま。

——アセルス？　アセルスと言ったの？

——ぞじゅまは、きりやい！　でも、あせるすしやまは、しゅき！

あせるすしやま。あせるすしやま。たどたどしい言葉であの方の名前を呼んでいた。もつと近くであの方の顔が見たい。私のことを見て、この頭を撫でて欲しい。一心に迷いなく、私は餌をねだる猫のように鳴き続けた。

——アセルス。この子は君のことを呼んでいるよ。

——……どうして？

——どうして、だって？　理由なんかないさ。どんな人間だって誰かの庇護を求め、いつの間にかに大人になって、知らないうちに親になるものだろう。

——親……。いや、私は……。

——手を差し伸べるんだ。アセルス。彼女は君を待っている。君がいなければ、彼女は一秒だって生きちゃいかれない。この子が君を呼ぶ声が聞こえるだろう？

ゾズマの言葉によってというのが実に忌々しいことではあるけれど、アセルス様はおそれるおそれる近寄って私の横たわるおくるみにそつと手を掛けた。あせるすしやま！喜びに私は叫ぶ。アセルス様はゆっくりと私の顔を覗きこむ……。

どうしてだろう。その途端にアセルスはふと胸を詰まらせたように言葉を失くして、そつと目を伏せた。

——白薔薇……。

どうして、そんなに悲しそうな顔をするの。私のせい？ アセルス様を苦しめているのは何なの？

——ほんとうに、よく似てる……。しろばら……。

何かが間違ってる。その時私はそう思った。だって私は赤薔薇と言うの。記憶とよべるほどの思い出もありはしないけれど、自分の名前だけははつきりと知っていた。私は、赤薔薇。どうして？ どうしてアセルス様は私を白薔薇と呼ぶの？

——ああ……そっくりだ……。なんて、こと……。

——あせるすしやま……。しゆき……。

——うん……。うん……。ありがとう……。ほんとうに……。

いつの間にか、アセルス様までもが大粒の涙を零していた。私の体をぎゅつと抱きしめ、優しく頬ずりをして、アセルス様は私の額にそつとキスをしてくれた。

——私も貴女のことが好きだよ……。名前も知らない貴女……。……。もう、心配なんていらぬ。貴女のことには、私が守つてあげる……。

——おいおい。本気で言つてゐるのかい、アセルス？ そんな赤ん坊なんて、どうみても足手まといにしかならないよ。針の城の追手が来たらどうするのさ？

手を差し伸べると言つたその口で、ゾズマは私を置いていけと言つた。例によつてニヤニヤと薄笑いを浮かべながら。

——……。でも、この子は私の名前を呼んで……。放つておくことなんかできない。

——やれやれ。まったくもつて、君つてコは相も変わらず不自由が大好きなんだな。感傷で他人を助けるなんてのは人間がやる馬鹿げた行為のなかでも最たるものだと思ふけどなあ。

——ゾズマ様。

——あ、なんだいディアデイルム。その冷たい眼は。——いたた。ごめんごめん。耳を引つ張るのはやめておくれよ。



50年ほど前、一人の実業家がボロに住む身寄りのない子供たちのために自らの財産を費やして小さな学校を作り上げた。また彼はボロの住民たちから基金を募り、有志によつて構成された法人によつて自分の死後も共同学校が運営されていく仕組みを遺していった。学校は彼の名をとつてタイム共同学校と名付けられ、ボロに住む幼い子供たちの教育を担う重要な機関となつてゐる。

お前はいま、この学校で中等2年生として勉強している。中等2年といつても生徒たちは13〜15歳と様々であり、クラスも一つしかない。もともと教師がそれほど多いわけでもなく、また学力も生徒によつてまちまちであるために仕方のないことである。文化レベルの低い未開惑星というものはおおむねこのように猿と大して変わらない生活を送っているものだ。もともと戸籍管理のしつかりしていないボロでは出生届を出すという文化さえ未だ根づいてはおらず、生まれた年のはっきりしないストリートチルドレンなどを広く受け入れねばならない共同学校では学年という区切りが曖昧にはなるのは当然のことであつた。

お前がアセルスとこの星で暮らし始めてからはや三年になるが、その間に体はぐんぐんと成長し今では14歳のウブリエールと同じクラスで机を並べている。アセルスとの会話、またT先生のライブラリに保存されている書物を読み耽ることですさまじく赤薔薇の早熟な精神は時にウブリエールを圧倒しさえする。人間としてはまず異常といえ

る成長スピードではあるのだが、タコの機械技師をはじめ外の星々からの様々な旅人を迎えているこのボロ口ではそれほど珍しいことだとは思われていない。

発掘を終えた頃にはもう朝日はすっかり昇りきっていて、お前とウブリエールが学校へ到着したのは二時間目も半ばを過ぎた頃だった。お前たちのクラスを担当しているT先生は物腰こそ柔らかいがルールには厳しい。後ろのドアをそつと開けこつそりと忍びこんだものの機械の精密さを誇るT先生の眼を誤魔化すことはできず、二人はあえなく見つかってしまう。

「赤薔薇さん。ウブリエールさん。どうして授業中に後ろから侵入したのデスカ。あなた達は、朝の点呼の時には不在だった筈デス」

「…………ごめんなさい。T先生。遅刻してしまいました」

「それはわかっています。遅刻した場合は一階の教務室で中等主任・副主任またはそれに準じる者から遅刻届用紙を受け取り所定の項目を記入してから提出して下さい。遅刻届は五枚溜まる度に罰課として規定の掃除または筆写または校門での挨拶作業が科せられることになっています。もし知らないのであれば生徒手帳の32ページを参照しておきましょう。重要なことデス」

「あのう…………そのことなんですけど…………」

おそるおそるウブリエールが手を挙げる。

「何デスカ。ウブリエールさん」

「あの、実はあたし達、朝の流星の発掘に行つてたんですけど、そこであの、何かお腹の痛そうな妊婦さんがいたので病院まで案内してたらおそくなっちゃったんです！」

「そうデスカ。それは良いことをしましたね」

「だから、そのう……遅刻は遅刻でなんていうか致し方ないのではないのかなあ〜なんて思っちゃったりするんですけども？」

「あなたの言うことは尤もデス。ウブリエールさん。あなたの行為は実に素晴らしい行動と言えます」

「おつ。ということとは……？ ということは私たちの遅刻は〜？」

「はい。あなたたちのことを学年主任・副主任またはそれに準じる先生はきつと暖かく迎えてくれることでしょう。遅刻届用紙の遅刻理由欄には今述べたことを記載することを忘れないように」

「ですよ、すみません……」

「今は授業中ですから遅刻に関する手続きは後にしてください。赤薔薇さん、ウブリエールさん。席について。授業を再開します」

渋い顔をしながら「くそう、また負けた……」と悔しそうにしているウブリエールに呆れながらお前は大人しく椅子に座る。机の端に彫刻刀で相合傘が掘られているのが

お前の机だ。傘の下には『アセカキアシナガイタチダケ』と書かれている。

「……このリージョン界において、主だった種族は四つあります。ヒューマン、妖魔、メカ、モンスター。この四つデス。明確には分類できないものもありますが、リージョンに存在する動物は——これはあくまでも能動的に動くもの、という意味ですが——基本的にはこの四つのどれかになります。今日はまずヒューマンについて説明したいと思います。ヒューマン。これは俗に言う人間のことデス。この学校に通う生徒、つまりあなた達のほとんどはヒューマンです。ヒューマンは有性生殖によって繁殖し、直立二足歩行を行う哺乳類を言います。多くの場合ヒューマン同士で群れ、社会を形成し、音声や文字による複雑なコミュニケーション能力を持っています。食性は雑食で高い思考能力を持ち、『閃き』——新たな道具の使用法を考えつくことができるのもヒューマン特有の力だと言われています。ヒューマンが繁栄しリージョン間を移動するまでに至ったのもこの『閃き』によるものデス。雷によって生まれた炎から火を保存し、肉を調理することを覚え、明かりや武器として使うことさえ編み出した。ヒューマンはそうして進化していったのデス——」

T先生の授業を聞きながらお前はふと、自分はこの中のどの種族に当てはまるのだろうか、と考える。普通に考えればヒューマンだろう。だがときどき、自分は他の子たちとは何かが違うのではないかと感じることもある。無論、それは思春期に特有の疎外感や

優越感の顕れなのかもしれない。しかし日に日に大きくなっていく自らの体や心のことを考えていると不意にどうしようもない不安に襲われる。自分はウブリエールたちとは別の生き物なのではないか。いつか、自分は彼女たちとは違う場所へ行くことになるのではないか。そう思うと手足の先がしんと冷え、お腹の中がきゅつと痛くなる。ウブリエールと別れるだけなら、悲しくはあるが仕方ない。既に何人かの知り合いとは、引越しや家の事情などでお別れを経験している。昨日まで机を並べて下らない会話をしていたことを相手がいなくなつた後で茫然と思ひ出し、心のどこかでうつすらと欠けていくような気持ち。何度も味わいたいものではないが、自分はそれに耐えることができるかと赤薔薇は知っている。仕方のないことだ。出会いがあれば別れがある。生まれたからには必ず死ぬ。世界はそういう約束で出来ているのだ。

けれど、とお前は思う。たとえ他の誰と別れるのだとしても、アセルスとだけは離れたくない。あのひとと一緒にいられないのなら、この世界には何の意味もない。

ヒューマン。妖魔。メカ。そしてモンスター。リージョン界に存在する種族はこの四つだ、とT先生は言った。しかし、アセルスはその中のどれとも違う。アセルスは半妖なのだ。もともとは人間だったアセルスは死にかけてたところに妖魔の血を与えられ、半分は人間、半分は妖魔として蘇つたのだという。この世に半妖はただ一人、と以前ゾズマは言っていた。だから僕は彼女の行動に興味を惹かれてならないんだ、と。

この世でたった一人の種族。孤独と滅亡の濁流を生きる乙女。その言葉は、ああ、なんて素敵な響きなのだろう……。そう思う一方で、しかし、お前は自分とアセルスとの違いに齒がみする。少なくとも、自分は半妖ではない。自分の血は、名前の通り赤色だ。アセルスには妖魔の力が宿っている。永遠を生きる者、けして損なわれることのない美貌。だが自分の寿命はいつまで持つのだろう。仮に長生きできたとして、自分はやがて老い、醜くなる。そうなった時、自分はどんな顔をしてあのひとの傍にいろのだろう……。



そこに何が埋まっているのかは、誰も知らない。けれども発掘者たちは未だ見たことのない神秘を求めてツルハシを握り力の限り星屑に打ち立てる。虹の根元には宝物が埋まっていると信じて疑わない童のように。財産も故郷も捨てて辺境へと黄金を求め、る旅人のように。

かちり、岩が削れ、こちり、石が砕ける。明々とした鉦石の断面。仄かに輝く原石。遙か古代、超文明の置時計、顔も知らない誰かが声を吹きこんだ蓄音器のかけら。光を透過する不思議な紗幕、滾々と墨の湧き出る壺。知らない誰かがそれを作った。知らない

誰かがそれを愛した。命を落とした誰かの代わりにその後の物語を紡ぐため、発掘者たちはツルハシを掲げる。かちり、岩が削れ、こちり、石が砕ける。何かを知りたいと思うから瞳を輝かせて夢を見る。

星屑の物語。眩くきらめく夢幻のファンタジー。

アセルス様は私の全てを知っているのに、私はアセルス様のことを知らない。だから私は毎夜、聞き分けのない子供のフリをしてアセルス様に昔語りをせがんだ。

……それで？ それからアセルス様はどうされたのですか？

うん。金獅子姫に負けてからはしばらく戦闘訓練ばかりしていたよ。自分の実力不足を痛感したばかりだったからね。なるべくなら戦わずに済ませたいという気持ちもあつたけれど……それでも、身を守る最低限の力が必要だから。

わ、私も！ 私もアセルス様を守れるよう、強くなります！

そんな必要は無いよ。赤薔薇。君は戦わなくてもいいんだ。誰かを傷つけることよりも、私はもつとあなたにたくさんのことを知ってもらいたいな。

はい……。

ごめんね。あなたの気持ちはとっても嬉しいよ。ありがとう。……それで、次に現れたのは針の城の黒騎士イルドゥンだった。

黒騎士、ですか？

うん。私も詳しくは知らないんだけど、黒騎士というのは針の城でも高い実力を持った妖魔にだけ許される称号なんだって。そのイルドウンていうのは私に戦い方を教えてくれた妖魔でもあつたんだけど、何しろ頑固で面倒くさい奴だったからつきりオルロワージュに言われて私のことを捉えに来たんだと思つたんだ。

でも、それは勘違いだった。話を聞いてみると、親友のラスタバンさんの頼みで私を守りに来たんだってことがわかった。ラスタバンさんは同じ黒騎士のセアトにやられてしまつて、最後に私のことを託すと言つて消えたんだって。

しばらくはなんだか面倒くさい奴が来てしまつたなあ。と思つていたよ。……でも、何しろその強さは折り紙つきだからね。頼もしいのも事実だったな……。実際、イルドウンは怖ろしいほど強かつたんだ。次に針の城からやってきたのは黒騎士セアトと彼の従騎士達だったけど、三体の従騎士は彼が単独で倒してしまつたから。たぶん、イルドウンがいなかったら私はセアトに負けていたんだろうな。セアトは本当に強かつた。妖魔なのに人間の武器や道具も使いこなして、私だけでは歯が立たなかつた。

そこまで話し終えると、アセルス様は表情を暗くして俯いてしまつた。聞かない方が良いだろうかと思ひながら、アセルス様のそんな表情のワケをどうしても知りたく

て、いけない私は気付かないふりをして続きをせがんだ。

アセルス様はなんとかセアトに打ち勝つことができた。けれどもその代償として、彼女を慕ってくれていた紅という女性を失うことになってしまった。アセルス様はそのことを今でも悔やんでいるのだという。私は紅に何もしてあげられなかった、とアセルス様は言った。私が彼女を助けてあげなきやいけなかったのに、と。

私はアセルス様とその紅という女性との関係がどのようであったのかは知らない。けれども、そうして涙を流されているアセルス様を眺めていると、心のどこかがささくれだつて行くのがわかる。羨ましい、と私は思う。私も紅のように永遠になりたい。アセルス様の命を救うことで、間接的にでもこのひとの命の一部になりたい。

私はセアトに勝った。そうならなければならぬと知っていた。この体に流れる支配者の血が、私がどうすべきかを教えてくれた。たぶん、その時の私は妖魔としての力に溺れていたんだと思う。白薔薇は私をちゃんと止めてくれたのに、私は彼女の意見を聞こうともせずに、この牙を……。

その方はいま、どちらに？

……いないんだ。もう、どこにも。

どこにも？ お亡くなりになってしまったのですか？

ううん、違う。その女はね……オルロワージュが造りだした闇の迷宮にいる。いまでも、あそこに囚われている。……セアトを退けたその後で、とうとうオルロワージュ自らが私たちを捕らえにやってきた。闇の迷宮に閉じ込められ、脱出できたのは私だけだった。ファシナツールから逃げ出した時は三人だったのに、私はまた一人になってしまった。何もする気が起きなかった。どうすればいいかも、自分が何をしたいのかもわからなかった。自分らしくいられる場所を、辺境を求めて旅に出た筈だったのに、結局私がしたことと言ったら彼女たちを不幸にしただけじゃないか。そう思うと……いろいろなことが虚しくなってきた。イルドウンが私に愛想を尽かすのも無理はないよ。彼は「立て」と言っただけで私は立ち上がらなかつた。イルドウンは私の妖魔の剣を砕き、私のことも殺そうとした。ゾズマとデアアタイムさんの手助けでなんとかその場を逃げ出すことは出来たけれど、イルドウンはもしかしたら今でも私のことを狙っているのかもしれない。

そんな……。傷ついているアセルス様を襲うだなんて、そのイルドウンという男はなんてひどい！ そんな男は屑の中の屑です！

ははは……。



「前回の授業では、リージョン界における四つの種族のうちヒューマンについて学びました。今日は二つ目、妖魔について話したいと思います。妖魔はヒューマンと良く似た生物デス。直立二足歩行を行い、言語を介してコミュニケーションを図ります。頭、胴体、手足という体の構造自体も変わりませんが、おおむねその外見・容貌はヒューマンのそれよりも優れています。ですが彼らの生態に関してはまだよくわかっていないというのが実際のところですよ。まず妖魔は繁殖を行いません。他の動植物のように幼体として生まれ成体へと成長するという過程を経るのではなく、一種、自然発生的に誕生するのだと言われています。しかしそれは単に我々が妖魔の誕生の瞬間を観測できていないのかもしれないですね。ペンシンリ大学チョーベンリ教授の論文によれば、とある妖魔の最古の記憶とは森を歩いているものなんでしょう。気がつけば森を歩いていて、自分が誰なのかを既に知っていた、と。昨日までの記憶と呼べるものは無く、ただ自分の名と生きていくための知識だけが頭の中にあつた。協力してくれた妖魔は質問に対してそう答えていました。

さきほど私は妖魔は自然発生すると言いましたが、それはあくまでも純粋な妖魔の話デス。妖魔の繁殖方法については詳しく判明していませんが、しかし彼らは血を吸うことによってヒューマンを妖魔へと転化させることができます。血を吸われたものは強

制的にその妖魔に従わされ、虜となります。人間としての記憶は残ったままですが、その体は妖魔のそれと等しくなります」

「先生！ そういうことなら、自然発生した妖魔というのは、実は別の妖魔に血を吸われたことを忘れてしまっているだけなのではないですか？」

「はい。大変良い質問です。その可能性は十分にあると思います。しかしそうだとすると、いくつかの限定的な条件が必要になります。まず、吸血されたという記憶を失っていること。それどころかその妖魔は人間であった頃の記憶まで失っていることになります。そしてその次に吸血を行った妖魔の虜となっていないこと、が挙げられます。自然発生タイプ、あるいは『自然発生した・いつの間にかに存在していた』と思っている妖魔は人間として別の妖魔に吸血され、何らかの事情によりそれまでの記憶を失いし自分の名前と多少の常識だけは必ず覚えてきたままで、かつ吸血した妖魔はこれまた何らかの事情により滅んでしまった、ということになります。その何らかの事情というのはもしかしたら吸血という行為における忌避・拒絶反応によるものなのかもしれません、いずれにしても仮説の域を出ません。

さて——妖魔の誕生方法についてはこれくらいにしておいて、今度は妖魔の特殊な社会について説明していきます。妖魔の社会は完全な縦社会です。妖魔には『格』というものが厳密に存在し、格が劣っている妖魔はけして上の存在に逆らうことはできません

ん。妖魔の格は他を魅了する美貌、他を威圧する恐怖、そして何物にも屈しない誇りという三つの要素によって決定されます。最も格の高い妖魔は『妖魔の君』と呼ばれ、自らの力で星を^{ほし}生み出すことができると言われていきます。

優れた身体能力を持つ妖魔ですが、ヒューマンとは違いその能力が成長することはありません。その代わりに妖魔は吸血や憑依によって他者の力を取り込むことができます。吸血は主にヒューマンや妖魔に対して行います。大して憑依は妖魔武具と呼ばれる特殊な武器の中にモンスター之魂を封印するという形で行われます。中級以上の妖魔はそれぞれ、剣、小手、具足、鎧を自らの力で生み出すことができ、これらの武器でモンスターを絶命させることでその魂を吸収するのです……」

いつものように淡々とした口調でT先生が授業を続ける。頬杖をついてぼんやりと話を聞いていると、鞆の中にしまい込んだ卵——我々の交渉役たるミスティが不意に話しかけてくる。我々の精神位相でもこのミスティという娘は特に低い階層に位置する女ではあったが、しかし数多に取り込んだはずのアニマの中でもお前のような小娘に近い精神モデルはミスティ以外には存在しなかった。不本意ではあるが、我々はしばらくこのミスティにお前との折衝を一任していた。

（ねえ、教えて頂戴、赤薔薇。あなたにはどうしてアニマが無いの？ 妖魔にも、モンスターにも、樹や水や石ころにさえもアニマは存在しているのに、あなたにだけはそれが

ない。それはなぜ？ 少女のような外見をしているだけで、本当のあなたは鋼鉄のメカなの？)

良く通るミスティの声に、しかしクラスメイト達は誰一人反応を示すことなく素知らぬ顔で教壇を眺めている。ミスティの声はお前にしか届かない。

(さあね。私がお前のかなんて、私にはわからないわ)

心の中でそつと念じる。と、すぐさまミスティが返事をする。

(あああら、可哀そうに)

(可哀そう？ 生憎と卵に同情されるほど惨めな生き方はしていませんもりだけど)

(……だって、生き物と言うのはみな、自分に何ができるのか、自分自身が何者なのかを求めて生きているようなところがあるでしょう。……それなのに、ねえ、自分が何なのかわからない、魂さえも持ち合わせてはいないというのは、それこそ人形、機械のようなものと一緒ではないの?)

ミスティは揶揄するようにくすりと笑う。生きていない、と再三告げてくる彼女の言葉に、しかしお前は鼻で笑って見せる。

(……下らない)

そう答えて見下すように鞆に視線を落とすと、ミスティは少しだけ驚いたように沈黙する。

（……どうして？）

（自分自身が何なのか、というのは、つまるところは自我の薄弱な生き物かよくよく暇な人間の考えることよ。……あなたは、私には魂——アニマが無いと言う。ウブリエールにもアニマが感じ取れるのなら、あの子もそう思っているのかもしれないわね。平然としているのは表だけで、裏では私のことを気味悪がっているのかもしれない。……でも、それがいったい何だと言うの？ 私は今日までとりあえず人間として生きて来たわ。そこには何の疑問もなかったし、特別の拘りや確信もありはしなかった。今日、この日、突然あなたから魂がないと言われたからといっていきなりそれらの全てがひっくり返ったりはしないのよ。どうやってアニマを感じているのかなんて私にはわからないうことだけれど、魂の証明なんてものは真実、私にとっては心の底からどうでもいいことだわ。魂が無いと言われたら、途端に絶望してしくしくと涙を流して、私は生きていないんだと悩みださなければいけないの？ それはただの、馬鹿でしょう。私は自分が何をしたいのかを知っている。それ以外のすべてはどうでもいいことよ）

（へえ……。それで、そのあなたの望みと言うのは一体何？）
（決まっているじゃないの）

お前は胸を張って答える。

（愛する人の傍にいることよ）

(そう——いいわね、そういうの。私も女だから、わかるわ)

(本当?)

(ええ。私にもいたのよ。どうしても手に入れたと思った男が)

(その人とはどうなったの? あなたは結ばれることができたの?)

(いいえ。できなかった。手に入れたと思つたその瞬間に、私は彼を失つていた。だから、赤薔薇、あなたにはそんな思いをしてほしくないの。私はあなたに願いを叶えて欲しいし、あなたの願いが成就することは、あの時叶わなかつた私の望みが報われることでもあるの。私にあなたの恋を手伝わせて頂戴)

(……手伝う?)

(ええ、そうよ。もしあなたが愛する人を手に入れたいのなら、今すぐにでもそれができる。簡単よ——)

ミスティは何でもないことのようにさりりと言った。

(——この卵エッグをその人に渡せばいい)



……余計な情報を漏らすな、ミスティ。我々の傷は未だ十分に癒えてはいない。この

星にはカンタールの娘もいるのだぞ。

そんなことは私の知ったこっちゃないわ、ウスノ口。いまは私が私たちの代表をしているのよ。それがわからないの？

勘違いするな小娘。貴様は所詮、我々が支配する星をうろついていた野人のアニマに過ぎぬ。支配者たる我々とはもともと階級というものが違うことを知れ。

笑わせないですよ。私が邪魔だというのなら、さつさと私を押し込めて精神海溝にでも沈めておけばいいじゃない。それができないのなら、あなたはその程度の男だったということなのよ。

愚かな。この卵に性別などない。

……そう。そうね。忘れていたわ。もはや女ですらないなんて、ああ、なんて馬鹿馬鹿しい。……まあいいわ。どうせあなたに逆らうこともできないのだし、精々あの赤ずきんちゃんを騙してあげるわ。

◇

「リージョン界における種族の生態について、今日は三つ目、メカについて講義していきます。メカというのは、俗に言うロボット、アンドロイドのことです。メカ種族の身体

は金属を主とする人工物によって構成されています。その体は心臓部を構成する『コア』と体を構成する『ボディパーツ』の二つに分かれています。人間や妖魔とは違い、メカはそのボディを自由自在に組み替えることができ、装備するパーツによってその性能を大きく変化させます。少しずつ、しかし着実に成長していく人間に対して、メカはその能力を完全にパーツに依存しなければなりません。当然ながらメカは自ら繁殖することはなく、基本的には創造主である人間に服従するように造られています。

さて、ここでみなさんに質問しなければならぬのは、はたしてメカは生物たりえるのかどうか、という問題です。……ああ、その表情はわかります。教壇に立つ私を前にしてそのような議論をするのはどうにもきまりが悪い、そんな風を感じているのですね。気にしないでください。私にはそのような感情はありません。私はあるべくしてここに在り、皆さんに伝えるべきことを教えているだけのデスから。さあ、話を戻しましょう。

リージョン界における主な四つの種族。そう言つて私はこの授業を始めました。この時点でメカはヒューマンや妖魔と同列に扱われていることがわかります。メカは機械ではありますが一つの種族なのデス。掃除機や冷蔵庫とは異なります。メカは人間に従いますが、しかし包丁やとんかちのような単なる道具ではありません。コアによって疑似的な人格を持ち、時には他のメカから『学習』することによって新しいプログラ

ムを生み出すことさえあるメカ。この種族は果たして生き物なのでしょうか？ 生物の定義を語る時、よく挙げられる条件は『自己増殖』『代謝』『恒常性』『細胞の保持』などがあります。メカはこれらのいずれをも満たしていませんから、一般的に生物だとは認められません。……もちろん、これらの条件を広義にとらえれば、メカが自らのコア人格データをコピーする行為を自己増殖と、自らのボディをメンテナンスすることを恒常性と捉える事はできるのかもしれませんが。人間が食事によってエネルギーを得るように、メカもまた電気やオイルから動力を得ているわけですし、人間の細胞を培養したボディを持っているメカもいます。科学が進めば進むほど人とメカとの境はより曖昧になって来ました——いいえ、メカばかりではありません。考えれば考えるほど、人とメカ、メカとモンスター、モンスターと妖魔の違いはわからなくなってくるものなのデス。

……丁度よい具合ですから、今日は最後まで進めてしましましょう。最後の種族は、
「モンスター」デス。簡単に説明すれば、モンスターとは他者の細胞を取り込むことによつて自らの姿を変える能力を持った生物のことを言います。この町でもロツキーやシエルワーム、ピックバードなどのモンスターを目にしたことがあるでしょう。人はモンスターを恐れ、同時にモンスターを狩ることで糧とします。モンスターの中には高い知能を持ち、人間と共存している種も数多く存在します。古来より人はモンスターと生

活を共にしてましたし、現代でも犬や猫などのモンスターを愛玩し、また馬や羊などを育て利用しています……。

——はい、そうデスね。リッテンツカヤさんの疑問はもつともデス。『動物とモンスターは違うのではないか?』そう考えるのは無理ありません。あなた方がペットとして飼っている獣を、今日とつぜんモンスターと言われてもにわかには領きがたい。しかし、いいデスカ、先ほど申し上げた通り、モンスターの定義は『他者の細胞を取り込むことによつて自らの姿を変える能力を持った生物』デス。犬や猫がモンスターでないと感じるのは変身のスピードが遅いからに過ぎません。全ての動物は他の生き物を食らい、その細胞を取り込み、自らの体を変化させていきます。その変身のスピードや体構造の変化率は様々で、明確な境界線は存在していません。

わかりますか? 犬も猫も、馬も羊も——全てはモンスターなのデス。犬とロツキーが違うのは人間にとつての危険度の多寡でしかありません。一般的に流布しているイメージでは、人に危害を与える恐れのあるもの、人にとつて危険な生き物が『モンスター』なのだと思われているようですが、実際は異なります。このリージョン界において、他者の細胞を取り込むことによつて自らの姿を変身させることができないのは——これまでの授業を聞いていたみなさんならもうおわかりでしょう——メカと妖魔。つまり、広義に言えば人間はモンスターなのデス。人間は他の生物を摂取し、自ら合成す

ることのできない有機物を取り込み、その身体を少しづつ成長させ、変化させていく。人はモンスターの一部に過ぎず、ただモンスターの中でも比較的知能が高く、言語によるコミュニケーション能力を持ち、『閃く』ことのできる生物がヒューマンと呼称されているに過ぎません。会話を行うことのできるモンスターや、『閃き』のように新たな道具の使用法を考えることのできるモンスターも存在しています。人とモンスターはとても近い存在なのデス——」

著しく偏向的な授業を聞きながらお前は己のことを考える。人間妖魔メカにモンスター、そのどれもアセルスは違っている。では自分どうなのだろう。自分はあとどれだけ生きられる。どれだけの時をアセルスと過ごすことができるのだろう。人間であれば百年。妖魔であれば久遠。しかし自分には妖魔の蒼い血など流れてはいないしもちろんメカのように代替の利くボディを備えているわけでもない。とすればやはり人間ではあるのだろう。他の同級生たちに比べれば随分と成長が早いといえれば早い（何しろお前はまだ齢を数えて一桁に過ぎないのだから）、しかし流れる血潮はその名に通じ真紅、人のように弱く人のように愚かで人のように夢を見る。

いつか、死ぬ。それは避け得ぬ定めであり条理である。しかしそれはお前にとって呪いではない。数多の乙女がそうであるようにお前もまた死を崇める幼き夢想家の一人なのだ。死とは終焉であると同時に永遠でもある。かつて紅という妖魔が我が身を賭

してアセルスを守つたように、お前もまた死という槍の穂先でもつて彼女の胸にけして癒えぬ傷を刻むことができるのだから。

夜、一つ屋根の下アセルスと寝台を並べて眠る時、お前は自らが死ぬときのことを考へてそつと顔を赤らめる。息を殺して体を起こし、瞳を閉じたアセルスの整つた顔を眺めてほうと息をつき、私が死んだらこの女はどんな顔をしてくれるだろうと胸を熱くさせる、それがお前のむなししい自慰だ。疚しい思いに言い知れぬ禁忌を感じてぶるりと背筋を震わせ、しかしお前は何ら心を痛めることなどはなく、ただ、一心に、この美しい女の一挙手一投足を網膜に焼き付けねばと強迫観念に駆られる。

なぜ、お前はアセルスに恋をしたのだろう。出会う前からお前はアセルスを愛していた。まるでそうなるように作られたとでもいうように。

お前はおそらく、狂つている。アニマを持たないお前のことだ、きつと訳のわからぬ因果を抱えて生まれてしまったのだろう。……いいや、この表現は不適切か。お前は生きてすらいらない。生きてすらいらないのだから心や精神と呼べるものを持ちうる筈もなく、そうか、お前が恋と呼ぶものはその実恋でも愛でもなく、脊髄反射のように原始的な反射反応に過ぎないのかもしれない。だとしたら赤薔薇、お前の求めるオアシスは砂漠に立つ陽炎だ。



孤独であるということは、凍えるように寒々しい感覚を伴うものだった。寄る辺ない不安や恃むもののない心細さにきゅつと目を閉じ、ただ震えながら悪夢が終わるのを待ち侘びていた。

だつて誰かを待っていた。大切な人がこの世のどこかにいることを、誰に教えられないでもなく知っていた。いつか誰かが私を迎えに来てくれる。そう、自分に言い聞かせるようにして空を見上げていた。

おくるみに包まれていたわたしを抱き上げてアセルス様がその頬を寄せてくれた時、柔らかな肌と肌から伝わる体温に手先の痺れが自然とほどけていくのが心地よかった。抱きしめてくれた。

暖かなその感触に蕩けるほどの悦びを感じて、私はきやらきやらと歓声をあげ、あせするすしやま、しゆき、とそんなセリフを吐いて彼女の頬をぺたぺたと撫で、けれどもそのうちに掌が湿っていることに気が付き、私はきよんととしてアセルス様を見上げる。

彼女は泣いていた。あなたの名前は何？ 声を揺らしながら彼女は言った。あかばら。私は素直にそう答える。すると、アセルス様はとても怖ろしいものを目にしたように顔をゆがめ、ふつと息を吐き、きつく歯を食いしばった。

なぜアセルス様が涙を流しているのかも、肩を震わせて嗚咽を堪えているのかも、幼い私にはまるで見当のつかないことだった。

彼女がどんな思いで私を育ててくれたのかを知るのは、ずっと後になってからだ。

私は何も知らなかった。親が子を愛するのと同じように、子が親を愛するのと同じように、愛は、当然の権利として分かち合えるものだと思っていた。

この星にやって来たアセルス様はゾズマからいくばくかのお金を借り、マンハッタン時代の貯金と合わせて開拓団発掘者名簿への登録料——つまり市民権の購入に充てた。開拓団の割り当てによるぼろ小屋とちっぽけな槌とを渡され、泣き叫ぶ赤子（私のことだ）を抱えたアセルス様は発掘者としての生活を始めた。

私はそれほど手のかかる子供ではなかったと自負している。何しろアセルス様に対してはひどく従順で、多少の我慢やお留守番であれば涙を滲ませて唇をかみしめたりはするにせよ逆らうことなどはけしてなかった筈だ。でもそれはあくまでもほかの赤ん坊と比べての話であって、満足に動けもしない私を抱えて慣れない発掘作業に従事するのは大変な重労働であったことは想像に難くない。

ボロの星に託児所などは存在しない。初めのうちはゾズマの侍女に預けて出かけることもできたが、やがて彼らが旅立ってしまうとそうもいかなかった。明け方、

ようやく寝付いた私をそつと背中に背負い、アセルス様は家を出ていく。ほかの男たちが何十人もの徒党を組んで発破や掘削機を使用した大規模な発掘を行っている現場の隅っこでしゃくりと小さな音を立てて槌やスコップを突き立て、じれったいほどの遅さで大地を掘り返していく。それで見つけられるものといったら、それこそ一山いくらで取引されるような鉄くずが精々。一日中休むことなく体を動かしてなんとか赤子の食事を稼いだとしても、私が一度でも風邪を引けば破綻してしまうようなギリギリの生活だっただろう。

そのころの私はといえば、まだ意識も定かではなく一日の大半をうとうとと過ごしていた。けれどはつきりと言語化することはできないにしても得体のしれない安心感、自分が愛されているという確信だけはなぜだか持つていて、怯えて泣き叫ぶことも癩癩に暴れまわることもなく、アセルス様の背中であらゆる揺らめきながら微睡むように世界を視ていた。私はアセルス様を愛していたが、しかしボロの住人達はアセルス様を馬鹿にしていた（その件に関して私は彼らを許さなかった）。その話を後になつて聞き憤慨する私を論し、アセルス様ご自身は無理のないことだといつて涼し気に笑っていた。ボロのような未開の星に集まるのは一攫千金を夢見る者や他の星を追われた者ばかり。そんな荒くればかりに囲まれて年端もいかなない娘が赤ん坊をあやしむながら発掘に交じつていれば、邪魔に思うものがない。難癖をつけられて襲われたの

が八度、帰り道に尾行されリンチされかかったのが四度、おそらくは強姦目的で薬を盛られたのが二度、これがボロにやってきたアセルス様がたつた半年たらずで経験したことだった。アセルス様はもちろん市民権を得ているのだから、略式とはいえ訴訟を起こすこともできる。けれど未だ法整備の不十分なボロは結局のところ賄賂やコネがモノを言う世界であり、下手に訴えを起こした結果として家財道具没収の憂き目にあうよりは、と泣き寝入りするものも少なくはなかった。私がイルドウンを憎みきれないのもそのあたりが原因だね。あいつは腹の立つ妖魔ではあつたけど、でもそれなりに大切なことを教えてくれた。生きるために必要なことを。旅をしている間も、ここで暮らしている時も、彼に鍛えられていなかっただら私はとうの昔に発狂していたかもしれない。以前、苦笑いを浮かべながらアセルスがそう言っていたことがある。そのときのアセルス様は笑っているにも関わらずとても鋭い眼をしていた。イルドウンが教えてくれたことというのは、非常にシンプルなことだった。闘うこと。それは未開の惑星で女子一人で生きるアセルス様にとつて一番の武器だった。話し合いで解決するというスタンスを失つてこそいなかっただけのもの、言葉が通じる相手かどうかというアセルス様の見極めはとて早くそして冷徹になっていた。私という弱点を抱えた以上、油断や容赦をしている余裕などはなかったから。アセルス様は敵対するものを徹底的に潰した。いま、アセルス様に挨拶をする男たちの目に怯えが交じっているのはきつとそのあたり

の理由もあるのだろう。

私はずっとそんなアセルス様の背中に揺られていた。私を奪われるのではないかといつも張り詰めた顔をしているアセルス様。発掘現場で赤ん坊のおしめを取り換え、ほかの男たちに指を指されて笑われるアセルス様。幼い私が全てを理解できていたとは言わない。それでも、私は子供心にこう思った。はやくおおきくなりたい。はやくはやく。おおきくなって、かしこくなって、アセルスさまのおやくにたてるようにならなくちゃ。一心に祈り続けていると、私の体はすすくと成長してあつという間に大きくなった。アセルス様に拾われてから一年後にはもう元気に走り回れるようになっており、襲撃の危険性から私をひとり家に残しておくことができなかつたアセルス様にとっては大助かりだつたそうだ。

私は大きくなつた。なぜそんなことができるのかはよく考えなかつた。そうする必要があつたからそうしたのだ。愛する人の重荷になることはできなかつた。

ゾズマは一年に一度、そのお付きの侍女はひと月に一度の頻度で様子見と連絡のためにボロを訪れる。このメイドは私の姿を見るたびに「大きくなりましたね」と驚くのが若干鬱陶しくはあつたものの仮面を除けばまともな女であり、ゾズマとは違ってそれ程嫌いではなかつた。

——赤薔薇さん。また大きくなりましたね。もう、私の腰くらいまで背がお伸びになつて。

——アセルスさまが言つてたわ。すききらいしないでいっばいたべればいっばいおおきくなるつて。あれ、ほんとよ。

——昔はこんなに小さかつたのに。貴方がまだ私の掌ほどにも小さかつたころは、この私がおしめを替えて差し上げたこともあつたのです。覚えていらつしやいますか？

——ううん。ぜんぜん。

——そうですか……。

メイドは寂しそうにしていたけれど仮面をつけていたので表情はよくわからない。悪い女ではないのだろうが、しかし素顔を見せない相手を信頼するというのは思いのほか難しいことだつた。ゾズマのような男に従つているといっただけでも度し難いというのに。

ゾズマ。私はこの男が大嫌いだつた。顔を見るだけで胸がむかついた。出会つたその瞬間からこの男とは相いれないことがわかつた。何のいわれがなくとも、生まれる前から私はこの男を憎んでいた。

それは恋だよ、とゾズマは言つた。僕のことを憎いと思うのは、好きの裏返しさ。ゾズマは臆面もなく言つてのけたがそれだけは違つたと断言できる（傍にいたメイドも呆れ

ていた)。不俱戴天。私はこの男の存在を認めることだけはどうしてもできなかつた。その発言も、軽薄そのものな態度も。何もかもが私の気に障る。この男が口にするのは私にとって都合の悪いことばかりだ。

ある夜、水を飲もうと起きだした私は別室に光が灯っているのを目にする。深夜というのは大人の時間帯であつてそこに子供である私が踏み込んではいけなのだから、すら感じていながら、押し寄せる好奇心に打ち勝てずこっそりと忍び寄つた私の耳に、ゾズマのあの気に障る声が届いてきた。

——卵を握つたからといって誰もが親になれるとは限らない。君だつてそれくらいはわかつているんだらう？ 何しろ僕らは鶏じゃあない。

——相変わらずの迂遠な物言いだね。少しは慣れもしたけど。

——つれないなあ。僕は僕で結構君のために行動しているつもりなんだけど。

——感謝はしてるよ。その証拠にこうやって歓待もしてる。ほら、大福とお茶。

——へーえ。こんな未開惑星で大福が食べられるとは思つてもみなかつたな。お、しかもこしあんじゃないか！ ありがたく頂くよ。

——前から気になつていたんだけど、妖魔なのに人間の食べ物が好きなの？

——好きだよ。そういう風に感覚をいじっているからね。

——どうしてそんなことを？

—— さあね。きつと、そのほうが面白いと思つたからじゃないかな。
—— 変なやつ。

—— まあ、自分が変わっていることはある程度僕も認めるところだ。でも君だつて大して変わらないんじゃないかな。何が楽しくてこんな原始の星で土いじりなんかしているのさ。あれから五年も経っているんだよ。僕はてつきり、君は死に物狂いでオルロワージュを倒しに行くんだろうと思つていたんだけどね。

—— それは……。だつて、私には……私は赤薔薇を育てなきゃならない。

—— どうして？ 所詮は他人だろう。だいいち、君はこれでも針の城から追われる身なんだつてことを忘れちゃあ駄目だぜ。君の周りには危険が満ち溢れている。本当に赤薔薇のことが大切だというのなら、然るべきところに預けた方が良いだろう？

—— 彼女は私を守る。そう決めたんだ。

—— それは君の感情だ。感情で子供の扱いを決めるのは愚かものすることさ。
……。

—— まあ、わかるよ。あの子は白薔薇姫にそっくりだものね。

—— ああ……。

—— でも、それでもあの子は白薔薇姫とは違う。彼女は赤薔薇だ。考えてもご覧、白薔薇を失つた君の前にそうそう都合よく瓜二つの存在が現れるなんておかしいとは思

わなないかい。どこぞの妖魔が君を狙って送り込んだか、それとも人間側の放った絡め手か。どのみちろくなものではないと思うけど。

——……赤薔薇は……そんな子じゃない。実際何もなかったじゃないか。

——うん。それは僕も不思議だね。どちらかの勢力が必ず君に干渉してくるものと思っていたんだが……。何しろ五年、さりとて五年、だ。奪いたければまず与えよとも言出し、それなりに長期的な作戦なのかもしれないな。妖魔にしてみれば大した時間ではないし、人間としてもまあ我慢できないというほどではないのかな。

——いったい、何の話をしているの。

——赤子が娘になるまでにかかる時間の話さ。君が手に入れた赤薔薇が君にとって唯一無二のものとなり、そして致命的な弱点となるまでの。もし赤薔薇を奪われたら、そのとき君は自分の命を投げ出さずにいられるかい？

——何が言いたい。

——君にとって、赤薔薇はどれだけ大切な存在なのかな。

——あの子は私にとって掛け替えのない存在だ。

——本当に？

——本当だよ。どうしてそんなことを聞くの？

——それなら僕に教えておくれよ。君にとって、白と赤のどちらがより大切なのか

を。

——馬鹿なことを聞くな。そんなこと、決められるようなことじゃないだろう！

——ふうん？　じゃ君は、白薔薇姫の前で同じことを言うがいいよ。私はあなたと別の女のどちらが大切なのか決められないので助けに行かれないのですってさ。

——お前……！

——僕に対して腹を立てるのはお門違いもいいところだ。君は君自身の優柔不断に對して憤慨するべきところだろう。……いやまあ、僕に對して怒るのもそれはそれでわからないでもないんだが、それはちよつと脇に置いておこう。ね？　僕は単に合点がいかないんで不思議がつているだけなんだよ。君は白薔薇姫を愛しているんだと思つていた。だから彼女を奪われればすぐにでも助け出そうとするものだとばかり決め込んでいたんだ。……でも、そうじゃなかった。君は動かなかつた。イルドゥンは君に失望したといつて劍を抜いた。どうしてなんだい？　君にとつて、白薔薇はその程度の存在だったのか？　今は赤薔薇の方が大事だから助けにはいかない、そういうことなのかい？

——違う、私は……！

——私は、なんだい？　彼女を愛していた？　闇の迷宮で白薔薇姫を失つて君が打ちひしがれていたのも、君が姫のことを好きだったからだろう。

——…友達だったし、お姉さんだったからだよ。そう…。

——じゃあ、口に出していつてみな。好きだつて。

——そんなの間違つてる。だいたいこれでも私は女なんだ。半分妖魔になつてもそれは変わらない。

——随分とくだらないことに縛られているんだな。男か女か、妖魔はそんなことを気にしたりはしないよ。

——だから、私は妖魔じゃない。

——へえ、そうかい。妖魔じゃなけりや、どつちつかずの答えを宙ぶらりんのままうっちゃつておいてもかまわないつていうのかい？ 忘れてはいけないよアセルス。白薔薇姫は今もなお、あの迷宮に囚われたままでいる。何しろ五年、さりとて五年だ。イルドウンが君を殺そうとしているのも、最近なんだかわかるような気がするな。あまり僕を失望させないでくれ。

——誰もかれもが勝手なことばかりを言う……。私だつて、白薔薇が私を待つていてくれるのなら今すぐにでも飛んでいくさ。……でも、問題はそう簡単じゃない。簡単じゃあ、ないんだよ……！

◇

そうしてお前はまだ見ぬ「彼女」のことを考え始めるのかもしれない。アセルスは自分のことを掛け替えない存在だと言ってくれた。それはこの上なく喜ばしいことだ。しかし同時に彼女はこうも言った。白薔薇が待っていてくれるのならすぐにも飛んでいく、と。お前の心に嫉妬という名の醜い斑点がぼつりぼつりと刻まれていく。顔も知らない「彼女」。言葉を交わしたことも、声を聴いたことすらも無い「彼女」。白薔薇。この世のどこかに彼女は存在していて、愛しいアセルスは彼女を求めているのだという。

アセルスとゾズマの会話を聞いた夜、お前はこつそりと家を抜け出して卵を拾い上げた発掘現場へ出かけた。ぼろぼろの鉄くずにそつと腰かけようとして服が汚れてしまふことを少しだけ悩み、何か下に敷くものはないかと辺りを見回し、使えそうなもの一つとして見つからず何もかもが馬鹿々々しくなつたお前は覚悟とともに腰を据えた。尻の下でアポロ製薬と書かれた看板が泣きごめいてぎしりと軋む。

お前は空を見上げる。星々を、遙か彼方の銀河に沈んだ宝石をそつと、息を潜めて静かに見守る。きつとこうして、誰もが自分と同じように星を眺めるのだろう。寂しい夜、あてもなく心細い夜に、リージョンここではないどこかの物語を求めて遠くきらめく星に住む誰かのことを想うのだろう。

お前はわかりきったことを確認するために今さらのように呺く。

「私が世界でいちばん好きなのは、私のことを世界でいちばん愛してはいない」

お前はわずかに肩を震わせる。私は泣くかもしれない、泣いてしまいたい。そう考えながら、しかしお前は泣かない。涙は流れない……。何故かしら。お前は首を傾げてふたたびぼんやりと空を見上げる。お前の感情を何ら斟酌することなく星は依然として輝いている。だからお前は低い声で呪うように言うのだ。どうせそんなことだろうと思つていたわ。それは嘘だったがやせ我慢ではなかった。訳の分からない諦念がお前の中にはいつのまにか芽生えていた。たとえば何も知らなかった赤子のころ、お前は間違いなくアセルスを愛していて、アセルスもまたお前を愛していた。その愛を疑うことはなかった。アセルスが世界で一番愛しているのはゾズマでもメイドでもなく、赤薔薇、お前自身に他ならないのだと、何の根拠もなく確信していた。それがお前の “ 永遠 ” だった。

だが生きていれば時は経ち、時の流れの中ではあらゆるものが移ろうもので、お前の自信にもいつかは陰りが見えてくる。それはたとえば学校へと通いだし、人間には必ず母親と父親がいるものだとき。それはたとえば早く目が覚め、アセルスの頬が濡れているのに気が付いてしまったとき。きつとこの家族には何か欠けているのだ彼女は何かを失ってしまったのだ、お前はそう思った。何かを懐かしむようにアセル

すが過去を語る時、彼女は一人ではなかったのだと改めて気づかされる。今では彼女のそばに自分がある。しかし、かつてはそうではなかった。彼女の傍には、別の誰かが寄り添っていた。過去に葬られた面影がけして敵わぬ恋敵となってお前の想いを阻むとき、どうせそんなことだろうと思っていたわ、お前は我知らずそんな台詞を囁き、そうして手の中の卵をぎゅうと握りしめるのだ。

自分というものが何なのか。どこから来てどこへ行くのか。心の弱い人間が患う例の病にお前もまた罹患する。はじめは自分のことなどどうでも良かった筈だというのに。アセルスさえいれば他のどんなことも気にならなかつた筈なのに。授業中、あるいはベッドの中で眠りに落ちるのをただじっと待っている間、お前はお前自身を想う。お前の名前は赤薔薇で、お前の顔は誰かに似ている。なぜ、自分は赤薔薇なのだろう。赤薔薇というその名は幼いお前自身が名乗ったものなのだ、とアセルスは言った。子供の頃のことなどあやふやなもので確かなことなどは何一つとしてないが、しかし自分は自分を称して赤薔薇だと言ったようにも思う。物心つくその前から、自分は自分が赤薔薇だと知っていた。それは何故なのだろう。あの「彼女」とよく似た名前。この奇妙な符号の一致はどこから降って来た運命なのか。考えても考えても答えは見つからず、ともすれば自分自身かまるで知らない別人のようにさえ感じられる始末。自分、とはいっ

たいなんだ。どうして生まれ、どうして恋をした。自分は赤薔薇で、赤く染まったこの血潮は自分が人だと示してくれる、それでも、生まれる前から自分は赤薔薇だと知っていたというその物語は、まるで自分が妖魔であるとも言いかのようだ。人の殆どは自らの名前を他者から与えられる。しかしお前は自身の言葉で自らを定義した。赤薔薇。それがお前の役割だ。

なんのために生まれなんのために生きるのか？ そんなことは誰も教えてくれない。だから人は足掻き、もがき、そして自らの道を歩んでいく。しかしお前には既にして赤薔薇という名がある。赤薔薇として生まれ、「彼女」によく似た顔をして、そしてアセルスに恋をした。赤薔薇。それがお前というキャラクターの名、配役の名だ。お前はそういう風に造られたのだ。まるで機械仕掛けのメカのように。

ひとであり、メカであり、妖魔であり、そしてけだものである。だとしたら赤薔薇、お前は一体何者だ。お前は自分自身をどう生きる。

お前は力が欲しい筈だ。訳のわからぬこの世の理をいともたやすく打ち砕き、思うさま振る舞うための絶対的な力を求めている筈だ。

卵を握れ、赤薔薇。アセルスにこの卵を渡して精神支配を行うのだ。そうすればお前は
この世の支配者になれる。そしてその時こそ、我らの……。

第二十五幕 妖魔の小手（赤薔薇） 後編

そしてまた、時が過ぎる。私の背はすすくと大きくなって、今では母とほとんど変わらぬ。もう半年もすれば追い越されてしまうね。母は嬉しさと寂しさが緬い交ぜになった表情でそう言った。すっかり大きくなったねえ。そういつて目を細める母が嫌で、私は思わず口をとがらせた。やめてよ。年寄りみたいなことというのは。

姿かたちが大人に近づいていくと次第に周りの見る目も変わっていく。子供だと邪険に扱われることが減り、その代わりに男たちから薄気味悪い目で見られるようになる。粘りつくような性的な視線が嫌で外へ出かけることが億劫になり、私はなおさら母の傍にくっついていくことが多くなった。同い年の友人はといえばウブリエールくらいで、あとは話しかけられても「そうね」とか「どうも」しか言わずにいるのでそのうち飽きてどこかへ行ってしまう。ウブリエールは呆れていたが構わない。私は今もなお母のことだけを考えている。

大きくなってまず変わったのは、アセルス様と呼ぶことを禁じられたことだ。私は随分と反対したが母からのたつての願いというので領かないわけにはいかなかった。もう赤ん坊ではないのだから、もし自分を呼ぶのなら母さんと呼びなさい。もし、それが

嫌ならば呼び捨てでも構わない。母はそう言ったが、私にはなぜそうしなければならぬのかが呑み込めなかった。家族なのに「様」をつけるのはおかしいというのが彼女の理屈だったが、私にとって「アセルス様」という言葉は私の感情すべてを込めた呼び方であつて、その言葉を禁じられることは私の感情をも封印するに等しかった。

そのとき初めて私は母への反発を覚えたのだつたが、しかしそれは私を反抗や憎悪へと駆り立てたりはせず、私はむしろ贖いを求める罪人のような気持ちで母の願いを受け入れた。たとえ罰であろうとも母が与えたものならばそれは私にとつて蜜であり、甘んじて受けるべき苦行だつた。

私は心の中でさえアセルスを様づけで呼ぶことを禁じた。これはとても辛いことだつた。彼女に向かって「母さん」と呼びかけるとき、また昼日中、学校で（アセルスはいま何をしているだろう）と物思いに耽るとき、大切なものを汚しているような気がした。彼女を馬鹿にしているような気分にはさえない、もうやめてしまおうと何度も思つたかしのれない。そもそも心の中のことまでは誰もわからないのだ。私が心の中で母をどう呼ぼうと私は自由ではないか——そう思う一方で私は「アセルス様と呼ばないで」と言つた母の気持ちを考える。私は彼女を崇拜していたが、しかし彼女の方はそうではなかつた。母が望んでいたのはありふれた家族であり、自らの信者ではなかつた。

母とゾズマの会話を聞いてから、私はずっと自分というものを押さえつけて過ごして

きた。私が世界で一番愛する人は私のことを世界で一番愛してはいない。そうはつきりと認識してしかし私は絶望することもなく平然と生きている。幼いころよくしたように母の膝に甘えることはなくなり、その代わりに彼女の顔色を伺うことが増えた。私は彼女に愛されるためにどうすべきかを考えるようになった。

母を母と呼ぶようになってから、不思議なことに私の中でも彼女を崇拜する気持ちは少しずつ薄れていった。他人に対する感情は呼び方にもひっぱられるものなのだろうか。それがもし彼女の思惑通りのものであるのなら、なるほど私は確かに母と呼ぶことでアセルスを家族と強く認識し、その言葉が日常のものとなり体に馴染むにつれて私の中のアセルスの神性は穏やかに後退していく。学校では中等過程を終了し、ウブリエールと共に高等課程へと進んだ。背は伸び、頼んでもいないのに胸が膨らんでいく。今私は母が魔法使いでないことを知っているし、用務員という彼女の職業が世間一般では決して羨ましがられるようなものでないことを知っている。

それでも——私にとって、母は、アセルスは、今もなお色褪せることなく輝き続けている。

夏の夕べの汗ばむ小道を、母に寄り添って静かに歩く。じわじわと叫ぶ虫の音に色濃く残る木々の影。あれはなに、と私が聞くと、母はそれがどんなものでも答えてくれる。

それまでぼんやりとしか認識していなかった世界を一つずつ指さしては名前を呼んでいく。

あれは朝顔、（ろうぜんかすら）凌霄花。木槿（むくげ）に芙蓉（ふよう）、時計草（とけいそう）。歌うように告げられた花の名が、私たちの歩く道を修飾する。橙色の大きな花をいくつもつけた蔓を撫で、「のうぜんかすら？ 変な名前」と私が言うと、母は穏やかにほほ笑む。

「（のうぜんかすら）凌霄花のノウゼンは空をしのぐという意味で、カズラは花。空を超えるほど高く伸びる花だから、（のうぜんかすら）凌霄花」

淡々と答える母が誇らしく、私はなんだか試すみたいに、これは、じゃあこれとはせがむように尋ねる。母はどんな花もその名を答え、やがて私は半ば意地になってその辺の生えている細長い葉の雑草を指さす。

「——じゃあ、これは？」

母は答えなかった。さすがの母も雑草の名までには知らないのだろう。母に恥をかかせてしまったかもしれないと少しだけ罪悪感を覚えて上目遣いに母の顔を覗くと、彼女は視線を遠くへと彷徨わせぼんやりとしている。

「母さん？」

もう一度声をかけると母ははつと我に返り、きまり悪そうに笑った。力のない、弱々しいほほ笑みだった。

「それはね、風知草。風が吹くとさらさらと草が鳴って知らせてくれるんだよ」
「母さんはなんでも知っているのね」

感心して言う、母は「別になんでもってことはないけどね」と苦笑いを浮かべる。
「だって、母さんは私の質問になんだって答えてくれる。空がなぜ青いのかとか、夕暮れに誰が空の明かりを消すの、とか、子供の頃、私がした質問には全部答えてくれたわ」
「何かの本で読んだり、誰かに教えてもらったからだよ。それでたまたま知っていただけ」

「そんなら私は、母さんに教わって花の名前に詳しくなることにする。——母さんは、誰に植物のことを聞いたの？ せんせい？」

「うん……」

と言葉を濁す彼女の表情を見て、すぐに私はそれが誰だかを悟った。いつもは頼もしい母がふいに幼く頼りなげな顔をするとき、それはきまって「彼女」の話題になるときだった。

「昔、お世話になった人が植物好きでね。その人に教えて貰ったんだ」

そう言う、母はこの話はおしまいとでも言うように私の背中を優しく押した。私はその手をさりげなくかわして、母の手を握る。

「今日は私がごはん作ってあげる」

「どうしたの急に」

いぶかし気な顔をする母に「さあね」と恍けて、私は目を背けながら手の力を強めた。母の手はどんな時でも不思議なほど熱を感じない。暖かくも冷たくもなく、ただ柔らかいですべすべしている。たとえ熱が感じられなくとも、その肉の感触が失われることはない。彼女は生きている。生きて、呼吸をし、胸の心臓を鼓動させている。私は母の手を力任せに振って彼女を困らせながら、聞こえないようにため息をついた。

私はこうして大人になっていく。彼女を母と呼びアセルスと呼ぶようになってから、私はもう彼女が神だとは思っていない。けれどもその代わりに、彼女が実の母だと考えもしない。彼女はいま、私の隣にいる。彼女は肉体を持った一人の女だ。今の私には、それがよくわかつている。

ミスティと名乗った遺物、あの卵は今でもときおり私に話しかけてくる。人間を墮落させようと企む悪魔のように、ミスティは何度となく私を誘惑する。卵をアセルスに渡しさえすれば、簡単に彼女が手に入る。それが本当なのかどうか、実のところ私にはわからない。私は自分がどうしたのかさえ不確かで、アセルスをこの手に抱くことが本望なのかといえればそれは何か違う気がした。

誘いに乗らない私に対してしかしミスティは焦りを見せることはなく、どこか長閑と

さえいえるような態度で私との会話を続けている。

「ねえ、赤薔薇。そろそろ支配者になる気になった？」

ある夜、学校の会合からなかなか戻ってこない母を食卓で首を長くして待っていると、いつものようにミスティがそう言った。私は突然話しかけられることにももう慣れつこになつていたので、平然と窓の外を眺めながら「いいえ」と答える。

「そう、なら仕方がないわね」

「……なんだか、最近は随分あつさり引き下がるのね」

「無理に急かしたからと言つてどうにかなるというものじゃないでしょう、こういう事は……それに、私たちは人間に比べればずっとずっと気の長い生き物なのよ」

「嘘でしょう？」 私は目を細める。「だって、あなたたちは別の星の支配者で、少し前までは戦争を引き起こしたりしていたんでしょ？ 気の長い人がそんなことするかしら」

「あら、気が短いか長いかということと戦争はまるで別の問題でしょう。それに私たちはもはや肉体という枷からは自由になった存在だから、時間の流れにはそれほど拘泥しないの」

「どういふこと？」

「だってあなたは百年もすれば死ぬでしょう？」

「……」

「あなたの説得が無理なら、あなたが死んでから別の宿主を探せばいい。私たちにしてみればそれほど長くはない。それこそ、私たちにしてみれば命は永遠に続くんだから」
「うらやましい話ね」

私はため息をついた。それは本心だった。もしも永遠に生きることができれば、もしいつまでも母の傍にいられることができたら。

「あなたにだつてそれができるのよ赤薔薇。あなたがこの卵を受け入れさえすればね」

「……今日は、その話はもうおしまい。さつきあなたもそう言つたでしょう？」

「そういうのなら、乙女が物欲しげなため息についてはいけないわ。欲しいものがあるのなら手を伸ばすべきよ」

「私は別に支配者になりたくないと言っているのではないの。あなたの言うことはとても魅力的だし、私自身、力が欲しいといつだつて思つてる。……でも、支配者になつたその後で何を望むのか、それが私にはわからないの。そして、それがわからないまま支配者になつた私は、きつと取り返しのつかないことをしてしまふ」

「……人間というのは不思議ね。下らないことをくよくよと悩んで、足踏みをして——そのくせ、いつのまにかに成長してこちらが思いもつかないような変わり方をするんだから、手に負えない。あなたはアセルスをどうしたいの？ 跪かせたいの？ 愛された

いの？　だって彼女のことを想っているのでしょうか？　卵を渡せばそれが全て叶うと
いうのに」

「私にだって、そうしたいと思うときだってもちろんある。……でも、やっぱり、それは
違う……。何かが違う、そんな気がする……」

私が言葉を濁すとミスティはしばらく黙りこみ、やがて静かに言った。

「彼女とセックスしたいの？」

「馬鹿！」

私がテーブルに両手を叩き付けて抗議すると、ミスティは涼し気な笑い声をあげた。

「じゃあ何が気になっているの？　やっぱり『白薔薇姫』のこと？」

「う……」

私は言葉を詰まらせ、無意識に壁に掛けられた装飾剣へと目を向けた。我が家の居間
には壁に一振りの剣が飾られている。緑色の鍔をした美しい剣。それは一定以上の力
を持つ妖魔だけが持つことを許された武器、妖魔の剣だ。だがこれは母の——アセルス
の剣ではない。アセルスの剣はすでにイルドウンによって碎かれている。だとすれば
これは母のものではなく、おそらくは『彼女』の——白薔薇姫の剣である筈だった。な
ぜ、彼女の剣を母が所有しているのか、それは私もずっと気になっている。

白薔薇姫。私によく似ているというその妖魔。どこかに囚われていて、彼女の剣だけ

がなぜかここにゐる。

「よく考えてみて、赤薔薇」ねつとりと絡みつくような声でミスティは言う。「この卵^{エッグ}の力を侮つてはいけないわ。卵^{エッグ}はあなたを支配者へと変えるだけじゃない。あなたを望む形、望む姿に変えることもできる。……そうよ、赤薔薇。あなたが望みさえすれば、あなたは白薔薇姫にだつてなれるのよ」

「私が……白薔薇に……?」

「あなたの愛するアセルスは白薔薇姫を愛する。でも、彼女はアセルスの傍にはいない。アセルスの目の前にゐるのは、赤薔薇、あなたなのだから」

「でも、それは……」

「ええ、そうよ。それは赤薔薇を殺すということ。あなたは赤薔薇を殺して白薔薇になるの。そうすべきだわ」

「そんな」

「あなたは待つていればいつかアセルスが振り向いてくれるとも思っているの？ そんなときは永遠に來ないわ。あなたはもつとアセルスをどうやって手に入れるかについて真剣に考えるべきよ。誰かを愛しいと思つても、その人は簡単にいなくなつてしまふものだもの……」

論すように言うミスティに強く反対することもできないまま、私は唇を噛みしめる。

でも。

だとしたら。

白薔薇としてしかアセルスに愛されることができないのなら、私は何のために生まれてきたのだろうか。

……。

……………。

ミステイはよく私をからかったり小馬鹿にする。けれども、何度となく彼女と話をしてきた私はミステイの台詞がけて嘘ばかりではないことを知っている。卵——旧支配者たちが滅び行く自らの肉体を悟り、己の精神を移し替えた卵型の現界器。無限のアニマを内包したクヴェル。

所有者のアニマを支配することで精神を操る彼らはある時ミステイという一人の少女の手に渡る。ミステイは卵を狙う冒険者、リッチ・ナイトと出会い、彼を求めた。だが彼女はミステイでありながら同時に卵でもあった。だから彼女は自らの肉体と引き換えに卵をリッチへと手渡す。そうすればやがてリッチのアニマが手に入るはずだったからだ。だがリッチの取った行動は彼女にとつて予想外のものだった。リッチ・ナイトは自らの意識が卵に侵されていくことを知り、すぐさま崖の上から身を投じた。こうしてミステイはリッチ・ナイトを失い、その想いが遂げられることは永遠になくなった

という。

だから私には、ミステイの言葉を「知った風なことを言うな」と一蹴することはできなかった。たとえばそれがメフィストフェレスのような悪魔だとしても、その瞬間の恋心だけは本物だった筈だからだ。

彼女が話してくれた昔話は私にとっても大切なことを教えてくれた。だから、私はミステイのような失敗はしない。やるからには、必ずこの思いを遂げて見せる。

たとえ、それがどんな犠牲を孕んだものだとしても。

◇

我々は生まれながらの支配者であり、人類を遥かに超越した生命体である。だが、だからといって我々は狭量ではない。自らの不完全さを認め、学び、成長する能力を既に獲得している。

我々の第一の失敗はアレクセイ・ゼルゲンという男を所有者に選んでしまったことだった。術の才覚を持たぬこの男は浅慮から不必要な争いを産み、結果としてナイツ一族との因縁を生み出してしまった。我々の行う精神支配は未だ完全なものとは言えず、所有者の行動はあくまでもその感情や気質に沿った形で行われる。発掘者として卓越

した才覚を誇るヘンリー・ナイツは我々にとつても優秀な宿主であつた。だがそんな彼に嫉妬心を抱いていたアレクセイは卵を奪い、これを殺害する。これが我々とナイツ一族との確執の始まりだ。アニマに対する鋭い嗅覚を持つナイツの一族は我々の気配を嗅ぎ付け何度となくこの覇道を阻んだ。

どうしようもない小物であり愚物であつたアレクセイ・ゼルゲン。我々はこの男の一件から宿主として選ぶものは強い生命力と知力を兼ね備えた者でなければならぬことを悟り、また個人の発掘者として動くことの限界を知つた。次に我々は新興宗教の信徒としてアニマ教を扇動し、多くの戦を引き起こすことで多数のアニマを得るようとしたが、この計画はヘンリー・ナイツの息子、あの忌まわしいウイル・ナイツによつて破綻する。不本意な形で陸を追われた我々は発掘者の手の及ばぬ海で勢力を蓄えようと一人の海賊を宿主に選び、またしても蛇のようにしつこいウイル・ナイツの手によつて海中へと叩き落される。宿主の力だけで戦うことの不利を学んだ我々は辺境の地、ノーステートに居を移し、そこで一人の少女と出会つた。ミステイ。まだ幼く年端もいかぬ彼女はしかし驚くほどの才覚と精神を持つていた。彼女はアニマを扱う術に長け、そしてまた人々を操る技術にも優れていた。それゆえ、開拓者たちを実験材料として無数のアニマを一つに集め兵器とする実験を進めていた我々の元に、ウイル・ナイツの息子リチャード——リッチ・ナイツが訪れた時も我々は微塵の懸念をも抱いてはいなかつた。

何しろリッチ・ナイツは愚かにも単独行でこの卵を追ってきたのだ。人間から抜き取ったアニメマを宿した我が兵器——アニメマ獣。いくらナイツ一族といえど一人では無数のアニメマ獣には勝てぬ。そうほくそ笑む我々を嘲笑うかのようにリッチ・ナイツは多くのモンスターが犇めく迷宮を抜け、この卵の眼前へとやって来る。奇妙な感覚が我々の意識に入り込もうとしているのがわかった。それは倒錯的な感情、ある意味ではおぞましいとさえ感じる想いだつた。我々の宿主——ミスティはあろうことかりッチ・ナイツに恋をしていたのだ。圧倒的な生命力、そして絶体絶命の状況でふてぶてしく笑うこの男をいつのまにかにミスティを愛してしまっていた。リッチ・ナイツに思いを告げるミスティ。もちろん奴は否定する。奴は我々を滅ぼそうとしている。そして我々もまた。所詮は相容れぬ存在だ。決裂した交渉の末にミスティが取った行動は——自らの体を男に預けること。男の剣がミスティを貫き、そしてミスティの両手は男の背へと回される。ミスティは言う。さあ、卵を受け取りなさい。いまこそ卵はお前のもの。そしてお前のアニメマは私の……。

これは完全に予想外の行動であつたが、しかし瞠目すべき一手ではあつた。なるほど、リッチ・ナイツを支配することができればほかのナイツ一族を排除することも容易になるだろう。不運にもミスティの思惑は男の自殺という形で成就しなかったが、敵を味方にするというこの発想は我々にとつても非常に有益なものとなつた。

ミステイの肉体を失った我々は南大陸の将校、デーニッツを宿主として選定し次なる行動を開始する。そこで我々は多くのことを学んだ。術の才覚こそが全てであったこの時代において、術不能者として生まれたギユスターヴ13世が「鋼」の武器を用いて軍を組織し東大陸の覇者となったこと。アニマを引き出す術だけが戦いのすべてではなく、また個々の力ではなく数こそが真に戦いの優劣を決するものであること。我々はいかにデーニッツをギユスターヴの後継者へと仕立て上げ、多くの人間共の支持を得ることに成功した。鋼鉄で身を固めた我が兵たちにはもはやまなかの術など効かぬ。ヤーデ伯チャールズを易々と葬り去った我々はどうとうこの世の覇権を再び取り戻すかに見えた。だが——だが戦いが個ではなく数であるように、我々の前に立ちはだかつた次なる敵はナイツ一族ではなく名もなき人間たちのつながりだった。サウスマウンドトツプの戦いさえ凌ぎ切れれば圧倒的な戦力で諸侯連合軍を屠り、返す刀でナイツ一族を根絶やしにさえできたものを。三度我々は敗れた。そして逃げ込んだ星のメガリスで我々を追つてやつて来た冒険者たち——我らの宿敵ウィル・ナイツ、その孫娘ジニー・ナイツ、ギユスターヴ15世、そしてヤーデ伯カントールの娘ブルミエール。最期の戦いで奴らによって碎かれた我々は星々を流れ、こうして辺境の星ボロへと辿りついた。多くのアニマを失いはしたが力そのものが消えたわけではない。必ずや我々はあの星に王として返り咲いてみせよう。

敗北から我々は学ばねばならない。しかし、何を学ぶべきなのか？ 敗因は一体何だったのか？ 我々は長い時間を思索に費やして答えを探る。

人は愚かで、百年足らずで死を迎えるあまりにも儂い生物だ。しかしその人が群れ、武装することで途方もない力を発揮することを我々は知っている。

人から人へと受け継がれるもの。人の意思、人の想い。生殖を行わぬ我々にはもはや遠いその概念が、今では不可思議な光を帯びて我々の感覚器を横切る。人の感情。愛。我々は次に“愛”を学ぶべきなのだろうか。

ミスティ。お前はなゼリツチ・ナイツを愛した。

そして赤薔薇。お前の織り成す物語の結末は如何なるものか。我々は特等席で見物させてもらうとしよう。

卵を握れ、赤薔薇。赤色の血を捨て去つて青白い肌を手任せよ。そうすればお前の願いは叶う。



あなたは将来何になりたいの。それはあまりにも唐突で、けれども有り触れた質問だった。あらゆる家族が、親と子とが、いつかは交わすはずの言葉。

尋ねられたことが聞こえなかった振りをして私はほんやりと窓にもたれかかったまま外の景色を眺めた。せつかくの休日今日日は母と買い物にでかける予定だったのに、生憎の雨で私たちは家に閉じ込められている。気の滅入るように曇り空、ぽとぽと虫の這いまわるような音を立てる雨足。

「赤薔薇、聞いてるの？」

きいてる、と力なく答えて私は俯く。窓ガラスから伝わる冷気に背中が痺れ、それでもなぜだか離れる気にはなれずに私はそつと息を殺した。

「そうね、お嫁さん、かな。素敵なお嫁さんになりたい」

感情を込めずに言うと、母は「それはまだ早いでしよう」と困惑している。

「誰か気になっている子でもいるの？」

「いないけど」

この人はなんてひどいことを聞くんだろう。

「お嫁さんもいいと思うけど、こういう職業につきたいとかはないの？」

キッチンからは暖かな香りが漂ってくる。夕食のために母が煮込んでいる鼠肉のシチューの匂いだ。いつもならば料理を手伝うふりをして母に甘えに行つたものだったが、この体は強張つたかのように冷たい場所から動こうとはしない。

「もう少ししたてば高等課程が終わるし、そうしたら晴れてあなたは一人前。どこかに就

職してもいいし、もつと学びたいことがあるのなら別の星の大学に行つたつて良い」

「うちにそんなお金があるの？」

投げやりに問いかけると、キツチンからむつとしたような雰囲気とともにおたまを鍋のへりに叩き付ける音が聞こえてくる。

「うちにだつてそのくらいの貯えはありますー。馬鹿にしないでくださいー」

子供じみた言い方に私はちよつとだけ笑つてしまい、妙にからかうような言い方をしてみよう。

「本当に？ 受験の費用だつて馬鹿にならないの？ 往復のシツプ代があつて、学費があつて生活費があつて、この星の貯金や連絡をやりとりするのにいちいち通信費と手数料を取られるの？」

「それは……大丈夫だよ。計算してみたけど、結構なんとかなるみたいだから」

「母さんは馬鹿ね」

「うわ。ひどい言いぐさ」

「仮に大学に行くとしても、お金ぐらい自分で稼いで見せるし。一人前だつていうのなら自分のことくらい、自分でなんとかしてみせるし」

「なに、変な遠慮して」

「遠慮じゃないでしょ。自分のお金で学ばなかったら身にもつかない、そういう話で

しよう」

「そんなことないよ。たいていの子供はみんな親の金で大学に行くもんだよ」

「私の周りで大学に行く人なんて誰もいないけど」

「ウブリエールは？」

「あの子は発掘馬鹿だからほつといても冒険家になるんじゃない？　ほかのみんなだつてきつとそうよ」

「それはここがボロだからだよ。もつと別の星に行けば、たとえばマンハッタンみたいな都会では半分以上の子は大学に行くよ」

「おあいにくさま。私はボロ生まれのボロ育ちですよ」

憎まれ口をたたく私に、母は妙に心細そうな口調で質問を繰り返す。

「大学に行く気はあるの？　ないの？」

「ない」私ははつきりといった。「私は母さんの跡を継ぐわ」

「夢がないなあ……」

寂しそうに母は言った。私はむきになって言い返す。

「何よ。母さんだつて自分でその仕事を選んだんでしょように」

「私は、ほら、いろいろと事情もあったからさ」

「私にだつて事情の一つや二つや三つや四つくらい、あります」

「そうじゃなくてさ」

わずかに声を湿らせ、母が鍋をかき混ぜる音が止まった。

「あなたももう大きくなつて、あと少ししたら学校も卒業して……そしたら、そしたらさ、自分で自分の道を選んで、職業について、誰かと出会って、結婚して、新しい家庭をつくつて……そういうものじゃない？ もちろんここはあなたの家だし、いつでも帰ってきていいけど、でも、子供はいつか独り立ちしていくものでしょう」

「出ていけつてこと？」

「そんなことは言つてないよー」声を荒げたことに動揺したのか、母は力なく「……ごめん」と謝る。

「そうじゃないよ。私だつて、いつまでもあなたがいてくれればいいなつて思うけど……でも、子供には自分の人生を選ぶ権利があるし、私とその邪魔をするわけにはいかないつていうか……」

「……………」

私は答えなかった。将来のことなんてどうでも良かった。なりたい職業なんてありはしない。結婚して子供を作りたいとも思わない。この家を出ていくつもりなんてまるでなかった。私はただ、この人と、アセルスと一緒にいられたらそれで良いのだ。

けれどももし、それがただのエゴでしかないのなら。

「私もし、一人でも生きていけるようになって、この家を出て行って、いままで子育てにかかっていた手間や時間がなくなったらさ……」

時が流れて、いつかこの人と別れねばならないのだとしたら。

もし私があなたの人生に最初から存在していないものだとしたら。

「——あなたは、白薔薇姫を助けに行くの？」

はっと息をのんだ母が、しかし冷静にキッチンの火を止め、ゆっくりと息を吐くのがわかった。私は居間の壁に飾られた剣を睨みつけながら重苦しい言葉を吐き出す。それは私が生まれて初めて行う母への反抗だった。

「……ゾズマから聞いたの？」

「……別に、隠そうともしていなかったんでしょう？」

盗み聞きしたとは言えず話をそらす私に、母は緊張した様子でゆっくりと歩み寄って来た。

「聞かれたら答えるつもりではいたよ。何を答えたらいいかはわからないけど」

「わからないってことはないでしょう。自分のことなんだから」

「自分のことだからわからないんだよ」

悲しそうに呟く母に、私は声を震わせる。

「わからないのは私の方よ。ねえ、教えて。私は一体何なの。どうして、私は赤薔薇なの。一人前になるのなら、出生の秘密くらい話してくれてもいいでしょう？」

「別に秘密なんてないよ。この星で私はあなたと出会った。あなたは自分で赤薔薇だと言乗ったんだもの」

「そんなのはおかしいわ。あなたは白薔薇姫を失って、そしてたまたま私という赤薔薇と出会った。こんなことつてある？ 何かがおかしいのよ。そうに決まっている」

「……ああ、確かにおかしいのかもしれない。でもおかしかろうが何だろうが、私たちは家族なんだ。たとえそこにどんな思惑があつたとしても、私とあなたが過ごした時間は消えたりしない」

「本当に？ 母さんは本当に何も知らないの？」

泣きそうになりながら尋ねると、母は神妙そうに答えた。

「……うん」

「でも」と私は声を裏返らせながら、か細い声でゆっくりと続ける。「それでも私は考えてしまうわ。自分自身が何のために生まれてきたのかつて。子供にはみな、願いを込めて名前をつけるものでしょう。でも、私はそんな願いすら持たずに産み落とされて、赤薔薇、そんな名前の登場人物として生きていかなければならない。あなたがかつて失っ

たひと、闇の迷宮に今もなお囚われている可哀想なお姫様の代替品として、私は後生大事に育てられてきたわ。だけど」

私は髪の毛を掴み取り、捧げものを持つ信者のように掲げる。

「ほら、見て。私の髪は赤いでしょ。母さんの髪は緑で私たちは実の家族じゃなくて、それでも母さんは私を本当の娘として扱ってくれたし、感謝もしてる。……でも、見て？ 私の色は赤なの。白ではないのよ……」

「私は別に、そんな……。あなたを重荷に思ったことはないし、あなたを白薔薇の代わりにしたつもりもない！」

「なら、どうして私を拾ったの」

「呼ばれたからだよ。あなたが私の名前を呼んだ、だから、私は……」

「そう……。私があなただを求めたの。だから母さんは私を拾ったのね。私が可哀想だから。助けてあげなければいけないような、弱々しい存在だったから！」

「違う！」

「じゃあ、どうして？」

「出会ったその時は確かにそうだったかもしれない。赤ん坊だったし、そのままにしていたらきつと死んでしまうと思ったから。でも、それだけじゃない。それからあなたを育てたのは、あなたが私の娘だから、あなたのことを愛しているから……」

愛している。その言葉の無機質な響きに必死になって耐えていたものがとうとう崩壊して、私の両目からふつふつと涙が零れていくのがわかった。

「わかるけど……それは、もちろん、言っていることはわかるけど……。でも、それは、ただ、私が、白薔薇姫に似ているから愛したのだから、そういうことでしょうか？」

「違うよ……どうしてわからないの、赤薔薇。たとえどれだけ似ていたとしても、あなたは白薔薇とは関係のない、違う人間なんだ」

「意味もなく似ているのに関係が無いから、だから苦しんでいるんじゃない。もし本当に私が白薔薇姫自身だったらどんなに良かったか……」

「赤薔薇……？」

「あなたは私を愛してくれた。でもあなたは、娘という役割の私を守るばかりで、私の気持ちに気づこうともしてくれなかった……！」

母は、アセルスは叫ぶ私をどうしていいのかわからずに戸惑っていた。その姿を見ていると訳もわからずに憎らしくなって、私は彼女の襟元を掴み、さつと唇を寄せた。胸がかつと熱くなった。けれども次の瞬間には怖ろしいほどの恥ずかしさが私を襲い、体の中をうず巻いていた衝動や怒りは瞬く間に冷えていった。

「あなたのことが好きなの」

今にも凍ってしまいそうに冷たい涙が頬を伝っていくのがわかった。それは口にし

たが最後、もうけして戻ることのできない言葉だった。

「赤薔薇……」

「私は女の人が好きなの。……ううん、そうじゃない。女の人が好きなんじゃない、ただ、あなたのことが好きなの。私はあなたの娘なんかじゃない。そんな役割なんか、いいらない。私はあなたが欲しい。アセルス、私を見て！ 私はここにいるでしょう？ あなたが生んだ娘でもない、人間でも、機械でも、モンスターでも、妖魔でもない、まして白薔薇姫でなんてあるはずもない……ただ、あなたのことが好きな女……」

掠れた声でそう告げてアセルスの手首を握り自分の胸元へと引き寄せる。アセルスは抵抗することもなく、私に抱きしめられた。

「ねえ、アセルス。あなたが私を大切にしてくれるから、私は自分にそんな価値があるのかと思ってしまう。もし私がいなかったのなら、あなたは白薔薇姫を助けに行つたんでしょう……？」

「そんなことはない……！」

アセルスが私の腕の中で小さく呻く。

「あなたのことが好きよ、アセルス。愛しているわ。……でも、やっぱり、私たちは本当の家族になんてなれないのよ。私はずっと、自分があなたの迷惑になつているんじゃないかって苦しかった。いつも迷惑ばかりかけて、守られているばかりで……あなたに気

に入られるため、恩を返すために、いつもいつも気を使って息が詰まりそうだった！
まるで家族ごっこよ、与えられた役割を演じるばかりで、私たちは何一つわかりあつてはこなかったのだもの！」

「そんなのは考えすぎだ！ 親が子供を育てるのは当たり前のことなんだ！ 子供はそんなこと気にせず幸せに生きてりやいいんだ！」

「それでも、そうよ！ 与えられたものだけを受け取って、ぬくぬくと素知らぬ顔をして生きていくだなんて滑稽だわ」

アセルスはぎり、と歯を食いしばり、私の肩を掴んで体を引き離す。

「……あなたにだつてわかっている筈だよ。赤薔薇。誰も、見返りを求めて人を愛するんじゃない。ただ、私はあなたのことが大切だから……」

傷ついた表情のアセルスに思わず目を反らし、私は唇を噛みしめる。

「ずっとこのままではいられないことだつて、あなたにはわかっているでしょう。いつまでも……誰かに守られているばかりでは、どんな卵だつて腐つてしまう。いつかは殻を蹴破つて、外に出なけりや……！」

「赤薔薇……」

「ねえ、白薔薇姫を助けに行つて。私のことを女として愛してくれないのなら、もう、私のことは捨てていいから、あなたの望むことをして」

「できないよ」

「どうして!?!」

叫ぶ私に追い詰められるようにしてアセルスは唇を歪ませ、そして壁に掛けられた装飾剣を苦し気に見つめた。

「……刺されたんだよ。白薔薇に」

「刺さ、れた……?」

彼女の言葉が理解できず鸚鵡返しに囁くと、アセルスは泣きだしそうに肩を震わせる。

……確かに、彼女のが好きだったよ。もしかしたら愛していたのかもしれない。でもわからなかった。オルロワージュに追われていた話は前にもしたね? 彼の手で白薔薇と一緒に闇の迷宮に閉じ込められて、ただひたすらに彷徨い続けて、でも、出口なんて全然みつからなかった……。困ったな、と思ったよ。でもそれほど絶望はしなかった。だって私は一人じゃない。その時は白薔薇がいた。白薔薇がいれば何とかなる、そう思った。針の城から逃げ出した時も、あてもなく旅をしていた時も、白薔薇は私よりもずっとずっと物知りで頼もしかった。彼女はどんな時だって優しく、完璧で、女神さまみたいな女性だった。……でも、そのうちに白薔薇は突然態度を変えて、それまで見たこともないような冷たい表情をして私を殺そうとした。あなたには失望し

た、と彼女は言った。旅にわざわざ付き合っていたのは私を苦しめて楽しむためで、でももうそれは飽きたからオルロワージュのところに戻ることにする、そういつて私は何度も私の体を切り刻んだ。訳が分からなかった。怖くて怖くてたまらなかった。闇の迷宮に閉じ込められたものは大切なものを犠牲にしなければ抜け出せない。だから、白薔薇は私を残して出ていくつもりだった。『あなたは私の大切な玩具だったけれど、でも、もういらない』。面と向かつてはつきり言われたよ。見ていた世界が音を立って崩れていくのがわかった。もう何もかもがどうでも良い、そんな気がした。白薔薇がそんな風に私を思っていたのなら、もう生きることになんの意味もない……仕方がない……そう考えて、彼女の剣に身を任せた。彼女が自由になるのならそれでもいいか、そんなことも思った。どうせ私には生きる気力もやりたいことも無い。……だったら、私よりも強くて、私よりも賢くて、そして何よりも自分がどうしたいのかを知っている彼女が生き残るべきなのかもしれないとも思った。

でも……そう言った途端、彼女は私のお腹に剣を突き刺して、迷宮の扉から叩き落した。気を失う直前に彼女の声が聞こえた。なんて詰まらない女。こんな女をここに残して、私を助けるために犠牲になっただなんて自己満足に浸られるなんて癪にさわる。……だから、ねえ、アセルス。私はやっぱりここに残る。あなたは私を犠牲にして生き残り……そして、一生、苦しみ続ければいいわ。

「だから……白薔薇姫の剣、鏢ウテナクロス十字はここにある。私を切り裂いた彼女の剣……」
「そんな」私は言葉を失う。「そんなひどいひと、さつさと忘れてしまえばいいのに……」
そう口にして、辿りついたその答えに私はよろめいた。それはあまりにも残酷な事実だった。そこまでむごい裏切りを受けてなお、アセルスは彼女のことを忘れずにいる。彼女のことを想い続けている……。

「しろばらひめのことがすきなのか？」

呆然としたまま私は言った。アセルスは苦しそうに首を振る。

「わからないよ。今でも」

「私ではだめなの？」

「……赤薔薇。私はあなたのことが好きだよ。でも……」

口ごもるアセルスを私はただじっと見つめていた。助けてほしい、と心の底から思った。だが次に彼女が口にした言葉は、私を徹底的なまでに打ちのめすものだった。

「あなたは……白薔薇になんか似ていない。ちつとも似ていないよ。あなたは白薔薇の代わりなんかじゃない。今日、あなたと話してそれがよくわかった。あなたは、たぶん……私に似ているんだ。いま思い出したよ。私もそうだった。叔母さんに養われることが、嫌で嫌でたまらなかつた……。あなたは私に、よく似てる。あなたのが好きだよ、赤薔薇。でも、私は自分の事があまり好きにはなれない。自分を愛することは

きないよ……」

そうして、とうとう、私は自分が恋に敗れたことを認めた。

もうそれ以上の言葉を聞いていることはできなかつた。私はアセルスを突き飛ばして一目散に家を飛び出していった。

◇

風が吹いていた。

名前も知らない風だつた。どこからやって来たのかも、そしてどこへ行くのかも、何一つ知らずに風は私を取り巻き、そして翩つていく。惨めにのどをしゃくり上げ、涙で臉を腫らして、私は墜落した星々に穿たれた荒野を一人歩く。

——さあ、卵を握れ。

頭の中で誰かが言つた。ミスティとは違う声だつた。卵は家エッグに置いてきた筈なのに、どこから聞こえる声なのか私には見当もつかない。

——お前は支配者になれる。

誰かが言つた。なりたくない。私は答えた。そんなものになりたかつたわけじゃない。私は「支配」なんか望んでない。

足を一步進める。自分がどこへ行くとうとして居るのかそれすらも定かでないまま、今は今にも痙攣しそうな足を持ち上げる。

——お前は白薔薇になれる。

誰かが言った。なりたくない。私は答えた。私は赤い。私は赤薔薇。この体の中にはいま、赤い血潮が流れている。

足を一步進める。風の吹くままにさすらう旅人のように、ここではないどこかへと目指して私は大地を踏みしめる。

「ようく考えて、赤薔薇」

懐かしい声が聞こえた。それはミステイの声だった。珍しく、私を心配するような声だった。……そんな言い方は、あなたには似合わない。

足を一步進める。自分の体が少しずつ変わっていくのがわかる。腕や指が少しずつ開かれ、重苦しい音を立てて蠢いている。

「あなたの願いはなに？　あなたが望むものは、どんなもの？」

ミステイが私に尋ねる。私は次第に不鮮明になっていく意識を必死に手繰り寄せ、私の愛を考えた。

「私は」

そしてまた誰かが言った。

——さあ、卵を握れ。

——お前は支配者になれる。

——お前は白薔薇になれる。

そしてまた誰かが言った。

——このリージョン界において、主だった種族は四つあります。ヒューマン、妖魔、メカ、モンスター。この四つデス。

——いいえ。できなかった。手に入れたと思ったその瞬間に、私は彼を失っていた。だから赤薔薇、あなたにはそんな思いをしてほしくないの。

……気が付くと、目の前が真っ赤になった。景色が変わったんじゃない。眼球からとめどなく零れ落ちる血液が、私の視界を真紅に染める。その内にぶちりと音がして私の眼は見えなくなった。

「ほんとうに、それでいいの?」

ミステイが言う。私は答える。

「どうせ叶わぬ想いなら」

もう、何も見えない。突然訪れた暗闇の中で、けれど私は恐れることなくこの荒野に足を踏み出す。必要のなくなった靴を脱ぎ捨て、石ころだらけの地面を素足で踏みしめる。ガラスの欠片や金属片が突き刺さり、足は瞬く間に裂け、滔々と血が流れていく。

踏みしめてなお溶け出す私の血液、ぴちやりと濡れ、静かに流れだす私の命。

腕は高らかな軋みを上げ、千々に分かれた。肌が堅い皮に覆われ、汚らしい苔色に染まる。

どうしようもない飢餓感に何気なくお腹を撫でると、しゃふ、と柔らかな音がして内臓が転げ落ちていくのがわかった。

そしてまた誰が言った。さあ、卵を握れ。

私は荒野に立つ。それはあの小さな星が墜落した場所、私が破殻卵ブレイクエッグを作り上げた場所だ。そこに卵は転がっている。目はどうにも見えなくなっているのに、それでも卵エッグはそこにあることがわかる。

お前もいつかは産んでやらなきや。無意識に私は嘔き、ゆつくりと卵を拾い上げた。私は考える。

こうして卵を握るなら、きつと私は大罪人だ。恋に敗れたというただそれだけで、こうして卵に手を伸ばすのだから。

けれども。

こうして願いが届かないなら、愛する人ひとり振り向かせることができなければならぬ。女の悲しみ一つで世界は滅ぶべきだ。きつと。

私は言った。

さあ、^{エッグ}卵。

私の願いを叶えなさい。

そうして少女は母になり、——そうして、少女はけだものになる。

少女は言った。

^{モンスター}怪物になりたい。

長く哀しい遠吠えが荒野に響き渡る。

それは乙女の咆哮だった。

◇

……そうか。それがお前の答えなのか、赤薔薇。

……良からう。ならば致し方あるまい。物語の話をしよう。

世界の果てで一匹の怪物が生まれる。

怪物の名は赤薔薇。だがその怪物は薔薇の姿をしてはいない。

それは振くれた七竈ナナカマドの化け物。赤い果実を實につける薔薇科の樹木だ。呪詛を宿して鳶を狂わせ、無数の根を蠢かせて動き出す。

欲しい欲しいと啼くのだ、その枝葉の一つ一つが。無闇矢鱈と繰り返す単為生殖で膨らませた雌しべはぼとりぼとりと斬首の音を立てて種をひりだし、破裂した種は辺りを飛び交う小鳥を捕まえてはぎうぎうと圧し固めて一つの肉塊とする。そうしてできた命の玉を自らの洞へと取り込んで血を啜り肉を齧りと赤薔薇は進む。その身にはらむ本能のまま、星屑のリージョン、ボロ、この辺境の星に暮らす一人の半妖の家を襲う。巨大なその体で屋根へとのし掛かればいとも容易く家は倒壊しその中から険しい顔をして女が飛び出してくる。女の名はアセルス。アセルス・ナイトレス。女は何しろいましがた飛び出した娘を心配していたのだが、まさかその娘が植物型のモンスターとして帰って来たとは思わない。突然変異の化け物かはたまた針の城からの新たな追手かと考えを巡らせ、こんな時に娘が家にいなくてよかったと少しだけほっとする。もはや剣を持たない彼女だが自衛のためにいくらかの武器は当然備えており、取り出した自動拳銃アグニッスPで怪物を撃つが堅い樹皮に阻まれてしまう。

ここは私の家だ。私と私の娘が帰る場所を壊すな。

そう叫んだ女は床に転がる小瓶の中身を飲み干し、見る間に妖魔へと姿を変えた。

戦う理由が私にはある。手に持った鉈を構えて女は言う。途方もない質量を秘めた

鋼鉄の枝を何度なくその身に受け、打ち据えられ、しかし女は立ち上がる。怪物がぶるりと身を震わせると赤い果実が無数に落下し、爆発して溶解液をまき散らせた。呻き声をあげて顔を覆う女の皮膚は無残に焼け爛れるが、しかし、見よ。べろりと剥がれ落ちたその皮はしかし血液に縫いとめられるようにしてするすると宙を飛び再び女の顔を象つていく。

怪物の鋭い根が女の柔らかな腹を削ぎ落とした。だがその根を無造作に掴み、女は力任せに叩き割る。耳を覆いたくなるような叫び声があがる。だが痛みに絶叫する怪物には構わず、女はその樹木への中心部へと歩みを進める。

私は赤薔薇を待たなきやならないんだ。邪魔をするな。

冷たく告げて強引に枝を切り払い、中心部の核を握りつぶす。戦いはあっけなく終わった。赤薔薇という名の怪物はアセルスの手によって討伐された。

そして――。

その手で赤薔薇を滅ぼして、ようやくアセルスは取り返しをつかないことをしたことに気づくのだ。

妖魔が妖魔武器でモンスターを絶命させるとき、そのアニマを憑依させる。赤薔薇の魂がアセルスの右手――妖魔の小手に吸い込まれていく。流れ込む赤薔薇の意識に全てを悟り、アセルスは絶望の嘆きを上げた。

そう、赤薔薇は知っていた。それはアセルスの命を救った紅にさえできないことだった。赤薔薇が手にしたものの名を我々は既に知っている。

それは「永遠」だ。

ヒューマン。妖魔。メカ。そしてモンスター。この四つの種族の中で唯一モンスターだけが妖魔と一つになることを許される。

支配者になるのではない。白薔薇になるのではない。赤薔薇はアセルスを自らのものにしようとしなければ自らの愛を叶えようとさえしなかった。

赤薔薇はただ願ったのだ。アセルスの幸福を。彼女が前へと進むことを。そして選んだ。彼女の武器に憑依し、とこしえに彼女を守護することを。

なんと馬鹿な娘だ。

お前は……。

……。

……赤薔薇。モンスターとなったお前の魂が泣き崩れるアセルスへと語りかける。あなたのことを、愛している。だから、私のことを愛してくれなくてもいい、せめて、自分自身のことを愛してほしい、と。

私が愛したあなたを愛して。あなたが望む未来を目指して。最後にそう言い残してお前は滅びを迎える。ただ純粋な力、どこまでも無垢にアセルスを守護する力として、

そつと幽かな光を小手に灯す。

……もういいだろう。あとはアセルスの意識を乗っ取り、このボロに住む全住人のアニマを吸い取るとしよう。

「——本当にそれでいいの？」

我々に語りかける者は誰だ。ミスティか？ お前はもう用なしだ。引っ込んでいろ。

「——何か忘れていないことはないの？」

……。忘れていないこと……？ そうか。我々は何を学ぶべきなのか、それをすっかり忘れていた。我々はかつてあのサンダイルで“愛”によつて負けたのか。その答えを出さねばならん。だが考えたところで答えは出まい。此度の事件でお前が示したものが、真に愛と呼べるものだったのかどうか我々にはわからぬ。このようにエゴイズムに満ち、歪んだ末路を迎えることが果たして愛なのかといえば理解に苦しむ。仮に愛だとしても、我々にお前の如き自己犠牲を行うつもりは微塵もない。我々は覇者であり、支配者なのだから。

だが——ああ、確かに認めねばならないのかもしれないかもしれぬ。これは負け戦だった。我々はいずれお前が誘惑に屈するものと高を括つていた。アセルスを支配し、その愛を手に入れるか、さもなければ白薔薇へと変じるのだろうと思つていた。だが、そのいずれの予想をもお前は超えた。最期の選択でお前は怪物になることを受け入れた。恋に敗れた

お前は自暴自棄なままアセルスを食い殺すのだろう、我々はそう考えた。女というものは一時の感情で全てを滅ぼそうと考える生き物だ。所詮はお前もその類であるとばかり決めつけていたが、そうではなかった。

……認めよう。我々は敗北した。勝ったのはお前だけだ。お前は紛れもなく自らの望みを通して見せたのだ。……そうか、お前は我々がこの後どうするか、それすらもわかっていたのか？ そんなはずはあるまい。これはただの気まぐれだ。我々はそれほど甘い存在ではない。……いや、これは考えても詮無いことか。お前の勝ちを認めた時点で我々の行動は決定しているのだから。

ああ、そうだ、赤薔薇。お前はあらゆるものに勝利した。我々がお前を精神支配することができなかったのはお前にアニマが存在していなかったからだ。今まではそう考えていた。だがそれはもしかしたら——お前の中にひっそりと眠るアニマが元は別の誰かのものだったからかもしれない。そうだ、お前はもともと何者でもなかった。ただ、アセルスを愛するために造られた赤薔薇だった。だが今は違う。この結末がお前の魂を証明する。お前のアニマは確かに妖魔の小手へと憑依した。お前は自らの力で命を獲得したのだ。

認めよう、赤薔薇。お前の意思、お前の選択を。そして誓おう。お前の望みを叶えることを。些少ではあるがこの我々の力もまたアセルスに流れ込んでいる。少しは助け

になるだろう。

構わぬ。それなりに面白い余興だった。お前の愛したアセルスが滅び去るまで、我々はしばし眠らせてもらおうとする。どうせ大した時間ではあるまい。百年、あるいは千年。アセルスがその生を全うするまで、久遠を生きる我々にしてみれば取るに足らん時間だ。

精々その時間を存分に味わえ、赤薔薇。お前がそう望んだのなら。

第二十六幕 埋葬者の荒野、魅了者の月

墓を掘らねばならないとそう考えた彼女は、行動を終えた後でしかし自分が埋めるべき遺骸を持たないことによく気づいた。

葬るべきもの、弔うべきものがその手にはなく、乾いた荒野の風だけが指と指との合間からすり抜けていく。悲しみには肉を与えて墓穴に添えてやらねばならないというのに目の前の暗がりには伽藍堂の夜を湛えて微動だにしない。

空っぽだ。

骸を晒し名前を付けてお前は私の悲しみだと囁きかける、埋葬とはそんな風に自らの感情を象るための命名儀式である筈だというのに握りしめた手のひらからは無機質な土塊ばかりが徒に零れ落ちる。

かつて自分にあつたものが、今はもうここにはない。去来した静かな虚無にそつと瞳を閉じて長く険しい呻き声を上げるとき、女は時の流れに絶望する。



荒野に夜が降りるとき、闇は瞬く間に地平を舐め、凍れる紗幕となつて大地を覆つた。昼の灼熱から夜の極寒へと二重人格じみた極端な変化に旅人はおろか虫や獣でさえも息を潜めて伏せる夜、世界は影絵の如く色を失う。

音もなく冷える夜。見渡す限りの索莫たる荒野。色を持たない影ばかりがひっそりと佇み、寂しい無言劇を演じ続ける。たとえどんな植物であろうともこの影芝居の中にあつては一本の棒切れにしか見えぬ、一つの頭に一つの体、二本の腕と二本の足を備えたならばそれはもう人間にしか見えぬ。たとえ人形であろうと妖魔であろうとも光なきこの荒野ではみな等しい影を持つ。

影絵の荒野に立つその女は喪服を身に着けていた。枯れ枝のように細いその身を黒衣で覆い、女は手に持ったスコップで地面を執拗に掘り返している。降りかかる土や泥で体が汚れることも意に介さず、淡々と女は穴を穿つ。無造作に焼き菓子を噛み砕くような音を立てて、少しずつスコップの剣先を地中深くへと突き立てていく……。

こんな夜中のこんな荒野に影絵となつて一人何をしているのかと問えば、女は子を失つたのだつた。失つてからは半年ほど女はひたすらにぼんやりとしていた。そのうちに彼女を訪ねてやって来た妖魔が慰めの言葉を掛けたのだが反応は薄く、彼女はそれでも呆然としている。女は雨風に打たれるがまま瓦礫に力なく尻を落としていた。帰るべき家は崩壊しており、他に行く場所はなかつた。妖魔は女の手を引いて安全な場

所へ誘つたが彼女は動かない。もういい。放つておいてほしい。それが女の返答だった。女をしきりに元気づけていた妖魔もやがては失望を顔に浮かべてどこかへと消えていった。君を隠すのをやめてしまえばイルドウンがやつて来る。それでもいいのかい。妖魔は最後にそう言い残したが、どちらかといえば女にはそれが救いの言葉のようにも聞こえた。イルドウンというその言葉は今や彼女にとつての審判者だった。

瓦礫に腰かけているといろいろな人が話しかけてくる。仕事場の同僚や子供の知り合い、みな心配そうに女の顔を覗き込み、たちまちのうちに言葉を失つて蒼褪めた。女には妖魔の血が流れており、有り余る再生力にその容貌はいかなる時も傷一つなく在るはずだったが、しかし今ではその瞳は昏く翳り、割れた鏡のようにいびつな世界を映している。絶え間なく続く絶望と疲労とが眼のふちに深い隈をつくり、乱れた髪の間から覗く双眸はまさに幽鬼。女はけして暴れたりはしなかったが、強引に病院へ連れ帰つてもいつの間にかに抜け出して荒野へと舞い戻つてしまうために知り合いたちはみな苦労を重ねた。妙に冷静な口調で女は言うのだった。大丈夫。私は半妖だから、このくらいで死にはしないよ。

最後まで女の元を訪れていたのは死んだ娘の友人だった。少なくとも彼女には娘がどのような死んだのかを話さなければならなかった。彼女は女を責めこそしなかったものの、やはりひどく傷ついているようだった。

女に声をかける者が一人また一人と減っていき、とうとう女は真の意味での孤独となつて、このボロの星の荒野に一人取り残される。

女は墓を掘り始めた。その動きはひどく緩慢でじれつたいほどにたどたどしい。悪霊に囁かれ正気を失つた精神病患者さながら、朦朧の手つきで掘り進め、やがて十分な穴が出来上がった。その時になつてようやく、女は重要な事に気づくのだった。棺の不在。肝心要の死体がここにはない。「彼女」の——赤薔薇の体、自分の娘の遺体はもうこの世には存在しない。自分が殺したのだからそれは誰よりもよく知っている。モンスターのアニマを小手へと吸収した後、七竈型のモンスターは見る見るうちに枯れ、塵となつた。塵は月明かりの照り返しを受けながら風に吹かれて散っていき、後には何も残らない。手を伸ばすべきだったと気が付いたのはずっと後になつてからで、女はただ娘殺しのおぞましさに震えるばかりだったのだ。

耳が痛くなるほどの静寂が胸に沁みだした。荒野の夜には凍えそうな冷気があらゆる物体を縛り付け、物音ひとつ立てない。女はやつれた顔で空を見上げる。それから小さなナイフを取り出すと右目の淵に添え、ゆっくりと差し込んだ。そのままナイフを握る手をぐいと引き下ろすと梃子の原理で眼球が剥がれて飛んだ。乾いた音を立てて眼球は墓穴へと転がっていく。女は薄い唇を薄つすらと綻ばせた。これが「彼女」の肉だ。彼女がこれから視るはずだったもの、その網膜に映すはずだったもの……。祭壇に捧げ

る供物の代わりに眼球を埋葬しよう。じわじわと増大していく眼孔の搔痒感に安堵しながら迷うことなくナイフの矛先を左目へと移す。力任せに眼球を跳ね飛ばす。ああ。頭が少し軽くなった。そのままぼんやりしていると雷にでも撃たれたように突然の激痛が眉間の奥に奔り苦鳴があがる。女は仰け反るが、しかし食いしばる唇の端はどこか笑っている。ははは……。

眼球はいずれまた再生する。その間に女は全身のあらゆる所を少しずつ削ぎ落とし、ていく。まずは左手の小指から。じゃがいもの皮を向くように刃と親指で挟み込みぼとりぼとりと指を落としていく。人一人分の肉を量ろうと秤の中に切り落とすように墓穴へ。全身の汗腺から夥しい汗が吹き出し、興奮に熱を持った肌が痙攣するのがわかる。痛いな、と今さらのように思う。しかし同時に女は知っている。その痛みがいつかは冷め、なかったことになることを。オルロワージュの血。半妖の体。ありとあらゆる傷は癒え、忘れてしまえる。気が狂ってしまわない限りはいくらでも忘れられるのだ本当に。ふと解剖の最中、何気なく彼女の姿を思い描いた。どんな眼をしていただろう、と考える。ありありと、そして鮮明に我が娘の顔形を思い出すことができた。やはり彼女は白薔薇に似ていた。墓穴に転がる自分の眼球とは似ても似つかない目。彼女の髪、目の醒めるような赤色、彼女の腕は心配になるほどちっぽけで細い。赤い服ばかりを好んできていた。あの赤い姿。当たり前だろう。自分の娘なのだ。忘れるはずがない。

忘れるはずがないのだ。それでも……。

女は思った。赤薔薇の膝裏はどんなだっただろうか。右膝に一つほくろがあることを赤ん坊の頃に見て女は知っていたが、しかし赤薔薇が大きくなり、抱き上げておしめを替えるわけにもいなくなつてからは、確かにいちいち全身の状態をつぶさに確認していたとは言い難い。彼女の膝、彼女の臍。些末な事だとは思えなかつた。自分にはもう彼女の姿の一部が思い出せない。だとしたら、時の流れの中でいつか赤薔薇の姿を忘却しないとどうして言えよう。……いや、それは違うだろう。ここは誓いを立てる所ではないか。わたしは決して忘れないと。何百年何千年経とうとも彼女をこの胸に留めておく。そんな絶対の約束を結ぶべきだろう。

女は言う。私は彼女を忘れない。口に出して宣言したが、悲しいかな喉が震えた。想像していたよりも遥かに弱々しい声だった。どうしてだろう。何故、自分は、娘を永遠に忘れないとそんな当たり前のことでさえ信じることができないのか。

ぼおん。

女は顔を上げる。どこかで時計塔の鐘がなつたようだった。こんな深夜にいかなる時刻を知らせるつもりか、ぼおん、時計塔の鐘が鳴る。頭が痛い。自分の名前が呼ばれているかのようにきよるきよると辺りを首を振って時計塔を探す。

息を吸って、息を吐いた。ぼおん、と間拔けな音を立てて鐘が震える。一度、そして

二度。数えている内に再生した目玉と視神経が繋がった。世界が見える。だが赤薔薇にはもう何も見えない。彼女はもう成長しない。再びナイフを差し込んで眼球を跳ね飛ばす。ぽこん、やはり間抜けな音と共に眼球が墓穴へ滑っていく。

ぽおん、ぽこん、ぽころろん。

ぽおん、ぽこん、ぽころろん。

気が済むまで眼球を割り貫いた。無数の眼玉がこちらを見ている。自分の眼は自分を責めているように見えたので女はやさぐれた顔をして笑った。馬鹿馬鹿しい。それがどうした。いくら罪悪感を覚えたところで人一人が生き返ったりはしない。

緩慢な憎悪、そして幼稚な自傷。とうとう女は墓を埋めた。石を置き、花を供え、そして——ゆつくりと、こう思う。

この荒野が旅の果て、私の辺境だ。フロンティアこのボロのこの荒野、凍てつく風が大地を削る寂しい夜。ここではないどこかを求めて旅をするのはもう終わりにしなければならぬ。

女はただ静かに待った。彼が訪れるのを。



太陽が地平線の向こうに沈み、訪れた宵闇に紛れるようにして音もなくその妖魔は現

れた。あらゆる光を撥ね退ける黒衣の外套に身を包み、美しい瞳に孤独な光を灯して。

鴉の眼。石化蜥蜴に似た白鬚粟の肌。あまりにも美しすぎるがために見る者全てを跪かせる亡霊のように、その形貌の幽美たるやまさに凄然。花緑青の長髪にすずろな夜風を孕ませ、荒野を踏みしめて悠々と足を進める。閑雅にして端麗なる黒騎士——だがその唇から告げられるのはあまりにも武骨な言葉だった。

「剣を抜け。アセルス」

呼びかけられた女——静かに墓を眺めるアセルスはしかし振り向かない。

「剣を砕いたのは貴方でしょう」

「知ったことか。ならば代わりの剣を用意しろ」

アセルスはちらりと自らの腰に視線を向ける。喪服にはまるで似つかわしくない粗末な鉄の剣——ベルトに提げられた凶器に手をあて、しかし抜くことなくおも男に背を向け続ける。

「剣を抜け」

「戦う理由が無いよ」

「そうか」男は淡々と答える。「では好きにしろ」

言い終わるが否や男は無造作に剣を抜き、情け容赦のない致命の一撃をアセルスへと叩き込む。くぐもった呻き声がこぼれた。背後から胸を一突きにされたアセルスは血

を吐き、それでもゆっくりと顔を上げ、動揺一つ見せずに剣を抜くと軽やかに大地を蹴つて男から距離を取った。

そして尋ねた。憎しみに顔を歪めるでもなく、あくまでも冷静に。

「どうして、貴方は私を殺したいのかな」

男もまた感情をささず平然と囁く。

「お前は下らん」

「私の何が下らないというの」

「お前は——」男は判決を下すように冷然と言った。「時の流れに敗北した」

「私が……?」

「そうだ。お前の言う事は一々面白いが気に入らん。だがそれでも良かった。お前が以前の望むとおりに生きるなら、そんなことは俺には関係が無い。お前が針の城から逃げ出そうと、どれだけの寵姫を連れ出そうともな。——だがお前は負けた。白薔薇姫を奪われ、立ち上がれと言った俺にお前は何と答えた? 赤子の泣き言のような甘ったれを抜かしただけだ。もはやお前には戦う理由が無いのだろう。俺に刃向かったあの小生意気な猿はどこにもいない。アセルス・ナイトレスは死んだ。府抜けたお前など、この世に存在しているだけで目障りだ。だから俺が殺す」

「はは……」アセルスは弱々しく微笑み、再び男に背を向けて墓を撫でる。「相変わらず

だな、イルドウン……」

イルドウンはそこでようやくアセルスが守っているものに気づき、目を細めた。

「……誰の墓だ」

「私の、娘。この星で……子供を育てたよ、イルドウン。貴方と出会ったあの時には、自分がそんなことをするだなんて思いもしなかった」

「娘？ 出産していたのか……？」　ようやく表情を変え、訝し気に眉を顰めるイルドウン。アセルスは投げやりにため息をつく。

「貴方も随分としつこいね。あれから何年経ったと思っているの？」

「大した時間ではない」

「妖魔にとってはそうかもね。……でも私にとってはそうじゃない。私にとっては……子を育て、そして母にはなれないと思いい知るだけの、あまりにも長い時間だった」

「なぜ、その子を守らなかった？」

「……」

「お前の弱さで何人の女が消えた？ 紅、白薔薇、そして今度はお前自身の娘か。愚かだ

なアセルス」

「ああ……」アセルスは息を吸い、ぞつとするような低い声色で答えた。「そうだね。認めよ……」

「これ以上醜態を晒すな。さっさと死ぬ」

「私がどう生きようが貴方に気にされる筋合いは無いよ。貴方らしくもない。私を殺したいというのなら、無駄口を叩かず、いま、この首を落とせばいい」

「ふむ」イルドゥンは頷く。「それもそうだな」

瞬間、ざり、と大地が削れたかと思うとイルドゥンの姿は消え、はつと天を仰げば剣を掲げたイルドゥンが頭上に迫っている。音もなく妖魔の剣を振るうイルドゥン。だがアセルスは落ち着いた様子で胸元から自動拳銃アグニSSPを抜き、躊躇うことなく発砲する。至近距離からの一撃を剣で弾き——イルドゥンは体制を崩すことなくその場に着地した。「そんな玩具でこの俺を倒せると思っているのか？ 笑わせるな」

事もなげに吐き捨てるイルドゥン。

「別に銃が効くとは思っちゃいない。……でも、この手でそのまま殴るよりは意味があるでしょう？」

アセルスはなおも銃を構えたまま目をそらさない。

「さっきも言った筈だよイルドゥン。私には戦う理由が無い。戦わずに済むのならそれに越したことはないんだ。お願いだから、剣を収めてほしい。……そして、できることなら、私の話を聞いてくれ」

真つすぐに——どこまでも揺れることなく相手を見据えてアセルスは言う。だがそ

んなアセルスの懇願をイルドゥンは一蹴する。

「お前の言葉はまるで夢物語だ。まだわからんのか、アセルス。誰も彼もが言葉一つで分かり合う世界など存在しない。世界は常に混沌としているもの。正義一つ、愛の言葉一つで何もかもが解決するとしたら、そんな薄気味の悪い宗教のまかり通る世界など願わばいい下げだ」

もういい。お前にはほとんど愛想が尽きた。そう吐き捨て、イルドゥンは混じりけのない殺意をのせて切りかかる。

死ね――。

遠慮も容赦もなく囁かれたその言葉に、しかしアセルスは冷笑を浮かべ、手に持つ銃を連射する。

「貴方は変わらないな。イルドゥン」

「俺が変わらないのは俺がイルドゥンだからだ。俺の行動はいつだって俺のもの。……お前はどうかだ、アセルス。お前の行動は常にお前自身の意思によるものか？」

「……」

「時の流れの中で人間は変わる。それは人間が己自身ではなく言葉に依拠するからだ。時には正義、時には愛、下らないそんなものに縋りつくから、お前たちはころころと行動を変える……！　だが俺は違う。俺は妖魔イルドゥン。俺は俺の望むことをする。」

いまこの俺が望むのはお前の死だ。死ぬアセルス。お前はつまらん
「ははっ……」

やつれた瞳を虚無的に曇らせ——とうとう弾を撃ち尽くした銃をイルドゥンへと投げつける。無造作に放つた剣閃で過つことなく銃を七つに切り分け、イルドゥンはさらに踏み込んだ。間合いをとろうと飛び退くアセルスとの距離を一瞬で詰め、そのまま足の甲を踏み割る。己の不利を悟り、ぐつと呻いたアセルスは避けられないと知るや自らの左腕を掲げた。妖魔の剣の一撃。自らの体を犠牲にして何とかその場を脱するも、アセルスの左腕は無残に砕かれてしまう。だが、しかし——アセルスもまたこの程度は慣れっこだと言うように平然とした表情で軽口を叩いた。

「この世は本当にままならないな。参ったもんだよ、本当に」

「もう口を開くな。うんざりだ……」

「貴方はそうでも、私は違う。何しろ腕が回復する時間を稼がなきゃならないんでね……」

「いいから死ぬ」

「ははは」アセルスは再び笑い、そして寂しげに目を伏せた。「まあ、でも、そうだね……。わかるよ、イルドゥン。きつと貴方の方が正しいんだろう。私は弱い。弱い私にはもう、何も変えられない」

「……ようやく認めるか。ならば大人しく死を受け入れろ」

「嫌だね」

アセルスは静かに言った。命乞いをするのでも誤魔化すのでもなく、ただありのままの気持ちを含めてイルドダウンの視線を受け止める。

「生憎と……私はいま、自分のことを好きになろうとしているところなんだ。そういうわけにはいかない」

「……なに？」

意味が分からなかったのか訝しむイルドダウンに堂々と背を向け——アセルスは遠い眼で自らの娘の墓を見つめる。

「なあ、イルドダウン……」茫洋と、アセルスは囁く。「貴方の理屈は正しいのかもしれない。……でも、私はもう、それなりに年を取った。わかったんだよ。私は正義のヒーローじゃあないし、ヒロインでもない。どちらかといえば悪なのかもしれないけれど、でも悪党であろうとも思わない。私は一体何なんだ？ そんなことを今さらのように考えるよ。私は妖魔じゃない。かといって完全な人間であるとも言いきれない。だつたら。私は」

「お前は取るに足らん半妖だ。それ以上でも以下でもない」

淡々と告げられた言葉に、アセルスは長く深いため息をついた。

「ああ、そうだな、イルドウン……。その通りだ。正義でも悪でもない。妖魔でなければ人間でもない。私は半妖だ。ああ、そうなんだ……。だから、決めたよ。私はただ、自分のやりたいことをやる。そう決めた。だから、私は……」

そうして——アセルスはようやく腰に手を伸ばし、ゆっくりとした動作で剣を抜いた。刀身に映る女の唇がどこかうつとりと……。陶醉するかのように歪む。

「——貴方を口説いて、この先に行くことにするよ……」

イルドウンの見つめる先で、

ツルギを掲げる乙女の唇が、

淫らに、そして優雅に紡ぐ、

その言葉。

「今………なんと言った？ お前は……」

それは完全なる未知の台詞。黒騎士イルドウンにとって未だかつて聞いたことのない女の口説。背を向けるアセルスが厳かに剣を抜く——その瞳は淡く、結晶の青^{アクアグレイ}灰。

その眼球は久遠を見据える支配者の眼、数多の失語症患者を生み出す淫魔の流眄^{ながしめ}。

「貴方を口説くと、そう言ったんだイルドウン。私の望みを果たすために……」

優しい微笑みにほんの僅かな嘲弄を忍ばせ——アセルスが振り返る。その髪は濫りがわしく伸び、ちょうど青白い月光に浸されたかのように蒼く染まった。それは妖魔だけが持つ鮮血の色。永遠を生きる魅了者の血の色だ。

「この俺を倒す……だと……?」

押し殺す声を剣呑に尖らせ、イルドウンが睨み付ける。並の妖魔ならば受けたただけで消滅するほどの怒気に、しかしアセルスは寸毫も動じずに緩やかな微笑みを続ける。

「ああ、そうだ。イルドウン。旅は終わりだ。私は先に進む。——貴方が、邪魔だ」

「ほごくな……半妖風情が。オルロワージュの血を受け入れた程度でお前如きに何が出来る」

「出来るとか、出来ないとか……そういう話じゃあないんだよ……」

昏い眼をしてアセルスは囁くように言った。

「ただ『そうする』と言うだけだ。私がそうしたいからそうする。ただそれだけだ。……それが出来ないというのなら、その時は私が滅ぶだけのことだろう」

事もなげに死への覚悟を告げるアセルスに——イルドウンは貫くような視線を向けたまま領いて見せた。

「それがお前の言葉か……アセルス。ならば問おう。お前の望みとは何だ。この俺を倒して、お前は何処へ行く?」

「ファシナトウルへ帰るよ」アセルスは目をそらさずに答えた。「もう一度オルロワー
ジユに会う。そして、白薔薇を取り戻す……」

「ふん……」

その言葉を聞いてイルドゥンはようやく柔らかな吐息を吐き出し、再び首肯する。

「その言葉がああの方に聞けていたなら、俺もこんな辺境にまで来ることもなかっただろ
うな。……だが」

イルドゥンが剣を構える。苛立ちのままアセルスを殺そうとしていたそれまでとは
異なり——黒騎士として全力で相手をするというその姿勢に、自然と周囲の空気が震え
始める。

「どれだけの理想を叫ぼうと現実には常に冷酷だ。この俺を超えられるか、アセルス。運
命に立ち向かう気があるのならまずはこの黒騎士を滅ぼしてみせろ」

その言葉にはもう、半妖への侮りや蔑みが込められてはいなかった。かつて自らが剣
を教えた女——アセルスへの真摯にして純粋な宣告だった。だが——。

「どうしてさ」

当のアセルスは首を傾げる。

「私は貴方を殺さない。殺せるとも思わないし、殺すつもりもない」

「なに……？」

「勘違いしているよ、貴方は。言つたろう、私には戦う理由が無いと。貴方の命なんて欲しくもない。そんなものは、いらぬ。たとえ——」アセルスは自らの剣を見つめる。

「こうして身を守るために剣を抜くことがあつたとしても、それは貴方と戦うためじゃない。貴方と言葉を交わすためだ」

「貴様……！」

とうとうイルドゥンは吠えた。抑えることのできない怒りだつた。どこまで世迷言を抜かずつもりなのだ、この女は——。失望に失望を重ねた後悔が喉元をせり上がり、暴力的な衝動が両手を震わせる。それは黒騎士イルドゥンとしては初めて味わう『憎悪』なのかもしれない。

「この期に及んで……貴様はまだそんな戯言を口にするのか。何が言葉だ、笑わせるな。力を持たないものはしよせん強者によって食われるのがこの世の習い。言葉など、つまるところは弱者が群れるための道具だろうが……！」

「いいや、違うね……」

感情を露わに叫ぶイルドゥンに、アセルスはなお低くそして深い声で言う。

「教えてくれ、イルドゥン。貴方を倒して一体何の意味があるというんだ。貴方の語るその理屈、力が全てだという考えに則つて私が貴方を殺したら、それは、私が貴方に成り代わるのと一体なにが違う」

「何だと……?」

「その時にはもうアセルスという女はこの世にいない。ただ私という女が、妖魔のような顔をして貴方のような口をきき、力づくで他者を捻じ伏せていくようになるだけだ。……教えてくれ、イルドウン。それが私なのか? 貴方が剣を教えたのはそんな女か? そうじゃないだろう。妖魔である貴方が百年千年と変わらぬイルドウンであるように、私もまた十年二十年を生きたアセルスなんだ。貴方が貴方であるように、私が私であることはもう変わらぬ。曲がらないよ」

「だから、何だ? それが甘ったれだと何度言ったらわかる。俺とお前、何一つ変わらぬのなら結局は殺し合いになるだけだ。お前がどんな言葉を吐こうとも俺がお前を見逃すことはあり得ない」

「そうでもない」アセルスはさりりと言う。「貴方が私を好きになればいい。それで問題は解決する」

「気でも狂ったのか……? この俺がお前を、だと……? いや……そうか。つまりお前が言っているのはこういうことか? この俺を魅了すると? 黒騎士である俺を半妖のお前が……! 笑わせるな!」

「その何が悪いんだ。教えてくれイルドウン。貴方が私の味方になってくれればこれほど頼もしいことはない。私は貴方を魅了する。それが私にとっての最善だ」

「何様のつもりだ。お前が俺を超えるというのなら、力でもって示して見せろ。妖魔にとつては格が全てだ、俺は俺よりも弱い者に傳くつもりは毛頭ない」

「妖魔の格……か。他を魅了する美貌、他を威圧する恐怖、そして何物にも屈しない誇り……。何が、妖魔だ。笑わせるなよイルドウン。殴り合いで勝つたやつが偉いなんていう理屈はな、男の単細胞が言わせる台詞なんだよ」

「馬鹿が……！」

「私は私を愛するとそう決めた。憎んでも憎み足りない自分自身をもし愛さなければならぬとするのなら、私は有り余るその愛で誰もかれもを魅了してみせるさ。……イルドウン。私は貴方のことが好きだよ。気に食わない所も多いけど、貴方の強さ、貴方の真つすぐな生き方には素直に憧れた。力を貸せ、イルドウン。私にはあなたが必要だ。貴方を殺したつて私は幸せにはならない。私は……私の望む道を進む」

「腑抜けめ……。自らの手を汚すこともなく何かを手に入れようなどと、都合のよいことばかりを囁つていればさぞ楽しかろう。だがお前には教えたはずだぞ。生きたければ奪え。戦つて殺せ。俺は——闘わない者は助けない」

「片手落ちだな、イルドウン。自分が欲しいものを手に入れるためには何かを犠牲にしなけりやならない——貴方の弁に従つて言うなら、そんなのは弱い奴の言う事だ。私は望むもの全てを手に入れる。そしてそのために——」

アセルスは真剣な目をして言った。

「——そのために、言葉を尽くすよ。……そうさ、力じゃあない、言葉づくで、貴方を超える……」

剣を、構えた。

月明かりに照らし出された乙女の姿、妖魔アセルスの支配的なまでの美しさ。美しさ？ いや——違う。彼女は美しくなどない。むしろ醜くさえある。窶れきつた目元には深い隈と皺が寄り、風に吹かれるままの乱れ髪が蒼く不確かに揺れる。着崩れた喪服は雨に打たれ、みすぼらしい黒衣に体をまとわりつかれた彼女は頼りない枝葉の如く瘦せ衰えて細い。

逆縁の悲しみに打ちひしがれ、子殺しのおぞましさに震える夜を過ごした。昼に怯え、夜に恐れる日々を繰り返し、浅い睡眠と覚醒とを間断なく続けながら悪夢に叫び声を上げて目覚め、掌を柔く握りしめ己の無力を嘆いて暮らす。敗北者アセルス。殺人者アセルス。もはや彼女には、かつて抱いていた若さゆえの澆刺とした輝きは無い。無体なお題目を口にし、声高に正義を叫びだすこともおそらくはもう、ない。それでも——。

依然として彼女の瞳には冬の空の闇夜にあつてなお消えぬ灯がある。疲労の色濃いその目には希望の代わりに冷たい野望と冷酷な全能感がある。口元には皮肉気な微笑。

嫣然と——そして蠱惑に閉じられた唇。

失つて、失つて、失い続けて、それでもまだ諦めきれぬものがあるとするなら、それが乙女の意地だろう。捨てきれない想い、忘れざる記憶。彼女を突き動かす衝動にその名を呼ぶのなら、それは意地だ。あるいはもし、その呼び方が気に食わないと言うのならこう呼ぶとしよう。

それは——生き物の性サガなのだ。

もはや血を飲むことすらなく妖魔化を遂げたアセルス。ぼおん、と鳴り響く時計塔の鐘の音。百万年を生きる怪物の魂が遠く、幽かに、アセルスへと溶けていく。

荒野の風にそつと囁く。遍く夜を飲み干して悠久の吐息を伴い、淫蕩に濡れる舌を震わせて叫ぶ禁断の言葉。ああ、とくぐもつた喘ぎ声と共に粘つく唾液を滴らせて囁く蜜の言葉。愛の口説。

——お前を愛してやるよ、イルドウン……。

かつて水の従騎士ハウゲータは愛を幻想と呼んだ。愛情などというものは畢竟、男と女の間で交わされる物語に過ぎないのだと。

生きとし生ける誰もが自分という名の物語を生きる主人公であるのなら、その誰もがいつかは自らの物語を語りださねばならない。ならばこそ、アセルスはたった今、物語を語りだそうとしているのかもしれない。

さあ、物語の話をしよう。

物語を愛そう、幻想を紡ごう……。

幻想ファンタジーのその果てに、まだ見ぬ理想があるのなら。この世の果て、手つかずの開拓地フロンティアに誰も知らない神話サーガが眠っているのなら。

旅は終わった。辺境に辿りついた。後は語りだすだけだ。

アセルスの台詞に顔を歪めたイルドウンが地を蹴り風をきり怖ろしいほどの速度で剣を振るう。妖魔の並外れた臂力によつて振るわれる妖魔の剣。たった一撃で巨大な黒龍すら両断してのける奪命の剣閃。

受けた。

そう感じた瞬間、途方もない衝撃が全身を襲う。容易く跳ね飛ばされた鉄剣が視界の端で宙を舞った。同時に右足の膝が蹴り碎かれる。武器を奪われ、体制を崩したアセルスを更なる剣撃が狙う。迷いの無い横薙ぎ。左手首が切り落とされる。

「お前には教えた筈だぞ」イルドウンが冷たく告げた。「どんな時でもけして剣を手放すなと」

妖魔の剣が振り下ろされる。頭の前から爪先へと真つ二つに——アセルスを両断すべく容赦のない剣が落ちていく。妖魔が持つ傲慢さそのものを体現するかの如く、何らの躊躇いもなくただ一つの純然たる殺意によつてのみ振るわれる殺人剣。目を閉じれ

ばそこで全てが終わる。楽になれる。アセルスは避けなかった。だがそれは死ぬためではない。

左手首の断面へとそつと右手を伸ばし、そして掴んだ。

「——手放してなんかいないさ」

隠し剣。己の肉の中へと仕込んだもう一つの武器。ぎちりと肉を引き裂いて強引に剣を引き抜く。左腕という鞘から抜き放たれ、血飛沫と共に剣が晒された。白薔薇姫の剣——ウテナクロス 罌十字。かつて自らの腹を貫いたその剣を今度は左腕から取り出し、アセルスは最後の咆哮を上げる。

血に濡れた妖魔の小手が紅に輝いた。

風が吹く。荒野の果てから吹く風が音もなく地を走り、身に纏う喪服の裾を軽やかに払う。罌十字を握る右手が風に解け、無数の花弁となつて乙女を取り巻いた。穢れを知らない純白の薔薇。血潮よりもなお昏い緋色の薔薇。一つの花は儂く脆く、風に無残に散つていく。柔らかに一つ。緩やかに二つ。夜の風を無邪気に孕んで舞う薔薇がくるり、描いた螺旋で輪廻を象る。

アセルスの右腕が風に溶ける。剣を、罌十字をその風に乗せて——襲い来るイルドゥンめがけて解き放つ。

力任せにイルドゥンの首へと罌十字を突き刺した。首を落とせば動きは止まる。強

引に首を落とそうと剣を捻ったその時、不意に視界が閉ざされ、右目が熱くなった。右目が熱い。そして重い。

炎に顔を食まれるような灼熱感に一瞬意識が遠のき、気が付くとアセルスは倒れていた。イルドウンの剣によって貫かれ、右目ごと大地に縫い付けられたのだ。

「……………」これが現実だ。アセルス」

イルドウンはアセルスの柔らかな腹に足を載せ、そのまま踏み下ろした。骨と内臓とを強引に叩き割られ、玩具のように下半身が千切れる。口から夥しい血を吐きだし、ぎ、と昆虫じみた呻き声をあげた。

アセルスを見下ろしてイルドウンは言った。お前の負けだ。

血反吐をぶちまけながらしかしアセルスは思う。この男は勘違いをしている。なぜなら自分はまだ生きている。そこに勝ちも負けもありはしない。

「つ……………まらない、な……………イル……………ドウン……………。お前の言う、現実……………」

しわがれた声で呟く。ぎり、と歯を食いしばり、痙攣する右手を必死にイルドウンの剣へと伸ばした。触れた途端、途方もない激痛が脳を駆け巡る。構わず剣を握りしめた。肉が軋む。掌が脂でぬるりと滑る。右目が燃える。

ああ。

ああああああああ。

耳を塞ぎたくなるような苦悶の声をあげながら顔を前へと進める。力任せに握りしめ、眼孔に剣を滑らせていく。剣の刃にこそげ落とされた肉が屑となつて零れ落ちた。気の遠くなるほどの痛みに絶叫しながら、アセルスは顔を貫く剣に沿つて強引に上体を持ち上げ、震える手を伸ばしてイルドダウンの襟を掴んだ。

痛い。頭がおかしくなりそうだ。そう考えながら——しかしアセルスが自分がけしして狂わないことを知っていた。オルロワージュの力。再生を繰り返す不死の体。たとえどれだけの痛みを味わおうともいつか癒えて消えてしまう。時の流れの中では、どんな傷であつたとしても忘れてしまえる。そう。この世は『物語』だ。永遠を生きる怪物の世界は全てが物語と化してしまふ。現実感を伴わない痛み。喪失の嘆きすら忘却の彼方へと消えていく。アセルスにとつて、肉体の痛みは現実ではない。自らが死ぬことですらも怖ろしいとは思わない。アセルスにとつて本当に苦しいのは、悲しいのは——こんなものではない。

掴んだ胸倉を引き寄せ、そして口づける。

「これが私の現実だ……イルドダウン……」

血に塗れた唇を寄せ、許されぬ口づけを交わした。嘘の味しかしないキス。愛してる。口の中で呟いたその言葉が真つ赤な嘘だと知っていて、それでもアセルスは丁寧に唇を合わせ、イルドダウンの舌をそつと吸い上げる。あなたに愛をくれてやる。男の唇に

歯を立て、流れ出した鮮血に音を立てて舐め上げた。

「何を……している……？ お前は……？ 気でも狂ったか……？」

たじろぐイルドゥンを見るのはそれが初めてのことだった。少し可愛いかもしれない。そんなことを思つてくすりと微笑むと、イルドゥンは顔を歪めてアセルスを蹴倒した。右目に刺さった剣がぶちりと肉を引き千切り、右の頬が裂ける。

よろよると——人形のように頼りない仕草で立ち上がり、しかしアセルスは残った左目でしつかとイルドゥンを見つめた。

「なあ、イルドゥン……」掠れた声で「貴方は猿なのか？」

「何を言っているんだ、お前は……？」

「力を振るうのか、言葉を尽くすのか。……別に、どちらが正しいというわけでもない。

……でも、選ぶことはできるだろう。気に食わない奴を殴るだけなら猿でもできる。でも貴方は——獣じゃあない。その筈だ」

「……」

「上級妖魔。黒騎士イルドゥン。貴方が数多の乙女を魅了する吸血貴族の一員だというのなら、半妖の私ひとり魅了して見せてくれ。『愛している』とそう囁いてみせてよ

……」

「……」

「私には貴方が必要だ。イルドウン……この私に、力を貸せ……！」
「言いたいことはそれだけか」

返答は短かった。冷たく無慈悲な拒絶。道端の花を手折るような無造作でついと剣が振るわれ、アセルスの首がぼとりと地へ落ちる。

◇

下らない女だった。

黒騎士イルドウンはそう考える。首だけになったアセルスの髪を無遠慮に掴み上げ、しかめっ面のままじろじろと眺めまわす。

眺めて嘲笑うにはそれなりに面白い子猿かと思ったが所詮はこの程度か。

味わい慣れた失望と落胆にうんざりしながら過去を振り返る。初めてこの女と出会った時はそれなりに愉快だった。元人間にしては骨のある雌だと感心させたほどだ。何しろこのアセルスはこのイルドウンを殴りつけ、罵倒してのけたのだから。

覚えている。イルドウンは今もなお、彼女の言葉を覚えている。

“それだけのことをしてるってのがわからないから、あんたたちは妖魔なんだ！”
アセルスは言った。

“あなた、実は馬鹿なんでしょう？”

アセルスは言った。

“何が、妖魔だ。性別を持たない美しい種族だの、薔薇の守護者、無慈悲な王だの、さんざ勿体ぶったことを言っておいてさ。結局は殴り合いで勝ったやつが偉いっていう典型的な男社会なんじゃないか。笑わせるなよ”

アセルスは言った。

覚えている。針の城を抜け出す前、彼女はイルドウンの元へやってきてこう言った。針の城を出ていくことにする、と。訳が分からなかった。行きたいのなら行けばいい。何故そんなことをわざわざ自分に告げるのか——本当におかしな生き物だ。だから答えた。知るか。勝手にしろ。するとアセルスは不思議そうに目をぱちぱちさせ、それだけ？と首を傾げた。

何がだ。

……いや、てつきり、止められると思っていただけから。

止める理由が無いだろう。

そ……そうかな……？　だつてあなたはお目付け役みたいところがあるし……。

オルロワージュの言葉を忘れたのか？　奴は俺にお前を任せると言った。逃がすな

とは言っていない。

でも……私が逃げ出したら、あなたに迷惑がかかったりするんじゃない？

なぜだ？

いや……まあ、かからないならそれでいいけど。

解せんな。お前はいつたい何のためにここへ来た？ 今日 of 戦闘訓練はもう終わり

だと言ったろう。

だから、ここを出ていく挨拶でしょう。それから迷惑をかけてごめんって言うのと

……。

お前は俺に迷惑がかかると思い、謝罪に来た。なるほどな。……だが同時にお前は俺に止められると思っていたのだろう。ならばなぜここへ来た。

そりゃあ、まあ……。

何だ。

私は、あなたのことがかなり嫌いなんだけどさ。

……。

でも、いちおうあなたは私にいろいろなことを教えてくれた。妖魔社会のこと、戦うこと……。借りがあふし、お世話になった。だから、何も言わずに出ていくのはちよつと筋が通らない。そんな風に思っただけだよ。

逃げ出そうとするお前を俺が切り刻むとは思わなかったのか。

思ったよ。あなたはひどい奴だからね。でもその時はその時で逃げるしかないと思っただから。

……アセルス。

うん。

お前は、馬鹿だ。

うん……。

何度も言った筈だ。妖魔の再生能力を手に入れた所で、まともな戦闘能力を持たないお前を無力化する方法はいくらでもある。他者の善意を期待しては身がもたんと。

うん……。わかってるつもり。……別に、忘れてるわけじゃないよ。もつとちゃんとしなきゃいけないって、いつも思ってる。……でも、やっぱり、あなたとオルロワージュに黙って出ていくわけにはいかないよ。それだけはできない。

そうか。

うん。

では好きにしろ。

うん。そうする。……本当に、止めないの？　オルロワージュに怒られない？

どうでも良いことだ。そんなことは。……アセルス。俺は俺の生きたいように生き

る。お前もお前の生きたいように生きろ。何をしようとそれはお前の勝手だ。だから俺は止めん。どこへなりと行け。

……イルドウン。ありがとう。

覚えている。ありがとう、とアセルスは言い、そしてはにかみながら右手を差し出した。それは人間世界において握手と呼ばれている儀式らしかった。どうでもいいとは思ったが断わる理由は何も無い。イルドウンはアセルスと握手を交わし、別れの挨拶を済ませた。

どうでも良いことだ。心底からそう思った。イルドウンはシンプルを好む。春には春、夏には夏の風物を眺め、酒を飲み、静かな自然の移り変わりを眺めていればそれで世界は美しい。それ以外の全ては余計なことだ。この世はとかく邪魔者が多い。下らんなたわごとをさも大層なことにように声高に語り、イルドウンの視界を汚す。鬱陶しい奴らばかりだ。己は己一人で完結していればいい。秋には秋の、冬には冬の景色を瞳に写し、何の思惑もなく佇む世界を愛でていけばいいのだ。もし半妖アセルスが針の城を出ていくというのであれば、それは自分の関知する所ではない。この女が自ら旅立ちを望んでいるのであれば、他者のなすことに口を出すことはない。放っておけばいい。そう思った。そう思っていた、筈だった。ラストバンの頼みでアセルスを守るためセアト

の從騎士と戦った時もそれは変わらなかった。アセルス自身がセアトに勝てないのなら、旅をする資格などはないのだ。その時は潔く滅びを受け入れるべきだろう。加勢はしなかった。そして実際、その必要もなくアセルスは勝利した。……そう、正義だ道理だと口喧しくお題目を口にする割に、アセルスはどこまでも我を通す傲慢な女なのだ。結局は自分のやりたいことをやる女。イルドウンに何を言われようとも、最後には自分のやり方を貫く女。だがそれでいいのだ。生物はみなそのようにしてあるべきなのだから。だが――。

……アセルスが膝を折り泣き叫んでいる。もういやだ。そんな泣き言を口走り、呆然と瞳を震わせている。闇の迷宮で白薔薇姫を失ったアセルスはいかに歩くのを止めた。まるで理解できなかった。お前はアセルスだったはずだ。奪われたというのなら、もう一度奪い返せばいい。それだけのことだ。なのになぜ――。腹が立った。失望した。頭蓋骨の一つでも砕いてやればまたいつものように刺々しい口調でこちらを罵倒してくるだろうか、と試しにそうしてみたがしかしアセルスは力なく笑って動かない。立ち上がらない。

人間は好かん、とイルドウンは思う……。何せ奴らは時の流れの中であまりにも脆弱に過ぎる。このアセルスにしてもそうだ。針の城を出た時はあれ程までに澆刺としていた女が、たかだか五年かそこら経った程度でこうして道端の蛆虫以下の層に成り下が

る。

下らない。何もかもが……。

寂しい激情を身の裡に孕んでイルドウンはどうとう剣を振り下ろす。自らが自らであらうとしない者には生きていく価値が無い。こんな女、死ぬべきだ。同情はなかった。容赦する気さえなかつた。よろよろとアセルスが掲げた妖魔の剣を砕き、息の根を止めるべく首を撥ねようとして——あと一歩という所でゾズマの横槍が入り取り逃してしまった。おかげでこうしてアセルスの首を手にするまであちこちの星を旅する羽目になってしまったが、百年はかからなかつたのだから大した時間でもない。

まじまじと手に提げた生首を見つめる。思えばこうしてゆつくりと観察するのは初めての間験かもしれない。半妖、アセルス。今は妖魔化しているため髪は蒼い。その瞳も——今は左目だけになっているが——ほんのりと蒼い光を放っている。頬は無残に千切れ、あちこちが血で汚れているものはいるもの、こうして間近で眺めてみると案外に——。

「アセルス……」

誰に言うでもなく、名を呼んだ。嘆息交じりの独り言。

戦いが終わり、激昂は去った。本当に馬鹿な女だ、と思う。魅了しようと思んでいるのならばどうして単細胞だ猿だと盛んにこちらを挑発するような真似ばかりするのか。

自分を味方につけたいのなら話は簡単だ。圧倒的な力で捻じ伏せ、君臨すればいい。アセルスがそうするのであれば自分は迷うことなくこの女の側についてやったというのに。この女のいう事は面白いが、そのいちいちが気に食わない。相対している間も苛立って仕方がなかった。『宵闇の覇者』と呼ばれる黒騎士イルドウンが声を荒げるなど、あの零姫と相対した時以来だというのに。

「アセルス」

もう一度名を呼んだ。呟くたびに心の平穏が戻っていくのが分かる。自分は冷静だ。本来の自分はこうあるべきなのだ。感情的になるなど、上級妖魔のすることではない。

そうして、完全に落ち着きを取り戻したその『本来の自分』を通して——イルドウンは改めてアセルスの言葉を考えた。

アセルスは言った。

『殴り合いで勝ったやつが偉いなんていう理屈はな、男の単細胞が言わせる台詞なんだよ』

アセルスは言った。

『気に食わない奴を殴るだけなら猿でもできる』

それは、つまり——。

「そうか……」

顔を歪めてイルドゥンは呻いた。何と忌々しいことだ。この女。首だけになってまで面倒ばかりを残していく。

妖魔としての格は明らかにイルドゥンが上。よって、格上の妖魔によって受けた傷はそう簡単には回復しない。そう、オルロワージュの血を享けたとはいえ万能ではないのだ。たったいまアセルスを完全に滅ぼそうとすれば容易くそれができる。アセルスを殺せる。だがそうした瞬間、アセルスの弁によればまるで自分は暴力しか能のない猿であると認めるようではないか。何という屈辱だ。この俺が猿だと？ ふざけるな。……だが、待てよ。仮にアセルスを殺さないのだとしたら、それは結局の所こいつの思惑通りなのではないか。どちらにしる何らかの形で俺は負ける。雁字搦めのこの状況。何という事だ。これまで、途方もなく長い生の中で迷うことなどは一度もなかった。自分はこのやりたいことをやるだけ。それが妖魔の生き方というものだからだ。ラストバンと知り合った時もそうだった。奴はこの俺を利用すると言ったが、俺には関係のないことだ。たとえ奴がどんな企みを抱こうと、俺の行動の全ては俺が決めること。奴が俺を利用しようがしまいが知ったことではない。そういうと、それからラストバンはやけに馴れ馴れしくなりたびたび酒を持ってきた。俺を友だと言った。どうでも良い。肯定にも否定にも興味はなく、好きにさせている内にいつのまにか友という言葉は親友へと変わり、いつしか自分もまたラストバンが友であるということに慣れた。酒は旨

かった。

あの時も自分は迷わなかった。自分の行動に疑問を抱く必要など存在しないからだ。だというのに、いま自分は引くことも押すこともできない状況にいる。

アセルスを殺せば自分が獣であることを認めることになり、かといってアセルスを救えば彼女の言葉に負けることになる。

どうする……。

思考の袋小路に迷い込んだその時——、現れたのは黒騎士セアトだった。いつもはきれいに整髪された巻き毛を乱し、血走った眼でこちらを睨みつける。

「ようやく見つけたぞ、イルドウン……!」

憎しみに満ちた眼。

「久しいなセアト」

「黙れ! 貴様とそのような挨拶を交わすために俺はこんな星へ来たのではない……!」

「さっさとアセルスを渡せ!」

「何だ? お前はまだアセルスを追っていたのか?」

「オルロワージュ様の命は絶対だ……。どんな手を使つても俺はその女を針の城へ連れ戻す。……いいか、イルドウン……! なぜ、お前がアセルスを殺そうとしているの

かは問わん。お前が我々に剣を向け針の城を裏切ったことも、今ならば不問に処してや

ろう。だから、その女の首を俺に寄越せ……！」

「愚かだなセアト」イルドゥンは馬鹿馬鹿しそうに言う。「この首が欲しいのなら奪えばいいだろう。それ以外に何がある」

「愚かなのはお前だ、イルドゥン。針の城の秩序は揺らぎ始めているのだ。次々に黒騎士が反意を抱けばそうもなろう。黒騎士同士が争えばファシナトゥールの勢力は弱まる。お前がアセルスに味方するというのなら滅ぼすしかないが、そうでないのなら話は別だ。理由はわからないが、現在お前はアセルスに敵対しているのだろう。ならばアセルスを渡せ」

「そうだな……確かにこの首はいらんが」

この女も大概に運がない、とイルドゥンは思った。殺すのか、生かすのか。確かに迷ってはいた。だがこうしてセアトがやって来たということはおそらくアセルスはここで死ぬ運命なのだろう。もちろんセアトが大人しく針の城へと連れて帰る可能性もなくはないが、一度は自分を打ち倒したアセルスをセアトが放置するとは考えにくい。オルロワージュに気づかれぬように処分し、その血を奪うのがお定まりの手段だろう。所詮はそれがこの女の運命だったのだ。どの道、自分がこれ以上執着するのもそれはそれで気に食わないと感じていた所だ。

……そう。下らない女だ。自分はこの女に固執などしていない。殺すか、生かすか。

そんなことはどちらでも良いことなのだ。後はセアトにでも押し付ければそれで万事解決というものだろう。

「で、ではイルドウン……」

「ああ」

頷いて、最後にアセルスの顔を眺めた。血まみれのひどい顔だった。薄汚れた頬に潰れた瞳。なんと醜い小娘だろう……。イルドウンは僅かに笑う。見れば見るほど汚らしい。

蒼い瞳、蒼い髪。それは妖魔の血。だがその色とは裏腹にアセルスの面相は妖魔のものとはまるで違う。ころころと変わる表情。真摯な光を灯した瞳。控えめな唇から零れ落ちる言葉は何度となくこちらの感情を逆撫でにする。

バーゲストに内臓を啜られ、厳しい戦闘訓練に打ちのめされながら、それでも気丈に刃向かってくるアセルス。旅の途中、こちらの知らない人間社会の知識を得意げに披露するアセルス。オルロワージュの血に吞まれ、絶対者としての酷薄な表情を浮かべるアセルス。

これでこの小娘と関わるのも最期か……。そう思うと感慨深く、イルドウンは深く呻く。

雨の日の午後空を見上げていた。窓へと寂しそうに頬を寄せるアセルスの頼りな

い横顔。伏し目がちの瞳。

かしましい声を上げ、白薔薇姫と花壇をいじっていた。熱々のどんぶりを押し付け、人間の料理を無理やり食べさせようとしてきた。剣の稽古では嫌そうにしながらもどこか楽しそうな目をしていた。動きの悪さを指摘すると途端に膨れた顔をする。

アセルスは逃げない女だった。針の城を抜け出しはしたが、しかし自分の意思を誤魔化すことはなかったはずだ。内心を押し隠しておもねることも、愛想笑いを浮かべて強者に取り入るような真似もけして行わなかった。気に食わないと思つた時は、どんな時であれ真つ向から逆らつてきた。殴りつけても、モンスターをけしかけても、アセルスは自らの言うべきことを真つすぐに口にする。停滞した妖魔社会に生きるイルドゥンにとつてその多くは新鮮で、それだけに腹立たしく思うこともまた多かつた。アセルスは平然と妖魔の習性を否定する。それはただこの女が世間知らずで人間界の詰まらない観念に囚われているからだと最初は思つていたが、そうではなかつた。アセルスにはアセルスなりの考えがあり、この女は自らが決めた一種の論理に従つて生きている。言葉の一つ一つに腹を立てることはあれども、彼女の放つ言動の裏に覗き見えるその論理、ルール——彼女なりの信念自体は必ずしも不快ではなかつた。

蒼い瞳、蒼い髪。それは妖魔の血。だがアセルスは妖魔ではない。半妖である彼女の髪はイルドゥンと同じ緑色。アセルスの顔をぼんやりと見つめる。彼女の言葉一つ一

つを何気なく思い出す。

ある時イルドゥンは月を見ていた。何の変哲もない月だった。夜空に皓皓と佇む三日月。朧な雲を引き連れて柔らかに街を照らす。そのときは明日の星にいた。民家の屋根に腰を掛け、珍しい酒を堪能しながら、飽きることなく月を眺めた。何の変哲もない月だった。何の変哲もないその月を、しかしイルドゥンは唯一無二のものとして己の心の中へと捉えたのだった。この月を美しいと感じる生物が自分以外にどれだけののだろうか。考え、結論が出るはずもないことに気が付いてため息をつく。冷たく清浄な空気が肺を泳いだ。静寂を湛えた夜の気配。湿潤な風に取り巻かれ、柔らかに靡く羊歯の群れ。理屈ではなかった。ただ、そんな景色を美しいと思った。心が音もなく満たされた。

だからアセルスが隣に腰を下ろした時は鬱陶しいと思った。またやかましく騒ぎ立てるつもりだろうかと思うとうんざりさえした。だがそれは間違いだった。アセルスは何も言わず、ただ黙ってイルドゥンを見ていた。何をしているの、と彼女は言った。月を見ていると彼は答え、そうして少し考えた。この女に月の美しさがわかるだろうか。イルドゥンを暴力的だと何かにつけて非難するこの女のことだ、自然を愛でているのだと言うイルドゥンに似合わない例の皮肉気な笑みを浮かべるのだろうか。それともイルドゥンに平伏す有象無象の乙女のように盛んに月を褒め称えて追従するのだ

ろうか。

月を見ている。そういうと、アセルスはふうん、と呟いてイルドウンと同じ方向へと顔を向けた。それからやはり意外そうにまじまじとイルドウンの顔を見つめて、しかし何も言わなかった。アセルスはそれから黙って月を見始めた。イルドウンの隣で、何も言わずに月を見つめた。夜が淡々と更けていった。もうアセルスを邪魔だとは思わなかった。イルドウンは彼女と共に、夜空に浮かぶ月を視た。

何かを美しいと思った。月そのものではない。月と、夜と、そして風。己を取り巻く状況がかつてどこかで味わったものと似ているような懐かしい既視感。こんなことが前にもあった、という不思議な安堵。そして——懐旧と、郷愁と、帰るところを持たない筈の自分が抱えた得体のしれないノスタルジア。こんなことが、前にもあった。しみじみとそう思い、そう思いながら——それでもイルドウンは同時にこうも思うのだ。この夜はたった一度。二度と還り来たることはない。

月は蒼い。全ての熱を奪いゆく蒼。影という影を大地に縫いとめ、色を、質量を、根こそぎ掠めとる。月の蒼。蒼の月光。月の蒼は唯である。妖魔の血とは違う。空の蒼とも海の蒼とも違う。ただ蒼と言って、その月の色を蒼という言葉でくるんで、言葉の上ではただ一つに過ぎない筈のその属性はしかし唯である。空とも海とも。降りしきる雨の色とも違う。月下に濡れる露草とも夜空の果ての犬星とも違う。

月がある。たった一瞬の月である。一秒前の月は今この時の月とは違う。今この場所から一步でも離れたならそれは違う月だ。かつて誰かが月を視たかもしれない。けれどもそれはきつと違う場所の月だったに違いないし、違う時間の月だったのだ。

時が、流れて。いま、この瞬間の月を、自分が眺めるこの月を覚えているものがどれだけいるだろう。この月はけして取り戻すことのできない月だ。目の前にありながら、決して手の届かぬ月なのだ。いつかは失われてしまう月。美しいと思うこの想いでさえ、時の流れの中では忘れ去られてしまう。だからイルドゥンは思う。いま、この瞬間の月を愛す。この月を。この夜を。

満たされた心のままに瞳を閉じ、取り巻く夜気に身を任せた。心地よかった。ちらと目を開き隣を見やると、アセルスはなおもぼんやりと月を眺めていた。風に吹かれた髪が耳からはらりと零れ落ちる。月光に白々と照らし出された横顔がやけに青白く見える。

私にはよくわからないとアセルスは言った。月の美しさを理解できるとは言わない、と。そうして月に瞳を奪われるようにしてそつと囁く。

でも、こうして月を視たことは、きつと後悔しない。

……

……

掌に感じるアセルスの首の重み。

もう一度アセルスの顔を見た。そしてわかった。

そうだ。

アセルスは言った。

あなたが必要だ。この私に力を貸せ、イルドウン。

「……………」

「どうした、イルドウン!? さっさとアセルスを渡せ!」

焦ったようにセアトが叫ぶ。その姿を見てみると途端に気分が白けていく。何をこいつはそんなに必死になっているのだろう……。

「馬鹿馬鹿しいな、まったく……」

ぼそりと呟く。アセルスの顔を見る。アセルスの眼を、その奥を覗き込む。

そしてイルドウンは言った。

「——気が変わった。俺は、こいつの側につくことにする」

幕間 光刃皇帝アルカイザー第五十四話 『決断！ その名、小此木烈人!!』

■前回までのあらすじ

とうとう宿敵シユウザーの元へと辿りついたアルカイザー。だが卑怯にもシユウザーは自らの体に小此木博士の脳を埋め込んでいた。攻撃を躊躇うアルカイザーに容赦のない遠隔ビツト攻撃を叩き込み、シユウザーは高らかに笑う。それが貴様の弱点だアルカイザー。貴様には正義が無い。本心から正義を望んでいるのであれば世界の平和を守るため己の肉親ですら犠牲にできるはず。だが貴様にはできない。何故だがわかるかアルカイザー。貴様が所詮は復讐者だからだ。復讐者には貫くべき信念がない。道理がない。正義がない。だから貴様は敗れる。だから貴様はこの俺に勝てんのだ！

ヒーロー、完全敗北。その身を賭したB J & Kの自爆によって命からがらその場を脱したアルカイザーことレッドだったが、その足取りは重く、光り輝いていた瞳も今は虚ろにくすむばかり。そんなとき、もがき苦しむレッドの前にある妖魔が現れる。

立て、レッド。闘え、アルカイザー。星々の平和は君の手にかかっている！

(回想)

鋭利なシザービットによって全身を切り刻まれるアルカイザー。夥しい血を吐き出しながら倒れこむ。

アルカイザー「ぐっ……」

シュウザー「どうした、アルカイザー。もうおしまいか?」

小此木博士「烈人! 私のことは構わない! シュウザーを……シュウザーを倒すのだ!」

アルカイザー「できない……できないよ……父さん!」

小此木博士「馬鹿を言うな! どのみち私はもう助からん。ヒーローとして……い

や、私の息子として、正義を!」

アルカイザー「嫌だ……。俺はあんたの息子なんだ……。あんたを殺すためにヒーローになったんじゃない! 助ける方法があるはずだろ! なんとかできるはずだろ! ヒーローがいるんだ、この世には! そうでなけりゃ……そうでなけりゃあ……!」

シュウザー「馬鹿め、貴様はもはやヒーローですらない! 脳だけになった父を守るために貴様は何百万という市民の命を失うことになるのさ。それが貴様の弱点だアルカイザー。貴様には正義が無い。本心から正義を望んでいるのであれば世界の平和を守るため己の肉親ですら犠牲にできるはず。だが貴様にはできない。何故だがわかる

かアルカイザー。貴様が所詮は復讐者だからだ。復讐者には貫くべき信念がない。道理がない。正義がない。だから貴様は敗れる。だから貴様はこの俺に勝てんのだ！」

アルカイザー「違う。俺は……！」

小此木博士「烈人！ 私に構うな！ シュウザーを倒すのだ！」

アルカイザー「父さん！」

シュウザー「アルカイザー。この俺の刃によつてさんざん戮られ、満足に抵抗もできない！ いくら理想を叫ぼうと、言葉だけではなあ！ 薄っぺらい貴様に残酷な現実を見せてやろう！」

自らの体の中からびくりびくりと蠢く脳味噌を取り出したシュウザーは、そのまま小此木博士の脳を握りつぶす。

小此木博士「れ……と……」

アルカイザー「と……父さああああああああん！」

シュウザー「クツクツク。実に良い気分だ。貴様のその絶望に満ちた顔！ ああ俺は生きている！ 君臨し、他者を蹴落とし、生きて息をしているのだ！」

アルカイザー「貴様……貴様……貴様あああああ！」

シュウザー「何が、正義だ。その安っぽい正義とやらのせいで、貴様は再び父を失つたぞ。貴様はヒーローの器などではない。ただの惨めな復讐者にすぎないのだ……！」

(回想終了)

レッド「ちく、しょう……!」

クローンの薄暗い地下水道をよろよろと歩くレッド。絶望、そして無力感に苛まれたレッドは無意識に右手を壁に叩き付けるが、血まみれになった手のひらからはなおも流血が続く。

レッド「俺は、死ぬのか……。こんな所で……。父さんの敵も取れずに……。い、や、だ……」

朦朧と霞む視界。次第に蒼褪めていく顔。

レッド「正義が……。俺に正義があれば……」

倒れこむレッド。薄れていく意識の中、レッドの耳に聞き覚えのある声が届く――。

「……あれえ、レッド?」

「誰だ、そいつは?」

「このまえ言ったでしょ。あのね……」

レッド「俺は……俺が……」

呟きながら昏倒するレッドを心配そうにのぞき込むウロネブリ。気絶するレッドの脳裏には走馬燈のように懐かしい声がよぎる……。

◇????????????

「俺にできるのは今この時の俺に思いつくことだけだ。それが俺の正義なのさ」

「でも私はこう思う。正義の役目は、全ての悪を魅了することだと」

「ヒーローの力は正義のために使わねばならん」

「正義の味方というのは、きっと君のような人間のことを言うのだろう」

一方、そのころ。

黒騎士セアトと従騎士たちはクーロンの地下水道を探索していた。情報によれば、標的のアセルスは京で金獅子姫との交戦を経て他の星へと逃亡したはずだった。しかしその後の行方はようとして知れず、ほかに手掛かりのないセアト達はこれまでアセルスが潜伏していた場所をしらみつぶしに探し回る羽目になっていた。

セアト「白薔薇姫の持ち出した金品もすでに底をついているだろうに……。援助を求めて知り合いを訪ねるかと思っただがその気配もない……。どうということだ……。？ オルロワージュ様の血を持つものなら、その匂いだけで下級妖魔たちが騒ぎ出すはずだ……。情報が何も出ないというのはさすがにおかしい……」

ハウゲータ「確かにそうだな。オウミ、シユライク、クーロン……。アセルスたちの足取りを掴むのは実に簡単だった。ところが以後の行動はまるで読めない。これはア

セルス達ではなく、第三者の手が加わっているとみるべきなのかもしれない」

アルキオネ「第三者?」

ハウゲータ「リージョン間を超えて情報統制を敷くだけの力を持った妖魔。あるいは、オルロワージュ様の血の匂いを隠蔽するだけの結界を張ることのできる妖魔、といったところか。……まあ、あくまでも想像だが」

セアト「それだけの実力者がアセルスに手を貸したと?」

ハウゲータ「可能性はあるだろうな。何しろ半妖だ。針の城では黒騎士ラスタバンやゾズマ様も彼女には好意的だったと聞く」

セアト「ゾズマか……。あいつは厄介だ」

ハウゲータ「不安か? ゾズマ様の力はオルロワージュ様も認めるところだからな。——だが、気にすることはあるまい。何しろお前にはその血液があるのだからな」

セアト「ああ……」

複雑な顔でセアトは腰に下げた小瓶をそつと撫でる。小瓶の中にはアセルスの血が収められている。

ハウゲータ「何故、飲まない。オルロワージュ様の力を取り込むチャンスだぞ。せつかく私がアセルスから奪ってきたのだ。早く飲め。そして私に感謝するがいい」

セアト「無論、感謝はしている。しているが……」

歯切れの悪いセアトを見かねたアルキオネは口をとがらせてハウゲータにくつてかかる。

アルキオネ「そんなのはセアトの自由でしょ。セアトはね、誰かがヨソから持つてきたものをほんと受け取ってはい強くありません。そんなのは妖魔としての誇りが許さないのよ。それがわかんないの？」

ハウゲータ「……そうなのか、セアト？」

セアト「ああ……まあ、そうなるな。すまない」

ハウゲータ「いや……いいさ。お前がそうしたいのなら私はとやかく言うまい」

セアト「ああ……」

言葉尻を濁すセアト。

セアト（俺は、アセルスの血を奪うと言ったハウゲータを止めはしなかった。それも構わぬ、と確かにその時はそう思ったのだ。失敗すると思ったからでもない。アセルスの——オルロワージュ様の力を取り込めば俺にもあるいは。そんな考えが俺の脳裏を横切った。だが実際にこうしてアセルスの血を手中に収め——しかし俺はこの血を飲み干すことができないでいる。アルキオネの言うように『こんな方法で強くなっても』と、確かにそう考えたのは嘘ではない。だが俺は——俺は、心の底では……）

暗い顔をして考え込むセアトは苦々しい思いに唇を噛みしめる——すると、そんな彼

とは対照的にウロネブリの能天気な声があがる。

ウロネブリ「あれえ……レッド?」

ウロネブリの視線の先には血まみれで横たわる男の姿。ウロネブリはきよろきよろとあたりを見回すと落ちていた木の棒を拾い上げ男の脇腹をつつき始める。

ウロネブリ「どうしたの? こんなところで? だいじょーぶ?」

セアト「誰だ、そいつは?」

ウロネブリ「このまえ言ったでしょ。あのね……」

レッド「う……。と、とうさん……。かあさん……。おれは……。お、おれは……。ヒーロ……の……。う……。あせるす、ねえ……。ちゃん……」

セアト「……今、何と言った?」

レッド「う、うう……」

セアト「確かに言ったな。アセルス、と。この男……。レッド、だと……。? マンハツタンでキャンベルを襲った人間、ウロネブリの話ではそんなところだったか。いや……。ウロネブリの話によれば『アルカイザー』がアセルスを庇ったのだったか。どういうことだ……。? この男も知り合いだったのか……。? いや……。まさか……」

訝し気にレッドを見つめるセアト。



レッドが目を覚ますと、そこは見覚えのある宿の一室だった。クーロンでも最低ランクに位置するぼろ小屋同然の安宿。起き上がるだけで全身に激痛がはしるが、どうやら治療はされたらしい。体のあちこちを包帯で保護されている。

レッド「ここは……？」

ウロネブリ「あ、おきた」

レッドの足元でいきたなくよだれを垂らして居眠りしていたウロネブリは、レッドの目覚めに気づくとぼつとうれしそうな顔をして飛び起きる。

レッド「お前……ウロネブリ、か……？ どうして……」

ウロネブリ「セアトくん！ おきたよー！」

大声で扉の向こうに呼びかける。と、重苦しい音を立てて扉が開けられ、現れたセアトは冷たい瞳でレッドを睨みつける。

セアト「ようやく目覚めたか、人間」

レッド「あんたが『セアトくん』か？」

セアト「黙れ、人間。劣等種ごときに気安く呼ばれる筋合いはない」

レッド「……そうかい。そいつは悪かったな。あんた達が俺を助けてくれたんだろう

? ありがとう。恩に着るよ」

セアト「助けただど? 勘違いも甚だしいぞ、人間。なぜ誇り高き妖魔であるこの俺が人間を救わねばならん。貴様を生かしておいてやったのは——貴様を『尋問』するためだ。それ以上でも以下でもない」

レッド「なん……だと……」

セアト「アセルスについて知っていることを洗いざらい話せ」

レッド「な……何のことだ……?」

とぼけながらも激しい動揺を隠せないレッド。

レッド(そうだ……こいつは……ウロネブリ達は……)

セアト「隠しても無駄だ。うわ言で何度もあの女の名を呟いていたぞ。……瀕死の状態で女の名を口にするとは、軟弱なことだな」

嘲弄を顔に浮かべるセアト。

セアト「さあ、話せ。アセルスはいま、どこにいる?」

レッド「……知らねーな。知ってたとしても、悪いがあんたには話せなツ……!」

首を振るレッドはセアトが無造作に突き出した剣によって傷口を抉られ悶絶する。

セアト「お前はさつきから何か勘違いをしているのではないか? 俺はウロネブリとは違う。劣等種にかける慈悲などは無い。知っていることを洗いざらい話せ。さもな

ければ殺す」

レッド「へっ……。嫌だ、ね……。！」

腹部から流れ出す血。青ざめた顔でレッドはしかしふてぶてしく笑う。その眼に秘めた強い光を目にして——セアトは顔を歪める。

セアト「貴様の、その眼——実に不愉快な眼だ。自己陶醉に染まった人間特有の薄汚い目つき——自らが正義なのだとも言いたげな目だ……。！　笑わせるな！　今の貴様に何ができる！　さっさとアセルスの居場所を吐け！」

レッド「そう言われてはいそうですかと口にする奴が、いるかよ……。本当に知らないんだ。俺はもう……。アセルス姉ちゃんと同じ道を進むことはできない。あの人とは……。マンハッタンで別れたつきりだ。そのあとのことは知らない。悪いな……。！」

セアト「嘘をつくな！　さっさと吐け！」

口を嚙んだレッドに暴行を加えるセアト。瀕死の体を血まみれにしながら、それでもレッドは頑なに口を閉ざし続ける……。

セアト「なぜだ……。なぜ、お前はそれほどまでにあの女の肩を持つ？　お前は……。！」

苛立つセアトは必要以上にレッドを颯る。その様子を見かねたのか、奥から様子を伺っていたハウゲータとアルキオネが現れる。

ハウゲータ「そのへんにしておけ、セアト。殺しては元も子もないだろう」

セアト「構わん。どうせ喋らないのならこのまま殺してくれる」

ハウゲータ「フーム……。いや、殺すなら殺すで結構だが、この手の男は拷問するよりも魅了した方が早いだろう? ここは私に任せてほしい」

セアト「……いいだろう」

ハウゲータ「すまん。では……」

朦朧としたレッドの側に近寄り、ハウゲータはそつと耳元に唇を寄せる。

ハウゲータ「坊や、私のあるじが随分とひどいことをしてしまったね? 許してくれ

たまえ……」

レッド「う、うう……」

ハウゲータ「さて……君にはいくつか聞きたいことがある。我々はいまとても困っているところなのだ。協力してくれると助かるのだが……」

レッド「おれは……何も、しらない……」

ハウゲータ「ああ、そうだろうとも。だが私が君に頼みたいのはもつと別のことだよ」

レッド「べ、べつのことだと……?」

ハウゲータ「そうさ」

レッドの耳元で熱く囁くハウゲータ。

ハウゲータ「ほうら、落ち着いて、息をして……私の眼を、見てごらん……?」
レッド「う、うう……」

ハウゲータ「瞳の中には何がある? 別世界だよ。網膜に映るのは君の姿。けれどもそれは、君であつて君でない。眼球という洞穴を抜けてするりと、抜け出たその先には何がある? 自我の膜を破り、目まぐるしい産道を超えて……、ほら、何が見える? 覗いてごらん、坊や……」

レッド「ぐ……」

ハウゲータ「君は私の中に君を見る。君自身の姿、君自身の思いを。さあ、目を閉じて、そしてもう一度目を開く……。さあ、いつかの君は、どこにいる? かつての君は、誰のもの……?」

レッド「お、れ、は……」

戸惑うように焦点を揺らし、しかしレッドはゆつくりと目を閉じていく。次第に落ちてきを取り戻しながら。

レッド「おれは……ここにいる。おれは、誰のものでもない。おれの、ものだ……」

ハウゲータ「そう、君は私の瞳の中にいる。君は君のものだ」

レッドはゆつくりと目を開き、ハウゲータの目に映った自らの姿を見つめて陶然と眩く。

レッド「俺は……俺のもの……」

ハウゲータ「君は君自身を手に入れる。君自身を支配する……。さあ……坊や。起き上がり、私のお願いを聞いておくれ。君である私の質問を」

どこか霞がかかったようにぼんやりとしていたレッドはやがて身を起こし、しっかりとして口調で答える。

レッド「一体、あんたは何が聞きたいんだ？」

ハウゲータ「アセルスの行方は本当に知らないのかね？」

レッド「知らないな」

ハウゲータ「君とアセルスの関係は？」

レッド「幼馴染だ。シユライクで……小さいころ、一緒に遊んでもらった」

ハウゲータ「君はキャンベルとの一件でビルにいたはずだ。ウロネブリの話では途中からいなくなってそれきりだったが……あの後、君はどうしていたのかな？」

レッド「あの後？」

ハウゲータ「君はウロネブリをかばって階段を落ちていった。その後のことさ。ずっと気絶していた？ 君はあの場所にアセルスが現れたこともしらないのかな？」

レッド「いいや……。ウロネブリを助けた後、俺はアルカイザーに変身してあの場所に戻った。アセルス姉ちゃん……。アセルスがいたことももちろん知っている」

ではないか? 問題はアセルスの情報を持っているかどうかだろう」

アルキオネ「はいはい、すいませんでした」

ハウゲータ「魅了された以上、嘘をついてはいない。……とすると、もしもアルカイザーであるのなら、キャンベルを倒したのは君なのだ。そして同行していたヒューズという捜査官がアセルスを撃ち、君は倒れたアセルスを庇った……そんな話だっただろうか。ウロネブリは君のサインをもらおうと満面の笑みを浮かべて我々のもとに戻ってきたわけだが……それから先は何があったのだ? 君はアセルスの知り合いだったのだろうか? 会話の一つも交わさなかったのか?」

レッド「アセルスは……あの人は、ブラッククロスであるキャンベルを殺すなど言っただ。話せば分かり合える、理解することができると」

ハウゲータ「彼女らしいな」

セアト「……小娘の言いそうならんセリフだ」

レッド「だが俺にとつてブラッククロスは倒すべき悪だ。頷くことはできない。俺は……奴らをぶっ潰す。それがたとえ……アセルスが望む世界とは別のものだったとしてもだ。彼女は俺を助けてくれた。あの人は俺のヒーローだった。この世にはヒーローがいると、そう信じていたからこそ俺は、自分自身もまたヒーローになれると思つて闘つてきた。……だが、もう俺は、あの人と同じ道に行くことはできない。彼女の身

を守るためにIRPOとは取引をした。でもアセルスとはそれ以上、何も話してはいない。白薔薇とかいう人が来て、気絶した彼女を連れて行ったよ……俺はただ、見ていただけだった」

ハウゲータ「白薔薇姫、か。俄かに真実味を帯びてきたな。それなりに筋も通っている。残念だが彼からこれ以上得るものはないようだ。どうするセアト。殺すか？」

セアト「……」

アルキオネ「セアト？」

セアト「いや……。まだその小僧には聞きたいことがある」

どこか躊躇うように視線を反らし——それからセアトは苛立ったようにレッドを睨みつける。

セアト「答えろ、人間。貴様は本当にアルカイザーなのか？」

レッド「ああ」

セアト「なぜ……なぜ貴様はアルカイザーになった？」

レッド「俺は家族をシウウザーに殺され、俺自身も殺されかけた——」

その言葉を聞くとセアトは苦々しげに口を歪め、口の中で小さくつぶやいた。

セアト「シウウザー、だと？ まだ存在していたのか……？」

レッド「——だがその時、アルカールが現れて俺にヒーローの力を与えてくれたんだ」

セアト「……それだけか。たったそれだけなのか? 何か理由があるのではないのか? なぜ貴様はアルカールに選ばれた? 貴様には何かがある? 戦闘能力か? 類まれな正義の心でも持っているのか? こんな……容易く魅了されてしまう程度の精神力で……?」

アルキオネ「セアト……」

レツド「俺が、なんでヒーローに選ばれたのかって……? いや……それは、わからない……俺自身にも……」

セアト「なぜ、わからない? 貴様はアルカイザーなのだろう? 選ばれた存在の筈だろう」

レツド「俺は……」

セアト「何と下らない男なのだ……こんな男のために……!」

憎々しげにレツドを睨みつけるセアト。だが心配そうに自らを見つめるアルキオネに気づき、はつとする。

セアト「いや……俺は大丈夫だ」

アルキオネ「うん……」

セアト「もう、いい……どこへなりと行け……」

ハウゲータ「殺さないのか?」

セアト「つまらん男だ。殺す価値もない」

どこか疲れたように答えるセアト。

セアト「貴様は用無しだ。さっさと失せろ」

レッド「わかったよ……」

傷だらけの体でよろよろと出ていくレッドに、セアトはふと問いかける。

セアト「これから……貴様はどこへ行く？」

レッド「シユウザーと戦うさ。勝てるかどうかはわからないが……」

弱気に答えたレッドに舌打ちするセアト。

◇

レッドが去った後、セアトは不快感をあらわにして呟く。

セアト「何が、ヒーローだ……。そんなものはどこにもいない」

その言葉を聞いたウロネブリは困ったように目を伏せる。

セアト「……なんだ、ウロネブリ？ ……そうか、お前はヒーローを信じているんだっ

たな……。……俺の言ったことは、あまり気にするな」

ウロネブリ「うん……」

元気なく下を向いたウロネブリは、やがておずおずと口を開く。

ウロネブリ「あのね、ボクはセアトくんがいなくていいというなら、それでいいと思うの。

セアトくんがいうならレッドだって今から殺してくるし、これからはヒーローはいないってことにする。……でもね、ボクは、やっぱり、ヒーローはいると思うなあ」

セアト「なぜだ？」

もじもじと両手を動かすウロネブリ。

ウロネブリ「だって、セアトくんはボクを助けてくれたでしょお。セアトくんはボク……ヒーローだもん！」

言い終わるや否やウロネブリは顔を真っ赤にして逃げていく。残されたセアトは暗い顔のまま、寂しそうに囁いた。

セアト「違う……俺はあの時、お前を助けたんじゃない。あの時、俺が助けたかったのは……」

◇

レッドはクーロンを彷徨い、なんとか闇医者又サカーンを見つけ出していた。治療を受けたレッドは又サカーンへ礼を言い、よろよると立ち上がる。

レッド「助かったよ、ドクター。治してもらって悪いんだがあいにくと今は手持ちがないんだ。治療費はIRPOのロスター捜査官に請求してくれ」

又サカーン「なあに、金などはいらんさ。なかなか面白い傷を観察することができて私も満足だ。どんな兵器で攻撃を受けたのかは知らないが、医者の治療を拒むような実

に質の悪く素晴らしい傷だった。また来たまえ」

又サカーンの言葉に自嘲するレッド。

レッド「……そうだな。『また』があれば、その時はここに来るさ……」

又サカーン「ふむ……？ その口ぶりでは君はまた危険な場所へ赴こうとしているよ
うだな。その傷を与えた相手がいるところへかね？」

レッド「……さすがは医者先生だな。何でもお見通しつてか？」

又サカーン「勝ち目のない戦いなのかね？」

レッド「……………」

又サカーン「私としては、君にはもつともつと怪我をしてもらいたい。……だが、死
ぬのはいかん。君には再びこの医院へと帰ってきてもらわねばならないのだから」

レッド「とんでもない先生だな。アンタ本当に医者かよ。……だいいち、俺だつて別
に好き好んで死のうとしてゐるわけじゃない。そんな趣味はない。……だがな、先生。
人間、誰にだつて、やりたかろうがやりたくなからうが、やらざるを得ないつうこと
があるもんじゃあないのかな。それをやらなきや、やり通さなきや、自分が自分である
意味がないんだつてことが」

又サカーン「私にはないな。私は自分のやりたいことだけをして生きている。そこに
例外はないのね」

レッド「……ああ、そうかい。とにかくアンタには世話になったな。礼を言うよ。じゃあな……」

力のない声でつぶやくと、レッドは病院を出る。クーロンの、ゴミ溜にも等しいスラム街の汚れた空にはどす黒い雨が降りしきる。その汚らしい雨をぎよろりとにらみつけ、レッドは低く唸る。

レッド「勝てるとは、思わない……。それでも……。俺は……」

◇

再びシユウザーの基地へと侵入したレッド。アルカイザーへと変身しヒーローの力で戦闘員たちをなぎ倒していくが、しかし前回とは異なり仲間のいないこの状況はまさに多勢に無勢。疲弊したその体に敵の光線銃がかすめレッドは膝をつく。

アルカイザー「まだだ……まだ、やれる……」

腹部から血を流しながら次の部屋へと続く扉を開くアルカイザー。そこに立っていたのは――。

アルカイザー「お前は……セアト!? 何故ここに?」

セアト「遅かったな」

陰鬱な表情で椅子に腰を下ろすセアト。剣を床に突き立てたままアルカイザーをねめつける。

セアト「貴様に一つ聞き忘れたことがあった」

アルカイザー「何？」

セアト「問おう。……ヒーローとは何だ」

アルカイザー「一体なんの話なんだ？」

セアト「わからないのか？ 貴様はヒーローなのだろう。ならば答えられる筈だ」

アルカイザー「……ヒーローは……。ヒーローというのは……。正義の、味方、だ……。正義のために闘う、世界の平和を守るために闘う……。そういう存在のことだ……」

セアト「では正義とは何だ。貴様の言う『世界の平和』とは、どのような状態のことを言う。この星間世界では今もなお数多くの紛争が起こり、弱者は淘汰されていく。黒十字団などは所詮、その一部を引き起こしているに過ぎん。貴様は……。ここクーロンでの戦いを選んだ。それはつまり、他の悪を見逃すということではないのか。答えろ、アルカイザー。貴様はなぜここに来た」

アルカイザー「……何が言いたい。お前は一体、何が知りたいんだ」

セアト「最初に言った筈だ。ヒーローとは何だ。正義はこの世のどこにある」

剣呑な声で問いを重ねるセアト。返答次第で今にも襲い掛かろうとするかのように……。

アルカイザー「わ、私は……」

セアト「答えられないのか。そんなことさえ考えずに、お前はその力を振るうのか」
アルカイザー「……わからない。俺は……俺には、わからないんだ。もしかしたら、俺は……。だが、たとえそうだとしても、この力を手に入れた俺には責任がある。できるだけのことを、やるしかないんだ……!」

セアト「馬鹿が……。そんなことはヒーローでなくともできる」

アルカイザー「お前はさつきから何が言いたいんだ。どうして、お前はブラッククロスの基地にいる? ブラッククロスの関係者なのか?」

セアト「……関係者、か。そうだな。これは因果だ。黒十字団にはいささか以上の縁がある。……俺はかつて、黒十字団の実験体だった」

アルカイザー「なん、だと……」

セアト「俺はそのころ何者でもなかった。ヒーローでも悪でもなく、名前すら持ち合わせてはいなかった。俺は実験体として改造され……いつか、貴様のようなヒーローと戦うはずだった。だがそうはならなかった。俺は役立たずとして始末されることになり……人としての俺はそこで死んだ。こうして妖魔として蘇った今もずっと考えている。俺は一体何だったのかと。俺が闘う筈だったヒーローとはどんな存在だったのかと」

アルカイザー「……」

セアト「それが貴様なのか？　ただ力を手にしただけの普通の男が。この程度の男を倒すために、俺は、俺たちは……。俺を失望させるな、アルカイザー。ヒーローとは、もつと超人的なものなのかと思っていたぞ」

淡々と呟くセアト。

アルカイザー「勝手なことを言うな……。！　お前に何がわかる！　お前に何がわかるんだ！　ある日いきなり家族を殺され、突然ヒーローの力を与えられて！　どうすればいい！　……。ああ、俺は闘うさ！　家族の仇をとりたいたいからな！　……。だがな、それ以上の上のことは俺にだってわからないんだよ！　俺だって、なれるものなら正義になりたい！　ヒーローにだってなりたいたいさ！　だが違うんだよ！　アルカイザーという存在が正義の象徴なのだとしても、この俺自身は正義じゃあない！　……。ああ、自分でだってわかってるさ！　俺は……。俺は何者でもない！　それでも何かになりたいんだ！　正義に近づくために……。闘わなきゃならないんだ！　俺は……。！　正義とは……。！」

自らに憤るかのように叫ぶアルカイザー。その言葉に、セアトはふと、はるか昔に彼自身が口にした言葉を思い出す。

俺とお前の何が違う。ただそう生まれたというだけで俺は死に、お前だけが生きることか。なぜ俺は人間なんだ。なぜ支配者として生まれることができなかったんだ。俺は嫌だ。死ぬのは嫌だ。負け続けることが嫌だ。そして何よりも人間であることが嫌な

んだ。

人間。

人間は弱い。人間は惨めだ。人間は臭く、醜く、薄汚い獣同然の生き物だ。俺を馬鹿にしたあの人間、俺と俺の母とを弄んだあの糞野郎どもを俺は決して許さない。俺は人間を憎む。この世全ての人間を憎む。何も知らずにのうのうと行き、無自覚に人を踏みつけにする人間を憎む。そして……。

……そして俺は、俺を憎む。俺と言うこの馬鹿を、こうして死んでいくことしかできない己自身を。

お前が理由を知っているのなら教えてくれ。なぜ俺はこうなんだ。なぜ俺はこうして何も手に入れられずに死ななければならぬんだ。ああ、そうだ、生まれてからこのかた人生は何一つ思い通りにならない。誰も俺を必要とはせず、俺を厭う視線でしか迎えない。どうしてなんだ。

勝ち誇りたい。奪われる前に奪いたい。俺は何かになりたいんだ。このまま死ぬのは嫌なんだ。死んでたまるか。死んでなどやるものか。嫌だ、死にたくない。誰か俺を助けてくれ……”

セアト「俺は……」

苦々し気に舌打ちをするセアト。

セアト「俺は……何かになりたかった。俺は……誰かに、助けてほしかった……」
アルカイザー「え……？」

セアト「貴様が何を望もうと、俺の知ったことではない。だが……今回だけだ。今回だけ、俺は……」

意を決したようにセアトは静かに息を吸い込む。

セアト「——お前に、力を貸してやる」

◇

意外にもセアトの助力を得たレッド。頼もしい黒騎士と共に破竹の勢いで基地を進んでいく。

そしてとうとう最後の部屋へとたどり着いたレッド達はブラッククロス四天王シユウザーと対峙するのであった。

シユウザー「誰かと思えば……。おめおめと逃げ出したヒーローがこの俺様に何の用だ？」

アルカイザー「ヒーローは同じ敵に二度は負けない！ 今度こそ、貴様を倒す！」

シユウザー「クツクツ……。目の前でむぎむぎ父を殺された男が、よくもヒーロー

などとほざくものだな! 笑わせるな! たとえいかに強固なスーツを纏おうと、その奥に隠れた貴様は所詮、ちっぽけな人間に過ぎん! さあ、愚かな貴様の本当の姿をさらけ出してやろう!」

言いながら手元の機会を操作するシュウザー。その途端、アルカイザーは苦し気に呻いて膝をつく。

アルカイザー「こ、これは……!」

シュウザー「アルカイザー。我が基地で開発されたこの装置によって生み出されるのはヒーロー力無効化空間! この空間内ではマクロダウナー効果Ωによってヒーローの力は完全にゼロとなる! さあ、恐れ慄けアルカイザー! 貴様はもはや無力な一般市民だ!」

アルカイザー「ぐ……。そ、そうか……。ブラッククロスのトワイライトゾーン……マクロダウナー効果によって強化された怪人達に対抗するために生み出されたのがヒーローの力……。トワイライトゾーンの力を応用することで逆に無効化するとは……」

シュウザー「フハハハハ! どうしたアルカイザー! 貴様の力はその程度か?

ハーハツハツハ! 頼もしいそのヒーロースーツも、今となつては重いだけの棺桶よ!

さあ、身動きすらとれずに死んでゆけい！」

シユウザーのクロービットが動けないアルカイザーを襲う。だが素早く割って入ったセアトは苦も無くビットを切り払い、シユウサーを見据える。

セアト「アルカイザー」

アルカイザー「う……ぐ……体、が……」

セアト「アルカイザー。動けないのか。ここで終わりなのか。動けないのならそう言え。俺が代わりにこいつを叩き斬ってやろう」

シユウザー「なんだ、貴様は？」

セアト「俺はただの随伴者だ。何者でもない。強いて名乗るとするなら——この場所における俺の名は二号だ」

シユウザー「二号……？ 貴様は——」

セアト「貴様に恨みがあるわけではない。憎んでいるわけでもない。だが——どうやら闘う理由はあるらしい。……俺はどちらでも構わない。アルカイザー、お前はどうかする？」

アルカイザー「……」

セアトの静かな言葉にアルカイザーは一瞬の沈黙。憎き仇、シユウザーを前にして奪われたヒーローの力。頼みの武器を奪われ、無力に地に臥すレッド。

正義のヒーローとは何なのか。

自分はヒーローになれるのか。

考えても考えても答えは出ず、迷いを抱えながらも数多くの出会いと戦いを経て――

――ついにレッドは、息苦しそうに喘ぎながらとうとうヒーローの仮面を脱ぎ捨てた。

レッド「俺は……」

冷たい外気に素顔を晒し、ぜえぜえと息を吐きだしながら、しかしレッドは力強い眼で己の敵をしつかと捉える。

レッド「ヒーローの力が無効化されようが……変身できなからうが……! どっちだつて構わねえ! どのみち俺は……! 今はまだ、ヒーローでもなんでもないんだからな……!」

シユウザー「……ほう? 自分がヒーローなどではないことをとうとう認めたな! ならば命乞いをしろ! 惨めに這いつくばり、無力な己を嘆きながら死ね!」

レッド「悪いが、そんなのはごめんだな!」

シユウザー「なにイ?」

レッド「ああ、そうだ。俺はヒーローなんかじゃない。正義でもなけりや悪でもない

！」

シユウザー「ならば、貴様は一体なんだ!？」

レッド「俺は俺だ。小此木烈人だ! ……ああ、俺はヒーローになってやるさ。完全無欠の英雄にな。……だがそれは今じゃない。お前を倒した後でだ。アルカイザーの力が使えないってんなら、望むところだ! 正義だ何だと四の五の言うのは、悪いが後にしておくれ! ——シユウザー! 俺の名を聞け! 俺の名は小此木烈人! ヒーローとしてではなく、アルカイザーとしてでもなく……小此木家の長男として、シユウザー! テメエを倒す!」

シユウザー「馬鹿が! 結局、貴様はつまらん復讐者に過ぎないのだ」

セアト「……それがお前の答えなのか。アルカイザー。都合に応じて出し入れできるようなものが、お前の言う正義なのか?」

レッド「悪いなセアト。俺は正義じゃあない……。だが、自分が正義じゃないからと言って、正義を諦めていいとは思わない。それでも……俺は正義を目指す。こいつを倒して、俺はヒーローになってやる!」

セアト「……よかろう。小此木烈人。ならばお前の戦いを見届けてやる」

アルカイザースーツを解除し生身の姿へと戻ったレッド。全身から血を流しながらシユウザーと対峙する。

シユウザー「さあかかってこい! 小此木烈人! 家族のもとへ送ってやろう!」

レッド「これが俺の……アルフェニックスだああああああ!」

シユウザー「ぐふっ」

レッド「やったよ。父さん、母さん、藍子……」

渾身の一撃で辛くもシユウザーを打ち破ったレッド。しかし、それでも失ったものは戻らない。亡くした家族への思いに涙を流しながらレッドはシユウザー基地を後にするのであった……。

■次回予告

とうとう宿敵シユウザーを倒したアルカイザーことレッド。

だが戦いはまだ終わらない。四天王ベルヴァが仮面武闘会に現れるとの情報を掴んだレッド達はシンロウへと向かう。

謎の覆面レスラーピンクタイガーは敵か味方か!?

そして曲者ぞろいの武闘会でアルカイザーが目にしたものとは!?

次回、『獣心! ひととけだもののベルヴァ!』見てくれよな!

第二十七幕　そして負け続ける馬鹿の唄——黒騎士セアトの物語——

目の前で正義が悪に勝利するのを馬鹿はずっと眺めていた。自分が想像していたほどの感慨は湧かなかつた。腹の底から沸き起こるような歓喜も、それが自らの前には決して訪れなかつたという失望もない。

正義が悪に勝利する。その事実が喜ばしいものであることを馬鹿はおそらく知っていて、けれども心は動かなかつた。ただただ茫洋と迫りくる徒勞に舌の根がもつれていくような、不快な感覚だけが強く残る。

崩れ落ちるような眩暈にたたらを踏んで馬鹿は——黒騎士セアトはそつと額を押さえる。

この世には正義の味方がいる。その正義の名はアルカイザーという。アルカイザーは悪の組織ブラッククロスの四天王、シユウザーと闘い、そして勝利する。

「かくして世界には平和が訪れる……か」

ぼんやりと、戸惑うように囁いてセアトは立ち尽くす。

宿敵をついに倒したアルカイサーはセアトに助力に感謝して立ち去って行った。あとに残されたのはセアトただ一人のみ。——ただ一人？　いいや、それは違う。セアトはもはや人ではない。一人、という言葉は適当ではない。一人という言葉は、あくまでも人間に向けて使われる言葉だろう。いま、ここ、この場所には、一人もいない。人であるものはもう誰も生きてはいないのだから。

セアトは焦げ跡の色濃く残る床に目を向ける。そこにはあまりにもみじめな姿をしたシユウザーの成れの果てが這いずっている。人であることを捨て、全身を機械と化したブラッククロスの四天王。小此木烈人の攻撃によって四肢を損壊し、芋虫同然になったシユウザーは息も絶え絶えに呻きながらひっしに床を這っている。

「し、死なん……俺は……死なんぞ……」

瀕死のシユウザーはセアトの存在すら忘れてしまったかのように一心不乱にもぞもぞと蠢いている。

「馬鹿め……アルカイザー……返り咲いてやるぞ……俺はまだ……次は……お前を……殺してやる……殺して、やるぞ……」

シユウザーはぐぶぐぶと唇の端から血の泡を吹きだす。しかしそれはこみ上げる血に喉を詰まらせているのではない。

彼は、ただ唾っているのだった。

自分に止めを刺さなかったアルカイザーの甘さや弱さ、そして復活し復讐を遂げられることに喜び、ほくそ笑んでいるのだった。頬の肉をびくりと痙攣させて笑うシユウザーの眼に、セアトは写っていない。重傷を負い朦朧とする意識では、正確に状況を判断することもできないのだ。自分の近くでセアトが冷たい目つきをしていることにも気が付かないのだろう。

「おい」

静かに声をかけると、シユウザーは面白いように動きを硬直させた。満足に動かない上体を軋ませるようにして捻り、ぎよろりと目を剥く。

「み、見逃してくれえ……」

顔には出さなかったが、その言葉を聞いて思わず笑ってしまいそうになった。それほどまでにみじめで、情けない声と表情をしていた。

「さきほどの威勢はどうした？」

「“付き添いだ”とそう言っただろう……お、お前は、さっきの戦いにも手を出さなかった……」

「確かに」

セアトは頷く。

「アルカイザーが戦うというなら、俺に口を出す筋合いはない。——だがな、シユウ

ザー。そしてお前を見逃すかどうかといえ、答えは否だ」

「ひ……」

シウウザーの声が裏返る。

「い、いやだ……。死にたくない……。死にたくないんだ……。た、助けてくれ……」

「……」

「金をやろう……。お前が望むならブラッククロスの秘密でも武器でもなんでもやる！
だ、だから……。命だけは……」

「……」

「な、なにが望みだ……。？ お前はヒーローでも何でもない……」

「……ああ。そうだな。俺は妖魔、針の城の黒騎士。人間世界の諍いにかかわる気はな
い」

「な、なら……」

「だが、お前は殺しておく」

「何故だ!？」

「先ほども言った筈だ。因縁がある、と」

「因縁……。？ お前さつきもそう言ったな……。名は二号だと……。そ、そうか……。ま
さかお前は……」

「そうだ。俺は四天王シユウザーを造り出すために改造され、そして廃棄された実験体だ」

「恨み……復讐か……。選ばれなかったものが……選ばれたものを追い落とそうと……」

「どうだろうな。俺にもわからん。それなりの時が過ぎた。昔ほどお前を羨んでいるわけじゃない。だが、それでも……お前はここで殺しておくべきだろう」

「フ、フフ……」

「……何か、おかしいか？」

「ああ、おかしい。結局は何も変わらん。選ばれた者と選ばれなかったものが入れ替わっただけだ。何が違う？ 組織のために改造され、かつてはお前が選ばれず、俺は四天王となった。そして今、俺は死に、お前だけが生き残る……。ならば俺はこう言い残すだけだ。『なぜ俺ではなくお前なのだ』と」

「……ああ、そうだな。何も変わらん。俺もお前も……。だが、生き残ったのはこの俺だ」

「……俺は、やはり死ぬのか？」

「ああ」

「いやだ……。死にたくない……。俺は生きたい！ なんのために改造の激痛に耐え四

天王になったんだ？　俺は最強だ！　そうでなければ意味がない……！　いつかはほかの四天王を皆殺しにし、俺こそがブラッククロスの頂点に立つ筈だったのに……この世の、王に……俺は……」

セアトはその言葉にこたえることなく、シユウザーの背中へと無慈悲に剣を差し下した。

「あつ……」

短い叫び声を上げて一瞬痙攣し、シユウザーは沈黙する。

動かなくなったシユウザーを見下ろしてセアトは奥歯を噛みしめる。顔を上げ、挑みかかるように天井を睨みつけて——何もかもこの男の言う通りかもしれない、と考える。

「この世の王に……か……」

身の程知らずの言葉だとは思わなかった。これから死ぬ男が口にするには随分と悲しい言葉だと思いはしたが笑う気にはなれない。

きつと、男なら誰であれ夢見るものなのだろう。誰よりも強くありたい。支配者でありたいと願うことは。

たとえその願いの多くが叶わないものと知っていて、それでもなお諦めきれない願望が男にはある。

最強であること。

王であること。

自分は一体どうなのだろう、とセアトはふと考える。イルドゥンほど自らの強さに拘っているつもりはないが、かといってラストバンほど無関心であるつもりもない。

(俺は……王になりたいのか)

誰に問うでもなく、心の中でそつと呟く。

(俺は……)

セアトはシュウザーの亡骸へ手を伸ばした。シュウザーの体に残された数少ない武装を剥ぎ取り、自らのものにする。これまで彼が数多くの妖魔に対してそうしてきたようにその力を奪い、わが物とする。

「それでも、勝ったのは……生き残ったのはこの俺だ。……そうだろう……セアト……」

呟いて、セアトは再び天を仰ぐ。シュウザー基地の最奥、人工物に取り囲まれたその部屋からは、星々を臨むことはかなわなかった。

◇

むかしむかしのお話です。

あるところに一人の馬鹿がおりました。馬鹿は馬鹿で馬鹿なのですから、自分が馬鹿であることにも気づいていませんでしたが、しかしあるとき悪の組織の実験体として改造されて、ひよんなことから人並みの頭を手に入れました。喜ばしいことではありましたが、何しろ馬鹿は馬鹿でなくなりました。その他おおくの人々がそうであるように、それなりの知能とそれなりの常識とを手に入れたのです。

けれども——ふと元馬鹿は思うのです。己が馬鹿であったころ、自分は様々な人間に笑われ、都合よく利用されてきたわけだけれども、やっぱりそれは許せないことなのだと。

だってそうでしょう。石を投げられたのです。川へ投げ落とされたのです。心の底からの親切を馬鹿にされ、口に出す言葉の尽くを笑われてきたのです。

元馬鹿には誇りというものがありませんでした。心の底をさらってみても、これっぽっちも存在してはいなかったのです。何かを成し遂げたことや、ほかの人よりも優れていると思えるようなことが何一つありませんでした。そうしたことを体験しかけても、必ず誰かが馬鹿の前に割り込んで「馬鹿だなあ、どうしてそんなことをしてしまうんだい。迷惑だよ」と言つて殴りつけてくるので、馬鹿は「ごめんよごめんよ」と言つてへらへらと愛想笑いを浮かべなければならぬのです。

だから馬鹿は思うのです。こうして人並みの頭を手に入れて、けれども自分はもはや

取り返しのつかない場所にいます。『失ったものを取り戻したい』とそう感じながら、
馬鹿は賤いを求めました。ごくごく自然な流れです。自分が笑われたその分だけ、別
の誰かを笑いたい。他人よりも優れた存在になって、高いところから見下ろして、そう
です、ああ自分は生きている価値のある生き物なんだ、と心の底から信じていることができ
なければ、何のために生まれたのかわからないではありませんか。

幸いにも馬鹿は黒十字団という悪の組織の実験体でしたから、自分の体を改造して強
くなることはそれほど難しいことではありませんでした。馬鹿の改造を担当していた
『博士』を暴力で屈服させ、自分自身の改造を手伝わせます。馬鹿はぐんぐん強くなっ
ていきました。醜かった姿かたちも美しく整い、その立ち振る舞いにも自信が漲るよう
になります。馬鹿は少しだけ笑うことができました。ほんの少しだけではありません
が、自分のことを好きになれそうな気がしました。

改造を続けるうちに、馬鹿は博士と仲良くなります。馬鹿は博士を無理やり殴りつけ
て言うことを聞かせていたのですが、博士は妙に懐いてくるのです。へらへらと、弱々
しい愛想笑いを浮かべてすり寄ってくる博士を見てると不思議な気持ちになりました
た。博士の卑屈な態度というのは、つまるところかつての自分自身の姿そのものだった
からです。馬鹿はなんだか博士を殴るのが嫌になりました。博士を殴るのをやめる代

わりに、馬鹿は博士にやさしくすることにしました。

そうして、馬鹿と博士は友達になりました。

実際に友達だったのかどうかはわかりません。「お友達になりましたよ」と言っただけではありません。「いいよ」と返事をもらったわけでもありません。でも馬鹿は時々空を見上げて博士のことを思い出します。それは何百年もの時間が過ぎた今でも変わらないことなのです。

馬鹿はその後博士とともに仲良く改造を続け、そして当然のように敗れました。敗北したのです。馬鹿は四天王シユウザーを造り出すために改造されていたのですが、そうして改造されていたのは何も馬鹿だけではありませんでした。選ばれるのはいつも、ほんの一握りの存在なのです。博士は処刑され、馬鹿たち実験体も処分されることになりました。

そこで馬鹿は一体の妖魔と出会います。彼女の名はアルキオネといいます。アルキオネは悪の組織の四天王として馬鹿を処分しに来たのですが、結局彼女は馬鹿を殺さず、逆に馬鹿を妖魔にしてくれました。「あたしがお前を選んだら、お前はあたしを選んでくれる？」と彼女は言いました。なぜそんなことを言うのかも、彼女が何を考えているのかも馬鹿にはわかりませんでした。でも構うことなんかありません。死ぬことに比べたらそれが何でしょう。それにだいいち、彼女は馬鹿を選んでくれたのです。生ま

れて初めてのことでした。理由が何であれ、彼女は馬鹿を選んでくれた、「あなたがいい」とそういつてくれました。馬鹿には嬉しくて嬉しくてたまりませんでした。

馬鹿は妖魔になりました。人間をはるかに超える寿命と力とを手にすることができました。薄汚い人間とは違う次元を生きる美しい種族。馬鹿はとても喜びましたが、やがて妖魔の社会のことを知ると大いに落胆します。妖魔の社会は完全な縦社会。妖魔は格上の妖魔にはけして敵わない。そんな話はないじゃありませんか。誰かに馬鹿にされるのが嫌だから人であることを捨てたのに、ようやく妖魔になったと思えばまた別の妖魔に頭を下げて生きていかなければならないなんて。

それでも馬鹿は諦めませんでした。後天的に妖魔となった馬鹿の格はといえば、始祖たる炎妖アルキオネに劣る下級妖魔でしたが、それならばと馬鹿は強くなるために考えました。妖魔という生き物はけしてその肉体が成長することはありません。けれども、モンスター之魂を憑依させて力を入れることはできましたし、他の妖魔には用いることのできない力——黒十字団の保有していた武器を初めてとする“道具”を使うことが馬鹿にはできました。また馬鹿は積極的に他の妖魔に対して吸血を行いぐんぐん強くなっていきました。

生まれ持った“格”はけして変わらないはずの妖魔である馬鹿が——たとえば何の力も持たない筈のちっほけな半妖がその身に流れる血から驚異的な成長を遂げていく

ように——ようやく中級と呼べるだけの実力を手に入れたそのころ、彼はとある妖魔の君と出会います。

それはまさに衝撃的な出会いでした。妖魔の中の妖魔、魅惑の君、妖煌帝オルロワージュはまさに馬鹿がこうありたいと願う姿そのものだったのです。何者にも侵されぬ強さ、いかなる時にも揺らぐことのない誇り。

“うらやましいなあ” 馬鹿は素直に思いました。こんな生き方ができたら幸せだろう。自らを恥じたり不安に思うことなど何一つなく生きていけたら、それはどんなに暖かな気持ちのするものだろう。馬鹿はオルロワージュに憧れました。自分もこんな存在になりたい、ならなければ、と、そう思ったのです。もともとはただ単に成り上がるためにアルキオネの口利きで妖魔の君へと近づいた馬鹿ではありましたが、この時ばかりは偽りのないまっすぐな気持ちで頭を垂れ、『どうか私を配下にお加えください』と言うことができました。恐る恐る返答を待っていると。オルロワージュは不思議なことを尋ねます。

お前は、永遠をどう思う？

永遠……でございますか？

はて。これは一体どのような意味を持つ質問なのでしょう。たとえば忠誠心が本物かどうか、あるいは馬鹿を部下とすることにどれだけの益があるのか、そういったこと

を訪ねるのでしたらわかりません。馬鹿は実際にそのつもりでおりましたし、その類のことでしたら得意ではないにせよある程度は雄弁に語りつくせる心持でおりました。けれども、永遠。オルロワージュの問いはまるで見当の違うものでした。予想だにしないかつた質問に、馬鹿はほんの少しだけ本音を漏らしてしまいます。

……そう、難しく考えずとも良い。余は何も、お前を試そうとしてしているわけではないのだ。ただ永遠を、”永遠”と呼ばれるものをどう思うのかを尋ねているだけだ。思いついたことを口に出せば良い。

永遠……でございますか。永遠、永遠……。永遠、とは……とても……長く、どこまでもどこまでも続いていくこと、絶えることのないもの……そういったものことでございますでしょうか。

ああ、そうだな。永遠とは、継続であり、延長であり、そして不変である……そういう意味を孕む言葉であろう。お前はその永遠をどう思う？

私には……よくわかりません。恥ずかしながら、これまで考えたこともありませんでした。

では、今、考えよ。焦らずとも良い。時は永遠にある。

え、い、えん……とは……。私は……。

うむ。

——申し訳ございません。私には、わかりかねます。

そうか……。

申し訳ございません……。

いや、良い……。では質問を変えましょう。お前にとって、永遠とはどういうものだ。これまで、永遠と呼べるようなものを感じたことはあるか。

永遠……それは、生きることや、死ぬこと……そういったことでしょうか。

ふむ。それがそなたにとっての永遠か？。

……いえ……。

では、何だ。

私は、わかりません……。ですが、こうして妖魔として何百年という時を生きってみてもしも「永遠」が……いつまでも変わらぬものがこの世にあるとするのなら、私にとつてのそれは「名前」である……のかも、しれません。

名前……？　ふむ……。

かつて人間であったころ、私には一人の友人がいました。……いえ、今となつては、それが友人と呼べるものだけの関係だったのかどうか定かではありません。それまでに友など持ちえたことはありませんでしたし、それ以後もありませんでした。だから、本当の意味では、私は「友」というものが何なのかわかつてはいないのでしよう。

ですが、それでも、私は今でもそいつのことを忘れずにいます。何十年、何百年と時を経て、それでもなおとうに滅びた人種族のことを思い出すことがあります。——その男の名は、セアトといいます。

……ああ。なるほど……。それが、そなたにとつての永遠なのだ……セアトよ。

おそらくは。

友……。そうか……。なかなか面白い話であつた。よかろう、妖魔セアトよ。そなたはこれより「黒騎士」を名乗るがよい。

黒騎士……でございますか。

そうだ。この針の城には無数の乙女たちが眠っている。余にはその乙女を守る騎士が必要だ。そなたは黒騎士として余に仕え、そしてあらゆる敵を排除せよ。

……はつ。身に余る光榮、恐悦至極に存じます……！

……と、まあこうして馬鹿はオルロワージュに仕えることとなり、後にファシナトウールが誇る恐怖と力の体現者として謳われる黒騎士の、その第一の騎士として選ばれたのでした。

馬鹿は舞い上がりました。何せ憧れの人から直々に任命されたのです。黒騎士、という名前もなんだか随分とカッコ良さそうではありませんか。ようし、自分はオルロワ―

ジュ様のために身を尽くして働くんだ。そうして、いつか自分もオルロワージュ様のよ
うに立派になってやるんだ。そう心に誓って、馬鹿は来る日も来る日もあるじのために
身を粉にして尽くしました。忠誠という言葉も滅私奉公という言葉も、妖魔のその生き
方からはほど遠いものとはまったく気づかぬままに。

初めて馬鹿が疑問に思ったのは、それから何百年もたつて新たにイルドウンとラスト
バンとが黒騎士に任命された時でした。それまで黒騎士は馬鹿だけだったというのに、
一気に3倍になったのです。最初のうちは、イルドウンが主であるはずのオルロワー
ジュに対等な口を利くことに対してただ憤慨していた馬鹿でしたが、そうしてイルドウ
ンを敵視している内にやがて違和感を覚えます。イルドウンの不遜とオルロワージュ
の泰然とは、底を同じとするものではないかと。妖魔としてより正しいのは——自
分やほかの妖魔達がオルロワージュに平伏し畏怖を捧げるような生き方ではなく——
イルドウンの方なのではないか、と……。

馬鹿は、また少しだけ昔のことを思い出しました。

妖魔になったあの時には、自分はもう誰からも支配されないと歓喜した筈なのに。誰
に頭を下げることもなく、何の支配も受けずに生きていけるはずなのだと思っていたの
に。——自分は今こうして、また誰かに敗北し、膝をついている。それは一体なぜなの
でしょう。世界は一体、どうなっているのでしょうか。馬鹿は来る日も来る日もイルドウ

ンのことを観察するうちに、段々と羨ましくなってきました。こういう風に生きられたらいいなあ、と自分が考えていたその生き方を、まさにイルドゥンは体現していたからです。自分のやりたいことだけをやり、ただどこまでも自らのみを恃むこと。自身の生き方を曲げないこと。そこでようやく、何故オルロワージュがイルドゥンを黒騎士に選んだのが馬鹿にもわかりました。イルドゥンはどこかオルロワージュに似ていました。

では、自分は？

馬鹿は深く考えます。自分はなぜオルロワージュに選ばれたのだろうか。自分はオルロワージュに似ているところがあるのだろうか？ 永遠に関するあの質問には何の意味が？

心に落ちた一滴の不安はじわじわと滲み、馬鹿の焦燥は深まります。

ああ、イルドゥンが妬ましい。

だってそうでしょう。いくら妖魔と言ったって、本当のところは誰彼構わず喧嘩をふっかけて生きるわけにもいかないし、ある程度は妥協して我慢して、自分より強い相手には尻尾を振って見せなければ。だってそうでしょう。妖魔の格が絶対だというのなら、たった一体の支配者を除けばそれ以外の妖魔は全て敗北者に墮す筈なのです。イルドゥンだって例外ではありません。オルロワージュと闘って敗れ去ったのなら本当

のところは滅んでいる筈だし、そうでなくとももつと腰を低くしているべきでしょう。それなのに。それなのに。それなのに。

どうして。

……馬鹿は、少しだけ疲れてきました。妖魔として長い長い時を生きるにつけ、はじめは見えていなかったものが段々とその輪郭を露わにします。イルドゥンのようになりたい、ならなければ、とそう憧れながら、しかし同時にイルドゥンを強く妬み、憎むようになります。

ある時、馬鹿はオルロワージュユからとある少女の世話を命じられます。ヨノメヨチコ、という人間の少女です。ちつぽけな人間でした。大して美しいわけでも賢いわけでもない、むしろどちらかといえば馬鹿一直線と言つても過言ではない少女でした。というよりも馬鹿でした。オルロワージュユからは何があつてもヨノメヨチコから目を離さず守るようにと命じられてはいましたが、そんなことをする価値があるとはどうしても思えませんでした。オルロワージュユと話しているときはどうにもすまし顔でいるようではありましたが、主の見ていないところではきつと鼻でもほじっているに違いありませんし、たとえそうでなかったとしてもいつかほじり出すに決まっています。人間、というのはそういう不完全で醜い生き物なのです。馬鹿の中ではそうなっているのです。

……部下である森の従騎士ウロネブリはいつの間にかにヨノメヨチコと仲良くなつて、今日も遊ぶ約束をしています。よーちーこーちゃーあーん。あーそーびーまーしよおー。

あのね今日はねえヨチコちゃんにおせんべいのね焼き方を教えてもらうんだよお。そう言つてニコニコしながらウロネブリが報告してきます。そうか、とだけ馬鹿は答えました。何をやっているんだこいつは、と思いはしましたが、馬鹿はウロネブリを傷つけたくありませんでした。ウロネブリを配下に加えてから彼女の身の上話を長々と聞きだし、気が付くと馬鹿は段々ウロネブリを甘やかすようになっていました。ウロネブリがそうしたいのなら仕方がない、好きにさせよう。そう考えはしましたが、しかし馬鹿自身はヨノメヨチコと口をきこうとは思いませんでした。

正直に言います。馬鹿はヨノメヨチコが嫌いでした。まず第一に人間が好きではなかつたし、その点を除いても彼女にオルワージュが拘るだけの価値があるとはどうにも思えなかつたのです。彼女に綺羅星のような美しさがあればまだ耐えることはできません。彼女に当意即妙の知恵があればまだ忍ぶこともできました。けれどもヨノメヨチコは無為でありました。無能極まりない馬鹿でありました。だからもし、何故ヨノメヨチコなのかと聞かれればそれはオルローワージュが選んだからだとしか言いようがありません。何の努力も苦しみもなく、ただ「選ばれた」というそれだけで彼女は妖魔の

君の寵愛を受けたのです。

ヨノメヨチコが人間としての短い生を終えた時、ウロネブリは泣いていました。きつと幼い彼女は人の死というものをまるで理解できていないだろうから、きちんと教えてあげないといけないなあ、などと考えていた馬鹿は拍子抜けしました。

意外なことは他にもあります。ヨノメヨチコを失ったオルロワージュはフアシナトウールへと帰り、長いあいだ目を覚ますことはありませんでした。仮にも妖魔の君ともあろう存在が、たかだか一人の人間の死に傷ついた。その驚きを、馬鹿はわずかな親しみや軽蔑と共に受け止めます。

オルロワージュが眠っている間、馬鹿には暇ができました。もちろん針の城の秩序を維持するという大義はありましたが、王の恋人たちの世話に奔走することはなくなりしました。しかしやらなければならないことはいくらでもあります。につくきイルドウンに追いつき追い越せと、セアトは誰にも知られぬようこっそりと数多くの妖魔を食らい、吸収しました。そしてまた、道具を使う、という妖魔社会にはない力を持っていた馬鹿は根っこの町のゴサルスの工房へと出入りし、数々の強力な魔具を身に着けました。

馬鹿は人間こそ嫌いでしたが、下級妖魔に対してはそこまで偏見を抱いてはいませんでした。ですからほかの妖魔たちが「努力する妖魔」であるとして馬鹿にしていたゴ

サルスに対しても他と同じように扱いました。『黒騎士であるセアト様がこの私を』と、ゴサルスはしきりに感激していました。ゴサルスと話し合い、特別に人間世界の兵器を改造させ、世界に二つとない武器を作り上げます。たとえ自分が中級でしかないとしても、上級妖魔を滅ぼすだけの武器を持てばいい。そうすればいつかきつと——。馬鹿は力を蓄えます。

時が流れます。妖魔の君オルロワージュがその血を与え、半妖となったアセルスは針の城から逃げていきます。しめしめ、と馬鹿はほくそ笑みます。これでアセルスを狩る大義名分ができました。馬鹿は最初からこの娘のことが気に入りました。血は妖魔の力の源であり、妖魔の君の血を与えられるということは妖魔の君そのものの力を受け継ぐに等しい。だというのに、このアセルスはそれに感謝するどころか妖魔の社会を嫌って逃げ出していくのです。ただそこにいたというだけでオルロワージュの血を手に入れた元人間。たくさんの妖魔達が焦がれるほど求めてやまない血を享けた女。何の努力も研鑽もなく選ばれた人間。そんな奴はみんな死んでしまえばよいのです。罰を受けて当然なのです。だから馬鹿は部下に命じてアセルスを追いました。苦々しいことに黒騎士ラストバンはこのアセルスに好意的なようでした。一体何を考えているのでしょうか。もしアセルスがその気になればいつか自分たちの地位を脅かしさえす

るかもしれないというのに。馬鹿は配下の従騎士たちにアセルスを追わせました。オウミ、シユライク、クローロン、そしてマンハツタン。その間に馬鹿はアセルスに肩入れするラストバンと敵対することとなり、かろうじて、その戦いに勝利します。紙一重ではありましたが、この勝利は馬鹿に自信をつけてくれました。ついに自分は黒騎士にさえ打ち勝った。自分は強い。自分には確かな力があるのだ。もう名前だけの黒騎士とは言わせない。今の自分はあのイルドウンにすら勝るはずだと。

従騎士たちを引き連れ、馬鹿はどうとうアセルス一行と相対します。ラストバンの要請でイルドウンがアセルスたちに与していたのは大きな誤算でしたが、しかし当のアセルスさえ殺してしまえば一行は瓦解する目算でした。いくら黒騎士といえども三体の従騎士相手ならば足止めも可能と踏んだ馬鹿はイルドウンの相手を彼女たちに任せ、自らはアセルス・紅姫・白薔薇姫に挑みます。白薔薇姫が戦うことなど聞いたこともありませんが、かつては恐れられた紅姫も今では寵愛を失って大幅な弱体化を遂げている。それならば三対一といえど恐るるに足らず。実際、剣を交えたアセルスには大した力を感じませんでした。妖魔化を行い青髪となった彼女には若干驚いたものだからといって黒騎士を滅ぼすにはまるで足りません。戦いは馬鹿の思惑通りに進んでいました。あと一步で妖魔の剣をアセルスに突き刺し、その首を落とそうとしたその瞬間——背後でアルキオネ達の弱々しいうめき声が聞こえました。

——從騎士ごときが、この俺を阻む気か？

恐れながらイルドウン様。我々の主は黒騎士セアト様。そして主の命は絶対なので
す。

……つまり台詞だ。

いくらあなたが強かろうと我ら三体がかりでなら……！

お前の言っていることはつまりこういうことか？ 三体一でなら黒騎士にも勝てる、
と。セアトの底が知れるな。口の利き方には気を付けろ、三下。その言動はお前の主を
も愚弄する。黒騎士セアトもそこまで弱くはなからう。

……。

戦いが始まる前、アルキオネ達とイルドウンがそんな会話をしていたのを覚えていま
す。しかしまさか——両者の間にそこまでの力量差があるなどと誰が予想できたで
しょうか。アルキオネ、ハウゲータ、そしてウロネブリ。彼の誇る三体の從騎士たちは
あつというまに叩きのめされてしまいました。馬鹿は激しく動揺します。イルドウン
が加勢に加われれば馬鹿はひとたまりもありません。何ということだ——内心で齒噛み
しながら逃げ出すタイムミングを窺っていると、奇妙なことにイルドウンは劍を収めま
す。アセルス。イルドウンは静かに言いました。あとは自分で何とかしろ。

イルドウンが何を考えているのかはさっぱりわかりませんが、しかしこれは明

確な好機でした。イルドウンさえいなければ、アセルス達だけならばその首を落とすのは容易い。逸る馬鹿は再びアセルスに襲い掛かり、そしてその胸をかつてのよう貫かんとしたまさにその時——紅姫が割って入りました。しまった、とそうはつきりと感じました。馬鹿が殺さねばならないのはアセルスただ一人です。白薔薇姫や紅姫はあくまでもオルロワージュの寵姫であり、滅ぼすわけにはいかないのです。ああ、それだけに——馬鹿の目の前で紅姫は『死にたくない』と言い残して塵になつてしまいました。なぜこうなる——忸怩たる思いでそれでもアセルスを殺そうと向き直つた馬鹿はそこで爛々と目を光らせたアセルスに出会います。

そうして、馬鹿は敗れました。

何が何だかわかりませんでした。紅姫を失い激昂したアセルスの瞳。この世全てを焦がすかのような輝き。対峙するだけで腕が、全身が震えだすほどの眼光。馬鹿は畏れを知りました。変貌したアセルスに肩を砕かれ、腹を裂かれました。つい先ほどまで何等の脅威でもなかったはずの小娘が感情一つで支配者へと変じる不条理。選ばれた者の力。

アルキオネたちを連れてほうほうのていで逃げ出した馬鹿は傷の痛みに呻きながら誰にも気づかれずに悔し涙を流します。

「ずるいじゃないか」

馬鹿は心の底から思いました。大切な人を失つて悲しむ者は溢れるほどそこらにいる。そんなことは誰にでもできる。でもその中でも選ばれた者は——その悲しみを糧にこの世の理を容易くひっくり返してみせる。誰かを奪われた怒りに覚醒し敵を退ける、という、ばかばかしくあり触れたその結末を引き起こすことができる者が、果たしてどれだけいるでしょう。

それは物語なのです。やがて誰かに語られる、そういう定めを背負ったものの足跡は美しく舗装されていて、馬鹿やセアトのような存在にはきつと歩くことが叶わないでしょう。

羨ましいなあ。馬鹿はなおも思います。そうした物語を引き連れて生きていける者、アセルス、そしてオルロワージュのような存在に自分もなりたい、と、そう思いながら、しかし同時に、どうせ自分には無理だろう、と諦めに項垂れます。

物語。

主人公。

ヒーロー。

やはり小此木烈人なんか助けなければ良かった——苦々しい思いでファシナトゥールへ戻った馬鹿を待ち受けていたのは、当然ながら主の厳しい叱責でした。

——確かに、余は言ったな。アセルスを捕らえよと。だが紅を滅ぼせと口にした覚えはない。

も、申し訳ございません……。

セアトよ。余は他者に奪われることを好まぬ。余は余のものを何一つ失ってはならぬのだ。……だが、そなたは余から姫を奪った。そうであろう？

は、……ははっ。

報いを受けよ。セアト。

………う、ぐっ。

セアトよ。アセルスと白薔薇を捕らえるまで針の城に戻ることは禁ずる。

し、しかし……それでは誰がこの城をお守りするのですか……？ ラスタバンは消え、イルドウンは我らを裏切りました……。後に残った黒騎士は私とウエズンのみ……。

余の言葉が聞こえなかったのか？ 余はアセルスを捕らえよ、と言ったのだ。……もとより、針の城には守りなど必要ない。余を凌ぐ妖魔なぞこの世には存在せぬ。

……で、では……私は、『黒騎士』とは一体何のために存在しているのですか。この城を守れと言ったのはオルロワージュ様ではありませんか……。

そうだな……。確かにそう言った。だがな、セアトよ。配下になりたいと言ったのは

そなたの方だ。余はその望みを叶えたまで。『城を守る必要がある』と……そう言ったのは、ただの言葉だ。

こ、と、ば……？

そう。『言葉』は、内実が何であれ懐に入れていけばいつかは真実になる……そういう性質のものであろう。それを証明したのはセアト、そなたではなかったか。

……恐れながら、わが君。どうしても一つ、お聞かせ願いたいことがあります。

何だ。申してみよ。

私は……我々黒騎士は一体何のために存在していたのですか。我々が黒騎士として選ばれた理由は……一体なんだったのですか……？

『黒騎士』とは名前だ。名前そのものに意味はない。……そうだな、知りたいのであれば答えよう。特に理由はない。先ほども言ったが……余に仕えたいと願ったのはそなたの方だ。だが確かに配下になりたいと願うものは大勢いた。余に闘いを挑み、滅んでいったものも方は下らぬ。その中で何故イルドウンやそなたを、と問うならば……ふむ、おそらく、それはそなた達がどこか余に似ていたからであろう。

私も……でございますか。

ああ、そうだ。イルドウンの強情、ラストバンの野心は永遠を求める余のそれによく似ている。彼奴らに手心を加えたのもどこか似たものを感じ取ったからかもしれない。

で、では、私は……。

ああ、うむ。セアトよ。そなたは弱い。そなたの弱さは……余に、とてもよく似ている。だから余はそなたを黒騎士へと任命した。たとえそなたにそれだけの実力がなからうとも。たとえそなたが上級妖魔には著しく劣る中級であろうともだ。

私が選ばれたのは、私の弱さゆえ……？　そ、そんな……。

予想外の言葉に打ちのめされた馬鹿は、従騎士を連れてファシナトゥールを離れます。もうアセルスを捕らえるまでは帰れない。馬鹿は必死の思いで彼女を追いました。懸命にアセルスの痕跡をたどりながら、馬鹿は失意のうちに身をよじります。

自分はなんて愚かで惨めな存在なのだろう。オルロワージュ様は——自分が敬い憧れたあの方は、自分の力を認めてくれたのではなかったのだ！

『野心』を認められたというのなら、納得することはできました。

たとえ『強情』であったとしても、意志の強さを認められたのなら頷くこともできました。しかし『弱さ』は——。

「ただの、道化じゃないか……」

ぼつりと、馬鹿は呟きます。他の従騎士たちは別の場所を探しています。呼びさえすればすぐにも駆けつけるはずでしたが、生憎と今は孤独でいた方が気が楽でした。

馬鹿は荒野に立つていました。

その時、彼はちようどボロという星にやってきていました。それまで訪れたことはなかったのですが、ある時急にこの星の存在に気が付き、そういえばまだ探していなかったことを思い出したのです。殺風景な荒野をとぼとぼと馬鹿は進みます。足取りは重く、気も進みません。馬鹿はすっかり元気をなくしてしまいました。ぜんたい、このままアセルスを見つけたとしてもはたして自分が勝てるのかどうかも定かではありません。かつて味わった苦い敗北が、そして主から受けた『弱い』というあの言葉が、馬鹿の心を静かに蝕んでいきます。

アセルスを捕らえなければ帰ることはできない。しかし、そのアセルスに勝てるのかどうかもわからない。

ああ。

自分は一体なんだろう。自分はきつと誰かに褒められたかったのだ。頭を撫で、価値を認められ、よくやった、すごいなど誰かに言っただけでよかったのだ。オルロワージュ様に認められたかったのだ。これが人間の悪い癖だ。奴隷根性がいつまでたつても抜けない。支配者になりたい、とそう考えているはずなのに、気が付けばそれは支配者になつて誰かに褒められたいという願ひに変わっている。その誰かというのは誰だ。支配者になりたいと言つて、その支配者になつた自分を褒めてくれるのはつまるところこ

の自分自身を支配する者に他ならない。

何が弱さだ。生まれついでたの支配者であるあのお方には、俺の気持ちなどわかるまい……。

馬鹿の心は自分自身の弱さというもので一杯になりました。怯懦と狼狽に知らず知らず腰は引けていきます。

そして——。

荒野を行く馬鹿の目の前に憎きイルドウンが現れます。イルドウンはアセルスの生首をぶら下げています。状況はまるでわかりませんが、これを好機とみた馬鹿は己の恐怖を押し隠すべくかえって居丈高に語り掛けます。

「ようやく見つけたぞ、イルドウン……！」

「久しいなセアト」

「黙れ！　貴様とそのような挨拶を交わすために俺はこんな星へ来たのではない……！　さっさとアセルスを渡せ！」

「何だ？　お前はまたアセルスを追っていたのか？」

「オルロワージュ様の命は絶対だ……。どんな手を使つても俺はその女を針の城へ連れ戻す。……いいか、イルドウン……！　なぜ、お前がアセルスを殺そうとしているのかは問わん。お前が我々に剣を向け針の城を裏切ったことも、今ならば不問に処してや

ろう。だから、その女の首を俺に寄越せ……！」

「愚かだなセアト」イルドゥンは馬鹿馬鹿しそうに言います。「この首が欲しいのなら奪えばいいだろう。それ以外に何がある」

「愚かなのはお前だ、イルドゥン。針の城の秩序は揺らぎ始めているのだ。次々に黒騎士が反意を抱けばそうもなろう。黒騎士同士が争えばファシナトゥールの勢力は弱まる。お前がアセルスに味方するというのなら滅ぼすしかないが、そうでないのなら話は別だ。理由はわからないが、現在お前はアセルスに敵対しているのだろう。ならばアセルスを渡せ」

「そうだな……確かにこの首はいらんが」

「で、ではイルドゥン……」

「ああ」

「……………」

「どうした、イルドゥン!? さつきとアセルスを渡せ!」

焦った馬鹿が声を上ずらせると、イルドゥンは冷たい眼でこちらを見つめます。軽蔑、あるいは失望の入り混じったその視線は弱り切った馬鹿にはことのほか堪えまじた。

それでもいい。たとえイルドゥンに馬鹿にされようと、見放されようと、アセルスさ

え手に入るのなら、それで……。縫りつくように視線を向けると、イルドゥンはあろうことかこんなことを言い放つのでした。

「——気が変わった。俺は、こいつの側につくことにする」

「なん……だと……？」

とんでもない返答に血相を変える馬鹿に、イルドゥンは肩を竦めます。

「見てわからんのか？　——今、この女は俺のものだ」

「貴様、やはり針の城を裏切るつもりか！」

「裏切つてなどいない。……そもそも、俺は針の城についた覚えはない」

「なに？」

「俺は俺の望むままを生きる。オルロワージュとてそれはわかっている筈だ」

「いくら黒騎士とはいえ、貴様だけで何ができるといふのだ、イルドゥン！　この俺だけではない、黒騎士ウエズンを初めとする何万の兵、そして妖魔の君オルロワージュ様を敵に回して、それでも我を通すつもりか!？」

「わからんな。お前は違うのか。妖魔は生まれ落ちたその瞬間からただ己のみを愛して生きる者。自分以外の他者は全て征服すべき敵に過ぎない……。もともと、俺はオルロワージュを倒すつもりだった。まあいい機会だろう」

「オルロワージュ様を倒すだと？　無礼にもほどがあるぞ！　身の程を知れ！　妖魔の

掟を忘れたか！」

「だからお前は中級妖魔なのだ、セアト……。妖魔の社会に掟など、あつてないようなものだろう。他を魅了する美貌、他を威圧する恐怖、そして何物にも屈しない誇り。三つの要素が妖魔の『格』を決定する。妖魔にとって『格』は絶対であり……。だからこそ、逆説的にこうも言える。妖魔にとって『掟』とは破るものだ。妖魔にとって『格』とは無意味なものだ。掟にも格にも屈することなく……。ただ己のみを誇るからこそ、俺たちは妖魔なのだ」

「な……」

「お前は最初の一手から誤っている。この女が欲しいのなら戦って奪え。たったそれだけのことだろう」

「黙れ……。貴様に何がわかるというのだ!? 俺は黒騎士として己の責務を果たす。風に流されるまま空を漂う種のようにふらふらと生き場所を変える貴様とは違うのだ。好き勝手やるために屁理屈をこねるだけの貴様には、俺の誇りはわかるまい！」

「勘違いしているなセアト。別に俺はお前の誇りは否定しない。アセルスを渡せと言ったのが理解できないだけだ。欲しいのなら奪え」

「だから、それは……。！」

「お前はアセルスに負けた。どんな理由があるにせよこの半妖に敗北したのだ」

「ぐ……」

「何故戦いを挑まなかった。臆したか、セアト？　アセルスに負け、この俺と戦うのが怖ろしくなったのか？」

「舐めるな……！　貴様と俺とは同じ黒騎士。立場の上では同格の筈だ。この俺が貴様を恐れるなど……！」

「だが格では劣る。針の城の黒騎士……中級妖魔はお前だけだ。何故だかわかるか、セアト。お前が半端者だからだ。お前が所詮は人間から転化した妖魔に過ぎず……妖魔らしくもなく努力を重ね、己の弱さを隠すために従騎士を増やし、口では妖魔社会の秩序を謳いながらその実お前自身は妖魔の生き方に馴染めていないからだ」

「だ……黙れ黙れ黙れ！　俺は強くなったのだ！　俺が黒騎士となったのは、オルコワージュ様がこの俺の力を認めてくださったからだ！　俺は……貴様を怖れたりはない。忘れたか、イルドウン。貴様の友、ラストバンですらもこの俺に敗れたことを。剣を抜け、イルドウン！」

「ああ、それでいい。最初からそうしろ。妖魔の『格』を超えてかかってこい、セアト。お前が俺に負けるのはお前が中級だからではない。お前が弱いからだ。お前の弱さを笑ってやる」

馬鹿は勢い込んで剣を抜きました。何がイルドウンだ。強がりを口にするだけなら

だれにでもできる。現実を見ようともせず自分は最強などと吠え続ける愚か者になどこの俺が負けるはずがない。そうだ。勝てば良い。イルドウンに勝ちさえすれば、オルロワージュ様もこの俺の強さを認めざるをえまい。ああ、俺は勝つ。何としてでも勝つてやる。

奥歯を噛みしめ、目を吊り上げ、決死の覚悟で立ち向かい――

――1分と、12秒で、馬鹿は負けました。

両足と左腕を失い、まともに身動きもとれない姿となつた馬鹿は、近づいてくるイルドウンを睨みつけます。たとえ敗れたにせよ、しかし自分は力を尽くして戦つたのだ。何も恥じることはない。せめて堂々と死を迎えよう――そう信じて、血だらけの顔を懸命に引き締め、淡々と歩み寄るイルドウンを見つめます。

けれども、何も恥じることはない、そう信じた筈の心は、しかしイルドウンの足音が響くたびに弱々しく震えてしまうのでした。ああ、自分は死ぬのだ――何も残さず、ただ無為のまま死んで行くのだ――。そう思うと、やはりどうしようもなくこみ上げてくるのは、恐怖、でありました。

どれだけの時を生きようが、人であることを捨てようとも、死ぬことは怖い。自分が消えてなくなってしまうことは怖いのです。

「い、いやだ……」

誇り高くありたいと願う馬鹿の心とは裏腹に、口をつけて出たのはそんな言葉でした。

「嫌だ……死にたくない……!」

ぼろぼろと涙さえ零して、いつしか馬鹿は懇願していました。お願いだから見逃してくれ。俺が悪かった。もう二度とアセルスには手を出さない。ゆるしてくれ。たすけてくれ。恥も外聞もなく口にするその言葉その惨めさにひどく傷つきながら、それでも、死にたくない、馬鹿は死にたくないと願うのでした。けれども心のどこかで馬鹿は、こんなことをどこかで見たことがある、どうせこんなことになるのだと自分は思っていた、とも考えます。ブラツククロスの基地で、哀れにも命乞いをしたシユウザーの姿が脳裏を掠めました。殺すなら殺せ、と、そう開き直ることができたならどんなにか楽でしょう。でも馬鹿にはそんなことできやしないのです。なぜと言って、だって死ぬことは恐ろしいし、たとえどんなことがあったとしても生きていたいと思うからです。自尊心をかなぐり捨ててでも、長年の望みを自ら踏みにじることになったとしても。

「許してくれ! イルドウン! 何もかもが俺のせいだ! この通りだ! どうか俺を見逃してくれ! 死にたくない! 俺は死にたくないんだ!」

必死に頼み込むと、イルドウンはうんざりしたように呟きました。

「見苦しい妖魔だな」

そうして、イルドゥンは小さなため息をつく、「どうしようもない」と吐き捨て、立ち去っていきます。

「……ま、」

待つてくれ。そう言いかけて、馬鹿は口を嚙みます。何を言うつもりだったのでしょうか。やっぱり殺してくれ、とでも言うつもりだったのでしょうか。そんなのは嫌です。だつてせっかく助かったのですから。馬鹿は九死に一生を遂げたのです。奇跡的な生還を果たしたのです。これは僥倖なのです。だから、

「あ、ああ……ああああああああ……」

きつとこんな風に呻き声を上げることはおかしなことなのでしょう。馬鹿にだつて理由なぞわかりはしません。けれども、もしかしたら馬鹿は美しく死ぬ最大の好機を逃してしまったのかもしれない。戦士として黒騎士として在る最後のチャンスを手放してしまったのかもしれない。だつて最後にイルドゥンが馬鹿に与えたあの視線は道端のゴミでも見るかのような視線でした。イルドゥンが馬鹿を見逃したのも、もはや馬鹿が相手にする価値すらないと判断したからなのかもしれない。

馬鹿は己の馬鹿を悔いました。そしてその一方で、助かったことに心の底から安堵してもいるのです。

馬鹿は肉体的にも精神的にもすつかりくたびれてしまいました。かといって、この惨めな気持ちでは従騎士たちを呼ぶ気にはなれません。馬鹿はとぼとぼとその場を後にします。みじめつたらしく涙を零して、しかし針の城へ帰るというわけにもいかず、どこに行く当てもないままに彷徨いました。馬鹿はボ口を離れます。従騎士たちに会うのが何故かとても怖くなりました。馬鹿は地平線の果て、この世のどこでもない場所へと、静かに消えていきました。

気が付くと——馬鹿は深い森の中にいました。誰とも会いたくはありませんでしたから、とにかく人目を避けようとしても考えたのかもしれない。

そこはファシナトウールの果てに位置する、黒宇森と呼ばれる場所でした。鬱蒼と茂る深い森を抜けて馬鹿は覚束ない足取りで進みます。

森にはちょうど雨季が訪れており、激しい雨が木の葉を振るわせます。水滴は疲れ切った馬鹿の肩を背中を激しく打ち据え、泥に汚れた髪の毛が青白い額からぬるりと垂れ下がりました。

森をしばらく行くと、木陰にゴサルスが腰かけているのが見えました。根つこの町で工房を営む、緑色の体をした醜い妖魔。馬鹿は咄嗟に体を隠し、じつと動きを止めます。こんな姿を見られたくはありませんでした。早くどこかへ行つてくれ——。ただそれ

だけを一心に願っていると、忌々しいことにゴサルスは「セアト様」と声をかけ、ゆっくりと歩み寄ってきてきます。

「セアト様」

「……なんだ。ゴサルス」

「その姿……やはり、イルドウン様に敗れたというのは本当だったのですね」

「……だったたら、何だ。俺を笑いに来たのか……?」

「いいえ、私は笑いません」

ゴサルスは大切そうに抱えていた剣を馬鹿へと差し出しました。

「これは『幻魔』と言います。どうかこの剣をお持ちください」

いつもであれば、きつと馬鹿は素直に受け取ったことでしょう。「なかなかいい剣だ」などと適当に褒め、ゴサルスにそれなりの褒美を与えていたことでしょう。けれども、今の馬鹿はそんな気にはなれません。むしろゴサルスの唐突な贈り物に苛立ちさえ覚えます。

「相手が……間違っているぞ……。贈るのならばほかにもっと良い相手がいる筈だ。お前が上級妖魔に認められたいのなら、俺ではなく……」

「いいえ。この剣はあなたのものです。私がそう打ち直しました」

淡々と答えるゴサルスに、馬鹿はかっとなって声を荒げました。

「同情なぞ、いらん！　そんなものを望んではいない！　俺のことはもう放っておけ！」
「同情などではございません。セアト様。作り手が使い手に想いを託すのに、理由など要りません」

「俺はイルドウンに敗れた。負けたのだ！　そんな妖魔に何の価値がある！」

「かつて、頭のおかしい女に問われたことがあります。この剣で妖魔の君は斬れるのかと。そのとき私は答えませんでした。今ならはつきりと言えます。この剣ならば——
“幻魔”ならばこの世のどんなものであろうとも切り裂くことができる。どうか、この剣をお持ちください。セアト様」

「うるさい……馬鹿が……」

苦し気に頭をかきむしり、馬鹿は呻きます。

「何故、わからんのだ？　お前は俺を蔑むべきだ。敗北者に妖魔が助けを与えるなど、あつてはならぬことだろう。妖魔ならば蹴落とせ。俺を蔑み、罵り、ただ己だけを信じ生きていくべきだろう……！」

「できません。針の城に住む貴族の中でも、あなたと白薔薇姫だけは私をまともに扱ってくれました。私の細工物を受け取り、認めてくれました。だから、私はこの剣をあなたに託したいのです」

「馬鹿野郎……。だからお前は下級妖魔なのだ……。だからお前は……。俺たちは……」

!

「セアト様……」

顔を背け立ち去って行く馬鹿を見つめ、ゴサルスは悲しそうに顔を歪めます。

「それでも、セアト様。この幻魔は……あなたのものです……」

そう言うと、ゴサルスもまた幻魔をその場に置き、その場を去っていききました。

ゴサルスと出会ったことで、馬鹿はより惨めな気持ちになりました。イルドウンに軽蔑されることよりも、自分よりも下だと思っていたゴサルスに情けをかけられたことの方が何倍も苦しく思えました。羞恥心に体がかつと熱くなり、けれどもその熱を持続させるだけの意思はなく、疲労と屈辱に力を見る間に萎えていきます。

雨はなおも降り続けます。強張った手足を人形のようにぎこちなく動かして、馬鹿は歩き続けました。

どこからか笑い声が聞こえてきました。はじめは気のせいかと思いましたが、薄気味の悪い笑い声は次第に大きくなっていきます。歩いてても歩いてても笑い声は消えませんが、ひたひたとしつこくついてきます。どこからか石が投げられました。もちろん避けようとはしましたが、ぬかるんだ地面に足は滑らせた馬鹿の額に石が鈍い音を立ててぶつかります。鮮血と共に額は割れ、痛みに馬鹿は唸ります。

「誰だ」

そう叫ぶと笑い声はなおも大きくなり、森全体に響き渡ります。笑い声は一つではありませんでした。森に潜む何百という悪意あるものたちが馬鹿を取り囲み、嘲笑していました。

また、石が投げられます。今度はなんとか避けることができました。しかし一つまた一つと石は増えていき、投げつけられた無数の石に馬鹿の傷が増えていきます。横っ腹に思い切りぶちあたった石に馬鹿は身をよじりました。

「何だ。この俺を誰だと思っているのだ！」

怒鳴りつけると、森の奥から狒々に似た一匹の妖魔が現れました。どこかで見たことがある妖魔でしたが、混乱した頭ではよく思い出すことができません。

「もちろん、わかっているとも。セアト君」

狒々は余裕たっぷりに言います。

「この仕打ち……貴様ら、この俺が黒騎士であるとわかってやっているのだろうか」

「黒騎士？　馬鹿を言っちゃあいけない。私たちは妖魔としての義務を果たしているだけ」

「義務……だと……？」

「妖魔としての誇りを無くしたものを。醜く愚かとなり果てたもの。そう…… 邪妖狩り」
「は我ら妖魔が果たすべき義務だ。自分の姿を見てごらん」

狒々の言葉に馬鹿は己の手のひらをじつと眺めます。するとどうでしょう、馬鹿の体はいまにも消えてしまいそうなほどに弱々しく、透けているのです。

「これは……。そんな、嘘だ……。！　お、俺は……。！」

「嘘じゃあない。君はもう黒騎士ではないんだよ。妖魔としての“格”を無くした、見るに能わぬ者。ただの邪妖に過ぎない」

「ち、違う……。！　俺はセアトだ……。黒騎士セアトだ！」

一匹、また一匹と森の奥から妖魔たちは現れました。そのどれもが獣に近い妖魔です。美しさの欠片もない下級の妖魔、かつて黒騎士であった馬鹿が有象無象のものとして扱った下級妖魔たちが——いまや残酷な狩人として馬鹿を包囲しています。かつて黒騎士セアトが下らぬ妖魔として見向きもなかった妖魔、また黒宇森での一軒でウロネブリやセアトにてひどく痛めつけられた妖魔が、かつての屈辱を果たすべく憎しみと嘲りに満ちた目でもって馬鹿をとらえます。

「時は、来た。時は流れた。老いを知らぬ妖魔にも等しく時は降りかかり、いかなる妖魔の心もいつかは滅びさっていく。それが今はお前の番というだけのこと」

「違う……。俺は何も失ってはいない。俺は、何も、諦めてはいない……。！」

「言葉では何とでも言えるさ。だが心は正直だ。誇りを失った妖魔はその格を落とす。お前の姿がその証明だ」

「違う、違う、違う……！」

「違わない。お前はもうここで終わりだ」

「いやだ……お前らなんか、この俺が……」

醜い妖魔に体を押さえつけられた馬鹿は泥の中に顔を押し付けられました。「ぶ、ぐふ」汚らしい音を立て、口元で泡が鳴ります。息苦しさに必死になって顔を上げると、誰かに思い切り蹴倒されて再び泥の中へと戻されました。苦々しい土の味が口いっぱいに広がりました。悔しい、と思いました。こんな奴らに。虫けらにも等しい妖魔に。のしかかる妖魔達を振り払おうと懸命に体をよじりましたが、重たい妖魔の体はびくともしませんでした。格を落とした馬鹿の体は、まったくの無力になりました。

狒々の姿をした妖魔が無造作に馬鹿の肩へと噛り付きました。そのまま肉を食いちぎり、くちやくちやくと汚らしく咀嚼したかと思えば「まずい」と言って吐き捨てます。わ、あ、あ、と馬鹿は叫んだつもりでしたがそれはのどの奥で引き攣った音を立てるだけで言葉にはなりませんでした。また別の誰かが馬鹿の左手に噛みつきました。ペキりぼきりと軽やかな音を立てて、暖かな妖魔の口腔で指の骨が砕けます。髪の毛を乱暴に毟られます。目玉を刮り貫かれます。わあ、わああ。痛みや悲しみに叫ぼうとして、しかし言葉にはなりません。誰かが馬鹿の服を脱がせました。げらげらと笑い声があります。やめろ。やめてください。悲鳴は懇願に変わります。誰かが遊び半分に馬

鹿の首を絞めました。気の遠くなるその一瞬にぱっと手が離されて慌てて息をしようとしたその途端、また首が絞められます。ゆるしてください。どうか。おねがいだから。

それでも、死にたくはありませんでした。

命乞いをしました。地べたに頭を擦り付けて、どうか見逃してくださいと謝りました。生きていてごめんなさいと言いました。けれども、誰も馬鹿を許してはくれませんでした。泣き叫ぶ馬鹿の体を妖魔たちは抱え上げ、高いところへ放り投げては何度も落として遊びました。57回落とされて、とうとう馬鹿は動かなくなりました。

ああ、死ぬのだ、と馬鹿は思いました。ありったけの呪詛を込めて妖魔達を、この世を呪いました。すでに涙は枯れ果て、流すこともままなりませんので、その代わりに瞳からは滔々と血を流します。

かつて。

一人のちっぽけな人間が人間を憎み、この世を呪いました。その馬鹿者は妖魔となり、今またこうして死の淵に立ちます。

時は流れました。

大地に転がった馬鹿の懐から、ぼろり、と何かが零れます。馬鹿は目を見開きます。

とても良い香りがしました。香しく、馥郁とした何とも言えない匂いです。

それは奪い取ったアセルスの血液でした。

なぜ、馬鹿はそれをすぐに飲んでしまわなかったのでしょうか。力が手に入るといふのなら、イルドウンと戦う前に口にしていけばよかったですのに。

……いまさら、そんな仮定のことを話しても仕方ありませんね。

もしかしたら馬鹿はこう考えたのかもしれませんが。イルドウンと闘うのにイルドウンよりも弱いアセルスの血を飲んでも意味がないと。

あるいは——ただ単に怖かったのかもかもしれません。もしアセルスの、妖魔の君の血を飲んで強くなることが出来なかったら——自分にその資格が無いと知ってしまったら、と、そう考えて。

正解はわかりません。今にも死のうとしてしている馬鹿にとつては、何が正しいことなのかもう考える時間はありませんでした。

縫りつくように、馬鹿は血液の入った硝子瓶を銜えます。何度衝撃を加えられても割れることのなかった瓶が、その時だけは不思議なほど容易に割れました。

ひたり、と。粘つくように震える血が馬鹿の舌を舐めます。ずるずると意地汚い音を立てて血を啜り、ぐびぐびと喉が鳴ります。

割れ飛んだ硝子の破片は血を写してぎらぎらと鈍く光りました。

敗北者の意地がするすると血液に溶け、沸々と泡立ちます。

妬み、嫉み、あるいは嫉妬。そして憎悪。力あるものや正義への渴望と怒り。それら全てが混沌の血に溶けていき、馬鹿の胃の腑の奥底で焦げ付いていきます。

オルロワージュは黒騎士セアトをこう評しました。その弱さはオルロワージュのそれとよく似ている、と。

オルロワージュの弱さ。失ったものにそれでも手を伸ばすこと。

魂の向こう側で時計塔の鐘の音が震えます。ぼおん、と深く、幽遠と時を掻き鳴らす鐘の音。その音はこの世の真理を静かに告げます。そう――、

――失ったものは、取り戻さねばならない。

自分は何かを失った。時の流れに奪い去られた物を、己は取り戻さなければならぬ。

時の流れに爪を立て、この世の条理を捻じ曲げろ。

俺は。

「俺は……」

何かを失った。

「何かを、失った……」

だから取り戻さねばならない。

「だから取り戻さねばならない……」

この世に永遠はあるのだと、証明するために……。

「永遠を超えてなお、この俺が生きるために……！」

誰かが馬鹿を笑っています。何かつぶやいているぞ、こいつ。そんな風に笑っています。

でも、もう、今ではそれほど気になりません。

馬鹿の体は見る見るうちに腐り果て、おぞましい匂いと共にぼとぼと肉が落ちていきます。脂の滴る腱が弱々しい鳴き声を上げ、捻じれては千切れ、振れては溶け落ち、降りしきる雨の中、黒宇の森の血と肉と泥の大地に混ざります。馬鹿の体はこれ全て一片の塵芥となつて融解し、無形の泥水へと融解を遂げました。泥が混じり、血に塗れたその液体はどす黒く濁っています。黒く、あまりにも黒く。ちやうど大地にぼつかりと穴が空いたかの如く、光さえも吸い込んでしまうほど。汚れた大地の底に凝った液体はぬるりと隆起し、うねり、やがて再び妖魔セアトの姿を象り始めました。けれども、その姿はもはや元のものとは異なるもの。純然たる漆黒の、虚無を湛える影。

ゆらり、と影が揺れます。蜃気楼のようにその輪郭は霞み、不確かに震えます。

馬鹿は静かに叫びました。

「幻魔よ……！」

そのまま空へと手を伸ばし、現れた剣を掴み取りました。どよめきと共に妖魔達が気色ばみます。慌てて馬鹿から剣を奪おうとしますが、触れようとしたその瞬間に剣ごと馬鹿の体は溶けて消えてしまいます。とぶり、と穏やかな音を立てて、後には静寂を湛えた闇が広がるばかりです。

妖魔の君、オルロワージュが元は影の魔物であつたように——“影”そのものと化した馬鹿は逆に妖魔達を襲い出しました。

しとしとと涼しく濡れる影の姿。影の化身となつたその生き物——人でなく、黒騎士でもないもの——影騎士セアトはこうして生まれました。

己を取り囲み嘲笑つていた妖魔たちをみな殺しにした影騎士セアトは、腹の底で膨れ上がる全能感に酔いしれながらももしかしやがて奇妙な飢餓感に気が付きます。そうだとセアトは思い出します。自分は何かを失つた。だからそれを取り戻さねばならないのだ。……そして、何かを取り戻すためには、力が必要だ。自分には力が要るのだ、と。そのためには——。

妖魔の君、オルロワージュが持つ『影』の姿を宿し、かつてとは比べものにならないほどの絶大な力を入れたセアトは——しかし、それでも馬鹿でありました。

セアトは配下である三体の従騎士を呼びます。どれだけ遠く離れてはいても、呼びかけさえすれば主従関係にある彼女たちには声が届くのです。現れた従騎士たちはセアトの変わり果てた姿を見てたいへん驚きましたが、それでも行方知れずだった主を心配してか喜びの声をあげます。

「セアトくん！」

ウロネブリはセアトの足にしがみ付いて顔をぐりぐりと擦り付けました。

「どこ行つてたのお。心配したんだよ！」

「ああ。済まない」

セアトはウロネブリの頭をぐりぐりとなぜます。するとウロネブリは「へへっ」と嬉しそうに微笑みました。

「本当よ、セアト。てつきりあんたイルドウンにやられたんじやないかって」

「そうだぞ。セアト。それにその姿はどうしたのだ？ 一体、何があつたのだ？」

口早に尋ねてくるアルキオネとハウゲータに、セアトはなお一層確信を深めます。ああ、そうだ。俺には取り戻さねばならないものがある。守らねばならないものがある。「アルキオネ。ハウゲータ。ウロネブリ。……俺は、強くならなければならぬ。だから……」

だからセアトは言いました。

「——お前たちの血を、その命を俺にくれ」

その言葉に、アルキオネは悲しそうに微笑み、ハウゲータは達観したように目を細め、そしてウロネブリは困ったように顔を伏せ、しかしすぐさま頷きました。

「うん。いいよ」

ウロネブリははにかみ、セアトの外套をそつとつまみます。

「ボクはセアトくんが好き。だからセアトくんが望むことはなんでもしてあげる。だってセアトくんがいなかったボクはここにはいないし、とつくの昔に死んでたんだから」
まっすぐにセアトを見つめるウロネブリに、ハウゲータは肩の力をすつと抜いて、やれやれ、とでも言いたげに首を振りました。

「自らの欲望にのみ従うという点では、我ら三騎士の中で最も妖魔らしいのは案外この子なのかもしれないな。……だが、まあ、悪くはない。こんな物語も悪くはないかな。私も構わないよ、セアト。愛するお前がそう望むのなら、この命くらいいつでもくれてやろう」

最後に残ったアルキオネはどこか寂しそうに遠くを見つめながらそつと囁きます。

あれから——。

あなたと出会ってから、本当にいろんなことがあったよね。

あなたたったら、理屈っぽい女をつれてきたり、鼻水垂らした子供を連れてきたりして

さ。でも、あなたと一番最初に出会ったのは、やっぱりあたしなのよね。

あたしがあなたを選んだの。あなたが、あたしを選んだの。

本当のことを言えば、あたしはその特別にあなたのことが好きでもなんでもなかった。それはそうよね。だって初対面だったんだから。

でもあなたと出会って、針の城に仕えることになってさ。いろんな敵と闘って、人間の子供を守ったりしてさ。

いろんなことがあったね。何十年、何百年、何千年と時が過ぎて。

本当にさ。情って奴が湧くものよね。なんだかんだでさ。

あたしは、あなたのことが好きになった。

あたしはあなたのことが好きだとそう思いながら、もしかしたらそれは、あなたが人間らしいからなのかもしれないと思ってた。

あたしはずっとずっと、心の中で妖魔になり切れないあなたのことをほんの少しだけ馬鹿にしたのかも知れない。

だから、きつとこれでいいんだわ。あなたは私たちの力を吸って、誰よりも強くなるべきよ。

セアト。いつかあたしたち、約束したよね。

あなたが望むなら、いくらでもこの血をあげる。

だから、強くなって。セアト。そうしてあたしを、支配者の女にして。

セアトはアルキオネをきつく抱きしめ、そしてその首に牙を打ち立てました。それと同時にセアトの足元からすると立ち上った影は瞬く間に周囲を、セアトと三体の従騎士たちを飲み込み、後には何も残りませんでした。

第二十八幕 春が巡る

ようやく目を覚ましたアセルスは、きよとんとした表情であたりを見回すと、隣に腰かけていたイルドウンに気づいて困惑したように眉を寄せた。

「私の勝ち……ということではないのかな、これは？」

「何がだ」

仏頂面で答えるイルドウン。

「だからさ」アセルスはのんびりと尋ねた。「力を貸してくれ、と私は言つて……それからのことはあんまりよく覚えていないけど、こうして生きてるってことは、あなたの魅了に成功したつてことではないのかな？」

「馬鹿か、お前は」

うんざりしたように吐き捨てるイルドウンにアセルスは首を傾げる。

「違うの？」

「俺がお前ごときに魅了されるわけがあるまい」

「でも、ほら、ちゃんと吸血もしたじゃない」

「吸血？ ああ……確かに血を舐めはしたな。だがあの程度で格下に魅了なぞされるも

のか」

「じゃあ、なんで私は生きているの？」

「……」

「あ……そ、そうか。もしかして、そういうことなの……？ 困ったな……」

何やら照れたように頭を掻くアセルスはイルドゥンは胡乱気な視線を向ける。

「お前が何を考えたのかは知らないが、確実に間違っている」

「いや、だからさ。魅了できていないのにこうして生かされているってことは、魅了するまでもなくあなたが私のことを」

「違う」

イルドゥンはアセルスの言葉を冷たく遮った。するとアセルスは不意に真顔になり、
「——なら、どうして私は生きているの」と穏やかにイルドゥンを見つめる。

「そうだな」

答え、しかしイルドゥンは面倒くさそうにため息をつく。

「お前を生かしたわけじゃない。……ただ、まだお前に尋ねることがあった。それだけだ。返答によってはお前を殺す」

「懲りないね……」

呆れたように肩をすくめてアセルスは再び倒れ込む。

「それで？ あなたの聞きたいことっていうのはいったいなんなのかな」

「フアシナトウールに帰り、白薔薇姫を取り戻す……お前はそう言ったが、あてはあるのか」

「あて？」

「お前にオルロワージュが倒せるのか。……それとも、妖魔の君を前にしてお前はあの甘ったれた戯言をほざくつもりでいるのか」

「……」

「答えろ、アセルス」

「……別に、あの人に勝てるだなんて思いあがっているわけじゃあないよ。そんな力はない。だいいち、そんなことをするつもりはないんだ。私はオルロワージュを滅ぼしたいわけじゃない。あの人のところから白薔薇姫を連れだしたのは私だもの。私に正義はないんだよ。……でも、それでも彼女を闇の迷宮に閉じ込めておくのは違うって思うし、なんとかして出してあげたいと思う。……でも、だからといって、話せば分かり合えると言って、あの人のところへ行って、そんなことは間違っているから出してあげてくださいと言ったって、そうそううまくは行かないんだらうなっということくらいは、私にもわかるよ」

「なら、お前は どうする気だ」

「さあ……どうしようね。あの人の悩みや苦しみは気の遠くなるほど長い年月を重ねてできたものでしょう。そんなあの人のところへたかだか三十年かそこら生きただけの私がいしゃり出て言つてさ、猪口才な説教をかましてめでたしめでたし、つて、そんな話でもないでしょう？ あなたなら、どうする？ 私はあのひとのことをそんなには知らないんだ。オルロワージュのことを教えてよ」

「俺も大して知らん。興味もないのでな。……だが、まあ、そうだな。強いて言えば、奴は『寂しい』と言つていた」

「寂しい？ オルロワージュが？」

「ああ、そうだ。何百年も生きていけば飽きが来る。来る日も来る日も同じようなことを繰り返していれば、その内に寂しいと思う日もやつて来る……、そんなことを言つていた」

「オルロワージュが……。そういえば、あの人は、『手に入れる』ということの意味がわからなくなつたと言つていた。手に入れた筈のものは、手に入れたいと思つた時のものとは決定的に何かが違つてしまつてゐるつて。……そうか。あのひとはやつぱり、何かを求めているのかな。手に入れたかつたはずの何か。ずっとずっと昔のうちに無くしてしまつた何か。……そういうものをさ」

「何か……か。そういえば……ある女がこんなことを言つていたな。オルロワージュは

『永遠』を求めていると」

「永遠……て、具体的には？」

「俺が知るか」

「……ごめん。まあそうだよね」

「オルロワージュが求める永遠が一体何なのか……そんなことはわからん。永遠に変わらぬもの。永遠に失われることのないもの……」

「……そんなもの、本当にあるのかな」

「さあな。あるといえばあるらしいが」

「ええ？ どこにあるの？」

「そんなことは知らん。だがこの世に永遠は存在する、と言いつつた奴はいたな」

「誰？」

尋ねると、イルドゥンは眉間に皺を寄せて不愉快そうに顔を歪めた。その名を口にすただけでも煩わしいとも言いたげに。

「——奴の名は零姫という」



いいか、とイルドゥンは言った。零姫という女はとにかく口の悪い妖魔だ。おそろしく性格が悪く、また性根が腐っている。お前がオルロワージュの話聞き出したというのなら案内してやらんでもないが、まあせいぜい覚悟しておくのだな。

あのイルドゥンがそう言うのだから、それはもう本当に性格が悪いのだろう、とアセルスは思った。

『……ドウヴァン、というその星は俗に気狂いたちの住みかとして知られている。ドウヴァンの住民たちはみな世捨て人であり放浪者である。彼らは冒険者であり魔術師であり、また審判者であり道化師である。彼らは法を持たず、道徳を持たない。彼らが信じているのはただ神のみである。しかしそれは唯一神ではないし多神教の神々とも違う。彼らが信じる神とは掌の中の札であり、賽である。神は乱数によつて記述される。星間船発着場を出て、ドウヴァンへと一步踏み出せばその途端、世界は神秘に象られていく。ポータブル・ナビや小型デバイスなどで目的地を探そうなどという魂胆であるものは、どんな方法をとるにせよ決してドウヴァンには辿り着けない。そこに住む者たちは骨牌を投げて行き先を決め、ダイスを振つて生き方を選ぶのだから。

あなたがもし『何か』を知りたいと思うのなら駅を出てぐるりあたりを見回せば良い。そこかしこにぐるりと巡る色とりどりの占い屋が見える筈だ。遊牧民めいた原色のテントに蛇腹楽器を切り分けたような洋館、あるいはコーヒーカップや酒樽を割り貫いた

形の家々。館ばかりではない。そこらを歩く人という人はみな占い師だ。右を向けば三針羅盤を構えた双子の道士がいて左を向けば笹竹を鳴らす易者がいてさてどちらへ行くかと首を捻ればふよふよと飛んできた魚型のモンスターが『骨占いはいかが?』とこちらの瞳を覗き込んでくる。

あなたはどこへ行っても良い。行きたいところへいけばいい。正解などどこにもない。この星で信頼性や信憑性を求めるのは見当違いもいいところだ。たとえば植物占いを頼み、その答えが『青紫の芳香、スミレの香り』と言われたとする。あなたは『なるほど。つまり私は王になる男だということですね』と一人ほくそ笑んで邪悪な儀式の結構日を少し早めてみてもいいし、あるいは『やはりそうだったのか。しかし、だとしても私はこの宝物をあの場合へ届けなくては』と呟いてほしい単行本14巻ほどになるストーリーのオープニングを演じ始めても構わない。しかし、『どういう意味ですか?』と尋ねてはいけない。その言葉を口にしたその瞬間にドウヴァンの魔法は解け、その星は蜃気楼となって消えてしまう。

忘れてはいけない。あなたは結末を見届けに来たのではない。物語を語るために来たのだ。

魔法は語るものではない。魔法は物語を語るためのツールに過ぎない。いにしえの詩人も言うではないか。女の喉の狭窄部こそ気紛れな必然と組織だった神秘とが始ま

る境目だと。

さあ、今こそ。神秘と神秘の渦巻くドウヴァンに身を委ね、謎めく航海を始めたまえ』
 ……………星間ガイドブック142925047年度版別冊ドウヴァンの歩き方より抜
 粋

「アルカナ・パレスへようこそ。ご用件は？」

彼女は開口一番そう言った。血の気のない青白い顔をしたアルカナ・パレスの女主人は先刻から表情を何一つ変えることなく手元の札を混ぜている。

「この星に神社があると聞いてきたんですが、どちらにあるのか教えていただけますか？」

アセルスは興味深そうにあたりを見回しながら尋ねた。周囲には様々な細密画が飾られており、不思議な文様が幾重にも描かれている。

「秘術の資質を求めるなら4つのカードを集めなさい。盾・金・杯・剣。この四つのカードを集めた時、あなたは自ずと秘術の素質を手に行っているでしょう」

「え？ ええと…………？」

アセルスが求めていたのは占いではなくただの道案内だったのだが、女主人の返答はそのどちらとも異なっていた。

「あの、私は別に術を覚えたいというわけではなくて」

「あなたにカードを渡しませう。四つのカード全てがアルカナ・タローへと変わるとき、あなたの運命に神秘が降り注ぎます」

「だから」

「秘^{アル・アルカ・アルカナム}して秘すべき神秘の法。四つの神秘を束ね、愚者から世界へと寓意を旅する時、あな

たは大いなる理を手にするでしょう。それはArcanaTangleです」

「はあ……」

長々としゃべり続ける女主人の前に、半目のアセルスはため息をついた。

「人の話を聞かない……あなたは妖魔ですね？」

「いいえ、違います」

即答した女主人にアセルスはややたじろぐ。

「普通に会話できるのなら最初からそうしてくださいよ……」

「普通に会話していたら面白くない。そうは思いませんか」

女主人は真顔で答えた。

「別に面白さを求めてここへ来たわけではないので」

「では求めましょう。ここはドウヴァンです」

「あなた……本当に妖魔じゃないんですか？」

「ですから、違います。もし私が妖魔なら、あなたの血には逆らえずきつとこんな会話はできないでしょう」

さらりと saying のけた女主人にアセルスは警戒に表情を変える。

「……なぜ、私の血のことを？」

「なぜだと思えますか」

これまた表情を変えずに首だけを傾げる女主人をじろじろと見回した結果、信じがたい、という表情のままアセルスは口を開いた。

「占い師……だから、ですか？」

「占い師だからです」

やはり即答だった。

「じゃあ、もう……それでいいです。針の城の追っ手ではないんですよね」

「ええ」

「……そうですか。神社へ行くにはどちらへいけばいいですか？」

「あなたが手に入れなければいけないのは四つのカードです。金とは技巧であり取引です。贈り物であり完全な満足です。剣とは条件付きの調和でありあるいは力による勝利、正義であり激怒であり悲しみです。杯は喜びを意味し、過去を振り返ること、またその幻想を示します。盾は庇護するもの、多すぎる財産、出発と交易を結ぶカードです」

「そろそろ腹が立ってきたんですが」

「カードとは」

女主人は穏やかに微笑む。

「この世界を読み解く翻訳機のようなもの。けれども異なる言語が必ずしも一対一対応ではないように、翻訳する人間によって文章は姿を変えらるもの。あなたは自分の好きなように札を切ることができます。あなたは剣で闘うことも杯を交わすこともできます。しかし私たちはただカードをめくり、そうして得た天啓を繋いで物語を語るしもべに過ぎません」

「……帰りますね」

「どうかカードはそのままお持ちになって下さい。あなたの幸運を祈ります」
「……どうも」

渋い顔をしてアセルスはアルカナパレスを辞した。扉を閉めたそのあとで深くため息をつき、「なんだこの星は」と盛大に呻く。どこもかしこも意味ありげなことを囁く占い師ばかりだ。

零姫はドウヴァンにいる、と教えてくれたのはイルドウンだったが、イルドウン自身はついて来なかった。『会いたくない』というのがその理由だったが、しかし零姫はどれほど性格が悪いのだろう。この星の住人といい零姫の評といい気の重くなることばか

りで憂鬱なアセルスは足取りも重くとぼとぼと神社を捜し歩いた。しかし会う人間はといえばこちらを揶揄うような迂遠な物言いをするものばかりで何の手掛かりにもなりはせず、やがて疲れ切ったアセルスは静寂を求めてひとけのない場所へと向かう。

ドウヴァンの外れには人の往来を頑なに拒むような長い長い階段があつた。針葉樹の生い茂る山をその頂まで石造りの階段が貫いており、その途中には漆塗りの木で組まれた門がいくつも並んでいる。

ようやく階段を上り終えたアセルスは振り向き、来た道を振り向いた。眼下に遙か遠く、ドウヴァンの駅が豆粒ほどに見える。見晴らす景色の清々しさにやつと満足げな息をついて顔を上げると、そこにもやはり朱木の門が待ち構えている。門をくぐり足を進めるとそこは石畳の庭だ。庭の奥には格子状の蓋がついた木箱があり、その横で小さな女の子が巫女服で竹箒で掃いている。

なんだか変なところへ来てしまった、とアセルスは思ったが、そこでようやく記憶が蘇ってきた。来る途中で何度も門を潜ったがよくよく考えてみればあれは烈人から聞いたことがある『鳥居』というもののように思えるし、とすればあの木箱は賽銭箱であり、この場所こそが自分の探していた神社であるのかもしれない。

「アーンには」

と試しにアセルスは庭掃除をしている子供に話しかけてみた。振り返った子供はと

いえば桜花の唇に黒絹の髪をして、澄み切った瞳に蠱惑的な光を宿している。人形のように整った顔をした少女はしかし振り返るや否や老婆のようにふてぶてしく顔を歪めた。

「何じや。嫌なおいのする娘じやな」

「……私は神社に行きたいのだけれど、ここが神社でいいのかな？ 教えてちょうだい。

お嬢さん」

いきなりの言われように怯みながら尋ねると、少女は「いかにも」と短く答え、後は見向きもしない。

「あの」

「ここは神を祀る神聖な場所じや。用がないのならはよう帰れ」

取り付く島もない少女の態度には閉口したが、幼い少女と年よりじみたその口調から生まれるギャップにはえも知れぬ魅力があり、興味をひかれたアセルスはなおも言葉を重ねる。

「あの門は鳥居、でいいの？ 私は鳥居というのは一つの神社に一つだけだと思っ
ただけで、どうしてあんなにたくさんあるの？」

「……あれは結界じや。余計なものがこの地へと寄り付かんようにするためのな」
「余計なもの？」

「さて、な。どのみちそなたには関係のないことじゃ。妾はいま忙しい。邪魔をするでない」

「ごめんなさい。でも最後に一つだけ。……零姫、という妖魔がここにいると聞いたんだけど、知らない?」

その言葉に少女はふと箒の動きを止めた。

「……そなた、名は?」

「アセルス」

「ふむ……」

しみじみと、呟いて少女は静かに瞳を閉じた。

「時は、流れたか……。赤かぶには会ったのか?」

「赤カブ? 闇の迷宮にいたあいつのこと?」

「……そうか」少女はむなしそうに微笑んだ。「いや……今の言葉は忘れてよい」

「え?」

「そなたがなぜ会いに来たのかは知らぬが正直に答えよう。……いかに、妾がその零

姫じゃ」

「あなたが!」

アセルスは驚いて少女の全身を今一度眺める。

「でも、その姿は」

「聞いておらぬのか？ 針の城から逃げるため、妾は幾度となく転生を繰り返す身。時が経つ程に魔力は増し、その力ゆえオルロワージュに居場所を悟られてしまう。そのたびに妾は転生し力を失わなくてはならぬのじゃ」

「そうだったんですか……」

「この居場所は誰から聞いた？」

「イルドゥンからです。安心してください。このことはファシナトゥールには伝えていません」

「イルドゥンじゃと？ あの偏屈者が協力するとはもう……」

零姫は感慨深そうに考え込んでいたが、やがて『まあ、あの馬鹿のことはどうでも良いわ』と呟いて顔を上げた。

「それであせるすよ。そなたはなぜ、妾に会いに来た？ そなたたちが針の城を逃げ出し、闇の迷宮に白薔薇姫が囚われたことは妾の耳にも届いておる。お前がこのような運命に巻き込まれたのには妾にも少しばかり責任がある。どのような形で決着をつけるのかはそなたの問題じゃが、妾も力を貸そう」

「……ありがとうございます。私はあなたに、零姫様にオルロワージュのことを教えてもらうために来ました。あなたは最初の寵姫であるとイルドゥンから聞きました。最

も長い時をオルロワージュと過ごした女性だと。……あの人はなぜ、あんな風になつてしまつたんでしよう。あの人の過去に一体なにがあつたんですか？　そしてなぜ、あなたはオルロワージュの元を離れたんですか？」

静かに尋ねたアセルスに、零姫は遠い眼をして口を噤んだ。

やつは。

オルロワージュは出会つた時から何かを探し求めていた。それが何なのかは妾にもわからん。妾と出会う前のオルロワージュに何があつたのか、それすらもあやつは忘れてしまつたのじやろう。

長い長い時を生きて、妖魔の君オルロワージュは多くのものを手に入れ、支配した。フアシナトウルを、多くの妖魔達を、そして九十九の寵姫たちを。

けれども妾はこう思う。たくさんのものを手に入れながら、しかしそれ以上にあやつは失いすぎたのだと。針の城に眠るのは九十九の寵姫。——じゃが、その誰とも違う乙女とオルロワージュは出会つた筈で、彼女たちは寵姫となることなく死んでいった。

いつかオルロワージュは妾に言つた。百万回の春を愛せば、いつか妾はまた来る春を憎むようになる、と。その言葉の意味が、かつての妾にはわからなんだ。今となつても、それが本当に理解できておるかはわからぬ。

しだいにあやつのが減んでいくのがわかった。何一つ心の動くことのない生き物は、もはや機械と変わらぬ。——しよせん、オルロワージュも並の男と変わらぬ。あやつは永遠に負けた。時の流れの波濤に心を飲み込まれてしまった。

何かを探し求めているのは、過去に何かを失ったからじゃ。しかしあやつは自分が何を失ったのかも忘れたまま、盲目の旅路を朦朧と続けている。

馬鹿馬鹿しい、と思つたよ。そんな男に抱かれていたことが途端に忌々しく思えてきた。あやつが求めているのは畢竟、妾ではない。『永遠』などという夢物語を追つて干乾びていく男に付き合うには、妾はちと美しすぎる。

それゆえ、あの夜——妾はオルロワージュを吸血した。虜化を破つたその途端、多くのものが見えてきたよ。自由意思を奪われていた哀れな人形としての自分。また永遠という虚しい闘争を繰り広げるオルロワージュの愚かさ。

妾はオルロワージュを傷つけ、そして叱咤した。永遠と闘うのならばそれなりの気概を持って、と。強くあれ、と妾は言った。奴は応えなかった。じゃから妾はあやつでなく、あやつがの寵姫たちを否定することにした。こんな愚かな男に従う女もまた、救いようなない愚か者じゃと。……ふ、ふ、あやつめ、途端に気色ばみ、斬りかかつてきよつたわ。ほんに、女のことしか考えられぬ軟弱な男のやることよ。

それから……次に妾はこう言った。弱くてもいいではないか、と。強くあることが出

来ないのなら、自らの弱さを認め妥協して生きるしかないか、と。それはせめてもの慰めのつもりじゃったが、あやつめ、せっかくの餞別さえ受け入れぬ。性懲りもなく妾を捕らえると宣言して、ハ、妖魔の君オルロワージュといえども結局は凡百の男と変わらぬ。

のう、あせるすよ。妾も長いこと追い掛け回され、うんざりしておるのじゃ。そなたが望むならあやつを滅ぼすのに力を貸してやらんでもないぞ。

どこかぼんやりと、熱に浮かされたようにして零姫は語った。

口を挟まずに聞いていたアセルスは、ゆっくりと首を傾げて言う。

「——でも、それは嘘ですよね」

「ほう？」と零姫は口元を緩める。「どうしてそう思う？」

「この世に永遠は存在する。そう、あなたは言ったはずです。あなたは永遠の在り処を知っている。あなたはかつて、確かに存在する『永遠』というものを感じたことがあったんです。教えてください。零姫様。いつまでもいつまでも失った過去に縛られたオルロワージュを見て並の男と変わらぬとあなたは評しました。それであなたは、そんなオルロワージュのことをどう思ったんですか？」

「は……」

楽しそうに、零姫は笑った。そして感嘆の吐息をもらしながら、ゆつくりと縁側に腰を下ろす。

「そうか……これが、あせるすか……。仕方がない、正直に答えよう……。下らん過去に囚われ、いつまでも在りもせぬ夢ばかり見ている男、そこらの男たちと何一つ変わらぬ女々しくも弱々しいオルロワージュを見て、妾は——」

仄かに頬を紅潮させ、零姫はどこか恥ずかしそうにその言葉を唱えた。

「——いとおしい、と、そう思つたよ……」

「零姫様……」

「のう、あせるすよ。オルロワージュの心は日に日に摩滅していく。何年も何年も変わらぬ男を前にして、愛し続けることはもはや妾にはできぬ。じゃから、妾は虜化を破らねばならなかった。虜化を破れば、自分の本当の心が——気持ちかわかる筈。妾はこの牙をオルロワージュに突き立て、その血を吸つた。妾は自分が忘れていたことを思い出した……。もはやあやつと共に生きることができなかつた。」

強くあればそれで良い、と思つた。もしオルロワージュが『永遠』を手に入れられずとも、過去を捨て、今また朽ち果てた心に活力を取り戻すことができるならと。

弱くあることが叶うのならそれも構わぬと思つた。たとえそれがどれほど無様でも、己の弱さを周囲と分かち合うことがオルロワージュの安らぎに繋がるのなら、と。

あやつはそのどちらにも領きはしない代わりに、いつものように言った。余は余の永遠を手に入れる。この世に永遠はあるのだと証明してみせる、と。

永遠とは、時の中で生きながらけして失われぬこと。時を止めて生きるのでもなければ、命を捨てて死に続けるのでもない。流動と変節の中で、しかし不変である存在のこと。

あやつは変わらぬ。出会った時から、何一つとして。

……ただ、それが嬉しかった。

あの日、あの夜、誰かを愛したことは嘘ではなかった。

妾にはもう、あやつを愛することはできぬ。しかし、たとえそれが追うものと追われるものとの関係であつたとしても、それが互いに互いを殺しあうような関係であつたとしても、奴と繋がり合うことができるのならそれで良いのじゃ。

この世に永遠は存在する。あせるすよ。妾は誓うぞ。この世に、永遠は存在するのじゃ」

深く、静かに呟かれた零姫の声色は悠久の吐息を伴って弱々しく震えた。倦怠と放埒を超え、数多の夜を飲み干してこの地へと辿り着いた零姫の言葉は、まだ若いアセルスの心にも深く染み入っていく。

「あやつを滅ぼすと言ったことに嘘はない」零姫は言う。「それはそれで正しい、とそう

思う。そうしてやるのが情けであるとも」

零姫はアセルスの手首を握り、うつすらと浮かび上がる静脈に視線を落とす。

「オルロワージュほどではないとはいえ、妾もまた途方もなく長い時を生きた。妾にはもはや見つけられぬ言葉がある。あせるすよ。妾がそなたに期待しているのはそれじゃ。年寄りが忘却の中に埋没させてしまった言葉。節度と分別の中に失ってしまった無謀。老いた者たちの物語は若者が引継ぐものじゃ。そなたになら、あるいはまた別の結末を見いだせるのかもしれない」

「そうしたいと思っています」

アセルスは神妙に頷く。

「できるかどうかはまだわかりませんが、私にはまだ、オルロワージュに伝える言葉が残っていると思います。……でも、どうして私なんでしょう。どうして、あなたは私にそこまで教えてくださるんですか？」

「そんなことを考えて何になる？　自分が勇者であると神のお告げでも受けねば世界を救ってはならぬのか。そんなものありはせぬ。あるのは目の前の状況と自らの心だけじゃ。——それにのう、あせるす。そなたとは、それほど初対面という気もせぬ。白薔薇姫やイルドウン、それに……。この世のどこかにそなたのことを助けようと考える者がいた。それがそなたの力。そして何よりもそなたは妖魔の君オルロワージュの血を

享けた娘。そなたの父がオルロワージュであるのなら、あるいは妾がその母ということになる」

「お母さん……零姫様が、ですか？」

「不服か？ ……まあ、さすがにこの外見ではな。妾がそなたの孫である方がまだしも自然というものか」

零姫はアセルスの頬に手を当て、その表情を覗き込む。

「しかしこの年になって娘ができるとは思ってもよらなんだ。どれ、その顔をよく見せておくれ。……ふ、ふ、なかなか見目好い子じゃ。妾ほどではないが」

「それはどうも」

静かに微笑み、アセルスは自分の顔を覗き込む零姫の瞳を見つめ返した。皺ひとつないその顔は老いなどまったく感じさせない瑞々しさを保っている。当たり前だ。彼女の肉体年齢はアセルスの半分にも満たないのだから。この幼く稚い少女が何千年という時を生き、転生を繰り返す妖魔の姫だと誰が信じるだろう。アセルスは零姫の肩にそつと触れた。熱のない体がそつと手のひらを押し返してくる。あまりにもか細く、弱々しい子供の体。こんな子供が、とも思う。

けれども間近に見る瞳のその奥では、草臥れた廃熱が延々と燻っている。疲弊した女の魂がいつか己の死を願いながら、それでもなお捨てきれぬ執念にしがみつく。そんな

目をしている。

それは自分にはまだ理解できないものだ、とアセルスは思った。オルロワージュの話聞いて、少しではあるが彼のことを理解できたように思う。しかしまだ十分ではない。オルロワージュに立ち向かうには、あまりにも足りなすぎる。

かつて何かがあつたのだ。戦いがあり、誰かが敗北した。

妖魔の君オルロワージュと第一の寵姫、零姫の物語。そして——オルロワージュがまだ妖魔の君ではなかつた頃の物語。

アセルスは瞳を閉じた。

幻聴が聞こえる。

心のどこかで、時計塔の鐘が鳴る。何度となく経験したあの鐘の音。時を刻み、過去を象るあの遠く儂い音。

何気ない気持ちでアセルスは零姫の体を抱きしめる。すると零姫は不思議そうな顔して、しかしおずおずとアセルスを抱き返す。

「何じゃ、これは？ 我々は一体なにをしておるのじゃ？ ——しかし何やら悪い気はせぬ」

「私にもよくわかりません。でも……なんだか急に、あなたのことを抱きしめたい、そんな気持ちになつたんです。零姫様。もっとオルロワージュのことを教えてください。」

あの人のことを、私たちはもつと話し合うべきなんです。きつと「そうか……そんなものか。こんなことは妾も生まれて初めてで、よくよく勝手がわからぬ。面白いものじゃな。『親』になるというのは」

ふふ、と微笑を零した零姫を見て、こみ上げる感情にアセルスは困惑する。この感情は誰のものなのだろう、と思いつながら。

第二十九幕 Dear demisister

来客を知らせる声に仕事の手を休め、店の玄関へと向かうと知人の女性が待っていた。
した。

「お久しぶりです」

彼女の挨拶に「ええ、本当に」と答えながら、しかし私は驚いてそれ以上の言葉を返せずにいました。ずいぶんと長い間、会っていない相手だったのです。

それはちやうど、10年目の再会でした。

彼女はメイドの姿をしていましたが、しかし針の城で働くミルファークさんとはまるで異なる姿をしています。

彼女らしいといえれば彼女らしく、しかしどこまでも奇妙なその姿。

彼女の顔には、武骨な鋼鉄の仮面がついていました。

◇

目を覚まして窓を開け、冷たい空気を肺の中へと取り込み、気怠い瞼をゆっくり見開

き、軋む体を懸命に伸ばして。

私の住むこの町を見下ろし、けれども私の視界に広がるその光景には暖かな日の光と
いったものはなく、洗蟲晶の仄かな光がぼんやりと輝くばかりです。

朝の来ないこの町には、地平の果てから太陽が昇ることはありません。時計の短針が
南東を超えはしても、空に広がる群青の夜がうつすらと董色へと白むばかりで、それ以
上の青を目にすることはありません。

空は、凍っているわけではありません。時が経てば姿を変えます。この町に朝や昼が訪
れないものだとしても、その色の移り変わりを見れば時が流れていることがわかりま
す。私たちの夜が、群青の夜から董色の夜へと変わるとき、人間世界には朝や昼が存在
していたことを私たちはうつすらと思ひ出します。

私は小さなため息をついて窓を閉じます。このため息に意味はありません。なんと
なく癖のようになっていただけなのです。いつからそんな癖がついてしまったのか、も
う思ひ出すことはできません。寝起きしている屋根裏部屋から階下へと降りて、いつも
のように自在鍋でお湯を沸かしながら、お客様からお預かりしているデザイン画や裁断
図に目を通していきます。仕立てに問題はないかどうか、手順に必要な人員は揃ってい
るか、今日一日の作業を確認している内によくやく頭もはつきりとしてきます。

沸かしたお湯で紅茶を入れ、私はほっと一息つきます。いざ始まれば目が回るほど忙

しい仕事場で、穏やかな時間を過ごすことのできる僅かなこの時間が私は好きです。カップから立ち上る湯気に目を細め、椅子に体重をそつと預けます。

しばらくのんびりしていると、一番にやってきたのは、今日も会計担当のサムオウルでした。眼鏡をかけ、生真面目に黒髪を撫でつけたサムオウルは「おはようございます」と頭を下げ、ちらりと私をみると困ったように頬を掻きました。

「どうしたの、サム？」

「おかみさん。いつも言っていますが、もつとゆつくりして頂いて大丈夫ですよ。開店の準備は下のものにやらせます」

「別に、そういうわけではありませんよ。近頃ではずいぶん早く目が覚めてしまうんです」

「ですが……」

「そういうあなただって、店に来るのはいつも一番でしょう」

「私はあなたが心配なんですよ」

サムオウルはなんだか腹を立てているようでした。

「もつと体のことを考えてくださらないと……」

「べつに、どこも悪くしてやしませんよ」

「そういう意味ではなくて」

会話を続けているうちに他の職人たちも次々にやってきます。

「おかみさん、おはようございます！」

「おかみさん、よろしくお願ひします！」

元気の良い挨拶。みな私よりも若く、そして才能と熱意に溢れた子たちばかりです。彼女たちに挨拶を返しながら私はサムオウルに言いました。

「でも、私には責任があるわ。この店はグレゴリーさんから私が引き継いだもの。そしてそのグレゴリーさんの前には、別のひとがこの店を経営していたの。この店は——」
「キャンディー・ベル」は受け継がれてきたものなのよ。やれるだけのことはやっておかなければ」

「でも」

言いかけて、サムオウルは悔しそうに下唇をかみました。やがて「朝からこんなことで言い争いをしている場合ではない」とでもいうように頭を振って自分の机へと向かいます。

困つたな、と私は思いました。こんなことでサムオウルと揉めたりはしたくありませんでした。謝るような気持ちでサムオウルに視線を向けると、彼は申し訳なさそうに小さく頭を下げます。

誰かに気を使わせてしまうだなんて、まだまだ私は至らない点が多いようです。

もうすぐ私は30になります。この店で働き始めた当時はまだ13歳でした。その頃の私にとつて、30歳という年齢は随分と大人に感じられたものです。世界中のありとあらゆることを知っていて、どんな状況でも頼れるほどに頼もしい。どうして私は、時が経ちさえすれば自分もまたそのようになれるものだと信じていたのでしょうか。あのころ夢見ていた理想に比べれば、今の私は随分と頼りなく、ものを知りません。なんだかさみしいな、と私は考えます。理想と現実のギャップは、つまるところいかに過去の自分が子供であったかを示すものでもあります。知らない間にあの頃の自分は否定されていて、その糾弾者たる張本人が私なのですから。

ふう、と眉を下げて悲しんでいると、新入りの子が心配そうにこちらを見えています。慌てて笑顔をつくり、なんでもないと、言うために手を振ります。

ごほん。咳をして、私は立ち上がると大勢の前に立つて朝の挨拶を始めます。今日一日の予定、大口のお客様、注意しなければならぬこと。手短かに要件を伝え、「それでは、今日も一日頑張りましょう」と言うのと、雇い人たちが大きな声で一斉に返事をしてくれたので、私は自然とにっこり微笑みます。

私はこの店が好きだな、と思いました。そして私は——そんな店の主である自分のことが、やはり好きになれそうな気がしました。

私は私が至らないことを知っています。最高の職人ではもちろんないし、閃きや技術

に欠けることも認めています。けれどもそんなことは、働き始めたときからわかっていたことです。私には、目の前の物事を一つ一つこなしていくことしかできないのですから。

私の名はジーナ。私が住むこの町の名は根つこの町。その町の小さな仕立て屋「キャンデーベル」が私の店です。

14年間、私はここで働いています。つらいことや苦しいこともたくさんあったけれど、最近ようやく『これでいいのだ』と思えるようになってきました。得体のしれない諦念と、飴玉のように優しい自己承認とを手に入れて、私は来月30になります。

ずいぶんと年をとりました。他の方からは「まだこれからじゃないですか」と言われることも多いですが、しかし体の方はあちこちガタがきていてよく故障しますし、視力のほうも悪くなるばかりです。ちよつとした階段の上下で息を荒くしたり、軽い気持ちで持ち上げようとした荷物がまるで動かなかったりして愕然とすることも増えてきました。当時は当たり前前に備わっていた体力がいつの間にかに体の内から立ち消え、気が付けばほんこつ口ポットみたいになっている自分があります。

しかし養っていた弟や妹たちはみな手に職をつけて独立していききましたので、金銭的にはとても楽になりました。17年間の内に弟が一度事故に巻き込まれて大怪我を

負ったことはありませんが、幸いにも一命は取り留めることができ、それ以外はとくに身内の不幸もなく済んでいます。年に一度は実家へと帰り、様々な出稼ぎ先から集まってきた家族たちと食卓を囲んで互いの近況を語り合います。つい先日までよりよち歩きしていた気さえする弟が筋骨隆々の逞しい成人になって、鑿や鉋を振るう面白さをお喋りしている姿を改めて目の当たりにすると不思議な感慨と同時になんだか自分が母親であつたかのような気持ちになります。

そう。あなたもなかなか立派になつたのねえ。しみじみとそう言うと、弟はその時だけは幼い顔をして恥ずかしそうにはにかんでいました。

団欒の場では、誰もが穏やかに幸せを噛みしめています

父がいて、母がいました。三人の弟はそれぞれ鍛冶、縫製、街灯屋の職に就き、二人の妹はメイドをしています。全員で暖かな湯気の立つ食事を摂り、最後にはいつものように檸檬ケーキを食べます。それは幼い時に作つたような蒸しパンケーキではありません。新鮮な檸檬の果汁とたっぷりの砂糖を加えた本物のケーキです。ケーキを九つに切り分け、みんなで口いっばいに頬張りました。鼻の奥につんと檸檬のさわやかな香りが抜けていきます。おいしいね。ああ、おいしい。そんなことを言い合いながら、いっしか食卓にはしんみりとした空気が漂い出します。誰が口に出すということもありませんでしたが、私たちは残つた一切れを黙つて見つめていました。

来年もまた、こうして集まりましたよ、と私は言いました。みんなで集まるのよ、全員でね。家族たちは静かに頷き、そうして次の朝、また別々の場所へと旅立っていきました。

私はおそらく幸福な女であろうと思います。今の仕事に不平や不満はありませんし、家族ともこうして顔を合わせることが出来ます。

私は幸せです。なぜならそれはきつと、私たちのような人間がみな『忘れる』という能力を持っているからではないかと思えます。どんなに辛いことや苦しいことがあつたとしても、いつか私たちは忘れていける。それは貧しい人間にとってなくてはならない技術ではないでしょうか。

私は多くのことを忘れてきました。かつて、私から飴鐘さんを奪った妖魔社会や根つこの町を少しだけ嫌っていたこと。妖魔の貴族様から受けた残酷な仕打ちや、針の城へと消えていった幾人かのお針子たち。職人同士の軋轢や原料費の乱高下など。悩みに悩んで胃が捻じれそうになったことも何度かありましたが、今となってはただの記憶となつて心の小箱の奥底にしまい込まれ、日の目を見ることはありません。

店を訪れるミルフアークさんの顔を眺めることもその記憶を確認することも、今ではすっかりなくなりました。

17年間ここで働き、『これでいいのだ』と思えるようになりました。けれども『これ

でいいのだ』と考えるということは、『本当にこれでいいのだろうか』と疑っている証左であるのかもしれない。

月日は目まぐるしく通り過ぎ、瞬く間に17年の歳月が経ちました。17年。思い出すとすれば、思い出すことはできません。ですがそれは、あまりにも儂いもののようにある気もします。私たちが何かを思い出すとき、そこにあるのは「何かをした」とか「どこかへ行った」という言葉でしかなく、その日その時の匂いや温度やらを事細かに覚えているわけではありません。私たちの心は言葉でできています。17年分の記憶はしかし言葉によって圧縮されているのですから、あつという間のことだと感じるのも仕方のないことかもしれません。

私は何かを忘れました。告白します。私は薄情な女です。

13年前、私は運命のひとと出会いました。そのひと——アセルス様は針の城を出る際に私を誘ってくれましたが、私はその手を取ることが出来ませんでした。オウミ、シユライク、そしてクローロンへと、様々な旅先からアセルス様は手紙を送ってくれ、その文面に目を通すたびに私はまるで自分もまたその旅に参加しているような不思議な感覚に浸るのです。自分の生活を守るためにこのフアシナトゥールから離れないこの私とは異なり、世界中のありとあらゆる場所を自在に旅するアセルス様。自由でロマに溢れたその生き方に憧れながら、しかし私はその旅の困難にいつもはらはらしてい

ました。アセルス様の無事を祈って何通もの手紙を書きました。ある時は従騎士に襲われたと聞いて驚き、またある時は基地で拷問を受けたと聞いて悲しみました。たとえ文面ではさらりと書き流されていようとも、アセルス様がどれほど傷ついていらつしやるかはわかります。アセルス様の苦境を知って何もできない自分に齒噛みした私は何か自分にもできることはないだろうかと考えましたが、平凡な人間に過ぎない私にできることなどただの一つもありませんでした。

最後の手紙によればアセルス様はヨークランドへ向かうと仰っていました。暖かな場所なので少しのんびりしていきたい、と書かれていましたし、私もまたアセルス様が僅かでも平和に過ごせる場所であれば良いと願って手紙を書きました。それが10年前のことです。ある時を境にぱたりと手紙は途絶え、アセルス様の消息を知るすべは失われました。どこかで危険な目にあっていたのかもしれないことがあつて、筆を執ることさえできないのかもしれないかもしれません。そんなとき私は何をしていたのでしょうか。何もしなかったのです。いいえ、もちろんミルファークさんや貴族の方たちにそれとなく状況を尋ねてはみましたが、かんばしい答えは得られませんでした。ファシナトウルにやつてきた旅人に外の世界のことを聞き、根つこの町のジーナがアセルス様を探しているところり伝えてくれるように頼みはしました。でもそれだけです。私はこの町を動きませんでした。あの方のことを今でも覚えています。あの方と出

会ったこと、あの方と交わした言葉の一言一句を今でもはつきりと覚えています。でも私にはあの方を追うことができませんでした。この根っこの町に取り残されて、私は、いつしか『これでいいのだ』と考えることが増えてきました。

あの方はいま、どこで何をしているのでしょうか。私のことなど、もうとうに忘れてしまったでしょうか。そう考えるととても悲しくなります。

◇

消息が途絶えたのは何もアセルス様ばかりではありません。アセルス様と私の手紙のやりとりを仲介して下さっていたあのメイドの方もまた、この10年間ついぞ姿を見せることはありませんでした。彼女はゾズマ様の命令で手紙を届けていらしたそうですが、初めてお会いした時はとても戸惑いを覚えました。何しろお仕着せのメイド服を着ているのにその顔には何やら恐ろしい形をした仮面がついているのです。あまつさえ、名前を尋ねるとメイドさんは「私はなぞのメイド仮面です」と名乗りさえしました。メイド仮面です。彼女はメイド仮面（なぞの）だったのです。どう対応すればよいのかさっぱりわかりませんでした。アセルス様の手紙を持ってきてくださったとはいっても素直に信用して良いのかどうかわかりませんでしたし、仮に真実だったとしてもなぞのメイド仮面に手紙を託してしまうアセルス様もアセルス様でいつたいどのような世

界に足を踏み込んでおられるのかと困惑してしまいました。

ですが、混乱したのは最初の頃だけで、実際に何度か話すようになってからはとても真面目な方だとわかりましたので、私の方でもことさらに警戒するというようなことはなくなります。メイドさんが来ると自室でお茶を飲みながら近況を報告しあうようになるのにもそれほど時間はかからなかったのではないのでしょうか。

メイドさんにアセルス様の旅路の様子を尋ねると、彼女はいつも丁寧に答えてくれました。

「アセルス様はとてもお強い方でいらつしやいますよ」

と、メイドさんは言います。

「トリニティ基地での拷問。私も直接その場を目にしたわけではありませんが、基地の様子はあまりにも凄惨なものでした。それでもあの方は気丈に振舞ってらつしやいます。ついこの間まで普通の人間だったとは到底思えないほどです」

そうですか、と答えて私はなんだか誇らしい気持ちになりました。

「お強い方なのですね、本当に」

「ええ。ゾズマ様もずいぶん感心しておられたようです。ですが……」

メイドさんはそこで言葉を濁しました。

「私はときどき怖くなる時があります。アセルス様は誰に弱音を吐くのですか？ ああ

方が強い女性だとしても、いつまでもずっと強いというわけにはいきません。普通の人間であれば発狂してもおかしくはない状況だったのです。あの方はこの針の城という安住の地で妖魔の君の庇護を受け、平和に暮らしていくこともできた。闘い続けることを放棄して安寧を得ることもかなった筈です。でもあの方はそうはなさらなかった。ゾズマ様はそれを面白いと仰っていますが、私はそこまで他人事のようにとは思えません」

私はその言葉を聞いてはつとしました。と同時に、この仮面をつけた女性に強い信頼と尊敬を感じます。

「ジーナさん。アセルス様はあなたに手紙を書かれています。そのことをどうかお忘れにならないでください」

「はい……。あの……ありがとうございます。あなたと今日、おはなしができて、本当によかった」

「お気になさらないでください」

メイドさんは困ったように首をかしげました。

「私は所詮、仮面をつけたメイドですよ。この言葉だって全部、もしかしたら嘘なのかもしれないのですから」

そう言いはしましたが、しかしメイドさんの口ぶりはいい加減には聞こえませんでしたし

たし、彼女の言動や対応はいつも誠実なものでした。

私は以前にも増して心を込めて手紙を書くようになりました。アセルス様はいつも率直な文章で旅の近況を伝えてお書きになられ、苦しいだとか助けてほしいといったことは当たり前ですが表には出されません。ならばこそ、心に秘めたその寂しさをせめて癒せたなら、と分不相応にも考えた私は、手紙を書く欲びに耽るだけではなく、言葉を学び、言葉を選ぶということを次第に深めていきます。

私はその時、生まれて初めて真剣に文章と向き合いました。記憶の荒野、あてもなく無辺に広がる言語の海原に、私自身の心を過不足なく象つてくれるもの、そしてまた、私自身が想わざる気持ちまでもを掘り当ててくれる言葉のツルハシを探します。手紙をうまく書くことができずに何日も経ってしまったことがあります。こんな言葉ではない、本当に伝えたいのはこんな体裁だけの挨拶ではない筈なのに、と。

メイドさんは嫌な顔一つせず私を待っていてくれました。手紙を前にして私がうんうん唸っていると、ある日彼女は何気なくといった調子でぼんやりと言います。

「——私も、むかし、そんな風にして言葉を探したことがあります。自分でも知らない何かを見つけ出したいくて、心の中を浚つては落胆して、一日じゅう頭を抱えていたことがあります」

「その時はどうされたんですか？ 最終的に良い言葉は思いつきました？」

尋ねると、メイドさんは淡々と答えました。

「見つかりませんでした」

「え？」

「見つからなかったのです。さんざん、頭を捻りはしたのですが。見つければいいなあ、と想いはしたものの、でも無理でした」

「それは……。そんな時は、どうしたら良いのでしょうか？」

「さあ……。私はその時、たぶん、悲しんでいたのだと思います、探し物が見つからなくて、泣いたりしたかもしれません。けれども結局どうすることもできなかつたので、私はいまメイド仮面をしています」

「……あの、今更こんなことをお尋ねするのは遅すぎるかもしれませんが、どうして仮面をつけていらつしやるのですか？」

メイドさんは私の質問になにやら考え込んでいましたが、やがてゆつくりと口を開きました。

「仮面、というのは、とても便利なものだと思いますよ。泣いたり怒ったりしていても、誰にもわからないでしょう。他人とどうやって話せばいいのかわからなかつたり、自分に自信が持てなかつたりしても、仮面をつけると気がずつと楽になります。それにたとえば、仮面をつけることで正直になれるということもあるのではないのでしょうか。自ら

の罪を打ち明ける告解室も、あれは自分と相手の顔が見えないからこそ成立するもの。案外、アセルス様もこの仮面をつければ正直に弱音を吐けるのかもしれないよ」

「……」

この方は。

私は改めて不思議に思いました。一体どのような人生を歩んでこられたのでしょうか。その仮面の下には、どんな顔が隠されていて、いま私の目の前で静かに語る彼女はどんな表情をしているのでしょうか……。



10年の歳月が過ぎ、私と彼女は再会しました。メイドさんは足を踏み入れて良いか躊躇っているようでした。

「突然お伺いしてしまって……」

「いいえ、そんなこと！」

慌てて首を振り、彼女を自室へと招き入れます。なにぶん仕事の最中でしたのですぐにというわけにもいきませんでした。なんとか時間をつくることができました。

「長い間、何の連絡もできず、申し訳ありませんでした。ジーナさん」

「……一体、何があったのですか？ アセルス様はご無事なのですか？」

はやる気持ちに最も知りたかったことを尋ねると、彼女は静かに答えます。

「あの方は弱音を吐かれました」

「え？」

「オルロワージュ様によつて白薔薇姫が闇の迷宮に囚われ、あの方はとうとう旅を続ける氣力を失つてしまわれたのです。だから私たちは彼女を追つ手から匿うため、ボロという小さなリージョンに結界を張りました。妖魔がアセルス様の血の匂いを追えぬよう、あの方の痕跡となるものは全て絶たねばならなかったのです。手紙を送ることができなかつたのはそのためです。……ご心配をおかけして、本当にごめんなさい」

「そうですか。そんなことが……」

やはりアセルス様は苦しんでおられたのだ、と私は忸怩たる思いで胸がいつぱいになりました。そんなことにも気づかず、私はこうしてぬくぬくとこの町で暮らしていたのだと。

「本当に、いろいろなことがありました。アセルス様の心は裏切られて、生きることすらも諦めているように見えました。ゾズマ様は失望したと仰り、私たちはアセルス様を守るのを諦めその場を離れました」

「そんな！ では、いま、アセルス様は?!」

「安心してください、ジーナさん。アセルス様はここに戻っていらつしやいますよ」
「え……？」

「結界が無くなり、誇りを失ったあの方を滅ぼすためにイルドウン様が現れました。あの黒騎士イルドウン様を、しかしどういいうわけかあの方は味方に引き入れてしまわれたのです。とても力強く宣言されたそうですよ。ファシナトウルへ帰る、そして白薔薇姫を取り戻すと」

「ああ……」

いつしか私は祈るように胸で両手を組んでいました。アセルス様に戻ってくる！爆発的な歓喜が背筋を駆け抜けていきます。嬉しさのあまり涙がこぼれそうになりました。喜びを誰かと分かち合いたくて、「ああ、なんてこと！」と目の前のメイドさんに抱き着いて頬ずりすると、困惑しながらも彼女は私の背中をぼんぼんと叩いてくれました。

「ほんとうに、ほんとうに私、心配で……」

「いいんです。長いあいだ教えてあげられなくて、ごめんなさい……」

背中を撫でる手の感触から伝わる優しさに胸がつまりそうになりました。

この女性は私の知らないアセルス様の10年間を知っているのだ。そう思うと僅かに嫉妬を覚えないでもありませんでしたが、どういいうわけか彼女の匂いはとても懐かし

い匂いがして自分でも不思議なほど安らぐのでした。

私はさっそくアセルス様への贈り物を考え始めました。長い長い旅のはてにようやく帰還されるのですから、それなりのものを用意しなければ。アセルス様とお会いした時に渡したドレスは、今にして思えばまだ未熟な出来でした。今の私ならばもつと素晴らしいものがつくれる筈です。

あれやこれやと夢見るようにデザインを考えます。それは久しぶりに心躍る時間でした。色は何にしようかしら。妖魔の青、それともあの人の髪の毛の緑？ アセルス様といえばやっぱり似合うのは赤色？ 前回お贈りさせて頂いたのは軍服のようにかっちりとした中世的なデザインのものでした。それならば今度は、貴婦人が夜会に出かけるような淑やかなものにしようかしら。

頭を捻っている時折メイドさんが店をのぞきにきます。彼女はなにか仕事があつて、しばらく根っここの町に滞在するのだそうです。私はてっきり彼女はアセルス様の手紙を届けに来てくれたのだとばかり思っていたのですが、どうやらそうではないようでした（その点に関して私は大いに落胆しました）。アセルス様は手紙をお書きになつてはくれないのかと、そんな風に問い詰めるのはどうにも無作法に感じられましたし、手紙もなしにメイドさんが私を訪ねてきたのは何か理由があるのでないかとも思いました。

その理由というのが私自身だと知ったのは、それから一か月後のことでした。

その日、私はメイドさんに「豆料理を振舞う約束をしていました。メイドさんからは他の星の料理をいくつか教わっていましたので、その日は私が特製の料理をつくるつもりでした。」

他愛もない話をしながら鍋で豆を煮ていると、店の扉が静かに叩かれます。こんな夜中に誰かしら、と首を傾げながら近づいていくと、扉の向こう側から深く染み入るような男性の声が聞こえます。

「ジーナ」

それは抗いがたく、蠱惑的な声でした。

「ジーナ。アセルス様が針の城へと戻られた。彼女がお前を待っている。今すぐに参ぜよとの仰せだ」

「アセルス様が!？」

思わず声が裏返りました。やはりあの方はこのファシナトゥールへと帰ってきていたのだ! しかもこの私をお呼びになっている!

「いま、すぐに参ります!」

私は歓喜に手を震わせながらドアノブへと手を伸ばしました。

「いけませんジーナさん!」

不意に鋭い声を上げたのはメイドさんでした。仮面をつけているためやはり表情はわかりませんが、珍しく声を上ずらせています。焦っているようでした。

「ど……どうされたのですか？」

「彼」を招いてはいけません。アセルス様はまだドウヴァンにおられる筈です。彼は嘘をつけています」

「え……？　でも……」

「ジーナ」

男の声がまた響きました。優しく私の鼓膜を震わせのその声は不思議に信頼できるように思えました。それが妖魔の持つ魅了の力だと私は知っている筈でしたが、しかし逆らうことはできませんでした。アセルス様が私を待っておられる。私はあの人の元へ行かなければならないのだと。私の頭を占めているのはそのことばかりでした。

私は扉を開きました。すると、ぬっと突き出てきた男の腕が私の腕をがちりと掴み、私は恐ろしいほどの力で引き寄せられます。

「ジーナさん！」

メイドさんが悲鳴をあげたようでした。

気が付くと、私は男性の腕に抱かれていました。突然の出来事に顔を上げると、そこにいらしたのは針の城の黒騎士ラストバン様でした。

「ラストバン……様……？ どうして……？」

「ジーナ。アセルス様がお前を待っているというのは嘘ではないよ。私と共に針の城へ行こう。君は私とあの方を迎える準備をするのだ」

「ジーナさん。その方の言葉を聞いてはいけません！」

戸惑う私のもとにメイドさんの叫び声が届きました。店を飛び出してきた彼女は自動拳銃を構え、ラストバン様へと強い警告を発します。

「その手をお放下さい。ラストバン様。そんなことをしてもアセルス様のお心は変わりません」

「フ、フフ……」

ラストバン様の喉から隠し切れぬ笑い声が漏れました。

「そんなちっぽけな武器でどうする気なのだ、君は？ このファシナトゥールで黒騎士を相手に銃を抜く、その意味が君にはわかってるのか？」

「くっ……」

警戒したようにメイドさんは後ずさりします。

「たとえば、あなたが黒騎士であろうとも、ジーナさんをお守りするのが私の仕事です。彼女を返してください！」

「勇敢なお嬢さんだ。だが愚かと言わざるを得ないな。怪我をしない内に早くご主人の

ところへ戻りなさい」

ラストバン様は鼻で笑うと彼女を無視して私を抱きかかえました。すると銃声と共に傍の石畳が弾けます。彼女が撃つたのです。

「……彼女を、返してください」

ラストバン様の顔から表情が消えました。

「君は、自分のしていることがわかっていないのだ。この状況で君にできることはない。これは忠告だ。君がするべきことは今すぐこの場を立ち去ること、あるいは一刻も早く助けを呼ぶことだ」

「いいえ……違います。私の仕事は彼女を守ること。私がするべきことは、貴方に立ち向かうことです」

声を震わせながらメイドさんが答えます。

「困ったお嬢さんだ……」

ラストバン様がため息をつきました。それから彼が片手を軽く振ると、突然メイドさんは吹き飛ばされ、背後の壁に激しく叩きつけられました。

「そこでじつとしていなさい。その方が君のためだ」

「やめてください！ ラスタバン様！」

私が悲鳴を上げ、じたばたともがきます。ラストバン様はこともなげに私を抱え直

し、諭すように言いました。

「彼女のためにも、君はじつとしなさい、ジーナ。その方が良い」

動かなくなつたメイドさんから拳銃を取り上げ、ラストバン様は落ち着いた足取りで歩み出しました。

私は恐怖と混乱のためにわなわなと体を震わせることしかできません。誰かあのメイドさんを助けてあげて、と心の底から願いましたが、口は強張つて思うように動きません。ラストバン様への——メイドさんを傷つけた彼への怒りと逆らい難い魅了の力とに引き裂かれ、私の心は千々に乱れていました。

「安心しなさい。ジーナ」ラストバン様は優しく言います。「彼女の命に別状はない。あれでも妖魔の端くれだ」

「わ、私は……私をどうするおつもりなのですか……?」

尋ねると、ラストバン様は穏やかに微笑みました。

「革命には物語が必要だ。そうは思わないか?」

「革命……?」

突然の言葉に戸惑っていると、ラストバン様は楽しそうに語り出します。

「アセルス様の体には、1億年を生きる怪物の血が流れている。それは永遠を生きる支配者の血、全能を唱えうる完全者の血だ。この閉塞した妖魔の社会を変えうるには彼女

のような劇物が必要なのだよ、ジーナ。役者は既に揃っている。後に残るのは物語だけだ。革命には物語がある。思想がある。激情がある。君はアセルスという革命の炎にくべられる薪炭となるのだ。想像してみるといい。君を失って泣き叫び、ついには妖魔の君さえも滅ぼすアセルス様の姿を。美しいとは思わないか？」

「そ、そんな……」

確かに、ラストバン様の言葉は魅力的に聞こえました、アセルス様のために好みを捧げられる。あの方が歩む物語にけして消えぬ挿絵となつて残ることができる。それはどれほど悩ましくも美しいことでありましょうか。どのみち、この状況で私にできることなどはないのです。下手に暴れ、またメイドさんを助けに戻つたとしても、それは彼女をさらに危険に晒すだけです。

「私は……」

答えようとおずおずと口を開いたその時、私は突然ラストバン様の腕から投げ出されました。路面に腰を強かに打ち付け、慌てて顔を上げると、そこには荒い息をつきながらメイドさんが右手に煉瓦を握りしめていました。彼女は煉瓦でラストバン様の後頭部を殴りつけたのです。血はついていないようでした。さすがにこの程度で上級妖魔が負傷するということはないでしょうが、不意の一撃にラストバン様も腕の力を抜いてしまったのでしょうか。

「ジーナさんを」メイドさんは肩で息をしながら呻くように言いました。「返しなさい……！」

「……………」

ラストバン様は何も言わずに目を細めます。メイドさんは倒れていた私の腕を掴み、背後に庇いました。

「ジーナさん。早く逃げてください」

「メイドさん、どうして？」

「アセルス様がファシナトウルへの帰還を決心された今、あなたを利用しようとする者が現れるのは想定内のことです。それがまさか黒騎士だとは思っていませんでしたか……」

「違います。どうしてそこまでしてくださるのですか？ これ以上はあなたが危ない目に遭うだけです。もう私のことは諦めてあなたは」

「馬鹿なことを言わないでください！」

メイドさんが叫びました。そんな風に感情的になる彼女を見るのは初めてのことでした。私の肩を痛いほど掴む彼女の手のひらがぶるぶると震えていました。

「あなたはアセルス様を動かす道具にされるのです。妖魔の洗礼を受ければ虜化によって都合の良い操り人形になってしまう。——何もかも忘れてしまうのですよ？ 大切

な人のことも、アセルス様のことも！」

それは感情を振り絞るような、痛切な叫び声でした。仮面の奥で、彼女が顔をくしゃくしゃに歪めているのが分かるような気がしました。

私はイルドウン様からミルフアークさんの秘密を知らされた時の喪失感を思い出してはつとしました。

けれども……。

どうすれば良いのでしょうか。私を庇うメイドさんの足が震えています。私は彼女を置いて逃げ出すべきなのでしょうか。

「警告はした筈だ。二度はない」

ラストバン様が冷たく言い放ちました。

「哀れなものだな。勝ち目のない戦いに命を懸けねばならないとは。主人に従うのはメイドの義務というものだが、君の主は随分と残酷な男のようだ」

その言葉にメイドさんはびくりと肩を震わせました。

「仮面をつけたメイドを従えている妖魔などそうはいない。噂には聞いていたが、やはりゾスマはアセルス様に手を貸しているのだね？」

「ふ……」

その時、緊迫した状況にあつてはじめてメイドさんは不敵に笑いました。

「その認識は大いに間違っておられますよ、ラストバン様。ゾズマ様は私の主ではありません」

「ほう？」興味深げにラストバン様の眼が光ります。「では誰だ？　アセルス様に鞍替えしたのか？　それともまさか——我が友人殿かな？」

「決まっているでしょう」

メイドさんはきつぱりと言いました。

「私の主は私です。それ以外の誰でもない」

「フム……。なるほど、君もまた妖魔、というわけか……。よかろう、ならばその仮面を打ち砕き、君の瞳を覗き込んでみるとしよう……」

ラストバン様は無造作に手を伸ばし、メイドさんの首根っこを掴みあげます。

「う……」

低いうめき声をあげてメイドさんがは暴れますが、上級妖魔の力はびくともしませんが。ラストバン様は余裕たつぷりにその仮面を掴み、ぎりぎりと言を立って締め付けます。

「う……ああ……！」

「最初からこうするべきだったか。……いや、今更それは詮無い話か……」

「メイドさん！」

私が叫び声を上げたまさにその時、メイドさんの右腕が胸元のブローチを引きちぎるのが見えました。

「ラストバン！」

彼女は叫びながら、ブローチを彼の顔面へと叩きつけました。それは——そのブローチは精霊石と呼ばれる封具でした。精霊の力を封じられた石は割れることによつてその力を開放し、彼と彼女との間で爆発します。

ラストバン様は顔をしかめていました。その隙間からは皮膚が焼け爛れているのが見えました。瞬間にその傷は治っていききます。

対してメイドさんは爆発の衝撃でしばらく気を失っていましたが、すぐに気が付いて起き上がりました。彼女は何の傷も負っていませんでした。しかし、

「その、顔……。なるほど、君が仮面をつけていたわけがようやくわかったよ」

ラストバン様は言います、メイドさんがつけていた仮面——あの武骨な鋼鉄製の仮面はいまや無残に砕け、僅かに右目を隠すだけになっていました。ようやく露わになってその素顔は——。

「ミルファーク、さん……？」

思わず私は呟いていました。

今まで隠されていたメイドさんの顔は、針の城で働くあの侍女と全く同じ顔だったの

です。妖魔の君の口づけによって魂を奪われたあの乙女たちと。

メイドさんはさつと顔色を変え、顔を手で覆いました。

「ミルファーク。ここで何をしている？ 君のいるべき場所は針の城の筈だ」

「私はミルファークではありません……！」

ぎりぎり歯を軋ませながら、メイドさんは声を絞り出すようにして言いました。

「ミルファークではないとするなら、何なのだ。その顔、その姿。ミルファーク以外の何物でもないだろう。君はしよせん魂を持たない侍女人形に過ぎない」

「いいえ、違います。あなたにはわからないのです。他者を操りことをなそうとする脚本家には、自らを演じ手とする者の事情など」

「生憎と、私は舞台に立つ側の存在ではないのでね。……まあ、どのみち君が何者であろうと私には関係のないことだ。君と同じ顔をしたメイドは針の城に大勢いる。ミルファークが一人消えたところで誰も悲しむまいよ。悪いがモブキャラクターには舞台から降りてもらおうか、ミルファークよ」

「私をミルファークと呼ぶな——ラストバン！」

怒りに顔を歪めながら、メイドさんはメイド服からフラッシュボムを取り出して地面に叩きつけました。

「逃げますよ、ジーナさん！」

「は、はいー」

メイドさんに手を引かれ、私たちは脱兎のごとく駆けだしました。あまりにも多くのことが起こりすぎて、何が何だかわかりません。私はただメイドさんに導かれ、ついていくのがやっとでした。道すがら私の頭を様々な考えがよぎりました。ラストバン様は私を利用してどうするつもりだったのか。メイドさんはなぜ仮面をつけていたのか。彼女は何者なのか。

ただ一つ分かっていたことは。彼女は信用できると言うことだけでした。彼女は妖魔であるという話でしたが、繋いだ手のひらはとても暖かく感じられました。

私たちは根つこの町を抜け、焼却炉へと身を潜めました。

「……なら少しは安全ですね」

そうメイドさんに告げられ腰を下ろした時、麻痺していた神経が突然回復したように安堵と疲労に体が震え、涙が出そうになりました。状況は未だ切迫していましたが、私はようやくやく一息ついてメイドさんに感謝しました。

「あの……何から何まで、本当にありがとうございます。私のために……」

「いいのです」メイドさんはまるで気にしていないというように事も無げに答えました。

「私が私の意思でやっていることです。あなたが気にすることはありません」

「でも、仮面が……」

心配そうに尋ねると、メイドさんは寂しそうに仮面の断面を撫でました。

「形あるものはいつか壊れるものです。仮面が私の素顔を引き出してくれるものであったとしても、時には素顔が壊れることもありましょう。……ジーナさん。あなたが無事であれば、私はそれで良いのです」

暖かなその言葉に、私は感極まって彼女に抱き着きました。はるか格上の黒騎士に一歩も引かずに立ち向かった彼女の勇気と、そして私を懸命に守ってくれたその優しさに胸がいっぱいになりました。

「ジ、ジーナさん……」

メイドさんは困惑しているようでしたが、構わずに私は思いのたけを告げました。

「……本当に、本当にありがとうございます……！」

「ジーナさん……」

メイドさんはおずおずと私の体を抱きしめてくれました。

「怖かったです……とつても……！」

「いいのです……仕方のないことですよ、それは……。あなたは何も気に悩むことはありません……」

私を包み込むようなその言葉に、自然と涙が零れました。

「——ああ、あなたが私の姉であつたらよかつたのに……」

私は自分でも無意識のうちに口に出していました。

「え……？」

「ねえ、教えてください。あなたは私の姉ではないのですか？ 私は私の姉をずっと探していました。私が幼いころ、針の城へ奉公に出た姉のことを。姉は針の城でミルフアークさんとして働いているのだそうです。……どうして、あなたはお城の侍女と同じ顔をしているのですか？ どうして、あなたは私をこんなにも守ってくれるのですか？ お仕事だから？ それとも——」

「ジーナ、さん……」

それはとても悲痛な声でした。悲しそうに囁いて、メイドさんは私の肩を掴んで引き剥がしました。

「あなたの、お姉さんの名前を、お聞きしてもよろしいですか……？」

「私の姉の、その名前は——」

私はそつと言いました。

「——デイミ、デイエ、とそう言います」

「そう、ですか……」

メイドさんは静かに微笑みました、その笑顔はなんだか泣いているようにも見えました。

「あなたには私の名前を教えましょう。それはゾズマ様と私しか知らない名前です。——私の名は、ディアデイルム、と言います」

「ああ、そんな……」

自分でもわかつていた返答ではありませんが、私は落胆に打ち震えました。

メイドさんは——ディアデイルムさんは私の顔をまつすぐに見つめていました。

「私があなたの姉であつたなら、どんなに良いでしょう。自分が誰なのかを思い出すことが出来たなら。……でも、私にはそれができないのです。私にできるのは嘘をつくことだけです。実は私はあなたの姉であると、たつたいまそれを思い出したのだと、そう口にすることはできません。……でも、それはやはり嘘なのです。本当のことにはなりません……」

「あなたは……?」

「私は針の城でミルフアークと呼ばれていた存在です。あなたも知っているように、どこかの女が妖魔の君の虜化を受け、心も体もミルフアークという焼き型に割り貫かれた存在にすぎません。私は多くのことを忘れてしまいました。ミルフアークであつた前、自分が何者だったのか、思い出すことはできないのです。ディアデイルムというこの名は、私が自分で私につけた名前です。なんだか、あなたのお姉さんの名前と似ていますね。もしかしたら私は、かつてあなたの姉であつたのかもしれない。……でも、やは

りそれは、わたしにはわからないことなのです。ごめんなさい……」

「ディアデイルムさん……」

私はようやく、彼女が仮面をつけていた理由を知りました。彼女が抱えていた孤独を、その悲しみを多少なりとも理解できたような気がしました。

「私は本当のところを言えば、少し諦めていたんです。もう、姉の消息なぞ見つかりたくない」と

私は正直に告白しました。

「でも、諦めるのはまた今度にします。今日、あなたの口からその話を聞いてそう思いました。だってそうでしょう？ あなたがそうして自らの記憶というものを求めつづけているのなら、私の姉もそうしないとは限らないじゃありませんか。そうして自分の意思をミルファークさんたちみんなが取り戻したら、いつか本当の記憶だって手に入れるかもしれない。……だから、どうかディアデイルムさんも、思い出すことを諦めないでください」

「私が私を探し続けることが、あなたのお姉さんを探すことにも繋がるか？」

「きつとそうですよ。私たちは、そんな関係で繋がっているんです。仲間です」

「仲間……」

そうつぶやくと、ディアデイルムさんはほう、と震えるように息を吐きだし、幽かに微

笑いました。

「一人じゃないということとは、素晴らしいことですね……」

しみじみと囁いて、彼女は私の手を取り、そつと握りしめました。

「やれやれ……」

冷笑的な声が聞こえたのはちょうどその時でした。

「感動的な話はそこまでにしてもらおうか。私の手を煩わせないでくれたまえ」

「ラストバン……」

憎々し気にディアデームさんが眩きます。そう、物陰から現れたのは黒騎士ラストバン様でした。なんとか撒けたものと思っていたのですが、やはり甘かったようです。

「そろそろ私の善意というものを理解してほしいものだな。わざわざこの私自らが出張ってきたのも不要に君を傷つけないためだ。配下の者たちには乱暴なものも多いのでね。……いい加減に認めたまえ。どだい、君たちの力ではこの私から逃げ切ることは不可能なのだよ」

「……不可能だろうが何だろうが、やってみなければわからないでしょう。私は……私は諦めません」

ディアデームさんが顔を強張らせながら力強い口調で答えました。

「わ、私も……私も諦めません！」

「は……」

ラストバン様は笑いながら俯き、人差し指で額を撫でました。ディアデイムさんは油断なく彼を見据えたまま、私を庇うように前に出ます。

「ジーナさん。気を付けてください。次に何をしてくるか……」

「いいや。もう“次”はない」

ラストバン様の姿が不意に消えた——とそう思った次の瞬間、気が付くとディアデイムさんの喉笛は彼の手によって掴みあげられていました。

「あ……ぐ……」

ラストバン様は無表情のまま彼女を地面に叩きつけます。鈍い音がして、ディアデイムはぐったりと動かなくなりました。

「ディ、ディアデイムさん……」

慌てて駆け寄ろうとした私をラストバン様の冷たい視線が貫き、私の体はその途端に動かなくなっていました。

「そこでじつとしていたまえ、ジーナ」

「あ……」

「私もこんなことをするつもりはなかったのだが……いささか時間がかかりすぎています。これ以上の手間を省くためにも、彼女はここで殺しておく」

ラストバン様の手がディアデイルさんの首に伸びていくのを、私は暗澹とした面持ちで眺めていました。何とかしなければ、とそう思いながら、しかし私の体は黒騎士の視線を受けて動かなくなっていました。誰か、誰か助けて！ アセルス様！ 助けてください！ アセルス様！ 必死になって助けを呼びました。すると――、

「……ト、そのとき上手から謎の妖魔が現れて口上を述べる。『さてここからは台本にない場面だ。即興劇を始めよう……』」

どこからか声が聞こえました。この状況を面白がっているような、自信に溢れた声が空から降ってきます。

「……………ツー！」

それまでけて余裕を失うことのなかったラストバン様の表情が初めて険しくなりました。素早く振り返ったラストバン様は腰に提げた剣を抜き、緊張を滲ませながら構えます。彼が見つめるその先には、とても美しい顔をした赤毛の男性が立っています。乱暴に逆立てた赤い髪に胸元をほだけた淫らかな服装、口元にニヤニヤと悪戯な笑いを張り付けたその方は、気取った仕草で肩を竦めます。

「いやあ、久しぶりだね、ラストバン。まさかこんな場面で君と出会うことになるとは思っていなかったよ」

「これはこれは……ゾズマ様。ご壮健で何よりです」

「うん。世界中を旅して回っていると面白いことばかりだね。中々退屈する暇もない。針の城にいた頃に比べると毎日が充実して困っているくらいだよ。君もどうだい？ 外の世界に飛び出してみては」

「私はこれで故郷を愛する妖魔でしてね。外界を味わう前に、まずはこのファシナトウールを楽しむことから始めようと考えているのですよ」

「へえ、僕にはよくわからないな。生憎と、地元愛とは無縁の男だね。……ところで一つ聞いてもいいかな？ いま、君は何をしようとしていたんだい？」

何気ない質問にラストバン様はふつと口元を引き締めます。

「いえ、なに——御覧の通り、針の城の侍女の職務怠慢を咎めていたのですよ」

「ふうん？」ゾズマ様は倒れているディアデームさんを見つめて首を傾げました。

「なんだか変なメイドだね。割れた仮面をつけている。そんな子、針の城にいたかな？」

「……どうやら彼女は愚かにもオルロワージュ様に反抗し、そればかりかこの私の邪魔さえしたのです」

「なんだって？」ゾズマ様は大きさに驚いて見せました。「それは悪い子だなあ！ そんな悪い子は、是非とも折檻してやらなきゃいかんねえ！」

「私も同感です、ゾズマ様。針の城の秩序を保つためにも、不穏分子は排除しなくては」その言葉に、ゾズマ様はニヤリと笑います。

「針の城の秩序？——おやおや、君がその言葉を口にするのかい？」

「さて……どういう意味でしょうか」

「いやいや、大した意味はないよ。気にしないでくれたまえ。……でも、あれれ？

ちよつと待つてくれないか？　なんだかそのメイドさん、見覚えがあるような気がする

なあ……！」

「……………」

「なんてことだ！　彼女は僕も知っているよ。それどころか、彼女はミルファークなんかじゃない。僕に仕えてくれるメイドさんだったんだ。ううん？　そうすると、なんだかおかしいな。困ったねえ……」

「何が……でしょうか」

「だって君はそのメイドさんは懲らしめようとしていたんだらう？　でも彼女は僕の知り合いなんだ。僕の知り合いを傷つけるだなんて、ひどいじゃないか、ラストバン君」
「そうでしたか……。あなたの所有物を傷つけたというのなら、その非はお詫びいたします。……しかし彼女は、彼女の主はあなたではないと言っていましたか？」

「おやおや、君らしくもない。黒騎士がメイドに騙されていたら仕方がないな。彼女は嘘つきなんだ。彼女の主はこの僕だし、彼女にジーナを守るように指示したのもこの僕

「や」

「……そうですね。それは申し訳ありませんでした。私はあなたと事を構える気はないのです。ここは退きましよう」

そう言つて身を翻すラストバン様を、ゾズマ様は楽し気に「まあ、待ちたまえよ」と呼び止めました。

「話はまだ終わつちやいない。君は彼女を傷つけたんだ。人間界にはね、謝つて済めば警察はいらないという言葉がある。BUKKYOという宗教の有難い文言だそうだよ」

「謝罪はさせて頂きましょう。お詫びが必要とあれば、貴方の望む玉石もお譲りいたします」

「そうかい」ゾズマ様は気軽に答えました。「なら、命を置いていきたまえ」ラストバン様が眉根を寄せます。

「それはあまりにも法外というものでは？　彼女は所詮、メイドでしょう。損害については弁償いたしますが、召使の怪我と貴族の命が釣り合うとは思えません」

「そうかい」

その時、ゾズマ様の声は一気に冷たくなりました。彼は残酷な瞳でラストバン様を見据えます。

「彼女が嘘つきだというのは本当のことだ。しかしながら君もよく知っているように、

嘘つきなのは僕もまた同様でね。さきほど僕は嘘をついた。彼女の主はやはり僕じゃない。彼女の主は彼女だけだ。他の誰でもないし、彼女は誰のものでもない」

「誰のものでもないとするなら」ラスタバン様は慎重に口を挟みます。「たかが下級妖魔一匹、たとえ私が傷つけたとして、あなたには関係がないのでは？」

「いいや、違うね」一切の容赦を感じさせないほど冷酷にゾズマ様は告げました。「世の中は複雑にできている。確かに彼女は誰のものでもないさ。——だがな、ラスタバン。それでも彼女は僕のものなのだ。わかるか？ お前は僕の所有物を傷つけた——その罪は、死を持って償え」

「まさかあなたがそこまで彼女にご執心とは」

ラスタバン様はため息をつきました。

「あなたは妖魔の中で唯一、闇の迷宮を走破し自由を獲得した方だ。この世の何物にも執着せず、拘泥しない——だからこそあなたとは敵対せずいられると思っていたのですが……。まさかそのあなたと剣を交えることになるとは、大いなる誤算でしたよ……」

それ以上ゾズマ様は応えることなく、静かに剣を抜き放ちました。ラスタバン様は外套を軽やかに払いながらやれやれ、と首を振ります。

「我が友人殿とは違い、私は力比べにさほど興味がない質でしてね。叶うならば退かせ

て頂きたいところですが——どうもそれは許されぬご様子。仕方がありませんな。ならば私も剣でこの場を切り開くと致しましょう……。なに、時には脚本家が舞台に立ち、自らの筋書きを正すため配役に指導を加えることも必要でしょうから……」

落ち着き払った態度で剣先をゆらゆらと揺らしながら待ち構えるラストバン様。

それまでの饒舌を嘘のように押し隠し、静かな殺意を瞳に込めたゾズマ様。

ファシナトウルにおいても名うての実力者たる二体の妖魔の戦いはこうして始まりました。

第三十幕 あなたに嘘を一つだけ

「久しぶりじゃのう、イルドウン。あの森での一件以来か？」

零姫を連れて発着場へと戻ると、イルドウンは見るからに不機嫌になった。

「おい……どういふことだ、アセルス。お前は話を聞きに行くと言ったはずだ。連れてくるなどという話は聞いていないぞ」

「私もそのつもりだったんだけど、零姫様も私に協力してくれることになったんだ。……それにさ、あなたが言うような方ではなかったよ、全然。むしろとても気さくで親切な……」

「気さくで親切だと……？ その女から離れろ、アセルス。零姫はそんな女ではない。何者かに虜化されているか洗脳を受けているに違いない。何かの罠だ」

「ええ……？」

「お前は本当に変わらんものう、イルドウン」

零姫は呆れたように目を細めた。

「妾がせっかく挨拶してやったのじゃから返事をせんか。それとも返事の仕方すら忘れてしまったのか？ 哀れな蛆虫じやな。おぬしはまずどこぞの乞食にでも転生してこ

の世の礼儀というものを学んで来た方が良いぞ」

「……………ふん」

イルドゥンは零姫には視線を向けず、ただ小さくアセルスに対して頷いた。

「どうやら本物のようだ」

「聞いたか、アセルス？ イルドゥンというのはこういう奴なのじゃ。日頃のそなたの

苦勞が手に取るように思い浮かぶ」

「いやあ、まあ、それなりに慣れもしますけど……………ははは」

「なんだ？ おかしいのは俺なのか？ 俺はいま、ひどく罵倒されたような気がしたが

……………アセルス。零姫を連れていくのはお前の勝手だが、その場合同行はできん」

「いや、悪いけどイルドゥン。それは駄目だよ」

「何がだ」

「私にはあなたが必要なんだ。いてくれなきゃ困る」

アセルスは真摯な眼をして告げた。

「……………」

「前にも話したよね。あなたは私に協力すると言った筈だよ。私はあなたと一緒にやりたいんだ。……………私は信頼しているんだよ、イルドゥン。あなたの強さ、迷うことのない決断力や、私の弱さを否定してくれること。これからの私には、きつとあなたのような

存在が不可欠だと思うんだ。それにあなたはいつだって……」

イルドウンが黙ってアセルスの話を聞いているのを、零姫は面白そうに眺めている。やがてイルドウンはため息をつきながらアセルスの台詞を遮った。

「……もういい」

「え？」

「もういい、と言ったんだ。相変わらず能書きの多い女だ」

「……じゃあ、悪いけど一緒に来てくれるね？」

「……ほんとうに仕方のない女だ」

イルドウンは答えなかったが、しかしその場から立ち去ることもなかった。

その会話を傍で観察していた零姫は敵の弱みを嗅ぎつけた軍師のようににんまりと笑みを浮かべ、「これは愉快」と独り言を零す。

「そういえば忘れておったわ。イルドウン、おぬしは妾の居場所を知っておったそうではないか。じゃというのにオルロワージュが来ないということは、さてはおぬし、妾を庇っていてくれたのじゃな。……いやはや、なんのう。さてはおぬし、いい奴じゃな」

「違う」イルドウンはさらに顔を歪めた。「そういうことではない」

「ふふ……照れることはないぞイルドウン。おぬしはいい奴じゃ。……折角仲間になったのじゃ、たまにはおぬしのことを褒めてやろう。おぬしい奴、おぬしい奴」

「だから俺はこの女が嫌いなんだ」

うんざりしたようにアセルスへと怒りをぶつけるイルドウン。アセルスは苦笑いを浮かべるしかなかった。

◇

その日、ファシナトゥール星間船発着場のタラップをとうとうアセルスは踏んだ。踏みしめる鋼板が古めかしく軋むその音が、彼女にこれまでの旅路を思い出させてくれた。

針の城を抜け、町はずれの焼却炉へと飛び込んだこと。

オウミで出会った人魚姫と領主の恋のこと。

シユライクでの叔母との再会にアルキオネとの闘い。

クローンでの貧しくも穏やかな生活、怪しげな医者ヌサカーンとの対話、そしてハウゲータの謎かけ。

それから……。

トリニティ基地に囚われて、拷問を受けたこと。基地の中で出会った少女、フーキとの別れと妖魔化への戸惑い。

小此木烈人と再会し、彼の身に起きた不思議な話。

マンハッタンでの再出発。助けてくれたキャンベル社長や、彼女を狙うIRPOやレッドとの決別。

京における金獅子姫との闘い、イルドウンの来訪。

そして——闇の迷宮に落とされ、白薔薇姫と決定的な別れを経験したこと。

失意に暮れ、ボロでひっそりと隠遁生活を送ったこと。そこで子供を育てたこと。子供を失ったこと。

自分を殺しに来たイルドウンとの闘い。

オルロワージュ第一の寵姫である零姫から聞かされた過去の出来事。

10年以上にもわたる長い長い旅を経て、アセルスはここにいる。

自分は帰ってきた。

時は流れた。

今の自分は、ここを飛び出した時の自分とは違う。どんな場所へ放り込まれても一人で生きていけるし、その術を知っている。万能とまではいかないとしても、自分で自分の身を守ることができる。

今の自分は、自らの意思で妖魔になることが出来る。自らの意思で他者と闘い、そして滅ぼすことが出来る。

アセルスはそのことを知っている。

それが良いことなのか悪いことなのか、それは彼女自身にもわからない。だが、何も知らなかった頃に戻りたいとは思わない。

時が流れて、何かが決定的に変わってしまった——かつての弱い自分を殺して、今のアセルスが生きている。

過去を殺して今を生きたら、弱い自分が滅びた未来で私は私を忘却する。

それを悲しいと思いがち、しかし後悔はしない。

旅を始めた時、傍には白薔薇姫と紅がいた。けれども、今、隣に彼女たちはおらず、その代わりにイルドウンと零姫がいる。ゾズマとそのメイドはこの星で合流する予定になっているが、まだ姿を見せてはいない。

空 を見上げてアセルスは言う。

「あの頃の私は、何も知らない子供だったね」

するとイルドウンが静かに答える。

「今だつて似たようなものだろう」

「……まあ、そうかもね。でもあの頃と比べれば随分と違うよ」

「そうか？」イルドウンはどうでも良さそうに答えた。「まあ、そうかもしれない」

きつとその程度のことなのだろう。自分が経験した多くのことは、他者からしてみれば

ばおそらくは無価値か、そうでなくとも些末事に過ぎない。何百年何千年と生きる妖魔にしてみれば、半世紀にも満たない人生経験などは茶番に過ぎないのかもしれない。

アセルスはイルドゥンを見上げ、まじまじとその顔を見つめた。

「……何だ」

いつものように不満げな顔でイルドゥンが睨む。今度は何を言い出す気だ、とでも言いたげな顔だ。

「私についてきてくれて本当にありがとう」

そう言うと、イルドゥンはうんざりしたように顔をしかめた。

「しつこいぞ。その話はもういい」

「うん。ごめん。……それで、ちよつと聞きたいんだけど、私のこと、少しは好きになつてきた？」

イルドゥンは何を言われたのかよくわからなかったようだったが、そのうちによく理解したのか普段ではけして見せることのない怪訝そうな表情を浮かべてぼんやりと呟いた。はあ？

「それが血の影響のせいなのかどうかは知らんが、アセルス……。やはりお前は徐々に発狂しつつあるようだ」

アセルスはくすりと微笑む。

「うん。まあ……。それはどうでも良いことじゃないかな。自分が狂っているって言われて、そりゃ困ったなあって反省したりする？　しないよね。……。私が狂っているかどうかってことは、いまさらどうでも良いことなんだ。私にとっていま重要なことは、貴方が私を好きになったかっていうことだよ」

「そんなことは万に一つもあり得ないが」イルドゥンは言葉を選ぶようにゆつくりと口を開く。「もし仮に俺がお前を好きになったとしてそれが何になる？」

「とても幸せなことだと思うよ。……。いま、私に必要なのは誰かを“魅了”する力を学ぶことだと思うんだ。たとえ半妖だったとしても、私にはその力がある筈でしょう。私の目的を果たすためには、この力を上手くコントロールすることが不可欠だと思う」

「とすると、何か。俺はその修行の実験台か？」

「うん」

「……お前も妖魔らしくなってきたな」

イルドゥンが呆れてみせる。

「俺が言うことでもないが、魅了というのはお前のように直截的な言葉で行うものではない筈だが」

「ほかに方法を知らないから。できることからやるしかないし。私にいまできることは、好きな人に好きと言うこと、そして自分を好きになって欲しいと言うこと、それく

らいかな」

「いつも言っているが、お前は少し身の程を弁えろ。俺が好きだというのなら、それなりの礼儀というものがあるだろう」

「別に好きじゃないよ」

アセルスは即答した。

「いつも言っているでしょう。貴方にはさんざひどい目に遭わされたよね。私は根に持つ方だからね。今でも恨みに思っているよ。あなたはいつも酷いことばかり言うし……ひどいことばかりする。斬ったり刺したり」

「……………」

「…………だから、貴方のことを好きだと言ったのは、あれは嘘だ。私は言ったでしょう。言葉尽くす、と。私のもつと言葉の使い方や学ばなきゃならない。あのとき貴方に好きだと言ったのは、あれは方便だよ」

「とすると……道すがらやたらと褒めてきたり持ち上げてきたのは」

「妖魔を口説く練習になると思って」

「お前と言う奴は本当に失礼な小娘だな」

「どうして？」

「どうしてだど？ そんなことを言われて腹の立たない奴がいるのか」

「そうかな……。でも、私は私の言葉が嘘だといった。貴方を好きになつたことは嘘だつて。でもき、だとしたらその言葉だつて嘘かもしれない」

「ああ……。？」

「何が本場で何が嘘なんて、結局は誰にもわからない。私が言ったことは、半分は本当で半分は嘘だよ。私は貴方が好きだと言つた。それは、半分は貴方を味方に付けなきやならないと思つたから口にしたことかもしれない。でも半分は本当の気持ち。貴方の強さに憧れたから。貴方のことが嫌いだと言つたのは、半分は貴方のことが心の底から嫌いだから口にしたこと。でももう半分は、照れ隠しみたいなものだよ。どちらの言葉を信じるのかは、貴方が決めてよ」

「……。そして、お前はその言葉ですらも嘘かもしれないと言ふのだろう」

「うん」

「……。普段なら、そうした小賢しい理屈をこね回す阿呆はすぐさま斬り捨てる所だ。俺の怒りは理解しているな？」

「うん……。悪いな、とは思つてる。一応」

「ふん。まあ良い。いい加減、お前のそうした物言いにも慣れてきたところだ。他の妖魔や人間がそんな真似をすれば滅ぼしてやるところだが、近頃ではお前に腹を立てても仕方がないという気もしてきた。ヒトが犬や猫を愛玩するというのは案外こういう気

持ちなのかもしれない。ペットに爪を立てられて本気で腹を立てるのもおかしいか」

「……貴方も大概、失礼な言い方するよね」

「お前にそんなことを言われる筋合いはない」

「はいはい。すみませんでした。……ねえ、イルドウン。貴方は、オルロワージュみたい
に寵姫を持つたり、セアトみたいに従騎士を持つたりはしなかったの？ 誰かを虜化し
たり、好きになったりすることはしないの？」

「何だ、急に」

「あなたの話を聞きたくなったんだ。いけない？」

「俺が必要とするのは俺だけだ。他者は必要ない。虜化や支配などに興味を持ったこと
はないな」

「そう……」

「妖魔や人間が愛だの恋だのと騒ぐことが俺には理解できん。……たとえば、蟬は何年
ものあいだ地中で暮らし、成虫になり、地上へ飛び出てからは長くても一か月で交尾を
終えて死んでいく。そうした生態に浪漫を感じる者もいるのだろうが、生憎と俺はそう
ではない。蟬の愛などに興味は持てない。妖魔からすれば蟬も人間も似たようなもの
だ。たかだか一世紀未満の寿命しか持たずに生まれ、瞬きの内に死んでいく。馬鹿馬鹿
しいとは思わないか」

「さあ、どうだろうね？ 何十年何百年と生きていけば私もそんな風に思うのかもれない。でも、愛の尊さと時間の多寡とは関係のないものだと思うな。たった一瞬で恋に落ちることもあれば、百年かけて告げる恋の一つもあるでしょう。どちらの愛の方が、なんて比べるのは、それは野暮だよ」

「……お前と話していると調子が狂うな。なぜこの俺が恋愛談義なぞしなければならぬのだ」

「私はそういう半妖なんだよ、多分。私にはその力がある筈だし、その力を使って生きていたいと思う。……言ってみればさ、イルドウン。私は私の前に立ち塞がるもの全てを魅了してしまいたいんだ。……それが、私と言う妖魔が望む『支配』というものの在り方だから」

「支配、か……。お前はもはや、自分が人間だと言い張る気はないらしい」

「うん……。ずっと昔に、知り合いに言ったことがあるんだ。正義の役目というのは、悪を魅了することだって。……でも、それはやつぱり間違っていたと思う。誰かの考えを変えてしまうということは……。他者を魅了するということは、結局、洗脳すること何ら変わりはない。私は私のエゴに基づいて誰かの気持ちや思考を捻じ曲げ、自分に都合の良いものにしようとする。私が選んだ生き方というのは、つまるところそういうものだと思う」

「そうか。……お前がそう決めたというのなら、今さら止めはしない。好きにしろ」
「うん。ありがとう……イルドウン」

礼を言うのと、ふん、とイルドウンとは尊大に頷いた。

零姫は先ほどから面白そうに会話を聞いているばかりで、自分から加わろうとはしない。久しぶりに訪れたファシナトールをときおり懐かしそうに眺めまわしては穏やかな笑みを浮かべている。

ようやく一行が根つこの町の入り口に辿り着いた頃、眼前から一人の女性が駆けてくるのが見えた。成人女性が人の目も気にせず全力で走っている姿はやや滑稽ではあったが、しかしそれが誰なのかにすぐ気が付いたアセルスは思わず自分でも走り出していた。

こんなに小さいひとだったろうか。まず脳裏に掠めたのはそんな思いだった。出会ったところは、まだ自分はろくに働いたこともない学生で、相手は手に職をつけ、自ら生計を立てていた。敬語を使われはしても、どちらかといえば相手を「大人」として捉えていたアセルスにとっては、久方ぶりに会う彼女の体は随分と華奢に感じられるものだった。それは自分が成長したからなのだろうか。時の流れというものに今また不思議な感慨を覚えつつ、アセルスはこみあげる思いに喉を震わせながら彼女の名前を呼んだ。

セルスの体臭ばかりで、およそ命と呼べるものは何一つ味わうことが出来ない。それが妖魔というものだ。ジーナは確かに知っていたが、しかし目の前のアセルスをそれと認めることはできず、ジーナはわずかに身を強張らせることとなった。

「ジーナ？」

アセルスが驚いたようにジーナの顔を覗き込む。しかしその肉体に熱はなく、鼓動はない。凍り付いて微塵もせず、在るべき姿を常態として千年を超える生物の体。

「ジーナ……」

困ったようにアセルスが微笑んでいる。考えていることが伝わったのだろう。悲しそうに、しかしどこか慣れたことのように上手く傷ついて見せる。アセルス。ああ、この方は変わってしまったのだ、と根っここの町のお針子ジーナははつきりと悟った。彼女はもう自分と同じ人間ではない。紛れもない妖魔なのだ。

「ジーナ。私はね……」

「アセルス様」

謝罪めいたものを口にしようとしたアセルスを遮り、ジーナはどこかせがむように彼女の体をさらに強く抱いた。

「アセルス様。きつと、お辛いことがあったのですね……悲しいことが、貴方の身に降りかかったのですね……」

その言葉を口にするために、今は自らの悲しみに酔おう、とジーナと思う……。時が流れて何かが変わってしまった。それは当たり前のことなのだ。自分でもそれは分かっていたはずだった。変わったのは何もアセルスだけではない。かつて自分は家族のために彼女の誘いを断った。そしていま自分には、家族だけではなく自らの店と従業員という背負うべきものがある。全てを捨てて彼女にこの身を捧げるということできない。そんなことはずっと前から分かっていたことなのだから。

その思いが懐かしさだけならばアセルスの体をはねのけることもできた。しかしジーナの味わう喪失感是她女を慰めへと駆り立てるのだった。親愛ではなく、罪悪感によつてジーナはアセルスを抱き返した。13年ぶりの抱擁は優しい打算によつて交わされることとなった。

「ジーナ……ごめん、ずっと、手紙を出すこともしないで……」

「いいんです。アセルス様。もう何も仰らないで下さい。こうして会えた、それだけで、私には……」

「嬉しい。ジーナ……」

アセルスの腕がゆつくりと背中に這わされ、ゆつくりと力が籠められる。指先が穏やかにジーナの背骨をなぞると、思わず声を漏らしそうなほどの快感がはしった。アセルス様？ 驚いて体を離そうとしたジーナは、しかし自らの体が不思議に動かないことに気

が付いた。確かに感じた筈の抵抗感は一瞬の内に萎え、彼女の全身は疲れ切ったようにぐったりと力が抜けている。

「ジーナ」

アセルスが名前を呼んだ。

「はい。アセルス様」

ジーナはいつの間にか、どこか甘えるように答えている。その瞳は潤んだように熱を湛え、頬はうつすらと赤らんでいる。

「旅をして……ようやくわかったんだ。自分に何ができるのか。自分が何をしたいのか……」

「はい……」

「……ああ、こうして、貴方と再会することができて、本当に良かった。ジーナ。ようやくわかったよ。私は……」

ジーナが陶然と見つめる先でアセルスはゆっくりと唇を開いていく。

13年ぶりの抱擁は優しい打算によって交わされた。しかしジーナにはまだ、妖魔に抱かれるということの意味がわかってはいない。かつてジーナはアセルスを愛していた。それが肉欲によるものか、はたまた幼い乙女の夢想的な憧れによるものかは定かではないが、しかしいずれにせよ時は流れたのだ。己の心を過去から取り戻し、ためつす

がめつ眺めることはできない。時は流れた。いかな感情もまたその時の中では色褪せることからは逃れられない。久方ぶりの再会に懐旧が湧き、変わってしまった友人の体への違和感に恐怖と悲しみを覚え、しかしてジーナの身に残る愛はといえれば——それは、出会ったころのものとはやはり同じものではない。アセルスのことを好きだ、と思う気持ち、その思いは——時の流れに浚われて少しずつ少しずつ変質してしまった。下半身を痙攣させて跪くような熱く苦しい想いは時の中に削られ、分別と理性とによつて懐旧という名に糊塗されてしまう。

しかしジーナはこうして妖魔アセルスに抱かれた。彼女という肉の暖かさを知り、彼女から発せられる芳香を嗅いだ。自らを取り巻く時間が、空間が、不意に粘性を帯び、柔らかに自分たちを包んでいくのをジーナは知った。

禁断の呪文を囁くかのようにアセルスの唇は踊る。

「——ジーナ。貴方のことが好きだよ」

渴望していた筈のその台詞は、しかしとても恐ろしい言葉のような気がした。悲鳴を上げ、脱兎のごとく逃げ出してしまふべきなのかもしれない。けれども——ああ——わかつている。そんなことはできっこない。その言葉は蜜であり毒である。飲む者に不死をもたらす「rb:変若水 > おちみず」であり、ふしだらな退廃へと誘う阿片なのだ。逃れることなどできはしない。

貴方が好きだ。貴方が欲しい。アセルスは言った。唇が首筋に落とされ、皮膚を甘く食んでいく。引き攣るような痛みと共に、息苦しいほど熱い快樂が首から顎へと昇ってくる。

きつと、妖魔の君にその身を捧げた姉もこういう気持ちだったのだろう。支配者に身も心も委ねて服従する被虐的な感覚。それは紛れもない性の悦びだ。焚火に薪をくべるようにこの命をアセルスという名の炎へと投じれば、焦げ付くほどの狂おしい快樂が待っている。

「ジーナ」とアセルスはなおも言う。「貴方が欲しい」

「いけません、アセルス様」

ジーナは弱々しく呻いた。

「貴方は……この私に家族を捨てろと仰るのですか……？」

血を吐くような思いでジーナはその言葉を口にした。愛する人を拒絶する苦しみに涙さえ零して。

「私がどれほどその言葉を待ち望んでいたことか……けれど、私にはその言葉に頷くわけにはいかないのです。貴方だって、それはわかつている筈でしょう。なぜと言って、その言葉は、貴方がその言葉を口にする意味は……。いけません、アセルス様……そんなことをしたら、貴方はもう……」

悲嘆に暮れるジーナが肩を震わせながら必死に絞り出したその声に、アセルスはふと悲し気に眉を寄せ、しかしきつぱりと答えた。

「私はもう、人間には戻れない」

「そんな……」

決別の言葉にジーナは言葉を失い、目を見開いてアセルスを見つめる。

「大丈夫だよ、ジーナ」

アセルスは困ったように目を伏せ、しかし優しく微笑んだ。

「私は何も奪わない。貴方を束縛することも、強制することもない。貴方はあくまでも貴方のままでし、仕立て屋や貴方の家族のことも、その関係は今までと何ら変わることはない。私は貴方の血を吸ったりはしないよ、ジーナ。私はただ、貴方が欲しい。貴方の体が、その心が欲しい。だから、そう……私は、貴方を『支配』したいんだ……ジーナ。血の契りではなく、虜化と言う魔力の産物でもなく……支配というその言葉だけで貴方と繋がりたい。貴方を愛しているんだ。ジーナ」

それはあまりにも甘美な誘いだ。しかしジーナはそれほどまでに悲しい響きを孕んだ誘惑もまたないように思われた。

自分にとってなんと都合の良い服従なのだろうか。妖魔に恋をした乙女に与えられる選択肢は零と一しかない。全てを捧げるか、全てを諦めるか。針の城で人形となった

姉のように意思を無くしてしまわなければアセルスの側にいることは叶わないものと思っていた。しかし今、彼女が口にした契約の言葉はまるで異なっている。自分は虜化されて寵姫となるのではない。どこまでも人間として彼女を愛してほしい、そう懇願されているのだ。アセルスが口にした支配というその言葉はあくまでも言葉でしかなく、何らの隷従を保障するものではない。それでもアセルスはジーナを「支配」するのだという。その言葉の、言葉だけの、あやふやで不確かな関係で結ばれていたのだという。支配したいというその言葉に頷いたからといって何が変わるわけでもない。時を経てばまた心も移ろうゆえに、いつか彼女を憎むことも蔑むこともあるだろうに、それでもアセルスは言葉以上の契りを求めない。いつそ強引にでも牙を立て、音をあげて乙女の髓液を啜りあげさえすれば永遠に変わらぬ愛が手に入るというのに。たとえ理性では拒んでしまおうとしてもジーナとて無理やりにもそうされた方がずっと心やすらかなことであるというのに。

旅の終わり、辺境を目指した物語の果てに——アセルスが望んだことは、支配という「言葉」だった。砂漠の果てに立つ陽炎のように缥缈としたそんな幻想こそをアセルスは求めていた。

「それは……」とジーナは答えた。「なんとロマンチックで、しかし……辛く苦しいことでしょう」

「ああ、そうだね……。きつと、虜化された方がずっと楽だろう。虜化されてしまえば、自らの心が変わっていくことに怯える必要もない。妖魔になつて、老いることも病めることもなく暮らしていれば永遠の愛というものが手に入るのかもしれないけど……。でも、そんなものを私は欲しいとは思わないよ。私が望むのは、いま、この時に交わされる一瞬の言葉だけでいい。それから先に貴方の心変りがあつたとしても、私は後悔しない」

「ひどい、アセルス様……。醜く老いていきながら、それでも貴方を想い続けると仰るのですか？ 皺だらけの老婆になつても、乙女のように恋をしろと……？」

「ああ、そうだ。ジーナ。私と共に戦つてほしい。私と一緒に、時間というものに立ち向かつてほしい」

「わ、わたしは……」

戸惑いに声を振るわせてジーナは視線を彷徨させた。嬉しい、と思つた。しかし同時に、何かが恐ろしいとも思うのだった。愛に溺れていくことは恐怖だった。理性では恋をして、本能ばかりが恐怖していた。自分は今にも首を縦に振りたがっている。アセルスの胸に抱かれ、優しいその感触を味わうだけで昇りつめそうになる。耳朶を震わせる優しい声色、無数の花々に囲まれるような甘い香り。この「r b・女 > ひと」を、愛している。そう思つてしまつている。大切に感じてはいてもそれは思い出の一部で、

自らの「r b・住処」> 根っこ」を捨てて探しに行くほどではなかったはずなのに。あの日あの夜別れた時には私は行けないと決別した筈だというのに。——こうして久方ぶりに再会して抱かれてみればどうだ、忽ちのうちに心は蕩け屈服してしまいたくなっている。そうだ。分かっていたことだろう。これが魅了というものなのだ。時間や意思など何ら斟酌することなく、あたかも物語を書き換えるかのように運命を決定づける魔の一手。抗うすべなどない。そうだ。彼女が何を言ったとしても、自分は既に魅了されている。彼女にはその力がある。仕方がない。仕方がないことなのだ、これは。幸いにも彼女は言ってくれていてではないか。家族を奪いはしない。吸血されもしない。望むのは言葉だけなのだ。何も迷うことなどは無い。約束の言葉を口にさえすれば何もかもを終わりにすることが出来る。これはまさしく魅了だ。魅了とは、「r b・魅」> ばけもの」が人の心を「r b・了」> おわり」にすることなのだから。だって彼女を愛してる。逆らう理由がどうしても見つけれられない。自分は魅了されたのだ。妖魔には誰も逆らうことができないのだ。恭しく膝をつき、この魂を捧げますと言えがいい。自分は貴方という主人に仕える哀れな奴隷ですと。

——そう考えた時、ふとジーナの脳裏に仮面をつけたメイドの言葉がよぎった。私の主は私です。果敢にも黒騎士に立ち向かったディアデームが口にしたあの言葉。

はつとした。アセルスの力に飲み込まれてはならない。魅了。虜化。彼女はそんな

ことを望んではいない筈だ。この力は、彼女自身が抑えることのできない呪いのようなものかもしれない。だとしたら自分はそんなものに飲み込まれてしまふべきではない。

「アセルス様」

ジーナは呟く。

支配したい、と彼女は言った。その言葉に頷くことは容易かつた。しかしそれはやはり違うことなのだ。このまま彼女が持つ魅了の力に膝をついてはならない。

「私の主は私です」。そうだ。この「r b : 女 > ひと」を孤独な王にしてはいけない。支配したいというのなら、私もまたこの「r b : 女 > ひと」を支配しなければ。どちらかが上でどちらかが下である必要はない。支配という言葉で繋がりが合うとしても、対等であつていけない理由などはどこにもない。

「アセルス様」

もう一度ジーナは言った。驚くほどの勇気が胸の内に溢れていくのが分かつた。初めて自らアセルスの腕を取り、抱きすくめて手繰り寄せる。私も貴方を愛しています。そう言つて口づけを交わした。私は私の意思でこの「r b : 女 > ひと」を愛す。そう決めた。泣き出しそうなアセルスの表情から、静かな歓喜が伝わってくる……。

ちっほけな町娘、お針子ジーナはこうしてアセルスと結ばれた。それは長い妖魔の歴史にあつて、初めて牙を介さずに繋がった恋人であつた。



セアトに敗れ、滅びた筈のラスタババンが現れ、ジーナを攫おうとした一件をアセルスが知ったのはその夜半、ジーナの部屋のベッドでのことだった。

「ラスタババンが？」

「はい。あのディア……メイドさんとゾズマ様が助けてくださいました」

「そう……」

アセルスは申し訳なさそうにジーナの体を背後から抱くと、ジーナの首筋に顎をのせたまま「ごめんね、巻き込んでしまつて」と静かに謝つた。吐息が耳にかかる心地よさうつとりと目を閉じたままジーナは、私のことはいいいのです、と首を振る。

ジーナとの暖かな夜を過ごしたアセルスは次の朝、ラスタババンの友人でもあるイルドゥンにさつそくこのことを話した。そもそもラスタババンと出会つたのは何年も前のことであり、交わした言葉も大して長くはなかったため、ラスタババンという妖魔についての印象がそれほど深くはいアセルスは首を傾げながら尋ねる。

「確かに……ラスタババンさんは私がこのファシナトウールを変えることを期待しているとか言っていたような気もするけど……でも随分昔のことだし」

「時が来た、ということだろう。お前が妖魔の力にも慣れ、かつこの俺とゾズマ、そして妖魔の君にも匹敵する力を持つ零姫が与しているのだから。これほどオルロワージユを倒す好機もそうそう無いと考えたのだろう」

「だからって……ジーナを利用して私を操ろうだなんて、そんなのはおかしいよ。何か事情があるんじゃないの？ セアトに負けて誰かに脅されているとか」

「無いな」イルドウンは言下に否定した。「そもそもあいつはそういう奴だ。何を企もうとも不思議ではない」

「そういう奴って……」

アセルスは戸惑ったように言葉尻を濁す。

「仮にも友人でしように」

「確かに奴は俺の友だが、その意味を考えたことはない。あいつはよくよく謀の好きな妖魔だからな。俺もよくはめられる。奴が何か面倒なことを考えているのなら、闘って滅ぼせばいい。それだけだろう」

「それはまあ、そうだけど……いいの？ あなたの友達なんでしょう？」

「だから何だ？ お前の言うことは相変わらずよくわからんな。そんなことよりもなぜあいつはさんづけで俺は呼び捨てなのだ。その方が気になるんだが」

「日頃の行いでしよう」

「……」

むつつりと黙り込んだイルドゥンには構わず、アセルスは聳えたつ針の城を見上げた。あそこにはオルロワージュがいる。明日、アセルスは自らを娘と呼んだ妖魔の君に謁見する予定だったが、やはり予想通りそこに辿り着くにはいくつかの関門が待ち受けているようだった。黒騎士ラスタバン、一度は敗北している金獅子姫。そして、

（白薔薇……）

心の中でアセルスは呟き、弱々しくそつと目を伏せる。彼女の言葉を思い返すだけで、胸の底が抉られるように痛む。彼女は何と言ったのだったか？ ……そうだ、白薔薇姫は言った。自分にはオルロワージュに会う資格などはないと。一億年を生きる不死者に対して口にできるだけの台詞を持ちはしないのだと。

彼女は明確な蔑みさえ浮かべてアセルスを見下ろしていた。そして彼女はその唇ではつきりところ言ったのだ。オルロワージュを愛している、と。

明日、アセルスはオルロワージュに会い、いくつかの言葉を交わすだろう。それはすなわち、白薔薇姫が告げた言葉との闘いでもある。

自分はいま、初めて彼女の言葉に逆らおうとしているのかもしれないとアセルスは思う……。旅の途中、彼女の言うことはみな正しかった。自分はただ、母を追う小鴨のように付き従っていればよかった。だが今は違う。白薔薇姫とアセルスはいま、敵対して

いると言っても良い状況にいる。

、そうだ。闘わねばならない。闘う理由が自分にはある。

あの日、闇の迷宮での記憶を自分は乗り越えなくてはならないのだから。

軋む心を抑えるために、アセルスは胸元にそつと爪を立てる。

第三十一幕 帰還／旅人という名の灰

……かつて、妖魔の王とその妃との口づけを永遠のものとするために一片の刺草が大地に投げられた。

刺草は乙女の血を吸うものである。恋に破れた乙女の怨念を、大地の底の情念を呑んで刺草はその棘を成長させる。肥大化し、湾曲し、天を衝くほどに聳え立つ刺草は、見よ、あたかも竜の死骸の伽藍の堂と化して軋み続ける。

温かみを求めて差し出された手のひらを刺草の棘は無情にも切り裂いてしまう。皮を破り、肉を割り、そして鮮血を喚ぶ。

なぜなら妖魔の王とその妃にとつて口づけとはそういうものであったし、永遠とはそういうものでなければならなかったからだ。

巨大化した刺草の中で妖魔の王は長き時を生き、伸長した棘を針のごとく研ぎ澄ませたその場所、その王城。針の城。

千の口づけを一つの記憶として妖魔の王は百億年を生き、千に一つの恋煩いをいつしか物語としてまた別の百億年へと挑み続けて怪物となる。そしてその物語の頁を白薔薇の姫は静々とめくり——、百億年の物語の百億の頁を超えて、いま新たに小さな文字

が刻まれる。

妖魔の君、オルロワージュの血を享けた愛し子。

支配者を継ぐ娘。

万魔の姫。

世界でただ一人の半妖、アセルス。

フアシナトゥールの中心に君臨する遙か高き城の門をアセルスは訪れる。身に纏うドレスは深紅。小手を覆う袖飾りには赤薔薇の意匠をあしらい、長い裾を翼のようにはためかせて颯爽と歩む。

半世紀にも満たない旅を終えて帰還した彼女を城の住人は無関心を装いながらも腹の底では嘲笑と共に出迎える。針の城を逃げだしておきながら結局は妖魔の王に屈するためには舞い戻ってきたのだと。長命を誇る妖魔にとつては瞬きにも等しい時間だったことだろう。オルロワージュの手を逃れはや千年をも超える零姫に比べてみれば、しよせんは半妖、百億年を生きる妖魔の王に比べれば、しよせんは妖魔もどきであると。アセルスの手がゆっくりと門を叩く。

それでも、旅の記憶は無かったことにはならない。たとえ微々たるものだとしても、旅したことを嘘にはできない。臆することはない。卑屈になる必要もない。

力強い目をしていて。この場所を逃げ出した時とは違う。

その眼に宿る光はけして純粹と言えるものではなかったし、妖魔に特有の傲岸なものでもなかった。しかし前を見つめる彼女の表情に迷いはない。深く静かな覚悟を秘めてアセルスは高らかに告げる。

我が名はアセルス。——門を開けよ！

◇

……暗い目を、していた。

どこを見つめるというのでもない。ただぼんやりと下を向いて、ぶつぶつと何事かを呟いている。投げやりで、無気力で、今にも死んでしまいうる虚ろな目。かつて相對した時とはまるで違うその姿にアセルスは少しだけ驚き——そしてほんの僅かな既視感を覚えるのだった。

きつと、こんな姿をしていたのではないか、と思う……。この手で赤薔薇を殺し、ボロの星で呆然自失としていた自分とこの男は、おそらくは似た目をしているのではないか。

何かをただただひたすらに呪っていた。この世の理不尽を、運命というものの惨たら

しさを憎まずにはいられなかった。

「セアト……」

呻くような嘯き声にその男は——セアトはうつそりと顔を上げる。

「アセルス……」

濁り切った声色で憎々し気にその名を呼び、セアトは顔を歪ませて立ち上がる。その姿はもはや、美麗な黒騎士のそれではない。虫食いだらけの襤褸を纏い、奇妙に蠕動する闇を引き連れて——影騎士セアトはアセルス達の前に立ちはだかる。

「俺と、闘え。アセルス」

「セアト……その姿は……」

「俺と闘え、アセルス」

ここちらの言葉が聞こえていないかのように、ぐる、と喉を鳴らしてセアトは静かに吠える。

「しつこい奴だ」うんざりした様子でイルドウンがため息をつく。「あれだけの醜態を晒しておいてまだ妖魔のつもりでいるのか？」

「黙れ、イルドウン。今の俺は以前の俺ではない……。そうだ……。俺は、一人じゃない……」

ぎり、と奥歯を噛みしめる。セアトの目にそこでようやく光が灯り——しかしその力

強さに反して、その姿は陽炎のように霞み、明滅を繰り返し始めた。

それまで黙っていた零姫の表情に静かな哀れみが浮かぶ。

「自分の姿が見えていないようじゃな。今のお主はこの世の理から存在すら消えかかっておるといふのに」

「なに……？」

「闘う前から勝負は見えておる。セアトよ。まだわからんのか？ 今やお主はちっぽけな邪妖に過ぎん」

「ふ……」セアトは口元を歪める。「それは勘違いというものです。零姫。俺は人を超え、妖魔すらも超えた……もはや妖魔の掟ですら、この俺を縛ることはできない。そうだ！ ついに俺は手に入れたのだ。オルロワージュ様にすら匹敵する力を！」

ぎらぎらと目を輝かせるセアトに零姫の激しい言葉が飛ぶ。

「思いあがるでないぞ、セアトよ。貴様ごときの腕がオルロワージュに並ぶなど、百億年早いわ！」

「……零姫」声押し殺してセアトは拳を握る。「私の言葉が真実かどうか……全ては戦ってみればわかること」

「格の違いもわからぬ身の程知らずが……。貴様ごときがこの妾に勝つつもりか？」

セアトは首を振る。

「今の私はあの方の命で動いている身ではありません。用があるのは……そこにいるアセルスのみ。叶うなら、貴方には退いていただきたい」

「……笑わせるな、小僧」

冷たく目を細めた零姫は言うが早い幻術で生み出した黒猫をセアトへ放つ。黒猫——死の呪いに満ちた術法生物は触れた瞬間に敵をシヨック死させる筈であった。

しかし、セアトの胴体へと触れた黒猫はその瞬間、とぷり、と吸い込まれるようにして消え失せる。セアトの黒装束——身に纏うその闇に吸い込まれるようにして。

不可思議な現象を目にした零姫はセアトを睨みつける。

「貴様——セアト。その力は……」

「貴方は既にご存知の筈だ。これは妖魔の君の血の力……。貴方がオルロワージュ様を吸血したように、アセルスの血を吸って俺はこの力を手に入れた。だから……今ではこんなこともできる」

ゆつくりと、何の警戒心も抱かせぬほどの静謐さでセアトは膝をつき、床に手を当てる。するとその手が触れた地点から波紋が広がるようにして波打つ闇が伸び、瞬く間に零姫とイルドウンを飲み込んでいく。

「何度も言わせるな」

イルドウンは静かに呟く。

「この程度で俺を倒せるとでも思っているのか？」

「そうだろうな。だが容易く出られるとも思ってはおらん。決着をつけるには十分な時間だろう。俺はアセルスを倒す。貴様は闇の中で黙って見ていろ」

言い捨て、床から手を放すセアト。零姫とイルドゥンは蠕動する闇の中に沈み込み、ついに消えてしまう。

「舞台は整ったぞ……アセルス。もはやお前を守る者はいない。これが最後の戦いだ。剣を取れ、アセルス」

それまで口を挟むことのなかったアセルスは、どこかへと消えた仲間を心配すること、殺意に満ちたセアトの言葉に怯えることもなく、ただ淡々と問いを発した。

「ハウゲータさん達はどうしたの？」

「なに？」

「あなたの従騎士達はどこへ行ったの？」

「それがいま、何の関係があると言うんだ？ これは俺とお前との闘いだ」

「あるさ。私はハウゲータさんと約束をした。彼女に負けない物語を見つけて見せる、と。私はまだその誓いを果たしていない。これが最後の戦いだというのなら、その前に彼女と言葉を交わしておきたい。こんな大事な時に彼女たちがいないのはおかしいでしょう」

「残念だったな、アセルス。その誓いを果たすことはもうない。あいつらは……我が従騎士はみな、俺が喰った」

「……どういふこと？」

さつと表情を変え動揺を見せるアセルス。

「なぜそんなことをした。彼女たちは、あなたのために戦っていたんだろう」

「そうだ。あいつらは俺のために存在した。主のために生き、主のために滅ぶ。それが従騎士の定めというものだ。強くなるために……俺は、奴らの血を吸ったのだ！ わかるか、アセルス！ すべては貴様を超えるためだ！」

顔を歪め、苦し気に言葉を絞り出すセアト。悲痛さえ滲ませるその表情にアセルスは悔し気に呻いた。

「馬鹿野郎……」

「なに……？」

「あなたには帰る場所があったんだ。あなたのことを想うひと、愛してくれる女性があなたにはいたんじゃないのか!? どうして、あなたはそんな簡単に居場所を捨ててしまえるんだ!」

「簡単に、だど!? ふざけるな！ 俺がどれだけの思いでこの力を手にしたと……!」

「……」

「……旅人は、自らの場所を愛せぬが故に棲み処を捨てて足を踏み出すのが常だ。今いる場所を愛することが出来るなら、己の全てを受け入れ肯定することが出来るなら旅立つ理由などは無いのだから。貴様とてその一人の筈だぞ、アセルス。貴様は針の城を逃げ出したのだ。貴様がフアシナトゥールへ来なければ、白薔薇姫を連れだしなぞしなければ、俺はこんな場所に立つてはいなかった……！」

「その点に関してだけは、私の非を認めるよ、セアト。だけどね、だからと言ってあなたに命を狙われることを甘受する気にはなれない。あなたにそこまで憎まれる理由が、私にはわからないんだ」

「ああ、そうだろうとも」憎々し気にセアトは呟く。「持てる者は自らの幸福に気づくこともなく、無自覚に敗者を見下すものだからな」

「私が一体何をした？ どうして、あなたとの戦いで紅は死ななければならなかったの？ その命を散らさなければならぬほどの罪が私にはあると？」

「ああ、そうだ、アセルス……！」

呪詛を吐き出すようにしてセアトは答えた。

「貴様のような存在はただそこにいるというだけで俺を苦しめる。私が何をしたかだど？ ああ、そうだ、確かに貴様は何もしていないとも！ 何もしていないにも関わらず、貴様は運命に選び取られたのだから。何の努力も研鑽もなく、貴様はオルロワージュ様

の血を享けた。まったくの偶然で貴様はこの世の支配者となることを許されたのだ！

これが理不尽でなくてなんだ！ 貴様のような奴がいるから、俺は……！」

「そうか、あなたは……」

血走った目で叫ぶセアトに、アセルスはようやく得心がいったというようにはつとして、それから僅かな戸惑いを見せる。セアトの絞り出した言葉全てを逆恨みと切つて捨てることは簡単だった。セアトの言葉こそ理不尽ではないか、という苛立ちを覚えもした。——それでも、どうしてもアセルスにはそれができなかつた。なぜならそれは——

「私が何もかもを手に入れてここにいますと思っっているなら、それは違ふよ、セアト。私だつて、多くのものを失つてここにいます。快樂だけを享受して旅を終えた訳じゃない。……だから私を許せと言うのは筋違いというものかもしれないけれど、少なくとも、私にはあなたが思っているほど全てを思いのままにしてきたんじゃない。……そんなことを言うのと、またあなたはそれを持てる者の傲慢だと怒るのかもしれない。でもそれはきつと……」

そこまで口にして、アセルスは悲しそうに俯いた。

「あなたが言っていることは、つまりこういうことなのか。平等であることが、全ての者が報われることが……『正義』が、あなたの望みだと」

「違う。俺はただ、貴様が許せないだけだ。正義などではない……！」
「そうかい。……わかったよ、セアト」アセルスは頷き、剣をそつと構えた。「私には、あなたと戦う理由がある。認めるよ……」

そう言つて、胸元に剣を翳したアセルスの髪は蒼く染まり、右手の小手は赤い燐光を放つた。妖魔化を遂げて剣を振り払うアセルスの小手からはらりと薔薇の花弁が零れ落ちる。

対峙するセアトは祈るように妖魔の剣を掲げ、眼前へと翳す。

「ハウゲータ。ウロネブリ。……アルキオネ。俺に、力を貸してくれ……！」



それは美しく燃える海だった。赤々とうねるように爆ぜ、かつまた波立つように火の粉を放つ海だった。影騎士セアトが振るう妖魔の剣——その刃先から零れ出す魔力の奔流が怒涛となつてアセルスを襲う。炎の海は瞬く間に針の城の一室を呑み込み、アセルスの退路を断つた。

「アセルス！」

吠え猛るセアトが剣を突き出す。かろうじて上半身を反らして避けるアセルスの背

を高熱の焔が舐め、たたらを踏んだその隙に第二撃が撃ち込まれる。咄嗟に剣で受けたアセルスははっと顔色を変えた。自らの持つ妖魔の剣——罌十字が軋んでいる。妖魔の剣の鏢に咲く白薔薇が見る間に色褪せ萎れていくのだ。あらゆるものに死を運ぶ腐敗の力——その持ち主の名をアセルスは知っていた。森の従騎士ウロネブリ。

その炎は従騎士アルキオネのもの。その水は従騎士ハウゲータのもの。セアトに仕える三体の妖魔が持つ力がいま、三位一体となつてアセルスを襲う。

「これが」ぎり、と歯を噛みしめ、アセルスが叫ぶ。「こんなものが、お前の望んだ力か！ セアト！ あなたを愛する者をその手にかけてまで！」

怒りのままに剣を叩きつけるアセルスに、セアトもまた苦し気に答えた。

「俺は……今だつて後悔している。こんなことをしなければ良かった。いつまでもあいつらと一緒にいれば、と……。それが俺の弱さだ。ならば俺は俺の弱さを越えなければならぬ。強く！ 何よりも強く！ そうあらねば、俺は息をすることすらままならない！ この苦しみが貴様にわかるか！ アセルス！」

顔を歪めたセアトは左手で外套を払い、腰に繋いでいたヘビーレールガンの撃鉄を引いた。その途方もない反動によって左腕は碎け散るが、しかし次の瞬間、血は闇に滲むようにして消え、腕は瞬く間に再生していく。

「……わかるかい」

弾丸に腹腔を撃ち抜かれたアセルスは顔を青ざめ、焼き切れた傷跡を押さえた。「嘘をつくな。俺はイルドゥンとは違う。虚言を弄して取り入ろうなどと思うな」

憎々しげに吐き捨てるセアトに、アセルスはどこか悔しそうに唇を噛みしめた。それが嘘であつたならこの男のためにもどれだけ良かっただろう。

「嘘じゃない」

「まだ言うか!」

激昂したセアトは矢継ぎ早にレールガンを放ち、その度にアセルスの体は撃ち抜かれ、蒼い血が滔々と流れだす。

「いいや、セアト。本当だよ……。分かり合うことができない方が、まだ幸福だったかもしれないのにね……。でも、私にはわかるんだ」

「黙れ!」

再び叫んだセアトに、アセルスもまた応えるようにして叫んだ。

「わかるさ! だって貴方の願いは、人間のものじゃないか!」

「な……」

その言葉を耳にした途端、セアトは殴られたかのようによろめき、茫然と顔を戦慄かせた。

「ちがう……」

老人のようにしゃがれた声で呻くセアトに、アセルスは痛ましげに視線を背ける。

「だって妖魔は後悔なんてしない。誰かに嫉妬することも、己の不運を嘆くこともしない」

「違う……。俺は強くなった筈だ！俺は人を超え、妖魔さえも越えた！影騎士となつたのだ！」

「強く、なりたかつたんでしよう？自分が何のために生きているのかがわからないから……。生きていてもいいのか、生きる価値があるのかを信じていることができなかつたから……。だから、強くならなければならなかつた。自分よりも優れた者が妬ましいから、蹴落として勝ち誇らなければならなかつた。自分で自分を愛するために、誰か別のものを見下さなければ生きていけなかつた。それは……。人間なら誰しもが思うことだ」

「違う！俺は人間じゃない！」

「別に貴方を否定しているわけじゃない。もとは人間の私にだってそういう部分がある。……いいや、そういう部分だらけかもしれない」

「黙れ！アセルス！俺はお前とは違う！俺は、俺は……！」

「私は誰かを守らなければならぬと思つていた。自分の価値を手に入れるために、誰かを守るだけの強さが必要だと。だから逃げ出したんだ。この針の城から」

「俺はただ薄汚い人間が気に食わないだけ……。お前のような半妖がのさばるのが許

せないだけだ……!」

「助けて欲しいと、そう思ったときにだれも私を助けてはくれなかった。だから私は、目に映るすべての人を助けてやらなけりやならないと思っただんだ!」

「俺は……お前とは違う……!」

苦し気に呻いて、セアトは俯く。

「……助けてほしいと、そう思った時に誰も助けてはくれなかった……。だから、俺は見下してやりたかった。強くなって、勝ち誇って……自分には生きる価値があるんだと思いたかった。だから……」

口にして、はっとセアトは顔色を変えた。狼狽えたように後ずさりし、恥じるように両手で顔を覆う。

「やめろ……俺の心の中に入ってくるな……!」

裏返った声で拒絶するセアトを見て、アセルスの顔が悲し気に曇る。

「お前なんかと出会わなければ良かった。お前さえいなければ俺は俺のままですられたのに……! お前といると俺はどんどん惨めになっていく。見たくもないものを見せつけられて、俺は……!」

「……セアト」

「黙れ……。俺を憐れむな……。……ああ、俺は弱い。だから……。俺は、お前を倒さず

にはこれ以上前に進めない……………」

「……………ああ」

「俺はどうすればいい……………？ どこに行けばいい……………？ もう……………あいつらはどこにもいない……………どうすることもできない……………」

掠れた声でセアトは囁く。

「だから、私がここにいます」

頷いて、穏やかな声でアセルスは答えた。

「悪徳に満ちたこの力で、どうすることもできないこの状況を『支配』するため……………貴方の心を捻じ曲げてでもその先へ進めるために」

アセルスはまっすぐにセアトを見つめた。

「お前を……………魅了してやる」

ゆら、と剣は揺れた。青い燐光の軌跡を伴い、室内に不可思議な魔方陣を描くようにして。アセルスの持つ妖魔の剣が微細に震え、唸りを上げる。

「セアト……………」

ゆつくりと、覚悟を込めてアセルスが呟く。誰かの心を殺すとき、今がまさにその瞬間なのだ。

ぎちり、と剣が哭く。セアトの持つ妖魔の剣が夥しい錆と灰とを剥落させながら漆黒

の力場を放つ。

「アセルス……」

絶望に身を焦がしながらセアトは呟く。全てを賭け、全てを捨てて、全てを終わりにするために。

この世に正義があつたなら出会わなかつたはずの両者がいま、己の存在を貫くために悪を振りかざして対峙する。

そして両者は叫んだ。意味のある言葉は既に失われていた。ただ祈りに似た何か、願いに似た何か、腹の底から噴き出すだけで、しかしけして分かり合うことはなかつた。セアトの剣がアセルスの左腕を切り飛ばし、アセルスの剣がセアトの左胸を刺し貫く。どうせこうなると思つていた、そんな哀しい顔をしてセアトは膝をつき、ささやかな涙を零して項垂れ、そして――、

生暖かい吐息が首筋に迫り、欲情に濡れた瞳がぎらぎらと血飛沫の中に光る。牙と牙との間で肉が裂け、滔々とこみ上げる血を、アセルスは吸い上げた。いつそ浅ましいとさえ言えるほど音を立て、舌を尖らせ、ああ、と歓喜に声を震わせて吸血する。

「く……」 精魂尽き果てたようにセアトは声を掠れさせる。「お前は俺に、何を……？」

「吸血……」

アセルスは言う。

「ご存知の通りさ。貴方の心はもう、私のものだ。……さあ、立て、セアト」

「ふぎ、けるな……。何が、吸血だ……。半妖のお前に何ができる……」

「さあ、それはどうかな。少なくとも、以前ほど私を憎いと思っではないはずだ」

尋ねられ、セアトは自らの魂の在りかを確かめるように己の心臓に触れ、静かに息を止めた。

「ちくしょう……。何が、魅了だ……。俺の心は、俺だけのものはずだ……。俺は、けして、お前を愛したりはしない……!」

「それでもいいさ。そんなに大層なものを欲しがっているわけじゃない。……別に私は、貴方に平伏せと言っているわけじゃない。貴方の命も、償いも求めたりはしない。それでも——私と貴方の戦いは、今日、ここでおしまいだ」

「アセルス……」

「イルドウンと零姫様を返して、セアト。私はこの先にいかなきゃならない」

「……これが、吸血か……。腹立たしいが逆らう気になれない。馬鹿馬鹿しい……」

「セアト。頼むよ」

「……どうせ、俺に拒否権などないのだろう。零姫も、イルドウンも……。忌々しいが、すぐに戻ってくるだろうさ」

「ありがとう。セ아트」

「……」

投げかけられた礼の言葉にセアトはつかのまきよとんと表情をやわらげ、そして静かにため息をついた。

「……お前には話しておかねばならないことがある」

「……？」

「不思議なものだな。以前ならもこんなことをお前に告げることなど考えもしなかったというのに。……だが、オルロワージュ様の元へ行くというのなら、伝えておかねばならないことがある。いま、ふとそんな気分になった。かつてあのお方が俺に言った言葉、そして……」

セアトは言った。

「よち子、という人間の娘についてだ」

第三十二幕 死亡友誼

その男は笑っていた。穏やかに、友好的な態度をどこまでも崩さずに微笑んでいる。

「これはこれは零姫様、そしてアセルス様も。お久しぶりでございます」

橙色の外套を身に纏い、人形のような笑みを顔に貼り付けたその男——黒騎士ラスタバンは慇懃に口上を述べる。

「……ラスタバンさん」

警戒心も露わに眉根を寄せるアセルス。しかしラスタバンは気にする素振りさえ見せず、アセルスの傍らに控えるイルドウンに目を向けて顔を綻ばせた。

「やあ、我が親友殿。アセルス様のエスコート役、無事に果たしてくれたようで嬉しいよ」

その言葉を聞いてアセルスは訝し気に視線を投げるが、当のイルドウンは面倒くさそうに溜息をつくだけだった。

「お前も懲りないな。……アセルスは俺が連れてきたのではない。この女は俺やお前の話など聞かん」

「なに、それでも構わないさ。言葉などなくともやりようはいくらでもある」

「……それはジーナを襲ったことを言っているの？」

こともなげに言つてのけたラストバンにアセルスは怒気を強めて問いただす。

「何のことでしようか？」

表情一つ変えずに答えるラストバン。

「惚けても無駄だよ。メイド仮面さんとゾズマから話は聞いている。貴方の目的はこの私をファシナトゥールの新たな王として祭り上げること——そうなんでしょう？」

「いいいえ、あれはちよつとした誤解でございまして……。実はセアトの配下がジーナ嬢を狙っているとの情報が入りましたね。彼女を守るために仕立て屋へ赴いたところ、ゾズマ様のメイド嬢に少し勘違いされてしまった、というわけなのですよ」

落ち着いたその釈明にイルドウンは僅かにふむ、と思索してぼそりと呟く。

「まあ嘘だらうな」

「イルドウン……」

ラストバンは呆れたように肩を竦める。

「困つたやつだな、君は。なんだってそう僕の邪魔をするのだね」

咎めるといふよりはむしろじやれつくような馴れ馴れしきで話しかけるラストバンの様子を、アセルスは冷たく睨みつけた。

「前にも言つたはず。私には、貴方のような野望はない、と」

「しかし、貴女はこうして針の城へと帰ってきた」

「……」

「世界を旅し、辺境へと辿り着き……そして零姫様とイルドウンを味方につけ、黒騎士セアトさえも虜にして……。今や針の城はまさに空洞の針というわけだ。たとえ、貴女にその気がなくともその行動には責任が伴うもの。……お気づきですか？ 多くの妖魔がアセルス様の登城を期待と共に待ち望んでいたのを。時代が変わる瞬間がいままさに訪れているのだと……皆が待ち望んでいるのですよ」

「そんなことは」アセルスは唇を噛みしめる。「私の知ったことじゃない」
「そうですか。とても残念です」

悲しそうに目を伏せていたラストバんだったが、やがて気を取り直したように顔を上げた。

「しかし——他の方々はどうか？ 零姫様。オルロワージュ様を倒すのならば今において他にないのでは？」

「ふむ……そうじゃな。悪い話ではない」

これまで黙っていた零姫は重い口を開いた。

「オルロワージュを倒すというのならそれも構わぬ」

「では……」

「じゃがな……今の妾はアセルスに協力する身。悪いがそなたの言うことは聞けぬな。……大體、頼むのであれば最も先に妾に言うべきであろう。それが一番気に食わぬ」

「左様でございますか。……となれば」

「最後は俺か？」

「そうさ、イルドウン。元々、君が王にさえなつてくれれば僕には何の文句もなかったのだ。ぜひ支配者になりたまえ。君がこの世の王で、僕はその右腕だ。これほど楽しいことは無いと僕などは思うがね」

朗らかにラストバンは語り続ける。友人と遊ぶ場所を相談しているときのようないやよきで。

「——そうして、王となったこの俺をいつかお前は蹴落とす気でいるのだろうか？」

ぼそりと、面倒そうにイルドウンが答えると、ラストバンは女性のように軽やかな声で笑い声をあげる。

「無論、時の流れの中ではそういうこともあるだろうが——しかし、問題はあるまい？ 何しろ君はこの僕に負けるつもりなぞ皆目ないのだろうし、ならば気に病むことは何一つないさ。僕たちの友愛は対等性から来るものではなく、あくまでも君という妖魔の無謬性にこそ拠っているのだということを、僕は重々理解しているよ」

「なぜ『友』などという面倒なものを手に入れてしまったのだろうか、俺は」イルドウン

は呆れたように首を振る。「ときどきわからなくなる」

「素晴らしいことだよ。イルドウン。面倒というのはね。この閉塞した妖魔社会においては何よりも代えがたい宝物なのだ。妖魔が尊ぶ美しさ、支配力、……あるいは矜持。そのどれとも「面倒」は違う。面倒！ 素晴らしいじゃないか。僕は君という面倒によつてこの世を愛し、かつまた僕自身を愛するつもりでいる。君もそうしたまえよ。僕とともにこのファシナトールを手中に収めようじゃないか」

「成程な。確かに面倒だ。お前は俺が領かないことも承知の上でその台詞を口にしてるのだろう。その点に関して、俺とお前は対等だ」

「……やはり、駄目なのかな。わが友よ」

「わかっている筈だ。ラストバン」

お前がこの俺の友だというのなら。そう口にする代わりに剣を抜き、イルドウンは傍らのアセルスの背を無造作に押し出した。

「先に行け、アセルス」

「え？ でも……」

「忌々しいがどうやらあれが俺の友人らしい。今までお前の旅はお前のものだと戦いを任せてきたが、今回ばかりはそうもいかん。この俺にも戦う理由とやらがあるようだ」

静かな眼差しでラストバンを見据えるイルドウン。

「ええと……」

行動を決めかねたアセルスが戸惑ったように視線をさまよわせていると、零姫は迷うことなくその手を引いて上階へと進んでいく。

「やつ自らがああ言っているのじゃ、好きにさせればよかる」

「良いんですか？」

「構わん構わん」

どうでも良さそうに零姫は答える。

「なあにが、先に行け」じゃ。良いかアセルス。真顔でそんな台詞をのたまう男を信用するでないぞ。そんな男は馬鹿かナルシストのどちらかか、あるいはその両方に決まっておる」

「……相変わらず腹立たしい妖魔だ。アセルス。その目障りな奴を連れてさっさと行け」

「うん……。わかった。イルドウン。任せて大丈夫なんだね？」
「誰に向かつてものを言っているんだ、お前は？」

不遜な態度のイルドウンを後にアセルスと零姫は次なる階へと進んでいき、そして後には二体の妖魔が残された。



「……君は変わったね、イルドウン」

どこかしんみりとした表情でラストバンは語り掛ける。

「そうか？」

「そうさ。……まさか、君がここまでアセルスに肩入れするとは思ってもみなかった。君は、彼女を守るために親友であるこの僕を倒すというのかい？」

「何か勘違いをしているようだな」

「え？」

「俺がこの場に残ったのは、ラストバン」イルドウンはこともなげに答えた。「俺がお前と戦いたいからだ」

「何だつて？ 君は何を言ってるんだい？」

いぶかし気に眉を顰めるラストバン。

「なまじ『友』などと呼び合うから忘れていたのかもしれない。近くにいると存外に気が付かないものだ。お前はアセルスの知り合いである何とかという人間の小娘を襲い、あのゾズマと対峙した。ファシナトウルでもオルロワージュに次ぐ実力者ともうわさされる程の妖魔と交戦し……そして退けた」

「あれは僕の敗戦さ。ほうほうの体で逃げ帰っただけだよ」

「いいや。ゾズマはそう言わなかった」

糾弾するかのようにイルドウンの瞳が鋭く尖る。

「実力など隠すな。俺と戦え」

「なぜ、そんなことをしなければならんのかね？　僕たちは友達だろう」

「だからだ。お前がこの俺の友だというのならなおさらこの俺と戦うべきだろう」

「君はつくづく……」ラスタバンは困ったように目を見開いてため息をつく。「……まったく、まったく、だよ。呆れてしまうよイルドウン。変わったといったのは取り消そう。君はやはりイルドウンなんだな」

「愚問だな。さっさと剣を抜け」

「やれやれ……」

薄ら笑いを浮かべたままラスタバンは首を振り、ゆっくりと後退った。

「困ったね、イルドウン。こんな筈では無かったんだが……。どうにも最近、やることなすこと裏目にでてばかりのような気がするよ。どうしてだろう」

「御託はいい。剣を抜け」

「はは」と、そこでラスタバンはっこりと微笑んだ。「剣なら既に抜いているさ」

「何——？」

その言葉を聞いた途端、イルドゥンは背後からの気配に気づいて飛びのく。ばさりと
はためいた外套の端を何かが——不可視の物体が貫いた。

「これでも孤軍奮闘の身でね。三対二で何の用意も無く君たちを待ち受けるほど僕は平
和主義者ではない。この部屋はすでに我が領域だ」

「……」

「最後にもう一度だけ通告しよう。——イルドゥン。わが友、わが相棒よ。僕とともに
覇道を歩む気は？」

「ない」

「……そうか。ならば仕方がない」

瞬間、ラストバンはそれまでの柔和な態度を豹変させた。腰にさげたその鞘に剣はな
い——無手のまま、ラストバンはゆらりとその身を震わせた。イルドゥンの眼前でその
姿が不意に消え失せる。

「……」

何かを悟ったイルドゥンは顔を顰め、咄嗟に振り向いて剣を薙いだ。甲高い音を立て
て剣と剣とが激しくぶつかり合い、火花が散る。背後から恐るべき速度で襲い掛かった
ラストバンの攻撃を防いだイルドゥンだったが、追撃に一步踏み出した途端ラストバン
は能面じみた顔のままずっと飛びのき、再び背後の闇の中へと消えていく。

「おい。またか」イルドゥンはほそりと言った。「面倒くさいぞ」

すると部屋はどこからか奇妙に反響するようにしてラスタバンの声が響く。

「……無茶を言わないでくれたまえ。僕はこの世界の誰よりも君の強さを理解しているのだから」

「理解した結果がこれか？　こんな小細工を続けていれば俺を倒せると？」

「そう焦ることもないだろう？　僕との戦いを望んだのは他ならぬ君だ」

「そうは言うがな」イルドゥンはため息をつく。「俺が期待していたのはこんなものではない」

「嫌だなあ、イルドゥン。君らしくもない」快活にラスタバンは笑う。「敵が君の望むものを与えてくれるだなんて、そんな甘ったれたことを願うなど」

「何だと……」

「君が望むのは正々堂々とした戦いというやつかい。それとも、真つ向からの剣戟とでも？　そんなものは——」

空気が震えた。苛立ちに舌打ちしながら再びイルドゥンは振り返り、背後から現れたラスタバンの攻撃を受けようと構え、そして剣を受けた。これまでと同じように容易く逸らすことのできる剣。もはや見飽きたときえ言えるラスタバンの攻撃。しかし——、

「——そんなものは夢想だよ、イルドウン」

「何……?」

手元で何かが爆ぜた。そう感じた瞬間にはすでにイルドウンは吹き飛ばされている。受けたはずの剣がただ力任せに押し負けたのだとようやく気づいた時にはもう遅い。イルドウンの動揺を嘲笑うかのように肉薄したラスタバンの顔は息遣いさえ聞こえるほど近く、その眼光を幽遠と湛えて静かに刺突を繰り返す。溢れるほどの殺意に無意識に反応した右手が震えながら剣の柄を握るもそれすらも見通していたと言わんばかりにラスタバンは優しく微笑み、惑うイルドウンの剣を躲して静かにその心臓を刺し通した。

無言のままラスタバンを睨みつけ、イルドウンはこみあげる血を「ごほり」と吐き出す。鋭いその視線を受け止めながらラスタバンは慈しむように微笑を浮かべた。

ラスタバんに胸を貫かれたまま、しかし黒騎士イルドウンは怯むことなく敵を見据え、

イルドウンの胸を貫いたまま、黒騎士ラスタバンは穏やかに嗤い続ける。

何が起こっているのか考える必要はなかった。そんな気もありはしなかった。何の予備動作もなく気配すら感じさせず、イルドウンはそのまま反撃に移った。だからどう

した——そう言わんばかりに胸を貫かれていることすら構わずに右手の剣を突き出した。だが己を穿っていたラストバンの剣は恐るべき速さで主人の手に戻り、甲高い音を立てて刃を受け止めている。いや——受けられたと思っただのはほんのつかの間で気が付くと受け手は自分になっている。ぎりぎりとは拮抗する力と力のはざままで妖魔の剣が震えた。一合、そして二合と撃ち合うたびに飛び散る火花が妖魔の青白い肌を照らし出していく。剣が重い。焦れたいほどの速度でしか剣は進まず、ようやく到達したとそう思ったときにはラストバンの剣に打ち払われている。不思議に喉が渴いた。息を吸うだけで喉に痛みが奔る。気が付けば今や剣戟の時は粘つくほどの濃度を帯びて刻み続けている。

黒騎士イルドゥンは巨人の一撃ですら素手で受け止める妖魔である。そのイルドゥンが——どうしたことか、事ここに至ってはどうにも認めざるを得ない——真つ向から打ち負けている。ラストバンの無造作な袈裟斬りを僅か一度受けただけで右手は痺れ、体中の骨が軋む。常ならば無表情の顔を顰め、叫ぶようにして呼気を吐き出した。剣を掲げる。ラストバンの攻撃が読めない。妖魔の不死性を恃むイルドゥンの驕慢を暴くかのように繊細な剣形がいつも一呼吸先を行く。剣を振り下ろそうとしたその矢先に水月を打たれた。たたらを踏んだその瞬間にぞつとするような音を立てて妖魔の剣が首筋を薙いでいく。血飛沫が飛んだ。呼吸がままならない。自分が人形にでもなった

かのように動作が強張つていく。穏やかなラスタバンの瞳に見透かされるかのように行動をリードされ続けている。ラスタバンの刺突が右目へと突きこまれた。視界を失うわけにはいかない。思うように動かない体に内心で悪態をつきながら咄嗟に左手で庇えば指が数本斬り飛ばされてぼとりと落ちる。全身に刻まれた裂傷は数重を超え、そのどれもが夥しい血に塗れて濡れている。

「君はオルロワーージュには勝てない。イルドウン」

ラスタバンは言った。淡々と、事実を告げるように。

「敵が自らの望むとおりに振舞い、そして自らよりもほんの少しだけ弱くあつてほしい——君の言っていることは、結局のところその程度のことなんじゃないのか」

「……」

イルドウンは答えない。

「僕がここまでやるとは思つてもいなかつたらう？ 僕の強さに期待していながらしかし君は、まるで歯が立たないとは思わなかつたのではないか。真つ向から斬りあつて負けるとは考えもしなかつた。それが、君という妖魔の限界点だ」

「……」

イルドウンは答えず、血を吐いて膝をつく。

「自分の敗北を受け入れられないただの子供と同じだ。オルロワーージュに固執しても、

そんな理由では勝てない。そんなものは妖魔の力ではないからだ。……僕はずっと考えていたのだよ。弱体化を続けるオルロワージュを前にしてイルドウン、君はあの敗北の日から妖魔の王にただの一度も戦いを挑まなかった。どうしてだい？ 傲岸不遜を気取り世界最強と嘯きさえる君が！

それまでは友を見守る優しい顔をしていたラスタバンの表情はどこか標本を眺めるがごとく冷酷なものへと変貌していた。

「ねえ、イルドウン。君は本当のところ絶望しているんじゃないのかね？」
ラスタバンは言う。

「君の不遜というものは、つまるところはその諦念の裏返しだとは言えないだろうか。だってそうだろう。本当の強者ならば——あの妖煌帝オルロワージュがそうであるように——自らの強さを徒に口にしたりはしない。そんな必要はないからだ。俺は強いのだと、そんな台詞を口にせずとも彼は強い。だから彼は妖魔の君なのだ。そう考えたことはないかい？」

ラスタバンは言う。審判者の声色でイルドウンを語り続ける。

「答えたまえよ、イルドウン。君はなぜイルドウンなんだい？ 一度はオルロワージュに敗れ、そしてまたいまこの僕に二度目の敗北を喫しようとしている君は——弱者になり果てた君という妖魔の、その誇りの在り処はどこにある？」

投げかけられたその問いにイルドゥンは答ええない。滔々と血を流し、力なく膝をついたまま起き上がろうせず、ただ静かに前を見つめている。

ラストバンもまた、じつと口を噤んだ。罪人の弁明を待つかのように冷然とイルドゥンを見据える。しかしいくら待とうともその返答が発せられることはなかった。やがてため息をつき、ラストバンは寂しそうに笑う。さらば友よ。そんな台詞を口にさえしてゆつくりと歩み寄り、剣を掲げた。その首を落とそうというのだろう。項垂れるように首を垂れたままのイルドゥンへと近づき、自身が親友と呼んだ妖魔の顔を最後にもう一度よく見ておこうとでも思ったのかほんの僅かに首を傾けてのぞき込み——そしてようやく、気づいたのだった。

イルドゥンは笑っている。



イルドゥンは笑っていた。音もなく。それは満たされた笑みであり、静かな笑みだった。それはけして戦闘のさなかに浮かべるような表情ではなかったし、ある意味では戦意を削ぎさえするほどに穏やかなものだった。だがその笑みを見て、どうしたことだろう、ラストバンは背筋のぞつとする思いと共にその場を飛びのいてしまう。

その笑みを、ラストバンは知っていた。それは彼の親友が孤独に夜を見つめる時、群青の夜を目にして浮かべる笑みだった。

日の暮れてまだ間もないころ、空の蒼を夜の帳が遮って生まれるその群青。宵闇。

光あるものが影に追われ、蒼穹と漆黒とが交じり合う混沌情景に身を浸して妖魔イルドゥンは微笑む。

それはあまりにも凄惨で、数多の失語症患者を生み出すほど美しい微笑。

イルドゥンはただ、どこまでも静かに笑っている。

この世には生きるだけの価値があると、そう確信して。

「……どうした、ラストバン。さっさとかかってこい」

囁くようにイルドゥンは言った。自らの不利など意に介することなく、どこまでも傲岸にイルドゥンは告げる。

「そうでなければそろそろ俺の傷も回復してしまうぞ。決着をつけるならば今だろう。……さあ、来い……」

「イルドゥン。君はまだ、僕の問いに答えてはいない……」

知らずに後退り、ラストバンは初めて声を戸惑わせた。

「知ったことか」イルドゥンは短く言い放つ。「長々と何か言っていたようだが、どうで

も……」

「……」

「俺にとつて重要なのはお前が強いということだけだ。俺の予想よりもなお強く——ならばよし。何も問題などありはしない。嬉しいぞ、ラストバン。お前とこうして戦えることが——お前という強者に挑むことのできるいまこの時が」

「挑む、だつて……？ それは妖魔が口にする台詞ではない。妖魔は常に見下ろしているもの。自らの弱さを受け入れることなど、あつてはならない」

「は……」

幽かな笑い声をあげてイルドウンは顔を上げる。

「それもそうかもしれない。……だが、いま、この場では、そんな理屈は塵にも等しい」

「……」

「“革命”を謳いながら、ラストバン、お前は妖魔の掟を口にする。結局のところ、身についた通念というものからはなかなか逃れられんものだな。俺もお前も」

「……」

「お前の企みがもし成就したその暁には……今度はお前がオルロワージュになるのかもしれん。……まったく、アセルスの奴に言われたことが今更ながらわかりかけてきて鬱陶しい」とこの上ないぞ」

「君は何を言っているんだ？」

「忘れる。全ては小娘の眩く下らん詭弁だ。俺とお前がこうして戦うことにはやはり何の関係もないこと。そう……どうでもいいことだ。俺が弱いとお前は言った。それが真実かどうかは俺が減んだその後で考えれば良い」

「イルドウン……」

「俺が弱い？ 俺では勝てない？ ……どうだろうな。いまや世界は牙を剥き、この俺を押し潰そうと迫り来る。だがそれでいい。それでこそこの世に価値があるというものだ。ラストバン、俺はいま、中々どうして愉しんでいるらしい。お前はどうか？」

全身に殺意を滾らせながら——しかしその表情は穏やかにイルドウンは問う。そんな相手を見て——ラストバンは僅かに息を吐き出し、どこか困ったように力なく笑う。

「僕は、君に謝らないといけないのかもしれないな」

「何をだ？」

不思議そうに尋ねるイルドウンに、ラストバンは自らが友と呼んだ妖魔を真つすぐに見つめた。

「この部屋は既に僕の領域だ、と先ほど僕は告げた。妖魔の剣——振動波。妖魔の小手——デッドリーパウダー。そして妖魔の具足——土蜘蛛。振動波は君の身体感覚を乱し、デッドリーパウダーによってあらゆる器官を麻痺させ、土蜘蛛の見えない糸がその

体を縛る。……まあ、だいたいそんな所が僕の手の内だ。なんだか、自分の実力を変に偽るのも恥ずかしくなってきたので素直に白状しておくよ。だが勿論、わかった所でどうなるものでもない。それでもやるのかい？」

「当たり前だろう」

「だったら僕も答えるよ、イルドウン。僕は嬉しい。僕の策謀もまた、あるいは君の率直さと同じように愚かしいのかもしれない。君と戦うことができ、僕は嬉しい。それが僕の結論だ」

ラストバンはそこでようやく、心から満ち足りたというように無邪気な微笑みを浮かべる。

「そうか」

イルドウンはぼつりと囁く。

「ああ」

ラストバンは短く答える。

そして両者は同時に剣を構えた。ゆらりと弧を描いたラストバンの切先が刺突の構えにぴたりと止まる。ただその命を奪うことのみを目的とした必殺の態勢。対するイルドウンはどこまでも無造作に自然体でいる。決着の時を迎えようとしているその表情はおよそ妖魔には似つかわしくない、どこか不敵であるいは野卑とさえ言える笑みが

浮かべられている。

言葉を交わす時はもはやとうに過ぎた。黒騎士達は自らの劍戟をもつて己が意の表明とする。同時に床を踏み碎いて跳び、あらゆる音を置き去りにして劍を奔らせる。両者の影が交錯し、そして——怒号が上がった。

「何故だ、ラスタバン」

その端正な顔を歪めてイルドゥンは囁いた。失望と驚愕にその両手を僅かに震わせる。イルドゥンの劍、その刃は見事にラスタバンを肩口から腰に掛けて真つ二つに切り裂いていた。だがそれはイルドゥンにとって納得のいく結末ではなかった。

「どうしてそんな顔をしているんだい。イルドゥン」

苦し気に血を吐き出しながらラスタバンは力なく微笑んで言う。やっぱり、君は強いや。

「違う……。貴様の方が速かった筈だ。なぜ、劍を引いた。俺とお前との決闘がこんな形で終わっていいはずがあるか」

ラスタバンは先ほどと同じように、やはり困ったようにして弱々しく笑っている。

「気のせいだよ。もしくは、そういう思い込みさ。自分が圧倒的に弱体化させられているのだから、と……。でも、理屈はどうあれ勝ったのは君だ。この土壇場で君は僕の策略を物ともせずに打破して見せた。ただ君が強かった。それだけさ」

「認めんぞ、俺は」

「この世に、心から納得のいく答えなんてものがあるのだろうか」独り言のようにラストバンは呟く。「そんなものがないからこそ、僕と君とは戦いを続けているんだろう」

「そうだとしても」

「……僕は、君には勝てない。いまそれがよくわかったよ。僕はこの世のすべてを何もかもを手に入れ、そして支配するつもりでいる。そのために君を失うというのなら、僕はそんな僕の弱さを超克しなければなるまいよ」

「……アセルスにも似たようなことを言われたな」

苦虫を噛み潰したような顔をしてイルドウンは吐き捨てる。

「どうして、俺の周りにはこんな奴ばかりが増えるんだ……」

「うんざりかい？」

「ああ、うんざりだ」

面倒そうに溜息をついてイルドウンはラストバンへと手を差し伸べ、痛たた、と冗談めかして呻きながらラストバンがその手を握る。

「ならば僕らは、やはりその倦怠を打破するためにこの世と格闘しなければならぬだろう。僕と君とは依然として同志というわけだ」

「訳が分からん……。俺は無論、オルロワーージュの奴に勝つ気であるが」懐いた犬のよう

に微笑んでいるラスタバんにちらりと目を向けてイルドウンは再び大仰にため息をついた。「やはりお前には勝てないのかもしれないな……」

「何を言っているんだい、イルドウン。さ、一休みしたら我らが姫を助けに向かうとしようじゃないか！ 革命の時は近いぞ！」

「ああ……まったく……」

イルドウンは疲れたように両目を覆った。

第三十三幕 TitleCall

肉まんを食べていた。丸々と肥えた中華饅頭に男はかぶりつき、美味しそうに嚙下する。

右の頬から左の頬へ、下品ながらも実に愉快なしぐさで肉まんを口腔に巡らせ、その稠密な触感を思うぞんぶん味わっては咀嚼を続けている。

その表情は半目である。少し眠たいようでもあるし、肉に嚙り付く至福に満ち足りている様子でもある。はふはふと白い息を吐き出しながら肉まんの載っていたグラシン紙を実に楽しそうに剥がしていく。

「ああ……」とその妖魔は突然小さく呻き、「お茶が飲みたいな……」としみじみ呟いた。すると傍らに控えていたメイドが慣れた様子で「こちらに」とティーカップを差し出す。妖魔は優雅な仕草でその中身に口をつけ、ああ、と、やはりしみじみ呟くのだった。

「うん。このミルクティーが肉まんによく……合わない！ 他に何かないのかい？」
「ごいませせん。烏龍茶は守備範囲外にごいませす」

淡々とメイドが答え、そんなあ、と妖魔が肩を落とす。それから大広間の扉を開いて呆れているアセルスと零姫にようやく気が付き、「やあ、ようやくここまでたどり着いた

ね」と片手をあげた。野放図に逆立てた赤毛、胸元をはだけた破廉恥な服装、そして胸元のニプレス。針の城の頂上を目指して大回廊を超えてきたアセルスたちを出迎えたのはゾズマだった。

「お久しぶりです。メイド仮面さん」

「お久しぶりでございます。アセルス様。お元気のようにで安心いたしました」

「ああ、いいいえ。こちらこそ以前はご心配をおかけしまして……」

「僕のこと無視して会話を進めるのやめてくれる？ だいたいアセルス、どうして君は僕よりも彼女と親しくなっているのさ。主役はあくまでも僕なんだよ？」

アセルスはゾズマにちらりと目を向けて、メイドとの談笑を笑顔で続ける。

「ははは。面白いこと言ってますね」

「ええ、なんだか手のかかる弟みたいで……」

「……聞いてよ。今から僕がすごく重要なことを言うところなんだからさあ」

「今からオルロワージュに会おうっていう時に肉まん食べてる奴に言われてもね」

「決戦の前に体を休めておくのも重要だろう。ほら、マンハッタンの有名店で買ってきた饅頭をお食べよ。たくさんあるんだ。好きなものを選んでいいよ。君は肉まん派？」

「それともあんまん派？」

「両方とも食べるよ」

さらりと答えたアセルスに、ゾズマはあてが外れたように「あそう」と呟いた。

「そういえば、イルドウンはどうしたんだい？」

きよろきよろとあたりを見回して尋ねると、零姫が

「途中でラストバンが待ち構えていてな。あやつは格好つけて残りおった」

「ははあ、なるほどね……」

したり顔でゾズマは頷く。

「向こうにはまだ金獅子姫がいるからね。彼がいてくれたら心強かったんだが……ま、仕方がないか。問題なければ後から来るだろうし、ぐずぐずしていたら僕がせっかく引き離してきた黒騎士ウエズンの隊が戻ってきてしまう。ここにいるメンバーでオルロワーージュに挑むしかないみたいだね。言っておくけど、僕は手出ししないんでよろしく」

「安心せよ。誰もお主には期待などしておらぬ。いざとなれば妾だけでもケリをつけてくれるわ」

「そうして頂けるととても助かりますよ。零姫様。あなたがこちら側の要ですから」
さらつと言つてのけるゾズマに、零姫は重々しく頷く。

「うむ……。わかつておるではないか。ではそろそろ行くとするかのう」

立ち上がり、颯爽と歩きだす零姫。続くアセルスにゾズマはそつと声をかけた。

「アセルス。君はこの針の城をどう思う？」

その質問に答えず、アセルスは静かに笑った。



フアシナトウール。魅惑の君オルロワージュの統べる星。妖魔の集う惑星のひとときわ高く聳え立つ伽藍の塔、針の城。その城の最上階へと続く長い長い螺旋階段を超え、やがて辿り着いたバルコニーにオルロワージュは立っていた。

漆黒の外套を身に纏い、その瞳に虚無を宿して下界を睥睨している。

幽かな風が吹き込んでオルロワージュは目を細めた。

「来たか、アセルス……」

風の擦れるような声で囁き、オルロワージュは記憶を反芻するかのように目を閉じる。

「我が血を享けた半妖の娘よ。もつと欲望のままに生きてはどうだ。己の苦悩を周りの世界にまき散らせ。そなたに関わるもの全てを不幸にせよ」

静かに告げられたその言葉に零姫はそつと視線を逸らし、アセルスは優しく微笑む。

「——私のためにそんな台詞を用意しておいてくれたの？　ありがとう。でも、貴方に

そんな言葉は似合わないよ、オルロワージュ」

「……そうか？ 余は妖魔の王、人種族を支配する不死者の頂点に立つ者だ。そなたの知らぬところでは、悪鬼羅刹の如き所業を繰り広げているやもしれぬであろう」

「たとえそうだとしても、いま、この私の目の前にいる貴方はそうじゃない。私にとってそれは全てだ」

「ふ……」

オルロワージュはその言葉の持つ既視感に短く息を漏らし、アセルスの後ろに立つ零姫に目を向けた。

「久しいな。零姫。我が最愛にして第一の姫よ。まさかそなたから姿を現す日が来ようとはな。再び余に平伏すために舞い戻ったか」

「たわけが」牙を剥きだして零姫が吠える。「相も変わらず救いがたい阿呆よのう」

「違うのか？」

「当たり前であろうが！」

「そうか……。残念だ。ではいったい何をしに来たのだ」

何を取り繕うでもなく率直に尋ねるオルロワージュに、零姫は声を荒げる。

「決まっておろう。果てしなく追われ続けるのもいささか飽きが来た。ならばいつそ妾自らが引導を渡してやろうと思うてな」

「ほう。余を滅ぼすか零姫。そなたにそれが出来るか?」

「貴様の血を吸ったのが誰かもう忘れたか? 貴様が針の城でのうのうと暮らしておる間に、幾度もの転生を繰り返して妻は更なる力を手に入れた」

「それは楽しみだ、零姫」表情一つ変えずにオルロワージュは頷く。「そなたの力が余の倦怠を癒してくれることを祈っておこう」

「祈る、じゃと? 神を信じぬ貴様が今さら何に祈ると言うのじゃ」

「……さあ、果たして何にであろうな。忘れてしまった。昔は余にも祈りを捧げるべき対象が残されていたような気がするが、今となつては忘却の彼方だ。かつて何かを信じていた、という朧な記憶だけが漠然とある。だが、祈るにはそれだけでも十分だ」

「相も変わらぬ、女々しいことを言う……」

「それは詮無いことであろう。余はとりたてて変わらぬとはしておらぬ」

「変えてみせる。いや、変えねばならぬ。この停滞したファシナトゥールの大気ごと、貴様を祓つてくれる」

「勇ましいことだ。その変わることをなきそなたの強い意志を、余は歓迎しよう」

両手を広げるオルロワージュに対して、零姫はじりと後退り警戒を強めた。

「さて」とオルロワージュは言う。「零姫が帰還した理由はこれでわかった。次はアセルス、そなたの目的を聞こう。先も言ったあの言葉は確かに芝居の台詞であつたが、何も

かもが嘘というわけでもない。そなたが妖魔として邪悪に生きるといふのであれば、余はそれを止めはしない。しかし、そうではないのなら——」

オルロワージュはそこで優しい瞳で見守るようにアセルスを見つめる。

「——もしもそなたが余の予想を超える言葉を持つているというのなら……これほど喜ばしいことはない。アセルス。我が娘よ。このファシナトールを離れ、そなたは何を見た？ 何を知り、何を考え、……そして、いかなる心をもつてこの針の城へと帰還したのだ？」

問いかけ。何気なく投げかけられたその言葉は、しかし妖魔の王の唇から放たれた途端に背筋を突き刺す重圧を放つ。

アセルスはぎり、と奥歯を噛みしめ、息を吸い、そして真つすぐにオルロワージュを見つめ返した。自分を娘と呼んだ妖魔のことを。

「辺境を求めて、旅をしたよ……」

アセルスは言う。知らないうちに、声が震えた。目の前の妖魔に畏れを抱いているわけではなかった。自分でも不思議なほど敵対心は湧かなかつた。胸をこみ上げるその感情とはいえ、僅かな後悔、そして懐旧。幸か不幸かはわからない。自分がそれを愛しているのかといえ、それも違う。しかし、どうやら——天涯孤独のこの身にとって、もしも帰る場所があるとすれば、どうやらそれはこの場所を置いては他にないよう

だった。

「ここではないどこかを目指すために。私が私らしく生きられる場所、私が私であることを続けていられる場所を求めて。たくさんの人と出会って、たくさんのものを見て、知って……」

自分はどうかやら泣きそうになっているらしいと気づいて、アセルスは少しだけ笑い出しそうになった。不死者の王を前にして、自分はいったい何を語りだそうとしているのだろうか。

「取り返しのつかない失敗を何度となく繰り返して、後悔して……死にたくなったり、何もかもが嫌になったりして、それでも、なんとか、ここまでたどり着くことができたんだ……オルロワージュ。貴方のところに、戻ってきたよ……」

「そうか」

オルロワージュの返答は短かったが、しかしそこに拒絶の意志はなかった。

「……旅は辛いことばかりだったよ。人間の嫌なところを何度も目にしたり、痛い思いや悲しいことを経験して、私はなんて馬鹿で浅はかだったんだろうって、そんな風に思ったりもした……でもね」

アセルスはそので言い淀み、どこか困ったように、恥ずかしそうに言葉を選びながら語り続ける。

「全てが全て汚いものばかりではなくて、思わずはつと目の覚めるような光景や言葉に出会って、まるで自分がその瞬間から別の存在に生まれ変わったような、そんな不思議な気持ちになることもあった。私は……誰かを好きになれた。愛することができた。恋をしたんだよ、オルロワージュ。私はき……それはきつと私が望んだことで、そのために貴方や多くの人を傷つけてしまったのかもしれない。だから、私は、もう一度ここに戻ってこなければならなかったんだ」

アセルスの肩に、そつと零姫が手を置く。

「……あの日、あの時、あなたに命を救われ、この世でたった一人の半妖として蘇って……もしも私がこの場所から逃げ出さずに貴方の娘としてファシナトウールに留まっていたら、きっと私は誰に恋することもなく、何も知らずに永遠の時を過ごしていたんだろう。だから、私は……この旅に出たことを後悔しない。自分が傷ついたことを忘れるようとは思わない……だけど……」

そこで躊躇いを見せ、アセルスは俯く。

「私は……」きつと顔を上げ、アセルスは言った。「私には、貴方に謝らなければならぬということがある」

ふむ、とオルロワージュは相槌を打ち、それ以上を言おうとはしなかった。

「オルロワージュ。旅に出たことを、私は謝らない。後悔もしないし、反省もしない。で

も……貴方の元から白薔薇や紅を勝手に連れ出してしまったこと、そして彼女たちを危険に晒し、失ったこと……。そのつもりはなかったけれど結果的にフアシナトゥールの秩序を揺るがし、騒ぎを起こしてしまったこと……。それは、紛れもなく私のせいだと思ふ」

「ごめんなさい。そう言つて、アセルスは頭を下げた。偽りのない素直な気持ちだつた。紅が死んだときのことを思うと今でも心が痛む。自分は彼女を幸せにしなければいけない筈だつたのに。そして、白薔薇は……。」

「顔を上げよ。アセルス。余にそなたを責める気はない。忘れたのか？ 確かにそなたはこの城から白薔薇と紅を連れ出した。だがそなたたちに追つ手を差し向け、闇の迷宮に白薔薇を再び捕らえたのもまた余だ」

「……」

アセルスはゆつくりと顔を上げる。その瞳に強い光を宿し、オルロワージュを前に一歩も引かずに堂々と口を開く。

「私はいま、ここに立つた。それは私の意思だ。貴方が私から白薔薇を奪つていったように、私もまた貴方から多くのものを奪つていった。だから……」

「だから？ そなたはここに何をしに来た。我が力に屈するためか。それとも自らが新たな王として君臨するためか」

「違うよ」そう言つて苦笑する。「そんなんじゃない」

「私はそんな非日常的なことをしに來たわけじゃない。当たり前のことなんだよ、オルロワージュ。貴方が悩んでいると知つたから。私のことを娘と呼んでくれた貴方が、時を思うその思いに答えるため——言葉を選び、言葉を交わす、そのために……」

「言葉……か。たとえどれだけの時が流れようとも、やはり女というものは不可思議な生き物だ。面白いことを言う」

「貴方は『永遠』を求めている。探している。挑んでいる。……そうなんでしょう?」

「ああ、そうだ。零姫にでも聞いたか?」

「うん……。それに、イルドウン、白薔薇、セアトにも話を聞いた。たくさんものを失い、たくさんものを忘れた。そんな貴方の物語のことを……」

「物語、か……」

うん、と再度アセルスは答え、いつしか潤みだしていたその瞳をぐいと一度乱暴に拭つた。

そして言う。

——物語の話しよう、オルロワージュ。



そしてアセルスは語りだす。

物語というのは一体なんだろう。物語を作る人がいて、物語を語る人がいて……。その物語を誰かが受け取って、受け取った誰かがまた別の誰かにその話を伝えていく。連綿と、そして脈々と物語は受け継がれていく。人から人へ、口から口へと伝えられていくその物語は、でも何もかも嘘かもしれないでたらめかもしれない。人の記憶や思いが積み重なって幾重にも解釈が加えられていくそのうちに、何もかもがわからなくなつて本当のことなんて忘れられてしまう。

もう、私には、人間であつた頃の感覚の全てを思い出すことはできない。無力である代わりに善良であつたあの頃の気持ちや、モンスターと戦いその命を奪うことへの忌避感も何も、今となつては何もかも遠い。

思い出せない。寒さに凍えることも。食事を摂る喜びも。もう、思い出すことはできない……！

わなわなと震える手を握り締めるアセルスを、オルロワージュはじつと見つめていく。

その代わりに私が手に入れたものは、妖魔の力。人をはるかに超える強靱な体。見つめるだけで虜を生む魅了の瞳。私は人であつた頃にはけして知ることのなかつた経験をした。腹を搔き毳る飢餓の苦しみ。立ちはだかるものを打ち倒し支配するあの甘美

な感覺。そして……愛するひとの血を啜る悦び。

貴方がくれたこの力で、私は旅を終えることができた。だから今度は私が貴方に返す番だ。

ここにはないものを求めて旅をした。それが私の物語。辺境を——自分が自分らしく居られる場所を求めて。

ここに居続けることはできなかった。与えられるものだけを受け取って生きていくことはできない。何一つ勝ち取ることができないというのなら、それは生きているとは言えないから。

でも、それはもしかしたら……都合のよい世界や聞こえのよい言葉を夢見る、現実逃避に過ぎないのかもしれない。自由になりたい。世界でただ一人の自分でありたい。そんな言葉を後生大事に抱えた私は、妖魔の生き方を否定することで人間性に縋りつこうとしていたのかもしれない。私は旅をした……どんな場所でも、気楽な自由なんてものはしなかった。針の城からの追手が、またある時には私を狙う人間たちが、私の生活を次から次へとぶち壊していった。

フクロテイル
辺境。

本当に、そんなものがあるんだろうか？ 黄金が眠る場所。誰も知らない手つかずの未開拓地。そこには何の法も制約もなく、誰もがのびのびと暮らすことができる。そんな場所が。

旅を続けているうちに私にも少しずつわかってきた。ここではないどこかを求めて生きることは、永遠を探し求めることとそう変わりはない。セアトにも言われたよ。旅人はいまいる場所を愛せないから旅に出るのだと。……私は自分自身が嫌いだったんだ。何もできないことが許せなかったし、何のために生まれてきたのかわからなかった。どこに行つても、どこまで遠くに逃げてても、安住の地なんてものはその片鱗も見えなかった。当たり前だよ、私が私を愛せないのに、いまいる場所を好きになるはずがない。御大層な嫌悪感を抱えて旅に出て、むやみな喪失感ばかりが降り積もっていく。そしてとうとう辿り着いたボロの星で、私は旅を終えることを決意した。何かを手に入れたからじゃない。そこでとても大事なものを失ってしまったから。だから私は旅をやめた。辿り着いたその場所が“辺境”なのだと受け入れて、この針の城へと帰ってきた。そういう意味で言うのなら、私はもしかしたら敗北者なのかもしれない。私は永遠を諦めたんだから。

「アセルス。それがそなたの答えか」

凍えるほど底冷えのする声でオルロワージュが囁き、

「“永遠”の話をしよう、オルロワージュ」

挑むようにアセルスは高らかに告げる。

「永遠とはなんだ。それは一体なんの謂いだ。永遠に変わらないもの。永遠に失われる

ことのないもの。そんなものがどこにある。仮にあったとして、それは時の停まった人形と何が違うの」

「アセルス……」

オルロワージュから零れたその悲し気な声に胸を痛ませ、しかしアセルスはなおも言葉を重ねる。

「かつて、貴方は言った。永遠とは、時の中で生きながらけして失われないこと。時を止めて生きるのでもなければ、命を捨てて死に続けるのでもない。流動と変節の中で、しかし不変である存在のことだと。永遠は流動と変節の中にある。変わらないことだけが永遠じゃあない。あるいは、変わり続けることそのものが永遠なのかもしれない」

「違う……。それは余が望んだ永遠ではない」

オルロワージュの言葉に剣呑な気配を感じ取った零姫がアセルスを庇って前に出るが、アセルスはやんわりと首を振る。

「だとしたらあなたが望んでいるものは何？ いったいあなたは何を忘れてしまったの？ 愛の記憶？ 交わした口づけの熱さ？ ヨノメヨチコという少女の言葉？」

「わからぬ……。余には、何もわからぬ。だが、確かにそれはあつた筈なのだ。それは、それだけは嘘ではなかった。余は確かに何かを失ったのだ」

「……通り過ぎて行った人たちの感触だけがいまこの時の現実よりもいつそう懐かしく

温かく思われるのは、胸を貫く喪失感が罪悪感へと変質してしまうからなのかもしれない。でも、忘れないでオルロワージュ。貴方の傍にいるひとたちは、今もなお貴方のことを想い続けている。過去だけが貴方を作り上げているわけじゃない。……紅はいつも言っていたよ。悪いのは自分で、貴方ではない、と。」

「わかつている。だが……」

オルロワージュの視線がアセルスを貫き、つかのま稲妻にでも打たれたかのように全身が痙攣する。

「領け、とそなたは言うのか。余に全てを受け入れて納得しろと、そう言うのか？」

痺れる腕を懸命に振り上げ、アセルスは胸に手を当てる。

「違う。違うよ、オルロワージュ。だって私にはわからない。たかだか二十年を生きたくらいで、永遠なんてものがわかるわけもない。貴方の苦しみも悲しみも、想像することとはできても理解することはできない。でも私には聞こえるんだ。あの時計塔の鐘の音が」

オルロワージュの表情はそこで変わった。記憶の底を浚うかの如く、時計塔、そう舌が動いて失われた過去の輪郭をなぞる。

「時計塔の鐘の音が私には聞こえる。それが何を意味するのか、私は知らない。でもその音を聞いているだけで何かかもどかしくてたまらなくなる。叫びたくて、喚きたく

て、意味もなく泣き出してしまいそうになる。どうしてだろう？ その音を聞きたびに私は思うんだ。こんなのは嫌だ。納得できない。こんなものに従うわけにはいかない。自分の全存在を賭けて抗わなくてはならないと。旅をしていて挫けそうになるたび、私には鐘の音が聞こえた。戦う理由がある、そう思った。あの鐘の音が私を駆り立てる。あの鐘の音が、私をここまで連れてきてくれた……あれは、きつと貴方の血の記憶なんだ。何かを失くしたその瞬間の、貴方の言葉……残響音」

「ああ、そうだ……。それが何だったのか、もはや余にはわからぬ。だが確かに余はそこに立っていた。時計塔の鐘の音を聞き、そして何かを失った。こんなことが前にもあったと、そんな既視感を抱えたまま幾星霜を超えて今日に至る。余は……余はかつて何か別のものであったのだ。高いところから何かを見下ろしていた。茫洋とした記憶だけが胃の淵に残り、訳の分からぬ喪失感が降り積もっていく。自分が何を失くしたのかもわからぬまま、どこにも因果の繋がることのない罪に苛まれている。だから余は戦わねばならぬ。この世の摂理を打ち砕き、あらゆる永遠をこの手にせねばならぬのだ。あの時計塔の鐘の音が聞こえるというのなら、アセルス、そなたにもこの思いがわかる筈だ」

「わかるよ、オルロワージュ。貴方の思いのその欠片がわたしにはわかる。でも……それはやっぱり、私の記憶じゃない。私にとってそれは、誰かに手渡された物語に過ぎない」

「だとしたら何だ、アセルス。何が言いたい?」

問われて、アセルスはごくりと唾を呑み込み、意を決して答えた。

「私たちはたぶん、きつとわかりあえない」

その言葉を聞いて、オルロワージュは僅かに微笑んだ。

「そなたは和解を求めてやってきたのだと思っていた。妖魔の王オルロワージュともあろう者が、これはまたずいぶん甘い考えを抱いてしまったものだ」

「……ごめんなさい、オルロワージュ。でも私は都合の良いお追従を口にするためにここに帰ってきたわけじゃない。私には貴方を完全に理解することはできない。本当のところを言えば棺に閉じ込めた寵姫たちのことは受け入れがたいし、今もなお白薔薇が闇の迷宮に囚われていることに諸手を挙げて賛成することもできない。でも……」

「でも?」

「でも、だからといって何もできないわけでもない。私には物語を語ることができる、そう思うんだ……。たとえ貴方の苦しみを理解することができないとしても、その記憶のひとつかけを背負うことはできる。貴方が忘れてしまったその物語を、私が受け継ぐ。また別の誰かに語り継いでいく。それは元の物語とはまた別のものかもしれないけれど、欠けてしまったあなたの記憶の分だけまた別の人の記憶や解釈が折り重なって、後の時代に受け継がれていく。そうして繋がっていく想いのことを、永遠と呼ぶことはできない

いかな……？ たとえいつか失われてしまおうとしても、また別の形できつと誰かに伝わるんだと信じるのが、少しでも貴方の癒しになりはしないかな……？」

緊張しながらアセルスは息を大きく吸い、そして最後の言葉を口にした。

それは物語の名だった。彼女が旅した道筋を指し示す言葉であり、幾億の時を超えて生きる怪物の墓標に刻まれるべき詩の一篇でもあった。

半妖アセルス。妖煌帝オルロワージュの血を享けた、世界でただ一人の異形の乙女。万魔を虜とする支配者の娘にして人と妖魔の境を生きる中庸の旅人。

その唇は緋桃の弧を描き、その声色は小夜曲の調べ。あらゆるものを魅了する淫魔の姫はいま、切なる思いを胸に物語を謳い上げる。

さあ、物語の話をしよう。

その言葉その物語の名を、あなたはきつと知っている。

アセルスという一人のちっぽけな娘によって編まれたその物語の名は――、

――ねえ、オルロワージュ。

物語が始まった時、貴方はどこにいたの？

私はいま、ここにいます。

それはけして黄金郷フロンテイアを目指す開拓者の夢物語サーガなんかじゃあない。

貴方が生きた一億年を彼や彼女が語り継ぐ。一人一人の百年を織り重ねれば貴方の物語にさえ届く言葉が見つけれ出せる。たった一人では支えることができなくても、一億年生きた貴方には、私が、零姫様が、白薔薇がいる。

永遠を求めて、旅をしたよ……。願くことのできないものに首を振って、意地を張って生きてみたよ……。

いま、ここにいる貴方は、とこしえを生きて疲れ果てた。私にはその悲しみを癒すことはできないのかもしれない。仮にできたとして、たった二十年かそこら生きただけの女がぼつり、二言三言囁いて物語が救われていいんだらうか？

それでも貴方は私を娘だと言ってくれた。私はただそれが嬉しかった。

オルロワージュ。

お父さん。

貴方は。

一億年を生きてこの場所に立った。多くのものを失い、多くのものを忘れた。

それでもまだ、貴方は滅びてはいない。涙を流して何もかもをなかつたことにするとだつてできた筈なのに、子供みたいにむきになって生きている。

貴方は諦めてはいないんだ。まだ戦い続ける。

記憶はいつか失われてしまう。物語はいつか嘘になってしまう。どれだけのことを苦しいと思えば悲しいと思っても忘れてしまう。

……でも、違う。

たとえ何かを忘れても、何かを忘れたその痛みが激情を呼ぶ限りなかつたことにはならない。

貴方のその抗う心は今もなお失われてはいない。領けないものに否やを告げるその心は不滅のものだ。

けして失われることのない場所が、いま、ここにはある。時の流れを憎むこと。いつかすべては失われるというこの世の理に挑むその心。

生きとし生けるすべてのものに、けして譲れぬ意地がある。意地と呼ぶのが気に食わなけりや、それは性だサガと誰かが言った。

貫いた意地の果てに辿り着くべき終焉の場所。語り継がれるすべての物語が結実する辺境地。この世のSagaの行き着く処——サガ・フロンティア。

物語が続く限り、永遠はそこにある。

第三十四幕 『立ち向かう』

……やがて言葉が語り尽くされ、後には静寂だけが残った。誰もが真剣な面持ちで佇み、密やかな息遣いがやけに大きく響き渡る。

物語を聞いていたオルロワージュはどこか遠い目をして零姫を見、そしてアセルスを見つめた。それは優しい目ではあったが、しかし共感の念は欠けていた。

「——それが、そなたの答えなのか。アセルス。サガ・フロンティア……。それが永遠だとそなたは言うのだな」

「うん……」

オルロワージュは厳かに歩み寄り、そつとアセルスの頭に手をのせる。くしゃり、髪をなげる感触が伝わってアセルスは眼を閉じ、その身を竦ませる。

「オルロワージュ。私は……」

「アセルス」

次に目を見開いたその時、オルロワージュの顔に浮かんだ感情に気が付いてアセルスはははっとする。

「残念だ、アセルス。余にその手を握ることはできない。余はそなたに立ち向かわねば

ならぬ」

妖魔の王からもたらされたその言葉の意外性にアセルスはつかのま違和感を覚える。それはオルロワージュのような絶対的強者が口にする言葉ではなかった。だがオルロワージュはそれをひどく慣れ親しんだ言葉のように扱った。立ち向かう。その言葉は。困惑に躊躇した次の瞬間、オルロワージュの外套から伸びた影があたり全てを薙ぎ払う。

変化は劇的だった。視界に写るあらゆるものは断ち割られ、瞬く間に崩壊していく。針の城の最上階は一瞬にして砕け落ち、もうもうと巻き起こる粉塵の向こうでオルロワージュがその瞳に暗い光を宿している。

「いかん、アセルス！」

咄嗟に叫んだ零姫が懸命に手を伸ばすも届かない。落下するバルコニーから逃れようと跳躍しかけ、そこでアセルスは自らに下半身が存在していないことに気が付いた。いつの間にか下腹部は見事な断面を見せて斬られている。それだけではない。痛みに呻こうと息を吸い込んだその瞬間にやはりオルロワージュから伸びた影が鋭利な槍となつてアセルスの心臓と右肺を貫き、乱暴に掻きまわしていく。

「お……」

「アセルス！」

慌てた零姫がアセルスの上半身を抱き留め、オルロワージュから距離をとるべく瓦礫を蹴つて跳ぶ。しかし、

「逃げてどうする零姫。少なくともそなたは余を滅ぼすためにここへ来た筈だ」

当然のように待ち構えていたオルロワージュは既に剣を抜いている。着地し、体制を崩しながらも零姫は懸命にアセルスの体を庇うが全てを断ち切る妖魔の剣の前ではあまりにも無意味。零姫の左腕が切り落とされ、そしてその奥に庇われたアセルスの脳天へと剣が突きこまれていく。

火花が散った。

ぎりぎりと言を立ててオルロワージュの剣が震え、皮一枚を残して止められている。妖魔の剣を防いだものもまた同じく妖魔の剣。

「まったく。なんとという体たらくだ」

アセルスへと迫るオルロワージュの剣を間一髪で受け止め、イルドゥンはいつものように憎まれ口を叩く。

「お前の言う理想など、所詮はこんなものだ。わかったら身の程を弁えて下がっていろ」吐き捨てられた台詞にアセルスは返答しようとするが、こみ上げるのは血液ばかりで言葉にならない。その無様な様子にちらりと目を向け、ふん、と不満げにイルドゥンは唸る。

「イルドウン、か……。久しいな。ようやく余の前に立つ気になったか。アセルスを守る騎士になったと話には聞いていたが……。残念だったな。そなたが担ぎ上げた乙女の願いはもはや叶わぬ」

「構うものか。順当な結果だろう。お前がこいつにあっさり説得されていたらどうしようかと思っていたところだ」

「ふむ……。そなたはアセルスを信じて行動を共にしたわけではないのか」

「馬鹿を言え。俺が望むのはいまこの状況の方だ。言語による解決などあつてたまるか。俺がこいつやお前とわかりあうためにここに来たとても本気で考えたのか？」

「ならばなぜここへ来た。余に敗北してから幾度も戦いを挑む機会があつたというのにそなたは何もしては来なかつた。なぜ、いまになって余の前に立とうとする。そなたはやはりアセルスを守るため助太刀に来たように見えるが」

「どいつもこいつも下らんことばかり聞きたがるのはどうしてだ？ ……お前に負けてしばらくした頃、ラストバンに言われてな。オルロワージュは確かに迷いを抱えている。あと何百年も経てば弱体化して殺せると」

「ほう……」

興味深そうに相槌を打ち、オルロワージュはあらぬ方向へと視線を向けた。

「そんなことを言ったのか、ラストバン？」

衣擦れの音が聞こえた。柱の陰に隠れ隙を伺っていたラストバンは気まずそうに現れ、口早に弁明を始める。

「いや、それは何と言いますか、オルロワージュ様。言葉の綾というものでして……ハハ、困りましたな」

「別に謝る必要はないが、しかしそれならばなおのこと奇妙だな。余が弱くなったというのなら、なぜ戦いを挑まない」

問われ、イルドウンは愚問だと言わんばかりに不遜に鼻を鳴らしてみせる。

「ラストバンの言葉を聞いて俺は実際途方に暮れた。それはそうだろう。お前が言葉通りに弱くなってきているのなら、そんなお前に勝ったところで面白くはない。お前の悩みが何だろうと塵ほどの興味もないが、しかしそれはそれとしてお前には救われてもらわねばならない。そう思った。そう思ったが……なんでわざわざこの俺がそんなことをしなければならんのかもわからんし、お前を救う方法などなおさら検討がつかん。半ば諦めかけていたそんな時にこの小娘が現れた。お前を救う、とこいつは言った。これほど都合の良い道具は他にあるまい」

「そなたの真意がどうにも見えんな……。そなたはアセルスの言葉を信じているのか？ それとも先ほど答えたように、やはり言葉などは無力だと考えているのか？」

「無論、言葉など無力だ。仮にも妖魔の王であるお前とわかりあうなど笑い種だ。だが

な、オルロワージュ。この娘のしつこさにだけは俺も一目置いている。初太刀でおまえを殺すことは失敗したようだが、この小娘はここからしつこいぞ。お前はこの馬鹿に白痴のように救われる。そのうえでこの俺が減ぼす」

オルロワージュはその言葉に珍しく感情を見せた。

「は、は……。変わらぬイルドウン。この世界においてこれほど余を苛立たせ、かつ楽しませる妖魔はなかなかおらぬ。まったく、惜しいものだ。あの時にそなたを友と出来なかつたことをこれほど後悔した時はない……」

「友などもういらん。特に最近ではな」

倒れ伏したアセルスをじろりと睨みつけ、イルドウンは剣を構えた。

「零姫、アセルスの様子はどうか？」

「良くはない」 苦い顔で零姫が答える。「まともに食らったのがまずかった。しばらくは回復せん」

「ならばその役立たずはあのメイドにでも預けておくんだな。ゾズマともどこか近くでこちらを窺っているはずだ。……お前はさつきとこちらへ来て加勢しろ」

「なに、いま何と言った？」

信じがたい言葉を聞いた零姫は目を丸くする。

「ま、まさか……おぬし、イルドウン！ よもや妾に助けを乞うているのではあるまいな

「？」

ち、とうんざりした顔でイルドウンが舌打ちする。

「こんな時にふざけている場合か？ さつさと戦え。零姫、ラストバン。そしてお前もだ——セアト。アセルスに吸血されたならどうせお前もここに来てこそこそ見ているのだろう。いいか、一度しか言わんからよく聞くがいい。この俺に手を貸せ」

ほかんとした顔でラストバンが呆気にとられていると、背後の瓦礫が音を立てて崩れ、苦々しい顔のセアトが現れた。

「……まさか貴様にそんなことを言われる日が来ようとはな」

「そうじゃぞ。イルドウン。気をしっかり持たぬか！ キャラが——キャラがブレておるぞ！ おぬしは助けてとか言う妖魔ではなからうが！」

「だからふざけている場合ではないと言っているだろうが……。もちろん奴に勝つだけなら俺単独で構わん。俺は奴に勝つ気である。しかしだからといって奴を甘く見るつもりは毛頭ない。勝つだけというのなら俺は勝つ。だが事はそう簡単ではない。今回やるべきことは、アセルスが目覚めるまで時間を稼ぐことだ。倒してもいいかん。倒されてもいいかん。妖魔の王相手にこれは至難の業だぞ……」

険しい顔のイルドウンとは対照的に、イルドウンらに四方を囲まれた形のオルロワー・ジユは己の不利を露ほども気にせず泰然としている。

「随分と楽しそうで何よりだ。イルドウン。ラストバン。そしてセアトか。黒騎士が勢揃いではないか」

「オルロワージュ様……どうか御身に弓を引くご無礼をお許しください」

躊躇いを見せながらゆつくりと剣を構えるセアトはじりじりと間合いを縮めていく。「良い。セアトよ。とうとう自らが次代の王となるべく戦いを挑むか。それで良いのだ。己が内に弱さを抱えたそなたがこうして余に挑む決意を固めたことを、余は祝福しよう」

「違います。私は御身を害さんが為に剣を取ったわけではありません。ただ……アセルスといふこの半妖が為そうとしていることは、必ずしも御身の不利益にはなるわけではないと、そう私は思うのです……！ 吸血を許し、魅了されたからそう思うだけなのかもしれません、しかし……！！ オルロワージュ様！ どうか今一度、この娘に機会をお与えください！」

「できぬ相談だ」

オルロワージュは全くの無表情のまま言下に拒絶した。

「余は、余から何かを奪おうとする者すべてを滅ぼさねばならぬ。戦い、これを打ち倒し、そして征服しなければならぬ。それが妖魔のサガというものだからだ。アセルスが余から永遠を奪い去ろうとするのなら、余はアセルスを滅ぼそう」

それは理屈ではなく、感情ですらなかつた。機械が自らのプログラムに従うかのよう
にオルロワージュはただそう決めていた。永遠と戦うことを誓つたあの日から変わら
ぬオルロワージュの法——“永遠”に抗う戦いを邪魔する者はこれを悉く滅する、と。
「オルロワージュ、様……」

忸怩たる思いで肩を震わせるセアト。

「迷っている余裕はないぞ、セアト」

厳しい声でイルドウンは言う。

「わかっている！ 貴様に言われるまでもない！」

声を荒げたセアトはレールガンを構え、オルロワージュへ狙いをつけ乱雑に連射す
る。が、オルロワージュは避けるそぶりすら見せなかつた。それもその筈だろう。オル
ロワージュにはまだもう一体、信頼する臣下が残っている。この舞台へと上がるべき最
後の役者——その妖魔は黄金色に輝く盾を高々と掲げ、主へと襲い来る凶弾を軽々と打
ち払つた。

「セアト殿。まさかあなたまでオルロワージュ様に背くとは……」

糾弾の光をその瞳を湛えて、盾を構えた金獅子姫が悠然と立ちはだかる。

「金獅子姫か」

どこか楽しそうにイルドウンは眩き、

「金獅子姫か……」

眉を顰め、嫌そうに顔を歪めて零姫は呻く。

「金獅子姫よ。そなたも先ほどの話を聞いていたのならわかるであらう。我らはオルロワーージュを滅ぼすために集まったのではない。アセルスの話はオルロワーージュにとつても救いとなるやもしれぬ。真の忠義者であるそなたにはそれが理解できるのではないか？」

「ええ、零姫様」金獅子姫は微笑む。「しかし興味がありません。もはや善悪を語る齡ではありませんせぬゆえ。私にあるのはこの劍の輝きのみ。私はオルロワーージュ様の劍、オルロワーージュ様の盾。この身を鋼として私はただ仕えるのみにございます」

「……この脳筋妖魔が」零姫はぼそりと毒づく。「まあ良い。もともと気に食わなかったのじゃ。貴様はどさくさに紛れて滅ぼしてくれ」

「それが戦いの結果なら、私はそれを受け入れましょう。……イルドウン殿。宵闇の覇者として誉れ高き貴方とこうして劍を交えることができることを心から嬉しく思います」

「ああ。まったく同感だ」

慈愛に満ちた微笑みを浮かべる金獅子姫にイルドウンもまた僅かながらの笑みを見せる。

「こんな状況でなければもつと喜んでるところだが……。いや、どのみち大して変わりはないか」

「ええ。所詮は剣と剣。どのような思惑があろうとも我らは畢竟、奪い合うのみです。この剣に命を賭して己が意を通さんがため、今ひとたびの死闘をここに！」

剣を掲げ、高らかに雄叫びを上げる金獅子姫。

「正念場じゃな」と零姫が自らの掌を切り裂いて妖魔の剣を濡らし、

「やれやれ。私は帰りたいのだが」ラスタバンは嘯きながら奸計を巡らせ、

「やはり戦うしかないのか……。このお方と。俺にできるのか？」とセアトが自問し、

「勝負だ、オルロワージュ。貴様を倒すそのために、まずは貴様を救ってやろう」イルドウンが静かに吠え、

そして、一同を見渡してオルロワージュは悠然と歩を進める。

「さあ……。かかってくるが良い」



開戦直後——イルドウン達の行動は示し合わせたように一致した。全員ともに最大の攻撃をオルロワージュ目掛けて放ったのである。けして金獅子姫を軽視しているわ

けではない。しかし誰もが言葉にするまでもなく理解していた。妖魔の王相手に一瞬でも目を離せば全滅は必至だと。

艶やかな織手を絡ませ、胸元で印を組んだ零姫は幻の死神を呼び寄せる。あらゆる因果律を超越し、対象に死という結末のみを押し付ける筈の死神。しかしオルロワージュはいかなる術をもつてしてか、形而上の存在である死神はこともなげに両断する。続くセアトとイルドウンが頭上から斬りかかり、床に爪を突き立てたラストバンが土蜘蛛を飛ばしオルロワージュの足元を崩落させた。死神を切り裂いた僅かなその隙を穿つ三者の挟撃。踏みしめる大地もなく体勢を崩したばかりのオルロワージュに逃げる場所はない——鋭い刃がオルロワージュの端麗な顔へと突きこまれ、血飛沫が上がる。

「ちっ……」

顔をしかめたのはイルドウンだった。素早く飛び退るその胸元には浅いながらも一文字の裂傷が奔っている。傷を負い、動きを止めたイルドウンを更に金獅子姫の追撃が襲う。イルドウンの構えた剣を巻き落とすようにいなし、そのまま腹腔を強かに蹴り上げた。毬のように飛んでいくイルドウンをしかし金獅子姫は追わず、術の精神集中を終えたばかりの零姫へと左手の盾を投擲する。だが凄まじい風音を立てて飛来する黄金の盾を零姫はこともなく素手で捕まえ、握り潰し、牙を剥きだして狂相を浮かべた。

「残念だったな」

淡々とオルロワージュは言う。イルドウンの剣を防ぎはしたものの、セアトの剣は確かにオルロワージュを貫いていた——だが、王の様子にダメージを受けた様子は微塵もない。オルロワージュの身体は肉にして影。いかな妖力を秘めた妖魔の剣といえど形を持たぬ影を断つことなどできはしない。

「相変わらず厄介な力だ」

かつての敗北を思い出したのかイルドウンが不愉快そうに呟いた。

「だが、やりようはある……」

セアトはオルロワージュから目を離さずに右手の剣をイルドウンへと伸ばす。ちらりとセアトに目を向け、ふ、と一息吐き出してイルドウンが妖魔の剣をセアトのものへと静かに重ねる。共振——妖魔能力の励起。ヒートスマツシユ、そしてアイススマツシユ。二振りの刃はそれぞれ極低温と超高熱とを纏い、爆発的な反応とともに閃光と蒸気を生み出した。ほんの一瞬目を閉じたオルロワージュの背後からラストバンが振動波を放つ。瞬時に影化してオルロワージュはこれを無効化する。しかし——、「ほう」感心したようにオルロワージュが小さく唸った。再び迫るイルドウンとセアト、その気配が消えている。

たとえ攻撃を無効化しようとも振動波はその周囲を取り巻いている。音や視線、風の流れ、僅かな気配ですら遮断され、五感は乱される。それでもなお、オルロワージュ

の表情に焦りはない。それどころか微笑みさえ浮かべたままオルロワージュはなんと自ら目を閉じてしまう。

「なかなか良い趣向だ」

賛辞の言葉を悠揚と口にし、オルロワージュは妖魔の剣をあらぬ方向へと指し示す。剣術を知らぬ妖魔の王が、しかしいかなる達人の技倆をも越えて体現する無念無想——見えぬはずの剣を視、捉えられぬはずの剣を受ける神の御業。はたして、現れたイルドウンの剣はぴたりと止められ微動だにしない。初めからそうなるべくしてそうなたとでも言うかのように、死角から襲った攻撃は予定調和に凍り付いていた。

「今の攻撃。中々面白かったぞ、イルドウン」オルロワージュは微笑み、その反応にイルドウンが不敵に答える。

「違うな。まだ『今』は続いている」

「何……?」

「我が主よ!」

不思議そうに呟いたオルロワージュの足元から漆黒の闇を抜けてセアトが跳びあがる。それは剣術においては本来あり得ぬ方角、妖魔の戦においてすら経験しがたい位置からの一撃だった。いくらあがこうとも躲す術はない——通常ならば。妖魔の王オルロワージュに油断がありはしてもその反応に弛緩はない。「効かぬと言ったはず」凄ま

じい対応速度で影へと溶けるオルロワージュ。幾重もの策を弄し繰り出したはずの必殺撃を容易く無と化し——しかし、そこでオルロワージュは動きを止める。

「む……」

初めてオルロワージュは眉を寄せる。その動きはこれまでと比べてどこかぎこちな
い。

「そうか、セアト……」

得心したようにオルロワージュはセアトへと目を向ける。緊張を滲ませながらこちらを見据えるセアト。その体はどろりと蠢いて闇に溶け、オルロワージュの外套と繋がっていた。先の攻撃、それは傷を与えるためではなくこのためであった。

「この力は御身から受け継いだもの。影騎士たる我が剣、御身の影を縫いとめさせて頂
く！」

影には影。あらゆる剣を無効化するオルロワージュの力に同じ影の力で干渉し、中和する。それはセアトにしかできないことだった。

「これは……」

「やれ、イルドダウン！」

セアトは叫び、答える暇すら惜しいとでも言わんばかりにイルドダウンが、ラストバンが斬りこんでいく。

「オルロワージュ様！」

零姫と打ち合っていた金獅子姫が血相を変えた。思わず振り向いたその背中を大上段から振り下ろされた零姫の剣が奔る。だが金獅子姫は深い裂傷に呻き声すら漏らすことなく駆け出していく。血が風に舞い大地へと落ちるよりも速く、金獅子姫は膨れ上がった筋肉を撓ませて地を蹴って跳んだ。自らの生き死になど問題ではないというその献身は、しかし同時に金獅子という妖魔の弱点でもあった。好機を逃すまいと背後から零姫が追い、口元を釣り上げ、今ならば殺せるとけたたましく笑う。

「ふむ。これは困った」

危機感に欠けた囁き声を漏らしてオルロワージュはつかのま真剣な表情を浮かべた。体は相変わらず思うようにならず、イルドウンの剣は眼前に迫っている。だがオルロワージュの懸念はそこではなかった。

「金獅子姫を守らなくてはな」

ぎりぎりど歯を食いしばり、必死の形相でオルロワージュの影を止めていたセアトはその台詞にぎよっとする。自分の目に行っているものが信じられなかった。確かにオルロワージュの「影」は封じていた筈だった。だが影へと逃れることすらなく、オルロワージュは妖魔の剣でラストバンの剣を打ち払い、その左小手でイルドウンの攻撃を受け止め、そして——妖魔の具足を踏み下ろした。ただそれだけの行動が一面に激震を引

き起こし、影となつていたセアトを吹き飛ばしていく。金獅子姫を追う零姫の指先がじり、と電撃を帯び、具現化した死の黒猫が屈強な女戦士の脾腹を噛み千切ろうと飛び掛かる。あと数秒あれば確かに金獅子姫は死んでいた。その筈だった。黒騎士三体を退けたオルロワージュがおそるべき速さで転移することさえなければ。

オルロワージュは優雅に金獅子姫を抱き留め、軽やかに後ろへと飛んだ。

「危ないところであつたな、金獅子姫」

耳元でささやかれたその言葉に顔を赤らめながら、金獅子姫は忸怩たる思いで項垂れる。

「申しわけございません。御身の手を煩わせてしまうとは……」

「気にすることは無い。零姫はあれで余に匹敵する実力者。余とそなた、互いに気を引き締める必要があるようだ。喜ばしいことだ。此度の戦はこれまでの退屈なものとは違う。今宵の舞踏を共に楽しもうではないか」

「はい。オルロワージュ様。この身は御身の為に」

高揚に顔を上気させる金獅子姫とは対照的に、吹き飛ばされたセアトの顔は暗く落胆していた。無敵とも言えるオルロワージュの能力を一時的とはいえこの自分が防いだというのに、それを超えて余りある妖魔の王の実力に剣を握る両手がやけに重く感じられる。

「今のはなかなか惜しかったな」

無表情に告げるイルドウン。焦る様子のないその姿にセアトはきつと顔を上げてくつてかかろ。

「惜しかった、だと？ 我ら三体がかりで傷一つ負わせることができているのだぞ！」

「そうか？」

「そうか、だと？ どうしてお前はそこまで呑気なのだ……！」

苛立ち交じりに吐き捨て、そこでセアトははつとする。見つめる先で、イルドウンはぼそりと言った。

「オルロワージュ。剣を受けたな」

「ふむ……？」

オルロワージュが訝しげに目を細め、己が持つ妖魔の小手を観察する。イルドウンの剣を受けたその箇所は確かに亀裂を見せている——だが、それ以上でも以下でもない。

「これがどうかしたのか？ まさかこの程度の成果を喜ぶそなたでもなかるう」

「いいや、まずはその程度で十分だ」

イルドウンは答え、そして唱えた。

「——クリスタライザ結晶剣」

乾いた音がした。オルロワージュユの見つめる先で妖魔の小手は見る見るうちに結晶へと覆われていく。

「む……」

顔を顰めたオルロワージュユが妖魔の小手を外し投げ捨てる。転がった妖魔の小手は完全に結晶と化し、やがてほろほろと崩壊し塵となった。

「俺とて、貴様に敗北してから何も考えずに過ごしていたわけでもないのにな」

「その答えがこの結晶、というわけか？」

「ああ、そうだ。いかにお前が影化しようとするこの剣は全てを固め、そして砕く」

「ふむ……」オルロワージュユは頷く。「やってくれたな」

瞬間、突如として自らを襲った戦慄にイルドウン達は一斉に跳び退る。目の前の敵が何をしたという訳でもない。しかしこちらを見つめるオルロワージュユが漂わせる気配は、明らかにこれまでのものとは一線を画していた。

並の妖魔であれば息をただけで絶命するほどの妖気。あまりにも冷たく、凍えるほどの威圧感。

「では第二幕といこう」

オルロワージュユは言った。妖魔の王の足元から三本の影が伸び、その背後へと凝り固まっていく。肉もつ影は今まさに生み出されたかのように蠢き、輪郭を取り、恐ろしい

変貌を遂げた。

◇

オルロワージュ。妖魔の王が備えるその“格”の顕現。他を魅了する美貌、他を威圧する恐怖、そして何物にも屈しない誇り。妖魔の絶対的な格を決定づける三要素——そのアイデアたる姿が俄かに命を持ち、脈動を始める。

巨大な槍を携え、異形の羽を羽ばたかせ枯衰の風を起こす重装の烏面——“疾風”の寵姫。

燃え盛る火焰を身に纏い、生物を狂気に駆り立てる咆哮を繰り返す獣——“野生”の寵姫。

その瞳に神秘を宿しながらもあらぬ寓歌をうわ言のように呟く道化師——“知性”の寵姫。

オルロワージュが生み出した新たななる魔将、三人の寵姫。その力を知っている零姫は咄嗟に叫んだ。

「いかん！　みな下がるのじゃ！」

「いいや、もう遅い」

オルロワージュの厳然たる宣告。大崩壊が始まった。『疾風』が背中の羽を蠢かし、竜巻を巻き起こす。局所的でありながら極限まで圧縮された螺旋の風はラストバン、そしてセアトを食らい、遙か上空へ吹き上げた。続く『野生』の全身が極彩色に発行し、口元から夥しい火焰を無造作に吐き出し始める。周囲は瞬く間に高熱と化した。景色は歪み、どろどろに溶け落ちた金属がどす黒く明滅を繰り返す。全身を焼かれたイルドゥンは膝をつき、荒く息をする。その息すらも燃え盛る火焰の中ではままならない。数的有利は瞬く間に覆された。不利に傾きつつある戦況を打破すべく矢継ぎ早に術式を組み上げた零姫は三人の寵姫へと幻体生物を放つ。だが、それまで動こうとはしなかつた最後の寵姫——『知性』がくすりと笑う。零姫が攻撃を放つのとほぼ同時に、『知性』もまた術を唱え、幻夢の一撃をぶつけ相殺する。毒もつ牙を尖らせたジャツカルを夢魔によつて昏倒させ、コカトリスがその石化の瞳を光らせる前に死神で絶命させ、そして鎌を振り上げ野生を襲わんとする死神を黒猫が混乱させる。

「おのれ……！」

「先ほどの借りを返させて頂きます」

歯ぎしりする零姫に真正面から金獅子姫が斬りかかる。小さな体で剣を受け止める零姫。その体格の差は如何ともしがたく、絶対的なりーチの差に防戦が続く。

「たとえば妖魔の格が劣れど、剣術においてはこの私に一日の長があります。零姫様、お覚

悟を！」

「ほざけー！」

零姫が妖魔の剣を手に更に一步踏み込んでいく。吐息すら届くほどの至近距離で両者は相対し、目にもとまらぬ攻防が始まった。一瞬の膠着状態から一切の予備動作なく繰り出された神速の剣技——金獅子姫の無拍子。反応することのできない筈の剣をしかし零姫は冷めた目で身を捻って躲すと手元を滑らせた剣を落とす、そのまま足で蹴り上げた。顎目掛けて飛ぶ剣を金獅子姫は僅かに首を振るとその牙で啞え止め、無防備な零姫へと稲妻突きを返す。対する零姫は翻身滑腿からの離心虎撲——離れると見せかけての双掌打にて剣を打ち払う。零姫の呼吸が変わる。内息を練り、剽力を全身へと巡らせての震脚。そこからの応答はあまりにも目まぐるしく交わされた。天地二段には蛙形漸肘。神速三段突きには回陣？邪。鞭のように振り出した手の甲で突きをいなした零姫は剽剽のみで背後から迫る「野生」の電撃を察知し、剣を蹴り上げて掴み取り、視線を送ることなく後ろ手に構えて受ける。電撃の衝撃に零姫の全身が仄かに痙攣し、金獅子姫の瞳がざらりと光った。全身全霊を込めた突貫——ベアクラッシュ。いかなる妖魔も骨ごと打ち砕く一撃に零姫はにやりと笑う。触れただけで折れてしまいうその細腕——その二本の指だけで金獅子姫の剣をびたりと静止させる。零姫の無足化剽によって全ての衝撃は完全に受け流されていた。

戦いは右手の透骨拳で終わった。全力の攻撃を外された金獅子姫は体軸の立て直しが間に合わない。肋骨の隙間へと吸い込まれるようにして零姫の中指がぶち込まれ、体内で炸裂した剄に金獅子姫が吐血する。

「……笑わせるな、小娘。貴様の武術など妾に言わせれば真似事。所詮、獅子は獅子。けだものに剣は使えぬ」

「ふ……ふふ……、お見事……」

呟いて、金獅子姫は気絶する。零姫は迷うことなくその首を斬り落とした。妖魔の再生を防ぐため更に心臓を抉り出そうと屈んだその時、吐き気を催すほどの怖気が鳩尾に突き刺さる。本能が告げていた。一刻も早くこの場から立ち去り、逃げねばならない。それは長い時生きる零姫にとって久方ぶりに味わう恐怖。齒の付け根が我知らず震え出す。

「——そなたは何をしているのだ、零姫……？」

音もなく、オルロワージュは零姫の背後へと現れた。

静かに問いただすオルロワージュの瞳に感情はない。澄んだ冬の湖のように静謐で、冷たく清涼な支配者の相貌。しかしその奥底に渦巻く逆鱗を零姫は知っている。

「あ……」

「なぜ、余のものを奪おうとする。なぜ、余から奪おうとする。そんなことを許した覚え

はないのだがな、零姫……」

「ならば、妾を……憎むがいい、オルロワージュ……」

掠れた言葉で口にすることができたのはそれだけだった。だが長い時を生きた零姫は知っている。恐怖には抗わねばならない。戦わねばならないのだと。齒を食いしぱり、牙を剥きだし、劍を構えて敵へと吠える。

「妾を見よ……！ 貴様の前に立つ女の姿を！ この姿がその目に写っているか、オルロワージュ！」

「見えているとも。我が妻、我が乙女。余の支配から抜け出し、そしてまた再び支配されんとする第一の姫よ」

「いいや、違う……！」

苦し気に言葉を絞り出しながら、零姫は劍を構える。

「貴様には何も見えてはおらぬ。ただ妾を通して過去を見、妾という名の物語を読み上げているだけじゃ。妾はあまりにも美しすぎるゆえ、そんな男に抱かれてやるわけにはゆかぬ。……妾を憎め、オルロワージュ。そうでなければいつか妾はそなたの全てを奪おうぞ。それが嫌だというのなら、その劍で見事この臓腑を掻きまわしてみせよ！」

「そなたが望むというのならそうしよう」オルロワージュは暗い目をして答えた。「それが願いだというのなら」

瞬間、オルロワージュの姿は消え、零姫の眼にはその影だけが映った。続く攻撃を躲すことができたのはまさに幸運としか言いようがない。我知らず後退ったその眼前を妖魔の剣は恐ろしい音を立てて通り抜け、全身から血の気が引いていく。

速すぎる。

脳裏に浮かんだ単純な言葉に思考が埋め尽くされる。確かに自分は強くなった筈だ。オルロワージュを吸血し、妖魔の君の力を手に入れた。幾度となく転生を繰り返し、無数の武術を習得し、妖魔を超える力を手に入れた筈だった。しかし、それでもなお、妖煌帝オルロワージュはあまりにも強い。長い時を経て精製されたそれは何者にも打ち勝つ力だった。誰に傷つけられることもなく、他者の干渉を何一つ受けることのない力。オルロワージュは血を流さない。痛みを覚えることさえない。それはそうあるべきと彼が信じた力。どれだけの時が経とうとも変わらずに済む絶対にして無敵の力。幼子の夢想にも等しい抽象的で都合の良いそんな力を携え、オルロワージュは生き続けている。

「それが……そんなものが、永遠などであつてたまるかっ！」

血反吐を吐く思いで零姫は叫んだ。全身に喝を入れ死に物狂いで剣を交える。一合、そして二合。交わした剣戟の数だけ傷は増え、腕が痺れていく。なぜ世界はこんな怪物を生み出してしまったのだろう。こんなにも哀れな怪物を。見ろ、眼前の男はただ強い

というだけでそれ以上でも以下でもなく、強さの果てに何一つ手に入れられず今を生きている。神に慈悲があるのなら何であつても構わない、この男に与えてやれば良い。それが弱さであれ涙であれ構わない。惰性でも死でも知るものか。神は強さだけを与えてそれ以外の全てを奪つた。体に心を入れたのに慰めは用意しなかつた。

ああ、オルロワージュ。

牙を剥き、その顔を修羅と化して戦いながら、零姫は心の中で涙を流す。

是が非でも勝ちたい。勝たねばならぬ。そう思いながらもしかし形勢は次第に不利へと傾いていく。冷たい汗が頬を伝う。

妖魔の剣をわざと受けとめ、吹き飛ばされるようにして背後へと転がり仲間の様子を窺つた。黒騎士たちはそれぞれ三人の寵姫と戦っている。『疾風』とセアト。『野生』とイルドウン。そして、『知性』とラストバン。この状況を打破せねば万に一つも勝機はない。瞬時に確認した零姫は脱兎のごとく駆け出した。

「ラストバン！」叫び、そして、『知性』へと斬りかかる。「妾の代わりに死ね！」

ラストバンの顔がぎよつとするが知つたことではなかつた。零姫を追つて現れたオルロワージュは寵姫を攻撃に巻き込まぬため標的を変えた。ラストバンの顔が蒼褪める。多少なりとも時間稼ぎの役には立つだろうと判断し零姫は、『知性』へと攻撃を続ける——フリをして、そのまま駆け抜けていく。向かう先はセアトだ。自在に宙を舞い

目にも止まらぬ槍を繰り出す。『疾風』に手を焼いているセアトに零姫は叱咤する。
「セアトよ！ 影騎士たるそなたの力を見せる時ぞ！」

セアトは飛び回る。『疾風』へレールガンを乱射するのを止め、かつと目を見開いた。空を飛ぶ『疾風』の更にその上空から死人ゴケが溢れ、そして墜落する。疾風の寵姫は甲高い叫び声を上げて顔を覆った。美しい寵姫の皮膚は見る見るうちに爛れ、腐り落ちていく。痛ましい声で呻く、『疾風』へとすかさずセアトは剣に火焰を纏わせて叩きつける。痙攣しながらもその剣を槍で受け止める。『疾風』だが、しかし剣を交えるセアトの姿が不意に揺らめき、影と化し——その身を透過して現れた零姫の一撃までもを受け止めることはできない。翼持つ寵姫はこうして絶命し、再びオルロワージュの持つ影へと戻った。



「……どうした、ラストバン？ それで終わりか？」

オルロワージュに見下ろされ、ラストバンは荒い息とともに膝をつく。すでに全身を切り刻まれ、身に纏う服はどす黒い青に染まっている。ただでさえ不利なこの状況、妖魔の王とその寵姫、『知性』に囲まれての戦いは僅かな間に黒騎士を瀕死に追い込んで

いた。

「やれやれ……」痛みに顔を歪ませながら、しかしラストバンはなおも惚けてみせる。「こういった役回りは我が友人殿に任せておきたかったのですが」

「良い機会であろう。そなたも妖魔ならば自らの威を示して見せよ」

「生憎とそのような事柄には興味が湧かないのですよ。オルロワージユ様。私の愉悦はそんなところには無い」

「ほう？ 確かにそなたの野心は余にも量りとれぬほど壮大なようだが。しかしそうであればなおのこと、こうして表舞台に立ってしまったのは失策だったのではないか？

脚本家は脚本家らしく、舞台の袖で役者の活躍でも眺めていれば良いものを」

「仰る通りです。我ながら何をしているのかと思いますよ」

苦笑して、ラストバンは震える手足に力を入れて立ち上がる。眼前に立つ二体の妖魔に己の死を予感しながら。

「……そなたもまた、己が妖魔の性に殉じて滅びを迎えるか、ラストバン？」

「私はそのようなものによって滅びる気はありません。この世界は私を中心にできているのです。支配者たるこの私を前にして運命が崩れ去ることなどけしてない」

「なかなか大きな口を叩くな、ラストバン。この状況から勝つ算段がそなたにはあると？」

「さてそれはどうでしょう。しかし少なくともオルロワージュ様、勝つというのなら私は既に御身が持ちえないものを手に入れております。たとえどれだけの時を超えようとも御身が獲得することの叶わなかったもの——“友”を。私は既にして勝利者なのです。我が君」

不敵に言い放つラストバンにオルロワージュもまた幽かに笑みを見せる。

「だがそなたは今から敗北者へと堕ちていくのだ。そなたが手に入れたというのなら、今度は余が奪ってくれよう」

「ハ……」ラストバンは笑う。「まだお分かりにならないのですね。あらゆるものに勝利し、あらゆるものを手に入れてきた妖魔の王。それだけに貴方は知らないのだ。勝利ではけて手に入れられぬものもこの世にはあるのだということ。……我らが王、オルロワージュよ！ 我が最期の剣、受けて頂こう！」

凜と言い放つラストバンは外套を翼のようにはためかせ、地を蹴って駆け出している。風を切り、音を超え、その身に孕む策略の何もかもをかなぐり捨てて死地の最中へ飛び込んだ。一步。体勢を低く。一步。水面を跳ぶように軽く。一步。踏み下ろしたその足で己が心に覚悟を穿つ。避けることなどはや考えはしない。捨て身の特攻を止めるべく主の前に出た“知性”が仮面の奥に不気味な瞳を光らせて立ちはだかる。白痴じみた独り言を呟きながら剣を突き出す“知性”。だがラストバンは何もしな

かった。受けることも躲すことさえも考えず、「知性」の剣に右肺を穿たれ、——しかし止まることなく突き進む。爛々と光るその瞳に「知性」の動きが一瞬止まった。狙うは「知性」の背後、妖魔の王ただ一人。はっ、と息が漏れた。ラスタバンの口元から隠しきれない爽やかな笑みが零れる。「知性」の腹部にそつと剣を差し込んだ。それは、けたたましい叫び声をあげる「知性」ごとオルロワージュを貫く必死の一手。しかし、

「知っているとも。ラスタバン」オルロワージュはやはり顔色一つ変えない。「だからこそ余はこうして戦っているのだ」

「く……！」

「そなたこそ、忘れたのか、ラスタバン？ そなたの攻撃など、余には効かぬ」

「知性」に隠れ見えなかつた筈だというのにオルロワージュは当然のごとく影と化している。ラスタバンの剣は届いてはいない。蒼褪めたラスタバンは膝をつき荒い息をついた。その足元には夥しい血が広がっていく。

「確かに最期だな、ラスタバン」

冷たく言い放つオルロワージュ。憔悴しきつたラスタバンは力なく微笑む。

「これが、ファシナトウルを統べる妖魔の王の力か……。このラスタバンの感服いたしましたよ」

「……」

「やはり妖魔の王に相応しいのは御身以外にはありません。……どうか、お慈悲を、オルロワージュ様。この愚かな私を再び御身の配下にお加えいただくわけには参りませんか……？」

見苦しい命乞いにしてはそれはどこか童にも似た無垢な表情だった。オルロワージュはじつとラストバンを見下ろしていたが、やがて寂しそうにつぶやいた。

「つまらぬ」オルロワージュは言う。「そなたたち黒騎士には期待していたというのに、この程度か……。失せろ、ラストバン。戦わないというのなら追わぬ。どこへなりと消えていくがいい」

興味を失くしたようにその身を翻すオルロワージュ——その後ろ姿にラストバンはニヤリと笑い、妖魔の剣を無防備な背中へと投げつける。

「つまらぬ、といった筈だ」

再び振り向いたオルロワージュの瞳は倦怠感にうんざりしたように曇っていた。ラストバンの剣は影の中に吸い込まれて素通りし、無造作に抜き放った王の剣が黒騎士の頭を断ち割る。顔れるラストバン。しかしその顔は——どこか誇らしげに微笑んでいる。舌を震わせながらラストバンは言った。

「勝った、ぞ……イルドウン……」

「——なに？」

オルロワージュが訝し気に問いを発したその時、離れた場所でおぞましい呻き声が上がった。失敗に終わった筈のラストバン最後の攻撃——投げつけられた妖魔の剣は火焰を吐き続ける「野生」の喉元を見事に刺し貫いている。

「時間は稼いだ……。寵姫も倒した……。息も絶え絶えに項垂れて、しかし力強くラストバンは吠える。「我が親友よ……。後は任せるぞ……！」

ラストバン。押し殺した声でオルロワージュは剣を振り、ラストバンの首が胴から離れる。

「下らぬ……といたいところだが、ラストバン。やつてくれたな……」

苦々しい声の中に賞賛を滲ませながらオルロワージュは見た。口腔内で膨れ上がった火焰は膨れ上がり、「野生」の瞳孔から火を噴きだす。混乱しながらも寵姫は両手を突き出して電撃を滅多矢鱈と鞭のように振り回すが、右手をセアトのレールガンに撃たれよろめいた。続く零姫が放つ穢れた犬が足首に噛みつき、流れ込んだ毒は瞬く間に全身を巡る。苦し気に全身を掻き毟る寵姫へとイルドウンが迫りその剣を振りかざす。最後に「野生」の寵姫が選んだのは自らの体ごと敵を消滅させる禁忌の炎術だった。焼殺——イルドウンの剣を受けながらしかしけして怯むことなく、自らの肉体を敵へと預け発火能力を全開にする。

だが自らを省みないというのならそれはイルドウンもまた同じ。ぶすぶすと皮膚が焼け、全身が焦げていこうとも構うことなく、「だからどうした」と言わんばかりに無慈悲な剣で寵姫の上半身を斜めに切り裂いた。倒れ伏した「野生」の口からラスタバンの剣を抜き、鋭いイルドウンの眼光がオルロワージュを貫いた。

……室内はいつの間にか様相を一変させている。あたり一面に火焰が燃え盛り、熱せられた空気がどろりとうねり出す。赤々と照らされた薔薇はしかしどす黒く変色し、醜く縮れては花卉を散らせていく。針の城の最上階、無数の薔薇は全て燃え、濃厚な命の匂いを焦げ付かせていった。

硬質な音を立てて妖魔の具足が床を叩く。咲き誇る薔薇たちに何らの感慨も見せることなく黒騎士イルドウンは足を進める。今だ治りきらぬ熱傷の浮かぶ顔に不遜を刻んで数多の薔薇を踏みじり、イルドウンはオルロワージュの前へと立った。妖魔の王を前にして怖れもなく惑いもなく、堂々と立ちはだかる。その後ろからは零姫とセアトが静かに現れ、険しい顔で剣を構えた。

イルドウンは倒れたラスタバンのへちらりと視線を向ける。再びオルロワージュへと眼差しが戻った時、その眼光は赤々と燃えていた。その瞳に一片でも怒りや憎しみがあつたならオルロワージュは口を開き簡単な擲擧でも投げかけたかもしれない。だがイルドウンの眼にはただ静謐な決意が宿るばかりで、妖魔の王はそつと口を閉じ、初め

て剣を構えた。

対峙する妖魔と妖魔。人外の力を誇る不死の怪物たち——最後の死闘は静かに始まった。飛び散る火の粉を断ち切つて妖魔の剣が唸りを上げる。三対一の状況でしかオルロワージュは焦りを見せない。零姫の幻術を打ち払い、セアトのレールガンを無効化し、イルドダウンの剣を捌く、その行程を息一つ乱さずに一瞬でやってのける。妖魔の王が無造作に剣を振る——それだけが、たったそれだけの斬撃がおそるべき鎌鼬となつて壁という壁を両断する。風圧に外套を切り裂かれながらもセアトは次々に壁を天井を飛び回り、無数の銃弾を乱れ打ち妖魔の王の妨害に努めるが、オルロワージュは意に会することなく淡々と敵対者たちを観察している。元来が無敵にして無敗の王である。自らに致命傷を与えうるのはごく僅かなものに過ぎないとオルロワージュは知っているのだろう。

背後から再び迫る零姫の刺突にオルロワージュは影化を選択——その動きががくりと止まる。セアトが大地にその剣を突き立て、オルロワージュの影を縫い留めたのだ。背後の零姫、そして眼前にはイルドダウンの剣。オルロワージュの眼が見開かれ、その口元には猛々しい笑みが生まれる。右手を稲妻の速度で跳ね上げ、小手で受けた。ぎりぎりと言を立てて二本の剣が妖魔の小手を滑る。オルロワージュの体が軋む。だが凄まじい膂力で零姫とイルドダウンを吹き飛ばすと同時に結晶化した小手をセアトへ放つ。

吹き飛ばされたセアトが剣を手放したことにより縛めは解かれた。地を滑るようにしてオルロワージュの剣が奔る。重力を感じさせぬあまりにも軽やかな剣閃。突きこまれた切っ先が零姫の頬を掠め鮮やかな血飛沫が飛び散った。

零姫の頬が吊り上がり、その瞳孔が縦に裂ける。悪鬼もかくやという形相を浮かべた第一の姫は合掌とともに大喝を放った。途端、零姫の頬から零れ落ちた血液はびたりと宙に停まり、紅の矢となってオルロワージュを襲う。漆黒の外套を翻したオルロワージュを追う弾丸は既存のいかなる物理法則をも越えて敵を追う。不気味な蠕動を繰り返し、不定に姿を変えながら獲物を狩る鮮血の一矢。だがオルロワージュの瞳がひときわ昏く輝いたその時、矢はつかのまの心と恋とを持ちえたかのように停止し力なく地へと墮ちていった。妖魔の王が持つ深奥の力——セレクション選別。力なきものは王が望まぬかぎりその身に近づくことすらできない。

零姫、セアト、そしてイルドウン。三者三様ながら死力を尽くしてここにいます。しかしながら一秒を超え十秒を超えていまだなお埋まらぬ実力の差に麗しき妖魔たちは歯を食いしばって耐えていた。ほんの一瞬気を抜けば戦線は崩壊し、一度の瞬きで首が飛ぶこの決死戦。条理を超えて聳え立つ妖魔の王という果てしなき頂きを踏破するには、この世の定めを打ち砕かねばならない。妖魔のサガ——他を魅了する美貌、他を威圧する恐怖、そして何物にも屈しない誇りという三要素が決定づける妖魔の格によって支配

される生き物の宿命を超越しなければ勝機は万に一つもない。なぜそんな生き物が生まれたのか——妖魔たちはみな知らない。なぜ「格」というものが存在し、なぜ自分がかくあらねばならないのか、その所以を妖魔は知らない。ただ在るべくして妖魔は在り、数多の命を食らう支配者たちはしかし同時に妖魔の掟によつて支配を受けている。何も知らずに生まれ落ち、神に象られたその意を知らず、……しかし零姫は、セアトは、イルドウンは知っている。

今こそこの世の理を破るときなのだ。

オルロワージュが「永遠」へと挑んだように、自らもまた破理を成し遂げるのだ。

麗しい妖魔の面を脱ぎ捨てて三者は吠える。獣のように息をして燃え立つような声を吐き全身全霊の獅子吼を上げる。優雅・妖美・高慢・倨傲。妖魔を構成するその一切をかなぐりすてて無心の剣がいま、手のひらから踊り出す。セアトの背後には臃げな陽炎。朱、蒼、そして碧。三色の幻像が守護するようにセアトを抱き、その剣へと宿る。限界を遥かに超えた超過駆動。全身の筋繊維がぶちぶちと千切れていくが構いはしない。まだ足りない。もっと寄越せ。腹の底には飢餓。胸に宿るは原始の衝動。殺意が牙を剥きだし、視界が紅に染まっていく。

それは、たった一瞬のことだった。

邪悪な笑みを浮かべた零姫が金獅子姫を投げつけ、ほんの僅かな隙が生まれたその

時、オルロワージュの剣はいなされ、セアトの剣が影を停め——そして、とうとうその胸をイルドウンの剣が貫いた。ほんの一瞬、イルドウン達の力はオルロワージュを勝り、その牙城を打ち崩した。



……辺りは、いつしか怖ろしいほどの静寂を取り戻していた。自分の体だけがまるで別の生き物にでもなったように忙しく息をしている。体が無闇に熱い。それまでは気にならなかった傷が途端に疼き出していく。

セアトは信じられないものを見ているように口を噤んでいる。妖魔の王、オルロワージュは膝をついている——ああ、こんな光景を目にする時がまさか訪れるとは。そして思う、この妖魔の王にもまた等しく血は流れているのだと。

しとしとと流れ落ちる血の色は蒼かった。海よりも深く、空よりも遠い瑩然の蒼。貫かれれば血を流す、そんな当たり前のことが、しかし目の前の妖魔には不釣り合いに思えてならない。

「——これが、痛みか……」

小さな声でオルロワージュは言った。途方に暮れた声だった。泣いているのかもし

れなかった。……いいや、やはり、それは違う。妖魔の王オルロワージュに至っては、そんな感情は遙か遠くに失ったのだ。かつて死神のように優しい乙女は言った。いつか心が亡びたら子供ののように涙を流して死んでしまえばそれでよい、と。おかしな話だ。それが容易くできるのなら一億年の長きを生きたりはしない。心が亡びるその前に、きつと涙を忘れてしまう。それが命の性なのだから。

「……久方ぶりに味わうこの感覚……。悪くはない……」

だから、きつと、オルロワージュは笑っているのだろう。

笑っている。

たとえそれが絶望でも悲しみでもオルロワージュという怪物の中にそんな言葉はなく、たとえ泣いているのだとしてもオルロワージュは静かに微笑み始めるのだ。

たった一人で。

オルロワージュに従う妖魔はもういない。金獅子姫は倒れ、生み出した三人の寵姫もまた消え去った。それでもオルロワージュは虚ろな笑みを浮かべて今さらのように笑い出す。そんなことは最初からわかっていたのだから。

ゆつくりと、胸元に深く突き刺さった剣を引き抜く。思わずよろめいた足に力が入らず膝が折れ、片手をついた。

「やはり、生きてはみるものだ……」オルロワージュは言う。「これほど余を楽しませる

出来事が待ち受けていようとは……」

オルロワージュ。零姫は茫然と呟いた。

オルロワージュ様。セアトが困惑と共に告げる。

オルロワージュ……。忸怩たる面持ちでイルドウンが言葉を濁す。

誰に対しても応えない代わりに、オルロワージュはただ静かに微笑んだ。その表情に——はつと我に返ったイルドウンが唱える。結晶剣。オルロワージュの肉体を結晶化し、封印する筈の技だった。しかし、

「なぜ、効かない……？」

呻くようなイルドウンの声がやけに反響して聞こえたその時、血を流しながらもオルロワージュは動き出した。戸惑いを隠せぬままイルドウンは近寄り、追撃を与えるべく剣を拾う。対するオルロワージュの動きは負傷を受けてかやはり重く見えた。遅いとさえ言えるその速度に慢心したというわけでもないが、イルドウンはどこか腑に落ちぬままに剣を振り上げ、そしてそれが仇となった。

膝をついたまま、顔を上げもせずには剣を振る。

オルロワージュは傷を装っていたわけではない。その速度は相も変わらずゆつくりと——しかし、その行動はどこか滑らかで、研ぎ澄まされたように決定的だった。その攻撃に立っていられた者は離れた場所で影に剣を突き立てていたセアトだけだった。

糸の切れた人形のようにあつけなく零姫とイルドウンが倒れていくのを、セアトは戦慄と共に眺めていた。一体なにが起きたのだ、そう思いながら声に出す暇すらもなく、気が付けばオルロワージュはセアトの目の前に立っている。

「残るはそなただけだ。セアト」

澄み切った声でオルロワージュが告げる。わなわなと震え出す歯の音を懸命に呑み込み、セアトは静かに首を垂れた。

「……どうした、セアト？ かかってくるが良い」

「オルロワージュ、様……」

「そなたが最後に残ったのは必然というものだ、セアトよ。そなたは弱い。そして……だからこそそなたは強く在ろうとし、事実ここにこうして立っている。我らは強く在らねばならぬ。戦い続けねばならぬ。——立て、セアトよ。我らはそうして己が宿命に抗わなければならぬのだ」

「私は……」

投げかけられたオルロワージュの言葉に、血を吐くようにしてセアトは答えた。

「かつて御身に——貴方に弱さを指摘されたその時、私には貴方の気持ちが一つ理解できなかった。貴方もまた、私の気持ちなどはまるで分かつてはくださらないのだと、そう思っておりまして。……しかし、今では違う。十分の一、百分の一に過ぎずとも

……貴方の心のその欠片が私には理解できる気がする。そしてまた、この惨めで矮小な私の魂というものを、ほんの一部であれおそらく貴方は知っている。オルロワージユ様。間違っていたのは私の方です。私の弱さは貴方のそれとよく似ていると言われたその時に気づくべきだったというのに。オルロワージユ様……。貴方に最大限の敬意を。そして……ささやかな憐れみを捧げます」

セアトは立ち上がり、再び剣を構えた。自らに待つ結末を悟りながら、しかし毅然と胸を張った。それが針の城第一の黒騎士、セアトの姿だった。

「強くなったな」

優しい言葉に背中を押されるようにして、セアトは駆け寄りざまに剣を抜き放ち、――そして、やはり届かずに倒れ伏す。敗れたというのにその表情はどこか穏やかで、これから滅ぶのだという恐怖は一片も残されてはいなかった。

こうして、オルロワージユは勝者となった。周囲を見回して声をかける者はいない。王であるにも関わらず伴う侍従はなく、剣を交えるべき敵さえも消えた。空を茫洋と見上げれば崩壊した針の城に仄かな日の光が差し込んで、自らの立つ場所を幽かに照らし出している。永遠という名の舞台上に立つ化け物の影がうつすらと孤独に浮かび上がる。

最後に残る者――自らの娘を求めて、オルロワージユはそつと歩み出した。

第三十五幕 仮面の奥で／妖魔アセルス

アセルス達はもう駄目だね。歴史の変わるところが見られると思ったんだが……期待外れだったな。残念だよ。もう行こう、ディアディム。

……。

（主に促され、しかし仮面をつけたメイドは動かない）

どうしたんだい？ いくらアセルスを庇ったって何も変わりはないよ。たとえば女が起きたところで、オルロワージュには勝てない。

……逃げ出すのですか？ ゾズマ様。

無論、逃げるさ。忘れたのかい？ 僕はこの世で最も無責任な妖魔だ。誰かを守るだとか、そんなヒロイックな考えは生憎と持ち合わせていないんだ。

……私はここに残ります。

どうして？ 君の行動にはいつも驚かされるな。いつの間にもそこまでアセルスに肩入れする気になったのかな。

（メイドは膝に抱く血まみれのアセルスに視線を落とす）

やっぱり、君も「正義」が見たいのかな？ 誰もが救われ、誰もが笑みを漏らす……

そんなことが本当に起こりうると信じているのかい？ 君はまたそんなつまらないものに縛られるつもりなのか？

いいえ、違います。ゾズマ様。私はアセルス様を信じているのでもなければ、彼女が正義だと信じているわけでもありません。

だとしたら、なぜ？

(メイドは、宙に視線を漂わせる。自らの魂を探し求めるかのように)

……やがて、ここに妖魔の王オルロワージュ様がやってきます。一度はあの方に魅了されたこの身。記憶も、魂すらも奪われミルフアークと化した私には、あの方を罵倒する権利があるのではないのでしょうか。

……はあ？ 君はいったい何を言っているんだ？ そんなことをして一体何の意味がある？ オルロワージュは君のことを針の城の備品くらいにしか思っていない。君は一瞥もされずに滅ぶのがオチだよ。考え直した方がいい。

そうでしょうか？ 私には、これが絶好の機会のように思えてなりません。……いいえ、きつとこんな機会は一生に一度しかないのです。

(メイドは自らの主を見つめる。仮面の奥のその瞳には、女の意志が確固ときらめいている)

ゾズマ様。私は一度、殴られたのです。……殴られたなら、殴り返さねばなりません。

……それで命を落とすことになったとしても、かい？ たったそれだけのために君は命を賭けると？

はい。

それは「自由」なんかじゃないよ、ディアデイル。それはただの「愚か」だ。

貴方は自分が愚かではないと信じていらっしやるのですか？ 自らが賢いと自惚れるような生き方は滑稽では？

……言つてくれるね。……しかし、まあ、それが君というもののかな。君がそうしたいというのなら、僕は君の意志を尊重するよ。残念ながら、僕はここでお別れさせてもらうけれど。

そうですね……。ゾズマ様。

(メイドの声が僅かに湿る)

なんだい。

今まで、本当にありがとうございました。

……。

貴方に会えたことが、この私の不確かな記憶の中で最も幸福な出来事です。貴方に仕えることができ、私は本当に幸せでした。どれだけの言葉を重ねても、この恩を語り尽くすことはできません。ゾズマ様。たとえそれが嘘であったとしても、やはりもう一

度だけ言わせてください。……貴方を、愛しています。さよなら……。

……君は、なかなか面白い妖魔だった。君ほど愉快な玩具はそうそう無いよ、ディアデイルム。その点に関しては保証する。君と僕との旅がこれで終わりだと思おうといささか寂しいけれど……、でも、ま、仕方がないのかな。それじゃあね、ディアデイルム。楽しんでくれたよ。

◇

そうして……、

回廊を進むオルロワージュの前に、一人の妖魔が現れる。腕組みをしたまま壁にもたれかかり、不機嫌そうに顔を顰めている。野放図に逆立てた赤毛、正気を疑うような胸元のニプレス。ぶつぶつと不満を口にしながら、妖魔ゾズマはオルロワージュを待つていた。

「やあ」

苛立ちを隠そうともせずにゾズマは言った。常とは異なる投げやりでぞんざいな仕事で後ろを指し示し、「アセルスはこの奥にいるよ」と告げた。

「そなたは……ゾズマか。珍しい顔だな。そなたもまた余に挑むつもりか？」

問われ、しかしゾズマはその言葉が聞こえていないかのように視線を背けたまま独り言を続ける。

「まったくさあ、馬鹿は本当に救いようがないと思わないかい？　せつかくこの僕が逃げると言っているのに。ああ、不愉快。実に不愉快だよ」

「何の話だ？　余はこれでも急いでいる。用がないのなら後にせよ」

「特にこれといった用はないよ。主役のアセルス達もこんな有様だし、今回の話はバツドエンドというわけで、僕は今から逃げ出すところなんだ。その前に一言、妖魔の王に挨拶だけでもしておこうかと思ってるね」

「そう言いながらもとうてい礼を尽くすとは言い難いゾズマの態度にオルロワージュは不思議そうに首をかしげる。

「挨拶だけという割には、何か随分と言いたげに見えるが」

「これはね、八つ当たりだよ」ゾズマは言った。「とつても腹立たしいことがあったのでね。僕としたことが感情を上手く制御できないんだ。困ったことにね」

「ふむ……」

「まあ、何にしても八つ当たりは八つ当たりだ。貴方には関係のないことだものな。お先にどうぞ、オルロワージュ様。僕は貴方に勝つ気もないけど、かといって殺される気も無いよ。僕は逃げる。アセルスは好きなようにしなよ」

「手負いとはいえ、余はそなたと戦うことになっても構わないが」

「僕は構う。そんなのは僕の主義じゃない。いくら貴方といえども、本気で逃げる僕を捕まえるにはそれなりに時間がかかるんじゃないかな？ そんなことをしている場合じゃないだろう？」

「確かにな」

答え、それきり興味を失くしたようにオルロワージュは再び足を進める。壁に寄り掛かったままのゾズマを通り過ぎ、——そして、ゾズマの唇が密かに囁く言葉を耳にした。「——っていう、つもりだったんだけどね」

面倒くさそうに剣を抜き、ゾズマはオルロワージュへと斬りかかるが、その打ち込みは呆気なく躲かされてしまう。不意打ちにも危なげなく対応したオルロワージュはしかし、困惑したように眉を顰めた。

「わからぬ男だな。戦うつもりであるなら最初からそうすれば良いものを」

「僕はアセルスを守る、この世の平和を取り戻して見せる……ってかい？ そんなことはできないよ。言つたらう。八つ当たりだよ。こうしているのは不本意な結果なんだ。僕は本当に無関心を決め込んで逃げるつもりでいたのさ」

「ではなぜだ、ゾズマ。闇の迷宮を踏破して見せたそなたが、いまさら何のために戦う？」

「それが僕にもわからない。まったくもってこの世はままならないものだね、オルロ
ワージュ。誰も彼もが嘘ばかりさ。彼女はいつもものように嘘をつき、僕もまたこうして
嘘をついている。頭がおかしくなりそうだ。それはそれで楽しいような気もするけれ
ど」

「嘘、か。思えば、そなたほど本心を見せぬ妖魔も珍しいな。ラストバンもそうであつた
が……奴とはまた異なるか」

「そうかい？ 僕はこれでも正直者で通っているんだぜ。僕ほど思つたことを口に出す
妖魔は他にいないんじゃないかな」

「言葉と心は所詮、不可分ではない。自らが操るつもりの言葉は、しかし容易く本心を裏
切るものだ」

「さすが、妖魔の王の言うことは壮大だな。でも僕がこうしているのは、もっと単純で馬
鹿馬鹿しい理由だよ」

「ゾズマはそこでため息をつき、僕は何を言っているんだか、とうんざりしたように
笑つた。

「理由とは何だ。なんのためにここにいる」

「愛していると言われた」ゾズマは答えた。「どうもそういうことみたいだ」

「言っている意味がさっぱりわからないが……。ともかくそなたは余と戦うというのだ

な。このオルロワージュに勝つと」

「勝たないよ。流石に僕だけで勝てるわけがない」

「ではなぜだ。なぜ逃げぬ」

「だからわからないよ。僕だつてこんな結末には不満だらけだ。……でも、まあ、強いて理由をあげるとすれば、そうだなあ……僕は嘘が好きだつて、そういうことなんだろうね」

寂しそうにゾズマは告げる。何物にも縛られぬという己が矜持を捨てて戦いを挑む自分自身を憐れむようにして細やかな微笑みを浮かべ、そして――

二体の妖魔の影と影とが一瞬のうちに交差し、そして一方が倒れる。

残つたもう一方――妖魔の王オルロワージュはゾズマを見下ろして呟く。

「嘘……。あらゆる記憶は時の流れの中に虚構へと変じてしまう。余は、そんな嘘を憎んでいた。嘘を愛する……そんな考えはなかったな……」



彼女は、アセルスを抱きしめて震えていた。寒さに凍えるように肩を揺らし、体温を少しでも分け合おうとでも言うかのようにアセルスを強く抱きしめ、迫りくる脅威から

守ろうとしている。その表情は暗く、いまにも泣き叫びそうに歪められている。血の気の引いた青白い顔は憔悴し、震える奥歯がかたかたと惨めな音を立てた。

それは当然といえば当然の結果だった。妖魔の王オルロワージュを前にして、何の力もない一介の侍女が張り得る虚勢などない。その妖気に晒されただけで息は止まり、捻じれた臓腑が吐き気を呼ぶ。それでも――。

割れた仮面を身に着けたメイド服の妖魔、ディアデームはそれでもなおオルロワージュの瞳を見つめ返していた。その手に庇うアセルスをけして離すことはなく、仮面の奥で怯えながらも懸命に王と対峙する。

「――そなたは、何者だ……？　なぜ、城の侍女がここに……？」

舞台上上がるはずのない役者を眺めるように、オルロワージュの唇から隠し切れない疑問が零れる。

「私の名前は……ディアデーム、と申します。……でも、きつと貴方は、私のことなど何一つ記憶してはいらっしやらないのでしょうか？」

「ディアデーム……？　そんな名前の者は針の城にはおらぬ筈だが」

「そうでしょうか。しかし現にこうして私はここにおります。もし仮に私がディアデームでないというのなら、きつと私は別の名前でこの城を生きていたのでしょうか。その名が貴方にはわかりますか？」

「ミルフアーク……では、ないのだろうか……」

その言葉に、ディアデームは柔らかに微笑んだ。

「オルロワージュ様。貴方にとって私は、無数に偏在するこの城のメイドに過ぎないでしょう。そのくらいのことをわからない筈がありません。私は——私たちは貴方に魅了され、そして魂を砕かれた下級妖魔の一群に過ぎないのですから」

「……」

「私は貴方を責めに來たものではありません。権利もなければ、力もない。私はきつと貴方を愛したのです。貴方のことを、愛していた……。そして幸運なことに貴方の寵愛を頂いた私はその牙を受け、虜化によってミルフアークと化した。私の心の弱さの、その責を貴方に負わせることはできません。しかし……やはり貴方は、私のことを覚えていてはいらつしやらないのですね。記憶を失うその前、ミルフアークとしてではなくただ一人の女として貴方に焦がれていたころの私の名を、もう一度呼んで下さらないのですね？」

「破面の侍女よ。余は……」「……ごめんなさい」

オルロワージュの言葉を遮って、ディアデームは頬を濡らしながら頭を下げた。

「貴方の孤独を僅かでも癒すことが出来たら良かったのに、私にはそれが出来ませんでした。虜化に負けたのは、私の心が弱かったから。貴方のせいではありません」

「……ディアデイルム。そなたを救ってやれぬ無力を余は恥じる。だがしかし……なぜそなたはここに居るのだ。なぜそなたがアセルスを守る。そなたは零姫や黒騎士達とは違う。何らの力も感じ取れはせぬ。戦うことのできぬ者が、なにゆえ余の前に立つ？」

「なぜ、でしょう……」自分でも不思議そうにディアデイルムはアセルスの髪を撫でた。

「私にもわかりません」

「道を開けよ、ディアデイルム。無力な者を強いて滅ぼす趣味はない。そなたが望むのなら、そなたの名を思い出すまで余の傍にいてはくれぬか」

「それはできない相談です。オルロワージュ様」

声が震える。綱渡りでもしているような気分でディアデイルムは言う。次の一言で自分は死ぬかもしれない。そう思いながら。

「なぜなら私の名はディアデイルム。貴方が愛した女を殺して、私はいまここに居る。貴方に恋い焦がれていた女はもうこの場にはいないのだから」

「そう、か……。いつか、全ては消えてなくなってしまう。全てはいつか失われてしまう……。だからだ、ディアデイルム。だからこそ余は、戦い続けなければならぬのだ」

「サガ・フロンティア。それがアセルス様の口にしたたわごとです。失ったものは二度と手に入らない。貴方の過去も、私の名も。……しかし、それとこれとはまるで別の話ではありませんか。アセルス様のお題目に屈することを、貴方は弱さだと捉えている。

ちつぽけな慰めをかなぐり捨てて、たった一つの宝物に手を伸ばすことが強さだと貴方は言うのですか。……いいえ、いいえ、そしていいえ。それで「永遠」に勝てると思いません」

「そうか。本当にそう信じているのなら大したものだ。……しかし、ディアアディムよ。そなたは仮面をつけている。割れてはいても仮面で素顔を隠すその心根は、つまるところ自らへの不審に根差しているのではないか。過去を失い、そなたは仮初のペルソナを求めた……。偽りの名、偽りの人格。それで自らを愛することができるならそれも良からう。しかしならばなぜ、余に自らの名を問う。そなたには仮面を捨てられぬ。仮面に身に纏う、その象徴が示す意味をそなたは十分に理解している筈だ。ディアアディムよ。心の底ではそなたもまた飢えているのだ。自らにひとときの名を付けたところで、しかしそれはつかの間の慰めに過ぎない。それは真実ではないからな。……余からもそなたに問おう、ディアアディムよ。そんなものに縋りついて満足か？ 自らが失ったものから目を背けておいて、本当に幸せになれるのか？」

問われ、ディアアディムは自らの仮面を外し、素顔を晒した。両の瞳を外気に晒し、真つ向から妖魔の王を見据える。

「ならば、いまここにあるものは真実ですか？ いいえ、違います。ここにあるのはまた別の物語に過ぎません。たとえば仮面を外したところで、手に入る真実などたかが知れて

いる。女の被る仮面が真実でないと考えるのは殿方の拙い感傷ではありませんか？」

「ふむ……」

「教えてください。オルロワージュ様。貴方が何かを失ったその時その瞬間に、貴方の傍には真実があったのですか。自らの肉体に何の疑いもなく、自らが発する言葉一つ一つが純粋な真実に満ちていたと。過去でも未来でもない、たった一瞬の現在には、透き通った真実だけが偽りなく厳然と存在していると、貴方はそう仰るのですか？ たとえ私が記憶を取り戻しても、そこにはまた別の嘘が潜んでいるだけです」

「多くのことを忘れた余に、過去を語る資格はない……。だが、確かにそなたの言う通りかもしれない。記憶を失う前の余が真実を手にしていたとは言い難い。自らの為すべきことは知っていた……。が、零姫と出会う前、口説き言葉の一つさえ知らなかった余には確かなものなど一つとしてなかった。己の心を伝えるための言葉すら持ちえなかったのだ。あの頃の余には、真実などありはしなかった……」

その言葉を聞いて、ディアデームは悲しそうに顔を歪める。

「……何かを取り戻して、そして貴方はどうするのですか。失った記憶を取り戻し、永遠”を打ち倒すことができれば、貴方は幸せになれるのですか……？」

「願いが叶ったその後……か。考えたことはなかったな。余は、そうしなければならぬと考えたからそうしているまでのこと。余自らが幸福を手に入れるためではない」

「ディアデイルムは涙を振り払うかのようにきつと顔をあげた。

「そんな答えしか返すことができないのなら、なおさらここをどくわけには参りません。オルロワージュ様。幸福を手にする気のないものが、明日を願う若者を滅ぼしてどうするのです」

「……すまない、ディアデイルム」

オルロワージュは苦し気に言った。零姫に裏切られた時でさえこれほどの辛い顔を見せはしなかった。イルドゥンにその胸を貫かれてなお平然としていた妖魔の王が、何の変哲もない侍女を前にしてひどく苦しんでいる。

「それでも、余は退くわけにはいかぬ」

「……どうして?」

「約束した。誓いを立てた」

「誰と? 貴方はいかなる契りを結んだのですか?」

「余には、何もわからぬ……。だが、確かにいた。嘘ではなかった。遙か太古、時の彼方の向こう側で余は誓ったのだ。たとえどれだけの時が流れようとも失われぬものがこの世にはあると。立ちはだかる全てをなぎ倒して頂点に立ち、永遠はここにあるのだと高らかに宣言しなければならぬのだ」

頑ななその言葉を吐き出して、しかしオルロワージュの表情は今にも泣きだしそうに

弱々しく見えた。だから、ディアデームはどうとう説得を諦め、腕の中のアセルスをぎゅつと抱きしめる。

「——貴方の孤独に、どうかさきやかな祝福がありますように」

小さな声で囁き、ディアデームは目を閉じる。

オルロワージュが歩みを進めると、強大な妖気にあてられたディアデームは緊張の糸が途切れたようにふつと気を失ってしまう。

後には、血の気の失せたアセルスだけが残された。力なく横たわり、無防備な命をさらけ出した乙女。

妖魔の王はゆつくりとその剣を振り上げる。

「——さらばだ、アセルス」

鈍い音が響き渡った。

振り下ろされた妖魔の剣。アセルスの脳天目掛けて振り下ろされたその刃はしかし、柔肌に届くことなく止められていた。

「……本当に、しつこい男だな、イルドゥン……!」

さすがにうんざりしたように罵り声をあげるオルロワージュに、割り込んだイルドゥンはしかし答える気力もないというように荒く息を吐き出した。顔を上げる力も残ってはいないのだろう、俯いたままアセルスを背後から抱き留め、身に纏う黒い外套の中

に庇っている。蝙蝠の翼の如く広がった外套は主の不遜を体現するように硬質化し、激しく火花を散らしながらもオルロワージュの剣を防いでいた。

「何度アセルスを守れば気が済むのだ。もはや勝ち目など残されていないことなどそんなたとてわかつていよう。なぜそうまでして生き急ぐ」

既に死に体のイルドウンへ何の容赦も見せず、途方もない力を込めてオルロワージュは剣を進める。イルドウンの全身が悲鳴を上げ、外套は無残に罅割れていく。血だらけの姿、蒼褪めた顔。瀕死のイルドウンは項垂れたまま、腕の中のアセルスを守るためにぎりりと奥歯を噛みしめた。今にも死んでしまいそうな弱々しいそんな姿の中で——しかし乱れた髪その奥、イルドウンの眼光だけが強く輝いている。

「どうせ放っておけば永遠に続く命だ」イルドウンは言った。「時にはちっぽけな小娘のために命を賭けてみるのも、悪くはあるまい……!」

「……どこまでも余を楽しませてくれる男だ。そなたを友にできなかったことをこれほど悔やんだことはない。……だがこれでおしまいだ、イルドウン。そなたの強情にもいささか飽きた。ここで引導を渡してくれよう」

妖魔の王の宣告に、イルドウンは答ええない。震え出した拳は緩み、全身から力が抜けていく……。

「まったく……どこまでも、面倒ばかりかける女だ……」

掠れた声でイルドウンは毒づく。

「お前はいつだつて、そうだ……。本当に、気に食わない……」

「呼びかけたところでその娘には何もできぬ。潔く運命を受け入れよ」

冷たく告げるオルロワージュに、やはりイルドウンは答えない。もはやうわ言を呟くように息も絶え絶えに語り掛ける。

アセルス。

お前はやはり無力だ。

たとえお前が目を覚ましたところで何も変わりはない。そんなことはわかってい
る。

所詮、言葉では何も変えられない。わかりあうことはできない。

アセルス。

お前は、馬鹿だ。

あまりにも愚かで、世界を知らず、この俺の感情をどこまでも逆撫でする。

だが……目を覚ましたお前はきつとこう言うのだろう。

変えて見せる。

運命を覆してみせると。

俺はそんな夢物語に頷くほど愚かではない。

しかしそれでもお前は諦めることを知らず、なおも戦い続けるのだろう。そうに決まっている。

そうだ……。きつと、そういうことなのだろう。

俺にはわからない力がお前にはあり、この度し難い状況を一変させてしまえる。

そうだな、アセルス。

そうだと言つて見せろ。

胸を抱くアセルスの体。何も知らずに気絶している半妖の乙女。痛みに呻きながらもイルドウンは腹の底を蠢く衝動に身を任せ、感情を剥きだして口を開く。

こみ上げる激情にイルドウンはとうとう叫んだ。張り裂けるような大音声で腕の中の女へと呼びかける。

「少しはしゃきつとしろ！ 見ていて歯がゆいぞ！ アセルス！」



耳元で誰かが何かを叫んでいる。誰かが自分の名を呼んでいる。

うるさいな、と思った。そんな風に怒鳴らなくなつて聞こえているさ。何をそんなに焦っているのだろう。せつかくいい気持ちで眠っていたのに。

どうしようもなく体が重かった。気怠い手足は鉛のように言うことを聞かず、ともすればまた寝てしまいそうになる。どこまでも意識が遠い。

アセルス、と誰かが言った。それは自分の名前だった。……誰かが、自分の体を抱いている。

温かいな、とアセルスは思った。なぜだか不思議に安心できる気がした。自分は誰かに守られているのだと理由もなく納得していた。ああ、温かい……。

旅をしている間も、こんな風に安心したことはなかった。誰かに庇われることはあつても、こうして確かな感触と共に守られているという実感を得たことはない。

アセルス、と誰かが叫ぶ。

うん。

わかってる。

すぐに起きるよ。

ただ、ほんの少し弱音を吐きたくなっただけ。

貴方の優しさがあまりにも温かかったから、つかの間の夢を見た。

でも、そんな気はないから大丈夫。

私は誰かに守られるためにいるわけじゃない。

イルドウン。

ありがとう。

血が爆ぜるように乙女の全身を巡る血管が脈を打つ。鍵盤を跳ね上げるかの如く五指は暴れ、高く宙へと伸ばされた腕が空を掴む。

はつと意識を取り戻してアセルスは起き上がる。目の前にはオルロワージュの剣がけたたましい音を立てて外套に食い込んでいる。爆発的に襲う緊張にどつと冷や汗が流れ落ちた。振り向けば、傷だらけのイルドウンがこちらを見下ろしている。

「やっと起きたか……この馬鹿が……」

辛そうに口を開いたイルドウンにアセルスは言葉を失う。気絶していた間に何があったのか、そんなことを問う暇はどう見ても残されてはいない。

「アセルス」イルドウンは言った。「何とかしてみせろ」

「……」

「何とかできるのだと、言ってみせろ！」

逡巡したのは一瞬だけだった。

「ああ」アセルスは高らかに答えた。「見せてあげる。私が望む結末を！」

望み通りの返答にイルドウンは笑みを零した。

「ならば、俺の血を吸え」

「血？ 貴方の血なら、あの時、」

「あんなものを吸血とは言わない。俺が、俺の意志で血を与えるのだ。だから……勝て！ アセルス！」

それは心からの言葉だった。偽りのないイルドダウンの台詞にアセルスは目を見開き、しっかと頷いて、そして――、

顔を上げ、イルドダウンの首を抱く。黒騎士イルドダウンの石化蜥蜴にも似た滑らかな肌。動脈の震えるその首筋へと甘き唾に覆われた牙が落ちていく。牙はがちりと肌をつかまえ、絹を裂くかのように容易く切り裂いた。噴き出す鮮血が口元を汚す。滴り落ちる血は宵闇に似て淡く、美しい蒼を宿している。

舌を伸ばし、肉を捕らえ、そして血を啜る。喉を擦り上げていく血の感触はあらゆる愛撫よりも淫らで甘く、満たされた獣の飢餓が歓喜の歌を奏でだす。ああ。零れ落ちた吐息は快樂に染まり、ごくり、血液を飲み干した喉がわなわなと震える。これがイルドダウンの血の味。憎たらしいほどに濃厚で、背筋の震えるほど鮮烈。そして――ああ、やはり自分は知っている。聞こえだす時計塔の鐘の音。ぼおん、と遠く幽かな鐘が鳴り響き、魂へと溶けていく。それは全能を掲げた化け物の記憶。それは一億年を生きる不死者の力。アセルスの髪はさつと解け瞬く間に蒼へと変わる。全身に刻まれた傷跡は煌々と明滅を繰り返し、かつて旅した足跡を明かそうとする。その色は深海に眠る

董^{アイオライト}青石の光。涼し気な声が口元から漏れ出す。それは自らが支配者であると知った微笑みだった。

妖魔、アセルス。身に纏うドレスは人の鮮血よりもお昏く、深紅の小手からは神秘の如く薔薇を散らせる魔性の乙女。右手には白薔薇姫の剣——尊十字。左手には倒れたイルドウンを受け止め、優しく床に横たえる。悪戯な微笑みで口づけを落とし、その代わりに黒騎士のもつ外套——宵闇の外套^{マント}を奪い、優雅に羽織つてみせる。軽やかに翻る外套は、万魔の姫に付き従う怪鳥の翼が如く鮮やかに羽ばたく。喉を滴る鮮血を野卑な仕草で拭い去り、手に残った僅かな血をうっとり眺めて——アセルスは美しく笑う。アセルスの造作が変わったのではない。瞳や髪の色の変化によるものでもない。言うなればそれは彫刻家の狂気によつて穿たれた玉石が持ついびつな美しさ。白痴の語る十行詩が生み出す奇跡にも等しい押韻の美しさなのだ。姿、ではない。存在しているのは美しいという論理そのものに他ならない。あらゆる類の美的範疇を抜け言語を超えて立つ支配者の美。自らを美しいと信じる者の高邁な信仰心が宿す陶醉が見る者全てに伝播する。

「——それが、妖魔としてのそなたの姿か、アセルス」

オルロワージュは感嘆に剣を停め、ふむ、と頷く。

「なるほど。これは確かに美しい」

「ありがとう、オルロワージュ。私もそう思う」

「なんの羞じらいも見せずにアセルスは答えた。漲る銜気に躊躇いもせず自らを愛して、支配者の娘はくすりと笑う。」

「待たせてしまつて、ごめんなさい。これからは私が相手をするよ」

「そうか。それは助かる。さきほどはいささか無作法な決着を迎えてしまったからな。そなたとはやはりきちんと剣を交えておかなくては」

「違うよ、オルロワージュ」アセルスは言う。「交えるのは剣じゃない。言葉でしょう?」

「……まだ、そんな戯言を口にするつもりなのか、アセルス? 我々の交渉は既にして決裂したはずだ。……サガフロンティアだと? そんな言葉で納得する余だと本気で思っていたのか?」

「何がいけないのかな? 私はそれでもいいと思つているよ。貴方がそれを受け入れるというのなら、悪いことではない」

「あるいはそうかもしれないぬ。だがな、アセルス。そんな言葉に頷くことができるなら、余も一億年を生きたりはしない」

「……私は勘違いしていたのかもしれない。貴方は……記憶を取り戻して救われたいんじゃない。慰めや気休めでもない。求めているのはもつと具体的な何かなんだね。かつて傍にいた何か。その心を注いでいた誰か。時計塔の鐘の音が舞い降りるその場所

に佇む「運命」を」

「だとしたら、どうする。時を操り、余を過去へでも連れていくか。それとも剣を抜き新たな王となるか？」

「貴方はそればかりだね、オルロワージュ。長年の倦怠を癒すため自らの挑む者を求めているだなんて、本当にそうなのかな。退屈を紛らわせると言って……本当は剣を抜いて斬りかかってもらわなければ相手を倒すことが後ろめたいんじゃない？ それとも、ただ死に場所を求めているだけなのかな？」

「さて、どうであろうな」

アセルスの糾弾に、オルロワージュはどこか面白そうに答える。

「そう言われると余はまるで善人のようにでも思えてくる。だが無論、余は人ではないし善でもない。そのような説得が通じると思うな」

「そうだね。やつぱり、説得は難しいな。自分でも信じていないことを人に信じてもらうなんて、どだい無理な話だったのかもしれない」

「それでは、そなたは一体なにを信じてここに来た。そなたの言葉で余を変えられると——そう思ったのであろう？」

「最初に告げたあの言葉は、でも嘘じゃあないよ。サガ・フロンティア……。平和的に分かり合えるなら、それに越したことはないからね。だけどやつぱり、私にとってそれは

全てではなかった。私にはまだ、貴方に言うべきことが残っていた」

アセルスは真正面から向き合い、そして言った。

「——私は貴方から白薔薇を奪うためにここへ来た。彼女のことを愛しているから」

しばらくの間オルロワージュは黙ってアセルスの持つ剣を眺めていたが、やがて肩を震わせて笑い出した。

「まさか余にそんなことを言う者が現れようとはな。これは傑作だ、アセルス。余の寵姫を奪う、だと。いかな妖魔としてそのような大言壮語を許したことはないのだが」

「……」

「その剣は白薔薇のものだな」オルロワージュの眼が鋭く光る。「妖魔の剣は主に従うもの……とすれば、白薔薇が力を貸すことを許したのか」

「さあ、どうだろう……。そんな感じは全くしないけど」

「あれは劇薬だぞ、アセルス」

「知ってるよ。嫌というほど」

「そうか……。そなたがここへ帰ってきた理由がようやく見えたな。言葉による解決などよりもよほど肩入れしたくなる動機だ。目的が余のものでさえなければ」

「悪いとは思っているよ」

「そなたもまた面倒な心を手に入れたものだな。針の城から白薔薇と紅を連れ出したこ

とを謝っておいて、舌の根も乾かぬうちにそれか？　妖魔の性もこれほどとはな。よくよく業の深い種族だ」

「どうして、こんなことになってしまったんだろうね。私にもわからない」

「必然であろう。白薔薇がそなたを見初め針の城からの脱出に同行したその時から、あるいはそうなるべくして運命づけられていたのやもしれぬ……。だが、おそらくはそれで良いのだ」

「……？」

「そなたや、そこに転がるメイドの言葉は余にとつて毒となる。それくらいならば余の物を奪うと宣言し戦いを挑まれた方が、まだしも心安らかというもの。……剣を抜け、アセルス」

厳然と、オルロワージュは告げた。一切の甘えや韜晦を許さぬその命令に——アセルスは躊躇うことなく剣を抜いた。

空気が弾ける。爆発音と共に石畳が蹴り砕かれ、全てを切り裂く妖魔の剣が、その刃と刃とがぶつかり合う。

拮抗する剣の彼方と此方で視線を交わす妖魔の王と娘。オルロワージュは愉し気に吠え猛る。

「楽しいな、アセルス。やはり戦いは良い。もはやいかなる理屈もいらぬ。互いの全存

在を賭けて生き残るために戦う、これほど純粹で美しい儀式が他にあるか。勝ったものが自らの意を通す。勝ったものだけが自らの望みを手に入れる。ただそれだけのこと」

「いいや、違うね！」アセルスが叫ぶ。「何も手に入りはしない！ 貴方にだってそんなことはわかつている筈だ！」

「そうかな？ いや、わかるまい。結局、そなたは剣を抜いた。自らが求める姫のために戦うことを選んだ。……知っているか、アセルス！ そなたはいま、微笑んでいる！」

牙を剥きだし、その悦樂を隠そうともせずアセルスは笑っていた。戦いを——支配を求める妖魔の性に酔い痴れながら、しかしアセルスはまたどこか悲し気に顔を歪める。

「そうかい。あるいは、そうかもしれないね。私はいま、楽しいのかもしれない。それが妖魔の宿命なのかもしれない。でも、だとしたら……」

痛切な声を絞り出し、アセルスの剣が震える。

「どうして、貴方はそんな風に寂しそうな顔をしているの、オルロワージュ」



「なに……?」

問われ、オルロワージュははつとする。何を言っているのだろう。自分は確かに笑っている。そうだ。今日ほど楽しい夜は無かった。自らを滅ぼしうる者——零姫、セアト、そしてイルドウン。数多の強敵を薙ぎ倒し、こうして支配者を継ぐ娘と剣を競っている。長らく続いた退屈を紛らわすまたとない贅沢な演目だ。楽しい。それ以外の言葉は見つからない。口は開かれ、牙を剥きだし、肺から出た空気が声帯を震わせる。それが笑うという感情表出。確かに自分は笑っている。

「何を言っている。アセルス。余はこの戦いを思う存分愉しんでいる。余計な言葉で興を削ぐな」

「貴方たちはいつもそうだ。人の話を聞かない。綺麗な顔で支配だなんだと嘯きながら、眉間に皺を寄せて仮面の奥で泣いている……! ああ、そうだ。紅と貴方はまったくお似合いだよ。邪悪な妖魔なら幸せになりたいと言ってみせろ! 他者のことなんかどうでもいい、自分の欲望を満たすためだけに生き、ただ快樂の限りを尽くしたいのだと吠えてみせろ!」

「先ほどからそう言っている。余は余の為に生きる。余は悪徳をむさぼる妖魔の王だ。白薔薇を奪いたいというのなら、余を滅ぼす以外に道はない」

「馬鹿……」悔しそうにアセルスは言う。「そんなのは、殺してくれって言ってるのと同

じことだろうに」

「戦いの果てに滅びるのならそれも良からう。負けるつもりはないが。……いい加減に迷いを捨てよ、アセルス。そなたは白薔薇を奪うために来たのか？ それとも余を説得するなどという夢物語にまだ縋りつく気なのか？」

「決まっている。そのどちらもだ」

「強欲だな」

「そうさ。私も妖魔だ。自らが望むもののために戦う、ただそれだけのことなんだ。……滅ぼしてなんかやらない。貴方にはみんなと笑ってもらおう」

「他者に勝手な価値観を押し付けるな。余はそのようなことを望んではおらぬ」

「そんなことは知らない。貴方の気持ちだとか感情なんてどうだって良いんだ。私がそうしたいからそうする。それだけだよ」

「……そなたは恐ろしい女だな」

「ねえ、オルロワージュ。このままいくと、どうも私は幸せになれないみたいなんだ。私たちが全員死んで、貴方が一人残されるか。それとも貴方が滅びて私が残るか。それがこの世の定めだというのなら、なおさらそんなものには領けない。永遠……。途方もない時の流れの中であらゆるものは色褪せ失われていく。その中で妖魔の王オルロワージュの心は摩耗し、忘却と喪失とを繰り返したその果てに妄執に取り込まれ、自らの幸

福すらも忘れてしまいましたとき。……そんな物語、私は嫌だね。予定調和には加担できない。だから、そう……」

アセルスの声は低く、しかし遙か彼方まで響き渡る。

「——戦う理由が、私にはあるな……!」

アセルスは言う。

「思い通りのならないこの世の全てと、私は戦う。時の流れが全てを奪うというのならこれと戦い、言葉では分かり合えないというのならその理屈とも私は戦う。納得できないものの全て、ありとあらゆる運命と格闘し、支配してみせる」

「そなたはやはり何も知らないのだ。時が、永遠がどれほど強大で途方もない存在であるかを。無理もない。僅か百年にも満たないその短い人生で理解できよう筈もないのだ」

「笑わせてくれるよ。生きた時間なんて関係ない。一億年前の貴方なら、そんな言葉にはいそうですね。いや、違うね。時計塔の鐘の音が私には聞こえる……だから、私は戦う。貴方の娘として、ここで引くことはできない!」

「娘、か……。そうか、娘とはそういうものか……」

ここに至ってようやくオルロワージュは理解する。目の前に立つアセルスがどうして自らに立ち向かおうとしているのかを。自らの娘が継ごうとしているものの名を。

ねえ、オルロワージュ。

時間というのは、本当に、気が付くといつの間にかに過ぎてしまう不思議なものだね。今日経験したばかりのことが、たとえば懐かしい人に出会ったり、嬉しいことがあったりしても、明日や明後日になればその心が薄れてしまつて、いつかは忘れてしまう。大切だったことも何でもないことになつて、飽きてしまう。

そんなのは、嫌だ。

私は自分の目に写る人くらいには笑つていてほしい。

そうでなければ駄目なんだ。

だから私は戦う。

貴方を幸福にさせるため――、

たとえどれだけの時が流れ、どれだけのことを忘れようとも、心が亡びることは決してないのだと証明するために。

その言葉に、オルロワージュは黙つたまま目を細めた。

「そうか」

優しい目で答える。

「今、わかつた。不思議なものだな。父というものは……」

「オルロワージュ。私は……」「アセルスよ」

オルロワージュは静かに言った。

「辛く苦しい戦いになるぞ」

「……うん。わかつてる。貴方を見ていればわかるよ」

「そうか……。ならばもう何も言うまい」

「うん……」

「これが、最後の戦いだ。アセルス。永遠に挑むというのなら……余を超えてみせよ」
その言葉と共に剣を構え、そして――、

妖魔がいる。

もとはといえば一幅の影絵。幼い子供が母を待つ寂しさに掌を遊ばせて生まれた一匹の犬畜生。獣に過ぎなかった筈の妖魔はやがて魔王となり、乙女となり、そして星に乗った。一億年の旅を得て妖魔の王となった獣がいま、自らが血を分けた娘と対峙する。漆黒の髪、漆黒の瞳。あまりにも昏い闇を内包したその姿は優雅にして閑麗。あらゆるものを切り裂く妖魔の剣を手に、待ち受ける死闘のために身を撓める。

妖魔がいる。

支配者の血を享けた娘。万魔に祝福されし半人半妖の姫君。赤薔薇の小手、白薔薇の剣、そして宵闇の外套。守護者たちの加護を身に纏い、永遠を継ぐべく王に戦いを挑む

乙女。その瞳は今だ若く、しかしそれ故に瑞々しい魅力を備えている。それは精神の虚を撃つ淫魔の眼。辺境を目指して旅をし、数多の出会いを経た妖魔は、物語が一つではないことを知った。それは人魚姫に恋をした領主の話。それは自らを食らいつくすウロボロスの少女。英雄を志し正義を語る少年がいた。自らを忘れたスライムの姫がいた。その物語の中で、彼女は決して主人公ではなかった。人はみな、自らが主人公の物語を生きている。有り触れた物言いでもやはりそれは真実で、だからこそこうも言える。この世の誰もが主人公なら、物語に貴賤などない。もしも自分が一億年の物語に登場する端役に過ぎないのだとしても、物語を動かすには十二分に過ぎるのだから。人の数だけ物語があり、人の数だけサガがある。彼女はとうとう物語を語り出す。

さあ、物語の話をしよう。誰もが逃れられぬこの世界の、時の流れの話をしよう。

妖魔の王。魅惑の君。妖煌帝オルロワージュ。

半妖。放浪の姫。辺境嬢アセルス。

妖魔たちの戦いはとうとう最終幕を迎える。

時は常に進み続け、巻き戻ることにはしていない。いつかこの世のすべては過去になり、物語になってしまう。あらゆる熱量は失われ、握りしめたはずの体温はむなしく掠れ散っていく。この世に真実は残らない。残るのは人々によって語られ、解釈の加えられた言葉、物語だけだ。

時間とはそういうものだ。物語とはそういうものだ。たとえば彼らが自らの物語の結末をどう望んでいたにせよ、時が進めばやがて物語は結末を迎える。

世界の全てはありふれて、妖魔と妖魔は剣を交える。外套をはためかせ、影と影とが交差し、やがて一方が倒れ、一方だけが立ち尽くす。

決着はついた。

時の流れの物語はいつでも、陳腐で、ありきたりで、くだらない終わり方を迎えるようにできている。

最期に残った者。勝利者となったものは――、

第三十六幕　そして星に乗る／獣が魔王になり、乙女になり、途方もなき時の流れの果て

その日、浜辺には多くの漂流物が流れ着いた。

動物の骨や単なる木片、使い古した銃に割れた仮面。陸の代わりに海を渡つて旅を続け、そして滅びた無数の残骸。ここではないどこかからやつてきたものたち。潮の流れに碎かれた漂流物はみな醜く薄汚れ、目にした者に眉を顰めさせる。けれどもそれは仕方のないことなのだろう。なぜと云つて、うら寂しく打ち寄せられたその有様は、誰からも愛されなかつた、捨てられた、という証明に他ならないのだから。漂流物は愛を知らずにそこにいて、それからもお無知のまま孤独に朽ちていくのだろう。

そんな光景を何となしに眺めることがあつたとしても、近寄ろうとは思ふ者はいないし、触ろうと考える者もない。それは自分とは何の由縁もないただのごみに過ぎないのだから。

しかし、たとえ自分にとつてそうであろうとも、他人にとつてもそうであるとは限らない。見る者が変わりさえすれば——たとえばそう、小さな子供がもしもそれらを見つけたら、たちまちのうちに漂流物は宝の山となり、夢幻の神秘をさえ孕みだすのかもし

れない。獣の骨は月の笛になり、木片が伝説の武器になる。旅をしたというそれだけがあらゆる塵を物語へと変えていく。だって、そうだろう——どうしてわかる？ それが本当に伝説の武器ではないと。

その日、浜辺には多くの漂流物が流れ着いた。そんな浜辺を一人の男が静かに歩いている。夜の海は月光を吸って白々と澄み、あまりにも深い場所から響く潮騒が記憶を浚うように殷々とこだまする。

ちやぷり、と音がする。打ち寄せる波が素足を遮り、僅かな波紋が生まれるか生まれないかという具合で次の波にくしゃと砕かれる。

あてもなくふらふらと海辺を散歩していた男はふと振り返る。いったいどれだけ歩き続けてきたのだろう、地平線の果てまでも続いているような己の足跡が暗く静かな波に少しずつ少しずつ削り取られては消えていく。

海を見る。繰り返される波音が単調な律動を刻む。「余は」と男は言う。なぜそんなことを言おうとしたのか、そして何を言おうとしたのかさえも自分ではわからず、それきり口を塞いで波の滲んだ水平線に視線を飛ばす。

言うべき言葉を見失い途方に暮れた男が海を見つめて黙りこくっていると、その背中にどん、と誰かがぶつかる。振り向き見下ろせば、そこには小さな女の子が赤くなった鼻をさすって「あ痛た」と涙目である。

「ちよつと、こんな所で立ち止まっちゃ、後がつかえてしまうでしょ」

少女は腰に手を当て、おしやまな口調で言った。こんなところ？　男はきよろきよると周囲を見回す。何せ浜である。道などない。不思議そうにしていると、少女は得意げな顔をして「あのね」と教えてくれた。

「砂浜に足跡があるでしょう。これ、あたしが見つけたの。あたしはね、その上を歩いてるところなの」

「……なぜ、足跡をなぞらねばならないのだ？」

尋ねると、今度は少女が不思議そうに首をかしげる。そんなことは今まで考えもしなかつたし、その必要もなかつたのだろう。うんうんと頭を捻り、やがて天啓が降りたのか少女は先ほどよりも更に得意げな顔をして「あのね」と言う。

「足跡から落ちるとね、死ぬの」

「それはまた怖ろしい遊びだな」

しみじみと答える男だが、少女は早くもじれったくなってきたらしい。「とにかく早く行つてちょうだい」と男の尻をぐいぐいと押してくる。だが残念なことに、男にはそのお願いに答えてやることができない。

「すまないが」と男は言った。自分はどこかに向かおうとしているのではない。この道はここまでだ。夜も遅いことであるし、足跡を歩くのはもう止めにして自分の家に帰り

なさい。

「そんなの、いやよ」

少女は断固として首を振った。少女があまりにも頑固なので男は困りはて、仕方なく少女の頭を撫でた。

「どちらにしても、もうここに道はないのだ」男はしやがみ、少女に視線を合わせる。「あなたはそなたの道を探すしかあるまい。だが、それはそれで楽しいはずだ。まっさらな砂浜に自分だけの足跡を残していく。自分で行く場所を自分が決める。それは旅の始まりだ」

少女は腕を組んで考える。なんだか騙されているような気がする、なんだか悔しい、そんな顔をして男を睨み、うんうんと唸り続けてしかる後に色々と面倒くさくなったのか、呑気な顔で「そうかも」と笑った。

「では、行け」

そう言つて背中を押すと、何が楽しいのか少女は両手を広げて「わーい」と駆け出していく。少し進むと砂に足を取られて転んだが、根は強い子なのだろう、特に泣き出したりはせずにまた走り出した。

男はしばらく少女の後ろ姿をじつと見ていた。やがてその姿までもが地平線の向こう側へと滲んでいくと、理由のわからない安心がこみ上げてきてほっとした。

「ああ、これでいい……」

そう言つて男は少女とはまた別の方へと歩き出した。波が足元を濡らしていく。足跡はもう残らない。

あてもなく、夜を視ていた。その夜の光景が美しいかどうかは男にはわからなかったが、しかし海は静寂に静まりかえつており、頬を撫でる風はとても心地のよいものだった。

一人の女がこちらへと近づいてくるのに男は気づいたが、しかし強いて振り向こうとは思わない。黙つて海を眺めていると、女は男の傍に寄り添つて「ああ」とため息をついた。

「なるほど。これは美しい夜空じゃな」

「そうなのか」

「そうなのか、ではなからう。おぬしはいつたい何を見ていたのじゃ。夜の海に浮かぶ空を愛でていたのではないのか」

「……ただ、見ていただけだ。美しいも何も無い。なんとなく見ていただけだ。特に意味はない」

そうか、と言いかけた声が震えて、女は不意に意味もなく泣きだしそうになつて慌てる。

「しかしなあ」声を湿らせて女は小さく囁いた。「それでも、この夜空を見ようと思ったのはそなた自身の心。要するにそれは美しいと思つたのと同義ではないか」

「……そうか？　あるいはそうかもしれないな。よくはわからないが」

「きつとそうじゃ。そうに決まつておる」

「そうか」

「そうじゃ」

そう言うのと、男と女は黙つて同じものを見つめた。肩を並べ、同じ風を頬に受け、波音に取り巻かれるままに海を見つめる。

なあ、とやがて女は言つた。

「色々とおつたが……、そなたは本当に駄目な男じゃな。浮気はする、妾が言つたことはすぐに忘れる、部下には裏切られ、いちいち余計な土産物を買ひ込む。そなたのせいで妾の寿命は凄まじい勢いで伸びたり縮んだりしたぞ」

そう言うのと女は何かを期待してじつと男の顔を見ていたが、男が「ああ、そうだな」としか答えないのでしまいには口を尖らせて不貞腐れながらぼそりと呟いた。

「しかし——そなたは良き夫であつた」

「……」

「なんやかんやで。瀬戸際の崖つぶちで。妾のあまりにも寛大な心によつて。……まあ

とにかくそういつた諸々を踏まえた上で、そなたは良き夫であった」

「……」

「ありがとう、と言え」

「……」

「……おい。忍耐にも限界というものがある。そなたに口があるのなら今すぐにも」

「零姫」

不意に、男は女の名前を呼んだ。

男は遠い目をして、夜ばかり見つめている。夜の、銀河にたゆたう星の明かりを一心に見上げ、もはや地上を見てはいない。

「そなたには迷惑ばかりかけたな」

「……ああ」

しみじみと答えた。胸をこみ上げる熱い思いにとうとう涙を零し、女は肩を震わせる。

男の言わんとしていることが、語り出した台詞の意味が女にもわかった。

いま、この場で語られようとしているのは死なのだ。

「そなたが第一の妻で本当に良かった。そなたでなければ、この場所に立てはしなかつた」

「オルロワージュ……」

「零姫」男は言った。「余は、いま笑うことができているか？」

女は涙で掠れた視界の向こうに男の顔を見る。男の顔は、なるほど確かに微笑んでいるように見えた。慣れていないのだろう、どこかぎこちなく強張ってはいたが、しかし確かに笑っている。

「いつか心が滅びたら、子供のように涙を零して死んでしまえばいい。かつて白薔薇に言われた言葉だ。しかし余に涙はない。だとするならば、やはりここは子供のように笑みを浮かべているべきなのだろう」

「我々はもはや何も知らぬ童ではない。無垢になど笑えはせぬ。だが——確かにオルロワージュよ。おぬしは微笑んでおる」

「そうか……。ならば、良い。一億年の果てにこうして滅びを受け入れられるなら、それは重畳というもの。この死に顔を白薔薇に見せてやれないのが残念だ」

「せっかく……。せっかく、こうして再び並び立つことができたというのに……。どうして、おぬしは——」

「それが時の流れだ、零姫。時は経った。ただそれだけのこと。以前の余ならばけして口にはせぬ言葉だが、これはこれでなかなか悪くはない感情だ。……。何かを失ったからではない。敗北でも、絶望でもない。アセルスがいる。だからきつと、これで良いのだ。

余はいま、微笑んでいるのだから」

「ああ、ああ……」

次から次へと溢れ出る涙を両手で拭い、子供のように泣きじやくる。涙に視界は歪み、こみ上げる嗚咽にしゃくり上げたその時、愛している、ふと聞こえた男のそんな声に、女ははつとして顔を上げた。

もう、男は見えなくなっていた。

男がその場にいた、という証拠はいつのまにかになくなっていく。足跡はない。匂いも影もありはしない。その代わりに、無数の蝶が空へと昇っていくのが見える。翅に月光を享けて風に乗る、小さな蝶がふらふらと頼りなく天昇する。天に輝くその月へと蝶は舞い、やがて星に乗る。

後にはもう、何も残されてはいなかった。

空を見上げて女はひとときわ長い嗚咽を漏らし、そして悔し気に言う。

「馬鹿が……本当に、本当に、馬鹿な、男……」

一億年を生きた不死の怪物——妖魔の王オルロワージュはこうして滅びを迎えた。



夢の話をしよう。

魔王が目覚ますと目の前には乙女が同じように寝ていて、「んが」と言いながら涎を垂らしている。相変わらず寝相も悪い。じっと見守っていると乙女もやがて目を覚まし、こちらに気づいて「へへ」と笑った。

ねえ、あたし、すごい夢を見ちまったわ。ほう。

あのね、あなたとあたし一つになって、オルロワージュっていう妖魔になってね、世界中を旅して回るの。色んな人や色んなものと出会って、……そりゃ、時には嫌なこと苦しいこともあるけど、でもやつぱり最後には大団円。ハッピーエンドを迎えたわ。本当にステキな、夢みたいな夢。

そうか。それは良かったな。

わんちゃんはどうな夢を見たの？

余は夢を見ない。

そう……。なんだか、さびしいね。

……。

……あのね。

なんだ。

あたし、明日死ぬの。

……そうか。

いままで、黙っていてごめんなさい。あなたとあたし、もうこれでお別れなのよ。

……さよなら。

……。

何故だろう、突然そんなことを告げられて、しかし魔王はあまり驚きはしなかった。むしろそれは、ずっとずっと前から知っていたことのような気がした。だから、そのとき魔王が感じるのは死という運命に対する驚愕や悲しみではなく、どこか茫洋とした既視感なのだった。

何だろう、と魔王は思う。同じようなことを前にも考えた気がする。……そうだ。自分にはなにか彼女に言おうとしていたのではないか。確かにそんな気がする。

でも、それは何だったろう。

不意に、とてつもない恐怖が沸き上がってきた。

思い出せない。何か言わなければならぬことがあったのではないか。自分にはきつと言いたいことがあった筈なのだ。……それなのに、言うべき言葉がどうしても見いだせない。自分の心がわからない。どうすればいい。

押し寄せる焦りに頭が混乱する。

彼女は明日、死ぬのだという。魔王にだってその意味くらいはわかる。明日になれば死んでしまう乙女には、今日でなければ告げられない。たった今言葉を口にしなければ、永遠に届かぬまま終わりになってしまう。

自分には言わなければならぬことがあつた筈なのだ。とても大切なことだつた筈なのだ。……それなのに、自分はどうして忘れてしまったのだろう。そんなのはあんなりではないか。あまりにも悲しすぎるではないか。

魔王は必死になつて考えた。しかし魔王は言葉を知らない。だつてそうだろう、魔王は魔王なのだ。影絵の犬として敵を殺していればそれですべては済んだし、淫魔たちと絡み合うのだつて言葉など要りはしなかつた。命令すれば誰もが願いを聞いてくれた。自分を脅かすものなど何一つなく、自分は無敵で全能の王だつた。言葉を選ぶということなど魔王の生き方には存在していない。仮に知っていたとしても、いまこの場でその言葉を口にできたかは疑わしい。なぜと言つて、その感情は愛と呼ぶほど美しくはなく、恋と言うには儂すぎた。淡く切ない思いではあつたが、具体的な形にはなつていなかった。魔王はまだ、何も知らない。獣である魔王には知る由もないことだ。

待て。……待つてくれ。言葉に詰まりながら懸命に懇願する。乙女は困つたように微笑んでいる。待つてくれ。まだだ。何かあるはずだ。だつてそうだろう。何も言えないなんて嘘だ。死に物狂いで頭を捻り、考えに考えて堂々巡りを繰り返したその挙句

に、どこでどういう筋道を踏んだのかはわからないが、ふつと言葉が心の中に降りてきた。そうだ。

友達に、なつてくれ。

……友達？

乙女は不思議そうに首をかしげる。

そうだ。友だ。

……あたし、明日には死んじまうのよ。友達になつてなつて、どうするの。

わからない。だが、いま、ふとそう思つたのだ。……そうだ。余は……余は、寂しい。どうしようもなく、寂しくてたまらない。だから、友達になつてくれ。傍にいてくれ。

魔王は、やっぱり何も知らないのだった。友達というのはもちろん、「友達になりましょうね」と言つて手を繋ぐようなものではないし、たつた今からは友達でそれ以前は友達ではなかつたということでもない。

でも、もちろんそれは、だから幸福になれないということでもないのだった。

魔王の願いを聞いて乙女はそつと微笑み、しゃがみこんで両手を広げるとこう言つた。

——おいで。

魔王は乙女の腕の中へおずおずと進んでいく。小さな両手に抱かれそつと体重を預けると、全身が暖かな気持ちに包まれた。二人の体温が溶けていく。

ああ、ずつと——気の遠くなるほど長い間、焦がれていたものがいまここにある。もう、けして離しはすまい。

旅に出よう、と魔王は言う。時間がどれだけ残されているかなど関係ない。夢をこの手に掴めばよい。乙女のスカートを啜えて強引に引つ張っていく。星間船発着場へ行き、おとなの切符を買って船へと乗り込む。星間船の窓にぴつたりとおでこをくつつけて、乙女は初めて見る星々の海に興奮する。

すごい、すごい。なんて綺麗なのかしら。

まだこんなものではない。この世には、この星よりも綺麗なものがたくさんある。あたしたちはどこへ行くの？

まずはファシナトゥールへ。そこには美しい妖魔がたくさんいる。アセルスという変わった娘、イルドウンという偏屈者、そして零姫という世界一の美女がいる。

それから？

気高い赤かぶがっている星がある。仮面をつけたメイドの星がある。占い師ばかりの星、四畳半の星、時の止まった星、未開拓の星、熱い星、寒い星……。全部、そなたに見せ

てやる。

楽しみだわ。

ああ、楽しみだ。……本当に楽しみだ。

魔王と乙女は頬を寄せて窓の外を見つめる。

そこには途方もなく広がる星々の海が無限に輝いている。もう、不安なことなど何一つない。二人は顔を見合わせ、そして同時に笑う。

終幕 Last Battle — Asellus —

女の見つめる先で時を刻み続けていた時計の秒針は、不意にその動きを停めた。

闇の迷宮、その深奥。

光の差さないその場所に白薔薇はいる。時の凍り付いたその場所で訪れるものなのがい隔絶を受け、しかし素知らぬ顔で姫は階段に腰かけていた。その表情に囚われ人が浮かべるべき焦りや絶望は見られない。静まり返った水面の如き涅槃寂滅の姿は、魂を持たない人形の如く美しい。

迷宮の姫は待ち人が現れるのをずっと待っている。焦がれているのではない。待ち望んでいるわけでもない。ただ結末を——投げかけられた問いの答えを、白薔薇姫は待っている。果たしてこの場所へたどり着くのはどちらなのだろう？ そう考えて仄かな笑みをもらし、黙したまま語らない。

それは人間にとつてはあまりにも長く、しかし妖魔にとつては瞬きにも等しい時間だった。視線の先で針を進ませていた時計に亀裂がはしり、見る間に崩壊していくその有様に小さな吐息を漏らし、姫は物語を読み上げるように呟く。

「——滅びたのはオルロワージュの方か」

時を刻む時計が止まり、ようやく時は流れ始める。音を立て時計の群れが砕け、四方を覆っていた闇は無残に剥がれ落ち——そして、漆黒の帳の向こう側から太陽が昇る。眩しいほど煌々と照らしだされた闇の迷宮が痛み、身をよじるようにして軋んでいく。差し込む日光は宙を舞う粒子を、その時をなぞり上げた。

迷宮が光輝くとき、姫はそつと目を細めて地平線を眺めていた。遥かな先——この世の果てから小さな人影が近づいてくる。腰に二振りの剣を提げたその女——緑髪の半妖アセルスは朝日を背に、神々しいほどの光を伴って悠然と足を進めた。

白薔薇はそんなアセルスをじつと見下ろす。玉座に深々と身を下ろす女王が如くその態度はどこか尊大で冷たい。値踏みにも似た透徹した瞳で視線を投げかけ、白薔薇は唇の端に幽かな笑みを浮かべた。

姫の眼前へと辿り着いたアセルスは自らが持つ剣の内の一振り——白薔薇の剣を手に取るや無造作に投げ渡してきた。剣を受け取り、白薔薇はその剣が辿ってきた戦いを慈しむように刃に指を滑らせていたが、やがてアセルスの腰に残ったもう一振りの剣に目をとめた。

「その剣は？」

「セアトに借りたんだ」アセルスは答えた。「イルドウンには嫌だといって断られたよ」

「あの方らしいですね」

くすりと白薔薇は軽やかに笑う。

それきり、二人の間には沈黙が降りた。再開の暁にはこうもあるうああもあろうと予想し、温めていた言葉の一つや二つをその胸の内に秘めてやってきた筈の者たちがしかし、目と目を合わせて何も言わず、口を噤んだままにいる。

アセルスを見下ろす白薔薇姫の眼。

白薔薇姫を見上げるアセルスの眼。

見つめあい、けして逸らすことなく結ばれた視線が唇よりも雄弁にその意思を物語る。

譲れないものがあってここへ来た。けして譲くことのできないもの、ともに天を戴くことのできない性を負ってたつた今ここにいる。

「私は」白薔薇がぼつりと言う。「貴女を憎むべきなのでしょうか、アセルス様？」

「あるいは」アセルスは答える。「望んでやったことではないとはいえ、結果的にオルコワージュは滅びた。……あのひとは微笑んで消えていったそうだよ、白薔薇。そこだけ切り取ればそれは美しい物語なのかもしれないけれど、でも貴方や他のひとにとつてはそうではないんだらう。こんなことになるだなんて思ってもみなかつたよ。私は私望むもののために正義だとか救いだとかいう御託を振りかざして父親を殺してしまつた。きっとそういうことなんだらう」

「『こんなことになるだなんて思ってもみなかった』……？ 本当にそうですか？ 少し考えれば貴女にだって理解できた筈。オルロワージュはあまりにも弱い男。たった一つのちっぽけな意地に縋りついて一億年の悠久を生きていた男が救われてしまったら、後は滅びる以外にはありませんか」

「……そうだね。そうかもしれない。困ったな。また嘘をついてしまった。そうか……確かにそうだ。私はこの結果を予想していた。認めるよ。私は進んであの人を滅ぼした。——でもね、白薔薇。私は後悔なんてしないよ。反省もしない。そんなことをするのなら、最初からやらない。もう貴女にだって謝らないよ」

「妖魔、か……」

呟いて、アセルスはのんびりと空を見上げた。闇が終わり、朝を迎えた迷宮の眩いほどの暁。燦燦と輝く朝日は何かが始まる予兆に満ちている。

「これから……何が起ころのかなあ」

誰に尋ねるでもなく独り言のように言う。

「あのひとがいなくなつて少しは妖魔の力が薄れてきたような気もする。……でも、依然として私は私のまま。周囲の人間全てが老いていくなかで私一人が生き続けてたら、それはやっぱり辛いことなんだろうなつて思うし、かといってこの力を完全に捨てる気

にはどうしてもならない。私の望みを叶えるために、これは必要な力だ。……不思議だね。妖魔が妖魔の性に殉ずるものだとしたら、この私もまたいつの間にか妖魔の血の虜となっているのかな」

「……貴女にはまだ、わからないでしょう。千年を、一億年を生きることの悲しみがどれ程のものか」

「貴女が言っているのはオルロワージュの悲しみのこと？ あの人にはあの子の、私には私の感情がある。ただそれだけだ。私は誰かの悲しみが完全に理解できると言うほど自惚れちゃいないよ。……貴女はどうなの？ 白薔薇。私にはわからないといった貴女なら、オルロワージュの悲しみを理解しているの？」

「いいえ、アセルス様。私はあの子の悲しみを横から眺めていただけです。物語を読み上げるように……そこに“解釈”というものがあつたとしてもやはりそれは理解ではありません。私はただ、貴女がたが足掻く舞台を形作るだけの語り部。物語を読むものは、それが虚構であると知っている。貴女だつてそうなのですよ、アセルス様。貴女も所詮は私が読み上げる物語の登場人物ではありませんか。貴女が苦しむのを眺めているのはとても楽しかった……。貴女がそれを許して下さるといふのなら、私は貴女の傍にいます。貴女という妖魔が新たな一億年を生き、数多の忘却と喪失を繰り返したその挙句をお隣で心の書物に記させて頂きます。それでもよろしければ、私は私が

愛する物語のキャラクターとして貴女を受け入れることができるとは思います」

挑発するような白薔薇の言葉に、しかしアセルスは動じない。

「物語……ね。この物語はどこへ行くのかな。私という半妖の物語。もう、私は誰にも遠慮しない。私は私の望む世界のために戦う。戦う理由が私にはある。それは誰もが笑っていられる世界。物語が必ずハッピーエンドを迎える世界だ。悲しい結末なんか認めない。でもたぶん、それはきつと……」

「貴女は『魔王』になるつもりなのですね」

短く、そして鋭い声で白薔薇は告げた。アセルスは寂しそうに笑い、そして頷く。

「そういうことになるんだろうね」

「それでもあなたは構わないと?」

「もしも本当に誰もが笑っていられる世界を求め続けたら、いつか私はこう考えるのかもしれない。『迷っている間に誰かが死んでいくのなら、この牙を全人類・全妖魔に打ち込んででも笑顔に』って。それはきつと、魔王でしょう。あるいはオルロワージュよりも最低最悪の支配者に私はなるのかもしれない。でもそれは、やっぱり仮定の話なんだよ。起こるかどうかもわからないもののために絶望するほど私は暇じゃない。仮にもしそうなってしまったとしたらその時はただ私が滅んでいくだけのことだし、そうでなければイルドウンがきつと私を殺してくれるだろう。……私はしばらくこの道を進ん

でみるよ、白薔薇。いつか迷うこともあるだろうけれど、また旅を始めようと思う。……そうだね、貴女がどうしてもその旅の記録を書き留めたいというのなら、私の傍においてあげてもいいよ」

不敵に言い放つアセルスに、白薔薇はまばたきと共に驚きの声を上げる。

「……貴女にそんなことを言われる日が来ようとは。いささか新鮮な感動さえ覚ええます」

「だって、貴女を愛してる。貴女が欲しい。でも、物語の登場人物としてというのはどうにも癪だな」

「ですがアセルス様。語り部が登場人物と結ばれることがあると思いますか？」

「それは思いうがりでだよ、白薔薇」アセルスはきっぱりと答えた。「自分だけが物語の外側において安全な所から余裕綽々で眺めているだけなんてさ。ひとはみな自分という物語を歩む旅人なのだ……つて、それは陳腐な物言いかもしれないけど、でもやっぱり、私たちはそこから逃げることはできないんじゃないかな。物語は厳然としてここにあるんだ。安全な場所なんてない。私たちは主人公として旅立ちつづけるしかないんだよ。……だからさ、白薔薇姫。語り部が語られることだってないとは言いい切れない。次は私が貴女を語る。だから今度は、貴女が物語の中わたしに入っておいで」

白薔薇はその言葉を聞くとふっと目を細め、穏やかな微笑みを浮かべた。

「……強く、なられましたね。アセルス様。以前はこの迷宮で泣き喚くことしかできなかった貴女が。つまるところはそれが貴女の性分というわけですか？ 貫き通したエゴの向こうで、果たして望みの物を手にすることができませんかしら」

「さあね。どのみち、やってみなけりやわからないんだ。今はとにかく前に進むだけさ」「勇ましいお言葉。その言葉で何もかもを支配することができたならさぞかし世界は美しく、かつまた楽しい舞台となることでしょう。……しかし、アセルス様。現実はそのではありません」

残酷な笑みと共に白薔薇の表情に僅かな嘲弄が浮かぶ。

「私は貴女を否定します。アセルス様」白薔薇は言った。「言葉だけで何もかもが救えるだなんて虫唾が奔る。貴女がどれほどの真実を口にしても私にとつてそれは詭弁。貴女が幾重もの口説を弄したところで私にとつてそれは薄っぺらな台詞に過ぎないのです。なぜと云って、それは当たり前のことでしょう？ 魔王オルロワージュを倒して世界は平和になりました、そんな物語を繰り広げておいて貴女は臆面もなく私の前に現れた。目に浮かぶようです。あまたの寵姫たちが、金獅子姫が、そして零姫までもが口を揃えてこう言うのでしょうか。『オルロワージュが滅んだことは悲しいことだ。だがあの王は満足して死んでいった。自らの永遠を継ぐべきものが訪れたことを知り、希望を胸に死ぬべくして死んでいったのだ』と。……そうして、みんな、いつかあの男のことを

忘れてしまう。一億年もの悲しみをハッピーエンドで塗り固め、何もかもを無かったことにしてしまう。……そんなのは、嫌です。アセルス様。だって、オルロワージュの悲しみは何一つ報われていないではありませんか。まだ何も思い出していない。忘れてしまった大切な何かを再び目にすることもなく、都合の良い嘘で自分を騙して死んでしまえばそれで大団円なのですか？ 下らない予定調和に手を貸す気にはなれません」

「……白薔薇」

いたわるようなアセルスの言葉に、白薔薇姫は珍しく感情的に口を開いた。

「イルドウン。零姫。そしてセアト。……どれだけの者が貴女に魅了されようとも、私にそれは当てはまらない。貴女の言葉に心を動かされるほど私は優しい女ではありません。……貴女がもしこの世全てを笑顔にしたいと願うのなら、私はその天敵となりましょう。言葉などけして通じず、明らかな悪意と憎悪とをもって立ちはだかる敵として」

白薔薇は剣を抜き、呪文を唱えるように呟く。

「すべての者は分かり合えない。生きとし生けるあらゆるものはこの世の誰とも似ていない。それこそがこの世の定め、この世の法。さあ、どうしますかアセルス様。私という邪悪を打ち崩す言葉が貴女の胸の内にありますか？」

「そう言われてみると」アセルスは答える。「無いような気もするね。戦う理由が、私に

は無い……。私はただ貴女が好きなんだと言いに来たただだから、そこには大義も理想もない。オルロワージュと戦った時のように、誰かを救うだなんていうお題目もありはしない。……だからさ」

アセルスは左手を腰の剣へと這わせる。

「今回ばかりは剣に頼ってみようか——なんて、考えていたりはするよ」

「ふ……」

アセルスの剣呑な言葉に、白薔薇は明確な嘲りに口元を歪める。

「貴女の覚悟はその程度というわけですか。綺麗事を口において、都合が悪くなれば簡単に引つ込めてしまえるものを理想と呼ぶのは欺瞞では？ 誰とでもわかりあいたいだなんて嘯いておいて、貴方は結局都合のいい操り人形が欲しいだけなのです。それならば最初から剣を抜いて闘うことです。言つたでしよう？ 聞こえの良い台詞を口にして誤魔化すくらいなら、たった一振りの剣をかざして戦いぬくことの方がずっと純粹で美しいと。貴女はいつまでたつても中途半端ですね、アセルス様」

「何しろ半妖だね。仕方がないところなのさ。人としての善と、妖魔としての悪とを秤にかけて、そのどちらもを選んだから私はいまここにいます。私は綺麗な言葉が好きだよ、白薔薇。だから理想だつて叫ぶし夢みたいなことと言う。……でも、だからといって私はそれが全てであるとも思わないよ。なぜと言つて、それはあくまでも「言葉」だ

からだ。語りうるものの全てが物語なら、信じることの全ては物語のように美しくそして虚構に満ちている。だからいま——私は剣を抜く」

陶酔に瞳をうっとりとしたと蕩かせてアセルスは剣をゆつくりと引き抜いた。妖魔さえも切り裂く妖魔の剣。借り物の刃にいまひとたびの悪を浸して、彼女はとうとう愛する者と対峙する。

「なぜ——貴女は笑うのですか？」

アセルスの口元に浮かぶ小さな微笑みに、白薔薇姫は小さな苛立ちを覚えて声を上擦らせる。

「決まっているでしょう」アセルスは言う。「むきになっている貴女を見るのが楽しいからだよ」

「な……」

言葉を失う白薔薇に、アセルスはくすりと声を漏らした。

「貴女の弁を借りるなら、私が気に食わないというのなら何も言わずに斬りかかってくれればいい。わからずやのイルドゥンみたいだね。……でも、貴女はそうしなかった。くどくどしく言葉を重ねて挑発しようとするのは、私に魅了されているのを認めるのが怖いからじゃないのかな。好きだって言ってごらんよ白薔薇。私のことを愛していると」

「……どこまで自惚れれば気が済むのですか。妖魔の王でさえそこまでは言いませんで

したよ」

「最近の私はすこぶる馬鹿なんだから仕方がないじゃないか。自分のことを好きになつてしまったら自惚れもするしこうして臆面もなく愛の言葉を吐きもする。恥ずかしいけど、これはこれでなかなか悪いものじゃない。私は私を愛している。だから、私は剣を抜く。この牙を貴女の首筋に打ち立て、その心を頂戴することにするよ」

「そんなことをして何になるのです。貴女にはわかっている筈。それで手に入る心などありはしないと。この私を虜としていたい何が変わるといふのです」

「物語が始まる」

きつぱりと、アセルスは言った。

「私と貴女は最後までわかりあえないのかもしれない。いつか私たちは憎みあうのかもしれない。全てを忘れてしまうかもしれない。でも、それはまだ誰にもわからないことなんだ。物語の結末を誰も知らない。誰も知らない世界の果て……手つかずの未開拓地^{フロンティア}にまだ見ぬ答えが眠っていると信じて、私は物語を始めよう」

物語が始まったとき、貴女はどこにいたの？ 私はいま、ここにいます。そう言って、アセルスはまっすぐに白薔薇姫を見つめた。



この女はいったい何を言っているのだろうか。困惑に白薔薇は口を嚙む。なぜこれほど痛烈に否定と罵倒とを浴びせられておきながら『愛している』などと平然と口にできるのだろうか。

本当はどちらでも良かった。生き残るのがオルロワージュであれアセルスであれ、滅ぼした者にその責を負わせて苦しめればそれでいいと思っていた。オルロワージュを愛していた。だから、その怒りと悲しみとともにアセルスを傷つけ、苦悩する彼女を眺めることができるならそれでも構うまいと思っていた。だが思惑は外れ、アセルスはぬけぬけと愛の言葉を口にする。この女が始めるという物語とは、あまりにも訳が分からないものに思える。

もしいい。

うんざりだ。

そう考え、白薔薇は口を開いた。『貴女など愛してはいない』そう言えば少なくとも何がしかの決着がつくのだろう。たとえその後で吸血を許し虜化を受けるのだとしても、魂では逆らっていたのだと証明することができる。そうだ。それでいい。愛する者の心を力づくで歪めてしまったアセルスがやがてオルロワージュのように絶望するのを待てば良いだけだ。さほど長い時間ではない。これまでと同じように語り部として支

配者の傍らに侍っていればいい。何も変わりはない。ああ。そうだ。

「私は」白薔薇は言う。「貴女のことなど、」

——単純で純情なアセルスを弄ぶのは、枯れた私の心にも久しぶりに楽しいという感情を思い出させてくれた。若く愚かなアセルスの、瑞々しく甘ったれた言葉に対して時には頷き時にはからかい、まごつくアセルスを笑うのは楽しかった。

「……」

不意に強張った舌が己の意に反して動きを止め、背筋がぞくりと震えた。首筋の傷が疼く。それはまだ出会ったばかりの頃、拾ったばかりの犬を太らせるために無償の愛を投げ与えていた記憶。

何故だろう。愛していないと、その一言を口にすれば終止符の打たれる物語なのに。どうしてたつたその一言が言えないのか。

こみ上げてきた感情は純然たる恐怖だった。悦びでもなければ快樂でもなく、まして安堵などあるわけもない。ただ、白薔薇姫は怖れていた。

「……アセルス様」白薔薇は顔を上げ、困ったように囁いた。「私は怖いのかもしれません」

「怖い？」

「貴方に愛されることが。貴方を愛してしまうことが」

「……どうして？」

尋ねられ、白薔薇は途方に暮れたように力なく微笑み、小さく囁いた。

「——幸せになつてしまいそうで」

「白薔薇……」

「——そうしたら私、きつと忘れてしまいます。オルロワージュの悲しみを。かつて愛したあの男を忘れて、貴方ばかりを目で追つて、貴方のことだけを考へてしまう。オルロワージュのことも——世界中の誰かが流した涙のことなんか初めから知らなかつたような顔をして、素知らぬ顔で微笑んでしまう。無邪気な笑い声を立て、薔薇色に頬を染めて……もしかしたら、それも良いことなのかもしれないね。何も知らない子供のようになつてを忘れて、ただ快樂の赴くまま貴方に抱かれていればそれでいいのかもしれない。——ですが、アセルス様。私は嫌です。……戦う理由が、どうやら私にはありません。たとえ世界中の誰もが貴方に魅了されたとしても、私だけは抗わなければ、とそう思うのです」

白薔薇はまつすぐにアセルスを見つめた。その瞳にはもう、嘲弄や侮蔑の感情は込められてはいない。ただ純然たる決意を秘めて、白薔薇姫はアセルスを見据える。

「思えばオルロワージュは——あの『父親』はどこまでも優しいひとだった」アセルスはゆつくりと言う。「考えの違いから戦うことになりはしても、オルロワージュは私を憎んではいなかった。でも、貴女は違う。貴女ほど明確な意思と論理をもって私を否定した者はいない。『戦う理由がある』——か。そうだね、白薔薇。その通りだよ。貴女の間で言っていることは正しい。貴女こそが、私の敵……。まごうことなき私という妖魔の天敵だ」

「……どうやらそのようです。アセルス様。最後に立ちはだかるはこの私。貴女という魔王の、その野望を打ち砕くために……私は今一度この剣をとりましょう」

そう言つて、白薔薇姫は自らの剣——罌十字を抜き放つ。

ああ。

認めよう。確かに自分には、愛していない、その一言を口にすることはできない。であるとするならば後はもう、運を天に任せる以外にないではないか。

戦う以外に道はない。

戦つて勝利し、アセルスを滅ぼすしかない。

勝てばいいのだ。彼女に打ち勝つことができるなら、あらゆる悲劇を永遠のものにする。

そしてもし、敗北してしまつたそのときは仕方がない——自分はきつと、この女を愛

してしまふ。

戦わねばならない。己の全存在、全感情を賭けて

窮地を切り抜けるため剣を抜くなど何年ぶりのことだろう。そんな野蛮な方法は遙か昔に忘れてしまった筈なのに、なぜだろう、牙は震え、体が燃える。忍び寄る恐怖に抗うことが、これほど自らを奮え立たせるものだとは知らなかった。

「戦う理由が、私にはある、か……」

戸惑うように呟いて、白薔薇は心安らかな笑みを浮かべる。悪くはない気分だ。自分にもやはり妖魔の血は流れている。敵対する者と戦い、これを打ち倒すあの悦び。けしと否定することのできない妖魔の性。

「行きますよ、アセルス様」

そう静かに告げて、白薔薇は剣を構えた。

この戦いの結末を白薔薇は知らない。支配するのか、されるのか。運命の秤がどちらへ傾くのか、それは神のみぞ知る筋書きだ。

「おいで、白薔薇」

優しくアセルスが答える。たかだか半世紀にも満たない齡の女が随分と思いがつた口を利いたものだ。笑ってしまった。だが目の前に立つアセルスの傲慢を憎いとは思わなかった。どこか清々しい気持ちで白薔薇は微笑み、そして己自身の未来を切り開く

べく戦いを開始した。

それは白薔薇姫の戦い。針の城で最も優しいと謳われた姫君が、その死神にも似た優しさを捨てて挑む最初にして最後の戦い。

そう——これから始めるのは、『私』自身の物語に他ならない。

物語が始まった時、貴女はどこにいたのかとアセルスは聞いた。

私はいま、ここにいます。

語り部が語ることをやめたとき、物語が迎えるのは滅びではなく新生だ。

結末は誰かに手に委ねられ、私はただ私自身の命を生きる。ただそれだけ。

さあ、物語の話をしよう。

その物語の結末を、あなたはきっと知っている。